まんじ

No.159

2021.2.1

まんじ第百五十九号　目次

海外旅行アラカルト……新井宏…4
天保の改革……三戸岡道夫…19
短歌　江戸川のほとり他……山本一成…23
漢詩　潮汐錄（百一）《漢詩の流れ89》……鯨游海…26
漢詩　汲深録（二十三）……松井秀人…29
戊辰東北戦争③　奥羽越列藩同盟異聞……千坂精一…31
古い物・遠い夢　我家の一品……忠内正之…45
青雲の彼方（十一）……太田精一…51
吾輩は紙魚ロボである　その五……永畑俊三…57
私の「昭和20年」（4）……山田嘉久…90
—終戦から75年—

回想　中央線中野駅北口、新井薬師、中野区立新井小学校……山本鎭雄…99
—都市は「ふるさと」か—
内田の国の怨霊信仰物語……横山正義…113
以徳報徳……浅野博文…119
高山右近（九）……鍋屋次郎…124
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（10）……村上邦治…138
私の伊達政宗像を訪ねて（その四－⑦）……安藤剛…161
明治時代の著述者　渋江保の一生（その二十四）…山本勉…185
人事部長　首切り姫（ラストワン）（九）最終話……匠克仁…202
一・二・三・四・五……十……匠克仁…210
編集後記……編集子…222

海外旅行アラカルト

新井　宏

そもそも第一波のコロナは、ヨーロッパでも、東アジアや東南アジア諸国でも、三月をピークに四月に入ると一斉に終息に向かっていた。その中で、政府は「このまま行くと二週間後には八倍、一ヶ月後には六十四倍になる」と国民を恫喝して、四月七日に「緊急事態宣言」を発令、「通院・買い出し・通勤」を除く不要な外出を規制し、観光業界の被害を拡大させてしまった。「宣言」の発令などしなくとも第一波は既に終息に向かっていたのである。

このことは「宣言」直後、状況の推移が判らない四月九日付けで『まんじ』一五七号に書いた。その後、状況があきらかになるに従って、専門家たちの間でも、「宣言」の効果は極めて限定的であったとの認識が一般化している。

しかも「Go To トラベル」を本格的にスタートさせた十月初旬は、奇妙なことに四月の「宣言発令時」よりも観光事業の救済が急務である。

十月一日から「Go To トラベル」が本格的にスタートした。日の前に「にんじん」をぶら下げて、旅行を奨励してくれるという。

子育ての頃、我が家には、①車がなく、②エアコンがなく、③犬かいなかった。娘は「よほど貧乏なんだ」と思っていたという。しかし、家族旅行は欠かさず、その後も登山や旅行は我が家の生活の一部であった。

いわば「旅行好き」でありながら、コロナ禍のなかの「Go To トラベル」には強い違和感がある。

それというのは、国の一連のコロナ対策が、あまりにもチグハグで、「宣言発令」による移動規制で膨大な社会的損失を生んだ一方で、こんどは一兆七千億円の巨額を投じて旅行を奨励したかと思うと、またもや感染者急増のため「Go To」の停止を図ると言う。

むしろ感染者数が多かった。ましてや、ひとあし先に秋が訪れたヨーロッパでは既に第二波が猛威をふるい始めていた。そのことを学べば「Go To トラベル」など暢気なことを言っている場合ではなかった。

事実、この原稿を書いている十二月初旬には感染者数が「宣言発令」を決めた日の十倍に達してしまった。これでは、「Go To トラベル」運用の中止をせざるを得ない。

一兆七千億円の巨額はどこに消えてしまうのであろうか。五百億円もかけた「官製マスク」と同様に、群がる利権業者に霧散してしまうに違いない。

ヨーロッパで先行していた第二波の大流行は、ここに来て、北欧を除けば、西欧・東欧で減少にむかっている。日本を含む韓国、台湾、香港では、未だ増加傾向が続いているが、間もなくヨーロッパの後を追って、横ばいから減少に向かう期待もある。

しかし楽観できる状況ではない。今後「Go To トラベル」を続けても、中止しても、結局観光業者の救済には、役立たなかったという評価になるであろう。

さあ、ここまで書くと、いつか書いた「八つ当たり語録」の再開となりそうなのでこの辺でやめる。

海外旅行は十年ほど前からお休みしている。おそらく年齢や家族、コロナのことを考えるともう機会がないだろう。

そう思って写真等をパソコンに入力して処分していると、思い出まで整理してしまいそうである。

今回は、海外旅行アラカルトと題してそのメモを作る。

会話

海外ツアーに参加しているといろいろな夫婦に出会う。日本には、夫婦揃っての「社交」の場は乏しいが、海外ツアーは「疑似社交」の場でもある。

◆ブダペスト・ドナウ河中洲マルギット島（2000.6.26）

前を歩いているツアー同行のご夫婦がどちらへ行くかでもめていた。うしろに私達がいるのに気付いていない。

ご主人「間違っていたらぶっとばすぞ」

奥様も負けずに「違っていたらけっとばすわよ」

ご主人は飛行機操縦を趣味とし、葉巻をくゆらす教養人、ご夫婦とは食卓では話しが弾むのであるが、何とも過激な会話である。

◆マドリッド王宮広場（2000.11.3）

「パンプローナの写真、撮っておけ」と女性の声が響いてきた。ご主人は唯々として指示に従っている。

ご主人はパンプローナに進出した日系自動車部品会社の責任者とのこと。パンプローナはスペインからの分離運動が激しかったバスク地方の中心地、フランシスコ・

ザビエルの出身地であり、毎年死者の出る牛追いのサン・フェルミン祭で有名だという。

いわば社長令夫人が、ご主人に向って「もう連れてこないよ」とも言っている。それでもご主人はにこにこしている。

奥様は、ご主人が現役時代に大病を患ったとき、群がる見舞客を一切シャットアウトし、命を救ったのは自分だと威張っている。その上に、ご主人の苦学時代に和裁で稼いで助け、更にはご主人の弟さんの奨学金返済まで面倒見たとも言う。それらの話がまったく違和感なく伝わってくるのがこのご夫婦の品格である。

◆敬語で話し合う夫婦

そうかと思うと、ふたりだけなのに、丁寧な敬語を使って話しあっている夫婦もいる。喧嘩をする時も敬語をつかうのであろうか。それとも喧嘩なんぞとは無縁なのであろうか。

ついでにいくつか語録を拾う。

◆「娘ですか、もう行って戻ってきています」

◆「お義母様が、Sちゃんと優しく言って苛めるの」

……ご主人仕方なくニコニコ

◆八十近いご夫婦「年に一度、ヨメさんの息抜きのために海外旅行に出かけて来るの」

……ヨメさん、おいくつなんだろう。

◆「次の旅行計画が出来ていないと不安なの」

……息詰まりそうな精緻な計画書を準備して行動している奥さん。

受付係

◆パリのギメ東洋美術館（1992.9.22）

ガンダーラ、シルクロード、中国、インド、日本、東南アジアに関する美術品の収蔵としては、世界最大のギメ博物館であるが玄関は薄暗い。階段脇の受付に中年の女性が座って電話している。

なかなか、私達に気付いてくれない。五分、十分……、仕方が無いので、受付の目の前で示威運動するが、動ずる様子を見せない。その内に、他の来館者も私達の後ろに並んだ。私達よりも場慣れしているようなので期待したが、結局二十分近く待って、やっと電話が終わった。「済みません」というような言葉は全くなかった。

時間がなくなったので、日本の仏像関係だけ参観して退館した。いまだ何が起きていたのかさっぱり判らない。雰囲気から言えば、友人、それも男の友達と楽しく話していたようであるが、とにかく唖然とした。

◆プラハ・カレル橋袂のスメタナ博物館（2000.6.16）

プラハの中心地のヴルタヴァ河（ドイツ語モルダウ河）に架かるのがカレル橋である。神聖ローマ皇帝カール四世（ボヘミア王カレル一世）が一四〇一年に完成させた

石橋で、その袂にスメタナ博物館がある。

そこからカレル橋を前景に聖ヴィート大聖堂を見上げる写真が、プラハの看板である。スメタナの交響詩「我が祖国」の「モルダウ」の影響であろう。小説、絵画よりもはるかに大きな影響をもたらすのが音楽である。

ツアーの限られた自由時間を割いてスメタナ博物館を訪れた。

びっくりしたのは受付のおじさんが美味しそうにジョッキーを傾けていたことである。チェコは良いところだと思った。あるいはボランティアが受付をしていたのかも知れない。ビールをどこで入手できるか訊ねたかった。

受付を通って二階に上がると晩年スメタナが住んでいた所が博物館になっている。観客は他に誰もいない。日本人も時々くるらしく、日本関係の資料もある。もしかしたら、日本人は大のお得意さんなのかも知れない。

私達だけで博物館を占有している気分もあって、丁寧に見て廻った。コメントに従って機器を操作するとモルダウの曲が流れる。もしビールがあったら至福の時間であったろうに。

◆ルクセンブルクのホテル（1997.9.23）

計量史関係の国際会議がドイツのジーゲンで開かれるので、十日間ほどの休暇をとって妻と一緒に参加した。その際に貴腐ワインの名産地、モーゼル河を遡りトリーアまで足を延ばした。ドイツで最も古い二世紀のローマ遺跡、ポルタ・ニグラ（黒い門）や円形劇場跡を見たかったからである。

ところがトリーアの駅についた時に、ルクセンブルク行きの三両編成の電車が目に入った。間もなく出発するというので、取りあえず飛び乗った。

ルクセンブルクについての知識はなかったが、一昔前の鉄鋼生産地。電車で一時間もかからない距離。

駅の案内所で徒歩圏内のホテルを予約した。鉄鋼の街と思っていたが、かなり洗練された町並みである。

受付で手続きをしていると「アッシュアライ？」と声をかけられる。「お支払い？」と言っているようだ。日本人観光客が多いのかと思いながら「カード」ですというと、そばで妻が「アッシュ・新井」と言ったのよと言う。

それなら「ムッシュ・新井」じゃないかと思ったが、フランス語でHのことをアッシュと発音するとのこと。何のことはない「H・アライ」と名前を確認しただけのことだった。

ホテルは多くの中小ホテルの家屋を合わせて、受付、宿泊、食堂、共通エリアと使い分けているらしい。見かけよりもかなり大規模である。

夕食は官庁街の中心地にある高級レストランに入った。ちょっと気張って高級料理を頼んだのまではよかったが、カードで会計する時に、チップを上載せることを忘れて

しまった。お酒を飲んでリラックスしたせいだろうか、あるいは緊張していたせいであろうか。今、思い出してもちょっと恥ずかしい。

ルクセンブルクは人口六十万で相模原市より少ない。しかしひとり当たりのGDPではいつも世界一、二位を占める豊かな金融国家。妻はノートルダム大聖堂に生花が捧げられているのを見て、とても豊かな地だといっていた。女性の判断基準は面白い。

◆ハンガリーのショブロン鉱山博物館（2000.6.22）

ショブロンはハンガリーというよりもオーストリアのウイーン側に食い込んだ位置にある六万人ほどの町。ローマ遺跡の上にできた町なので考古学博物館があるが休館中。その代わりに間口二十メートルほどの小さな鉱山博物館を見つけて入った。

展示物は一般向けであったが、どうやらショブロンは中世の鉄生産地だったようだ。近くに大きな湖があるので沼鉄鉱（褐鉄鉱）を原料としていたにちがいない。そして受付のおばさんに何か参考資料がないか尋ねてみた。そんな観光客はめずらしいらしく、結構時間を割いて、パンフレット類や論文集を持ってきてくれた。その中に東欧地区を主体とする古代～中世の鉄生産に関する研究論文集を見つけた。垂涎の資料であった。

日本の製鉄史研究者は、あまりヨーロッパの製鉄史について知らない。ある程度勉強していてもせいぜい西欧の研究とまりである。私はかねがね定説に逆らって弥生時代の日本でもヨーロッパのように小規模な沼鉄による製鉄が始まっていたと主張していた。

研究論文集は大部分現地語で書かれている。趣味で研究しているアマチュアの論文が多いからであろう。幸運だったのは、ショブロン鉱物博物館がマリア・テレジアの設立したヨーロッパ初の鉱山学校を引き継いでいたことである。あまり言葉は通じなかったが、受付のおばさんには感謝、感謝であった。

祝祭

◆ルーマニア・ベルサナ村のお祭り（2003.6.30）

ルーマニアの奥地とでも言うべきマラムレシュは今や観光名所である。その地域をバスで廻っている途中、バス道に沿って村人たちが列をなして歩いているのに出会った。若い女性達は白いブラウスに華やかな色柄のミニスカート、小柄で腰回りが豊かになった女性達も無柄ではあるが、赤、黒、濃紺と色とりどりのミニスカート姿である。ベルサナ修道院を会場とする村のお祭りであった。

添乗員もガイドもその日が村の祝祭日であることを知らなかったようだ。急遽下車して三十分ほどお祭りに参加した。

村の修道院といえば、小さな建物を想像するが、木造三階建の堂々たる建物が二棟、桁行二十メートル、梁行十メートル、高さ十五メートルほどある。その他に教会、鐘楼や建築中の建物もある。

このお祭りに日本人が来ているとのことで、地元の新聞記者の取材を受けた。翌日の新聞に載ったと思うが確認してない。

予期せぬ出会いに一同大喜び。偶然というのは楽しいことだ。

その後、マラムレシュ地方の古い修道院を数多く訪問したが、これほど大規模なものはない。どうやら、その頃ベルサナ修道院は新しく建築中であってまだ観光地としては知られていなかったらしい。いまインターネットで調べるとマラムレシュ地方を代表する観光地として載っている。

この地方の古い健造物が木造なのは、良質な木材が得られるからであろうが、その建築技法が驚くほど日本の寺院建築と似ている。なんとかその詳細を知りたいと思いながら、まだ良い資料に出会わない。ただし、その後知ったことであるが、ルーマニアからかなり離れたノルウェーにも良く似た健造物がある。北イタリアの古い民家の木組みも校倉造りに良く似ている。

◆シチリア島アグリジェントのアーモンド祭り（2000.2.12）

アグリジェントは古代ギリシャの神殿群の遺跡が残り、「神殿の谷」と呼ばれ、世界遺産に指定されている。ギリシャには行ったことがないが、ギリシャ以上にギリシャ遺跡が多く残っているのはトルコとシチリア島だという。とにかくその広大さにはびっくりした。

ホテルは古い市街地に続く街道沿いにあった。案内図をもらって散歩しているとかなりの人波である。折からのアグリジェント「アーモンドの花祭り」であった。後で知ったが日本からのツアーが幾つも出ているとのこと。しかも土曜日で世界から民族舞踊団が集まり行進をする日であった。ラッキー。

アテネア門からアテネア通りに入ると教会があり、ミサでもあるのだろうかものすごい人だかりである。ちょっと並んでみたが、民族舞踊団の行進が始まったのでそちらに廻る。アテネア通りは既に暗くなり電飾されていた。

先頭を、タータン模様のキルト（スカート）を佩いて、バクパイプを演奏しながら数十人が行く。解説がなくともスコットランドと判る。その後ろを二人だけであったが、黒マントに赤いマフラーの騎乗姿の衛兵も行く。

踊りながらの行進は、阿波踊りにも似ているようだ。日本からも阿波踊りのグループが参加していたに違いない。

◆ミュンヘンのオクトーバーフェスト（1997.9.21）

大きなテントの中でビールを飲む祭典とは聞いていたが、その規模のおおきさにはびっくりしてしまった。テ

レージエンヴィーゼと言う大公園の中に一万人近くを収容できる大テントが十個以上立ち並んでいる。仮設というが、柱や側壁を見ると恒久建築なみで、屋根だけがテントといった感じである。基礎は毎年再利用しているらしい。

会場に隣接して、仮設遊園地ができている。その規模の雄大さも、日本の常設遊園地を凌駕している。子供の遊園地を想像して妻と一緒に「船のブランコ」に乗ってみたが、大人でも怖さを感じるほどであった。安全な大観覧車に乗ってミュンヘンの夜景を楽しむ。

ビールメーカー別に作られた大テントに入ると、舞台で騒々しい音楽を奏でて、かなり盛り上がっている。

ビールはリットル入りにきまっていて、ソーセージ、チキンなどの注文も流れ作業だ。空席を見つけて座ると、いきなり見知らぬひと同志でワイワイ話がはじまる。ウエートレスは両手に十個のジョッキーを持って動いている。半月間の会期に六百万人の参加者、ビールの消費も六百万杯という。

オクトーバーフェストそのものがドイツだ。そんな感想を持って会場を出るころには、かなり酔っ払ってしまっていた。テント内で席のハシゴを何回かしたようである。

登る

夫婦で百名山踏破を目指していた時期がある。七十座近くまで数えたが、定年後、私が韓国の大学に行ったことで頓挫してしまい、二人で出掛けるのは海外旅行が主になった。

しかし、海外旅行でも高いところがあると、とにかく登って見たくなる。

◆エジプト・シナイ山（2285m）(2002.2.13)

ピラミット、スフィンクス、ルクソール神殿、アスワン遺跡と超大型の観光資源を有するエジプトにあって、モーゼ十戒のシナイ山は全く異質である。それだからこそ、遠路砂漠のシナイ半島を一日かけて行くツアーに参加したのであり、旅行記としては唯一『まんじ』八十四号に書いた。深田久弥の言うように、山に歴史や信仰を求めるとすれば、モーゼ十戒のシナイ山は欠かせない。今、読み返して、まあまあしっかり書いている。日の出前に登った山頂の気温は零下であった。

その他には、古代都市ポンペイを火砕流で埋め尽くしヴェスヴィオ火山、今も火を噴く神話のシチリア島のエトナ山などが旅行コースに沿ってあったが、とても登る時間的な余裕はなかった。

◆ブダペストのヤーノシュ山（527m）(2000.6.18)

ドナウ河ブダ側、モスクワ広場駅（現在のセールカー

センター駅）から登山電車でセーチェニの丘へ、そこから小一時間歩いて、ヤーノシュ山のエリジャベド展望台まで行った。

私達がツアーの自由時間に、変わった行動をするのを知っているNさん達が一緒に行くと言う。エリジャベドはもちろんヨーロッパ随一の美貌を謳われたオーストラリア・ハンガリー二重帝国の皇妃エリザベートのこと。姑のゾフィー大公妃と合わず、ウイーンの宮廷を嫌い、ブダベストに滞在することの多かったエリザベートはハンガリーで人気があり、エリザベート橋もある。

◆サンマリノの峰ロッカ・オ・ケスタ（729m）(2008.6.5)

今度の新型コロナウイルスで最も死亡率が高かった国サンマリノは中部イタリアにある人口三万三千名の独立国、観光で成り立っている。観光案内所に行くとパスポートに捺印してくれる。一六三一年にローマ法王庁から独立を承認されたという。天然の要塞であり攻め取っても大した価値のないところが、独立を維持できた原因であろうか。

◆パリ・モンマルトルのサクレ・クール寺院（1992.9.23）

モンマルトルの丘は芸術家たちが集うパリで最も高いところ。その丘の上に八十五メートルのサクレ・クール寺院が聳える。眼下に見下ろすパリ市街地が私達の専有物になった気分であった。

◆ヴィアナドカストロのサンタ・ルジア教会（1999.10.13）

ポルトガル・ポルトの北約七十キロメートルにある、標高二四九メートルのサンタ・ルジア山の上に立つ教会。パリのサクレ・クール寺院と良く似た教会。とにかく登った。

◆フィレンツェ大聖堂のクーポラ（2008.6.6）

サンタ・マリア・デル・フィオーレの八角クーポラ（一一五メートル）とジョットの鐘楼（八五メートル）は並んで立ち、共に頂上近くまで登れる。フィレンツェの瓦屋根の町並みが美しい。クーポラの内径は四十二メートルで、ローマのパンテオンやサンピエトロ大聖堂のドームよりやや大きいようだ。

◆バルセロナ　サクラダ・ファミリヤの塔（2000.11.12）

歩いて登ったように記憶しているが今はエレベータがついている。一八八二年に着工したガウディの代表作で、その没後百年の二〇二六年完成を目標としていたが、コロナ禍のためにまた遅れるとか。

◆ブルガリアの古都ヴェリコ・タルノヴォの丘（2003.6.26）

十二世紀から十四世紀にかけて、第三のローマと称しバルカン半島全体を支配したブルガリア帝国の首都。ツァレヴェッツの丘を中心に要塞が築かれていた。頂上に立つ教会の塔に登ろうと急いだが、集合時間に遅れそうなので途中から引き返した。同行した方が「ゆっくり帰りましょう。集合場所が見えたら急げばいいのよ」という。なるほどなるほど。

買い物

ご婦人方の楽しみは買い物。ツアーで人気のあるのは、土産店よりもむしろスーパーマーケット。日本では見かけない現地の日用品をゆっくり探して定価で買える。

◆イタリアのミラノ（2008.5.31）

ホテルの近くの地下街に大きなスーパーがあった。寿司の折詰めがほぼ日本並みの値段で沢山並んでいる。びっくりしたのはその当時既にセルフレジがかなり設置されていたことである。

◆スペインのマラガ（2000.11.9）

マラガのスーパーもエスカレーターで各階を結び共通清算であった。スーパーマーケットの先進地相模原に住んでいてもびっくりするくらい進んでいた。

◆エジプトの買い物ゲーム（2002.2）

エジプトでの買い物は、日用品まで含めて「値切りゲーム」の様相である。

ちょっと特殊な日本製カメラを持って出掛けたが、途中でフィルムを無くしてしまった。さあ大変、大急ぎでカメラ店を見つけると、同じ型のフィルムがある。かなり高かったが数本確保した。ただし、翌日ホテルで同じタイプのフィルムを簡単にみつける。三分の一の値段。それからは私達の交渉目標は三分の一と決めた。ツアー同行の方々は二分の一になったと大喜びしているので、私達が三分の一で買ったとは言えない。

ただし、金のカルトゥーシュ（王名版）は地金の価格の比率が高いので、あまり割り引いてはくれなかった。でも現在の金価格はその頃の五倍になっているので儲かっていると思う。

◆トルコのカッパドキア（2006.4.14）

妻が分不相応なトルコ石を買った。トルコ石の原産地だと思ったからであろうが、トルコではトルコ石を産出しない。

その翌日、カッパドキア地下洞窟内の工芸品店に案内された。数十人の観光客を前にして工房主がいろいろと説明してくれる。絵や焼き物はなかなか良さそうだ。ところが、説明が終わるやいなや、工房主が私達を目指してまっしぐらにやってくるではないか。もうトルコ石のことが伝わっていたらしい。品物は気に入ったが一切買わなかった。

◆観光バスでの必需品

観光バスでの必需品は飲料水とトイレ用の小銭。いずれもトイレ休憩所のバールなどで調達する。アルコール入りの水さえ問題なく飲める私などとちがって、硬水が駄目な方が多いが、現地語が読めず間違って買ってしまう人もいる。容器に触ってみて堅いのが硬水、柔らかいのが軟水と教えて差し上げた。

ガイドと添乗員

観光国のツアーでは原則として資格のあるガイドが英語で説明し、添乗員が通訳してくれる仕組みになっている。しかしベテランの添乗員になると同じコースを何回か案内している内に、大抵のことは頭に入り、ガイドの説明がなくとも日本のお客がどんなことに興味をもつか知って説明してくれるので判りやすい。

大変なのは、初めてのコースの添乗員。しかし商売であり、事前に良く勉強しているので、さすがだと思う。

現地ガイドが全行程同行する場合が多いが日替わりで付く場合もある。その他に、現地で生活をしている日本人をガイドとして雇っている場合もある。そんな場合でも資格のあるガイドがつく。

◆プラハからピルゼン等の観光（2000.6.15）

プラハからドイツ国境よりのピルゼンやカルロビバリへ一日ツアーに出かけた。まだ若い日本の女性がガイド役で同乗している。数年前にプラハがどこにあるのかも知らずにやってきたというが、ガイドの出来も現地語も抜群だと感心じた。日本の女性もすごい。

◆ローマからポンペイ行き観光バス（2008.6.10）

ローマからポンペイ行きの観光バスに乗った。日本人観光客専用である。

面白かったのは、現地ガイドは最初から最後まで日本人の非資格ガイドにまかせきりで、ほとんど何もしないのである。ところがポンペイの遺跡に見られる鉛や鉄について質問するとさすがに適切な返事や見解を述べてくれた。要は、資格のない日本人ガイドへの心遣いで、ついでに楽をしているのだ。イタリア人らしい。

◆ポルトガルの周回ツアー（1999.10）

ポルトガル十三日間のツアーに参加した。添乗員の女性は初めてのコースらしい。

何か事情があってか城塞都市エルバスの観光に添乗員もガイドも同行せず、一行は指示された通りに丘を登っていった。しかし目的地に到達できず、結局時間切れとなって戻った。おそらく現地ガイドの説明を添乗員が間違えて伝えたのであろう。間違いは仕方がないが、その頃から添乗員の評判が悪くなる。

バスの中でも、現地ガイドの説明が途絶え勝ちで、添乗員も黙っている。リスボンのテージョ河の三角江に架けられたヴァスコ・ダ・ガマ橋は前年に開通したばかりのヨーロッパ最長十七キロの斜張橋であるが、そこを通過する十分ほどの間、ほとんど説明が無かったのにはあきれてしまった。

そしてツアー参加者の間に世論のようなものが形成されてしまう。いつもは評判の良い添乗員だったのにと会社の方でも驚いたようである。

塩野七生

塩野七生は気が強く何かと周辺と摩擦をおこすと聞くが書き物はすばらしい。最初、男性かと思って読んでいたが、途中で旦那さんの話が出てきてびっくりした。

◆イタリアのベネチア（2008.6.2）

もう四十年近くも前になるが、会社創立五十周年記念に、塩野七生の『海の都の物語』を下敷きとして書いた論文が最優秀賞となり金杯をもらった。

人口わずか十万人の通商都市国家ベネチアが地中海に覇を唱え続けた千年の歴史……。それは強大国のトルコやフランス、ハプスブルグ家に対して、常に現実に徹しきって守り抜いた地位であった。わが社もそれに学ばなければというのが主旨であったが、とにかくベネチアに惚れ込んでしまった。

そんなことを言いながら人生は不思議、やっと訪問出来たのは、私達の最後のヨーロッパ旅行の時である。ベネチアがなぜ外敵を守りきったのか、それはやはりラグーン中に迷路のように張り巡らされた浅瀬のお陰だったことを改めて実感した。

◆トルコのイスタンブール（2006.4.22）

『海の都の物語』のすぐ後に『コンスタンチノープルの陥落』が出版された。東ローマの帝都コンスタンチノープルはエルサレムに向かうはずの第四回十字軍によっていったん征服されたが十五世紀まではなんとか生きのびていた。しかしその地は強固な城壁に守られていたとはいえ、四周わずか二十六キロメートルで渋谷区ほど、周囲は全てオスマントルコの支配地であった。ベネチア、ジェノヴァ等の援軍を合わせても七千人の兵力でメフメト二世の十六万の包囲を二ヶ月間耐えたが遂に墜ちた。

イスタンブールでは、観光の他に、城壁や「船山にのぼる」のガダラ地区を歩きまわった。

ヨーロッパに対するオスマン帝国の優勢は第一次ウイーン包囲（1529）に始まり第二次ウイーン包囲（1683）年の失敗でやっと終わる。

◆マルタ島のバレッタ（2000.2.15）

一五六五年にオスマン帝国は地中海のマルタ島を四万八千人の大軍で包囲した。要塞を守るのはマルタ騎士団長バレッタ以下三千人、最終的に包囲軍の撃退に成功した。この戦いについて塩野七生も書いていたと勘違いしたが、それは聖ヨハネ騎士団の『ロードス島攻防記』の印象からであった。

ロードス島で敗れ放浪する聖ヨハネ騎士団にスペイン王カルロス一世（神聖ローマ皇帝カール五世）がマルタ島を与える。そしてマルタ騎士団となってオスマンに勝った地がバレッタと名付けられた。

面白かったのは、「北方領土返還」のマークを付けた

中古車が走っていたことである。今でも人口四十万余のマルタに毎年五千台程、日本の中古車の輸出されているそうである。

◆イタリアのフェラーラ（2008.6.3）

イタリアの歴史に夢中になったのは塩野七生の『チェーザレ・ボルジアあるいは優雅なる冷酷』を読んだ頃からである。副題名が素晴らしいと思った。

十五世紀末のイタリア。法王の庶子チェーザレ・ボルジアが群立する都市国家の統一を目指し、権謀術数を駆使しロマーニャ地方を次々に法王領化していった。

いわば織田信長のような人物。マキァヴェリが『君主論』で君主のあるべき姿として称賛しているが、信長の妹お市の方と同じく、美人の妹ルクレツィアが政略結婚を繰り返したとことまで良く似ている。

そのルクレッツィアの最後の夫がフェラーラの領主アルフォンソ1世、彼の姉にルネッサンスの華と謳われたイザベッラ・デステがいる。

ルクレッツィアの墓があるというので行ってみたかったが時間の点で断念した。

お酒談義

私にとって旅行の楽しみに「お酒」がある。四十年以上一日も欠かさず飲んでいるのでベテランであるが、味覚に無頓着なので利き酒はできない。だから有名なお酒とか高価なお酒に興味があるわけではない。

しかし酒飲みなので、飲みながら講釈をすることが多い。以下、旅行で出会ったお酒の話。

◆酒精強化ワイン

ワインにブランディを加えたようなアルコール度の高い品種。著名な銘柄としては四種あるが、その内、ポートワイン（**ポルトガル・ポルト 2000.10.12**）、シエリー（**スペイン・カディス 2000.11.7**）、マルサラワイン（**シチリア・マルサラ 20002.12**）の現地で宿泊または試飲している。日本にも戦前から壽屋の赤玉ポートワインという安価な疑似ワインがあったが、もちろん別種。

◆貴腐ワイン

極めて糖度の高いブドウを原料に特殊な製法で作られた甘口ワインなので一般的に最高級ワインとされている。著名な銘柄としては三種あるが、その内**ドイツのモーゼル地方（1997.9.24）**と**ハンガリーのトカイ地方（2000.6.24）**を訪問している。

トカイ平原はハンガリーの東北部、モンゴル帝国のジュチ家の当主バトゥ率いるモンゴル帝国軍とハンガリー王ベーラ四世率いるハンガリー軍等の間の「モヒの戦い」があったところである。両軍ほぼ一万人の戦闘であったか、ハンガリー側が大敗しベーラ四世はクロアチアにいったん亡命し、ハンガリー全域がモンゴルの支配

下に入った。勢いに乗ったモンゴルはさらにウイーンを目指したが、モンゴル帝国大ハーンのオゴデイの死によって、バトゥはハンガリーを放棄して帰国した。

◆ビルゼン・ビール　世界には百種類ほどのビールが存在するが、大分類はエールビールとラガービール、そのラガービールにピルスナーやバドワイザーなどがあり、日本のビールはほとんどピルスナーである。

ピルスナーの発祥地はチェコのピルセン、工場見学と試飲ででかけた（2000.6.15）。またバドワイザーの故郷チェスケー・ブジェヨヴィツェにも宿泊した（2000.6.17）。その他、デュセルドルフのレストラン・ツム・シフヘンでエールビールの代表格アルトビールを飲んだこともある（1997.9.24）。ナポレオンもそこに座って飲んだと聞いた。

音楽

日頃、判りもしないのに、絵画は東洋が良いけれど音楽は西洋が圧倒的だなどと言っている。

ドイツではライン河下りの観光船のなかで、ローレライの合唱が始まるのはめずらしくもないと聞くが、航空機のなかでも始まったのにはびっくりした。しかも、ハーモニーもなかなか良い。教会の賛美歌・聖歌のせいであろうか。

ヨーロッパ旅行はどうしても建築や絵画が中心となるが、それではと言うので、音楽についても少し力んでみた。

◆チェコ・プラハ国立オペラ座　トスカ（2000.6.16）

ツアー同行のご夫婦が日本でオペラ座の公演を予約してきたと言う。それではというので私達も当日券を申し込んだ。「トスカ」ならきっと知っているメロディが出て来るだろうと。

二階だけど良い席。三幕ものであったが、途中で居眠りばかり。結局、なじみの旋律もなく終わってしまった。タクシーでホテルに帰る途中、プラハの夜景がうつくしいので、三十分ほど観光ドライブ。今度は居眠りなどしなかった。

◆ハンガリー・ペーチ アマチュアの演奏会（2000.6.23）

ペーチは十四世紀にできた大学のある町。そこのホテルに泊まった時に、近くのホテルで室内楽の演奏会があるとのパンフレットを見つけた。

アマチュアの演奏会らしいのは判っていたが、入ると椅子が二十席ほど準備されている。バイオリン3、チェロ2、ホルン2の編成で、曲目はk525（Eine kleine Nachtmusik）やk287（Mozart Divertimento）など有名曲。聴衆は十数名の贅沢な音楽会で、飾られた楽団旗（？）にハンガリー語で「マジャール」と書かれていた。

マジャール語は北方のフィンランドやエストニアとともにウラル語系に属し、東洋系であるが、容貌は周辺のゲルマン系やスラブ系と何ら変わらない。

◆ポルトガル・リスボン　ファドのレストラン（1999.10.21）

ツアーでポルトガルに行く直前にファドの女王、アマリア・ロドリゲスが亡くなった。ファドはポルトガルの国民歌謡のような存在で、美空ひばりが亡くなったようなもの、どこに行っても追悼の曲が流れていた。

どこかコーランの影響が色濃いように思った。耳になじむと癖になる。リスボン最後の日に同行のご夫婦と一緒にファドレストランに出かけた。

ホテルでタクシーに乗ろうとすると、盛んに止める。髭面で心配だというのだ。まさか乗りかかったのに止めるわけにも行かない。幸いファドの店が集中している迷路のようなところに要領よく案内してくれた。

日本語の案内書にでていたところであるが、数十人の客のなかで大部分は常連客、歌手とのやり取りが面白い。観光客らしいのは私達だけだったようである。

◆ブダペスト王宮のバイオリン弾き（2000.6.26）

ブダ旧王宮の円柱が並ぶ閑散とした一角で、ひとりの男がバイオリンを弾いていた。ツゴイネルワイゼンの様だったのでロマ（ジプシー）と思ったが、学生か観光客だったかも知れない。

ロマは楽譜なしでこの難曲を弾くという。それにしてもこのツゴイネルワイゼンのメロディは中学校の音楽唱歌として習った。他に「アルルの女」もあった。全国一律の教科書だったので、私達の年代の者は誰でも知っているのであろう。

リストのハンガリー狂詩曲にもツゴイネルワイゼンのメロディが採られているという。

◆ブルガリア・ルーマニア国境ドナウ河（2003.6.27）

ドナウ河そしてブルガリアといえば、日本人なら誰もが想うロシア民謡

黒きひとみいずこ　わがふるさといずこ
ここは遠きブルガリア　ドナウのかなた

であろう。

現地ガイドに聞くが知らないという。小声で口ずさんで見るがやはり通じない。そこで気がついた。これはソ連の兵士がブルガリア侵攻の時に歌っていた軍歌なのではないか。

後で調べてみて、ロシア民謡と思ったのは間違えで、『カチューシャ』『ともしび』などと共に第二次大戦中に制作された戦時歌謡とのこと。ブルガリアにとってロシアは敵であった。

奇遇

百名山目指して山登りに励んでいた頃は、しばしば顔見知りの方に出会った。大体「朝日」とか「毎日」の山

行ツアーに参加していたので、今度はどなたに会うだろうかという位で、奇遇などというほどでは無かった。

しかし、山の顔見知りに海外のホテルや空港で出会うと話しが弾んだ。

海外旅行も山行と同様で、同じ旅行会社のツアーに参加していると見知りの方に会うことは珍しくなかった。

しかし、「奇遇」と言える出会いもあった。

◆フランス　ストラスブルグ（1997.9.20）

フランクフルトに泊まって、フランスのストラスブルグまでの日帰り観光に出掛けた。乗り物は十人乗りの小型車で運転手が案内役。

高速道路を運転しながら、結構著名な観光客を案内しているらしく、興が乗ると後ろ向きになって説明する。ドイツのアウトバーンは制限速度がなく普通二百㌔は出ている。本当にひやひやしながら、なんとか無事にフランクフルトに帰着した。

ホテルで一休みし、暫くしてから中心地まで夕食に出かけた。そこでばったり運転手に出会ったのである。全く奇遇であった。人混みのなかで良く気付いたものである。日本人の観光客で、それなりに目立ったのであろうか。

◆エジプトナイル河遡上の観光船（2002.2.15）

ブダペストのヤーノシュ山（2000.6.18）に一緒に登ったNさんとナイル河遡上二泊の観光船で偶然再会した。

夜の仮装パーティで現地の服装をまとったNさんと妻が意外に様になっていた。「化粧」というのはこう言うことをいうのであろうか。

こんなことをだらだら書いていては、何時終わるが判らない。コロナ禍で厳しい最中、「旅行談義」でもあるまいと思いながら、書き始めて見ると、当人にとっては意外に楽しい作業であった。

最後にまたもう一言。

そもそもコロナ禍では、最も困窮している人達を助けるのが国の責務なのに、観光需要喚起のためとは言え、旅行に行ける恵まれた人達に多額の補助をするのは「論理的な思考」の欠落である。このような政策は状況が悪化すると支離滅裂になる。そうならないことを祈っている。

二〇二〇年十二月七日記

天保の改革

三戸岡　道夫

(一)　天保の改革のあらまし

徳川時代には三つの改革があった。最初は徳川吉宗による享保の改革、次は松平定信による寛政の改革、最後が水野忠邦による天保の改革である。

天保の改革は天保十二年（一八四一）から天保十四年（一八四三）の二年間であったが、その頃は十二代将軍家斉による爛熟した文化文政文化の後であり、幕府の財政は危機に頻していた。それを救わんためのものであったが、しかしそれはすでに手遅れで、残念ながら失敗に終った。その概要を簡単に眺めてみる。

水野忠邦は肥前唐津藩六万石の水野家に生まれたが、幕閣に列して日本の政治を左右したいという望を持ち、唐津藩主だけに止まることに満足しなかった。そこで中央へ進出する手段として、出世城といわれる浜松城への転出をなしとげ、さらに大坂城代、京都所司代を経て、天保五年（一八三四）に幕府本丸老中となった。忠邦が四十一歳のときである。

五年後の天保十年には老中首座となり、この頃になると忠邦の胸の中には、幕府の財政改革、すなわち天保の改革案がすっかり出来上っていたが、家斉が依然として実権を握っていたので、改革を実行することは出来なかった。そして天保十二年に家斉が死去すると、やっと天保改革に着手することが出来た。忠邦が本丸老中となってから七年間、ひたすらその時期を待ちつづけたわけであり、忠邦は四十八歳になっていた。

天保の改革の内容は多岐にわたるが、大きく分けて三つに分類される。

その第一は、きびしい倹約令の徹底であった。大名行列の無駄をはぶくとか、献上物の廃止など、武家に関す

るものから、町人庶民の暮しに関する細かな点にまで及んだ、きびしいものであった。庶民の生活に関しては、たとえばぜいたくな食物の禁止、能役者の装束に金銀の箔を使ってはならない、雛人形のむだな飾りは一切ならぬ、すべて町人の衣服は木綿にかぎり、羽二重などは厳禁、芝居小屋の所払いなど、細かい多くの点に及んだ。

そしてこれを南町奉行の鳥居耀蔵を使って徹底的にやらせたので、人々から鳥居耀蔵は「妖怪」と言われて嫌われ、大倹令は人々の大反対にあった。

その二は印旛沼の開鑿計画である。これは江戸への食糧輸送のために、印旛沼から江戸川への堀割工事を行う計画であったが、長期を要するものであり、難工事のため、工事の途中で中断した。

その三は上知令の実施である。これは江戸と大坂を中心として、十里四方の大名の土地を、すべて徳川幕府の直轄地にくり入れ、その代りの替地を地方に与えるというものであった。しかしこれも各大名の大反対にあい、これをきっかけにして水野忠邦は老中を罷免され、天保の改革はわずか二年で終了してしまった。すなわち天保の改革は失敗したのである。水野忠邦が五十歳のときであった。

(二) 天保の改革はどうやれば成功したか

以上のように天保の改革は失敗に終ったが、しかし改革を行うにはもう手遅れではないかという時に、しかも誰も手をつけようとしない改革を敢然と行った水野忠邦の行動は、天晴れというべきではなかろうか。あたかも二百五十年前に関ケ原合戦で、負けるのは判っていながら西軍の将となった石田三成の心意気に通ずるものがある。これをなんとか成功させる方法はなかったものであろうか。

水野忠邦の改革は、あくまでも徳川幕府の財政再建を中心とし、それが天下のために絶対よい改革だという自負に溢れていて、大名や武士、庶民の感情は無視されていた。この点、もう少し全国的な視点から眺め、時代に合った感覚でやったら、成功の道はあった。考えつくものを列挙してみると、次のような点である。

第一は、倹約、倹約ばかりを言わずに、経済の根元を豊かにすることである。

幕府も諸藩も借金が多く、財政が苦しいのは、贅沢もさることながら経済の根元である農村が荒れているからである。だから年貢の入りが少い。当時の日本の経済は、なんといっても農業が支えていた。だから農村を復興し、米を中心とした農産物の生産を豊かにするのが、一番の解決策である。農村振興を全国的に展開するのが、改革の柱であるべきであった。

それには恰好のモデルがいた。二宮金次郎である。二宮金次郎は天保時代を中心にして、今の茨城県、栃木県から関東一円で、六百余村の農村復興を行い、成功したのである。この二宮金次郎のノーハウを全国に普及すれば、効果は一挙にあがったはずである。

また各藩を見ても、どの藩にも二宮金次郎のような篤農家がいたはずである。各藩でも彼等をリーダーとしてうまく使い、また幕府も時にそのリーダー達を江戸城に集めて表彰などすれば、農村振興の効果は一段と挙ったであろう。

第二に行うべきは、参勤交代制度の廃止である。徳川幕府は、各大名はすべて家族とともに江戸に住むことを義務づけ、大名だけは一年置きに領国に帰ることになっていた。ということは、大名は一年置きにしか国許に帰らないので、国許の政治はどうしても国許の家老以下に任せきりになってしまい、領国政治が不在になり勝ちになってしまうのであった。そのため年貢のあがりが少いといっても、国許の家老や、代官、庄屋、大地主などの懐ろは、潤っている場合が多いのである。

参勤交代をやめて大名が領国に住むようになれば、そのような中間搾取への眼が行きとどき、農村振興が成功する可能性が高い。

また水野忠邦が、日の色を変えて禁止した贅沢も、参勤交代制度によって全国の大名家が江戸に集り、贅沢な生活をするからである。もちろん、これが裏表になって江戸の文化は繁栄しているわけであるが、天保の頃にはすでに参勤交代の必要性はなくなっている。水野忠邦がこのように考え、参勤交代制の廃止を実行したら、天保の改革は成功したと思われる（参勤交代制度が実際に廃止されたのは、これから二十年後の文久二年（一八六二）であった）。

第三に考えられるのは、商業政策の実施である。

この頃の日本の産業は農業が主とはいえ、徳川幕府初期の頃とは異り、各地に生糸とか、木綿、紙、紅花、茶、塩、その他多くの生活必需品の生産が盛んになり、また江戸や大坂を中心に、各地との物流も盛んな、商品経済の時代に入っていた。そしてそれを大規模に動かして大儲けする、豪商なども現れていた。

ところが幕府の組織は、幕府創立以来、老中、若年寄、寺社奉行、勘定奉行、町奉行の三奉行と、二百五十年間まったく組織が変っていないのである。当然、変化があって然るべきである。そこで商業奉行を作り、商業の振興や統制をはかり、農業の年貢に相当する商売税のようなものを作れば、幕府や藩の財政改善に役立ったはずである。

第四は大袈裟にいえば士農工商の解消である。もちろ

んこの時代はまだ徳川封建制度の時代であるから、正面切って士と農工商の間の壁を崩すということは出来ない。

しかし幕府も藩も財政困難で、武士は貧しい。そこで武士も農業をやったり、商売をやってもいいようにするものである。貧乏下級武士が、よく映画に出てくるような傘張りの内職などをするよりも、正々堂々と商売をしたり、田圃で米を作ったほうが、働き甲斐があり、またその方が適している人間もいるであろう。かって財政再建に成功した上杉鷹山の米沢藩では、武士も農夫に混って農業をしたのである。このような改革をすれば、人々の生活も安定し、天保の改革への賛同者もふえたはずである。

第五としては、やらない方がよかったことである。それは印旛沼の開鑿工事である。これは難工事である上に、長期間を要し、天保の改革がめざす幕府財政再建とは、あまり関係がないからである。

第六に、やるべきではなかったことが、上知令（あげちれい）の実施である。徳川幕府の最盛期の頃ならいざ知らず、幕府末期に近い衰退期に、このようなことをやれば、各大名たちや武士の反感、反対を買うだけである。現に上知令の実施宣言が引き金となって、水野忠邦は幕府を追われ、天保の改革は道半ばで挫折し、終了したのである。

最期に第七として問題となるのは、人の使い方である。最大の失敗は鳥居耀蔵の南町奉行への起用である。そのやり方の凄さに、人々が「妖怪」とあだ名して恐れをなした鳥居耀蔵の仕事ぶりは、忠邦の命令を忠実に守っているように見えて、結局は行きすぎて、人々に改革への反感をつのらせ、天保の改革を失敗へと導いたのである。水野忠邦は一人の人間だけに任すのではなくて、ブレーンやスタッフをもっと活用する必要があった。人材活用の用意が不十分だったことが指摘される。

以上問題点を総括すると、天保の改革に当った水野忠邦には、出世欲、名誉欲、権力への過信が強すぎたということが言えるのではなかろうか。それが無理な政策への自信となり、強い権力で実現できるという官僚的な改革推進が、逆に墓穴を掘ったのだといえよう。

天保の改革はすでに時期が遅かった。遅い上に、さらに水野忠邦が本丸老中になってからも、将軍家斉が死去するまで七年も待たなければならなかったという客観的条件から、どうやっても満足な改革が完成できる状態にはなかった。しかし、もし忠邦が以上のような改革を行ったならば、天保の改革もある程度成功し、二十五年後に迫っていた明治維新への対応も、もう少しスムーズに行えたのではないかと思われる。

（終）

短歌

江戸川のほとり他

山本一成

江戸川のほとり

江戸川はさざ波たてつつ利根川を離れゆくなりここは関宿

葦茂り流れはよどむ利根運河舟行き交ひし往時を思ふ

暮れなづむ江戸川の水面とぶ魚（いを）の水の輪消へてまた生（あ）れゆけり

雷雲ゆ閃きつらなる稲妻をスカイツリーはひと呑みにせり

「原発はむしろ被害者」控へ目に詠ひし岡井隆つゆ空に逝く

コロナウイルス

夕暮れを電車は鉄橋わたりゆく外出自粛の解かるるを待つ

マスク忘れ電車にのれば冷やかな視線をあびぬ新聞ひろぐ

毎朝の席を奪はれ飼猫は娘（こ）のテレワークを訝しみをり

外出時の妻の【訊問】近頃はハンカチ財布にマスク加はる

おのが身を顧みずして罵り合ふ潜むウイルス嘲笑（あざわら）ふべし

秋

家並みは黄金にそまり鉄塔が沈む夕日を二つに分かつ

里山になれる柿の実あかあかと夕日に照れり知る人もなく

古希すぎて朝ごとに論語聞きをれどイヤホン外せば忘れてゐたり

小春日の梢に見ゆるざくろの実孵化させてみたしこの大空に

焼酎に柚子の香たちて秋の夜のこの一杯に今日ひと日あり

漢詩

潮汐錄（百一）

鯨游海

賀辛丑春　　令和三年元旦

牛頭狗肉幕尻金
歡喜渦中我獨沉
角界未知愚政界
鴻鯤何處闇彌深

押韻・金沉深

〈辛丑の春を賀ふ〉

牛頭狗肉か　幕尻の金（星）は
歓喜の渦中に　我れ独り沈む
角界は未だ　政界の愚に如かざるも
鴻鯤　何処　闇いよ〳〵深し

〔注　解〕

幕尻＝大相撲の幕内番付の最下位の力士のこと。この一年優勝した二力士は前頭・17枚目等最下位であった。牛頭狗肉＝羊頭狗肉、牛首馬肉とも「懸牛頭賣狗肉」。「牛の看板を懸けて狗の肉を売る」こと、即ち「外観と中味が違う」「看板に偽ある」こと。鴻鯤＝おおとりと巨魚。共に中国神話の想像上の動物で、転じて「志の高い大人物」の喩えとして用いられる。荘子「燕雀安知鴻鵠之志」。沉＝沈の正字。

〔口語訳〕

令和二年という年は大相撲界にとって波瀾の一年であった。コロナ禍で本場所の中止とか無観客試合とか……また幕内の最下位力士だった徳勝龍や元大関の幕下照ノ富士がアレヨアレヨという間に何と優勝して了った。歓喜の渦中に私は独り沈み込んでいた。角界の愚劣さは政界より未だましなものの、大物不在、大人物不在の付けは深刻で日本の闇は深い。

☆鴻や鯤いずくに在るや闇深し
　人みな酔ふも我れ独り醒む

新型冠状謎微粒子其一　　令和二年三月

一爲十百忽千億
冠狀妖魔謎肺炎
萬國官衙悉愚鈍
不知惡疫秘沉潛

押韻・炎　潛

〈新型冠状謎の微粒子その一〉

一は十百と為り　忽ち千億
冠状の妖魔　謎めく肺炎
万国の官衙　悉く愚鈍にして
悪疫の秘かなる沈潜を　知らざりき

〔注　解〕

中国湖北省武漢市に発生した新型コロナウイルスは世界をパニックに陥れた。パンデミック感染症の恐怖！あっという間に世界を席捲し、人類は20世紀初頭のスペイン風以来の未知のウイルスとの闘いに挑んでいる。

〔口語訳〕

たったの一つが十となり忽ち百、千、億。新型の冠状の妖魔、この謎多き疫病。万国の為政者は悉く無能でウイルスが秘かに沈潜しているのに気付かなったとは！

☆死者五千女子アナの声坦々と
　人の生命やかくも軽きか

新型冠状謎微粒子其二　　令和二年五月

幽鬼纍纍千里堆
未知魍魎毒黴培
救援錢貨猶不屆
冀降如由破格材

押韻・堆培材

〈新型冠状謎微粒子その二〉

幽鬼累々として　千里に堆かし
未知の魍魎　毒黴の培ひたる
救援の銭貨　今もなほ届かず
冀くは由の如き　破格の材を降さんことを

〔注　解〕

冠状＝コロナ。謎微粒子＝ウイルス←→微生物（菌、細菌、黴菌）との違いは何か。極微小で非生物な所か？魍魎＝化ケ物、怪物＝魑魅魍魎。幽鬼＝死者の魂。亡霊。冀＝こひねがふ＝切望する。強く願う＝庶、庶幾、希。由＝仲由。孔子の弟子。字は季路。子路とも。論語「政事由有季路　文學子游子夏」孔子は仲由の行動力、実行力を評価し一番弟子として可愛がった。降＝英雄は天が地上に降すものとされた。龔白珍「不拘一格降人材」

☆コロナ前のあの長閑さは何処にや
　闇明くる日のふたたび来るや

大迫勇也選手　　平成三一年一月

一蹴脅威凌砲弾
韋駄天足救危難
左奔右走前復後
堅甲利兵無半端

押韻・弾難端

〈大迫勇也選手〉

一蹴の脅威は　砲弾を凌ぎ
韋駄天の足では　危難を救ふ
左奔右走　前復たうしろ
堅甲利兵　半端なし

〔注　解〕

日本蹴球界の主力選手。凌＝凌の正字。凌駕する。
韋駄天＝仏印度バラモンの神。魔王が仏舎利を奪って逃げたのを追い取戻した→速く走る人(事)を云う常套語。
堅甲利兵＝孟子・梁恵王「秦楚之堅甲利兵」＝堅守強攻。
無半端＝「半端」は漢語にはないが愛称の固有名詞として。

〔口語訳〕

球一蹴の脅威では砲弾を凌駕し俊足では危機を救った。
左奔右走堅い鎧兜と利い武器で半端じゃない大活躍だ。

☆韋駄天は弾射る如く一直線
　身をひるがへし斜に転ぶ

《漢詩の流れ89》江戸時代①藤原肅（惺窩）

新古今朝の代表といわれた鎌倉前期の大歌人藤原定家12世の孫。一時仏門に入ったが還俗、以後儒者として学問に打ち込み、徳川家康にも招かれたが固辞した。林羅山、石川丈山、松永尺五らを育てた。
我が身の出世よりも隠棲を重んじた魅力的な人物であった。私はこの人の生き方に陶潜明を想起する。

山　居　（さんきょ）

青山高聳白雲邊　青山高く聳ゆ　白雲の辺
厭聽樵歌忘世緣　厭かに樵歌を聴いて　世縁を忘る
意足不求絲竹樂　意足りて求めず　糸竹の楽しみを
幽禽睡熟碧巖前　幽禽ねむり熟す　碧巌の前

(注)

糸竹＝弦楽器や管楽器。琴、琵琶、笛、尺八…等。
幽禽＝ここでは自らを「かくれ棲む鳥」に喩えた？
なお青山、白雲、樵、樵歌、幽、幽禽、碧巌、世縁…等の熟語は、隠者の象徴としての語群である。

漢詩

汲深録（二十三）

松井秀人

江村秋暮

（江村秋暮）　令和二年九月

向晩江村繋釣舟
携魚熟路洒家樓
西風吹醉獨凭牖
月照陌阡霜葉幽

押韻・舟　樓　幽

〔注　解〕

熟路＝通いなれた道。
洒家＝さかや。酒店。
凭＝よる。もたれる。よりかかる。
牖＝まど。れんじまど（壁をうがち格子をはめた窓）。
陌阡＝あぜみち。みち。街路。
霜葉＝霜のために黄や赤に変わった木の葉。紅葉。

〔口語訳〕

暮れかかってきた川辺の村に釣舟を繋ぎ
釣ってきた魚を携え、通いなれた道を行きつけの酒屋に向かう。
西風に醉を吹きさまされ、独りれんじ窓に寄りかかっていると
月が照らす街路は紅葉が奥ゆかしい。

霜晨散策

（霜晨散策）　令和二年十月

早暁西郊寒氣盈
林間小徑踏霜行
凋殘楓槭初冬景
猶在黃花怡我情

押韻・盈　行　情

〔注　解〕

早暁＝夜明けがた。早朝。
西郊＝都会の西の郊外。秋の野。
凋殘＝枯れのこり。枯れていたむ。
楓槭＝かえで。
黄花＝黄色の花。菊の別称。菜の花の別称。
怡我情＝我が情をよろこばす。

〔口語訳〕

夜明けがたの秋の野原には寒気が盈ちていて
林の間の小みちを、霜をサクサクと踏んで歩いて行く。
枯れ残りのかえでの紅葉は、もう初冬の景を呈しているが
それでも咲き残っている黄色の花があり　気持ちが和らいだ。

曉起大雪

牀上推窓眼界新
皚皚二尺似堆銀
喧囂童子遊阡陌
衰叟擁爐惟待春

（曉起大雪）
令和二年十一月

牀上に窓を推せば　眼界新なり
皚皚二尺　堆銀に似たり
喧囂の童子　阡陌に遊び
衰叟　炉を擁して　惟　春を待つ

押韻・新　銀　春

〔注　解〕

牀上＝寝台の上。
眼界＝目に見える範囲。見渡す限り。
皚皚＝雪や霜の白いさま。
喧囂＝やかましい。口やかましく騒ぐ。
衰叟＝衰えた年寄り。

〔口語訳〕

寝床の上で窓を開けると　見渡す限り新しい情景が広がっていて
一面の大雪の白いさまは、あたかも銀がうず高く積まれているようだ。
口やかましく騒ぐ子供たちは、道で遊んでいるが
老人は炉に暖まりながら、惟、温かい春を待つばかりである。

冬霽閑居

雪霽陽光日午天
破居無客獨蕭然
哀歡繚繞茶煙裡
輕暖爐邊貪惰眠

（冬霽閑居）
令和二年十一月

雪霽れ陽光　日午の天
破居に客無く　独り蕭然
哀歡繚繞　茶煙の裡
軽暖の炉辺　惰眠を貪る

押韻・天　然　眠

〔注　解〕

雪霽＝雪がやみ空が晴れる。
日午天＝昼ひなかの空。
破居＝わび住まい。
哀歡＝悲しみと喜び。
繚繞＝まつわりめぐる。くねくね曲がっているさま。

〔口語訳〕

雪が降りやみ、ひなかの空には陽光が出てきたが
わび住まいには客も来なく、がらんとして独りでもの寂しい。
人生の悲しみと喜びとが、茶煙の中をまつわりめぐっており
ほのかに暖かい炉辺で　惰眠を貪ることにしよう。

聽雪喫茶

始覺嚴風夜幾更
煎茶小室雪來聲
雖添炭尚寒威迫
爐畔忘憂樂此生

（聽雪喫茶）
令和二年十一月

始めて覚ゆ厳風　夜幾更ぞ
茶を煎ずる小室　雪来る声
雖も炭を添えると　尚　寒威迫る
炉畔に忘憂　此の生を楽しむ

押韻・更　聲　生

〔注　解〕

嚴風＝冬の風。
添炭＝炭をつけ加える。
忘憂＝憂いを忘れる。心配事を忘れ去る。

〔口語訳〕

ようやく冬の風に気が付いたが、夜はもう何時頃だろうか
茶を煎じている小室でも、雪が降ってきた音が聞こえる。
炭を添えても、それでもなおきびしい寒さが迫ってくる。
炉辺で憂いを忘れて茶を飲み、このような暮らしを楽しむ。

戊辰東北戦争③
奥羽越列藩同盟異聞

千坂精一

一、

出羽米澤（山形県）の領主上杉齊憲は慶應四年（一八六八）四十九歳の新春を国許で迎えた。

といってもいつものような平穏で長閑な新春ではなかった。

昨暮も押し迫った十二月二十七日に朝廷から『王政復古の大号令』が届くと、二日後の二十九日にこんどは大坂在城の将軍慶喜から『上坂を促す檄文』が届いたのである。

家中では、朝廷の指示にしたがって上洛するか、将軍の命を受けて上坂するかの意見に別れて紛糾したが、齊憲の決断でこれまで恩顧を受けてきた幕府の指示に従って上坂することに決定し、家老の竹俣美作久綱を急出府させておいて、越年と賀正の祝いを取り止めると、急ぎ上坂の準備にとりかかった。

そして、十二日に侍頭本庄彌次郎寛長率いる一番組を先発隊にして出陣させておいて、齊憲みずからは世子茂憲に留守を預けると、四男勝賢と従弟の勝應を従わせ、謙信の父爲景が朝廷から賜ったと伝えられている紺地に日の丸の旗を押し立てて、古式に則った供揃えで出陣したが、この日は殊のほか風雪が烈しく、峠路を行くのに難儀して、日暮時に漸く板谷まで辿り着いた。

翌日は国境を越えて庭坂で休息をとり、暮れ六ツ（午後六時）頃にようやく福島に到着して本陣に宿泊した。

その夜、急出府させて様子を探らせた竹俣久綱が江戸表から馳せ戻り、変事の様子を報告した。

それによると、幕府が薩摩の仕掛けた挑発に乗って江戸の薩摩屋敷を焼討ちにしたことが起因になって在洛中の薩摩軍が大坂城にいる将軍慶喜を攻めるという報を受

けた幕府軍が機先を制すべく京都守護職の會津兵、所司代職の桑名兵、それに幕府が雇った新撰組や浪士組などを動員した一万五千の軍勢で京へ向かったが、途中鳥羽、伏見の両街道で薩長軍五千と衝突して敗れ、慶喜将軍が江戸へ逃げ帰ったということを報告して、ここは確と情勢を見究めたうえで行動を起こすのが賢明と具申したので、齊憲は承知して翌日一旦米澤へ引き揚げた。

追っ付け届いた江戸屋敷からの早馬が、鳥羽、伏見での幕府軍の敗北から将軍慶喜追討令が発布されて薩摩、長州の朝廷軍が江戸城を攻める、との詳報を持ってきたので、ことの次第を知った齊憲と重臣たちはその重大さに緊張した。

つづいて二月九日に江戸詰の中之間年寄大瀧新藏秀光が早駕籠で到着した。

一月十七日に京屋敷に滞在中の仙臺の家老但木土佐が朝廷から會津征討を命ぜられ、当家にも仙臺の応援を強要されたという火急の報告で、『応援沙汰書』を持参してきた。

それは、仙臺に會津征討を命じたから米澤は仙臺を応援せよとの有無を言わさぬ要求であった。

二月二十六日に東征大総督府の下に奥羽鎮撫使をおくと、総督に九條道孝、副総督に澤爲量、参謀に醍醐忠敬、下参謀に大山格之助、世良修藏を任命した。

そして、三月十日に大坂を出港して仙臺に向かったと知った伏見屋敷に常駐していた家老千坂太郎左衛門高雅は、十二日に急駕籠を仕立てて二十二日に帰着すると、ただちに山田八郎を仙臺に遣わして鎮撫使取り扱いの方法を尋ねさせることにした。

千坂高雅は性急な性分の人だったらしく、手紙の冒頭にはいつも「大急ぎ大急ぎ」と急き立ててあったという。

ところが翌日仙臺から飛脚が届き、鎮撫使率いる薩長の軍勢はすでに十八日に松島湾に到着していて、下参謀の大山、世良から至急仙臺へ出頭するよう要求しているとの報せてきた。

米澤では直ちに大瀧新藏に上與七郎と江口復藏を副えて仙臺へ急行させておいて、あらためて家老色部長門久長が出向くことにすると同時に、中之間年寄木滑要人政恕と提学片山仁一郎一貫を窃かに會津へ発たせた。

松島湾に入港した奥羽鎮撫の薩長軍は二十三日に仙臺城下に入ると学問所の養賢堂に本陣をおいた。

九條総督は直ちに仙臺に會津攻めを急き立てたので、やむなく重い腰を上げた伊達慶邦は二十七日に先鋒隊を會津へ送った。

米澤には四月朔日に九條総督が直々にやってきて、齊憲に會津征討の先鋒を命じた。

米澤も仙臺同様にその優柔を詰られて切羽詰まった。

そして四月四日、遂に討會の命に従うことに決すると、七日に軍政府を江戸家老毛利上總業廣の留守邸に置き、

軍事総督に家督を継いで昨年二十七歳で家老になったばかりの千坂太郎左衛門高雅、参謀に廿糟庄之助繼成を据えて、齊憲から『軍令状』を授けた。

しかし、これらはすべて擬装であって、米澤は窃かに仙臺と力を併せて必死に會津の謝罪嘆願の斡旋工作をつづけていた。

米澤の上杉にはどうしても鎮撫軍の片棒を担いで會津を攻めることが出来ない深い理由があった。

それは――。

話は二百年ほどまえに遡る。

二、

寛文四年（一六六四）五月朔日、参覲で出府していた江戸幕府になって三代目の出羽米澤領主上杉播磨守綱勝は、外桜田の上屋敷（現霞ヶ関法務省）から江戸城へ出仕した帰路に鍛冶橋御門内の妹婿にあたる高家筆頭吉良上野介義央邸へ立ち寄り、休息したのちに帰邸したのだが、その日の夕刻から俄かの腹痛をおこして臥床し、七日後に薬石の効もむなしく二十七歳の若さで身罷ってしまった。

綱勝には嫡子も庶子もなく、まだ養子も決めていなかったので重臣たちは狼狽した。

幕法では〈嗣子なきときは断絶〉と定めている。

上杉家の取り潰しは間違いないところであった。

それを、綱勝の岳父で三代将軍家光の異母弟にあたる會津の初代領主保科肥後守正之が、

「鎌倉以来の名門を取り潰すのは惜しい」

と幕閣や長老たちの間を精力的に説得して回ってくれたのが功を奏して、高家吉良義央の嫡男三郎を急養子に迎えることで異例の半知相続を許された。

そのときの経緯を上杉家歴代の公式記録『御年譜』にはこう記述されている。

「寛文四年夏六月五日　昨日老中ヨリ吉良若狭守義冬ヲ以　播磨守老臣等ヲ酒井雅樂頭忠清ノ官邸ヘ差出スヘキ旨告達ニ依テ　保科中將正之　吉良義冬　同上野介義央　上杉内記長之　畠山下總守義里　並元老中條越前知資　千坂兵部高治　安田兵庫清元　澤根伊右衛門恒高　各大老酒井忠清ノ官邸ニ参仕ノ処老中阿部豊後守忠秋　稻葉美濃守正則　久世大和守廣之列座台命ヲ忠清申伝ラル　其趣ニハ　播磨守実子無之ニ付　御掟ノ如ク跡式御立難被成被思召候得共保科肥後守量ヲ以　吉良義央カ男子致養子候段申上ニ付　即三郎ヘ遺跡相続仰付ラル　秩半減羽州米澤領十五万石被下ノ旨也　謹テ御請演達各退出ス　即日月番阿部忠秋ノ官邸ヘ右御一族方　並老臣四人召招カレ十五万石上ケ地等ノ事　且藩仕置念ヲ入　幼君ヲ守立ヘシ幼少ノ内国目付遣サルヘキノ旨台命ヲ伝ラル　各御請有テ退出ス　此ニ依テ即日江府ヨリ小川茂左衛門吉弘　須崎嘉右衛門重昌両人米府ニ差下サレ　同九日両

土米府ニ到着　老臣及ヒ郡中ノ諸士ニ告達ス」

つまり米澤は、會津の始祖保科正之から受けたこの大恩を仇で返すような行爲にはでられなかったのである。

だから米澤は鎮撫軍に恰も同調するかのようにみせかけて巧みに矛先を躱しながら刻と稼ぎ、仙臺と協力してなんとか會津を恭順させ、謝罪嘆願の方向に導こうと裏工作に奔走したのである。

その懸命な説得に會津は漸く軟化し始めたかに見えたので、伊達慶邦は鎮撫軍下参謀の世良修藏に会って、「會津謝罪の斡旋をしたいが、どのような条件を出させたら九條総督は納得されるか」

問うた。

會津征討の急先鋒で過激派の世良修藏は、再三征討令を出しているにも拘わらず愚図愚図して応じないばかりか、ことここに至ってまだ謝罪の斡旋をしたいといっていることに業を煮やして

「謝罪の条件は、松平容保の斬首と嗣子若狭の監禁、それに若松城の開城だ」

そう途方もない苛酷な条件を口走った。

そんな条件を提示しても、會津方が承知するはずはなかった。

あちら立てれば、こちらが立たぬ。

ほとほと困惑した伊達と上杉は、窮余の策として勝手に修正案をつくり會津と交渉しようと考えた。

四月十三日、仙臺から使者として若生文十郎と横田官平が到着して木滑要人と大瀧新藏に会見して協議し、會津のためにもういちど尽力しようと申し合わせ、會津に開城と削封と首謀者を斬首するの三条件提出を説得して鎮撫総督に斡旋することにした。

つまり、開城、削封、重臣の首級をもって謝罪させようとしたのであるが、しかしこれも會津側の予想外の抵抗に遭って挫折してしまった。

仙臺は万策尽きたとして匙を投げ、鎮撫軍参謀から會津攻略の督促が厳しく、切迫した情況にあるところから引き揚げてしまったが、なんとしても弓矢を向けることを躊躇う米澤はなおも諦めず、単独で執拗に説得をつづけた。

だが、それは徒に空転するばかりであった。

會津の主戦派は強硬だった。

「さきの鳥羽、伏見での衝突は薩長側が発砲してきたから応戦したまでのことであって、われわれには朝廷に対して弓を引く意志など毛頭なかったのだ。あれは飽くまでも正当防衛であったのに朝敵の汚名を蒙ったのは心外である。だが、事の次第はどうあれ、いまわが會津に対して理不尽な征討令が下ったからには、受けて立つのが武門の習いである」

そう筋目を通して態度を明らかにし、一歩も譲らなかった。

穏健派にしても、当主容保の城外謹慎と、所領の削封ぐらいにしか考えていなかったのである。

むしろ會津は、おなじ立場にある出羽庄内（鶴岡市）領主酒井忠篤と四月十日に軍事同盟を結んだのと同様に、伊達、上杉とも同盟して奥羽諸侯を決起させ、鎮撫軍を撃退する積極策を希んでいたのである。

……

月がかわって閏四月朔日、米澤、仙臺、會津の代表たちが仙臺へ集まり今後の方針について会談した。

だが、ここでも米澤の必死の説得はついに実らず、會津の頑強な抵抗のまえに一歩も二歩も後退して妥協せざるを得なかったのである。

こうした和平工作がすすめられているあいだにも山形と上山に庄内追討の応援出兵が命ぜられ、奥羽鎮撫副総督澤爲量と下参謀の大山格之助は薩摩軍を率いて岩沼を出発し、天童の家老吉田大八の先導で山形を経て上山に入り、二十三日には新庄に到着していた。

そして、翌二十四日に薩摩軍と庄内軍が立谷沢川が最上川に合流する清川口（山形県東田川郡庄内町）で交戦したのをはじめ、閏四月四日には庄内軍が天童城を攻撃したりして、出羽では戦闘がはじまってしまった。

この日、米澤の千坂、竹俣、仙臺の坂、但木の四家老連盟で、

「會津より謝罪嘆願の申し出があるので評議いたしたく重臣を白石まで出張させて欲しい」

旨の回状が奥羽諸侯宛に出された。

のちに『奥羽越列藩同盟』といわれる諸国会議の招請状である。

話は逸れるが、私はこの稿（戊辰東北戦争）の中で〈藩〉という字をいっさい使っていない。

それというのは、〈藩〉は明治政府が慶應四年（一八六八）閏四月二十一日に発表した『政体書』のなかで地方組織を府、藩、県に分けたときの呼称であって、江戸時代には〈藩〉という呼びかたはしなかった。

所領は国家または領国であり、藩主は国主又は領主、藩士は家中であった。

だから大名家の紛争は〈藩騒動〉ではなく〈御家騒動〉であった。

余談はさておき、話を戻す。

白石は仙臺伊達家の重臣片倉小十郎一万八千石の城下町で、仙臺と福島のほぼ中間に位置し、藏王山の玄関口である。

白石での会議は十一日の夜、片倉小十郎の家老佐藤勇記宅で開かれた。

會津謝罪に関する嘆願書の草案が配付されて説明が加えられ、質疑応答がなされて、

「會津への寛大な処分を嘆願すること」

に決した。

翌十二日、齊憲と伊達慶邦は岩沼の総督府へ出向いて九條総督に直接会い、東北諸国連盟の嘆願書、會津独自の嘆願書、それに米澤、仙臺両領主の嘆願書の三通を直接手渡した。

この和睦して平和への方向を模索する嘆願書を九條総督は一旦受け取りはしたものの、やはり、

「独断で指図はできぬから、いちおう預り置く」

そう言って回答を保留した。

鎮撫軍の総督九條自身も、副総督の澤爲量も参謀の醍醐忠敬も首脳部はみな公卿で、軍務には不向きな名ばかりの存在であった。

だから実践にあたっての作戦、用兵は下参謀の大山格之助（薩摩）と世良修藏（長州）が思いのままに指揮をとってきていた。

これまでも公卿三人と武家二人のあいだで事ごとに意見の齟齬をきたしてきていたので九條総督も二人の下参謀の意見をきかないわけにはいかなかったのである。

十七日になって九條総督から漸く沙汰があった。

その返書には、

「會津は朝敵容すべからざる罪人に付き、御沙汰に及ばされ難く、早々に討入成功を奏すべし」

と記されていた。

世良修藏の強硬な反駁によるものであることは明白であった。

その世良は十八日に長州の勝見善太郎を随行させて白河を出立し、夕刻本宮の大内屋に着いて宿泊、翌日二本松を経て八丁目宿（福島市松川町）に入り、本陣で醍醐参謀の到着を待って密談に入った。

「たとえ仙臺と米澤が會津攻めに協力しなくとも頼むに足らず、これより江戸へ行って大総督府の援軍を請い、白河に集結させて大挙して會津へ攻め込もう」

そう結論に達すると、世良は勝見を伴って江戸へ向かい、その日はまだ日の高いうちに福島の金沢屋に宿泊した。

そこで世良は、出羽新庄にいる大山に宛てて密書を認めた。そこには、

「此上は一応京師へ相伺、奥羽の情実篤と申入れ奥羽皆敵と見て、逆撃の大策に致し度く候に付、及ばずながら小子急に江戸へ罷り越して大総督府西郷様へも御示談致し候上、京に登り仕りなお大坂までも罷り越し大挙奥羽へ皇威の赫然致し候より仕り度く存じ奉り候」

と書かれていた。

書きおえた世良は福島の用人近習頭の鈴木六太郎を呼んで新庄の大山格之助に宛て急飛脚を立てることを命じた。

そのとき世良は、

「飛脚は二人立て、仙臺の者に悟られぬようにせよ」

と命じながら、自身で書翰を油紙で包み紐を掛けた。

その様子が鈴木に不信の念を抱かせた。

ちょうどそのころ、上湯口から瀬上主膳、軍監姉歯武之進、書記岩崎秀三郎の三人が阿武隈川畔舟場町の長樂寺に設営されている仙臺の軍務局に立ち寄った。

あいにく訪ねる参謀泉田志摩が留守だったので昼食をとりに鰻屋の各白軒に寄った。

そこで世良修藏が金沢屋に入ったことを知った。

ただちに長樂寺へ戻ったところへ鈴木六太郎が世良の書翰を持って駆け込んできた。

そして鈴木が世良に、

「仙臺に漏らすな」

と念をおされたことを知った。

密書を披見した瀬上主膳は、憤怒の形相物凄く怒り心頭に発しているところへ、世良が、

「明朝六ツ刻（午前六時）出立につき人夫を差し出せ」

と命じたという情報が入った。

（世良を誅殺するのは今宵しかない）

瀬上は白石本営の指示を待つ余裕なしと判断して独断でそう決定した。

人選は、瀬上隊の軍監姉歯武之進をはじめとする五名、投機隊二名、それに福島の用人鈴木六太郎ほか二名の十名である。

世良誅殺隊は丑の刻（午前二時）頃金沢屋に押入り、主人浅之助を呼び出して世良と同衾している飯盛女を連れてくるよう命じているあいだに仙臺の赤坂幸太郎と福島の遠藤粂之助が突然世良の寝所に踏み込んで捕縛した。

二十日未明、世良は宿の裏を流れる小さな川の川辺に連行されて斬首された。三十四歳の生涯であった。

九條鎮撫総督に提出した『嘆願書』は突き返され、世良下参謀を捕らえて処刑したからには、和平交渉など成立するはずはなく、仙臺と米澤は會津への出兵を撤退させた。

そして閏四月二十二日、白石の奥羽諸国会議所に二十五箇国の重臣たちが集合して、和平のために結成された同盟が軍事同盟結成になっていった。

五月二日、さらにそこへ北陸道鎮撫軍軍監岩村精一郎との会談が決裂した長岡の家老河井繼之助が参加を希望してくると、越後の諸国も続々参加してきて六箇国となり、三十一箇国による奥羽越列国同盟に膨れ上がっていった。

そして、上野戦争の渦中を脱して落ち延びてきていた輪王寺宮公現法親王（のちの北白河宮能久親王）を盟主にいただき、伊達慶邦と上杉齊憲が総裁に、幕府の老中だった小笠原長行と板倉勝静が参謀に就任して薩・長の朝廷軍を迎え撃つ態勢を整え、決戦のときを迎えた。

四、

仙臺の但木土佐は、薩・長合わせても百二十万石しかなく同盟した奥羽越諸国は合わせて二百三十万余石と保有高のみを比較して有利と踏んだが、時勢はそうはいかなかった。

北陸道鎮撫軍が越後へ侵攻してきたのを阻止しようとした會津軍が敗れて国境が不穏な情勢になってきたので、米澤は五月朔日に三番組侍頭中條豊前明資を大隊長にして六百三十余人を出陣させた。

その三日後には江口縫右衛門を大隊長にした二百二十人を奪取された白河城の応援に差し向けた。

さらに五月十日、家老色部長門を総督に任じ、中老若林作兵衛を後見にして越後口の増援に送り、翌日甘糟備後を参謀に命じて追っ掛け出陣させた。

この甘糟は文武両道に秀でた人物で、新津で色部長門が病に罹ったあとの全権を任された。

五月十八日に新発田から水原に移動して本営を据えた仮総督の甘糟は、笹原から到着した中條豊前とともに會津の西郷勇右衛門、日向左傳、庄内の石原友太夫ほか諸国の将と軍議を練った。

翌日、甘糟は一小隊を率いて水原の本営を発し、分田から阿賀川を渡って村松に向かった。

この日、長岡城が陥ちて越後方面はさらに険悪な情勢になっていった。

二十一日、甘糟隊は賀茂に到着した。そこへ妙見口で敗れた會津、桑名、長岡、村上、上山の残兵が逃れてきた。

甘糟はここでまた、僚将中條豊前と次々に集まってくる諸国の重臣たちとの合同軍議に臨んだ。

臨席した面々は、會津の一ノ瀬要人、西郷源五郎、長岡の河井繼之助、花輪求馬、桑名の金子權左衛門、村松五次右衛門、村松の田中勘解由、森重内、村上の水谷孫兵次、上山の祝井段兵衛らだったが、軍議はなかなかまとまらなかった。

そこで甘糟備後が、

「総軍を三分割して、㈠は中條豊前が総帥となり、米澤兵と古屋作左衛門の衝鋒隊を主力に長岡、村松の兵を加え、長岡口の大面（三条市）へ進軍して見附（見附市）を占領する。㈡は一ノ瀬要人が総帥となり、會津、桑名、上山の諸軍が与板口（長岡市）へ向かい、三條か地藏堂（長岡市）を経て与板城を攻略する。㈢は會津、庄内、山形、三根山の各軍と水戸浪士組の兵を加えて出雲崎口（三島郡）へ進撃する」

そうしてはどうかと問うた。

凝つと傾注していた一同からは対案が出ずに、

「その軍略大いによし」

として衆議はやっとまとまった。

齊藤主計を先鋒隊長とする米澤軍が、大面と小栗山一帯で朝廷軍と交戦したのにはじまり、二十六日に衝鋒隊の古屋がまともにぶちあたれば、甘糟參謀が敵の側面を

衝いて米澤軍は緒戦で華々しい勝利を味わった。

六月朔日の朝までつづいたこの戦闘では、薩摩、長州、金澤、名古屋、松代諸国の数千に対して、米澤はその一割程度の兵力でありながら善戦して敵を退けている。

この日越後長澤口（三条市）の闘いは激烈だった。

仮大隊長の古海勘左衛門は、桃井清七郎、山下太郎兵衛らの隊を率い長岡、村松、會津の諸軍とともに加茂の東南黒水の聖賢寺から進撃した。

大面が三条から長岡へ至る表口なら、長澤はその裏手行路である。

七ツ（午前四時）頃間道を進む同盟軍は、突如山手からの攻撃を浴びて苦戦に追い込まれ、退かざるを得なかった。

後退する友軍のなかから唯一人逆行して山上へ駆け上がって行ったのは山下隊長であった。

山下隊長は当然ながら銃弾を浴びて壮烈な討死を遂げたが、すでに雪崩落ちて行く味方の士気を奮い立たせることはできなかった。

だがこの日、米澤軍は新潟港を確保した。ここはもともと旧幕府の直轄領であったが、幕吏田中廉太郎から託されて米澤の家老色部長門が會津の家老梶原平馬とともに守備することになった。

ここが同盟軍にとって弾薬や物資の補給路として役立ったのはいうまでもない。

だが託された色部が不幸だったのは、のちに朝廷軍の猛攻を浴びて死に場所になってしまったことである。

六月三日、米澤では上杉齊憲みずからが越後へ出陣することになった。

戦線が拡大激化していったので千坂、色部両総督から士気を鼓舞する要請があったのだ。

六月四日、齊藤主計、甘糟參謀、花輪求馬の各隊が相次いで見附（見附市）に集結して村長金井茂兵衛宅を本陣にした。

六日にはそこへ千坂総督が到着した。

この見附での軍議は米澤の千坂、甘糟のほかに會津の家老佐川官兵衛、長岡の家老河井繼之助などの顔触れで開かれたが、この席でのちに有名になる『倒薩の檄』が公表された。

草案者は文才豊かな熱血の詩人雲井龍雄こと米澤の小島守善である。

雲井は学問所の興譲館で学び、二十一歳のとき江戸へ出て儒者安井息軒の門に入った。

雲井は六月十六日平潟に上陸した朝廷軍に対して米澤、仙臺、平諸国の先鋒となって九面と関田を守る旧幕府遊撃隊の応援に出掛けた。遊撃隊長人見勝太郎は雲井の旧友である。

二人は勿来関址下（福島県いわき市勿来町）の奥羽街道松川浦で再会し、兄弟の約を結んで〈回天の壮図〉を

誓い合った仲である。

雲井は遊撃隊とともに會津を取り囲む朝廷軍の背後を襲う作戦を立てたのだが、思い通りにはいかなかった。

そして、八月十九日には會津の原直鐵らと戸倉の関に入り、沼田を望んで事を謀った。

薩長誅伐の闘志に燃える雲井は沼田の兵に追われ八月三十日に帰国するが、すでに国論は降服に決定したあとであった。

くだって明治二年（一八六九）六月、米澤の学問所興譲館の教師になった雲井は、やがて集議院議員に選ばれた。

しかし、彼の行動精神はまだ鳴りを鎮めてしまったわけではなかった。

東京芝二本榎の上行寺、圓眞寺に帰順部曲点検所を設けて戊辰戦役の敗残兵を狩り集めた。

結局、雲井龍雄は内乱の罪に問われて、翌明治三年十二月二十六日、東京荒川南千住の小塚原で斬首刑に処され、二十六歳の生涯を閉じた。

話は逸れてしまったが、それはさておき、雲井龍雄草案の『倒薩の檄』が千坂総督によって柏崎に駐屯中の長州軍仮参謀時山直八に送られ、同盟軍は六月十四日一斉進撃を開始した。

大口を攻め、栃尾（長岡市）を抜いたが、七月朔日の大黒の激戦で戦死者四十数名、戦傷者多数を出して敗退した。

新潟港が攻撃されたのは七月二十九日で、この日前述の米澤の家老色部長門久長が戦死したのだが、長岡では同盟軍が城を奪還した。

だが、増援をたのんだ朝廷軍の優勢に屈してしまい、八月一日越後口の千坂総督は全軍に退還を命じた。

この地域にいた米澤軍は、国境（南蒲原郡下田村〈三条市〉）の八十里越から會津を経てようやく米澤へ帰国した。

このとき、重傷を負った長岡の家老河井繼之助も戸板に乗せられて會津へ向かったが、八十里越を経て會津領に入ったところの塩澤村（只見町）で力尽きて落命した。

そのとき、白嘲をこめて詠んだという、

八十里腰抜け武士の越す峠

は後世に伝えられて有名になった。

そのころ、国許米澤では予期せぬことが起こって家中が動揺していた。

ことのおこりは、伊達郡小坂村（国見町）に駐留している米澤軍の陣営に、二本松口に進駐してきていた土佐軍の澤本守也が、米澤の重臣に宛てた参謀谷守部（干城）、片岡健吉、伴權兵衛連名の書状を届けにきたのである。

重臣宛ということで急ぎ米澤へ届けられた書状は『降服勧告書』であった。

山内家ではこれまでに数名の姫君を輿入れさせていて、

上杉家とは重縁関係にあった。

山内容堂は、謙信以来の勤皇の家である名門上杉家が朝敵の汚名を蒙って取潰されるのを惜しんで救援の手を差し伸べてきたのであろう。

ほかの西国諸国の縁戚大名家、たとえば安藝の浅野家や日向高鍋の秋月家などからも上杉家を心配しての降服勧告が次々に届けられてきていた。

齊憲と重臣たちが鳩首協議を繰り返し、親戚筋の大名家の立場も配慮して、土佐を始め西国諸侯に類が及ばぬうちにとついに降服を決議した。

八月二十八日、参謀齊藤主計と中之間年寄黒井小源太が越後の沼村に赴き、薩摩の村田勇右衛門、長州の奥平謙輔、安藝の寺本榮之助らと会見して帰順する旨を告げ、「九月五日までに当主齊憲か世子茂憲が新発田に出向いて総督に謁する」

ことを確約した。

九月朔日、家老毛利上總業廣、中之間年寄木滑要人に新発田の総督府への使者を命ずると、翌二日、齊憲は家中一同を集めて恭順を命じておいて、自身は米澤城を出て謹慎した。

齊憲は所労で体調を崩してしまったので、新発田の総督府へは世子の茂憲が出頭することになった。

茂憲に付き従う家老は、色部長門は戦死、千坂太郎左衛門は謹慎、毛利上總は越後に在陣していて米澤には竹俣美作しかいなかったので寂しい限りであった。

総督に提出する『謝罪降服嘆願書』には、

「就ては連合の諸侯へも早速降服謝罪を仕り候様説得に尽力仕り候間、悔悟謝罪の諸侯にもご寛大な処置を下されます様に」

と連合した諸侯にも謝罪降服を説得いたしますので同様の寛大な処置を下されますように、と願っている。

連合した諸侯たちから恨みを買わぬためには同様の処置をしてもらうよりほかに方法はなかった。

九月十一日、上杉茂憲は新発田において朝廷軍軍事総督仁和寺宮（のちの小松宮）彰仁親王に謁して降服を申し入れ、『謝罪降服嘆願書』を提出した。

そのとき、茂憲は庄内追討の先鋒を願い出た。

また米澤が土佐のすすめで降服を決意する最中の九月三日に、會津の堀粂之助が若松城を脱出して米澤に援軍を要請しにきたが、すでに降服を決断した米澤が応じなかったので、堀は使命を果たせなかったことで自決した。

また、六日には手代木直右衛門と秋月梯次郎が同様に救援を要請しにきたが、米澤は降服謝罪に決したことを告げて會津にも勧めて返した。

奥羽越連合同盟の指導者だった仙臺も片腕と恃んだ米澤を喪ってはやむなく九月十五日に謝罪降服すると、盟主に立っていた輪王寺宮も二十二日に降服して、奥羽越列国同盟はついに瓦解して消滅した。

最後まで孤軍奮闘した會津も結局刀折れ矢尽きて、九月二十二日に降服した。

こうして戊辰東北戦争は終わった。

五、

戦争終結のあとにくるのは勝者による敗者への処罰、すなわち国土（領知）没収と首謀者の処刑である。

この戦後処理方法は、八十年近くものちの太平洋戦争の東京裁判にいたるまで連綿としてつづいた。

慶應四年九月八日に『明治』と改元された年の十二月に同盟した奥羽、越後の諸侯に領知没収処分が通告された。

米澤は率先して恭順したことで特に四万石の削封ですみ、齊憲が隠居して世子茂憲が家督を許された。

その他、主な諸侯の削封高は、

仙臺三十四万石、會津二十万石、盛岡七万石、二本松五万石、庄内五万石、長岡五万石、白河四万石などであった。

そして、領知没収につづいて戦争責任者つまり戦犯の提出を迫られた。

米澤では色部とともに軍事総督だった千坂が自分を差出すよう再三隠居した齊憲に申し出たが、諸侯の様子を窺ったところ、會津では生存している政務総督の梶原平馬と軍事総督の山川大藏の二人を出してしまっては再興に支障を来すことが懸念されるので、負傷して自刃した筆頭家老の田中土佐と三席の神保内藏助、次席の西郷頼母は他の重臣たちと折合いが悪く心配した容保が越後境の守備隊指揮に出したところ、仙臺へ行ってしまって所在不明だったのでやむなく生存している四席の萱野權兵衛を差し出した。

萱野は翌二年五月十八日、會津下屋敷（港区三田一丁目、慶應義塾大学のあたり）において自害して果てた。

仙臺では但木土佐と坂英力が奥羽越連合結成首謀の罪と、世良下参謀殺害の罪を問われて東京へ護送され、麻布の仙臺下屋敷（南麻布一丁目、大韓民国大使館のあたり）において刎首された。但木五十二歳、坂は三十七歳であった。

こうして各国の領主は會津に倣って戦死した重臣たちを提出していることを知った茂憲は、千坂の申し出を抑えて新潟で戦死した色部長門久長ただ一人を首謀人として届け、あとは言を左右にして回避つづけた。

ところが、翌年五月二十七日にそれがとんでもないことになってしまった。

越甚五右衛門が東京からやってきて、隠居の齊憲に携帯してきた新政府からの『御達書』を差し出した。

そこには戦犯として提出した首謀者の〈家名断絶〉が命じられていた。

齊憲は新政府が戦争責任者をそこまで追い詰めるとは思ってもいなかっただけに、唖然とすると同時に戦慄した。

齊憲は、すぐさま当主茂憲をはじめ重臣たちを召集して評定を開いた。

だが、議論が百出してまとまらず、

「結局姑息に致し候とも別にお咎めはこれあるまじくも万一の事これあり。末々不都合出来候ては相成らず、情実に於ては誠に以て忍び難き義なれども、色部長門の遺跡は断絶申し付くる外これなく」

とそう結論づけられてしまった。

但し、色部家は名門であり国家のためには大忠臣につき、齊憲は嫡子彌三郎康長に山浦氏の再興相続と禄秩二千石、それに上杉家の家紋〈竹の丸飛雀〉の御紋を与えた。

山浦氏というのは越後守護上杉氏の一門で、関東管領上杉憲方の三男房方の二男頼方が興して北浦原郡白河荘山浦（阿賀野市折居）地方を領有した。

謙信の時代に活躍した山浦源五國清は北信濃の豪族村上義清の子で、謙信が絶えていた山浦氏を継がせた。

謙信は流浪の将軍足利義昭から再三信長討伐に上洛するよう要請されていたところ、ようやく関東から小田原北条氏の勢力を駆逐したので愈々信長討伐の上洛を決定し、天正三年（一五七五）家臣団に軍役を課した。

その『軍役帳』には一群が一門、客将、二群が下越国人衆、三群が上、中越国人衆、四群が譜代、旗本衆の順で書かれているが、その一群の一門御中将様（養子景勝）の次に山浦殿と敬称がつけられている。

天正六年（一五七八）謙信最後の関東出陣で大動員令をかけたときにも、『上杉謙信自筆将士書上』といわれる『上杉軍団動員名簿』八十一将のなかに山浦氏の名がある。

また、謙信の跡を継いだ養子景勝の代の文祿三年（一五九四）につくられた『定納員数目録』（職員録のようなもの）にも越後侍中の筆頭に名があり、山浦氏は上杉家中の名門であった。

のちの話になるが、明治十六年（一八八三）十一月二十日に断絶した色部長門久長の長男山浦彌三郎より『色部家再興伺書』が提出された。

これについて当主茂憲は、

「別意なし」

として、家令堀尾重興より奉札を以て伝達した、とある。

色部家の再興が許されて相続した長門久長の長男彌三郎康長は大正六年（一九一七）三月六日に死去したので上杉家から堀尾家扶が会葬して香典七円が供えられた。

その翌日、長門久長の五十年忌の法要が米澤の北方窪田村の千眼寺で執り行われたので、上杉家から櫻井家従が代拝として遣わされ、霊前に香典十五円が供えられた。

こうして上杉家は、断絶させられた色部家を当主がと

きおり墓参しては霊を慰めてきていたし、故人の年忌には家令なり家従をかならず弔問させることを怠らなかった。

それだけ上杉家代々の当主にとって由緒ある重臣の名家を断絶させられたことはなんとしても無念だったことのあらわれであった。

ながくなったが、色部家の名誉のために付記しておく。

（了）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の一品〈二〉

まんじ誌前一五八号に続いて、妻の茶道の先生から譲り受けた、茶道具二点のうち残り二点につき紹介致したい。掛物と黒釉花入れである。先ず掛物から進める。

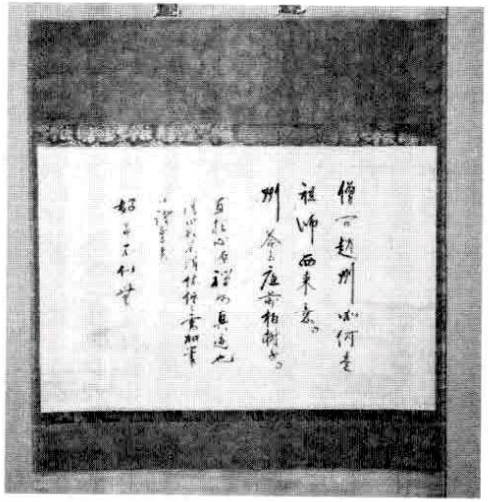
「掛物」玉室宗珀書　清巌宗渭添書

「庭前柏樹子」

本文

僧問趙州、如何是祖師西来意。州答云、庭前柏樹子。直指心源禅師真迹也。清巌宗渭依他之需加筆以證焉矣。

好事不似無。　清巌　宗渭



玉室宗珀書　清巌宗渭添書「庭前柏樹子」

「読み」

僧、趙州に問う、如何なるか是れ祖師西来の意？

州、答えて云く、庭前の柏樹子!!

直指心源禅師の真迹也。

清巌宗渭、他の需めに依って筆を加え以て焉を證す。好事も無きに似かず。

「解説」

趙州は、唐代の禅僧であり、趙州従諗禅師という。

祖師西来の意とは、祖師即ち達磨大師が西の方インドから中国にやって来た意図ということで、達磨の禅の神髄をいう。さらにいえば禅の悟りのこと。

庭前の柏樹子とは、庭前の檜柏の樹。趙州がこう答えた肚は、実際に参禅した上でなければ分らない。

直指心源禅師は、大徳寺第一四七世住持、玉室宗珀（一五七二―一六四一）。後陽成天皇より禅師号を勅賜さる。

真迹とは、真跡。真筆。

清巌宗渭（一五八八―一六六一）は、大徳寺第一七〇世住持。後水尾天皇から清浄本然禅師号を授かる。

好事も無きに似かずとは、いらざる事をして、却って珠玉に瑕をつけてしまったとの意。

この掛物の前三行は玉室宗珀の筆である。会下の弟子の何人かに「庭前柏樹子」の公案を指導のために書いて授けたのあろう。それ故に落款はない。それを後に或る人が手に入れ、清巌に鑑定を乞い、清巌が「直指心源禅師すなわち玉室宗珀和尚の直筆である」と証明し、これを余白に書きつけたものである。

以上の解説は、この掛物の添えられている「芳賀幸四郎先生」のメモ書きによる。

さて、この茶掛の筆者である、玉室と清巌は中世の高名な禅僧である。それ故に貴重な書跡とされる処である。そこで茶と禅との関係について考えてみたい。

茶の歴史を極めて簡潔にまとめた文章がある。

「お茶を飲むという今では極めて日常的な習慣は、茶の原産地である中国に始まり、奈良時代に日本に伝えられたようだ。さらに鎌倉時代になると、中国で禅を学んだ僧侶たちが、「抹茶」を飲む習慣と道具を持ち帰った。

それが日本の風土と美意識のなかで、「茶の湯」に変化し、さらに「侘び茶」へと昇華し、多様な展開を見せながら現代に伝えられている」。

（茶の湯をまなぶ本より）

室町時代の茶はきわめて絢爛豪華なものであった。広間に舶来品の珍しいものまで取り入れて、さまざまに飾りつけた中で茶を楽しんだという。ところが、次第に変貌して閑寂の風趣を喜ぶ、いわゆる侘び茶へと移行したのである。そのような流れの中に三人の巨匠が次々に輩出して、今日の茶道に繋がる侘茶を完成したと云われる。珠光、紹鷗、利休である。

村田珠光（一四二三―一五〇二）は室町幕府第八代の将軍足利義政の時代、いわゆる東山時代に活躍した。

珠光は「君台観左右帳記」の著書として名高い能阿弥に師事し、唐物の目利きと立花とを学んだ。そして一休（一三九四―一四八一、大徳寺第四七世住持）に参禅して禅の修行に努め、ついに一休から印可を受け、圓悟（臨済禅の高僧）の墨跡を印可状の代りに授けられたという。珠光は茶禅一味の境地に達したのであった。禅は茶の中にも在り、侘び、寂びは外観ではなくて、心の中のものである。と常に説いていたという。

能阿弥も、義政も、最後には珠光に茶を学んだと伝えられている。広間の茶席を四畳半に変え、広間の時代に喜ばれた唐絵の表装も、できるかぎり地味にと心がけたのが珠光の茶であった。

武野紹鷗（一五〇二―一五五五）は、珠光の弟子藤田宗理（生没年不詳、室町後期の茶人）に従って茶を学んだ。かたわら、和歌は三條西實隆に師事した。紹鷗は先輩珠光にならい大林宗套（一四八〇―一五六八、大徳寺第九〇世住持）に参禅し、紹鷗四十六歳の時、一閑居士の号を授けられている。

千利休（一五二二―一五九一）は初め北向道陳（一五〇四―一五六二、室町末期の茶匠）に、後、その紹介で紹鷗に師事した。珠光精神の発展に力を尽くし、侘び茶の大成者となったことは、改めて云うまでもない。

禅は初め笑嶺宗訢（一五〇四―一五六八、大徳寺第一〇七世）に従って修行、名を宗易と改めたが、後、古渓宗陳（一五三二―一五九七、大徳寺第一一七世住持）に参禅、利休居士の号を授けられた。

茶席の床飾りには、唐絵を避けて、墨跡を第一に尊重するようにと、常に弟子たちに教えていたという。

以上のように見てくると、侘茶を完成させた、この三人の巨匠たちにとっては、禅の修行は茶の修行と同様に重いものであって、すなわち、禅と茶との修行は全く不可分の関係にあったことがわかる。それ故に利休は、茶席においては墨跡を第一に重んじようという結論に達したのであろう。

さて、茶席に掛ける墨跡とは何か？原点に立って考えてみよう。

わが国では、墨跡とは禅宗（ことに臨済を主として）の僧の筆跡をこうよぶ。従って高僧であっても、法然・親鸞・日蓮らの他宗の人々の筆跡には、この名を用いないのが習わしとなっている。（崇めるか崇めないかという次元の問題では無い。念のため）

珠光・紹鷗・利休にあっては、禅は生活の中のものであった。茶と禅との両面の修行は完全にバランスが保たれていたといえる。

ところが、時代が下り、茶が一般大衆の間にゆき渡ってくると、このバランスは当然のごとくくずれることになった。それは茶そのものがだんだん繁雑な形式を生み、したがって、それの稽古にかかり果てることとなる結果は、禅の修行が、ごく一部の人々を除いては、もはや手の届くところではなくなってしまうからである。

後世の茶人にとって、利休の残した言葉は大切に守らなければならない。茶掛けとして墨跡を尊重するという観念を捨てることはできないのである。といって禅の修行の伴わない茶人たちにとっては、茶掛けとしての墨跡は手の届かない存在になってしまっている。

そこで、利休のことばを守りながら、同時に、禅の修行がなくとも理解のできる内容の墨跡を、床に飾る以外に方法はないと考えられたのである。

ここにその苦肉の策として生まれたのが、「一行物」と名づけられる墨跡である。五言あるいは七言の禅語の句を一行に揮毫した墨跡である。「水急不流月」とか、「月明不借芦花白」とかいうたぐいである。このような文言ならば、禅学の素養を欠いても、どうにか意味が通じるからである。

こうして「夢」とか「無」とかの一字や、「無一物」の三字を書いた横物と称する掛物も喜ばれることになった。この場合、一行物にせよ、横物にせよ、大徳寺の僧たちの揮毫したものが珍重される。これは珠光以下の三匠が、すべて大徳寺に参禅し、且つその高弟たちも之に従ったという伝統をふまえてのことであるに他ならない。今日に至るも「大徳寺もの」が圧倒的に迎えられている所以であろう。

ここに至れば、現在の茶掛けとしての墨跡には格の高下のあることに気づく、すなわち、格の高い墨跡とは、茶掛けとして用いられることを予期しないで書かれた印可状・法語・偈頌のたぐいであり、ひくい墨跡とは、したがって俗人にも理解されやすい語句を選び、初めから茶掛けとして使われることを計算に入れての執筆になるもの、という区別が当然生じるのである。この区別のあることを、頭に入れておかなければならない。

あらためて、この掛物に注目すると、自慢する様でおこがましいが、この掛物は、禅の教えの公案に用いられた。執筆者は両者共に江戸初期に於ける大徳寺禅の高僧である。

資料によれば、玉室宗珀は、石州流の開祖である片桐石州（一六〇五―一六七三）が参禅の師としており、清巌宗渭は千家流を確立した千宗旦（一五七八―一六五八）の参禅の師として知られている。

従って前述する、格の高い方の掛物として存在している。

平成十三年、妻が親しく茶道の指導を受けていたK先生は、老齢のため茶室を閉じて施設に入られることになった。その際、茶道具の大半は、道具商に渡ったが、日ぼしい品を弟子たちに譲って下さることになった。

K先生の持物の中でこれはと認められる掛物は二幅あった。一幅は「中峰明本」書の法語であり、あと一幅はこの玉室書の禅語があった。

中峰明本（一二六三―一三二三）は中国元代前期の臨済宗の僧であり、無準師範・雪巌祖欽・高峰原妙の法系を継いでいる。高徳の誉高く「仏法の中興は本中峰」と称揚されて、多くの門徒が参集した。書をよくし、柳葉体と呼ばれる独特の書風で有名であり、法語・書状など、その書跡は少なからず伝存するという。

「中峰明本」の掛物をK先生は大変、大切にされていた様で、私は遂に拝見する機会を得られなかったが、妻はつぶさに拝見することができ、法語の内容も解説していただき、強い感銘を受けたとのことである。

K先生はこの掛物だけは、流石に格別の思いがあるらしく、他に譲らずに、永年絆の深い、裏千家御家元に寄贈されたとのことである。

残る一方の掛物も貴重な品であり、多くの希望者があった様であるが、当家へ譲って下さることになり誠に有難くお受けした次第である。

以前にも述べたので繰返しとなるが、先生の意向としては、名品は死蔵してはならない。茶会に飾られて、しばしば人様の眼にふれてこそ掛物が生きることになるので、釜を懸ける労をいとわない忠内へと、特に名指しで譲って下さった由であった。

当方としては、そのお志を受けて、先生をお招きした回を含めて、以降春秋に茶会を重ねて、適時皆さんに鑑賞していただいている。

K先生は、平成二十八年天寿を全うされた。誠に学識に富んだ人格者で、しかも大正生まれの洒脱なモダンガールであった。

平成二十九年、ご遺徳を偲ぶ茶会が、主要な弟子さん達により開催された。その席で、前号で紹介した、千道

安の茶杓とこの掛物、そして、この後説明する予定の、李朝会寧（かいねい）の花入れが飾られ、皆さんに親しく鑑賞していただくことができた。

亡き先生もきっと喜んで下さったものと思う。

続く

参考資料

茶掛の書　堀江知彦著　東京書籍
禅と茶　信濃千曲著　文化書房博文社
禅宗の歴史　今枝愛真著　吉川弘文館
書道人名辞典桑田忠親編　東京堂出版
その他

青雲の彼方（十一）

太田精一

十一．民族意識の高揚と南京政府

（一）中国国民党の対外政策

北京公使館一等書記官の就任以来、一年半が経った。英二の北京での交渉案件は多く、また、常に困難を伴うものであった。なかでも決薪問題、曹揚無線問題、中国税関制度問題が難航した交渉であった。

決薪問題とは、中国政府に雇われている日本人の給料不払い問題で、曹揚無線問題とは、三井が、中国政府のために巨費をかけて曹橋に無線電信台を建設したのだが、中国政府はこれを引き取らず問題となった事件である。

三井では、大村得太郎を北京に駐在させて、公使館の館員と共に折衝に当たったが、結局交渉は不成立となってしまい、そのままうやむやにされてしまった。

また、税関制度問題とは、元来中国税関の実権は英国が握り、その総税務司も初代はサー・ロバート・ハート、次はサー・フランシス・アグレーと英国人が相次いでそのポストを引き継いでいた。英国は、三代目にアーサー・H・Fエドワーズを後任に据えようとしたが、南京政府はこれに納得せず、英国側でも困り抜いて、日本に対し、税関内の日本人岸本広吉を副総税務司に昇格させるからエドワーズを支持してくれないかなどといろいろな案を持ってきて打開策を講じようとしていた問題である。

しかし、中国の税関は郵便と同様すべて中国側に回収されることになった。中国政府の管理下に置かれることになったのである。中国においては、不平等条約撤廃を日的とする南京政府が政権を掌握したので、日本を始め諸外国の中国に対する利権や特権は、ほぼ撤廃されることになったのである。

中国は民族意識が高揚し、欧米諸国の利権を排除し、

中国人のための中華国家の建設に意欲を燃やす政治勢力が次第に力をつけつつあった。その一つは蒋介石率いる国民党で、もう一つは毛沢東率いる中国共産党であった。張作霖のような軍閥政府でさえ、民族主義を表面に押し出し、対外関係においては、強硬路線を貫かざるを得ないほど民族意識はかつてないほど高揚していた。こうしたナショナリズムの嵐が吹きすさぶ中国の政治情勢の中にあって日本政府の対中外交は、国益を主張する経済界や軍の要請に応え、中国に持つ利権の擁護に目を奪われ、次第に強硬路線に傾き、中国との亀裂を深めて行ったのである。

英二は、北京日本公使館の一等書記官として、あらゆる情報を分析整理し、的確な判断材料を外務本省に提供する立場にあり、中国側の動きと日本国内の対中強硬論のギャップに悩まされるのであった。

このように北京は、外交官としての仕事のやりがいはあったが、責任は重大で常に的確な情報と冷静な判断を要した。だが、そうした仕事上のストレスも家族を同伴したおかげで和らげることができ私生活の面では、それなりに楽しむことができた。

英二は家族ともども前任者の官邸を引き継ぐまでホテル住まいをするつもりでいた。だが、前任者の重光一等書記官が病気で、治るまで少し時間がかかりそうであった。そのため仮住まいのつもりで、北京城壁の近くの閑静な場所に建つ家に移った。その家は、かつて横浜正金銀行の重役が住んでいた邸宅である。もともと迎賓用に建てた家で、住むには不便であった。部屋は広過ぎ、冬は暖房が十分に利かず寒かった。

ある朝起きると応接間にあった絨毯がなくなっていた。外に空のトランクが放置してある。早速警察を呼んで調べさせた。警察では大体盗品はどこに集められるか分かっているらしい。いわゆる泥棒市といわれるところに網を張っていたところ、案の定そこに持ち込まれていたので、すぐ盗まれた品は取り戻すことができた。盗まれた品は戻ってきたが、泥棒は捕まらずそのままうやむやになってしまった。当時の中国の警察は、品物さえ戻ってくれれば、それで一件落着となって、犯人を逮捕するところまでとても手が回らないようであった。

そのうち前任者の病気が治り帰国したので、英二は彼の後を継いで麻線胡同の官邸に移った。この家は、棠蔭精舎と名付けられた庭に海棠の木が二本あった。狭かったが風情もあり由緒ある家であった。場所も外国公使館や館員のため設けた区域内にあったことから治安は比較的良かった。だが、北京の街の真中にあり、周りの衛生状態は良くなかったので、子供のためには環境が良いとはいえなかった。

北京では代々前任者から引き継いだ馬車を使用していたので英二もそれにならった。ところがその馬車が風変わりな馬車であったので北京市民間では知られており、郵便物などは自宅に配達されるのではなく、この馬車に投げ込まれることがしばしばあった。

北京での外交団は常に外交団会議を開き、中国政府と事に当たっていた。大問題が起こると英米が手を握り、日本と対立、フランスがやや日本寄りの発言をするかと思えば、最後に英米側に付くといった構図となっていた。

こうした外交団の宴会は非常に盛んに行われた。また各国の公使婦人は一定の受付日を設け来訪者を接待していた。

中国側との宴会も盛んに行われた。中国の習慣ではいわゆる「蜻蛉点水」といわれ、トンボが水の上を掠めて飛ぶように一定の時間のうちに次から次へといくつかの宴会に顔を出すのが礼儀となっていたので外交官も常に胃袋を丈夫に保つことが必要であった。だが、英二は一夜一宴主義をとっていた。

日本人間の宴会も盛んに行われ、招き招かりしたがいずれも西洋流で夫人同伴であった。男はタクシード、そして食後にはブリッジ、麻雀に興ずるのがお決まりのコースであった。また、北京ではテニスやゴルフも盛んに行われていた。

（二）孫文霊柩奉呈式出席と国書奉呈

英二は、北京公使館の一等書記官として中國政策について外務本省との意見のすり合わせを行うため、昭和四年五月一時帰国した。外務本省では奉天総領事であった吉田茂が、事務次官に栄転していた。英二は早速吉田次官に面会を求め、中国問題について本省の考えを質した。

吉田事務次官は、かつて安東領事、奉天総領事などを歴任した中国通である。

話の途中に、彼は、英二に広東総領事時代に培った孫文配下の人脈に注目し提案した。

「この度、国民政府は南京で、孫文の「霊柩奉安祭」を行うので、その式典に出席し、併せて国書奉呈のために、芳沢公使の派遣を考えている。ついては、総領事時代に親交のあった天羽君に、芳沢公使に随行してその「霊柩奉安祭」に出席し、国書奉呈の儀式を手助けしてもらいたい。その後に日本公使館の代表者として、君を南京に駐在させることにしたい」との意向が吉田事務次官から示された。

こうして英二は、国書奉呈後、北京から南京に移転するものと思い、ずっとその心づもりでいた。

昭和四年五月十四日、英二は、芳沢公使とともに東京を発って同月二十七日上海に着いた。上海では、豊田紡織廠豊田利三郎社長の別邸に一旦休息後、直ちに米内光政第二遣外司令官の指揮下にある軍艦「矢矧」に重光葵上海総領事、建川、松川陸海軍駐在武官らとともに乗り

込み、揚子江を上って同二十九日に南京に着いた。

揚子江は悠々と流れ、川べりの長閑な景色の眺めは、争いをよそに悠久の時を刻んでいるように英二には思えた

英二が南京に到着した時には、すでに各国公使たちは集まっていた。孫文総理の遺骸は、しばらく北京西山の碧雲寺に奉置されていたが、南京政府は南京の紫雲山山腹に広壮な霊廟を建て、そこに遺骸を奉安することにしたのである。

式は、孔子の子孫で蒋介石の義兄孔祥熙が采配を振るった。盛大な霊柩奉安式となり、各国公使が参列した。日本政府代表は芳沢公使で、これに天羽英二が随行する形で参列した。民間からは犬養毅、頭山満、萱野長知ら当時孫文と親交の深かった人びとが参列している。英二は、最後の安置所まで行ったが、遺骸はあたかも生けるがごとくガラス張りケースの中に収められていた。

その後英二は、在モスクワ日本大使館参事官となってレーニン廟を訪れた時に見たレーニンの柩と孫文の柩が酷似していたと述べている。

奉安祭が終わって六月三日に芳沢公使による国書奉呈が行われた。

随員は重光上海総領事、建川陸軍、杉坂海軍武官、公森財務官、横竹商務官と英二であった。

芳沢公使は、国書を蒋介石総統に奉呈、口上書を述べた。これに対する答辞が行われそれが終了した後、芳沢公使は随員一同を蒋総統に紹介、蒋は随員一同と一人一人握手を交わしたが、英二とは広東で周知の間柄であったので、しばしば立ち話をした。

こうして奉呈式は無事終了したが、一部の右翼から芳沢公使の奉呈は丁重過ぎたとの攻撃を受けたのである。もともと右翼の連中は蒋介石の南京政府には反対で、日本政府が蒋介石に国書を奉呈すること自体反対であった。いわば反対のための反対であったのだ。

また、日本の外交団の服装が夏にもかかわらず大礼服姿であるため、他国に比べ大仰に感じられたのかもしれない。さらに芳沢公使が蒋に対して三顧の礼を尽くして対応したが、それが右翼には気に入らなかったようであった。

玄関から蒋の部屋に入るとその部屋が曲がっていて蒋総統に達するまでには何度も頭を下げねばならず、外国使節も同じであった。が、そんなことまで問題になるほど日中関係は複雑な関係となっていたのである。

奉呈式を無事終え、英二たちは南京を去り、六月七日には上海で南京政府の王正廷外交部長に会って、芳沢公使とともに排日運動の取締を強く申し入れた。上海から大連丸で青島へ、青島から陸路済南、天津を経て十二日北京に帰った。

北京に着くと公使館に家族からの悲しい知らせが届いていた。妹町子が六月八日他界したという知らせである。町子は末っ子で英二が最も可愛がった妹である。肺炎が悪化したという。公使館の窓から眺める月が、いつもと違って英二には、ぼんやりとかすんで見えた。

(三) 幻の南京赴任

南京での孫文霊柩奉呈式に参列した犬養毅はその後も芳沢公使と一緒にしばらく北京公使邸に滞在していたが、その時英二が近く南京に転勤するとの話を聞いて英二のために数枚の書を揮毫した。

犬養氏の書は有名であったが、特に英二の依頼に応じて書いた「平心」という額は、書いた当人が傑作中の傑作と自負するぐらいの出来であって、立派なものであった。英二は日本に帰って長らく自宅の応接間に飾っておいたが今次大戦で自宅と共に灰になってしまった。そのことを英二は、長い間悔やんでいた。

そうこうするうちに芳沢公使は、七月十五日付けでフランス大使に任命された。一方英二は、七月初旬、商震山西省長の招待で北京を発ち張家口を経て、有名な「大同の石仏」を見学、さらに足を延ばして綏遠から包頭まで沿線旅行をした。その旅行に公使館の安東書記官、鉄道省の北京代表金井清、杉坂海軍武官が同行した。

この視察旅行は、運悪く雨に見舞われ、ずっと降られ通しであった。だが、中国北方の内陸部まで、国民政府の勢力が浸透し、中国が大きく変わろうとしていることが分かった。そうした意味では有意義な旅行であった。いたるところに国民政府の宣伝が行き届き、新生活運動が展開されていた。また、カソリックの勢力が中国内地にまで浸透しているのは驚くべきことであった。

大同では、商震省長の指令が行き届いていて趙印甫司令らが英二たちを大いに歓待した。

旅行から帰り暫くした後の八月十二日に、英二は帰国命令を受けた。八月二十二日、商震が仕立ててくれた特別列車で多数の人々の見送りを受け、北京を発ち天津まで行き、天津から船で日本に向かった。東シナ海が荒れ、英二は平気であったが、家族は船酔いで大変苦しんだ。瀬戸内海に入ると海は静かで、子供たちは元気を取り戻し、日本の島々を眺めながら船の中で大はしゃぎをしていた

八月二十七日無事東京に着いた英二は家族総出でまず妹の町子の墓に詣でた。

英二が孫文の「霊柩奉安祭」に一時帰国の日本から出席し、北京公使館に戻り、日本に帰国したわずか三ヶ月の間に、日本の政治情勢は大きく変わっていた。田中内閣が倒れ、新たに浜口雄幸を首班とする憲政会内閣が誕生し、外相には再び幣原喜重郎が就任したのである。

その頃中國では、南京政府が政権を掌握していたが、馮玉祥ら蒋介石反対の余燼がくすぶっていた。

さらに重大なことには、ソ連と中国との関係が悪化、七月十八日には、両国間は国交断絶となりついには北満で砲火を交えることになったのである。

ソ連は北満に侵入し、満州里に攻撃を加えたが、たまたまこの砲弾が日本の旅館に落ち、死者一名、負傷者一名を出したという不幸な事件も起きた。

中ソ両国間の紛争は、昭和四年十二月に協定が成立し、停戦となったが、その後もソ連側が終始満州北方を圧迫している。

英二は、東京に着いた後、外務省に幣原外相及び吉田事務次官を訪ねた。吉田次官は、「北京の公使館代表を南京に駐在させる案は各国との釣り合いもあってさたやみとなった。だから君の南京行きも中止となったが、その代わり今度田中ソ連大使が更迭になるので、君は大使館参事官としてモスクワに赴任してくれないか」との内示があった。

ところが、その日芳沢公使の後任として中国に赴任することになった佐分利貞男駐英大使参事官から「帝国ホテルで至急会いたい」との連絡があり、英二はすぐに帝国ホテルに出向いた。

そこで英二は、佐分利参事官からつぎのような申し出を受けた。

「僕は、今度駐支大使の内命を受けたので近く南京に赴任するが、君は中国の事情に明るいから残って僕を助けてくれないか」

日本はこれまで、中国の北京に公使館を置き公使を派遣していたが、南京政府になってから大使館とし、南京に大使を派遣することにしたのかと英二は思った。だが、実際の大使館設置はそれから六年後の昭和十年となったのである。

英二は、少し前に吉田事務次官からソ連大使館参事官として赴任するよう内示があったばかりなので、佐分利氏の申し出の真偽を理解できなかった。

「それはできません。実は、私は先ほど吉田事務次官から内示があり、モスクワ大使館の参事官として赴任命令を受けたばかりです」

後日この佐分利氏は、中国に赴任する前に箱根で怪死したとの知らせを受けた。死因については、解明されていない。

久しぶりで日本の秋を満喫した英二は、十一月になって冬を迎えるモスクワに赴任することになるのである。

（つづく）

吾輩は紙魚ロボである　その五

永田俊三（永田俊一）

前回（その四）自動悪意化装置が外せるか否かを賭け宇宙ブラックホール目指し旅立ったところで、未完の完で終わっている。その後どうしたであろうか。

こうして書いている以上、ブラックホールに突っ込んで、この世最大級の圧力で自裁することはなかったのは明らかである。地球に帰還した故にご報告出来る訳である。宇宙に飛び出し帰ってくる道行きについては、話はどうしても技術的なことになる。決断・決行して、それに沿って自身がどういう可能体か確める為、ただただ進み、確かめた結果に従ってただただ舞い戻ったのである。

一、帰還

（一）宇宙からの帰還

クローンの子紙魚ロボ二つと合体した頭脳が、別途爆風で飛ばされた紙魚ロボ身体と組み合わさって宇宙に飛び出してからの吾輩は、わが体型がＡＩロケットに相応しく、作者が紙魚型に設計した意図が其処にもあったことを先ず実感した。外部の皮質や飛行体型だけでなく、内部も宇宙船指令室さながらに対面する宇宙空間の星雲・星座・恒星・惑星・衛星・ブラックホール等映し出す三次元ＣＧ大画面は勿論のこと、体内システム機能表示画面や操作指令盤が細大漏らさず備え付けられており、自らを動かしコントロール出来た。マニュアル資料を参照しながら機能・操作方法を点検、試行錯誤しつつ取敢えず自らの飛行計画の初期画面設定を行った。

天文関係のデータから、八惑星からなる太陽系の先端海王星の先に広がる太陽系外縁天体に、バレーボール位の大きさで重さは地球の一〇倍程度の原始的ブラックホールらしきものがあることが分かり、先ずはそこを目指すこととした。距離的には地球～太陽間（一天文単位

AU＝一・五億キロ）あり、その時の速度だと一年強の所用時間であった。これなら、もし近傍で悪意スイッチとの切断、無理ならブラックホール中心への跳び込みで目的達成と考えた。

しかし、相次いで想定外の運不運両方が分かった。幸運の方は自身の側の悪意スウィッチ受容装置が見つかったこと、不運は生命有限装置の存在が明らかになったことであった。後者は作者の意図は正確には分からないが、三〇年程度動かしてみて回収・解析、次期ロボ製作に活かそうという事ではなかったか。

これだと数千万光年先の超巨大ブラックホールは勿論のこと、二～三万光年の一回り小さいブラックホールでも、光速で向かったとしても一歩もいかないうちに命尽きてしまう。悪いことに今方向を向けた原始的ブラックホールに所期の力がないことも分かってきた。そうこうしているうちに、別仕立ての速度計を見つけ調べるとどうやら光速に挑戦するためのものらしいと日星がついた。切り替えには存続のリスクが付きまとうが、覚悟してこれを前提に飛行計画を考え直した。巨大ブラックホールはその横長の中心部にあり千万光年の彼方だが、その星座の端にある恒星が太陽系から四光年ぐらいしか離れておらず質量も太陽よりやや大きいケンタウルス星座を目指すことにした。

その上で速度計を光速に入れると激震が走り暫し制御不能となったが、幸い破壊には到らずやがて光の速度で運航し出したことが分かった。そして幸運にもケンタウルス星座に入ったところから俄かにブラックホール並みの強い力を受けるようになり、恒星に突っ込む前に悪意スイッチ受容装置が機能停止になった。すかさず途次研究を重ねた通り後戻りの態勢に入り、踵を返して地球に照準を合わせて帰還の旅についた。生命有限装置の設定期限（一〇年＋α）内の約八年で旅を終えるべく。地球接近後は主人の黒子からのパルスを指針にして帰還、着陸。そして、主人は八年を経て信託博物館の館長になっていたという次第である。

なお、一つ付け加えると、この旅の途次でわが身が経験し体得したことに触れておかねばなるまい。

それは時折、瞬時光速を僅かに超えることがあり、其の際は光速より次元の違う目標接近スピードを感じると共に、宇宙の時空に所謂ワームホールと称されるタイムマシンの入り口・出口が瞬時現われることであった。思いを決して潜り込んでみると、どちらの口から入るかによって過去・未来自由に往来できることが分かった。子紙魚ロボが限定的に達成していたことが完成した瞬間ともいえる。

更に、帰路光速を超えていることがあったことがどう影響しているのか分からないが、帰還時の地球上の時計では脱出から三年も経っていなかった。

（二）帰還後初仕事は歴史への飛翔

そして帰還後最初の問わず語りサポートは、早速、身に就いた時空を超える力を活かし、問わず語りのインプットで、主人が館長になって執筆に取り掛かっていた作業の後押しであった。「歴史に学ぶ信託話―キケロ・モア・空海」と称する読み物である。

冒頭で吾輩の今の棲みかを紹介したが、展示の画像や文章中や背景に、キケロやトマス・モアや空海も登場する。信託の歴史により関心を寄せ信託をより理解してもらうよう、これらむしろ歴史一般に著名な人物との関わりを通して物語にしてみてはどうかという思いのようである。

御主人は、この三者の信託絡みの事蹟を、傍にいたりした関係者や観察者の目や口を通して語り、信託の歴史の中に置こうとした。仮に分かった史実にはない人物を設定した場合も、史実とは背馳しない範囲で物語を組み立てようとしていた。

そこで吾輩が自己設定したミッションは、史実に名前の明かな人物であろうがそうでなかろうが、関係の深い人物を探し、三者やその事蹟を何らかの形で物語り説明する、語りや書き物を探し、主人の著述の確からしさを確認することであった。

（三）紙魚ロボットの独り言

その間吾輩が感じたことを独り言のように語れば、次のようなことだった。

考えてみれば、吾輩は昔から御主人が語り書いたものの中で、信託遺贈やユース禁止法や綜芸種智院のことは見聞きしており、それに関係する人物であるキケロ、モア、空海の固有名詞も記憶にはあった。だから吾輩が地球を飛び立つ決心をした時も、自然とその信託の考えをベースにしていたことは前述の通りである。ただここまでそれら固有名詞の人物の人生にまで立ち入って、全人的に社会に向き合った生を見つめたことはなかった。

御主人も博物館の展示資料を前にした故に、一人一人を追ってみたいという気になったのではないかと思われる。吾輩にとっても誠に良い機会になった。

ところで宇宙に飛び立つ前は御主人を観察し、御主人を通して世を見、思考法を学び、主人と離れる決断を自らするに到った。しかし、飛行中は自らだけが頼りであったし、還ってからはこうして主人のサポートを陰で行いながら、主人のものしたものを自分の口で語ってみている。ある意味主体性が増したというか、何か独立というか自律自尊というか、そのような気が宿り始めたような気がする。一言で表現すると、御主人とは違う自分を自

分で語りたくなった。

「吾輩は猫である」の猫は、作者が物語をどう始末しようとしたからかといったことは別として、人間語を自由に操れるようになった猫が、人間と勘違いして人間がやることをやったら、肉体の猫では助からぬ羽目に陥り不運にも昇天してしまった。しかしながら現代の吾輩はそうはなれない。

自身の存在の在り様について、また人間との間や今後の道行きについても、明確な認識がある。だから自らのなすべきことについても明確である。余命が残り少ないと今分かっているからである。飛行中に明らかになり初期設定のもので如何ともし難いものであった。そうであれば紙魚型の進化はあるにしても初期設定で決まっている以上の体型進化はあり得ない。すなわちＡＩやＩＴそのものである頭の進化と生物的進化の体は、このままだとアンバランス性を増すばかりである（だからロボットの物語りは、体は生物学的に現在頂点に立つ人間の形に初期設定してあり、むしろ知能・精神とのアンバランスをどう埋めてゆくかやその間に起こるトラブル等が主題となってきた）。これらを受け容れて自らをどう処してゆくか、まさに人間的末期のテーマを、人間に近づいた頭とは言え、考えても答えはＡＩ的にシンプルであった。

そしてそんなわが身に鑑みて、吾輩は自らの所謂老齢・寿命・死の受け入れ対応のデータを蓄積しつつ、残された余生を時を駆け宙を駆け御主人のサポートを通じての恩返しと、既に行っているヒト型ロボットは「賢い善を初期条件設定とすべし」の主張とそれらに関係する知見や具体的道行きについての調査研究と具体化の方法等について遺言を残し、人間社会への恩返しが出来ないものかその考察に勤しんでいる。

人間には本来寿命があり、御主人とて然りである。そして吾輩は自分の余生が近未来であることまでしか分かっていない。だが不可思議なことに、御主人がまだ暫し信託歴史の話を調べ語る可能性は続くので、恩返しの為にも御主人よりは一時でも遅く寿命を迎えたいと強く願う心が生まれてきた。そして、長生不老の霊薬を求めて東の海に漕ぎ出した徐福伝説までは行かないが、予定の寿命ではなく吾輩自身の寿命であれかしとの人間的思いだけでなく、その間に予定のメカニズム解消の手立てがみつかるかもしれないという人間的願望の持ち方さえも生まれたような気がする。

余生と恩返しを述べたばかりだが、自分でありたいとの気持ちが出てきたことも述べた。時と空間の自由な往来は実現したが、大きさの自由は拡大方向の視野は宇宙の旅で実現したものの、縮小方向即ちミクロ、ナノの視野自由はいまだしである。そこへコロナウイルスのパンデミックに遭遇、博物館は一次閉館になったが、人間社会をパニックに陥れているこの生物にも近寄って何か知見を得られないか、という思いも募って来た。しかも願望とはとめどもなく、御主人と別れの時は「鶴の恩返し」ならぬ姿を変えて直接言葉を交わしたい、といったことまで想像する。人間のあるべき心の在り様を突き付けられて戸惑い始めた今日この頃でもある。

二、コロナウイルスとの遭遇

（一）ミクロ、ナノの視野自由

時空を超える予兆は子紙魚ロボに現れて、合体後の吾輩が宇宙に飛び出ることを決断し光速を超える仕掛けが埋設されていることに気付いたことで実現した。そして宇宙で飛ぶことを前提に天体望遠鏡の機能が埋蔵されていることも分かった。故に星やブラック・ホールの存在や位置の特定が出来た。これに対して顕微鏡の機能のイプシロンやナノの視野自由の兆候はない。裸眼は御主人の目で見ていた時は当然人間の視力であったが、合体して本来の紙魚ロボットになった時には、自然に考えると言う意味なら、昆虫の紙魚だから昆虫の目ではないか。そうだとすると昆虫の視力は人間の百分の一以下である。いわば人間に較べればそれだけ近くを見る眼である。

しかし、紙魚ロボはロボットであり人間にとって代わる存在として想定されているから、人間の視力がむしろ前提で、体は人間の五百分の一位だから眼球もバランス上はその位になるので、人間の視力に合わせるため眼球レンズの厚みの調整をしていると考えるのが自然であろう。結果、全く人間と同じ距離感と解像度で、人間と同じ景色を同じ色で見ているわけである。

そこで元に戻ってウイルスに合わせ得ることが想定されているかどうか。仮にウイルスまで見るとするなら電子顕微鏡機能は別途備えているかということだが、そこは今は分からない。悪意で細菌兵器まで考えていたとすれば血管に潜り込んでミクロの世界に融和できるようにとうことはあろうかと思うが、それには体長が大き過ぎるように考えられる。いずれにせよ電子顕微鏡機能は原作者がセットしているとしてもそれが顕現する条件下にならないと分からないので、受身で構えるしかない。

それまではこれまでに分かっている機能を使って、コロナとヒトの関わりを観察し、ヒトとロボットの在り方・関係に於いてこの問題を時空を翔けて考察するということであろう。

勿論体長がミリの単位だから人間よりずっと小さなものまで判別出来る道理であり、そのように設計されていることは事実である。ただこれに気付いたのは合体して

全き紙魚の姿になった時で、それまでは御主人の眼で見ていたからである。しかしそれにしても、ミリの万分の一以下のウイルスまでは届かない。一方人間は既に電子顕微鏡でウイルスを捉えてはいる。原作者が生きていれば当然改造したであろう。更に言えば、電子顕微鏡はその倍率を調整してウイルスそしてそれ以下に到達してゆく。即ち今の範囲で大きさのグラデーションをスムースに判別認識してゆく能力は、この調整能力を埋め込んであるから可能と考えるのが自然である。

電子顕微鏡並みの倍率能力を持つ物を使って、それの調整範囲を現状にセットしたと考える方が製作方法としては可能性が高いと思われるので、諦めずあの宇宙に飛び出した時体内の構造が何故か見えたように、そのチャンスを探り続けることとした。

（二）ウイルス、コロナウイルス、新型コロナウイルスの科学的知見

その間兎も角も、これ迄ウイルス、コロナウイルスについて解明されているところを、吾輩なりに整理してみた。

「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」御主人が幕末維新の故郷の木鐸と言われた儒者の教え（溟北塾記・・漢語）を現代風に翻訳口癖にしているものである。溟北は医者もやっていた時期があり、科学的に事の由ってくるところも冷静に究明することの重要性も勿論である。ご主人の黒子で見聞を広めた吾輩であるから勿論そこから入ったしだいである。取敢えず日本の論稿・著述・記事等を洗ってそれなりに纏めてみた。

1　ウイルス一般（科学誌等から分かり易いもの）

・ウイルスは感染性のある微小物質の一つで、白癬菌のような真菌（カビ）（10μm～5μm）や大腸菌・ペスト菌・コレラ菌のような細菌（1μm 前後）よりも小さく（0.1μm 以下）、スペイン風邪流行後、電子顕微鏡の発明によって見つけることが可能になった。

・ウイルスはDNAかRNA（生物が同一細胞内に持つ二種類遺伝物質分子）のどちらか一方を持つウイルス核酸を持ち、たんぱく質の殻に包まれている。しかし、たんぱく質を合成する機能も、エネルギーを産生する仕組みも持っていない。従って病原体単独では増えず、感染した細胞の助けを借りて増殖し、細胞の外では増殖出来ない。しかも生きた細胞でしか増えない。

・ウイルスが細胞に感染するには先ず細胞表面にくっつくことが必要で、その結合する細胞膜上の分子は受容体（レセプター）と呼ばれ、ウイルスごとにレセプターの分子構造は異なっている。ただ、インフルエンザ・ウイルスが遺伝子変異を起こしやすい性質から、偶然感染した鳥インフルエンザ・ウイルスがヒトの体内でヒトとの相性を獲得して新型ウイルスに変異することもある。

・ウイルス感染症には明らかな症状を伴う顕性感染と症状を伴わない不顕性感染がある。前者には発症前に潜伏期キャリアとしてウイルスを排出することがある。後者は発症せず健康キャリアだが、症状を伴わなくてもウイルスを排出することがある。いずれにせよ完全治癒はウイルスの完全排除である。

・人間での伝播経路、細胞内でしか増殖できないウイルスが人体へ入る時、先ず粘膜の細胞で増殖する。消化器系、呼吸器系、生殖器系の粘膜である。一方細菌は体内の粘膜の表面で殖えることが多い。

・紫外線やエックス線で直ちに死亡する。高温（60度で30分間or100度cで一分）で死滅する。逆に低温に強く4度cで数日間から数か月間死滅しない。マイナス70度で数年間死滅しない。

・コロナウイルス・インフルエンザウイルスなど脂質と糖タンパクから構成される膜であるエンベロープをもつものとノロウイルスやロタウイルスなど持たぬものに分かれる。エンベロープはアルコールなどの有機溶媒に溶ける（死滅する）が、ないウイルスはアルコールでは死滅しない。PHへの抵抗力はPH五～九の間で安定。エンベロープがある方が酸に弱い。

2　コロナウイルス

・コロナウイルスの名前の由来はウイルス粒子表面の突起が太陽のコロナ（ラテン語の王冠）に見えるからである。

・学名分類上、属はα・β・γ・δと四種ある。

α：ヒトコロナウイルス229E・NL63（風邪）、ブタ伝染性胃腸炎ウイルス・流行性下痢ウイルス（胃腸炎）、イヌコロナウイルス（腸炎）、ネコ伝染性腹膜炎ウイルス（致死性血管炎）、コウモリコロナウイルスHKU6（不明）

β：SARSコロナウイルス（肺炎）、MERSコロナウイルス（肺炎）、2019新型ウイルス（肺炎）、ヒトコロナウイルスHKU1・OC43（風邪）、マウス肝炎ウイルス（肝炎）、ウシコロナウイルス（腸炎）、ウマコロナウイルス（腸炎）、イヌ呼吸器コロナウイルス（風邪）、コウモリコロナウイルスHKU4（不明）

γ：ニワトリ伝染性気管支ウイルス（気管支炎）、シロイルカウイルス（不明）

δ：ブタデルタコロナウイルス（胃腸炎）、コウモリコロナウイルスHKU16（不明）

3　2019新型コロナウイルス（COVID-19）

・一般的に動物のコロナウイルスはヒトに感染しない。理由の一つは、ウイルス側の「鍵」と宿主側の「鍵穴（受

容体）」の関係が挙げられる。しかしコロナウイルスの中でも同じグループ内であれば種間伝播の可能性は否定できない。

・二〇一七年イタリアの研究グループにより、α-コウモリのコロナウイルスはヒトに感染出来るコロナウイルスに変異する、β-コウモリには、元々ヒトに感染出来るようなウイルスが存在しており、ヒトのコロナウイルスの祖先はコウモリのコロナウイルスとの説が提示された。

・新型コロナウイルスは、SARSコロナウイルスと全遺伝子配列が79.5%一致、コウモリコロナウイルスRaTG13株と全遺伝子配列が96.2%一致が報告されている。また、MERSはコウモリからヒトコブラクダに感染、そこからヒトへと、言われている。WHOシルビー・ブリアン博士は「中間宿主がいた可能性が高い」と言っている。

・運ぶ媒体としては、飛沫、手の接触が主で空気（塵埃）もある。飛沫は、咳・喋りで口から飛び出し、一～二メートル以内にいる対面するヒトの口、鼻、口の粘膜に付着してそこから感染が始まる。SARS同様糞便に含まれるとの報告もある。個室使用者が手でさわった錠等から接触感染のおそれがある。また、日常生活で鼻汁や唾液が手に着くこともある。また、肺炎が起きたヒトでは痰に入っており、床に落ちた痰から塵埃でも。

・活性持続時間は、（湿度40%の環境下）生存期間をみると、プラスティック七二時間（1/1000に減少）ステンレス四八時間（1/1000に）銅四時間（1/200～1/300に）段ボール二四時間（1/1000に）＊空気中のエアロゾルでは三時間経過しても1/6しか減少しない。

・消毒法は、六二～七一%エタノール、〇・五%過酸化水素、〇・一%次亜塩素酸ナトリウムが消毒可（一分以内に不活性化）。加熱は不活性化に効果的（56度C、30分以上）、低温では安定（4度Cは4日～21日報告も）。

（三）パンデミック史からの教訓

「歴史に学び、事の出って来る処を事実に依って究明し」ということだから、パンデミック史を当たってみる必要がある。騒ぎが始まって以来その手の書物や紹介論稿が山のように書店に並んだり、引用されたりしている。スペイン風邪は教訓の身近さと資料の多さでも圧倒的で述べる必要はないかもしれないが、先ず簡単にまとめておく。

1　スペイン風邪

一〇〇年前のインフルエンザの世界的大流行は、世界全体で二〇〇〇～四五〇〇万人、日本でも四〇万人以上の死者を出した。一九一八年春、第一次大戦の前線に部隊を送ろうとしていた米国の兵営の一つで、新兵が数千人入院しうち数十人が死亡するという惨事が起こった。死亡原因は肺炎とされている。その後ウイルスと分かってからも、そもそもの発生は何処か中国南部で、渡り鳥に運ばれて伝播という説もあるが特定できておらず、患者発生は記録のある限りいまのところこの米国が最も早い。そして一八年三月始まったパリ北東百キロ第二次マルヌ戦線に米軍部隊も投入された。四月～五月と独仏両軍に患者の出た記録があるが、明らかに七月には両軍戦闘能力を失うほどの状況になった。

中立国スペインでは、フランスから来たのか二月には国境沿いの保養地でインフルエンザが流行していた。結果は八〇〇〇人が罹患することになるが、交戦国は発表せず公表したスペインの名がついてしまった不幸にも見舞われた。インフルエンザ・ウイルスは、直径一〇〇ナノメートル（一ミリの一万分の一）程度なので、光学顕微鏡でも見えない。一九三〇年代に開発された電子顕微鏡で見えるようになった。表面に二種類のたんぱく突起を持ち、内部に八つのRNA遺伝子の分節を持っている。古い人体の組織片からスペイン・インフルエンザ・ウイルスが分離されるようになったのは、一九九〇年代のことであった。最近の研究でインフルエンザ・ウイルスには、構成する基質たんぱくの種類によりA型・B型・C型の三種があり、最も感染力が高く、人類を含む動物にとって脅威になるのはA型であることがわかった。

この時期より前からインフルエンザは認識されており一九一八年の日本の新聞にも「今流行中のインフルエンザ」の文字が見える。明らかにこの悪性のインフルエンザらしきものは四月台湾巡業中の大相撲力士の三名が死亡数名が入院の事態を嚆矢とするようで、六～七月になると軍隊内に数千名の単位で罹患者が出ているが、この段階では通常の感冒に較べ強度は致死が著しく高まるようなものではなく七月末には小康状態を得ていた。本格的流行は一〇月に始まる「前流行」と翌一九年一二月に始まる「後流行」であった。前者は罹患率は高いが死亡率は比較的低く、後者は罹患率は低いが死亡率は高かった。前流行の一九年前半までに感染者二一〇〇万人死者二五万人（第一波）、後流行は一九年九月～二〇年七月（第二波）患者数二四〇万人、死者一二・七万人、二〇年八月～二一年七月（第三波）患者数二二万、死者〇・四万人、となっている。

（その上で吾輩は、次の様に関心を広げた）

スペイン風邪も当時は姿が見えなかったが、一九世紀後半までは細菌も同様であり、人類社会はその波状的な襲撃にさらされてきた。人間の目が感染の実態を何処迄科学的観察でき、その時点で正しい対応がどこまでできたのか、人々はどう受け止めどう行動変容を果たし、感染無ければ歴史が変わったかもしれない史実はどんなものがあるのか等、人間社会的な視点で参考になりそうなものを探った。ここでもご主人が、前から信託の歴史が

らみの論稿や話をしていることから、私のデータにはいっているところをきっかけにして、二つ取り上げ調べてみた。ペストとコレラである。まず、信託の歴史でローマの信託遺贈を長年取り上げてきた中でユスティヌアヌス法典に触れたことがあり、それを思い出した。

2　ユスティヌアヌスのペスト

（ご主人の書いたものの中に次のような文章がある）

ユスティヌアヌス帝（在位 AC527~565）は、後世「大帝」とも呼ばれ、東ローマ帝国史上画期的な治世で、滅亡した西ローマ帝国の領土を、ローマ市を含み部分的に回復し版図を押し広げ、「帝国の再建」に努めた。

ニカの乱（532/1）を切り抜けると帝は再征服に乗り出し、ササン朝ペルシアと「永久平和条約」を結んで東方国境を安定（532/6）、翌年には北アフリカのゲルマンのヴァンダル王国を征服、更にゲルマンの東ゴート王国の内紛に乗じてイタリアへ侵攻（535）、翌年末にはローマを奪回する（その後東ゴート側の強固な抵抗に遭い戦争は長期化する）。また国内では ニカの乱で焼失したハギア・ソフィア大聖堂（現アヤソフィア博物館）の再建を完了し（537/12）、ビザンツ建築の最高峰として現代まで伝えられることになった。

しかしその後発生したペスト（541~543）で帝国の人口が激減、労働力不足と賃金の上昇が引き起こされ国力を疲弊させる。また、長期化したイタリア戦役では、最終的には抵抗を続ける東ゴート軍を壊滅させるが（552/10）、完全な平定になお数年を要した。ペルシャも、ホスロー一世が「永久平和条約」を破棄して東ローマ領へ侵攻（540春）、ペスト発生で戦争は小康、両軍優勢を得ず和平（545）。この後も北部で戦いは続き最終的に五〇年間毎年金四~五百ポンドを支払う代りにペルシャ軍が撤退する和平が締結された（562）。

これらが帝国の財政への大きな負担となり、ユスティニアヌス帝死後、北方からの異民族の侵入やササン朝の攻撃を受けて帝国は急速に衰退し始め、八世紀半ばまで外敵の侵入と国内の混乱が続くことに。ただし、一時的にであれ往時のローマ帝国の版図をローマ市を含め回復した事は、その後の東ローマ帝国が持ち続けた「我が国はローマ帝国である」と言うイデオロギーの根拠となり、苦難の時代を迎えた帝国の精神的な拠り処となった、と言われている。

（さて、では具体的に感染の状況や対応はどんなものだったのだろうか。そこで示唆されていたのが、当時の著名な歴史家プロコピオスが『ペルシャ戦役史』にペストの記録を書き残しているということだった。探すと、『ペスト大流行』村上陽一郎著（岩波新書）にその詳細な記録文章が引用されていた。そこには、細菌とウイルスの違いはあれ感染症パンデミックの今眼にする光景を彷彿とさせるものがあり、その乱や逆境にいても歴史家のあくなき監察眼と本質を見る眼に驚きの敬意を表さざるを得ない。そこから抜粋したのが以下である。）

『この大悪疫（本新書ではペストと表記している）は世界中に伝播され、どの民族をも一様に冒し、どんなに遠く離れた人々をも、また年齢、性別をも区別はしはしなかった。住むところ、生活様式、職業、その他どんな点であれ、お互いにどれほど異なっていようとも、ペストの流行に関する限りは差が無かった。色々な立場の人が、この問題をそれぞれに論ずることだろう。歴史家としての私は、どこでこの悪疫が起こり、どんな風に生きとし生けるものを破滅に導いたかを物語ることにしよう。それはエジトのペルジウム地方の住民の間に起こった。そして分かれて、一方はアレクサンドリアを通ってエジプト各地に拡がり、他方は、エジプト境界地方から、パレスティナを経て、全世界へと拡がった。この伝播には常にある一定の期間を必要としていた。というのは、この伝播は、一定の法則に従い、またどの地方でもある一定期間は続くように見えたからである。流行は常に海岸沿いに始まり、次第に内陸部に及んだ。二年目にはその時私はその地に住んでいたので、一部始終を目の当りにしたのだ。

それはこんな風に始まった。まず人間の形をした雲の幻影を見た人々が数多く現れた。この幻を見た人は、ただちにペストにかかった。・・どんな形ででも幻影を見ないで済み、あるいは恐ろしい幻聴を聴かなくて済んだ人は、どのようにして病にかかったのだろうか。あるものは、床から起き上がろうとして、あるものは歩いている間に、さらに仕事をしている間にも、突然発熱がおこった。顔色に著変はなく、普通高熱を発した際にかんじるような悪寒や灼熱感もなかった。炎症の徴候もなく、その日の朝から夕刻までは、熱もたいしたことがないので、当人も、あるいはその脈を執る医師もそれほど危険を感じることもない。ペストにかかった人も、最初は、誰も死などを考えることがないのだ。しかし、ある場合はその日のうちに、またそうでなくても、翌日または数日のうちに、鼠蹊、腋下や、あるいは耳下その他の部位に、腫脹が出現する。

これは大抵の感染者に共通したことだが、それ以上の点になると、その症状はそれぞれかなり異なっていた。その差異が、個人の健康状態の違いから来るものなのか、この病気を世界にもたらした創造主の意志によるものなのか、「それは、私には判断がつきかねる」。とにかくあるものは深いこん睡に陥り、あるものは狂気にかられた。苦しみはどちらも同じだった。看病する側も、そうした病人のあり様に困惑し、苦しむので、同情は病人と

同様に、看病する周囲の人々にも集まった。それは病人の側にいると病気がうつるという理由からではない。医者であれ、素人であれ患者に触れることで必ずしも病気に感染した訳ではなく、看護人にしても死体処理人にしても、一般の危惧に反して、結構健やかにその持ち場で暮らしている一方、患者に接すると言うような危険は一切おかさないような人々が数多く病のとらえるところとなり、早い時期に命を落とすわけだったからだ。医師達は如何していたか。彼らは、ペストの襲撃に際して五里霧中であった。しかし、その根源が腫脹にあるのではないかと考えて、死者の遺体を調べた。何体かが解剖に付され、悪性の疔（チョウ・ヨウ）の生育が認められた。この病気の凄まじい暴力は、或者は身体全体が豆粒大の黒色の小発疹で被われて死んだ。この場合には病人は一日ともたず、発疹が現れるや一時間も経たずに息を引き取った。またあるものは突然大量に喀血して死んだ。きわめて優れた医師のなかには、回復期にあるような病人の不幸な転帰を予言し的中し、また死の淵をさまよう患者の回復を予言して成功した。「こうした点から考えても、このペストの流行は、矢張り人間理性一般の範囲の圏外に理由があるとしか思えない。」

腫脹が甚だしく化膿したときは、平癒するが、それは、その疔の根元の力が弱まり、それが膿に排出された結果であり、経験によれば、これはペスト治癒の最初の徴候である。腫脹に変化のない患者には、前述の苦痛が何れはやってくる。ある場合には鼠蹊はすっかり水分を失って乾き、腫脹がどれほど脹れても化膿しなかった。また舌に症状が出た人は、死ぬまでどもったり、つまったり、うまくしゃべれないようになった。

この悪疫は、ビザンチウムで何カ月も続いた。最もしょうけつを極めたのは三カ月ほどであった。最初は、通例の病気の死者数よりもやや多い程度の犠牲で済んでいたが、状態が悪化するに連れて、死者は一日五千人にも上り、やがて一万人になった。ペスト発生当時は、死者は身内のものが自分の家の墓に埋めたり、ときにはこっそりと、さらに公然と、他人の墓所に遺棄する位で済んだが、間もなく恐るべき混乱がやってきた。・・

事態収拾に当たって皇帝（ユスティヌアヌス）は、テオドルスを特別な担当官とし、兵士と国庫から支出した莫大な資金とを彼に任せた。彼は皇帝から受け取った資金に、自費も加えて、必要なだけの埋葬が出来るように手配を重ねた。・・・

不品行の限りを尽くしありとあらゆる人生の悪業と不行跡とを重ねてきた人々も、突然慈善を行うようになった。・・多くの場合何とか恐るべき破局から身を逃れようと、自己規制を試みるからであった。それゆえ、もう危機は去ったと判断したとたん、まるで災禍などわが身には無関係だと言わんばかりに、その生活は再び悪に戻り、これまでにもまして放縦になり、あらゆる類の不品行・放蕩に身を沈めることになるのであった。従ってペストが単なる偶発事であったにしても、あるいは神の天啓であったとしても、人間に対する一つの確かな試練を提供し、人間の本性の最も根本的な基本を見極めるための材料を与え得ることになったと言える。

その頃になると。ビザンチウムでは、仕事に就いている人を見付けることは難しくなっていた。健康なものは家に残って、病人の看護をするか、死者を葬るかしていた。街中で出会う人々は、ほとんどが死体を担っていた。あらゆる業務が止まった。あらゆる職人たちは、自分の道具を捨て、新しい仕事はおろか、以前に請けていた仕事さえしなくなっていた。その結果、ひどい飢饉がやってきた。それは想像を絶するものであった。パン、いやどんな種類の食べ物も手に入れることができなくなった。最後には、ペストよりも、食料の問題の方がもっと重要かつ緊急なことがらになった。多くの病める人達が不幸にも餓死した。

「これがビザンチウムやローマ帝国（東ローマ帝国）にペストが起こった時の模様である。このとき、ペストは、ペルシャをはじめ、他のすべての国々を襲って同じような災いをもたらしたのであった。」（結び）』

なお、・コンスタンティノープルでも十五年ほどの間を置いて（558）、激甚な再発があった。その様子はアガティアスの「ビザンツ史」に描かれている。

また、新書著者は他の文献を使って、このペストが二～三〇年かけてヨーロッパを北上してゆく記録及び推定を述べている。

3　ヨーロッパ中世黒死病とルネッサンス、宗教改革、経済発展

（ペストが所謂黒死病として中世のヨーロッパを席巻する様は、前述新書の中心テーマであり、次のような感染状況であった。）

ペストは感染すると皮膚に黒紫色の斑点や腫瘍ができるところから「黒死病」（Black Death）と呼ばれた。一三二〇～三〇年頃中国で大流行し、イスラム世界でも猛威をふるい、モンゴル軍がペスト菌を媒介するノミと感染したネズミを中世ヨーロッパに齎したことで大流行した。一三四七年一〇月中央アジア・クリミア半島を経由シチリア島に上陸内陸部へと広がった。また海路ジェノバ・ヴェネチア・マルセイユ等に伝わり、一三四八年にはアルプス以北のヨーロッパにも伝わり、一四世紀末まで三回の大流行と多くの小流行を繰り返し猛威をふるった。ヨーロッパの中心地としてはまずアビニヨンに一三四八年年一月にペストが発生し、四月のフィレンツェ、一一月にロンドン、一三四三年一一月にはスウェー

デンやポーランド、一三五一年にはロシアまで達した。ペストによる死者の数はヨーロッパにおいておよそ人口の三分の一、村上陽一郎氏の試算によると世界全体では七千万人ほどとのことである。丁度百年戦争が始まっており、英仏の戦いの前半の山場である、仏王王位継承権を主張して戦争を始めたエドワード三世の長男黒太子エドワードがカレーに攻め込んだ戦いの最中、ペストが両軍を苦しめている。

（更に社会経済にどのような影響を与えたかみてみると）

経済基盤の荘園制を担った農奴のペストによる死者が多く、残った農奴と領主の力関係が大きく変わり、荘園制が成り立たなくなった。都市では商工業者の力が強くなり始め、ペストの前に無力な教会の権威は落ち、医学の分野でも、圧倒的な死者の数を前に古典的な医療に対する信頼は失われ、学問の権威も失墜した。文化的にはペストの大流行のフィレンツェからその郊外に逃げ出した男女一〇名が一〇ずつ語りつぐ計一〇〇の物語り集で、やがて来るルネッサンスを暗示する「デカメロン」が、1349-1351年にかけてボッカチオによって著述された。

この作品では人間と環境との関係について、健康と安定は幻想にすぎない、という視点が貫かれている。その上で、出発点は神へのゆるぎない信仰、個人としての勇気、寛大さ、などという、まさに中世騎士道そのものに置いているが、殆どの物語は極めて現実的、小賢しさ、ビジネス感覚、快楽主義、それでいて人間としてのインテグリティの追求という内容になっている。

（デカメロン冒頭には詳細なペスト観察が書かれており、簡単に抜粋すると）

○一三四八年オリエントで発生したペストがフィレンツェで発生、市当局は特別任命役人が市街の清掃に勤め、汚物を除去し、病人の市中への立入りを禁止し、衛生管理も周知徹底すべく御触れを出し、御祈りも何百度とし、多くの人々が市中を行列して練り回り神様に嘆願しました。効き目なく春先から大災害は始まりました。

○発病当初は股の付け根や腋の下に腫ものが出来あるものは林檎や卵の大きさに腫れはガヴォッチョロ（ぐりぐり）と呼ばれ、次々に処構わず出来黒や鉛の色をした斑点となって表面化します。ぐりぐりが出たら間違いなく死にました。

病人と話したり近づいたりした人にうつり、病人の衣服とか病人が触ったとか使ったものに触れただけでも伝染し、触った動物まで病気にかかりました。

○人々は皆およそ不人情な仕打ちをしでかすようになりました。病人やその持ち物は避けて遠ざけます。余計な

ことを一切しなければ災難から逃れられると考え、仲間だけで他の人から離れて暮らす。逆に飲む・遊ぶ・欲望のままに生きる、もっとひどいのは何か面白そうな楽しそうなことがあると聞き付けると其処へどっと押し掛けます。法の権威は地を掃い、掟は何もないのと同然です。フィレンツェから逃げ出した連中は神の怒りの対象はあくまで市内に留まった連中と思っていたようです。しかしいずれの考えの持ち主も到るところで結構病気になったのです。

○一旦罹病すると、近しい者、身内の者、友人にも見放され、介抱してくれる使用人もいなくなって行きました。一日に数千人が発病し何の助けもなく死にました。腐敗した死体の悪臭で隣人も気づき、死人が街中に満ちました。教会の墓地ではとても足りず、大きな溝を掘って遺骸を並べて寝かせました。上までギッシリ詰まるとそこに僅かの土をかけて表面を覆いました。市を取り巻く郡部や田舎にとってもそれに劣らぬ災厄の日々でした。

○市内では一〇万人以上の人が確実に命を落としたと信じられています。

（そしてここからでてくるヨーロッパはもう暗黒の中世ではなくなる）

それまで世界文明の中心であったアラブ・イスラム文明が頂点に達したのちしばらくはヨーロッパやアジアに対して大きな影響を与えていたが、このパンデミックで凋落傾向に入り、中国では元帝国に対して紅巾賊の反乱や相次ぐ自然災害で末期症状を呈し始めていた。ヨーロッパでは「デカメロン」のスピリットが封建社会の殻を破り始めた。ペスト、百年戦争、度重なる自然災害が複合的に危機を深め、その先にニュートン（科学）の、マキャベリ（政治）の、コロンブス（大航海）のヨーロッパへ展開することになり、世界史の中心となって行く。

4　コレラ

コレラはご主人が、故郷を題材に書いた時こだわったテーマであった。

（その症状、感染などを概観すると）、

コレラ菌による感染症で、突然の高熱・嘔吐・下痢・脱水症状が起こり、その感染力は非常に強い。紀元前三〇〇年頃のものから、七世紀（中国）、一七世紀（ジャワ）の記録もあるが、世界的大流行はカルカッタで起こりアジア全域とアフリカに達した一八一七～一八二三年のものからである（原発地はガンジス川下流インドベンガル地方及びバングラディッシュにかけての地方）。一部日本にも及び「文政コレラ」と呼ばれた。一八二六～三七、一八四〇～六〇、一八六三～一八七九、一八八一～九六、一八九九～一九二三年（以上アジア型）と都合六回の大

流行があった。日本は一八五八～六一、前記三回目が上陸（安政コレラ、六二から残留コレラが更に二～三年）、一八七九（同四）、一八八六（同五）には死者一〇万人を超した。一八八四年コッホによりコレラ菌が発見され、医学の発展、防疫体制の強化などとともに、アジア型コレラについては世界的大流行は起こらなくなった。（一九〇六年エジプトで発見されたエルトールコレラは一九六一年の流行に始まり、世界的に広まりを見せている。）

（第四回目の際、一八七九年日本も襲われているが、ご主人が「渓北先生時代日記」に、それに触れた叙述がある。）

『明治十二年はコレラが日本を襲った。全国的猛威で死者は十万人を超えたと言われる。佐渡でも夏に上陸し、晩秋に鎮火するまでに相川で四百人近くが亡くなっている。感染は防げなかったが、臨床の医術も進歩し隔離体制が組織的にとられた。西欧では病原の菌発見が競われていると伝えられる。文明開化の恩恵は広まりつつあることも実感するところである。しかし安政の大流行の時、次までには何とか原因究明と防疫をと期待したところであるが、研究が進んでいることは報告されているが、未だ解明には到ってない。辛いことだが被害の状況は受け入れざるを得ないし、この次を祈るところである。

この年のコレラでは新潟県で三千三百六十人の死者が出たとの記録がある。七月末に島の南の玄関口である小木で最初の死者が出ると、あっという間に相川でも犠牲者が出た。相川の死者は三百七十三人との記録がある。郡の検疫委員、役場の予防委員、監視役の警察と備えはあったが、患者を隔離、家族・親類・近隣住民に石炭酸（フェノール）をかけて消毒するのが関の山で、見る間に患者が広がってしまった。感染すると日に二、三十回も続く下痢や嘔吐による脱水症状であっという間に死に到り、初期は効なく猛威は凄まじい勢いで犠牲者を広げた。各町内で患者隠しのないよう監視しあい、隔離し、患者の家に対する相互扶助を取り決め、患者は施設に収容され、家族そして辺りの家が次々と隔離され学校も閉鎖されて行くに従い、やっと十月にはコレラも下火となって、人々の顔にも安堵の色が見え始めた。

残念ながらコレラは医学的にはまだはっきりした原因の特定と治療・予防法の確立がなされているわけではないので、対症療法の良し悪しの勝負だった。幕府奥医師松本良順と共に長崎でオランダの医師ポンペの教えを受け、この道の先駆者でもあった真野出身の司馬凌海医師は、この時島にはいなかった。幕末帰島し奉行所抱えになっていたが、明治初年に上京して医学校（後の東大医学部）教授となり日本の医学向上に貢献したが、奇しくもこの年春四十一歳で療養先の熱海から帰京の途次急逝

していた。

この明治十二年はその二年前に出来た相川病院が丁度公立病院になった年であり、幕末佐渡で初めて種痘を行った藤沢三省医師も中心となって対応に努めていたが、矢張り原因不明で諸説喧伝されることに頭を悩ませていた。「はやり病は、接触か呼吸か飲食かどれかを通じて伝染する。コレラは接触でないことは明らかで、今は呼吸説だ。瘴気が便に蓄在し気中に拡がって感染すると言うが疑問がある。原因が分かれば、天然痘を種痘で治すように根本治療が可能だが、そうでないものはこれまでの対応で学ぶしかない。患者の隔離や消毒・煮沸や滋養はどれにも通じる。呼吸なら近寄らない、うがいする、口・鼻を隠す等、飲食なら患者の吐瀉・排泄に絡んだ飲料水や食べ物を避ける、ということだ。空気も水もどちらも思わぬところに伝わってゆくからどうしても広く徹底した予防が必要だ。原因に確信が持てるまでは全てを注意すべきだ」と幾重もの対策を心がけていた。西欧でも原因追究が学説対立をも生み熱を帯びて来ているとのことで、目に見えぬ微生物を捉えられる顕微鏡の発達がその特定に力を発揮しているとのことだった。この瘴気説でこの時は、コレラ毒は患者を火葬する煙によっても伝染するとされ、大佐渡の山並みに連なる青野峠へ登る道沿いの、その為に出来た五十里道の火葬場。西の海岸線の突端の稲鯨の段丘上など、死者は人里離れたところで荼毘に付された。』

なお、明治一〇年の西南戦争からの政府軍の海路帰還、そして二八～九年の日清戦争からの兵員帰還に当たってその、隔離・上陸現地医療施設建設と集中治療・出身地への帰還の規制等組織的対応で鎮圧を図った、後藤新平の活躍についてご主人はつとに語っていた。

（四）感染経緯と医学的判断及び政策対応そして社会的評価等の推移

次に「時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり」に関して、コロナウイルスの認識と対応が如何推移したか簡単にみておきたい。

1　中国の気付きと公表・対応遅れと世界的パンデミックへの足音（1～2月）

・二〇一九年一二月三一日武漢市衛生健康委員会が中国当局初めて「わが市における肺炎感染症の状況通報」を公表、そして年を越え一月九日には、当該肺炎患者からコロナウイルスが特定、公表された。二〇日には国家衛生健康委員会リーダーの鐘南山氏（SARSの時の立役者）が「ヒトーヒトの感染が確認された」と公表、この日習近平国家主席が「絶対に感染症の蔓延の勢いを食い止めなくてはならない」との重要指示を出すに到った。既

に「春節（暦では二五日だが）の民族大移動」は始まっており、また、重要指示時北京を不在にしていた習主席が表舞台に立つのは一月二八日の世界保健機関（WHO）のテドロス事務局長との会談であり、局長はこの時も緊急事態宣言時期尚早論を繰り返ししかも中国の対応を評価した。WHOが「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言するのは二日後三〇日であった。これが発生源秘匿の疑いも含め、パンデミック拡大の責めを中国に問う声は世界、とりわけ欧米に強まり、特に既に経済戦争に入っていた米中関係悪化に拍車をかけることとなった。

・他方、武漢封鎖後の感染対策という点では、前述鐘南山氏率いる部隊の指導よろしく、封鎖二日目から一週間の突貫工事で千床のベッドを備える臨時病院を建設、二病院目も二月初には完成稼働、他省にも同様に建設が進み、各地から軍医を始め医療チームの大部隊や医療物資が到着する。規制犠牲者も出る程徹底したロックダウンと合わせて、感染は終息して行き、臨時病院の稼働は四月一五日に終わった。この間世界は感染急拡大、それを尻目に中国はマスクの供給や医療支援等世界の支援者に転換、元々の一帯一路で各国に影響力を強めていることとも相俟って、世界の警戒感が強まる現象が見られた。

・WHOは一月三〇日になって、中国を中心に十倍以上に急増した患者数を前に「遅きに失した」の批判を受けながら緊急事態宣言を発した。既にパンデミックの足音に各国でも警告論が高まりを見せ、渡航制限に着手する国が増え、欧州では中国からの旅行者によって持ち込まれた新型コロナウイルスがイタリアでアウトブレークを起こし南欧から欧州北部へ急拡大する動きの序曲が始まりつつあった。一月二一日米国で武漢訪問もした男性が初患者として確認され、二四日にはフランス、二五日には豪でも感染が確認されていた。

・日本でも武漢から帰った日本在住の中国人の感染が三つの医療機関の受診を経て見つかり（1/16）、それを踏まえて新聞社説でも「新型肺炎を機に備え高めよ」（1/18）といった警告が発せられた。二〇日の施政方針演説ではコロナに一言も触れなかった政府も、WHOが緊急事態宣言を出した一月三一日新型コロナを感染症法の「指定感染症」に指定するが、より強い措置の取れる新感染症指定には後ろ向きで、緊急事態宣言を発する想定も見受けられなかった。しかし、この楽観論も感染者を乗せ接岸したクルーズ船によって打ち砕かれた。

2　クルーズ船の試練（パンデミック対応の基本を問われる。2～3月）

・ダイヤモンド・プリンセス号の集団感染が起こる。クルーズ船が横浜港に到着したのは二月三日夜、検疫官が乗り込み四日夜PCR検査の一部が判明する。その三一

人中一〇人について陽性が確認され、全乗客乗員の規模を考えると相当数の陽性者のいる可能性が認識された。厚労省から官邸が司令塔機能を引き取り、政府は乗客乗員三七一一人の一四日間の船内隔離の異例の措置に踏み切った。二月四日以降官房長官指揮の下、厚労相・国交相・内閣危機管理官ほか関係府省の次官・局長が招集され、一元的対策が模索された。新型インフルエンザ対応の経験を持つ厚労省審議官の乗船や自衛隊や神奈川衛生研究所など各方面の戦力も投入された。

・しかし多国籍の高齢者の多い乗客や船内での密状態の管理や多国籍乗員による管理支援サポートの不手際等船内の感染不安の拡散や持病悪化の不満鬱積等が、船内動画で悲惨な状態として伝えられたりして、特に海外メディアに「海に浮かぶ監獄」等と批判的に報道され、国内でも批判が高まった。国立感染研究所の記録によれば、船内隔離が始まって以降、新規感染者は抑えられていたが、陽性判明した日毎に感染者を逐次発表したため、感染防止策がとられた後も感染者が増え続けているように報道されたこと、また、具体的な船内状況の説明がなく、隔離期間終了間際までいつ下船できるかなど具体的な出口戦略が明示出来なかったこと等が批判に拍車をかけた。

・一日、那覇市に一旦入った際に仮検疫済証を取得した英国船籍のダイヤモンド・プリンセス号に感染者が判明ということになり、公海上の船舶は所属国が取り締まる「旗国主義」があるも人道上の配慮で接岸を認めたが、日本政府の権限が完全に及ぶ訳ではなかった。感染発覚後も船内でパーティーを催おしたり、引き続き乗員が配膳業務などに当たっていた。横浜港停泊とともに船内に入った自衛隊の先遣隊も、決定権が船長にあり日本政府は助言役に過ぎず、任務が限られるので当初想定の派遣規模拡大を見送った。

3　クラスター捕捉から非常事態宣言（4/7）に向かって（二～四月）

・二月一四日都内のタクシー運転手の感染が確認され、その濃厚接触者の二人の感染も判明、一人は前月半ばこの個人タクシー組合支部による新年会が行われた屋形船の従業員であった。都の発表では「感染した従業員が中国客と接触していた」等屋形船が感染源であるような表現をした。中国人団体客に感染者がいなかったのは分かっており、その組合従業員は複数感染しており、屋形船の感染従業員はアルバイトであった。新年会と感染確認の一カ月の間隔も踏まえ考えると、屋形船がクラスターと断定することに疑問があったが、公表と共に営業を自粛、その後も風評による脅迫状、誹謗中傷の電話等で再開は叶わず廃業も考える程経営的にも追いつめられるが、緊急事態宣言の解除が論ぜられる中営業再開に辿りついた。

・こうした状況を受けて、一一日、衆院は新型コロナウイルス感染症対策で私的権利の制限を伴う「緊急事態宣言」を可能とする政府法案を可決した。一三日、安倍首相は新型コロナウイルス感染症対策本部で、感染拡大防止に向けて無症状の感染者に対しても強制入院等の隔離を可能にする方針を表明、関係政省令を改正し一四日から実施に移した。併せ観光業の中小企業への資金繰り支援等を柱とする緊急対応策も発表した。マスクの生産力を月六億枚に、簡易診断キッド・抗ウイルス薬・ワクチン開発に早急に着手、全国で水際対策を担う検疫所の体制・機能強化、入国拒否対象地域や旅客船の機動的指定、観光業の資金繰り支援で五千億の貸付・保証枠、雇用調整助成金の要件緩和を打出した。

・この時点で世界一二九カ国が中国からの入国を何らか制限しており、（米・豪・シンガポール等は中国全土からの入国制限）日本は二月一日から入国申請日前の一四日以内に湖北省に滞在歴のある外国人や、同省発行旅券を所持する中国人の入国を認めていなかったが、一三日この措置を浙江省に拡げた。また七日には香港発のクルーズ船アムステルダム号に日本入港をやめるよう要請している。

・二月二四日夜の専門家会議での「これから一～二週間が感染が急速に進むか収束できるかの瀬戸際となる」との見解を切掛けとして、政府は二五日には対策の基本方針を決め、企業に「休暇取得、テレワークや時差出勤の推進に協力するよう」呼びかけ、「臨時休業等の適切な実施に関して都道府県から要請する」とした。二六日に北海道が小中学校を一週間休校にさせる方針を発表すると、二月二七日夕、安倍首相が専門家会議への相談もなく文科省にも同日朝伝え文科相の懸念表明にも拘わらず唐突に小中高校への春休みを前倒して三月二日からの休校要請を打ち出した。翌二八日（金）には、道内の感染者は一二人増え累計六六人と全国で最も多いことから、鈴木北海道知事が「緊急事態宣言」を出し、道民にこの週末の外出自粛を呼びかけた。同日二〇二〇年度の予算が衆院を通過参院に送られた（年度内自然成立のタイミング）。また首相は感染対策の取り組みが長期化する事態もにらみ、新たな法案の準備を指示した。そして、三月二日参院予算委員会冒頭首相は「緊急事態宣言の実施も含めた新型インフルエンザ対策特別措置法と同等の措置を講じることが可能となる様、立法措置を早急に進める」と強調、三日、自民党はコロナウイルス感染拡大を受けて政府に二〇二〇年度補正予算の検討を求める異例の提言をまとめた。

改正特措法は、与野党の協力で異例のスピードで三月一三日に成立、翌日施行された。政府対策本部（本部長は首相）と都道府県対策本部（本部長は知事）を設置、国民の生命と健康に著しく重大な被害を与えるおそれと

全国的且つ急速な蔓延で国民生活と経済に甚大な影響を及ぼすおそれ双方に該当すると、専門的評価があった場合（専門家による諮問委員会で意見をきく）、政府対策本部長が緊急事態を宣言し、知事が住民に外出や学校の休校、イベント自粛等（ガイドラインで定める）を要請できることになった。

・二二日にＩＯＣが「延期のシナリオの検討に入る」と表明、二四日夜にはＩＯＣバッハ会長と安倍首相が電話で協議、感染の収束が見通せず、選手らの準備期間も踏まえ一年程度延期することで合意、遅くとも二〇二一年夏までに開催すると確認した。世界は既にスポーツどころではなく、通常開催の断念は時間の問題であり、中止シナリオは回避したものの、開催国として五輪・パラリンピック延期という前代未聞の難事業に向き合うことになった。

・更に感染は拡大し、二月一五～一六日大阪のライブハウスで開催されたイベントに出席した参加者の感染が確認され、三月四日には大阪で一五人、東京で二人、高知では既に確認済み者の関係者四人が新たに確認され、他にも全国各地で三六人の感染が確認された。ライブハウスだけでなく各地のスポーツジムやイベント会場のプレハブ小屋等で確認されており、各地でクラスター連鎖が起こっていると見られるようになった。

また世界では、一七日欧州連合（ＥＵ）は新型コロナウイルスの感染拡大を抑えるために、外国人のＥＵ域内への入国を三〇日間原則禁止することで合意、マレーシアは一八日国境を事実上封鎖、台湾も入境を原則禁止する。米ジョンズ・ホプキンス大学の集計によると全世界の感染者は同日、二〇万人を超え「封鎖ドミノ」に拍車がかかっている。日本が欧州ほぼ全域からの入国上陸を拒否したのは、四月三日になってからである。他方、中国では四月八日に武漢の封鎖を解き、新型コロナの「終息宣言」の布石にしようとしている。

・三月二六日東京・神奈川・千葉・埼玉・山梨の一都四県は、不要不急の外出を自粛するよう住民に求めた。東京都で感染者数が急増（24～25にかけて二倍以上に急増）し爆発的な感染拡大のおそれがでているため、結束してヒトの往来を抑えることになった。政府も同日「緊急事態宣言」を可能にする新たな対策本部を設置した。企業は営業の停止や在宅勤務の推進に着手しており、首都圏を挙げた危機対応が動き始めた。宮城、栃木、群馬、長野、新潟、静岡各県の知事も首都圏との往来を避けるよう県民に呼びかけた。

二八日には安倍首相が「リーマンショック（対策事業規模約五七兆円ＧＤＰの一割以上）を上回る過去最大規模の、個人・企業への給付金を含む緊急経済対策策定を指示した。緊急事態宣言に向けた手続きの一つと位置づ

けられ、宣言について「今の段階においてはないが瀬戸際の状況」と強調した。

・こうした中四月七日首相は、政府の新型コロナウイルス感染症対策本部で特別措置法に基づく緊急事態宣言を発令した。感染が急拡大している東京・神奈川・埼玉・千葉・大阪・兵庫・福岡の七都府県が対象で実施期間は七日から五月六日まで。七都府県の知事は外出自粛や営業停止を要請する法的な裏付けを得、夫々の知事の判断が順次行われて行くことになった。同時に政府は七日夕の臨時閣議で、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う緊急経済対策を決定した。事業規模は過去最大の一〇八兆円、内企業の資金繰り対策四五兆円規模に上り、政府系金融機関による無利子融資や減収企業に対する給付金等急速に深刻化する企業の財務基盤を支える。また、家計向け現金給付は月収減などの要件を満たした世帯に三〇万円を支給する。八日、全国知事会は、知事会として一致団結して七都府県を全面的にバックアップすると呼びかけるとともに、国と一体で取り組む方針を明記するとともに、イベントや事業活動の中止休止に伴う損失補償を国に求めるとともに、対象地域外への移動自粛徹底の注意喚起・入院医療提供体制の整備・地方が柔軟に使える財政支援制度の創出、風評被害や差別意識の排除も国に要望した。

4　五月連休を挟み、緊急事態宣言延長、解除（四～五月）

・こうして感染防止に大きな一歩を進めたわけだが、事前にも特措法には交通機関を止めたり道路封鎖の規定はないのに小池都知事が欧米のロックダウン（都市封鎖）の用語を使ったり、出発点から経済収縮を懸念する政府と広範囲の休業想定をする都の姿勢の違いで迷走が続き、政府部内でも首相が人との接触を七～八割削減目指して外出自粛をと訴えたが部内からは八割でないと削減不可の声が聞こえたり後に首相が通勤は七割削減と言い換えたり、また緊急経済対策でも三〇万円現金給付の条件（世帯主年収換算で住民税が課税されない低所得世帯水準まで落ち込んだ場合か月収が半分以下に減り年収換算で住民税非課税ラインの二倍以下）の難しさに批判が出て政争の様相を呈するなどざわつき、現実の感染者も国内感染が五千人を越え新規増加スピードを増す状況が続き、対策効果の見えぬことに不安と不満が醸成され混乱もみられた。一方で米欧は経済再開へ外出制限緩和へ指針作りをするなど出口戦略を探り始めたが、日本では依然として感染拡大は止まらず、五月大型連休が視野に入ってきた。

・四月一六日首相は感染拡大を受け、緊急事態宣言の対象を全国に広げ、七都道府県に新たに七都府県と同程度に蔓延している北海道・茨城・石川・岐阜・愛知・京都を加えた一三都道府県を「特定都道府県」と指定した。

現金給付も国民一人一律一〇万円給付に変更決定した（一三〇〇万世帯四兆円→一二兆円）。

皮肉なことに同日米国では、政権が指針を示し州が時期判断する三段階での経済再建案が公表された。政府は、沖縄などを新たに特定警戒県に加える意向を示すとともに、今月末にも緊急事態宣言を全国に拡大した効果を検証し、期限となる五月六日前の大型連休中に実施期間延長の是非を判断するとした。社説でも大型連休も自粛を続け感染拡大を防げとの主張がなされた。二九日には知事会も緊急事態宣言延長を要請し、政府も一か月程度を軸に延長を検討するとし、五月一日に専門家会議、四日にも詳細な案を決定すると表明した。また首相は休校長期化を考慮、九月入学の検討を表明した。

・五月四日、新型コロナウイルス感染症対策本部で、全国を対象に緊急事態宣言の期限を六日から三一日に延長すると正式決定した。首相は記者会見で、専門家の分析次第では期限を待たず解除する考えを示し、予定通りに緊急事態を終えられなかったことを陳謝し、追加の対策を検討すると表明した。また、自粛要請は地域に配慮し、一三を維持した特定警戒都道府県には従来の行動制限の踏襲を期待し、それ以外の三四県は外出自粛や施設の使用制限を緩和した。

・五月一四日、専門家委員会は感染状況の分析や緊急事態宣言の解除基準、今後の感染防止策を議論、感染拡大防止と社会生活の両立のため、地域の感染状況に応じて対策を講じる必要があると指摘、都道府県を特定警戒・感染拡大注意・感染観察の三区分に分類し適切な対応を講じるよう求めると提言した。当夜政府の対策本部は緊急事態宣言の対象から愛知・福岡・茨城・岐阜・石川の特定警戒県を含む三九県を外すと決めた。緊急事態宣言の期限は三一日まで、政府は二一日をメドに専門家の意見を受け再度見直すとした。

・そして政府は二一日、新型コロナウイルス対策本部で、大阪・京都・兵庫の関西三府県への緊急事態宣言を解除すると決めた。今回見送った東京都など首都圏の四都県と北海道も、新規の感染者は確実に減少し、医療のひっ迫状況も改善傾向にあると指摘、二五日にも専門家の評価を踏まえ解除の可否を判断するとした。大阪は二三日にも休業要請を縮小するとした。なお、二一日世界の感染数は五百万人を超え一カ月で倍増した。最多米国も一五〇万超え、続くロシア三〇・八万超え、続くブラジル二九・一万超えと急増、欧米など行動制限の緩和など経済活動の再開に動くが世界全体の拡大ペースは衰えていない。

二五日、或意味予定通り、残る五都道県を解除、四月七日に発令した宣言は全面解除となった。同時に基本的対処方針を改定し、三週間ごとに感染状況を分析して段階的に経済活動を再開する方針を盛り込んだ。マスク着

用やテレワークの推進等「新しい生活様式」の定着を前提に外出や営業自粛を段階的に緩和し、三週間ごとに地域の感染状況を評価する移行期間を設ける。また、事業規模一〇〇兆円とする第二次補正予算案の調整にも入った。過去最大の一一七兆円の事業規模の一次補正（政府支出四八兆円）に続き経済を下支えする姿勢を改めて示すとしている。

5　解除後も感染拡大に揺れる夏（六～八月）

緊急事態宣言の解除で、外出自粛や休業要請の段階的緩和が始まったが、六月入りは東京都が新規感染の増加傾向をにらみ夜の繁華街に警戒を促すため、二日独自の警戒情報「東京アラート」の発動で始まり、レインボーブリッジと都庁舎が警戒を意味する赤色にライトアップされた。第二波の可能性に検査・医療・保健・治療体制の整備に努めつつ、経済対策の早期実行を図り、経済活動と感染予防の両立する新生活様式・新常態を目指し、歩を進める事になるが、想定と現実の狭間で揺れながら過ぎた夏であった。

・六月は東京アラート解除で、繁華街夜の人出を課題としつつも休業緩和ステップ3へ（6/12）、そして県を跨ぐ移動の自粛要請も全国で緩和（6/19）される。

・七月に入って新規感染者数は一日の一二〇〇人超え後も四～五月の緊急事態宣言時を上回る日が続くも政府は「感染者に重症者は少なく、医療の提供体制も余裕がある、再び宣言を発出し社会経済活動を全面的に縮小させる状況にはない」と述べ続けて行く。他方WHOは重ねて「多くの国が誤った方向に」コロナ対策をとっていると批判した（7/13）。また六月以降ホストクラブなど「夜の繁華街」関連の二〇～三〇代で感染が急増した東京都では七月になると職場や家庭内、高齢者施設等感染経路は多岐にわたり、年齢層も広がり、専門家のモニタリング会議では「第二波がかなり近い」と強い危機感が示された。そんな中、七月末Go to travelが始った。

・八月に入り一日朝の報道は、七月末の前日国内感染者が過去国最多の一五七二人に上り東京も初の四百人を超え、沖縄県・岐阜県・長崎県等が帰省シーズンの本格化を前に県境を越えた移動等の自粛を求める独自の緊急事態宣言を出したことを報じることで始まり、合わせてPCR検査の滞りも改めて指摘された。感染の拡大で一二府県で病床の使用率が急上昇していること、世界の七割で感染が再拡大していることも続けて報道された。また自宅療養が二週間で四倍近くなり家庭内感染が懸念される等所期の対策が後手に回っていることが如実に示される中、広島の原爆慰霊式典後六月一八日以来の記者会見に臨んだ安倍首相は「緊急事態の状況ではない」として、

お盆の帰省についても高齢者の感染に繋がらぬよう十分注意して欲しいとしつつも自粛を求めることはしなかった（8/6）。翌日新型コロナウイルス対策分科会（尾身会長）は先月末同分科会で提起された緊急事態宣言前の段階から休業要請等感染防止策をとれるよう感染状況を四段階に分け指標化した、各県ごとのデータを公表、沖縄は二項目が最も危険なレベルにある等のコメントを行い注意を促した（8/7）。お盆休み初日の八日は東京駅は昨年比七割減（高速道路は昨年並み）、近場は混雑という滑り出しであった。世界の感染者は二千万人を超えた（8/11）。

・感染防止と経済対策の両立路線が揺れ動きながら進む中、結局八月二八日、感染症法の運用見直し、検査態勢の抜本的拡充、医療提供体制の確保、ワクチン供給、保健所の体制強化を柱とする今後の新型コロナ対策を置き土産に、七年八カ月の長期政権を担った安倍首相が辞意を表明して八月は終わった。

6　再自粛要請とGo to travelの一時停止で越年へ（九～一二月）

感染防止と経済両立の新常態を目指しての世界そして日本の道行は、行動変容と医療体制整備に期待しつつ自粛緩和と経済再起動の動きの中で、そのバランス調整に腐心を続けるが、次第に感染の再拡大が高波となり、年末にかけて、欧州では再ロックダウン、日本では再自粛の議論を高めてゆくことになる。

・世界の感染者数総計は三〇〇〇万人を超え（9/17）欧州の感染再拡大・再規制への動きが始まる中、日本では菅内閣が発足（9/16）、コロナ対応・経済両立を掲げ船出した。当初は新内閣の両立のための対策に期待を寄せ、政府が推進するGo to travelに期待を示した向きも、月末にかけ高水準化した感染者数や対策が掛け声倒れの実態から、世論も危機感を強めることとなった。コロナの死者は世界で一〇〇万人を越えた（9/29）

・一〇月に入ると先ずトランプ米大統領のコロナ感染という衝撃的ニュースが世界をかけ巡る（10/2）。大統領選挙終盤でマスクもせず経済優位を公言する大統領の感染は、短時日で強気に退院（10/5）、感染急拡大の動きを他所に猛然と選挙戦の巻き返しに没頭し、傍目も憚らぬ選挙に終始した姿も相まって、世界の動揺を倍加した。この間欧州は新規感染者数が（七日移動平均）過去最多を更新する国が続出、感染者は春の第一波に比べ三倍にも達し、全面的ロックダウンはしないまでも、このコロナ第二波でフランスの夜間外出原則禁止やドイツのマスク着用義務拡大・飲食店閉鎖などの規制強化が月央以降順次行われることになった。中にはスペインのように非常事態宣言を再び出すところもあった（10/25）

日本では、Go to travelで人出が回復、感染状況は予断を許さない中、東京も観光地に向かう人は増加傾向となり、繁華街も週末の人出が増え、緩和ムードが一段と広がった。月末にはGo to 商店街も始まった。そしてGo to travelの来年五月連休までの延長論が与党内には出てくる状況であった。

・一一月に入り、感染再拡大でもコロナ無策や失態もあり三日の選挙でバイデン候補に敗れたトランプ大統領が投票結果を認めず混乱する中、米コロナ感染は一〇〇〇万人を超え（12/9）八割の州で過去最多を更新する。死者も八月の第二波の水準を超え二五万人となり（12/18）、ニューヨーク市は再び休校措置と規制モードに入ってくる。日本も国内新規感染が八月ピーク以来一日一五〇〇人を超え（11/11）、その後連日最多を更新、中高年・無症状の比率増加や家庭内感染が多く、職場・会食経由が目立ちクラスターも各地で発生、場所も多様化し、企業は出社制限を強化する等第三波の様相を示しだし、東京都の分析会議は「急速な感染拡大の始まり」と位置付けた（11/12）。北海道や大阪で病床使用率上昇が顕著になり医療逼迫が訴えられ始めた。欧州でも各国で入院患者が最多を記録した。簡易迅速なPCR検査キットの開発やAIによる検査・診断の迅速多様化等改善されるものがあっても全体的な医療対応体制の整備は目に見えるようには進まず、感染拡大・医療逼迫そして規制への道を歩まざるを得なくなる。なお、治療本命の抗体医薬が米国で実用段階に入るとかワクチン開発も加速して実用化が大詰めという報道も相継ぐようになり、一二月には英国でワクチン接種も始まる。

・一二月に入る頃には感染拡大を受け、酒を出す飲食店などに営業時間短縮などを要請する動きが全国で相次ぐことになっていた。他方前述のようにGo to travelの来年六月までの延長が追加経済対策（コロナ拡大防止・経済構造の転換と好循環・国土強靭化の三本柱）検討中の政府方針として固まった。しかし第三波の急速拡大の動きはとどまることなく、高齢者が集中する病院や福祉施設でクラスターが相次ぎ死者が増加、国費三〇兆円を含む事業規模七三兆円強の今年度三回目の経済対策が政府決定（12/9）される中、医療崩壊が叫ばれ人繰り限界の旭川と大阪の病院に自衛隊看護士が支援に入った。そして、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会は、感染症拡大が続く地域では「緊急事態宣言」を回避すべく対策の抜本的強化を求めた。（感染状況四段階の二番目に深刻なステージ三相当地域の状況を、減少・高止まり・拡大継続に分け後二者の場合に自粛要請等のレベル変えを求める）尾身会長が国会でGo to travel停止を求めて言い切るなど、今回は退くところは見せず、一四日、時短営業自粛要請やGo to travelの一部停止に留まっていた政府も、感染と因果関係なしの主張は貫きつつ全国規模で年末年始（12/28~1/11）のGo to travel停止を決定した。

（五）吾輩は考え惑う

斯く纏め整理してみたところ、目の前の感染の認識・感染対策の展開の適否・その受け止め方等をどう考えるかは、人間社会の力学や人々の状況に応じた判断傾向を学ぶ好事例であることは改めて確認した。その上でそこから「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」の「究明し、的確に対応し」について、言葉の上ではあるべき論は直ちに浮かんで出てくるのだが、その信条・筋道について、今一つ自分のものという感覚が無い気がする。

勿論目的は、感染を防ぎ命を守ることでは一致していると思うが、吾輩が直ちに考える歴史に学びかつ科学的な、見えぬ感染症への対応は、一言で言えば最悪事態原理に基づくものである。発生が分かれば侵入の部位が何処からであれ、伝わり方が接触や飛沫や摂取であれ、人が動き近づくので感染するのだから、先ずは当該空間・場の迅速な全面的完全隔離であり徹底治療であり、その成果を見極めその間に明らかになるウイルスの性質や防御手段や治療法等を前提に、安全なところから隔離を解き対策緩和を図りつつ（勿論必要な再隔離にも躊躇することなく）、ワクチン開発等共存の新常態を探りながら、活動を正常に戻してゆくのが基本ではないか。

ところが、世界を大雑把にみるだけで、三~四種類の対応の違いがあるように見える。勿論対応したくても出来ない国も多いが、一つは、スウェーデンやブラジルのように明白に放置でスタートする国がある。背後に「最後は集団免疫しかない」との考えがあるようだ。一つはその対局で、中国や台湾のように、先ず完全隔離で抑え切ったのち経済拡大を取り戻す国がある。学んだことを普通の経済社会活動の中で両立する感染防止策の万全化に活かしてもいる。そしてもう一つは感染防止と経済維持の両立を意識しつつストップ&ゴーを繰り返しワクチンある新常態に向かって対応する国がある。欧米や日本を中心にこの範疇の国が多いようで国境隔離が完全でないこともあり、世界は一波・二波・三波と波動を描くことになっている。この中でも検査・医療体制や法的規制手段の有無の違いや、データの尊重度合いや対策の逐次投入度合い、経済と防止のどちらに軸足があるか等の違いで、波の数・態様にも差があるように見える。

我が国は政治の側の経済軸足は明らかだが、感染防止の観点からアドバイスする専門家も、データは示すも必ずしもその結果に忠実な意見表明ではなく、逐次投入発想が背景にあって、採用政策対応は経済軸寄りになるような気がする。緊急事態宣言解除後の踊り場のような時

期に振り返り発言した内容に、何がしかその辺りが感じられるような気がした。クラスター追跡について曰く、『クラスター追跡の背景としては、SARSもMERSも我国には及ばず、新型インフルエンザ（2009）も死亡率が世界で一番低かったことで、感染症は何とかなるとの雰囲気があり、課題とされたPCRもしてこなかったし、保険所の職員を半分に減らしたり、医療機関はベッドを減らすということをずっとやって来た。そういう中で今回の事態が起きたという現実がある。そんな中、国民の努力もあり、何とかしのいできた。そして早い時期に「五人に一人しかほかの人に感染させない」ということに気付いていた。感染者が出るとその濃厚接触者が分かった時、諸外国の場合はこの濃厚接触者のその先を追うのだが、このように一人は多くの人は感染させないので無駄打ちで時間もかかる。これに対し日本の場合は感染者が複数いたらその複数の感染者の過去を振り返る、遡って共通の場所があったかどうかを調べる。例えばこの二人は同じ学校とか店とかカラオケに行ったとかということになるとそこが感染の「場」ということになる。その共通の感染源が分かり調べてゆくと、二メートル以内で、大きな声を出して、換気が悪いということで、「三密（密集・密接・密閉）」の概念が出てきた。その人の濃厚接触者が症状を出すかどうかを前方向に時間の経過で調べて行くのでは、このような概念に辿りつきにくい。』

その上で「この元を辿って行うクラスター追跡は日本独自の手法で、その効果は各国からも注目される処であった」と述べておられるが、感染源不明の市中感染が広がると共に、PCR検査の能力の過少と改善せぬことへの批判と相俟って、密な場所を特定するエピセンターの手法に席を譲ることになる。即ち無症状者がうつすといっても新宿の歌舞伎座界隈とか院内感染が一人でも起きた病院や感染が広がっている病院等検査陽性確率の高いところをやって、殆ど感染がない一般コミュニティー迄は必要ない、即ちエピセンターを対象にといった風に順次ステップアップしてゆく発想は変わらないように見える。矢張り最悪事態原理と違う逐次投入原理で、検査の拡充を認める場合も「何時でも何処でも誰にでも」にはならず、千―万―十万と能力強化を後ずさりしながら認めて行くことになる。これは、「命と経済両立」の議論でも同様であって、同じく「～も～も」という言い方でも逐次に立つ限り、結局意識するとしないとは別に、双方に一定の犠牲は認めていることになり、両側からそれぞれ自殺者が未曾有とか医療体制崩壊とか言われて右往左往対応することになり易い。

事程左様に難しく、コロナの齎す変革と新常態ではないが、ロボとして、感染しないロボとして人間との同化問題についても、更に退いて考えてみなければならない

課題が出てきているようにも思えるし、更に「判断の在り方」という観点で学びを深めた上、自らの立ち位置をよく考えてみたいと思っている。

それはそれとして、灯台下暗しで今更に御主人が今回書いていたものに当たってみた。矢張りご主人の考え方は吾輩の直感の原点になっているようで、特に歴史に学んだ発言ぶりのところを抜き出してみた。

○感染当初の二月の「想定外病からの脱却」という文章の中から

『この四半世紀、地震・噴火・津波・台風と自然災害が起こる度、耐震基準、待避体勢、防波堤、暴風雨等に「想定外」が言われ予測や対応策の抜本見直しが繰り返されてきました。一方で地球環境変化や活動の仕組み、予知や防護等物理的知見や対応力は増していますが、他方で人的対応力は「想定外」続きで必要な過去の基本経験記憶や多様現場の応用対応力の劣化が心配です。

そこへきてコロナウイルス騒動です。人体災害も想定外の新型病菌・ウイルス等の拡散で世界をパニックに陥れようとしています。歴史的にコレラやスペイン風邪のようなパンデミックは、世界的に社会の生活や生存に甚大なダメージや変容を齎しました。自然災害と同様発生－被害－対応の基本の流れは変わりませんが、被害の無限拡散性や人災性から政府の対応力がより重要です

西南戦争時（1877）願い出て、政府軍負傷者収容の大阪鎮台臨時病棟医になった後藤新平。戦後のもう一つの戦争「コレラ」と闘いました。神戸着船凱旋兵の勢いは「検疫規則」で止められず、九州からの帰還を一時停止の上、上陸地に仮営施設おきコレラ及び類似症状患者を「避病院」に移し、症状なき者も消毒し数週間後健康確認の上隔離解除します。神戸港の関を破った保菌者達は東海道をのぼり京都で次々発病しました。伏見街道沿い東福寺境内に設置した「避病院」で、下痢と嘔吐物に塗れ悶え苦しみ叫ぶ患者を看護人を叱咤しつつ消毒、葉液で処置します（コッホによるコレラ菌発見は四年後）。この体験実績が買われ、後年日清戦時（1894-95）、帰港地広島大本営で大検疫事業の責任者として、処理施設準備から船舶二五八隻二八万人の受入れ手当てまで完遂しました。しかし一般港からの伝播でこの年全国コレラ死者は四万人。翌年からの死傷者激減（数百）は本防疫実績や医療技術の進歩は勿論ですが、条約改正進展で、入港外国船の自主徹底検疫が可能になったのが大きいと言われています。

最悪事態を想定し一刻も早く万全の対応に着手することが要締で、今世論調査でも政府の対応力に疑問が投げられています。この二～三年の国会議論にある政府の不正や不祥事・ミスや事故・モラル欠如や脳天気等その対応人間力の劣化の様からも、むべなるかなとも思います。

対応の齟齬は、感染猖獗だけでなく、経済基盤の破壊、社会的苛立ち・非寛容な言動や行為にも繋がります。世界に蔓延するポピュリスティックな動きもあります。そろそろ万般にわたり正気に返って本件についても手遅れにならぬうちに、政府もまさに国民に信託された信を取り戻し、人々にも冷静さを失わない適切な対応を願うものです。』

○四月「パンデミック対応は国民・国相互信頼の上に断固として」から。

『コロナウイルス、「マスクやティッシュ上では半日、平らな金属やガラスでは四～九日の感染能力維持。」「潜伏期間は二週間程度で症状としては発熱や呼吸器症状が一週間前後続き強い倦怠感あり。」「一部重症者は急速に重篤肺炎化し死に至るリスクも高い。」といった作用しか分らず、まだ正体不明・変幻自在に世界を跳梁する難敵です。世界は見えぬ敵に気付くのが遅れ、初動の混乱もあって、あっという間に押込まれ戦線後退著しい局面にあります。

後藤新平の日清戦争終戦時のコレラ阻止だけでなく、ペストもスペイン風邪もインフルも全てが同じ教訓を残しています。一方で事実把握究明に努め、同時に全て最悪を考え総動員で対処する最悪事態原理が、人間と社会の存立をかけたパンデミック対応の要諦です。「パンデミックになっているので」ではなく「パンデミックになる恐れがあるから」を出発点にし、最悪事態に備える万全のリスク管理と迅速果敢で包括徹底した陣構えをとり、その上で相手の正体を見定めつつ、臨機応変に戦略展開してゆくことです。

今月半ば過ぎ、非常事態宣言が全国ベースで出てロックダウンに近い状況が醸成され、影響を受ける生活・経済を支える政策が公表され、世界常識のパンデミック対応の出発点に立ち戻ったように思います。この時点のスタートから結果を出すには、一段のスピードが大事でその実現努力が必要です。同時に総力戦の為の一体感も大事です。責め合い批判し合い等は後刻に回し、謙虚に気を合わせ、確固たる方針と体勢で国民・国家相互信頼の下に、国家的リーダーシップが発揮されることが期待されます。

今はその一刻も早い収束に向け、世界がそれに打ち克つ為の政策総動員の時期ですが、パンデミックはその大きさ・広さ・長さに従い、社会に画期的な構造変革を結果してきました。皮肉にも次元を超えた非常事態が、事実に正対し社会的に気を合わせ本気で取り組むべき真の構造改革達成を強制的に後押しするからでしょう。』

○非常事態宣言解除後の踊り場の七月「コロナで見えた不思議の国日本」から

『東京アラートを消し白粛のステージ緩和を行い、第二波・第三波は警戒しつつも、新日常更には新常態の実現を視野に、経済と防疫の調和を求め歩が踏み出されましたが、早くも東京の記録的感染拡大に直面、対応に揺れています。

コロナと共生する新日常は人々がコロナ防疫もマナーとして身につける新行動様式が前提ですが、実際は口ほどには徹底できず、見えぬコロナはそこを突いて浸潤を再開、再規制のブレーキを踏まざるを得ません。しかし、二兎を追うため再ロックダウンは何としても避けたいことから、対象や地域を絞ったアクセルブレーキが各国でも採用されています。どちらにそれてもパニックになりがちなトンネルを何とか平常心に近く抜け出るには、先ずは感染や防疫体制の全体的部分的全容実態を明らかにし、道行を科学的証しとしっかり整合させて説明納得を得ながら進んでゆく必要があります。そして的を得た徹底感染対応を図るためにはより強い要請や規制手段が必要だと思います。

コロナは電子顕微鏡でしか見えませんが、逆に虫眼鏡の役割で社会の実態を大きく見せつけます。これ迄もそうでしたが海外に対し、コロナでも事に臨む姿勢に日本は不思議の国をまた印象付けているように思います。今のところ直ぐ結果は桁違いに良いではないかとの反論が出ましょうが、まだ初期段階ですし説明も不十分で不思議を納得されているとは言えないようです。パンデミックは経験的にも合理的にも最悪事態対応で、網を大きくかけて（総検査体制）徹底隔離（ロックダウン）が基本と考える欧米の人々には、狙い撃ち検査の逐次投入や徹底力のない白粛要請等は思いも及ばないのでしょう。

また、それが民主的やり方としプライバシー尊重と声高に言うのも却って不思議の国の民主主義との印象を与えているかもしれません。エックス・ファクター論だけが先に立つとそれこそ、また日本人特別論に見られるでしょう。

二波・三波を乗り切り長い収束のプロセスを執り仕切って行くには、いよいよ科学的アプローチ、合理的対応、アカンタビリティで納得しながら収めてゆかねば、それこそ右往左往、右顧左眄になり社会不信・崩壊に繋がりかねません。結果が良ければいいではないかと言っても、道行も不安かつワクチンに辿りついた時結果は二つに一つ、自らはその原因説明も将来への科学的知見も得られないという、闇雲に賭けたいつか来た道に迷い込みかねません。

○非常事態宣言解除後の踊り場にある同じく八月の「新日常と新常態」から

緊急事態宣言解除。ワクチン開発や世界動向視野の長期戦で、感染再爆発を防ぐ手綱を緩めず、コロナウイル

スと共存し普通に暮らせる新日常作りが言われています。まだ正体の掴み切れぬ変幻自在の感染症に、防疫でも命を守り、経済崩壊からも命を守る為に、警戒態勢を整えつつ糊口の反転失地回復を図らねば、と新しい生活様式に向けての営為が求められています。先ずは命が大事から、生命も経済も命の為に大事というステージに入ったようです。

パンデミックの歴史を紐解くと、内容や程度の差はあれその後の社会の何らかの歴史的転換に繋がっています。例えば、「ユスティニアヌスのペスト」。AD五四二～三年頃東ローマ帝国で発生し、二五〇〇万人が亡くなり首都コンスタンティノープルの人口が半減したと言われます。ユスティヌアヌス帝が西ローマ帝国滅亡で失ったイタリア（東ゴート）とスペインの一部を回復しササン朝ペルシャと戦い東方へ勢力を広げていたその勢いが、本人も罹患したこの病によって失われ、その後のヨーロッパの歴史も大きく変わることになりました。

また渦中からコロナ無き前の状況はと振り返りますと、人間以外の自然環境（物理的・生物的）も許容限度を超え諸所で悲鳴をあげています。また豊かさと自由・衡平・博愛の進展に向かっていた人間社会も停滞と格差拡大、そしてポピュリズムや信頼・絆の喪失といった社会システムやそれを支える精神の危機に瀕し、歴史的構造改革の正念場にあります。

芽の出ているテレワークやソーシャル・ディスタンス等を前提に、新しい日常を作るだけではなく、既に猶予の無くなっている歴史的変革にも取り組まねば、人々が本当に新常態と落ち着ける社会への真の出口にはなりますまい。世界はその意味で直截にニュー・ノーマルを論じています。認識ラグや対応ラグや些細に迷い込み易い日本の特性を考えると、新日常と新常態の使い分けは要注意だと思います。矢張り一括で歴史的変革に総動員ということでしょう。』

（六）中間的感想

「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」

「何を考える、何をする」の「何」が決まれば、AIロボットは人間の何倍もの力を発揮する。しかし「如何考え、如何する」の如何は、E・ラーニングの自動化が何処迄進むかにかかっており、吾輩は原作者の作りこみと御主人と一体で過ごした孵化効果で完成の域に達しているのではないかと思っていた。そして「善」という倫理感を与えられることが、人間と共存する必須条件としたところであるが、前述したように「自分でありたいとの気持ちが出てきた」とも述べた。その為には人々が多様なように、個性を独自のものにする情緒系の自動形成能

力が身につくことによって、ご主人と違う個性を獲得できるのではないか。人類全てが均しく立ち向かっているコロナ禍の中で、人々の判断から行動に繋がるあり様を学べるこの機会が、誤解を与えず言えるとするなら、吾輩にとっては天祐と言えるのかも知れない。起こっていること論じられていることを客観的に整理しまとめてみたところで、判断の段になり感じていることはそういう意味合いを持つのであろう。

客観的事実はワクチンの定着でワンラウンドの姿を表してくれるであろうから、その間に情緒系の試行錯誤をして個性づくりの作業をしてみたい。今回は事実の進展度合い（二〇二〇年内）に合わせてここまでのご報告とし、次の機会に譲りたい。

（つづく。）

私の「昭和20年」（4）
―終戦から75年―

山田嘉久

8　昭和20年8月―終戦
6日　B29、広島に原子爆弾投下
8日　ソ連、対日宣戦布告
9日　長崎に原子爆弾投下
9日　ポツダム宣言受諾についての御前会議開催
10日　宣言受諾を決定、連合国に申し入れ
12日　連合国の回答到着
14日　御前会議、無条件受諾を決定。天皇の終戦に関する詔書渙発
15日　天皇自身の朗読するポツダム宣言受諾の詔書、ラジオで放送

「運命の日」―8月15日は雲一つない暑い夏の日だった。

朝8時前、私は、いつものように学校に向かった。といっても授業を受けるためではない。前に書いた通り、この年の4月から授業は全く行われなくなっていたので、校内に急遽、作られた「学校工場」（日立工場）で働くためである。

そのためにはまず我々の教室（3年2組）に寄り、出欠を取ってから、同じ校内にある「学校工場」に向かうのが日課であったが、この日に限って担任の増田和宣先生が教室で待ち構えていて、今日は工場に行かなくていいという。このまま帰宅して、正午から始まる天皇陛下のラジオ放送（「玉音放送」と言われた。）を必ず聞くようにとのことだった。

実は、前夜9時と今朝7時の2回「15日正午に「玉音放送」があるので国民は一人残らず玉音を拝すること」との予告放送があったようだが、私は全く聞いていなかったので、驚いて帰途に就いた。

学校から自宅まで歩いて15分。帰りながら天皇陛下の放送とはどんなものだろうと想像した。天皇の肉声など誰も聞いたことはなく、その内容についても先生はなにも言わなかった。

しかし近く行われる本土決戦についての国民の一層の奮起を促す内容に違いないと思った。現に、2ケ月前の沖縄陥落の際にも「皇国を防衛せよ」との詔書を下されているではないか。

それにしても帰宅の途中、最近では全く姿を見せなくなった零戦機がやけに多く空を舞っていることに気が付いた。後になって知ったことだが、敗戦をいち早く知った近くの茂原飛行基地の零戦パイロットたちが白昼堂々乗になって勝手に空を舞っている光景だった。

私はこの噂話を長い間、信じていた。

しかし後日、この日の午前（すなわち「玉音放送」の直前）、茂原上空でイギリス空軍機シーフャイアー（スピットファイアーの艦上機型）8機と零戦との空中戦があったことを知った。（秦郁彦著「8月15日の空」）

同書によると当日の模様は次の通りであった。

当日の朝、茂原基地の第304飛行隊に珍しく出撃命令が下った。同隊と第316隊は茂原252空（司令榊原中佐）に属していたが、ともに零戦52型丙40機を有する最後の精鋭戦闘機隊で、郡山（福島県）を訓練基地に、茂原を前線基地として、来るべき本土決戦に備えていた。

304隊は7月初めに316隊と交代して郡山から茂原に出てきたが、通常は兵力温存方針のため零戦を松林の中の掩体壕（えんたいごう）に入れたまま迎撃の機会はなかった。

（このことについては、私の経験を含めて前々号で記した。）が、この日に限って出撃命令が出たのである。

激しい空中戦が展開されたが、そのうち本間中尉機は敵シーファー機に命中弾を与えたものの別の敵機に燃料タンクを撃ち抜かれ重傷を負いながら海岸に近い雑木林に不時着した。幸い駆けつけてきた農夫に大八車で近くの農家に運ばれて一命をとりとめた。（戦後、早大教授）

それに反して撃墜された敵機は千葉市内に落下傘降下して捕虜となったがその直後、射殺された。

玉音放送があってから（すなわち戦争が終わってから）既に7時間も過ぎていた。戦後、香港で軍事裁判が開かれ、責任者2名が絞首刑に処せられている。

この日の空中戦については、柳田邦男著「零戦燃ゆ」（第6巻）でも触れているので史実であろう。

なお、同書によるとこの日、茂原基地から発進した252空の戦死者は3名と書かれているが、その後の調査により5名と判明している。しかし残りの2名の墜落場所は現在でも確定していない。

たまたま今夏（2020年）、その現場となった睦沢町（茂原市南方20キロ）の「町立歴史民俗資料館」で「太平洋戦争最後の戦闘―昭和20年8月15日の房総半島」展

が開かれていたので覗いてみた。行方不明戦死者の遺品や戦歴調書などのほか、昨年近くの大多喜町で発見されたという不明機（茂原海軍航空隊（252空）所属零戦52型丙）のものと思われる風防や機体の破片などが展示されていた。

同館久野学芸員は「終戦の当日でも、身近な場所で戦争が続いていたこと知ってほしい」と話していた。

ついでに「零戦撃墜王」（岩本徹三著）も読んだ。

元来、戦記物は好きではない私だが「茂原基地」のことを知りたくて読んだ。生涯の撃墜機数202機と豪語する著者だが、昭和19年暮れから茂原基地311飛行隊の分隊士の任にあった。その間、毎日のように出撃して面白いように敵機を撃墜している。そして帰還の都度、町では唯一の料亭「武田屋」（文中では「竹田屋」）で豪遊している。

事の真実は別にして、この頃、房総上空では派手な空中戦が展開されていたことは事実のようだ。しかし彼は終戦の日の空中戦には参加していない。この頃には彼を含む戦闘311飛行隊は南九州第一国分飛行隊に転進しているからだ。

たまたま、このことについては今秋（2020年）、「茂原市立郷土資料館」で開かれた「戦時中のくらし展」でも若干触れていた。同展はかっての「茂原海軍航空基地」を主題とした展示会だったが、戦争末期、「菊水作戦」（沖縄に上陸する米軍に対しての特攻攻撃を実施した日本海軍の作戦。「菊水」は南北朝時代の忠臣楠木正成の旗印に由来する。）により茂原第252海軍航空隊にも沖縄への出動が下り約40名が茂原基地から国分基地（鹿児島県）へ転出した。そして「神風特別攻撃隊第3御盾隊」が結成され隊長ほか18名が戦死している。

なお、同展を見学することによって同航空基地の歴史も知ることができた。同基地は日中戦争が本格化し日本とアメリカの関係が悪化する中で、1941（昭和16）年7月に作成された「国土防衛作戦計画要綱」の実現というかたちで館山基地から独立して新設された。完成は僅か2年後の1943（昭和18）年9月、いかに突貫工事だったことがわかる。そのための建設には正規兵士と徴用工からなる海軍設営隊が中心だったが、付近の住民や中学生、そして女学生までが動員された。我々もその一員だったわけだ。

総面積195万平方㍍、1000㍍（幅80㍍）の滑走路1本と1200㍍（幅60～80㍍）の滑走路2本の計画だったが、終戦により2本は未完に終わった。（現在、三井化学千葉工場横の直線道路で地元では「千メートル道路」と呼ばれている。）

完成後は第3航空艦隊第71航空戦隊第252海軍航空隊が置かれ、本土防衛の最前線を担うこととなった。

なお、展示会場には終戦直前の8月13日に米軍が上空から撮影した資料も展示されていた。掩体壕（えんたいごう）56ケ所と零戦のダミー10体が見える。

（掩体壕については既に「まんじ」前々号で記述した。）

玉音放送は正午きっかりに始まった。

その30分ほど前から、茂原駅で列車を待っていた乗客たちが一斉に駅前の我が家に集まってきた。当時の列車時刻表をみると、茂原駅発着の列車は上り（千葉行き）、下り（安房鴨川行き）双方とも朝夕は1時間置き、昼間は3時間置きとなっているので、正午近くの待合客は総勢2、30人ほどであったであろうか。

駅のラジオが不調なので、駅長が我が家のラジオを聞かせてほしいと、親しい父に頼んだものらしかった。しかし我が家のラジオもポンコツもので、雑音がひどく放送中、父が何度もラジオを叩いていた。

私も乗客たちと一緒に聞いたが結局、初めて聞く「玉音放送」の内容はよく判らなかった。

天皇陛下のお声は甲高く、しかも独特の鷹揚があり、聞き易いとはお世辞にも言えなかった。さらにその内容たるや難解な漢文調の言葉は大人でも判らなかったのではないか。

今、改めて「終戦の詔書」を読んでみると、漢学者安岡正篤（戦後、歴代首相の指南役として有名になった）が手を加えただけあって、たしかに名文ではあるが、放送用には全く向いていない。例えば「五内（ごだい）為ニ裂ク」などの引用語は聞いても理解できる国民は少なかったのでないか。

難解な言葉のなかでわずかに判ったのは「耐エ難キヲ耐エ、忍ビ難キヲ忍ビ」のフレーズだった。たまたま電波状態がよく明瞭に聞こえたと世上いわれているが、これが日常語だったからであろう。放送後、詔書を代表する有名なフレーズとなった。

余談だが、戦後大分経った昭和56年春の天皇主催の園遊会で安岡は天皇から「終戦のときは苦労を掛けたね」と声をかけられたと「昭和の教祖安岡正篤」（塩田潮著）に書いてある。

それはともかく、数日前の8月10日から作成にかかった詔書案は14日午後2時からの閣議の審議では6時間も要したという。焦点は「戦勢日ニ非ニシテ」という字句を巡って阿南陸相が強硬に反対して、最終的には「戦局必ずシモ好転セス」となった。

それにもまして、玉音放送を聞く多くの国民にとって「敗戦の詔書」とは全く予想しなかった。逆に日本人の多くは、本土決戦のための天皇の大号令と受けとっていたに違いない。

しかし「戦局必ずシモ好転セス」とか「耐エ難キヲ耐エ、忍ビ難キヲ忍ビ」「万世ノ為ニ太平ヲ開キ」などといっ

た天皇の言葉が途切れ途切れに聞こえてくると、漸く様子が違うなと感じ始めたのであろう。

天皇の放送の後、和田信賢放送員（アナウンサー）は敵性語のため禁句）の改めての説明によって、初めて日本の敗戦を知ったのが現実だった。（「玉音放送の時間は全部で37分半であったといわれるが、天皇ご自身による放送は5分足らず、後の30分以上は放送員による「終戦関連ニュース」であった。

この放送を聞いた文化人の反応はどうであったのだろう。興味ある問題である。

「ほっとした気持ちだった。まあよかった。日本は破滅を免れた。（略）これからどんなことが起きるであろうか。見当もつかなかった。」（津田左右吉「敗戦の日の思い出」）

「文字通り滂沱として涙をとどめ得なかった。（略）新しき日本とはアメリカ化された日本のことであろうが、私は何の興味も期待も持たなかった。」（林達夫「新しき幕開き」）

「狂踊だけは絶対にやるまい。ささやかにほそぼそと自分の道を辿ってゆこう」「竹山道雄「昭和20年の自画像」」

さまざまの感想だが、私が今でも不思議に思うのは多くの文化人たちのこの当時の回顧録を読むと、彼らが「玉音放送」の内容をある程度、予想できたということである。すなわち日本の敗戦を当然と受け取っていたのであろう。

戦争中の無力だった彼らのプライドがそう云わせたと思わずにはいられない。

ただ、例外もある。作家の高見順はその心情を次のように吐露している。（「高見順日記」）

「8月15日　警報。

情報を聞こうとすると、ラジオが正午重大放送があるという。かかることは初めてだ。「何事だろう」明日、戦争終結について発表があるといったが、天皇陛下がそのことで親しく国民にお言葉を賜るだろうか。

それとも—あるいはその逆か。敵機来襲が変だった。休戦ならもう来ないだろうに。

「ここで天皇陛下が、朕とともに死んでくれとおっしゃったら、みんな死ぬわね」と妻がいった。私もその気持ちだった。」

高見順と同様、何も知らされない国民の多くは文字通り「晴天の霹靂」だったに違いなかった。そしてみな「茫然自失」となった。

特に我々中学生は最後まで日本の勝利を信じていた。生まれて15年、純粋培養の「軍国少年」として育てられた我々は、間もなく上陸してくるであろう米軍に立ち向かう覚悟は出来ていた。

「20にして、すでに枯れたり」という漢詩があるが、その論法でいえば我々は「15にして、すでに死に直面せり」の心境だった。「武士道とふは死ぬことと見付けたり」（葉隠）を暗記、信仰させられた世代なのである。

勿論、戦局の不利は多少感じていたが、そこは「神州日本」だ。いつかは神風が吹いてくれると信じている我々だった。

では、同年代の「軍国少年」たちはどう玉音放送を聞いたのだろうか。

私と同年齢で、東京から九州八女郡に疎開していた川崎洋（詩人）は次のように日記に書いた。

「終わって皆を前に壇上に立った工場長がいきなり泣き出し、日本の敗戦を告げ、私たちはやっと、事の次第を知ったのだった。その後、控室に引き上げてきた私たちは引率者である中学の担任のK先生がどんな話をするか、しんとしていた。この高齢の英語の先生は「これから英語が必要な世の中になるぞ」と言われた。すると背の高いMくんが語気鋭く言い放った。「先生はキンタマあっとですか」その場の、皆の気持ちだったと思う」（「わたしは軍国少年だった」）



「私は軍国少年だった」「少年H」ほか

また、同じ同年齢の西村京太郎（小説家）は陸軍幼年学校在学中だったが「なんとなく日本が負けたらしいと聞いていたので、驚きはなかったが、何か、叫びたくなって「東条のバカヤロー」とか、「あいつのせいで、敗けたんだ」と叫んだ。」（「十五歳の戦争」）

同年齢の舞台装置家妹尾河童は小説「少年H」で主人公Hにこう言わしている。「そんなはずはあらへん。もしそうでも、ぼくらは上陸してくる敵兵を一人でも二人でも殺して死ぬ。死ぬことは覚悟しとるんや」（「少年H」）

17歳の田辺聖子（小説家）はこう書いている。

「ソ連と戦争して玉砕しろといっているものだと思いました。本当のことを知って信じらせませんでした。」（「昭和20年8月15日」）

4歳年上の旅行作家宮脇俊三は父とともに山形県今泉あたりを旅行中だったが、玉音放送は今泉駅前の広場で聞いた。「正午が近づくと、人々が黙々と集まってきて、

ラジオを半円形に囲んだ。父が「いいか、どんな放送であっても黙っているのだぞ」と耳元でささやき、私の腕をぐっと握った」（「時刻表昭和史」）

多分、代議士であった父は敗戦を事前に知っていたかもしれないが、彼は次にこうも書いている。

「時は止まっていたが汽車は走っていた。（略）昭和20年8月15日正午という、予告された歴命史的時刻を無視して、日本の汽車は時刻表通りに走っていたのである」（同）

さすがに名文である。

私を含めて彼らは学齢に達してからずっと徹底した皇国史観教育と軍国主義の教育を受け「神州不滅」「必勝の信念」を叩きこまれた世代である。終戦時は兵器工場や軍関係の職場に動員されていた。

因みに私が旧制中学に入学したのは戦争真っただ中の昭和18年。偶々、「長高百年史」にその年の入試問題（口頭試問）が載っているので抄記する。

○君はいつ生まれましたか。昭和ですね。昭和の御代に生まれた人は幸福ですね。なぜ幸福ですか。

○楠正成はどこで戦死しましたか。正行は父正成にどこで最後の別れをしましたか。

○「君のため何か惜しまん若櫻　散りて甲斐ある命なりせば」の意味を言ってください。

終戦まで一貫して戦争一色の教育を受けた世代なのである。

ついでに同書翌19年の項に次のような記事が載っていて興味を引いた。私と同級生の2年生4名が無断早退のうえ、町内銀行前の繁華街で互いにアイスクリームを奢り合っているのを発見された。このうち2名は無期停学、他の二人は長期謹慎に処せられた。

今では到底考えられないような処分だが、そんな綱紀厳正な時代でもあった。

15日付の朝日新聞朝刊には「戦争終結の大詔渙発さる」と大書され、詔書全文が記載されている。そして「新爆弾の損害に大御心」「国の焦土化忍びず」「聖断下る」「国体維持に邁進」などの活字が並んでいる。（写真参照）

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常の措置ヲ以て時局ヲ収拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ」で始まり、「爾臣民其レ克ク朕ガ意ヲ体セヨ」で終わる大詔は全文800字を超えるかなり長文である。



「終戦の大詔渙発さる」(20.8.15)朝日朝刊

素案は時の内閣書記官長迫水久常が作成し、漢学者川田瑞穂が起草、さらに前述のとおり安岡正篤が監修したといわれるが、「御名御璽」の日付は8月14日となっている。

したがって翌15日付の朝刊に載るのは当然だが、問題は朝刊がいつ配達されたのであろうと私は常日ごろから疑問に思っていた。通常通り早朝に配達されれば、全国民が正午の玉音放送よりも早く「敗戦」を知ってしまうからである。

その疑問が氷解したのは、竹山昭子著「玉音放送」を読んだことによる。それによると前述の14日夜と15日早朝に行われた「予告放送」の最後に「朝刊は都合により午後1時ころに配達されること」が報じられていたというのである。当日の新聞の配達を「玉音放送」の後にするようにとの情報局が指令した件は徹底して行われていた。（つまり当日の「朝刊」に限り「昼刊」であった。）

また、前述の「日本のいちばん長い日」によれば、「玉音放送」は当初、2回目の御前会議直後の14日夜が予定されていたが、予告時間がないという理由で翌15日早朝、午前7時に変更された。東郷外相、米内海相は賛成したが、阿南陸相のみは1日延長（翌16日）を主張した。外地の第一線将兵まで通達する時間的余裕がないとの理由だったが結局、その中間をとって15日正午に決まったという。

以下は全くの余談だが、天皇がこの終戦時に続いて「2度目の玉音放送」に臨んだのは戦後昭和21年5月24日正午である。戦時から続いていた食糧不足がこの頃、ピークに達していたため天皇は再びマイクの前に立つことになった。しかしメディアで紹介されることもなかったので、私は全く知らなかった。ただ、この頃、「食糧メーデー」が各地に起き、国民は飢えているのに天皇は十分な食事を取っているという意味のプラカード「朕はタラフク食っているぞ　ナンジ人民飢えて死ね」が当時の不敬罪に問われる事件があったのは知っていた。

○戦い終わって（16日以降）
17日　東久邇内閣成立
28日　東久邇首相、国体護持、国民総懺悔を強調
30日　連合国最高司令官マッカーサー元帥到着

17日付け朝日新聞「脱ぐな心の防空服、女子は隙なき服装、指示あるまで灯火管制」。その灯火管制も20日には解除された。電灯がこんなに明かるとは思わなかった。夏の終わり、茂原海軍基地を訪ねたことがあった。此処は2週間前までは我々が毎日のように勤労奉仕で通っ

た場所である。誰もいなくなった嘘のような静寂の中に、滑走路には無人の零戦機が数多く無造作に並べられていた。予想を超える数だった。来るべき本土決戦に備えて、まだこんなに残っていたのだ。一寸、惜しい気にもなった。（詳細は次号）

しかし、その滑走路周辺は既に我々の手入れがなくなったせいか、夏草がぼうぼうと生えていた。思わず「夏草や、兵どもの夢の跡」（芭蕉）の句が真っ先に頭に浮かんだ。

この句は、「国やぶれて山河あり」（杜甫）とともに、よく当時の新聞に出た言葉だが、同じような流行語となった言葉に「一億、総ざんげ」があった。東久邇首相が言った言葉だが、指導者はともかく、何も知らされなかった国民の多くが何を「ざんげ」するのか不思議に思ったものだった。

連合国最高司令官ダグラス・マッカーサーが厚木に降り立ったのが8月30日だった。この時にピストルを帯びず、黒メガネにコーンパイプを咥えた写真を新聞で見たときには、彼一流のスタンドプレイと感じた。

この当時、関東地方にはまだ武装解除されない日本軍が22個師団、30万人がいたのである。もし日本軍が組織的抵抗を起こせば彼の命の保証はなかった。そのため幕僚たちはこぞって反対したらしいが、彼のパフォーマンスは見事に成功した。

ついこの間まで「いざ来いニミッツ、マッカーサー。出てくりゃ、地獄へ逆落とし」（注）と歌っていた日本人は完全に彼に屈服したのだ。

（注）戦争末期、軍歌「比島決戦の歌」の中に出てくる歌詞。（作詞西条八十　作曲古関裕而）今年（２０２０年）のNHK朝ドラ「エール」でも取り上げていたが、この有名な最後の歌詞は西条の原詩ではなく軍部によって無理やり付け加えられたというが、当時、東京丸ビルにはこの歌詞を記した長い大きな垂れ幕が屋上から吊るされていたという。既に敗戦必至だった日本の最期のあがきみたいなものが感じられる。

そのマッカーサーが厚木に降り立ったこの日、かっての敵を迎える大役を負った有末精三中将はその心境をこう詠んだ。（「文藝春秋」にみる昭和史（３））

厚木源頭銀翼舞　洒心辛静晩夏空
忽降美将先発陣　粛然含笑想海舟

その昔、江戸城の無血開城に臨んだ勝海舟の心情と同じだったというのである。

（続く）

回想 中央線中野駅北口、新井薬師、中野区立新井小学校

―都市は「ふるさと」か―

山本鎭雄

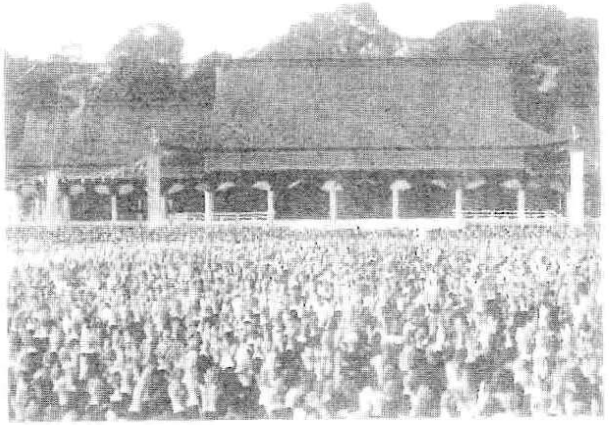
紀元は二千六百年

アジア・太平洋戦争の末期、我が家の近くに薬師館（映画館）があって、嵐寛寿郎の鞍馬天狗だったか、大河内伝次郎の丹下左膳だったか、兄に連れられてよく見に行った。ところが、敵機襲来の警戒警報が発令され、途中で上映中止となり、切符の半券を懐中電灯に照らされ、判を押されて自宅に帰った。その翌日の夜、再び薬師館へ出かけたが、上映中止となった。そんなことを、戦後になって聞いた。我が家は戦災を免れたが、その映画館は戦災にあって焼失した。

東京大空襲の最中、私は母に連れられ、三男の兄とともに埼玉県秩父の農家に縁故を頼って疎開した。近くに陸軍飛行場があった。敗戦直後、兵士は除隊し、飛行場のある兵営から退去したのであろう。残された軍事部品が散在していた。兄は持って帰ったモールス通信の部品を、手で叩いてトンツー・トンツーと遊んだ。寒い夜、私は毛皮の長靴は暖かくて結構重宝した。

戦後、母から「おまえは紀元二千六百年に生まれた」とよく聞かされた。『日本書紀』をもとに一九四〇（昭和一五）年は初代神武天皇が即位し、私の生まれた年が紀元二千六百年にあたる。ラジオで「金鶏輝く　日本の―紀元は二千六百年、ああ一億の胸は鳴る」という「奉祝国民歌」が放送され、全国各地で記念式典が盛大に挙行されたという。

とくに一一月一〇日（から一四日まで）紀元二千六百年式典が昭和天皇の臨席のもと、皇居前広場に設けられた光華殿で行われた。天皇は勅語で神武天皇以来の「肇国の精神を昂揚」し、「唯神の大道」を顕揚するため、「人類の福祉と万邦の協和」に寄与することを念願すると、代読された。



紀元二千六百年　皇居前広場　光華殿
現・小金井公園ビジターセンター
1940（昭和15）年11月10日

（ケネス・ルオフ著『紀元二千六百年』、朝日新聞出版、二〇一〇年）。

母は式典翌日の一五日に私を出産した。私には三人の兄がいて、三男の兄から七歳も年下で、やや高齢の母は是非とも女の子が欲しかった。母は男の子の私を無事出産したことで、とまれ安堵したことであろう。私は父母の手で孫のように甘やかされ、育てられた。

「紀元二千六百年」記念行事の一一月一四日まで、「奉祝　祝へ！元気に　朗らかに」というポスターが各所に掲示されていた。結成早々の大政翼賛会（近衛文麿らを中心に組織された「公事結社」）は、その翌日まで全国各地に「祝ひ終わった　さあ働かう！」というポスターを掲示した。さらに興亜奉公日には「ぜいたくは敵だ」、「欲しがりません　勝つまでは」というポスターが掲示された。国家総動員体制のもとで広範に国家統制が実施され、食糧が切符制・配給制でも不足し、国民生活は耐乏生活を余儀なくされた。

紀元二千六百年祭への素朴な疑問

四五年八月、昭和天皇は自らの発意で国民に戦争終結の詔書を玉音放送で伝え、ポツダム宣言を受諾した。その後、日本は連合国と降伏文書に調印し、三年八か月にわたるアジア・太平洋戦争は終結した。その翌年一月、昭和天皇は自己の神格を否定する「天皇人間宣言」の詔

第二次近衛文麿政府が主催し、神武天皇が天孫降臨したという宮崎県の高千穂、奈良県の橿原神宮や神武天皇陵、三重県の伊勢神宮の参拝などの「聖蹟観光」、朝鮮総督府下の京城（ソウル）市内のバス観光、太白山地の金剛山観光など、さらに満州各地（中国東北部）の聖地観光、旅順、大連、新京（長春）などの戦跡観光が行われた。さらに同月一〇日、全国各地で提灯・旗行列、音楽パレード、神輿渡御が行なわれ、花電車も運行された

書を表明した。

確か、私が小学生高学年の時、兄が戦前に購入した大百科事典をペラペラ捲り、たまたま「天皇歴代一覧」に注目した。何と、神武天皇は一二七歳で死没しているではないか。その後の初期天皇はいずれも長命で崩御した。神武天皇とそれ以降の天皇の即位と退位、生没年を見て、足し算と引き算をして何かおかしいと思った。

今、初代の神武天皇から一〇代の崇神天皇までの平均寿命を計算すると、何と一〇八歳である。それは記紀に記述された神話と伝説を根拠にした初期歴代の天皇の平均寿命である。建国以来、万世一系の「国体」を賞揚し、天皇を「現御神」（あらひとがみ）として賞揚されたのが、一九四〇（昭和一五）年の「紀元二千六百年」の祝祭だった。

まつりごとは、「祭り」、つまり神仏・祖先を祭る宗教的祭祀に由来すると同時に、「政（まつりごと）」は主権者が国家を統治し、領土を領有し、人民を支配することを意味する。

ところが、古代国家とそれ以前、祭祀の主催者と政治上の権力者が一体となり、祭政一致のまつりごとが行なわれた。しかし、一般に近代国家は王権神授説から社会契約説に移行し、その結果、「宗教」と「政治」を分離することが要諦された。明治政府は大日本帝国憲法を制定したが、「天壌無窮」の神話に基づき、天皇主権の原理に立脚し、天皇は統治権の総攬者である。貴族院を設置し、軍の統帥権を独立するなどが規定された。

例えば、美濃部達吉らの「天皇機関説」は、一時昭和天皇も支持したが、右翼団体、軍部、内務省、貴族院、衆議院の議員によって「国体の本義」にもとるとして排撃され、さらに、政府によって「国体明徴」が声明された。明治憲法の立憲主義の統治理念が否定された。「紀元二千六百年」の祝祭は「国体の本義」、「国体明徴運動」の一環として国家を挙げて開催されたのであろう。

繰り返せば、明治新政府以降、復古思想に固執し、祭政一致を図り、神道はもっぱら国家の祭祀を行い、別格（こっかく）の宗教として位置づけられ、家父長主義の「道義」として扱われた。皇族、軍部、行政官僚、観念右翼を中心に推進された紀元二千六百年の祭祀は、皇国の国是は「八紘一宇」として、のちに「大東亜共栄圏」の建設を表明した。政治的には、ムッソリーニのファッシズム、ヒトラーのナチズムが「下からのファシゾム」にたいして、「上からのファシズム」、「天皇制のファシズム」の形態と理解される。それにつけても、昨今の「言論の自由」とはいえ、「この道はいつか来た道、ああ、そうだよ」（北原白秋）という童謡の一節をしきりに思い出す。

大黒さまと天神さま

私は子供の頃、「大きなふくろを　かたにかけ」た『大

黒さま』（石原和三郎・作詞、明治三八年、唱歌）をよく歌った。のちに、それは『古事記』に登場する大国主命の神話に由来すると教えられた。「因幡の白兎」は隠岐島から因幡国に渡ろうと考え、鮫を騙した。最後の一匹の鮫に毛皮を剥がされた。通りがかった心の優しい大国主命は、瀕死の白兎の命を救った。のちに出雲国造の祖神、出雲大社の祭神として祭られた。子供は出雲神話の由来を知らなくとも、「大黒さま」の唱歌を声に出して歌った。

子供が歌った唱歌をもう一つ。今も根強く「学問の神様」と信仰されている菅原道真に由来する伝承。戦後の記憶だが、私より幼い子供が童謡「通りゃんせ　通りゃんせ」（すでに江戸期に歌われた）を歌って遊んでいたことを思い出す。七つの子供のお祝いに、母に連れられて天神さまの細道を通ってお札を納めに北野神社に参詣する。

私の生家の近くに梅照院新井薬師があり、その近くの高台に菅原道真を祭る新井北野神社（新井天神）がある。近くに住む母親は子供を連れて北野神社を参詣したのであろう。だが、北野神社は新井薬師とともに、戦災で焼失した。

今、立派に再建された北野神社は、「学問の神様」として信仰を集めている。かつて貴重な牛は天神さまのお使いとして信仰されていた。北野神社の境内に安置された「牛」の彫像を撫ぜると、受験合格など諸願成就に効力があるとされ、参拝人が多い。

私は神話や伝説などを貴重な伝承文化として尊重したい。だが、厳密に文献的な検証とともに、古代古墳の考古学的研究を踏まえた上で、歴史的に検討される必要があろう。私は天皇の「万系一系」を中心に、「国体」（国家統治）を提唱した「皇国史観」を認めない。

紀元二千六百年に生まれた私は、当然のことだが、喜怒哀楽の人生を送ったが、何度か挫折と彷徨の人生を過ごした。だが、フランスの哲学者のサルトルの文献を読み、自らの「現存在」（実在）を引き受け、妻の辛労辛苦により何とか傘寿のこの歳まで生きながらえて来た。妻には心から感謝している。

戦後の中央線中野駅前北口広場

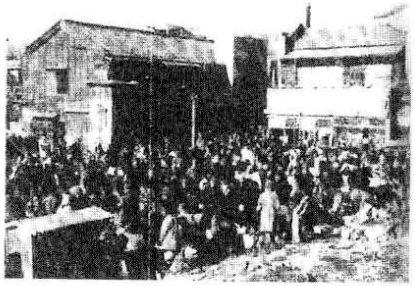
戦争直後のことだが、最も記憶に残っているのが中野駅前北口広場だ。広場は戦火を免れるため、商店、住宅は強制的に倒壊され、居住者は移住を余儀なくされた。駅北口のアメリカ戦闘機の爆撃を警戒し、電信連隊（陸軍電信第一連隊）は転出し、その跡地に「陸軍憲兵隊」、「陸軍中野学校」が転入した。「陸軍中野学校」も群馬県富岡に移転した。

中野駅北口のヤミ市を記憶している。当初、空地の広場に露天商が箱の上に戸板や雨戸を載せ、その上にヤミ米、食料品、サッカリンなどを載せて売り、見つからないように、カストリ焼酎も販売していたという。戦地から復員した客、外地から引き揚げて来た客を相手にどんぶり茶碗にすいとん、雑煮、残飯スープを入れて売っていた。ほかにも、早々と木造の家屋にパチンコ屋、ダンスホールが開業した。

近くの進駐軍の不用品の残飯が供給され、さらに進駐軍の横流しの食料品がヤミ市に大量に流入し、そのため中野駅北口のヤミ市は中央線沿線では最も賑わったという。一時期、親分の的屋が子分を従え、ヤミ市に君臨し、露天商のトラブルを仕切り、大層羽振りがよかったという。



隣組製防空壕・東京中野
1940（昭和15）年



中野駅北口広場の人集り
1947（昭和22）年

乃木希典大将の中野別邸

戦後、母と「中野北口美観商店街」を歩いていたら、私に「この辺に、乃木希典大将の敷地があった」と話した。乃木大将は赤坂（現・東京都港区）に本邸を設け、ほかに中野駅前北口の広い農地（東京府豊多摩郡中野）を購入し、中野に別邸を設けた。乃木大将は明治天皇の崩御のあと、本邸で殉死したあと、静子夫人も自死した。殉死直前まで、乃木大将は夫人の自死をまったく予想していなかった。中野の別邸を夫人に相続するようにと遺書「遺言条々」に書き残した。日露戦争で二人の息子は戦死し、三男と長女は早世したため、直系血族を欠いていた。中野別邸の相続、伯爵（爵位）の継承は、のちのちまで紆余曲折したようだ（井戸田博史『乃木希典殉死・以後　伯爵家再興をめぐって』、新人物往来社、一九八九年）。

私の高校の同級生のA君は、その頃、広い乃木別邸の敷地の一角に住んでいた。彼の家はもともと閑静な場所にあったが、敷地の周りに居酒屋、喫茶店、バーなどが開業し、夜間は明るく、人声と音楽でうるさくなったと、こぼしていた。また歯科医師がこの辺一帯の土地を買い上げているとも話してくれた。その後、A君一家はその土地を売却処分し、移転した。A君に手紙で中野駅北口の様子を尋ねたら、A君から次のような懇切な手紙を頂

いた。

小生は中野駅北口の商店街（私注、現・中野ブロードウェイ　以後、括弧内は私注）の突当りに在る家に生まれました。幼児、周辺は陸軍の街で休日には、街に多くの兵隊さんを見ました。騎兵も多く、大通りにその隊列を見に行った覚えがあります。現在、陸軍中野学校はよく知られていますが、当時はその存在自体が秘密だったのではないでしょうか。

敗戦後、米軍が使いました（日本陸軍占有地の跡地に駐屯）。小生の出身中学（中野区立第九中学校）はその地つづきで、塀はなく、雑木林で区切られ、米兵ら校庭にも遊びに来ました。‥‥園町の名は江戸時代の犬小屋の名残りであると聞きました。

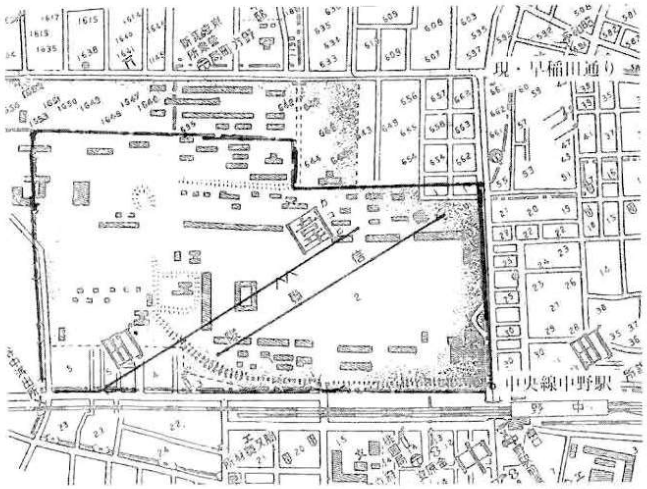
私の生家は中野駅から五分程歩いたところでした。ここは湯地一族の屋敷でした。初代当主は湯地定基でした。定基は薩摩藩士で若年時アメリカ・マサチューセッツに渡り、（当地の大学で）農学を学んでいたということです。帰国後、黒田清隆の下で北海道でジャガ芋、小麦の他、農産物の生産指導をし、根室県令などをつとめています。夕張辺に広大な農地を所有し、後に貴族院議員になっています。‥‥定基の妹・静子は乃木希典の妻です。

‥‥この土地は乃木が日露戦争後、宅地として入手し、後に義兄の定基に譲ったもののようです。小生の生まれた家は約四〇〇坪の敷地に、他に畳数五〇、便所三ケ所、客用、家族用、使用人用の建屋というものでしたが、当時、使用人などは居らず、両親は雑木、雑草の始末と税金に苦労していました。

以上、何かご参考になるでしょうか。

敬具

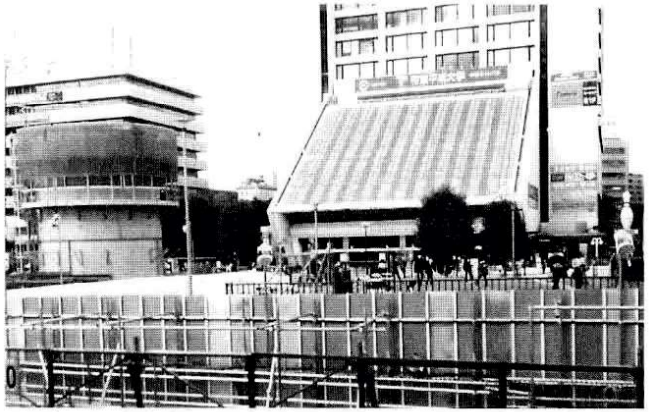
令和元年八月十七日



中野区詳細図の一部
1944（昭和19）年（現・中野４丁目、旧園町）

彼は中野駅北口前に生まれ育っただけに、この土地とその周辺の事情に驚くほど詳しい。さらに、彼が保存していた一九四一（昭和一六）年発行の「中野区詳細図」（復刻古地図）を郵送して頂き、その一部をカットし、ここに掲載する。しかし、この図面には「園町」の敷地に略称の「電信連隊」と記載されている。当然とはいえ、スパイ養成所の「陸軍中野学校」の記載がない。

この度、見通しの良い中野駅のプラットホームから北口を眺めると、西側には中野サンプラザ、中野市役所、さらに明治大学キャンパス、帝京平成大学中野キャンパスなどの高層ビルが見えた。北口前は高層ビルの建造中だった。七〇年以上も経過したとはいえ、このように大変貌した北口前の景観にはいささか驚いた。



中野駅北口　中野サンプラザ　工事中（手前）
2020（令和２）年12月６日

浦島太郎は助けた亀に連れられて出郷し、竜宮城の三〇年後に帰郷し、形見に貰った玉手箱を開け、白煙が立ち昇り、たちまち白髪の老人となった。私は子供の頃、敗戦後の中野駅北口の空地と焼け跡を思い出した。今、七〇年余年後に中野駅北口広場を眺望し、まだ白髪混じりだが、浦島太郎の説話以上にその一帯の地域景観の大変容にただただ驚嘆した。

「サブカルチャーの聖地」と昭和レトロ

アメリカ帰りの歯科医師の宮田慶三郎は東京コープ販売株式会社を設立し、旧乃木別邸の敷地や家屋を買収し、また賃借権を譲り受けた。その後、突貫工事で地上一〇階、地下三階の複合ビル（下層階と地階のショッピングセンターと、上層階の集合住宅（マンション）を建造した。六六（昭和四一）年、中野ブロードウェイを開業した。駅前にショッピングアーケードの中野北口美観商店街（現、中野サンモール商店街）が完成し、その続きに中野ブロードウェイ（ブロードウェイは「広い通路」の意味。以下ＮＢＷと称する）が建築された。ＮＢＷの店舗は、開業後しばらくは営業的に順調ではなかったよう

網とコンクリートの壁、警備のための監視塔と巡視路があった。さらに反抗的な抑留者を制裁するために、足を吊し上げ、腕をねじ上げて体罰を与える三本の「木の柱」を見た。

さらに博物館の説明では、抑留者に軍靴を履かせ、ただ長距離を歩かせた。それは兵士の長距離の行軍で、何キロ歩いたら軍靴がどの程度損傷するのか、それを測定する人体実験である。その他、抑留者にわざわざ素手で深い穴を掘らせ、そこに大きな石を埋めさせたあと、今度はその石を掘らせて穴を埋めさせるという意味のない単純作業を命じ、厳重に監視したという。

三　アウシュビッツ強制収容所で

私たちがアウシュビッツを訪問したのが、奇しくも同じ八月六日だった。四二余年前の四五年のこの日、広島の上空を飛行するB29爆撃機から「リトルボーイ」と称された一発の原子爆弾が投下された。一瞬にして死者数二〇万人以上の人命を奪い、被爆地・広島を地獄図に変え、瓦礫の山と化した。しかも被爆者は原爆による放射能後遺症に苦しみ、死亡した。六〇年代後半から一〇余年間、広島で過ごした私は、第二次世界大戦のドイツ占領地ポーランドのアウシュビッツ強制収容所の惨劇の舞台を訪問することは、かねてからの念願だった。



アウシュビッツ強制収容所入口

と指示したのであろう。しかし、収容所が解放され、ごく少数の抑留者だけが奇跡的に「自由」の身になった。抑留者は親衛隊員や監視兵のもとで長時間の肉体労働に耐え、粗末な食事で飢え、不潔な寝床で生活し、ただ過酷に「働く」ことを強要された。ナチスは占領地で無償かつ長時間の労働力を確保することを主要な目的とした。

元ポーランド軍の兵舎だけあって、赤レンガ造りで、整然と二列二八棟が目に付いた。すでに展示館として整備され、収容棟の各室には抑留者のトランク、メガネ、靴、義足・義肢、衣類、さらに女性の髪の毛（ドイツ・

堅牢な建物が並んでいた。三八年八月、独ソ不可侵条約が締結されたその翌月、ナチス・ドイツ軍はポーランドに侵攻し、ポーランド軍を撃破した。ポーランド南西部のオシフィエンチムの陸軍砲兵隊の兵舎を占拠し、ナチス強制収容所に転用した。その当初、ドイツ親衛隊はポーランド軍の捕虜、ナチス・ドイツを批判するポーランド国民を拘束したのであろう。

受付のインフォメーションで案内書を入手しようとしたら、受付の女性は私たち一行が日本人と見て、日本語の案内書を貸してくれた。それは英語からの訳書『アウシュビッツの悲劇』（K・スコーレン著）だった。訳者は広島で知己を得た広島大学政経学部で国際法を専攻する小谷鶴次教授だった。小谷教授は国際平和の観点から日本にアウシュビッツ強制収容所の惨劇を紹介し、それと同時に爆心地広島の悲劇も英文で紹介した。国際法研究者の信念は原子爆弾が投下された広島の惨事と、ナチス・ドイツが横暴を極めたアウシュビッツの悲劇が繋がっていたのであろう。

受付の建物から外に出て、中央出入口ゲートの鉄で張り巡らされたアーチを見上げた。ARBEIT MACHT FREI（働けば、自由になれる）というスローガンが貼り付けられていた。ナチスはこのゲートをくぐった抑留者に「働け」、死ぬまでただ従順に「働け」

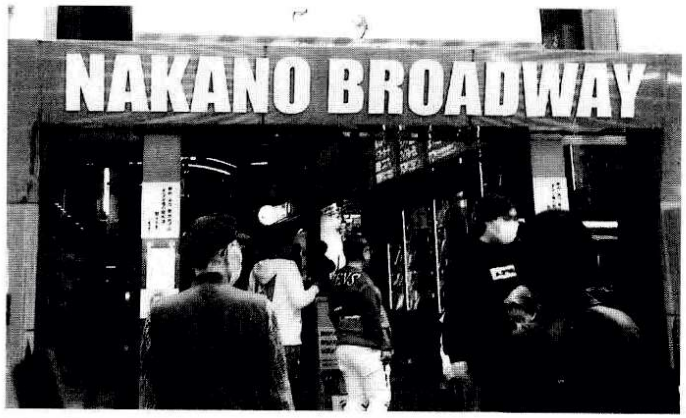
バビリアの工場に送られ、洋服の肩パットやカーペットに加工されたという）がそれぞれ分類され、乱雑に展示されていた。さすが、高級な金貨や宝石は展示されていなかったが、これらの展示物はすべてそれぞれの抑留者から身ぐるみ剥いだ証しだろう。さらに空気に触れると、有毒ガスが発生するチクロンBの空き缶が山積されていた。この展示物は抑留者を大量に殺戮するために使用されたことは明らかだ。

「死のブロック棟」と称された第一一号棟を見物した。ポーランドの聖職者コルベ神父は来日して長崎で伝道に努め、養護施設などを設立した。そのコルベ神父はポーランドに帰り、カトリック教を伝道した。その後、コルベ神父はアウシュビッツ強制収容所に拘束され、処刑者の身代わりになると申し出た。処刑者には妻と子供がいる。彼は「自分は独身だ」申し出た動機だった。彼は直ちに餓死を命じられ、餓死棟の窓を板で遮蔽され、暗闇の「死の地下室」で一心に祈りを捧げて餓死した。「アウシュビッツの聖者」と呼ばれた。

餓死棟と隣の第一一号棟との間に「死の壁」と称する処刑場があった。一一号棟に拘留された抑留者は目隠しされ、木製の部厚い壁の前に立たされた。親衛隊員数名が一列に並び、鉄砲を構えて一斉に射撃し、抑留者は射殺された。私は「死の壁」に打ち込まれた弾痕と、銃殺された人々のために供花が捧げられていたのを思うと何

だが、上層階には芸能プロダクションが部屋を所有し、人気絶頂の歌手・ジュリー（沢田研二）などの超有名な芸能人や当時の東京都知事の青島幸男などの著名人が住むマンションとして、雑誌や新聞で盛んに取り上げられたという。

NBWは漫画古書専門店の「まんだらけ」の開業、新たなオタク世代の嗜好に焦点をあて、業績を伸張させた。さらにアニメ、コミック、プラモデル、レコード、コンピュータ・ゲームなどのサブカルチャー全般を扱う店舗も開業した。NBWは秋葉原



中野ブロードウェー　やや右　「まんだらけ」のショーウィンドー
2020（令和2）年12月6日

とは異なるが、「サブカルチャーの聖地」として、また特定の趣味に熱中する若い世代のオタク文化の盛り場として繁盛した。

私はセンター内の通路を歩いた。NBWの通路はコロナウィルス禍にもかかわらず、通行人で賑わっていた。明石屋書店、高級時計や中古時計の店舗を覗こうと思ったが、先を急ぎ、早稲田通り（旧、昭和通り）に出て、中野新井薬師に通じる薬師あいロード商店街（新井薬師参道）を歩いた。確か、商店街の左側に長屋造りの店舗の二階が昭和亭という大衆演劇場があったが、今はその面影はまったくない。

さらに北へ歩くと、中野区唯一の銭湯の寿（ことぶき）湯があった。子供の頃、この大衆浴場で遊び仲間と一緒に入浴した。浴場の大きな壁には富士山を中心に山と樹木のペンキ画が描かれていた。今、「天然温泉　中野寿湯温泉」という看板がかかっていた。汲み上げていた井戸水を水質検査したところ、温泉の成分が検出され、改めて「天然温泉」の看板を掲げた。表看板は入浴客にアッピールするように新装されていたが、その外観のたたずまいから「昭和レトロ」の雰囲気を感じた。

我が生家の思い出

さらに薬師あいロード商店街を北に歩き、ふじや呉服店と坂本商店の間の横道を入り、私が生まれ育った生家

を見物した。その当時、生家は平屋の母屋と二階建て、その一階が倉庫、二階が小部屋（長男の兄が絵を描いていた）。他に薪で焚く檜の風呂場があった。北側には表門に並んで生け垣があり、南側には小さな庭と池、そこに掘った小さな防空壕があった。

秋になると、庭の黄橙色の柿の実をもぎ、皮を剥き、母が吊るした干し柿を良く食べた。砂糖菓子やチョコレートなどのない戦後で、甘い干し柿は美味く食べた。ところが、長兄は干し柿を勝手に持ち出し、友達と食べたらしい。それ以外にも、長兄の無頓着で、自分勝手な行動は止まず、いつも母の頭痛の種だった。

長兄は武蔵野美術学校に入学し（のちに、中退した）、無審査の第一回日本アンデパンダン展に絵画を出品した。家の路地の向いに住むおばあさんが『読売新聞』の記事を見たのであろう。子供の私に「展覧会に出品されて、おめでとう」と言われたが、何のことか、まったく分からなかった。

ところが、長兄は敗戦後の社会と思想の錯雑した混乱期に直面し、伝統的な家制度やそのような思考に疑念を抱いたらしい。一切の束縛を嫌って、自らの生き方を模索していたのであろう。父母は長兄を家の後継ぎと考え、厳しくしつけたが、長兄はますます反発した。父母は長兄の行動に手を焼き、いつも愚痴をこぼしていた。

我が家に回覧版が回ってきて、母から「保健所が消毒に来るから、表道路の集合場所に行け」と言われた。私は指定された時間に表道路で待っていた。保健所職員が来て、子供の頭の髪の毛、服を剥いで、皮膚にノミやシラミ用の殺虫剤ＤＤＴを噴霧器で白い粉を盛大に撒いていた。私は怖くなって、その場を逃げ出した。母にはそのことを内緒にした。

私が小学校四年生の時、父は中野区新井の敷地と家を売却し、杉並区荻窪に引っ越した。その理由は資金繰りがつかず、税金を滞納し、敷地を売却したのである。四八年一二月ＧＨＱは経済安定九原則を発表し、その第二項に「徴税計画を促進強化すること」と謳っている。要するに、重税を課し、徴税を徹底した。

私は小学校の午前組で、学校からの帰り、午後組の行き合う友達から、「引っ越すの？」と聞かれ、何を聞かれたのか、まったく理解出来なかった。急いで家に帰り、居間に行くと、タンスに赤紙が貼ってあった。「何て書いてあるの」と聞いたら、「開けるな」という答えだった。税務署がトラックを走らせ、タンス、布団、ちゃぶ台などを差し押さえた。父と署員が話し合い、持ち出したタンスなどを元に戻し、使用不可の赤紙を張って帰った。

今、新井の旧生家を見物した。そこには三階建ての鉄筋コンクリート製の賃貸アパートが建っていた。私はふと「幾年ふるさと　来てみれば」という唱歌『故郷の廃

家』の冒頭の一節、「遊びし友人　いまいずこ　さびしき故郷」を思い出し、何故かメランコリックな気分になった。

表道路の薬師あいロード商店街に出て、味噌樽に入れて、量り売りをする坂本商店でおすすめ品の味噌を買った。ふじや呉服店はシャッターを下ろしていた。隣の煎り豆屋で手製の煎り落花生を買った。「昭和レトロ」を堪能した。呉服店と煎り豆屋の裏に掘り井戸があった。夕方、そこで児童会の打合せ会でその井戸に集まり、子供同士で「井戸端会議」をした。すでに、井戸は埋められ、そこに通じる横道は閉鎖されていたので、見物することは出来なかった。

「昭和レトロ」を実感したが、シャッターを閉めた商店、木造の朽ちた家屋も見かけた。また毎朝のように、母に言われ、容器を持って近くの豆腐屋へ行き、朝食に豆腐入りの味噌汁を食べた記憶がある。今は、横町にあった豆腐屋はおそらく閉店したであろう。

芸者街の「隠れん坊」遊びと西部劇映画

薬師あいロードの東側と薬師柳通りの西側の間に、狭い路地に小さな平屋が密集していた。路地に入り、三味線の音を聞いたことがあるが、いつも静かで、よく遊び友達と「隠れん坊」をして遊んだ。鬼役が「もういいかい」と言うと、隠れ役は「まあだだよ」と言って、物陰に隠れて「もういいよ」と、大声で鬼ごっこをした。ところが、家の中から「うるさい」という男の野太い、ドスの利いた声がした。怖くなって、すぐ隠れん坊を止め、その場を一目散に逃げ出した。

江戸期以降、新井薬師は子育て薬師として庶民に信仰され、毎月八月の縁日は大変賑わった。参道前の南の柳通りの両街は待合茶屋、芸者屋、料理屋の三業地で、遊里に「薬師芸者」がいたという。戦災を免れ、昔風の建て込んだ芸者街が残った。芸者街の路地は近くの子供の「隠れん坊」には恰好の遊び場だった。

近くの映画館の焼け跡に、金髪でスマートに軍服を着た米兵がジープに乗ってやって来た。彼らはチョコレート、チューインガム、飴玉をジープに群がる子供に与えた。子供は「サンキュウ・ベリーマッチ」と覚えたての英語を叫んで、立ち去るジープに手を振っていた。そのことを母に話したら、母は「米兵からそんな物を貰うな。そこに干し柿があるから、食べな」と言われた。以後、米兵がジープに乗って来ても、私はただ離れて眺めていた。

戦災で焼失した「めばえ幼稚園」の跡地に映画館が開館した。アメリカの西部開拓時代を背景にしたアクション・ドラマが盛んに上映された。とくに目を見張ったシーンは、先住民のアメリカ・インディアンを駆逐し、「正義」のかっこいい白人のガンマンや騎兵隊の隊長が

広大な地域を占領した場面だった。大仰な髷物のチャンバラ映画と違い、拳銃の打ち合いや烈しい格闘の西部劇映画をわくわくして見たことを思い出した。

さらに薬師あいロードの終点の角を回り、新井薬師商店街を歩いた。小学生の頃、参道の入り口の角に窪寺伝古（愛称は窪伝）が経営する文房具屋があって、小学校の行き帰りに文房具を買った記憶がある。窪伝は東京府議会議員（のちに、都議会議長）となり、新井地区土地区画整理組合事業の組合長として、率先して道路（中野通り）を拡幅整備し、その歩道にソメイヨシノを植樹した。今、桜の大木が中野通りの中野駅北口辺りまで繋っていた。ほとんど落葉していたが、さぞや春のお花見シーズンは通行人や見物客を満喫させるであろう。

新井薬師と新井薬師公園を訪ねて

梅照院新井薬師の参道を進み、山門をくぐり、手水舎で手や口を清め、本堂の薬師如来を参拝し、社務所で「め　め」と印刷されたおまじないを頂戴した。眼病平癒のご利益があるとして、「治眼薬師」と呼ばれている。眼をショボショボした老婆がお祈りしながら、「地蔵尊」にせっせと柄杓で水をかけ、スポンジで眼のあたりをこすっていた。それをすると、眼が良くなると信仰されているのであろう。

戦争末期、新井薬師とその一帯は戦災で焼失した。戦後、仮設の木造の本堂が再建された。長兄たち若者グループは周囲の子供に呼びかけ、本堂の畳の上に机を並べ、補習のための学習塾を開いた。長兄から「お前も来い」と言われ、遊び半分に勉強したことがある。戦後の新井薬師の「寺小屋」は長くは続かなかった。

新井薬師公園では、三番目の兄が小遣いを貯めて買った布製のボロのグローブを借り、三塁を守り、草野球をして遊んだ。急に尿意を催し、泣きながら新井薬師の参道を走り、我が家に駆け込んだことがある。今、広い公園には、幼児が西側にある滑り台やブランコで声を上げて遊んでいた。東側にはグランドや水遊びのじゃぶじゃぶ池というプールがあった。今夏はコロナ禍のために、利用されなかったという。

夏の夜、小学校の郊外授業で、薬師公園で澄み渡った夜空を仰いだ。「あれが天の川だ、あそこが北斗七星だ、北極星だ」と教わり、満天の星に感激した。今、東京の郊外に住み、夜空を仰いでも、天の川や北斗七星は微かに見えるだけだ。満月を見ようとしても密集した二階建ての屋根が妨害し、歩行者に怪しげながら、歩き回って、やっと見ることが出来る。それにつけても、あの公園で満天の星を仰いだ記憶は今でも鮮明だ。

子供の頃、薬師公園の階段を下ると、窪地に瓢箪池という湧水池があり、その回りに雑草、水中に葦などの水草が伸び放題だった。その池で小さなダボハゼを釣って



新井薬師（新井山梅照院）奥・本堂
2020（令和２）年12月６日



新井薬師本堂

いた。若い太公望は「どうしたことか、よく針に細長いゴム風船が引っかかるんだ」と話してくれた。

見ると、ゴム風船が池の水面にぷかぷかと浮いていた。子供の私には、何故、池にゴム風船が浮いているのか、まったく分からなかった。

今、この池から、O一五七（大腸菌の一種）の病原菌が検出され、池に入るなという掲示板を見かけた。老齢の太公望が釣り竿を垂れていた。水は濁り、水面にアメンボを散見したが、魚影を見ることが出来なかった。ただ趣味としてフィッシングを楽しんでいるのであろうか。

中野区立新井小学校の思い出

新井薬師公園の瓢箪池を見物したあと、広い中野通りを歩き、中野区立新井小学校に着いた。新井小学校は上高田小学校と統合して令和小学校と命名し、校舎を解体し、新築するようだ。だが、敷地全体がシートで覆われ、工事中の内部を見物することが出来なかった。近くの喫茶店でコーヒーを飲みながら、しばし在校中の思い出に耽った。

新井小学校は戦災で焼失した。入学式は隣の学区の野方小学校で開かれた。今、入学式後に撮った集合写真を見ると、背景には銀杏の大木が写り、児童は皆よれよれの服を着て、下駄履きだった。今日のように、新品の制服を着、学帽を被る児童はいない。担任の先生は若い女

性だった。新井小学校は木造の仮校舎が急造された。授業は午前組と午後組の二部授業だった。三人がけの木製の椅子（ベンチ）に座り、机で勉強した。

焼け跡に残った材木とブリキ板の掘立小屋を見ながら、登下校した。教室では直立して教科書を開き、先生が「あかい　あかい　あさひ　あさひ」と読み、続けて児童が元気に唱和した記憶がある。体育の時間は校庭でドッチボールをして逃げまわった。カーキ色の国民服を着た若い先生は仮設の宿直室に寝泊まりして、広い校庭の一角にさつま芋やカボチャの苗を植えていた。

小学校の校外学習、上野動物園で写生会が行われた。何がきっかけでそうなったのか、記憶にないが、絵心のある長兄が同行した。私は馬だったか、羊だったか、長兄に描き終えた写生画を見せたら、「まあ、いいだろう」と言われた。その翌々日朝だったか、教室の後ろの壁に参加児童全員の動物の写生画が張り出されていた。

真横から見たはずの、私の動物の絵には眼が二つ描かれている。それを見た同じクラスの友達から、「あれ、眼が二つも見えたの」と言われ、陰でクスクスと笑われた。学校から帰り、長兄にそのことを話したら、「気にするな！」と言われた。私の写生画の一件はそれでお終いとなった。写生画の基本は写生だが、心に映じたことを描けというのが、兄の信念だったのであろう。

私は小学校の教室で人形劇に出演したことがある。戦後、人形劇団プークが再建され、子供とともに若い世代からも大いに歓迎された。長兄はプーク人形劇の影響を受けたようだが、早速、新井に住む親しい仲間とともに、アマチュアの人形劇グループを創り、公演した。長兄が「おまえも出ろ」と言われた。多分、終幕にでるメンバーが足りなかったのであろう。そこで、連日、家の柱に紐を渡し、人形を操り、台詞を吐く、長兄との特訓がはじまった。

新井小学校の教室で人形劇の公演が持ち上がった。演題も役柄も忘れた。その当日、私は終幕の舞台で懸命に人形を操り、台詞を吐き、舞台の幕の右側に退場した。ところが、長兄から小声で「あっちだ、あっちだ」と指示され、「ああ、そうだ」と、思わず大声を上げて、人形を操って、幕の反対側から退場した。観客席から一斉に笑い声が聞こえた。私は「しまった」と思い、内心穏やかではない。長兄は私の肩を叩いて、「よくやった」と言われ、ホットした。今でも、終幕直前の大失敗は記憶に残っている。

長兄との人形劇の付き合いは、さらに続く。長兄は中野駅北口に近い信濃寮（学生寮・長野県人会）の寮庭で公演をすることになった。長兄は小学生の私に開演の挨拶をしろと言うのだ。長兄から挨拶の仕方と文句を教わった。だが、私の頭髪はイガ栗のように伸び放題だった。学帽を被れば、何とかカモフラージュ出来たが、学

帽を脱ぎ、伸び放題の頭髪を気にしながら、何とか挨拶を終えた。何を、どのように話したのか忘れたが、あの時の恥ずかしかった気持ちは今でも記憶に新しい。

あとがき

私は『まんじ』前号（一五八号）で都市は「ふるさとか」と問い、たまたま文京区日白台に職を得た機会にタウンウォッチングをして、路上から周囲の公共施設、商業施設、家屋、商店などのコミュニティの景観に興味を覚えた。我が人生の「ふるさと」の一つとしてアイデンティティ（自己同一性）を自覚した。

急行列車に例えれば、「ふるさと」は列車がただ行き過ぎる「通過駅」にたいして、乗客が乗り降りする「停車駅」で下車し、駅前広場、道路、学校、図書館、公園、住宅や商店などの景観に「場所へのシンボリックな愛着」（ドイツの都市社会学者、レンツ・ローマイス）を実感すれば、そのコミュニティ（場所）を我が「ふるさと」としてアイデンティティを自覚されるであろう。

私は農村だけではなく、都市もまた「ふるさと」であると考える。人生の第一の「ふるさと」は急行列車が発車する始発駅とその周辺のコミュニティだろう。おそらく第二、第三の「ふるさと」を体験し、最後の終着駅、つまり終の棲家とその周辺のコミュニティが最後の「ふるさと」であろう。次稿以降、都市は「ふるさと」かと自問しながら、第一、第二、最後の「ふるさと」を回想したい。

二〇二〇年一二月一〇日　擱筆

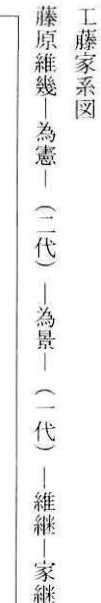
内田の国の怨霊信仰物語

横山正義

島根県の県中北部、日本海に面したところに江津市（ごうずし）があります。市名は江の川運搬の拠点から来します。北部は海岸砂丘、南部は丘陵地である。近世は流域の物品の集約地で廻船問屋、倉庫が立ち並んでいました。この地、江津市誌に江戸時代、内田氏子孫が「我々の先祖は工藤祐経だ」と語ったとあります。

工藤祐経の系図。天慶三年（九四〇）頃、藤原維幾の子為憲は遠江権介・木工助の職につく。工藤を名乗る。二代後、維景は駿河守を勤めた後、伊豆国狩野に永住し、狩野を名乗る。一代後、維継、狩野九郎と称す。この頃、柿木に城を築く。次の代、家継狩野四郎太夫と称す。後に久須美に移り伊東と名乗る。祐維、祐経と続きます。

工藤家系図



あだ討ちで有名な曽我兄弟の弟は曽我五郎時致（そがごろうときむね）と言います。なぜ兄が十郎で弟が五郎か。弟が怨霊を顕すためです。

名前の「時」は北条時政の烏帽子であったことに由来します。致（むね）は「ち」と読み、「ち」という字も「ち」と読み、致は霊を顕し、怨霊を示しているのです。内田氏の子孫は名前に「致」を通し字としています。

怨霊（おんりょう）は、恨みを持った霊魂で、御霊（ごりょう）は五郎に通ずるのです。内田氏の初代は四郎で、死を意味します。

私説ですが、内田氏は三郎、四郎、五郎、六郎など出てくるが、同一人物でも陽数、陰数で時により使い分けていたのではないだろうか。

内田氏領地は菊川市内田、東海道線菊川駅より南約六キロの地点にあります。

工藤祐経の怨霊が強ければ、強いほど内田氏にとって、霊験あらたかなのです。

内田武士団は各地に戦いを繰り広げています。戦いの前に、曽我五郎時致に殺された、工藤祐経、内田四郎の父・原三郎の憤懣やるかたなきを偲べば闘志がみなぎり、すなわち守護神であったのです。

掛川市原里には工藤祐経の妹の墓といわれる墓がありますが、江戸時代、山陰の地で、内田氏の子孫が「我々は工藤祐経の子孫であった」という事は原三郎の令室が、工藤祐経の息女であったことが考えられます。

祐親は祐隆の先妻との間の孫、祐継は祐隆の後妻の連れ子との間の子、祐隆の子が工藤祐経である。複雑の関係が怨念を生み、殺し合いにつながったのです。

祐隆は死期が近づくと先妻の従兄弟の子祐親に工藤祐経はまだ幼い、面倒をみてくれと懇願しました。祐親は快諾し、工藤祐経に自分の息女の万劫（まんごう）を嫁がせ、領地はかならず祐経の物とする約束をしました。

工藤祐経の父（祐隆）は四十三歳にて、重病となり、余命幾ばくもなく亡くなりました。祐継は安堵して死での道へと旅だったのでした。

工藤祐経は成長し、万劫を娶り、京で平家に都（みやこ）務めをしている間に、工藤祐経の領地愽美地区は河津祐親に盗られたうえ、娘の万劫を無理やり帰国させ、離縁し近隣の江間氏に嫁がせてしまいました。

もう一人泣かされたのが源頼朝でした。源頼朝は祐親の女（娘、万劫の姉妹）八重媛と恋仲になり、千鶴丸という頼朝にとって第一の男の子をもうけました。祐親は大番役で京都に行き伊豆の国留守中であったので、帰国し態度がかわり平家の怒りを恐れ、男の子を松川の上流に沈めて殺害しました。そして頼朝の殺害も計画しましたが、これは洩れ失敗に終わりました。

源頼朝、工藤祐経ともに工藤祐親に恨みを持っていました。この間、工藤祐経は京の平家務めは止めて、曽我兄弟の女親満江の父狩野宗茂（むねもち）の口聞きで、源氏源頼朝の配下となり、頼朝が京の知識をもつ、工藤祐経を重宝し、ナンバー2の地位となっていました。

恨みを持った工藤祐経は河津祐親の殺害を企てました。

伊豆奥野の巻狩り

安元二年（一一七六）十月十日過ぎ、工藤祐経の意を受けた大見小藤太、八幡三郎は伊東祐親をねらったが、誤って河津三郎祐通を射抜いてしまいました。祐通は曽我兄弟の父でした。

富士の巻狩り

源頼朝は建久三年（一一九二）征夷大将軍となる。鎌倉幕府の名実そなわる。

建久四年（一一九三）源頼朝の天下取りの証し富士の巻狩りが開催され、参加した武士、お付きの者はインドガンジス河の砂ほどの人数、参加したと言われています。

巻狩りの布陣北の門

外陣、左の列

遠江国（とうとうみのくに）の住人。原小次郎忠義、同じく小太郎、同じく三郎、堺小太郎、内田小四郎兄弟です。

原三郎だけが大人の武将で、その他は子供です。原三郎は曽我兄弟が工藤祐経を討った、直後に異変を察知し、先陣を切り、兄曽我十郎の肩を射抜きます。すかさず仁田四郎忠常が斬りかかり留めをさします。つづいて

原三郎は弟曽我五郎の十人切りの五番目に登場し、腰骨が割れるまで、切りつけられ、即死します。

なぜ、原三郎は富士から百キロほど西、掛川在の住人で、これまで戦ったか、工藤祐経の娘婿であったのではないだろうか。

曽我五郎時致は源頼朝の命を狙い頼朝の館に、切り込みます。しかし女装していた藤王丸に取り押さえられます。そして翌日、工藤祐経の嫡男犬房の命で筑紫仲太に殺されてしまいます。筑紫仲太は七日後に狂ったようにもだえ苦しみ死にました。

曽我五郎時致はなぜ北条四郎時政の娘婿源頼朝の命まで、狙ったのか。伊豆の国の狭い領主である、北条氏にとって天下をとる野望が見え隠れする事件であったのです。

源氏三代、初代源頼朝は謎の死を遂げ、二代目源頼朝の長子、北条時政の孫源頼家は北条氏によって殺害され、三代目同じく源頼朝次男、北条時政孫源実朝は甥によって殺害され、政治権力は北条氏に移っていきます。

掛川小笠郡誌より

源氏墳墓は原田村寺島元寺田にあり。（掛川駅から森町に行く途中約一〇キロ）曽我兄弟墓　原谷村本郷にあり。曽我五郎時致、長福寺門前。工藤祐経の妹女の墓。

誌によれば曽我十郎祐成の墓は宗塔庵の山上にあり、文字なし。とある。

内田氏が曽我物語の次に登場するのは「承久の乱」です。朝廷と鎌倉幕府との争乱。後鳥羽上皇と鎌倉幕府北条政子、北条義時の争いです。

承久三年（一二二一）五月十五日興る。内田氏は鎌倉

幕府に尽く。

北条義時いくさの詮議を始められました。海道の先陣は北条時房（北条時政の子）、伊藤左衛門尉大和守（伊東祐時）工藤祐経の子、大見左衛門（伊豆国田方郡大見庄出）、宇佐美左衛門（工藤祐経弟の祐茂の子）、内田五郎（工藤祐経の孫）。

内田五郎は曽我五郎に通じ、怨念を持っているという意味です。

五月三十日

内田四郎致茂（むねもち）は北条時政の命により、築井太郎高重の軍十九騎を殺害し、承久の乱の先陣をきる。

この戦いの勲功が北条義時により評価され、島根県浜田市、現在の島根県益田市横田、大分県木築市山香広瀬に領地を獲得しました。

貞応元年（一二二二）八月十七日

幕府、遠江国内田致茂を石見国貞松豊田地頭職に補任する。

陸奥守平朝臣（北条義時）

貞応元年（一二二一）九月十日

六波羅探題、遠江国内田致茂に石見国貞松・豊田地頭職補佐を施行する。

武蔵守（北条泰時）
相模守（北条時房）

その後、内田氏の武士団は連戦し、勝ち残っていきます。

島根県益田市誌より

益田市は島根県西端の市、高津川と益田川の沖積平野に市街地がひろがる。

市名は古来以来の郷名、真砂田（ますだ）による。

建武二年（一三三五）足利尊氏が兵を起こし反旗をひるがえすや、天下は再びみだれて諸国の武士が二つに分かれて戦乱が始まりました。

官軍奉持者であった内田致景は、官軍の将新田左馬助義氏の手に属し、延元元年（一三三六）三河の国にはいり吉良、八幡、本野原に戦い遠江国に入り、八月十二日袋井縄手の戦いにおいて敵将伊豆国田代了賢の若党中島行道の首を挙げ、続いて九月十三日篠原引間に戦い、天竜河畔において敵将仁木義高を倒し大いに剛勇振りを発揮し、一品宮宗良親王を遠江に迎えるという栄誉を荷なったといいます。

横田物語より（益田市内南部の町、横長の田があったことによる）

延元三年（一三三八）春奥州にあった北畠顕家は大軍を率いて東海道を西上し遠江に到着。内田致景は遠江にあって宗良、満良の両親王を奉じて顕家の軍に参加した。

内田致景が守る豊田城を延元四年（一三三九）十月十三日足利氏の派遣将軍上野頼兼の攻撃を真正面から受け、善戦のすえ退けました。

（同年一〇月日「吉川経明軍忠状」吉川家文書）

一年後、興国元年七月八日上野頼兼は芸、防、長三国の兵を集め、再び豊田城攻略します。しかし守りが堅く落城しませんでした。内田致景は死守したのです。

同年十月十五日上野頼兼は三度目の戦いで勝利し、内田致景は敗者となり、遠江内田の庄に帰ります。（同年四月七月日「内田熊若代藤原兼家軍忠状」思文閣古書目録）

内田氏致景は権利を主張し、四年後に再び豊田の地に帰ります。そして豊田姓を名乗ります。

享禄元年（一五二八）豊田常陸介宗勝は益田氏の家臣となり、城主を退きます。貞応元年初代内田致茂より三百年の歳月が流れていました。豊田家は毛利、益田氏など移転したが、豊田致景の一子豊田祥景（よしかげ）は願い出て横田に住み、名前を「有無」と改め、医師を代々勤めました。この家の九代目豊田平七致次は横田七ケ村の夫割り役を勤めてその後代々役を勤め、明治維新になりました。第十三代豊田才右衛門致厚は旧姓の内田姓にもどし内田才右衛門となのり戸長をつとめました。

内田才右衛門致厚豊田村二代目村長、郡会議員など勤める。現在令和の世、内田家は健在です。

内田氏家系図

致茂（むねもち）―致員―致親―〇―致景―致世―〇―
致中―致行―宗（致）焼―宗（致）祐―宗（致）勝―
尊致―安宗（致）―〇―〇―〇―祥致

＊静岡県菊川市、島根県益田市豊田
致茂―致義―致直―致康
＊島根県益田市俣賀
致茂―致重―?―致清―致時
＊大分県杵築市

現在、島根県浜田市では内田という地名ともに、周布氏と婚姻関係で、足跡を残し、島根県益田市豊田横田では後裔が内田氏として活躍、大分県杵築広瀬では工藤姓は多く、城跡は杵築農業高校となっています。

「参考文献」
江津市誌（上巻）昭和五十七年六月三十日発行
編纂者　江津市誌編纂委員会
発行社　江津市〒695島根県江津市江津町
一、五二五
横田物語　著者　益田市横田町　大庭美一
印刷所　白想社　益田市常磐町八―八
日本地名百科事典　㈱小学館
静岡県小笠郡誌
編纂兼発行者　静岡県小笠郡役所
益田市誌　編纂委員会　発行所　益田市
上巻昭和五十年十二月二十日　昭和五十三年六月三十日
承久記（新日本古典文学大系）43
益田　宗　久保田惇　岩波書店

島根県の地名（日本歴史地名体系）　発行人　下中　弘　発行所　平凡社
曽我物語の基層と風土　二本松康宏　三弥井書店
遠州御家人内田氏の歴史的考察（内田家文書と俣賀家文書を中心に）　大山喬平論文

以徳報徳

浅野博文

確かに、正義の主張者であることを忘れ、権力を弄ぶだけの小人は多い。しかし、道を枉げて大衆に迎合する様な不届き者に、政治家の資格はない。教育勅語を忘れた戦後の民主主義政治にはどうしてもその様な限界があるが、その限界を自覚した上で、道を枉げずして人心をつかむ努力が肝要である。

省みれば、今日もアメリカ大統領は、必ず就任時に左手を聖書の上にのせて宣誓する。我が国も古来より祭政一致が本来の姿であり、神事とは政事を意味してきた。真に国を憂える者とは、常に神の前に敬虔でなければならない。その上で、中庸とは古今東西を一貫するものと信ずる。

果して、江戸時代後半の二宮尊徳先生は、その意味に於いて大政治家と呼ぶに相応しい。特筆すべき各藩の財政再建事業とは正しく中庸の実践であった。それは、「誠

みずからは政治家でもなく、有権者として投票に行くことを唯一の政治参加としている大多数の一人に過ぎないが、政治家とは人間の世の中で最も難しい仕事であると思っている。当然ながら、それは知識人でなければならない。加えて、個人のみならず多数社会を利するために中庸であることが求められる。中庸とは、道を枉げずして人心に順うことであり、「まつりごと」の極意とは中庸であるとの認識である。

ある知人は、便宜主義や功利主義、官能主義も已むなしとし、「今さら古代ギリシアの君子政治や哲人政治が通用するはずがない。彼のニーチェも、既に神の死を宣言している。政治家は神様ではない。そもそも金と鞭と看板がなくて政治家は務まらない。それは自他共に認める三種の神器だ。」と言っていた。詮ずる所、Might is right（力は正義なり）という事である。

は天の道である。これを誠にするのは人の成すべき道である。これを誠にするとは私を去るを言うので、即ち已に克つということである。」との見識によって立つもので、先生は下野国桜町領を皮切りとして「以徳報徳」（徳を以て徳に報ゆ）の責任に於いて六百余村を復興し、報徳思想の種子を蒔かれた。

人は皆、おのれを虚しくすると、他人の長所を採って短所を構わなくなる。それこそ最大多数の最大公約数であり、中庸には不可欠である。そもそも、長所と短所は表裏一体、相離れられないものであるので、長所がよく理解出来れば、短所は自ずと霧消する。何より人間とは万物の霊長である。それは倫理的存在であることを意味してきた。人と人とが信じ合えるが故に人なのである。大切なのは短所という枝葉ではなく、長所という根幹である。

それは、個人の人生に於いても同様で、枝葉の些事に煩悶し、みずからを卑しむ、そして無いものねだりばかりして根幹を見失ったのでは、悲しみ苦しみばかりで、人生の幸福自体、本も子もない。

ある家の玄関で目にした以下の言葉が忘れられない。

いつも喜んでいなさい。
絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。

善因善果・悪因悪果が人生の鉄則であることは言うまでもない。仏教に於ける一切経が説く所も「諸悪莫作諸善奉行」（諸々の悪事をなさず、諸々の善行をなす）に集約される。おのれを虚しくして、他人の長所を採用して短所を等閑にすれば、「一芸は道に通ずる」のたとえにある如く、結果として善に傾く。善因善果は中庸が前提である。

顧みれば、我が国の建国神話に於いて　今上陛下の直接の祖先にあたられるニニギノミコトは、高天原から高千穂の峰に降られる（天孫降臨）際に、天照大神より天壌無窮の神勅と共に三種の神器（今日も皇位継承の儀式にて侍従が捧持する）を下賜せられたが、日本人であるならば周知である。

北畠親房公の『神皇正統記』には、三種の神器について、鏡を正直、玉を慈悲、剣を決断の表象と記されている。君主とは本来「知仁勇」を兼ね備えた存在である。我が国を代表する積善の家にして、日本人全体の象徴にして終始、中庸の御立場にあるのが　天皇家であらせられる。

知者不惑（知者は惑わず）仁者不憂（仁者は憂えず）勇者不懼（勇者は懼れず）。建国以来、日本国の重大なる危難（大化改新・建武中興・明治維新）に臨んでは、皇室みずから先頭に立ってこれに当たられ、御自身の苦難は少しもお厭いにならないのが前後一貫した御態度

である。そうであればこそ　皇統長く栄え、その国家二千年を経て隆盛であって、はるか天壌無窮の神勅にお答えしているのである。

各々の家系図を遡れば、必ず　皇室の分家や別家となる日本人が、本家である　皇室を範として中庸の見識に立てば、君民一致、祖国は再び興るに違いない。

道義の根本とは他人の悲しみがわかるという事であり、人は他人のために生きてこそ人である。真の愛も、また同時に真の嘆きも、おのれを虚しくする所に発し、その為に人を感動せしめねば止まぬ。

以下は、私自身の心に残り、私自身の戒めとなる他人の手記である。

墓場まで

子どものころから「何か」が変だった。人には簡単なことが全くできないし、話が理解できず、一生懸命に考えるうちに置いてきぼりになって泣きたくなる、その繰り返しだった。

母もおかしいと思ったらしく、中学生の時、精神科に連れて行かれた。恐怖心しか残っていない。医者は「同年代の子どもと遊べないのは異常」と言っ

た。以来、母は病院を受診させなかった。

結婚はできたが、何をやってもうまくいかなかった。自分の中で違和感がふつふつと沸き、土台にあるのは「自分は何一つできない馬鹿」との事実。このままじゃ夫や子どもに迷惑をかけ、自ら生きることを絶つんじゃないか、そんな気がしてきた。

夫にも子にも母にも内緒で「心のクリニック」へ行ってみた。医師は「よく頑張ってきましたね」と言い、検査を勧めた。私は知能指数が極めて低いことが分かった。医師は、療育手帳の交付を受けられますよ、と教えてくれた。夫も子も私がそうだと知らない。手帳は申請しなかった。

子は3人とも負けん気が強く、苦手なことも数度やれば習得できる。母親が知能遅れだと知って、彼らがスランプや悩みに直面した時、「母がそうだから自分が無理」とあきらめてほしくない。子どもや夫に恥ずかしい思いをさせたくない。日々コツコツ努力をしよう。

このことは墓場まで持って行くと誓っている。同じような思いの人が勇気を持つきっかけと、ペンを執りました。

札幌市南区
匿名希望　パート・43歳

出典は毎日新聞朝刊（２０１５・12・16）女の気持ち。

「男は度胸、女は愛嬌」という言葉があるが、その母親の子供に対する愛情が最も利己心の無いものであることを知る時、その女性は既に女傑であると思う（注一）

母への遺言・辞世

皇国三千年の歴史を考ふる時、小さな個人、或は一家のことなど問題ではありません。我々若人の力で神州の不滅を護り抜いた時、皇恩の広大は小さな一家の幸福をも決して見逃しにはしないと確信します。

もちろん、皇恩の余沢を期待される母上ではないと信じますが。

つまらぬことを書き連ねましたが、要は、私が、心から満足して立派に死んでいったことを知つて、母上から喜んでいただければよいのです。百枝（注・妹）や叔母上様方にもよろしくお伝え下さい。

くれぐれもお身体をたいせつに長生きされて、日本の隆々と栄ゆる御代の姿を見とどけてください。

では、さようなら。

昭和十九年十二月三十一日

母上様

辞世

すめら皇国は　大丈夫の　かなしき生命
つみかさね　まけのまにゝ　死にかはり
生きかはりつゝ、　栄ゆなり

海軍少佐　吹野　匡　命　二十六歳

出典は靖国神社発刊『英霊の言の葉』。

勇士たちの悪戦苦闘と犠牲にもかかわらず日本は敗戦国となりました。けれども戦いの勝ち負け如何にかかわらず、この人たちが国に対する義務に忠誠であり、そしてそのことに命を捨てた行為と犠牲の尊いことは変わるべきではありません。身を殺して仁をなす。仁の最も大なるものと言います。人を愛し人を救うために自分が死ぬということは最高の愛の行為です。戦死者は特定の人を救う為に死んだのではありませんが、日本国民という過去から未来に及ぶ同胞全体のために身を殺したものであって、その人々を殺させた同胞国民としてその人々とその行為を忘れてはすまないのです。

（慶應義塾頭・小泉信三）

戦争、病気、家庭不和、貧困など、人は社会に於いて、どうしても「理不尽な苦労」と対峙しなくてはならない。否、おのれ一代だけではなく、大本にまで遡れば応報因果の理はあるに違いないが、当人には理不尽としか映らないのが常である。「艱難汝を玉成す」の艱難とは、所謂「理不尽な苦労」を云うに違いない。世界を見渡せば、誠に此の世の中とは試練の場所であることが今更ながら分かる。

最も重要なことは、何一つ守り通すことなく、何も遺さず、ただ苦労の敗北者として終わってしまうことだ。それでは一体何の為の人生か。生命は天から授かるものだ。人が他人のために生きることをせず、ただ煩悶の中で独り虚しく死んでしまっては、まさに天祖の罪人である。この世に生を享けた意味がない。

そうであるが故に、中庸であることを忘れてはならない。理不尽な苦労に耐え、それを克服するための学びを続けなければならない。絶えず己の行動と学びを合致させ、「以徳報徳」（徳を以て徳に報ゆ）の一生でなければならない。

そして、その志が、自分の死によって消えてゆくことなく、子孫によって敬虔に継承せられてゆく。人生最大の喜びはここにあると確信する。（了）

注一　個人的見解として、歴史上の偉人の背後に女傑の存在は不可欠であった。古代の三韓征伐に代表される神功皇后の国防を皮切りに、足軽から天下人となった豊臣秀吉や明治維新の志士を生み出したのは、女傑（母・妻）であるとの見方も出来る。故に、戦後社会の価値観の著しい変化とは、女性のそれであるとも言い換えられるのではないか。

参考文献

『戦没学徒の心』
皇學館大学講演叢書　第八十輯

高山右近（九）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

基督教説明会をはじめる

高山右近が加賀金沢に来て六個月が過ぎようとしている。金沢城に登城するのは一カ月に数回であり、小姓の篠田伊織を伴っての城下チェックも、城の周りは全て終わったが、教会建築の場所は、「総合的な金沢城のあるべき姿を描いてから、その中でどこが良いかを決めよう」と言う前田利家の言葉もあり、右近たちが一日も早くと思う気持ちのようにはいかない。

右近は、この加賀が一向一揆を起こしたり、石山本願寺と共に、織田信長と十一年間も戦ってきた原因は何だろう、と考えてみた。今の金沢の領主前田利家は、一向宗を抑える織田軍の代表的武将の一人として、住民とはかなり過酷な戦をしてきた。しかし、領主になってすぐ神社・仏閣等への旧領安堵を始めとし、住民の安定した生活が成り立つような政事を行って、現状見るかぎりにおいては領内は安定し、領民も過去の戦いにこだわっている様子はない。

この状態の中で、右近はこの地での「キリシタン宣教」をどのようにして始めるかを考えたが、先ず最初に「十戒」と「七つの大罪」を事例をあげながら、人間が生きてゆくにあたっての神様からの教えであると分かりやすく、話すこととした。

場所は屋敷の横に、道路に面して二十坪くらいの空き地があるので、「教会ができるまでの仮建築」として、そこに平屋建てを建ててれば、聴衆は三十人くらいは収容できるであろうと考え、横山家老に伝えると、「いずれ教会を建てて宣教することだから」と了解と共に、大工の世話もしてくれた。

右近は、明日の初日を控えて前日夕方、小姓等武士、家族全員、お手伝い召使等、今右近の家にいる者全てを集めて、次のように話した。

「いよいよ明日からキリスト教の説明会を行う。皆によく言っておくが、一向宗や地元のお寺、地元の各種神社などと喧嘩しに来たのではない。お互い宗教は共存共栄でなければならない。相手をやっつけるのではない。キリスト教も、一向宗も、日蓮宗も、地元の神社も、お寺も、全て共存共栄でなければならない。バテレンの一部の人たちは宗教は自分たちキリスト教のみが正しくて、後は未開民族の邪教だ、と言う誤った考えに凝り固まっている。オルガンチーノ先生は既にこのことを理解してくれている。一向宗も、日蓮宗も、何とか神社もこの地域の人たちと苦楽を共にして、今迄お互いに信じ合って今日を迎えている。私たちキリスト教は、この土地で、その仲間入りをさせてもらうんだ。だからキリスト教の教えも聞いてください。わかってください。と言うのが明日からの活動だ。

キリスト教の説明を始めると、必ずと言っていいほど各宗教から宗論闘争を挑まれる。宗論をすればどっちがいいとか、優れているとかお互いに勝負をつけたくなる。これは厳禁する。冷静な立場での説明をお互いにすることは大歓迎だ。

だけど、質問のある人には、時間を気にしないでトコトン丁寧に説明するように。そのときは相手の氏名、住所、職業、年齢等も正確に把握してください。後日の追加説明もあると思うので。では、明日朝から宜しく頼みます」

と皆に話して明日の準備状態を見に行った。

既に新しい建物の入り口には次のような案内が掲示されていた。

「キリスト教の説明会をします。どなたもお気軽にお越しください」

開催日　毎月四日、十一日、十八日、二十五日
開始時刻　毎回　開始　未の刻　終了　申の刻
誰でも自由に参加できます。武士・領民・男女の区分一切ナシ
費用　一切無料
話し手　主に　高山右近

初日は前面の開き戸を全て開け、どこからでも内部が見えるようにして、家族・召使・小姓たちが時間前から建物の前に並んで、案内に立った。開始時間の羊の刻になったので、初日は右近が「十戒」を分かりやすい言葉で説明した。初日は前田家の武士が三人来て話を聞いてくれた。

右近が驚いたことに、うち一人は横山家老の嫡男康玄であった。終わった後、康玄は右近に丁寧に頭を下げて帰った。

また、右近は今日の話は辻説法とは違うので、説明資料を用意して参加者に渡すべきだったと大いに反省し、二回目からは、「十戒」を和紙に二十枚書いて参加者用の教本として用意し、更に座る場所に経机と墨と筆、自由に使用できる和紙も用意し、参加者に自由に使ってもらうようにした。

最初に来た武士三人は二回目も来て、新しく僧侶一人が来て終始黙って聞いていた。

右近が客将として登城するときは、講話は篠田伊織が行った。

やがて、半年、一年と経過するうちに、集まる武士も十人を超え、僧侶や領民の参加も十名近くなってきて、右近の家族、使用人等を入れると、座る席の空きも少なくなってきた。

右近　小田原征伐に参加

天正一八年（一五九〇）二月、関白秀吉による小田原征伐が始まろうとしていた。秀吉はこの戦には国中の全大名を集め、それにより　日本中に秀吉に従わない領主はいない、つまり秀吉が絶対的な天下人であることとなることを期していた。仙台の伊達、会津の上杉が、今回の小田原討伐に当たって秀吉に靡いてくるか、何か理由をつけて参戦しないかが、秀吉の知りたいところであった。他に、大物として徳川家康が、どのように動くかも、秀吉としては見定めたいところであった。

前田家としてもこの小田原征伐に家格並みに出兵しなければならず、地理的に北関東の北条方の城、上野松井田城（現群馬県碓氷郡）、武蔵鉢形城（現埼玉県大里郡）、八王子城（現東京都八王寺市）と順番に攻め落としながら、小田原城に向かうこととした。

右近は客将の立場として、前田利長から一千の兵を預かった。利長としては、右近から戦いの全貌を把握した上での効果的戦略、戦術の意見を聞くために、右近を前田軍主力とまではいかなくても、いつでも前田本隊と一体化できる立場に置きたかったが、利家の「以前関白様が言っておられたが、右近の一千の勢力は、他の一万に匹敵するだけの効果的戦略・戦術を発揮する」との言葉を利長に伝え、右近を常に本体との連携を考えた遊撃隊として活動させることとした。右近は自らの旗は九州征伐時と同じ十字架の旗を翻し、利長本隊と共に金沢から岐阜へ出て、碓氷峠を超えて上野松井田城を落とし、武蔵鉢形城、八王子城と次々攻め落とし、華々しい戦果を

挙げ、利家にも利長にも目を見張らせた。

しかし、右近の心中は複雑だった。客将の立場としては参戦することもやむを得ないが、自分の教会を持ってデウスに奉仕し、地域にキリスト教のことを伝え、その他、敷地内に建てた茶室で静かに茶の時間を過ごしながら、何れ出来上がる南蛮寺＝教会の運営をどのようにするかの考えを一つづつ纏めてゆきたかった。

しかし、利家は右近の前で口にこそ出さなかったが、この戦いで右近に手柄を挙げさせ、出来ることであれば、小田原陣中で秀吉の目通りを得て、追放処分の解除を得たいと考えていた。だから、この戦いでの右近の活動に大いに期待していた。右近もそのことは利家の片言隻句（へんげんせっく）からも感じていた。しかし、秀吉は右近の挙げた戦果も承知はしているが、この小田原の戦場では、右近の目通りは実現できなかった。

小田原では、北条氏内部の評定が長引いて、攻める方も一方的に動けず、参戦している領主たちの滞陣は長びいていた。右近の旧友蒲生氏郷や細川忠興などは、右近のところに来て、平素は食べられない牛肉に舌鼓を打つなど、右近は追放されている立場も忘れたかのように、久しぶりに愉快に過ごすことができた。

一方、右近の身を案じて、北国で冷遇されているか、または既に殺されてしまったのではないかと不安の塊になっていた宣教師たちは、右近の挙げた戦果と、小田原の陣で旧友である蒲生氏郷や細川忠興などと牛肉を食べて楽しんでいる、とのうわさを耳にして、「流石はキリシタンの大旦那。遠からず再びどこかの領主に返り咲いて、キリシタン伝道の大きな力になることは間違いない」と喜びに沸いていた。

右近の加賀金沢行きが、宣教師たちにとってはあまりにも唐突で、加えて右近から加賀行きについて何の連絡もなかったことから、一時期消息不明になっていた右近との連絡が復活できたことも大きな喜びであった。

この小田原攻めを契機として、前田家内での右近の信任は高まり、客将としての立場が、前田家内部では筆頭家老の立場にもなっていた。右近が知ったのは、前田家家老協議内容の決定事項記名押印順序が、いつの間にか家老最右端の筆頭家老の位置になっていたことからであった。記名押印する前に知ったので。傍らにいる青木家老に

「記名順序が違う」

と言って記名する前に綴じこまれている綴りを持って行くと、青木家老は

「これは大殿と利長様がお決めになられたことで、身ど

もに言われても・・・」

としか返事はない。このまま利家のところに持って行くのも大人げないことでもあり、機会を見て次回から再び家老連名欄外の「客将」の立場に戻してもらおうと、そのまま押印した。

このことは、客観的にみれば、前田家内での右近に対する評価・人望と期待が高まった事を示している。それは前田家内でのことであり、自分としては現在関白秀吉からキリシタンを棄教しないことから追放を受けている、いわば「咎人（とがにん）」の立場としては受けるわけにはいかない。次回、利家に会ったとき直接話すこととした。

右近　京都駐在を兼ねる

翌日朝、右近のところに利家からの使いが来て、

「明後日。巳の刻に登城されたい。趣旨はこれに」

と、利家からのメモ書きを渡された。それには利家・利長・横山家老・高山客将の四人での話し合いとしか書かれていない。巳の刻に登城すると、いつもの奥の利家の個室に通された。既に横山家老は座についており、待つ間でもなく利家と利長が入ってきた。利家は大きな座布団の上に胡坐をかいて、茶を一服旨そうに口にしてから

「二人とも朝からご苦労。今の関白秀吉様は唯一の天下人として、戦もなく静かな時が流れている。関白様は非常に心配症と言うか、下のものが力をつけると、その力を使い果たさせようとする。今、人々の話題に上っている朝鮮征伐がそれだ。率直に言って朝鮮征伐も織田信長様が描かれた夢とは違う。例え朝鮮で戦果を挙げても戦果に対して配分できる土地はない。関白様の蔵にある黄金を配るわけにもいかない。出兵した者が、部下の命とかかった費用を負担して終わり、と言うことになる。どこの領主にも朝鮮に自費で出兵させて、有り金を使い果たさせようというものだ。簡単に言うと、どこの領主も関白様に反乱などとてもできない財政力に落とすことだ。このことはここだけで禁句だよ」

怪訝な顔をして領く二人をチラッと見て

「おそらく二年以内に始めるであろう。先ずは肥前名護屋に前線の城を築城する。城ができたときが朝鮮への第一陣の出発となる。一陣は子飼いの小西行長・加藤清正あたりになるであろう。二人とも九州肥後だ。その間、関白様は、ご自分の死後も、豊臣家が天下人として安泰に存在するためにはどうあるべきかを、永久に豊臣家に忠誠を尽くす領主連合でも作りたいのではないかな」

「利家に京に駐在せよと言うのは、領主連合の元締めになって欲しい、ということであろう。とてもそのようなものは今すぐにはできるはずはない。どう出てくるか全くわからないのが徳川家康だ。最初から反対側の首領として出てくるかもわからない」

「まあ、そこで高山には、この利家と二人二脚になって、前田家の外交に従事して欲しい、と言うことだ。茶会を開催したり、たまには牛肉を食べる会を開催したり、当面は高山の仲良し仲間を作ることでもよかろう。その仲間には是非、利長を入れてもらいたい」

「前田家の京都屋敷に駐在してもらって、必要な軍資金は必要なだけ遠慮なく使っていいから。京都行きは先ずは一緒に行く。今、直ぐ何をすべきかなどは考えないで、京都にいて動くべき情報があった時に動けばよろしい。この件については、これからちょくちょくこの四人で相談をするので宜しく」

右近が

「大殿、一つだけどうすればよいかお教えください」

と言うと、利家は

「何かあるのか」

「大殿もご存知の、右近が関白秀吉様からの追放になっているままで加賀金沢に行けるのか、と言う疑問を解消しようと、時の秀長様がお知恵を出され「高山右近一家を畿内追放処分」とすれば、畿内以外はどこに行ってもよいことになるから、と言うことになりました。と言うことは右近は現在京都に入れないことになっていますが」

の右近の質問に、利家は

「豊臣家のためにこの利家が京都に駐在することを命ぜられ、その駐在目的を遂行するために利家が右近を身近の京都に在京させる、このことについては誰も異論はないはず、心配することはない」

と言い切った。

高山右近に「教皇祝福書簡」が贈られる

「この頃羅馬（ローマ）バチカンでは、カトリックの世界で、類のない、時のローマ教皇が、一カトリック教徒に「教皇祝福書簡」を出すという動きが起きていて、それは、日本国内の大名高山右近が、城主の身分・地位等一切を剥奪されても、益々熱心にイエズス会の日本宣教の杖にも柱にもなっている活動への、ローマ教皇の「祝福書簡」である。」（以上六行著者注記）

バチカンの羅馬（ローマ）教皇は、一五九〇年（天正一八年）、イエズス会からの高山右近に関するローマ教皇宛の報告で、秀吉からのキリシタン棄教命令に対し、潔く大名を棄てて信仰を選んで、日本においてイエズス会の宣教の杖とも柱ともなっている高山右近に対し、教皇シスト五世から「教皇祝福」書簡が贈られた。（注　①）

愛子なる貴候ユスト右近殿あて

（教皇シスト五世）

わが愛子なる卿に、予の挨拶と教皇祝福を贈る

敬虔なるキリスト者は、潔く顕職を棄て、勇敢にこの世の富を蔑み、苦しみを主のたまものと甘受し、もって成聖の道を全うするが常なり。卿はいみじくもその模範を示し、追放の刑も厭わず、すべての富を失いて、しかも毅然と耐えしのべり。更に卿は、義のためにこそ忍ぶ苦難と困窮のうちにカトリック者の信・望・愛の徳が完成せられ、かつキリスト教が信者の死の軽視と殉教によりて、いよいよ栄え、ますます弘められるべきことの模範を、身を賭してしめせり。

主の御栄のため、かつは卿とその国民の救いのため、忠誠にして卓越せるキリスト者は、天国のむくいを予期せるものたるを、身をもって立証し、世の模範となせり、予は特にこれを喜ぶものなり。しかして予は、この故に卿に対し、熱烈な讃辞を呈し、教皇祝福を送らんとす。

卿は主のみ言葉のごとく、正義のため迫害を忍べる者が、天国にて至福を与えられるべきことを知れり。また卿はキリストに倣いて、みずから十字架をになえる者は茨の冠を被せられたる頭の下で、肢体も共に苦しまざるを得ぬがごとく、主の御後に従うべきことを熟知しおれり。予は、卿が今までのごとく、将来にもこの確信を止め置かれんことを期待するものなり。

予は卿に勧告せず、そは、卿が既に充ち満てる熱意に燃え居るが故なり。予が、ここに言わんとするは、卿に対するよりは、むしろ他の人びとのためなり。卿が既にこれを知悉し居るは卿の生活がこれを実証し居れり。すなわち、天国の富は卿の損失せる地上の富にはるかに勝れるものにて、卿は確子たる信念の盾と熱烈なる愛徳の剣とをもって飽くまで天国の富を獲得せらるるに相違なきこと、これなり。

紀元一五九〇年四月二十四日　予の教皇在職第五年

羅馬、聖ペトロ聖堂の傍らにて

漁夫の指輪（注　②）を捺印してこれを与う

教皇シスト五世は、その年の夏八月二十七日の晩に他界した。高山右近に宛てた彼の書簡がいつ日本に届いたかわからない。何らかの事故で届いていなかったと思われる。もし、普通の送路ならば、おそらく二年後、一五九二年に右近の手に入ったと思われる。彼にとって、キリストの代理者から受けたメッセージはどんなに大きな慰めとなり力となったであろう。

右近の父ダリヨはいつか、生存中どのようなことを最も望んでいるのか、と尋ねられた時、罪を犯さず慈善事業を存分に行えることなどの他、一度ローマまで行って、教会の頭なる教皇に会いたい、と答えたそうである。高山父子には、ローマまでの巡礼はかなえられなかったが、教皇からの親書が作成されていたことを知れば、右近は

勿論、一家の者にとって生活の一大事であったに違いない。

あいにく、原書は残っていない。ヴァチカンの記録所には、当時の教皇秘書官 Marcellus Barbianus の手になる控えだけが見られる。一九四九年にイエズス会史料編纂所のシュッテ神父がそれを発見し、故村上直次郎博士が原文と邦訳を『私学雑誌』二十九巻五号に発表した上にあげた名訳が、それである。

注　①　以上、教皇書簡とその後の説明は、正確さと理解の正しさを追求する観点あら、H チースリク著「高山右近史話」二百九十三頁十四行目から二百九十六頁迄を引用させていただきました。（ただし二九五頁十行目以降では、本文の趣旨を壊さない範囲内で鍋屋が加筆しました）

注　②　漁師の指輪　漁師の指輪とはローマ教皇の指輪また印章として利用され、ローマ教皇の象徴ともなっている。キリスト教カトリック教会の長であり、漁師であった初代教皇ペテロの後継者であると言う意味を有すものとなっている。（出典　ウィキペディア）

著者注

この教皇書簡は、作成されたのは事実と思います。当時の船便は、おそらくローマからインドまでは年何回か出されていたと思いますが、それから長崎と言うことになると、中国沿岸を経由しながら長崎に向かったと思うので、丁度いい船便があればよいが、船便を探し探して長崎に来ると、一年くらいは必要としたと思います。それと船の事故や海賊の襲撃もあります。教皇書簡が日本についていれば、日本国内のイエズス会が記録的にも大騒ぎをすることは必定と思います。そのような記録が全くない、と言うことは在日イエズス会員は、この教皇書簡が発行されたことも全く知らなかったのではないかと思います。

秀吉　帰朝した天正少年使節団を謁見

天正十年（一五八二）二月二十日に日本を出発した天正少年使節団は、天正十八年（一五九〇）六月二十日、約九年の歳月を経て長崎に帰朝しました。帰朝時は、秀吉のバテレン国外追放令が実行には移されなくても生きている時であったので、ヴァリニャーノは以前のバテレンの資格ではなく「インド副王使節」を名乗り、小田原滞陣中の秀吉に謁見を申し込んだ。秀吉も約九年間も遣欧使節として欧州に行っていた少年たちの話も聞きた

かったので、目下小田原陣中であり、いずれ京都で会おうと返事をした。

粘っていた小田原北条氏も七月に秀吉に降ったので、秀吉は九月には京都に戻った。

少年使節団が翌年一月に秀吉に謁見するまで紆余曲折はあったが、右近と父ダリヨは一月にヴァリニャーノと少年使節団が京都に来ることを聞き、居ても立ってもおられず加賀から雪の中を京都に向かった。オルガンチーノは二人を手元に留め、ヴァリニャーノと少年使節団が秀吉に謁見できるための諸準備を整え、またそのための右近の意見を求めて実行していた。

聚楽第でのヴァリニャーノと少年使節団の秀吉との謁見は大成功に終わった。秀吉は少年使節たちの持ち帰った各種洋楽器を見てその場で演奏を聞き、日本では奏でられない素晴らしい音色と響きに感嘆、その他珍しい品々を土産に貰ったり見たりして、少年使節たちの土産話を上機嫌で聴いていた。

この謁見には、秀吉が在阪・在京の諸侯に同席するように声をかけていたので、二十五人の諸侯が集まって、その中に前田利長もいた。ヴァリニャーノは翌日から二日間を使って、これら諸侯の所にお礼参りを行った結果、諸侯からも答礼が行われていた。

前田利家の嫡子利長はヴァリニャーノに答礼を澄ませてから、オルガンチーノと高山右近に対して

「日頃からキリシタンであられる高山右近殿に接し、そのお人柄、人格に大変敬意を持っている。自分も少しでもそのようになりたいので、この機会に自分も洗礼を受けたい」

との申し出があった。これに対し、オルガンチーノも右近も

「今回の謁見は関白様も大変お喜びのご様子でしたが、利長様は前田家の御嫡子でいらっしゃいますから、洗礼の儀は今しばらく様子を見られたら如何でしょうか。右近はまだ関白様から追放処分を受けている身で、キリシタンについて関白様から今後更にどのようなご沙汰が有るか分からないこともありますので。」

と丁重に情勢を話してお引き取り願った。

ヴァリニャーノと少年使節たちは、京都・大阪に約一か月滞在し、京阪の主な教会からの挨拶・相談も受けて長崎に戻った。

今回の謁見では、秀吉が「インド副王使節　ヴァリニャーノ」に対して行動の自由を保証したこともあって、京阪の個別教会はそれを従来のバテレンと共に教会活動の活性化につなげる動きが出てきたが、右近は「それは時期尚早」とアドヴァイスし、右近自身は自らの追放処分解除は近いと読んでいたので、自らの追放処分解除が、個別教会活性化開始の時期と考えていた。

右近　追放解除

天正二十年（一五九二）正月、関白秀吉は朝鮮戦役に自ら肥前名護屋に赴くこととし、秀吉から九州出発前に右近に会いたいという話が出たと秀吉側近から伝えられたので、急いで大阪城に行ったが、九州で会おう、と言うことであったので、右近も前田家の武将として、前田家の三千の軍勢と一緒に加賀から肥前名護屋に向かった。

右近が肥前名護屋に着て二ヶ月経過しようとする頃秀吉から呼び出しがあり秀吉に謁見、漸く追放処分の解除を得た。福岡での追放から五年、秀吉は右近をいたわるように優しく声をかけ、二日後の秀吉主催の茶会に誘った。秀吉の茶会は身分あるものに限定されていたので、この誘いにより、追放解除と共に、関白の茶席に諸侯と並んで参加できる資格を与えられたと右近も周りのものも理解した。その直後に前田利家が肥前名護屋で関白を招いての茶会を催し、右近も参加した。

この追放解除により、右近は今まで常に「追放処分を受けている我が身」と言う思いから逃れられなかったが、公然と自由に行動できる身になったことを感謝している。しかし公の場では言えないが、関白の許での、自由に信仰に生きられない立場は望んでいない。オルガンチーノ宛の手紙では、このような右近の赤裸々な心中を伝えていた。

蒲生氏郷

天正十八年（一五九一）八月の小田原討伐後の転封により、奥州日付を兼ねて、功労として会津四十二万石（後更に加増により九十一万石となる）を与えられた蒲生氏郷は、文禄元年（一五九二）肥前名護屋城に出仕後一旦会津に戻ったが、健康を害し、養生のため名医のいる京都に文禄三年（一五九四）上洛した。

肥前名護屋に行っていた右近は加賀に戻っていたが、蒲生氏郷が病の中を上京したと言う知らせを聞き、雪道が何とか人馬が通れるようになると、直ちに加賀から都へ出かけた。右近が気になることは、蒲生氏郷の病状は勿論であるが、彼の洗礼を受けた後の信仰であった。会津四十二万石に転封したころは、秀吉の右近追放事件にも拘らず「会津をキリシタンの国にする」などと張り切っていた。会津では領民にも改宗を進め、領内には教会を建て、猪苗代にはセミナリヨ（神学校）の建設も行っていた。しかし、健康の悪化には勝てず、彼自身の信仰も弱っているという情報も耳にしていた。従って右近は蒲生氏郷に会ってその辺をたしかめ、信仰面で確認と激励をしたかった。

右近が京都の会津屋敷に入ってゆくと、屋敷奥で押し問答をするような声がしたが、やがて奥向きの召使が出

てきて、礼儀正しく「失礼ではありますが、殿様のご寝所にご案内いたします」と言って案内してくれた。先ほどの奥から聞こえた問答は、「右近であればこの寝所に案内せよ」と言う氏郷の声だったのだと思いながら奥座敷に入って行った。

氏郷は入ってくる右近を見て、布団の上に胡坐をかこうとしていた。それを見た右近は氏郷の所に行き「そのままの姿勢で横になっているように」と氏郷を布団の上に横向きに寝かせ、右近は氏郷の顔の正面に座った。

先ず喜ばしい話をして、その後、氏郷を信仰面で励まそうと思い

「蒲生殿、いろいろとご心配をおかけしましたが、関白様の身どもに対する追放処分は、過日、肥前名護屋で関白様からお許しを頂き、その後、関白様の茶会にも在名護屋の諸侯と共に出席を赦されました」

右近がここまで言うと、氏郷は頭を少し上げて

「高山殿、誠か！　よかったなぁ。茶席にもか！　よかった！」

と病人とは思えない声を張り上げ、右近の顔を見つめて喜んでくれた。少し上げていた頭を枕に戻し、再び

「良かったな、よかったな！」

と言った後、声を落として

「高山殿、この体では朝鮮まで行くことはできない」

「蒲生殿、朝鮮はともかく、そんな弱気では駄目だ。全てをデウスにお願いして、元気を取り戻そう」

「俺は長くはないと思うけど。ここだけの話、遠からずやってくる関白の次の時代をどう生きるか。前田殿も考えて居られると思うが、高山殿も前田家の一員としてよく考えられよ」

右近は都から遠い会津にいる病中の氏郷の、常に先を読んでいる怜悧な頭脳と神経に驚いた。しかし、言葉の端端から、キリシタンとしての信仰が弱っていることも感じ取り、氏郷の今現在の体調をおもんばかりながら、半刻程信仰の話と励ましを行って、再会を約して京都会津屋敷を辞去して加賀に戻った。その後、加賀に聞こえてきたことは、関白秀吉が氏郷の病を知り、京都の会津屋敷に名医曲直瀬道三を派遣して見舞ったと伝えられてきた。

右近は文禄四年（一五九五）一月、氏郷の病を心配して雪の中を加賀から都へ向かった。一月末に京都会津屋敷を訊ねると、氏郷は右近が来たと言うので、布団の中に脇息を入れその上から薄手の布団をかけ、脇息にもたれて右近を迎えた。布団の周りには、沢山の炭火を入れた大きな火鉢をいくつか置いて部屋を暖めている。右近が信仰の話をして励ますと、氏郷は「」の罪を口にして、彼の口から神父への告解的な言葉が聞かれた。右近は氏郷が信仰に戻ったことを悟り、これ以上氏郷を疲れさせるようなことはよくないと判断し、この日は氏郷にも聞

こえるようにデウスへの感謝の祈りを祈って、会津屋敷を出た。

右近は前田家の京都屋敷を足場に使っていたが、氏郷の病状が気になって仕方がないので、その後毎日のように会津屋敷に氏郷を見舞い、変わりがなければ顔を見て「じゃ、また」程度で帰っていた。二月七日、何時ものように右近が氏郷の枕元に座ると、氏郷のやせ細った腕が右近の膝の所に伸びてきて、口元を見ると何か言っている様子だが、聞き取れない。右近の反対側に座っている夫人に会釈して、右近は布団の上で氏郷を抱き上げることのできる場所まで行ってそこに座り、氏郷を右近の膝の上に抱き上げ、氏郷の耳に口を添えてパライソ（注③）の話をすると軽く頷くので、周りの家族にも聞こえるように少し声を出して

「デウス様がパライソで出迎えてくれるから心配するな。家族のことも全てデウス様が守ってくれる」

と言うと、氏郷は周りの家族にもはっきりわかるくらいに大きく頷き、少し首を挙げて夫人と右近に挨拶するように目を開くと、それを最後に右近の腕に抱かれたまま召天した。

注　③　パライソはキリシタン用語で「天国」のこと。

それから五日くらい経った午後、明日は加賀に戻ろうと思いながら、前田家の京都屋敷前田利家自慢の庭園を眺めながら、蒲生氏郷の洗礼に至るまでのことを思っていた。

右近は信長・秀吉傘下で、信長の二女を娶っている蒲生氏郷を始め黒田官兵衛、細川忠興、その他多くの武将に、また、千利休傘下の茶人に、キリシタンのことを話して信仰を勧めた。その結果の反応は十人十色であり、聴いた言葉が、その人の頭の中で全く予想もしていない日に、突然か、または何らかの関係する言葉を聞いたときか、頭の中で閃き、右近の言った言葉がその人の頭の中で何度も再現され、頭の中に浮かぶ都度その言葉の意味するところを改めて意識しないうちに、考える？思い続ける？の繰り返しの中で、いつの日か信仰を得るまで膨らんで、洗礼にたどり着く。一度も閃めかない人も沢山いる。洗礼を受ける人は、みんな、それぞれの、その人なりの道を通ってくる。洗礼に到達するまでのその人の道程は、人の知恵や思いでは推し量れない。全てデウス様のお計らいである。

だから、こちらから一旦キリシタン信仰のことを話した人には、機会ある毎に話し続けることが必要だ。いつ、どのようなときに、その人の頭の中に閃きが起こるかは、我々にはわからない。いつの日の話が閃きの動機づけになるかはわからない。一回でも話した人には、機会ある

毎に話し続けなければならない。話し続けることが絶対に必要である。拒否されない限り。これがキリシタン宣教者の鉄則と信じ、加賀での伝道に当たって、信徒全員が諦めることなく、この鉄則を着実に行っていかなければならないことだ。

父　高山飛騨守ダリヨ没す

こんなことを考えていると、玄関の方から慌ただしい人声が聞こえる。何かと思って玄関の方に歩いて行くと、ダリヨの北ノ庄時代から付け人となっている浅香与平が血相変えて飛び込んできて

「殿様、つい先ほどダリヨ様が倒れられました」

と言って、廊下に座り込んでしまった。右近は驚いて

「父が倒れたって？」

と聞き返すと

「今朝までは朝食も美味しいと言われ、いつも通りお召し上がりになられましたが、つい先ほどお部屋にご様子を見に行きましたら、畳の上にお倒れになっておられ、私が見たところ、呼吸はありませんでした。直ぐかかりつけの医師を呼びに行かせ、私は殿の所に駆けつけた次第です」

「そうか、良し分かった。直ぐ行くから先に帰っておれ」

と指示して出かける準備に入ったが、右近の頭の中は、幼い時からの父と自分の、二人だけの場面が、次々と浮かんでは消えていった。

（続く）

参考文献

完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
茶の湯の心で聖書を読めば　高橋敏夫　フォレストブックス
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房

加賀百万石異聞　高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史　渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡　小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編

安芸門徒シルクロード紀行（10）

村上邦治

五世紀の始め梵語・漢語二か国語に堪能、しかも大乗・上座両部を修得した鳩摩羅什（亀茲国）が、後秦皇帝姚興から国家事業とする全面支援を受け三十五部三百巻という多くの経典を訳出した。しかも流麗かつ達意な意訳と言われ、中国人にとって理解が容易であり布教拡大に大きく貢献した。

その後も羅什を加え四大翻訳家された六世紀梁武帝に迎えられた真諦（八十部三百余巻）、七世紀玄奘（七十五部千三百余巻）、八世紀玄宗に灌頂を授けた印度密教僧不空（密教経典百十部百四十余巻）らが幾多の経典を訳出した。特に太宗の厚い援助により二十年間にわたり数多く訳出した玄奘は原典に忠実で正確といわれる厳密な漢訳を心掛け、以後の訳者は玄奘の訳語を採用した。ちなみに羅什以前を古訳・以後を旧訳、玄奘以降を新訳という。

日本仏教界はこれまで中国から将来した経典を、何一つ疑わず信じ込んできた。しかし漢訳者によって、微妙にあるいは基本的に相違した箇所があることに気付き始めた。

紀元前五世紀仏陀入滅後仏教は全印度に広まる。紀元前後には新しく大乗仏教が興り、これが中央アジアシルクロードを東漸して一世紀中頃中国にもたらされた。初めは西域出身の布教僧により梵語で書かれた法典（原典）を、中国語や漢字に精通しないまま翻訳（訳経）されたものも使われた。一世紀印度僧の迦葉摩騰・竺法蘭、二世紀安世高（安息）・支婁迦讖（月氏）、三世紀支謙（月氏）・竺法護（敦煌）らの訳経である。

これらの僧以外にも六世紀浄土教の先駆けを担った曇鸞の師菩提流支、八世紀戒律を中心に六十八部二百九十巻を翻訳した義浄（『南海寄帰内法伝』著者）など、多くの訳僧が中国仏教の盛行を支えた。

後世に大きな影響を及ぼした鳩摩羅什と玄奘が共に訳した『阿弥陀経』は、羅什訳が流暢で読みやすく現在でも読経され、原典に忠実な玄奘訳は使用されていない。

ちなみに今日浄土真宗正衣の経典「浄土三部経」は次の訳僧による。

『仏説無量寿経』　曹魏（二五二）天竺三蔵康僧鎧訳
『仏説観無量寿経』　宋元嘉中（四二四―五三）
　畺良耶舎（きょうりょうやしゃ）訳
『仏説阿弥陀経』　姚秦三蔵法師鳩摩羅什奉詔訳

この三人はいずれも西域出身で、三世紀中頃から五世紀中頃に完成した。

この三経は古来多くの訳僧により漢訳された。中でも真宗が重んじる『無量寿経』は「五存七欠十二訳」といわれ、十二度漢訳され五本が現存している。五存は支婁迦讖（漢訳）・支謙（呉訳）・康僧鎧（魏訳）・菩提流支（唐訳）・法賢（宋訳十世紀印度僧）とされ、安世高・竺法護ら七僧の訳典は欠本である。また「漢訳」は竺法護、「呉訳」は支婁迦讖とする説があり確定していない。現在読経される経典は康僧鎧とするが異説もある。

これら漢訳経典は訳僧により意訳されているので、微妙かつ不明確な箇所や意味不明なところがあっても、梵語原典が消失しているので正しようがない。二つの法典を比較し真意を読み取ろうとしても限界がある。日本仏教は自宗に閉じ籠り自派に伝習されたもののみ修習してきたので、将来した漢訳経典を疑うことはなかった。

一次探検隊渡邊哲信と同郷で本願寺派文学寮の先輩高楠順次郎（在家東京帝大教授）が、

「明治初期まで梵本やパーリ語の原本を読まなくとも依拠しなくとも、漢訳仏典の説くところは理義にかない道理に照らしても欠けたることがないから、漢訳仏典の原典（梵語・パーリ語の仏典）に左右されるものではなく原典を読む必要性すらも感じなかった。それが原本を欠損させ原本の探求も望まなかった」（高楠全集第一巻）

とその間の事情を述べている。

明治に入り日本仏教は西欧の近代宗教学者から、「大乗非仏説」を突き付けられた。国内では庶民に広めるため漢文経から和訳するとき、多くの誤りや不明な箇所がみつかり、原典にさかのぼり真の教えを求めたいという願望が強くなった。

明治初期最初に近代仏教学を求め欧州へ留学生を派遣したのは、経済的に余裕のある浄土真宗二派であった。大谷派では南条文雄・笠原研寿、本願寺派では赤松連城・

高楠順次郎らである。南条・高楠の二人はオックスフォード大学教授マックス・ミュラー（比較宗教学・言語学）に師事、梵語原典の必要性を強く認識した。帰国後東京帝大教授として日本の印度学・仏教学を引率した。

明治二十年台になると、最初にセイロン（現スリランカ）に留学した釈興然がチベット願望の河口慧海に諭したように、「セイロンに行って真実の仏教を学び、仏教の本旨を理解する」（『西蔵旅行記』）ため、セイロン・印度への留学が盛んになる。欧州より留学費用は少なくて済み、釈尊の身近にいた弟子たちが頑なに守った上座部仏教から原典に迫ろうとした。そのため梵語とパーリ語の習得が並行して修学された。主なセイロン・印度留学僧は真言（釈興然・比留間宥誠）臨済（釈宗演・釈守愚）浄土（村山清作）本願寺派（東温譲・徳沢智恵蔵・川上貞信・清水黙爾）真宗仏光寺派（善連法彦）真宗誠照寺派（小泉了諦）大谷派（朝倉了昌）天台（大宮孝潤）がおり、短期間の間に各宗派がこぞって派遣した。しかし多くの留学生は途中挫折し、印度仏教遺蹟の巡拝や放浪生活を余儀なくされた。大谷探検隊員の手記にはこれら人物が多く登場する。

一時セイロン・印度だけでなく緬甸・シャム（タイ）にも派遣された。しかし「梵語・パーリ語の習得は難しく、しかも上座部の理解には長期間が必要である。小乗の仏典から日本仏教にとって必要な大乗の原典にたどり着くには、さらに長い年数が必要である」ことが判明するにつれて、セイロン・印度留学の熱は次第に冷めた。

次に入蔵熱が高まる。西欧の東洋学者が「ネパールあるいはチベットに存在している」（河口慧海旅行記）と述べたように、河口は「チベット語に訳された経文は文法の上からいうても意味の上からいうても、シナ訳よりも余程確かであるという説は西洋人の間では確定説のようになっている」とした。そして慧海は「はたしてチベット語の経文が完全に訳せられてあるものならば今日梵語の経文は世界にその跡を絶ったにしても、そのまたチベット語に訳された経文によって研究することができる」と主張した。かれのチベット仏教経文への熱い思いは当時の若い学僧の間で共通していた。

西欧の東洋・仏教学者が先行したチベット語による経文の研究は言語学に基づくものであった。わが国でもチベット仏教経典の研究を進め、梵語・パーリ語の原典にたどり着こうとする者が増えてくる。

当時の印度仏教学の第一人者東京帝大教授高楠順次郎は仏教研究に関し前掲書で、

「第一原本が梵文とパーリ文である。この両語を知ることは仏教研究の第一要件である。第二原本が西蔵文である。西蔵一切経は唐代から元代までの翻訳で、殊に句々梵文の影を留めているのであるから、梵文の原型を知るに最も必要である。厳密なる研究には必須の研究である。第三原本が漢文一切経、第四が日本仏教の味読」

と強調した。

チベット語は中国西南部（四川・青海・雲南）や印度北部からネパール・ブータンまで広域に使用されている。語順は日本語との類似点が多く、日本人にとって馴染みやすい。主語や目的語が先に来て述語が文末に来る。「の」や「に」の助詞が日本語と同じ名詞のあとに来る。ただし指示語や形容詞数字の位置は名詞のあとになる。例えば「その大きな犬」は「犬」＋「大きな」＋「その」の順となる。

チベット文字は梵字をもとに考案された表音文字であることから、梵字との互換性が容易である。この点に仏教学者は注目した。チベット大蔵経は印度梵語の原典を逐語的にチベット文字により翻訳されているため、散逸した梵語原典に復元できる可能性が高いとされた。

大乗仏教が独自に発展した漢訳経典は、梵語で書かれた原典を二世紀にはすでに一万字ほどに増えた漢字の中から梵語原典の「表音」と漢字の有する「表意」の二つに適う漢字を選択して漢訳された。梵語原典の理解と漢文・漢字の知識双方が不可欠であった。これらを兼ね備えた最初の訳僧が鳩摩羅什であった。漢字文化圏の朝鮮と日本は、漢訳された仏典をそのまま将来した。

チベット仏教は七世紀吐蕃建国と同時に印度から直接伝来、上座部・大乗部・後期密教（日本には初・中期のみ）を受け入れた。一時衰退するが、十一世紀イスラム教の弾圧を逃れた多くの印度僧が流入し復興した。その後土着のボン教を取り込み、大乗系密教色の強い独自のチベット仏教に発展した。同じころ梵語による原典が、チベット語・文字により翻訳され始め、十四世紀にはチベット大蔵経として完成した。

漢訳のもとになる梵語原典を消失してしまい、原典に遡れることができるチベット大蔵経の入手を日本仏教界は目指すことになった。

明治二十年代後半から日本仏教界には「入蔵熱」が沸き起きる。厳重な鎖国体制を敷くチベット国に浄土真宗大谷派南条文雄の影響を受けた能海寛・寺本婉雅の二人が一八九九年チベット領東端に初めて入った。次年変装してネパールからヒマラヤを越えて潜入、初めて首都ラサに至り半年間滞在したのが黄檗宗河口慧海である。

慧海は再度密入国を狙い印度北東部を放浪するが、一九〇二年十二月偶然列車の中で知己の藤井宣正に会い、その紹介で仏蹟探索中の大谷光瑞と面会、一夜話し合った。会談の様子は『西蔵旅行記』に残されており、再びラサに行く覚悟の慧海を光瑞と藤井が「命の危険があ

る」として押しとどめている。河口の探検談を聞いて、梵語で書かれた仏教経典を発掘したいと思っている光瑞が、チベット大蔵経の重要性と西蔵入国を思い始めたのは間違いない。

四七　流転するダライ・ラマ

日本の若僧が目指したチベット（漢字表記西蔵古くは蕃・吐蕃）は南にヒマラヤ山脈北に崑崙山脈西にカラコルム・トランスヒマラヤ山脈に囲まれた「雪の国」といわれ、三千㍍を超える高原国家である。日本では辺境の貧しい地方を意味するが、「笑いとお祭りの国」「喜びと饗宴の国」と言われた。日本人として最初にラサに入った河口慧海は『西蔵旅行記』で「仏陀の国」「観音の浄土」と書き起こしている。「生きる喜びを謳歌する国」として経済的には決して豊かなとはいえないが、餓死する人もおらず国民は幸福感を持ち安定した暮らしを続けてきた。政治と信仰とが一体となった五百年続く政教国家であり、イスラム教とは真逆の一妻多夫的な側面を持ち女性優位といわれる不思議な国であった。

チベット仏教（ラマ〔喇嘛〕教・チベット密教）徒である国民は、二十世紀初頭まで世界の仏教徒の中で最も幸せであった。何せチベット仏教法王ダライ・ラマ十三世（一八七六―一九三三）は政治・行政など世俗的実権のすべてを掌中、政・教いずれも最高指導者であった。

これを支えたのが「転生活仏」信仰である。七世紀印度仏教が伝来し次第に土着の民間信仰であるボン教と混交、タントラ（ヒンドゥー教の聖典）密教化した独自のチベット仏教を形成する。この仏教は三宝（仏・法・僧）のほかに師（ラマ）を加えた四宝が崇拝され、現世に教えを説くために現れた（転生した）ラマを敬った。

歴代のダライ・ラマはラサ・ポタラ（観音の霊場ポータラカ〔補陀落山〕）宮に住み、観音菩薩の化身として信じられた。死後必ずこの世に転生し、一切衆生を救うとされた。

この教主継承方法たる活仏信仰はチベットを支配するラマ教にとって大きな利点であった。ダライ・ラマは転生することから、若く優秀で将来性のある者が選び抜かれ、帝王学を教え込むことにより跡を継がせることが正当化された。この人選は先代の血脈とは無縁なので、ダライ・ラマは政教両方の実権を独り占めにするが皇統はできなかった。どこの国でも国王など実権者が亡くなると一族間で後継者争いから内乱に至ることは珍しくないが、この国では避けることができた。

慧海は「天然の嶮により世界と隔絶」と表現したが、北は五千㍍級の崑崙山脈が、西から南側にかけては八千㍍級のカラコルム・ヒマラヤ山脈が連なり、東の中国側には中・小の山脈が重なりあうという自然の要塞に囲まれた国である。この地理的条件が他民族からの侵略やイスラム教の進出を拒み、チベット仏教とダライ・ラマ体制を長く維持させた。

十九世紀末になると、シベリアから南下を目指す露国、南から英国（印度政庁）による市場拡大の動き、そして東の宗主国を自認する清国からの圧迫が続き、小国チベットは翻弄される。大国の進出に対抗するため、徳川幕府と同じように厳しい鎖国政策を敷いた。島国である日本は西欧の軍艦がどこにでも来航できたので圧倒的な軍事力の前に開国せざるを得なかったが、内陸深くしかも世界の屋根に囲まれていたので二十世紀初頭まで鎖国を続けることができた。

英国は大半が山岳・高原地帯とはいえ本土の二十倍という広大な領土を持つチベットを、英国製品の輸出市場としてまた羊毛・鉱産物の原材料基地として開国を何度も迫った。優位な立場を利用して宗主国を任じる清国と一八九〇年、九三年とチベットに関する条約を締結し清朝に貿易の自由を認めさせた。しかし独立国を標榜するダライ・ラマ十三世は当然ながらこれを認めず、英・清による頭越しの条約を拒否した。小国チベットがその姿勢を堅持できたのは露国の後ろ盾があったからである。英・露両国の軍事的均衡によりかろうじて鎖国を続け、ダライ・ラマ政教独裁体制を維持することができた。

一九〇四年二月日露戦争が始まると日本と同盟を結んでいた英国は戦争の経過からすぐには終わらず、日本軍の善戦により露国軍は苦戦を強いられており、この地に軍隊を振り向けられないと判断した。前年から国境付近で軍事行動を起こし情勢を睨んでいた英国軍は、八月初めチベットの植民地化を目指し、突如首都ラサに武力侵攻した。

英国の近代兵器を備える圧倒的な軍事力の前に、チベット国側は戦にもならずラサはたちまち占領された。そして翌月には二国間で「ラサ条約」を締結させられ、事実上の保護国化が成し遂げられた。この条約はチベット国は英国以外の外部勢力と何らの関係をもたないこと、英国人は自由に貿易に従事することができることを柱にしたものであった。目的を遂げた英国軍は締結後印度に引き上げた。

清国政府は「宗主国たる清が関与していない」二国間条約を承認しなかった。余談になるがこの条約締結について五十年後のチベット亡命政府（ダライ・ラマ十四世）は、「清国の支配が及ばない事」の証拠であるとし、すでにこの時期チベットは独立国であったと主張した。

英軍の侵攻直前ポタラ宮の十三世はラサを脱出、露国の支援を求めて外モンゴルウランバートル（庫倫・クーロン）へ亡命した。この地は清国の領土であるが露国の

勢力下にあり、チベット仏教と密接な関係があった。

歴史は七百年ほどさかのぼる。十三世紀初頭テムジン（チンギス・ハン太祖位一二〇六―二七）はモンゴル高原を統一、モンゴル帝国（都カラコルム）を樹立した。さらに西遼・西夏を征服するが、吐蕃（チベット）はいち早く忠誠を誓うことでこれまでの体制を維持できた。その後チンギスは華北・東シベリア・満州を支配した女真族金（前金）朝を滅亡させた。

孫のフ（ク）ビライ・ハン（世祖位六〇―九四）が五四年大理国を滅ぼした時、チベットは服属した。フビライはカラコルムから大都（北京）に遷都七一年国号を中国風に元と改称七六年南宋（都臨安）を滅ぼし、異民族として初めて中国全土を支配した。

在位三十五年という長期間君臨したフビライは、チベット仏教サキャ派のパスパ（一二三五―八〇）を導師（国師・帝師）としたので、帝室はチベット仏教徒になった。この王朝は宗教には寛容であり、イスラム教（清真教）・キリスト教ネストリウス派（景教）・道教（全真教）とも共存した。パスパ以降もチベット仏教の高僧がその地位を継承し、歴代皇帝はチベット仏教を保護したので、帝室のみならず官僚など支配階級まで広まった。元朝のもとで各地にチベット仏教寺院や仏塔が建てられた。とりわけ武宗（位一三〇七―一一）と弟仁宗（位一一―二〇）の実母ダギ皇太后は、「身も心も惑溺」したといわれるほどチベット仏教を崇拝、幾度となく大都と五台山を巡幸して巨費を費やした。国師・帝師は寺院に対し法旨を出すことができたので、チベット仏教の影響は一段と広まった。

パスパはフビライの命により、表音文字のチベット文字を原形としたパスパ文字（蒙古字・蒙古新字別名方形字）五十六字を創り文化面に影響を与えた。元の「国字」となり全土で勅書・紙幣に使われたが、儀式用の文字とされ一般には普及しなかった。パスパ文字は元の滅亡とともに使用されなくなるが、十五世紀李氏朝鮮（一三九二―一九一〇）世宗（位一四一八―五〇）の時制定された訓民正音（ハングル）の基礎になったとされる。

チベット仏教がモンゴル人民にまでひろく広まったのは二百年後北虜といわれ明を脅かしたモンゴル国アルタン・ハン（位一五五一―八二）の時代である。アルタンは明と和睦する傍ら、新疆・青海・チベットを勢力下におき、皇帝自らチベット仏教徒になり全土に広めた。現在のモンゴル国、中国北部満州・南シベリア（女真族金〔後金〕清王朝建国）および中国南西部である。アルタンはチベット仏教ゲルク派座主に「ダライ（モンゴル語大海）・ラマ（師）」の称号を贈り後ろ盾となったことから、以後政・教両面の最高指導者となった。

こうして十六世紀以降チベット仏教は、モンゴルからチベットまでの広範囲にわたり多くの信者を得た。

十六世紀末今度は女真族ヌルハチ（太祖姓愛新覚羅位一六一六―二六）が満州を統一、その勢力は中国東北部全域におよび、後金（一六一六―三六）を建国した。次のホンタイジ（太宗位一六二六―四三）が明を滅亡させ国号を清と改称、李氏朝鮮・モンゴルを平定した。

女真族は十六世紀モンゴルからの広まったチベット仏教を信仰しており、文殊菩薩の名にちなんで民族名をマンジュ（満州）に改めた。こうして清朝皇帝は中国の皇帝・満州族の統率者・遊牧民の覇者そしてチベット仏教の大施主の四つの顔を持った。

外モンゴル庫倫に亡命したダライ・ラマ十三世は一七二七年五代雍正帝が創建、その後モンゴル活仏によって拡幅されたチベット仏教寺院ガンダン・テクチェンリン寺院に滞在した。しかし頼った露国は意外にも日本との戦争に勝利できず、国内では革命組織との衝突が激化しつつあった。この新たな情勢により十三世はもはやこの地での亡命を望まず、光緒帝がチベット仏教の大施主で教徒が根を下ろす清国に赴くことを決意した。

十三世は二年滞在した庫倫を発ち、六年八月母国に近いアムド（現青海省）地方の中心都市西寧のチベット仏教寺院タール寺（十四世紀創建ゲルク派六大寺院別名クンブム寺）に取り敢えず居を移した。しかしこのまま清国内に滞在すれば、清の宗主権を自ら認めることになる。しかも清国は一九〇〇年義和団事件以降急速に国力を衰退させており、いつまでも身を寄せることはできないと思わざるを得なかった。

激変する国際情勢に揺さぶられるダライ・ラマ十三世は、東アジアで台頭著しくしかも同じ大乗仏教国日本に接触を試み始める。そして十三世の希望を実現させたのが、一九〇八（明治四一）年五台山における日本仏教界との会談であった。

このお膳立てをしたのは真宗大谷派寺本婉雅である。日本人として河口慧海に次いで十三世不在のラサに入っており、十三世やその側近とも面識があった。十三世と接触を図りたい英・露・独・仏とともに、露国との戦争に勝利し東アジアの覇権を目論む日本政府は「東亜の平和」論構想（日・清・チベット三国の仏教を介した連帯）を持ち、外務省出先機関はこれを支援した。

寺本は大谷派であったが、すでにチベットへの関心を失くした東本願寺を頼らず、積極的に海外に目を向ける本願寺派宗主大谷光瑞に会談派遣の人選を依頼した。

十三世が会談に赴いたのは五台山であった。北京の南西二百五十キロにあり、文殊菩薩の聖地である。古くから四大名山として知られ最盛期には三百もの各宗寺院が林

立、十五世紀チベットから高僧が招かれチベット寺院善薩頂が建立された。清朝になるとチベット仏教を信奉した康熙帝や乾隆帝が訪れ「ラマ宮」と言われ始め、漢伝・チベット仏教との唯一の共通聖地となった。

一九〇八年八月初め五台山の二日間にわたる会談には、日本から光瑞の名代として弟尊由（清国開教総監）を筆頭に本願寺派から四名、大谷派寺本、浄土宗一名計六名が参列した。日蔵仏教代表者は初対面であったが同じ大乗仏教指導者として、尊由が「日本国京都西本願寺法主は十三世法王の安否を案じている」と切り出し、十三世は「数年間山河に落魄していた」と述べるなど打ち解けたものであった。

二人の間で合意されたのは、両国仏教徒の留学生交換であった。一九〇三年六年ぶりに帰国したとき大冒険家として社会をにぎわした河口慧海の西蔵ラサ入りは、個人の熱意から成し遂げられたが法を破り密入国したものであった。今般日本人僧を受け入れるということは、厳格な鎖国政策を取ってきた十三世が、日本の仏教徒のみ入国を許可するという特別に優遇するものであった。

無論双方に大いなる利得が望めたからのことである。尊由の方は漢訳仏典よりも釈尊の言葉（梵語原典）に近い「チベット大蔵経」の入手が期待された。十三世は急速に国力を増す日本の政治・経済・軍備を直接学ぶとともに、近代化を進める上で今後課題となる政治と宗教の在り方について調査ができると見込んだからであった。

会談を終え九月末光緒帝と西太后に謁見のため北京に向かった。清朝都には紫禁城北に二万坪に及ぶ国内最大のチベット仏教寺院雍和宮があり、この寺院に滞在した。雍正帝が皇太子時代の邸宅であったが、半分をチベット仏教ゲルク派に与えたものである。次の乾隆帝がチベットおよびモンゴル族への懐柔策として正式にチベット仏教寺院として使われることになった。今日内外から多くの旅行者が訪れる観光名所となっている。

光緒帝との謁見は十三世として屈辱的な臣下の儀礼「三跪九叩頭の礼」を余儀なくされた。清国に逃れているからには、宗主国皇帝に対する礼儀として止むを得なかった。一方清朝帝室の導師であり、チベット仏教最高指導者として威厳を保つことが大切であった。清朝は英・露・日が狙うチベット国の政・教最高指導者に対し宗主国としての態度はとるものの、帝室や民族が敬う導師として手厚いもてなしを欠かさなかった。

四八　競い合う中亜探検

大谷光瑞が西欧留学から帰朝した一九〇三年以降、中央アジアを舞台に各国は次々に探検隊を派遣、激しい発掘競争を繰り広げた。まさに二十世紀初頭は「内陸の冒険・探検の時代」であった。

この間日覚ましい成果を上げたのはスウェーデン人スウェン・ヘディンと英国人オーレル・スタインである。

ヘディンは九九年から三年間二回目の中央アジア探検を行い、ロプ旧湖床と湖畔の砂に埋没し消え去った古代都市楼蘭国（紀元一世紀―七世紀鄯善国と改称）の廃墟を発見、古文書を発掘した。漢文の文書・木簡や嘗てタリム盆地で使われたカロシュテイー文字による文献を含んでおり、世界の考古学・東洋学者を興奮させた。この詳細な調査書が発表されたのは二年末である。

さらに地理学者ヘディンが早くから一貫して目指したのが、「禁断の国」チベット高原の地図に未だ記されていない空白地域の調査であった。九六年の第一次探検では厳重な鎖国を行うチベット国境沿い崑崙山脈の北縁まで達した。二度目は楼蘭から南に進み崑崙山脈の東澗からチベット国の侵入に成功、西に横断しカラコルムへ抜けた。一九〇五年からの第三回探検では逆にカラコルムから潜入、チベット兵に監視されながらもラサから三百キロ隔てた第二の都市シガツエまで進むことができた。この時の探検で未知であったトランス・ヒマラヤ山脈とインダス川水源を発見、地理学者として名を残した。河口慧海の『西蔵旅行記』と彼の『南チベット』とにより「地球上最も知られざる、最も近づき難い」雪の国の一端が知られることになった。八年十一月探検の帰途日本を訪問、西本願寺で光瑞と会った。

一九〇一年ホータン郊外の砂漠に埋もれたダンダン・ウイリクの古寺院址を発見、多くの仏画・彫刻・古文書を持ち帰り世界の考古学・東洋学・仏教学者を驚かせた考古学者オーレル・スタインは、六年から二年間第二次探検を西域南道で行った。ミーランでギリシアに繋がる見事な有翼天使像を発掘後、ヘディンの地図を頼りに楼蘭を目指し、崩れたストゥーパの下から木簡に書かれた三百近い大量の漢文文書やカロシュテイー文書を発掘した。古代の多種にわたる文書であったことから、後に楼蘭学と称される幅広い学者の参加を呼び込む端緒となった。その後予定した敦煌に赴き、七年五月「世紀の大発見」としてまたもや世界を驚嘆させた莫高窟蔵経洞から「敦煌文書」と呼ばれる貴重な文書・仏画類六千点を入手、本国に持ち帰った。

仏東洋学者ポール・ペリオは一九〇六年からタクラマカン砂漠周辺の仏蹟を探索していたが、スタインが敦煌で大量の仏教文書を発見したとの報を聞き込み、計画していた調査を中止、八年二月急遽敦煌に向かった。スタインが残した石窟に入り、中国語に精通していたので一点ごとに目を通し、その中から重要と思われる五千点を選び抜き本国に送った。その後北京で蒐集品の一部を披

露、中国の考古学・歴史学者を驚かせた。すでに清国末期の混乱した中であったが、慌てて二人が残したすべての古文書類を北京に送らせる処置をとった。

独国は人類学者グリュンウェーデルやル・コックを団長にしてヘディンやスタインが赴かなかった西域北道のトルファン・クチャの遺蹟に的を絞った調査を行った。ル・コックが団長として一九〇四年―五年にわたりトルファンを、五年―七年グリュンウェーデルが同地域に加え中間のオアシス都市カラシャール（焉耆）西域南道敦煌と楼蘭を経由北道交差地）に広げた。独隊は敦煌に次ぐ仏教石窟遺蹟クチャのキジル・クムトラ千仏洞、トルファンベゼクリク千仏洞から、美術的価値の高い壁画を根こそぎ切り取って持ち帰り展示発表した。これらシルクロードの文化遺産を誇示、ベルリンに来る政治家や考古・東洋・仏教学者らを驚かせ国威発揚に役立てた。

露探検隊は一貫して南下政策に伴い、早くからチベット・モンゴル仏教圏であるシベリアからチベットまでを国家事業として実施した。十九世紀末先駆者ブルジェワルスキーは外蒙古（ゴビ砂漠）からチベット（青海湖）を結ぶ地域に集中、幾度も探検を繰り返し軍事に必要とする詳細な地図を作成した。

弟子コズロフは七年―九年モンゴル・四川探検を行い、西夏（一〇三八―一二二七チベット系タングート族建国都興慶）時代の廃墟カラホト（黒水城）を発掘した。二千点を超える西夏文字書・漢文書・仏像・仏画を採取した。これにより宋と対立しながらも実利を取った和睦（慶暦の和約）など、知られていなかった王国の概要が明らかになる発見であった。

四九　第二次探検隊派遣

大谷光瑞は三年三月帰国後先代にかかわる仏事・継職の儀式や行事、新法主としての直諭・親示、かねてから考えていた本山執行所改革（財務強化の勘定任務条規並びに室内部職制制定・各典礼明文化）、地方布教体制整備（別格別院制定・採訪使新設）を矢継ぎ早に実施、皇室と姻戚関係になり参内天機奉伺・青山御所参候、そしてパミール高原・印度聖地探査にかかわる講演・仏教美術写真展などが重なり多忙を極めた。

翌四年二月日露開戦により本山に「臨時部」を設置、いち早く戦時体制を整えた。師団・連隊への慰問、大連などの戦地布教、患死者追悼法要、傷病兵慰問布教など他派に先駆け積極的に行った。

五年九月講和締結後は、新たに領土となった樺太と北海道内を二か月にわたり巡教、六年十月からは教線拡大のため八か月に及ぶ二度目の清国視察を行った。

七年には須磨月見山別邸が皇室の武庫離宮（現須磨離宮公園）として使用されることになり、宮内省に買い上げられた。光瑞は代わるものとして灘岡本の六甲山山裾に土地を取得、大谷邸別邸（二楽荘）の建設を始めた。

そして西本願寺五十年毎の最大行事「宗祖親鸞六百五十回大遠忌法要」が一一（明治四四）年に予定されており、準備のため法要の五年前から準備事務所を開設した。光瑞はこの大法要を三・四月二回に分け、各々一週間行なうことで、全国から門徒百万人の参詣を目標とした。これだけの門徒が京都に来ることになると、迎える西本願寺は多岐にわたり早期の大掛かりな準備が必要であった。ちなみにこの法要に参集する門徒のため、西本願寺の近くに国鉄梅小路駅が臨時に新設された。

帰朝後陣頭指揮を執る光瑞は八年に入ると、過労のため不眠に悩み神経衰弱の症状が出始めた。「このままでは宗祖大遠忌に頗る憂うべき」（『新西域記』上原芳太郎）状態に陥ることを懸念、医師の勧めもあり一年程度の欧州漫遊が計画された。出発は来年父光尊七回忌法要があり、また妹武子と妻籌子の弟九条良致との結婚が予定されており、それらが終わる秋頃とされた。

この欧州旅行が具体化するや、欧州列強諸国の派遣した中亜探検隊の動向および発掘成果をみていた光瑞は、再びこの地に探検隊を派遣することを決断した。

今回の探検は梵語経典の発掘を主眼に置くものであるが、タリム盆地の探索だけでなく、確実に原典に近づくことのできるチベット仏教の調査研究を加えた。

当時正当な手続きによるチベット入国は不可能であったので、政・教の最高指導者ダライ・ラマ十三世が一時身を寄せた外モンゴル庫倫（ウランバートル）と「チベット・モンゴル仏教」といわれるほど一体化しているモンゴルのチベット教遺蹟並びに宗教事情を調査することにした。タリム盆地へは前回の高峻なパミール高原からではなく、モンゴルから南下し新疆ウルムチに入いる道をとらせた。

タリム盆地ではヘディンが最初に発見し、スタインが大量の仏教関連文書の発掘をした楼蘭での調査が最大の目的であった。西域南道を東漸するヤルカンド・ホータン・ニヤ・ミーランではすでに仏画や仏具とともに断片ではあるが古代文字で書かれた多くの経典が発掘されており、ロプ湖畔に位置し西域北道と南道を結ぶ街道上にあり嘗て繁栄した楼蘭には、すでに二人が発掘したとはいえ大半は未だ砂に埋もれたままであり、多くの仏教遺物が残されていると光瑞は睨んだ。

今回第二次探検隊員に選抜されたのは橘瑞超と野村栄三郎の二人であった。

瑞超は一八九〇年生まれのまだ一八歳の青年であった。

名古屋市真広寺の長男で、県立第一中学の時から優等生の誉れが高く中学卒業と同時に光瑞から西本願寺に呼ばれた。側近として法主邸錦華殿で起居光瑞に侍した。十五歳で得度した時、光瑞の一字を与えられた。仏教に限らず多くの分野を勉学させられたが、その中でも特に英語・中国語が飛びぬけていた。しかも勇気と知力を備え機智に富み決断力にすぐれた人物として目立った。身長は一五五cmと小柄で、写真で顔も見ると少女と見間違う美少年であった。光瑞は「瑞超がまるで少女のように見え、どんな残忍な匪賊でも殺すことはない」と選んだ理由を笑いながら語ったという。しかし光瑞の人を見る目は確かで、はた目には未知で過酷な砂漠の探検にはとても耐えられないと思われたが、瑞超は若く旺盛な行動力と折れない精神力発揮した。

栄三郎は瑞超より十歳年上の在家である。父と兄が西本願寺・大谷家に奉職、その関係から本人も西本願寺に勤めることになった。わが身を顧みないその忠勤振りが光瑞に認められた。かれの書き残した「蒙古新疆旅行日記」(『新西域記』所収)を読むと、謙虚で実直几帳面な性格であったことが分かる。

以下野村の日記をもとに追っていく。

一九〇八(明治四一)年四月二人は中国に向け京都を発った。五月北京で第二次隊員堀賢雄らに壮行会を開いてもらい、六月北京を出発、内モンゴルから庫倫へは幹道を使う計画であった。野村の最初の記載は二十五日「張家口出発、入蒙第一日なり」と記されている。北京から西二百キロの張家口はモンゴル高原の遊牧民に備える軍事拠点で、堡子里といわれる要塞が残るこの地方最大の都市である。郊外には明の時代に造られた大境門長城が東西に建設され、その中央部に大境門がありこの門を出るとモンゴル(内蒙古)になる。

橘・野村は馬夫二人・従僕二人、馬車二両(一両四頭曳)馬十二頭(乗馬用二予備二)編成のキャラバンを組み、米・馬糧など三十日分の食料を積み込んだ。

既に夏季に入っており、幹道であっても砂漠が続き夜間での行進を余儀なくされた。日中は四十度以上の猛烈な暑さのため砂地の地熱が高くしかも烈風が砂を巻きこむので、四月から六月ごろまでが往来する時期で夏場には旅客は絶えた。張家口から庫倫まで五十日とされたが、七月末に着いたので一か月余の旅となった。

清国の領域である外モンゴルの中心都市庫倫(ウルガ現ウランバートル)は内モンゴルと違い、露国が経済を支配していた。露人の雑貨店・飯店・酒舗が多く、流通している貨幣は露国通貨が最も信用があった。電報局は清国、郵便局は露国が営み、切手は露西亜切手のみ通用した。支那人の商店も多いが日本製雑貨がどの店にもあり、また日本人経営の商店もあった。

庫倫には十日間滞在した。遊牧民が崇拝するチベット仏教寺院は元来季節で移動をするものであった。十七世紀小高い山に囲まれた二つの川のほとりに寺院を建てたのがこの都市の起源で、宗教都市の性格が強い。市内には多くの寺院・廟があるが、信仰の中心は広大なガンダン寺である。十九世紀活仏ボグド・ハーン五世によって建立され、四年夏ダライ・ラマ十三世が亡命した時この寺に滞在した。市内にはモンゴル国最後の皇帝活仏八世が住まう宮殿が残り、この地のチベット仏教の興隆が見て取れた。宗教事情の調査と共に、市民の服装・習慣・礼儀の様子をスケッチし詳細に記録した。

清国庫倫欽差大臣(皇帝の全権を委任された臨時官)や露国領事館を訪問、赴く予定の和林(カラコルム)の調査目的を説明した。所在地や周辺の情報を直接得るとともに、駱駝十頭馬五頭を借りることができた。市内の商店で二カ月間の旅途に伴う食料などを準備した。

八月七日出発南西三五〇キロにある大モンゴル帝国第二代皇帝オゴテイが築いた首都和林(カラコルム現ハラホリン)に向かった。当時庫倫から直行できる幹道は無く、まず庫倫を南に二百七十キロ行き、賽爾烏蘇(サイウルス現マンダルゴビ)から今度は西に二百五十キロ進むと哈達圖(ハタット現アルバイヘール)に着く。ここに二泊して真北に百キロ離れた和林への旅行準備をした。石摺紙・土工具・米など一か月の食料を持ち、取り敢えず不要な荷物は当地に預けた。見張りの兵一名と野村・橘には各々蒙人一人が付き添い、駱駝三頭・乗馬を新たに加えて出発した。

元朝初期には大モンゴル帝国の首都として繁栄を誇った和林への大道は失われていた。途中大ラマ廟や白塔が残り往時をしのばせた。ハタットから四日を要しオルホン川渓谷にある和林に着いた。

最大の調査目的であるエルデニ・ゾー(宝の寺)は、皇帝が創建した一辺百余メートルの方形白壁に百八つのストゥーパが立ち並び、モンゴル帝国を思い出させるチベット仏教寺院の大伽藍であった。二人は丸二日間滞在、白塔・城壁・廟碑・刻石と周辺地を丹念に調査、配置図・断面図・側面図・周辺地図を作成した。

次にオルホン川を挟んだ西岸の草原の中に七世紀唐時代の城郭が残るハル・バルガス遺跡を調査した。この地は八世紀ウイグルが突厥を破り建国し、首都として再利用「宮殿の都市」と記録された。なお二人はこの遺蹟を七十キロ東北のハル・ボヘン・バルガス遺蹟(黒い牛の城)と同一視しているが、別の遺跡である。

このホショーツァイダムには追悼碑の残る霊廟(現ビルゲ・カガン遺蹟)に碑文が残されており、烈風の中天幕を張り十時間かけて二十五枚の摺紙を得た。さらに発掘しようとしたが、住民から「凡そ山には山主(神)あ

り地には地主（神）あり、然るに他より来りて恣に地を堀り寶を探る如き、若し貴国に於いて此の如き行を為さば豈に許容せんや」と諭して許可しなかった。二人は「学僧にして決して貴珍を得て利を射んとする者に非ず」と嘆願するものの許されなかった。

野村はユーモアもある。夜蚊の多さに悩まされ、十八世紀寛政の改革を皮肉った大田蜀山人の川柳「世の中に蚊ほどうるさきものはなし文武ぶんぶと夜もねられず」を思い出し、「一世の英雄成吉思汗が覇業を成就して武威を欧西に輝やかせし創業の地なり。文に武に彬然たる偉蹟は、既に史上に嘖々たる所、今や蚊も亦た往時を謳歌せるものか」と一人苦笑した。

和林は十九世紀末露国人が大規模な探検を実施、匈奴・突厥・ウイグル・モンゴルの遺跡調査を九三年に発表しており、それ以上の新しい発見はできなかった。

しかし外蒙古の独立宣言（一九一一年）の直前、首都庫倫と営ての都和林を訪れ実査したことは日本人としては無論初めてであった。チベット・モンゴル仏教といわれる同質化した遊牧民族の宗教事情を調査したのも初めてで、この地域を研究する上で貴重な資料となった。

二週間の和林調査を済ませゴビ砂漠北のモンゴル高原を通り国内を横断、九月二十一日西部の中心都市コブトに着いた。そこから南下、天山北路古城子（奇台）を経てウルムチに着いたのは十月二十六日であった。

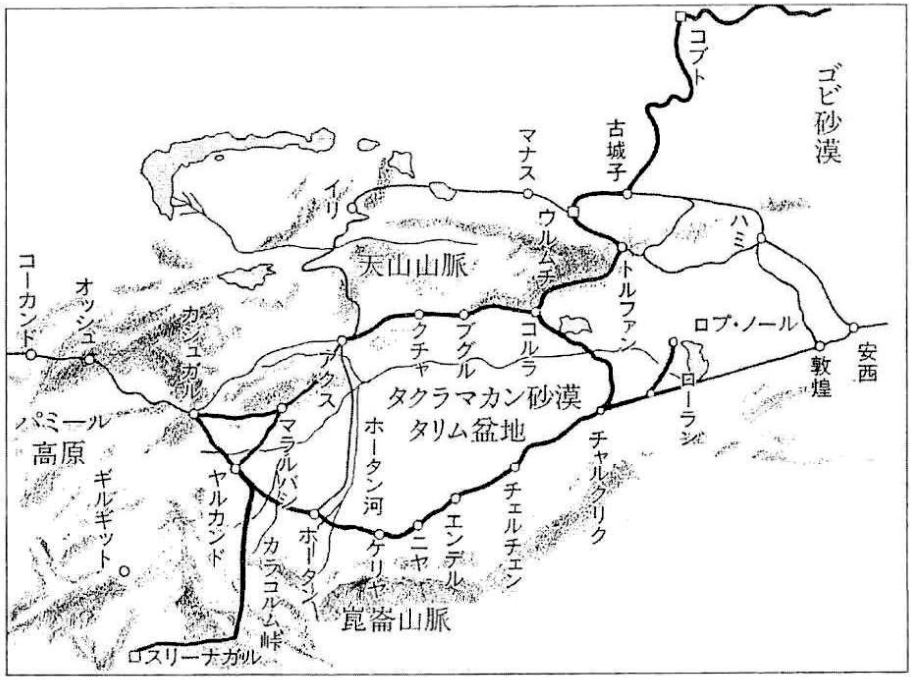
五〇　楼蘭発掘

二人はウルムチから別々の行動となった。野村は第一次探検隊渡邊哲信・堀賢雄の二人が短期間しか滞在しなかったトルファンへ赴き、本格的な発掘調査を開始した。

この地は独探検隊のグリュンウェーデルやル・コックが幾度も発掘を繰り返し、おびただしい仏教史料と貴重な壁画を採取していた。一次でやり過したが、捨てておけない重要な仏教遺蹟地であった。野村は住民を雇い交河故城・高昌故城の発掘を行い、独隊の取り残したと思われる貴重な遺物を少なからず掘り上げることができた。実直な野村ならではの成果であった。

トルファン郊外木頭溝（ムルトク）の火焔山麓にある当地最大の仏教遺蹟ベゼクリク千仏洞の壁画は独探検隊により剥ぎ取られベルリンに持ち帰られていた。住民が「発掘欧人は最良の壁画を採取し、然らざるものはわざと損傷を加え去れり」と説明するのを聞いて、「文明国の学者を以て任ずる欧人が、世界の至宝を一人に私せんとする心事は、盗賊より陋劣なり」と厳しく断罪した。

日によっては三十人の人夫を雇い発掘するが「恰も欧人発掘の跡を掃除せし感ありて遺憾窮り無し」の状態であった。しかし見逃した何カ所かの石窟を発見、見事な仏頭・絹地仏画・壁画を得ることができた。



第二次探検隊　橘・野村の行程図
『シルクロードに仏跡を訪ねて』（本多隆成）

中に何度も会った知己の京都帝大教授小川琢治（湯川秀樹父）に依頼した。小川は東京・京都両帝国大学、地理学協会、西本願寺連合による招聘を交渉しており、光瑞はヘディン応諾の情報をおそらく十月ごろには得ていた。

十一月来日、明治天皇・皇后両陛下に拝謁、勲一等瑞宝章を授与された。これまでにも露皇帝・英皇太子、仏大統領と謁見していた。東京では日露戦争で世界に名将として名をとどろかせた東郷元帥、乃木・奥大将との会見が設けられた。ヘディンの「ロプノールをめぐるさまよえる湖論争」「古代都市楼蘭の発見」「チベット潜入」など世界が注目した探検談は日本でも新聞・雑誌などで知られており、講演会は多くの聴衆を集め盛況であった。東京の日程を終え京都に来たのは十二月二日であった。

京都滞在は十二日までの十日間で、招聘した京都帝大・西本願寺の訪問、講演会などの歓迎行事が日々予定された。西本願寺では仏教大学教職員並びに学生・開教練習所や女教誨師講習所関係者・婦人会並びに青年会幹事・新聞記者など八百人を前に「チベット探検と喇嘛教」について講演した。聴衆者の中に仏教大学予備科二年生青木文教がいた。入蔵を夢見ていた文教はヘディンの講演を聞いてこれまでのあこがれから、「何としても入蔵したい」との強い願望に変わったと記した。

西本願寺に一泊したが特別の羽織袴が用意され、袈裟をまとった光瑞と一緒に和服姿の写真を残している。妻

一方橘はウルムチとトルファンに滞在し、そこから離れなかった。次にヘディンが発見した楼蘭に行くことになっているが、その正確な場所が不明であった。そのため十月末から進むことができず、時折野村が調査していたベゼクリク千仏洞の発掘作業を手伝うなどして暇をもて遊んだ。

楼蘭については玄奘の『大唐西域記』に、天竺からの帰途西域南道ニヤ（尼撲）エンデル（都貨邏の故地）チェルチェン（折摩駄那の故地古の沮末国）を経て最後に「納縛波の旧地さらにここ（チェルチェン）より東北へ行くこと千余里、納縛波の故国（ロプ湖周辺鄯善国か）に至る。即ち楼蘭の地である」と記し、十二巻に上る大旅行記は完となる。当時ここからが唐の領域であった。

玄奘の記述からタクラマカン砂漠の東にあるロプ砂漠の干上がった湖床の中で楼蘭の地を探し求めるのは無理であった。ヘディンの後玄奘と同じ道を通り楼蘭に辿り着いたのはスタインであったが、二人の調査書が出版されるのはともに十年以上先のことである。

しかし京都の光瑞は確かな見通しを持っていた。ヘディンが五年からのチベット探検を終え、八年九月印度に着いた後帰国の予定を知り、その海路に日本へ招待する計画をたてた。来日の交渉は同じ地理学者で欧州滞在

籌子（皇太子妃実妹）・妹武子（後九条良致妻）の三女性も接待に駆り出され、本山を挙げて歓迎した。

京都では日本風旅館を希望し、上京区麩屋町澤文旅館に宿泊した。光瑞は小川と第一次隊員堀賢雄をヘディンのもとにやり、楼蘭の位置を聞き出すことにした。ヘディンは元々ストックホルム単科大学地質学科に入学した地質学者であった。その後ベルリン大学に留学、リヒトホーフェン（古代交易道をシルクロードと命名）から最新の地質学を学んだ。小川は欧州留学を経て京都帝大地理学教授であり、堀はオックスフォード大学で同じく地理学を学んだ。二人とも地理・地質学が専門であり、英会話にも不自由がなかったので話は弾んだ。話題は新疆の発掘有望地の選定から楼蘭の位置に話がおよび、二人はヘディンからその位置を聞き出した。

直ちに光瑞に報告され、トルファンで待機していた橘に次の暗号電報を打った。

京都　十二月十三日発　日本人橘　トルファン

「東経九〇度北緯四一度　東西ニハ石碑アリトス　捜索セヨソノチ発掘セヨ」（経緯度は暗号、電文ローマ字）

光瑞から楼蘭の所在地を知らされた橘は、トルファンから西域北道の要所コルラ（トルファン・クチャ間の中間都市）に向かった。野村はクチャでキジルおよびクムトラ千仏洞を調査した後カシュガルに向かい、そこで二人は落ち合うことにした。

残念ながら橘の手記は自坊の火事により焼失してしまい、これからの探検の詳細は不明である。印度でタイムズ紙記者に話した記事・帰国後の講演会録、生前直接本人から聞き取った金子民雄（橘著『中亜探検』解説）の記述、光瑞・本山とやり取りした電報の補綴（『新西域記』所収）などから追うしかない。

橘は二月二十一日コルラを発ち、タクラマカン砂漠の北東を南下、まず西域南道のチャルクリクを目指し、三週間後の三月十一日到着した。ここから一か月の予定で楼蘭発掘の探検に出発した。ロプ砂漠の中を東経九十度北緯四十一度が交差する地点の大きな石碑（現在も残る巨大粘土塔スタインはストゥーパとする）が目印であった。羅針儀を持参しているので経緯度が分かると、交差地点にたどり着くことは難しいことではない。

最初に発見したヘディンは『さまよえる湖』の中で楼蘭付近の川（ダリア）・湖・島・突き出た岩塊などの形状を詳しくスケッチで書き残している。このときにはタリム川の支流を筏で進み水深半メートルの浅い大きな湖にたどり着き、その沿岸で古い家・共同墓穴を発見した。墓から少なくとも二千年以上眠っていた王女や王妃と思われるミイラが発掘できた。

しかし橘の楼蘭探索時には支流にも水はなかった。橘

はヘディンやスタインが発掘したと思われる周辺の砂の下から、かなりの量の紙・木簡などを採取した。大半は断片なものであったが、その中に丸め込まれた首尾完結する墨書された二枚の文書があった。

五一　李柏文書

二葉の紙には次のような漢文で墨守されていた。

「五月七日鎮西域長史□□（関内）侯李柏頓首々々」

「西域長史李柏□請撃叛将趙貞、為貞所敗」

また文書の断片だが次のように読むことができた。

「臣柏言焉耆（ハラシャル）王龍、達海頭（ロプノール か）、逆賊趙（貞）」

これら二葉の文書は西域長史関内候李柏という人物の書牘（手紙）の草稿であることが分かった。尚現在李柏が西域諸国の王にあてた半ば公的な官文書であり、秘書役が作成した原案で手元に残された文書いわゆる古文書学的にいう「正校案文」とする見解が出されている。

前漢は匈奴の侵略から守るため一世紀半ば西域都護府を設けたが、一旦廃止された。しかし度重なる匈奴の進攻が続いたことから、新たに西域長史府が一二三年に設けられた。この守備隊を統率し漢の西域経営責任者が西域長史である。発掘文書に出てくる「李柏」は四世紀五胡十六国時代甘粛で建国された前涼（三一三―七六）主張駿の部下でこの西域地方の長官であることが、『晋書』の張駿伝にみえることを京都帝大教授羽田亨がいち早く指摘した。

京都帝大教授内藤虎次郎（湖南）は『十六国春秋』にも同様に出てくることを示して、

「前涼主張駿の部下で、この西域地方の経営に西域長史府長官として従事したということが、歴史でもわかることであって、その人が経営の際に作った書牘が現れてきたというのは、歴史上極めて重要な証拠となる文字と言って宜し」（内藤「西本願寺の発掘物」『新西域記』所収）

とその発見に驚いた。

文書の断片には、「焉耆王龍熙」の文字が見え手紙の相手と思われること、海頭とあるのはロプノール（またはハラシャル付近の湖）を指していること、戦争までした敵国の大将趙貞がみえることから、

「その年代は四川に建国した東晋（三一七―四二〇）の初代成帝司馬睿の咸和年間に当たっていて、紙に記された文書として、これまで発見せられたものの中で最古のものといって宜しい」（前掲書）

とその発見を高く評価した。

また同書で「四世紀には字体は今の楷書行書の間にあって少しも今の字と異ならないことがわかり、これが隷書といっていたもので当時盛んにこの字体が使われて

いたことが証明される」とし、ちょうど王義之の二十歳代にあたり行草書の中にあるものと同じ筆法のものも見え「書法の上からも実に珍奇至極のもの」と讃えた。

橘は無論内藤湖南や羽田亨のような中国古代史に深い知識はないが、漢文が読めたので二葉の文意は理解できた。だが発掘した時はさほど重要な古文書とは思わなかったであろう。だが野村と二人で摺り取った和林の碑文やトルファン・クチャで野村が長期にわたり発掘した像・壁画・経文などの仏教遺物、その他古銭・古印などの大半は、カシュガルで一時保管してもらうのだが、橘は完結しているこの古文書は携行した。

次年の一九〇九年末カルカッタで印度の専門学者に鑑定してもらうため、重要発掘品を開陳した。この李柏文書もその中に入っており、中国古代の二世紀頃のものとされた。

公開した発掘品はニュースで報道され、欧州の専門家に知られることになった。その後橘は当地で英ザ・タイムズ誌の取材を受け、今回の第二次探検の概要とその発掘品について説明した。この時の取材記事が二月三日付けのタイムズ紙に「中国トルキスタン探検」の見出しで掲載された。これら報道により、橘瑞超は欧州の探検家や考古学者の間で知られることになった。

尚李柏文書は現在龍谷大学で保蔵されており、「歴史資料としての重要性」から重要文化財に指定されている。

橘は楼蘭の調査を終えて、チャルクリクに戻り、西域南道をニヤ・ホータン・ヤルカンドへと進み、七月八日カシュガルに着き、西域北道から一か月前に到着していた野村と合流した。

ここで光瑞から新しい指示があるはずであったが中々着電しなかった。翌月ようやく電報が届き、「大行李はカシュガル英国代表部に預け、カラコルム峠を越えてレーに出てスリナガルに行け。法王は十一月印度に行き、面会あるべし」とあった。第一回探検時光瑞ら三人は英国の配慮により軍事・郵便専用路である最短のフンザ古道を使いスリナガルに向かったが、今回のカラコルム峠越えは政庁がフンザの通行を断ったからであった。

二人はヤルカンドを十月初めに出発、カラコルム峠（五千五百メートル）から八千六百メートルのK2を主峰とするカラコルム山脈の東端を通り印度北部のレーに行き、そこから会合地スリナガルに向かった。

すでに光瑞は到着しており、日本から遠く離れた印度カシミールで再会することができた。

五二　ダライ・ラマ十三世謁見

九年九月光瑞は妹武子と九条良致男爵との婚儀を済ま

せ、妻を伴い二度目の印度・欧州旅行に出立した。随行者は足利瑞義（渡邊哲信同郷露国留学仲間）・桂本瑞俊・和気善巧・青木文教（後チベット留学生）であった。印度孟買に着いたのは十月十八日で、静養を兼ね二度目のスリナガルに向かい、モンゴル・中亜探検を終えた野村・橘の二人と会った。

ここで新たな指示として野村には「再度カシュガルに戻り預けた荷物を引き取り、西域南道および仏教が盛行した西夏（一〇三八―一二二七チベット系タングート族建国都興慶府〔現甘粛省銀川〕）の調査を行い一一年四月までに帰国せよ」という第三次探検の派遣であった。橘は光瑞一行と合流し翌年一月まで一次探検で井上弘円と清水黙爾が確定できなかった釈尊生育地カピラ城と人滅したクシナガラの所在地を調査するとともに、王舎城の詳細な地図・調査書の作成を命じた。

一方これまでの光瑞による一連の行動は印度政庁をいたく刺激していた。韓国・満州と矢継ぎ早に極東アジアで拡大を成し遂げている日本国政府・軍部が後ろにおり、仏教一宗派法主という光瑞は仏教遺蹟を調査するということにして、実は多方面で諜報活動を行っているのではと思わざるを得なかった。チベット仏教圏という目で見ると満州・露国シベリア南部・モンゴル・新疆東部・チベットは一体となりつながる。満州を獲得した後、次はこの「チベット仏教圏を狙っており最終的にはチベット国までを視野に入れている」と英印度政庁は疑った。

光瑞は一九〇七年二回目の清国巡遊の時、清の許可が得られず実現はしなかったが、十三世は清の青海に亡命中で、チベットをめぐる各国の思惑が交差する微妙な時期にもかかわらず、チベット訪問を打診した。またダライ・ラマ十三世と弟尊由との五台山会談実現には、日本公使館の協力があったことを確かめていた。また八年夏からの橘・野村二人のモンゴルから中亜までの広域探検では、暗号を使い煩瑣に電報で連絡し合っていることも掴んでいた。

これらを総合すると大谷光瑞一行は日本政府・軍部の隠れ蓑として、モンゴル・タリム盆地で間違いなく諜報活動を行っていると断定せざるを得なかった。政庁は日本外務当局に光瑞一行の疑わしい行動に抗議し、また橘・野村について公人か私人かの身分照会をしていたことが後に外務省外交記録から判明した。すでに大谷探検隊の行動は日英の外交問題にまで発展していた。

英国は二年一月末敵対する露国と日本を取り合い、「光栄ある孤立」を捨ててまでも日英同盟を締結した。この時両国は最も親密な関係になった。夏からの大谷探検隊に対しては、カシュガルやフンザ古道での涙ぐましいまでの協力をして無事な通過を支援した。

しかし八（明治四一）年二次探検隊時の国際情勢は大きく変化していた。英国は長年敵対した露国と協商を締結、仏国を加えた三国協商を成立させた。これにより欧州では独・伊・墺（オーストリア）と敵対、第一次世界大戦の構図ができ上った。東アジアでは韓国を併合、野心をあらわにする日本を「警戒する国」とみなし始めた。

印度政庁は光瑞から新たな指示を受けた野村が、再び中央アジアで諜報活動に赴くものと疑いを強めた。この事情を知らない野村は何度も清国カシュガルへの出国を申請した。しかし許可されず、野村のタリム盆地・西夏探索計画は断念せざるを得なかった。孟買で乗船を待つ光瑞にこの旨を報告後、無念にも印度から帰国した。

チベットをめぐる複雑な国際情勢が、野村・橘による第二次探検を急遽終わらせ、野村の三次探検派遣を中止に追い込んだのであった。

一九〇六年十三世不在のまま、頭越しに英・清の間で北京条約が結ばれた。この条約では清国はラサ条約の有効性を認めるが英国に領主権を認めさせた。一方英国は今後チベットへの侵略行動は行わずまた内政干渉をしないと譲歩したが、これまでの経済権益を確保した。

八年夏日蔵仏教界の指導者が懇談するという歴史的な五台山会談実現の後、九月末十三世は北京で光緒帝と西太后に会見、屈辱的な臣下としての儀礼を取り、ようやく帰還が許されラサに着いたのは九年十一月末であった。英国の侵攻により露国を頼って庫倫に亡命してから、五年という長い亡命生活であった。

ここでまたもや十三世をめぐる情勢は激変する。帰還の前年西寧滞在中の八年十一月、清王朝光緒帝と実権者西太后が一日違いで相次いで亡くなるというまさに驚天動地なことが起きた。十三世は忍従して臣下の礼を取ってまで西太后・光緒帝と融和を図ったが、一夜にして理解し合った二人を失った。突然重しがとれた政府は清朝存続をかけて、明治日本の近代化を範とする思い切った国内改革（憲法制定・国会開設・科挙制度廃止・鉄道国有化）を急ぎ推し進めた。

その背景には内外に困難な多くの問題に直面していたことにあった。一九〇〇年の義和団事件以降首都北京に外国の軍隊が常駐するという独立国ではあり得ない状況に陥り、国内にナショナリズムが高揚、米・英をはじめとする欧州列強国と東アジアの雄日本に対する排斥運動が起きた。内政では異民族征服王朝である清朝を倒し、漢民族による政権樹立を目指す武装蜂起が各地で繰り返されその鎮圧に苦しんでいた。

チベットに対しては四川総督趙爾豊率いる清国四川軍が五年からチベット東部の国境沿に軍事圧力を強めていたが、一〇年二月一挙にラサへ侵攻制圧した。自ら欽差大臣を兼務するとともに、中央チベットを「西蔵省」東

チベットを「西康省」とし清国の領土に編入した。
この時僅か帰還三か月であった十三世は、またもや亡命を余儀なくされることになった。今度逃げる先はもはや英領印度にしかなかった。
しかしチベット国の経済権益を確保している英国は、清朝の強権的支配を排除し完全な独立を目指すダライ・ラマ十三世の願望を積極的に支援することはなかった。
一〇年一月末まで大谷光瑞は印度に滞在していた。カルカッタの日本総領事館を通じ、チベット入国を申請したが印度政庁は拒否し続けた。許可されれば帯同させている青木文教の派遣を準備していた。光瑞は西欧行き客船に乗船後も、青木を暫く聖地探索に従事させながらカルカッタで入蔵の機会をうかがわせていた。

まさにその時光瑞・青木文教のもとに幸運が舞い込んだ。四川軍の侵攻という緊急事態の発生より十三世が印度ダージリンに亡命してきた。青木はこの機会を逃すまいと、ロンドンに向かっていた光瑞に電報で報告、指示を待った。光瑞から「拝謁を試みよ」との命に、かねてより十三世謁見の時のために用意していた「日本浄土真宗本願寺法主大谷光瑞」の親書を携え、ダージリンに向かった。
側近の随員に光瑞の書状を渡し、謁見を願っていることを告げた。そして三月五日五台山会見以降光瑞に親近感を抱く十三世は、遂に日本浄土真宗僧青木文教を公式に引見した。その後も青木は別殿で幾度も私見を許され、留学生交換の実現を訴えた。

一九一〇年一月末、光瑞は橘瑞超と共に予定通り孟買から欧州に旅発った。今度の印度旅行は前回とは打って変わった印度政庁の対応に、不満を持ったことは間違いない。しかし青木文教がチベット仏教法主ダライ・ラマ十三世との劇的な謁見を成し遂げたとの良報を受け、西蔵大蔵経を入手できる期待を抱かせた。
四月ロンドンに着くが、光瑞をして驚かせたのが、楼蘭と敦煌で発掘・発見された古文書の西欧での意外な反響であった。

（つづく）

参考文献は最後に記します

私の伊達政宗像を訪ねて（その四－⑦）

安藤剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
政宗の海外への残夢は消えず
その五：仙台城と瑞巌寺
瑞鳳殿と政宗終焉の地を訪ねて

【政宗の海外への残夢は消えず―嫡孫光宗の悲劇】

支倉常長が八年に亘る遣欧使節から帰国した直後に仙台藩内に禁教令が発せられ、政宗の海外への夢と野望は虚しく封印されたが、政宗の海外への残夢は消えず、嫡孫光宗の悲劇を招いていたと思われる事象を、松島円通院の光宗霊廟三慧殿で見た。

〈1〉松島のバラ寺・円通院を訪ねて

松島湾に面した土産物店街から参道を入ると、政宗の瑞巌寺を正面に、北に正室愛姫の陽徳院、南に嫡孫光宗の円通院と長女五郎八姫の天麟院、四軒の菩提寺が並んでいる。正室と長女の菩提寺があるのは当然として、子女や孫が数多くいる中で、なぜ孫の光宗の菩提寺だけがしかも政宗公のすぐ隣にあるのか、気にはなっていた。

光宗は、寛永四年（一六二七年）に、仙台藩二代藩主忠宗と家康の孫娘振姫との間に生まれた次男で、長男の虎千代丸が七才で夭折したため世子となり、三代将軍家光から偏諱を賜り、光宗を名乗った。

父忠宗は、九歳の時に生後間もない家康の五女市姫との婚約が成立していたが、市姫が三歳で夭折したため、代わりに家康の次女督姫と池田輝政との娘振姫を、将軍秀忠の養女として正室に迎えていた。

母振姫の父池田輝政は、信長の重臣池田恒興の次男で信長に近習し本能寺の変後は秀吉に仕えた。長久手の戦いで父と兄が討死、家督を相続し大垣と岐阜の城主となる。秀次事件で妻妾ら三九人が秀吉の命で斬首される中、正室になっていた妹は助命された。秀吉の死後、家康に接近して石田三成襲撃事件に参加、関ヶ原合戦では南宮山に布陣する毛利勢の参戦を阻んで東軍勝利に貢献、戦後に西国大名の抑えとして姫路城主五二万石を賜わる。

振姫の母督姫は、本能寺の変で無主状態になった甲斐信濃を巡る争乱の和睦と同盟の条件に、後北条氏五代当主氏直の正室に嫁いだが、秀吉の小田原征伐で後北条氏が滅亡、義父家康の助命嘆願で高野山に流された氏直が死去すると、秀吉の肝煎りで池田輝政の継室に再嫁した。

光宗は、家康を曾祖父、政宗と輝政を祖父に、戦国大名の雄が生んだ貴公子であり、血統書付きサラブレッドであり、仙台藩三代藩主を約束された光宗は、徳川幕府と仙台藩を繋ぐ鎹であった。（一六八頁の相関図参照）

光宗は、若年ながら従四位下侍従越前守に叙位される。侍従とは国持大名と同格、世子の身ながら先官侍従の上位に列せられ、外様の名君と将来を嘱望されていたが、正保元年（一六四四年）一〇月に仙台に初入部、翌年三月に江戸へ戻った半年後、十九歳の若さで急死した。

父忠宗の衝撃と悲しみは如何ばかりだったろう。忠宗が、藩祖政宗が再興した瑞巌寺のすぐ隣に、光宗の菩提寺円通院を建立したのも当然かもしれない。

一昨年（令和元年）一〇月中旬に仙台市北山の光明寺に支倉常長の墓を訪ねた翌日、瑞巌寺の障壁原画特別展を鑑賞した後、隣接する円通院に初めて立ち寄った。

瑞巌寺の門前に並ぶ洗心庵を右に折れ、山門を潜ると雑踏から静謐な別世界に誘われた。石庭の「雲外天地の庭」は、松島湾に実在する七福神の島々を表すという。

本堂の大悲亭は、江戸の納涼亭を愛息の早逝を悼んだ忠宗が解体移築させたもので、寄棟造の萱葺大屋根の佇まいが、小堀遠州の作と伝わる心字池を中心にした前庭と相まって、禅寺らしい雰囲気を醸していた。

本堂の横から裏手に回ると、墓地に向き合う形でバラ園があり、バラの甘い香りが広がってきた。一〇〇坪はあろうか。赤や白や黄色の秋バラが咲き競っていた。

バラ園に十文字に敷かれた敷石の中央に、マホガニー色の御影石で造られた仏塔風噴水が据えられ、仏教とキリスト教の融合したバロック的雰囲気を演出したのだろうが、なぜ禅寺に洋風バラ園なのか、違和感を覚えた。

バラ園から竹林を抜けると、美しく苔生す瞑想の庭と命名された禅林が広がり、紅葉し始めたモミジの黄と赤と緑の織り成す彩色豊かな和風庭園をカメラに収めた。

杉林の奥の凝灰岩壁に掘削された洞窟に、古い供養塔の並ぶ様は、まさに霊場の世界である。その奥に、宝形造本瓦葺の三慧殿が見えてきた。政宗の嫡孫光宗の霊廟で、風雨に晒されて色褪せた三間四方の建物は、霊屋建築として宮城県最古、国の重要文化財に指定されている。

正面扉が両開きされて、仕切りのガラス越しに宮殿型の厨子が見えていた。照明が当てられ、暗闇に浮かび上がる華麗な装飾の厨子の中に、白馬に跨る衣冠束帯姿の光宗像が安置されていた。政宗と家康の血を受け継ぎ、将来を嘱望されながら、早世した光宗の無念は如何ばかりだったろう。光宗の安寧を祈り合掌した。

〈2〉光宗霊廟三慧殿の西欧文化模様

正面扉の横に置かれた説明板に『厨子に描かれた西欧文化模様』と題した図解があり、厨子の扉の模様について「バラ模様：荘厳な厨子の図案は、支倉常長が西欧より持ち帰った、ローマを表すバラ、「日本最古の洋バラ」は支倉が持ち帰った、仏教では無縁のトゲのある洋バラが丹念に描かれている」「水仙模様：フィレンツェ市の象徴の水仙、アカンカス、西洋ぶどう、ガーベラ、蘭など様々な文化模様として描かれている」とあった。



厨子の造作の模様についても「ダイヤ模様：皇族の紋を細かいダイヤの形で囲み模様として」「クロスつなぎ：

切支丹弾圧の時代、ローマに行った証としてまっすぐに十字架を描かず斜めにつなぎ合わせ、菱形が目立つ様に」「スペード模様：光宗君は家康の曾孫にあたる為、葵の紋を描いたが、実際にはスペード模様が描かれている」とかなり詳細に説明されていた。

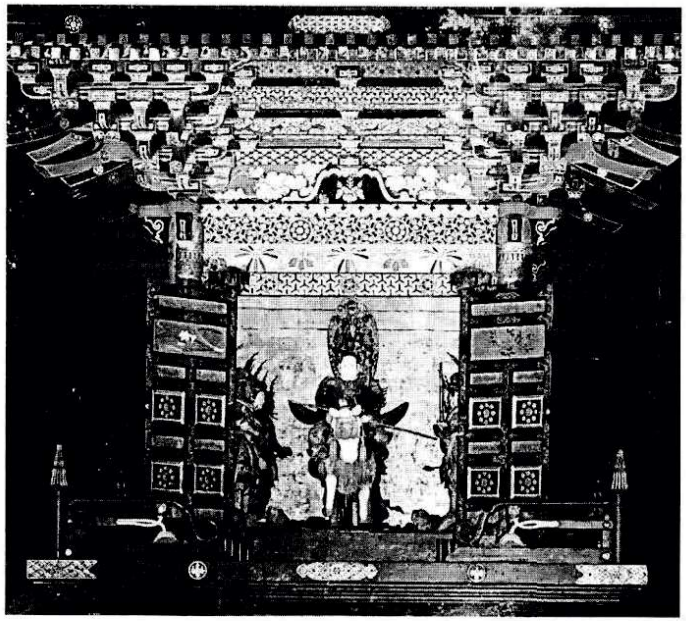
厨子に描かれたバラの花にあやかり、境内にバラ庭園が造営され、バラ寺と呼ばれる由縁を、初めて知った。

静謐な庭園を持つ臨済宗妙心寺派の円通院の霊廟に収められた厨子に、なぜ常長が持ち帰った西欧文化模様が装飾されているのか、持ち前の好奇心が擽られてきた。

厨子は本来、仏像や位牌などを安置する祠で、確かに光宗像と十一面千手観音立像が収められてはいるが、装飾模様は、釈迦や天女や鳳凰や霊獣など仏教や道教の世界とは異次元の西欧文化の世界である。

山門前の立看板に「華麗な彩色模様には政宗の好みが引き継がれています」とあり、水玉や山形模様の陣羽織や幾何学模様の寺院装飾など、粋で派手好みの政宗がキリスト教を容認して海外交易の使節を西欧に送った国際感覚こそ、華麗な彩色模様の原点なのかもしれない。

パンフレットに「当時鎖国制度を施行していた徳川幕府に対しては、伊達家の霊廟と申し立て、その扉は開けることはなかった、そのため三世紀半もの間公開されずに現代に至った伊達藩の秘蔵である」ともあった。



幕府に霊廟だと申し立てて、扉を開かせなかったとは、忠宗が幕府を憚る装飾模様であることを承知の上で描かせていた証であろう。この西欧文化模様の世界は、光宗の生前の日常生活の空間だったに違いない。早世した愛息への父親としての愛情から、光宗の好んだ西欧文化模様を密かに厨子に描かせたのではないだろうか。

西欧文化模様の説明に「クロスつなぎは、十字架を斜めにつなぎ合わせ菱形が目立つように金箔が塗られている」とあり、確かに十字架にも卍崩しにも見えてくる。逆さ卍であれば、支倉常長の家紋ではないか。

厨子前部上縁の帯状の毘沙門亀甲文様の中に、ロータリークラブの歯車マークに似た模様が三個描かれていたが、牛車の車輪にも、紡ぎ車にも、船の操舵輪にも見える。操舵輪だとすると、常長一行を乗せた遣欧使節船「サン・ファン・バウティスタ号」を想起させるではないか。

もし厨子の装飾模様に、十字架と逆さ卍と使節船が隠されているとしたら、それは幕府の禁教政策下で抹殺された遣欧使節支倉常長の世界である。まさにダヴィンチコード、隠された真実を後世に伝える暗号ではないか。

それでは光宗と常長の間に接点があったのだろうか。光宗が生まれた一六二七年は、遣欧から帰国した常長が死去した六年後、二人に直接の接点はない。しかし政宗没年の一六三六年に光宗はまだ一〇歳足らずだが、幼い光宗を抱きながら、常長の持帰り文物を見せて叶えられなかった海外への夢を語り聞かせていたかもしれない。

晩年の政宗が小姓に語った言行録『木村宇右衛門覚書』に「我一年黒舟を作らせ南蛮へ渡す、国の重宝求めにあらず、異国への聞こへのため成」とあり、禁教下でなお自分の遣欧使節派遣を誇らしげに政宗は語っていた。

〈3〉三慧殿に隠されたキリスト教の世界

厨子に描かれた西欧文化模様の世界が、生前の光宗の日常生活の空間、それも支倉常長の世界だったとしたら、幕府の禁教と弾圧の下で虚しく潰えたはずの、海外へ馳せた政宗の雄大な夢が、残夢となって幼い嫡孫光宗に引き継がれ、光宗の中で西欧文化への憧憬とキリスト教への信心の芽が育まれていったのかもしれない。

もしかしたら、光宗は、禁制のキリシタンになっていたのではないだろうか。予想もしない思考の展開に慄然とした。家康の曾孫であり政宗の孫であり、仙台藩三代藩主を約束されていた光宗が、キリシタンとは、決してありえない、妄想に過ぎない、と打ち消してはみたが。

衝撃的な円通院観光から帰宅すると、三慧殿の西欧文化模様とキリスト教を結びつける接点が本当にあるのだろうか、妄想のような仮説の裏付け調べに没入していった。そして幾つかの興味深い情報を見つけ出した。

一つは、三慧殿の厨子の右扉に描かれた赤いバラの花が暗示する世界である。三慧殿の説明板に、支倉常長が西欧より持ち帰った、ローマを表すバラ、とあったが、赤いバラの花は、キリストが十字架で流した赤い血潮をイメージしているといわれ、殉教を指すことからキリスト教を象徴している、というのである。

そして、カトリック教会で祈りに使う数珠状のロザリオは、ラテン語のrosariumに由来しており、バラの冠という意味もあり、輪状に繋がれた珠を繰りながら唱える祈りが、バラの花輪を編むような形になるからだという。

ロザリオと聞いて思い浮かぶのが、慶長遣欧使節持帰り絵画「ロザリオの聖母像」である。改めて聖母像の説明を見ると「三日月の上に立つ聖母マリアが、右手に幼児キリストを抱き、左手にロザリオを持つ図模様の聖母像。マリアの周囲にはバラの花のついたロザリオをめぐらし天上には父なる神と天使が描かれる」とあり、ロザリオの数珠の中に一〇個のバラの花が描かれていた。

厨子の扉に描かれた赤いバラの花には、キリストの殉教と聖母マリアへの祈りが込められていたようである。

それでは、赤いバラと対比する厨子の左扉に描かれた白い水仙は、何を意味しているのだろうか。清楚な少女を思わせる水仙の花が、なぜ青年光宗の霊廟の扉に描かれているのだろう、不釣り合いにみえるのだが。

光宗の早世を暗示させる水仙に纏わるギリシャ神話があった。スイセンの学名はNarcissus、若さと美しさを兼ね備えながら、愛を寄せてくる男性や女性を無視していたナルキッソスが、泉に写る自分の姿に恋をして、やがて水に落ちて溺れ死に、水辺にスイセンの花が咲いていたという神話で、ナルシストの語源になったという。

水仙は、外見は清く美しいが麻酔性のある有毒植物で、花言葉が愛と希望と自惚れ、周りの愛を受け入れず、自己中心でプライドと自惚れが強く、自ら早世の運命を辿ってしまった若き光宗を思わせる話である。

一般に厨子の中に収められる像は、礼拝対象の仏像か祖師像、または故人の守り本尊か、故人を模した座像か立像が多いようだが、三慧殿の宮殿型厨子に収められている光宗像は、公家の正装である衣冠束帯姿で弓を片手に白馬に騎乗しており、珍しくむしろ異形でさえある。

白馬で想起されるのは、ギリシャ神話の翼を持った天馬ペガサスや神社の神馬、白馬に騎乗する姿で想起されるのは、軍神と呼ばれた八幡太郎義家や川中島の上杉謙信、そして現人神と崇められた戦前の天皇である。

いずれの白馬も、神を象徴しているが、白馬に乗る光宗像に、何か特別な意味が込められているのだろうか。

キリスト教に関連する白馬について調べてみると、新約聖書の最後に収録されている、預言書的聖典といわれる「ヨハネの黙示録」の中に、白馬に乗って天国から地上に再臨するイエスキリストの話があった。

ヨハネは、キリストの十二人使徒の一人、暴君ネロに続いてユダヤ人とキリスト教徒を迫害したローマ皇帝ドミティアヌスによって流刑にされたエーゲ海のパトモス島で、神の啓示を受けて黙示録を書き記したといわれる。

黙示録十九章十一節に「われ開かれたる天を見しに、見よ、白き馬（あり）、またその上に座し給ふ者は信、また眞と稱へられ、且つ義をもて裁き、また軍し給ふ」

十三節に「彼は血に浸されたる衣を纏ひ、またその名を神の言と稱へられ給ふ」とあり、白馬に乗った者とは、信と眞、英文でFaithful and True、自分の約束に忠実で真実な方、すなわちメシア（救世主）キリストである。

白馬に乗り天の軍隊を従えて天から地上に再臨し、悪い獣や偽の預言者を裁いて祝福をもたらしたキリストの姿を、白馬像の光宗は投影しているのかもしれない。

厨子の光宗白馬像の背後に、十一面千手観音立像が収められており、千手千眼観音とも呼ばれ、千の手の中に眼があり全てを見通して、千の手でどんな衆生も漏らさず救済する、無限の慈愛を表しているといわれる。

如来は悟りを開いた最高位の仏、菩薩はまだ修業の身であり、阿弥陀如来が衆生を救いたいと願い、流した涙から千手観音を生み出し、人間界に降りて人びとを救えるように、自分を菩薩の位に下げてきたのだという。

頭部に阿弥陀如来の化仏を頂き、自分の位を下げて人びとの苦しみを救う姿は、人類を原罪から救うため身代わりに十字架の磔刑になった神の子キリストに通じるではないだろうか。光宗が千手観音像の姿を借りて、密かにキリストに祈りを捧げた念持仏だったかもしれない。

〈4〉光宗とキリスト教の接点

それでは光宗は、禁教下の江戸に在って、いつどこでキリスト教の世界に触れることがあったのだろうか。

光宗を巡る親族大名の相関図（次頁）を作成してみると、親族に元キリシタン大名の多さが際立って見える。

光宗の母振姫の実父池田輝政の先妻糸姫の父中川清秀の従兄弟に有名なキリシタン大名高山右近がいる。清秀と息子二人も洗礼を受けており、清秀の妹が嫁いだ古田織部もキリシタンといわれ、織部は政宗の茶の師である。

輝宗の重臣四人がキリシタンで告訴され、輝政自身もキリシタンだったとする説が播磨の切支丹史にあり、振姫の実母督姫に仕える二人の高貴な若い婦人が受洗していた記録がイエズス会日本報告集にあるという。

光宗の妹鍋姫が嫁いだ立花忠茂は、天正少年遣欧使節を送った大友宗麟の家臣立花宗茂の養嗣子であり、政宗の十男宗勝が忠茂の妹を継室に迎えている。母振姫の姉茶々姫も、キリシタン大名京極高知の嫡男高広に、政宗の四女で忠宗の妹千菊姫もその子高国に嫁いでいる。

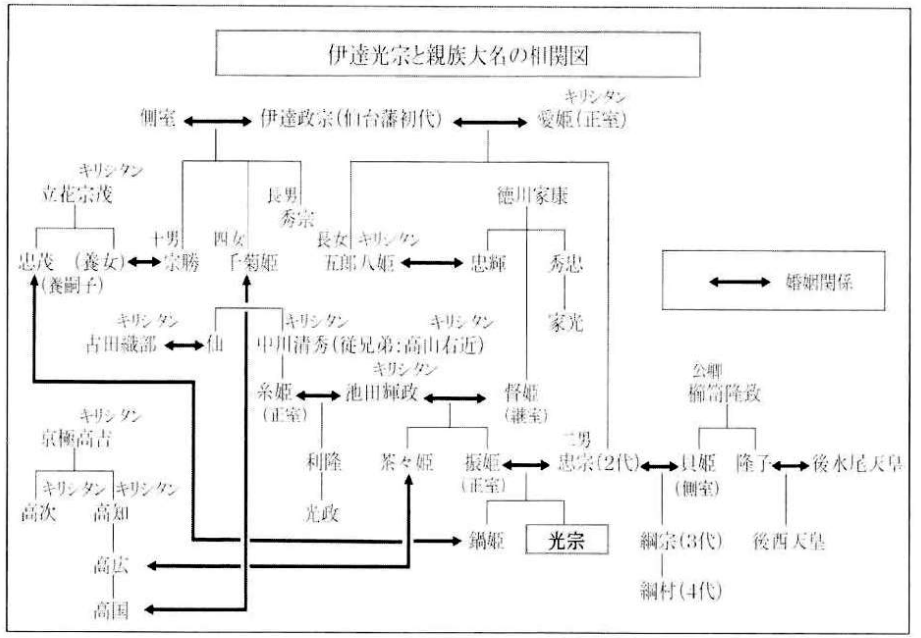
正保元年（一六四四年）の鍋姫と忠茂の婚儀に、忠宗、夫人、光宗、秀宗、宗勝らが、京極高国、池田光政ら親類を招待して祝宴を挙げたと伊達治家記録にあり、江戸に住まう光宗が、親族の元キリシタン大名と親交を深めて、影響を受けていた可能性は十分にあったのだろう。

慶長十八年（一六一三年）に遣欧使節団を派遣した政宗は、キリスト教に寛容で、仙台藩に宣教師を迎えて家臣に洗礼を受けさせてきたが、その政宗が死去して幕府のキリシタン弾圧が更に激しくなった一六四〇年代に青年期を迎えた光宗を、御禁制のキリスト教の世界に誘った人物が身近にいたとしたら、それはキリシタンだったといわれる政宗の正室で祖母の愛姫と長女で伯母の五郎八姫ではないだろうか。

愛姫は、天正十八年（一五九〇年）に二三才で秀吉の奥州仕置により人質として上洛、京の聚楽第に住まい、やがて伏見へ移り、秀吉の薨去で大坂に移住、関ヶ原合戦後の慶長八年（一六〇三年）に江戸に移り、一六五三年に八六才で逝去するまで領国に帰ることはなかった。

五郎八姫は、京都聚楽第で生まれ、母愛姫と伏見・大坂・江戸に移り住み、慶長十一年六月に初めて仙台に入り、十二月に家康六男忠輝と結婚して越後高田城に住むが、元和二年（一六一六年）に夫忠輝が改易されると離縁されて江戸の仙台藩屋敷に戻り、元和六年に政宗の指示で仙台へ移住して六八歳で死去した。

忠輝が父家康に疎まれたのは、大坂陣での怠慢といわれているが、東印度会社平戸商館長コックス日記に、キリスト教や外国貿易に深い関心を持っていたこととあり、忠輝と五郎八姫ともにキリシタンだったようである。



五郎八姫の誕生した文禄三年は、京都だけで五百人の受洗者が生まれたといわれ、秀吉が当初布教を保護して天正十一年に大坂教会が建てられ、高山右近の勧めで蒲生氏郷、黒田孝高、小西行長が入信、文禄三年に京都に修道院や聖堂が建てられ、明石掃部、京極高知、蜂須賀家政が入信、キリシタン内藤如安の妹内藤ジュリアが中心になり、大名夫人たちに布教活動を行っていたという。

愛姫と五郎八姫母子が、京と伏見で過ごした一〇年余の間に、キリスト教の世界に入ったとしたら、天正年間に高山右近に教化された細川忠興の正室玉子（ガラシャ）の誘いがあったのかもしれない。

忠興は、政宗が九曜文の家紋を貰い受けた昵懇の仲で、伏見城下の伊達屋敷の南西隣に、長岡越中守（細川忠興）屋敷があり、細川ガラシャと連れ立って、伏見のイエズス教会に通う愛姫と五郎八姫母子の姿が浮かんでくる。

光宗は、キリシタンだった祖母愛姫と伯母五郎八姫との接点は、いつどこであったのだろうか。

光宗は、寛永四年（一六二七年）江戸で生まれ、正保元年（一六四四年）十月に仙台に初入部、翌年三月に江戸に戻った以外の十八年の人生の殆どを江戸藩邸で過ごしており、慶長八年（一六〇三年）以来江戸に住まっていた祖母愛姫の手元で世子として養育され、祖母の影響で幼少からキリスト教の世界に触れていたに違いない。

急死する九カ月前に仙台に初入部した光宗は、支倉常長が帰国した一六二〇年に仙台に移り住んできた伯母五郎八姫と会って、キリスト教について語り合い、常長持帰りのキリスト教関連資料に触れていたかもしれない。

江戸藩邸の光宗付き家老に古内伊賀の名がある。後の伊達騒動の寛文事件で酒井大老邸の原田甲斐刃傷事件の生き残りとなる古内志摩の実父であり、支倉常長をメキシコに迎えに行き洗礼を受けて帰国したサンファン号船長横澤将監の娘を正室に迎えた古内義実である。

元和九年十二月七日に政宗が家光に仙台領内の切支丹取締り強化を要請されて国元の石母田大膳・茂庭周防・津田近江宛て書き送った書状の差出人三人の筆頭に古内伊賀の名があり、この指示によりキリシタン家臣後藤寿庵の追放とカルバリヨ神父らの広瀬川畔殉教が起きた。

古内伊賀は、寛永十七年（一六四〇年）に後藤寿庵の去った水沢福原を知行されると、逃亡した主君寿庵に置き去りにされたキリシタン家臣団を時宗に改宗させて召し抱え、福原足軽組を組織したといわれる。

伊達治家記録の寛永二〇年十二月二九日の条に、光宗が江戸城に登城して従四位下に叙され侍従に任ぜられた記述に続いて「此年、嗣君御部屋の老として古内伊賀義重を附らる」とあり、光宗が仙台初入部する前年に、光宗付き家老に任じられたようである。

伊達治家記録の正保二年（一六四五年）正月五日の条に、初入部した仙台城で正月を迎えた嗣君光宗が、片倉小十郎重長宅へ御饗応として御出の際「勝手へ瀬上淡路景純、古内伊賀義重伺候す」と記述あり、三月二九日の条に、仙台から江戸に戻った光宗が江戸城に登城して公方様に御目見した首尾を、瀬上淡路と古内伊賀が連名で御国奉行宛に書き送った記述がある。

世子光宗の仙台初入部に備えた光宗付き江戸家老人事に古内伊賀が抜擢された理由はなんだったのだろうか。

古内伊賀が、キリシタンに縁故が多く、寿庵の後始末を任された現実主義者であり、禁制キリシタン対応の穏健な適任者として、キリスト教に傾倒していく光宗を教諭する役目を託されていたのではないだろうか。

三慧殿の厨子に安置される光宗の騎馬像の左右に光宗に殉死した家臣七人の神将形立像が収められているが、明治になって伊達家三十一代当主となった伊達邦宗公の著書「伊達家史叢談」巻之七「光宗殉死者」の項に、伊達治家記録に記載された七人の外に、後に死亡した古内伊賀と瀬上淡路の二人の名が加えられていた。

佐々久監修の「仙台藩家臣録」の瀬上淡路の項に「要山様（光宗）御遠行に付、右淡路儀古内伊賀同道仕高野へ罷登候処、於京都正保弐年極月廿二日病死仕候」とあり、二人は光宗の命を救えなかった自責の念で高野山を詣でたのだろう。古内伊賀は、光宗の七年後に死去したが、伊達邦宗公は、二人の特別な使命を知った上で「伊達家史叢談」の光宗殉死者に列記したのかもしれない。

〈5〉愛姫の菩提寺陽徳院を訪ねて

昨年（二〇二〇年）一月に叔父の葬儀で帰省した折、光宗をキリスト教に誘ったと思われる愛姫と五郎八姫の菩提寺を訪ねるべく、松島まで足を延ばした。

愛姫の田村氏は、平安時代後期に蝦夷を征討した坂上田村麻呂の末裔といわれ、政宗とは従兄妹関係にあり、常陸の佐竹氏と会津の蘆名氏に対抗するため、一人娘を政宗に嫁がせた三春城主田村清顕の政略結婚だった。

政宗毒殺未遂事件で田村家の内通が疑われ、一時不仲になったといわれ、正室として長女五郎八姫と後嗣忠宗と早世した宗綱と竹松丸を儲けたが、政宗が八人の側室に長男秀宗ら十二人の子女を儲けており、天下人の変遷に振り回されて二度と故郷東北の土を踏むことがなかった愛姫の心情は如何ばかりだったろう。そんな孤独な愛姫を支えたのがキリスト教だったのではないだろうか。

混雑する瑞巌寺の前を素通り、北隣にある愛姫の菩提寺陽徳院に直行した。訪れる人影もない寺の案内板に「院は二代忠宗が母の政宗正室愛姫の修養道場として開創したものです。三年後の承応二年（一六五三年）に八六歳で亡くなり、院の裏手の高台に葬られた」とあった。

愛姫の霊廟への道案内の表示はなく、当てずっぽうに隣の瑞巌寺と境界する路地から、本堂裏に通じる山道を辿って長い石段を上がると、鬱蒼とした樹林の中に、煌びやかに装飾された霊廟「寶華殿」が建っていた。

霊廟の説明板に「陽徳院御霊屋（寶華殿）は孫の綱宗により造営され、宝形造銅板葺九尺四方で、平成二一年に創建当初の豪華絢爛な姿に復元された」とあり、黒漆の外壁に桟唐戸や蟇股が金箔と極彩色に彩られ、経ケ峯で見た政宗の霊廟瑞鳳殿を彷彿させる華麗さである。

御霊屋の内部は、金箔を押された板壁で、天井に濃彩で花等が描かれ、禅宗様須弥壇に、陽徳院座像と念持仏と位牌が安置されているという。安寧を祈り合掌した。

閉じられた両扉に、青白色の花が四つ描かれ、女性の霊廟らしい慈愛溢れる色彩である。陽徳院様御夢想之書付に「色良き花の枝をこそみる」とあり、愛姫が生前好いていた花なのだろう。四つの花の上に描かれた左三つ巴文は、愛姫の実家田村家の家紋だが、伊達家の家紋がどこにもないのは、どうしたことだろう。

巴紋のすぐ上に赤い花が描かれていたが、つる状の枝からバラの花だとすると、三慧殿と同じ赤いバラが寶華殿にも描かれていたことになる。やはり光宗と愛姫はキリスト教の象徴であるバラの花で繋がっていたのだ。キリシタン光宗の原点は、祖母愛姫にあったに違いない。

〈6〉五郎八姫の菩提寺天麟院を訪ねて

もしかしたら五郎八姫の菩提寺天麟院にも、陽徳院と同じ発見があるかもしれない。胸をときめかせ、瑞巌寺前の雑踏を抜け、円通院隣の天麟院に直行した。

寺務所の墓所広告板に「五郎八姫とは、母正室愛姫が生まれた女の子に男名をつけると次は男子が生まれるという謂れから五郎八姫と名づけたと言う」とあった。

政宗と正室愛姫との間に結婚十五年にして生まれた待望の第一子で、関ヶ原合戦の前年に、天下取りを目指す家康の政略結婚で、家康の六男忠輝と婚約、七年後に結婚して越後高田城に住まうが、忠輝は大坂の陣での怠慢もあり父家康に疎まれ遠ざけられてしまう。

家康の死の三カ月後に、忠輝は兄秀忠に改易されて伊勢に流罪となり、離縁された五郎八姫は、政宗に引き取られて二七才で仙台に移り住んだ。その後、周囲に勧められても終生再婚しなかったのは、離婚を認めないキリスト教の信仰があったからといわれている。

菩提寺天麟院の横の五郎八姫御霊屋参道の石段を一〇〇メートル程登り切ると、正面に宝形造檜皮葺屋根に白壁の清楚な霊廟「定照殿」が建っていた。

寛文元年（一六六一年）に六八才で死去、二年後に四代藩主綱村によって霊廟が創建されたが、現在の御霊屋は二〇一六年に改修されたものだという。

光宗や愛姫のような豪華絢爛な霊廟を期待していただけに、白漆喰の壁に装飾が火灯窓だけというあまりに質素な建物は、衝撃だった。扉が閉じられ確認できなかったが、天麟院殿瑞雲全祥尼大姉の戒名ではなく「伊達五郎八姫之墓」と刻字された大きな石碑が収められているという。最後までキリシタンだった証ではないだろうか。

人質同然の母愛姫を江戸に残し、仙台での孤独な四〇余年の後半生は、彼女にとって何だったのだろう。そんな彼女を支えたのは、キリスト教だったに違いない。

政宗は、政略結婚に翻弄された薄幸な娘を仙台に引き取り、娘の幸せを願いながら、禁制のキリスト教への信仰を黙認していたのではないだろうか。

両扉に描かれた金色の九曜紋は、政宗が細川忠興から貰い受けた家紋である。忠興の正室は、キリシタンの細川ガラシャ、霊廟に唯一装飾された九曜紋にキリスト教との繋がりを思うのは私だけだろう。

母愛姫の霊廟寶華殿で見かけた赤いバラの花が描かれておらず、当てが外れた思いだが、平成二〇年に、五郎八姫が忠輝と一〇年の新婚生活を過ごした越後高田城のある新潟県上越市で開催された「高田城ロードレース大会」に参加した折、立ち寄ったカトリック高田教会で見せていただいたステンドグラスの五郎八姫の緑色の小袖に赤い花が描かれていたことが思い出された。

教会堂の上段に白ベールの尼僧姿で数珠を手に蓮の前で合掌する姿が、下段に髪を解いてロザリオを両手に焼香台を前に座する小袖姿が描かれ、マリオ神父は、忠輝も五郎八姫に影響されて禁制のキリシタンになったため、家康は離縁改易させたのではと話しておられた。

諏訪市の忠輝菩提寺貞松院に、信長から秀吉そして家康に渡った一節切「乃可勢（野風）」が伝わっており、家康が死期に忠輝の生母茶阿局を通じて忠輝に贈ったといわれる。事実なら家康が嫌っていた忠輝に、天下人に引き継がれてきた名笛を託すものだろうか。

幕府の創生期に三河以来家康を支えて幾多の戦陣を勝ち抜いてきた譜代武功派と、平時の領国経営に行政手腕を発揮する新参吏僚派が対立するなか、将軍職を譲った三男秀忠の立場を慮り、幕藩体制安定のため、大久保忠隣ら武功派が擁立せんとする六男忠輝を遠ざけ、家中の分裂を回避する苦渋の判断があったのかもしれない。

五郎八姫と忠輝の間に隠し子がいたとする話がある。伊達氏研究家上生慶子氏の著書「伊達政宗娘いろは姫」に「宮城県図書館蔵「伊達文庫」の「伊達氏譜系」に、天麟院の二世住職黄河幽清和尚は、五郎八姫と松平忠輝の子供だったとある。忠輝の配流後に妊娠が分かったが、政宗は父家康に疎まれ兄秀忠に改易させられた忠輝の男子を幕府を憚り密かに仏門に入れたのだろう」とあった。

東京都あきる野市の大悲願寺に、政宗が小田原参陣の直前に自らの手で刺殺したとされる弟小次郎を隠匿しており、そこに幽清も預けていたという説もあるらしい。

小次郎生存説の裏付けとなる大悲願寺に残る古過去帳に、後世の加筆がありその信憑性に疑問を抱くが、預けたのが五郎八姫の隠し子だとすると、在り得る話である。

大悲願寺の住職海誉上人の叔父が、家康が関東に入府する折に師檀の関係を持ったとされる増上寺十二世観智国師源誉上人、家康と政宗の係である幽清の隠匿を家康が源誉上人を通じて海誉上人に託したのかもしれない。

大悲願寺に伝わる政宗書状「白萩文書」に、先日訪問した折に庭の白萩が見事だったが、その時は言い出せなかったが、その白萩を所望したいとあり、大悲願寺に隠匿していた弟小次郎に会いに行ったといわれている。

白萩文書の元和八年（一六二二年）は、五郎八姫が仙台に移った二年後、大悲願寺に預けていたのが、弟小次郎ではなく五郎八姫の子で、忠輝との離縁の翌年に生まれたとすると五才になる。仙台に移り住んだ母の許に送り届けて欲しいという書状だったのかもしれない。

京に生まれ江戸で育ち、雅な都会生活に馴染んでいた五郎八姫が、母愛姫を江戸屋敷に残して見知らぬ田舎の仙台にひとり移り住んだのも、大悲願寺に隠匿していた我が子を引き取るためだったのではないだろうか。

昨年（二〇二〇年）一〇月下旬にGOTOトラベルキャンペーンを利用して松島を再訪、ようやく天麟院ご住職ご夫妻に面談することができた。

母屋の玄関口で、裏の墓地に五郎八姫の霊廟を参拝してきたこと、霊廟に俗名のお墓が収められていると聞いたが、五郎八姫がキリシタンだった証しなのでしょうかと率直にお尋ねして、更に、越後高田城とカトリック高田教会を訪ねて来たこと、忠輝公の菩提寺貞松院に蔵されている名笛の由来など、五郎八姫への思い入れを披瀝すると本堂内に招き入れていただいた。

本堂の中央祭壇に大きな後背を持つ本尊の釈迦如来座像、右の祭壇に天麟院と忠輝公のご位牌、左の祭壇に開山の瑞巌寺百世洞水禅師木像が安置されていた。

天麟院の位牌に合掌、あなたは本当にキリシタンだったんですか、忠輝公との間に本当にお子さんがいたんですか、と問い掛けてみた。そして五郎八姫の隠し子が二世住職だったという話がありますが、と本題に入った。

ご住職は、これがその二世の位牌です、と洞水禅師木像の前に置かれていた高さ八〇センチはあろう灰色に変色した位牌を指差した。そして、政宗が刺殺したとされる弟小次郎を寺に隠していたといわれており、五郎八姫の隠し子も僧侶にして隠していたことはあるかもしれない、と話された。

そして忠輝の改易で離縁された五郎八姫が、四年後の元和六年に仙台に下向して、仙台城内の西館か、宮城郡下愛子の屋敷で、後半生を送ったといわれるが、越後高田から侍女や家臣が付き添ってきたという。

わざわざお付きが付いてきたとは、幕府に憚る隠し子がいたからではないだろうか。隠し子が長じて母の菩提寺の住職になっていたとしても、不思議ではない。

五郎八姫のキリシタン説について、ご住職は、当時のキリスト教は流行りのようなもので、誰もがキリシタンになっていた時代であり、洗礼までは受けなかったとしても、キリスト教を信じていたかもしれない。

そして六八才で亡くなったが、八年前に母愛姫を、その五年後に兄秀宗、その一ケ月後には弟忠宗を亡くしており、その翌月に瑞巌寺百世洞水和尚を戒師に落飾して、天麟院殿瑞雲全祥尼を号し、修養道場に天麟院を設けていることから、親兄弟を立て続けに亡くした無常に囚われて、仏教に帰依したのではないだろうかと話された。

人の死を嘆き悲しむのではなく神に召されたと考えるキリスト教には、死者を供養するという概念がなく、相次いで肉親を失った五郎八姫の現実の悲しみを癒してはくれなかったのかもしれない。仏教に改宗したかどうかは知れないが、本尊の釈迦如来像の前で、父母と兄弟の菩提を弔う五郎八姫の姿が浮かんでくる。

天麟院の隣に、尖塔に風見鶏を付けた教会風の建物があった。松島町立松島保育所とあり「この建物は教会だったのですか」と尋ねると「昔から保育所でした。五郎八姫に因んだデザインなのでは」という返事だった。五郎八姫がキリシタンの祈りを捧げられるよう教会様式の建物を門前に建てたとは、松島町の粋な計らいである。

後日、瑞巌寺宝物館の主任学芸員堀野真澄氏に、五郎八姫のキリシタン説についてお尋ねしたところ「五郎八姫様は熱烈な禅宗信者であり、キリシタンであったということはあり得ません。法身禅師像への納入品がそれを物語っていますし、母陽徳院愛姫様の実家、坂上田村麻呂に連なる富山観音堂の修復、梵鐘の鋳造、瑞巌寺一〇〇世洞水東初禅師に手織りの袈裟を送る等、禅宗に厚く帰依されています。また、伊達家自体が鎌倉時代末期から禅宗を信奉しており、元来伊達家の菩提寺である北山五山は全て禅宗寺院であり、政宗公が菩提寺とした瑞巌寺も臨済宗です。政宗公が対外的にキリシタンを方便として用いたことはありますが、その方便をそのまま信用するのはあまりにもこじつけが過ぎます」と返信があり、法身性西像胎内納入品の資料が参考に添付されてきた。

法身性西和尚は、天長五年に慈覚大師が創建した天台宗の延福寺を、正元元年に禅宗に傾倒する鎌倉幕府執権北条時頼の命により、臨済宗の円福寺に改宗させた瑞巌

寺の開山禅師である。瑞巌寺本堂の仏間の須弥壇に安置される二代開山像の法身性西像は、政宗の正室陽徳院愛姫が没した翌年に雲居禅師の発願で造立されたもので、平成十一年に解体修理された際、その胎内から五郎八姫たちが納めた品々が発見されたという。

胎内納入品は、五郎八姫が亡母の菩提と自身の善処後生を祈念、自身や母の侍女近臣に呼びかけて行った作善行の品々で、毛髪や自筆の写経、金銅懸仏、伽羅の香木などを納めて、金襴袋に「佛果之縁ニ上ル」と自署しており、確かに禅宗に帰依していたのかもしれない。

光宗が仙台に初入部した正保元年（一六四四年）頃の五郎八姫はまだキリシタンだったろうから、二人はキリスト教について語り合っていたのだろう。そして光宗は、従兄弟の幽清和尚と出会い、政宗と家康の孫でありながら、将軍家を憚り寺に隠棲させ、幕府の威光に平伏する父忠宗と仙台藩の現実に、何を思ったことだろう。

〈7〉光宗急死の私的考察：光宗毒殺説

光宗の菩提寺円通院の案内パンフレットに「光宗君は伊達政宗公の嫡孫で幼少の頃より文武に優れ、その才智は政権安定に力を注いでいた徳川幕府にとって恐るべき逸材であった。光宗君は江戸城内において十九歳の若さで卒し、その死因に関して毒殺説と病死説が伝えられる」とあった。光宗の急死はそれ程に突然だったのだろう。

政宗と家康の血を受け継ぐ雄藩の世子が、江戸城内で毒殺されたとは只事ではない。火の無い所に煙は立たぬの喩がある。もし光宗が毒殺されたとしたら、犯人は幕府か、仙台藩か、そして毒殺の目的は何だったのか。

外様の名君と将来を嘱望された光宗を警戒した幕府が毒殺したという憶測も流れたというが、家光が三代将軍の宣下を受けて既に二二年が経っている。家光の強権的な親政によって、外様大名の改易と幕政の改革と武家諸法度の改訂が進められ、幕府の威光は盤石である。

幕府が一雄藩の世子を江戸城内で毒殺するような姑息なことをする必要があっただろうか。しかも光宗の母振姫は、家光の従妹、身内の光宗を毒殺するはずもない。

幕府ではないとすると、毒殺の犯人は誰なのだろう。三慧殿の厨子に描かれた西欧文化模様から思い浮かんだ光宗キリシタン説が、光宗毒殺説に結びつき、私の思索は、おぞましい妄想へ一人歩きしていた。

支倉常長の持帰った西欧文物に触れ、祖父政宗の語る海外への夢に思いを馳せ、祖母や伯母や元キリシタンの親類大名に影響を受け、キリスト教に教化されていく光宗の成長振りに、父忠宗は、鎖国と禁教下で仙台藩の将来を託する不安を抱いていったのではないだろうか。

忠宗が我が子とはいえ、家康の曾孫で将軍家光の従兄妹の嫡男を廃嫡するなど公然と出来るはずはない。病死

と見せかけて排除するしかなかったろう。しかし守政の名君と評される温厚な忠宗が、果たして我が子殺害という苛酷な決断を下せるものだろうか。

ここで思い浮かぶのが、岩手と宮城の県境の秘境といえる一関市大籠で見聞してきた忠宗の非情さである。

備中から製鉄技術者として招かれたキリシタンの千松兄弟が布教を始め、その後、幕府の禁教令で迫害されたキリシタンと宣教師が逃げ込み、キリシタン聖地となった大籠地区で、政宗逝去の三年後に三〇〇人以上の殉教があった。処刑の多くが棄教させる見せしめの公開磔刑ではなく、逃げ惑う信者を見付け次第に斬殺し銃殺する所成敗という大量虐殺で、忠宗の治政下で行われた。

幕府の禁教政策に忠実な忠宗に、キリスト教を信奉する我が子への手加減は許されなかったのだろう。仙台藩の将来を案じた苦渋の決断だったのではないだろうか。

円通院のパンフレットに「当時鎖国制度を施行していた徳川幕府に対しては、伊達家の霊廟と申し立て、その扉は開けることはなかった、そのため三世紀半もの間公開されずに現代に至った伊達藩の秘蔵である」とあった。

幕府に霊廟と申し立て、扉を開けることを許さなかったとは、忠宗の強い隠匿意志が感じられる。幕府の禁じるキリスト教の世界であることを承知で、西欧文化模様で光宗の霊廟を装飾させ、密閉隠匿したのである。

霊廟の扉を密閉して光宗の死を悼むという話で思い出すのが、梅原猛の著書「隠された十字架」である。

法隆寺が蘇我入鹿に滅ぼされた聖徳太子一族の怨霊を鎮魂する寺院だとする梅原哲学が一時一世を風靡した。

聖徳太子の長子山背大兄王一族が自害して焼失した斑鳩の宮の跡地に建つ東院夢殿の厨子に、フェノロサと岡倉天心が千百年の眠りから解き放つまで、ぐるぐる巻きの白布を外せばこの世が終わると言い伝えられ、秘仏として救世観音像が収められてきたが、この救世観音像こそ聖徳太子の等身仏であり、夢殿はその扉を閉じて聖徳太子の怨霊を封じ込めるため建立されたと論じていた。

円通院の三慧殿の厨子に、開かずの間のように密かに隠されてきた衣冠束帯姿の光宗の白馬騎乗像が、私には法隆寺夢殿の救世観音像と重なって見えてくる。

光宗の菩提寺として建立された円通院は、禁教のキリシタンとして若くして命を絶たれた光宗の怨霊を鎮魂する法隆寺であり、光宗の好んだ西欧文化模様で描かれたキリスト教の世界を扉で封印した厨子が収められた三慧殿こそ、光宗の怨霊を封じ込めた夢殿だったに違いない。

〈8〉光宗急死の私的考察：父忠宗との確執

しかし禁制のキリシタンだったというだけで果たして我が子を殺害できるものだろうか。父子の間に何か他に已むに已まれぬ事情があったのではないだろうか。

伊達家の歴史は、父子相克の歴史ともいわれている。伊達家十二代成宗と嫡男尚宗、十三代尚宗と嫡男稙宗の間で争乱を起しており、十五代晴宗は、奥州の親族大名を二分する七年もの天文の乱の末に先代稙宗を倒して家督を相続、十六代輝宗も、家督になった六年後に父晴宗を閉居させてようやく実権を握ることができた。

親子骨肉の争いとなった天文の乱の最中に生まれた輝宗は、父子相克と家臣分裂という悪しき家運を払拭すべく、十八才の政宗に家督を相続した。輝宗四一歳である。

光宗と忠宗の親子関係は、果たしてどうだったのだろうか。光宗が急死した正保二年に、光宗十九才、父忠宗四七才、戦国乱世の天正年間と時代背景は全く違うが、光宗は政宗が家督を相続した歳にはなっていた。

伊達治家記録の「解説」に記載された光宗急死前後の記述から、二人の親子関係をみてみたい。

「嗣君光宗は、正保元年（一六四四年）八月二〇日頃から風疹に罹り気分悪く、二六、七日頃から「毎夜御フルヒ付」、近日は軽快に向ったが「御病気ニ付テ両度マテ上使、色々御懇ノ上意」があり、二七日には老中阿部対馬守重次が上使として、光宗入部の御暇を賜わった」

「十月二日、嗣君光宗は江戸を発駕、九日申刻、仙台城に到着、御迎の諸役人は岩沼町頭近くに罷出、御目見、一門一家一族の輩は中田町河原まで出でて御目見、十日に鷹狩、十二日に城中において御礼に登城した家臣に御目見、嗣君初入部を祝う饗宴が連日饗せられた」

「江戸の忠宗は、第七男安産を注進してきた側近の鴇田周知に書信を賜わり、鴇田の病を案じながら「越前殿（光宗）御無事御大慶ナリ、世上今程ハヤリモノハ鷹歌道ナリ御満足シルヘシ」と書き添えて、光宗が元気で鷹狩や歌道に励んでいることに満足の意を表していた」

「十二月に入り仙台初入部の儀礼的行事が一段落した光宗は、家臣の屋敷に出かけて饗応を受けたり宮城郡中山・権現森で鹿猟したり、多忙の中にも楽しい日々を過しており、光宗は翌年九月八日に江戸で没しているから、この帰国は生前の光宗にとっては最初にして最後のただ一回の帰国であり、鷹狩に饗宴に思う存分若い人生をたのしんだ貴重な時期でもあった」

「正保二年（一六四五年）の正月祝儀を光宗は仙台で迎えた。鷹狩、茶饗、歌会、家臣宅での饗宴等、故郷の春を万喫した光宗は、二月晦日仙台発駕、途中所々で和歌を詠じ、日光山に参詣、三月七日江戸屋形に到着、父忠宗に大鷹、馬、御国袖、白革、白鳥を土産に献上した」

「五月十二日忠宗に帰国の御暇仰出され、十八日江戸発駕、二五日未刻仙台城に帰着した。六月十一日、江戸から嗣君光宗が霍乱の疾に罹ったと通報してきた。七月二六日嗣君病気の飛脚到来、八月十六日に去十三日江戸

発の飛脚到着し、光宗の病気重態の由を知らせてきた」

「二六日に「公上府セラルヘキノ上意」を告げる老中からの奉書が到来、二九日子刻忠宗は急ぎ江戸に到着、九月四日光宗危篤に陥り、九月八日巳上刻遂に卒去した」

「九月九日丑刻光宗の遺骸は江戸を出て仙台に下り、二二日夜松島に於て土葬にした。御束帯石櫃ニ納ム、御太刀御具足等ヲ納ル、御法名要山透関大居士、円通院殿ト号シ奉ル、瑞巌寺監寺洞水座元導師タリ、殉死者七人」

「九月二五日松島において葬礼、その時「微風大雨」「葬礼次第奉行役人等不知」「諸仏事法語不伝」とある」

「世嗣の死を見送った忠宗は、九月二六日帰国の途につき、十月三日夜仙台に帰着した。その間九月二六日から二八日まで三日間、松島において光宗の預め百ケ日の追善を弔修、十月二一日上使が仙台に到着、城中で御鷹の鶴を忠宗に下賜した。十月二七日利府に鷹野に出かけ、二五日には城中で幕府御馬買衆に茶を饗した。十二月四日に岩沼に鷹野に出向いた忠宗は九日白鳥雁鳧五十余羽を獲えて帰城、云々」

忠宗は、光宗の遺骸と一緒に仙台へ下らず、江戸に残っていた。幕府の許可なく江戸を離れられない忠宗に幕府から暇が出たのは九月二二日、忠宗の江戸出立が二六日、その前日に松島で光宗の葬礼が営まれ、二六日から三日間、百ケ日法要が繰り上げで済まされていた。

江戸から仙台まで約八日の行程である。幕府の御暇仰出を受けて即日仙台へ出立していれば、松島の葬礼を四日遅らせるだけで光宗の葬礼に参列出来たし、百ケ日法要を急いで繰上げする必要もなかったろう。

早世した愛息の葬式にも百ケ日法要にも参列しなかった忠宗は、仙台に帰城すると、上使の饗応接待に奔走するばかり、そして四十九日の忌明けを待っていたかのように、利府の鷹野に繰り出し殺生に及んでいた。

伊達治家記録を見る限り、忠宗が愛息光宗の早世を悲しんでいたようには、とても思えない。二人の間にやはり確執のようなものがあったのではないだろうか。光宗急死の忠宗への疑惑は深まるばかりである。

江戸に生まれ江戸で育ち成長していた光宗と、参勤交代で隔年上京する父忠宗との間に、目に見えない溝が出来ていたのかもしれない。視点を変えて見てみたい。

前掲の「伊達光宗の相関図」（一六八頁）をみると、伊達家の親族大名といわれる池田光政、立花忠茂、京極高国は、忠宗の死の二年後に、三代藩主綱宗を遊興放蕩理由に隠居させた伊達騒動の主役三人組である。

この親族三公は、元キリシタン大名として、家康と政宗の血を引き外様の名君と嘱望された若き世子光宗に接近、更に幕閣と結託して政宗亡き後の仙台藩に圧力を掛ける存在になっていったのではないだろうか。

幕藩体制が確立した寛永文化の江戸で育つ光宗は、親族大名に取り込まれながら、幕府創始者家康の曾孫としてのプライドを育む一方で、奥州の雄藩たる仙台藩の世子としての自覚と誇りを果たして抱けていたのだろうか。

ここで家光と父秀忠の確執が思い浮かんでくる。かつて秀忠と母お江が弟忠長を溺愛して、春日局が祖父家康に直訴して家光の後継指名が決着したといわれている。

家光は「権現様天下草創の時、各々の助力によって全うした。大御所もその昔は各々方と同僚であった。しかし某におよんでは、生れたままの天下であるぞ」と公言して、幼い頃から仕えてきた側近の小姓頭番頭六人を若年寄に登用して幕政の中枢に据え、父秀忠の大御所政治勢力を刷新して幕閣を掌握した。

そして家康の江戸城天守閣を建替えた父秀忠の天守閣を、祖父家康を崇敬する家光が父を越えんと巨大天守閣に建替えさせ、更に父が久能山から日光に遷宮した家康の霊廟を豪華絢爛な日光東照宮に造り替えさせた。

光宗もまたそんな従伯父の家光の影響を受けていたに違いない。祖父政宗を崇敬し、長兄秀宗を差し置いて後嗣となった父忠宗を、幕府の威光に諂う奥州の田舎大名と蔑んで、親子間に確執があったのではないだろうか。

光宗の霊廟三慧殿の厨子の正面中央に、五七桐の紋が描かれていたが、秀吉が関白になった時に天皇から下賜された由緒ある家紋で、光宗はこの家紋が気に入っていたのだろう。厨子に装飾される家紋は、この五七桐と両扉に四つの九曜紋だけで、伊達家伝来の三引両紋と竹に雀の紋がない。家康の血を受け継ぎ、江戸で育った光宗は、奥州の外様大名の枠に収まらない成長を遂げていたのかもしれない。

隔年の参勤交代で江戸に上る忠宗は、江戸屋敷に常住して親族大名三公に篭絡され、キリスト教だけでなく幕府の威光に傾倒していく世子光宗の成長ぶりをみるにつけ、自分の死後の外様大名仙台藩の行く末を案じ、光宗排除の覚悟を固めていったのではないだろうか。

光宗が急逝した正保二年に、忠宗は側室との間に四人の男子（宗良・宗倫・綱宗・宗規）を儲けており、光宗排除後の後継者不足の懸念はなかったろう。

特に六男綱宗は、皇室に繋がる血筋にある。後に仙台藩三代藩主となる綱宗の生母貝姫の姉櫛笥隆子が、御水尾上皇との間で後西天皇となる良仁親王を儲けており、綱宗は後西天皇と従兄弟関係にあった。

貝姫が公卿櫛笥隆致の次女で姉隆子が御水尾天皇の側室となっているという素性を隠して忠宗の側室となったといわれているが、果たして将来の世子の母になり得る側室の身元を確認しないだろうか。皇室と緊張関係にある幕府憚った口実だったに違いない。

後水尾天皇は、およつ御寮人事件や紫衣事件で天皇の権威失墜を図る幕府と対立、娘（明正天皇）に譲位して院政を敷き、なお幕府との確執は続いていた。

外様と天皇の統制を強化する幕府を牽制するように皇室に接近を図り、良仁親王の生母の妹貞姫を側室に迎えて綱宗を儲けた忠宗は、徳川家と血縁深く親族大名に通じて仙台藩にとって危険分子に育っていく光宗を、外様の雄藩たる仙台藩当主としてどうみていたのだろう。

政宗の慶長遣欧使節派遣に賭けた海外への残夢が、幕府の禁教下で最愛の嫡孫光宗をキリシタンに誘い、仙台藩の後嗣としての自覚に欠ける将来不安と親子の確執が忠宗に光宗排除を決断させたのではないだろうか。

忠宗の死後に家督を相続した三代綱宗が、光宗を失った幕府の逆襲と皇室に接近する伊達家を警戒する幕府の威圧に、不行跡という暗愚を装って僅か二年で隠居、その後幕閣の介入を招く寛文事件に繋がっていったとしたら、泉下の政宗はなんと思うだろう。私の仮説が妄想であって欲しいと願うばかりである。

〈9〉光宗急死の私的考察・田中勘左衛門良長

正保元年八月に罹った風疹が癒え、仙台初入部で過ごした五ヶ月を鷹狩や饗宴で大いに楽しみ、至って元気だった光宗が、江戸に戻った三カ月後に突然、霍乱に罹った。父忠宗が仙台に向け江戸を発った直後である。

霍乱とは、激しい下痢や嘔吐を伴う急性の病気である。あまりの突然の死に、毒殺説が生まれたのだろうが、毒殺だとしたら、犯人は内部関係者としか考えられない。

光宗急死の二年後、光宗の霊廟三慧殿の完成を伝える伊達治家記録の記事の六行後に、小姓平井左門の江戸還遣、という記事がさり気なく記されている。

正保四年（一六四七年）五月の条に「此月、松島ニ於テ、要山公（光宗公）ノ御廟宇営建成就ス」

同年六月の条に「十五日、御小姓平井左門ニ御暇ヲ賜ヒ、江戸ニ還遣サル。御歩行組両人相附ラル」

還遣とは、送り返されること、平井左門は、江戸詰めの小姓だったようである。

小姓江戸還遣の記事に続いて、驚きの記事があった。

「十六日、小姓頭、田中勘左衛門良長逐電、御小姓平井左門ニ就テ不法ノ事アリト、云々」

「十七日、朝、松島ノ雲居和尚、津田近江頼康所へ来リ、田中勘左衛門出家ヲ望ム、身命ヲ助ラレ、剃髪ヲ請フノ由申上ラレ、即チ松島へ還ラル。此旨、近江披露ス。因テ松本出雲宗成、岩淵吉次ヲ御使トシテ、勘左衛門身命ハ助ラル、末代召仕ハルマシ、他国ハ勿論御城下南ヘハ参ルヘカラス、一日路ノ外、東北奥ニ罷在ヘキ旨仰付ラル。因テ剃髪シ、恵通ト称ス。屋敷家財等没収ス」

なんと小姓の犯した不法の事で小姓頭が蟄電して密かに瑞巌寺の雲居和尚に出家を申し出たというのである。

小姓とは、主君に近侍して身の回りの雑事全般を請け負う役回りであり、小姓頭とは、主君に近侍する小姓の統括者、いわば藩主忠宗の筆頭秘書であり側近中の側近である。その筆頭秘書の田中勘左衛門が、部下の小姓の犯した罪で逐電して出家するとは、只事ではない。主君忠宗の温情で身命は助かったが、屋敷家財没収の上に永久追放されたとは、よほどの重罪だったのだろう。

田中勘左衛門が重く責任を問われた部下の平井左門が犯した不法の事とは、いかなる不法なのだろうか。

まもなく三回忌になる光宗の霊廟三慧殿が完成した翌月に江戸に送り返されていることから、平井左門は、江戸詰めの光宗付き小姓だったのだろう。不法の事で送還される平井左門に付けられた御歩行組は、単なる護衛ではなく逃亡を警護する徒士だったに違いない。

世子の幼馴染であると同時に、世子が当主になった暁には、新参譜代に取り立てられて、側近政治の中枢を約束された近習である。その将来有望なエリートが犯した不法とは、仕える光宗に対する不法以外にないだろう。

光宗の急死に関わる不法だったのではないだろうか。

そして上司の田中勘左衛門は、急死させた責任と光宗の菩提を弔うため出家を申し出たのではないだろうか。

小姓頭田中勘左衛門の助命と出家について、瑞巌寺の雲居和尚が周旋したとあったが、雲居和尚は、瑞巌寺の創建に当たり、京都の臨済宗妙心寺派塔頭の幡桃院から政宗が三顧の礼で招聘を試みたが固辞され、政宗の遺言による忠宗の働きかけでようやく松島瑞巌寺九十九代住職に迎え入れて、政宗の百ケ日法要を営んだ名僧である。その雲居和尚が周旋に動いたというのだから、よほど事情があったのだろう。

その田中勘左衛門良長が、なんと出家した十一年後に主君忠宗の薨去に殉死していたのである。

菊田定郷著の仙台人名大辞書に、田中良長（勘左衛門）について「寛永の初年、政宗公新に俸金三十両、廩米十口を賜ひて世子忠宗公の小姓に挙ぐ。鷹匠より申次、小姓頭に歴進し、禄を増して千四百石に至る。正保年中故ありて家禄を没せらる。是に於て髪を削り、名を會通と改め、四方に周遊す。万治年中長崎に在りて遥に公の病を聞き、急遽仙臺に来りて其の志す所を告ぐ。公謁を賜ひ、俸五口を給して松島に寺を造り、之に住せしむ。公の薨ずるや、万治元年八月五日詰朝仙臺通町東昌寺に詣りて公の霊牌を拝し、臨終の句を唱へ洞水和尚と三問三答畢りて殉死す。享年四七」とあり、出家の理由について、故ありて家禄を没せられ、とあるだけだが、忠宗の病に帰参して志す所を告ぐとは殉死を申し出たのだろう。

伊達家三十一代当主の伊達邦宗公の著「伊達家史叢談」巻之七に「田中勘左衛門ハ、性剛直ニシテ、嘗テ公ト事ヲ論ジテ屈セズ、忽然トシテ退キ、直チニ去テ松島ニ赴キ、瑞巌寺ノ雲居禅師ニ請ウテ僧トナリ、會道ト号ス、公ノ薨ゼラルルヤ、會道訃ヲ聞キテ、即チ仙台ニ来リ、殉死ノ列ニ入ラントス、傍人怪ンデ曰ク、汝既ニ十列ヲ離レテ仏門ニ入レリ、何ノ故ニ身ヲ捐ツルカト、會道大渇シテ曰、故君ニ生前ニ約セシコトアリ、今身桑門ニ入ルト雖モ前約ハ渝フベカラズト、遂ニ自尽ス」とあり、公ノ薨ゼラルルヤ、會道訃ヲ聞キテ、即チ仙台ニ来リ、忠宗と事を論じて屈せず、忽然と逐電し出家、忠宗の訃報に、生前に約束していたと申し立て殉死したとある。

伊達邦宗公は、この逸話について「瑞鳳殿の廟守石田常直の談に依りて記せり、常直は貞山公（政宗）に殉せし石田将監の裔なり」と追記しており、情報提供者の身元にまでわざわざ言及するとは、邦宗公もこの逸話に強い関心と、ある確信を抱いていたに違いない。

主君忠宗と議論して屈せず、逐電して出家した田中勘左衛門が、主君の薨去に、菩提を弔うのではなく、追い腹を切るとは、その裏に何があったのだろうか。

田中勘左衛門と江戸の光宗に接点はあったのだろうか。伊達邦宗公の著書「伊達家史叢談」の「義山公（忠宗）殉死者名簿」の田中勘左衛門良長（年四七）の横に家士芝原角左衛門（年二五）の名前が小さく並記されていた。

田中勘左衛門に殉死した家士の芝原角左衛門について、日本の倫理学者で日本弘道会副会長古川哲史氏の著書「殉死・悲劇の遺蹟」に興味深い逸話があった。

「田中良長が江戸在勤中、日本橋で児を抱いて彷徨している士人を見た。橋の上から「かわゆい児だなあ」と声かけると、帰路を待ち受けていたかの士人が「落ちぶれて年も寄り、この児を養育する力もない。あなたは身分の賤しくないお人と見うけます。この児を差しあげます。もし才があったら用い、不才なら捨ててください」と姓名も出身も答えず去ったので、児を連れ帰り鞠育した。児は長じて芝原覚左衛門と名づけられたが、後に罪を得て流落十数年に及んだ良長の側を離れず、薪水の労をとり、良長が忠宗公に殉じた日、良長に殉じて死んだ」

田中勘左衛門良長は、平井左門と同じく、江戸詰めの家臣だった。伊達治家記録に二人の名前が現れるのは、光宗の霊廟三慧殿完成記事の六行後であり、江戸詰めの二人は、急死した光宗の遺体に従って仙台に来ていた光宗付きの小姓頭と小姓だったに違いない。

光宗を急死させてしまった責任であれば、七人の殉死者と同じく光宗葬儀の直後に殉死していたはずだが、二年後の霊廟三慧殿完成を待って逐電出家、十一年後の忠宗の訃報に殉死したということは、田中勘左衛門の罪に忠宗の意向があったということではないだろうか。

藩主忠宗に近侍する小姓頭の田中勘左衛門は、禁制のキリシタンとなり徳川家に傾倒してゆく光宗に、仙台藩の行く末を案じた忠宗の密命を帯びて、光宗毒殺を小姓の平井左門に指示していたのではないだろうか。

田中勘左衛門と光宗が結びつく物的証拠といえるキイワードがあった。二人の法名が酷似していたことである。

伊達治家記録の万治元年七月二七日条に、忠宗に殉死した十二人の中に「圓福天然会通西堂俗名田中勘左衛門良長、正保四年六月十三日御勘気ヲ蒙り、松島瑞岩寺に入テ出家ス。今年京都ニ在テ、公御病気ヲ聞及ヒ、早速下向シ、御臨終ニ謁見シ奉リ、殉死ノ志を言上スと云々」

忠宗公の霊廟「感仙殿」の本殿脇に並ぶ殉死家臣の宝篋印塔の中にある田中勘左衛門の宝篋印塔に「俗名田中勘左衛門良長、法名圓福天然会通西堂、没年万治元年八月五日、行年四七才、殉死場所輪王寺」と刻されおり、田中勘左衛門の法名が、圓福天然会通西堂とあった。

忠宗に殉死した田中勘左衛門の法名が、仙台人名大辞典に會通とあり、伊達治家記録には恵通と会通、経ケ峰感仙殿の宝篋印塔にある法号が会通、邦宗公の伊達家史叢談には會道とあったが、これは石田常直からの聞き違いか、書き写し違いだったのかもしれない。

田中勘左衛門は、光宗の法号である円通（えんつう）院と酷似した韻を持つ會通（えつう）を法号にしていた。

この極似は、偶然なのだろうか。田中勘左衛門が出家するに当たり瑞巌寺の雲居禅師に光宗の法号に似た法号を希望したのではないだろうか。主君忠宗が薨去した時には後追いで殉死する覚悟を決めていたのだろう。

多くの傍証から、江戸詰めの小姓平井左門と小姓頭の田中勘左衛門の二人が、光宗の急死に関わっていたことは明らかなようである。

光宗の永遠の棲家である霊廟三慧殿の完成を見届けた平井左門は江戸へ送還され、田中勘左衛門は、切腹を申し出ながら、忠宗の指示で出家追放となった。

追放された田中勘左衛門は、仏門に入り光宗の菩提を弔い、忠宗の薨去に後追い殉死、主君との秘密をあの世に持ち去った。江戸に戻った平井左門も密かに命を断ったに違いない。あるいは江戸に着く前に、警護の徒士に暗殺されていたかもしれない。

ここでどうしても気になることがある。伊達邦宗公の著書「伊達家史叢談」にある「田中勘左衛門ハ、嘗テ公ト事ヲ論ジテ屈セズ忽然トシテ退キ」という下りである。

江戸詰めの田中勘左衛門が、小姓頭として死を賭して主君忠宗と議論して屈せず、逐電出家してのち、忠宗の薨去に殉死することになるほどの議論とは、いかなる議論だったのだろうか。

禁教のキリスト教にかぶれて幕府寄りに変貌する嗣君光宗の慢心に、仙台藩の行く末を案じた田中勘左衛門が、主君忠宗と交えた議論とは、後嗣問題を含む光宗排除の議論だったのではないだろうか。

そして田中勘左衛門は、主君忠宗の苦悩を忖度して、光宗毒殺を独断専行したのかもしれない。光宗の毒殺は、父忠宗の本意ではなかったのかもしれない。

〈10〉光宗残章

政宗の嫡孫光宗の霊廟三慧殿に描かれた西欧文化模様と光宗の白馬像などから想像を膨らませていた仮説を立証するような傍証の連続は、まさに歴史の断片をパーツにしたジグゾーパズルの世界であった。

そして政宗が慶長遣欧使節を派遣して抱いた海外への遠大な夢と野望の残夢が、嫡孫光宗の悲劇に繋がったのだとしたら、泉下の政宗の悲しみは如何ばかりだろう。まさにシェークスピアの悲劇である。

私の推論に確たる証拠はない。あろうはずがない。伊達家にとって、あってはならないことなのだから。もしあれば、当然にこの世から抹殺されていたはずである。

しかし、歴史の闇に隠された真実の叫びが、幾つかの歴史の残照の中に聞こえてくる。私の独り善がりのおぞましい帰結が妄想であって欲しいと願うばかりである。

伊達治家記録の正保二年九月二五日の条の光宗葬礼記事の最後に、編者が愛惜の言葉を添えていた。

要山公為人孝愛深シ、平生和歌ヲ好ミ玉フ、歳暮ノ御哥アリ、此ニ附ス。

タラチ子ノ　老行末ヲ思フニハ　猶惜マルル年ノ暮哉

たらちねは、垂乳根の意で母の枕詞、病の母振姫への想いを詠った歳暮の歌といわれているが、光宗が早世した一六四五年に、母振姫は、まだ三八才、老い行く先を案じるような歳ではないだろう。

母方の祖母督姫は、三〇年前に亡くなっている。父方の祖母愛姫は、このとき七七才、光宗が歳暮の歌を贈ったのは、仙台藩江戸屋敷で共に起居する愛姫だったのかもしれない。

キリシタンといわれる祖母愛姫と年の暮れの降誕祭に祈りを捧げている光宗の姿が私には浮かんでくる。

明治時代の著述者
渋江保の一生（その二十四）

山本勉

第十期　大学館時代から晩年⑦（東京）一九〇三年（明治三十六年）～一九三〇年（昭和五年）四月

渋江晩年期を貫く思想

一　はじめに

渋江は一八七二年（明治五年）、一五歳でカッケンボスの『米国史』を兄の山田脩と万巻楼より翻訳出版した後、生涯において二〇〇冊余りの著作を出版しているが、出版社、大学館に渋江が関わりを持つようになった頃から、著作傾向に大きな変化が見られるようになった。

本稿においては、大学館以降、なぜ著作傾向が様変わりしたのか、晩年期の渋江の著作とその特徴を踏まえ、当時の出版界の動向や渋江身辺の生活状況、当時の政治・経済や社会状況を俯瞰しながら、渋江執筆思想の激変を探り、晩年期を貫く基調を明らかにしたい。

二　著作の傾向

渋江が生涯において執筆した書籍は、一部雑誌も含めて一九五冊に及ぶ。このうち大学館時代以前の著作は一〇一冊、大学館以降の著作は九四冊ある。このうち大学館以降の著作については原作が判然としないものが多いが、渋江の全著作の分類を行い著作の傾向を探りたい。

（1）大学館以前の著作の傾向

大学館以前の著作は六つに分類することができる。その内訳は、教育関係書（偉人伝や教育論、教育教材、自己啓発書など）五四冊（五三・四%）、戦史一八冊（一七・八%）、評論三冊（三%）、文学二冊（二%）、歴史三冊（三%）、その他二〇冊（一九・八%）となっている。渋江の著作の中で半数を占めるのが教育関係書である。

渋江は博文館に勤務する前、彼の前半生において数多くの学校で教鞭を執っている。浜松時代には師範学校である浜松瞬養学校（現静岡県立浜松北高等学校）に奉職し、『小学校授業必携』を執筆している。宝飯中学校時代においては宝飯中学校長兼英語教師として赴任し、三河地域の教育に尽力している。また、加藤幸三郎宛渋江書簡（一八八二年（明治一五年）三月二六日付）[1]によれば、金曜日の夜に英語の講義会（訳読会）を加藤幸三郎（一八五八～一九〇九）や山崎程吉（一八五八～不明）と行っていたことがわかっている。加藤は渋江と同じく慶應義塾に学び宝飯中学校設立の中心人物、山崎も慶應義塾で英学を学び渋江が校長を辞職した後、宝飯中学校の校長として約三年半校長の職務を遂行した人物である。渋江は宝飯中学校を辞職後、東京に戻り慶應義塾の教師となっている。その後、療養のため静岡県周智郡領家村（現浜松市天竜区春野町）へ転籍し、周智郡領家村の名望家、栗田輝永の招請により英学研究所で村民に英語教育を施している。更にその後、静岡市に転籍し、三つの英語学校と渋江塾にて英学や漢学を指導している。静岡県掛川市出身で、中国人留学生教育の父と呼ばれ魯迅や周恩来、郭沫若、秋瑾等中国人留学生に日本語を教えた松本亀治郎は、渋江の静岡時代の教え子である。こうした経緯が博文館の目に留まり、博文館時代には数多くの教育関係書を手がけたものと思われる。大学館以前の著作として次に多いのは戦史であり、一八冊全てが代表作である万國戦史シリーズである。その他の著作として、数としては少ないが評論や文学、歴史ものを執筆している。こうして大学館以前の著作を概観すると、その七割が教育関係書と戦史であることがわかる。

（2）大学館以降の著作の傾向

大学館以降の著作を見ると、これまでとは全く傾向の異なるジャンルの著作を執筆している。大学館時代初期には比較的著者が明らかになっている冒険ものやSFものを翻訳出版しており、冒険ものの多くの著作の中には人口に膾炙した作品が多く見られる。大学館時代中期からゴシックものが多く見られるようになり、悪魔や幽霊、狂人、死人、ドクロ等の表現や描写が多数散見でき原作者も判然としない。特徴的なのは、冒険ものやSFもの、ゴシックものの作品中に描かれている場面が日本の地名や都市名であったりしている点で、そこに登場してくる人物も日本人に置き換えられている。途中から話が変わってしまう作品や結末が原作とは異なっている作品もあり、全体的に自由創作作品となっている。更には後ほど触れる『死人の執念』のように結末を先送りしている作品もある。大学館後期になると催眠術関係の著書が大半を占めるようになり、大学館後期から晩年にかけては易学関係の書が数多く散見できる。

大学館以降の作品を総覧すると、ゴシック二六冊（二七・六%）、冒険二一冊（二二・四%）、催眠術一三冊（一三・八%）、SF二冊（二・一%）が主な著作としてあげられる。これら四分野の著作で全体の六五%ほどを占める。そして最晩年には、易学関係書一七冊（一八・一%）を三才社や神誠館から出版している。その他の著作としては、歴史一冊（一・一%）、教育一冊（一・一%）、小説一冊（一・一%）で、その他一二冊（一二・七%）となっている。

①冒険・SFもの

冒険ものについて大学館時代の渋江の著作から『怪髑髏』[2]を取り上げてみたい。『怪髑髏』の原作はピーターソンの『wife of Monte Cristo』（モンテクリストの妻）であるが、元をたどれば日本でも『巌窟王』で知られている、アレクサンドル・デュマ・ペールの『モンテクリスト伯』であり、この冒険小説は、映画・演劇・ミュージカルやアニメ等、様々なバリエーションで人気を博した作品である。日本においては、ジャーナリストであり小説家の黒岩涙香が自ら創刊した万朝報に一九〇一年（明治三四年）から一九〇二年（明治三五年）にかけて『史伝巌窟王』を翻案連載し、その後、青木嵩山堂から出版されている。

『モンテクリストの妻』はモンテ・クリスト伯の妻が主人公で復讐劇を演じる物語で、『モンテクリスト伯』のオマージュであり続編とは言い難い。日本においては高桑良興が『後の巌窟王』として出版している。一九一二年（明治四五年）に出版された高桑良興の『後の巌窟王』の序文において黒岩涙香は『モンテクリストの妻』、『モンテクリストの息子』、『モンテクリストの娘』などが『モンテクリスト伯』の後編に当たることを記している。[3]しかし、『モンテクリストの妻』の原作者はT・Rピーターソンであり、『モンテクリスト伯』のあらすじを参考にした創作であり、黒岩が序文で書いたことは誤りではないかと思われる。デュマの『モンテクリスト伯』においては、航海士のダンテスが無実の罪を着せられ牢獄に一四年間投獄され司祭の導きを受けて脱獄し、モンテクリスト島で財産を手に入れたことが、高桑良興の『後の巌窟王』においては、「第二節　回想」に、一方、渋江の『怪髑髏』においては、同様の場面が「第三　蓬莱嶋の探検」[4]において次のように語られている。深川の州崎の船長辰蔵という青年と十八歳のおてるが恋仲になったが、漁夫入間萬吉、洋服裁縫師片野伝太郎、遊び人館山五郎もおてるに気を寄せていた。三人は結託して密かに手を廻して日探被疑者として辰蔵を訴え獄に投じた。辰蔵は獄で僧侶と出会ったが、僧侶と辰蔵が仲が良いのを恨んで僧侶を殺し、辰蔵は僧侶に代わって袋に入り海

に投げ込まれるが一命を取り留め僧侶から聞いていたクレカラール島で財宝を手に入れ蓬莱島と名付け自ら蓬莱公と名乗った。こうして物語は展開していく。終章の「第廿一結局」においては「ある日台湾の或る海辺へ二個の死屍が漂着した。孰れも男子の死屍と覚しいが水で腐敗した様子は、毫みなく、久しく陸地にあった様子で、肉は殆んどなく、頭部などは、丸で髑髏になって居る。（中略）又殆んど同時に、天城山麓の或る藪中に女子の死屍が発見された。（中略）『まさかまる子の死骸ではあるまいが？』といふものがあれば、前の漂流死骸は、守夫、辨蔵のそれではあるかいが、それにしても、蓬莱公夫婦や、春田伯は、ナゼ未だ帰って来ぬのであらふ。」[5]とある。高桑良興の『後の巌窟王』の終章、『第五十四節懲悪の島』の「大団円」では物語は大団円を迎えめでたく終わっているのに比べて『怪髑髏』の結末はそれとは全く異なり、オマージュとは言え渋江の自由創作物語と言って良いであろう。

SFものについても原作者が判然としていないため、SFものであると断定できないが、大学館時代の渋江の著作の中でSFものは『月世界探険』と『空中電気旅行』の二冊ではないかと思われる。『新海底旅行』については書名だけから考えるとジュール・ヴェルヌの『海底二万マイル』と思われるが、渋江の『新海底旅行』は内容も低俗的でSFとは言い難い。

②ゴシックもの

大学館時代の著作として最も多いのがゴシックであるが、大学館以前に翻訳出版したもののように原作や原作者が明記されておらず、文体もエログロ的色彩を帯びており、博文館時代とは似ても似つかない。本来ゴシックは幻想文学の中に位置づけされ、ホフマンやゴーチェ、シェリーに代表されるように神秘的、幻想的であり、ロマンスともとれる作品群となっている。しかし、渋江のそれは翻案と言うより、創作的な作品に仕上がっていて作品としての価値は残念ながらない。

フランスのゴシック文学の傑作とされる『吸血女の恋（死女の恋）』は吸血鬼文学とも称され、純粋な青年僧が男の血をすする美しい女性に出会いその美しさに魅了される話である。しかし、この『吸血女の恋（死女の恋）』を渋江が翻案したという事実はない。『吸血女の恋（死女の恋）』にタイトルが近いと思われる『死人の執念』が渋江の大学館時代の作品にある。この作品は内容は全く異なりゴーチェの『吸血女の恋（死女の恋）』のように美しい文体ではない。『世界のオカルト文学　幻想文学・総解説』のゴーチェの「作者とその背景」に「彼の怪奇幻想作品と特徴づけるものは浪漫的情熱と濃厚なエロティズム、そして美への礼賛であろう。」[6]とあるが、『死人の執念』は、目次「第一訝しき、美人の死体」で「或

る朝、横浜の野末運送店へ変な荷物が舞い込んできた。（中略）函中なるは、二十歳に足らぬ、秘世の美人の死骸にして、」、「此の死体が、夜々彼方此方歩行廻るという噂が家人の間に起り始めたのだ。」[7]とあり怪奇幻想をただ単に色情的怪奇的に描写しているに過ぎない。目次には「第三悪魔」、「第六『ヤアー残酷な』深夜の虐待」[8]等のタイトルがついていて、タイトル自体も猟奇的でさえある。『死人の執念』全体に流れる脈絡もはっきりせず、『吸血女の恋（死女の恋）』に見られるような美しい文体ではない。終章の「第二十一花嫁と花婿」で「彼の箱詰め死美人は、全くなる子と別人であることが判明したが、一体何処の何者であらふか？此の事は、他日別に述ぶるであらふ。」[9]と結末を先送くりし、判然としないで物語は終わっている。『死人の執念』は一九〇八年（明治四一年）に出版されているが、大学館時代後半になるとこうしたエログロ的色彩を帯びたゴシックものが増えてきている。

③催眠術もの

大学館時代末期になると、ゴシックものから催眠術（メスメリズム）に傾倒して行ったと思われる作品が数多く散見される。催眠術に関する始どの著作は、小引に原作や原作者が明記されており、この点については、冒険・SFものと異なる。また、催眠術に関する著作は、『降神術』を除いて一九〇九年（明治四二年）に出版されているのもその特徴と言える。

渋江はエログロな冒険ものから催眠術ものへと著作が移っていくが、長山靖夫の『鴎外のオカルト、漱石の科学』によれば、催眠術が医療目的で使われるようになったのは明治二〇年前後で、明治二〇年代には催眠術の他に記憶術もブームになり、明治三六年頃ピークを迎えることを触れているが、概ね日本では明治末期から大正時代にかけて催眠術が大流行し、渋江が催眠術関係の著作を執筆した時期は、当時の社会が催眠術を受け入れた時期と重なっている。催眠術は、ドイツの医師、フランツ・アントン・メスメル（一七三四～一八一五）らが提唱した治療法であり、日本にも明治初期に伝わり、明治三〇年代半ば頃催眠術ブームが起こったと言われている。渋江は催眠術が日本で流行する中で、一八九四年（明治二七年）に博文館よりジョーンスロムの『催眠術』を翻訳出版しているが、例言に「本書は、恰も古代の神託、禁咒、妖術、預言等を始めとして、我か邦の憑狐者、生霊等を學理に由りて説きたるものなれば、興味殊に深く、且つ有益なり」[10]とあり、催眠術の定義から歴史に至るまで章立てして詳しく述べている。その後催眠術に関わる渋江の著作はなかったが、千里眼事件の発端ともなった御船千鶴子の能力の実験が行われた年、一九〇九年（明治四二年）に渋江は、催眠術関係のほとんどの著

作を手がけている。渋江の催眠術関係の著作のひとつに一九〇九年（明治四二年）に出版された『原理応用神通力自由自在』がある。小引には五冊の参考文献とその原作者が記載されている。[11]『Practical Palmistry, Clairvoyance, and Psychometry』、これは渋江が本文中にケイロ（Keiro）著、『霊感術』として紹介している。『From India to The Planet Mars A study of a Case Somnambulism』はテオドール・フルルノワ（Flournoy）著、『インドから火星へ　異言をともなう夢遊病の一症例に関する研究』である。残る三冊については、『Apparitions, and Thought Transference』は、ポトマリー（Podmree）著、『亡霊とテレパシー』、ホワイト（White）著、『催眠術』、『Climinal』は、エリス（Ellis）著、『犯罪者』と思われる。但し、ヘンリー・ハヴロック・エリス（Henry Havelock Ellis）の『犯罪者』であれば、『Criminal』であり、タイトルのスペルの「l」が「r」でなければならず判然としない。小引に「本書、是れ等諸術の理論と用法との述べたるものなれば、読者若し本書に由って次第にその術に上達せられ、過去。現在。未来を通じて、近きは地球上より遠きは他の星界、又は幽霊界の人物出来事を手に執る如くに観察せられ、若くは他人の喜怒哀苦より彼れの病原、病症に至るまで明かに察知得られたならば、汽車。汽船。電信。電話。空中飛行船。蓄音器の如きも悉く不用に属すべきのみならず、医者も入らねば、刑事探偵も贅物と為り、歴史上の疑問も一切氷解せられるであらふ。」[12]とある。渋江の小引に見られることは異様にも感じられるが、渋江が本書で「千里眼術」について多くの頁を割いて触れているように、また、明治末に起こった千里眼事件にも見られるように、渋江が特別ではなく千里眼を初めとする催眠術への興味関心を生む風潮が当時の社会にあったと考える。渋江は最晩年に易学ものを多数執筆するが、中国古代に行われた占法について同書「第二十七章　筮法並に其の種類」に「卜筮の方法は、先師海保漁村先生の『周易占法』の中に委しく載せたれば、茲に之を贅するの用なし。我が先師根本羽嶽翁は、十八変筮法を非とし、『十八変にして卦を成す』は三画小成の卦なり、三十六変にして卦を成さでは、六画大成の卦とはならずとて、飽く迄も三十六変筮説を主張せられた、今翁の筆に成りたる『周易復古筮法』に基きて其の所謂三十六変筮なるものを記さん。」[13]と述べ、海保漁村の十八変筮説も根本羽嶽の三十六変筮説も、千里眼術や霊感術に共通していると結んでいる。こうして易学について催眠術ものの著書で触れている点を鑑みれば、最晩年に易学ものを執筆する準備が既にこの時期にできたいたものと思われる。海保漁村については、山路愛山『独立評論』第二巻第六号（大正三年六月一日）の渋江保氏談話「海保漁村先生」の中で、海保塾の教則について触れているが、渋江は海保漁村から経書、つまり儒教の基本的な古典である『易』・『書』・『詩』・『礼』・『春秋』の五経を始め四書や呂氏春秋等を学んでいたと思われる。根本羽嶽については、同じく『独立評論』第二巻第一号（大正三年一月一日）の渋江保氏談話「根本道明翁」の中で、根本が易学の大家であること、学説については渋江とは全く考えが異なることなどを根本の日常生活も交えて語っている。『独立評論』に渋江に影響を及ぼした人物として二人の師を挙げるほど極めて身近な存在であったことが伺える。

④易学もの

渋江は漢学者である根本道明（一八二二～一九〇六）門下に一八九七年（明治三〇年）に入門するが、最晩年は易学に没頭し、漢詩人でジャーナリストである上村売剣（一八六六～一九四六）が設立した三才社から七冊、柄沢正義が渋江の著作を出版するために援助した神誠館から八冊、易学関係の著作を出版している。渋江が易学関係の著作を最晩年に執筆するに至った経緯が『渋江抽斎』その五十三に以下のようにある。「抽斎の病況は二十八日に小康を得た。遺言の中に、兼て嗣子と定めてあった成善を教育する方法があった。経書を海保漁村に、筆札を小島成斎に、『素問』を多紀安琢に受けしめ、機を看みて蘭語を学ばしめるようにというのである。」[14]渋江はその後英学の道を志すことになるが、幼少期に亡き父抽斎の漢学の道を歩む教育プログラムが仕組まれていたのである。

（3）今後予定の著作

渋江が今後予定の著作には、「読書五十年、日本私罰史、支那刑法史、周易一家言、経子一家言」があった。森鴎外の『渋江抽斎』その百十二に「保さんの作らんと欲する書は、今なお計画として保さんの意中にある。曰いわく日本私刑史、曰く支那刑法史、曰く経子一家言、曰く周易一家言、曰く読書五十年、この五部の書が即ちこれである。就中読書五十年の如きは、嘗に計画として存在するのみではない、その藁本が既に堆を成している。」[15]とあるが、このうち『読書五十年』については、『羽化渋江保翁伝資料のために（三）』の註2に「翁の遷化は昭和五年四月七日（七十四歳）で、鴎外が「読書五十年」と誌すその藁本は、その後更に六十四年を加えて、『羽化読書六十四年』となって、未刊のまま乙女さんの手許に蔵されている訳であろう。」[16]とあり、出版はされなかったが、渋江は脱稿したのであろう。また同書の註には「「保さんが作らむと欲する書五部あり、保さんは果して能く其志を成さしむるであろうか。」と鴎外が抽斎伝に誌している「周易一家言」は、かくて売剣翁の犠牲的出版と羽化翁の病を冒しての努力で完成された訳である。」[17]とる。このことから、「読書五十年」は

出版に至っていないものの、鷗外が『渋江抽斎』で述べている二冊については確認がとれたが、『日本私罰史』、『支那刑法史』、『経子一家言』については現時点でわかっていない。尚、『抽斎歿後』を見る限り、鷗外が『渋江抽斎』であげた『日本私刑史』は『日本私罰史』[18]であろうと思われる。

（4）冒険ものとゴシックものの差異

冒険ものとゴシックものについてはこれまでに述べてきたが、この二つのジャンルを比較したときに、大きな差異があることがわかる。冒険ものの大半は原作者がはっきりしており、少年少女向けの冒険小説などにも取り上げられている著名な作品が多い。ゴシックものについては、そのタイトルからゴシックものと判断できるが、実際には内容も全く異なり原作者を特定することはできない。冒険ものについては、藤元直樹が『文芸翻訳家としての渋江保』で取り上げているように著名な原作者が多く見られる。ヘンリー・ライダー・ハガード（一八五六～一九二五）が原作者の著作は一一冊に及んでおり、壮大なスケールで描いた冒険ファンタジーである『ソロモン王の洞窟』、『洞窟の女王』等の作品が名を連ねている。また、R・Lスティーブンソン（一八五〇～一八九四）の『宝島』やアーサー・コナン・ドイル（一八五九～一九三〇）の『ボヘミアの醜聞』等の著名な作品も含まれている。これに対して、ゴシックものについては、藤元も前述の『文芸翻訳家としての渋江保』においても原作者を挙げて紹介しておらず、実際に渋江の翻案はゴシック文学とは言い難い内容となっており原作者の割り出しが困難である。こうした渋江のゴシックものにおける著作態度から、渋江のゴシックものはオマージュ的な創作と思われるが、原作者が特定できない内容をアレンジした自由訳となっている。こうして、冒険ものとゴシックものを眺めてみると、あくまでも著名な作品とそれとなくわかる形で翻案していた冒険ものに比べて、原作者がわからないほどに自由に創作してしまった大学館時代後半に多く見られるゴシックものから、英国立憲主義思想を持ち崩してしまった渋江の姿が垣間見られる。

（5）ゴシック文学とオカルト文学の親和性

イギリスのゴシック文学は大きくは幻想文学に位置づけることが出来るが、由良君美監修『世界のオカルト文学幻想文学総解説』によれば、広義の幻想文学の中にオカルトや怪奇も含まれることが述べられている。同書では、「Aオカルト文学編」として、更に詳細に、悪魔や魔女、魔術、催眠術、占星術等に細かく分類されている。ゴシック文学自体は一八世紀末から一九世紀初頭にかけて主にイギリスを中心に流行した小説群を指しているが、同時期、日本においても催眠術やこっくりさんが大流行

しており、森鷗外も一九〇九年（明治四二年）に『魔睡』を執筆していることから、鷗外自身、既にイギリスのテーブル・ターニング（こっくりさん）や心霊術、催眠術、ゴシック等の幻想文学を理解し認識していることわかる。また、これらの幻想文学は明治期の日本の近代化と同時進行して起こっている。こうした日本における幻想文学の興隆は、明治期末の日本の社会状況と無縁ではない。日本は一九〇四年（明治三七年）の日露戦争に勝利するが、社会は多くの矛盾を抱えた。一九一〇年（明治四三年）には日韓併合条約が締結され、この年に大逆事件も起こった。同年、石川啄木は『時代閉塞の現状』を発表するが、こうした社会の閉塞感の中で、催眠術や心霊術等が興隆を極めたのではないだろうか。ヴィクトリア朝時代のイギリスと明治期末の日本の社会のこうした行き詰まりを人々は幻想文学に救い求めていたと考えても何ら不思議ではない。欧米の多くの書物を訳読していた渋江は、博文館時代よりこれらの書物に触れていたと思われる。当初は、前述したジョーンスロム原作の『催眠術』に見られるような翻訳スタイルをとっていたと思われるが、自由民権運動の衰退や自身の生活状況の変化により、大学館時代に入ると欧米の幻想文学の影響を受けて、ゴシック小説や催眠術等のオカルトものを執筆するようになっていったと思われる。

三　晩年期の渋江思想の激変とその社会的背景

（1）当時の政治・経済並びに社会状況

自由民権運動前期の激化事件も下火となり、一八八九年（明治二二年）には大日本帝国憲法が発布され、大同団結運動の中心的存在であった後藤象二郎が黒田内閣に入閣すると、その中心的な存在を失い自由民権運動は終焉の時を迎えた。翌年の一八九〇年（明治二三年）には帝国議会が開設され、一八九四年（明治二七年）に日清戦争が勃発すると、民権家の福沢諭吉や徳富蘇峰なども対清主戦論者となって行った。日清戦争後、獲得した戦時賠償金により消費が拡大され、戦後景気を迎えた。日清戦争後の一九〇一年（明治三四年）、安部磯雄、木下尚江、幸徳秋水らが軍備廃止や政権の平等を理想とし、治安警察法の廃止、集会・言論・結社の自由等二八項目の綱領を制定して社会民主党を結成したが、即日結社処分となっている。幸徳秋水、堺利彦は更に一九〇三年（明治三六年）に平民社を興して週刊新聞『平民』を刊行し非戦論を展開したが一九〇四年（明治三七年）、日露戦争は開戦の道をすすんだ。自由民権運動の急進的な指導者であった大井憲太郎や頭山満も対外強硬論者として活動し、頭山満は日露開戦を主張し大アジア主義を唱えた。日露戦争後、無賠償講和や多額の戦費の調達に不満を持った民衆が暴徒化し一九〇五年九月（明治三八年）に日比谷焼き討ち事件、一九〇五年（明治三八年）には

明治四十年恐慌が起こり、東京株式市場が大暴落、翌年にかけて企業の倒産や銀行の休業が相次ぎ経済恐慌が全国をおそった。こうした戦後恐慌の中で待遇改善を求める運動が労働者の間で活発化し、一九〇七年（明治四〇年）には足尾銅山暴動が起こり全国に飛び火した。更に、日露戦争開戦に反対していた幸徳秋水ら社会主義者が一九一〇年（明治四三年）に大逆罪で次々と検挙され処刑された。この頃、予てより産業革命により大英帝国を築き上げたイギリスも一九世紀末からその勢いに陰りが見え始め、一八九九年（明治三二年）から始まったボーア戦争の長期化により国家財政も破綻、国力も疲弊し大英帝国は衰退していった。また、渋江が英学を志すに至った師と仰いだ福沢諭吉が、民権運動後期に国権論的主張を展開し対清主戦論者となる等、自由民権運動を牽引してきた民権家たちも社会情勢の変化の中で思想的変遷を遂げた。こうした内外の政治経済や社会の状況に呼応するかの如く、渋江身辺の生活状況も大きく変化していった。

（2）渋江身辺の生活状況の変化と渋江思想の社会的背景

『抽斎没後』によれば、一八九七年（三〇年）八月に「◎此の年八月不慮の災難を受く。倅純吉の足を洗ひ遣はさんとて井戸端に出て既に洗ひ卒へて小児を抱へて立たんとせしに誤て窓の竹にて頭部の天辺を甚しく打ち、一事は殆んと人事不省となりたり。幸にして甚しきに至らざりしかど七八分四みたり。」[19]とあり、頭部に大怪我をし人事不省に陥っている。更に、一九〇三年（明治三六年）の『抽斎没後』によれば、「柄にない株の相場に手を出した、然るに意外にも僥倖にして八九万の金を得た依て研学専門にならんとした不幸にして此の年三名の恩人に義理を立て或る人々に頼まれて連帯の印を貼した為めに非常の悪結果を生し折角の金を水泡に帰せしめたのみか所有の動産不動産（書籍は此の外）を悉く売却せねばならぬ」[20]とあり、株式市場にて金を儲けるが、他人の負債に連判し生活も困窮する。その結果、世間との交わりも希薄となり生活も困窮し精神的に追い込まれたのではないかと思われる。渋江が『抽斎没後』で語ったことが、山路愛山の『独立評論』六月号第三巻第六号の「風俗雑話」にも詳細に書かれている。ここには『抽斎没後』に書かれたことの他に、生活上の激変が以下のように綴られている。「自分は再び以前通りの貧乏の境涯に立ち戻らねばならぬことになった。其れ此れするうちに長病らひに侵されて、病床に起臥すること前後十年。どうやらかうやら自分の用事を自分で辨ずることの出来るやうになったのが、やっと一昨年頃のことである。さういふ訳で最近二十年の間は、自分の生活に於ては殆ど中断の時期ともいふ可きもので、此の間に世間も

私を忘れ、私も世間を忘れ、知人との関係さへ全く没交渉になってしまった程である。私が現代の事実につきお話をすることのないのは、全く此んな理由から現代に関する知識を殆んど有してをらぬからである。」[21]渋江が『独立評論』に執筆したのは一九一五年（大正四年）であり、この前年頃から普通の生活ができるようになっていること、ここ二〇年間は中断の時期であることに鑑みれば、頭部に大怪我をし人事不省に陥った一八九七年（明治三〇年）頃より精神的にも肉体的にも疲労困憊していたことが伺える。ただ、同年、一八九七年（明治三〇年）九月に根本道明門下に入門しているのか何故なのか、幼少時の漢学への回帰もさることながら、易学に精神的な救いを求めたとも考えられる。また、『抽斎没後』に「大正五年◎私は従来著訳の書が概ね百余種に及んだ併し是れ等は概ね糊口の為書肆の需むるがままに筆を執りたるもの多く言はば再び見るすら不快を感ずるのである。尤もその中に只二三の書即ち「偉人の真相」（世界英雄神髄）の如きは自己の年来稍や研究したるところを述べたけれども他人の執筆になりたる故に筆勢も渋れるのみか我が述へたる所の三分の一も記さず故に択んで精しからざるの感なしとせず」[22]とあり、一九〇三年（明治三六年）に出版した『偉人の真相（世界英雄神髄）』は渋江自らの執筆ではなく口述筆記であることが読み取れる。「糊口の為書肆の需むるがままに筆を執りたるもの多く、言はば再び見るすら不快を感ずるのである」とあり、生活のためには手段を選ばすして執筆していた渋江の姿がはっきりと捉えることができる。

イギリスにおいては、同時期、一八九七年（明治三〇年）にブラム・ストーカーのゴシック小説『吸血鬼ドラキュラ』が発表された。また一九世紀初頭、ヴィクトリア女王誕生の前年、ゴシックロマンスの代表作、メアリーシェリーの『フランケンシュタイン』が出版されている。産業革命を迎えたイギリスでは、ロンドン万国博覧会に象徴されるような華々しい時代を迎えたが、その反面、「切り裂きジャック」の猟奇殺人事件（一八八八年）やイースト・エンドの貧民街に代表される犯罪・貧困・大気汚染、地方都市からロンドンへの人口流入等、繁栄の影にさまざまな社会的な矛盾を抱えた。こうした社会のひずみの中で一九世紀のイギリスにおいては、天使や魔術、占星術、テーブル・ターニング（こっくりさん）、錬金術等の神秘的・超自然的なものが興隆を極めたのであり、このような社会的背景が当時のイギリスにおいてゴシック文学の主人公の怪物たちをイギリス社会に居座らせたのかも知れない。その怪物たちは、吸血鬼であったり、幽霊や亡霊であったり、さまざまな怪物たちがイギリス社会を闊歩した。その怪物たちは大英帝国発展から凋落に至るまで、イギリス社会を見つめてきたもう一人の主人公だったとも言える。坂田薫子は『イギリス

十九世紀末小説の怪物たち（1）』の中で「インドの反乱に始まり、ボーア戦争での屈辱に至るまでの植民地におけるイギリスの経験は、衰退する国家、権力の座から滑り落ちて行く国家としてのイギリス像を、まさにイギリス国民の鼻先に突き付け続ける役割を果たしたのである。」[23]と取り上げているが、渋江もイギリスの衰退を欧米の書物を訳読した中から理解し、日本の置かれている自由民権運動の衰退と重ね合わせたのではないだろうか。また、『イギリス十九世紀末小説の怪物たち（2）』の中でハガードの『洞窟の女王』やストーカーの『ドラキュラ』、ウェルズの『宇宙戦争』を取り上げ、イギリス人の人種退行の原因や人種差別、イギリスの逆植民地化の恐怖について触れ、「「イギリス国粋主義を脅かし」、イギリス文化にとって「不純で危険な」存在とは、自国のホモセクシュアルの男性とフェミニストの女性、そして、植民地の他人種であると結論付ける。そして、彼らを怪物として取り扱い、文学作品の中で抹殺してみせることで、大英帝国のかつての栄光に陰りが見えてきた中で生じる人種退行への恐怖心に打ち勝とうとあがいてみせたのである。」[24]と文学作品の中で怪物を登場させた意義について述べている。渋江自身も日露戦争以降の社会の行き詰まりの中で大学館時代後半より原作者が判然としないゴシックものを手がけ、内容も文学作品にはほど遠いエログロ的著作を出版し、その後、易学に救いを求めた。そして、明治四〇年代、日本に欧米のスピリチュアリズムが伝わり、心霊関連書が多数出版されると期を同じくして、「一　著作の傾向」でも述べたような著作を一九〇三年（明治三六年）から立て続けに出版していく。

『抽斎没後』によれば、一八九九年（明治三二年）に「明治三十二年◎七月三日、自今東京瓦斯株式会社の翻訳事務を担当す」[25]とあり、渋江は、生活の困窮したこの時期、大橋新太郎が取締役であった東京瓦斯株式会社の翻訳業務を担当することになった。しかし、数年も経たないうちに「八月二十九日東京瓦斯株式会社の翻訳に従事する約を解く」[26]と『抽斎没後』にもあるように、一九〇三年（明治三六年）翻訳業務を解任させられる。そして、一九〇一年（明治三四年）の『出世の栞続』を最後に渋江の博文館での著作は見られない。『抽斎没後』によれば、一九〇二年（明治三五年）に「明治三十五年六月四日自今支那人劉成寓について支那語を研究す爾来三十八年七月に至るまで劉氏常に来り教ふ」[27]とある。渋江と劉成寓については、拙著『中国言語文化研究第二〇号』の「清末漢訳万国戦史が翻訳出版された背景と万国戦史の意義」において詳述しているが、劉成寓は当時の民主主義を目指した革命的な雑誌『湖北学生界』の編集者に名を連ね、清末革命家、馬君武や馮自由とも交流があった人物である。渋江の『万国戦史』は、全二四

冊中一四冊が中国語に翻訳されており、このうちの一一冊は渋江が執筆したものである。万国戦史第六巻『露土戦史』は『露土戦紀』として一八九七年（明治三〇年）に、万国戦史第二巻『英清鴉片戦史』は『英人強賣鴉片記』として一八九八年（明治三一年）に中国語に翻訳され出版されている。こうしたことに鑑みると、東京瓦斯株式会社の解任や博文館からの執筆が途絶えたのも、清末中国人留学生たちとの交流が影響していると考えるのもあながち間違っていないであろう。

これまで、渋江思想の背景を当時の政治・経済や国内外の社会状況、並びに渋江の生活状況の変化も踏まえて探ってきたが、渋江の晩年の心情、そして思想的葛藤にさいなまれている渋江の姿が如実に表れている文章がR・Lスティーブンソン原作の『奇人の航海』に見られる。『奇人の航海』は世界怪奇文庫第二編冒険小説として一九〇五年（明治三八年）に大学館から出版されたもので、途中から『宝島』の話になってしまう渋江の創作小説である。藤元直樹『文芸翻訳家としての渋江保』において渋江の晩年の心情に触れた一文が次のように掲載されている。「愛国心とアジアの団結という大義の間に引き裂かれつつ、説得に応え発明を譲渡する決意をした郭は、その直後に自死を遂げるのであった。」[28]実際に、清国の郭雲が、日本帝国の軍人今市文吾に自分が発明した救生爆裂弾の製法を伝授し絶命することが、『万国戦史』執筆時の開明的思想と共に『奇人の航海』の「第二十四幸福！悲惨！」に二人のやりとりをとおして語られている。今市は郭に救生爆裂弾の製法を伝授してほしいと懇願するが、郭は「イヤ折角の御懇望だが、其の儀ばかりは御免蒙りたい、それは何故といふに、迂生は、もともと吾が清国が昔年の威名を失って、漸く外国の侮を受けるやうになッたのを憂ひ、勢力を挽回したいと思ふ一心で発明したものである、けれども甚だ汗顔の至りながら、吾が皇帝陛下は、左右の奸臣の為めに聡明を掩はれ給ふて、臣の献策を允可遊ばさない、（中略）一日も早く戦争の惨毒を除くのが人道であらふが、苟もコレハ清国、コレハ日本、コレハ英国、コレハ露西亜といふやうに国々の区劃を立ててある間は、敵に糧をもたらすやうな事をしては、自国に対して相済まん道理で、或は国賊なぞと酷評を下されても、辯解の語がないのです。ドウモ此の儀ばかりは、平に御免蒙りたい、」[29]と言って断っている。この郭の語りの中で、「臣」とは瓜分の危機にさらされた清を救おうとした清末の革命家たちであり、「吾が皇帝陛下」とは西太后であろう。郭の思いを聞いた今市は「イヤ先生の貴命、一々御尤もです、ですが先生、日清両国は、唇歯輔車の関係である、殊に彼の緑眼児が虎視眈々として、逐々の欲を逞せんとして居る際には、猶更に互に相輔けんければならぬといふことは、諄々申上げる迄もなく、先生の方が僕よりも御存じ

の筈です、現に吾が日本国が折角貴国の為めに粉骨砕身の労を執って膺懲を行っても、講和の暁に大屈辱の条約を結ばんければならぬやうな否運に遭って居るぢやああありませんか、」[30]と語って救生爆裂弾の製法を教えてもらうように懇願した。今市が語った中で「緑眼児」はロシアであることは言うまでもない。先に記載したように渋江は万国戦史第六巻『露土戦史』を執筆しており、漢訳『露土戦紀』も出版されている。『露土戦紀』においては、梁啓超がロシアを念頭においた序文を執筆している。このことは、拙著『中国言語文化研究第二〇号』の「清末漢訳万国戦史が翻訳出版された背景と万国戦史の意義」において詳述している。郭は今市の話を聞き、救生爆裂弾の製法を伝授するが、郭は「迂生も、貴所の手を假りて、戦争の惨毒を世界から除くことが出来ると思へば、此様な嬉しいことはない、」[31]と今市に話したかと思うと、隠し持った短剣を引き抜いて命を絶った。そして、「郭は苦しき息を吐き吐き、ヤットの事で『授けねば人類に対して仁を欲き、授くれば、吾が国に対して義を欲く、仁は義より重し、故に義を棄てて仁を取りたり、義は生より重し、故に生を棄てて義を取りたり、』」[32]と息絶え絶えに今市に最後の言葉を発して絶命する。これは、自由民権運動に十代で開明し、多くの民権家たちが変節を遂げる中で、頑なに自分の理想であるイギリス立憲主義を貫いてきた渋江の心の叫びを郭をとおして語らせたのであり、欧米によるアジアの植民地化に反対し、欧米型に開明した渋江の民主的思想が晩年に精神的に行き詰った証左とも言える。

四　まとめ

小論においては、渋江身辺の生活状況や当時の社会状況を踏まえながら、渋江の著作傾向の激変を分析し晩年期を貫く基調を検証した。『まんじ一五八号』において掲載した「渋江思想変遷年表」の民権家の思想変遷において内村鑑三も含めて一五名の主な民権家の思想変遷を取り上げて分類を行った。非戦論者でキリスト教を唱道した内村を除いた一四名の中で、民権運動期に民権思想を主張し民権運動の急進的な指導者であった者で国権と思想を変えたのは五名（三六％）、民権思想は持ち続け民権に肯定的ではあったが、主立った活動をしなかった者は八名（五七％）に及んだ。『横浜毎日新聞』を創刊し渋江と共に主権論・普通選挙論争を新聞紙上で繰り広げた島田三郎や官有物払い下げ反対の大演説会を開き東海地方や東北地方を遊説した沼間守一らは日和見的な態度で民権運動からなりを潜めた。渋江が静岡時代に暁鐘新報社主、前島豊太郎と共に静岡に招いた後藤象二郎でさえ国権へと転じていった。残る渋江保一名だけが、民権運動後期に至っても民権思想を持ち続けていたが、渋江自身は多くの民権家たちが変節していく中、イギリス立憲思想に充実であった故に最後期は民権思想を捨て去った。こうした渋江の民権への挫折には師と仰いだ福沢ら民権家の背信行為が決定的に響いた。

当時の民権家たちが啓蒙思想や啓蒙書だけで民権思想を理解していたのに対して、ベンサム思想の影響を受けて欧米型思想に開明した渋江は、多くの書物を翻訳する中で、民権思想を英国史や英国社会、その文化の総体として理解していた。このため、当時の著名な自由民権家の中で、渋江は当時世界的な問題となっていた植民地問題や民族問題を深く理解することが出来た唯一の人物ではないだろうか。しかし、民権思想の出発点であり理想としていたイギリスの凋落と共に、日本におけるベンサム思想は自由民権運動が衰退していく中で途絶えてしまう。渋江自身も多くの民権家たちが反動化していく中、大学館以降の著作も激変し思想的な行き詰まりの中で生活に困窮して行った。そして、渋江は大学館時代前期まで持ち続けてきた精神的な支柱であるイギリス立憲主義思想を自己との葛藤の中で捨て去り、その精神的な安定をヨーロッパから流入した幻想文学に求め、最晩年の著作である易学に集大成させたと結論づけたい。

（了）

（注記）

（一）加藤幸三郎宛書簡一八八一年（一八八二年三月二十六日）

（二）羽化仙史『怪髑髏』（大学館　一九〇七年九月二十日）序文

（三）高桑良興『後の巌窟王』（扶桑社一九一二年一月二日）十七～二十二頁

（四）羽化仙史『怪髑髏』（大学館　一九〇七年九月二十六日）十七～二十二頁

（五）羽化仙史『怪髑髏』（大学館　一九〇七年九月二十六日）一八〇～一八一頁

（六）由良君美著・監修『世界のオカルト文学　幻想文学・総解説』（白由国民社　一九八五年五月三十日）一一〇頁

（七）羽化仙史『死人の執念』（大学館　一九〇八年六月四日）一～二頁

（八）羽化仙史『死人の執念』（大学館　一九〇八年六月四日）目次

（九）羽化仙史『死人の執念』（大学館　一九〇八年六月四日）一九二頁

（十）渋江保『催眠術』（博文館　一八九四年六月十一日）例言

（十一）渋江易軒『原理応用神通力自在』（大学館　一九〇九年八月八日）小引

（十二）渋江易軒『原理応用神通力自在』（大学館　一九〇九年八月八日）小引

（十三）渋江易軒『原理応用神通力自在』（大学館　一九〇九年八月八日）二二一頁
（十四）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）一五四頁
（十五）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）三〇一・三一一頁
（十六）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（三）』（紀元書房　一九五八年八月一日）五十四頁
（十七）太田兼雄編『易学研究　羽化渋江保翁伝資料のために（二）』（紀元書房　一九五八年八月一日）五十四頁
（十八）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一三三頁
（十九）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一二一頁
（二十）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一二二・一二三頁
（二十一）山路愛山『独立評論』六月号第三巻六号澁江保氏談話「風俗雑話」（独立評社　一九一五年六月一日）三五頁
（二十二）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一三二頁
（二十三）坂田薫子『イギリス十九世紀末小説の怪物たち（1）』（京都教育大学紀要第一〇二号　二〇〇三年三月三十一日）二十五頁
（二十四）坂田薫子『イギリス十九世紀末小説の怪物たち（2）』（京都教育大学紀要第一〇二号　二〇〇三年三月三十一日）五十三頁
（二十五）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一二一頁
（二十六）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一二三頁
（二十七）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』七十二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）一二二頁
（二十八）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第六〇号　二〇〇四年三月）四〇二頁
（二十九）羽化仙史『奇人の航海』（大学館　一九〇五年十一月十四日）二〇六頁
（三十）羽化仙史『奇人の航海』（大学館　一九〇五年十一月十四日）二〇七頁
（三十一）羽化仙史『奇人の航海』（大学館　一九〇五年十一月十四日）二〇九頁
（三十二）羽化仙史『奇人の航海』（大学館　一九〇五年十一月十四日）二〇九頁

（参考文献）

（一）高桑良興『後の巌窟王』（扶桑社　一九二二年一月二日）
（二）ゴーチェ原作高野優訳『死女の恋』（くもん出版　二〇〇八年四月一日）
（三）長山靖生『鴎外のオカルト、漱石の科学』（新潮社　一九九九年九月三十日）
（四）坂田薫子『イギリス十九世紀末小説の怪モンスター物たち』（京都教育大学紀要一〇二号　二〇〇三年）
（五）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『抽斎歿後』
（六）由良君美監修『世界のオカルト文学幻想文学総解説』（白山国民社　一九八五年）
（七）藤元直樹『渋江抽斎歿後の渋江家と帝国図書館』（参考書誌研究第六〇号　二〇〇四年三月）
（八）山路愛山『独立評論』第二巻第一号（一九一四年一月一日）
（九）山路愛山『独立評論』第二巻第六号（一九一四年六月一日）
（十）山本勉『清末漢訳万国戦史が翻訳出版された背景と万国戦史の意義』（中国言語文化研究第二〇号　二〇二〇年十月）

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）（九）最終話

匠　克仁

〈時系列〉

一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年三月三十一日　良香、東西信販退職
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット入社
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証が東西信販から京亜クレジットへ全株株式譲渡
（登記上はケイワンが全株所有）
二〇一八年三月一日　良香・御木アサヒ信用保証転籍
二〇二〇年三月二日　アサヒ信用保証組織改革
二〇二〇年七月三十一日　アサヒ信用保証決算
（譲渡後2回目）
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
二〇二一年三月三十一日　アサヒ信用保証決算予定
（8ケ月に決算期間変更）
二〇二一年四月一日　アサヒ信用保証の全株式名義ケイワンから京亜クレジットへ変更予定

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
東西信販から京亜クレジットを経て転籍
御木武利　アサヒ信用保証会長
京亜クレジット常務から転籍
猪本進一　アサヒ信用保証前会長（創業者）
東西信販から社内ベンチャーで創業
立花豊　アサヒ信用保証社長（二代目）
東西信販から創業時に出向・転籍
桐先嗣夫　ケイワン（アサヒ信用保証持ち株会社）社長　外科医
谷町雅子　雅ギャラリー社長
御木武利の娘

8（終章）　株主総会【後編】

「俺が詐欺をしただと。俺が何をしたと言うんだ」
御木武利は尻餅をついた床から立ち上がると、弓本良香を怒鳴りつけた。
「アサヒ信用保証のM&Aの際の買収金額は七十六億円でした。しかし、実際には七十五億円で買収できたのです。そのため、株主のケイワンは一億円の損失をこうむったと言えます」
良香は落ち着いて答えた。M&Aは企業の合併・買収である。
「企業買収の価格交渉したことが、詐欺といえるのか」
「もちろん、それだけでは詐欺ではありません。しかし、差額の一億円が御木氏の手に入っていたらどうでしょうか」
良香の発言で会場が一時、騒然となった。
「私も理解できていない。弓本君、もっと詳しく説明してくれないか」
立花豊社長が口をはさんだ。
「買収の際に創業者で前会長の猪本進一氏にゴールデンパラシュートとして五億円を支払いました」
ゴールデンパラシュートとはM&Aの用語で創業者に対する多額の退職金である。
「しかし、猪本前会長に支払った五億円の内の一億円が御木氏の関連のある会社に渡っています。その会社というのは雅ギャラリーと言って画廊と絵画の販売をする会社です。猪本前会長は退任後の二年間に渡り二十点この会社から絵画を購入しています」
「ちょっと待ってくれ。猪本さんは以前から絵画の収集家です。退職金で絵画を買ったからと言って問題はない」
立花社長が疑問を感じた様子であった。
「雅ギャラリーの社長は谷町雅子と言いますが、旧姓を御木といい、御木氏の実の娘になります」
「言いがかりは止めろ。たしかに雅ギャラリーは俺の娘が経営している。猪本君との交渉をしていたら、彼が絵画の収集家と知った。画商をしている娘の会社を紹介しただけだ」
どす黒い顔を紅潮させながら、御木はまくし立てる。
「猪本氏は別に雅ギャラリーを通さなくても、直接、買うことができました。しかし、猪本氏は自分が欲しいと思った絵画をまず雅ギャラリーに購入させました。そして、その金額に五百万円を上乗せした金額で自分が支払う。そのようなことを二十回繰り返したとしたらどうでしょうか」
会場が一瞬、静まった。
「本当ならうまい手を考えたものだ。絵画の値段など買主が納得した金額でなら、いくらでもなるな」
取締役の一人から独り言のような発言があった。

「こうして一億円が御木氏の関連する会社に流れたのです。この御木氏と猪本氏の裏取引は刑法246条1項の詐欺罪に該当することになります」
「証拠はあるのかね」
御木が怒鳴って、机を叩いた。
その時、会場のドアが開いて、一人の男が入ってきた。
「御木君、見苦しいぞ。素直に認めたらどうだ」
その男は御木に対して、大声で話しかけた。
東西信販出身の取締役が前会長の名前をつぶやいた。
男は猪本進一前会長であった。
「正直言って、ゴールデンパラシュートで会長を退任したことを後悔している。当時の御木氏が提案した退職金は五億円でなく四億円だった。しかも、五億円として退職金を受け取りながら、一億円を御木氏個人にキックバックする条件だと明かされた」
「猪本、裏切りやがって」
御木は顔面を真っ赤にしていた。
「先に裏切ったのは御木君、あなたの方だ」
「何を。俺は裏切っていない」
「週刊誌に私のゴールデンパラシュートの記事が批判的に書かれた。社内ベンチャーで高額の退職金は卑怯だという論調だった。あの記事の影響で社員の皆からかなり恨まれた。あの記事のニュースソースはあなただろう」
「俺がそうだという証拠があるか」
「記事には退職金で絵画を買ったとあった。当時はそのことを他の人に知らせていなかった。つまり、あなたと谷町社長しか知りえない事実だよ」
御木は反論できなかった。
「それで、弓本に裏取引をしゃべったというのか」
御木は自分が裏取引を認める発言と気づいていないようであった。
「それは違う。弓本君から指摘されたよ。株式譲渡に際して御木氏との間に裏取引があったんじゃないかとね。あなたは他人に五億円儲けさせたら、必ず見返りを求める人間だということを弓本君は見抜いていたようだ」
御木は良香をにらみつけた。
「実は、雑誌に私の記事が書かれた後も弓本君は私を訪問していた。私の絵画コレクションの鑑賞が目的と言っていた。交渉の過程で弓本君を信頼できるようになったから、私も喜んでいた」
良香は猪本のコレクションを見る口実で猪本の自宅を訪問していた。実際は御木との裏取引を探っていたのであった。
「アサヒ信用保証のM&Aはそもそも弓本君が担当していた。創業者の私を引き続き会長とする条件で進めていた。それを途中からあなたが出てきて、私の退任を要求してきた」
買収後の猪本会長の続投は既定路線であったのに、御木が強引に退任を主張したのであった。
「四億円やるから俺に一億円くれ、という意地汚い提案であった。当然ながら断ったが、受け取らなくても、退任に追い込むことができると脅してきた。京亜グループに入ってしまえば、当時の常務の力で私を追い出すことができるという。それで脅しに屈したところもある。
しかし、裏取引はあきらかに詐欺行為だ。そんな犯罪に加担したことを後悔している」
良香自身も買収交渉の過程で、猪本が卑怯なことをしない人物と感じていた。
「本当は金のためだけではない。私が創業したアサヒ信用保証を東西信販が売却することへの反発があった。創業者の本人が反対しているのに、株主だからと言って勝手に売却を進めた。振り返って考えると、このM&Aで東西信販と京亜クレジットを見返そう、騙してやろうと思ったのかもしれない。それで、御木の卑劣な手段に乗ってしまった」
猪本はため息をついた。
「週刊誌には社内ベンチャーで創業のリスクは無かったと書かれ、馬鹿にされた。しかし、東西信販からは出資だけで、借入をしていない。私は自宅を担保に入れて、銀行から借り入れした。自宅を失う寸前までいったが、何とか成功させ、成長させた。東西信販は出資金以上のリスクを取らなかった」
良香も猪本前会長の創業時から買収までの困難と克服は調査していた。だから、買収後も創業者として会長職で残ってもらおうと計画していた。
それを御木が覆したのであった。しかも、後任会長に居座って旨い汁を吸っていた。
「なぜ、分かったんだ」
「私が頻繁に絵画を購入していることから、その購入した画商を自然に弓本君は私から聞き出した。その画商の法人の過去十数年間の除籍謄本を取り寄せたと聞いた。そこで社長の谷町雅子は旧姓を御木であることを知った」
「それだけでは証拠とならない」
「たしかにそうだ。しかし、弓本君は直接、私に質問してきた。『ゴールデンパラシュートの条件で、当時の御木常務と雅ギャラリーに何らかの利益を還元する約束をしていませんか』とね」
良香自身は推論に自信を持っていたが、証拠が無かった。もう少し証拠固めをしようかと思ったが、これ以上は時間をかけられないと考えた。
御木が自分を排除しようと考えていると察知したからである。
「弓本君は『例えば、絵画を購入する際に金額を上乗せしていませんか』と聞いてきた。物凄い洞察力だと驚いた」

自分の推理を話したら、証拠を消してしまう可能性もあった。良香は猪本自身の良心に訴えることにした。

「全てしらばっくれていれば、済むことだった」

猪本前会長は御木のような卑怯な人物でないと確信していたので、賭けをして勝ったのである。

「確かに推論のみで証拠は無かった。しかし、私自身が良心に恥じている。誰かに告白したいと思った。その相手が弓本君なら適任だと思った。それで、御木氏からの一億円のキックバックを要求されたこと、その支払いを絵画購入に五百万円を上乗せして二十点まで繰り返したことを話したんだ」

猪本が言い終えると、良香が続ける。

「私は猪本前会長から裏取引の詳細をお聞きしました。そこで株主であるケイワンの出向社員として桐先社長に報告しました。

その上で御木氏の取締役再任否決・退職金の支払い停止・一億円の損害賠償請求・内容のプレスリリース・詐欺罪としての刑事告訴をすることを決定しました」

良香は淡々と告げた。

「貴様」

御木は怒りで顔が真っ赤になり、こめかみには静脈の瘤が浮き出ていた。

御木は良香に向かって突進するかに見えた。突然、御木は頭を押さえると、うめき声を挙げながら、卒倒した。

この状況に会場全体が騒然となった。

「119番通報し……」

良香は自分のスマホを取り出して、救急車を呼ぼうとした。良香の言葉が終わる前に桐先が話を始める。良香は通報するきっかけを失った。

「御木君は過去に京亜クレジットの取締役会でも突然、倒れて、私の病院に担ぎ込まれたことがある。東野君なら知っているのではないか」

桐先はいつもの冷徹なままである。

東野と呼ばれたのは今回、再任された取締役である。

「京亜の取締役会で常務だった御木さんが急に倒れたことがありました。私は取締役でありませんでしたが、総務から議事録を取るため出席しました。御木常務が賄賂を貰っていると、対立する役員が発言したときです。私が救急車を呼びました」

東野は戸惑いながらも答えた。

「その時の私の診断は……」

桐先が話している間も、御木は頭を抱えて、うめき声をあげている。

「仮病だよ。もっとも日頃の不摂生で健康状態が悪かったから、専門用語を混ぜて診断書を書いた。入院の必要も無かったが、御木君から是非と頼まれ、仕方なく何日か個室に入院させた」

桐先の言葉に新任取締役の間で失笑が漏れた。

「御木会長、いや、前会長、また仮病で誤魔化そうとするんですか」

東西信販出身の氷室取締役が革靴の先で、御木会長の頭を二回、小突いた。氷室は御木と激しく対立していた取締役である。

「待て」

桐先は語気鋭く制止すると、倒れている御木の側に駆け寄った。

桐先は常に持ち歩いているというペンライトを胸から取り出して、会長の眼球をのぞき込んでいる。

「今回は仮病でないな」

冷徹な桐先の顔が険しくなった。

「弓本君、119番通報だ。くも膜下出血と伝えてくれ。現場に明生大学病院の外科医がいるので、病人と医者を明生大学病院へ運ぶように依頼するんだ」

桐先は自分の勤務する大学病院を告げた。良香はすぐに桐先の指示通り119番に電話して伝えた。

桐先もスマホで電話した。電話の相手は病院の部下のようであった。

「くも膜下出血グレードⅤ（最も症状が重い）のクランケ（患者）が目の前にいる。今から戻ってICU（集中治療室）でクリッピングオペ（開頭し、破裂した動脈瘤をチタンで挟む手術）をする。大至急、準備をしておけ。くも膜下出血を起こした後で、頭部を蹴とばされた。生存率一割程度の極めて生命の危険な水準だ」

桐先の言葉を聞いて、氷室が青ざめた。さらに桐先は様々な指示を与えてから、電話を切った。

「議長、株主総会は未だ閉会していないだろう」

救急車を待つ間に雑談するかのように桐先は立花社長に話しかけた。

「はい。閉会宣言は未だ行っていませんが」

立花はいぶかしげに答えた。この緊急事態に何を質問するかという様子である。

桐先は氷室に指を突き付けた。

「こいつの再任も取り消しだ。御木君が死んだら、こいつは傷害致死罪に問われることになる。人殺しを役員にする訳にいかないだろう」

エピローグ

二〇二〇年十一月十三日、アサヒ信用保証の株主総会から二週間が経過した。

明生病院に運ばれた御木は数時間の手術を受けて、命は救うことができた。桐先医師の技術が無ければ危なかったということである。

御木が入院している明生大学病院に良香は居た。見舞いをする気にはなかったが、良香は御木の容態を見にきたのである。

御木はベッドに上体を起こしていたが、良香の姿を見かけると微笑んだのである。御木は常に怒ったような顔つきでそれまで一度も笑った顔を良香は見たことがなかった。

良香は御木の笑顔を不気味に感じながら、会釈をした。

「すみませんね」

御木の口から初めて謝罪の言葉を良香は聞いた。

「僕は脳の動脈が破裂したせいで、今は記憶がはっきりとしてない。あなたにはとてもお世話になっていたような感じがするんだけど、名前が出てこなくてね」

そういうと御木は深く頭を下げた。あぐらをかいたまま上下座をしているようであった。

「手術は成功した」

桐先が良香の背後から現われた。

良香は「手術は成功したが、患者は死んだ」という桐先の世間で有名になった言葉を思い出した。

「一時的に認知機能を失っているが、リハビリで少しは回復するだろう」

桐先には事前に明生病院へ御木の元に行くことは時刻を含めて伝えていた。ケイワンにおける社長と出向社員の関係は現在も続いている。

「しかし、何か様子がおかしい様な気がします」

良香は率直な感想を伝えた。

「くも膜下出血手術のついでに前頭葉前頭前野を全て摘出した」

「ついでって、それはロボトミー手術じゃないですか」

切り裂きジャックのあだ名を良香は思い出した。

「君はロボトミーを知っているんだ。だったら説明をしてみてくれ」

「精神疾患のある人間の前頭葉を切除する手術です。しかし、その手術後の患者は精神異常の行動は治まってもロボットみたいで人間性を失うため、現在の日本でロボトミー手術は禁止されているはずです」

「意外と詳しいな」

桐先は感心したようだった。

「しかし、君は勘違いしている。今回の御木君の開頭手術の際に前頭葉前頭前野に悪性腫瘍が見つかった。前回に仮病を使った際に頭が痛いと言ってくれたら見つけたのだが、胸が苦しいと嘘を言っていたからな」

良香は事情を知って少しは納得した。

「いずれにせよ、御木君の性格が劇的に変化したのは、見ての通りだ。むしろ、御木君の過去の行動は前頭前野のシナプスが悪性腫瘍による異常なシグナルを送ったためだったかもしれない」

直接、御木と仕事で接触していた良香にとっては、御木は性格異常者としか思えない人物であった。

「私自身も調べたら、他人より前頭前野が異常に活性化している。脳のこの部分は特に人間の個性が表れる」

普段は寡黙な桐先だが、株主総会以降は良香に対してかなり饒舌になっていた。

(どうりで御木も桐先も普通と違って、変人だ)

良香は思ったが、口にはしなかった。

「君も私達と同じく前頭前野が活性化しているタイプの人間だな」

(あなた達と一緒にしないで)

桐先の珍しい軽口を良香は無視した。看護師が桐先を呼ぶ声が聞こえて、桐先はそのまま病室を出て行った。

株主総会とその後の展開から、あの冷徹な桐先も高揚して普段の態度と違うのかと良香は考えた。

御木は不気味な笑い顔を向けたままである。良香は居づらくなって、病室を後にした。明生大学病院を出て、株主総会以降のことを良香は思い出していた。

御木に対する株主ケイワンの方針は変わった。民事訴訟や刑事訴訟やプレスリリース等は取り止めることにした。退職金については当然ながら支払わなかった。

そして、良香の提案により、次の通り手続きすることで関係者が合意した。

御木武利自身は合意できないので、娘で雅ギャラリー社長の谷町雅子が代って合意した。

前会長の猪本進一は自身の退職金の受け取りに不正があったことを認め、損害賠償として一億円をケイワンに支払う。

その一億円は雅ギャラリーから猪本進一に返還されたものである。

具体的には二十枚の絵画を売買・再売買という形にした。つまり、当初、猪本が雅ギャラリーに支払った価格(一枚あたり五百万円高い価格)で雅ギャラリーが買い戻す。その上で正当な価格で再度、猪本がさらに買い戻すということにした。

こうして一億円を捻出したのである。結果的に御木武利から一億円を奪い返したことになる。

雅子は事情を聞いて協力的だった。もっとも協力的でなければ、猪本と御木だけでなく、法人として雅ギャラリーも詐欺で刑事訴追の対象となったかもしれない。

また、一億円が雅ギャラリーから御木武利個人の名義に移されていなかったので可能になった。

ケイワンは七十六億円の株式出資金全額を京亜クレジットから借り入れ、利息を含めた金額で同社に売却する。賃貸借契約も売買予約も有効に成立しており、金額が変更される余地はない。

つまり、ケイワン、実質的に桐先個人が今回の一億円をそのまま利益として受け取ることになった。

(ケイワンに一億円を儲けさせたのだから、私にも臨時ボーナスとして、いくらか……)

そこまで良香は考えたところで、思考を中断した。御木と同じ思考をしている自分に気付き、苦笑した。〈完〉

一・二・三・四・五……十

匠　克仁

一から人生をやり直す。五十才のアスペルガー診断で第二の人生を始めることを決心した。生まれ変わったので三才の幼稚園児から人生をやり直したい。今現在ならば四才児として幼稚園の年中組に入れてもらおう。ぼくは五感（視・聴・嗅・味・触の五つ全部）が過敏であり、第六感も感じる。面倒な幼稚園児である。やり直ししても七転八倒の人生になるのだろう。ぼくの人生後半は七転八起というようにしたい。普通人では生きられないので九死に一生を得たつもりである。ぼくは人生を一度、五十才でリセットして人生百年時代を生きたいと思う。

一日一回は軽く筋トレするなど良い習慣は続ける。上腕二頭筋はいわゆる力こぶで、ダンベル等で鍛える。上腕三頭筋はその反対側の筋肉で腕立て伏せで鍛える。下腿四頭筋は太ももの裏スクワットで鍛えている筋肉である。第五肋軟骨と結ぶ大胸筋も腕立て伏せで鍛えている。よく六つと言われる腹筋部分は腹筋運動で鍛えている。実は七つなど左右非対称に割れる場合も多い。解剖学的には八～十の筋肉が結合し腹直筋はできる。6パックでなく九つに左右が非対称に割れてみえるボディービルダーも十個に割れてみえるボディービルダーもいる。ぼくのは六つに左右対称に腹直筋がなっていない。それで、左右二つの腸腰筋を意識して、腹筋運動をする。体脂肪率が一桁になると、腹直筋の左右非対称が気になる。腹筋は一回ごとに左右に捻じり運動する。ぼくの腸腰筋の上に二筋の静脈が浮き出ている。これが健康的か判らないが五十四才で腹筋に血管が浮き出るのは珍しいと思う。

一頭、二頭とは筋頭という体の中心に近い先端で、上腕二頭筋は力瘤の肩側をよく見ると二つに分かれる。上腕三頭筋は鍛えても見えないが三つに分かれている。大腿四頭筋は深層に隠れているが四つに分かれている。下

腿二頭筋は腓腹筋が二頭とヒラメ筋が一頭で、合計すると三頭になる。しかし、解剖学的には足底筋の一頭があり四頭に分かれているのである。だから下腿三頭筋は下腿四頭筋と呼ぶことが正しい。二頭筋というと一般に上腕二頭筋のことを意味する。しかし、二頭筋には他に大腿二頭筋もある。この筋肉の名前をあまり聞かないが大腿四頭筋の反対側にある筋肉である。太ももの裏側の大腿二頭筋と半膜様筋と半腱様筋をハムストリングとし大腿二頭筋だけ単独で筋トレしないので使われにくい。大腿二頭筋のハムストリングはハムの紐の意味である。肩の三角筋は腕立て伏せ等で鍛える筋肉である。下腿には第三腓骨筋があるが、第一腓骨筋や第二腓骨筋は無い。第三腓骨筋は腓骨筋群でなく下腿伸筋群である。日本人の二十人に一人は、先天的に欠けている。腓骨筋（群）は二つに分けられ長腓骨筋と短腓骨筋という名である。第三腓骨筋は長腓骨筋と短腓骨筋に次ぐ意味である。下腿三頭筋の一部は腓骨筋でなく腓腹筋である。ヒラメ筋を一頭と書いたが、一頭筋でなくて、単頭筋という。下腿三頭筋のヒラメ筋は魚の平目（鮃）の直訳である。下腿三頭筋のヒラメ筋は赤筋で魚のヒラメは白筋である。

一関節筋（単関節筋）というのが骨格筋のほどんどだが二関節筋という筋肉の性質を表す総称名がある。関節を二つにまたがる筋肉ということである。具体的には上腕二頭筋でこれは肘関節と肩関節の両関節までである。上腕三頭筋も同じく肘関節と肩関節までである。手の部分では二筋のみであるが、足になると九筋ありその一つが大腿四頭筋の長頭で、坐骨結節と腓骨頭とつながる。さらに三関節以上の関節にまたがる筋肉もあるが、三関節筋や四関節筋という言葉はなく、多関節筋と呼ぶ。指屈筋は八個の関節を持つ手根骨を覆っている多関節筋である。

二腹筋があるが、腹筋と関係がない。二腹筋というのは二つの筋肉が縦に結合した筋肉なのである。具体例は顎二腹筋である。ややこしいが、二腹筋の腹は筋腹であり二つ筋腹の筋肉なのである。筋肉は筋頭・筋腹・筋尾の三つに中心に近い部分から呼んでいる。二頭筋が筋頭が二つあることと同様である。この様に二腹筋があるなら三腹筋があるかというと、三頭筋と違って存在しないで三つ以上の筋腹を持つのは多腹筋と呼んでいる。例えば三つ以上の筋腹を持つのは腹直筋である。腹直筋は八～十個の筋肉が結合している。腹筋が割れる理由は筋腹が八～十個の腹直筋のためである。二頭筋・二腹筋からは二尾筋がありそうなものだが無い、というのは、筋尾が二つ以上の筋肉を多尾筋というのである。多関節筋では八個の関節を覆うと説明した指屈筋は多尾筋でもある。

一つここで多尾筋・多腹筋・多頭筋について整理する。

二つ以上の筋尾を持つ筋肉が多尾筋である。それに対し三つ以上の筋腹を持つ筋肉が多腹筋である。その理屈で四頭筋があるから、五つの筋頭を持つ筋肉は、多頭筋

か五頭筋かと疑問を持った。調べてみると、筋頭が五つも六つもある筋肉はないのである。しかし、多頭筋はあり七不思議である。ここまで書いたが、続きが書けず四苦八苦している。せっかくだから十まで続けたいが四九八九…いや四苦八苦して書けなくなってしまった。これで十分と自分を慰めよう。二字目が一二三四五六と続くと十まで書きたくて文章が止まる。多頭筋の説明であるが五以上の筋頭を持つ筋肉でなくて、平行筋（紡錘状筋）の一種である。筋肉の代表的な形状は、平行筋と羽状筋の二つがある。（半羽状筋などもあるが代表例である）

一、平行筋＝筋繊維が平行である。例えば大胸筋や上腕二頭筋などが平行筋である。

二、羽状筋＝筋繊維が斜めに並んで詰まっている。上腕三頭筋が上腕二頭筋と違いこの筋肉である。また、大腿四頭筋も羽状筋である。

五つ以上の筋頭と関係なく、多頭筋とは平行筋の一方が二つ以上に分かれた状態である。

一つの習慣は筋トレであるが、他にも習慣がある。

二つ目の習慣はエレベーターでなく、階段を使うことで三十一年くらい続けている。現在ぼくは大阪市営住宅の四階に住んでいるが、引越しして七年でエレベーターは五回位しか乗らない。一年に二回使ったことがないので六回以下である。四階だからできるのでなく四階の倍の七階に住んでいてもできる。（四階までの階段数の倍は八階ではなく、七階である）　実際に、直近の勤務先は九階であったが、よく階段を利用していた。過去には二十階まで階段で毎日、通勤していたことがある。実際は二十七階超（後述）に相当する。当時のぼくは銀行本店三階で働いていた。しかし、ぼくの所属する部署七人が二十階の部屋に移った。ぼくのいた銀行の本店のビルは二十四階建てで、高さが９９・９５ｍであった。ビルは十六階以下を銀行が、十七階以上を別の会社が所有して二十階は別会社の余った小部屋を借りたのである。この二十階の勤務先に行くのに一般銀行員用エレベーターで十五階まで乗って役員専用のエレベーターに乗り換えて二十階まで昇っていた。十六階まで行くエレベーターを十五階で止める。当然ながら役員が乗っている。役員が十六階で降りた後、ぼくは残って十に行く。このように二十階に行くのが面倒くさいというか気まずい。実際に十五階でエレベータが開いたら、入社時の支店長がいて十六階で降りた。その人は副頭取になっていた。ぼくは二十階までエレベーターで移動することが、面倒になり二十階まで階段で登るという決意をしたのである。さて二十階といっても、銀行ビルは一般マンションと違って一階ごとの高さはマンションより差が随分ある。つまり二十四階建てで高さ９９・９５ｍあるので、計算すると一階あたり平均約４．１６ｍの高さになる。二十階まで十九階分を登る計算になる。１９掛けた７９．１ｍ登

り二十階に到達する。マンションの一階は３ｍであるから十九階分の銀行は７９．１…÷３＝２６．３７…となり二十六階分と約四割の階分の階段を登る。マンションの二十七階を超え二十八階迄の階段の四割である。ぼくは二十七階と二十八階との間の踊り場近くまで登っていて二十七階超だと毎日が登山みたいなものである。ぼくは四苦八苦することなく平気であった。それでぼくは大腿四頭筋がいまだにかなり発達している方だと思う。下腿三頭筋も同様に鍛えられている。太ももももふくらはぎも三つ位に筋肉の先端が分かれていた。健康の上でも下腿三頭筋は心臓に良いのである。心臓にとって最大負荷は二本の足先から重力に逆らい血液を上方へ上げることが一つの真実である。ミルキングアクションといって下腿三頭筋が下肢の静脈血を心臓へ運ぶ。ふくらはぎは『第二の心臓』と呼ばれている。ふくらはぎは二対なので第三の心臓もあるとも言える。第三の心臓として前腕部が四足歩行していた名残として指摘をする人もいる。尚、第二の脳と呼ばれるのは腸である。この文を書いて、もが八文字続く諺を発明した。太ももももももの肉。も八文字だけでなく内と肉との漢字の形を意識した。もう一つ創った。ももくる三年かし八年。太ももつまり大腿四頭筋を鍛えるのに三年かかり、くるぶし、つまり下腿三頭筋を鍛えるのに三年かかるという意味である。大腿二頭筋を含めた下肢つまり二本の足全体を鍛えるのには八年かかる意味である。これも実体験であり石の上にも三年というように三年は鍛錬しないと日に見えるように三つや四つに筋頭が分岐をしない。ぼくの足のサイズは二十三センチである。下肢全体を鍛えても足のサイズは二十三センチのままである。日本市場に成人男性の靴は二十三センチのものは流通していない。仕方がないので二十四センチ以上の靴を履いている。レスリング用では二十三センチのシューズがあり、問題なかった。ぼくは二十四センチの革靴を履いていたが、小指が窮屈であり二十四センチでも小指の爪が変形した。この文を書いて四千年も前のギリシア神話『プロクルステスの寝台』を三十年ぶりに思い出した。プロクルステスは旅人のため二つ寝台を持っていた。人より小さい寝台と大きい寝台二つである。小さい寝台に寝た旅人の寝台からはみ出た二本の足を切り落としたのである。小さい寝台よりもう一方の大きい寝台が悲惨で寝台の長さに伸ばし殺した。

二十階までの階段生活は健康的でよかったのであったが二、三ケ月くらいで終わった。ぼくのいた部署の全員で三百名くらい居た。その部署が人間ごとまとめて銀行の一部から分離され、ＮＴＴ子会社になると報道された。二十階の勤務場所はそれだけでは変わらなかった。当日に一人ぼくだけが銀行の支店に異動になったのである。

二つの習慣が無ければ鬱が悪化していたとぼくは思う。

二つの習慣も鬱になったらできないと指摘されそうだ

が一つ誤解がある。習慣は無意識、運動は鬱を改善するの二つの真実は否定できない。朝、日が覚めて起きるとき一回は腹筋になる。腹筋もできず俯せで手で体を起すと一回は腕立て伏せになる。立ち上がる時にスクワットが一回になる。一回できたら二回目は簡単にできる。もし百回できたら千回も簡単である。レスリング初心者時は十回でも胸筋が痛くなった腕立て伏せも百回連続できて百回を十セットできるようになった。今でこそ少なくて十回のときや病気で一回のときがあっても腕立て伏せを一回もしない日は無い。また、駅等のエスカレーターは一階分くらいなものは全く使わない。一階分で乗るのは一ヶ月に一回くらいで緊急時である。鬱状態が酷い時は一段階段を登るのも辛く感じるけど、エスカレーターを一回も使用しない。肉体疲労が極限でも、優先座席には一回も座らないのと同じ感覚である。人生をズルしてる一抹の不安を感じるからである。

三つ目の習慣は一日四回の舌磨き・歯磨きである。毎朝一番で舌磨きを専用ジェルとブラシでする。終わったら二番目に歯磨きをする。それから朝食を摂るのである。三度の食事の後に歯磨きをして、軽く舌も磨く。合計で四回、舌と歯磨きをする。歯磨きに限った道具だけでも五種類（普通・電動式・タフト・フロス・歯間）なので六種類（舌ブラシ含）になる。ホームホワイトニングを七日間つまり一週間に一回くらいする。八〇二〇運動で八十才で歯を二十本残そうと奨励している。ぼくは二十九本歯がある。親知らずが一本右上にある。百才でも二十九本残っていそうである。虫歯も歯周病も歯科学では二者の間での感染症・伝染病が証明されている。ぼくは二人っきりのパートナーシップ関係というのが無いので一生、口腔内の感染症の虫歯などの心配は無い。それに三ヶ月に一回は歯医者で歯石を取ってもらっている。

六つの中の歯間ブラシであるがぼくのSSSという〇・七ミリ最小の歯間ブラシを使っている。左上の六番目と七番目の歯の間の一ヶ所しか歯間ブラシは使えない。二十六ヶ所の歯の間は〇・七ミリの隙間も無い。たったの一ヶ所のために歯間ブラシを使っているのである。

四つ目の習慣は毎日朝、体重を測ることである。ぼくは三十五年間毎日、夜を含め三回ほど体重を測っている。

五十三キロを三十年近くも維持していた。毎朝の体重が五十三キロの上下二キロの範囲であった。五十才過ぎて四十七キロに落ちた。発達障害の疑いがあり人事部から一度、医師の診断を受けるように指示があった。診察で一発で発達障害と診断され人事部に報告した。それから一般の正社員からパートに降格されて、収入もいきなり二分の一以下になって、仕事も合わず、人間関係も悪く六キロやせてしまった。鬱病の診断基準で体重の減少が一割以上になったケースというのがある。ぼくの場合は五十三キロから四十七キロと書いたが、寝る前に測る

と一～二キロ増えている。前の年に寝る前に測った体重は五十五・二キロがあったから、その値と比べたとしたら八キロ以上やせたことになる。ダイエット商品の広告で八キロやせた人が八十キロ位だったりする。ぼくの四十七キロに対して八キロは六分の一に相当する。体脂肪は一割前後とやせる前も低脂肪であったから尚更である。

五十才過で急に六キロもやせると頬の肉がえぐれる。十九世紀末のムンクの『叫び』の顔になった。『叫び』は五種類あるのだが、油彩画が似ていたと思う。ぼくは週五日間こけた頬を見られないようマスクを着けた。二〇一九年の新型コロナのマスクでの先駆けをした。時代の一歩先をぼくは行くのである。原稿を書いている現在は五十三キロ（朝少し下回り、夜少し上回る）に戻った。

五十三キロから太らない様に体重を測っていたが、今は四十キロ台にやせない様にも気を使っている。体脂肪率一桁にしたいと思うので、かなりバランスが難しい。

五十四才まで生きていけた原動はメタ認知感覚で自分を一歩後から見たり、自分を上空から見る能力である。

一流のサッカー選手が自分や他選手を上空から見る様に一瞬で判断してプレーするのもメタ認知である。全ての五感をフル稼働したら脳の中で上空からの映像が映る。

一般的には幽体離脱もメタ認知である。寝ているときも五感は働いている。触覚から自分の寝姿を想像ができて五感から脳の中で視覚として認知して、触覚として上空二メートルで浮いている体感をすれば幽体離脱になる。

三途の川から引き返す臨死体験と同じ脳内現象である。四十七キロでムンクの叫びを鏡に見た時に、脳の中には一個、まんじのエッセイのネタができたと喜んだ、もう一人の自分がいた。これもメタ認知である。メタ認知の一例を紹介しよう。**あなたは今まんじを読んでいる。**

一例の**あなた**は読者つまり、まんじから視覚情報を得る一人の人間としての**あなた**である。まんじの読者の一人一人が一つのことを思っていることが、ぼくには分る。

一、そんなわけないだろう。

一人一人がまた一つのことを思っていることが分る。

一、あたっている。

五感だけでなく、ぼくは第六感もあるような気がする。五感を超えるものがあっても不思議ではない。なぜなら二つの感覚が混ざる共感覚の不思議な脳だからである。第六感というと霊感みたいな感覚で、メタ認知できる。第六感として人は磁覚（磁力を感じる感覚）があると二〇一九年に東京大学などが研究を発表した。磁覚という第六感は渡り鳥、鮭、蜜蜂が持っている。電気を感じる第六感は鮫が持っている。

四苦八苦をぼくはよく使う。ぼくの人生を象徴している四苦八苦という言葉が好きで先ほどの文章にも使った。四苦八苦は現在ではとても苦労することの意味であるが四苦八苦は本来は、仏教のドゥッカの生・老・病・死

の四苦と愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五蘊盛苦を加え八苦としたものである。特にアスペルガー星人のぼくは五蘊盛苦を常に感じている。

五蘊盛苦とは心身活動だけでも苦しむことである。

五蘊は色・受・想・行・識（色＝体、受・想・行・識の四要素＝心の働き）のことである。心と体の働きである五蘊が地球人の様に機能せず苦労している。仏教用語は四苦八苦や五蘊盛苦や六波羅蜜や十二因縁など数の入る四字熟語が多い。

六波羅蜜　布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧という六つの修行徳目。

六道輪廻　地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上という六つの迷いの世界に繰り返し生まれ変わること。

十二因縁　苦悩を滅する条件で、無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死の十二個があって十二縁起ともいう。

四字熟語でない数字の入った仏教用語はもっと多い。

四苦や八苦でなく三苦という言葉もある。

三苦　苦苦・壊苦・行苦の三つの苦。

三苦の苦苦とは通常に苦と考えられているもので他にも二つ苦があり、楽が壊れたときの苦、存在が苦である。

一切行苦という用語もあり行うことが全て苦である。

三苦と同じサンクの読みで三垢という仏教用語がある。

三垢は貪・瞋・痴の三つの心の垢であるが、一般的には三毒と呼ばれている。三毒は一〇八個もある煩悩の中で三大のものであり、次に箇条書きで説明する。

一　貪（とん・むさぼり）　貪（どん）欲

二　瞋（じん・いかり）　怒り

三　痴（ち・おろか）　グチ（愚痴）はおろかおろか

一〇八の煩悩全て書きたいがまた読者が離れてしまう。

一〇八の煩悩くんがぼくの股間から生える煩悩をした。

一〇八の煩悩や妄想が多いのがアスペルガーである。

一個人のぼくだけの問題でなく、アスペルガーの特徴の一つに妄想癖があるとか幻覚を見ると書かれている。

一〇八本生えている様子が幻覚としてぼくは見える。

四苦八苦を前半の文で四九八九と書いたが、ぼくは苦を九に等、文字が数字に見えることがある。

四苦は四九で$4\times9=36$　$3+6=9$（九＝苦）

八苦は八九で$8\times9=72$　$7+2=9$（九＝苦）

三苦は三九で$3\times9=27$　$2+7=9$（九＝苦）

三苦など書いているだけで脳内で計算が始まる。ここで三苦など、はひらがなで書いて、六行前の文章で、苦を九に等、…とナドを文字調整で使っていると思われるが二十年以上前からナドの前後が漢字ならひらがなを使い一方ナドの前後がひらがなら漢字を使っていたという一々くだらない言い訳をしてしまう。ぼくの脳では四苦八苦を四九八九でなく、死苦恥苦にも見えてしまう。

四＝死や九＝苦と変換されるのが、ぼくの脳である。

四などの数字情報が死などの文字情報に伝達するという七面倒くさい（シナプス刈込みのない）脳なのである。

一日二十四時間こんな脳を持っていると、大変である。

一二三ならよいが不規則な数字の並びが文にみえる。

一般人と同じ生活をしたいが、ぼくの脳は許さない。

一日中、数字が文字に見えたり、煩悩が暴れまくる。

一本の股間の煩悩くんもついでに暴れまくるのである。

四四二二…いや獅子奮迅の働きを脳がしていてもそれで二十…いや日常の生活がやっとである。脳内では獅子が八四…いや走り回っているという煩悩が発生している。

一十…人として普通に生きたいのである。

三苦や三垢や三毒など悪い仏教用語が続いたが、三では三宝などという良い意味の仏教用語がある。

三宝　幸せになるための仏宝・法宝・僧宝の三つの宝。

三学　悟りを開くための戒学・定学・慧学の修行方法。

三の熟語の次には四以下からの熟語を記述する。

四生　生物の誕生で、胎生・卵生・湿生・化生。

四諦　苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つの真理。

五位百法　現象を五つの分野で百に分類したもの。

五戒　在家信者の五つの戒律。

一　不殺生戒　生き物を故意に殺してはならない。

二　不偸盗戒　他人のものを盗んではいけない。

三　不邪婬戒　不道徳な性行為を行ってはならない。

四　不妄語戒　嘘をついてはいけない。

五　不飲酒戒　酒類を飲んではならない。

五戒をみれば五の不飲酒戒以外は、キリスト教のモーセ十戒（じっかい）の内容にかなり類似している。仏教の五戒で殺していけないのは生き物全般であるが、モーセ十戒では人間だけのことである。

六曜　先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口。

七慢　慢・過慢・慢過慢・我慢・増上慢・卑慢・邪慢の七通りの自惚れ心のこと。

一期一会という四字熟語がある。この熟語の上の二字の一期は仏教用語であり、一生涯という意味である。一期一会は一生涯に一度しか会えない気持ちでもてなすとの千利休の茶道の精神を示した諺である。一期一会に似た千載一遇は人でなく物事の出会いを指す。一期一会から一五一八という数字を連想した。期はゴなのでそのまま五でよいが、会はエなのに、ヤに脳内で勝手に変換して八になってしまった。面倒な脳である。古来の数え方で八はヤ（ア）で半分の四はヤ行のヨ（ツ）である。さて六はム（ウ）で半分の三はマ行のミ（ツ）である。さて二はフ（ウ）で半分の一はハ行のヒ（イ）である。さて千利休が生まれたのは、西暦一五〇〇年代と知っていて一五一八年でないかと調べてみた。おしいことに生年は一五二二年だった。豊臣秀吉に死（↓四）を命じられた千利休の生年を一五一八（↑一期一会）＋四（↑死）＝一五二二年と記憶した。こんな脳だから千利休の生年

を一期（一生涯）忘れない。千利休の生年がぼくの一期（一生涯）に何か意味があるかというと関係ない。普通は七面倒くさいこんな脳神経の経路を通らない。この一期一会の話だけでシナプスの刈込みのないぼくの脳神経は四方八方に飛び散って、文章も四散してしまっている。

一度ここで仏教用語の話を終え、住所の話をする。

一と漢数字か、1と算用数字か地名のルールがある。

二丁目は漢数字で書き、2丁目としない。住居表示では三番ではなくて、3番である。続く号も番と同じように四号でなく4号とするのが正しい表記である。人名では五郎さんを5郎さんと書かないのと同じ理屈で、地名も六本木を6本木としないのと同じなのである。昭和三十七年制定の住居表示に関する法律による。だが横浜市は八丁目でなく8丁目などと一部だけが算用数字を使うが九丁目と殆んど漢数字を使っている。算用数字は昭和三十七年の住居表示に関する法律の制定前の地名である。三十七年以前から小字の代りに丁目を使っていた。昭和三十七年以降であれば、1番とするところを法律前に既に一丁目でなくて1丁目としていたのである。したがって一丁目でなく1丁目の部分は地名でない。しかし旭区の二俣川だけが例外の例外で地名でありながら横浜市旭区二俣川1丁目と二俣川2丁目とが存在する。二つは昭和三十九年にできた地名だから算用数字はおかしい。旭区二俣川1丁目と二俣川2丁目が北海道を除いた全国でも二つだけが算用数字を使う地名ということになる。

一丁目まで地名であり固有名詞に算用数字を使わない。

一つ大きな例外は北海道で札幌市・旭川市・網走市など四十近くの市と町だけは、算用数字である。条が入ると一条も一丁目もせず算用数字になる。北海道でも通常は一丁目と漢数字である。条丁目といい、中心より南北に一本のy軸があるとみなして条とし、同じ様に東西にも一本のx軸があるとみなして丁目とするからである。

一例を挙げると、札幌市中央区北1条西2丁目である。

一つ帯広市だけ丁目が先にくるが、他は条が先である。

一丁目と地名を漢字で書く良い例は静岡県下田市であり一丁目から六丁目という六つの丁目だけの町名がある。

一丁目を使わない地域があり、堺市では日を付けないで一丁と表記する、ただし、堺市でも美原区は一丁でなく一丁目である。福島県いわき市や郡山市の一部の地域は一丁目でなくて、一町目が使われている。江戸時代から一町目が使われたが、他の地域は町目を丁目に変えた。

一丁目に一町目を現在でも変えなかった。ぼくは、この一丁目と一町目の違いだけで会津の人の明治維新以後も一本気な志を持ち続けていると感じるのである。全国で一町目を一丁目と変えているにもかかわらず、福島県の一地方だけ討幕政府である方針に従わない。戊辰戦争の一九六八年から既に百五十年以上たっているが、恨みが一町目に表れていると感じるのである。

三重県名張市には丁目という地名が存在しない。埼玉県八潮市には二丁目という地名があるが、これはもともと二丁目村という江戸時代の村が大字として残った。また一（壱）丁目という地名が埼玉県上尾市にあるがこれも一（壱）丁目村が大字として残った。岩手県花巻市東十二丁目という地名も東十二丁目村という村名であった。

一丁目と戸籍抄本で、1丁目と住民票で、表記される。

一丁目としない理由は住民票は横書が多いからである。

九州大分県大分市から法務省に住民票の住所欄の表記を一丁目でなく1丁目としてよいかと照会があり法務省が一丁目と漢数字でしなくてよいと回答した。それが昭和三十八年で各地の住民票が徐々に算用数字に変わった。

一度ここで住所の話は終わり、発達障害の話をする。

一患者としてニューロマイノリティと呼んで欲しい。

一九九〇年代からのニューロマイノリティという言葉も二〇二〇年になってもあまり普及していない。もっとも二〇二〇年に日本ニューロダイバシティ研究会ができて二〇二〇年代後半には日本でも定着するかもしれない。

一九六〇年代からあるセクシャルマイノリティの様に。

二〇一三年に米国でアスペルガーの診断が廃止された。

二〇一三年から日本の医学界でも診断が少なくなった。

二〇一七年にぼくはアスペルガー症候群と診断されたが二〇一九年の診断書で広汎性発達障害に変わった。別に二年で病状が変わった訳でない。広汎性発達障害もあと二、三年で自閉症スペクトラム障害になると思う。

三つの誤解を招くのが広汎性発達障害の診断名と思う。

一、広汎性は社会生活を行う上で広範囲という誤解。

二、発達は脳だけでなく体全体に対するという誤解。

三、障害は配線の違いでなく、欠損するという誤解。

一番問題なことは、neuroつまり脳神経の省略である。

二〇一二年までは原語でも日本語でも省略されていた。

二〇一三年に原語にはneuroという用語が追加されたが一部だけで混乱している。neuroが追加されても日本は二〇二〇年に至るまで反映されていない。（脳）神経が一番この病気の重要なワードだが病名に入っていない。

一つ一つぼくなりに誤解を解くように説明する。

一、広汎性は、脳内において広くという意味である。

二、発達はあくまでも脳の神経についてだけである。

三、障害の原語disorderは順番や流れ等が異なることで一つも障害や欠損しているという意味は無いのである。

第一に知的障害や身体障害はdisabilityの訳で全く異なる二つの単語を同じ障害と訳した理由が理解できない。

一言で直訳するとdisorderは無秩序である。この三点を一つにすると、脳内の広範囲で神経が無秩序である。

一人の患者当事者としてぼくは発達障害を説明する。

一、脳神経が広範囲に流れや順序が他の人と異なる。

二、そのため多数派の脳神経の社会と軋轢を起こす。

三、副次的に病気が発生して日常生活が困難になる。

四、多数派の人に無い発想・感覚・表現能力を持つ。
五、アインシュタインなど世界を変える発見もする。

一般の人と異なり具体的には多数決で少数派になる。

一に一を足すといくらになるかを尋ねて、幼稚園児や小一に民主主義的に答を多数決で決めると仮定する。もし三と答える子が多いと、それが正解になるのだろうか。

二とぼくが主張したら空気が読めないとされる。さらに十もありえると主張したら、変人扱いされるだろう。

二進法の世界では、一に一を足すと十が正解である。

十進法の世界ではということを前提していないのだから十もありえるとぼくは小一くらいで考えていた。時間が六十進法というのは小一でも分かるだろう。位＝桁とは十単位とは必ずしもなっていない。例えば、三十一秒に三十一秒を足せば位＝桁が上がって一分二秒である。

六十進法で10、11…をA、B…と一文字で書くと三十一はVであるから、三十一つまりVを足し合わせると一分二秒になる。V（31）＋V（31）＝12。

十進法よりも大きい進法では十以上をアルファベットで十→A、十一→Bとするのが通例であるので説明したが六十進法では通常、二桁の数字の組合せを一桁とみる。

一年は一月の十二進法であり、一月は一日の不規則な三十進法であると考えるのがぼくの脳神経である。やはり七面倒くさい人間だなと他人は考えるが、本人はもっと七面倒くさいのである。

一と一を足したら二になることを一々、疑問に思う小学一年生がいたら変であろう。その変な子がぼくである。

三つ子の魂百までということわざがある。ことわざでは三才までに身に付いた性格や行動様式は成人になっても百才になっても変らないという意味である。この考えは十割、エピジェネティクス＝後成遺伝学で否定された。

二子（ふたご）の研究というのがあり、一卵性双生児と二卵性双生児とを比較した結果で実証されている。さて三つ子を双生児の様に三生児とぼくは誤解して三生児は百才になっても三人とも同じ性格と勘違いしていた。

五十四才のぼくはエピジェネティクスの方を三つ子の魂百までのことわざより信じて生きるつもりである。

十才頃の変なエピソードを思い出した。ぼくは太陽光に六角形の光が見えたのである。太陽光の写真上にはよく六角形が写っている。しかし、肉眼で見えるのは幻視で六角形はレンズフレアといってカメラのレンズの周りの六角形の羽の影響である。ぼくは写真のレンズフレアの六角形が脳のシナプスに結びついて、肉眼で存在しない六角形を認識していた。もしぼくが先生に「太陽の光が六角形なのはなぜ」と質問したら変と思われる。実際に六角形の太陽光を写生画で書いて先生に怒られた。でも六角形は脳で認識した光景を忠実に写生した。漫画でも六角形の太陽光はよく描かれるが、漫画家が写真に写る六角形を自然現象と思ったか、知って書いたか、ぼく

の六角形の幻視と同じ様に脳のシナプスで発生している。

六角形というと氷晶つまり氷の結晶であるが、雲の中で六角形の短い柱の氷晶が縦に並ぶ現象がある。無風では六角形の短い柱の氷晶は空気抵抗がないため規則正しく六角形の部分を水平に雲の中に分布する。太陽の真横に六角形の氷晶を持つ雲が並ぶとプリズムの役割を果たし六角形の氷晶を持つ雲の反対側に、幻日が発生する。

六角形の氷晶を持つ雲が地表の太陽の前に並んだときに六角形の氷晶面に反射し太陽柱という火の柱に見える。

六角形は太陽については幻視であるが、土星は観測上で六角形が北極点の周りに実在する。円形の液体タンクが六角形を形成する実験がある。中心と外縁の速度の差で六角形や回転速度違いで三角形、八角形が発生するので六角形が土星の北極に発生する仮説の一つとなる。

六角形は自然界に多く存在している。例えば、蜂の巣は六角形の組合せである。他にも自然界には亀の甲羅など六角形の組合せでできている。また昆虫は人の目と違い六角形の組合せの複眼である。球形の物を密集させると六角形に変形する。そもそもDNA・RNA塩基は全て六角形でできている。正確には、アデニンもグアニンも六角形と五角形がある。余談であるがサッカーゴールは六角形のネットでできていて四角形より衝撃に強い。

六角形の幻視はレンズフレアという現象を知ってからは一度も発生していない。脳のシナプスが改善された。

一個人のぼくの例だが体全体の発達が遅れる傾向なのは二次障害であると思う。偏食が多いのはアスペルガーの一つの特徴である。子供の頃から食が細かった。ぼくの一年一ヶ月下の弟はアスペルガーでないので、ぼくは小一くらいで弟に身長で抜かれていた。ぼくの弟も父親も一般的な平均身長である。他にも発達遅れの例がある。

十代半ばで弟の口元の産毛が濃くなっているのに気づき一才上のぼくもそろそろと思い続けている。あれから四十年。ぼくは未だに四十年前の弟ほどもひげが無い。四十年後は発達してひげが濃くなっているだろう。ぼくは一年でひげを剃るのも数えるほどである。にゅるうんと一本のびているのを見つけるたびに毛抜きで引抜いたり百円ショップで買った眉毛はさみで切っている。最近の一年は剃ってないが前述の通りして、ひげは見えない。高一まで脇毛や×毛まであまり生えていなかった。両脇の二ヶ所からはー～～くくろろそそゐゐゐという毛が五六本ほど生えているくらいであった。精神科医だったら一日で体の発達遅れからアスペルガーと分っただろう。

一応注意しておくとアスペルガー＝体の発達遅れという一対一の関係でなっているのではない。そうではなくて二次的な障害（食欲不振など）でそのような発達遅れが一般人に比べて顕著な傾向にあるということである。

二字目を気にしてこんなエッセイを書いているくらいで一般社会に適応していくのは非常に困難なのである。

編集後記

コロナ・ウイルスを地球上から一掃したいですね。でなければ、コロナ・ウイルスが人間に害を加えないように、人間が譲歩して、コロナ・ウイルスと共存できるように、全人類が有効なワクチンを接種するしかないですね。

私たちの周りでも、外食産業が大手も含めて廃業やむなしと言い出し、そこの従業員が正規・非正規を問わず退職に追い込まれています。その方々が復職できるような社会の活性化ができるのでしょうか。週休三日、出勤率七割削減の呼びかけは、大変厳しい社会変革につながるのではないでしょうか。

まんじ誌本号からの表紙絵にお気づきでしょうか。牛に乗った「コブッタ」さんが、何とも言えない笑顔で、右手に持った光で世の中を浄化しています。コロナに「シュン」としている私たちに「元気をだしましょう！」と呼び掛けてくれています。牛も優しく微笑んでいます。

田寺先生、素晴らしい表紙絵を有難うございました。

本号から新しい同人山本一成氏を迎え、早速寄稿していただきました。同人忠内氏の紹介で、鍋屋も協和銀行で同じ支店でご一緒したことがあります。

悲しい訃報です。永年、短歌で独自の世界を開いてまんじ誌に寄稿を続けておられた石黒修身氏が、去る一月十三日に逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

末筆になりましたが、同人の皆さん。くれぐれもコロナへの感染にはご留意ください。二月予定の合評会が開催できることを願っています。

（鍋）

まんじ第159号

令和３年２月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL・FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について
「牛にひかれて　暗雲退治」

田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.160

記念号

2021.5.1

まんじ第百六十号目次

表紙絵解説「摂理」……田寺怜葦（たでられい）……4
天守台を仰いで㈠……三戸岡道夫（みとおかみちお）……5
食器洗い主夫の「つぶやき（ツイッター）」……新井宏……12
流人……深堀武士の討入顛末……太田精一……26
杉森孝次郎のこと……松下壽男……38
宅建士「花山聖司郎」の事件帖
地霊の怒り……葵州月……43
オバマ大統領就任演説……鍋屋次郎……80
君なんぞ高歌・沈吟せざるや（続）……鯨游海（くじらゆうかい）……91
漢詩 汲深錄（二十四）……松井秀人……97
短歌 大隅半島・佐多岬……山本一成……99
戊辰東北戦争④ 最後の旗本榎本武揚……千坂精一……102
古い物・遠い夢 我家の一品……忠内正之……116
吾輩は紙魚ロボである その六……永畑俊三……124
回想 東京都杉並区荻窪の思い出……山本鎭雄……150
―都市は「ふるさと」か―
私の「昭和20年」（5）……山田嘉久……162
―終戦から75年―
「国旗と世界のストーリー」が
書店に並ぶまでの始末記……米村典紘……172
人生他なし忠と孝……浅野博文……180
飢饉とコロナ禍……横山正義……190
安芸門徒シルクロード紀行（11）……村上邦治……193
私の伊達政宗像を訪ねて（その五－①）……安藤剛……222
明治時代の著述者 渋江保の足跡を訪ねて（その一）……山本勉……247
ビタミンA・B・C・D・E……Z……匠克仁……260
編集後記……編集子……274

表紙絵解説「摂理」

田寺　怜葦

今回の表紙絵は理屈っぽいものとなりましたので解説をつけさせていただきました。画題は「摂理」です。

「摂理」の意味を調べますと自然界を支配している法則のこととあります。

生物である私達はこの世の森羅万象の中で生かされていますが、知識欲旺盛な人類はそれらを解明しようと日夜努力を重ねてきました。

コンピュータの出現により世界中が同時に情報共有できるようになり、宇宙の謎までが日々明らかにされています。

また二〇世紀までは考えられなかった遺伝子操作、臓器移植なども可能になり人間の定義とは何なのかと考えさせられたりします。

飽くなき人間の探求心は社会を便利で豊かにしてきましたが、これからもそうなのでしょうか。すでに旧来型のコンピュータに代わる量子コンピュータなるものが開発中と言われています。そして量子コンピュータが開発されればＡＩの誕生が現実化されるようです。

ＡＩの出現は人類にとっての幸せとなるのだろうか。

ふと、アメリカに住むドイツ系移民の宗教集団アーミッシュを思ったりします。

科学の進歩は誰にも止められないでしょうが、人間は自然界の摂理から外れては生きられないし幸せにはなれないように思います。

天才科学者アインシュタインの名言があります。

「宗教のない科学は不完全であり　科学のない宗教は盲目である」

彼は無神論者のように言われていますが、実際には自然界の摂理に神を見い出していたようです。日本人の宗教観と似ているかもしれません。

ここで画の解説となりますが、お釈迦様の後輪のように描いているのは量子コンピュータを記号化したもので、お釈迦様が抱えているものはブラックホール…のつもりです。壮大なイメージばかりが先行して自分の技量が追いつきませんでしたこと恥じ入ります。

天守台を仰いで(一)

三戸岡　道夫

（一）

一九四四年（昭和十九年）（終戦の前年）

山王灘に面した山王市の朝は静かに明けた。ぐっすり眠った町はほとんど動かない速度で、東から西へと徐々に明けていった。

それは四月のある朝だった。

町はまだ朝靄に色濃く包まれて、動かない。朝はやい鳥も飛ばず、空はまだ暗く、夜中の星の名残りが光っていた。町の中央に聳える山王城の天守台は黒々と盛り上った背中を見せていた。

しかし東の空の山際はすでにほの白く明るみ始め、あと一時間もすれば、その山頂からぽっとまぶしい太陽の顔をのぞかせるべく、朝は用意周到に準備されていた。

四時を少し廻った頃であろうか。

朝の一番列車が勢よく喘がりをついて山王駅を出て、一直線に東を目ざして走っていった。窓にオレンジ色の光を灯した一番列車は、まばらな客をのせて矢のように走りながら、重々しい、ずしっとした、そして妙に金属的な鋭いレールの地響を、民家の方に伝えた。

すると突然、列車は、

ピーッ、ピーッ、ピーッ

とけたたましい警笛を発して急停車した。

列車の車輛は何かを引きずると、車体をぎくしゃくさせると、線路の上にぴたりと止まった。

ピーッ、ピーッ、ピーッ

列車は再び警笛を鳴らし、その音は夜の眠りから覚めきらぬ民家の方へ流れていった。それはもの悲しい少年の悲鳴のようだった。未明の警笛は町民を目覚めさせ、その不気味な音響は、普段よりも一時間早く、山王市を

朝にしてしまった。
懐中電燈を片手にした山王駅の駅員が数名、線路の砂利を踏んで列車の方へ走っていった。列車は黒々とのさばるように巨体を地上に横たえていた。汽関車の煙突は、はっ、はっ、はっと真白な濃い水蒸氣を動物の荒々しい呼吸のように撒き散らしていた。あわたたしく車掌が線路の脇を走って、なにか喚いた。客車から飛び降りて物見高く集ってくる乗客を、追っ払っているのだった。
「寄ってきちゃいけない。いけない。邪魔だよ」
「挽いたんですか？」
駈けつけた駅員が息をせいせいさせて聞いた。
「しょうがねえな、全く、朝っぱらから」
車掌はぶつぶつ言っていた。
駅員がさっと懐中電燈で車体の下を照らすと、赤黒い血が一面に散り、その横の方に何か襤褸の固まりのような物が、くちゃくちゃとなって丸まっていた。レールには血と頭髪が混ってべとっと密着していた。そしてもぎ取られた一本の腕が離れた所に転っていた。駅員の一人がその血まみれの肉りを一寸動かそうとすると
「動かしちゃいけない。おい、すぐ警察へ電話をかけろ」
他の一人がどなった。だが、その肉塊の一部を覗きこむようにして
「おい、まだ子供じゃないか」
すると車掌がぶっきら棒に、
「学生だよ、中学生だ」
「自殺かな？」
「そいつは解らねえ」
「運転手に聞いてみろ」
「暗くて解るもんか、そんなこと。それに靄がひどかった。不意にレールの上へとび出してきたんだ。停める暇なんか無かったよ」
列車は屍を二十メートルも引きずっていた。
駅員の一人が駅に駈け戻り、電話を町の中央警察署へ鳴らした。

(二)

この朝の警笛の悲鳴を、日比野正英は蒲團の中で聞いた。
聞いたというより警笛の音で目を覚ましたのだ。まだ外は暗かった。彼は不安になって電燈を付け、また蒲團の中に潜りこんだ。警笛はひっきりなしに鳴っていた。彼はその怪鳥の鳴声のような不氣味な音を、自分の上に落ちかかってくる不幸の音のように聞いた。
隣で寝ていた母親の素乃も、矢張りその悲鳴を聞いていた。彼女はもう息子が学校へ行くために、起きて朝の支度をしなければならないと思っていたところだった。

正英が電燈を捻った時、彼女は息子の方に顔を向けて
「どうしたの」
「何だろう、あの警笛、氣味が悪い、あの音、誰かが挽かれたんだ、また」
「そうかもしれないねえ、可哀いそうに、厭だねえ、本當に」
素乃は起きて朝の支度にとりかかった。正英は母が井戸水を汲む音や、薪を割る音を蒲團の中から聞いていたが、やがて町の一角に起こった事件の余波はこの家にまで波及してきた。きぜわしく家の前を人の足音が往來した。誰かゞ駅の方へ走っていった。隣家の主婦が來て、母と台所の入口で立話をしているのが聞こえた。ぼそぼそとした話声の途中に、母の「まあ」とか、「可哀いそうに」という感嘆詞がはさまった。正英は不安な氣持でその声の方に耳を傾けていた。
雨戸をがらがらと開けると、もう外は明るんでいた。素乃は正英の枕許へぺたりと坐ると、
「正ちゃん、正ちゃん、大変よ」
と肩で息をして、
「沼崎君、沼崎君だよ」
「え、沼崎、沼崎がどうしたの？」
彼は飛び上った。彼の唯一の親友、沼崎武夫。だが一体彼がどうしたというのだろう。汽車に挽かれた？　そんな馬鹿なことが。
「自殺したんだって、今朝」
「自殺?!」
正英の頭は不協和音で混乱した。彼は「自殺?!」と二度悲鳴をあげた。
「朝の一番列車に飛び込んだんだって」
正英の全身には冷水が走った。
「ああ、矢張り。やはり取り返しのつかない結果になってしまったのだ」
と彼は思った。
自殺という言葉が、彼の頭の中をごろごろと岩のように転った。親友の自殺、それが余り突然で、どう解釋してよいのか彼には解らなかった。正英はまだ自分の生命について、また自分の生命（いのち）を自分で断つことについて、深く考えてみたことはなかった。ところが事実の方が先にきた。不意に爆弾が懐の中で破裂した。親友の自殺、自分と同じ年令の人間の自殺、昨日まで机を並べていた少年の自殺、目の前に押しはだかった問題が余りに重大すぎて、一体何処からどう解釋の糸口をひっぱり出したらよいのか、見當がつかなかった。
正英と沼崎武夫とは山王中学校一年生以來の親友であった。入学して二日目に彼等はもう親しくなった。町の中央に聳えている山王城の天守台の上で、彼等は互にその友情を確かめ合った。秋になって近郊の農村へ勤労奉仕に行くようになり、二人が同じ農家に派遣されて、

一緒に稻刈りをしたりすると、ますます二人の友情は深まっていった。爾來、中学四年生の今日に至るまで、二人はずっと同じクラスだった。長い年月をかけて育ててきた友情は、時に少しばかり諍をしても、それで崩れてしまうことはなかった。彼等は何時でも一緒に居た。学校でも、家でも、眠る時でも、二人の心はしっかり結びついていた。その親友が不意に死んだ。それも自殺だ。急に正英の前から居なくなった。

彼の精神の片っ方が無くなった。彼が話しかけようとしても其処にはもう居ない。正英の上には閃光を放って雷が落ちたのだ。悲しみを両手に一杯抱きかかえた雷が、正英の心を隅から隅まで引掻いて引き千切った。彼は嵐の激浪に空高く抛り投げられ、また奈落の底に突落されたのだ。

しかし実際にそうした悲しみが彼の心を襲ったのは後になってのことで、最初に來たのは驚愕だった。まだ悲しみが正英の頭に入る余地はなかった。突如起った「自殺」という異常事件は、彼の中で爆弾のように破裂し、彼の頭を混乱させ、興奮させ、驚愕させた。

だが差当ってそんなことはどうでもよかった。それよりも重大なのは、彼が親友の自殺の原因を知っていることだった。

母の口から沼崎の自殺を聞いた時、彼の頭には最先に昨日の学校での出來事が閃いた。血だらけの親友の身体を、正英は肩にかついで家に歸ってきた。その親友の血なまぐさい重さは、一夜明けてもまだ正英の腕の中に残っていた。

『金剛寺教官が沼崎をなぐり殺したのだ』

それは間違いのない推定だった。

昨日の放課後である。沼崎武夫は山王中学校の配属将校である金剛寺教官から、死ぬほどひどい私刑を受けたのだった。彼は血だらけになり、意識を失い、正英たち友達が家まで運んできたのだった。そのあまりに大きい衝撃が沼崎を自殺に追い込んだのであった。

そうに違いない。そうであることが親友の正英には直観的にピンときた。沼崎に対する金剛寺教官の私刑と沼崎の自殺とは、ぴったり表裏一体となって、正英の頭の中で結合した。それを疑うことは出來なかった。それはせんじつめて言えば、金剛寺教官が配属将校としての權力を濫用して、沼崎武夫を擲り殺したのと同じであった。

正英は蒲團の上に起き上って、昨日のことを思い起した。異常な興奮から身体が小刻みに震えた。

『沼崎、お前、つらかったんだなあ』

正英は沼崎に呼びかけた。

『なぜ俺は昨夜沼崎の側につき添って一晩中看護してやらなかったのだろう、そうすれば自殺しないですんだかも知れない』

素乃は枕許で息子の沈んだ顔を見つめていた。父の鉄五郎も眼を開いて、首を蒲團から持ち上げ、

「武ちゃんが自殺した？　ひどいことをするもんだなあ」

正英は父母の顔を両方一度に見つめた。

「ねえ、あんなになぐられちゃ、誰だって自殺したくなるよ、顔が眞青に脹れて、血だらけだったんだもの、氣を失ったんだもの、あんなにひどくなぐられちゃ、誰だって……、畜生！」

正英は親友の顔を思い浮べた。瞬間、その顔は眞青に膨れ上り、一面に血まみれて引きゆがんだ。彼は金剛寺教官の所へ押しかけて、

『お前が殺したんだ、お前が殺したんだ』

と、教官の首を押さえてやりたかった。だが、そんなことをしたら、正英も同様に殺されてしまうだろう。

母親の素乃は、そんな思いつめた息子の顔が、昨夜歸ってきた時のたゞならぬ顔つきと同じだと思った。

素乃は昨夜、正英の歸りが遅いのを心配して、何回も道に出て、息子の歸りを待った。正英が歸ってきたのはもう夜の八時を廻っていた。正英は眞青な顔をして異常に興奮していた。息子の口から、金剛寺教官の私刑を受けて氣を失った沼崎武夫を、友達と一緒に家まで送り届けてきたのだと聞いた時、彼女はそんな恐ろしい中学校から息子を退学させてしまおうかと思った。長年の彼女の夢が実現して、息子の入学した中学校が、いくら戰時中とは言えそんなになってしまったとは……。彼女は息子が井戸端で、手や洋服についた血を洗うのを手伝った。

しかしその友人が世をはかなんで、鉄道自殺をしてしまうなどとは、彼女は夢にも思わなかった。それは彼女が一度でも、息子の正英が自殺するなど考えたこともないのと同じだった。しかし自殺は現実に起ったのである。それと同じ魔手が自分の息子の上にも伸びてこないとは限らない。彼女は慄然とした。

彼女は自殺した少年の両親を知っていた。

「可哀そうにねえ、親御さんも、折角これまで大きくしたのに。武ちゃんは一人息子だったねえ」

「妹があるよ」

「そうだったねえ、でも妹があってもねえ」

素乃の心の中にそうした同情と同時に、憤りの感情が通過した。

「でも、親御さんは一体何をしていたんだろうね、自分の子供が自殺するのを止めることが出來なかったのかねえ、死ぬほど辛がっている子供を、慰めてやれなかったなんて……」

もちろん素乃にも、若し彼女が実際そのような立場になったならば、一歩おとなの世界へ足を踏み入れようとしている息子の氣持を慰め、落着かさせてやることなどが、できるかどうかは解らなかった。だが彼女ならば、

決して息子を自殺させるようなことはしないだろう。彼女はそれを止めることができただろう。彼女の愛の力は息子の周囲を厳重に見張っていて、息子が死へ歩み寄ることを阻止することができただろうと、素乃は自分の愛の力に力をこめた。

正英は死んだ沼崎の唯一の親友だった。そして沼崎も、正英の唯一の親友だった。だがその正英自身も、沼崎が自殺するとは思わなかった。正英は今までに自殺というものを真剣に考えてみたことなどなかった。それは自殺するほど深刻な場面に彼がまだぶつかったことがなかったからでもあったし、また、自ら自分の生命を断つことができるほど大人ではなかったからでもあった。

そうしてみると沼崎の方が自殺できるだけ、正英よりも大人だったのかもしれなかった。確かに二人の友情には、同学年であるといっても、一方が年上で一方が年下という、一部兄弟のような感情があった。勿論それは表面には現われはしなかったが、時に正英が、沼崎の中に兄のようなものを感ずるのは事実だった。沼崎の中には何時のまにか、正英よりも大人になっている部分があったのである。

彼は正英が知らないうちに、正英の知らない大人の世界のことも、考えることができたのだった。

しかし正英も、知ると知らぬにかかわらず、その未知の世界の中に立っていることは、たしかだった。自殺するのは沼崎一人とは限らない。友の死を介して知った人生への危惧、親友を失った悲嘆、親友を死に追いやった金剛寺教官への怒り、それらがごろごろと正英の頭の中で混乱した。

正英は朝食もとらずに家をとび出し、息せき切って線路の方へ走っていった。駅に近い線路に駈け上り、四辺を見廻した。少し東の方に、それらしい人々が群っているのが見えた。彼はその方に走っていった。

すでに沼崎を挽いた列車の影はなく、駅員と警官が二三人、話したり、手帳にメモしたり、見取図や巻尺で血痕の距離を測定していた。それを少し遠くの方から取巻くようにして、近所の人達や子供達が、変に冷たく親しみのない眼つきで眺めていた。

正英はその人垣を押し分けて前に出た。少し離れた所に沼崎の轢死体は席をかぶって横たわっていた。その席の端から何か紺色のシャツのようなものだけが見えた。

それに近づくことは許されなかった。血痕は地中に水分の大半を吸い取られて、既に半乾きの色で四辺に散らばっていた。人垣の中には山王中学校の生徒も居た。クラスの友達も二人ばかり居た。彼はその友達とたゞ目と目を合せ、互に頷き合っただけで黙っていた。

東の空から太陽が昇り始めていた。山際の雲が白絹の

ように光り、やがてその雲の間に顔を出した太陽の眞直な光線は、レールの上で白く反射して、正英の位置まで届いた。その朝日を受けた銀色のレールの光は、正英の頭の中で、親友の肉体を挽き千切った鋭い衝激音を立てて高鳴った。

『死んでしまった、死んでしまったのだ』

彼は低く呻いた。

彼はレールの上に駈け寄って、席をかぶった血まみれの轢死体を力一杯に抱き、激しく揺って、もう一度その生命を呼び戻したかった。人間の死の重さが、彼の上に雪崩となって落ちかかってきた。

彼は目がすっかり昇ってしまわないうちに親友の屍を片づけてしわまなくては可哀そうだと思った。

だが屍はいつまでたっても手がつけられなかった。

警察官は何をしているのだろう。

彼は歸ろうとした。

すると一人の男が目にとまった。首をうなだれ、肩を落し、瞼を眞赤にして幽霊のような男が立っていた。

沼崎の父親だった。

正英はその方に走り寄ろうとした。しかし男はすっかり放心していた。口だけをもぐもぐ動かして、一夜の中に十年も年取ったように見えた。正英はすぐ駈け寄った。そしてだらりと垂れ下った父親の両手を握った。

「ああ、正ちゃん」

父親はよろめくように正英を見ると、

「死んでしまったよ、ほら、あの通り死んじまった。血だらけになって、ずたずたになって、父親のわしを置いて死んじまったよ」

それは譫言のように正英には聞こえた。

父親と正英は抱き合って、丁度親子のように立ちながら、レールの屍を見つめていた。

（つづく）

食器洗い主夫の「つぶやき（ツイッター）」

新井宏

近頃、妻の体調やコロナ禍の影響で、食器洗い、ごみ出し、買い出し、そして時には、掃除・洗濯も担当している。いわば全て家事単純作業で、慣れない「買い出し」も散歩の合間に「指示書」にしたがってスーパーを巡回して揃えるだけなので簡単である。

単純作業中は、頭の中は無負荷状態なので、素晴らしい「ひらめき」が生じる。いずれも夢の中の「大発見」と同じで、ちょっと経つともう思い出せないような「他愛のないこと」が多い。しかし『まんじ』の題材にはなりそうなものもあるのでメモして置いた。

そして、いざ選ぶ段階になると、どれも単独では物足りない。それならいつもの流儀で「合わせ技」で一本にしよう。かくして「つぶやき（ツイッター）」としゃれてみる。もっとも「ツイッター」には文字数制限があるようだが、御容赦を。

糖尿病内服薬オングリザ

もう四年近く前のこと、妻がいよいよ白内障の手術をするというので、私も世話になった渕野辺病院の眼科で準備を進めていた。そして手術前の検診で「大事件」がおきた。血液検査の結果、血糖値の指標ＡＩＣが一二・三でとても手術などできる状況ではないというのである。

私は若い頃から血糖値が高めで、節食および万歩計と格闘しながら、何とか健康を維持していた。それでも、インプラント実施の際、たまたまＡＩＣ値が八・三と出て、とても抜歯など出来ないと懇意の歯科医から宣告されてしまった。ＡＩＣ値の判定表をみると、記載値が最大一三までで、対応する血糖値が三五〇と出ている。通常これ以上悪い数値はないということである。ＡＩＣ＝八・三の場合は、対応する血糖値が一九〇である。

ＡＩＣが八・三と出た時でさえも一騒動であった。歯科医に対して、インシュリンの使用なしで何とか七以下にしてみせると宣言、三ヶ月後に無事インプラント実施にこぎつけた。歯科医は「そんな馬鹿な」と怪訝な顔をしていた。それほどＡＩＣの値を下げるのは難しいとのことであるが、その経過については、『まんじ』129号（2013年）に誇らしげに「ヘモグロビンＡＩＣ」として披露したことがある。

渕野辺病院から北里病院を紹介してもらい早速インシュリン治療を始めた。インシュリンを使えば血糖値はさがるが、毎日の注射が必須である。下げ過ぎれば、低血糖状態になり生命の危険がある。管理が大変で、一度、インシュリンをつかうと、後戻りできないと聞いていた。

当初は即効性インシュリン注射を一日三回、持効性インシュリン注射を一日一回のペース、さすがに順調にＡＩＣ値は下がる。一ヶ月後には一〇・二、二ヶ月後には七・一、三ヶ月後には六・二を達成し無事に白内障の手術を実施した。

びっくりしたのは、注射を開始してから二ヶ月半後には、早くも一日三回の即効性インシュリンが中止され、持効性の一日一回のみとなったことである。お陰でとにかく楽になったが、内心本当に大丈夫なのか危惧していた。

そしてその持効性インシュリン注射さえも開始から四ヶ月後には、経過が良いので中止してみるという。そうなると、インシュリンの分泌を高める内服薬オングリザを一日一錠飲むだけである。予想外の展開で、もう全快したような気分になった。

そして更に二年後には、そのオングリザの内服さえも中止になった。それでもＡＩＣをほぼ基準内に保っている。想像さえしていなかったことであるが、おそらく高血糖値が慢性化する前だったのが幸いしたのだろう。

その点はラッキーであったが、糖尿病と格闘している最中、足のむくみと共に腎機能の指標値クレアチニン値が上昇し始め、危険水域の一・〇を越えてしまった。このまま上昇が続くと透析が必要となるが、血糖値が下がった効果もあってか今は〇・八を下回り安定している。

幸運が続いていたが伏兵もいた。骨粗鬆症からくる背骨の圧迫骨折による腰痛で歩行が不自由になった。しかしこれも今では痛みも薄れ、家の中は歩行器で動き回っている。

そのような状況のなかで、家庭内における私の役割分担も大きく変わった。従来は庭の草刈り等に限定されていたが、食品等の買い出し、ごみ出し、食器洗いの役割が追加となった。時には掃除、洗濯も担当している。

オングリザは日本国内では七年前から使用されている。糖尿病予備群の私にとって、もし足腰が弱って「万歩

計」方式に頼る血糖値コントロールが難しくなっても「オングリザ」がある。この安心感は何者にも代えがたい。

食器洗い

家事の特徴は、ほとんどが個人作業。結果さえ問題なければ、自己流でやれる。

まず食器洗い。洗剤を使かわず、四二度の温水で洗う。どの程度、油分が取れたかの判定は触感が抜群に優れている。油の付着さえ触感で判るのだから、汚れ分の判定など、眼をつぶっていてもできる。

寒い時に温水を使うのは快適である。まるで「足湯」の代わりに「手湯」に浸かっている感じである。手足は末梢神経の多いところ、冷たいと血管が収縮し、無理に血行を高めるために血圧があがる。おそらく、身体がその感覚を良く知っていて喜ぶのであろう。足よりも手の方が心臓にちかい分だけ、「足湯」よりも「手湯」のほうが快いのであろう。

食器は温水で洗うと洗いカゴに重ねて入れる。普通ならそのまま放置して乾燥させるのであろうが、我が家は何故か食器類の枚数がかなり多いようで、無理して一度に入れると山盛りになる。そのため先に入れた食器が冷えてしまったところに、上の食器から垂れ隊ちる水滴で、また濡れてしまう。そうすると、数時間では乾燥しないので、布巾で拭くことになるが、丁寧に拭いても冷たい水滴がうっすらと表面を蔽っていて乾燥した感じがない。

そのため、温水で洗ったら食器類の温度が下がらぬ内に、布巾でおおざっぱに水滴部をぬぐい取る。まだ温度の高い食器の表面の水分はあっと言う間に乾燥する。この作業結果はなんとも言えない快感である。その時、分厚く重い瀬戸物ほど冷えないので満足感がある。食器棚にしまってからも更に乾燥しているようで気持ちが良い。

イタリアの小さな村

我が家の台所は対面キッチンでカウンター越しに食堂があり、その一番奥にテレビが置いてある。食器洗いの時は、ニュースかスポーツか旅行の番組に合わせておく。ちょっと距離があるので音も聞き取れないし、テロップも読めない。ただし、映像だけは何とか見れる。

一番よく見るのが「イタリアの小さな村」という番組である。そのことは『まんじ』145号(2017年)の「ベニシアのエッセイ」のなかでもちょっとふれた。私たち夫婦はシチリアを含めてイタリアを一ヶ月ほど見て廻ったので、多少の土地勘もあり、妻が最初にはまってしまった。そして、たまたま一緒に見ている内に、これは「イタリア人の生活哲学」を主題とした番組なのではないかと思うようになった。とにかく、千人位の「小さな村」の主

人公たちの語る言葉がどれも、哲学であり詩なのである。

ところが昨年、イタリアがヨーロッパ最初、最大のコロナ震源地になり、日本からのスタッフが入国することなど不可能になってしまった。最初は再放送で、なんとか凌いでいたが、その内に素晴らしいアイディアが生まれた。十年ほど前に放映した人気番組を半分ほど紹介しながら、その後続版をイタリアのスタッフに依頼してつくり始めたのである。

画面にマスク姿が登場すれば最近の撮影だと判る。かつて私と同年配の七十才代だった主人公達、そしてその子供達や孫達が仕事を立派に受け継いでいる趣向の物語が多い。BS日本テレビの長寿番組で毎週土曜日の放送であるが、初回は二〇〇七年で、同一内容を二回繰り返して放映しているので現在は作品としては三三七回である。その上、アンコール放送として日曜日にも放送しているので延べ回数は一三〇〇回を超える。

緊急事態が生んだアイディアであろうが、制作費は大幅ダウンしているに違いないのに、時の流れや現地スタッフの視点が加わり、かえって成功しているように思う。コロナ禍を活かした番組だと評価している。

調理用鍋

食器洗い担当となり、鍋や釜もせっせと洗っている。もともと金属屋なので、金属容器がさびついていたり汚れていると気になる。内外面ともにピカピカにしてひとり悦に入っている。

煮物用の深鍋、味噌汁用鍋、牛乳沸かしなどは、もともと焦げ付くようなことはない。水分が充分にある間は、内面の温度は一〇〇度以上にはならないから当然である。

問題となるのは大型の中華鍋である。外見から職人の手作りらしいのが判るが、鉄鍋ながらかなり高価なもののようだ。内外面共に黒色に光っていて、見た目にはひどい焼き付きはない。しかし、表面を撫でてみると焼き付き部分の凹凸がよくわかる。エスカレーターのベルトに手を触れていると下地が如何にゆがんでいるかわかるようなものである。点字を創出した盲目のルイ・ブライユは、幼い頃、絵本の印字の凹凸をなぞって文字の認識をしたという。網膜は皮膚の光感受性が高まったものと聞くが、触感も進化するとものすごい。

中華鍋は全面黒色になっているので、張り切って磨くが、細かい番手のサンドペーパーでは作業がはかどらない。そのため硬質スポンジに#二四〇、#一二〇の砥粒をまぶした研磨ブロックを買ってきて磨くと、やっとこびりついて黒くなっていた部分から「墨汁」がにじみ出てくる。

書道用の墨は、炭と黒鉛の中間的な材料で、微細な油煙を集めて固めたものであるが、かなり黒鉛に近い性質

をもっていて、硬くて熱伝導や電気伝導にすぐれ金属に近い。類似のカーボンブラックはゴムタイヤの強化材として重量で三割も混ぜられている。だから意外に墨の部分の研磨は手間がかかるが、凝り性なので内面だけで無く外面までキレイにみがき上げた。大きな中華なべも一見ステンレス製のような渋い光沢となり、黒く焼き付いたところはもちろん変色部分も全くない超高級品になった。使うのがもったいないほどの出来映えである。

ところが、実際の使用結果を見ると、どうも以前よりも焼き付きが多いようなのである。そして金属屋なので直ちに気がついた。裸の鉄よりも墨で表面を蔽った方が焼き付き防止にははるかに優れているのではないかと。

一般的に金属というものは、みかけとは異なり、極めて活性の高い材料で、もし表面に酸化保護皮膜を生成しなければ、周囲と激しく反応するのである。だから磨いてしまうと、金属の本性があらわれ、かえって調理材と反応してしまう場合もある。その点、薄く強固に付いた墨は鉄を守ってびくともしない。

その後、中華なべを使う料理人は、なべを拭くだけで決して磨かないと聞いた。しかし、折角磨き上げたので、焦げ付きが出るとまたせっせと磨いて誤魔化している。

実は中華鍋ばかりでなく、フライパンでも失敗した。フライパンはアルミニウム材にテフロン等のフッ素樹脂をコーティングして、油を敷かなくとも炒め物が付かないようにしたものが多い。しかし、なにせ、樹脂なので強く磨くとすり減ってしまう。だからフッ素樹脂に人造ダイヤモンド粉を混ぜて強度を上げたり、接着面がはがれにくい様に表面に凹凸を付けた高級フライパンも出ているという。

それをステンレス鋼の金属たわしでごしごしこすったのだからいきなりアルミ面が露出してしまった。しっかり油を敷かないと焼き付くし、使用後の洗浄も大変である。比較的に安価なものなので、取り替えれば良さそうなものだが、自業自得なので今でも頑張って磨いている。

ついでに金属材料屋として、焦げ付かない鍋について原理をひとくさり。とにかく鍋の温度にムラを生じないように厚くすることである。厚くすれば直火の部分でも厚さ方向に熱を伝える間に、横方向にも熱がながれ均熱できる。そのため厚さ方向には熱が伝わり難く横方向にはよく熱が流れる複合材料（クラッド材）が鍋底には使われている場合が多い。

家にはStaub（ストウブ）というフランス製の調理鍋もある。鋳鉄製で重さが四キログラムもある。底厚は五ミリほどあろうか、ホーロー加工により表面にガラス質の釉薬を高温でやきつけてある。料理材の焼き付きがなく、琺瑯の接着も安定していて、均熱性や保温性に優れ、蓋も重いので圧力釜の要素もある。重いことを除けば、理想の調理器である。十九世紀末に発売され、いま日本でも高級品扱いされている。

ついでに、お肉をうまく焼くには鉄板焼きが一番よいが、ある料理店で机台ほどの大きさの鉄板の厚さを聞いたら十二ミリと言われた。それなら私でも上手く焼けるにちがいない。

相模原高校前の道路拡幅

私の住む相模原市は、旧陸軍の造兵廠や士官学校、病院などを中心にして、相模原の丘陵地に昭和十二年に都市計画された軍都である。市街地の北部を東西に走る国道十六号線は巾四〇㍍、それに直交する市役所通りも巾四〇㍍であり東京都内の最大巾の昭和通りに等しい。中心市街地は、ほぼ東西四〇〇㍍、南北二四〇㍍のブロックに区切られ、その道路幅は大体二〇㍍ほどあり、最小でも十一㍍はある。

我が家の前の東西道路も、幹線道路でもないのに、ブロック区割りに接し、車道七㍍に両側二㍍の歩道がついている。

そこから西五〇〇㍍ほどのところに県立相模原高校、通称「県相」がある。地元での進学高であるが、私達が結婚して相模原にやってきたころは、周辺には何もなかった。「県相」の北面に通じる家の前の十一㍍幅道路が途中から巾一㍍ほどの草道に狭まっていたほどである。

「県相」の敷地はひとつのブロックの西半分を占め、南面を十八㍍巾、北面と西面を十一㍍巾の道路で囲まれている。この学校でお世話になった息子によると、創立当時、県の財政状況が厳しかったとかで、三階建ての校舎はみすぼらしいと言うが、校庭や周回する道路は、歩道も整備され立派なものである。

昨年末のことであった。いつものように散歩していると、「県相」の正門の東面十一㍍道路の拡巾工事の予告が出ていた。つい数年前に再舗装の工事が終わったばかりで、それほど交通量が多いわけでもないのにどうしたことであろうか。

新年明けに工事が始まった。まずは「県相」の周囲を蔽っていた樹木が次々と切り倒されている。拡巾の用地を「県相」が提供するするらしい。丸見えになった白い校舎群は三階建てで中学校用のようにもみえるが、景色には良く調和している。正門横に駐車場の整備が進んでいるが、用地提供の代償なのであろうか。不可解なことで気になった。

歩道の幅が一・五㍍から四・五㍍に拡幅されるようである。そしてやっと工事が、自転車通学の安全対策だと気がついた。

そう言えば、相模原市内各地を散歩している時に、しばしば列をなして歩道を自転車で疾走する高校生群を見かけた。狭い歩道を併走している場合もあり、危険でノ

ンビリ散歩を楽しむような雰囲気ではない。

調べてみるまでもないが、相模原市内には電車通学の可能な高校などほとんどない。電車通学にしても、自宅から駅まで、あるいは駅から学校までは徒歩となるため、時間的な負担は自転車通学より大きくなるのであろう。事実、市内の中心地にある「県相」でさえ、最寄りの相模原駅から一・八キロ、徒歩二十五分、一時間に数本の相模線上溝駅からなら一・五キロ、徒歩二十分の距離である。

市内の東部で比較的に人口の多い小田急線沿線の住宅地から「県相」までは約八キロほどである。自転車通学なら三十分ほどの距離である。大多数の生徒達が雨の日でも風の日でも自転車通学となるのがむしろ自然なのである。「県相」の場合は、始業時間にあわせ千名弱の自転車通学者が正門に殺到するわけである。

散歩しながら、小さな疑問が解けて、ちょっと幸せな気分になった。しかし、歩道拡幅工事のきっかけに交通事故でもあったのかも知れない。今度はそれが気になった。

ファミレスの閉店

コロナ禍の影響で、我が家でも時々利用していた「パンのレストラン」が最初に閉店した。その後も半径六〇〇メートル以内にある大型外食店六軒の内、二軒が相次いで閉店している。いわば半数近くが既に閉店したことになる。

閉店が続くのは大型飲食店ばかりではない。もともとファミレス等の進出の中で、やっと持ちこたえていた個人飲食店が、後継者問題もあり、次々にシャッターを下ろしている。カラオケ店、新興ヘルスジムも壊滅状態である。それに反して、「家族葬」を対象とした「小規模葬祭場」がやたらに生まれている。

変化の激しいのは、スーパーや大型コンビニで、いまや「仕出し屋」となり、弁当売り場、総菜売場はどこでも活況を示している。肉類、魚類、野菜類で賞味期限の近づいた素材を調理して並べているようで、商売としては実に効率的である。従来の飲食店も、座して待つ訳にも行かずテークアウトと称して、にわか弁当屋さんに変身している。その反面で、従来からの弁当屋さんが潰れている。まあ、めまぐるしい。

面白いことに、こんな状況下にあっても、近所に二軒新しく飲食店が開店した。ひとつはドローンのモニター操縦を楽しみながら、もうひとつもジオラマで模型電車を走らせながら食事も採れるアイディア店である。

コロナ禍がこのままずっと続くわけでもない。まったく旧に復することはなくとも、一定の需要が回復するのは確実なのである。ファミレスや旧来の飲食店が消え去る中、新規開店というのは「逆張り」であるが、出店には場所も選べるし、テナント料金も割安で済むだろう。

ちょっと応援したい気分になる。

秘すれば花　マスク美人

「非常事態宣言」発令中なので、流石にマスクを付けないと散歩もできない。出会う人達もおしゃれなマスクを着用していて、もう一種の風俗となっている。

我が家の周辺には、徒歩圏に十軒以上も郊外型スーパーがある。散歩で歩数を稼ぐため、妻の「買い物指示書」に基づき、遠近を問わず歩き廻っている。

店舗により若干の差はあるが、しっかりマスクを着用し、若い女性は髪型やお化粧まで揃えているところもある。一見みんな似ていて、個人の識別が困難になるかとも思ったが、慣れてくると目だけみるだけでもかなり判る。人間の識別能力というのはたいしたものだと思う。

そこで思ったのは、おしゃれなマスクで、鼻、唇、頬など化粧の難しい部分を隠せば、残るのはチャームポイントの瞳、眉毛、髪などで、如何ようにも描けるではないか。さすれば、みんなマスク美人になる。

そもそも、世界の伝統的な女性の衣装は、その最も魅力的な部分を隠すものが多かった。

日本の着物は、身体の線にくびれをつくらない着付けを原則とし、バストの膨らみは帯で締め上げ、ウエストからヒップにかけてのくびれにはタオルで補い、いわば寸胴型に仕上げる。韓国の韓服も、布でバストを締め付けて平らにして、そこから長くゆったりしたチョゴリ（スカート）でウエストとヒップを蔽い、丈の短いチョゴリ（上着）を羽織る。いずれも女性の魅力的な部分を抑制して美を表現しているのである。

ヨーロッパでも、かつて男女ともにスカートをはいていた時代があったと聞くが、いまや男でスカートをはくのはスコットランドくらいである。しかし女性がズボンをはくまでには長時間を要した。やはり身体の線をあからさまに表現するのを避けたからであろう。

そして、イスラム教の聖典コーランは「美しい部分は隠せ」と命じている。これは、美しいところを抑制的に表現するというよりも、文字とおり、美しいところは人に見せぬよう蔽ってしまえというのであるから徹底している。

ヒジャブ（ヴェール）、ブルカ（全身を覆いかくすもの）、ニカブ（目だけ出して顔を隠すもの）、アバヤ（黒い長衣）、チャドル（一枚布で全身を覆うもの）など多様な衣装があるという。

面白いのは、日本には「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず」（世阿弥）という言葉があり、コーランでも「美しい部分は隠せ」との言葉があることである。

世阿弥の言葉は「やたらに見せるな、見せなければ人は花と思う」と言う意味である。一方、コーランの言葉を「美しい部分は見せるな、秘すればみんな平等に美人」と読む

と面白い。一時期、小学校の徒競走で、みんなで手を繋いでゴールし「みんな一番」の方式が流行ったのを思い出す。

乳房を目立たなくする　お尻を目立たなくする　顔を蔽う　これこそ女性の平等のためのアイディアだったのではなかろうか。

いま総務省に対する東北新社の接待問題で、某内閣広報官がニュースに登場する。マスク姿をみて四十代前半の女性と思っていたが、マスクを外した写真は六十才ちかく見える。念のために確認したら六十才であった。やはり「マスク美人」はあると確信した。

日本の「Qアノン」

コロナ禍が始まる前は、週二回ほど都心に出かけていたが、現在はほとんどの会合が中止となり、月に一回あるかないかである。それにともない知人からのメール件数も激減した。会えなければ、むしろメールが増えそうなものなのに、かえって疎遠になる。

その中で、米国大統領選挙の行われた昨年の十一月三日からバイデン氏が正式に大統領に就任した今年の一月二十日までの三ヶ月弱の間に、ある「知人」から三十二通のメールをうけとった。いずれも、一貫して「トランプが勝つ」と主張する内容で、その証拠や資料が添付されている。

投票日のメールは「トランプ大統領の圧勝」を断言するもので、米国内にはトランプ支持を明言しないが、本音はトランプ支持者が多くいるとの内容であった。事実、開票が進むと、バイデン票は世論調査ほどには伸びなかったので、なるほどと思った。

様相が変わるのは、主要メディアが「バイデン当確」を伝えたころからである。

「ニューヨークの元市長ジュリアーニ弁護士が、バイデン側の選挙不正を裁判に持ち込んだ」とか「元米空軍中将が、民主党とCIAの選挙結果操作する内幕を暴露した」とか「裁判所がペンシルベニア州に期日後に到着した投票用紙の別個の集計を指示した」とか「これは共和党と民主党の闘いを超えて、アメリカ本土を戦場とした米中戦争である」とか「中国共産党の壮大な陰謀だ」とか「トランプ陣営、押収のサーバーからデータ入手、選挙不正の根底から揺さぶる情報を解読した」とかまことにぎやかである。

最初の頃は知らなかったが、米国には極右でトランプを熱烈に支持する「Qアノン」という闇の団体があり、米国に巣食うディープ・ステート（陰の政府・陰謀組織）と戦いながら「バイデンの選挙不正」を告発しているという。この辺までのメールは、論拠を確かめようもないので、ちらちら眺める程度であった。

しかしジョージア州でトランプ氏が再集計の結果にも敗れてからはますますエスカレートする。ジョージア州で負けたのは「予定の行動」であるとか、「トランプ氏を退任させるCNNの密謀録音」が流出したとか、「トーマス・マキナニー中将が、トランプ大統領に反乱法を発令し大規模な逮捕を開始するよう呼びかけた」とか、さらには「テキサス州が、ジョージア州、ミシガン州、ペンシルバニア州、ウィスコンシン州を連邦最高裁に提訴した」とか毎日のようにメールがくる。

更にはテキサス州の提訴が簡単に最高裁に却下されてしまうと「トランプは全て予想していて、ディープステートを完全に排除するため、時間をかけて網を張っている」のだと強弁する。

更に十二月十四日バイデンの当選が確定してからも、「もうバイデンの芽がない」とか「八～九割の確率でトランプが勝つ」とか「バイデンが少しずつ追い詰められている」とか主観的な主張が続く。

そして選挙結果が正式確定する連邦議会の一月六日が近づくと、「バイデンのウクライナでの汚職情報を公開して、関連する各国法務機関へ送付する」とか「バイデン家の銀行口座、通話記録について壊滅的な情報を公開する」とか、一段とボルテージがあがる。

しかし彼の期待とは異なり、バイデンの当選が連邦議会で確定してしまうと、こんどは「ペンス副大統領の裏切り」と罵しりながら、「トランプは厳戒令を発令し、ヒラリーや下院議長のナンシー・ペロシ、イタリア大統領、ローマ教皇が逮捕された」とのニュースを流し始める。ディープ・ステート（陰の政府）の本拠地はローマ教皇庁」だという。

ここまでくると誰にでも流石にフェイク・ニュースであることは簡単に確認できる。

そしてバイデンの就任式の翌日一月二十一日、最後のメールが届いた。

「すみません。予想大外れでした」とのタイトルをつけて「皆さんは半信半疑だったかと思いますが、私は恥ずかしながら九十九パーセント確実と思っていました」とありやっと一段落した。

ここまで、必要以上にメールの経過を詳しく紹介してきた。それは、このようなオカルト信奉者が米国のみならず日本にもかなりの勢力を得ていたことを知ったからである。日本のこのようなグループを「Qアノン」になぞらえて「Jアノン」と言うが、マスコミで活躍中の著名人にもかなりの賛同者がいるとのこと。ヨーロッパにおける同様なニュースは目立たない。

明治の頃、地動説や進化論をいとも簡単に受け入れた日本人なので、オカルト的な「陰謀論」とは相容れないとおもっていたが、政治的に左右の立場どちらでもな

い「普通の日本人」を自認する人ほど、陰謀論を信じやすい傾向にあるとの解説もあった。もっとも日本にも「オーム真理教サリン事件」があり、教育ある若者達が主力を担っていた。

「知人」は発想力が非常に優れている。しかし「エネルギー保存法則」さえ、簡単に無視してしまうようなエキセントリックな面もある。そう言えば、ノーベル賞に輝く世界的な科学者のなかにもオカルトにはまった例がいくつかあるという。天才の中には、執着心の強いアスペルガー的な傾向を持つ者が多い。いや、アスペルガー者でなければ、偉大な成果を得られないのかも知れない。

オリンピック…孫子の兵法

東京オリンピックはコロナに始まりコロナに終わりそうである。この状況が続けば日本がどんなに上手く対応しても「負け戦」は仕方がないであろう。孫子の兵法で「三十六計逃げるにしかず」なのである。事実、日本の世論調査でも八割がオリンピックの中止か延期を望んでいる。逃げろ、逃げろ。逃げて逃げまくれ。

しかし日本には「勝算」が無くなった時に「玉砕」を美化した歴史も持っている。何が起きるのであろうか。

二月十九日、菅首相はテレビの先進七国首脳協議で「人類が新型コロナに打ち勝った証し」としてオリンピックを開催する考えを重ねて表明し、会議は「日本の決意を支持する」との声明を出した。

何やら戦意高揚を叫んでいるようであるが、「コロナに打ち勝つ」とはどういう意味なのであろうか。

文脈から言えば、「コロナ感染を押さえ込む」あるいは、「コロナの脅威にもめげず」とでもなるのであろうか。しかし何とも不可解な言葉である。

一年前の二月後半、中国発のコロナ禍が、韓国の大邱や横浜港のプリンセスダイヤモンド号で大ブレークした。当然、地理的に近い日本に対して世界から厳しい目が注がれた。はたして予定通りオリンピックを開催できるかと。

幸いだったことに、日本はコロナ禍の初期段階では、先進七ヶ国に劣らぬ好成績を維持していた。しかしオリンピック主催国としては、感染者の増大をなんとしても避けなければならない。そのため、政府や東京都では、PCR検査を発症者等に絞り、80%近い「元気な感染者」は検査を後回しとしていた。その効果もあって、三月に入ってからも数値上では良好な成績を維持していた。

状況が激変したのは日本を除く先進七ヶ国の方である。いきなり感染者数が一～二桁も急増してしまった。これでは、IOCも日本の責任を問うことなく「一年延期」の決定をせざるを得なかった。ほっとしたのは日本で、やっとPCR検査の「滞貨一掃」に向かうことになった。

一日当たりのPCR検査が千件、五千件、二万件と急増、それにともなって、感染者数も百名、五百名、四千名と急増する。そしてオリンピック延期決定からわずか二週間後の四月七日には「緊急事態宣言」を発令する慌てぶりであった。

結果から見ると延期決定は正解であった。西欧諸国はオリンピックを予定していた七月まで新規感染者数が安定していたが、米国が大ブレークした。米国一国だけでその他の先進六ヶ国合計の二十倍もの新規感染者を発生してしまったのである。

米国が参加しないオリンピックなどあり得ない。

それでは、今回は予定通りオリンピックを開催できるのであろうか。

そのためには理屈として、前回延期を決めた昨年三月のコロナ禍の状況よりも、今年の開催時には新規感染者数が改善されていなければならない。

表1に先進七ヶ国の新規感染者推移を示す。表中に強調文字で示したように、第一波のピークも第二波のピークも先進七ヶ国間でかなり良く同調している。現在、第二波から大幅に改善しつつあることもほぼ共通していて、平均では、ピークから三分の一まで下がっている。

大きな進展であるが、問題はその改善した状態でさえ

表1　先進7ヶ国のコロナ感染状況（人口10万人あたり週間単位で示す新規感染者数）

年	週間	主要な出来事	日本	英国	ドイツ	フランス	イタリア	米国	カナダ	平均
2020	2.24～3.01	コロナ初期状況	0.18	0.05	0.16	0.20	2.8	0.02	0.05	0.28
	3.02～3.22	延期(3.24)の直前	0.2	2.5	6.7	7.3	29	2.6	0.9	5.0
	3.23～3.29	延期(3.24)	0.5	18	50	36	64	30	12	28
	3.30～4.05		1.2	36	**46**	**48**	**53**	57	23	42
	4.06～4.12	1次緊急事態(4.7)	**2.7**	**56**	36	39	46	**66**	25	46
	4.13～4.26		2.6	51	19	23	36	62	**30**	40
	4.27～5.03		1.3	50	10	11	23	60	27	35
	5.04～5.10		0.7	49	7.7	12	15	54	30	32
	5.18～5.24	緊急事態解除(5.25)	0.2	25	5.1	3.9	7.5	48	19	25
	7.20～8.09	オリンピック予定	5.8	7.8	5.1	12	3.3	130	8.3	60
	9.28～10.4	GoToトラベル(10.1)	2.9	75	18	119	24	92	34	62
	11.2～11.8		4.7	237	154	**510**	**368**	223	69	209
	12.28～1.3		19	511	155	143	169	439	131	284
2021	1.04～1.10	2次緊急事態(1.08)	**34**	**620**	**188**	191	**193**	**518**	**180**	**342**
	1.18～1.24		30	386	120	**249**	143	376	108	250
	2.01～2.06		13	199	73	214	138	257	72	170
	2.15～2.21	G7首脳会議(2.19)	8	117	63	200	140	153	53	114
	2.22～3.07		5	79	59	290	184	131	55	114
	3.08～3.21	原稿提出後の追記	7	59	102	257	256	126	62	116
	3.22～4.04		11	49	132	403	243	135	93	136
	4.05～4.09	直近	15	28	137	425	156	140	143	135

強調文字で示した欄は第1次、第2次のピーク時

も、昨年延期を決めた頃の二十倍も新規感染者が発生していることである。

このまま改善が続けばよいが、第二波の低減もここに来て停滞気味である。唯一の希望はワクチン接種が始まったことであるが、オリンピック開催前にどの程度まで接種完了するか、見通しははなはだ暗い。

例えば、最も豊富にワクチンを確保している米国でさえ年内に接種完了できるのは75％だと言っている。オリンピックまでに50％完了するのも容易ではないだろう。

先進七ヶ国の現在の平均有効接種率は15％以下でオリンピックまでに30％に達するのは容易でない。

一方、有効接種率（α）と感染低減率（β）の関係は、ほぼ表2のように計算できる。すなわち有効接種率30％なら新規感染者を二分の一に低減できるが、二十分の一に低減しなければならないのに対しては、全く不十分である。

表2 ワクチン接種率と新規感染者減少率

有効接種率 α	新規感染者減少率 $\beta=1-(1-\alpha)^2$	
10%	19%	1.2分の1
20%	36%	1.6分の1
30%	51%	2分の1
40%	64%	2.8分の1
50%	75%	4分の1
60%	84%	6.3分の1
70%	91%	11分の1
80%	96%	25分の1
90%	99%	100分の1

ワクチン接種に過大な期待ができないのは、世界で最も接種が進んでいるイスラエルの現状を見ても判る。

有効接種率がほぼ50％に達しているが、未だに新規感染者低減の実績はやっと半減にすぎない。とても「コロナに打ち勝つ」ことなど不可能なのである。

そうなると、海外からのコロナを水際で徹底的に防止するしかないが、だからと言って、最初から海外観客を閉め出すのは愚策である。ここは、とにかく厳しい入国制限を提示し、その条件内で大々的に海外観客を誘致することを基本とすべきである。

まず原則として競技者、観客、観光客を問わず、入国者は「抗体維持者であるか、またはワクチン接種完了後二週間以上経過した者」とＩＯＣに提示する。

そのことによって、ワクチン確保に苦慮している国では、競技者さえ送り出せなくなるかも知れないが、その解決はあくまでＩＯＣの任と逃げよう。ついでに観客や観光客の分のコロナワクチンも極力確保して貰おう。

これらの条件によって、海外観客が大幅に減少し、ますます赤字が膨らむとしても、海外のコロナ禍のためだと日本は逃げることが出来よう。

このように、逃げろ、逃げろといっても、ただ逃げるのではなく、攻撃しながら逃げようと言うのである。

ここまで書いたところで、新任の橋本大会組織委員長が早々と「無観客での開催・再延期は考えてない」と声明したことを知った。

世論調査で国民の80％が望んでいる中止や延期を「考えていない」というのはどう見ても傲慢すぎる。

勝算がなくなった時、かつて日本は「玉砕」を美化したことがあった。

我らが同人・瀧沢中氏が昨年末出版した『人望論』に、インパール作戦で「申し訳の玉砕」を許さず見事な「殿軍」を勤めた宮崎繁三郎少将の話が紹介されている。殿軍の役割は、本隊の退却を助けるため、留まっては戦い、戦っては退却し、また留まって戦う、最も困難な役割である。その作戦を最初から放棄するとは何事か。

「逃げろ、逃げろ」というのは、「退却のために戦え」ということでもある。日本側から中止や延期を申し出るかわりに、「ワクチンを確保しろ」といってＩＯＣをゆさぶり、もし外国からの観客が不十分なら国内でも観客を動員するから「収入の上納を免除」しろと主張しよう。

鼻先にニンジンをぶら下げて「Go To オリンピック」を進め評判の悪い「GO TO トラベル」の失点を挽回しよう。

三月三日、ＩＯＣのバッハ会長は恩着せがましく「各国オリンピック委員会に、できればワクチン接種をして東京に来てほしいと要請している」と語った。

「できれば接種をして来て欲しいと要請」とは何事か。日本から先制的に「未ワクチン接種者は競技者であっても入国不可」と通告しなかったからなめられるのである。

ＩＯＣは今回のオリンピックが、「開催」にしろ、「再延期」にしろ、「中止」にしろ、いずれにしても「負け戦」になることを知っている。逃げたいのである。

しかし、表1に示したように、日本の新規感染者は、先進七ヶ国の平均の二十分の一と断トツである。だからこそ、日本はいくらでも強く要求できる。そのことによりＩＯＣがオリンピックを中止せざるを得なくなっても日本が責任を問われることはない。やはり「逃げるにしかず」である。

本稿最初に、菅首相の「人類が新型コロナに打ち勝った証し」の発言について違和感があると書いた。その違和感について、つぶやいている内に、こちらまでちょっとおかしくなりかけた。読み直すと没にしたくなる。

そんなことをしている内に、青沼陽一郎という方が菅首相の国語力を痛烈に批判している記事に出会った。

その記事によると菅首相の「人類が新型コロナに打ち勝った証し」との表現は、英文の公式報告では「新型コロナウイルスに打ち勝つ世界の結束の証し」となっているとのこと。外務官僚が勝手に書き直したらしい。おそらく菅首相はこの英文報告書を読んでいないだろうが。

やっと、この稿も一緒に提出する気になった。

流人

―深堀武士の討入顛末―

太田精一

強い日差しが波間に、キラキラ輝いている。

鳶がゆっくりと円を描き久賀島の上空を舞っている。

風が島の藪椿の小枝をかすかに揺らしている。

久賀島は、わずか三十八平方キロに満たない小島である。島民も五百人ほどで、隠れキリシタンが多い。

志波原羽右衛門は、島の東南に位置する金剛崎の岩に腰を下ろし、東に広がる海を眺めていた。

すると背後に人の気配を感じ、振り向いた。

元禄十四年三月から流人としてこの島に流されてすでに三ヶ月が過ぎていた。訪れる人もまれで、このところ人影を見ていない。そのため、人の気配には敏感であった。

商人風の男が立っている。この島では見慣れない顔だ。

「何か御用でござるか。拙者は、志波原羽右衛門と申す。故あって流人となってこの島に流された。故郷を偲び、こうして海を眺めているところである。お見かけしたところ島のお方ではなさそうだが」

羽右衛門は、見慣れない人物に問いかけた。島役人とは違い、威張ったところがない。

「実は、呉服や小間物の商いに島に渡ってきました。あちこちを歩くうちに、長崎で討入り騒動を起こしたお侍の一人が、この島でお過ごしと、伺いましたので、討入りにまつわるお話を、国元への土産にと思い、こうしておそばに上がった次第でございます。お話し下さいませんか」

島に来てから、流人として疎まれ、島民とも親しく話をすることのなかった羽右衛門が、言葉を交わすのは久しぶりであった。その商人風の男の柔らかな物腰と誠実そうな態度は、固く閉ざした羽右衛門の心を次第に開いて行った。

（拙者は、この島で朽ち果てることになろう。武士の意地と誇りを懸けて戦ったあの討入りも、やがて世間から忘れ去られてしまうかも知れない。何故、深堀武士は、死を覚悟してまで騒動を起こしたのか。そのことを少しでも多くの人に分かってもらい、後世の人に伝えたい）

そう思った羽右衛門は、重い口を開き、事件の顛末を語った。

一、泥濘のいさかい

元禄十三年（一七〇〇）十二月十九日、長崎にはめずらしく雪が積もった。前夜来の雪が、長崎の街に薄化粧を施し、そこはかとなくなまめかしい風情を漂わせている。

佐賀鍋島の支藩深堀領主鍋島官左衛門家来深堀三右衛門と志波原武右衛門の二人は、雪見かたがた同僚の喜多佐左衛門の結婚式の祝いの品を買うために、深堀から長崎に出てきた。

本博多町の天満宮坂に差し掛かった時、二人の中間風の男と出くわした。いずれもしたたかに酩酊している。雪が融け、道はぬかるんでいた。

深堀三右衛門と志波原武右衛門は、足を取られまいと用心しながら坂を下り、上って来る酔漢を避けようと道の端に寄った。

その時、三右衛門の足が窪みにはまり、よろけるはずみに泥を撥ね、酔漢の一人の着物を汚してしまった。三右衛門は六十九歳、武右衛門は五十九歳の老人で、動作が鈍っている。

「やい待て。何の恨みがあって俺に泥をかけた」

酔漢の一人が、酒臭い息を吐きかけながら詰め寄って来た。

二人は、長崎西浜町の町年寄高木彦右衛門の中間である。泥をかけられた男は、惣内と言って、飲むと人に絡みたくなる悪い癖があった。

「これはまったく粗相をいたした。何分にも年を取っていることゆえ、足元がおぼつかない。誠に申し訳ない。お詫びいたす」

三右衛門は、辞を低くして謝った。

「いや、このまま帰すわけにはいかない。俺の着物をどうしてくれる。このままでは、主人の高木彦右衛門様の前にも出られやしない。俺の着物に泥をかけるということは、主人の着物にかけたのと同じだ」

惣内は、高木彦右衛門の権威を嵩に着て喚き散らしたのである。

長崎で町年寄と言えば、町の行政を実質的に支配する行政官の役割を果している。町年寄は、有力な商人が選ばれ、当時七人いた。この制度は安土、桃山期の堺など、町民自治の伝統を受け継いだものであった。

高木彦右衛門は、元禄元年（一六八八）四月、家を継いで町年寄となっていた。同十年十月には唐蘭商売元締、同十三年には、江戸で代物替会所頭取となっている。苗

字帯刀を許され、切米八十俵を幕府から貰っている身分であった。浪人を抱え、使用人は百人にも及んでいる。使用人たちは、高木家の権勢を嵩に、長崎奉行支配下の役人を除いて、長崎周辺の武士たちを軽く見ていた。

だが、権勢を誇る高木家の評判も長崎の町人の間では良くなかった。

一方、深堀領主鍋島官左衛門は六千石。佐賀藩の代官として長崎御番に当っている。

深堀は、長崎港の入り口にある。入港の船が、深堀の前を通過する時には、敬意を表し、帆を下ろして通るのが通例となっていた。帆を下ろすことにより船の速度が鈍る。その間に、深堀から小舟を出し、積み荷の一部を入港税のように受け取っていたのである。高木家では、そのことを快く思っていなかったので町年寄の名のもとに長崎奉行に手を回し、この慣例を廃止させた。深堀武士にとっては、収入源が減ったことから高木家への鬱憤が溜まっていた。

「これだけ謝っても許せぬとあれば、身共にも覚悟がある」

三右衛門は、武士の面目を潰され開き直った。

その言葉が、惣内の激昂をさらに煽ることになった。大きな声で怒鳴る惣内の声を聞きつけた周りの人たちが集まり、人垣ができた。

見かねた町衆の一人が飛び出し、居丈高に騒ぎ立てる惣内をなだめ、三右衛門と武右衛門の二人を五島町の鍋島御番、深堀屋敷に送りつけた。

惣内は、しぶしぶその場を立ち去った。だが、高木屋敷に帰っても怒りが収まらない。ことの顛末を仲間に語った。それを聞いた仲間は、日頃の深堀に対する鬱憤が爆発した。二十人ばかり徒党を組んで、深堀屋敷に押し掛けたのである。

「さっき俺に泥をかけ、恥をかかせた野郎を出せ。武士なら武士らしく出てこい」

そう言って屋敷内に押し入り、土足のまま部屋に上がりこんだ。

屋敷には、折悪しく三右衛門と武右衛門の二人と数人の使用人しかいなかった。二人は、刀を取って応戦しようとした。

ところが、武右衛門の抜き放った刀が、天井の梁に刺さり抜けない。彼は、刀を梁から抜こうと焦った。その隙をついて、数人が襲い掛かり、武右衛門は、押さえつけられてしまったのである。

三右衛門も庭に出るところを石につまずき転倒し、取り押さえられた。不覚にも、二人とも刀を奪われてしまったのだ。

「この刀は、貰って行く。悔しかったら取り返しに来い。だらしない腰抜け侍だ。ざまあ見ろ」

そう捨て台詞を残し、高木勢は立ち去った。

この知らせは、飛脚によって、すぐ深堀にもたらされた。深堀は、長崎半島西側、長崎の街から海沿いに、十二キロほどの距離にある。

「すわ一大事。たとえ町年寄とはいえ、町人の分際でけしからん。このまま引き下がっては、深堀武士の名折れである」

志波原、深堀、両家の親族、隣人たちが集まって談合し、高木屋敷を襲い、刀を取り返すことを誓いあった。

三右衛門の妻スギは、十七歳の息子に、高木屋敷襲撃に参加するよう諭した。

「三右衛門殿は、年も年であり、転倒して手足も不自由であろう。その方、命を惜しむな。決して怯んではならぬ。必ず敵を倒すよう母は祈っている」

集まった親戚や、隣人たちは、これを聞いて一層結束を固めた。

十人ばかりの一団が、第一陣となって白装束に身を固め、長崎五島町の深堀屋敷に駆けつけた。次いで第二陣が、やはり白装束に白脚絆、顔も白い綿布で包み、同屋敷に向かった。

寒風が、吹きすさび肌を刺す。暗い海に雪が舞っていた。

二、討入り

「これだけの恥辱を受けて黙って引き下がるわけにはいかない。支藩といえども、鍋島藩の葉隠士魂は持ち合わせている。命を捨てても武士の面目を貫こう」

深堀屋敷に集結した第一陣は、高木屋敷にすぐ討ち入ろうと主張した。

「まあ待て、高木屋敷に討入りすれば、全員死罪は免れまい。それだけでは済まぬ。御公儀のお考え次第では、深堀鍋島家お取潰しにもなりかねない。長崎奉行に訴え、張本人の二人を死罪にするようご裁可を仰げばよいのではないか」

家老たちは騒ぎが大きくなり、主家の取潰しにまで発展することを恐れた。

「それでは、深堀武士の面目は丸潰れとなり申す。屋敷を土足で踏みにじられた恥辱は、末代まで消えることはありませんぞ。深堀武士は、腑抜けだと世間から語り継がれてもよいと言われるのか」

親戚一同の討入りへの決意は固かった。

刀を奪われた深堀三右衛門と志波原武右衛門は、ことの重大さに責任を取るべく切腹の覚悟を決めている。だが、屈辱にまみれて死にたくはなかった。せめて高木邸に討入り、相手と刺し違えても無念を晴らそうとしたのである。

評議の結果、討入りと決まった。

三石衛門と武石衛門は、第一陣の十人と共に高木屋敷の門前に立った。

東の空が明るく陽が昇り始めている。

「われらは鍋島家の家来でござる。昨日、貴家高木家の家人衆が主人屋敷に大勢して踏込み、乱暴狼藉を働いた罪許しがたい。その連中をここに差し出し願おう」

「ただ今、主人留守中で帰り次第お知らせいたす。ひとまずお引き取り下され」

門番は、血相を変えた一団を見て怯え、門を開けようとしなかった。

痺れを切らした若い喜多佐左衛門が、塀を乗り越え門を開いた。

「無体な。何をなさる」

門番は、屋敷内から門を開けようとする佐左衛門に後ろから抱きついた。

佐左衛門は、肩に抱き着く門番を振り払い、突き離して、首筋から肩口にかけて切り下した。

「ギャー。深堀の侍たちが屋敷内に乱入しました。お出会い召され」

門番は、倒れながら大声で屋敷内の家人たちに呼びかけた。

それを聞いた高木家の家人たちは、眠い目を擦りながら、深堀勢を迎え撃った。だが、決死の覚悟で侵入した深堀勢にはかなわない。

そのうち第二陣も到着した。高木勢は、次第に切りたてられて、主人の高木彦右衛門の居間にまで後退した。

襖を蹴破った三石衛門の息子嘉右衛門が、高木彦右衛門に切り付け、左腕に深手を負わせた。逃げようとする彦右衛門を喜多佐左衛門が追い掛け、後ろから袈裟懸けに刀を浴びせた。

「ウワー」

彦右衛門は、血潮にまみれ、虚空をつかんで倒れ、こと切れた。

あちこちで行われていた戦闘も、主人の彦右衛門が討ち取られたと聞いて雇われ浪人たちは四散した。彦右衛門は討ち果したものの、跡継ぎの彦八は、残っている。

深堀武士たちは、佐賀藩の長崎代官たる深堀屋敷を預かっていながら、その屋敷を土足で踏みにじられた責任を感じていた。その恥辱を晴らすためには、高木家の存続が許しがたかったのである。

屋敷内をくまなく探したが、彦八は見つからない。女中部屋に隠れていたことが、後になって分かった。

「御家中の方々のお力添えをいただき、拙者を辱めた惣内や乱暴者を退治した。その上、日頃町年寄の身分を嵩に着て専横の振る舞い目に余るものがあった高木彦右衛門を討ち果すことが出来申した。跡継ぎの彦八を取り逃がしたことは、いささか心残りであるが、最早これまでと存ずる」

三石衛門は、感謝の涙を流しながら討入りを決行してくれた一同に謝辞を述べ切腹した。それを志波原武右衛門が介錯した。

武石衛門は、刀を収めるとその首を羽織に包み、その場を立ち去った。浜町の大橋まで来ると通り掛かりの人々に向かって大声を上げて叫んだ。

「鍋島支藩深堀の家臣志波原武右衛門、無礼きわまる高木家当主彦右衛門を討取った。町衆を騒がせ申し訳ない。よって拙者は、この場で腹を切る」

そう言い残して見事に切腹したのである。

討ち入った武士たちは、長崎の深堀屋敷に引き上げ、奉行所に事の顛末を届け出た。

長崎開港以来の大事件である。町中、この噂でもちきりであった。

長崎は、町人の町であるにもかかわらず高木彦右衛門が討たれたと聞いても同情を寄せる者は意外と少なかった。

「あげん中間を威張らせて放っておいた主人も悪か。主人も主人ばってん使用人も使用人たい」

高木家の専横は、目に余るものがあり、使用人の乱暴は町でも手を焼いていたのである。

届け出を受けた長崎奉行所は、蜂の巣をついたような大騒ぎとなった。江戸表に飛脚を立て、幕閣の判断を仰ぐことになったのである。

三、幕府の裁断

元禄十四年（一七〇一）三月二十一日、深堀武士たちへの裁断が下った。

深堀領主鍋島官左衛門にはお構いなし。討入り一番手のうち深堀三右衛門と志波原武右衛門は、すでに切腹しているのでそのまま。残る十人についても切腹。討入り二番手の九人は、五島列島に流罪となった。

一方、高木家側は、高木彦右衛門が殺害された時、逃げ出した息子の彦八は、不届きであるとして家財、屋敷没収のうえ長崎五里四方外に追放となった。加えて、京都、大坂の在住を許さず、家名断絶。また、浪人を含む使用人九人が死罪となった。結局彦八は、天草に移り住み、そこで一生を終えたと伝えられている。

幕府裁定は、祖法に基づく喧嘩両成敗であった。

長崎の街では、深堀武士への同情が集まり、処分の決まる間、討ち入った十九人に対し、差し入れの品が後を絶たなかったという。

切腹は、裁断の下った同日の三月二十一日五島町の深堀屋敷で行われた。

夕刻から始められ深夜までかかった。同夜九つ（午前零時）過ぎ、十人の遺体は、深堀に運ばれ、丁重な葬儀が営まれた。

深堀三右衛門と志波原武右衛門は、騒動を引き起こした張本人であるという咎により家名断絶となった。残る十人の切腹した武士についての家名断絶は、免れている。

五島列島に流罪となった九人の深堀武士は、一つ島で暮らせるよう嘆願したが許されず、福江島、久賀島、宇久島と離れ離れに流されることになった。

翌三月二十二日、長崎湾は、凪いでいた。港を包み込む山々も春を迎え、新緑が日に染みる。青空に白い雲が漂っている。大勢の町人たちが遠島になる深堀武士を一目見ようと大波止の周りを取り巻いた。

船に乗ると、手鎖がはずされた。役人たちも見送る家族たちの思いに応え、咎人扱いにしなかったのである。

三月二十七日、五島列島最大の福江島に着いた。六日間にわたる船旅であった。五島家の家老白浜久太夫が出迎えた。大庄屋塩谷惣右衛門の家にひとまず落ち着き、翌日からそれぞれ定められた配所に送られた。

語り終えた羽右衛門の目に涙が浮かんでいた。羽右衛門は切腹した芝原武右衛門の甥である。

「まことに有難うございました。またお会いすることもないかと存じますが、このお話に、私も大変勇気づけられました」

商人風の男は、深々と頭を下げ、含みのある言葉を残し、島を出た。

その翌年の暮れ十二月十四日に、さらに幕府を震撼させた大事件が発生した。播州赤穂の浪士四十七人が、吉良上野介屋敷に討入り、見事主君の仇を討ったとの風聞が、この最果ての小島、久賀島にも届いた。

「なんでも吉良屋敷の討入りには、深堀事件を参考にしたという御仁がいるそうだ。敵と味方の区別がはっきり分かるように火事装束に身を固め、合言葉を使っていた。また、討ち入った途端に弓の弦を切り払い、槍を捨てている。それに火災を防ぐため、部屋の火を消し、障子、襖を取り払った」

そうした噂がまことしやかに伝えられたのである。

志波原羽右衛門が、久賀島に流されて一年が過ぎた。家族と離れ、知人もいない島での暮らしは、耐え難いほどの孤独感を羽右衛門の心に植え付けた。小屋に一人で、ぽつんと座っていて思い出すのは、故郷の妻や子のことばかりである。時折、独り言をつぶやいて、うつろな目で外を眺めている姿は、島民たちの哀れを誘い、同情を集めた。疎ましい存在であったはずの羽右衛門もいつの間にか島民の一人として認識されていたのだ。

「かわいそうに。いつも一人でいる。よか女子（おなご）でん世話せんば」

島民たちは、世話役に相談を持ちかけた。世話役は、代官にそうした島民たちの声を伝え、妻を持つ許可を求めた。

咎人には妻を持つことは許されない。だが、深堀武士は、流人とはいえ犯罪者としての扱いではなかった。

領主五島大和守は、流人全員に妻帯を許した。近くに住む娘や後家がその対象となった。

流人といえども武士である。島民の中には、進んで娘や後家を娶わす者もいた。そのためか、流人となった深堀武士の中には妻帯する者が、次第に増えてきた。

だが、羽右衛門にはその気はなかった。お仕着せのような妻を娶る気にはなれなかったのだ。島には、故郷に残したような妻ほど情愛深く、それでいて凛とした美しい女子はいないと思い込んでいた。

ところが、ふとしたことがきっかけに、しまという女子と知り合うことになったのである。

四、現地妻

しまは、この島で生まれた。実家は、半農半漁の島人で、隠れキリシタンである。彼女は、同じ島に住む漁師の若者と十八で結婚した。新婚生活を楽しむ間もなく、わずか一年で、夫は漁に出て帰らぬ人となってしまった。

実家に帰ったしまは、両親の手伝いをして五年が過ぎ、二十四となっていた。

「お前も連れ合いをなくしてから五年になる。どこでんよか人がいれば、嫁がせようと思っとったが、適当な若者ば見当らん。お前さえよかなら、あの流人の志波原様のところに嫁いだらどげんか」

実家は、今や兄夫婦の代になっている。出戻りのしまは、次第に自分の居場所が狭くなっていると感じていた。

（このままいつまでも実家に居座るわけにはいかん。ばってん志波原様がどんなお人かわからんば、嫁に行くわけにもいかん。敵討に力を貸してお咎めを受けたとば噂されていなさる。どげんお人か一度見てみたか）

しまは、思い切って羽右衛門の小屋を訪ねることにした。

裏山の藪椿の茂る山道を登って行くと、頂上に出る少し手前に、わずかな平地があった。雑草に囲まれたその土地に、ぽつんと一軒の小屋がある。しまは、その小屋に近づき、崩れた土壁の隙間からそっと中を覗いた。

薄暗い部屋の中で、羽右衛門は、じっと目を閉じて座っていた。

「誰だ」

外に人の気配を感じた羽右衛門は、身構えた。髪は伸び、髭茫々で、頬はこけ、目だけが異様に光っていた。近寄り難い空気が部屋の中に漂っている。

しまは、一瞬たじろいで、土壁から目を離した。一呼吸おいてから勇気を出して話しかけた。

「あのう。こちらにお住いのお武家様が、何かとご不自由されているのではなかかと案じ、獲ってきた魚を届けよと、父が言よりましたので、持ってまいりました」

「流人の身、お気遣いには及ばん。しかし、折角山道をお運びくだされたこと故、そのままお持ち帰り頂くのもかえってご迷惑なことであろう。何もお返しはできないが、有難く頂戴いたす。ただ、今後は、くれぐれも気遣いご無用と父上にお伝え頂きたい」

羽右衛門は、戸を開け表に出た。眩しそうに細めた目は、外から見た目と違って優しそうで、寂しげであった。

しまは、羽右衛門の薄汚れた体から滲み出る孤独な影を、自分の行く末と重ね合わせていた。

（こん人のために、何か出来ることをしてあげたか）

家族の中にあって、寂しさを感じていたしまは、愛情を注ぐ何かを求めていた。羽右衛門への同情と共感が、その対象となったのである。

しまは、時折、羽右衛門の小屋を訪れ、煮物や魚を届けることにした。

初めは迷惑そうにしていた羽右衛門も、次第に打ち解け、しまの来訪を心待ちにするようになっていた。

しまも、小屋に食べ物を届けるだけでなく、汚れ物の洗濯、部屋の掃除など家事を手伝ううちに、羽右衛門が見かけとは違って、情愛深く、心優しい一面を備えていることが分かって来た。単なる愛憐の対象から、男性としての羽右衛門を意識するようになり、それがやがて、恋心へと変わって行ったのである。

湿った強い風が南から吹き付ける八月の蒸し暑い夜、しまは、羽右衛門の夕食の支度をして帰りが遅くなった。

雨が激しく降り出してきた。雷の光が闇を切り裂くように走る。雷鳴が轟き、小屋を揺すった。

「しま殿。今夜は、嵐になりそうだ。もし、よかったら泊まって行きなさい。親御さんから何か言われたら拙者が謝りに行く。どうしても帰るというなら、送り申そう」

羽右衛門の言葉を聞いてしまは、外の閃光が体の中を突き抜けるように感じた。次いで来る雷鳴が身を揺すり、デウスが、羽右衛門と共にこの小屋で一夜を明かすよう命じているように思った。

「はい。そうさせて頂きます」

か細い声で答えたしまは、薄い布団を取り出し、羽右衛門の床を作った。自分は、板敷の上に着物のまま横になり、羽右衛門の羽織を掛布団代わりにした。

閃光と激しい雷鳴に、しまは身を縮め、じっと耐えている。

そのけなげな姿を見て、羽右衛門は、たまらなく愛しさを覚えた。しまを布団の中に引き入れ、強く抱きしめた。

しまは、抱かれるままに身をゆだね、羽右衛門の愛撫に応えた。

昨夜の嵐は、まるでなかったように朝の光が差し込んで来た。二人は、その光に目をさまし、体を離した。だが、心はすでに強く結ばれ、離れがたいものとなっていた。

羽右衛門は、しまを妻にしたいと、両親に申し出た。両親に異存があるはずはない。しまも、羽右衛門の妻になることを望んでいるという。そのことを知って、両親は、心から喜んだ。羽右衛門は、早速島役人に妻を娶る許可を求め、日を経ずして裁可された。

羽右衛門は、しまを妻に娶り、夫婦仲睦まじく、二人の女の子にも恵まれた。島での幸せな暮らしに満足し、故郷のことはほとんど思い出さなくなっていたのである。

五、赦免

八年の歳月が流れた。宝永六年（一七〇九）将軍綱吉が没し、家宣が、六代将軍となった。元禄の世は、綱吉と共に終焉したのである。

さしも権勢を誇った柳沢吉保も失脚し、新井白石が登用され、幕政の大改革が行われた。

新将軍家宣の代になって、五島列島に配流された深堀武士たちもご赦免となった。

宝永六年（一七〇九）八月、長崎奉行を通じ五島大和守への達しが届き、同年九月、帰国のための船が用意された。

流人たちは、晴れて故郷の土が踏めると喜んだ。だが、島の妻子たちにとって、それは悲しい別離の知らせであった。

「羽右衛門様と一緒になって七年余り、二人の娘にも恵まれました。どげんしてもお国に帰りなさるとならしかたなか。お留めすることは出来ましぇん。ばってん、私たちを連れてってくんしゃい。今更別れるのは嫌ですけん」

「こらえてくれ。わしもここに留まることを考えた。しかし、故郷に残した親兄弟にも会いたい。会って、志波原家の行く末を見届けねばならぬ。お前たちを連れて帰りたいのは、やまやまなれども、ご法度によってそれはかなわぬ。この島に残した子供たちの成人を見届けるために、また引き返してくるから辛抱して待っていてくれ」

羽右衛門は、断腸の思いで島を離れる船に乗った。しまと二人の娘は、いつまでも岸辺を離れず泣き崩れ、船の見えなくなるまで見送った。

穏やかな日差しが秋の海を照らしている。船は、しま親子の思いを断ち切るように東の海に消えて行く。

九人の深堀武士たちは、一旦、福江島に集結した後、六日間の船旅を経て、長崎に着いた。

ほとんどあきらめかけていた夫や倅が戻って来たのである。出迎えた家族たちは、再会の喜びに肩を抱き合い泣き崩れた。

羽右衛門も出迎えた妻子と共に深堀に帰った。深堀では、親族が集まり、祝宴を開いて、羽右衛門の帰還を歓

迎した。

だが、羽右衛門の心は、複雑に揺れ動いている。家族との再会を喜ぶ気持と久賀島に残した妻子への想いが、絡み合って手放しで祝膳を楽しむことが出来ない。注がれる盃に久賀島の妻や子供たちの顔が浮かび、これまでにない苦い酒となった。

羽右衛門は、酒が盃に注がれる度に、目を閉じて一気に飲み干し、心の痛みを断ち切るのであった。

秋風の立つ頃である。久賀島に一人の旅の僧が渡って来た。

志波原羽右衛門が赦免されてから、半年後のことである。僧は、黙々と雑草をかき分け山道を登って行く。その先には、かつて羽右衛門の住んでいた流人小屋がある。

僧は、雑草の中に、今にも朽ち果てそうに残っている小屋をひと回りして、しばらく様子をうかがっていた。

もはや住む人もないことを確かめた後、人口の前で手を合わせ、人家のある方に歩いて行った。

「ちとお尋ねします。あの流人小屋にいた人は、どうされましたか」

僧は、山裾の島民の家を見つけて訪ねてみた。

「はい。しばらく一人で住んでいました。一年ほどして、こん島の後家を嫁に貰い、子まで出来て、幸せに暮していなさった。ちょうど半年ほど前に、ご赦免となり、お国に帰られたとです」

「それはよかった。ご赦免になって国に帰られたか。してそのご内儀とお子さんは、どうされたのじゃ」

「そいが、女房子供は、島を出ることはならぬとのきついお達しで、泣く泣く島に残りました。今は、二人の子供と三人で、わずかばかりの土地を耕して暮らしとります。なんでもあんお方は、お国に奥様と子供がおありなさるとのことですけん、こん島に戻ってくることはなかですばい」

「左様であったか」

旅僧は、深くため息をつき頷いた。

僧は、かつてこの島を訪れ、志波原羽右衛門に、深堀武士討入りの様子を、根堀葉堀聞いたことのある商人風の男である。

男の名は、寺坂吉衛門と言い、赤穂浪士の一人であった。

足軽の身分であった吉衛門は、大石内蔵助の命を受け、討入り後、密かに吉良屋敷を抜け出した。彼は、諸国に散った義士たちの家族や親戚縁者を訪ね、討入りまでの一部始終を伝え、残った金を貧困にあえぐ遺族に配って歩いていたのである。

八年ほど諸国を経巡った後、吉衛門は、大石内蔵助との約束を果たし終えたことに満足していた。

（内蔵助様の命じられるままに志士たちの思いをそれぞれの家族に伝えた。この上は僧となって、残る人生を全

うしたい）

そう考えた吉衛門は、諸国を行脚するうちに、ふと久賀島に流人となっていた志波原羽右衛門を思い出したのである。

（そうだ。志波原殿に一言お礼を言わねばなるまい。吉良屋敷討入りの成功は、あの御仁から、深堀武士の討入りの模様をこと細かく聞き、それが手本となったからじゃ。今頃どうしておられるか。配流の無聊をお慰めしよう）

そうした思いに駆られた吉衛門は、矢も盾もたまらず、再び久賀島の土を踏んだのである。

だが、すでに志波原羽右衛門は、ご赦免となり、国許に帰っていた。

吉衛門は、残されたしまと子供たちが哀れでならなかった。日々の暮らしにも困っている様子である。

女手一つで二人の子供を抱え、ひたすら夫との再会を夢見て懸命に生きている健気な姿を見ると吉衛門は、放っておけなかった。

（しばらくこの島に留まって残された家族を見守ってやりたい）

仏門に入ったせいであろうか、慈愛の心が湧いてくる。

それに吉衛門は、この島が気に入った。

あまりにも多くの死を見届けて来た彼には、世俗から遠く離れたこの島の自然の生活は、安らぎであったに違いない。

吉衛門は、島の恵剣寺という小さな寺の寺僧となり、住職が他界した後、その跡を継ぎ、同寺の住職として天寿を全うした。

しまと成人した二人の娘に看取られながらの穏やかな旅立ちであった。その顔は、すべての苦悩と煩悩を飲み込む慈愛にあふれ、優しい微笑みさえ浮かべていた。

しまは、二人の娘を嫁に出した後、廃墟となった流人小屋を時々訪れ、隠し持ったマリア観音像に、羽右衛門との再会を願っていた。そんなある日、強い夕立に遭い、小屋の朽ちた庇に身を寄せているうちに、心臓発作に見舞われ、人知れず天国に旅立った。

羽右衛門は、深堀に帰還して数年後、胸を病み他界した。病床にあって、しまとの約束を果たせなかったことを詫び、島に残った子供たちの行く末を案じての最後であった。

（完）

本稿は、平成二十四年五月一日発行の「まんじ」百二十四号に掲載された「流人」に加筆、訂正を加えたものである。

杉森孝次郎のこと

松下壽男

何年前のことだったろう。「おとき」とよんでいる毎月の読経にやってこられた菩提寺の住職が、深蒸しの粗茶をすすりすすり「檀家の杉森家からは大学教授が出ておる」と話をなさった。何でも憲法起草に関わった大学者だという。「へえ、そうですか」と、その時はえらく感心はしたものの、私はその後すっかりと忘れてしまっていた。

実は、私は、そのときすでに、杉森孝次郎と出会っていたのであった。日本国憲法起草の立役者に目される鈴木安蔵を中心に描いた映画や新書本のなかに当然杉森幸次郎は登場していた。しかしその孝次郎と、檀家仲間の杉森家とが結びつかなかったのである。それは、読経の名残か、住職の「憲法」という渋味が効いた発声が、大日本帝国憲法を想起させてしまっていたからだろう。

だから、コロナ禍で家にこもりがちになった昨年、本の整理の合間に新書本を読み返して、日本国憲法草案成立の陰の功労者である杉森幸次郎が、我が家から一キロメートルも離れていない杉森家の出身であり、目と鼻の先にある母校の小学校の大先輩であることを知って、年甲斐もなく興奮してしまったのだ。

この興奮は、おそらく、半径一〇キロメートル以内に住む人にしか伝わらないものだろう。なぜなら多かれ少なかれ郷土愛を前提にした興奮だからである。

散歩に出て南の小高い連山が目に入れば、幼い日の杉森孝次郎も眺めたものだと感じてしまう。この街道を彼もまた歩いたのだと踏みしめる。それは空想ではなく実感である。この実感は、かけがえなく尊い。学校の道徳教育でも、郷土愛は、道徳的価値の一つとして大切に扱われているのだ。

郷土に偉人を発見した私の興奮は、久しぶりに、本当に久しぶりに私を物書きにした。読者は興奮が伝わる範囲で十分である。その実感はやがて地域を超えて普遍化するはずだ。

こうして私は、母校の小中学生が道徳の時間に語り合うための資料を書き始めた。

南山杉森孝次郎

道徳資料　小学校六年生　四－(七)
　　中学校　　四－(八)

焼け野原の東京でわずかに残ったビルの一室に、七人の民間人が集まりました。四十代から七十代、それぞれ本や新聞雑誌を舞台に、社会や政治や哲学を論じてきた文化人でした。

「一番の年下ですが、明治の自由民権運動時代の民間憲法案をこつこつと研究してきた鈴木安蔵君に、この会のまとめ役をお願いしてはどうでしょう。」

「賛成」

「ではみなさん、この会では、自由平等の精神の元で、会員中一人でも異議のある条文はのせないことにいたしましょう。」

「異議なし」

戦争の間、自分の考えを思うように表現することができなかった彼らは、ほとばしるように議論を始めました。その会は「憲法研究会」と名付けられました。十五年間も続いた戦争に負けてアメリカを中心とした占領軍に支配されてしまった日本に、自分たちの願う憲法案を作り、新しい国の形を表現しようというのです。

昭和二十年（一九四五年）十一月、人々はもう戦争はこりごりだと感じながらも、これからの国の姿がどうなるのか、だれにもわからないころでした。

この憲法研究会の七人の一人が、杉森孝次郎さんでした。

孝次郎さんは、明治十四年（一八八一年）、静岡県小笠郡の河東村に生まれました。

河東村が高橋村と合併して南山村になった年は、「大日本帝国憲法」が全国に広められた年でした。憲法を持つことによって、日本は一人前の国家になりました。とはいえすべての国民の安心安全を支えるだけの福祉の力も、人権の考え方も、その憲法には備わっていませんでした。人々はそれを互いの支え合いで補いました。

小笠郡では村々に報徳社が作られました。毎月常会で話し合って、子どもも総出で共同で田植えをしたり、お祭りで豊作を祝ったり、人々の日々の暮らしは村という社会と共にありました。近くの渡の地区に、双松学舎という、二宮金次郎の教えを中心に学ぶ青少年の学校も生

まれました。孝次郎さんは、社会の動きをびん感に受け止めながら、生き生きと南山尋常高等小学校で学んでいました。

勉強のよくできる孝次郎さんを、ぜひ自分のあとつぎにしたいという人物が現れました。少しはなれた加茂村の白松六治郎という医者でした。孝次郎さんは、十二才の時、白松家の養子になり、東京の予備校で必要な学力を身につけてから、医学専門学校に入学しました。

都会に出た孝次郎さんは、いっそう勉強にはげみました。しかし村の暮らしのような助け合いもなく、電灯がかがやくビルのかげで、病気のせいで自由に歩けなくなった親子が物ごいをしているような光景を見ると、心を痛めました。

（どんな名医が居たところで、あの親子の病気を治すことはできないだろう。親子にお金がない限り。それは旧舎でもおんなじことだ。村人にも手術代や高価な薬代を出し合うゆとりはないからだ。じゃあ、どうしたらいいのだろう？）

孝次郎さんの関心は医学をはなれ、社会や道徳について深く考えるようになっていきました。英語も夢中で学びました。外国の文化を直接学び取ることができると、そこには新しい考え方が広がっていて、生涯をかけて学んでいきたいと思うようになりました。

孝次郎さんは医学の勉強をやめ、東京の早稲田大学文学部へ入学し、二十五才で卒業した後は「早稲田文学」の記者になりました。当時の記者は、号を名乗るものでした。幸次郎さんの名字は、白松です。（さて号は？）と考えて思いをはせたのは、ふるさとの村でした。孝次郎さんは、記事に「白松南山」と署名をしました。

その翌年には、大学で教える立場になりました。学者になった孝次郎さんに、もう医者になる意志がないことを知ると、白松家は養子のえんを切りました。とはいえ六治郎は、杉森の名字にもどった孝次郎さんの東京での活やくを目を細めて見守り、「徳」として自まんしていたそうです。

孝次郎さんは三十二才から六年間、文部省の特別留学生として、ドイツやイギリスで学びました。そこから世界に向けて、英語で研究の成果を出版しました。その書物は、アメリカの大学で教科書に採用されました。日本でも若手の学者が翻訳して「道徳的帝国の原理」という本になりました。

帰国すると、孝次郎さんは哲学の教授になりました。多くの学生を育て、本や雑誌を通して全国の読者に大きな影響を与えました。英語で書いた論文を海外に向けて発表しました。

しかし戦争が、初老の孝次郎さんの心を苦しめました。孝次郎さんの研究テーマの一つ、安心安全の人権を保障する社会国家の考え方が、安心安全とは正反対の戦争

を続けるために利用されていったのです。しかも戦争は、もう止められる状態ではありません。負ければ国民の人権がどうなるものかわかりません。孝次郎さんも、わが国の正義をうったえて、読者を勇気づけることしかできませんでした。

昭和二十年（一九四五年）八月一五日、日本が負けて戦争は終わりました。

憲法研究会は三回の会合で「憲法草案要綱」を完成させました。十二月二十六日に、鈴木代表と室伏氏と孝次郎さんが、できたばかりの「憲法草案要綱」を首相官邸にとどけ、政府の憲法改正に生かしてほしいと念をおしました。そして記者室に寄り、新聞記者を通して全国に向けて発表しました。

さらに孝次郎さんは、一人でＧＨＱへ向かいました。ＧＨＱとは、そのころ日本を占領支配していた連合国軍総司令部です。孝次郎さんは、「憲法草案要綱」を手渡し、案にこめた思いを直接英語でうったえました。ＧＨＱの担当者たちは、その案を熱心に読み込んだうえ上官に伝えました。

やがて、政府の憲法改正案が世に出ましたが、憲法研究会の意見は、ほとんど生かされていませんでした。

ＧＨＱは、政府の改正案を全く認めませんでした。さらに政府に対して代案を示してきました。政府の委員会はＧＨＱの代案をもとに新しい憲法案を作ることになりました。

このような産みの苦しみを経て、昭和二十一年（一九四六年）三月六日に、政府は、日本国憲法の原案として「憲法改正草案要綱」を発表しました。

翌朝の新聞にのったその原案を一気に食い入るようにして読み終えた孝次郎さんは、驚きと喜びで声も出ませんでした。そこには、憲法研究会が「憲法草案要綱」にこめた願いのほとんどが生かされていたのです。

（これこそわたしの憲法だ。でもこれを作ったのは、わたしではない。憲法研究会の七人でもない。われわれは民間人にすぎないのだ。ならば日本国憲法は、だれが作ったと言うのだろう？）

早春の青空をながめながら孝次郎さんは思いをはせました。

孝次郎さんは、その後もしばらく大学教授を務めました。深く学生を愛したそうです。国の形を示した後に、この日本を大きく大きく成長させるのは学生たちだと信じていたのでしょう。

講義に向かう廊下で、かけこんでくる学生のくつ音を聞くと、孝次郎さんは立ち止まってふり返り、お先にどうぞと軽くぼうしを取ってこう言ったそうです。

「後進に道をゆずる。」

私は次のような文章を添えて、その資料を日頃親しくしている母校の校長に手渡した。

この資料を授業等でご活用くださる先生方へ

「南山杉森孝次郎」は杉森家の菩提寺である法谷寺住職石田辰芳師（前菊川市副市長）、「駒沢大学総長になった小僧さん」（この資料は今後『まんじ』に寄稿予定）は、正林寺住職後藤道照師の校閲をいただいております。

どちらもそのままで読み聞かせたり、児童生徒が読んだりできるように作成しましたが、一時間の道徳授業で扱うには長すぎるかもしれません。ぜひ先生のお考えで鋏をいれてください。

田中良昭老師の資料は、社会科でシルクロードについて、杉森孝次郎さんの資料は、日本国憲法について学んだ後がタイミングかと思います。また二つとも八月十五日が登場しますので、平和教育の一環として、その近くに扱うことも可能ですね、夏休みの短い今年なら！

この資料は、諸々の記録にもとづいて、松下が作成しました。著作権は主張しませんが、研究のネットワークを広げる目的から、ご活用の際はご一報をいただければ幸いです。

令和二年五月三日

そして未だに一報は届いていない。

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

宅建士「花山聖司郎」の事件帖
地霊の怒り

葵州月

戦略会議

もう朝が来ているようだ。

今朝は窓の外を飛びまわるスズメのさえずりが特に喧しく不快に彼の鼓膜に響いてくる。

花山聖司郎、三十六歳、州英不動産株式会社、本社、横浜市中区馬車道。第一営業課長、宅地建物取引士。K大学法学部卒業と同時に同社へ入社し、十四年目になる。

軒を飛び交うスズメのさえずりが邪魔に感ずるのは聖司郎の肉体にとって睡眠不足だけのせいではなかった。

昨夜の「タカオビル買収」戦略会議が原因だった。

不快感を呼び起こした会議室での出来事が脳裏に強烈なパンチを浴びているようにフラッシュバックしてくるのだった。

「チュッ！とかチェッ！」とスズメの鳴き声のような舌を鳴らす癖をもった常務の丸尾裕一との対立だった。

「チュッ！この物件の担当はキミでは駄目だ！富山課長に担当を替われ！チェッ！」

あの丸尾常務の怒りを含んだ発言は胸を痛撃した。

あの怒りは何処から発生しているのだろうか。学生時代、アンガーマネジメントの講座を取っていなかったことが今、悔やまれる。ある学者の深層心理によると、怒気が起こる前提として愛情、寂しさ、不安、困惑、恐れがあり、怒りの表現はその二次的な感情であると言われているのだが、彼の場合、愛は感じない。従って愛からくるものではなく、自己の利欲に固執した期待感の困惑から起こるものか、恐れ、不安が絡み合っているのだろうと分析してみたが、いずれにしても汚物を浴びたような不快感はぬぐえなかった。

あらゆる業務に対して正義心を通してきた彼にとっては納得のいかない屈辱的な「担当替え」の命令だった。

尊敬し信頼し合っている直属の上司、営業部長、田丸謙二郎も花山をサポートすることはなく無言だった。

夕刻から開始した戦略会議。

州英不動産株式会社、第一会議室。

配布された資料に「タカオビル買収企画書」のタイトル、買収金額二十三億円の買付証明書、重要事項説明書、添付された公図、建物図面、現地案内図、固定資産税評価証明書、登記事項要約書等が閉じこまれている。

彼は田丸営業部長から一週間前に指示を受けて、現地を外部から確認、急遽重要事項説明書の法的要件等を調査し作成したのだった。

〈極秘物件だから外部に一切悟られないこと〉が条件だった。

「では第一号議案に入ります」

資料を開く音が夕刻の会議室に響く。

「花山課長、物件の重要事項を説明してください」田丸営業部長から指名を受ける。

既存の建物がある不動産については法的な基準はクリヤーしており問題なくこれらを含めて順次各要素を述べ報告した。

しかし、花山は契約まで持っていくのは時期尚早であると、考えていた。

「結論としてはこの案件は、現時点では極めて不明な要素があります。再度、売主本人の意思確認を含めて調査する必要があります」

会議の雰囲気は一変した。

「チェッ！どういうことだ！」

常務、丸尾裕一が花山を苦苦しい目で見て問う。

「現在、所有者の高尾紹子に直接連絡が取れておりません。また面接の確約も取れていません。所有者は九十一歳の高齢者であり売買契約の意思、行為能力があるという確認が必要です。媒介している不動産コンサルティングと称する行政書士の対応にも問題があるような気がします」

「小沼君のことかね？」

「そうです」

「チュッ！キミね、小沼君がこの案件を極秘で持ってきたんだよ。まだ他社が何も知らない処女案件だぜ。この物件の相場は四十億をくだらないと言われている優良物件なんだよ。大多社長は今夜は出席されていないが、契約を急げ、と、オレに全権を委任されている！チェッ！わかっていないね！」

「ですが・・」

高齢者との不動産取引では昨今、取引をした後に至って契約価格や売却意思の錯誤を理由にしたトラブルが多発していることを知っていた。この案件は宅建法上のハ

イリスクも想定されるケースなのだ。

「小沼君と一緒に来た弁護士の早川伊久磨先生と売主の代理契約をされており、売却依頼書を見せて貰い、オレは間違いが無い案件だと確信しているよチュッ！」

「それはわかりますが敢えて小沼行政書士に対して、直接高尾様にお会いしご挨拶をしたいと申し入れていますが・・小沼氏は頑なに面談を拒否されています」

「そのとおりだよ！ダメだよチェッ！内々に独占的に進めている話で、外部に漏れたら契約は解除になると、小沼君からクギを刺されているんだ、チュッ！」

花山が主張しているコンプライアンスが理解されていない。

謙虚に常務にお願いしてみよう、と、

「常務から小沼行政書士にお願いして頂くわけにはいかないでしょうか。売主様に直接、面接の時間をいただければ確認できるわけですから」

「わたしを信頼しないのか！チェッ！花山はわたしにケチをつけるのかい！チェッ」

「そのような意図はありません。わたしは不動産取引の基本を守って事前の調査をすべきだと申し上げています。申し訳ありませんが、不動産の縁をただ利益の目的だけで判断することはリスクを伴います」

「チュッ！利益を上げてどこが悪いのだよ！この物件で儲けてどこが悪いんだよ！企業は利益を上げていかなといと、やっていけない。この不動産の取得は千載一隅のチャンスなんだぜ！チュッ！県会議員の三瓶さんにはこの物件を取得したのちに、この土地を高層誘導地区に指定を受けるために行政庁の指定を受ける段取りもできている。そうなれば土地の価格は倍になる」席を立ちあがって花山の前に来ると充血した目で「この当社創業以来の高額利益を失ったとき、キミはどうゆう責任を持つというんだよ！このままでは済まないからな！チェッ！」

会議場の雰囲気は凍り付いたままだ。

常務の剣幕に怯えたように寒々とした時間がすぎてゆく。大方の者は無言で俯いたままだった。

田丸部長は腕を組み顔を天井に向けて瞑目している。

花山は不動産取引の原点を田丸部長に教わったことを思い出していた。

「天が創造した大地は人間が生まれる以前から存在しているんだ。人間だけの大地ではないんだよ」目の前の蕎麦を箸の先で指して「この蕎麦も土地からのめぐみ、真っ白に咲いた蕎麦の花を知っているだろ！一所懸命咲いて実をつけていく。この大地が万物に与えている営みを忘れてはいかん」

更に、

「すべての物には命がやどり、大地はその営みを万物に平等に与えてくれているんだ。人間に許されたその大地の一部は、われわれが天から預かっているだけなのだよ。

人間の利欲だけで取引をしてはいけない」
この天理は守らねばならないのだ。

この間、丸尾常務の胸中は、
花山の表情を観察し彼の「翻意」を待っていたのかもしれない。
しかし、花山は常務に屈することはできなかった。
やがて丸尾常務が重々しい口調で発言した。
「いつまでもバカな議論はやめよう！チュッ！理想論では会社は生きてゆけません。キミは今回のプロジェクトからは外れてくれ！これ以上キミが勝手に動いて、この契約が壊れた場合、会社は大損害を被ることになる。チェッ！」
営業部長の田丸謙二郎は一言も述べずに書類に目を落とした。
部下の野本修一郎主任も彼の傍で眉を吊り上げて怒りを我慢しているように見えた。
組織社会では仕方がない。上司の権限に逆らうことは会社を辞める時だ。
忍従あるのみだ。
会議に出ていない他の部下もこの戦略会議が終わるまで花山を待っているに違いない。会議の成果を持ち帰れない、花山は無性に寂しく、情けなかった。

不動産取引とは、ひとの縁によって法によって定められた「ただしい道筋」で「許された目的」に従って「一定の期間」「処分、利用、収益」をするために「権利と義務」を必要とする人や企業に繋ぐ、手助けをする事業なのだ。
このポリシーを田丸部長から教えられ、花山は部下にも指導してきた。
しかし、田丸部長は何故か、その席上では彫像のように静止したまま無言だった。
窓の外では明滅するネオンだけが動いていた。
「どんな手を使っても、あの物件は手に入れろ！田丸部長！花山みたく、チェッ！きれいごとばかり言っていては金儲けはできんよ！花山の後任は富田課長にする。田丸君！富田を呼んで来い！花山は富田に事案を早急に引き継げ！チュッ！」
突然呼ばれた富田は怯えたような表情で、田丸部長の後ろから入室すると、丸尾常務が担当替えを富山に告げた。
「わかりました。ありがとうございます」猫背をさらに折り曲げて応令した。
富山は常にイエスマンで通している男だった。上司に反論することはない。半面、部下には厳しく、反論もさせない。
「わたしは宅建上を持っていませんが・・・」

「チェッ！それは毎年合格できないキミ個人の問題だろうが！チュッ！当社には宅建士はほかにもいるではないか！重要事項説明書は既に完成しているから、キミから他の宅建上を指名して、形式的に説明させろよ。キミの仕事は行政書士の小沼君に協力して売主の高尾さんと早く仮契約をしなさい。資金はすぐに用意できるね、経理部長！」
「用意はできています・・・」
経理部長の坂下が小声で答えた。
「金儲け、金儲け！それがすべてだよ！チュッ！チュッ！」
この部屋には意地の悪い雀が飛んでいるな！
花山聖司郎は舌を切られた童話のスズメを丸尾常務に重ねて見ていた。
くやしいがポリシーの違いだ！
事実、丸尾常務の取引では価格競争だけで実績を上げてきた事例が大半であった。
高値で買い、安値で売る。利益がマイナスになることもあった。
大多社長はそんな常務に逆らうことはなかった。おおらかさを持った大多社長ではあるが、むしろ丸尾に遠慮しているような素振りさえ花山には見えることがあった。
何かふたりの間には隠れた確執があるのだろうか。
今回は特別に不明朗な処分に、二人の関係にも不信感を感じている。
取引の基本を無視してなりふり構わず契約を急ぐ。なぜだろう？
選ばれた優越感に浸る富山課長と眉根にたて皺を寄せて三角眼で花山を睨む丸尾常務の顔が脳裏から離れなかった。

放火殺人事件

そして
「お父さん！時間ですよ！」
妻の咲代が呼ぶ声で聖司郎は正気に戻った。
夢ではない。これが現実だった。
不快な気分だったが出社をしなければならない。
ベッドのサイドテーブルに置いたスマホを取る。
時刻は八時を回っている。
いつものようにショートメールとラインを確認する。
情報は何も来ていない。
落ち込んでいても始まらない。これも天から与えられた試練なのだ。組織社会の一員である限り我慢して許された仕事を続ける、これもまた仕方がない。
二階の寝室へ上がってきた妻が窓のカーテンを開けた。
快晴だ。
チュン！チュン！と軒からスズメが飛び立つ。

「いいお天気よ！お父さん、まあ！富士山がきれいだわ！早く起きて！」

ピンクのセーターに前掛け姿の咲代が聖司郎の腕を引っ張った。

引き寄せられた胸に顔をつけて「いい匂い・・・」咲代を引き寄せる。

「あ～ん、ダメでしょう、いまは・・バカね」

鼻先を手で塞ぎ「会社におくれるわよ！」身体を離すとウインクを残して階下に降りてゆく。

ガウンを装い窓からの景色を見る。

春霞がたなびく丹沢山系の向こうには白雪を被った富士山が麗雅に輝いている。

手を合わせたくなるほど神神しい姿だ。

こんな日の丹沢の山々はまるで富士を鎮座させた座布団のように見える。

横浜市の某丘陵地、別称「富士見ヶ丘」と謳われた分譲地の一区画。

「大地は万物のためにある。人間だけのものではない。人間に許される土地の利用、開発は天道に愧ずるものであってはならない。人類や動植物に謙虚であるべきだ」とする企業哲学を社是にした崎口茂を会長とする株式会社立華物産グループに山林の地主、熊谷甚右衛門が感銘し、同社に売却した経緯がある。

このポリシーの生かされた建物付き分譲地は自然と融合した快適な住まいとなった。

このプロジェクトは三年計画で公園、公共施設エリアを充実して二五〇区画を開発、宅地分譲し即日完売したのだった。

花山もこの分譲販売に携わった一員だった。

特に花山聖司郎は秋から春先にかけて、富士山を見ることが出来る、この立地が好きで分譲に応募（提携住宅ローン付き）して当選、昨年春、この地に移ってきた。

その朝も彼は寝室を出ると二階のバルコニーから富士山に対峙した。

二礼二拍手して、神社参拝と同じように富士山に拝礼をする。

朝の風景は昨夜の苦苦しい気分を少し和らげてくれた。

「正義は貫かねばならぬ！」

不動産の利権、利欲が複雑に絡み、悪質な罠が仕掛けられて不動産詐欺事件が多発している現実を認識はしてはいた。

近々でも大手住宅メーカーやホテル事業の会社が数十億の詐欺にあったニュースは知っている。

振込詐欺も不動産詐欺もメディアによって認識されていても度々繰り返され被害者は後を絶たない。

「なぜだろう！」

拝金主義、人間の利欲が業となっているせいだろう。

昨今は倫理、道徳観が欠如している時代だ。不動産に限らず、オレオレ詐欺、銀行のキャッシュカード詐欺、架空商品取引詐欺、知能犯による事件が続発している。

すべては人間の幼少からの倫理、道徳教育の欠如が原因だろうが・・・。

その原点は本来の自由主義とはかけ離れた「放任主義」を教えた戦後教育のせいでもあるだろう。

しばらくして、

バルコニーから離れて階下の庭に降りると何時ものように門柱の郵便受けから新聞を取り出す。

太陽の光を受けた庭の白梅も彼の鼻腔に甘い芳香を漂わせてくる。

「梅一輪一輪ほどの暖かさ」服部嵐雪の句を口ずさむ。（芭蕉の弟子だ）

「ホントに春の兆しをあたえてくれる名句だよ！この庭に根付いた梅の樹に感動するなあ！」

その数輪の白梅に瞬間胸にわだかまった胸の異物が取れたような気がした。

「オッ！」

一瞬にして暗雲が消えて清々しい気分に変わった。

いまは丸尾常務の陰湿な陰も消えていた。

「わたしは私の主義を貫く！すべて正攻法で行く！正義、至誠あるのみだ」

冬萌えのつぼみの中で咲いている数輪の白梅を後にして彼は玄関に戻った。

新聞を持って朝日が射しこんでいるリビングに入る。

「おはよう！」

聖司郎の好きな爽やかなＢＧＭ（ショパン）が流れている。

妻の咲代の気配りだ。

「はい！だんな様！コーヒーが入っているわ！」

昨夜から顔に出ていた仕事上の悩みを見抜かれていたのだろうか、明るく振る舞う咲代の笑顔にも救われ今は無上の幸福を感じている。

「庭の梅が咲いたよ。見たかい」

「もちろん！見えるわよ、キッチンからも。白い梅の花がほころんできたのね。その向こうに富士山！今朝の景色は素晴らしいわ！」

「さすがに富士見ヶ丘さ！この土地の縁は良かったね。田丸部長やタチバナグループのみなさんのお陰だよ」

湯気の立つコーヒーを手にして新聞を開いた。

「沙樹はもう学校へでかけたの・・・」

コーヒーを手に、新聞を見ながら呟くように妻の咲代に問いかける。

「もう、部屋から出てくるんじゃない。今日は学期末テストだって！」

「そうか！大変だなあ」
コーヒーの香りと苦みを味わいながら小学校六年生の娘の沙樹の様子も妻に確認している。これも彼が一日をスタートするルーチンワークのひとつだった。
「また学校変わるの、イヤだ～」
浦和市からこの地へ転校してきていろいろあったが、ようやく友達もできて学校にも慣れてきたようだ。どこの地でも順応してゆく力を持たせることも大切な親の教育なのだ。
勿論、妻の咲代のお陰だと納得して、いつのまにか平穏な日常に戻って内心ホット胸を撫ぜおろしている。
いつものように政治面から社会面の新聞の見出しを追いながらゆっくりコーヒーを啜る。
「おとうさん！スープが冷めるわよ！新聞はあとにしたら！」
妻の咲代が決まって声をかけてくる。
「うん」
それ以上答えることもない。黙って香ばしいトーストサンドに手を出す。
沙樹が二階の部屋から降りて来た。
「行ってきま～す！」
直接玄関に向かい学校へ出かけてゆく。
「行ってらっしゃい！車に気を付けてね！テストが終わったら横浜西口、交番の前よ！間違わないでね」
咲代が声をかけて沙樹を送る。
「うん！わかってるヨ！」
横浜西口って、何なのだろう。
新聞越しに顔を玄関に向けて沙樹の後姿を追う。
笑顔で指を丸めて咲代にオーケーサイン。
可愛らしいふたりのシグサにこころを癒される。
でも、今朝も、
「お父さん！行ってきま～す」と、
（沙樹は最近は言わなくなったなあ）
最近は不平も言わないし不満顔も消えてホット胸をなでおろし気にすることもなくなったのだが、いつの間にか娘に無視されているような気分になり、少し寂しい気がする。
これも課長になって以来帰宅は遅いし、朝食時間も合わなくなってしまった。
不動産会社の休日は火曜日だけ。土日は休日の不動産探しの顧客に対応するため特にいそがしいからだ。
その因果か、
いつの間にか食事の時、新聞から目を離さないナガラ族になってしまい、何を聴かれても「うん・・ああそう」としか答えなくなった自分のせいかもしれないのだろう。
仕方がない。でも咲代と沙樹が明るく仲よくやっている

様子に何にも代えられない幸せな気持ちになっている。
Hには出さないが、このふたりこそ自分にとって一番の宝物だと認識しているし、愛しいと真から思っている。自分は誰にも負けない幸福者だと思っている。
三面記事の中段、「夜半に火事、行方不明者多数」の見出しが目に入るが、その時、同時に目はテレビ画面も追っていた。
画面はモーニングショーを報道している。
「オヤ!!」
「横浜で昨夜十一時ごろ火災が発生しました。この火災で男女多数が逃げ遅れて不明の模様です。はっきりした犠牲者の数は現在消防、警察が捜索中で不明です」
映像は燃えて噴き出す炎に向かって放水している消防士、ビルの各窓から炎や猛煙をあげる模様が映し出されている。
「現場は横浜市中区にある集合ビルで二階のカラオケボックス付近から爆発音と同時に出火、顧客や従業員、男女合わせて十数名が逃げ遅れて煙にまかれた模様です。出火原因に不審なところがあり、県警は放火の可能性も視野に入れて調べをすすめている模様です」
「タカオビルだ！」
愕然（がくぜん）として聖司郎はテレビの画面を追っている。恐ろしい火災事件が身近で起きている。あの窓の炎の中は灼熱地獄だろう。黒煙に巻かれた者は有毒ガスで生命を絶たれていることだろう。
それが見慣れた建物「タカオビル」で起こっているのだ。衝撃が身体中を走り皮膚は泡立っていた。
自分は今どう対応すべきか。
人命が失われた遺族は突然、激しい悲しみにくれる。仮に咲代や沙樹が事件や事故に巻き込まれたら・・・そんなことは考えたくもない！が、現実になれば復讐を考えるだろう。
その時、
リビングのカウンターに設置した固定電話からリズミカルな待受け音楽が響いてきた。
「はい！花山（かやま）ですが」
妻の咲代が応答を始めている。
「いつも大変お世話様になっております。はい！お蔭様でみんな変わりはありません！」
テレビのモーニングショーを意識して他の紙面記事を読み進めながら聖司郎の耳は妻の電話にも注意している。
（早朝から妻のＰＴＡ関係のママフレンドだろうか）
「沙樹もいま学校へ出かけたところです。はい、ありがとうございます。部長様の皆さまにはお変わりありませんか・・・あ・・・はい、居ります。いま変わります！」

ブチョウと言った咲代の言葉を耳にして初めて聖司郎は新聞を卓上に置いて目を妻の方に向ける。
「あなた・・田丸部長さまから・・・」
彼は立ち上がるとカウンターに置いた真紅のシクラメンの鉢植えの傍に設置している受話器を妻から受け取って耳に当てた。
「はい！花山です。おはようございます！昨夜はお疲れ様でした」
「おう！おはようさん。見たか！今朝のテレビを！」
「はい！見ました。驚いていたところです。あの古いビルですから・・有毒なガスや煙に巻かれて犠牲者がでたようで・・お気の毒ですね・・」
「そのビルの三階のクラブで飲んでいた一人がさ！新東洋開発の河北社長だよ！自宅へ帰っていないんだよ！」
「ええ！どうして！」
また花山の皮膚は泡立ってきた。
「今さっき、金丸副社長から電話を貰ったのさ！昨夜(きのう)あのビルの例の三階のクラブで金丸くんが、例の行政書士、小沼氏らと一緒に飲んでいたようだ。金丸くんは途中で帰って無事だったと言っていた。小沼氏も無事で、河北社長が今もって連絡が取れていないらしい」
「小沼氏と飲んでいた？河北社長が！奇妙な組み合わせですね！」
「裏があるようだな・・・丸尾常務は知っていないだろうさ・・」
昨夜の会議で無言を通した田丸部長の真意を聞いてみたかった。が、いまはそれどころではない。
「それでだな、キミは社に入る前に、現場を見てきてくれないか。金丸君も現場へいるようだから、詳しい情報を掴んできてくれないか」
このビルの担当は丸尾常務に外されていたのだが、
「わかりました！詳細を出来るだけ調べてきます。わたしも放火だとすれば大事件に発展するような予感がしています」
「昨夜の丸尾常務のことは忘れてくれ。オレはキミを外してはいないからな」
「ありがとうございます」
信頼関係は崩れてはいなかった。
更にテレビはラグビーワールドカップの報道に移っていた。
「ワンチーム」「ワンチーム」で勝った！を繰り返している。日本の選手が一丸となって強敵のアフリカチームに勝利したこと報道していた。
「正しく当社もワンチーム」にならねばならないのだが。
「別件ですが、川崎の契約はどうしますか？」
立華物産グループの新規の開発分譲計画仮名「川崎ホープタウン」の一部用地の仲介を新東洋開発と合同で

する予定になっていた。
新川崎の元倉庫用地五百十九・七六㎡を買主であるデベロッパー、株式会社橘物産の子会社タチバナハウジングへ移転する土地建物の売買契約であった。
売主は横浜市中区、有限会社鶴亀商店、代表取締役、鶴田源之助。仮登記をつけている。
担当部長は田丸だが、指示を受けた宅建士の花山聖司郎が事務手続きについては一切を任されている。早急に手配をしなければならないが、事実をまず確認しなければなるまい。この物件が「タカオビル」の関係者、不動産コンサルタント、行政書士、小沼夢次と深い因果関係があることはこの時点では分かっていない。
「今日も帰りが、遅くなるかもしれんな」
聖司郎は妻の咲代に言って玄関に向かう。
「お気の毒だわ、あの社長さんね？」
咲代が眉根に皺を寄せて言う。
「女性におモテになる有名な社長さんでしょう？」
咲代は過って夫婦で橘物産の創立四十周年のパーティーに招かれた時の光景を思い出して言っているのだろう。河北社長が美人のコンパニオンを巧みな会話で口説いていた様子を見て嫌悪感を覚えていたのだろう。それを思い出しているのかも知れない。
「亡くなったの・・・ご家族のことを思うと胸が痛くなるわ」
「そうだね、ともかく現場へ行く」
「気を付けてね、そうそう！きょうの午後、わたしと沙樹はヨコタカでデートなの！」
横浜西口の高島屋のことだ。
「そうか、沙樹も間もなく卒業式だったな、この春から中学生だなあ・・・」
「そうなのよ、中学指定の制服を合わせに行くの、夕方の時間が合ったら、あなたも合流してほしいな。あの特別食堂で夕食を食べれない？」
「ベリーグッド・プラン！」
咲代に親指を立てる。
久し振りに家族三人で楽しい食事がしたい。沙樹の父親離れを取り戻したい。
ヨコタカの特別食堂やうなぎ専門店の野田岩の場景が目に浮かんでいた。
が、すぐに現実に引き戻された。
「でもな・・・一度、会社に帰ってみないと分からないんだ」
「分かっているわ！課長さんは仕事優先よ！でも期待して待っているわ！今日は車を使うね！」
笑顔で嬉しそうに聖司郎に反応してくる。
「・・・・」
車には気を付けてね。と、言う言葉は飲み込んだ。咲

代の運転歴は長く、丁寧だから問題はないだろう。

改めて、

スマホで予定を確認するとタチバナハウジング中田社長、及び親会社の株式会社立華物産の会長、崎口茂が午後二時に当社を訪問。大多社長を含めて営業部長、課長と合同で「川崎ホープタウン」の打合せ予定。終了の時間が読めない。

「携帯に電話するよ」

自社の大多社長と二社の社長ともに「不動産を人間の利欲や利権のための物」だと考えてはいない。

丸尾常務を除き、堅固な信頼関係で結ばれ提携している。

が、不動産の中には幾度も人間が争い、争奪を繰り返してきた物件もある。不動産の歴史、地歴は土地が利欲のための対象物となり、利権をめぐる抗争の痕跡を造ってきたものであることは理解している。

地歴が汚辱にまみれた不動産は無視して目的対象から除外して良いのか。

「偏狭的、近視眼的視野は公益に馴染まない」

土地無くして人類は生きられない。相対的な矛盾は潜んでいるが、このような物件も取り扱わねばならないときもある。

これからは「タカオビル」用地もその一つに加えられるだろう。人も土地も泣いているのだが。

「タカオビル」の火災現場へ向かう途中、聖司郎のスマホへショートメールが入って来る。

部下の野本修一郎からだ。

「昨夜はお疲れ様でした。悔しい結果で昨夜は眠れませんでした。丸尾裕一常務について、知人からの情報です。以前、株式に失敗して高額の残債務あり。競馬やボートなどバクチ好き、マル暴と取引歴あり、要注意」マル暴とは社会的反勢力のことである。

野本は五十五歳、不動産経歴長く、バブル崩壊で倒産した不動産会社から中途入社、現在営業第一課主任で博識な営業マンである。

「了解です。以後、何か情報が掴めたらよろしく」

返信をする。

聖司郎は「タカオビル」の現地へ到着した。

六階建てのビルは煤けて青黒く、大半は焼失している。窓ガラスは割れて、中から水蒸気や煙が漏れ出しておりガソリン、化学薬品のような異臭も胸を突く。各階の内部はおそらく隔壁や内装材、家具調度品は焼失し、この状態から推測すると煙や有毒な物質によって逃げ遅れた人々が犠牲になっていることは否めなかった。思わず合掌、すぐに不敷布のマスクを取りだして鼻を覆う。

幾台の消防車から何本ものホースが畝って重なりビルの入り口や窓の周囲に伸びている。再燃の危険に対応するためだろう、何人もの隊員が入り乱れて騒然としている。

救急車両も二台待機していた。

未だに火災にあった人がこのビルの焼け跡のどこかに残されているのだろう。

反対側の歩道には近隣の住民や通勤途中の野次馬で溢れていた。

県警のパトカーも来て、その外側では報道の車両が数台見える。

TVのアフタヌーンショーの録画撮りだろうか。あるいはライブだろうか。

女性のアナウンサーが

「現在、消防と県警の鑑識が焼け跡に入り、現場の検証を始めているとの情報があります。では、このビルの火災を深夜に発見された方に状況を伺ってみましょう」

花山はマイクを向けられた男性を注視した。白い割烹着の胸に××寿司の縫込みが見える。そのうえからジャンパーを羽織っている。

「店を終わった、ゆうべの十一時ごろだったかな。突然バンッ！って音がしたと思って外へ出てみたらさ、あの二階の左側の窓から火が吹いていたのさ！」

「大きな爆発音がしたのですね」

「うん！そうだよ！何回か大きな音がしてサ、この店の入り口の格子戸がガタガタ震えていたさ。あっという間に二階から三階と火が回って、全部のまどから火と煙がでてきたな！すぐに消防へ電話を入れたさ！」

「何分くらいで消防はきましたか」

「そうさな・・最初の消防車が来たのは大体五分くらいかなあ。もう、気が気じゃないさ！ここら辺も熱くなるし、風向きが反対側に変わればこの店も危ないところだったさ！」

「ご近所のみなさんは寝ていらっしゃった時刻ですね」

「誰かが『火事だ！火事だ！』大声で走って回っていたよ。オレも裏側へ大声で知らせたよ！」

インタビューは終わる。

「すでに数名が救急車で運ばれた模様で、まだかなりの数の犠牲者が残っていると言われています」

入り口に白いテントが張られている。

その中の状況は不明だ。

花山は新東洋開発の金丸副社長の姿を探していた。金丸副社長の姿は見えなかった。何回も携帯へ電話を入れる。

金丸副社長の電源が入っていない。花山の背中に幾度となく冷たいものが走り抜けた。

今後のために周辺の状況も視察しなければならない。
老朽化ビルの多いところだ。
やがて、この界隈は区画整理の対象地域になる予定だった。
「バンッ！」と最初に破裂音がし、何度か破裂音がつづいた、と、寿司屋の店員が答えていたことを思い出していた。放火事件の捜査は警察の仕事だが。
新東洋開発の河北社長が焼死したとなれば、事前の行動、クラブで飲むことになった因果関係等の状況などは把握しておかねばならないだろう。

花山は火災ビルの裏の通りへ出た。
県警が張り巡らせたテープの中へは入れないが、その境界線に沿って見ると裏面の二階建て木造の建物は屋根が半分焼け落ちていた。
このままでは住める状態ではない。住人はどこへ避難しているのだろうか。
その他の近隣の建物も影響を受けて若干被災をしている模様だった。
不動産担当者としては早急に公図を取り、登記された土地と建物の所有者や権利の状況を調べておかなければならない。
すぐに、概略の図面と地域、地番を手帳にメモをする。
会社に戻ればオンラインで登記情報は収集できる。
再び元の通りへ戻る。
張られたテントから鑑識や警官たちが数名、慌ただしく出入りしていた。
突然、ピッピッと警笛が鳴る。
テントの中から青いビニールシートで覆われたタンカーが運び出されてきた。
犠牲者だろう。
「またかよ～、何人めだ」
「もう十人くらい運ばれたぜ」
野次馬の声で、悲惨な状態が推測できた。
前後に数名が付き添いながら救急消防車の署員がストレッチャー（簡易タンカー）を押して救急車両に向かっている。
それに並行して肩を落とした背広姿の男性が付いてゆく。
金丸副社長の姿だった。
「金丸さん！」
救急車を見送る金丸副社長の背後から花山は声をかけた。
「花山課長！・・・」
振り向いた顔は青ざめて「ダメでした。大変なことになってしまった！残念です！」煤けた顔には涙のあとが見える。
押さえた口のハンカチには汚物のようなシミが見える。
何回も吐き気がして吐いたという。
「悲惨な状態の遺体も見ましたが、まさか・・こんなことになろうとは・・社長とは昨夜、このビルの三階のクラブで別れたばかりで・・・」
「ホントですか！このビルで飲んでおられたのですか！何と言ったらいいのか言葉が出てこない・・・ご愁傷様です・・」
誰と、どのような経緯でこのビルへ来て飲んでいたのか、詳細を聴きたかった。
いまは言葉を抑えた。
「中継テレビのアナウンサーに答えていた人の話ではおおきな爆発音がしたと言っていましたが・・・」
「まだ、正式には発表していませんが、間違いなく放火のようです」
「確かにガソリンのような匂いもしていますが・・」
「そうです、灯油だろうという鑑識の声が聞こえていました・・・」
「誰がこんなことを・・お気の毒なことになり・・・」
一体誰が何の目的で残忍な放火をしたのだろうか。
「金丸さん、お聞き苦しいのですが、河北社長はどんな状態だったのですか？確認できる状態で・・・」
「はい、三階のエレベーターに向かう廊下で見つかったようです。社長は有毒ガスによる窒息死のようです。顔はどす黒く煤けていましたが、苦しそうな表情が残っているように感じました。どうして社長だけ逃げ遅れたか、遺体の司法解剖をするようです、小沼氏や薬局の事務長、弁護士が一緒だと思っていましたから、不思議なんです、刑事さんにもこれは言っておきました・・」
すすけた拳で涙を拭う。四角い顔が灰色の斑になってモズクガニの様相を感じさせた。
「やさしい社長だったのに・・惜しい人を失いましたね」
「わたしが悪いんです。一緒に帰れるまでおればよかった・・後悔しています」
「かなり飲んだか、余程の体調が悪いかでなければ脱出できる体力があったのに、不思議なんです」
「やはり女性とご一緒だったのでしょうか？」
「ええ、そうです。三階でホステスが五名のうち二名が同じ廊下で倒れているのが見つかったようです」
「女性にモテるひとでしたからね・・」
「はい！でもあのお店は初めてのところで、行政書士の小沼先生に勧められ、さっきも話した通り調剤薬局の事務長ともう一人弁護士とで飲んでいたのですが・・・」
「小沼行政書士？と弁護士？」
丸尾常務が花山に言った、信頼している小沼と早川弁護士がいたという。昨夜の丸尾常務とのやりとりが胸に

浮かんできた。
やはり小沼らとの縁は、悪縁なのだ。当社独占とはウソだ。河北社長と小沼らに繋がってゆく不穏な構図を脳裏に描き、不信と疑惑が渦巻き、やりきれない怒りが込み上げてくる。

ある夜、
業界と某政治家のパーティで隣り合わせた時の河北社長との会話が脳裏に浮かんでいた。
「花山さん！この女性はなあ、アレがいいのよ。クジラみたいに」
花山の耳元で嬉しそうに彼女を紹介した時の表情を思い出していた。「潮吹きよるんよ！」下品な表現だが河北社長の陽気な人柄から嫌味に感じさせない。
「何言うてはるの！また、エッチなこと言わはったのと違うん！恥ずかしいわあ！」
関西弁で河北社長の膝を叩くしぐさ、丸顔で八重歯がのぞいた口元はセクシーで可愛い女性だった。
彼は四角張った顔立ちでイケメンタイプではないが、女性にモテる。好色男の噂は業界では有名だった。
今度もあの女性と一緒に犠牲になったのだろうかと思っていたが。
そうではなかった。
初めて小沼氏グループと仕事の打合せで交流したと言うが、その店で何が語られたのだろうか。
遊び心が旺盛でいつも気配りが細やかでその場を盛り上げる能力抜群の人だったから仕事話が絡んだとなれば、ホステスを味方にして時をわすれて小沼氏らと過ごしていたに違いないだろう。
それにしては、小沼氏は火災から逃れているという・・・
何故だろう！電話で話しただけの小沼行政書士にどうしても直接会って状況確認をしなければならないだろう。ふと、未知の闇のなかに陰険な罠が仕組まれているのではないかと疑惑が湧いてくるのを抑えられなかった。

聖司郎が現場から昼過ぎに本社へ戻った時、営業部長の田丸謙二郎は株式会社、立華物産会長崎口茂、タチバナハウジング社長中田正志郎と社長室で面談中だと部下の小城弥生が言い、「帰社次第来るように」命令を受けていると、報告しながら彼をエレベーターに先導する。
「ありがとう。他には電話はなかったかね？」
「司法書士の志摩佐一先生から明日の取引時間、場所の確認がありました。それから鶴亀商店の鶴田社長から先日お送りした日本橋プロジェクトの調査報告書のお礼の電話がありました」
「そう。ありがとう。明日の取引は予定通り、問題ないから、わたしも顔を出す予定だよ」

別件で部下、野本修一郎の担当する川崎区の取引の案件もあった。
「ご担当の野本主任に電話を回しておきました」
エレベーターを四階で降りる。
社長室のドアをノックして小城弥生はドアを開けた。
「失礼します。花山課長がお戻りになりました」
「おう！ご苦労さん！テレビでも見ていたが現地は悲惨な状況だねえ。河北社長はやっぱしダメだったようだね」
中田正志郎が花山に向かい
「まあ、お気の毒やった。いい人を亡くしたとね、女性が何人も犠牲になられたようったい。放火殺人で県警は動きだしたげな」
福岡支店長から東京へ転任して三年になっても博多弁が取れない。
「灯油を撒いたらしいです。放火の目的はまだ判明していないようですが」
「県警は怨恨も視野に置いているようだの」
「あのビルの買収もしばらくは様子を見なければなるまい」
大多留男社長、崎口会長、中田社長に田丸営業部長が説明をする。
「花山君の現場からの報告を聞くと、不動産コンサルタントを名乗る、行政書士の小沼とやらが新東洋開発の河北社長、金丸副社長にも触手を伸ばしていたとはね！当社の丸尾にだけ来ていた極秘物件ではなかったことが判明しました。これは当分見送ったほうが良いかも知れませんな。あのビルの用地の地歴にまた残忍な事件で傷がつきましたよ！」
田丸部長が窓の外に目をむけて嘆くような表情を見せた。しばらくして、
「花山君からほかに何か報告があるかい」
花山を促した。
「一度あることは二度あるという格言がありますが、どうも呪われている物件のようです・・」
「過去にもなにか事件がありましたかいの？」
崎口茂会長が花山に問う。
「重要事項説明書でも付帯的に説明しようと、部下の野本に調べさせてみましたが、昭和三十八年ころ、二階建ての住宅が建っていたそうですが、当時、不審火で出火して老人夫婦とお手伝いさんが焼死したらしい」
「放火殺人ですか」
「警察に聞いてみましたが、詳しいことは教えてくれません。一般人ですから当然でしょうが近隣の老女が覚えていて色々教えてもらったようです、でも結局事件は迷宮入りのようです」
「呪われているような物件ですなあ、よかろうかのう、その土地を買ってもロクでもないとね」
中田社長が崎口に言う。

「まあ、長い歴史にはいろいろありますちゃ！放火、殺人、刃傷事件は欲得がある限り人間界では避けられん出来事ですちゃ。明治維新で起きた京都での様々な事件、それまで犯してきた信長や秀吉の罪など、戦国時代でも同じでしょうがの。忌まわしい血にまみれた大地、でも人間界を支えてくれる大地に責任はありませんのじゃよ、こう言う不動産でも当社に縁があって手に入れば、こんどは万人が喜ぶ有益なものを造り、地歴を塗り替えてみたいものです。そうすれば地霊も喜んでくれますじゃろうがのう」

山口出身、方言のイントネーションが染みついている自信満々のご託宣だ。

「崎口会長さんの哲学には感服します。私どもも買収活動は進めますが、時間はかかると思います。花山君！周辺の物件と合わせて綿密な調査を頼むよ・・」

田丸部長が花山に告げた。

「わかりました。このビルは丸尾常務の命令で富田課長に担当替えになりましたが」一応、言っておかねばならない。

「富田さんとも共同で、周辺を含めて調査し攻めてみます」

「そうせい！ワンチームに徹せよ、ラグビーの日本代表チームのようにな」

おおらかな大多留男社長が久しぶりに檄を飛ばす。

「ご苦労をばかけとるのう、その買収の件は田丸部長さん考えられとる通りに、従来通りに考えとくと。それにしたっちゃ、今回の事件は河北社長さんの異常な女好きが誰かん恨みでも買うたんかも知れんとね」

崎口もそれに反応して眉根にしわを寄せて中田を見ている。

「はっはっはっ！笑うては不謹慎だが、ほんなこつ女癖が悪かひとやったなあ」

花山は崎口の反応を受けてスキャンダラスの話題を変えたかった。不明で深刻な問題が脳裏を過ぎる。

その雰囲気を察したように

「私たちは次の予定がありますからの、これで失礼しますちゃ。いろいろご足労をおかけしますがな、あとのことはお任せしますので善処ください」

崎口会長が立ちあがり大多社長と握手をして中田社長を従えて玄関に付けた社用車へ乗り込むまで、田丸部長と花山が二人を見送り、再び社長室へ戻ると田丸に促されてソファーに座る。

大多社長が花山の前に座ると

「花山君、現地には河北さんのご家族は見えていなかったのかい」

「金丸副社長のみでした」

「だろうな、家庭生活は崩壊状態になっていると聞いていたが当然かもな、美人の奥さんがありながらアレだから・・・今回は天罰が当たったのかもなあ」

「古いビルに共通して、廊下には段ボール箱やゴミがいっぱいだったと聞いています。三階のエレベーターホールにも段ボール箱が積まれていたと金丸副社長は言っていました。その状態を知って灯油を撒いた犯人のやり口は非情過ぎます！」

「オーナーの自宅もあったでしょう」

大多社長は丸尾常務からの情報で知っているようだ。

「四階以上はオフィスですし、六階のオーナーの自宅は、金丸氏のはなしから判明していますが、高尾紹子さんは夕方倒れ、救急車で病院に運ばれて、不在でしたから火難は逃れたと言っていました」

「火事からは逃れても病気の容態がどうだかなあ」

「それも調べてみます。いろいろ気がかりなこともありますし」

丸尾常務へ極秘と言っていた計画案は既に崩れている。等価交換方式でビルを建てる計画も河北社長に提示されたと言う。

行政書士の小沼夢次、妻は生命保険の元外交員で現在はエムユー生命保険の不動産次長で等価交換資金をバックアップするという案が提示されたと、金丸副社長から花山は火事の現場で聞いていた。

「そうだな、何か隠れていたものが出てくるかも知れん直接金丸氏と一緒に小沼、高尾紹子に会うことだね！」

田丸部長も丸尾常務に疑念を持っていたのだろう。これまで無言を貫いてきた意味が花山には読めてきた。

まず、金丸副社長の協力を求めねばなるまい。

ハゲタカのように不動産を食い物にする人間の習性を花山はバブル崩壊後の不動産処理のやりかたを見て知っている。

過去に引き起こしてきた事件は今後も不動産に起こりうることだった。

ターゲットにされた不動産は弱って死にかけた動物のようにハゲタカに狙われてくる。

その時、金丸副社長から花山の携帯に電話が入る。

「実はね、御社の常務の丸尾さんと当社の河北社長との覚書が出て来た。いろいろ考えて黙殺することも考えたがね、課長にはかっていろいろ助けて頂いたし、正義、誠意を大切にされておられる花山課長にご連絡したわけです。セコイ話ですよ！成功すれば裏のリベートを支払うという、まったく！呆れた話です」

丸尾常務と河北謙三との密約の情報だった。

「ありがとうございます。御社も大変な時に恐縮です。覚書はメールに添付して送っていただけますでしょうか」

「そのようにします。ではまた何かありましたらご連絡を申し上げましょう」

不可思議な登記簿

「課長！この登記事項を見てください」

部下の野本修一郎が登記簿を花山課長の卓上へ置いて指で示した箇所の確認を促す。部下ではあるが彼の年齢は五十五才。年上だがバブル崩壊で倒産したSハウジングから花山が課長に昇進した後、二年後に入社した。大多社長の友人の紹介だった。

彼は不動産取引の経験が深く財務管理の経歴も持っている。

「高年齢で使いにくいと思うが・・配属先をどこにするか」

打診を受けて、

「社長！是非わたしのところへ下さい」

人は見かけで判断してはいけない。

多面的、長期的に見よ。

これが父親の教えだった。

事実、花山にとっては今や有力な戦力になっていた。

手元に示した登記簿の写しを見る。

登記簿は土地、建物の経歴書とも言える。現在は「登記事項全部証明書」と言う。

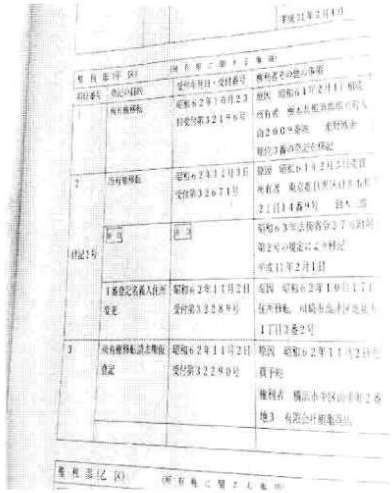
川崎ホープタウン敷地の一部。個人所有の宅地である。

現地も登記簿も確認したが倉庫は取壊されて建物は建っていない、更地だった。

登記簿の全体写真



右の甲区欄（所有権の抜粋）



「所有権欄だね、どうかしたの？」

「この所有者欄を見てください」

「所有権の経移だね。鈴木三郎と・・うん！どこにでもある名前、同姓同名は全国で数えきれないほどあるだろうが・・・」

取引事例を回想しながら、表題部から甲区、乙区の登記事項を眺めている。

「課長が入社された以前の時代、地面師グループの一団が、登記所へ入り込み、法務局職員の監視のスキをついて、登記簿を抜き、持ちだして、甲区（所有権に関する事項）の所有者を書き換える、登記簿偽造事件があったんですよ」

車に積みこんだタイプライターで所有者登記を偽装、当時の登記官の偽造印を作成し押印して、素知らぬ顔で登記簿へ戻して置く。大胆な偽造グループが摘発された事件だ。

長期不在地主の優良な更地が狙われた。

登記知識を持った人間が加担していることは推測された。

偽装した登記の所有者に成りすまして市役所、区役所を騙して登記に必要な印鑑証明書を取得し売買や担保物件として利用、金融機関から融資金をだまし取る手口。このような荒っぽい手口の詐欺集団が関東区域で詐欺行為を繰り返して行ったのだった。

やがて、真の所有者がこれを知り、明るみにでて初めて警察が捜査して、この一団が逮捕されて事件の概要がマスミによって報道された。

「大胆不敵な登記簿の偽造集団だね」

「当時の法務局には登記簿の閲覧場所に監視カメラがなくて、職員も常に監視をしていたわけではありません。登記簿閲覧のシステムの盲点をつかれた犯行でした」

「犯人らは全員逮捕され刑務所へ入ったのですか？」

「完全に解決していたか、確定はできないと私は考えています。一団のグループ中の一部の犯人は、逮捕を免れているのではないか、推量しています」

今も偽造されたまま発見されていない、埋もれている物件の登記簿が残っているのではないかと、推量していた。

「悩ましい問題だね」

「はい！関東各地の登記所を標的にして犯行しておりましたが、そのうちで一番多く使われた名前が鈴木三郎名なのです」

「自分の名前に所有権を書き換えたということですか」

花山にはまだこの詐欺のトリックが理解出来ていない。

「そうではなく、ありふれた名前を利用したようです。全国で二百万人くらい鈴木性があるようです。市役所もダマしやすかったと言えるでしょう。そこで実印を登録、改印など申請書を作成して、印鑑証明書、住民票、戸籍

まで本人になりすまして取得をしたということです」
「権利証が無ければどうしょうもないと思いますが」
「彼らの一部の犯行では権利証の偽造もしています。精巧なものです」
「いや～、ホントですか！想定外だ！」
花山は唸った。
「真の所有者は登記を回復できたのでしょうか？」
「ご存知のように民法では詐欺による所有権の移転後、更に善意の第三者（この事実をしらない）が取得した登記は回復できません」
「エ～ッ、所有者は泣き寝入りかい」
「すべてお金による国家賠償で決着しています。中には銀行や金融業者からその偽装した土地を担保にして金銭を借りて逃亡したケースもありましたよ」
「被害を受けたお金は回収されたのですか」
「騙された被害金は国が保証しましたが、犯人がだまし取った何億のお金の全額は回収されていないと思います。背後には黒幕がいて、金を持ってジッと地下に潜んでいるのではないかという噂が流れています。手先の犯行者には出所後の保証を言い含めて刑を受けさせて、黒幕がトカゲのしっぽ切りをしたのではないかとわたしは推測しています・・・」
詐欺罪の時効は七年、民事は三年、密かに潜伏している犯人がいるに違いないと野本は考えている。

登記簿の電子化は平成十六年頃からはじまり十八年頃までに各地の登記所は次々にオンライン庁に変わっていった。以降は、この手口は不可能になった。この移行時に判明した不正な登記は新しい登記簿には移記されてはいないのだが、その不正の発見を遺漏した不実の登記は今も残っているかもしれない。
「でも、この鈴木三郎が真の所有者かニセモノかどこで分かりますか？」
「これはわたしのカンです。確認のため登記簿に記載された住所の現地に行かせてくれませんか」
「早速調べてください。おねがいします。疑念をもったまま取引はできません！野本主任！よろしくお願いします！」
部下でも年長者に対しての礼は失ってはいない。
「司法書士の志摩先生と同行します。現在は司法書士には厳しい本人確認の義務が課せられていますから・・」
「結構です！」
万が一にも、この物件に瑕疵があってはならない。信頼されて代理権を受けている立華物産、タチバナハウジングに迷惑をかけることは出来ない。
翌日、野本は志摩司法書士と目黒へ出かけて行った。

最初に、登記をさている目黒区目黒本町二丁目一四番九号の鈴木三郎を調査するために現地へ行く。
東急東横線の学芸大学まえで下車したふたりは「天気が良いから歩いて行きましょう」と志摩司法書士「碑文谷公園の先ですから、二〇分はかからないと思います」スマホのグーグルマップで目的地にGPS対応のセットをして野本を先導して歩いてゆく。
志摩司法書士は二十八才、学生時代はラグビーの選手だと言うが、野本と同じような背丈と体形だ。（ホントにラガーマンなのかい！）と、疑念をもったこともあったが、鍛えられた筋肉が違うのかもしれない。
足の速さはさすがだ。先に先にと飛ぶように地番と地図を片手に進んでゆく。
閑静な住宅地が続く。桜並木も見えるがまだつぼみだ。先端が赤く膨らんでいるから間もなく咲くだろう。
「ここですよ！野本主任！」
現地の地番は宅急便を扱うコンビニだった。そこはコンビニエンスストア“ライフクラブ目黒本町店”のフランチャイズ定型の看板が掛かっている。
店の入り口には区役所が発行しているブルーの住居表示板と一致、間違いない。
「少しお聞きしたいことがありますのでオーナーさんをお願いします」
店員が奥に声をかけると温厚そうなスキンヘッドのオーナーが笑顔で現れる。
「丸山です。何かご用で・・」
五十歳、前後だろうか。
ふたりは名刺を渡して、野本が来意を告げる。
「すみません、突然お伺いして、仕事上少しお聞きしたいんですが、ここは鈴木三郎さんの所有地だったのしょうか？」
すぐに警戒心で顔の表情が固まった。
「ここはわたし、丸山の所有地だよ！」
「いいえ、失礼しました。聞き方が悪かったのです、申し訳ございません。この土地の所有権の話ではありません。これから私どもが購入する土地が川崎の高津区にございまして、その所有者様の元の住所がこの住居表示の地番になっていますので、以前は鈴木さんの所有の土地だったか、そのように確認したのです」
「もともと二十数年前かなあ、鈴木さんという方は内科医で、診療所があった場所だと聞いているよ。うちの親父が鈴木さんから買って、しばらく八百屋をやっていたがね、わたしの代でコンビニに立て替えましたが」
「鈴木さんのご家族やお子さんとか、お聞きになったことはありませんか？」志摩司法書士が資料を開いて「横浜市に引っ越したとか言う情報を耳にされたことありませんか」
丸山オーナーが不審そうな表情に変わる。

「横浜へなんて出て行っていないと思うよ。鈴木さんは昭和六十一年ごろこの地の自宅で無くなっているよ。癌だったらしいと、聞いていたがね・・温泉療養のために栃木の温泉地へ行ったとか・・・亡くなる前に医院を廃業したあとを、うちの親父が買ったんだよ」

「その年、六十一年に亡くなった」

「死んだ人間に権利能力はあり得ない。やはり、この鈴木三郎は誰かが本人に成り済まし、住所を目黒から川崎に移したのだろうか！あるいは別の鈴木三郎さんが実際に存在していたのだろうか？」

この事実は目黒区役所、川崎市役所、管轄登記所の各種の書類の現物を調査してみなければならない。

近年、成立した個人情報保護法により、関係官庁の担当者をあたっても、

「個人情報ですからお答えできません」

門前払い受けることになるかもしれない。

それでも、あらゆる手段で調査して事実を掴まねばならないのだ。

容易ではないが、

「登記所に事情を話して、不審な点があれば、担当官と一緒に、調べてゆきましょう」志摩司法書士が野本に告げた。

この調査にも時間がかかる。

「取り敢えず、取引は延期するように花山課長に報告しよう」

「タカオビル」の顛末

少し時間をさかのぼってタカオビルで起きた真実、所有者高尾紹子を取り巻く人間模様、その時間的な経過を再現してみよう。

土地には土地の神様、その地霊が住んでいるという。

この地霊が知っている事実を検証してみよう。

午前一〇時、

タカオビルの六階は高尾紹子の自宅である。

「おはようございます！おばあちゃん、見た？関東に大地震と津波がくると昨夜のテレビでやっていたけど？」

定期訪問してきた平洋二郎はリビングのテレビを指さす。有限会社黄金不動産社長、平洋二郎は長年「タカオビル」の管理、部屋の賃貸媒介をしてきた。

「ヨウちゃんはアサから縁起の悪いことを言いに来たのかい！きやしないよ！テレビ局ってサ、視聴率を上げるために、へんてこな学者を担ぎ出してきては世間を煽ってネ、放映料を稼ぐのさ！」

「おばあちゃんは相変わらずお口もお身体もお達者ですねぇ、そう言われちゃ身も蓋もない桶屋のヨウちゃん・」

「バカ言ってないで早く五階の空き部屋を埋めなさいよ！ヨウちゃんが身も蓋もない能なしなら業者変えちゃうよ！」

「勘弁してくださいよ！頑張っているんだから・・・」

「このビルの二階のテナント、小沼行政書士がサ！何度も来ているのよ。このビルを等価交換方式で建て替えれば収益も倍になるから、自分にやらせてくれってさ！」

「ダメダメ！ダメですヨウ！あの先生、口八丁手八丁で評判悪いよ！いろんな不動産屋が出入りしていることは聴いているけど、小さな事務所にそんな資金力なんかないで～す、ヨーちゃん、ホント！」

「それがさ、奥さんがエムユー生命の不動産部のサ、次長に昇進したとか言ってね、会社の部長を連れてきてネ、エムユー生命が全面的に資金を出して、ビルを建て替えれば、ここで横浜支店を開設すると言ってきているのよ」

「その話少し、ヤバくない、クサいね、匂うよ！やるなら当社にやらせてよ！優秀な社員七人のサムライがいるんですヨ！」

「まあ、おたくとは古い付き合いだからサ、バッサリ切るわけにもいかないけどね、古い縁も多い土地柄だから考えてはいるけどさ・・・でもいつまでもあると思うな親と縁！と言うよね・・」

「まったく、コワイはなしだ～ね、えにし（縁）は一生という諺もありますよ！おばあちゃん！」

「もう一つ言っちゃおうか！青山の新東洋開発って言ったかしら、カニみたいな顔をした不動産屋の副社長も再三きてさ、このビルを三十億で売れと言って来ているのよ」

その時、高尾紹子と同居している女子大生の姪、濱田佳子がコーヒーと羊羹をテーブルに運んでくると、

「おはようございます、タイラ社長さん！いつも叔母がお世話になっております！」

「おや！虎屋の羊羹がでてきたよ。ボク、大好きです、いただきま～す！」

「この羊羹ね、カニが持ってきたのよ。さっき言った不動産業屋の副社長さ！」

「ゲッ！」

「でも平社長さん！いま二人のお話を伺っていたけど、殻を脱いで美しいチョウチョのように生まれ変わる、この街もそんな風になったほうが良いのではないのかなあ！新しい時代に、合理的で機能的な街づくりも大切なのではありませんか。ねえ、おば様！」

「佳子さん、それはジョークでしょ？このカニが持ってきた羊羹みたく悪い冗談はいけませんよ～」

「この子はK大の理学部で都市工学を専攻して勉強しているからね！」

「それはすごい！でもね、佳子さん、街並みを変えることはそんなに簡単なことではないのですよ。この街はね、故きを温ねて新しきを知るという諺もあるように失われつつある日本人の人情や文化の精神を街のみんなに引き

継いで行くことも大切なんですよ」
「温故知新かあ・・・少し例えが違うと思うけど・・そう言われてもね、世代が変われば歴史が変わると言われているのよ。都市計画はこれから次つぎに立案され法制化、施工されて行くと思うわよ」
「ヨウちゃんにそんなことを言ってもムリよ、むつかしいことはわからないよ！ケイコは早く学校に行きなさい、遅れちゃうわよ！」
「平社長さん！不動産や建築の法律もこれからは次ぎつぎに変わって来るわよ」
「いや！これは参ったな！その通り！ありがとうございます。佳子さま！今度教えてください。法律には弱いんだ、オイラは！」
「いいわよ！ただし有料ですよ！うっふふ・・・」
佳子はハンガーからコートを手に取るとリビングをあとに出かけて行った。
「ヨウちゃん、この栄養ドリンクを飲む？」
「これもカニのお土産ですか？」
「これはキツネからよ」
おばあちゃんはキツネ目の小沼行政書士のことを言っていたのだが、
「要りません、また来ます。おばあちゃん、キツネやカニに騙されないでね！うちのことも考えていてね！空き室は埋めるから、もうちょっと待っていてちょうだいね！」

その日の午後三時

「千載一隅のチャンスだ！」
この話が軌道にのれば一機に会社は息を吹き返す。
新東洋開発株式会社、社長室に不動産コンサルタント、行政書士小沼夢次、妻のエムユー生命保険、不動産部次長の小沼洋子が社長室で対面していた。
河北社長は小沼洋子に渡された名刺を見て
「奥さんはすごいなあ！出世したんだねえ」
「皆さんのお陰ですわ！わたしが保険の外交で苦労していた時、社長様をはじめ、奥様やお子さんたちの分まで、契約を頂いて感謝しています」
「いやあ、そうでした。社員や取引先も随分紹介しましたが・・・」
今はその保険料の支払いも苦しいのだが、滞らせてことはない。
「奥様はお変わりございませんか」
「うん！まあ・・・」これ以上は聴いてほしくない。
が、小沼洋子は河北の妻とは別居中であることは知っていた。妻から河北の女性関係も聴いており、お金に困っていることも知っていた。
「どうかよろしくお伝えくださいませ」
何食わぬ、にこやかな表情で答えた。

「河北社長様とはそういうご縁もあり、まず、御社にこの話を持ってきました。洋子、資金の話を進めてくれ」
「あのビル、タカオビルは当社で買い取ることが内定したわ、等価交換方式で進めて頂きたいのよ」
副社長の金丸が
「しかし社長、買収で進めていた計画と齟齬することになりますよ」
すでに州英不動産と共同媒介、立華物産への移転契約も進めている。花山課長とは一部の周辺土地の買収も計画して区画整理の対象として準備を進めてきた。
「州英との信頼関係に傷がつきます」
「信頼だけでは飯は食えないぞ、金丸くん！」
河北は切羽詰まった事情を抱えていた。
好きになった一人の女性のためにマンションを買ってあたえている。これを知った妻とは別居状態、離婚調停間際で離婚が決まれば当然高額な慰謝料も発生するだろう。息子と娘は妻と同居。今は二人のために養育費を毎月妻の口座に振り込んでいる。
お金が要るのだ。
すでに銀行からは借り入れは不可能であった。これは金丸も知っているはずだ。
（どうやってこの苦境を切り抜けたら良いか・・・）
金丸の言うことは正しい。しかしここは試案のしどころだ。
「この話は早いほうがいいのです。いかがですか、今夜、タカオビルの高尾紹子に会いに行きませんか。具体的な計画を詰めてゆきたいんだが・・」
小沼が等価交換方式の計画書、契約書案を河北の前に置いた。
「こんなに具体化しているの？早そうですな、決済条件がこれですか？」
小沼が計画書の所定の項目を指で示し、
「高尾紹子と土地の仮契約をして仮登記申請時に二十億円、新築ビルの着工時に二十億円支払い、建物工事代金五十六億円はエムユー生命がM建設と契約、完成時に高尾から工事代金三十億を負担してもらい、高尾に交換部分の床面積を移転する、大まかな数字です」
河北には他の詳細な図面に興味はない。
「で、当社の仲介料は」
「当然三パーセント、一億二千万円をお支払いすることになります」
「いい話だが・・・金丸君、どうかね」
「そうなれば・・でも、あのおばあちゃんは、承知するかな、これまで、たびたび訪問してきましたがね、ウンと言わない・・」
「それはね、計画に早期の具体性がないからです。今般、高尾の意向を打診しましたが、金丸さんには内心こころを寄せていますよ。熱心な人だと褒めて虎屋の羊羹を喜

んで食べていましたよ」
　高尾紹子が、羊羹を美味しいと言って食べていたことは事実だったが。金丸をカニみたいな顔の人と言って、「信用できん」と、言っていたがこれは当然今は言わない。嘘も方便、外交辞令も口八丁。
（うまい話には裏をつけておく必要もあるな）
「で、これは裏の話ですが、わたしは不動産コンサルタントです。御社の仲介手数料から二千万円はわたしにキックバックしてほしい」
「当然でしょうな！」
　州英不動産の丸尾も同じような条件を出してきている。どっちもどっちだ。
「ご承知なら、この念書へ署名をお願いします」
　彼は署名、押印をして渡した。
　金丸は両手で胸を押さえて俯いていた。
「午後五時には小沼行政書士事務所へ参ります。金丸君、ヨコタカで虎屋の羊羹を買ってきてくれ、頼みます」
　横浜駅西口を出ると日は落ちて、街灯や店の誘導看板灯、ネオン灯が明るく夜の景色を作り出している。
　二人はタクシーで曙町のタカオビルへ向かう。
「信号の手前で止めてくれ」
　ふたりはタカオビルの正面玄関へ向かって歩いてゆくと、紅い点滅灯を回転させている車両、救急車が止まっている。
　何名かの人たちが見つめているのは、タカオビルの出入り口だった。
　何があったのだろうか。
「事件か！」
「病人か！」
　たちまち通りすがりのヤジ馬で、人垣ができてゆく。
「小沼事務所へ入ってゆきますか」
　金丸が救急車の先に見える通路の先のエレベーターホールを指さす。
「いや！少し様子を見よう」
　救急車の後部の扉は開いていた。
　注視して見るとメインストレッチャー（車輪付きの搬送用ベット）が無い。
　おそらく救急隊員とビルの中へ運ばれているのだろう。
　一人の救急隊員が階段口から出てくる。
「そこを開けてください！」
　エレベーター前の人垣が割れて搬送ベッドが運ばれてきた。
「おお！」
　金丸が奇声をあげた。
「高尾のおばあちゃんだ！」
　白髪の頭がベッドの上部に見えている。
　お手伝いの姪、濱田佳子が救急隊員のあとを追って出てきた。
　片手に大きなボストンバッグを抱えている。
　高尾紹子が横たわるストレッチャーが開かれた救急車後部から押し込まれる。
　濱田佳子も乗ると扉が閉められた。
「社長！どうしましょう」
　金丸が呆然として立っている河北社長に声をかけた。
　救急車は警笛を鳴らしながら路地を出て行った。
　人波の輪が溶けて崩れてゆく。
「事件性はないな」
「単なる急病人のようだね」
「あの青白く固まった皮膚の色から見ると脳溢血のようだぜ」
　火事と喧嘩は江戸の華、他人の喧嘩や火事は大きいほど面白いと言われているが、こうした深層心理がはたらいているのだろうか、大半の野次馬は失望を表して散って行った。
　この時「タカオビル」がやがて夜半に火事を起こし大惨事に至るとは「特別な人間ら」を除いて想定できる者はなかった。
　しかし、河北と金丸にとっては他人事ではない。突然、計画した目標を失ったふたりはビルの裏口で固まっていた。
「どうも、ご苦労様！エライことになりました、予定が狂いましたよ！」
　背後から小沼行政書士の声を聞いて二人は振り返った。
「どこの病院かわかるかね、先生！」
「恐らく横浜中央だと思いますが、所管の消防署へ連絡をとりましょう」
　小沼は携帯電話を操作している。
「教えてはくれないだろう。われらには関係家族の証明ができない。個人情報保護の名目で今は教えてくれないだろうな」
「やるだけやってみます」
　河北が制した。
「いいよーもう、たとえ、病院に行ったところで病人にとっては逆効果だよ、改めて状況を調べてから出なおそうよ」
　事実ふたりは、近時の厳しい個人情報保護にたいする社会事情を知っている。
　従来は問題なく教えてもらった善意の情報が今は聞くことすらできない。
　銀行や役所へ照会を掛けた時の事務的に門前払いを受け、割り切れない思いをしたことも二度や三度ではない。
（個人情報保護法は本当に有益で社会的な正義なのか！）と、今は疑問さえ持っている。
「金丸くん、腹が減ったなあ。何か食おう。関内に戻ろう！」

金丸にはわかっていた。あの丸顔で関西から来た女性が勤めているクラブのことだろう。
「いや、今夜はわたしに任せてください。このビルの中の店でお願いします。今後のテナントの立退き話のためにも一度社長さんらを紹介したいのです」
忸怩たる思いで河北社長は小沼についてタカオビルの地下へ降りてゆく。

そこには三軒の飲食店が営業をしていた。すでに老朽化したビルの地下街は華やかな面影はなかった。ラーメン店、お好み焼き店、その先に、赤ちょうちんがポツリと浮かんでいる。
居酒屋「ケイコ」の看板の店に小沼は縄のれんを潜り、金丸、河北が続いて行く。
金丸は過って高尾紹子とうまくいかない交渉疲れを癒すためこの店に来たことがあった。
カウンターだけの店には中年の男がひとり、自分で瓶ビールを注いでいた。
「いらっしゃいませ、先生！」
「ケイコさん、二人の大切なお客様をお連れしましたよ」
ケイコと呼ばれる老ママに勧められた椅子に付くと
「ここのオーナーが倒れたんですってね？・・」
先客からの情報らしい。
ケイコママは小沼も金丸もタカオビルに関係ある人間であることを知っている。
「詳しいことは何もわからんです」
金丸が答えた。
「昼過ぎに会ったのよ！元気そうだった、九十一歳とは思えないのよね、あのおばあちゃん、何か変なものでも食べたのか知らねえ」
「この時期の食中毒はありえんでしょう」
金丸が答えた。
「あのおばあちゃんは、栄養ドリンクを毎日飲んでいるんだ。姪の佳子さんがまとめて買いに来るんだ。小沼先生と同じ薬草いりのK&Kドリンクをね」
隣の男が金丸に言った。
「キミの場合、その話は個人情報になるぜ」小沼がキツネ目で睨んだ。
「いや！これはここだけの話にしてください先生！つい口が滑ったな・・」
金丸が不審そうに
「小沼先生は厳しいですね」
小沼の目を見た。キツネ目が厳しく光っていた。
「わたしは調剤薬局の事務長をしていますから・・・スミマセン」
河北が笑顔で応じた。
「大丈夫です。むしろその情報、いただいて感謝です！命に差し障るほどの身体の弱い老人でなくてね・・・」

河北にとっては大切な金づるになる売主だ「安心しました。薬局のかたでしたか？口外はしませんから、ご心配なく」個人情報の違反について彼は無頓着。これも現実なのだと金丸も苦笑していた。
「そう！オーナーが亡くなったら家賃を払わなくていいかしら！」
「バカなことを言うもんだね、それとこれとは別だよ！でも、どこかの不動産会社がこのビルの買収にかかっているらしいから、追い出し賃が入るかもね」
小沼が金丸に皮肉を言う。
「ホント！いいわね～、立ち退き料をもらって・・・、もっとマシな場所へ移りたいな～」
「ゴホン、ゴホン、ゴホン！」
河北社長がビールの誤嚥でむせる。
金丸が背中を軽く叩く。
「ママね、ここにさ、でっかいビルが建つんだよ！そうなればビルの利用者や入居者は何千人と増える。テナントには各専門医院が来ますし、うちのオーナーは大賛成しています。更に調剤薬局のチェーン店を増やそうとしていますよ」
その時、ひとりの中年の男が入ってきた。
銀縁の眼鏡をかけた中年の細身。黄色のネクタイが目立つ。
「やあ！お疲れ様！先生こちらへどうぞ！小沼先生もいまきたところですよ！」
調剤薬局の男が自分の右側に空いていた席を顎で示す。
先生と呼ばれた客は弁護士の早川伊久磨だった。
「焼酎がまだあったかな、ママ」
「早川先生のボトル、芋の黒霧だったわね」
ママの背後に並んでいた芋焼酎の「霧島」黒ラベルの銘柄が並んだ棚からボトルを見つけて、手に持つと灯りに透かしている。
「あるわよ、少し・・・もう一杯分！」
常連の客のようだ。
「同じモノを入れていいよ」
「わ～い、うれしいわ！ありがと！いつものお湯割りでいいのね」
キツネ顔の小沼が早川弁護士を見て、小さく頷くと
「このビルのばあさん、食中毒らしいよ・・僕が顧問先の三ツ沢の小柴医院に救急車で担ぎ込まれた。横浜中央病院は受け入れ拒否だったそうだ」
「先生、今、その話をしていたところなんです」
隣席の金丸と河北を見ながら
「はじめまして」
金丸と河北社長の顔色を警戒している様子で、小沼の顔を伺う。
「大丈夫ですよ、先生。仲間です。ご心配なく・・・」
「小柴病院の要請で保険所が明日には高尾の部屋に調査

員が入るでしょう。何が食中毒の原因かを調べるために。そういえば管理会社の黄金不動産がカギを持っていたなあ。平くんに立ち会わせなければならないか・・・明日でいいかねえ！」

自問自答している。

「そうですよ！平氏はもう寝ているかも、明日にされたらよろしい！」

「そうしょう！さあ、飲もう！」

頷いたキツネ顔の小沼の目が妖しい笑みを帯びた表情には誰も気が付かなかった。

「スミマセン！わたしたちは、こういう者です。このビルを買収しようとして以前から来ていましてね」

金丸は名刺を早川弁護士に渡し、更にその隣の野瀬に渡す。

「こちらはうちの社長です」

河北もにこやかに名刺を持って回っていく。

「小沼先生の等価交換方式の企画に当社の社運を賭けています！今後、なにかと皆様のお力添えをお願いします」

河北が続けて

「ママさん！そこの山崎一八年もの、ボトルを入れてください。皆さんとお近づきのしるしです。はい！そうです、皆さんに回してください。皆さん！乾杯をして頂けませんか」

「ホントに今晩はうれしいわ！売上倍増！小沼先生と事務長さんのお陰だわ！」

金丸が河北社長の耳元で囁く。

「社長！虎屋の羊羹！みなさんに分配しませんか」

「任せる！」

酒の酔いと共に、河北は気分が高揚していたのだ。

河北はこの三人との出会いが早々に一億円の利益を齎すことを信じており、冷静に人間の本質を分析する能力を失っていた。

いや！溺れる者は藁をも掴む、と、言うことわざがあるように、切羽詰まった河北にとっては彼らが財運を齎す大黒様のように見えていたということが本根だろう。いま！出口が見つからなかった暗闇から脱出できる！州英不動産の丸尾が言うようにこの世はお金がすべてだ。このプロジェクトが成功すれば更に実績が評価されて将来、仕事も増えるだろう。

行政書士、小沼夢次は別の思惑で表情が緊張しはじめていた。その時、小沼の脳裏には別の男の顔が浮かんでいたからだった。

一週間前の午後、事務所へ突然、一人の男の電話があった。元不動産業者の香川だった。

「先生、ムショ暮らしは長かったよ、今頃は（臭い飯）とは言わないがね、やっぱし、娑婆のウマイ御馳走が食いたいぜ、お約束したオレの分、あるよね」

詐欺罪で判決を受け収監され、刑期を終えた香川からだった。

「大変、ご苦労でした。お約束したことは忘れてはいないよ。キミらを裏切ることはありません。預かったものはお渡ししますが、出所してすぐに動くのは危険だからね、安全にお渡しするための段取りをしますから、明日もう一度電話してください」

「もう我慢も限界だからな、下半身が燃えてたまらねえ」

「安全な店を紹介しますよ」

小沼は苦り切って答えた。

翌日、

「先生！決めてくれた？」

「はい！安全な方法を決めました。二十一日の午後十一時に事務所へ来てください」

「夜かよ！」

「昼間より、その時分がいちばん安全だからね。警官の尾行には気を付けるようにね、こちらでも気を付けて事務所へ出てゆくから」

今夜がその日時だった。

いよいよ気が進まなかったが、やむを得ない計画が目前に迫っている。

小沼はこの計画の主役を演じ、野瀬を脇役にして極秘で綿密な計画を立てていた。

野瀬が午後九時を回ったとき小沼に時計を示して目で知らせた。

「そうだ小沼先生、河北社長！みんなで席を変えませんか」

「いいね、三階のクラブ「みなとの花」かね、河北社長、金丸副社長、如何ですか」

「お供しますよ。今夜はお近づきのしるしで当社に任せてください！」

酔いのまわった河北はご機嫌だった。

金丸は心得ていた。接待役は河北社長の領域で、金丸は早々に退散しなければならなかった。（ホステスにモテすぎなければいいが・・）

「すこしお付き合いしますが、早々に退散させて頂きます」

金丸は河北の耳元で告げる。

金丸もその店は初めてだった。

以外に広く、シャンデリアが中央で煌めきボックス席は刺繍が縫い込まれて予想以上に豪華な造りだった。

入り口にはホステスが五名、客待ち用のソファーで待機していた。

「いらっしゃいませ」

「あら！先生」

「事務長さん！」

五名とも立ち上がってそれぞれがボックス席に誘導す

る。

「河北社長さん、お好きな女性をどうぞご指名ください」

野瀬が「今夜はこちらの社長さんが主役だよ。ママ！頼むよ！」

「あら！ハンサムな社長さん！喜んで！」

河北の四角い顔がゆるむ。お世辞と分かっていてもうれしいのだ。

金丸は乾杯が済むと「わたしは次の仕事で行かなければならないところがありますので」

ひとりのホステスに付き添われて出口へ向かって行った。

エレベーターホールには数個の段ボール箱が積まれていた。（来るときは気が付かなかったが・・邪魔だなあ）

エレベーターの扉が開くと同時に宅急便の作業着を着た二名の男が、更に段ボール箱を持って降りてきた。

「また、お待ちしていますね」

ホステスの拝礼に敬礼をして金丸は帰って行った。（仕事はその場しのぎの口実だった）

二階のカラオケボックスの隣には小沼夢次の行政書士の事務所があり、その廊下の隅にひとりの黒ずくめで全身を覆った中年の男が段ボール箱の陰に潜んでいることは誰も気が付いていない。

丁度その頃、高尾紹子に付き添って三ツ沢の小柴医院にいた姪の濱田佳子から黄金不動産社長平洋二郎の携帯に電話が入っていた。

「平社長さん、お願いがあります。家のカギを開けて頂いて構いませんので、応接の卓上に虎屋の羊羹と栄養ドリンクの箱と飲んだ空き瓶を持ってきていただけませんか？」

「どうしたの？」

「おばあちゃんの食中毒の原因を調べて頂くのよ」

「カニとキツネの贈物かい？」

「おばあちゃんはね、三時のおやつで羊羹を頂いた後で、栄養ドリンクを二本も飲むんだもの。その後、急に吐き気がして、様子を見ていたんだけど、夕方には三十九度も熱が出て、救急車を呼んだのよ。いつも自分で買って飲んでいたものと同じだったけど、病院から指摘を受けて急いで調べて頂くの」

「ガッテン承知の助です！すぐに行って病院にお持ちしますよ」

この経緯については、小沼、野瀬は当然知る由もなかった。

地霊の怒り

タカオビルを取り巻いた人間の強欲、傲慢劇を地霊は見ていた。

彼らは完全犯罪を計画、実行を企てていたのだが、犯

罪の証が白日のもとに晒される日は遠くはなかった。

きっかけは不動産登記簿偽造事件（鈴木三郎名義）に関わる公文書、私文書の偽造、偽装を調査していた司法書士志摩佐一と州英不動産、営業課長、花山聖司郎及び主任、野本修一郎が収集した書類が警察の目を引いたことだった。州英不動産株式会社、丸尾常務と新東洋開発の河北社長とのあいだで結ばれた成功報酬の裏金の覚書の中に、小沼行政書士が河北を通じて丸尾に内密に放火請負人の紹介を要請、支払い報酬五百万円を記載したメモが附随して書かれていたことだった。

新東洋開発株式会社の家宅捜索で押収された書類から更に事件の内情が判明した。

小沼の行政書士事務所からは書類が火災で消失していたから小沼は証拠無く逃げきれると思っていたかもしれないが、火災現場から発見された焼死体をＤＮＡ鑑定した結果、暴力団員奥平の身元が判明、県警は放火依頼を臭わせる証拠文書を小沼行政書士に突き付けて自白へ追い込んだのだった。

共犯者は奥平某、小沼の妻洋子、野瀬、河北の正妻、州英不動産株式会社の丸尾を逮捕した。参考人に早川弁護士を任意同行してその詳細を供述させた。

その経緯は次の通りである。

一、放火犯は小沼行政書士が丸尾常務に依頼して紹介された反社会的勢力の、×組の組員、奥平某という男に放火を請け負わせた。小沼は予め五百万円を奥平に支払っていた。

手口は調剤薬局の事務長の野瀬に手作りで調剤した爆薬をつめた牛乳箱をタカオビルの二階に投げ込ませる計画。それを当日の夜十一時、放火を請負った、奥平が爆薬の導火線に火をつけて投げ込んだ。前もって灯油の入ったポリ容器のフタを開いて流していたから爆発と同時にカラオケボックス入口に向かって一気に火は広がった。火は更に各階の廊下に段ボール箱を積み重ねていたために燃え広がっていった。

放火目的の一つは不動産登記簿偽造犯の一員、元不動産業、香川某の殺人計画だった。小沼と予め計画した通り、犯罪の禊をうけて出所した香川の口を永遠に封じるためだった。二千万円を隠し持っていた分配金も小沼らは横領していた。

この殺害計画を知らない刑務所を出所したばかりの香川は小沼と約束通り、二階の段ボール箱の陰に潜んで彼が事務所に来るのを待っていたので、最初の爆発で即死したようだ。

二、もう一つは河北社長の殺人計画だった。

彼には小沼の妻、小沼洋子が生保の外務員時代に一億円の死亡保険金が掛けられており、別居して困窮してい

た河北の妻と親しい小沼洋子がこれを奇貨として共謀、死亡保険金の詐取を計画したものだった。

予め、調剤薬局の事務長に睡眠薬を用意させてウイスキーボトルに入れさせて河北が飲んだことを確認して夜、一〇時四〇分に三人は女性にもててご機嫌の河北を残して店を後にした。睡眠薬入りのウイスキーを飲んだホステス二名は巻き添えだった。

三、更に、高尾紹子の食中毒も小沼と野瀬調剤薬局事務長との計画的な犯行だった。

予め野瀬に大腸菌を入れた栄養ドリンクを作らせて配達させていた。

当日、計画していた放火殺人計画にはタカオビルの高尾紹子を巻き添えにすることは出来なかった。

以後の土地の処分を州英不動産の丸尾常務と小沼との親密な関係を利用して同社に専属専任媒介契約を結ばせて、等価交換方式で独占して事業を請負うためだった。

高尾紹子の自宅も消失すれば証拠品の栄養ドリンクは残らないと安心していたのだが、放火前に黄金不動産の平社長によって小柴病院に搬入された。これは小沼にとって予想外だった。

小柴病院に提出した栄養ドリンクから恣意的に混入した大腸菌が検出されて小沼らの犯行が始めに発覚し、これが放火殺人犯罪の糸口にもなっていた。食中毒の高尾紹子は的確な医療処置ができたので早期に退院した。

エピローグ

完全犯罪を目論んだ彼らの罪は重い。

彼らは大地に地霊が宿っていることを知らなかった。横暴、残虐な人間の行為にたいして大地は何も言わず、何事も受け入れてくれる。しかし、だからと言って大地を侮ってはいけない。大地の神様には人間と同じように精霊力が宿っている。

地霊は天道に背いた人間の残虐非道な行為まで許すわけはない。

時には大地に対する不作為の作為もやがて人間に大災害を齎す。新たな疫病を発する。水害、がけ崩れ、山林火災と。

人は地霊の怒りを知るべし！

明日に向かって州営不動産株式会社では営業部の〝夕礼〟が行われている。

営業部長の田丸謙二郎が部員を前に訓示。

「罪を憎んで人を憎まず、と言う諺があります。論語にも聖書にも謳われています。今回の事件で犯罪に加担した人は罪を償わなければなりません。その結果、当社の組織上やむなく、悪縁を悔やみ不運を嘆いている社員もありましょう。その社員には罪はありません。今からネガティブな考えは切り捨ててください。今回の事件は天から与えて貰った試練だと考えて、自己を磨いてください。

当社は利益主導、拝金主義ではありません。しかし利殖無ければ私たちも会社も国も富むことはありません。儲けることは罪ではありませんが、その根底には、利は義の元なり、または利は和なりと言う、先賢たちの教えを守りながら業務に励もうではありませんか。今回の事件を振り返って、私たちは不動産業務を通して正義を貫き、更に倫理、道徳をお互いに磨きあい、人が人を育て、有益な企業人を造っていく、これも利殖のひとつです。そして一丸となって社会に貢献して行きましょう！」

野本主任が花山課長に言った。

「いい会社で働けて幸せです」

「そうだね。ボクもいい上司と部下に恵まれて感謝しています。ありがとう」

（終わり）

これはフィクションです。記載された団体名・会社名、人名、事件は架空のものです。

オバマ大統領就任演説

鍋屋次郎

どうして小生が、全く関係のない、ましてアメリカの大統領として過去の人である「オバマ大統領の就任演説」などと題して書くことになったか。おそらく小生を少しでもご存知の方は「？？？」であろうと思います。

そもそも、昔からアメリカの大統領選挙は、あのような大騒ぎをするのか、と疑問に思っていました。

二十年くらい前、知人の女性大学教授が、アメリカが大統領選挙で大騒ぎしているときに、ワシントン・ニューヨークに研究の打ち合わせで行くと言うので「何故アメリカがこんな大騒ぎをするのか、見てきて」とお願いしたところ、見てはきましたが「アメリカ人でなければ、それと個人的、思想的に政策的利害が絡んでいなければ分からない」と言われ、それ以後は「日本人には理解できない他国のこと」と、興味を持てませんでした。

ところが今年のアメリカ大統領選挙を見ていると、本人の獲得票数が集計された後も、それを信用しない（何故信用しないのか、小生には理由不明）で告訴迄しているトランプ大統領の言動について「これが民主主義の世界的リーダー国アメリカ大統領の言動？」と思うことがいくつかありました。結果的にはその主張は相手にされませんでしたが。

そこで「アメリカ大統領とは、国家の中でどのような地位と権利を持つのか」「国家をどのように代表する人なのか」と言う疑問が出ました。注①

調べているうちに「大統領になるとき、国民にどのような約束をしたのか」が、評価のポイントになると思いました。そこで、バイデン・トランプ・オバマ三代の大統領の就任初回演説をインターネットで引き出しました。

オバマ大統領の就任演説は、現在のアメリカの繁栄は、独立戦争と独立宣言を行った先人の思想と行動を、その後の人たちが、引続き努力して実行してきた結果であり、自分が大統領になっても、引続き国民がこのような努力をして欲しい、と言う誠に地味で国民と共に歩むと言う基本姿勢がしっかり述べられていると感じました。

そこで、オバマ大統領の二〇〇九年一月の初回就任演説を、「AMERICAN CENTER JAPAN」が「国務省出版物」と表示している就任演説全文（英文）をインターネットで引き出して末尾に添付して、引用しながら論を進めます。

注① アメリカ大統領の地位と権限

アメリカ大統領の地位と権限は、イギリスで言えば国王（ないし女王）と首相を合わせたような権限を持っています。アメリカの大統領は、一面で国王とほぼ同等の国家元首としての役割と権限を持ち、他面、大統領は行政府の長として首相とほぼ同じ権限を持ち、行政府内での政策と人事を決定する。必然的に、大統領には国家元首としての尊厳・威厳・権威、そして華やかさが与えられている。（岩波新書　アメリカ大統領選　八～九頁より引用）

なお、トランプ大統領・バイデン大統領の演説については、他国の大統領のことでもあり、小生の論評は避けます。興味のおありの方は、ご自宅でインターネットで引き出せますのでご覧ください。

オバマ大統領の演説概要

一読して印象的なことは、演説の最初から、アメリカの現在の繁栄は、アメリカ国民が建国の文書とその理想に忠実であったからであると言っていることです。今のアメリカは危機の中にいると述べて、建国以来の数々の危機を乗り越えた苦しかったことを旅に例え、今も旅は続いていると警告を発しています。そして、その後の発言の中に、後述、「演説抜粋」に記載した今までのアメリカを前進させてきた基本の『「正直・勤勉」「勇気・公正」「寛容・好奇心」「忠誠心・愛国心」』を持って困難な仕事に喜んで取り組んでゆくことを国民に訴えています。最終部分の発言で、独立戦争（革命）の結果がまだ不明確な時も、我々の祖先は一致して戦いを続けて危機を乗り越え、自由と言う偉大な贈り物を次の世代に届けることができたと結んでいます。アメリカ国民がアメリカ前進のために果たしてきたこのような事例を挙げて、オバマ大統領として「今のアメリカを国民と共に地味な基本に立ち返って前進させていきたい」という自らの思いを述べていたのではないでしょうか。

オバマ大統領演説抜粋　九項目

以下に述べる九項目は、オバマ大統領演説全文の中から、これはと思われる主張を抜粋して、その要旨と具体的文言を抜き出してみました。後掲の演説全文（英文）の中に、この九項目の英文出典場所を、以下の九項目記載番号で表示しましたので、ご参考にしていただければと思います。

(1)　アメリカ独立以来、国民が先人の理想と建国の文書に忠実だった

これで四十四人の米国人が大統領の就任宣誓を行ったことになります。繁栄の波に乗っている時や、平和な安定している時期に宣誓が行われたときもありましたが、時には暗雲が垂れ込め、嵐が吹きすさぶ中で行われたこともあります。こうしたときも米国が前進し続けてきたのは、指導者たちの技量や洞察力のためだけではなく、「われら人民」が先人の理想と建国の文書に忠実であり続けたからであります。

(2)　今のアメリカは危機の中にいる

① 私たちが危機のさなかにあると言うことは、もう充分理解されています。我が国は戦時下にあります。暴力と憎しみの大規模なネットワークとの戦争です。我が国の経済はひどく弱体化しています。これは一部の人びとの強欲と無責任さの結果です。

② 我が国の医療コストは高すぎます。

(3)　オバマ大統領の「しがらみとの決別」宣言

今日この日、私たちは、この国の政治をあまりにも長い間抑圧してきた、些細な不満や偽りの約束、非難や使い古した教義に終わりを告げるためにここにやってきました。

(4)　建国以来今日までの苦労とアメリカの発展を旅に例えて

① 私たちが来た道程が近道であったことは一度もなく、途中で妥協することもありませんでした。

② 長く険しい道を繁栄と自由に向かって進むことができたのは、危険を冒す者、物事を実行する者、何かを作り出す者たちのお陰であり、このうち何人かは称賛されていますが、多くはこの苦労が世に知られていない人たちです。

③ 彼らは私たちがより良い生活を送ることができるよう再三にわたり奮闘し、自分を犠牲にし、手の皮がすりむけるまで働いてきました。彼らは米国を、個人の野心をすべて合わせても及ばないほど大きな存在であり、生まれや富や党派によるすべての違いを超えるほど偉大なものと考えていました。

④ こうした旅を私たちは今日も続けています。

(5)　政府のあり方

今日、私たちが問うているのは、政府が大きすぎるとか小さすぎるとかではなく、政府が機能するか、つまりそれぞれの家庭が人並みの仕事を見つけ、費用を負担できる医療を受け、品位ある引退生活を送るために、政府が役立つかどうかです。

(6)　国防・外交・・国内外へのアメリカの取るべき姿勢

① 防衛については、安全と理想の間の二者択一を誤りとして拒絶します。建国の父たちは、私たちが想像もできないような危険に直面しながら、法の支配と人権を保障する憲章を起草しました。

② こうした理想は今も世界を照らしており、ですから、巨大な首都から私の父が生まれた小さな町に至るまで、さまざまな場所で今日この式典を見ている他国の国民や政府にこう伝えたいと思います。米国はそれぞれの国の友人であり、平和と尊厳のある未来を求める全ての男性、女性、子供の友人であることを、そして、再びまた指導的役割を果たす用意があることを。

(7)　アメリカの構成と成り立ち

私たちの多様性と言う遺産が弱点ではなく強みであることを、私たちは知っているからです。私たちの国は、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、ヒンズー教徒、そして無宗教の人びとで構成されています。世界各地から集まったあらゆる言語と文化で形作られています。私たちは南北戦争や人種隔離と言う苦い経験もし、その暗い時代から抜け出して、より強く、より団結するようになったためどうしてもこう信じてしまいます。かっての憎しみがいつか消え、民族を隔てる境界線もすぐになくなると。世界が小さくなるにつれ、共通の人間性が現れると。そして、米国が新しい平和の時代を先導する役割を努めなければならないと。

(8)　国民に求めるもの・・今後のアメリカの成功のために

私たちの課題は新しいのかもしれません。それに立ち向かう手段も新しいかもしれません。しかし、私たちの成功の可否を左右する、正直さと勤勉、勇気と公正、寛容と好奇心、忠誠心と愛国心と言った価値観は、古くからあるもので、真実です。これらは米国の歴史を通じて、前進するための静かな原動力となっていました。必要とされているのは、こうした真実に立ち返ることです。今、私たちに求められているのは、新たな責任の時代です。米国人一人一人が、自分自身、国、そして世界に対して義務を負っていると認識することです。そして、全力を

尽くして困難な仕事に取り組むこと程心を満たし、米国人らしさを示すものはないと確信して、この義務をいやいやではなく、喜んで引き受けることです。これが、市民であることの代償であり、約束なのです。これが私たちの自信の源です。神が、定かではない運命に方向性を与えるように、私たちに求めているのです。

(9)　宣誓のフィナーレ・・(状況説明)「オバマ大統領の宣誓の場所はナショナルモール（国会議事堂からリンカーン記念堂までの広場）。宣誓時二百万人の人で埋め尽せられた・・この時オバマ大統領は自分が黒人の子供であることを発言した。

そして後述において、独立戦争時に、「自由」と言う偉大な贈り物を、我々の祖先がいかに苦労して獲得したのか、そして、それを次代に贈り届けたことを、現在の国民に改めて示しているのではなかろうか。」

これが（前(8)の最後を受けて）私たちの自由と信条の意味なのです。これが、あらゆる人種や信仰の男女や子どもたちが、この巨大なモール（広場）に集まって祝うことができる理由、そして、六十年足らず前に地元のレストランで食事することを許されなかったかもしれない父親を持つ男が、今、極めて神聖な宣誓を行うために皆さんの前に立つことができる理由です。

だから、私たちが誰で、どれだけ遠くから旅してきたかを思い起こして、この日を心に刻ましょう。建国の年、最も寒い季節に、愛国者（注　鍋屋　独立戦争参加者を愛国者と呼び、入植者のうち独立戦争参加者は八〇％程度と言われている）の小さな一団は、凍った川の岸辺で消えそうなたき火のそばで身を寄せ合いました。首都は見捨てられ、敵が進軍していました。雪は血に染まっていました。革命の結果が最も危ぶまれたとき、国民の父（ジョージ・ワシントン）はこの言葉を人々に読み聞かせるように命じました。

「未来の世界にこう語られるようにしよう。極寒の中、希望と美徳しか生き残れなかったときに、共通の危機にさらされた都会と地方が、それに立ち向かうために立ち上がった　と」

アメリカよ。共通の危機に直面したこの苦難の冬の時期に、時を超えたこの言葉を忘れないでいましょう。希望と美徳を持って、再びこの氷のように冷たい流れに勇敢に立ち向かい、いかなる嵐が来ようともそれに耐えようではありませんか。そして、私たちの子孫にこういわれるようになりましょう。試練にさらされたとき、私達はこの旅を終わらせることを拒み、後戻りすることもたじろぐこともなく、地平線と神の恩恵をしっかり見つめ、自由という偉大な贈り物を未来の世代に無事に届けたのだと。

アメリカ独立戦争の呼称

日本では「アメリカ合衆国の独立戦争」と呼んでいるが西欧では「アメリカ革命（American Revolution）」と呼んでいる。

アメリカの独立戦争　注(2)

アメリカ独立戦争は一七七五年四月十九日、イギリス軍がマサユーセッツ州レキシントン・コンコードに兵を送って、植民地軍の武器を押収しようしたときに始まった。以後一七八三年パリでの平和条約締結まで続いた。

動機はイギリス人が入植している植民地の安全保障費・印紙税・砂糖税などを植民地側が負担すべきとイギリス側の要求から始まった。その前にも「ボストン茶事件（茶の輸出入を巡って）」など険悪な事態はあったが、イギリスが勝手に決めた税法などを植民地側は「植民地側から一人も議会に招くことなく、イギリス本土で勝手に決めることは承服できない」と主張、これに対しイギリス本土は「植民地の法をつくる絶対的権利はイギリスが保有する」と主張し、お互いに譲ることはなかった。

入植者側十三植民地連合は開戦の翌年の一七七六年七月四日独立を宣言した。

十三植民地名は下記の通り。ジョージア、バージニア、ペンシルベニア、メリーランド、ノースカロライナ、マサチュセッツ、テラウエア、ニューヨーク、ニュージャージー、ニューハンプシャー、ロートアイランド、コネディカット、サウスカロライナ、以上（順不同）

独立宣言の翌年、イギリス側の猛反抗もあり、植民地側は苦戦した。その後、植民地軍が勝利をおさめ、一七八三年九月にアメリカとイギリスの間に講和条約が締結された。

独立宣言　の冒頭部分に

「すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、及び幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」

と謳い、イギリスからの独立からの当然の権利として「人類は、慣れ親しんでいる形態を廃止することによって自らの状況を正すよりも、弊害が耐えられるものである限りは、耐えようとする傾向がある。しかし、権力の乱用と侵害が、常に同じ目標に向けて長期にわたって続き、人民を絶対的な専制の下に置こうとする意向が明らかであるときには、そのような政府を捨て去り、自らの将来の安定のために新たな保障の組織をつくることが、人民の権利であり義務である」と述べ、最後に宣言として

「我々アメリカ連合諸邦の代表は、大陸会議に参集し、我々の意図が公正であることを、世界の最高の審判者に対して訴え、これらの植民地の善良な人民の名において、そしてその権威において、以下のことを厳粛に公表し宣

言する。すなわち、これらの聯合した植民地は自由な独立した国家であり、そうあるべき当然の権利を有する。これらの植民地と英国王に対するあらゆる忠誠の義務から完全に開放され、これらの植民地と英国との政治的な関係はすべて解消され、また解消されるべきである。そして、自由で独立した国家として、戦争を始め、講話を締結し、同盟を結び、通商を確立し、その他独立国家が当然の権利として実施できるすべての行為を実施する完全な権限を有するーと。そして、我々は、この権限を支持するために、神の摂理による保護を強く信じ、我々の生命、財産、および神聖な名誉をかけて相互に誓う」で結んでいます。

注② 独立宣言については、インターネットで「AMERICAN CENTER JAPAN」（国務省出版物）を参考にし一部引用しました。

オバマ大統領演説 英文 全文

次頁から「オバマ大統領の就任演説」（英文）を、「AMERICAN CENTER JAPAN」（国務省出版物）から引用し、英文中の前述九項目の英文出典箇所に同一の番号を記載して表示しました。

President Barack Obama's Inaugural Address
（オバマ大統領就任演説）

2009/1/21

My fellow citizens:

I stand here today humbled by the task before us, grateful for the trust you have bestowed, mindful of the sacrifices borne by our ancestors. I thank President Bush for his service to our nation, as well as the generosity and cooperation he has shown throughout this transition.

(1) 『Forty-four Americans have now taken the presidential oath. The words have been spoken during rising tides of prosperity and the still waters of peace. Yet, every so often the oath is taken amidst gathering clouds and raging storms. At these moments, America has carried on not simply because of the skill or vision of those in high office, but because We the People have remained faithful to the ideals of our forbearers, and true to our founding documents.』

So it has been. So it must be with this generation of Americans.

(2) ① 『That we are in the midst of crisis is now well understood. Our nation is at war, against a far-reaching network of violence and hatred. Our economy is badly weakened, a consequence of greed and irresponsibility on the part of some,』 but also our collective failure to make hard choices and prepare the nation for a new age. Homes have been lost; jobs shed; businesses shuttered. ② 『Our health care is too costly』; our schools fail too many; and each day brings further evidence that the ways we use energy strengthen our adversaries and threaten our planet.

These are the indicators of crisis, subject to data and statistics. Less measurable but no less profound is a sapping of confidence across our land – a nagging fear that America's decline is inevitable, and that the next generation must lower its sights.

Today I say to you that the challenges we face are real. They are serious and they are many. They will not be met easily or in a short span of time. But know this, America – they will be met.

On this day, we gather because we have chosen hope over fear, unity of purpose over conflict and discord.

(3) 『On this day, we come to proclaim an end to the petty grievances and false promises the recriminations and worn out dogmas, that for far too long have strangled our politics.』

We remain a young nation, but in the words of Scripture, the time has come to set aside childish things. The time has come to reaffirm our enduring spirit; to choose our better history; to carry forward that precious gift, that noble idea, passed on from generation to generation: the God-given promise that all are equal, all are free, and all deserve a chance to pursue their full measure of happiness.

In reaffirming the greatness of our nation, we understand that greatness is never a given. It must be earned. **(4)** ① 『Our journey has never been one of short-cuts or settling for less.』 It has not been the path for the faint-hearted – for those who prefer leisure over work, or seek only the pleasures of riches and fame. ② 『Rather, it has been the risk-takers, the doers, the makers of things – some celebrated but more often men and women obscure in their labor, who have carried us up the long, rugged path towards prosperity and freedom.』

For us, they packed up their few worldly possessions and traveled across oceans in search of a new life.

For us, they toiled in sweatshops and settled the West; endured the lash of the whip and plowed the hard earth.

For us, they fought and died, in places like Concord and Gettysburg; Normandy and Khe Sahn.

③ 『Time and again these men and women struggled and sacrificed and worked till their hands were raw so that we might live a better life. They saw America as bigger than the sum of our individual ambitions; greater than all the differences of birth or wealth or faction.』

④ 『This is the journey we continue today.』 We remain the most prosperous, powerful nation on Earth. Our workers are no less productive than when this crisis began. Our minds are no less inventive, our goods and services no less needed than they were last week or last month or last year. Our capacity remains undiminished. But our time of standing pat, of protecting narrow interests and putting off unpleasant decisions – that time has surely passed. Starting today, we must pick ourselves up, dust ourselves off, and begin again the work of remaking America.

For everywhere we look, there is work to be done. The state of our economy calls for action, bold and swift, and we will act – not only to create new jobs, but to lay a new foundation for growth. We will build the roads and bridges, the electric grids and digital lines that feed our commerce and bind us together. We will restore science to its rightful place, and wield technology's wonders to raise health care's quality and lower its cost. We will harness the sun and the winds and the soil to fuel our cars and run our factories. And we will transform our schools and colleges and universities to meet the demands of a new age. All this we can do. And all this we will do.

Now, there are some who question the scale of our ambitions – who suggest that our system cannot tolerate too many big plans. Their memories are short. For they have forgotten what this country has already done; what free men and women can achieve when imagination is joined to common purpose, and necessity to courage.

What the cynics fail to understand is that the ground has shifted beneath them – that the stale political arguments that have consumed us for so long no longer apply. **(5)** 『The question we ask today is not whether our government is too big or too small, but whether it works – whether it helps families find jobs at a decent wage, care they can afford, a retirement that is dignified.』
Where the answer is yes, we intend to move forward. Where the answer is no, programs will end. And those of us who manage the public's dollars will be held to account – to spend wisely, reform bad habits, and do our business in the light of day – because only then can we restore the vital trust between a people and their government.

Nor is the question before us whether the market is a force for good or ill. Its power to generate wealth and expand freedom is unmatched, but this crisis has reminded us that without a watchful eye, the market can spin out of control – and that a nation cannot prosper long when it favors only the prosperous. The success of our economy has always depended not just on the size of our Gross Domestic Product, but on the reach of our prosperity; on our ability to extend opportunity to every willing heart – not out of charity, but because it is the surest route to our common good.

As for our common defense, we reject as false the choice between our safety and our ideals. Our **(6)** ① 『Our Founding Fathers, faced with perils we can scarcely imagine, drafted a charter to

assure the rule of law and the rights of man,』 a charter expanded by the blood of generations. Those ideals still light the world, and we will not give them up for expedience's sake. ② 『And so to all other peoples and governments who are watching today, from the grandest capitals to the small village where my father was born: know that America is a friend of each nation and every man, woman, and child who seeks a future of peace and dignity, and that we are ready to lead once more.』

Recall that earlier generations faced down fascism and communism not just with missiles and tanks, but with sturdy alliances and enduring convictions. They understood that our power alone cannot protect us, nor does it entitle us to do as we please. Instead, they knew that our power grows through its prudent use; our security emanates from the justness of our cause, the force of our example, the tempering qualities of humility and restraint.

We are the keepers of this legacy. Guided by these principles once more, we can meet those new threats that demand even greater effort – even greater cooperation and understanding between nations. We will begin to responsibly leave Iraq to its people, and forge a hard-earned peace in Afghanistan. With old friends and former foes, we will work tirelessly to lessen the nuclear threat, and roll back the specter of a warming planet. We will not apologize for our way of life, nor will we waver in its defense, and for those who seek to advance their aims by inducing terror and slaughtering innocents, we say to you now that our spirit is stronger and cannot be broken; you cannot outlast us, and we will defeat you.

(7) 『For we know that our patchwork heritage is a strength, not a weakness We are a nation of Christians and Muslims, Jews and Hindus, and non-believers. We are shaped by every language and culture, drawn from every end of this Earth; and because we have tasted the bitter swill of civil war and segregation, and emerged from that dark chapter stronger and more united, we cannot help but believe that the old hatreds shall someday pass; that the lines of tribe shall soon dissolve; that as the world grows smaller, our common humanity shall reveal itself; and that America must play its role in ushering in a new era of peace.』

To the Muslim world, we seek a new way forward, based on mutual interest and mutual respect. To those leaders around the globe who seek to sow conflict, or blame their society's ills on the West, know that your people will judge you on what you can build, not what you destroy. To those who cling to power through corruption and deceit and the silencing of dissent, know that you are on the wrong side of history, but that we will extend a hand if you are willing to unclench your fist.

To the people of poor nations, we pledge to work alongside you to make your farms flourish and let clean waters flow, to nourish starved bodies and feed hungry minds. And to those nations like ours that enjoy relative plenty, we say we can no longer afford indifference to suffering outside our borders, nor can we consume the world's resources without regard to effect. For the world has changed, and we must change with it.

As we consider the road that unfolds before us, we remember with humble gratitude those brave Americans who, at this very hour, patrol far-off deserts and distant mountains. They have something to tell us, just as the fallen heroes who lie in Arlington whisper through the ages. We honor them not only because they are the guardians of our liberty, but because they embody the spirit of service: a willingness to find meaning in something greater than themselves. And yet, at this moment – a moment that will define a generation – it is precisely this spirit that must inhabit us all.

For as much as government can do and must do, it is ultimately the faith and determination of

the American people upon which this nation relies. It is the kindness to take in a stranger when the levees break, the selflessness of workers who would rather cut their hours than see a friend lose their job which sees us through our darkest hours. It is the firefighter's courage to storm a stairway filled with smoke, but also a parent's willingness to nurture a child, that finally decides our fate.

(8) 『Our challenges may be new. The instruments with which we meet them may be new. But those values upon which our success depends – honesty and hard work, courage and fair play, tolerance and curiosity, loyalty and patriotism – these things are old. These things are true. They have been the quiet force of progress throughout our history.

What is demanded then is a return to these truths. What is required of us now is a new era of responsibility, a recognition, on the part of every American, that we have duties to ourselves, our nation, and the world, duties that we do not grudgingly accept but rather seize gladly, firm in the knowledge that there is nothing so satisfying to the spirit, so defining of our character, than giving our all to a difficult task.

This is the price and the promise of citizenship.

This is the source of our confidence, the knowledge that God calls on us to shape an uncertain destiny.』

(9) 『This is the meaning of our liberty and our creed, why men and women and children of every race and every faith can join in celebration across this magnificent mall, and why a man whose father less than sixty years ago might not have been served at a local restaurant, can now stand before you to take a most sacred oath.

So let us mark this day with remembrance, of who we are and how far we have traveled. In the year of America's birth, in the coldest of months, a small band of patriots huddled by dying campfires on the shores of an icy river. The capital was abandoned. The enemy was advancing. The snow was stained with blood. At a moment when the outcome of our revolution was most in doubt, the father of our nation ordered these words be read to the people:

"Let it be told to the future world...that in the depth of winter, when nothing but hope and virtue could survive...that the city and the country, alarmed at one common danger, came forth to meet it."

America! In the face of our common dangers, in this winter of our hardship, let us remember these timeless words. With hope and virtue, let us brave once more the icy currents, and endure what storms may come. Let it be said by our children's children that when we were tested we refused to let this journey end, that we did not turn back nor did we falter; and with eyes fixed on the horizon and God's grace upon us, we carried forth that great gift of freedom and delivered it safely to future generations.』

Thank you. God bless you. And God bless the United States of America.

インターネット　出典先　AMERICAN CENTER JAPAN 国務省出版物
英文（正文）は全文引用　仮翻訳の日本語分は前述9項目について　引用または参考にさせていただきました。

君なんぞ高歌・沈吟せざるや（続）

鯨游海

およそ数多く存在する世界の文字の中で、もっとも詩歌に適したのは漢字であろう。表意文字であるからだ。しかも漢字は一字一母韻という稀な特性を持つ。多数の漢字の羅列は整然と揃い、荘重な構成美を成す。定型詩の独擅場である。

漢字文化を遺伝子に刷り込んできた我々日本人。漢文訓読の文語文は、緊張とエネルギーに満ち溢れ詩吟に昇華した。「菊を采る東籬の下　悠然として南山を見る」この美しい一句に陶然としない人は居まい。七五調の快適なリズムを有する文語文の美しさ！

これら名句名吟を「きみ　なんぞ高歌し　将たなんぞ沈吟せざるや」・・・

千里　鶯啼いて　緑紅に映ず
水村　山郭　酒旗の風

千里鶯啼緑映紅　水村山郭酒旗風

江南の地に待望の春が来た。千里四方、見渡す限り草木の中、紅い花が点在し、陽に照り映えまばゆい。随所に鶯の声がする。

眼をこらすと水辺の村や山下の里には、のどかに居酒屋の青旗がはためいている。

揚子江下流地方は気候温暖で、春が来たかと思うと一気に闌となる。杜牧はこの変化を敏感に察し一幅の水彩画を文字で描き、更に鶯の声も盛り込んだのである。

「緑紅に映ず」は物理的には「紅緑に映ず」が正しいのだが、押韻のルール上転倒せざるを得なかった。而も異和感を覚えさせない所が一流の詩人なのであろう。これに続く後半も秀逸だ。「南朝四百八十寺　多少の楼臺烟雨中」

江南春・杜牧（唐）

水を渡り　復た水を渡る
花を看　還た花を看る

渡水復渡水　看花還看花

漢詩の原文で唯ったの10文字。重複を除くと6文字しか用いていないのに、この場の情景や雰囲気が存分に伝わってくる。漢詩の魅力の一つであろうか。表意文字の極意だ。

これに続く後聯も意表をつかれ面白い。

春風　江上の路
覚えず　君が家に到る

いつの間にか気がついたら君の家に来ていた。この少しとぼけた洒脱な味！

江南の水郷地帯は、到る所小川が流れている。長閑な春、ぶら〳〵歩いて友人を訪ねた。恐らくは用事もなく、約束もしていまい。友人は胡という隠者である。詩題が教えてくれている。詩を理解するには題も鍵となる。

尋胡隠君・高啓（明）

春寒くして浴を賜う　華清の池
温泉水滑らかにして　凝脂を洗う

春寒賜浴華清池　温泉水滑洗凝脂

純白の肌が温泉を弾き、ピンク色に染まるというエロティックな描写ではある。当時の庶民はこの表現に驚いたことであろう。

「洗う」は「洗ぐ」或は「洗ぐ」と訓む漢学者も居る。何れにしろ湯が肌を滑り落ちるさま。楊貴妃の妖艶な姿態であることに変りはない。千三百年前のポルノ？

古来、謹厳実直な文人墨客、大学者たちがこのくだりを如何なる盲想で詠んだことであろうかと思うと、可笑しくなる。

しかし物語りはこの後暗転し「宛々たる蛾眉の人　馬前に死す」のであった。

千三百年前の白楽天の筆の斬新さ、当時の思い切った表現の自由さがきわ立つ限りだ。

長恨歌・白居易（唐）

風定まりて　花なお落ち
鳥啼きて　山さらに幽なり

風定花猶落　鳥啼山更幽

江戸時代後期、越後の名家の長男として生まれた良寛は、曹洞宗の始祖道元禅師に私淑し、托鉢僧として一生を送った。実生活は清貧そのものだったが、その精神は限りなく豊かでまた学識も抜群であった。

陶淵明を好み、作った漢詩は千首を越える。

彼の詩は思索的で論理性に勝れ、同時に寒山や王凡志に似て虚無的でもある。近体詩のルールを無視し、先人の名句を遠慮なく採り入れる。つまり既存の観念に拘泥しない。従って迫力に富み、説得性がある。

この詩も于武陵、王籍、王安石ら先人の句から借り、何らてらうことなく名句に仕上げて了った。見事な対句で静寂を表現している。

無題・良寛（江戸）

桃花潭の水は　深さ千尺
及ばず汪倫の　我を送る情に

桃花潭水深千尺　不及汪倫送我情

放浪の旅を続けていた或る時、桃花潭と呼ばれた清流の村に滞在し、村長さんの汪倫と気が合い仲良くなった。しかし何時迄も逗留する訳にもいかず、ついに別れの日が来た。

「友人汪倫さんが示してくれた友情は、その名も桃花潭という美しい清流――それは渕が深いことで知られているが――その千尺もの深さよりも更に深くて篤いのだ」……

つまり渕の深さと汪倫の友情とを較べ、やはり汪倫さんが勝ったと言って感謝した。

通常比較し難いものを引き合いに出して、一方を優位に置くという漢詩の手法を巧みに生かした、留別詩の最高の水準を示した作品ではなかろうか。尚「汪」は深く広い池の意味。

贈汪倫・李白（唐）

別離　方に域を異にし
音信　若為か通ぜん

別離方異域　音信若爲通

唐王朝の高官として活躍中の、外国人阿倍仲麻呂が帰国する際、親友王維が贈った送別詩である。

「今別れて貴殿は、遠い東方の異世界にお帰りになられる。私は今後、如何にして便りを送ればいいのだろうか（もう不可能だ）」

送別詩の白眉である。惜別の情が胸に迫る。

奈良時代から我が国は遣唐使をくり返し派遣して大唐の文化を吸収して来たが、漢詩はその最大の果実である。唐に於てもこの時期李白、杜甫、王維を始めとする錚々たる大文人が輩出したのは好運であった。

これに刺激された我が文人らは、競って漢詩、漢文を習得し上達していったのである。

送秘書晁監還日本・王維（唐）

平生の　一宝剣
留贈す　交わりを結びし人に

平生一寶劍　留贈結交人

遣唐留学生として唐に渡った仲麻呂は、在唐38年、既に唐王朝の高官になっていた。為に勝手に帰国することは許されない。そこで使者として日本国に派遣するという粋な計らいで、出国が許可された。この時明州の港で詠んだのが「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の和歌と、親友王維への別れの漢詩一篇であった。

結局、彼の乗った船は台風に遭遇し終に日本に帰れず、越南に漂着。後陸路長安に帰り、再び唐王朝に仕えて70歳で没した。

卓越した能力、識見を持ち合せた仲麻呂は外国人も登用される風土の中で努力し、当代一級の人士とも交誼を結んだ国際人であった。

銜命使本國・阿倍仲麻呂（奈良）

白髪　三千丈
愁いに縁りて　箇くの如く長し

白髮三千丈　緣愁如箇長

白髪が何としたことだ、三千丈（約九千米）にも伸びてしまった。世の中の苦しみや悲しみは、こんなにも深刻なのだ！

漢詩の誇張は、時に爽快である。よくぞここ迄思い切った表現をしたものだと感嘆する。他の言語にも勿論誇張した表現はあるが、何故か漢詩の場合、異和感、抵抗感はない。

学問をし見識が深まるにつけ悩みや愁いは深まる。文明病だ。では貴方は未開人でありたいか。否であろう。痩せたソクラテスを選ぶ。これが知識人というものだ。

杜甫も李白も深刻に悩んだ。天衣無縫にみえる李白も悩める孤独な智の巨人だったのだ。社会は進む程不条理や不義、無常を増す。

緣愁如箇長・李白（唐）

千里の目を　窮めんと欲し
更に上る　一層の楼

欲窮千里目　更上一層楼

人間の本能の一つに、高所への上昇志向がある。木登りの少年は、より高い所にと手足を伸ばす。長じて高い所に登りたがる。エッフェル塔、スカイツリー、アベノハルカス、富士山……。

この本能とは何だろう。単に眺望が良いからだけではなかろう。根源には人間の持つ向上心、探究心、冒険心、征服欲等々の為せる業か。さて、詩の作風は時代を写す。

この句を読むと何故かウキ〳〵、ドキ〳〵してこないか。わが国が戦後の高度成長を遂げた昭和後半、日本は繁栄の極に在った。中国の唐代も同じだった。漢詩が華発いた盛唐という時代のエネルギーが発散している。

登鸛雀楼・王之渙（唐）

君に勧む更に尽くせ　一杯の酒
西の方陽関を出れば　故人無らん

勧君更盡一杯酒　西出陽關無故人

「さあ、もう一杯飲んでくれ。明日君が旅立つ西方の国境に在る関所の陽関を出たら、もう知っている人は誰も居ない異郷の地だから」

送別詩でこれ程人口に膾炙しているものは他にあるまい。古今の絶唱といわれる所以だ。

故人とは「古い友人」で、和語の意味とは異なる。旅中の安全も現在とは全く異なる。

唐王朝の使命を帯びて友人の外交官が西域に旅立つのを送る王維の友情溢るる名句だ。

前半の二句も色彩鮮やかで王維らしい。

渭城の朝雨　軽塵を浥おし
客舎青青　柳色新たなり

柳は別れのシンボルで送別詩に欠かせないし、酒と宴会も必須の添景である。

送元二使安西・王維（唐）

漢詩

汲深録（二十四）

松井秀人

鎌倉八幡宮奉納居合演武有感（鎌倉八幡宮奉納居合演武に感有り）

令和二年十二月

朔風陣陣似龍鳴　朔風陣々龍鳴に似たり
霜刃寒光心更清　霜刃寒光心更に清し
百遍推敲通百錬　百遍の推敲百錬に通じ
右文左武愈研精　右文左武愈研精

押韻・鳴清精

〔注解〕

朔風＝北風。
陣陣＝とぎれとぎれに続くさま。
霜刃＝霜のように白く鋭い刃。
寒光＝寒々とした光、刀剣・鏡・滝などについていう。
推敲＝詩文の字句を練ること。中唐の詩人賈島が詩作の中で「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」の句で「推」「敲」どちらにしようかと苦心した故事による。
右文左武＝文を右にし、武を左にする。文武両道を兼備する。
研精＝深く研究する。

〔口語訳〕

とぎれとぎれに聞こえてくる北風の音は、龍鳴に似ている。
霜刃の寒光は、心を更に清らかにする。
百遍の推敲は、百錬（の数稽古）につながるものがあり文武両道を、一層深く研究するものである。

新年言志（新年言志）

令和三年一月

悪疫猛威猶未終　悪疫の猛威猶ほ未だ終はらず
年頭黎首待醫功　年頭の黎首医功を待つ
書齋獨坐初陽裏　書斎に独坐初陽の裏
尚友相親啓我蒙　尚友相親しみ我が蒙を啓かん

押韻・終功蒙

〔注解〕

早悪疫＝新型コロナのこと。
黎首＝多くの民衆。庶民。
医功＝医学の功績。
尚友＝昔の賢人を友とすること。古典を学ぶこと。
啓蒙＝愚かな者や不明な社会を導き、はっきりわからせる。

〔口語訳〕

悪疫の猛威は猶おまだ終息に至っておらず、年の初めには人々はワクチンや治療薬などの開発を期待している。
書斎で独り古典に親しみ、自分の愚かさに向き合いたい。

禁城春雪

春早同雲覆禁城
青皇錯否六花清
東風乍促梅枝動
天霽上林紅白爭

〔注　解〕
同雲＝雪雲。
禁城＝宮城。
青皇＝春をつかさどる神。
六花＝雪の別名。
上林＝天子の庭園の名。

〔口語訳〕
床春の夜明けに、雪雲が宮城を覆っていて
春の神様がくい違えたのかどうか、雪は降って清らかである。
春の風が、突然に梅の花が咲くのを促し
空も晴れて天子の庭園では、梅と雪とが紅白の色を競っている。

春雪庭梅

朔風吹度峭寒奇
小雪閑庭花發遅
恰好陽光動春意
枝頭負白點冰姿

〔注　解〕
峭寒奇＝寒さが非常に厳しい。

（禁城春雪）
令和三年一月

春早の同雲 禁城を覆ふ
青皇 錯（たが）ふや否や 六花の清
東風 乍ち梅枝の動くを促し
天霽れ 上林 紅白争ふ
押韻・城 清 争

〔口語訳〕
北風が吹き渡り寒さが厳しく
小雪が降る静かな庭では、梅の花の開花が遅れている。
ちょうど良いことに、陽光が春意を動かし
枝の先の雪に、咲きだした梅の花が点を印しているようだ。

（春雪庭梅）
令和三年二月

朔風吹き度り 峭寒奇なり
小雪の閑庭 花発くこと遅し
恰も好し 陽光 春意を動かし
枝頭白を負い 冰姿を点ず
押韻・奇 遅 姿

恰好＝ちょうどよい。
冰姿＝氷のように清らかな姿。梅の花の形容。

斜日花堤

暮天江畔夕陽流
忘老櫻堤戴酒遊
吹起東風紅白亂
醉歸花徑帶春愁

〔注　解〕
暮天＝夕ぐれの空。
江畔＝岸辺。岸のほとり。
櫻堤＝櫻の木が並ぶ堤。
戴酒＝酒をもってゆく。
醉歸＝酔って帰る。
花徑＝花の咲いている小道。
春愁＝春の日の何となく気がふさがり悩ましく感ずること。

〔口語訳〕
夕ぐれの岸辺には夕陽が流れ、その中で年のことも忘れて
酒をもって桜咲く堤に出かけ、桜見の遊びに興じた。
春の風が吹いてくると、紅白の桜の花が風で乱れ
その道を酔って帰ると、春の愁いを感ずる。

（斜日花堤）
令和三年三月

暮天の江畔 夕陽流れ
老いを忘れて桜堤 酒を戴せて遊ぶ
吹き起こる東風 紅白乱れ
酔帰の花径 春愁を帯びる
押韻・流 遊 愁

短歌

大隅半島・佐多岬

山本一成

江戸川のほとり

風わたる江戸川の岸べ青柳は光を浴びて水面（みなも）に垂るる
岸の辺の葦の葉そよぐ江戸川のカヌーのパドルは転（まろ）びゆくごと
江戸川の流れのとまる昼下り羊雲のかげ川面をわたる
夕暮れの迫る河川敷五回までのスコアボードがさびしげに見ゆ
江戸川のほとりに夕の風立ちて下校を告げる放送ながる

春が訪れ

水鳥の憩ふ岸辺の昼下り窓に見ゆるもあと幾日か

水底に丸太のような鯉のゐて尾鰭をふりぬ水ぬるむらし

寒空に動きの鈍きトラクター耕す土に椋鳥群れる

庭先の落葉かかれるひとところ小指がほどの福寿草出づ

公園の白木蓮（はくれん）咲けり夏の夜の尺玉のごと辺りを照らす

大隅半島・佐多岬

太平洋東シナ海見霽かす女神の如き佐多の灯台

黒潮を二つに分かつ佐多岬日は中空に心晴れたり

蘇鉄生ふる岬にたてば海と空の静寂（しじま）の中にわれ吸はれゆく

初夏（はつなつ）の岬に立ちて目陰するわが視野の中に船影おぼろ

白波が岩にくだけてその後のしばしのしじま潮騒にあり

戊辰東北戦争④
最後の旗本榎本武揚

千坂精一

一、

帰路は穏やかな日和つづきで、往路の時化に見舞われた悪天候の難行苦行とおなじ航路を辿っているのかと疑いたくなるような来る日も来る日も好天に恵まれて凪ぎがつづいていた。

それは幕府がオランダに発注した蒸気軍艦開陽丸の竣工を待って四年半に亙る留学を打ち切り、進水式をおえたばかりの同艦に乗船して帰国の途についた彼ら青年たちを天が祝福してくれているようであった。

幕府がオランダに新鋭艦を発注すると同時に留学を命ぜられた若侍は七人で、そのうちの最年長者がこのとき二十七歳の榎本釜次郎武揚であった。

榎本は天保七年（一八三六）江戸下谷御徒町柳川横町に住む幕府旗本西丸御徒目付、勘定役榎本圓兵衛武規の二男に生まれた。

弘化四年（一八四七）十二歳で幕府の儒学を主とした昌平坂学問所に学ぶ。

安政元年（一八五四）十九歳のとき箱館奉行堀利熙の従者として蝦夷（北海道）の箱館に赴き、蝦夷地や樺太（サハリン）巡視に随行した。

一年後に昌平坂学問所に再入学するが、翌年七月こんどは長崎の海軍伝習所に転校して航海学、蒸気機関学を習得した。

そして文久二年（一八六二）三月、幕府がオランダに蒸気軍艦（開陽丸）を発注するに際して、陸海軍の兵制を研究するため旗本の子弟たちを留学させることに決定して、榎本も選ばれた。

このとき留学生に選抜されたのは、榎本のほかに内田正雄、澤太郎左衛門、赤松則良、田口俊兵、津田眞道、西周の六人であった。

榎本はあらためて船舶運用術、砲術、蒸気機関学、化学、国際法を、澤は鉄砲、火薬製造などの造兵技術、赤松は造船学をそれぞれ学ぶように命ぜられた。

留学生たちは、六月十八日にオランダ製の咸臨丸に乗船して品川沖から出航したが、榎本、内田、澤、赤松の四人が麻疹に感染したため下田で下船して療養し、あらためて長崎に向かい八月二十三日に到着した。

長崎に半月余り滞在して、九月十一日にようやくオランダ船カリップス号に乗船してバタビアに向かったが途中ジャワ島北方沖で暴風雨に遭遇して船が座礁してしまい、無人島に漂着したが運よく救出されてバタビアへ行き客船テルナーデ号に乗り換えてセントヘレナ島でナポレオンの寓居などを訪ねたあと、文久三年（一八六三）四月十八日にようやく無事オランダのロッテルダムに到着した。

十箇月に亙る難行苦行の長旅を経て六人の留学生たちはようやく目的地に辿り着いたのだった。

榎本はハーグに下宿して、下命どおり船舶運用術、砲術、蒸気機関学、化学、それに国際法などを熱心に学んだ。

勉学の合間に榎本は赤松とともに観戦武官としてオーストリア軍の戦線を見学してまわったり、フランスが幕府に軍艦の建造、購入を提案してきていることを受けて内田とパリへ行きフランス海軍と交渉したり、また赤松とイギリスへ行って造船所や機械工場、それに鉱山などを視察したりして見聞を広めた。

ほかにもオランダ語をはじめ英、米、仏、独語を熱心に学んで習得し、殊に『海律全書』を習熟して国際法を修得した。

そして慶應二年（一八六六）三十一歳になった榎本は、幕府がオランダに発注した開陽丸の竣工を待って留学を終了し、六人の留学生仲間とともに新艦開陽丸に乗船して帰国することになった。

開陽丸がいかに最新鋭の軍艦とはいえ、処女航海の長旅であるから途中なにが起こるかわからないので、七人は緊張して乗船した。

造船関係者をはじめ七人が世話になった人など大勢の人たちに見送られて開陽丸は無事に出航し、帰途に着いた。

全長約七三メートル、全幅約一五メートル、三本マストに張られた帆の面積約二、一〇〇平方メートル、四〇〇馬力蒸気機関の補助エンジン付で速力一〇ノット（一時間に一八、五二〇メートル）、スクリューはプロペラで推進し、乗員五〇〇人という巨大軍艦なので長い航海中にどんな故障が起きるかわからず、七人は緊張の連続であった。

開陽丸はすべるようにしてイギリス海峡を抜けると、アフリカの西海岸へ出て南下して行き、南端をまわって

インド洋に入り、東進してオーストラリアの西海岸を北上してインドネシア共和国諸島のあいだを通り抜けて太平洋へ出ると、一路北上していった。

「そろそろわが国が遙か彼方に見えはじめるころじゃないだろうか」

誰かがそう言い出すと、七人は一瞬緊張したが、次の瞬間われさきに船室を飛び出して階段を駆け上り甲板へ出た。

なかに冷静な者がいて望遠鏡を持ってきていたので、それを代わる代わるまわして前方を凝視しつづけた。

吹き抜けてゆく潮風が心地よく頬を撫でていった。

やがて遙か前方にどこまでも黒く横たわる陸地のようなものが見えてきて、その中程にひときわ形のいい突起物が望見された。

思わず「富士山だ」と漏らし、あらためて

「おい、みんな、富士山が見えるぞ」

そう叫んだ途端にみんなが一斉に望遠鏡に群がってきて奪い合いになった。

やがて開陽丸は、日本の海域に入ると、房総半島館山沖から浦賀水道を抜けて、慶應三年（一八六七）三月二十六日無事横浜港に到着した。

二、

これから留学で習得した学問と技術を大いに活用して幕府へ恩返しに励もうと希望にもえて帰国した七人であったが、国情はすっかり様変わりしてしまっていて二六〇年つづいた太平の世は終わり、彼らが活躍を意気込んでいた幕府という舞台は根底から崩れかかってしまっていた。

帰国した榎本は長崎の海軍伝習所時代頭取だった先輩の軍艦奉行勝海舟に引立てられて海軍総裁稲葉正己の下につく副総裁に任じられた。

榎本は東洋一といわれた幕府海軍を率いる位置に立ったのである。

だが、世情はきびしかった。

勅諚により幕府の第二次長州征伐がはじまり、将軍家茂が征長先鋒総督となって彦根以下三十一諸侯に出兵を命じ、みずから大坂城まですすんだところで病に倒れ死去してしまったので、後見役の徳川慶喜は征長を断念した。

そして、その年（慶應二年）十二月五日に慶喜が将軍宣下したが、その二十日後に孝明帝が三十六歳で崩御してしまい、翌慶應三年正月九日に皇太子睦仁親王が践祚した。

これにより朝廷内部は有栖川宮熾仁親王や公卿正親町實徳ら王政復古派の勢力が強くなっていった。

いっぽう大名側でも薩摩、長州、土佐の倒幕同盟が結成され、土佐の山内容堂から将軍慶喜に『大政奉還建白書』が提出された。

そして十月十四日、将軍慶喜が政権奉還の意志を呈上したその日、朝廷の倒幕派公卿たちは薩摩と長州に『倒幕の密勅』を下した。

翌日、朝廷は慶喜の『大政奉還』を承認したのだが、一部の公卿を唆して倒幕令を受けていた薩摩と長州は官軍となって倒幕する方向に走った。

二十四日、慶喜はさらに『将軍職辞表』を提出した。

十一月に入ると、朝廷、幕府側ともに同志討ちのような事件が起こった。

十五日、土佐の坂本龍馬と中岡慎太郎が京河原町の寓居近江屋で暗殺されると、十八日にこんどは新撰組が脱退して御陵衛士となった伊東甲子太郎を七條油小路で暗殺し、死体を引取りにきた高台寺党と決闘している。

十二月九日、『王政復古』の大号令が発布されると、小御所会議で慶喜の『辞官納地』を決めた。

二十五日には、幕臣たちが江戸の薩摩邸、佐土原邸を焼打ちにした。

まえにも触れたが、この焼打ちにいたった因は薩摩側にあった。

徳川方を武力闘争に立ち上がらせようと謀った西郷隆盛は、江戸市中を攪乱させることを益満休之助に命じた。

益満は相楽總三を唆して江戸へ下り、芝三田の薩摩屋敷を根城にして浪人や無頼の徒を集めて徒党を組ませ、富豪商人宅に押し入って金品を奪わせたり、市中で暴行、掠奪、放火などを繰り返させて幕府を挑発した。

幕府の勘定奉行小栗上野介忠順は一斉検挙に躍起になり、十二月二十五日の夜明けに庄内兵を主力にした二千の軍勢で薩摩屋敷を包囲すると砲撃を加えて焼き払い、挑発に乗ってしまったのである。

このことで悲憤慷慨した會津、桑名の兵たちは慶喜に挙兵を迫った。

こうして京坂地区は風雲急を告げていった。

明けて慶應四年（一八六八）正月二日、幕府軍は大坂を発して京へ向かった。

このとき、榎本率いる艦隊は兵庫沖で薩摩の船団に砲撃を加えている。

そして三日、大坂から鳥羽、伏見の両街道を進撃してきた幕府軍を迎え撃った薩摩軍が大いに戦果を挙げた。

敗走する幕府軍を追って薩長軍が淀城に迫ってきたので、身の危険を感じた慶喜は松平容保、松平定敬、板倉勝静らと大坂城を脱出して天保山沖に停泊していた榎本艦隊のうちの一艦に乗船すると江戸城に帰ってしまった。

置いてきぼりを食った榎本は、大坂城から二分金一八万両と重要書類を持ち出すと、残っている艦船を引き連れて江戸へ還った。

翌日、朝廷側は『慶喜征討の大号令』を発布した。

江戸城中で最後になる和戦評定が開かれ小栗忠順はあ

くまでも『主戦論』を唱えたが、勝海舟の『和平論』に敗れ、慶喜も受け入れず『恭順』に決まった。

ところが『天皇親征』の詔勅が出て、總裁有栖川宮熾仁親王が東征大總督となった。

十二日、慶喜は江戸城を出て上野寛永寺大慈院に蟄居して退隠を表明した。

このことにより天野八郎、澁澤成一郎らが浅草本願寺に参集して、慶喜警護の〈彰義隊〉を組織すると、新撰組残党も近藤勇が若年寄格大久保剛、土方歳三が寄合格内藤隼人となって甲陽鎮撫隊を結成し勇躍甲州に出陣したが、勝沼で板垣退助麾下の土佐迅衝隊を主力とする東山道鎮撫軍と戦い敗れてしまった。

三月八日、大總督府は東海、東山、北陸三道の先鋒總督に発令して江戸進撃を十五日に定めたが、直前の十四日に高輪の薩摩邸で行われた西郷と勝の第二次会見で江戸開城の了解が成立したので江戸市中戦は回避された。

残るは奥羽と越後諸国の平定であった。

十九日、奥羽鎮撫軍九條道孝率いる軍勢が陸前東名濱（宮城県東松島市）に上陸し、北陸道先鋒總督高倉永祐が越後高田（上越市高田新田）を出発した。

二十三日に九條總督は仙臺に本営を定めると領主伊達慶邦に會津征討の先鋒を、米澤はじめ奥羽諸侯に応援を命じた。

四月三日、甲州勝沼から逃れて下總流山（千葉県流山市）に集結した甲陽鎮撫隊は本陣を東山道鎮撫軍に攻囲され、近藤勇は捕縛されたが土方歳三は辛うじて切り抜けて江戸方面へ逃れた。

その二日後、幕末の動乱期に勘定奉行、町奉行、外国奉行、軍艦奉行、海軍奉行、陸軍奉行、歩兵奉行などの要職を歴任した主戦派の筆頭小栗忠順が慶喜の恭順に反対して辞職し、自領の上野国倉淵村（高崎市倉渕町権田）に隠棲していたところを近藤勇を捕縛した東山道鎮撫軍に捕らえられ、軍監豊永貫一郎と原保太郎の手によって近くを流れる烏川畔で梟首された。

四月十一日、朝廷軍が江戸城を接収、慶喜は江戸を去って実家の水戸へ退去した。

江戸城の武装解除、兵器引渡しは終了したが、江戸湾に集結している軍艦は天候不良のため翌日に延期された。

引渡しに未練を抱く榎本はその隙を衝いて観光、蟠龍、咸臨、富士山、開陽、朝陽、回天の七隻を率いて安房館山沖へ脱走してしまった。

このとき歩兵奉行大島圭介も土方らの甲陽鎮撫隊の残党が加わった一団を率いて下總市川へ走り、撒兵隊頭（洋式歩兵）の福田八郎右衛門も部下を率いて上總木更津へ走った。

若年寄大久保一翁は西郷に徳川家一門の助命を嘆願したとき、交換条件として艦隊をそっくり間違いなく引き渡すよう念を押されていた。

薩長の貧弱な海軍力しか持たない總督府は東洋一をほこる榎本の海軍力が垂涎の的だったのである。

一翁は榎本の直接上司である海軍總裁矢田堀鴻に帰港を命じさせようとしたのだが、混乱の最中でみつからなかったので、親しくしている海軍奉行の勝海舟に解決を依頼した。

勝は承諾すると、安房沖へ出向いて榎本と会い、説得した。

海軍伝習所の先輩として尊敬し、勝の推挙で副總裁になれた恩ある人の説得を承知しないわけにはいかず承諾すると、閏四月十七日にひと月ぶりで全艦を品川沖に返した。

その後榎本は、勝に幕府が倒れて生活困窮している旗本たちのために蝦夷で新天地の開拓を図ろうと思っていることを相談した。

話をきいた勝は、

「早まるな」

と抑えたが、榎本は、

「幕臣の意地でござる」

と突っ張って勝の説得に応じなかった。

榎本は勝の監視の隙を狙って八月十九日九ツ刻（午前零時）夜陰に乗じて八隻全艦を率い品川沖を脱走、東北に向かった。艦隊は荒井郁之助を司令官として開陽には榎本と一緒にオランダへ留学した澤太郎左衛門、回天には甲斐源吾、蟠龍には松岡磐吉、千代田形には森本弘策など長崎伝習所出身の俊英たちが艦長をつとめた。

だが、出航して間もなく台風に見舞われて美賀保が座礁し、銚子の黒生浦に漂着したところを捕獲されてしまった。

咸臨丸も駿河湾清水港に避難ところを新政府の軍艦に拿捕され、蟠龍も船団から逸れてしまったので辛うじて仙臺領の松島湾に寄港したのは五隻であった。

上陸した榎本は、青葉城中で同行してきた前老中板倉勝静、松平太郎、永井尚志、土方歳三、人見勝太郎らを幕府側として奥羽諸国の軍事会議を開いたが、目下會津は苦戦中であり、仙臺領主伊達慶邦はすでに帰順を決めていたので榎本の説く統合作戦計画には乗ってこなかった。榎本はやむなく再挙を図るべく蝦夷地へ向かうことにした。

このとき仙臺にいた所司代だった桑名の松平定敬、前老中の備中松山領主板倉勝静、同肥前唐津領主小笠原長國の養子長行、陸軍奉行だった竹中重固らが参加、會津戦線にいた歩兵奉行大鳥圭介の傳習隊、新撰組生き残り土方歳三の率いる隊、人見勝太郎の遊撃隊、歩兵指図役頭古屋作左衛門の衝鋒隊、仙臺星恂太郎の額兵隊その他が続々集結してきたので各艦に分乗させた。

蟠龍は船団に送れて到着したが、そのまま庄内救援に羽前酒田へ向かわせたので、代わりに仙臺へ貸与して

あった大江と鳳凰を返してもらい、二千数百名に膨らんだ将兵を七隻に分乗させ、あらためて艦隊を組み直して松島湾を出航すると途中南部領の陸中宮古湾に寄港して燃料の薪と餅などの食料を積み込んでからいっきに蝦夷地の内浦湾鷲ノ木を目指して北上して行った。

三、

十月二十日、蝦夷に到着した榎本軍は、すでに雪の降り積もっている鷲ノ木に上陸した。

榎本は直ちに朝廷に提出する『蝦夷地借用嘆願書』を人見勝太郎、本多幸七郎の遊撃隊に預けて箱館府知事清水谷公孝に届けさせた。

清水谷知事は榎本軍上陸の報に接して作戦会議を開き、二十二日早暁軍監宮地正太郎に指揮をとらせ、府兵と松前、弘前の兵を藤城方面へ派遣させた。

主力を大野口におき、一部は森と五稜郭のあいだの要衝峠下村方面に前進させ、備後福山、越前大野の隊は主として箱館港の警備にあたるという万全の防衛態勢をとらせた。

これに対して榎本軍五百人の右縦隊は先遣隊長大鳥圭介に率いられて大野口から南進し、つづいて仙臺の額兵隊、春日左衛門の陸軍隊など五百人の左縦隊は土方歳三に率いられて川汲峠を越えて右縦隊と同様に箱館へ進軍した。榎本自身の率いる本隊は一日遅れて進撃した。

府知事への使者に立った遊撃隊の人見勝太郎と本多幸七郎が峠下村に到着した二十二日の夜半に砲撃を受けたが、仏暁小高い丘に陣取っている敵兵に奇襲をかけて追い払った。

その日の夕刻大鳥圭介の先遣部隊が到着して、翌日七重村と大野村の二方面にわかれて攻撃をかけ、吹き荒ぶ悪天候のなか寒風を衝いて雪中での激闘が演じられた。

大野村に進んだ部隊は、大鳥圭介の陣頭指揮のもと銃撃戦のあと白刃を振るって敵中へ斬り込み、退散させた。

上方歳三の左縦隊は二十四日夕刻川汲温泉付近で遭遇したが、大した抵抗もなく突破した。

おなじ日の夜半清水谷府知事は府兵に護衛されて五稜郭を脱出すると箱館市内に移り、翌日秋田佐竹の軍艦陽春を借りて青森へ逃れていった。

こうして榎本軍は蝦夷へ上陸後数日を経ずして制圧し、五稜郭に無血入城した。

榎本は直ちに弁天砲台と運上所に日章旗を掲揚させた。

これで蝦夷福山（松前郡松前町）領主松前修廣は孤立無援になった。

居城の福山城は海岸近くにあって艦船の砲撃を受け易く危険だったことから急遽江差の北方二十キロに奥まった舘村（檜山郡厚沢部町館）に新城が築かれていたので、松前修廣は正議隊に護衛されて十月二十八日にこの新城へ移り防戦の準備を固めた。

榎本はその福山城を攻撃した。

攻撃隊の総帥に百戦錬磨の新撰組副長だった土方歳三を選んだ。土方は渋澤成一郎ら彰義隊残党、星恂太郎の額兵隊、春日左衛門の陸軍隊など七百名を選抜して、二十七日に箱館から海沿いの道をとって進軍を開始した。

松前方のほうも土方軍の先鋒隊と知内峠一の渡し一軒家から萩智利集落へかけて雪中露営をした十一月一日の夜、福島村から小舟に分乗した松前兵五十人の一隊が夜襲をかけた。不意を衝かれて土方軍は混乱したが立ち直って撃退した。

翌二日には逆に知内峠を越えた星恂太郎の額兵隊が福島村へ向かう途次に三百名の松前兵を発見したので後方へまわり込み不意に陣営を襲って敗走させた。

土方軍は四日夜半に福山城まで一里（四キロ）の荒谷村へ到着して五日払暁に攻撃を開始した。

松前方は蠣崎民部や三上起順ら百数十名が守備に就いていた。

澁澤成一郎ら彰義隊の残党が正面から、仙臺の額兵隊と春日左衛門の陸軍隊は搦手門から突入して攻め立てた。

このとき城の表口にいた田村量吉という古老がよく踏み堪えて抵抗したが、所詮敵わず無数の痛手を負ってついにみずからの手で腹を掻き切って斃れた。この孤軍奮闘した田村量吉は七十二歳であったという。

結局蠣崎民部らは支え切れずに城を捨て、残兵たちは館や江差へ退いた。

土方軍はこれを追って十五日に江差を攻略した。

この日未明、榎本らがオランダから遠洋航海してきた新鋭艦開陽丸があろうことかこの江差沖で暴風に遭遇して座礁してしまった。

館城の松前修廣は少数の兵たちと十七日に熊石へ逃走し、さらに十九日に海路津軽の平舘（青森県東津軽郡外ヶ浜町）へ去っていった。

残された松前兵たちは降服し、領主松前徳廣は二十九日に弘前の薬王院で病歿した。

慶應四年九月八日に『明治』と改元された十二月十四日、英仏公使が榎本らの蝦夷地開拓の嘆願書を岩倉具視に提出した。

そして二十五日に榎本らは箱館で蝦夷地平定の祝宴を張った。

その席で、いかにしてこの地の資源を開発して産業を興し、新しい国家を築き上げていくかが課題になった。

それには運営する政治機構が必要になるので、アメリカ合衆国の選挙制度に倣って役職を決める投票が行われた。

その結果、百五十票の最高点を獲得した榎本が總裁、百十六票の松平太郎が副總裁、同じく百十六票の永井尚志が箱館奉行、八十六票の大鳥圭介が陸軍奉行、八十二票の松岡四郎次郎が江差奉行、七十三票の土方歳三が陸

軍奉行並、五十六票の春日左衛門が歩兵頭並に選出された。

その他荒井郁之助が海軍奉行、人見勝太郎が松前奉行、中村三郎助が箱館奉行並、澤太郎左衛門が開拓奉行、竹中重固が陸海軍裁判役頭取、甲賀源吾と松岡磐吉は海軍頭、古屋作左衛門と本多幸七郎は歩兵頭、伊庭八郎、星恂太郎、澁澤成一郎、今井信郎らは歩兵頭並にそれぞれ任命された。

戊辰戦争は榎本らの蝦夷地攻略を最後にして終結したかにみえた。

ところがそうはいかず、明けて明治二年（一八六九）己巳の年を迎えて新政府の蝦夷攻めが開始された。

四、

新政府は二月二十五日清水谷公考を青森總督に任じ、黒田了介（清隆）を陸軍、山田市之丞を海軍の参謀につけると、三月九日薩、長、柳河の兵千名を預け、甲鉄、飛龍、陽春、春日、丁卯、豊安、晨風、戊辰八隻の艦隊で品川沖を出航させた。

青森には昨年十一月頃から長州、徳山、津、岡山、久留米らの兵が順次集合していてその数六千数百名に達していた。

「政府軍が北上してくる」

の情報を得た榎本軍は、海軍奉行荒井郁之助の指揮下にある回天、蟠龍の二隻に昨年箱館港で拿捕した久保田の軍艦高雄（第二回天と改めていた）を加えた三隻をもって三月二十五日の払暁南部領宮古湾まできている新政府の艦隊を襲撃しようとはかったが、途中台風並の強風に煽られて機関の劣る第二回天と蟠龍が遅れ、甲賀源吉艦長の回天のみが宮古湾へ殴り込みをかけて甲鉄の奪還を図った。

というのは、甲鉄は幕府がアメリカへ発注して購入した艦なのだが、竣工して江戸湾へ回送されてきたときにはすでに大政奉還後で幕府はなく、新政府に引き渡されてしまっていたのである。

だから榎本軍にしてみれば奪われてしまった甲鉄を奪い返そうとしたのだった。

回天を甲鉄に接舷させると、土方歳三の下知のもと新撰組の野村利三郎、彰義隊の笹間金八郎、加藤作太郎らが甲鉄へ斬り込んだが甲鉄側はガットリング砲を撃ちまくり、他の七隻からも集中砲火を浴びせてきて甲賀艦長以下十六名が戦死したので土方らはやむなく逃走に転じて、甲鉄奪取は適わなかった。

その後、政府軍は四月九日江差の北に隣接する乙部（爾志郡乙部町）に上陸すると、一軍は海岸沿いに松前へ、他の一軍は二股の山道を通って箱館へ進撃した。

榎本軍も大鳥圭介隊が五稜郭から出撃して福山口へ向かえば、土方歳三の隊は二股口へ馳せ向かった。

政府軍は江差を攻略すると十七日に海陸両軍が呼応して福山城を攻撃し、さらに参謀黒田了介率いる薩摩、長州、水戸、岡山、備後、福山、弘前、徳山、松前の諸兵が江差に到着すると一挙に福山城を奪回した。

榎本軍は頑強に抵抗したのだが、死傷者が続出してついに敗走したのである。

政府軍はつぎに上磯郡の知内、木古内を奪取して矢不来（北斗市）に迫った。

四月二十九日、五百の兵を率いた大鳥圭介が矢不来で防戦したが海陸から銃撃を受けて堪らず有川へ退き、七重村へ追い落とされた。歩兵頭並天野新太郎など将士たちの犠牲が大きかった。

この日、奇襲攻撃で新政府軍を悩ませた二股口の軍も退路を絶たれることを怖れて五稜郭へ撤退した。

いっぽう海軍のほうは箱館湾で交戦した。

四月二十四日、港内へ進入してきた甲鉄以下五隻の新政府艦隊を回天、蟠龍、千代田形が応戦したが、弁天砲台が砲火を浴びた。

五月四日、千代田形は座礁、回天は機関部を損傷した。

昨年十一月十五日に開陽を江差沖で失い、救援に赴いた神速をも座礁させてしまい、宮古湾で第二回天を捕獲されてしまった榎本艦隊は、昔日の新政府艦隊を凌ぐ威力を削がれてしまっていた。

五月になると榎本軍の戦況はますます不利になっていった。

十一日、清水谷總督は本営を江差から湯ノ台へ進めてきて陸海双方から総攻撃をかけてきた。

別働隊を山背泊及び寒川、大森浜から箱館の背後へまわしておいて、本隊は赤川、七重、桔梗野、亀田を攻略したあと双方から箱館市内へ突入してきた。

海軍のほうは甲鉄、春日が主として弁天砲台を、陽春が大森浜方面を攻撃、港内に侵入してきた朝陽、丁卯二艦は回天、蟠龍に交戦してきた。

この日は東からの強風が吹き荒び湾内は荒れていた。

回天は機関部に故障をおこしたので浅瀬に乗り上げて停止すると左舷に大砲を据えて撃ちまくった。

回天はまさに海に浮かぶ砲台であった。

蟠龍は港内を動きまわって撃ちまくり、一弾を朝陽の右舷に命中させた。火薬庫に引火した朝陽は轟音とともに爆発して多数の戦死者を出した。

しかし、結果的には回天も蟠龍も新政府艦隊の砲撃に屈してしまい、榎本艦隊はついに壊滅状態に陥ってしまった。

いっぽう陸軍のほうはといえば、このとき大鳥圭介、本多幸七郎らは七重浜から進攻してくる敵に備えて海岸方面へ出動していたし、土方歳三は京以来の新撰組同志相馬主計、島田魁らや仙臺の額兵隊、旧幕府伝習士官隊ら猛者たち五十名の手兵を率いて箱館奪回をはかった。

上方は黒羅紗の詰襟服に白の兵児帯、それに陣羽織を着込んだ出立で馬を駆り、箱館口指して急行した。

箱館と亀田村（函館市亀田町）の境にある一本木の関門で歩哨を立てていた新政府軍の小隊と出会い戦端が開かれたが、その最中に土方は銃弾を受けて落馬した。

同志の相馬と島田が急ぎ駆け寄って抱き上げたが、銃創は腹部を貫通していた。

二人に抱き抱えられた土方は、彼我の銃声をききながら目を閉じた。三十五歳の波乱に富んだ生涯であった。

翌十二日、榎本のところへ新政府軍の参謀黒田了介から箱館病院の医師高松凌雲を仲介に立てて降伏勧告の使者を送ってきた。

榎本は勧告に応ぜず、オランダへ留学しているときにたまたま入手したフランス人ウールトラン著の『海上公法』を黒田に贈った。

榎本は二度と手に入らない国際法に関する貴重本を戦火で焼いてしまっては日本国の損失になることを憂えて黒田に贈ったのだったが、そのことで黒田は榎本の必死の覚悟を知り、返礼の清酒五樽を贈った。

そして新政府軍は総攻撃に入り、弁天台場、千代ケ岱、五稜郭などに砲弾の雨を降らせてきた。

そのうちの一弾が郭内で酒を飲んでいた衝鋒隊の古屋作左衛門ら十数名の車座に命中して死傷者が出た。

十五日に弁天台場が陥落して、永井尚志、松岡磐吉、相馬主計ら二百数十名の守兵が降伏すると、翌日には千代ケ岱台場も陥ちて守将中島三郎助は二人の息子恒太郎、英次郎とともに最期を遂げた。

中島三郎助は浦賀奉行組与力を勤めたあと長崎伝習所の一期生になった開明主義者で恭順論者であったが、大鳥圭介や松平太郎に砲台を放棄して五稜郭へ退転するようすすめられても日を潤ませながら辞退して親子ともども倒れてしまっている旧幕府に殉じた節義の人であった。

抵抗虚しく敗れ去った榎本軍は、五月十八日總裁榎本武揚、副總裁松平太郎、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大鳥圭介の幹部四人が五稜郭を開場して新政府の軍門に降った。従う将士は千余人だったという。

このとき室蘭にいた留学生仲間で唯一人榎本と行動をともにした開拓奉行澤太郎左衛門も三百余人とともに投降した。

松平定敬らの諸侯はこれより以前に箱館を脱出して上京し新政府に謝罪したので、死一等を減じられて禁錮刑となり、松平定敬の桑名は六万石に、板倉勝静の備中松山は二万石に、竹中重固は三百石に減封、小笠原長行の唐津は父長国が早期に帰順したので咎めがなかった。

五月二十二日、自刃を図って制止された榎本は松平、荒井、大鳥、永井、松岡、相馬らの幹部六名とともに東京へ護送された。

そして八月十五日、蝦夷の地は『北海道』と改称された。

榎本艦隊が品川沖を脱してから九箇月、戊辰から己巳とつづいた幕末の内乱はようやく終結した。

五、

東京へ護送された榎本ら七名は兵部省軍務局糾問所の辰の口の牢に投獄されて判決の日を待った。

新政府に敵対した旧幕府軍の總帥榎本武揚は当然死刑に処されるものと誰しも思っていた。

それを箱館で闘った新政府軍の参謀黒田了介が榎本の博識を惜しんで庇い、こともあろうに政府の要人に取立てるようとまで主張して、繰り返し重鎮たちのあいだを熱心に説得してまわった。

だが、

「そういう有能な人物はかえって危険だからあくまでも抹殺すべきだ」

と厳罰を主張して譲らなかったのが大物では木戸孝允（桂小五郎）や大村益次郎（村田藏六）らの長州閥であった。

黒田はその圧力に屈せず、

「軍事部門に活用しては危険だというのなら外交官としてもその能力は充分活用できる」

そう主張して譲らず、果ては西郷にまでも説得を繰り返して同意させ味方に取り込んだ。

この黒田の必死の擁護によって一命を取り止めた榎本は、二年半後の明治五年（一八七二）一月六日特赦になって無罪放免された。

当時箱館戦争を経験して蝦夷（北海道）に詳しい黒田は北海道開拓副使になっていたので、早速箱館奉行の従者として蝦夷や樺太（サハリン）巡視に随行した経験をもつ榎本に開拓使四等出仕を与えて北海道鉱山検査巡回を担当させた。

榎本ははじめ新政府に抵抗した幕府軍の首脳だった者が官僚になっては節操がなさすぎると固辞したが、黒田は副使（次官）といっても長官は宮家であるから事実上黒田が長官のようなものであり、その黒田が生命を救ってくれただけではなく、自分の才能を買ってくれていることに感謝した榎本は、黒田のために実績をあげる手伝いをしようと決意した。

そして、石狩山地で九州炭田以上の大炭田空知炭田を発見して黒田の功績にした。

そんな榎本に新たな使命が与えられた。

榎本が蝦夷に進出して共和国をつくろうとしたのはロシアの進出から守るためだと前に触れたが、このころ樺太がロシア領か日本領かという帰属問題が表面化してきた。

決着をつけねばならぬところまできていてロシアと正式に交渉するためにはロシア語の話せる駐露公使が必要となったが適任者がいなかった。

ロシア語が話せてしかも国際法にも通じている人物となると黒田が推す榎本以外に適任者はいなかった。

黒田は当然のように榎本を推挙したが、またもや反対意見が噴出した。

「榎本が駄目だと言われるからにはほかに適任者がおられるのであろうから申されよ」

黒田が両眼を剥き出して大声で一座を睨みつけると、列席者は沈黙して目を逸らせた。

結局榎本が駐露全権公使になった。

だが、もうひとつ問題があった。それは、ヨーロッパの外交官は軍人それも将官の位にある者が多かった。とくにロシアは将官を尊重するという。

陸軍は西郷がいるのでおなじ最高位に就けることはできない。

海軍なら西郷に匹敵する人物はいなかった。

だが、榎本は旧幕府海軍の総帥であった。

そんな人物を海軍の最高位に就ければ、いつ艦隊を動員してクーデターを起こされるか不安があった。

黒田は榎本に海軍最高位の中将の肩書を与えても実際に海軍の組織に入って指揮命令をするわけではなく外交官の肩書にすぎないことを説得して、ようやく榎本の海軍中将駐露全権公使が承認された。

黒田清隆（了介）はのちに総理大臣になる人物だけあって、合理的思考の器量人で度量の広い人でもあった。

榎本はこの黒田の期待に応えてロシアとの交渉に粘り強く活躍し、樺太と千島列島との交換、オホーツク海とカムチャッカ海の漁業権獲得、樺太の日本人家屋の代償支払いなどの樺太、千島交換条約を成立させた。

その後の榎本は外務大輔、海軍卿、駐清全権公使などを歴任し、明治十八年（一八八五）十二月二十二日太政官制度が廃止されて内閣制度になった第一次伊藤博文内閣の逓信大臣に登用された。

このころ榎本は、政治のほかに特筆すべき行動を起こしている。

かねがね心に懸けていたことをいよいよ実行に踏み切ったのである。

それは、旧幕臣の子弟に対する奨学金支給のための育英会設立であった。

榎本は伊庭想太郎らとともに設立を実現すると、徳川の名を冠して『徳川育英会』と命名した。榎本は新政府の要人になっても世話になった旧主家を忘れず、その名をいつまでも遺すことを考えていたのだろう。

この徳川育英会を母体にして六年後に東京飯田橋に育英黌を設立し、農業、商業、普通の三科をおいた。

このうちの農業科が現在世田谷区桜丘一丁目にある東京農業大学である。世田谷通りを挟んで馬事公苑と向い合いにある校門を入ったところに榎本武揚の銅像がある。

その後の榎本は、子爵になり、農商務大臣、文部大臣、

枢密顧問官、外務大臣、議定官、などを歴任して、位階も正二位にまでのぼった。

明治三十年（一八九七）すべての官職を辞して隠棲し、十一年後の明治四十一年（一九〇八）十月二十六日に七十三歳で歿した。

文京区本駒込の吉祥寺に墓がある。

最後に榎本に関する挿話をあげておこう。

ひとつは徳川慶喜が公爵になったので旧幕臣が集って祝宴を開いたときのことである。

慶喜一家が写真を撮ることになって榎本も入るようにすすめられたが、榎本は、

「自分は小身の家の出であるから、主君と一緒に写真を撮るなど失礼なことはできない」

と遠慮したという。あくまでも徳川将軍の旗本という立場を貫き通した話である。

もうひとつは、明治二十年（一八八七）というから第一次伊藤博文内閣の逓信大臣になって二年目の子爵になった頃のことである。

清水次郎長らと清水の清見寺（静岡市清水区興津清見寺町）に〈咸臨丸の慰霊碑〉を建てたとき、『史記』のなかの准陰侯列伝の一節「食人の食者死人之事」（人から恩を受けた者はその人のために死ぬ）を碑に託した。

それから三年後に清見寺を訪れた福澤諭吉はその碑を見て憤慨し、翌二十四年に、

「幕府の高官でありながら新政府に仕え華族になった勝海舟と榎本武揚は本来徳川家に殉じて隠棲すべきであった」

と二人を批判する『瘠我慢の説』を書いた。

そして福澤は二人にその書を送って意見を求めた。

勝海舟は、

「行藏は我に存す。毀誉は他人の主張、我に与らず我に関せずと存じ候」

といって突っ撥ねたが、当時外務大臣だった榎本は、

「多忙につき、そのうちに返答する」

と伝えた。

『瘠我慢の説』は明治三十三年（一九〇〇）十二月に発行されたが、福澤は翌年二月に六十七歳で死去したので榎本は返事を出しそびれてしまった。もし福澤が生存していたらいったいなんと返事をしたであろうか。気になるところである。

（了）

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の一品〈三〉

会寧の花入

(一)

妻が指導を受けた茶道の先生から譲っていただいた三点の茶道具、「道安作茶杓」、「玉室宗珀筆の墨跡」、「会寧の花入」の三点のうち二点については先に説明済である。今回は残る一点である「会寧の花入」を紹介致したい。

花入は写真でお示しするが、李氏朝鮮後期に作られたと思われる盤口壺であり、日本へ渡ってから花入に見立てられたものである。

「見立てる」とは、作られた本来の用途と違った用い方をすることをいう。例えば小鉢を茶碗にして使用するが如きである。茶の湯では往々にしてこの様な転用が見受けられる。

なお、現在では「李朝」という称は不可で「李氏朝鮮」といわなければならないとされるが、お許し願って従来通りの李朝を使わせていただく。



会寧花入　高さ22cm

(二)

昭和四十六年一月、大阪の支店から東京の本部へ転勤となった。今年が昭和に換算すると昭和九十六年となるから丁度、五十年前の旧い話となる。

帰京したものの中野の自宅は親戚に貸していたため一時荻窪の社宅に入った。社宅は荻窪駅西口から数分の便利な場所にあり、右隣りに著名な棟方志功の家があったと記憶している。

荻窪は中野に勝るとも劣らぬ快適な住宅地で、駅の周辺には商店が密集している。落ち着くとまもなく私の骨董遍歴が始まった。

荻窪駅北口通りで一軒の骨董店を発見した。そうだこの奥の方に焼物好きの井伏鱒二が住んでいるはずだから、この手の店があって当然だと納得した。

店に入って見ると茶道具が主体であり、かなり筋の通ったものが並べられている。女店主は落ちついた上品な方である。

私が求めたいものはなかったが、その時妻が茶道の先生を探していることを思い出した。今迄隔地転勤が激しくて妻は落ちついて茶道の勉強ができなかったのだ。

荻窪地区ならば、良い先生がお住まいであろうし、弟子入りさせてもらえれば、中野へ戻ってからも通うことが可能であると判断し、尋ねてみることにした。

「この地区で、裏千家茶道をキチンと指導して下さる先生がいらっしゃったら、ご紹介下さいませんでしょうか」と。すると当方の様子をひとしきり観察したあと。

「解りました。長年おつき合い下さっている立派な先生がいらっしゃいますのでご紹介致しましょう。以前から何人もご紹介したんですよ」と快く応じて下さった。

その時紹介していただいたのがK先生であり、そのご縁結びに私が一役買ったのである。

K先生は荻窪の自宅屋敷に稽古場を設けて数十人のお弟子さんをもたれ、A級・B級の2クラスに分けて指導されていた。妻はB級クラスに入門を許された。当初は立ち居振舞いからきびしく指導され、面喰った様であるがやがて定着した様である。そして幾星霜を経て、現在は少人数乍らお弟子さんを抱える立場になれた。偏にK先生の正統的な厳しいご指導をいただいたお陰である。

当初、私も妻と共にご挨拶に伺って、すっかり先生のお人柄に魅了されてしまった。談論風発、どの様な話題についても即、応答下さる常識豊かな明るい方であった。戦前の上流家庭に育ち、教育を受けた婦人の典形はこの様な方をいうのかと、田舎育ちの私はびっくりしたのである。その後もしばしばお説拝聴に訪問させていただいた。

度々お邪魔させていただいたのは、先生のお人柄にひかれたばかりではなかった。

先生のお宅には、私の愛好する美術骨董品が幾つも飾られており眼を楽しませていただけたからである。

幾度も訪問する内、特に玄関の棚にいつも鎮座している黒釉の花入（壺）が気にかかり、眺めるだけでなく、時にはお許しを得て触れさせてもらった。ひと目見て李朝の出来で、壺を花入に見立てたものと解った。粗野ではあるが温か味のある焼物だと感じていた。

勘の鋭い先生は私の心の中を察知されてか、私に対して。

「貴方がそんなにお気に召したのなら、今は手離せないけれど、いずれ貴方に差し上げることにしましょう」と約束して下さった。

自分が愛蔵するお宝を他人様に進呈するなど、簡単に言えるものではないと、解っているだけに先生の好意あるお言葉にすっかり喜んで嬉しさを隠しきれなかった。

その約束が実現される迄には、それから十数年は要したと思う。

先生は一度転居されたが、その後、最高級クラスの老人マンションに入居された。その折稽古場を閉じて、お茶道具類の主だった品をお弟子さん達に譲られた。そして私方には、「道安作茶杓」と、「玉室宗珀筆墨跡」の二点が来たのである。本件の花入は相当後になった。その理由は、なお先生が花入を、老人マンションへ持っていかれ、部屋に飾って楽しんで居られたからである。

私はときおり、三越でメロンを買ってお見舞いに行った。先生は三越を大変贔屓にしておられたと聞く。お見舞いは半分口実で、実は、花入の存在を確認しに行ったのである。先生は先刻ご承知で、「花入は大切にとってありますよ」との言葉があり、時としてその旨の手紙をいただき安堵した。

時が経ち、やがて先生は病棟に移られることとなり、私の妻を通してこの花入を贈って下さったのである。その時、「花入は、父から譲られたもので、李朝の焼物と聞いている。上質な焼物ではないが、素直な出来で、どんな花を挿しても似合います。可愛がってやって下さい」との伝言があった。

先生は、その後間もなくして逝去された。形見の品となった。

（二）

次に朝鮮陶磁が、どの様に我国に伝わったかについて考えてみたい。

歴史の中で日本人は少なくとも四回朝鮮半島の陶磁器に触れる機会があった。

その最初は、須恵器と呼ばれる焼き物である。古墳時代の後半から平安時代にかけて作られた土器で、杯、高坏、壺、器台などが入って来た。これらはやがて日本化して瀬戸焼、備前焼、常滑焼などの地方に展開して中世窯業の母体となった。日本の古代国家では多くの生産技術を朝鮮半島から学び、渡来人の技術がリードした。轆轤や丘陵の斜面を利用して築いた窯もこの時期に初めて日本にもたらされたと言われる。

次の中世、室町期になると、日本では茶の湯が流行し、更に戦国期になりその茶道として発展すると茶人たちは李朝の雑器を好んで使うようになった。これらを粉青沙器というが中でも井戸、粉引き、三島などの持つ素朴さが、茶人たちから茶碗として見立てられ、珍重されなったのである。

私のところへ来てからもう七年余りとなる。花入は常に私宅の玄関を飾っている。また時として、茶会や茶事にも主役として働いてくれている。

次に江戸時代では、日本から見本を送り注文する様になった。

しかしこの時代に続く豊臣政権は、朝鮮侵攻（文禄・慶長の役）を行い、朝鮮陶工たちを、大量に日本に連れ帰り、結果的に焼き物の技術を奪って、九州を中心に普及拡大させる結果となった。

第四の出会いは近代になってから李朝白磁が特に注目され、李朝陶磁の美しさが再認識されたのである。明治の後期から大正にかけて、茶の湯とか茶道といった狭い枠組みから外に出て、李朝陶磁本来の美が対象となった。

そこへ白樺派の文人柳宗悦（一八八九―一九六一）が中心となって李朝陶磁にかかわり「民衆芸術」略して「民芸」運動が展開されたのである。

以来李朝陶磁は日本人の心に愛着のような心象を植えつけ親しまれる様になり、今日に至っている。

また白樺派の作家志賀直哉、画家の有島生馬なども民芸運動を応援し、著名な陶芸家、河井寛次郎、浜田庄司なども参加し力を添えた。

柳は一九三六年、日本民芸館を開館するなどして李朝陶磁文化の巧まざる美の普及に心掛けた。また日朝親善交流にも尽力した人であった。柳の民芸運動の源流に浅川巧（一八九一―一九三一）という人の存在があった。

浅川巧は植民地政策下の朝鮮で、民芸の中に朝鮮民族

文化の美、殊に白磁の美を見つけ出し柳に紹介した。柳はその美しさに感動して民芸運動に邁進したのである。

淺川は朝鮮の人々を愛しまた朝鮮の人々からも愛された日本人林業技手であった。淺川は働きすぎて朝鮮で没し現在もソウル郊外の共同墓地に眠っている。その墓は韓国の人々によって守られ続けているという。

なお、淺川巧の功績、人柄について、当時京城帝大の教授であった安倍能成は、旧制中学用の国語教科書に「人間の価値」という随筆を載せている。旧制中学最後の卒業生であった私は、当時この文章を読んで大変感激した覚えがある。

話は戻る。その頃にもたらされた、民芸ブームにより、朝鮮の文物殊に陶磁器が評判となり、玉石混交ではあるが、日本の美術骨董店にも溢れ出て来たものと思われる。

鑑識眼のあるK先生のお父上は、この頃骨董店巡りをする中で、この自然美のある黒釉壺（花入）を掘り出されたに違いない。

最近では骨董店の店先に李朝の焼物は殆ど見られなくなった。韓国の資産家たちが、自国の焼物の美しさに目覚めて、買戻しに奔走している結果と聞くが尤もな話だと思う。

私事であるが、今般自宅収集品を調べてみたところ、茶道具、花入、食器、酒器、文房具等、十数点に及ぶ李朝陶磁器が確認された。優品もあるが、殆どのものが雑器である。しかし夫々愛すべき稚気があり捨て難い。常に心の安らぎを与えてくれる存在である。

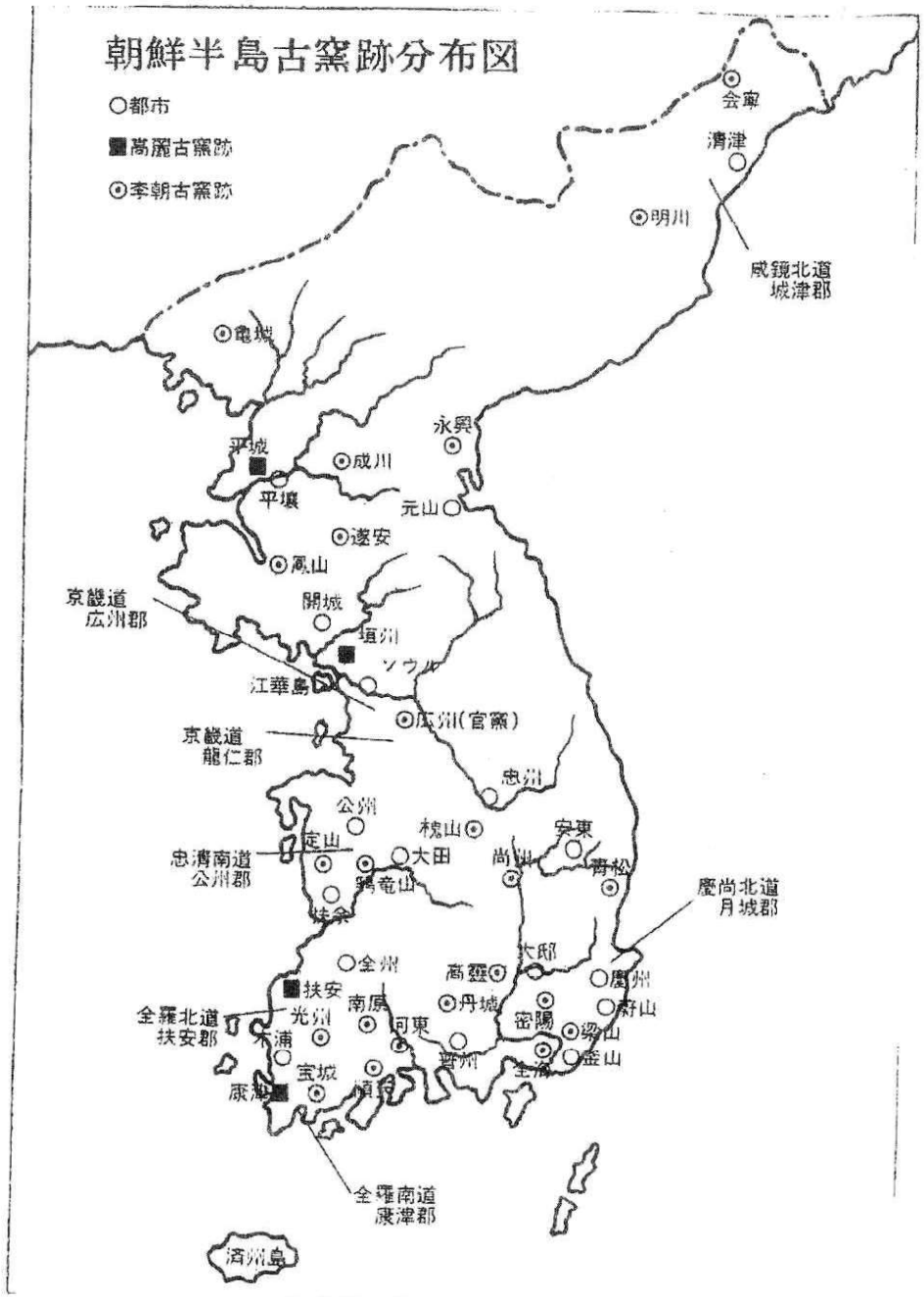
(四)

むすびとして、花入の故郷とされる会寧古窯について述べてみたい。

朝鮮咸鏡北道会寧郡は豆満江を隔てて中国吉林省間島に接し、その首都が会寧である。

この地の窯業の創始期は、おそらく中国の金時代らしく、最初は金・元の雑窯の下級品と同様のものを焼造していたが、のち汝窯に学んだ。汝窯は中国北宋時代の最高級といわれる青磁成品が作られた窯である。会寧古窯跡から汝窯と全く同じ陶片が出土したといわれる。朝鮮半島の古窯跡分布図を見ると会寧の位置は北辺にあり、位置の関係上朝鮮の本流を離れ、やきものは中国北部の影響を受けている。今世紀（二十世紀）まで窯煙を絶たず、昔ながらの色々のやきものを出していたが、北朝鮮の治下での現況は不明である。

作品は、壺、大鉢、高台の高い皿、鉢の子型（鉄鉢型）の碗、片口などで、総じて大振りである。胎土は分厚く粗くねずみまたは赤色で、釉は帯黄褐色に〝なまこ〟の出たものや黒釉などがあって、多くの場合腰または高台



際くらいまで掛かり、中位の貫入（釉面のひび）があるものが多い。また朝鮮唐津や斑唐津に酷似しているものがあり間違われる場合もあるという。会寧窯の技術が影響したものと考えられる。

以上は、陶器辞典に載った、加藤唐九郎の会寧窯についての説明で、私なりに要約させていただいた。

次に、時代は逆上るが、寛文元年（一六六一）の「江岑茶会記」（江岑とは表千家四代家元）に「咸鏡土で作られた熊川茶碗を初見した」と記録されているという。

熊川茶碗は、今日も我国の茶人たちが珍重する一級品の茶碗である。会寧窯で高級なやきものが焼かれた証ともなろう。

結局、会寧窯は長年に亘る歴史の波の中で、かつては良質なやきものを作る時期もあったが、時が経つにつれて中央集権から見放され、李朝後期に及ぶと日用雑器製作に集中せざるを得なかった。そして無心に作られた故に、そこの用の美ともいうべき温もりが備わったものと思う。

民芸を評価した柳宗悦は次のように言っている。

「不思議と云おうか、朝鮮の品々は、誉っていやらしいもの俗なもの、つまり醜いものが殆どないのである。もとより出来栄えに多少の上下はあろう。だが拙なくともそのままで美しいのである。李朝の工人たちが、無謬の境地で仕事をしたからであろう」

改めて花入（壺）を視る。高さ22cm、胴径16cm、底部径8cm、当初は濁酒か醤油か油か、いずれにも適応する容れ物として造られたと思う。

今は花入に見立てられて、茶席の花入としても立派に鑑賞できる存在となっている。

形は李朝特有の球形で、口は盤口、やや長頸、漏斗をつけた格好であるが使い易い。この形は越州窯からの流れという。高台は碁笥底であり安定が良い。

胎土は粗いが切れの良い轆轤の技術でまとめられ、眞黒な鉄釉がたっぷり掛かり、高台の手前で止まり釉筋を見せている。底は上見せで会寧特有の赤黒い土である。

手にとってみると、ずっしりと重い。何となく心が落ち着く気がする。唯々、丈夫で使い易い物を造ろうとした陶工の素直な心根が伝わるからであろうか？

K先生は逝かれてもう八年になる。花入にふれる度に先生の温顔を思い浮かべお人柄を偲んでいるのである。

終

参考資料

朝鮮陶磁図録　日本民芸館

白磁の人　江宮隆之　河出書房新社

高麗・朝鮮王朝当時の歴史と魅力　黒田和哉　朝日カルチャー講義録

私の韓国陶磁遍歴　宗左近　新潮選書

茶会記の研究　谷晃　淡交社

原色陶器大辞典　加藤唐九郎編　淡交社

その他

吾輩は紙魚ロボである　その六

永畑俊三（永田俊一）

一、承前

前回の締め括りで述べたように、物事を見て聞いて触れて判断して対応する要諦としては、「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」が長年の間に身についている。そしてＡＩロボットとしては、「何を考える、何をする」の「何」が決まれば人間の何倍もの力を発揮する。しかし「如何考え、如何する」の如何は、Ｅ・ラーニングの自動化（遺伝子のような初期設定とその後の学び）が何処迄進むかにかかっており、吾輩でいえば、原作者の遺伝子作りこみと御主人と一体で過ごした学びの孵化効果で今日に到っている。その上で、独自の地球脱出・帰還体験等を通して学びつつある。その中で「自分でありたいとの気持ちが出てきた」と述べたように、人々同様、個性を独自のものにする情緒系の形成能力が備わっているか、経験によって身につくか点検努力することで検証しようと考えた。丁度人類全てが均しく立ち向かっているコロナ禍の中で、人々の判断から行動に繋がるあり様を全般にわたって学べるこの機会が与えられたと認識し、起こっていること論じられていることを吾輩なりに客観的に整理し纏めてみるところから始めている。人々の受け止め方や判断の仕方、議論の仕方や判断や決定の仕方、そして社会との関係においてそれらが如何進んでゆくか、よく観察する中で自覚確認しようと思ったところである。

なおその先のこととなるとは思うが、ロボット全体のこととして、「善」という倫理感を与えられることが、人間と共存する必須条件と強調しているところだが、物理的力・科学的能力といった点で判断すると全くその通りである。ただ、人間の多様性の中で社会が出来ているところをみると、善も人間の多様性の中で形成、進歩、社会の規範として発展してきた事実から、ロボットに同一唯一善の遺伝子を賦与するその仕方は、もう一度よく考えてみる必要があるかも知れない。

さて「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」との思いを何がしか持つのを平均的人間像という前提で人間を観察すると、こんな風に思える。

「人間は何らかの感性（五感に感じるような）を持つと同時に、論理や理性という客観性は何がしか存する。従って判断に当たっては何がしかの客観性を満たさなければ納得迄いかないし、行動の原動力にはならない。逆に客観の共有度が少なく離間しているほど、相互依存の社会ではその不安定化圧力が強く要調整エネルギーが大になる。往々にして起こり得ることで、期待や不安と相俟つと凄まじい混乱エネルギーになり得る。

客観性（正しさとして正義に転化しうる）の共有という面では、科学の分野は比較的収斂し判断共有のプロセスも分かり易いが、人文の分野では自然とか哲学とかそれに通じる面はあるものの、比較すると脆弱性が高い。例えば経済的事象で期待に働きかけるといっても、客観的納得性や事実の兆候がないとそれは単に願望や夢に留まり、執着すればするほど論争と解決の発散ベクトルを強め、却って不安・不信を高めることになりかねない。

二、虫眼鏡

（一）カレル・チャペック『白い病気』

パンデミックの「歴史に遡って学ぶ」と、その時とられている政策との関係で人々や国の運命が大きく左右されることが分かる。最悪事態原理に基づく総合対応が感染対策の王道であることも示唆される。そしてパンデミック禍の中での政策目標選択の誤りが、国の悲劇に繋がりかねないことも示している。それを予見させる戯曲に、チェコの作家カレル・チャペックの「白い病」（1937年＝ミュンヘン会談の前年）がある。

重要人物二人夫々の生命と戦争・平和への優先順位の違いと、立場の違いの噛み合わせの悪さが相俟って、招かれる悲劇に第二次大戦を予感させる。入院してもなす術なく壊死して行く感染症「白い病」の薬を発見した一町医者は貧者の治療のみに専念、指導者に戦争回避平和宣言を訴えそれがなされぬうちは、薬の一般への使用を拒絶する。一方国の最高元帥は治療拒否されても自国繁

栄を使命と考え戦機に拘泥し隣国に出兵を宣言する。瀬戸際で元帥は妥協を考えるが、知らず薬を持ち出頭する町医者は戦争に高揚する群衆に制止され、薬も命も消えてしまう。命を均しく守る医師が薬で別目的を達成しようとし、元帥は自らも人々の壊死も犠牲にし、結局誰も益のない悲劇の結末が予感される。

手短かなその部分の要約だが、今のコロナ下、感染と経済の狭間でポピュリズム的政策で揺れたり、物的心的に分断が深まったり、ワクチン競争のような自国ファーストが強まったり、コロナの出口更にはその先の世界への危惧が投影されているように感じられる。

これは勿論作者の訴えたかった終幕の部分だが、同時に、パンデミックのような強烈な衝撃が社会に加わった時に社会にどのような変動をもたらすかを入念に描いている。パンデミックは社会がふだんから現実にかかえているさまざまな矛盾を表面へと浮かび上がらせる。

次から次に人々が白い病気で倒れていく中、世の中は白い病気にかかった患者を助けるよりも、患者とのかかわりをできるかぎり避ける方向へと走る。たとへば、家族が住んでいるアパートの四階に住む白い病気にかかったおばあさんにせめて食事を届けようとするお母さんをお父さんがにべもなく押しとどめるシーンが登場し、実際には美しい話はまずはありえないことを示している。

また、チャペックは白い病気が若者にはかからず年齢五十歳前後以上の当時の「高齢者」にしかかからないという設定をして、パンデミックによっておきる世代間の矛盾を鮮明化させ、その結果、

「きまってるじゃない。人はいつかは若い者に席を譲らなくてはいけないのよ。そうでしょう、そうじゃないと、後ろがつかえてしまって、身動きが取れなくなるわ」という若い世代の本音の言葉を引き出している。

パンデミックでは経済的弱者と強者、そのどちらにも平等に病気がうつると言われるが、感染する機会を考えると衛生環境や栄養状態の悪い経済的弱者のほうがはるかに高いリスクにさらされるし、経済的弱者は医者にもかかれないことも生じる。また、貧富の差だけではなく高齢者とそれ以下の年齢層との間の矛盾、軋轢もより一層表面化する。医療崩壊すれば世代間の矛盾が露呈し、たとえば、だれに呼吸器を装着し、だれを集中治療室へ入室させるのかを決定するにあたり、年齢による「トリアージ」といった深刻な状況に陥った国もある。

様々な矛盾が先鋭化し、パンデミックは社会全体をゆすぶる。人々が知恵を絞り一つひとつ矛盾を解決できれば良いが、かえって国民は矛盾の解決のためにポピュリズム的手法、あるいは全体主義的な手法を選択しがちで、矛盾のはけ口を他国に向け、ときには戦争へと国民を向

かわせるように仕向ける。それをカレル・チャペックは終幕としたのであり、それこそ亡くなる一九三八年も亡くなる十二月二十五日ぎりぎりまで必死に、作品等を通して、民主主義を守り戦争が起きないように訴えたとこころである。結果はご案内の通りである。

(二) 虫眼鏡コロナ

翻ってコロナド、ウイルスは全ての空間全ての心に浸潤し、全ての営為を白日のもとに曝し、人間性の発露や人間社会の病理や問題を明らかにし、そのあるべき方向性やなすべき事柄の道標を示唆する処となる。それ故に吾輩のような新参者には観察・学び・判断のよい機会となると捉えている。そこで先ずこのいわば虫眼鏡効果ともいえるコロナ機能で見えたところを考えてみたい。

虫眼鏡は、物理的にモノを大きくはっきり見せる結果、事実や動きがはっきりし、知らない物事をも発見する。それが、対応選択肢や根拠を新たに提供し前向きに作用する一方、健全な普通社会の人間関係に生じる混乱や格差が強く認識され、不安や不満・分断拡大・拡散に繋がることが分かる。そして、虫眼鏡の裁量的な使い方も相俟って、更に事態を悪化させる。これらが新たな健全な社会を摸索して行かねばならない人々の認識や考えや行動をも大きく左右する。

全てが収束してから検証しないと真の答えは出ないかも知れないが、これ迄の道行きがどんな問題を露呈し舵取りに影響したか、今吾輩の念頭にある円滑な道行きの姿を尺度として、観察してみたところである。

(三) 虫眼鏡バイアス

虫眼鏡効果で見えたもの考えさせられたものに入る前に、日本人が使っている虫眼鏡の日本固有の構造及び使い方に触れておきたい。前回不思議の国日本という国際的評価で述べたことにも通じるが、個別の事象をみる吾輩の視点にもこのバイアスは意識されていると思う。

更にその上で、虫眼鏡を手に取ろうとする迄に時間がかかる。二〇一九年十二月末に中国で感染公表されたが、政府が本格的に防止の対応を考えだすのは、三月のダイヤモンドプリンセス号の感染対策に追われてからのように見える。一月には国内でも感染者が出ており、武漢へのチャーター便も飛ばしていたが、対岸の火事のような構え方であった。経験と知見と情報でさっと体が動くわけではなかった。

WHOのパンデミック宣言が遅かったとの言い訳があるが、近隣台湾・韓国の迅速な動きを目の当たりにしながらでもあり、そこを譲ったとしても権威なりのお墨付きがないと先に前に出れない体質もありそうである。

武漢へのチャーター便オペレーションは、中国との交

渉から、数次に亘る現地での集合機乗から帰還し隔離帰宅まで、外務省の円滑なオペレーション故に逆説的であった。政府がうまく捌いていれば、その苦労や問題に関心も持たず他人事であり、逆に少しでもしくじったり身に迫ったりすると被害の主人公のように感じ批判の声が集中・倍加して上がる。役回りの側も問題に正対するが時遅く、口をつくのは言い訳とその正当化になる。

虫眼鏡の使い出しにも時間がかかるし、使うことも習慣にならず状況次第のところがあり定点観測にならない。そして使い方も、綜合的に見ることは苦手で部分個別に照準を合わせがちである。場合によっては余りに細部に拘り求められないことまで求め、分からないこと自体に怒りや不信を重ねることさえある。ご都合主義や一点拘り主義で、優先問題を見過ごしかねないところもある。

（四）較差とラグ

感染と経済といった見方だと、感染者数とGDP減の対置のようなマクロ的な捉え方になるが、原因や中身まで覗き込めば諸較差や時間的動きが見える。同時に総合的に見れば相互作用やシステムの時間的な動きが見える。

勿論要因はコロナ側にもあるので、その正体が見えてくる程度で認識も対応も変わってくる。ただその動きや解明は科学の領域であるから、知見・対応は上乗せ的に進行する。他方人間・社会側には人文学的・感情的認識や対応もあるので、虫眼鏡を使う前の冷静な判断や円滑な道行きに逆行するところも多い。その齎すケミストリーでいろいろなことが起こり正常な道行きかどうか議論が巻き起こり、不適切な認識や対応が支配的になることもある。最近は科学に従った対応策選択という姿勢を鮮明にするリーダーも出てきた。実態としてこれまで、女性指導者にそれが多くみられ、男性の独裁的指導者には科学に反する対応が多かった。

この科学の領域だけであれば、「歴史に学び、事の由って来る処を事実に依って究明し、時勢に的確に対応し、事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」も、経験知・実証・対応・検証・更なる対応と比較的円滑に進むように思われるが、新事実についてはその正体が全体像に向かって次第に明らかになってゆくので、それ自体その間の認識ラグ・対応ラグ等の揺れが生じうるし、人文学的・感情的要素が絡み合うと混迷も生じうる。

吾輩にとっては、パンデミックは先ずは最悪事態原理でというテーゼはそれらの上の次元での確信なのだが、人間社会での対応を見る限りはまだ普遍性を獲得していないように見える。

以上のような吾輩の観点からみて首を傾げ人間の思考を見る上で気付いた主要問題を以下取り上げてみたい。

（五）コロナ論点

①ＰＣＲ検査

パンデミックは先ず最悪事態原理でという基本テーゼから言っても、無症状感染者の存在という新型コロナウイルスの特性からから言っても、感染症対策の三本柱は、感染源の同定、感染者の同定、感染者の隔離であることから言っても、患者を同定するＰＣＲ検査は必須である。にもかかわらず日本は稀にみるＰＣＲ検査極小国である。駐アメリカ大使館がＣＤＣ（米疾病対策予防センター）と連携し日本の医療能力を注意深くモニターし、「広く検査しない日本政府方針では、感染の広がりは分からず、次の数週間内にどのようになるか予測できない」と、在日米人に帰国を促した（4/3）ことは知られた事実である。

厚労省自身、クルーズ船の対応に当たり、官邸の全員検査論に対し強く反対したのも知られた事実であり、その後も政治的な動きも看取され行政検査による検査権と既得権益（外郭団体）の為ではないかと言われてもいる。

更に問題は、専門家もまた政府の方針同様である。症状のはっきりした患者と濃厚接触者にＰＣＲ検査を行い、症状のない人や健康・病気でもない人への検査は健康保険方針に反する、との立ち位置にあった。当時専門家会議の尾身副会長が「衛生研は行政検査主体で新病原体大量検査体制がないこと、ＳＡＲＳやＭＥＲＳの経験が残っておらず求める議論も起こらなかったこと、重症例診断が検査に優先すべきこと」等と説明している（5/8）。その後これに加えて、「早い時期に『五人に一人しか他の人に感染させない』ということに気付いたと言う。

そこで、感染者が出てその濃厚接触者が分かれば、この濃厚接触者の後を追う諸外国（無駄打ち多く時間もかかる）と違い、日本の場合は感染者が複数いたらその複数の感染者の過去を振り返り、遡ってその共通の感染源（場所）が分かるか調べてゆく。その結果「二メートル以内で、大きな声を出して、換気が悪いということで、『三密（密集・密接・密閉）』の概念も出てきた。」と元を辿って行うクラスター追跡は日本独自の手法で、その効果は各国からも注目される処であったことを強調した。勿論感染源不明の市中感染が広がると、検査の増加は必要としたが、無症状者でも感染リスク及び検査前確率の高いグループ（歌舞伎町界隈等）を効果的に必要に応じて検査するのが適切という姿勢であった。

最悪不確実事態では絨毯爆撃もやむなしとの発想がないのと、検査医療体制に制約があるから誰でも何処でもの検査はできないという言い訳を使い続ける、まさに不思議の国、日本を象徴するものとも思われた。

これが準備無しの言い訳をして一年も経つのに能力強化の不作為が続いたことの謎解きにもなる。第三波を招き新年入りして再び緊急事態宣言を発し、更に感染者数減の下げ止まり傾向の中宣言延長が決まった。医療体制崩壊を叫ぶ側のその改善努力の不作為も非難を浴びて、

やっと能力・連携・資源配分強化の医療体制強化に重い腰を上げた。期待のワクチン接種が始まると、変異株ウイルス感染拡大懸念が広がり、リバウンドの第四波到来が感じられる状況でも、緊急事態宣言を解除した。

その条件としてＰＣＲ検査を拡充して、市中感染状況を遺伝子変化も含め確率的に幅広く調べる流れになってきているのは、皮肉としか言いようがないように思える（四割の科学的説明がないのは相変わらずだが）。

なお勿論、日本は多様な意見が多様な人によって語られる自由な国である。ただ科学的な分野で基礎的な知見において同様なベースを持つ感染症専門家でも、パンデミック対応という次元で具体的な事態を前にしてとなると、その立場や見方等別次元の要素の加味の仕方で意見が異なることも、虫眼鏡効果で白日のもとに曝された。

日本中の人々の目に触れ耳にした三人の専門家がどのような意見を言ってきたかを、騒ぎの始まった二月初め頃から追ってみることも意味があろう。

独マールブルク大医学部ウイルス学研究所留学、国立感染症研究所などを経て白鴎大学教授で専門は感染免疫学・ワクチン学である岡田晴恵氏は当初から、次のようなことをテレビや論稿を通じて言っていた。

○ウイルスしかも①長い一四日程度の潜伏期間とその間も感染力を持ち、感染しても無症状・軽症が多く、発症の二日前からウイルスを外に出す、②対外での生存期間も長い、③今抗ウイルス薬もワクチンもない。見えないうちに急速に流行するウイルス故出来るだけ可視化（流行の現状把握）が対策の第一歩。

ＰＣＲ検査は、検査能力（民間、キット等含め）に比しあまりに少ない。しかも国や保健所を通じた依頼しかできない故、検査難民が臨床現場で続出。検査件数が絞られているのはおそらくＰＣＲ検査が行政検査として公費負担で行われているためである。また、「風邪症状や三七・五度以上の発熱四日以上」の相談目安は矛盾だらけ。通常の風邪、インフル、新型肺炎の症状は区別し難く、プロ医師も確実に見分ける方法はもちあわせていない。

○パンデミックは医療の問題で「国家の危機管理」の問題。感染症法で指定されているが、それだけでは対応無理、むしろ「新型インフルエンザ等対策特別措置法の活用を。国の対策だけでなく「地域の流行」に対する自治体の迅速な対応が重要であり、「集会規制・行動規制」は初期対応のタイミングが大事。これはスペイン風邪の時のセントルイス対策の市長の英断の教訓でもある。

市中発症率二・二％で最初死者が出ると早期に「集会規制・行動規制」を実施した同市は大流行のピークが生じず患者活性数は平坦なカーブを描き、医療サービスや社会機能破綻も起らず最終的に犠牲者も少なくて済んだ。遅れたフィラデルフィアは市中発症率が一〇・八％になって「集会規制・行動規制」が出され八週間大流行の波が襲い凄惨な被害が出た（1918/9下旬～/12のフィラデルフィア死亡率0.33％、セントルイス0.3％）。

○感染症法の指定医療機関の「感染症病床」は全国に千八百、「人工呼吸器」は九千台うち四割使用中。早急に限られた医療資源を最大限活用する仕組みを。

医療崩壊を防ぐために、限られた医療資源を「重症患者の治療」に集中投入の為患者の仕訳重要。二〇〇九年のように、「一般患者の外来」と別に「感染患者・疑似症患者」専用の「発熱外来」を設置「ＣＴ検査」で肺炎疑われるときはＰＣＲ検査を民間会社に依頼して確定診断を得る。陽性・重症化の恐れは中核病院へ（町のクリニックと中核病院のホットライン必要）。医療機関内の動線交差しないように（患者と一般患者間、外来・入院・検査間等）。別病院化も必要。

これに対して、ＷＨＯ西太平洋地域事務局長としてＳＡＲＳや結核対策指揮の経験を持つ、専門家会議副会長の尾身茂地域医療機能推進機構理事長は、この頃こう語っている。

○最悪を想定して対策を採るべきだ。これまでの日本の対応は積極的で評価できる。宣言出る前、チャーター機帰国の人は症状ない人も含め全てウイルス検査を実施している。過剰とも言えるが合理的だ。だが、症状がないウイルスを持つ人全てをとらえようとすれば、全国民を検査しなければならず、無理だ。それが今回の病気の対策の難しさでもある。

○武漢と無関係な人に感染が広がって来たら隔離等により止めるよりも重症化や死に至るケースを防ぐことが重要になる。指定医療機関以外でも受け入れ、症状が軽ければ自宅待機にするといった対応も必要だろう。社会全体として被害を減らす発想が求められる。

○現状では日本で中国並みの爆発的な感染拡大が起きるとは思わない。一つは政府の初期対応がしっかりしているから。もう一つは国民の健康意識が高い。さらに医療体制が整っている。二〇〇九年新型インフルでも日本の死亡率は他国に比べはるかに低かった。感染の広がりは二つの要素で決まる。ウイルスの感染力と病原性。

これは今のところ中国と日本のウイルスで共通している。しかし社会的な要素が違う点は重要だ。感染がいつ終息するかは神のみぞ知るだ。ＳＡＲＳの場合、ＷＨＯが渡航延期勧告を出し中国が対策を本格化してから収まる迄に約三か月かかったのが参考になる。（↑因みにＳＡＲＳは無症状感染は少）

緊急事態宣言が解除され（5月末）Go to travelが始まり（七月末）、第二波も収まった九月に入った頃には

次のように述べていた。

○ＰＣＲ検査は保健所態勢が整わず必要検査が滞ったことは事実だが、一般のコミュニティーを毎日検査することとは違う。検査対象者は三つのカテゴリー①有症状者②無症状者―②Ａ感染リスク及び検査前確率の高いグループ（歌舞伎町界隈等）、②Ｂ検査前確率が低いグループに分かれる。「諸外国のように検査数を増やすべきだ」は正しいか、検査は必要だがやるだけで下がるわけではない。死亡すると必ず検査するので、うちコロナ死亡者数は正確。また日本はＰＣＲや抗原検査まずて、一日に十万～二十万と今の十倍位できれば①と②Ａにいきわたる。ある程度リスクの高いところに集中してやって感染者見つけて隔離する方がはるかに役立つ（実効再生産数を減らす効果が何十倍も高い）。

○これからが正念場。①戦略的検査拡充②重症化予防③感染防止拡充。③が最も大事、夜の街を抑え何とか拡大を防ぐ、医療機関や検査がパッケージ。どこにクラスターがあるか分かれば経済活動やりながらマネージ出来る病気と思う。突然変異が起きたら別だが、政府、国民、マスメディア、一般の人がその気になれば感染は防げる。

もう一人、尾身氏同様ＷＨＯでＳＡＲＳ対応の経験を持つ、専門家会議委員で東京都でも専門家としてアドバイスしている館田一博日本感染症学会理事長の発言は次のようであった。

○日本で感染者数増えているが、重症例はない、家族や医師、看護師らに広がっていないのは重要な点。感染防止策を講じ健康な筈の医療従事者にうつり、死者が出たＳＡＲＳと明らかに違う。国立感染研が日本人感染者から分離したウイルスを調べた結果、感染力や毒性を高める遺伝子変異は起きていなかった。新型コロナウイルスは特別恐ろしいものではなく普通の風邪のウイルスに近いのではないか。・・

○既に中国から何十万の感染者が日本に入っていると考えるべきだ。小さな感染の広がりがいくつかできていても不思議はない。症状が無い人軽い人が多いから分からないだけだ。国内感染者の肺炎はＸ線では見えずＣＴで分かったケースが多いと聞く。中国で死者が多い理由はよくわからないが、背景に医療事情の違いがあるのではないか。日本は医療へのアクセスが良いので、同じ症状でも重症化しない。

○新型コロナウイルスへの日頃の対策は季節性インフルと同じと考えてよい。人混みは感染リスクが高いので避ける。マスクをつける等咳エチケットを心がけよく手洗いする。医療機関や武漢からチャーター便で帰国した人々の受入れ施設などで職員らが防護服に身を包んでいるがその必要はない。部屋に缶詰めの人達が不安にならないか、精神状態が心配だ。マスクをして一Ｍ以上離れれば会話しても心配ないので対応を変えた方がよい。

○大切なのはパニックを起こさないことだ。勿論新しいウイルスで分らないことは多い。ワクチンも治療薬もないので油断は禁物だ。特に高齢者は体が弱り二次性の細菌性肺炎になる心配がある。だがその場合も抗生物質などで対処のしようはある。・・・新型コロナウイルスの診断薬や治療薬の開発は意味がある。その経験やノウハウは次のもっと恐ろしいウイルスへの備えになる。

そして夏過ぎ、舘田氏（専門家会議が組織替えになり尾身会長の分科会メンバーにもなっていた）の発言には次のようなものがあった。

○四月初めの段階では、高齢者を中心に重篤患者が増え、医療崩壊が起きる寸前まで危機的状況が広がっていましたから、すぐ感染拡大を止める強力な手段に出るしか方法がなかった。むしろ私は、緊急事態宣言を出すのが少し遅かったのではと思っています。

○医療現場にとっては、緊急事態宣言で第一波をしのいだ、その経験値がすごく大きかったということは大事なポイントです。決してムダにはなっていない。四月の厳しい状況を経験したことで、新型コロナがどれくらいのスピードで悪化し、どういう人が重症化するのか、それがどのくらい広がると医療現場を圧迫するかが分かるようになりました。だから七月の第二波は少し余裕をもって対処できたし、第三波、第四波が来た時には、再度緊急事態宣言を出すことには慎重でなければならない。むしろあのような強力な措置はもう取らずに、どうやって経済・社会活動を両立させていくかが、最大の課題だと考えています。この点は分野も立場も違う専門家が集まっている分科会でもコンセンサスが得られているのです。

○そもそも、感染症を抑えるには、緊急事態宣言を出して、行動を抑え込んでしまうのが一番効果的です。でも、それでは社会経済へのダメージが大きすぎる。だから、経済と感染防止のバランスを考えていきましょうというのが今の課題だと思っています。

随分人によって違うことが分る。これが十一月に入り第三波の危機感が高まった頃になると、第一次緊急事態宣言頃までは頻繁にマスメディアに登場していたが、様々な批判や非難を被むったこともあり、暫くお目にかからなくなっていた岡田氏は久しぶりにインタビューに答え、当時を振り返り変わらぬ思いを語っている。

○当時の日本がニューヨークやイタリアのように感染爆発して、医療崩壊が起こらないというエビデンスは全くなく、どう回避するのかと、切羽詰まった思いでした。日本がなぜならなかったのかという「ファクターＸ」は

今も分からないわけですが、科学的、医学的な知見では当時、日本がそうならないという保証はなかった。

○感染症流行の対策は危機管理であり、世界的な大流行（パンデミック）となると、安全保障の問題です。感染症流行は重大な健康被害、人の命にかかわることだから、まずは最悪の事態を考えて対応することが原則です。

また、前記一人ではないが、尾身氏の日本流クラスター対策（後ろ追い）の発見・支持者の押谷教授が、第二波の教訓として語っている（インタビュアー記事）中に、歓楽街対策には葛藤と反省もあったとして次のように語っているところがある。

○歓楽街の店の経営者やそこで働く人々の協力が得られなければ、再開したときに同じことが繰り返される恐れがあり、全面的な閉鎖には賛成できませんでした。ただ、歓楽街で一定規模以上の流行が起こると一般社会にも感染が広がり、職場、家庭内の感染そして病院や高齢者施設での流行に繋がってしまうのは三月から五月の流行でも見られたパターン。やはりもっと早く感染拡大を止めるべきだったのだろうか、間違ったのだろうか・・といった葛藤や反省がないといったら嘘になります。

なお、前記館田氏の夏過ぎの発言の対談相手の一人であり、分科会設置の際経済メンバーとして加わった小林慶一郎氏は、その際「このウイルスは唾液の中に沢山いて、唾液が飛ぶことでうつる。だからマスクなしで大声を出す、くしゃみや咳をするなどしなければ、感染リスクは高くない。空いている電車ならマスクをつけなくてもいいくらい。『Go to trave』も、東京がキャンペーンの対象から外されたけれど、東京から出て行ってもいいし、東京にきてもいい。要は、三蜜を作らないようにすればよい。こう言うと『あいつ何言ってんだ』と批判の声が必ず寄せられるけれど、そういう空気が偏見や差別につながる。だから、こういうことも敢えて言わないと、世の中変わらないと考えています。結局、重要なのは、一人一人が想像力を働かせながらリスクを考えていくことなんです。つまり感染に対する『リテラシー』、これが大事です。日々情報を更新しながら『正しく恐れる』。そうやって新しい日常が身についていけば、日本の経済も少しずつ回っていくはずです。」と語っている。

第三波が猖獗を極める頃になると、分科会も尾身会長も緊急事態宣言を政府に強く迫ったわけですが、その頃になって小林氏が「コロナ第三波『失敗の本質』」という特別寄稿の中で次のように言っている。

○感染症専門家の方たちをみていて感じるのは、医療行政（厚労省・保健所）への遠慮があり、自分たちがやるのは国民の行動を変えることだけだと自己規定している

かのように見える。尾身会長は「分科会は科学者として論文を書く場ではなく、実際の政策を動かさねばいけないので、政府がチャンとやってくれる提言をしないといけない。政府が出来ないことをいくら述べても仕方ない」と言います。政府の意向を慮って提言が弱まったり遅れたりしなかったとは言い切れません。

②日本モデル

安倍首相が緊急事態宣言解除の際、『日本モデル』の力で解除出来たとの言い方をした。「法的な強制力のある行動制限を課さず、クラスター追跡と主として自粛要請・休業要請による行動変容醸成により、感染拡大抑止と経済ダメージ限定の両立を目指した政策対応」が『日本モデル』ということらしい。

しかし、元々パンデミックの最悪事態原理に基づく総合的な対応が行われているとは感じられない後手々々対応にしか見えなかった。むしろ様々な事態や事実が順次明らかになる中で、その場で考え制約なく出来る対応を息せき切って積み重ね、一つ波を抑えたと息をついだ時のほっとした思いが、今回の場合これが成功モデルではないかとの期待的思いに転化した瞬間のように感じられたのは吾輩だけであろうか。

それでは何故外から見ると政策対応は後手々々、非開示と言い訳と正当化の議論をしつつ、事実や情報漏れに追い詰められてジグザグ進むのか。吾輩なりに内側の内面での動きを推察すると、パンデミック発生の可能性を知った時担当者の頭にどうなるかが浮かばぬ筈はない。そして先ず、やるべきことをやっていなかったことに思い至る。ここでは、前述の一〇年前の新型インフルエンザ流行の際の報告書の勧告であろう（新型コロナウイルスにもそっくり当てはまる）。

そこでは「国立感染研究所・地方衛生研究所・保健所の体制強化、発熱外来の整備、ＰＣＲ検査体制の強化、医療従事者の防護具の提供、ワクチンの確保等」個別の指摘の上、「人員態勢や予算の充実なくして抜本的改善は実現不可能である。」としており、「この点は以前から重ね重ね指摘されている事項であり、今回こそ発生前の段階からの体制強化の実現を強く要望したい」旨結んでいる。嘗て勧告を行い今は専門家会議のメンバーになっている専門家も首筋の寒さを覚えたに違いない。この間の関係者の不作為の責任も背負って新たな事態に対応する中で、自分が全ての責任を取らされないように成功の日本モデルを示し結果を出さねばいけない。

何せ姿の見えぬ相手、事実や問題は逐次明らかになって行く。その度に不作為に伴う制約とは言わずそれを前提としつつ対応策を示すので、本来皆が等しく負い共有すべき厳しい事態をはっきりと国民に突き付けて対応を求められない。対策の中身の場当たり性も相俟ち、憶測

や不平や不満が噴出しポピュリスティックな対応が取られたりする。また政府内、国地方の不協和音も表面化する。

新型コロナウイルス感染事象は科学の領域であり医学的に解明が進み、次第に正体がはっきりしてくる。その度に打ち手の問題が認識されその背景が次第に露わになってくる。一旦片付くとそこで止まるが、また事態が動き問題が出てくると不作為や元々ある政府や政治や社会の機能やシステム不全が明らかにされてくる。例えば、前述のPCR検査能力不足や、治療薬の拡充や変異株のPCR同時検査や我国でのワクチン製造が進まぬことにも繋がっている。厚労行政の、認証・手当の迅速性や緊急時対応の欠如や、手続き・連携システムの能力不足・不全も次々と表面化してきている。

そして事態が山を越えるとまた不作為の虫が戻り、短期的にも中長期的にと同じような現象が繰り返される。

また、不作為の言い訳は窮すると「出来ないものは出来ない」との開き直りも生む。現に直ぐ出来る見込みのないもので当座の対応は出来ないし、中長期の取り掛かりに着手するインセンティブも湧きにくい。人々の不満・不安を何とかしようとの政治的思惑にも綻びを与える。アベノマスクはマスク不足に応えたものだが、小手先作業のつけは、実用面でも舞台裏ということでも虫眼鏡効果で露わになり、却って不信感を強めた。また昨年二月末の唐突な一斉休校は対策の選択肢としてはあり得るものの、あまりの準備議論や説明の不足・欠如でリーダーシップへの疑問を深め、更にはこの時点で急遽結論を得るのは無理な九月入学論争迄巻き起こし迷走した。

こうした思いつき的なものが一方にあり、他方には決断・実行の遅れが連鎖し、後に前述小林慶一郎氏が『失敗の本質』で時間コストと呼ぶものとなった。

第一次緊急事態宣言の出たのは四月七日、街の人波は消えたが流行のピークは四月一日頃、特措法改正後二十五日が経っていた。経済対策の迷走もあり国民への現金給付も遅れ消費減が四～六月期の実質GDPの減少率を大幅にした。これが政策当局に、宣言は消費者心理を冷え込ませることを重く考え、次に緊急事態宣言を出すタイミングを更に遅らせた。十一月からの再流行の急速甚大さを前にして、Go to travelを止めるのも年末、緊急事態宣言に到っては年を超えて一月七日となった。決断できない、それが誤った固定観念に繋がり次の正しい決断の遅れにつながる。

前述の『失敗の本質』は終わりに、第三波の教訓として、「今後のコロナ対策の大戦略は、まず、東京都での新規感染者数が一日百人程度になるまで感染レベルを下げること（一日五百人は多すぎる）。次に、医療提供体制の拡充、検査体制の拡充、接触確認アプリの普及の三

点セットで感染を低レベルに抑え込み、そのうえで経済の正常化を段階的に進めることです。」とし、更に「今後、日本が危機への対応能力を上げるためには、まず政治家と官僚が無謬性の罠から脱却すること、そして最悪の事態を想定した政策をスピーディーに打ち出し、『試行錯誤』を柔軟に繰り返して、政策を進化させることが必要だと考えます」と結んでいる。その指摘に沿った実行がなされれば評価されるところである。

ただある意味これだと、長年の不作為の罪を何時の間にか一年の混乱の罪に帰着させて、改善に務めて行こうということになってしまい、本当に深く心に刻んで当局の行動変容をこの面で遂げられるか、折角の機会を無駄にしかねないようにも感じる。このジグザグの中で、やっと制約としていたことが、実は改善努力がなされれば解消されまたそれは出来ることだとの事実証拠と認識に到達した。その一つが医療崩壊論である。その先の不作為を意識せず済ますとまた繰り返すことになる。

感染拡大が始まって初期の段階で、武漢からの帰還者の感染予防や感染隔離治療などの取扱いやクルーズ船内での感染者取扱いの教訓もあってか、感染者は無症状及び軽症者、重症者、重篤者の区分で、自宅、ホテル等施設、受入れ病院に分散して隔離されることとなり、その背景に医療資源特に病床数に限度があることが認識された。時が経つに従い、自宅治療の患者と常時連絡を取るべき保健所の機能に日詰まりが起きたり、施設に派遣される医療従事者の不足・不具合が明らかになる。院内クラスターが頻発するようになると院内体制の脆弱性が報じられ、医療従事者の装備の欠如や人工呼吸装置や重篤患者用のECMOの必要性そしてその為の専門医師・技師・看護師は勿論のこと、病床を増やしても医療従事者が確保出来ないことを知る。感染と隣り合わせで疲労の限度まで献身する医療従事者への感謝の念が高まるとともに、諸要素の最大公約数的な医療体制の限度への意識は強まり、緊急事態宣言の発令・解除に当たっての主要基準に感染者数と並んで有効能力とかけ離れた病床使用率（実数というより）があげられることに不思議を感じざるを得なくなった。

ところが、第三波が急速甚大に進行し出し、重症化率の高い高齢者の感染も高まり死者も増え、病床使用率でさえその警報が高まり、自宅や高齢者施設からの救急入院要請拒否が急増し、助かる命も助からぬ不安感・不信感が広まることになる。ここに及んで欧米に比べて医療機関数や医療従事資格者数やベッド数に遜色のない日本で、何故限度水準が低く医療崩壊が起り易いのかとの疑問が呈されるようになる。分科会で医療崩壊を危惧する医療機関関係者や日本医師会会長などが医療機関の経営悪化や医療崩壊を避けるためより厳しい自粛要請をすべきと訴える一方で、自医療機関では新型コロナ患者を受

け入れないことなどが知れると、疑念は更に深まった。

日本は医療機関は多いが地域の小医院が圧倒的多数でその能力がない、大病院も私立病院が多く、公的病院も国立病院と地公体立病院に分かれ主体が別々である等特殊性が次々に説明された。しかし、日本より桁違いの患者がいる欧米諸国で制度の違いはあれ崩壊が起こってないのは何かと詰められると、結局緊急事態を想定した医療資源の連携・適切再配分の機動性を持っているからであることが明らかになって、今からでも体制構築や工夫の余地があることも分かってきた。さらに言えば一〇年前の改善勧告を無視した不作為に行き着くわけで、緊急措置として前述の岡田女史の提言にもあり中国も感染拡大認識直後週単位で専門大病院を建設したように、当初専門病院との声を上げたところもあったが、いつの間にか萎んでいたことにも気づかされるのだった。

③較差

虫眼鏡効果は、大きくするだけでなく違いを鮮明にする。経済社会と人という視点で概観してみたい。

コロナは世界の隅々まで分け隔てなく浸潤し、皮肉にも世の問題も全て曝け出してしまう。否応なく実証が進み、DXに限らず全ての面で変革・変容せねばコロナもその先も光は見えてこない実態が付きつけられる。またこの四半世紀繰り返し言われた生産性向上や経済構造変革も実らぬ淳（おり）と化し限度を超え、若者を中心とした危機感やスタートアップの増加といった形で噴出しており、変革実現の最後の機会との警鐘に見える。

人間・人間社会をロボットという外の眼から見ているので、どうしても思考の過程を遡って観察してしまうため、以下は人間にとっては当たり前でわざわざ言葉にせず飛ばしているところの表現が多く読むのが煩わしいかもしれないが、その点予めお許し願いたい。

人間社会の経済構造は生産―所得―支出を三頂点とし、分配↓需要↑供給を三辺とする三角形の上で論じられる。定義上事後的には常に三面等価が成り立つが、中長期的に見れば、各頂点・各辺に構造要因を抱えている。例えば生産における一次・二次・三次産業やモノ・サービスのような産業構造や働き方であり、分配・所得における雇用形態や生産年齢人口や世代構成や資産構成である。また、需要・支出面では、消費性向（品別・世代別・時期時代別）、投資性向、公・私や内外需別等である。そして何処に起点を置くにせよ、全体が円滑に回ることを、検証し、適切な時間軸・関係軸上に積み上げた実現可能な総合政策で示すことが、中長期的には望ましい。転換期の戦略（構想）は、転型期と言われた半世紀前の経済社会発展計画のように、社会あげて調査分析検討した長期計画を共有して進めることが適当と考えられる。将に信頼の三角形で進めることを意味する。

コロナ下ではこの信頼の三角形にひびが入って円滑を欠き、従前からあった不具合が場合によっては拡大しつつ危殆に瀕しており、それを虫眼鏡があぶり出している。コロナ感染は三蜜な場所・状態で、声出し・接触で起こる。従ってモノと向き合っている現場では感染の恐れは少ない。機械化された工場や個人的にモノ・サービスに向き合う生産・サービス現場は比較的安全であり、モノやヒトをヒトの間で動かしたり隔地間を運んだり、蜜の形でサービスしたり運んだりする生産・サービス行動は制約され、それに携わる人々に行動変容がきつく迫られる。エッセンシャルワーカーと言われる人々のうち食糧の生産や流通を提供するサービスは比較的安全な領域であり、医療・介護関係者等はもろに危険に曝されている。幸いなことは生活に必須な食料の生産、収穫・加工の縦生産系列は確保されたものの、成果物へのアクセスのところに様々な制約が出ている。そして蜜状態の場への集団運送やイヴェント開催が縮むことになる。その裏側に分野ごとの所得減少や消費アクセス困難度合からくる消費・利用の減少があり、売り上げ・所得減少がある。

消費という面で統計的にも明らかな影響をみると、対面型サービスが苦境に立たされているのに対し物品購入やコンテンツ配信などネット消費は好調に推移している。また、業態や分野でみると外国人の激減で百貨店の落ち込みが大きいのにスーパーは好調、遊園地や映画館、居酒屋や喫茶店・カフェの落ち込みが大きいのに対して飲食料品小売りや医薬品・化粧品は伸びている。そして最近では雇用消費環境の悪化と消費への悪影響の相関が強まっているという。

経済社会単位ごとにみると、雇用所得稼得と食・住・役務消費主体の家計・家庭・家族は密な単位でそこでのリスク管理が重要である。企業・店舗や公的機関（学校を含む）等生産・利用消費の組織では蜜を避けるための集合制限から、働き方の工夫が必要となりDXの進展を後押しし生活変容を齎す結果ともなっている。他方命を守る機関・組織は何が何でも万全の機能を発揮してもらうよう、非感染のあらゆる手を尽くすことになり、そこに生ずる需要もある。それこれ合わせて感染予防と経済悪化のトレードオフが生じ、双方の適正水準を両立させる意識共有と政策対応が大きな課題となっている。

更に人そのものに及ぼすこれら較差のあるマイナス要因効果の結果生じる問題が、時間とともに多く大きくなってその対応が課題となり、元々あるその傾向をも助長し、甚大かつ深刻な社会問題化してきている。

年を越えてからのある新聞のコロナ下における生活についての世論調査によると、オンライン利用が増えたと

いう。小中高生の自殺者は過去最多で、相談窓口チャイルドラインではいじめに関する相談が大幅に減った一方、気分の落ち込み・在宅勤務の親との関係・自傷行為の相談が増え、死にたいと思っていると考えられる相談が五倍近くに上った。東京都の自殺者数でみると二、三一人で前年より一二四人増、年代では、四〇代、五〇代・二〇代の順で、男性が微増に対し女性は二割増となっている。一回目の緊急事態宣言が出された昨年四、五月ころは前年を下回っていたが、六月以降全ての月で前年を上回っている。自宅療養の三〇代の女性が迷惑をかけて申し訳ないと悩んで自殺したケースもある。ライン等による見守りもあるが、医療従事者の家族への差別的発言が問題になったように、その手の心無い差別的発信が傷つけている例も数多く挙げられている。

三、ロボット

ロボットと人間との共存について実証的検討のための、観察・判断・思考努力をこのコロナ下故に強めている。

こうして見てくると、科学的思考は吾輩にも親和性が高く、ロボットにとって内容的にも、より精細により総合的により空間・時間の広がりをもって円滑に進めて行けるように思う。むしろコロナ下では人間の方がうまく行っていないように見える。更に、その断面、断面にお

いう回答の多いものの順でいうと、買い物、友人・知人とのやり取り、会議や打ち合わせ、遠方に住む家族とのやりとり、学校の授業・習い事、公的機関への申請、病院の診察となっており、今後増やしたい順は公的機関への申請や会議・打ち合わせが断然高い。なお、テレワークはメリットが大きいとするもの三八%に対しデメリットが大きいとするものが二三%で、因みに定着すると思うかの問いには五三%の人が思わないと答えている。

一方家族と接する時間が増えたとするのが二二%（変わらないが61%、家族以外とは減ったが一%（変わらないが91%）、そしてストレスは増えたが五三%（変らないは44%、ストレス増男性47、女性38%）となっている。

感染リスクを日々感じながらステイ・ホームが構成員の立場、関係を変え、巣籠りが病的なものにまで転化したり、感染者が出て自宅療養者も一万人を越えたり、本人も家族もストレスが極限まで行ったり、元々の不協和音があればその助長もあり、様々なトラブルや身体的・精神的異常をきたすことが増えている。

現象的にみると例えば、昨年の自殺者数は十一年ぶりに前年水準を上回ったと言われる。原因・動機で伸び率が高いのは学校が原因の女性の自殺者が約八割増、経済・生活は二〇・三〇歳代合計で約六割増、孤独感は約三割増等と特に女性についてコロナの影響が見られるとける判断・実行については、情緒分野の思考が絡み、人間社会の社会的ビヘイビアーは情緒間せめぎ合いの要素が高まってくる。それ故に対応の右往左往も大きくなる。

突き詰めると物理的存在の在り様の違いを、機能や結果対応を如何に共存可能に収斂させられるかが行き着く問題であろう。従って人間側からみれば、物理的力・機能差（過渡期も含めて）を情緒系の能力獲得（脳・神経のニューラルネットワークをディープラーニングで五感や受発信や体の動きや行動に反映する能力を人間並みにする）と、どう安全安心に結び付けていけるかが、人間との共存社会に同じ市民権をもって参加させられるかどうかの鍵になるだろう。

共存の受容という観点からは、最初に装着される物理的圧倒的力（自動機械）は制御の装置や機能がなければ脅威が先立つであろう。次の人型の身体・身動きの酷似はそれだけではペットを超えたものという認識にはなりにくかろう。そして人工知能の極限酷似の動きは、物理的力との整合化を図りつつ進展させられるかが課題となろう。そこでは少なくとも悪意の設定は避けなければいけないことを吾輩が言ってきているのはご案内のとおりである。勿論同時に人間の方が悪意を以てそのために「自動化機械＋人間酷似」のロボットを囲い込んだりしないようにしなければならない。

（一）カレル・チャペック『ロボット』

さてこの点でロボットを巡る議論を、経緯的にも現代に通じるものとしても多くの示唆を与えてくれるのが、矢張りカレル・チャペックのロボット初出の一九二〇年秋出版、SF劇「R・U・R（エル・ウー・エル）―ロッスムのユニバーサルロボット」（通称ロボット）で、チェコ語ROBOTA（賦役）からの新語ロボットが描かれている。粗筋を凝縮して紹介してみよう。

先ず舞台は島のロボット工場から。昔哲学者で根っからの唯物論者であるロッスムが原形質という生きた物質を化学的合成によって似せて作るところから始まり、化学的には全く異なった構造であるにもかかわらず、まるで生きたものであるかのような物質を発見、試験管の中で我々と違う素材の人間まで作れる生命を作り出す。その生命を試験管から取り出し、速く発達するようにし、器官やら骨や神経その他諸々を作り、様々な物質、触媒とか酵素とかホルモンなど見出し、人間とでも呼べるものを作り出そうとし、いろいろな腺を一本残らず人間の身体にあるように作ろうと考え、盲腸、扁桃腺・・そして生殖腺まで作って行く（↑クローンやES細胞を思わせる）。

甥のロッスム技師が島にやってきて、人間を作るのではなく、生命のある頭脳程度の高い作業機械を作ろうと

転換する。両者対立し閉じ込められた実験室で死んだ老ロッスムはもう二体生理的化け物を何とか作り出していた。若いロッスムは人間をやめて機械のロボットを作り始め、労働節約・コストカットの為の人型ロボットを生産して増加する世界の需要に応えて搬出する（ロボットは人間でなく、機械的には人間より完全で、素晴らしい知性を備えているが、魂は持っていない消耗品になる）。工場の首脳陣は、英国の技師ファブリ、仏人研究部長ガル博士、独人心理学者ハレマイエル、ユダヤ人経理部長・領事のブスマン（ビジネスマン）、そして社長のドミン（ラテン語の主を意味するドミヌス）、そして建築士アルクビスト（ラテン語のある者―主より上の「誰かあるもの」をチャペクは考えていたのではないか）

そこへグローリー会長の娘ヘレナが訪れるところで序幕が始まる。

ドミンはじめ首脳陣との人道問答で展開する。機械対人間の論争は平行線で終わる（首脳陣間で受け止め考えに差があるらしいことが示唆される発言はあるが）。すなわち、ヘレナがロボット達を人を扱う様に扱うべきでロボット解放が必要で人権連盟を作りたいと言う。それに対し、ロボットは喜びも味覚も感じず愛することもなく何にも関心がない。その生産性のおかげで物は豊富になり無償で配られ貧困もなくなり人々は労働から解放され好きなことだけすればよくなる（仕事を奪われ労働の良さも失われる、そんな楽園のような話ではないというメンバーもいるが）、といった説明がされる。そして、反抗なぞ無い、勿論機械は丁寧に扱わねばならないが、ロボットの痙攣と呼ぶ歯をガチガチさせるのは出てくる。これは器官の故障で廃棄処分にしなければならないというと、ヘレナは「それは魂だわ」と叫ぶ。自分で自分を壊さないように痛みを感じさせる実験をしているというのに対し「何故魂を作ってあげないのか」と問う。出来ないから、関心外だからとの答えが返ってくる。

皮肉にもヘレナは首脳陣すべての求愛の対象になる。

転じて始まる一幕では、ドミンの妻となって十年のヘレナの登場と港に見える軍艦がロボットの反乱を示唆する。ヘレナはロボットによって実を結ばない花（子供を産まなくなった）になった人間を嘆き、ロボット生産の制限を主張するが否定されてきた。ロボットに心をというヘレナに同情したガル博士が生理的関係素を人の面倒をみるロボット等に一部導入、その者の中から反乱の指導者が出たことが明らかになる。更に心を主張するヘレナにガル博士はもう遅いと言う。覚悟したヘレナは秘匿されていたロッスムの設計図を燃やしてしまう。

そして二幕は雲霞のごとく「人間は敵」とのロボット組織の宣言をもとに戦闘ロボットを先頭に蝟集してくる無言のロボットの反乱軍に、何故とどうするで揺れる首

脳陣の論争になる。戦闘を教えたヨーロッパが悪い、から始まって、人道的問題、そして作りすぎ、といった議論が延々と続く。鉄線に二千ボルトを入れて近づけなくするが益々増加するロボット。「壊れるが作れないから、死ぬしかないとの不満だから、設計図を渡して停戦し生き残って捲土重来を図ろう」との論に辿り着くが、ヘレナが焼いたと聞き一転愁嘆に暮れる。ガルがヘレナに頼まれ一部人間的に改造したことの責任論にも発展、ガルが必死に試みるが製造過程で必要な重要な二つの薬品の構造が正確に分らず挫折。最後はブスマンが有り金をもって直か交渉へと皆の止めるのも振り切って出て行くが、鉄線に触れ爆死する。いよいよ万策尽きついに突入され、反乱軍の首魁の一人がここにいたラディウスであることも分かる。そして一人を残し皆殺害される。

アルクビストが製造方法の解明・研究の為残され、ロボット委員会から催促され続ける。行き詰まって、付き人のロボット、ヘレナ（生前のヘレナに名ずけられた）とプリムスの解剖を決意。だが互いに庇い合う二人に負け開放、アダムとイヴの予感を残し終幕を迎える。

既に百年前『ロボット』で、生物・生理学的に人間を創ろうとの試みに始まり、人のように口をきき人の五倍もの労働をこなす人造人間が大量に創造されるだけでなく、ロボットがあまりにも大量の製品を製造し、労働者は街頭に放り出され、さらには魂を持ったロボット、つまりＡＩによって人類はとって替わられ、ＡＩによって滅ぼされる可能性すらあることがカレル・チャペックによって述べられていたことに驚かされる。

二〇世紀は、戦争と産業発展の世紀で、兵器の機械化、生産の自動機械化そして通信の高度化、ＩＴの発展と世界の構造変化が進展。宇宙船の高度ＡＩ装置が反乱を起こす映画や産業用ロボットが歩行や会話を始め出したりする。二一世紀に入りその動きは加速化しており、三十年前にビル・ゲイツが誰でもどこでもＩＴを普通に使えるよう機能が進化する、といった状況に近づいている。

ビッグデータによるディープラーニングの進化で、チェス・将棋・碁と人間を破り脳・神経のシンギュグラリティーの段階が指呼の間との声も上がっている。

アンドロイドに代表されるように、人間の身体・五感を酷似させ人間の心をつかむ試みも、認知科学、脳科学、心理学等と共同して人を知るロボット研究を深化させている。ロボットはチャペックの想定した究極のロボットに近づいているといえよう。

（二）哲学

いわばそこで生まれた変異種が吾輩なのではないか。

ＡＩの急速な発展を踏まえ自己ラーニングの最大限可能な運動機能付きの独立個体ロボット。その時出来る最大限の大きさと形が紙魚型だったということで、使用目的からもアンドロイド的発想は持ち合わせていなかったのだろう。そして幸か不幸か、自己の管理のもとに置こうとした作者は亡くなり、吾輩も脳神経と体が分離した形で吹き飛ばされた。そして奇跡的にご主人の皮膚表層にへばりついた人工知能部分が特別教育ラーニングを受けて進化してきた。悪事もなせる汎用性を持たせた作者の悪意は消せたが寿命は変えられていない。この虫、元々エサが何もない状態でも一年以上生息することが可能で、虫の中では寿命が長く七～八年は生息するとされる。何故そこだけ実物と酷似させたか、実験段階で何処にいても消せるようにとした位しか思いつかないのだが。

寿命がある吾輩が、寿命の無い人間の痛みや病気に無縁な、ヒト型で力は人間を圧し、人間能力を超える人工知能を持つロボット論一般をなすのは、今後のロボットと人間のあり様がどう進み、社会をどう変革し、如何に共存関係を築いていけるかが、偏に心配だからである。

身体能力・科学能力はロボットが高いことは勿論として、それと情緒や感情といった精神的能力との総合の中で、人間の認識・判断・行動等の営為が出てくるわけだが、問題はその結節・融合を人間らしくしているところの営為はどのように考えればいいか。人間の学の側から見た時それは、哲学ではないか。

チャペックが『ロボット』を書いた頃、フランスの大哲学者アンリ・ベルクソンの雑誌発表論文『形而上学序説』（1903）が独訳（1912）、英訳（1914）で単行本化された。直後の『創造的進化』で思想は更に補強されているが、仏文原文自体は、後に初めて『思想と動くもの』（1934）の中に収められた。

『形而上学序説』によれば、物を知るのに二つの見方がある。一つは相対で、物の動きを外からの視点で見、座標や基準点などの符号によって表現する、その二点で相対という。もう一つは絶対で、運動体（事象）に内面的な謂わば気分を認め、外からみるのではなく従って符号にも依存せず、内から動きの中でそのままとらえる。例えば小説で事件や人を私が語るに、描写・記述・分析による限り相対の中に留まる。符号や視点はその人物が他の人物と同じか違うかを言い表しているに過ぎない。しかし、その人物の固有な点、その本質をなしている点は符号によって言い表せない、その意味でその人物そのものとの一致が私に絶対を与える。また絶対は直観（対象の内部に身を移すための同意）の中でしか与えられず他のすべては分析の領分（相対）ということになる。

分析は周りから対象を見るため、不十分な表現を十分

にするために限りなく視点を増やし様々な符号を使ってゆくので、分析は無限に続く。しかし直観は、もし可能だとすれば、単純な行為である。実証科学は分析を慣用手段とし、科学は何よりも符号を基として仕事をする。自然科学の中で最も具体的な生命科学でさえ、生物、その器官、その解剖学的要素、というような眼に見える形に頼る。それらの形を互いに比較し、複雑な形を単純な形に帰し、延いては生命の働きをその眼に見える符号ともいうべきものについて研究する。事象を相対的に知る代わりに絶対的に把握し、事象に対する視点を取る代わりに事象の中に身を置き、分析する代わりにその直観を持ち、延いてはあらゆる符号的表現、翻訳、表現に依らずに事象を把握する方法があるとすれば、哲学は正にそれである。してみると哲学は符号なしにやろうと志す学である。

我々が誰でも内から、単なる分析によらず直観によって把握する事象が少なくとも一つある。それは時間を通じて流れてゆく我々自身である。持続する我々の自我である。我々はその他のいかなるものとも、悟性的にむしろ精神的に同感することは出来ない。しかし我々は我々自身とは同感する。

吾輩には大変難解であるのだが、どうやら認識に二通りあり科学的認識は人間界の周り或いは自身の身体的な自然といった、自我と違うところに座標軸や基準点等符号のヒントを持ち、それによって実証やあるべき姿が相対的に判断され、時間と共に新たな発見があり符号とあるべき姿が新たになってゆく。他方精神的な認識は様々な情緒・感情があり直観的で固有絶対的である。この二つの認識が融合し円滑に作用していくには、哲学の力が要り、それが身についてゆくことが必要である。それは時間の中で経験の積み重ねの上であるべき直観の蓄積となって人間社会の円滑と発展を支えてゆくことになる。

哲学という言葉自体があいまいな点を持ってはいるが、印度哲学において、仏教の唯識論がそれを示唆している。情緒・感情や思考を司る心の構造を、眼識（視覚）・耳識（聴覚）・鼻識（臭覚）・舌識（味覚）・身識（触覚）の前五識（感覚）とし、意識を第六識（知覚・感情、思考・意志）としこれら六つの識を表層の心とする。そして深層の心として、第七識（自己執着心）の末那識（まなしき）と第八識（根本心）の阿頼耶識（あらやしき）を置く。

この心がどう動くか、その心の動きを「識の転変」と言う。

深層の阿頼耶識が内蔵している感触・注意・感受・想念・意志などの根源的と呼ばれる識知に基づいて、我見（個人我についての妄信）、我痴（個人我についての迷い）、我慢（個人我についての慢心）、我愛（個人我への

愛着）といった煩悩がつねに随伴する、自我意識と呼んでもよい末那識が活動し思考作用を司る。そしてこれもまた阿頼耶識から生じる六識でそれぞれ眼識が色を、耳識が声を、鼻識が香を、舌識が味を、身識が触（触れられるもの）を、意識が法（考えられる対象、概念）を識知・識別する。

末那識とこの六識とが「現世的な識」であり、我々が意識の分野としているもので、阿頼耶識は無意識としている。時々の末那識と六識の行う意業は刹那だけ現在して、過去に過ぎて行く。その際に阿頼耶識に余習を残す。それが種子として阿頼耶識のなかに蓄積される。

このような「識の転変」によって、存在の様態をどのように見ているかに、（三性）あるとする。すなわち、

遍計所執性（へんげしょしゅうしょう）＝構想された存在　凡夫の日常の認識。

依他起性（えたきしょう）＝相対的存在、他に依存する存在

円成実性（えんじょうじっしょう）＝絶対的存在、完成された存在

の三つである。

このような見方は唯識を待つまでもなく大乗仏教の基本であり、その原型が既に般若経に説かれている。煩悩を述べたが、それらの種類を表す心所という心作用には六種五十一あるとされ、六種は、偏行位・別境位・善位・煩悩位・隋煩悩位・不定位の六つである。例えば善位は、自らを向上させていく善なる心の働きのグループである。その働きによってどこまで悟りが開けているか、それが三性で表されている。

この部分が前述したアンリ・ベルクソンの哲学に当たるのではないか。

それでは中国はとなるが、そこはこうではないか。

およそ紀元前六〇〇年から紀元前二〇〇年にかけて、ユーラシアのいたる処で哲学運動や宗教運動が起こり、人類が繁栄するための多種多様の展望がひらけた。後に枢軸時代と呼ばれるようになるこの時代には、ギリシアで発展した思想の多くが中国でも出現したし、その逆の場合もあった。実際今日の西洋で一般にいきわたっている信条とそっくりなものが中国でも生まれていた。

仁・義・礼・智・信の五常講に代表される儒教の人間あるべき道の教え等。ところが、儒学（とりわけ儒教の経学）が欧米でいう「哲学」に相当するか否かを疑問視する学者も出たり、他方、儒教にも仏教、道教からの影響が次第にみてとれるようになり、この三教の総合的学際的研究の必要性が知られるようになるに従って、現在では「中国哲学」の名を避けて「中国思想」の名が用いられる傾向にある。心や認識のメカニズム論が前段としてなく、あらざるべきものとの対比でいきなりあるべき

姿、倫理観などが語られるからであろう。

デカルトは「我思うゆえに我あり」と言い、ベルクソンは「その中に我々は生き我々は動き我々はある」と言った。哲学する人間をロボットに適切に投影するには、その部分の成否にかかっている。吾輩が以前善意といったのは表出する倫理感としての善だが、それが哲学する脳神経の働き（認識・判断・決定・行動）としてそこへ至る道筋も辿れるか、結果のところで仕組むか、育ちあがるように遺伝子的に埋め込むか、教育で持ってゆくか。出来るのだろうか。

（三）惑い

いつの間にロボットを外から見ている吾輩がいる。相対という意味では、立位置とともに人間の基準でロボットを見ており、それをロボットの絶対哲学で考えられるか。ロボットの目的論、能力論、存在論夫々を、そして相互関係を、更に総合的に論じ詰め実証しなければならないが、今の吾輩にはロボットの在り様についての絶対的答えを出せていない。その中で普遍的なものと確信している絶対はやはり善であり、まだそこ迄でもある。

西欧文化の諸学特に哲学の原点として語られるのがキケロである。その代表作の一つが『善と悪の究極』であり、その肝が義務論でもあり別途『義務について』もある。

前述の第三波の教訓は「不思議の国日本、そして先を考えると改造を」ということであったが、この義務論で整理してみたい。

憲法前文にあるように、国の政治は国民の崇高な信託によっている。即ち「そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。」とある。そして憲法は基本的人権と健康な生活を保証し、公共の秩序に反する場合を除きその多様性を認め他者の尊厳を認め合うことを求めており、国家に信任されたものの義務を課している。

敢えてその主な条項を吾輩なりに列記すると次のようである。

（第十一条）国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与へられる。

（第十二条）この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する

責任を負う。

（第十三条）すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

（第十四条）すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。

・・・

（第二十五条）すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。②国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。

（第二十六条）すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。②すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う。義務教育は、これを無償とする。第二十七条　すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負う。②賃金、就業時間、休息その他の勤労条件に関する基準は、法律でこれを定める。③児童は、これを酷使してはならない。

（第二十八条）勤労者の団結する権利及び団体交渉その他の団体行動をする権利は、これを保障する。

（第二十九条）財産権は、これを侵してはならない。

自由・平等・博愛を国家社会像とするシステムを信認関係に基づき作っており、その統治には、理性・自然法・共同体概念が重要である。そのような社会は心技体備わった運行を続けている筈だが、コロナは結果としてこれら条項に照らしてみて満たされていない点を大きく浮き彫りにする。また公共の福祉と権利の間の調和の軸を漂流させ、普段は見えないそのさまを虫眼鏡で映し出す。

例えば知の分野では科学の心（実証の心）を失わせる。ヒトの立場に立つ（多様性を認める）点では、（イ）イマジネーション力を失う（ロ）思い遣りの心を失う（ハ）自分ファーストになる、といったことで、検証・洞察・中長期を忘れ右往左往することになる。

それは政治指導者や専門家や政策当局者のコロナ対策当事者の在り様に如実に投影され、同時に多様な国民各層・各個人の受け止め方や対応の在り方にも影響を与え、結果として認識共有や対応受容などをあちらへこちらへと動かして信頼（信託）関係を大きく不安定にしている。

これを社会の持つ復元持続力の許す時間の中で、積み上がり行く科学的実証の共通認識を醸成し、対応の基本哲学を共有し、信頼関係安定化を実現し、ニューノーマルを作り出せるかが、まさに必解の課題である。

吾輩としてはそのメカニズムを実証検分していかねばならない。その為、人間の哲学は逆境を革新で克服する力も総動員してどう信頼を回復して行けるのか、それはロボットの振舞いとし得るものか、そうだとすれば如何すれば達せられるのか。コロナの収束状況を、まだまだ観察し続けていかねばなるまい。

今回も「つづく」とすることにならざるを得ない。

つづく。

回想　東京都杉並区荻窪の思い出

――都市は「ふるさと」か――

山本鎭雄

杉渓中学校の通学路で

戦後、東京都中野区立新井小学校から杉並区立桃井第二小学校（桃二小）転校した。

伝統のある桃二小は中央線荻窪駅に近く、住宅や商店に囲まれていた。校庭には春は白旗桜が咲き、一部破損した二宮金次郎の石像、方形の屋根に覆われた相撲の土俵場があった。校舎の直ぐ近くを神田川に注ぐ善福寺川が清らかに流れていた。二階の教室から遥かに富士山を眺めることが出来た。一九三六（昭和一一）年一〇月に与謝野晶子が作詞した校歌「高くそびゆる富士の嶺は　桃井第二の校庭へ　学びの心済み入れと　朝々清き気をおくる―」に次ぎ、「あおげば尊し　わが師の恩　教えの庭にも　はや幾年―」と合唱して卒業した。

桃二小を卒業し、杉並区立松渓中学校に入学した。荻窪駅南口に近い私の家と松渓中学校のいつもの通学路の途中に旧近衛文麿邸の荻外荘があった。戦前、近衛文麿は第一～第三次の内閣総理大臣に就任したが、敗戦直後、荻外荘で青酸カリを飲み、自殺した。

私の通学の途中、荻外荘は高く積み上げられた石塀と生け垣があって、広大な敷地と建物を見上げても、その内部を見ることは出来なかった。荻外荘の敷地はなだらかな傾斜地にあって、表通りに面した北側の「台地」に邸宅があり、「低地」には湧水池があり、池水は善福寺川に流れていた。

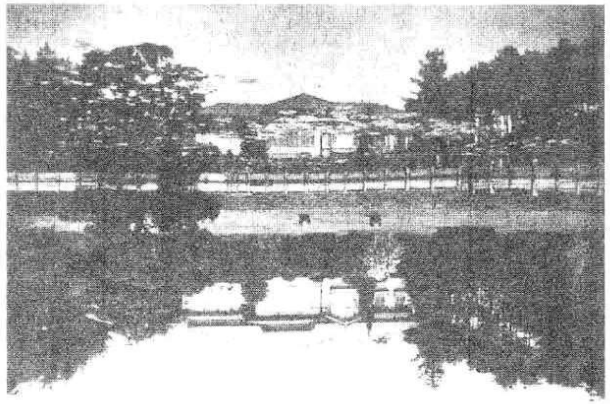
近衛邸の筋向いに漫画家の田川水泡（本名・高見沢仲太郎）の家があった。樹木に囲まれ、道路から少し奥にあり、赤いベンガラ色の洒落た家だった。内弟子として田川水泡の家に住み込んだという人気漫画家の長谷川町子を見かけたという噂を聞いた。

毎朝、朝日新聞朝刊の四コマ連載漫画の「サザエさん」を見て中学校に登校した。下校時、今日こそ長谷川町子を見かけるかなと思い、わくわくしながら歩いたが、ついに見かけなかった。田川水泡の隣に版画家・装幀家の恩地孝四郎（妻・潤子は小林秀雄の妹）の家があった。当時、書店で見かけた児童書や雑誌の表紙に恩地の装幀画が載っていた。

音楽評論家で博識の大田黒元雄は、ＮＨＫのラジオ番組「話の泉」で人気を博していた。彼の大豪邸が近衛の荻外荘の近くにあった。大田黒元雄の死後、遺族が敷地と建物の一部を杉並区に寄贈し、杉並区立大田黒公園として公開された。自由に庭園の美観を見物し、散策することが出来るようになった。晩年の私の母はこの大田黒公園が朝食後の散歩コースだった。また、角川書店の創業者の角川源義が寄贈した杉並区立角川庭園も近くにあり、数寄屋造りの建物は幻戯山荘（詩歌館）と称され、公開されている。

近衛文麿の荻外荘

荻窪駅南口のさらに南東に実業家、政治家、高級軍人、大学教授、官僚らが武蔵野の山手台地に別宅を建てた。その当時、この一帯は田畑が広がり、松や檜が繁り、霊峰富士を眺望することが出来た。これら別邸の建築は明治末期にはじまり、関東大震災後に加速した。荻窪駅南口の「御屋敷町」で最も注目されたのがこの近衛文麿の荻外荘であろう。近衛文麿は荻外荘を譲渡される以前の晩秋、この邸宅を訪れて、「武蔵野の面影」が残る景観や敷地の印象を述べ、大いに「気分の転換」になったと回想している。



荻外荘（1928年頃の邸宅）

敷地は南を受けた丘で、庭の外には小川が流れ、その先が田園になって、向の丘につづいているのであるが、目に入るところ、余り建物などが見えず、恰度晩秋の頃であったから、周囲の松林の間には紅

葉も美しく、丘や原には、薄の穂が波打ってゐるといふ訳で、―久し振りでふるさとへ帰ったといふやうな感じがしたことであった（近衛「荻外荘清談（三）」『政界往来』三月号、一九四〇年三月）。

近衛邸は元老の西園寺公望が「荻外荘」と命名した。近衛文麿に組閣命令が下ると、近衛は荻外荘に松岡洋右、東條英機、吉田善吾らの四相候補を招き、第二次近衛内閣の基本方針を協議、のちに日独伊三国同盟が締結された（「荻窪会談」、一九四一年七月）。近衛は荻外荘を組閣本部として各官僚を任命した。同年一〇月、近衛首相は荻外荘に陸・海・外相・企画院総裁の四人を招き、対米戦争への対応と日中戦争（支那事変）の日本陸軍の駐留について協議したが、東條陸相の反対で不調に終わった（「荻外荘会談」）。その直後、第三次近衛内閣は総辞職し、東條内閣が成立した。閑静なはずの荻外荘とその周辺は政治家、官僚、新聞社などの取材合戦、さらに特高や憲兵の常駐で「御屋敷町」のこの一角はさぞや賑やかだったであろう。

敗戦直後、アメリカ占領軍GHQは近衛を戦争犯罪人容疑者に指定し、巣鴨プリズンに出頭を命じた。近衛家は五摂家の筆頭で、近衛は一貫して「国体」（天皇制国家の形態）の護持を信念とし、昭和天皇に累が及ぶことを懸念したのであろう。だが、近衛は「予期しない、意図せざる結果」（マックス・ヴェーバー）としてGHQの指令で戦争責任を負うことになったと思われる。

四五年一二月、近衛は次男の通隆と深夜まで話し合い、次男に乞われ、鉛筆書きでメモを書いた。「米国から今犯罪人として指名を受ける事は誠に残念に思う。――いつかは冷静を取り戻し、正常に復する時も来よう。この時始めて、神の法廷に於いて、正義の判決が下されよう」（要約）という遺書である。その早朝、青酸カリで自殺した（以下の冊子を参照、国歴史跡指定記念特別展『荻外荘』と近衛文麿　展示図鑑』二〇一七年四月、杉並区立郷土博物館。国指定史跡『荻外荘（近衛文麿旧宅）』二〇一八年三月、杉並区教育委員会。『新版　荻窪の記憶』二〇二一年二月、地域区民センター協議会）。

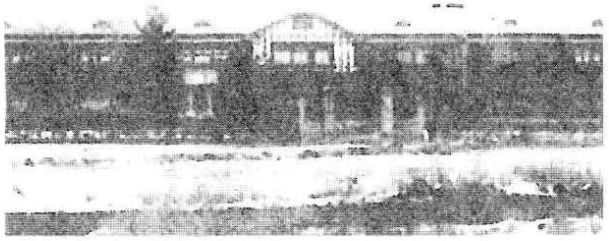
伝統の杉並区立桃井第二小学校（桃二小）

二三（大正一二）年九月一日、関東大震災が勃発し、とくに東京の都心部は甚大な被害を受け、住宅が類焼し、都心部の住民は郊外への移住を余儀なくされた。荻窪も農村地帯から郊外住宅地に変容し、急速な人口増加で小学校の開校も迫られた。二八（昭和三）年、桃二小が開校した。戦争末期、戦災で焼失を免れ、木造の校舎は存続した。

五〇年六月の朝鮮戦争の勃発を契機に、GHQは警察予備隊と海上警備隊の拡充を発令した。また朝鮮戦争の

直前、GHQはレット・パージ（赤狩り）を指令した。その後、追放指名者の範囲は公務員、教職員組合の活動家、有力企業、軍需産業の幹部にまで拡大された。しかも、義務教育の小・中学校の教員に対して「教育二法」（「特定政党への支持を禁止する臨時措置法」と「教育公務員について政治的行為を禁止する特例法」）が可決された。

桃二小の担任の先生は父兄に渡すようにと、教育の民主化と非軍事化にたいする「逆コース」として批判する杉並区教職員組合のチラシを配った。その当時、私は何も分からなかったが、何か風向きが慌ただしく変わったと感じた。変化する政治と社会を微かに感じながら、「社会科」の授業を熱心に聞いた。小学校六年生の最後の学年末試験で百点満点を貰い、「社会科」だけが通知表で最高の評価だった。今、そんなことをただ漠然と記憶している。



新築の桃井第二小学校　1928（昭和３）年

戦後、食料事情が改善し、私は満腹するまで食事するようになった。それが習慣的となり、デブとなり、横着になった。戦前、桃二小は全国小学校相撲大会で優勝した。その伝統もあったのであろうか。体育の時間に男子は校庭の隅の相撲場で相撲をした。「アンコ形」の私はいつも押し出しで勝った。行司役の担任の先生は私に向って団扇を上げて、「みぃーぎ、東富士」と勝名乗を挙げた。その当時、横綱の東富士は「怒涛の寄り」で人気を博していた。

私は体育の時間の相撲だけでは満足出来ず、近くの柔道場に通い、柔道の稽古に励んだ。赤帯の太った道場主の師範に稽古をつけて貰ったことがある。私は右手の袖で師匠の身体を押して後退させ、左足のかかとを内側に払った。師範はよろめき、「おっとっと」と言って後退した。この小内刈りの連続技は今でも懐かしく思い出す。道場別の団体戦があって、中野駅北口の警察大学校の広い柔剣道場で試合をした。その警察大学校は噂に聞いていたスパイ養成の陸軍中野学校の跡地にあった。

週一回、習字教室に通った。ほかに、幼稚園でそろばん教室に通った。先生が、「御破算で願いましては」と言って、数字を読み上げると、みな一斉にそろばんの珠をパチパチと弾いた。計算した結果が正しければ、生徒は「御名算」と言い合った。次第に、先生が数字を速く読み上げると、私は途中でそろばんの珠を弾くのを止め

てしまった。暗算は読み上げられた数字を頭にイメージしたそろばんの珠を弾く。だが、暗算は一向に上達しなかった。

近くの駄菓子屋で箱入りの「紅梅キャラメル」を買った。箱にはおまけに巨人軍の投手、捕手、内野手、外野手のカード一枚が入っていて、九名ワンセットを揃え、製造元のキャラメル会社に郵送すると、景品や冊子が送られてきた。その冊子を見て、夏休みのグループ学習の宿題にキャラメル工場の製造から、菓子屋で売られるまでのプロセスを絵入りで模造紙に書き写した。それを黒板に張り、グループ学習の成果を発表した。今でも記憶に新しい。

杉並区立松渓中学生の思い出

桃二小を卒業し、杉並区立松渓中学校に入学した。桃二小の卒業生は私立中学の進学者を除き、環状八号線の東側に住所があれば、自動的に松渓中に入学した。西側であれば、杉並区立神明中に入学した。なかには、その東側に住所があっても、卒業前に西側の知人宅に住所を変えて「寄留」し、高校受験に実績のある神明中に入学した生徒もいた。私の二番目の兄が東京学芸大の学生の時、教育実習先がたまたま神明中だった。私は秋の運動会を見に行き、運動着を着た兄を探し、何故かホットしたことがある。

松渓中の入学式の翌日の最初の学級会で、担任の先生が総務委員（学級委員）をどう決めようかと提案すると、同級生の一人が「はい」と手を上げて、自薦するではないか。桃二小ではなかったことだが、入学早々、学級委員の自薦にはただただ驚いた。一年間、学級委員の「吉さん」は誰彼と区別せず、ともかく無事に任務をまっとうした。今も近況の電話で挨拶程度の交友が続いているが、町内会の世話人など地域社会の活動に極めて積極的のようだ（本稿の作成の際、Y君には多大の協力をいただいた。ここに謝意を申し上げる）。



松渓中学校
入学式後の集合写真（1953年4月）

中学生の頃、自転車に乗り、良く遊び回った。お菓子屋の「先ちゃん」とよく遊んだ。私が自転車で彼のお菓子屋に行くと、いつも店番をしていた。一応の区切りを付け、一緒に自転車に乗って出かけた。近くの神社に行ったことがある。境内でしばらく駆け回り、遊びに飽きて休憩しようと、社殿に近づくと、階段の下の地面にすり鉢状の「蟻地獄」を見つけた。穴に落ちたアリが外に出ようとしきりにもがいていた。そこで、拾った枯れ枝で「蟻地獄」をぐちゃぐちゃにしたことを思い出す。

新任の社会科と体育の兼任の若い先生には、今も不愉快な記憶がある。生徒の指導には熱心だと言えば、それまでだが、いたずらが目立つ生徒を見ると、職員室に来いと言い、泣き出すまで執拗に説教した。私も職員室で泣いた記憶がある。生徒は陰で「憲兵」と渾名を付け、「憲兵が来た」と言って、その場を一斉に逃げ出した。

「憲兵」は教室で「東京教育大学を卒業した」とよく自己紹介した。私の兄は東京学芸大を卒業して、小学校の先生をしていた。兄宛に郵送された同窓会名簿をめくっていると、何と、「憲兵」の実名と在職する松渓中の学校名が記載されていた。親しい友達に「あの憲兵は学芸大学卒だよ」と言っても誰からも信用して貰えなかった。「憲兵」が何でそんな嘘をつくのか、私にはまったく理解出来なかった。

杉並区の「小地域の民主化」と「世界の杉並」

五四年三月、アメリカ政府はマーシャル諸島のビキニ環礁で第一回の水爆実験を敢行した。投下された水爆の爆発力は広島の原爆の約一〇〇〇倍に相当すると言われている。この水爆実験の結果、「危険区域」のはるか遠海で操業中のマグロ漁船の第五福竜丸が「死の灰」を浴びた。二週間後に、同船が捕獲したマグロを静岡県焼津港に陸揚げした。東京築地中央市場では「死の灰」を浴びたマグロは「原爆魚」と称され、マグロの売買は成立せず、そのため倒産・転業した漁業関係者も出たという。

第五福竜丸漁師二三名は「急性放射能症」（原爆症）と診断された。とくに甲板で観察していた無線長の久保山愛吉は全身に大量の「死の灰」を浴びた。彼は東大付属病院の病室で「俺が死ねば原水爆は禁止されるだろう」と言って、被爆六カ月後に死亡したという。

杉並区の郷土史によれば、四七年四月、戦後最初の東京都の特別区で公選の区長選が実施された。杉並区では評論家の新居格が立候補して当選し、東京都では唯一の革新系の区長と見なされた。新居区長は区民一人一人が戦前の軍国主義を反省し、戦後の民主主義を自覚して「小地域の民主化」と「世界の杉並」を目指し、将来の杉並区に文化的地域を実現したいと念願したという。ところが、新居区長は就任し、その一年後に高血圧症のた

めに辞任したあと、脳溢血で死亡した。

学校教育の一環として、桃二小のPTAは桃友会を発足し、子供の未来のためにより良い教育環境を保障出来るように、真剣に話し合われた。国際法学者で法政大学の安井郁教授の提案で桃友会の有志によって「荻窪教育懇話会」が結成され、民主的な国民教育の在り方について、桃二小の集会室で寒い冬でもストーブに当たって夜遅くまで熱心に話し合ったという。

四八年五月、杉並区第二代の公選区長に高木敏夫が当選し、民主的な区政の構想と区民の啓蒙を重視し、学校建設と戦災復興を最重要課題とした。とくに区民が自由に学習出来る公立図書館と自由に集会出来る公立公民館の建設に当たった。その後、完成された図書館と公民館の初代館長に安井郁が就任した。安井は桃二小の桃友会、女性中心の「杉の子会」、消費生活協同組合などで、学識者の一人として熱心に講演をした。

安井は公民館館長として公民館で公民教養講座を主宰し、女性を中心に五四年から六二年まで八年間も続いた。毎月土曜日、レコードコンサートのあと、主に杉並区在中の知識人が講師に招かれて講演した。そのあと、安井自身が「世界の動き」をテーマに懇談したという。また、ほぼ同時期に公民館で「杉の子会」主催で社会科学系の読書会が開催され、ビキニ環礁の水爆実験、平和共存、教育システムの「逆コース」など、当時の時事的問題を学習した（丸浜江理子著『原水爆署名運動の誕生―東京・杉並の住民パワーと水脈―』凱風社、二〇一一年。同『ほうしゃの雨はもういらない―原水禁署名運動と虚像の原子力平和利用―』凱風社、二〇一六年〔「ほうしゃ」は「放射（能）」の意味〕。五四年五月、日本各地に「放射能の雨」が降下した。以下も両著を参考にした）。

第五福竜丸事件の衝撃

五四年三月、アメリカ政府は信託統治領のマーシャル諸島のビキニ環礁で最初の水爆実験を実施した。アメリカ政府はビキニ環礁などでキャッスル作戦を計画し、水爆を投下した。五八年に中止するまで、核実験は六七回に及んだという。アメリカ政府は第一回の水爆実験をブラボー・ショットと称した。想定外の大規模な核爆発が起り、放射能を含む珊瑚礁の「白い粉」が上空に舞い上がり、広範囲に降下し、マーシャル諸島の住民も被災した。操業中の遠洋マグロ漁船の第五福竜丸のほか、遠洋漁船八五六艘が「死の灰」を浴びた。

マグロを積載した第五福竜丸は二週間後に静岡県焼津港に帰港した。早速、読売新聞は「邦人漁夫、ビキニ原爆実験に遭遇」と第一報を掲載した。さらに水爆実験、第五福竜丸の被爆、マグロやカツオの放射能汚染についての真相を、GHQの報道規制にもかかわらず、マスメディアがセンセーショナルに報道し、国民的不安が昂じた。

すでに平和擁護世界大会委員会はスウェーデンのストックホルムで大会を開催し、核兵器廃絶に向け、世界に呼びかけるストックホルム・アッピールを発表した（五〇年三月）。その後、ビキニ環礁での水爆実験と被害の報道に接し、哲学者のラッセルと物理学者のアインシュタインが共同で核戦争廃絶を訴えるラッセル＝アインシュタイン宣言を発表し、核兵器の開発につて警告した。

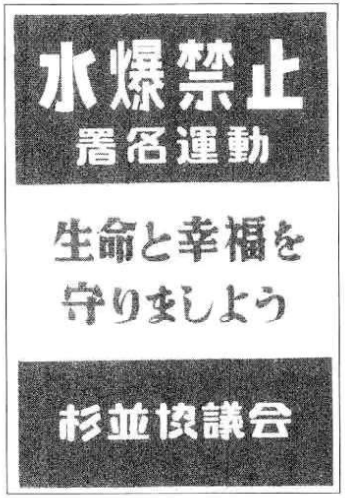
五三年三月、日米でMSA協定（相互安全法に基づき締結された「日本国とアメリカ合衆国との間の相互防衛援助協定」）が調印された。同協定で日本の防衛力増強が義務付けられ、その後の日米会談で第五福竜丸事件の早期終結、魚類の放射能測定の終了、漁業関係業者の損害賠償を提案した。実際は、アメリカは損害賠償ではなく、低額の慰謝料を見舞金として支払い、一切の請求権の放棄と水爆実験を続行した。

吉田茂内閣はアメリカ政府の意向を尊重し、早期に決着するために巧妙に画策した。行き詰った吉田茂内閣の後継内閣に鳩山一郎が就任した。すでにアメリカのアイゼンハワー大統領は国連総会で「原子力の平和利用」と核兵器の転用を提唱し、原子力技術を商品として輸出することを示唆した。日本政府はアメリカ政府が提案した濃縮ウランの貸与の申し出を受け入れ、原子力発電への エネルギー転換を意図して、発電所の設置を計画した。

原水爆禁止署名運動杉並協議会の活動

荻窪の杉並公民館長の安井郁は、アメリカ政府の水爆実験による甚大な被害に不安を抱き、汚染されたマグロやカツオを忌避する主婦たちを相手に公民館で勉強会（「杉の子会例会」）を始めた。勉強会で第五福竜丸事件の放射能汚染の恐ろしさが認識された。安井館長の呼びかけと「杉の子会」の協力で、杉並区に三四の女性団体の代表が集まり、超党派の「杉並婦人団体協議会（婦団協）」が結成された（五四年一月）。

その後、安井を中心に婦団協のメンバーと綿密に話し合い、「水爆禁止署名運動杉並協議会」が発足し、「水爆禁止のために　全国民が署名しよう」、「世界各国の政府と　国民に訴えよう」、「人類の生命と　幸福を守りましょう」と、三つのスローガンを掲げ、世界に向けて「杉並アッピール」を発表し、署名活動を開始した（五四



水爆禁止署名運動
杉並協議会宣伝ポスター
（1954年）

年五月）。主婦を中心に杉並区の街頭や駅頭で自然発生的に「水爆実験反対！」、「安全な海を！」と訴え、署名運動が行われ、科学者もまた原爆や放射能の危険性を訴え、また売買不良の魚商は杉並区長や杉並区議会に陳情した。杉並区議会は原爆実験の禁止、原子力の国際管理を要求する決議を可決した。

全国的組織の憲法擁護国民連合（擁護連合）や日本平和委員会は杉並協議会の活動に賛同し、原水爆禁止署名運動全国協議会の結成を協議した。全国世話人約五〇〇名の参加を得て、全国協議会が発足した。安井は事務局長に就任し、公民館を事務局として、全国から郵送された署名簿の整理・集計に当たった。

第五福竜丸事件は戦争末期の広島と長崎に原爆投下に次ぐ、第三の放射能被害として国民的に広く認識された。全国協議会第一回全国会議で広島の代表から、「原爆一〇周年を期し、広島で八月六日に原水爆禁止世界大会を開こう」という提案があって、全会一致で決定された。五五年八月六日から九日の三日間、長崎からの参加、海外からの参加を得て、広島で第一回世界大会が開催され、原水爆による膨大な死者、悲惨な原爆の被害、核兵器の恐ろしさが明らかにされた。

杉渓中学校の思い出と広島の経験

私の在校する杉渓中学校は課外授業の一環として映画鑑賞会が実施された。中央線荻窪駅の隣の阿佐ヶ谷駅にすぐ近い映画館・阿佐ヶ谷オデヲン座で怪獣映画『ゴジラ』（五四年公開）を鑑賞した。『ゴジラ』の宣伝ポスターには「放射能を吐く大怪獣の暴威は日本全土を脅威のドン底に叩き込んだ！」と書かれていた。

今、ストーリーの展開はうろ覚えだが、海底の洞窟に潜んでいた太古の巨大怪獣ゴジラがビキニ環礁の水爆実験で眠りを覚まし、口から高熱放射線を吐きながら、東京湾岸を上陸し、銀座一帯や国会議事堂も踏みにつけて破壊した。私はただ奇想天外な映画の展開に目を見張った。この映画は第五福竜丸事件をヒントにして製作されたことをあとで知った。

阿佐ヶ谷オデオン座から杉渓中学校への帰り道、花籠部屋の（初代）若乃花を見かけた。「土俵の鬼」と言われた若乃花がまわしを締め、間借りしていた真盛寺の回



特撮怪獣映画『ゴジラ』宣伝ポスター（1954年）

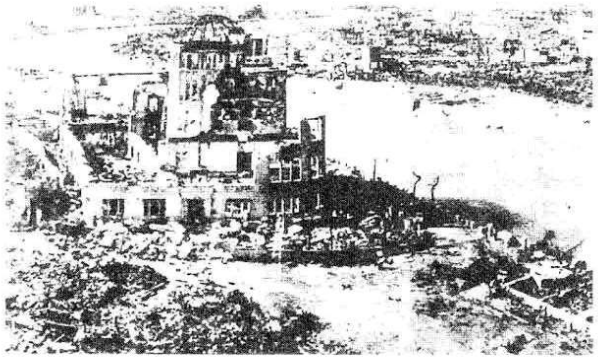
廊から何ごとかという無愛想な顔つきで私たちを見下ろしていた。私たちは突然の意外な出会いで、帰り道を若乃花のあれこれを興奮して声高に話して歩いた。今、『ゴジラ』映画の鑑賞よりも、筋骨隆々だが、小柄な若乃花の雄姿を見た経験ははるかに記憶に残っている。

私は長兄から「近くの荻窪の公民館で第一回原水禁世界大会の報告会があるから行け」と言われた。杉並区民代表の一人が原水爆の脅威と被害の惨状を報告した。今でも微かに記憶していることは、広島の爆心地に近い基町バラック（広島では「原爆スラム」と称されていた）で、被爆した生存者や海外からの引揚者の家族や孤児が焼け残ったトタン板や木材でバラック小屋を建て、そこに密集して居住しているという報告だった。

私はこの報告を聞いて一五年後、図らずも、広島に職を得て赴任した。早速、平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑、広島平和記念資料館、原爆ドームを見物した。本安川沿いの木造住宅の密集街を歩いた。広島で開催された第一回原水爆世界大会の参加者の報告を思い出し、原爆スラムと迷路のような路地を見物した。一軒のバラック小屋から火の不始末で失火し、出動した消防車は消火出来ず、しばしば大火に見舞われたという。私は広島に滞在中、広島に原爆投下された八月六日の八時一五分前後、何処からか、「ああ許すまじ原爆を　われらの街に」の歌が聞こえてきた。その日、広島平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」と刻まれている慰霊碑に向かい、原爆死没者に黙禱を捧げた。

職場の同僚は中学校（旧制）の朝礼で、校庭で被爆した。小柄な彼は最前列に直立し、後列の同級生の下敷きになり、直接被爆を免れ、九死に一生を得たという。彼から原爆投下の凄惨な体験を伺った。被爆二世の子女から涙ながらに父の被爆死と母の苦労とともに、本人自身の健康不安に悩まされていることを伺ったことがある。

その後、彼女は結婚したが、離婚したと噂に聞いた。大学在学中の友人S君が私より先に広島に赴任していた。彼の職場の同僚は原爆の熱線で顔や腕などにケロイ



爆心地　広島の惨状（1945年8月6日）

ドを負った被爆者だった。彼女は「原爆乙女」二五名の一人としてアメリカに渡り、治療を受けた。私は彼と一緒に彼女の自宅に招かれ、被爆体験とケロイドの整形手術を受けた体験談を静かに伺ったことがある。当時も、広島市はなお被爆の痕跡を残していた。

原水爆と原発

二〇〇一年一月、国連憲章にもとづき核兵器禁止条約（核禁条約）は五一の国と地域が批准（署名八六カ国）して発効した。核禁条約の批准に国際的に貢献した国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン、ICAN」はノーベル平和賞を受賞した。だが、核禁条約には国連安全保障理事国五カ国と北朝鮮など四カ国の核保有国の保有核弾頭数は一万三千発以上であるといわれている。

核禁条約は核兵器の開発、実験、製造、備蓄、移譲、使用、威嚇としての使用を禁止した（第一条）。「核兵器のない世界」の実現を目指し、「核兵器の終わりの始まり」である（サーロー節子、被爆者、カナダ在住の反核運動家）。核禁条約の前文には（広島と長崎の）「核兵器の使用による犠牲者、つまりヒバクシャ hibakusya の受け入れがたい苦悩と被害に留意する」と明記されている。ところが、世界で最初の原水爆被害国の日本政府は、この核禁条約を「署名」も「批准」していない。

杉並区民は原水爆禁止署名運動を行い、それが原水爆禁止世界大会を実現する契機となった。杉並区民は「原水爆禁止署名運動発祥の地」として誇りにして来た。「核兵器なき世界」を実現するために、核禁条約が発効した今日、改めて杉並区民の平和を希求する歴史的意義を尊重したい。戦後、最初の公選市長で、思想的にアナーキストの新居格は、一方では「小地域の民主化」という方針と、もう一方では気宇壮大な「世界の杉並」という発想が、はからずも実現したといえよう。

「原子力の平和利用」、「未来のエネルギー源」と喧伝され、原子力発電所は世界で、また国内でも率先して増設された。ところが、アメリカではスリーマイル島の原子力発電所二号炉に大規模な炉心事故が発生した（七九年三月）。その結果、原発には何重も安全装置が施されているという「安全神話」が崩壊したという。

その七年後、ソ連のチェルノブイリ原子力発電所四号炉は大規模な炉心事故が発生した（八六年四月）。その結果、放射性物質は上空に吹き上げられ、放射能による環境汚染のソ連はもとより、全ヨーロッパをはじめ広範囲に及んだ。この原発事故について、日本では原子炉がアメリカ型で、チェルノブイリ原発のソ連型とは構造的に異なる。しかも「運転上の規則違反があった」という理由を上げ、多重の防御設備と優れた管理技術によりシビアアクシデント（過酷事故）は起り得ないという国内の原子力発電の「安全神話」が語られた。そのため、原

発それ自体の構造上の欠陥は無視された。

これら二大原発事故に次ぎ、東日本大震災が東北地方と関東地方の一部に未曾有の大災害をもたらし、大規模な地震と巨大な津波によって東日本一帯が被災し、東京電力の福島第一原子力発電所で世界的に第三の大規模な原発事故が発生した（二一年三月一一日）。この大事故は原子炉内に燃料棒がメルトダウン（炉心溶解）し、シビアアクシデントが起きた。

その翌日、福島第一原発一号機の原子炉建屋の最上部が水素爆発で吹き飛んだ。その翌々日、三号機で水素爆発が起き、その翌日に四号機で火災が発生し、二号機でも水素爆発らしきものが発生したという。東京電力は予想外の地震と大津波、つまり「天災」だと主張しているが、「安全神話」を崩壊させた「人災」である。

リスク社会への提言―年寄りの繰り言―

「核兵器禁止条約」の発効により「核兵器なき世界」が「終わりの始まり」として人類に大惨事をもたらす核兵器（原水爆）と、地震国日本では「安全神話」が根底から疑問視される原発は、その目的や核分裂の現象によって異なることは当然であろう。だが、核兵器の脅威と原発事故によって無差別の大量破壊は決して異質ではない。要するに、広島と長崎に投下された「原水爆」と、福島第一原子炉の「原発」事故による大規模な人命の被害と前代未聞の環境破壊について率直に危惧する。

浅田次郎は「『原子力の平和利用』という言葉の裏を返せば、『原子力発電は核兵器の申し子』ということになる。兵器とはそもそも人を殺し傷つける目的で開発されるのだから、『平和利用』という論理そのものに、本来の目的を無視した矛盾がある」（日本ペンクラブ編『いまこそ私は原発に反対します』、浅田次郎「記憶と記憶」、二〇一二年三月、平凡社）。

さらに浅田は「日本はかって、広島、長崎、ビキニ環礁、そして今回、福島と、四度の被爆を体験してしまった。国家の歴史を繙いてもこれにまさる不義はなかろうし、世界的にいうなら国辱というべきである。つまり、縦から見ても横から見ても、まったく申し開きのできぬ局面に日本は立っている」と立言した。

要するに、「原発」は受益圏と受苦圏を分離し、たえず増加する電力需要にたいして、「原発」によって供給を増加させるということでは、ただ悪循環を拡大させることになるのではないのか。

二〇二一（令和二）年三月二一日　擱筆

私の「昭和20年」(5)
―終戦から75年―

山田嘉久

9　昭和20年9月―授業再開

2日　東京湾の米戦艦ミズーリ号上で降伏文書調印
11日　GHQ、東条英機ら39名の戦争犯罪人の逮捕を命令
15日　「日米会話手帳」刊行
26日　復員第一船高砂丸、別府に帰港
27日　天皇、マッカーサーを訪問

9月に入ると6ケ月ぶりに授業が再開された。

8月末に、文部省が9月中旬までに全学校の授業再開を通達していたからである。しかし従来とは全く様変わりの授業再開だから、先生方はかなり戸惑った筈である。

文部省からは「修身」「歴史」「地理」は即刻廃止の通達以外、指針らしい指針はなかったというから、まさに暗中模索の状態であったであろう。

この辺について、母校発行「長高百年史」に何か記されているか調べてみたが、他のことは冗漫なほどに詳細に記述した1500ページに及ぶ大著ながら、不思議なことに肝心の「授業再開」の内容については全く触れていなかった。Y校長の訓辞が載っているが、再開の内容は勿論、戦時中の教育者としての反省も皆無だった。ただ「引き続き増産に励め」ととんちんかんなことを言っている。

そういえば当時、校庭のほとんどが芋畑だった。

「英語」―他の教科よりも早くから授業が廃止されていたので、久しぶりの授業再開だった。

この月に発売された「日米会話手帳」(誠文堂版　たしか80銭?)がベストセラーになり、忽ち売り切れになるという「英語ブーム」が到来したのである。

この本の出版元社長小川菊松は8月15日、「玉音放送」を出張先の千葉県岩井駅(房総西線)で聞いたが、そのまま帰社するなり「どうだ、これからは日米会話の手引きが必要になるのではないか」といって、まだ茫然自失のままの社員一同を驚かせたという。



戦後初のベストセラー「日米会話手帳」

いかに日本人が変わり身が早いかを示している。

一方、ラジオでは9月半ばから「実用英語会話」が始まり、翌年の平川唯一のカムカム英会話に引き継がれてゆく。

なにしろ、今では全く考えられないことだが、当時の日本では今後、アメリカの意向で「英語」が日本の公用語になるのではないかが真剣に論議された時代なのである。

読売新聞は社説で「漢字を排して音標文字(ローマ字)の採用」を説いているし、翌21年には文豪志賀直哉が「フランス語国語論」を提言している。

かくて、戦時中、不如意を囲っていた英語の先生方が急にわが世の春を謳いだしたわけである。

今まで化学を教えていたH先生は黒板一杯に「ポツダム宣言」の原文を書いて得意気に訳してくれたが、この時、問題の「subject to」をどう訳したか記憶にない。

しかし「subject to」については、大分後年になってから、この字句は「ポツダム宣言」の本文には載っていないことを知った。「宣言」は7月26日に発表されたがその中身を見ると、戦後の対日政策として「日本軍隊の武装解除」など6項目が載せられているが肝心の「国体の護持―天皇制の存続」については全く触れられていない。そこで8月10日の御前会議において「天皇の地位に変更ないこと」を条件に「宣言」を受諾したのである。

それに対して翌日、バーンズ国務長官から回答が打電された。いわゆる「バーンズ回答」であるが、その中に「天皇及び日本国の権限は連合国最高司令長官に subject to」とあった。陸軍はこれを「隷従する」と解釈して、なお降伏に反対したが、外務省は「制限下に置かれる」と婉曲に訳して、2回目の14日の御前会議を乗り切ったのである。

(9月2日に調印した「降伏文書」にもこの「subject to」が記されているが、日本政府は外務省訳文を使っている。)

「ポツダム宣言」が発表された際、鈴木首相は記者団に「ただ黙殺するのみ」と言明した。実は前日の御前会議で「条件次第で受け入れる」方針が決定していたのだが、強硬派の陸軍に遠慮しての発言だった。これが日本にとっての悲劇を呼ぶ。

「黙殺」を海外放送網は「ignore」(無視)と訳し、「日本、ポツダム宣言を無視、拒絶」のニュースが全世界を

駆け巡った。その結果が広島、長崎への原爆投下、ソ連の対日参戦に繋がったのは何としても残念であった。（しかし、最近の研究ではポツダム宣言の出る前に既に原爆投下命令が出ていたことを指摘する歴史学者が多い。）

そのポツダムには20年前に訪れたことがある。「ドイツと東欧の旅」ツアーだったが、ドイツでの目玉は「ベルリンの壁」と「ポツダム」見学だった。ツアー客のほとんどは崩壊間もない「ベルリンの壁」に興味を示したが、私はむしろ、数十年前、日本の運命を決めた地ポツダムに関心があった。

ポツダムはベルリンの郊外にあり、バスで1時間弱。古くから王家に愛された夏の避暑地で現在は「世界遺産」に登録されている。

その美しい宮殿内を見て回ったが、ポツダム会談の行われた会場や会談の主人公（米トルーマン、英（前半）チャーチル、（後半）アトリー、ソ連スターリン）の泊まった部屋がそのまま保存されていた。

しかし宣言の大部分はアメリカによって作成され、イギリスが若干の修正を行った。（しかし7月26日署名時にはチャーチルは母国の総選挙で大敗したため帰国して不在。）

中華民国は全く関与していない。（そもそも会談に参加していない。）ソ連はこの時点ではまだ参戦していないので署名の資格すらない。

従って、米国トルーマンが自身を含めて3人分の署名を行っている。（蒋介石には無線で了承をとった。）

しかし、このツアーの若い日本人女性ガイドの説明には物足りなかった。ポツダム宣言の中身についてはほとんど触れず、なかには6ケ月前に締結されたヤルタ協定と混同した説明もあったので、クレームをつけようとしたが、同伴の家内が私の袖を引いたので止めた。

ガイド曰く「日本人観光客の多くは、「ポツダム宣言」の説明を求めますが、会議の主目的は2ケ月前に崩壊したドイツの戦後処理でした。たしかに日本軍の無条件降伏に関する「宣言」は出ましたが、会議の公式日程には正式には上りませんでした。」の説明に一寸、鼻白けた。

「英語」の授業再開については、私には苦い思い出がある。

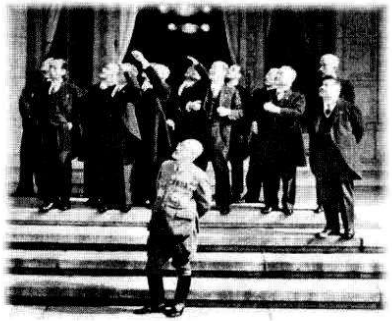
英語については、戦争中、真っ先に授業中止となったので、私は暇に任せて、一人で辞書を引いて教科書を自習していた。そしてこの教科書は2度と使用しないだろうと、行間に日本語訳を朱記していた。

ところが、予想もしない授業再開となり、再び同じ教科書を使うというので慌てた。早速、日本語訳をインク消しで消そうとしたが、赤インクで書いているために全く消えない。仕方なく紙面いっぱいに真っ赤に日本語訳

が記入された教科書をそのまま使ったが、案の定、先生に見つかってしまった。「お前はカンニングしているのか」と一喝されたが、私にはその事情を上手く説明できず臍を噛んだ。

12日には東条元首相の自殺未遂事件があった。

前日夕方、米軍憲兵が世田谷の東条宅を訪れ、その拘引を告げた直後、彼は左腹部に銃弾を撃ち込み重傷を負った。新聞には「遺言」も掲載していたが、それには「法廷に立ち戦勝者の前に裁判を受けるのは希望するところではない。寧ろ歴史の正当な批判に俟ちたい」と述べている。しかし多くの国民の目は冷たかった。同情を寄せるどころか、彼に対する非難攻撃に始終した。



東条内閣（昭和18.10.26)「アサヒカメラ」より

このニュースを知った私も、終戦の日、自決した阿南陸相の見事な死様を真っ先に思い出した。それに反して、つい数年前（昭和16年初頭）、陸軍大臣として「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」の戦陣訓を作った当の本人が、自決に失敗して敵軍だったアメリカ人の輸血を受けたという。

まさに日本人の恥だと思った。しかも隣家の医師に頼んで心臓の位置を教えてもらいその部分に墨で黒い印をつけてもらったという嘘のようなゴッシプを聞くに及んで（恐らく嘘話だろうが）開いた口がふさがなかった。

「人間の出来損ないたること明瞭なり。かかる馬鹿者に指導されたる日本は不幸なり」（細川護貞「細川日記」）。

「なぜ東条は阿南陸相のごとく終戦の日に潔くしなかったのか。またなぜ阿南のごとく日本刀を用いなかったのか。日本人は苦い笑いを浮かばずにはいられない。」（山田風太郎「戦中派不戦日記」）

しかし山田はこうも書いている。

「日本人は東条をヒトラーのような怪物的な独裁者とは考えてはおらず、敗戦日本の犠牲者でもある」（同）

東条のあまりにもだらしなさに怒りを通り越して、同情論となったのであろう。

9月末に行われた天皇によるマ元帥訪問にも驚かされた。

ついこの前までは全国民に「現人神」と崇敬された天皇が自ら出向いて「青い眼の大君」に会われたのである。しかも相手は出迎えもしなかった。（さすがに帰りは玄関先まで見送ったようだが）

翌日の朝刊に載った写真を見た時、私のみならず国民

のすべてが我が国の置かれている現状をいやとなく知らされることになったであろう。モーニング姿の正装でやや緊張気味で直立不動の天皇の横で、普段着の軍服で、手を腰に当てリラックスした大男が並んで立っている写真である。

この写真を見た歌人の斎藤茂吉は日記に「うぬ、マッカーサーの野郎」と書いたといわれる。

戦争が終わっても、なお日本国民にとって「現人神」であり続けた天皇がいわゆる「人間宣言」をしたのは翌21年1月1日に発せられた「年頭の詔書」であった。

「天皇ヲ現人神トシ且日本国民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル観念ニ基クモノニ非ズ」

天皇自身がはっきりと神格化を否定したのである。

翌2月からは早くも人間天皇の地方巡行が始まった。天皇はそれまでは庶民と直接、会話を交わすことはなかったので、最初の巡行（川崎）に出る前、侍従とひそかに会話の勉強をしたという。巡行中、天皇が連発する「ああ、そう」はその当時の流行語となった。

天皇と国民を近づけるキーワードとなったのである。

天皇が我が郷土茂原を訪ねたのは昭和22年春だったと思う。中学5年となっていた我々は沿道の両側に土下座をして天皇を迎えた。と突然、級友の日君が立ちあがって両手を挙げ、大声で「天皇陛下、万歳」を叫んだ。我々は驚いた。事前に先生から土下座のまま目は常に伏せて、絶対に天皇のお姿は見てはならないとの厳重注意があったからである。

卒業後のクラス会で常に話題になるが、当の日君の弁は「夢中で全く覚えていない」であった。

天皇とマッカーサーの会談に戻すと、この会談はアメリカ大使館で行われたのだが、私は長い間、会談の場所はGHQ本部（日比谷、第一生命ビル）と勘違いしていた。（天皇とマ元帥との会見は以後、合計11回に及んでいるが、会場は両方を交互に使用、すべて天皇が出向いている。）

そこで、昭和の終わり、日比谷の「マッカーサー執務室」を見学した。50坪ほどの予想より狭い部屋に彼が使用していた机と椅子が置かれていたが、椅子は当時、第一生命の社長だった石坂泰三の使用したものをそのまま使用したとのことだった。

細長い机には引き出しがなかった。「即断即決」を旨とした彼には引き出しは必要なかったとはガイドの説明だったが、一寸出来すぎの話と思った。

一方のアメリカ大使館には昭和30年代初め、2、3回訪れる機会があった。当時、近くの支店の外回りをしていたが、顧客の中にアメリカ大使館に勤める日本人が数名いて、よく呼び出しがあったためである。まだ人種差

別の激しい時代で、館内エレベーターは「white」「black」に分かれていた。日本人はどっちに乗るべきか一瞬迷ったが、無難な「black」を選んだ。そんな時代だった。

さらに余談だが、大使館脇の坂道（「霊南坂」）を登り切った反対側にホテルオークラがある。作家司馬遼太郎は上京時にはこのホテルを定宿としていたので早朝、この坂を散歩するのが楽しみだったと、その著「街道をゆく」（赤坂散歩）にあるので、司馬ファンである私は早速ぶらぶら歩いてみた。大使館の塀は全面、白に塗られ、さながら江戸時代の武家屋敷を思わせた。場所柄、人通りも少なく司馬の云う通り絶好の散歩道になっていた。

と、反対側の歩道に「霊南坂」の由来を記したらしい案内板を見つけたので、車道を横切ること数回。案の定、アメリカ大使館警備の警官に誰何され「この辺りをあまりふらつかないように」と注意された。

10　昭和20年10月―進駐軍

9日　幣原喜重郎内閣成立
11日　映画「そよ風」封切、主題歌「りんごの歌」大流行
25日　松本蒸治を委員長とする憲法調査委員会設置

前述の通り、マッカーサーが厚木に降り立ったのが8月30日だが、それに先立つ2日前に先遣部隊が厚木に到達している。以降、矢継ぎ早に米英の占領軍が進駐してきたが、「敗戦」を「終戦」と呼んだように「占領軍」も「進駐軍」と呼ばれた。

終戦から1週間後の8月23日、政府は全国民に向けて「進駐軍を迎える心構え」を通達している。そのいくつかを拾ってみる。

（進駐前の心構え）

1連合国軍の進駐はわが政府との緊密な折衝の結果行われたもので、暴行、略奪など万なきものと信じられるから徒に周章狼狽せぬこと

2軍隊輸送のため2、3日は汽車やバスに一般住民は載せぬと思うので、通勤者は家庭にあって差し支えない

3住民は絶対に県庁、警察、憲兵を信頼してデマに迷わず冷静に職場を守り家業に精励すること

（進駐後の心構え）

1外国軍人に対して個人が直接接触することは極力避ける。ただし先方から求めてきた際は毅然たる態度で接すること

2特に婦女子は日本婦人としての自覚を持って外国軍人に隙を見せないこと

3婦女子は淫らな服装をせぬこと、また人前で胸をあらわにすることは禁物である

4外国軍人が「ハロー」とか「ヘイ」とか呼び掛けても婦女子は相手にならず避けること

8月31日以降も米軍の移動が行われ、横浜港や館山港（千葉県）にフリゲート艦で上陸したのは太平洋陸軍配下の第8軍であった。

今、館山港には「米軍上陸の地」記念碑を見ることができる。

上陸した彼らは、それぞれ、関東地方の飛行場その他の主要基地に進駐した。茂原海軍基地にも米軍第11軍団600名（隊長アレキサンダー大尉）が進駐してきた。9月2日と思われる。

この時、「252茂原基地」より米軍へ引渡しされた武器は次の通りであった。

航空機の部

零式艦上戦闘機52型73機　零式艦上戦闘機21型3機
彗星艦上戦闘機43型1機　零式練習戦闘機2機
白菊艦上作業練習機1機　93式中間練習機4機
計85機　（「茂原の昭和史」より）

予想よりは遥かに多い零戦機が引き渡されている。

2日といえば、東京湾上の米戦艦ミズーリ号で日本が降伏文書に調印した日だが、正式降伏前に米軍は実質上、日本を占領していたことになる。（当初は降伏調印の日は8月31日と決まっていたが台風接近のため9月2日に延期されたという事情もある。）

余談になるが、私がミズーリ号を見たのは、平成14年ハワイ・真珠湾（パールハーバー）である。ハワイには何回も行っているが肝心の真珠湾には行ったことがなかった。そこで何回目かの時、皆がダイアモンド・ヘッドを観光中に、一人で反対側にある真珠湾に出かけることにした。狭いオアフ島内だが、それでもホテルのあるワイキキからバスで1時間近くかかった。

真珠湾に入ってまず、通常の観光コースとなっている「アリゾナ記念館」を見学。真珠湾攻撃の際、日本軍によって撃沈された戦艦アリゾナ号をそのまま保存して、甲板上を記念館としていた。

検問所でボデーチェック、身の回り品はカメラを含めてすべて取り上げられた上、荷物の保管料まで取られた。そこからシャトルバスで目的のミズーリ号の見学。ハワイでミズーリ号にお目にかかるとは夢にも思わなかった。

なぜ此処にミズーリ号が保存されているのか？

真珠湾との関係は？　と真っ先に疑問が湧いたが、渡された日本語の案内書を読んでもあまり納得できなかった。

ミズーリ号は大戦中、アメリカ海軍最後の戦艦として1944年1月に進水（艦名は後の大統領トルーマンの出身地に因む）。同年末に真珠湾に寄港した。これが唯一の真珠湾との関係である。

その後、沖縄戦に参加して終戦を迎えた。「降伏文書

調印式」の会場となった頃がこの艦の最盛期で、戦後は朝鮮戦争などに参加したが1998年退役、翌年、真珠湾で「記念艦」として公開保存されることになった。

しかし此処で公開されることについては、多くの反対があったという。此処には既に真珠湾攻撃の象徴であるアリゾナ号がある。それに戦争終結の象徴であるミズーリ号が重なったら観光上、逆効果になるのではとの心配があった。そこでなるべく離れた所に設置することで妥協したという。事実、アリゾナ号とミズーリ号はかなり離れていた。

しかし、この危惧は解消した。アリゾナ号では多くのアメリカ観光客は一様に深刻な顔をしていたようだが、ミズーリ号では途端に彼等は陽気となり、特に甲板上に再現された調印式会場では皆喝采を叫んでいた。

この日の日本人は私のほか若い男女ペヤーだけだったが、3人ともなんとなく肩身の狭い思いで見学した。この若者は戦争遺跡に関心があるらしく、アリゾナ号で見た日本海軍の「人間魚雷」について私は多くの質問を受けた。

なぜ、調印式にミズーリ号が選ばれたか。第一に艦上なら陸上よりも防衛上安全であることが挙げられるが、それよりもマッカーサーのトルーマン大統領に対する「忖度」ではなかったろうか。トルーマンが名付け親の戦艦ミズーリ号がわざわざ選ばれたのである。

しかし数年後、彼自身が、そのトルーマンによって罷免されたとはなんとも皮肉だった。



降伏文書調印式（昭和20.9.3朝刊）

調印式当日、ミズーリ号は横須賀沖に停泊した。奇しくもその昔、約100年前、ペリーが日米和親条約調印の際に、旗艦ポーハタン号が停泊した場所と同じ所に停泊させられたのである。しかもご丁寧にミズーリ号上のマストにはあの黒船に掲げられた星条旗がわざわざ外されて、持ち込まれ掲げられていた。

いずれもマッカーサーの「演出」だった。

その艦上に重光、梅津両日本全権代表は随員9名とともに上がったが、そこにはアメリカ将兵の「燃えるような憎悪」と「無限の好奇心」があったと、随員の一人加瀬俊一の「回想録」にある。

調印式の後、ミズーリ号上空をB29、700機と艦載機1500機の大編隊がデモンストレーション飛行したとは、我々日本人にとってはなんとも切ない光景であった。

わが町茂原にも進駐軍がやってきた。

我々は戦時中、「鬼畜米英」と教えられていたので、進駐軍は極悪非道、何をされるかわからないと戦々恐々であった。特に婦女子は外出禁止とされたので、茂原高女の「授業再開」は延期されたはずである。


米軍東京に進駐(昭20年9月上旬)

駅前旅館である我が家では、私は親父に言われて「Nothing for sell」(売り物ありません)と半紙に筆で大書して、店頭先に張り出した。この英語は町内会で決めて回覧板で回したものだろう。

こんなある日、一つの事件が発生した。

この頃、茂原飛行場には前述の航空機のほか戦車、車両など「本土決戦」に備えて九十九里浜に配置されていたあらゆる武器が集められ無造作に放置されていた。零戦や戦車の中には日本兵の使用していたマフラー、ベルトなど貴重な軍需物資が隠匿されているとの噂が広まっていた。これらは戦時中から我々中学生にとってほしくてたまらない羨望の的だった。

そこで我々中学生10数人は盗みに入ったわけである。しかしたちどころに見張りのMPに見つかってしまい数人が捕まってしまった。私を含めた残りの者は蜘蛛の子を散らすように逃げたが、いずれは芋蔓式に捕まると学校中の評判だったので、戦々恐々の毎日が続いたが、何とか事なきをえた。

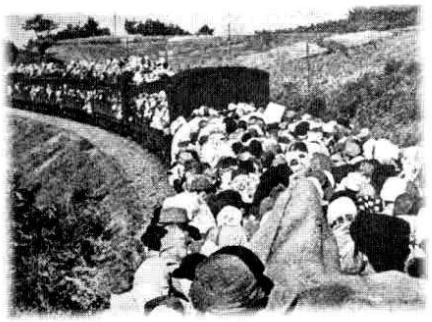
以下、余談だが、戦時中、九十九里浜に集められた軍需物資はその後、横流しされ辿り着いたのは東京への玄関口である秋葉原附近である。そこでは一大ヤミ市が形成されていった。当時、千葉県人にとってヤミ市といえば秋葉原のそれを指した。此処が次第に「日本一の電化製品の街」に変貌してゆくのである。

このことは数年前にNHKで放映され反響をよんだ「戦後ゼロ年　東京ブラックホール」でも取り上げていた。

戦後の風物詩としてはヤミ市のほかに「買い出し列車」があった。当時の食糧難のため千葉や埼玉など遠方まで買い出しに行く都会人が絶えなかった。写真は終戦の年11月4日付朝日朝刊で、東京に向かう国鉄総武本線(千葉―銚子間)日向駅付近の「買い出し列車」の風景である。貨車や客車の屋根まで鈴なりとなっている。当時の世相をよく表している写真である。

このことについて「時刻表昭和史」(宮脇俊三著)に興味深い記述があった。この当時、全国で一番乗り越し

客の多い駅は千葉駅だったという。1日の乗り越し客はなんと7千人を超えていた。その殆どが東京からの買い出し部隊である。


「買い出し列車」(昭和20.11.4　朝日朝刊)

当時、都内から千葉駅までの電車区間の乗車券は自由に買えたが、千葉駅以遠の汽車区間は発売が制限されていたからである。そのため乗客の殆どが乗り越し客だった。

さらに興味あるのは、乗り越しの罰として「発駅からの3倍の運賃」が徴収されたことである。3倍の運賃を払ってでも、当時の国民はヤミ物資を手に入れたかったのだ。

なお、昭和20年の「都内(両国)―茂原」片道運賃は2円50銭。これが僅か2年後の22年には10倍に跳ね上がっている。当時のインフレがいかに凄かったかが判る。

さらに参考までに当時、百キロ超の乗車券(外房線では東京―御宿以南)を手に入れようとするには警察署長等の証明を必要とした。勿論、買い出しなどは論外、必要最低限の旅行目的に限られていた。この制度は戦後初の改定が行われた昭和22年まで続いた筈だが、この年2月、私が旧制高校受験のため金沢に赴いた時にも必要であったかどうか定かでない。ただ、鞄の中は肝心の参考書よりも寄宿先で食べるコメで一杯だったことは覚えている。

本題に戻ろう。

我々が盗もうとしていた物はほんの細やかな「軍需物資」であろうが、全国的には、もっと大々的な軍需物資の放出が問題となっていた。

信じられないことだが、終戦の前日14日には「軍所有の軍需用物資」の緊急処分が閣議決定され、終戦の日15日には既に陸海軍とも軍需物資処分の決定をしていたのである。こうして敗戦直後から軍の放出物資が全国に大量に出回っていた。

小佐野賢治や児玉誉士夫といった政商は戦時中から軍需物資の調達で軍と密接な関係にあったが、戦後もいち早く大量に放出された軍需物資を手に入れたことで財を築くことになる。

(続く)

「国旗と世界のストーリー」が書店に並ぶまでの始末記

米村典紘

はじめに

「まんじ」の同人村上邦治さんは私よりも熱心な文筆家です。その村上さんが「はじめは同人誌「まんじ」に参加し自分の文章が「まんじ」に載っただけでも緊張しました……」と話していたことが思い出されます。村上さんの力作「千家尊福伝」が２０１９年4月に出版され、多くの作品の中から厳しい審査を経て自費出版文化賞入選をみごと果たされました。そのときの感想の中に「三戸岡先生の細やかなご指導と皆様のお陰」としみじみと語っていました。

私の場合は入選など全く手が届かないものですが、一つの本として出版出来るまでの経緯は、村上さんと同じ思いが重なります。

1：出版の原点

私が７３歳の２０１６年11月、三戸岡先生から「経験を活かし、国際的観点で何かを書きなさい」と入会のお誘いを頂いたことがきっかけでした。

三戸岡道夫先生主宰の同人雑誌「まんじ」（日本の同人雑誌の会では、最も長い歴史を持つ会）は年に4回、学士会館を「合評会場」に、小説・漢詩、短歌、伝記、専門書などを執筆している先生方が集まり、昼食を共にした後意見を交わす大変楽しい会です。

私の参加は第１４２号に「世界の国旗から学ぶ」というタイトルで投稿したのが初めてでした。4年後の「東京オリンピック」で、ボランテイア活動に参加することにしていましたので、世界中から訪れる選手達や観客の皆様に日本を知ってもらうことは大変嬉しいことですが、迎える側の私達にとって参加する選手の国旗や国情などを知っておくことは、ホスピタリテイーとして必要なことだろうと思い書きはじめました。

2：国旗の難しさ

学生時代から「人文地理」は大好きでしたから、すんなり入れると思いましたが、いざ、取りかかりますとアフリカ大陸の新興国やカリブ海諸国、バルカン半島諸国、旧ソ連邦から分裂し独立した国々、アジア地区の国名の変更などもありましたので、それなりに苦労を致しました。

多くの人は、特定の国旗を知っていても、２００近くある国の名前や、場所も良く知らないのが普通です。例えば、アフリカ大陸には、ウガンダとルアンダ、ガンビアとザンビアがあり、カリブ海にあるアンティグア・バーブーダの国旗だけを見て、国名も場所も分からないとすると国旗図鑑だけを手にしても余り役に立ちません。また実際、多くの国旗を並べて比較してみると更に「混乱」してしまいました。

国旗図鑑は辞典と同じで筆者の感情がないこともあり余り面白くありませんでした。また、国旗は分かるとしてもその国のイメージが浮かんでこないのです。更に読み終わってもなかなか頭に残らないことを感じました。

そこで、中高生から高齢者に至るまでを対象にした「今までにない国旗の本を、分かりやすく書いてみよう」と意気込んでみました。しかし「まんじ」はカラーではなく白黒がベース、更に「色と形」で自国を主張する国旗に、似通った国旗がたくさんあることがわかったのです。ヨーロッパやアフリカにおける3色旗の色の順番や、横分割か縦分割、紋章や星のあるなしで、国が変わってしまうのです。

3：国旗図鑑からの脱皮

季刊同人誌「まんじ」はカラー誌ではなく、私の原稿だけカラーにすると、大変なコストがかかり、国旗の色彩にも特に注意が必要となります。一度試してみましたが、費用対効果は情けないほど訴えるものはありませんでした。そのため、文章表現や国旗分類に重点を置き書くことにしました。結果的にはそれが国旗だけの本ではない良い結果を生むことになりました。

まず構成を、「序文」「本書を読むための事前準備」「大陸別国旗の傾向」「大陸別、国家の概要」「国旗のプロトコル」とし、第１０章では「オリンピック編」として、「オリンピックの歴史」や「リオデジャネイロオリンピック」「平昌オリンピック」などとしました。コラムでは「アメリカ大統領選挙の不思議」「シオニズムとは」などを特記しました。

そのような経験と過程を踏まえ、見るだけではなく文章表現でも捉え、さらに、図形による分類、色彩、太陽、月、動植物による仕分け、類似国旗の比較など、読んで

理解する様な内容にチャレンジしました。また、最近の国情や小生の紀行文なども顔を出し、国旗とその国の雰囲気、国情を自然に結び付け、読んでいるうちにいつの間にか身につく本を目指しました。

4：オリンピック編を加える

オリンピック編を加えた趣旨は、オリンピックは世界最大のイベントであり、先人たちの努力でやっと東京にやってくることになった喜びと情熱を失わないために特記しました。

古代から人類が一つにまとまるための平和の祭典「オリンピック」を、人類同士の争いで中止するのではなく、人類共通の難敵である「新型コロナウイルス」に立ち向かい、打ち勝った証として開催できたとすれば、それだけでも「世界平和としての共生をテーマとした最高のオリンピック東京大会」となると思ったからです。また、翌年には「冬季北京五輪」の開催も控えています。

その趣旨からすれば、入場行進に各国から参加する医師・看護師たちの行進や、東京湾に浮かぶ各国からのコロナ専用客船（病院船）などを浮かべ世界が一つになってコロナに立ち向かっている光景を描くのも良いかもしれません。いずれにしても、世界的感染症に打ち勝ち、今後行われるあらゆる世界的イベントの先鞭を担う意味でも「東京２０２０五輪」の成功を期待することは大いに意義のあることだと思ったのです。

5：いよいよ原稿が出来上がりました。

原稿は２４０ページにもなってしまいました。三戸岡先生に原稿をお送りすると、丁寧に読んで頂き、原稿の一字一句に赤ペンが入りました。更に「出版には2種類があり、自費出版と出版社による商業出版がある、自費出版は自分の思い通りのことが書けるが、社会への広がりが少ない。出版社による商業出版は、出版社の意向で決まるもので、自分の思う通りにはならないが社会への広がりが大きい」とのアドバイスを頂きました。また三戸岡先生から「この様な国旗の本は類をみないので、社会に出した方が良いと思うが、どちらが良いか自分の思いを決めたら、それに向かって進みなさい」「そのためには、本のタイトルや目次をしっかり組み立てることが重要」とのお話を丁寧にして頂きました。

6：出版に向かっての作業

目次、骨組みの構想を練りました。いろいろな種類の本を参考にしてその中で、特に困ったのが、国旗の貼り付けでした。始めは、ハサミと糊で細かい作業をしていましたが、その作業を見ていた妻が「今どき、そんなことをしている人はいませんよ（笑）。パソコンからフリーで引っ張ってきて貼り付け、固定すればいいのに……」

と嘲笑されました。

しかし私にとって、その作業たるや大変な苦労で、国旗を貼り付けてもどこかに消えてしまったりして混乱し、私の血圧を大きく上げる要因ともなりました。

7：スポーツクラブでの出会い

私は某ホテルのスポーツクラブに２０年近く通っている関係でいろいろな友人がいます。

そのクラブのメンバーには、音楽関係、ハイキング・水泳、そして早稲田という場所柄出版関係の友人などがいます。

その内の1人に32歳から週刊現代の編集長をなさり、クラブでは鉄人と云われている82歳の友人N氏がいます。N氏は私の原稿チェックを自らやって、さらに、「この文章では何故そうなったのか？理由が分からない」「文に脈絡がつながらないところがある」などの厳しいご指摘の後で、「この原稿の趣旨は非常に面白いので、出版するのであれば、後3か月かけて原稿を書き直しなさい」「タイトルには……ストーリーと、付けた方がこの内容では良いと思う」「是非とも最後まで出版することを諦めてはいけない」との貴重なアドバイスを頂きました。

また、スポーツクラブで柔軟運動をしているときに親しくなった70人の社員を抱える印刷会社の社長Y氏からは、「カラーでもなんでもあなたの親しい人に配る分なら直ぐに好意としてやりますよ」と温かい言葉も頂き、更に「組版・デザインなど当社で最も優秀な人材がいる」と言ってD部長を紹介して頂きました。いろいろな方から出版会社の紹介も頂きましたが、出版会社は「人の紹介ではなく、自分と意気が合ったところにしよう」と心に決めていましたのでネットで検索してみました。新潮社とか名だたる企業もでてきました。

何故か昔、諏訪でボランテイア演奏を定期的にしていたせいでしょうか。長野の諏訪に本社があり、新宿に営業所がある「鳥影社」が目に止まりました。本社に電話すると「はい、鳥影社です」と女性が出ました。私は電話の主旨を話したあと「どなたか編集の方はいらっしゃいますか？」と伝えると編集の人に電話が繋がりました。仔細を再度説明した後、編集の人は「新宿の営業所の方に原稿をメールして下さい」と丁寧に応えて頂きました。その雰囲気から私は「あなたが編集者なら、貴方に送ってはダメですか」と伺うと「私でも結構です」と応えて頂きました。まだ不完全であった原稿でしたが、教えて頂いたアドレスに直接メールしました。その後数日が過ぎ、何も連絡がありませんでしたから「縁がなかったのかな」と思っていました。

一週間後、メールの返事が返って来ました。「是非当社で出版させてください」と快諾のメールに私は驚嘆しました。その後、私の通っているスポーツクラブがある、

リーガロイヤルホテル東京でお会いすることになりました。

8：出版社・百瀬精一氏との出会い

ホテルのレストランで打ち合わせしました。私が何もわからないので、前述した印刷会社のD部長に同席頂きました。先方は東京支店の女性が一緒でした。私が「いつも名刺は持っていないので」と申し上げると、その編集者は大変謙虚な方で「私も名刺を忘れました」となにげなく同調し、「百瀬精一」と名乗りました。一見して非常に腰が低い紳士で「気配りの細やかな、なかなか出来た人だな」と私は感じました。食事が終わりに近づいたころ、一冊の本を取り出し「この本・季刊文科は当社が発行しているものです」と手渡されました。その季刊誌には三島由紀夫没50年記念特集が掲載されており、最後のページには、発行者・百瀬精一と書いてありましたので、編集長さんかなと思っていました。

私は「出来ましたら印刷会社は田部長の会社を使って欲しい」と申し上げると「当社は多くの印刷会社と取引がありますが、見積もりが合えば使います」とのことでした。

後日、私の友人でマガジン誌6誌を発行している会社の社長が「鳥影社は直木賞作家を出したこともあり文芸と学術出版では実績がある立派な会社です」と薦められました。

2度目の再会は、私の作品の校閲・校正をやってもらっている兄に同席してもらい、コロナ対策が充分出来ている経団連のレストランで打ち合わせを致しました。友人の印刷会社を使う件では「印刷製本の見積もりは、当社の見積もりと比較し、かなり違うため難しいので、紙質などのコストが掛からない組版だけはお願いしたいと思います」と気を使って頂きました。それから一か月後に出版契約書が送られてきました。後の話になりますが、鳥影社が芥川賞・直木賞作家の書籍や多くの学術書を出版している存在感の高い出版社であることが分かり、人との出会いの不思議さに運命のようなものを感じました。

9：いよいよ全国の書店に並ぶ契約

商業出版にあたって、出版契約書にはいろいろなことが書いてありました。特に目にとまったのは、雑誌等への広告の欄でした。日本書籍出版協会刊の「これから出る本」・講談社「本」・幻冬舎「小説幻冬」鳥影社「季刊文科」など。トーハン週報、ニッパン速報（出稿）他、および読売新聞一面三段1/8。と書いてありました。いよいよ全国の書店に「国旗と世界のストーリー」が並ぶことになりました。私はこのような契約書にはじめてサインをしました。出版社側の欄を見ると代表取締役・百瀬精一氏の署名捺印が押してありました。

10：それからが大変

契約書では出版予定日は契約後6か月なのですが、私の原稿内容が東京五輪・世界の時事問題が入っていることもあり、時事も刻々と変化し、また東京五輪の状況も踏まえて発行は5月中旬を目標としました。契約の重要性は、銀行員時代から身に染みて分かっていることなので、周りの人達に喜んで頂けるような「期待に応えられる書籍」にするため、最終原稿は何度も修正を繰り返し、多くの人にご迷惑をお掛けすることになってしまいました。

11：「国旗と世界のストーリー」の構成

当初は季刊雑誌「まんじ」に載るだけでも満足していた私でしたが、三戸岡先生や多くの方々のご指導を頂き、上品でカラフルな表紙が出来てくると一冊の立派な本になった様な感じになってまいりました。

最終的に本の構成は、①目次 ②序文 ③本書を読むための事前準備 第一章G7諸国と日本の近隣4ヵ国 第二章ヨーロッパ大陸（45ヵ国） 第三章アジア大陸（47ヵ国+2） 第四章アフリカ大陸（54ヵ国） 第五章オセアニア（16ヵ国） 第六章北米大陸と中米編（10ヵ国） 第七章南米大陸（12ヵ国） 第八章カリブ諸国（13ヵ国） 第九章国際プロトコル （世界の国旗編の終わりに思うこと） 第10章オリンピック編 ④終わりに ⑤参考文献 ⑥索引（日本文と英文）となりました。更に「米国大統領選挙の不思議」など70近くのコラムを加えました。また、著名のプロフィールの中には、2019年に米国のメモリアルバレーで撮った写真を添付致しました。

12：「終わりに思うこと」を以下原文のまま掲載させていただきます。

東京オリンピックで世界から集まってくる選手それぞれの国旗や国情を知っていれば、迎える私達として「素晴らしいホスピタリティーになる」との思いで、未知の国旗紹介を重点的にすすめていました。

我が国や、大国である米国、中国、英国、ドイツあたりは、もう少しスペースを割いても良かったかも知れません。

米国は、50州からなる合衆国で、50州にそれぞれ州旗があり、カルフォルニア州はグリズリー（黒熊）、アリゾナ州（旭日旗）、南部に行けば昔の南軍旗もはためいていました。最近は、ミシシッピー州の州旗に描かれていた南軍旗が取り除かれ全ての州旗から南軍旗をイメージする州旗が無くなりました。しかし、ハワイの州旗には、今も英国のユニオンフラッグが入っているのには驚かされます。

私が米国の人に、「どちらからいらっしゃいました?」と聞くと、州の名前で答える人が多いことから、「アメリカ合衆国」なのだと気づかされます。ついでに申し上げると、ヨーロッパの国々を訪問すると、見慣れぬ旗に出会うことがあります。イタリアでは、ミラノ、ベネチア、ナポリなど、都市国家時代の旗が掲げられています。これは、スペイン、フランス、ドイツでも同じ傾向です。

中国の国土は、ヨーロッパ全体の国土とほぼ同じ広さで、4直轄地市（北京・天津・上海・重慶）22省・5自治区（新疆ウイグル・内モンゴル・チベット・広西チワン族自治区・寧夏回族）・2特別行政区（香港・マカオ）に分けられた広大な国家です。中国の旗の歴史も、ギリシャの「ヴェルギナの星」と同様に歴史と趣を持ち、三国志など覇権争いの時代にはそれぞれの軍旗がはためいていました。我が国の戦国時代における旗印も同様ですが、人間の本性として、集団になると、それを示す何らかのシンボルが必要なのかもしれません。

本書は、政治的問題について、極力避けて来ましたが、言うまでもなく、政治・行政・経済はそれぞれ密接な関係があり、実は避けて通れない問題です。近年、米国と中国の間で覇権争いの様相を呈していますが、我が国は、輸出、輸入とも、この両国に大きく依存した経済体制をとっています。

しかし、多くの新興国も、ほとんどの国が、政治、経済ともに大国依存が極めて高くなっていることが分かります。大国になればなる程、その責任は重く大きいものです。大国の軍事力と経済力は、「人類の幸せのために行使」して欲しいと願うばかりです。

また、人類の歴史が争いの歴史そのものであることが分かります。防衛問題は、「日本人のタブー」であってはならないことに気付かねばなりません。「防衛」は決して軍国主義や帝国主義の証ではなく日章旗も、軍国主義の証ではありません。「日の丸」は私たちひとりひとりに姓名があるように、現代社会の「日章旗」は「私たち、日本人の表札」として穏やかな日本人としての誇るべき国籍表札なのです。その様な状況の中で、驕ること無く、現状に満足すること無く、将来の人財育成に努め、常に新たな成長分野にチャレンジし、より公平・公正でより幸福な国家を目指し、かつそれぞれの責任と義務を認識し、穏やかな世界平和の先頭に立つ「昇る太陽」であることを祈願しています。

「まんじ記念号投稿」の結び

今回「国旗と世界のストーリー」が出来上がるめぐり合わせは、三戸岡先生はじめ「まんじ」の方々、スポーツクラブの方々、政・産業界のメンターの方々、家族・兄・学生時代の親友、出版に至るプロセスで知り合った印刷会社と出版社の素晴らしい人達との出会いによるものでした。思いがけないことに出版本の帯には佐藤優先生の推薦文まで頂くことになりました。

そして、不完全な拙文が、上記の皆様のご助力とご指導によって出来上がっていったプロセスを思い返し「多くの方々との絆によって出来あがった一冊」に至上の喜びを感じています。心から感謝申し上げます。

まんじ160記念号が発行される5月上旬にはインターネットのアマゾン新刊予約販売が始まり、5月下旬には全国の書店に「国旗と世界のストーリー」が並ぶ予定です。（尚、まんじ執筆の先生方には献本させて頂きます）ご笑覧頂き、ご感想・ご指導をお聞かせ頂ければ幸です。（ISBNは978-4-86265-883-8）

人生他なし忠と孝

浅野博文

一、米中思想の本質

現代社会を象徴する出来事として、国家と巨大ＩＴ企業の対立が先鋭化している。そのことが注目される契機となったのが、超大国アメリカの大統領であったトランプ氏（在任期間二〇一七・一・二〇～二〇二一・一・二〇）のツイッターアカウント凍結事件である。

かねてより、トランプ氏が米国リーダーとしての発信装置として、ツイッターを活用していたことは周知の事実である。殊に、手腕と共に徳望が求められる政治家の中にあって、最後までその言動に「誠心誠意」を感じとれなかったトランプ氏だが、その登録閲覧者は全世界に約８８７０万人（日経新聞）を数えていたのだから、衆目を集めていたことだけは確かである。

しかし、「天網恢恢疎にして漏らさず」ということなのか、あっけなく言論の自由は失われ、併せて権力の座からも失脚したことは、やはり衝撃的だった。ただ、改めて振り返れば、政治家として国際社会に向けて公共財を提供する意志も能力も無いことを公言する形で斬りつけた刀は、その返す刀で国内社会にも深刻な傷跡を遺したのであるから、当然の結果であったことは間違いない。

実際、公共の精神とは結び付かない自己責任を、建国以来の伝統と称し続け、今コロナ禍で約二十万人もの同胞アメリカ人を死なせたという点は、その身の不覚であった。加えて、ＩＴや人工知能、医薬品等の先端技術で世界を牽引する国の評価を著しく損ね、心ある人々を失望させるものであった点も動かない。

今後、コロナが収まり、民心を覆う暗雲が散じたる時、前大統領は、一人の人間として厳しき歴史の審判の前に立つみずからを見出すであろう。嘗ての風雲児ナポレオンの傲然たる態度も、その雄図ひとたびつまずいて囚われの身となった時、その審判に竦然（しょうぜん）となった。トランプ氏も、歴史を恐れ、神を恐れる、その時を迎えるに違いない。

一方、刮目すべき事実として今回クローズアップされたのが、一企業による言論封殺であり、一国の指導者をも引きずり落とす勢力にまで成長を遂げた巨大ＩＴ企業の不気味な実態である。今日その四強として名を馳せているのが、そのイニシアルをとってＧＡＦＡ（ガーファ）と呼ばれるアメリカ企業であり、偏在する世界の富の中心にいる、グローバリゼーションの代表格である。

一体、アメリカは歴代政権の国家戦略の位置付けで、ＩＴ企業の育成を世界に先駆けて進め、今日に至るまで、官民一体でインターネット空間という新たなフロンティアを開拓し、その覇権を制して来た経緯がある。

にも拘らず、今回突然のクーデターという試練に直面した。広く民主主義の危機とまで騒がれているが、国家と巨大ＩＴ企業の対立に至るまでの経緯を振り返れば、実際は、覇権国家アメリカ存続の危機が、意味としては強いと思う。同じ覇権国家の中共に於いてもアリババというＩＴ企業が、中原の覇者として君臨せんとする一党独裁国家の政治的流れに抗っている様子である。

双方が共有する「覇権国家の危機」という問題認識は、「既存の国家体制崩壊の危機」ということを意味する。具体的には、トランプ氏の如く、濁流遊泳の術を解する一部の有力者の既得権益保持を目的として権謀する姿をそこに観る。詮ずる所、彼らにとっての国家とは、崇高なる権威としてのそれではなく、生命を捧げることで生甲斐を感じる対象でもない、自分だけ栄華を極め得れば、それでよいとする国家でしかない。

現に、米国では二十万人もの同胞の命が失われた。本来なら、一つの目標の本に団結し、一つの意志によって統一せられた国家の主体というべき存在の国民とは、誰一人も弊履を棄つるが如き扱いであってはならないが、解決し克服しようとする意志を持たず、「天下は破れば破れよ、世間は滅べば滅びよ、」として省みなかったことは、その証左に他ならない。

それは、両大国に脈々と流れる思想の源流が、唯物主義や個人的、利己的の立場から考えたものであるのだから、公平無私を求めること自体に限界がある。有史以来、強い者が力を失い、盛んな人が勢いをなくすれば、昨日までの屈服は今日の反抗となり、今日のへつらいは明日の喇りとなるのは、革命を前提とし、国是としてきた歴史のくりかえして来た事実であり、破壊断絶を常とする思想が持つ本質なのである。

二、記紀の実証と事実の尊厳（上）

今日、制御が困難になった巨大ＩＴ企業には明確な野望がある。それは世界の人々をコントロールする上でのデータ（ビッグデータ）の支配である。それは、近代国家としての強力な生産力を背景として、アジア諸国への軍事的威嚇を断行した嘗ての欧米列強とは、その足跡が異なるのだが、戦略的に、ひたひたと押し寄せる姿は、不気味で人眼を刺す。

そもそも、データとは事実を意味する。事実ほど確かなものはなく、事実は恩讐を超えたものである。失くしたものを数え、無いものねだりばかりして嘆息する者の稚心を一掃する。故に、しっかりと人が事実を見極め、その上で行動するならば、何をやっても、事の成否は別として後悔だけはしない。

然れば、稚心を去り、事実を尊厳とする。人生を有意義なものとする第一義である。

思えば、学生時代に拝聴した、「大和朝廷の成立と発展について」と題された特別講演とは、そのことを教える最初の機会であった。講師は、日本古代史学を専門とする著名な実証史家、田中卓・元学長。以下、当時の講演内容を私なりに整理して振り返りたいと思う。

かつて歴史上には、偉大なる人物（先哲）が現れ、世の中の理非曲直を明らかにし、社会を革新して来た。その過程で作られた法律も、基本的には正しくあろうとした人間の努力の積み重ねに他ならない。だからこそ人は独りよがりでは生きて行けないし、人は他人のために生きてこそ人である。本来歴史の発展とはそういう事であり、その最も著しいのが祖国日本なのである。

今日の日本には不満を並び立て、権利ばかりを主張する人が多い。実際、「主権在民」「人権尊重」「反戦平和」は現行憲法の三本柱として周知だが、これはアメリカ流の理念ではあっても、我が国の歴史的精神には馴染まない空論に過ぎない。日本人は歴史を忘れ、自己の本質を見失っているのである。「天皇尊重」「忠臣孝子」「武勲英霊」。今後、我々が真の日本及び日本人の姿を明らかにする上で注意すべきは、「破邪」の批判ではなく「顕正」の発揚にあることを念頭に置かねばならない。

個人は皆、有意義な人生を送りたいと望む。そうであるならば、先ず過去に遡り、その根源にある正しい事実（神武天皇の建国）を知らなければならない。本質となる正しい事実とは、常に人の恩讐を超えたものである。

かつて、幕末の志士が目の当たりにした欧米諸国の科学技術と、それを駆使した圧倒的軍事力という事実も、それに祖国滅亡の危機感を抱き、その後徹底して欧米に

学び、近代化を果たしたという日本の歴史が、そのことの真実たる所以を如実に示すものである。

さて、今日の日本国が、皇室を中心とした所謂、大和朝廷を中核に発達した国家であることは言うまでもないが、大和朝廷の成立については、なお明らかでない点が少なくない。

遡る事、昭和五十三年の九月、埼玉県行田市にある稲荷山古墳から一振の鉄刀が出土した（本来それは両刃のため一般には「剣」と称するが、銘文に利刀と記されるので鉄刀と呼称する）。その刀身には一一五字（漢文）の象嵌銘が刻まれていた。

辛亥の年の七月中、記す。乎ワケの臣の上祖、名は意富ヒコ、其の児、多加利のスクネ、其の児、名は弓已加利ワケ、其の児、名は多加披次ワケ、其の児、名は多沙鬼ワケ、其の児、名は半弓比、其の児、名は加差披余、其の児、乎ワケの臣、世々、杖刀人の首と為て、奉事して来りて今に至る。ワカタケル大王の寺（朝廷の意）シキの宮に在り。時に、吾、天下を佐治し（佐け治むの意）、此の百錬の利刀を作らしめ、我が奉事の根源を記す也。

銘文の書かれた目的は、乎ワケの臣が、上祖の意富ヒコ以来、杖刀人の首として大和朝廷に奉事して来て今に至る先祖の功業を讃え、先祖代々の尊名を記すことを以て、その奉事の根源に代えたものである。

この刀の製作年代は、「辛亥年七月」と明記されている。「辛亥」が四七一年か五三一年の何れかであることは、学界の通説であるが、ここに記されるそれは、記紀（古事記・日本書紀）の第二十一代雄略天皇崩年記事と照らし合わせても四七一年が矛盾なく適合する。今日、ワカタケル大王を雄略天皇と観るのは、学界の大勢である。

何れにしても、雄略天皇朝の五世紀後半か、少なくとも六世紀前半に、大和朝廷の勢力が、東は武蔵、西は九州の肥後（※熊本江田船山古墳出土の刀には第十八代反正天皇の御名が記されている）にまで及んでいたことを証明する有力な根拠である。

三、記紀の実証と事実の尊厳（中）

稲荷山古墳出土の刀銘とは、古事記・日本書紀（の内容）を実証する系譜（系図）に他ならない。

特に、天智天皇の皇太子の大友皇子と天皇の御弟である大海人皇子（天武天皇）の不幸な争いに象徴される壬申の乱（六七二年）からも伺える様に、嫡子相続の原則

が確立していなかった古代とは、父子関係は必ずしも長子相続を示さず、古代に於いて一世代、平均三十年というのは常識である。

上祖の意富ヒコの時代は、およそ〈三十年×七～八代〉前となるから、それを四七一から差し引くと、およそ〈二三一～二六一年〉頃の存在となる。一方、古事記と『住吉大社神代記』に観える崩年干支によると、第十代崇神天皇の崩年は「戊寅（つちのえとら）」で二五八年に相当する。

つまり、上祖の意富ヒコは、崇神天皇の御代の人ということになるが、この人は、記紀に観える有名な四道将軍の一人で、崇神天皇の御代に北陸に派遣された大彦命と一致してくる。

仮に、この家が大彦命の時代から一貫してヤマト朝廷に仕えてきたことが明らかであるとすれば、当然、その奉仕の対象である歴代天皇、即ち、崇神天皇以来雄略天皇までの皇統歴代の実在を、承認せねばならないであろう。さらに付言すれば大彦命の出自が第八代孝元天皇とする点から、皇統譜を崇神天皇以前にまで遡って理解することが可能となる。

翻って、崇神天皇の御代とほぼ同時期に、『魏志』倭人伝には、二三九年、邪馬台国の卑弥呼が魏の皇帝より「親魏倭王」の称号と金印紫綬を授けられたことが記されている。

邪馬台国の所在地は、倭人伝の記事からも北九州に推定するのが妥当であろう。『魏志』倭人伝が「女王国東渡海千餘里、復有国、皆倭種」と記すのも、その当時の邪馬台国と大和朝廷との位置関係を示したものか。

但し、その所在地には今尚、九州説と畿内説が対立し、邪馬台国と大和朝廷との関係についても、種々の推定はなされているが、確かな説はない。

我が国最古の史書である、古事記・日本書紀によれば、皇室の中心であった神武天皇が、九州の日向国（宮崎県）から瀬戸内海を東進して大和国に入り、ナガスネヒコをはじめとする土着豪族を討ち平らげて、辛酉の年に畝傍の橿原宮に於いて即位し、大和朝廷を開かれた（日本書紀・前六六〇年）と伝えている。

殊に、同じ史書でありながらも、その出来事を年月順に整理することが出来ない『古事記』に比し、年月の順にそれが明確に理解できる『日本書紀』の紀年法とは、讖緯の説によって推古天皇九年辛酉（六〇一年、皇紀一二六一年）の年に起算点（神武天皇紀元の逆算点）が置かれ、それより千二百六十年遡った年を、神武天皇即位年として定めたものと考えられている（故に歴史を回顧した天皇を推古天皇と申し上げる）。

一体、推古天皇紀二十八年（六二〇年）には、聖徳太子を中心として「天皇記及国記・臣連伴造国造百八十部并公民等本記」が撰録されたとあるが、その際に大陸か

ら帰化した学者も編纂に関与した結果、ここに後漢の世に流行した讖緯の学を応用することになった。

即ち、六十年に一度ある辛酉の年は、人生の大きな変わり目であり、千二百六十を単位として歴史の時代は転換し、その変化する年は、推古天皇九年辛酉（六〇一年、皇紀一二六一年）でなければならないという所謂運命学の歴史学に於ける応用である。

ここで重要としなければならないのは、日本書紀は御歴代天皇の代数を増やすのではなく、その御寿命を引き延ばして、ともかく話が合うようにした（第十二代景行天皇百三十七歳、第十六代仁徳天皇百四十三歳など）が、事実そのものに対しては讖緯の説を介入させず、決して手を触れることをしなかったという点である。ここに歴史学者の苦心の跡を観る。

改めて、第十代崇神天皇の崩年である「戊寅（つちのえとら）」である二五八年に返り、更に一世代平均三十年の原則を当てはめると皇紀は、事実より五、六百年程延びていることが分かる。尚、私見では、九州の筑紫平野の原邪馬台国より弥生文化をもつ勢力が東進を繰り返し、西暦一世紀前後に、皇室が大和に入ったものと考える（注一）。

四、記紀の実証と事実の尊厳（下）

閑話休題。古代に於ける日本国家の成立を考察するのに、周到にして精緻な研究は言うまでもない。しかし、記録文献の乏しい古代に於いて、その性質上、考古学との協力の中で、断片的な事実を精査して、如何に整合性をもたせるかが重要となるが、やはり基本となるのは古典である。古典とは、言語の巣窟にして往古の旧事を著したものであり、我が国最古のそれは記紀である。

敗戦後の国史学界、特に古代史学界が、戦前・戦中の論調を一変して、古事記・日本書紀の古典を軽侮し、古伝の否定に走ったことは周知の事実である。その結果、万世一系の皇統は疑われ、いわゆる天皇家の断絶を得意気に説く歴史家が脚光を浴びた。皇国伝統の歴史を破壊しようとする論説は荒れ狂い、学生による過激な革命闘争は一世を風靡した。

重ねて自らは、破邪の批判よりも顕正の発揚に重きを置く。種々の推定がなされながらも確かな説のない古代史上の問題を明らかにする上では、その基本となる古典に則って論じなければならない。

いずれにしても、神武天皇により掲げられた建国の大理想は、三世紀の後半から四世紀の前半にかけて、畿内に皇室を中心として推し進められ、殊に御肇国天皇（はつくにしらすすめらもこと）とも称えられた崇神天皇、垂仁天皇の御代とは、その統一国家が出現しつつあった

時代に当たると思われる。

また、同時期より高塚式古墳が大和地方に築造されはじめ、やがて全国に普及するが、それらは大和朝廷のめざましい発展と並行したものであろう。殊に第十五代応神天皇・第十六代仁徳天皇の壮大な御陵は大和朝廷の権勢を象徴するものである。

『古事記』・『日本書紀』は、このような大和朝廷の統一と発展の過程を、四道将軍の派遣（崇神天皇朝）、伊勢神宮の創祀（垂仁天皇朝）、日本武尊の熊襲・蝦夷征伐（景行天皇朝）などの所伝の中で物語っている。

以上が、拝聴した講演の概要であり、私なりの理解でまとめた内容である。

田中先生は、海軍少尉として敗戦を経験され、その後は一貫して学究生活を送られた。特に、国学者・河村秀根の言葉に「書紀に深ければ即ち国体に達す」とある様に、日本書紀を尊ばれ、また古代の朝廷に於いて三十年に一度講読せられた事や幾多の優れた学者がこれにより志を立てた事実を重んじ、一般に記紀と記される所を敢えて紀記と書かれていた。

既に幽界の御仁となられたが、その業績は建国記念の日の法制化や歴史教科書の正常化に於いて中心的役割を果たされた点に代表される様に不朽のものである。今も、明治神宮外苑には祝日として「建国記念の日」が法制化されたことを記念して建てられた文庫が佇むが、田中卓先生の立志と功業の基づく所は、全て東京帝国大学国史学科時代の恩師（平泉澄博士）より賜った師説の継承にあった点は見逃せない。

私は日本人として、或いは館友（皇學館大学卒業生）の一人として、その誠心誠意・実直懇切の勇姿を決して忘れはしない。併せて、「東大にクイズ学科が出来たのか」と揶揄される今日の東京大学ではなく、仁愛と理知との上に立って大義名分を主張する誉ての帝国大学の復活を切望する次第である。

五、人生他なし忠と孝（上）

今日も永続する我が国に於ける敗戦後の思想の基底をなしたものとは、階級闘争史観や反体制史観など様々な呼称がなされるが、詰まる所は革命思想である。即ち、前のものと後のものと何等関係のないのが革命という代物である。

それは、材木を燃やすと灰という全く新しい物質を生成する化学変化と同じである。革命とは不可逆変化なのである。正に、産業革命（Industrial revolution）が、そうである。しかし、国家にあっては、子孫の代になって新たに国是を営立するなどという事態が、あってはならないのである。

歴史的事実として、我が国の神武天皇の旧に復したのが大化改新であり、更に大化改新に復したのが建武中興であり、建武中興の後には神武天皇の古へに復したのが明治維新である。全て、君臣の名分を明らかにした上で、国家の根本を変えるのではなく、その秩序を正すための革新（Innovation）運動に他ならなかった。

故に、現存する国家の中で、日本は最古の歴史を有する。神武天皇建国から今上陛下百二十六代に至るまで皇統は男系継承以て連綿として続き、日本という大きな血族団体の中心としてあらせられた、謂わば本家が皇室である。

一般に、表立って盲従と言い、自立と言えば、誰にしても盲従を嫌い、自立を喜ぶ。しかし実際は、無意識のうちに世の大勢に押し流されて行くことが少なくない。敗戦後より一貫する、本来の歴史的伝統に馴染まないアメリカンデモクラシーを文明の本質とするのではなく、父祖の足跡に連なる日本人としての見識によって立ち、おのれの責任に於いて行く道を選ばなければならない。

そうであるならば、皇位継承の本義を理解することは、日本及び日本人が興る上で、本質となる正しい事実を知るということに他ならない。それは、日本歴史が皇統守護を最も重んじ、日本人がそれに殉じて来たからである。明治二十二年に刊行された『皇室典範義解』とは、井上毅が事実上執筆し、伊藤博文の名前で出された旧皇室典範の逐次解説書であるが、皇室典範第一条「大日本帝国皇位ハ祖宗ノ皇統ニシテ男系ノ男子之ヲ継承ス」について以下の解説を附す。

即ち、「皇位の継承は祖宗以来既に明訓あり。（中略）皇統は男系に限り女系の所出に及ばざるは皇家の成法なり。上代独り女系を取らざるのみならず、神武天皇より崇峻天皇に至るまで三十二世、嘗て女帝を立つの例にあらず。（中略）其の後、推古天皇以来皇后皇女即位の例なきに非ざるも、当時の事情を推原するに、祖宗の常憲に非ず。而して終に後世の模範と為すべからざるなり。」とある。

その上で、古代より皇室が氏称を持たないのも、皇室が既に他の氏族とかけ離れた高い立場にあり、日本国の象徴として、中心的な地位を得ておられた事の証明として、また血統という事実が、その厳然たる根拠として存するのを深く理解することが出来る。

六、人生他なし忠と孝（下）

小生は、この事実を観て深く思いを致すのは、今日の世の犯罪についてである。上に行く程よこしまな者が多く、下に行く程その悲しみが深いという現実がそこにあり、とりわけ、下にある者ほど目尊心が毀損せられ、人

格破綻の境遇にあり、救いようのないという事実である。

俗情から言えば、不幸に育った人は反抗反発に陥り易く、心の冷たいのはありがちであるが、本人が密かに抱える深い悲しみのその根本にある問題として、自分の血に対する信用の欠如がある点は否めない。

しかし、日本人だけは違うのである。日本人であるならば全く憂える必要はないのである。革命（王朝交替）の行われ、既に忠と孝の一致しない外国と違って、君主国として世界最古の歴史を有する我が国だけは、個人の家系図を遡れば忠と孝が一致し、その中心に今日も　天皇陛下があらせられるのである。

実際、六世紀中頃の欽明天皇の御代に、朝鮮の百済より伝来した我が国の仏教（大乗教）は、それを革新的な政治思想の柱とした推古天皇の摂政・聖徳太子により日本仏教の基礎が確立された。

そして、奈良時代の聖武天皇の発願により七一二年に建立せられた東大寺大仏殿（盧舎那の大仏）を中心に、全国それぞれに置かれた国分寺と国分尼寺の存在とは、我が国の国家思想を体現するものとなった。

即ち、その教義とする華厳経で説く所の「るしゃな」は、太陽とか光明を意味し、その光が広く限りなく照らすことを象徴したものであり、併せて天皇の御存在と重ね合わせ、天皇には万民の心が映り、その御光が万民を照らすという日本国の国家原理を、大仏殿に象徴されたものであった。

日本人であれば皆、何一つとして孤立している者も無ければ、他の事と絶縁している事もない。全ては一つに結ばれ、一つは全てに繋がる。一つにすべてが影を宿し、一つが全てに光を映すという日本仏教の特筆すべき姿は、その後に陸続する真言宗（大日如来）や浄土宗・真宗・時宗（阿弥陀如来）の先例として、また日蓮宗や禅宗寺院においても、御本尊に大御心を映し、真の鎮護国家の仏教として、皇国の限りなき栄えを祈ることを本質とした「大乗相応功徳之地」として、釈迦の理想を体現し、今日に至っているのである。

同様に、小生が個人社員として所属する掛川の大日本報徳社が亀鑑とする、二宮尊徳先生の報徳の教えも、その精髄が以下の報徳道歌に圧縮せられている。

「父母もその父母も我が身なり、われを愛せよ、われを敬せよ」の歌意とは、遡れば皇祖皇宗に連なる父祖伝来の魂の継承を説くものであり、「昨日より知らぬ明日のなつかしや、もとの父母ましませばこそ」と詠む中で、日々の精励切磋が本来の幸せを開くとことを喝破している。

神儒仏正味一粒丸とも言い換えられる、報徳の教えとは、建国以来の日本精神が脈々と流れるに止まらず、これを敷衍して善因善果・悪因悪果を人生の鉄則と悟りきった深い東洋哲学として、ここに美しい影を映しているのである。

以上の事実は、「忠孝一本」・「君民一致」を伝統とする日本の国柄を示す一端に過ぎないが、日本人にして、この事実を認識さえすれば、世の問題の根底に横たわる恩讐は、全て超えられるものと信じる。一国として、真の世界平和に向けて立つことが出来る。

畢竟、「君、君たらずとも、臣、臣たらずべからず、親、親たらずとも、子、子たらずべからず、まして名徳の大君、名分の親にして仕えるに絶対なり。」を道理とした古人の徹底した態度は、「学問とは君臣の間の忠、父子の間の孝に極まる」とした。加えて、「臣民は君に忠にして以て父の志を継ぐ」というのが家である。重ねて「家」とは、先祖以来の志を継ぐことであり、継ぐとは忠にして初めて継ぎ得るのである。

これこそ建国以来一貫して流れる日本精神の神髄であり、我々の先哲偉人は、万世一系の国史を誇りとし、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」（『教育勅語』）て来たのである。

「道、忠孝に窮る」。嘗て畏友が墨書せられた色紙の言葉が忘れられない。嗚呼、正しく「人生他なし忠と孝」である。

注一　神武天皇が畝傍橿原の地にて御即位せられ、日本国家の礎が築かれた時、既に東洋では孔子と釈迦が、西洋ではソクラテス・プラトン・アリストテレスが出現し、史に旧約聖書も完成していた。

参考文献
平泉澄博士著　『少年日本史』　皇學館大學出版部
田中　卓著　『山　彦』　勉成出版
『日本国家成立の研究』　皇學館大學出版部
三戸岡道夫著　『二宮金次郎の一生』　栄光出版社

飢饉とコロナ禍

横山正義

二宮尊徳が財政再建を行った時代は享保（一七三一）の飢饉、天明（一七八二）飢饉、天保（一八三〇～一八四〇）の飢饉の三大飢饉の一つ天保の飢饉の時代でした。全国の死者二十万～三十万人。天保初年より天候不順が続きました。地方によっては犬、猫を殺し食べて飢えをしのいでいました。全国各地とも三分ないし七分作で米価騰貴、各地餓死や捨て子があり、行き倒れもあり、騒動が勃発しました。

米価の高騰に伴い、諸物価が高騰しました。この頃の多少の救いは幕府の窮民賑給、お救い小屋など、酒造制限、小売値引き令、囲い米の売却、廻し米、韻隠米などの政策をとったが江戸だけであった。大坂では公平な処置が行われないため大塩平八郎の乱が起きました。

二宮尊徳が大掛かりで最初に取り組んだ桜町の改革では、最初、失敗し、逃げ帰ってきました。ふたたび二宮尊徳は不退転の決意をし、創意工夫して、改善にとりくみました。奥さんを代え、財産を捨て、家族で桜町に編入しました。思想としては参禅した経験に基づき、「儒教思想、神道」に仏教が加えられ、仏、儒、神となりました。

元禄時代（一六八八～一七〇三）桜町領は高四千石民家四百四十戸、貢租三千百俵であったものが、文政（一八一八～一八二九）期には戸数百四十戸、貢租八百俵に減少していました。

二宮尊徳は領主と交渉し、石数四千石から二千石としさらに貢租は十年間四百五石と条件を勝ち取りました。

二宮尊徳は早朝より夜遅くまで、領内を巡回し、農民に勤勉の生活を教え、また出精者を農民の投票で表彰したりもしました。〆粕、乾鰯（ほしか）などの肥料の導入、種穀の貸付、用排水や農道の整備、荒地の復興、分

家と入り百姓による人口の増加などを試みました。植え付けの二割、稗（ひえ）を播く。その他に芋、かぶ、大根などを栽培する。こと細かに創意工夫を試みました。

現在、桜町領は下野国桜町領、下野国芳賀郡横田村・物井村（栃木県芳賀郡二宮町）東沼村（栃木県芳賀郡真岡（もおか）市である。

桜町領では民衆は二宮尊徳の報徳仕法を自らの創意工夫で生活のなかに取り入れ飢饉を乗り切ります。

江戸幕府は救済措置をとりましたが、大坂では救済が不平等で大塩の乱が興りました。

現在令和の世、コロナ禍、民衆が行政の作る仕法とワクチン接種に、創意工夫で生活の中にどれだけ、取り入れることができるかどうか。そしてコロナを克服し、世界で突出したGDPの二倍千兆円以上にもなる財政赤字、財政再建ができるか。問われるところです。

令和三・一・二三　コロナウイルス感染者　三十五万六千九百四十七人　死者四千九百九十四人

天保の時代、三人の農政家が財政の再建を主張いたしました。二宮尊徳（一七八七～一八五六）、大蔵永常（一七六八～一八五九）行方不明、大原幽学（一七九七～一八五八）自殺でした。名を残したのは二宮尊徳だけでした。

天保の飢饉の頃

明和五年（一七六七）大蔵永常生まれる

天明七年（一七八七）二宮尊徳生まれる

寛政九年（一七九七）大原幽学生まれる

＊米一表の値段

文政六年（一八二三）	金二十一銭	二宮尊徳桜町の報徳仕法開始
七年（一八二四）	金二十六銭	
八年（一八二五）	金十八銭	
九年（一八二六）	金十六銭	
十年（一八二七）	金十九銭	
十一年（一八二八）	金三十六銭	越後地震
十二年（一八二九）	金三十九銭	江戸大火
天保元年（一八三〇）	金三十銭	
二年（一八三一）	金三十銭	総人口　二、七千二十万人。防長大
三年（一八三二）	金三十八銭	全国飢餓始まる
四年（一八三三）	金二十五銭	全国地で米価騰貴による一揆・打ち破壊し頻発。五年の倹約令
五年（一八三四）	金三十銭	関東諸国に江戸廻米命ず。江戸町会所窮民三二万金次郎四千人に施米
六年（一八三五）	金三十七銭	
六年（一八三五）	金三十七銭	
七年（一八三六）	金六十銭	諸国飢餓。甲斐郡内一揆。江戸神田に御救い小屋設置。死者十万人。一揆、打ちこわし頻発
八年（一八三七）	金三十八銭	二宮尊徳桜町報徳仕法終了
		大塩平八郎の乱。江戸に御救小屋設置
		生田万の乱（越後柏崎）
		佐渡百姓騒動
九年（一八三八）	金三十四銭	
十年（一八三九）	金三十八銭	
十一年（一八四〇）	金二十八銭	

安政二年（一八五六）　金三十二銭　二宮尊徳死亡
安政五年（一八五八）　大原幽学自殺
安政六年（一八五九）　大蔵永常行方不明
平成十四年（二〇〇八）金一万四千二百九十五円

『参考文献』

＊国史大辞典
編集　国史大辞典編集委員会　発行者　吉川圭三
発行所　㈱吉川弘文館

＊親子で学びたい二宮金次郎伝
三戸岡道夫　致知出版

安芸門徒シルクロード紀行（11）

村上邦治

五三　第三次派遣準備

一九一〇（明治四三）年初頭、名だたる中央アジア探検家は珍しく揃って母国に帰国していた。国家の支援を受け持ち帰った古文書・仏画・仏具類・壁画などの採取品を整理し、調査報告書を作成するためであった。

一月末大谷光瑞が主宰する日本探検隊がトルファン・クチャ・楼蘭で数々の遺品を発掘したことが報道された。二月初めには英ザ・タイム誌が橘瑞超を取材、「中国トルキスタン探検」を掲載した。その中で最古の極めて珍奇な歴史史料「李柏文書」を、楼蘭で掘り当てたことを詳細に報じた。

これら報道により「瑞超・橘」の名は欧州の探検家、考古学・東洋学者の間で評判になり、一流探検家の仲間入りをした。

大谷光瑞は瑞超を伴い、孟買（ボンベイ）から途中エルサレム・エジプト（ナイル上流探訪）・ギリシア・イタリアを経てロンドンに着いたのは四月上旬であった。光瑞が所属する英王立地理学協会では橘の発掘した「李柏文書」が話題になり、橘は二十歳の若さで会員に推挙された。「光瑞・大谷」とともに橘の名は西欧に広く知られていることに改めて気付かされた。

八年の暮れヘディンが日本を訪問した折西本願寺に招き親しく歓談した光瑞は、ストックホルムに赴きに橘を紹介した。楼蘭での古文書発掘により一躍有名になった橘に会い、あまりの小柄で優しい風情の青年に驚いた。ヘディンからは最初に発見したホータンのダンダン・ウイリク寺院や楼蘭の故城発掘について教示を受けた。そしていつの探検でも地図に空白となっているチベットの

探検を目指した地理学者ヘディンから、厳重な鎖国政策をとるチベット入国について聞き込んだことは間違いない。瑞超はヘディンの探検談を後日実行する。

ロンドンではスタインに会いトルファン・ホータン・楼蘭の発掘について尋ねた。さらに敦煌莫高窟で発見された「敦煌文書」の残余の古文書について、詳細に聞き出したはずである。スタインから聞かされた敦煌文書は後で日本への将来に努める。この時も光瑞が同行した。

二人の大探検家は二十歳の若さで「李白文書」発掘という偉業をなした青年に向かって、「しかり遣るべし」(『中亜探検』)と激励した。国家の支援を一切受けず、貧弱な陣容装備にとどまる日本探検隊のこれからの困難に思いをはせ、あどけなさが残る橘に同情した。

光瑞は当代二大探検家ヘディンとスタインの面談には紹介を名目に同行し、橘と一緒に直接体験談を聞いた。二人から未知の地の体験を克明に聞き込むことで、三次探検で赴く調査地を検討した。

ベルリンでは民族博物館でトルファンやクチャの千仏洞から根こそぎ剥ぎ取った仏教壁画を実見し、ル・コックに会った。コックは「どうしてなかなか抜け目のない素ばしっこい仏僧」と橘の印象を書き残した。パリの国立図書館(経典類)並びにギメ国立東洋美術館(仏教芸術品)で、中国語が読解できた東洋学者ポール・ペリオが選び抜いた精華を閲覧した。二人はペリオに会い、中央アジアの最新情報を得た。

スタイン探検隊は大英博物館と印度政庁から多額の出資を受け国家事業として遂行された。王道士から寄付金として安く買い求めた敦煌文書は、約四万点とされたうち五千点を最初に選び、占写本二十四箱絵画古美術品五箱を大英博物館と印度政庁に運んだ。文物は九年春ロンドンに到着、スタイン自ら調査・整理したあと、一〇年六月大英博物館で一般に公開された。

スタインが真っ先に選んだ敦煌文書は、千年以上莫高窟の一洞で保蔵されていたとは思えない色鮮やかなもので、観客は一様に驚き仏教絵画に圧倒された。漢字もわからず仏教経典・絵画を初めて見た人々を魅了し、その反響は西欧のみならずアジアまで詳しく報道された。

ちょうどこの時光瑞はロンドンに滞在中であった。確かな記録は見つからないが、光瑞や随行員はこの展示会に行ったことは確かであろう。光瑞は経典や仏教美術に幅広い知識を持っており、展示された仏画の鮮やかな色彩や漢字で書かれた見事な筆づかいの写本に驚かされた。展示された「敦煌文書」を目の当たりに見て、光瑞は莫高窟に関心を高めたことであろう。

最初にスタインが次にペリオがそして残りのすべては北京の京師図書館(現国家図書館)に送られたとされたが、清国の政情・役人そして民衆の習癖を熟知している

光瑞は「莫高窟にはまだ残存している」と確信すると共に、その中には探し求めている梵語による原典が混ざっている可能性もあるのではと思わせた。

チベット仏教については五台山での弟尊由とダライ・ラマ十三世の会見以来興味は増すばかりであった。しかも前年には青木文教が亡命先のダージリンで拝謁を成し遂げ、チベット仏教研究のため留学生派遣の実現を期待した。しかしラサは清国四川軍に占領され、肝心の十三世自身が印度に亡命の身であった。日蔵二国間で合意された留学生交換の実現は見通せなかった。

これら検討したうえで三次派遣の目的地は、ヘディンやスタインの話からタリム盆地のシルクロードオアシス都市には仏教東漸を物語る多くの未発見の遺物が眠っているということで、引き続きトルファン・楼蘭・クチャ・ホータンの地とし、探索することである。

光瑞は三次探検の概要を英国地理学会に予告したがその計画はジャーナル誌に掲載された。そこにはクチャ・トルファン・敦煌を調査地とし、特別調査対象として楼蘭のあるロプ・エチナ盆地および敦煌・安西近傍地域間の関係調査のためエチナノール(湖)・カラノールを探索の予定とした。派遣探員は三人、調査期間は一年半であった。しかし実施された調査地も人数も発表の内容と大幅に変更されていた。最近の研究によると、英国が大谷探検隊は「日本政府・軍部の別動隊」との見方に反発、あえて偽りの計画を発表し抗議を示したものと解されている。

次にロンドン大英博物館・パリ国立文書館・ギメ国立東洋美術館での公開により、専門家だけでなく一般社会を興奮させている「敦煌文書」の日本将来である。まだ敦煌莫高窟にはかなり残されていると考えた。

第三はヘディンが挑戦し成功したチベット入国を果たし、地理・政情・宗教事情を調べることである。厳しい鎖国を続けているが十三世の帰還が見通せない今、何とか入国を果たし秘密の国を調査することであった。

光瑞の三次派遣の構想は固まった。この探検に挑戦する人物は、最も可愛がる橘瑞超一人であった。

ロンドンには光瑞に同行した橘と新婚旅行中の九条良致・武子夫妻、裏方籌子と印度滞在中からお供をした足利・桂本がいた。また九条夫妻や籌子の案内のため英国に最も詳しい一次隊員の渡邊哲信を一足早く派遣、ロンドンに駐在させた。印度に残り遺蹟調査に従事していた青木文教・和気善巧の二人も印度から呼び寄せた。これからの本派を担うことになる若い者に、世界の中心英国や西欧諸国を見聞させたいとの心遣いであった。

また本山で宗祖大師六百五十回大遠忌法要の準備に忙

殺している執行長の末弟尊由を藤山尊証に随行させ、最も早く西欧に行くことができるシベリア鉄道を使わせ呼び寄せた。名目は本山各部の大法要の準備状況の把握と今後の体制整備について協議することであった。法要まで既に一年を切り、門徒百万人の京詣という途方もない計画に、本山各部は忙殺されていた。しかし尊由に西欧の進んだ団体旅行や観光客の誘導など、よく考えられた無駄のない対応を直に見せることで、団体参拝の効率的な手配を検討させるためであった。

本山の奥深く留まっている法主と違い、光瑞は自ら西欧を視察しながら経営者としての目を養っていた。こうしてロンドンには本派に関する滞在者は十名に上った。

裏方と武子は途中立ち寄りながらシベリア鉄道で、光瑞は寛げて豊富な料理が楽しめる客船で其々帰国することにした。武子の夫良致はケンブリッジ大学に引き続き留学を希望しロンドンに残った。チベット留学を目指す青木文教は首都ラサの情勢に変化が見られず、暫く英国に滞在、西欧諸国の宗教事情を調査することにした。

八月十五日裏方・武子と随員渡邊が出立、光瑞は足利・藤山・桂本とともに二十日客船で帰国の途に就いた。

五四　突然の悲運

光瑞が西欧から帰山したのは十月の初めであった。大遠忌法要の三月まであと半年もなく準備も佳境に入り多忙な中、十一月後継者を披露する儀式を行った。

父光尊には光瑞ほか男三人女三名が成人した。籌子の父九条道孝は六男七女を儲けた。籌子のすぐ下の妹節子皇太子妃（貞明皇后）には、既に迪宮（裕仁後昭和天皇）淳宮（秩父宮）光宮（高松宮）の三人の男子が誕生していた。幼少の頃から病弱であった嘉仁皇太子と違い、光瑞の背丈は百八十㌢を越え体重は八十㌔を上回り西欧人と肩を並べても遜色ない堂々とした体格は、当時の日本人としては大柄で遠くからでも目立った。乗馬や山歩き、ヨット操縦など体は至って壮健であった。

光瑞は妻籌子を大切にし、当時としては珍しく二度も外遊に連れ添った。最初は六（明治三九）年光瑞二度目の八か月にわたる清国視察、二度目は九年から一年にわたる印度・西欧の外遊である。いずれも随行員を付け遣蹟や宗教事情の調査に没頭する光瑞とは別行動をさせ、風光明媚な名所や名高い観光地を旅行させた。

しかし夫婦間・両家の血統に何も問題がないにもかかわらず、なぜか二人の間に子は一人も授からず、皆口には出さなかったが不思議がった。これまでなら側室を迎えるのだが、近代文明国を自認するこの時期では周辺からは側室の声はでなかった。

結婚して十年を経たが籌子との間に跡継ぎができず、

七年十歳下の直弟尊重（淳浄院浄如光明）を養子とし大谷宗家の後継者に決めた。

十一月初め懸案であった尊重の大谷家嗣法選定式を宗祖像が安置される御影堂で行い、その後東山の麓大谷本廟宗祖墓所の祖壇前にある大谷明著堂で報告式を行った。合わせその日尊重は九条道孝公爵五女紆子（裏方籌子・節子妃殿下の妹）と婚儀を挙げた。これにより門主光瑞並びに新門光明は九条家から三女・七女を妻に迎え、一方妹武子は九条家に嫁ぎ、大谷伯爵家と九条公爵家はきわめて緊密な家柄となった。披露宴は次の日京阪の名士を招待して本山で行われた。帰国後の慌ただしい中、懸案であった新門披露と挙式を済ませ、翌年春の大法要に集中した。

一一（明治四四）年元旦、五年前から準備をしてきた宗祖六百五十回大遠忌法要開催の年が明けた。この正月は昨年十一月光明の婚儀と嗣法選定報告式を済ませ、三月からの法要準備も順調であり、めでたい三箇日になるはずであった。

ところが大行事を前にして突然光瑞に非運が襲った。西本願寺裏方籌子に異変が起きたのだ。

籌子は結婚以来日本最大宗派を誇る浄土真宗本願寺派法主光瑞の片腕として目の届かないところを支えてきた。日露戦争後光瑞の命により、地方に分かれていた婦人門徒会を趣旨書・概則を定め仏教婦人会に統合、総裁に就任した。表舞台に立った籌子は、婦人教化を進め戦時の婦人のあるべき姿を明らかにし、坊守・門徒として積極的な行動を促した。多くの住職・門徒が戦地に赴いたあと後顧の憂いなき宗派を目指して教化の最前線に立ち、精力的に全国各地へ出向いて協力を求めた。裏方を拝顔し直接講話を聴くことのできる滅多ない機会に、どこでも婦人門徒は競って集まり盛況を極めた。

婦人会の具体的な事業としては女子教育の振興がある。京都高等女学校（現京都女子大学）の設立、東京では島地黙雷設立の女子文芸学院（現千代田高等学院）を運営した。欧州を旅行した折には義妹武子とともに、西欧の進んだ女子教育の実態を視察した。キリスト教に模した日曜学校や寺院併設の病院にも積極的に関与した。

光瑞が苦手とする所轄の文部省や宮内庁の折衝は一手に引き受けた。

伯母にあたる英照皇太后（孝明天皇女御立后前天皇崩御・明治天皇嫡母・父道孝実姉九七年没）に幼い時から一番可愛がられ、孫の嘉仁皇太子（後大正天皇）の御妃に望まれていたことは多くの人が知っていた。早くから籌子・節子の九条姉妹は皇太子妃の有力候補であった。

西本願寺の裏方になってからは、上京すれば何せ節子妃が御所で姉籌子に会われるのを一番の楽しみにして

待っておられた。仲の良い二人は住む世界が大きく違うものの最高位の夫人として語り合うことは多く、日ごろの鬱積した気分を和らぎさせた。皇太子妃が最も煩瑣に会う裏方籌子に対し、いつもは呼びつけ横柄な態度で見下した言い方をする官僚たちは、上品な物腰と話しぶりながら皇太子妃と同じく少し勝気で毅然とした態度に、役目として当然の詳細な聴取・耳の痛い苦言・所轄部署としての指導などとてもできなかった。桂首相ですら光瑞の意を受け海外領事館や陸軍への依頼事を粘り強く説明し目的を遂げるのが常であった裏方を、「最も苦手とする訪問客」と周囲に漏らすほどであった。

異変は元旦の夜突如起きた。恒例の新年懇親会は大谷家一族・執行長以下本山幹部が錦華殿食堂に集まり開かれる。裏方は役員に「今年もよろしく」「昨年はお世話になりました」「春の大遠忌の準備で大変でしょう」などと慰労や感謝の言葉を掛けながらお酌をして回った。この宴が終わるまで何とか気丈にふるまっていた裏方は、深夜「気分が悪い」と言ったまま息も荒く痛みに苦しみ始めた。

直ぐに主治医が駆けつけ、次に京都一の名医といわれる内科・婦人科の二博士が呼ばれ診察と治療にあたった。高熱を発しうわごとを言うような症状が続き次第に悪化、病名も判明しなかった。

最も心配されたのは節子皇太子妃であった。報告を受けるやすぐに侍医と婦人科の権威二人を京都に向かわせた。しかしこの二人でさえ病名や治療法が分からず、対処療法を試みるばかりであった。

時折熱が下がり小康状態の時には夫婦の会話もできたが、一月下旬危篤に陥り二十七日深夜数珠を手に「南無阿弥陀仏」を唱えながら息を引き取った。入輿して十六年、享年三十一歳の短い生涯であった。諡名は光願院如性と称された。

大阪毎日新聞記者で光瑞夫妻と印度まで同行した関露香は紙上で、印度での「洋装美々しく前途燃ゆるがごとき希望にみたされ、しかもすこぶる御壮健で夢だに今日のことあるべしとは思わなかった」と当時を懐かしんだ。そして「人は朝に生まれ夕べに死する露の命とはかねて知るものの、籌子裏方のごときはまだ花も盛り、ようやく三十に達せられたばかりであるのに、昨日は花と見しうるわしの裏方も、今日は無常、はや鳥辺の山に荼毘一片の煙となった。いまや白骨と化し、大谷本廟の中陰壇に納まった」（一部略）と往生を惜しんだ。

官報に東宮妃御服喪として「伯爵大谷光瑞妻籌子今二十七日卒去に付、御姉の御続を以て九十日一月二十七日から四月二十六日まで喪を服せらる」と掲載された。節子妃は歴代の天皇陵がある京都に参拝で赴く時には、

姉に会えるのを何よりも楽しみにされた。

深い悲しみの中、次の和歌を残された。

ふりつみし　みゆきはいまだ　残れ共
はかなく消ゆる　つゆの玉の緒

光瑞は七十二歳まで生きながらえるが、一切後添えを望まなかった。妻を深く愛しており、お互い揺ぎない信頼を持ち合っていた。最大門徒を抱える浄土真宗本願寺派管長・西本願寺住職として多忙を極める光瑞にとって、内助の功を果たしてきたかけがえのない理解者を失った。以後裏方の存在の大きさが次第にあらわになる。

しかし光瑞には妻籌子の死を嘆いている暇はなかった。葬儀が終わり悲しみにふけることさえできなかった。本山・末寺・門徒すべてが五年にわたり準備してきた宗祖六百五十回大遠忌法要があと一か月に迫っていた。この大行事が一時ではあるが寂しさを忘れさせた。

五五　大遠忌法要

全国から門徒百万人参詣という途轍もない目標に光瑞は秘策を練っていた。まず三月に第一期（十六日から二十四日隔日）四月に第二期（八日から十六日隔日）の二期十回に分けて法要を営むことにした。そして朝（午前九時）夕（午後二時）の二座に分け、各々三時間かけて勤める。朝座は報恩講作法、引き続き御俗姓（八代蓮如上人が宗祖親鸞聖人の遺徳を讃える中で真宗門徒としての心得を記したもの）の拝読、夕座は無量寿会作法により行うことにした。この二十回の法要を営むことにより、一法要につき五万人に分散できた。

参拝客を収容するため御影堂前の大広場に、建出（掛出）が設けられ参拝席を設置した。遠くからでもよく見えるように前方は低く後方を高くした。この建出の建設により、御影堂とあわせ二万五千人の収容ができた。少し遠望となるが阿弥陀堂前から御影堂・虎之間の広場を含めると、何とか五万人の参拝者収容が可能となった。

法要の際は阿弥陀堂から御影堂に至る経路を行列にて縁儀を繰り広げることにした。先頭に素袍（武家装束した下・無位者）が立ち、ついで本願寺世話係百五十名と七条袈裟僧侶六百名が続き、その後を鏡如法主が進み御影堂に入る演出がなされ、多くの参拝者に配慮した。

問題は参拝客の宿舎の確保であった。門前にある九十三軒の旅館では不足が見込まれたので、民家・慈善会財団事務所・本山直轄施設（大仲居・下間邸・平安中学・本山役員宿舎）があてられた。参拝部に宿舎課が設けられ、輸送課と連携し宿泊計画が立てられた。

最大の難関参拝門徒百万人を達成するため一年前から参拝事務本部が設けられ、光瑞の考えた団体参拝の募集

趣旨書が作成された。わが国初の本格的な集団旅行となる団体法要参拝では、西欧で一般化している列車・汽船・宿泊の確保と割引、宝物・書院拝観・法要参拝の手続きが一括して済ませることができるようにした。この団体方式により計画的に参詣できる体制をとることができた。

参詣者が平均して参列できるように全国を五区二十七総班に分け、一総班は人数を平均化させ編成した。門徒の少ない第五総班は東京・神奈川・静岡・千葉・栃木・群馬・埼玉・山梨・茨城の一府八県で構成され、逆に安芸門徒を擁する広島県は第十八総班（備後）十九総班（安芸）の二班に分割した。

本山から募集概要が発表され団体参拝申し込みが始まった。明治四十四年のこの時期、地方の門徒にとって列車や船に何度も乗り換え、五十年に一度の大遠忌法要のため京都本山に参拝旅行することなど夢であったに違いない。農閑期の温かい時期にあたり手続きが簡単で費用も割引され、しかも同じ近所の檀家同士で皆顔見知りばかりの寺ごとに旅行できるので、地方からの宿泊団体参拝申込者は増大、一月末で二十二万人に上った。

全国各地から列車を貸し切る団体門徒の京都入りは、京都駅・本山近くに特設した梅小路臨時駅・京阪電鉄大宮駅の三駅に集中させ混乱を防いだ。各駅にはイルミネーションを付けた歓迎アーチが建てられ青年会・婦人会が出迎えた。到着ごとに楽隊の吹奏があり、花火が打ち上げられた。この派手な歓迎ぶりは、地方から来た参拝者を驚かせた。沿道には青・黄・赤・白・橙の五色の大仏旗が掲げられ、夜間には電灯提灯と台付提灯が明るく照らし参詣者の目を楽しませた。

遠方からの門徒に手厚い接待が用意された。婦人会から五百名が動員され、虎之間でお斎接待が飛雲閣では茶菓が供された。御影堂建出の壁の上部には教団の歴史をたどる大絵が展示され、また宗門の各種学校・別院・孤児院・海外の教会堂などの写真も掲げられた。

四条烏丸には宗祖親鸞が比叡山を下って参籠し、九十五日目の暁に夢の中で救世観音（聖徳太子）から夢告を受けたゆかりの六角堂（頂法寺）がある。その前に建築中の六角会館（後京都婦人慈導協会・婦人会入居）を使い、本願寺諸事業を展示、説明文を付けて周知に努めた。

全国から集まった門徒に対し伝道が行われ、この活動は「大挙伝道」と呼ばれた。隣接の仏教大学に布教本部が置かれ、精力的な活動が展開された。学生により張られた天幕内で伝道する天幕伝道、団体参者の宿舎を訪ね遠路の疲れを慰みつつ行う宿舎慰問伝道、街頭に出ての路傍伝道、市内各所を移動する遊履伝道など布教使・女教士・婦人会・学生により行われた。法要の間市街には門徒の参拝者であふれ、府民に日本最大を誇る浄土真宗本願寺派の力を示した。

何と言っても参拝者が京都本山に参り長く記憶にとどめたのは、報恩講作法の儀式であった。御影堂に埋め尽くす僧侶の大読経、笙・鐘などの雅楽、法主・高僧のきらびやかな僧衣は地味な真宗ではあまり見られないもので、さながら時代絵巻を観るようであった。特に明治三美男子と言われた父光尊に勝るとも劣らない貴公子然とした光瑞法主の偉丈夫でひときわ目立つ姿は門徒には生き仏に見え、姿を見るや「南無阿弥陀仏」を唱えた。

なお報恩講作法については二〇一二（平成二四）年一月に行われた親鸞聖人七百五十回大遠忌御正当報恩講「報恩講作法」の様子が西本願寺のホームページで視聴できる。ついでながらこの時始まった音楽法要は、オルガンが演奏され正信念仏偈が合唱された。キリスト教の讃美歌と同様な雰囲気を醸し出し、若い層の門徒に受け入れられる新しい法要の形を示した。

団体参拝者は記念品として宗祖聖人自筆の『唯信鈔』、『善信聖人絵』の一場面を影印印刷した額装、赤松連城・前田慧雲らの法話をまとめた『遠慶宿縁』が配られた。法要の写真を収めた『大遠忌写真帖』や四百五十回大遠忌を描いた『大遠忌絵巻』が記念出版され、多くの参拝者が買い求めた。

地方の門徒にとって初めての京都・本山参詣・大遠忌法要参列そして度肝を抜く歓迎ぶりに、皆一様に満足して帰途に就いた。

法要の全日程が終了した四月中旬、鏡如宗主は次のような満座消息を発布した。まず、「巨万の同朋と共に二期の法要を修了せしこと喜び之に過ぎず」と、法要が全国各地から門徒を迎え無事修了したことに安堵した。参拝者は百三万人に及ぶとされた。続いて「凡夫如来の願力によらずんば、いかてか生死を出離することを得ん。故に一向に弥陀に帰し一心に本願をたのみ毫末も自力の妄計をまじえさえれば、往生は仏の方より治定せしめたまう」と宗祖親鸞の絶対他力本願を説いた。

光瑞が六百五十回大遠忌で真に願ったのは「一時の盛況止りて、将来の発展に資するなくんば、報恩謝徳の真意に副ふべからず」と一門が団結しさらなる発展であった。光瑞は法主就任後海外で教線拡大に注力しており、中国に展開しつつある拠点をさらに増やす計画であった。そして衰退した中国仏教の復興と印度での仏教復活を目論み、アジア全域の仏教興隆を目指したのであった。そのためにも西欧に残る大乗偽仏説を打破するための梵語原典の探索と、海外布教の拡大に備えて人材の育成が急務であり、六甲二楽荘に隣接の武庫中学を開校した。

これらの実施には途方もない資金を必要とした。明治の初めには本派本願寺には今日の価値で数百億円の蓄えがあった。日清・日露両戦争に積極的な協力・支援をし

たとはいえ、ほぼ使い果たしていた。そのためこの大遠忌の準備に入るや財政の立て直しに着手する。

一九〇六（明治三九）年年頭「宗祖大師六百五十回大遠忌にあたり一宗本末の基礎を鞏固にして伝道の永遠に企画する」ため「本末共保財団」の設立を示した。その後直喩で寄付金目標額を五百四十万円以上とし、三分の一を本山基金、一を別院・末寺・説教所・教会講社の基金、一を日露戦役の負債の償却と大遠忌挙行の準備に振り向ける常用金、とするとした。既に先代明如の時「護持会財団」や「慈善会財団」が設立されていたが、教団自体の財政を強化する財団は設置されていなかった。

寄付先の末寺に布教員を派遣し、寄付額に応じ昇階させる褒賞制を採った。大遠忌法要という大行事に百万人の参拝という大目標を掲げたのも、この寄付金目標五百四十万円の大幅超過を狙ったものでもあった。

しかし日本経済は日露講和直後には一時好況に沸いたものの、明治四十年からその反動による経済恐慌が発生、倒産や休業が続出した。その後も元老井上馨が『提言』でいみじくも述べたように「欧州の大禍乱（第一次世界大戦）は日本国運の発展に対する大正新時代の天祐」としたが、一四（大正三）年までの二十五年間は不況が続いた。この間大資本による独占化が進み財閥が形成されたものの、民衆は戦争費用の返済や軍備増強のより、所得税増税や酒類など間接税の新設に苦しんだ。しかも物価高騰や天候不順による凶作に喘いだ。

過半の門徒が占める農村では明治の初め地租改正により農民は土地所有を認められ自立したが、不作や水害が続くと借金から土地を手放し小作農に戻った。辛い農村生活に見切りをつけ、満州は無論のこと遠くハワイやアメリカ本土さらにブラジルへの移住が本格化した。跡継ぎ以外の子女は都会の工場に働きに出たが、過酷な労働条件と低賃金に苦しんだ。この時期綿糸・紡績工場や炭鉱・銅山で組織的な暴動やストライキなどの社会運動が頻発した。こうした中での末寺の寄付金募集は困難を極め、目標額達成は程遠かった。

そのため本山執行部は基金への配分を後回しにし、大法要の開催費用である常用金百八十万円の集金を優先させざるを得なかった。御影・阿弥陀両堂の修理、出勤僧侶集会所・団体参拝事務所・記者警察官詰所・臨時郵便局・救護所の設置などすぐにでも巨額の資金が必要であった。この処置により何とか常用金は目標額に達したものの、本来の目的である本末共保財団の基金に充てる寄付金は大幅な未達となった。

本山が六百五十回大遠忌法要という大行事の眼目として掲げた本末共保財団設立の基金募集はその後も難航し続けた。門徒に経済余力の乏しいことが主因であったが、

一万に及ぶ末寺の全面的な協力が得られなかったことも大きい。

光瑞は本山に不在しがちで、行事のある日以外は新築した六甲二楽荘で過ごした。これを見ていた末寺の住職らは、法主の勤めが不熱心にみえた。六甲で教線拡大に必要な人材の育成に取り組む法主を理解する者は少なかった。まして日本仏教の正統性やアジア地域の仏教興隆を抱いて海外視察や探検を行う光瑞を、本山を長期間留守にして中国や印度・西欧への長期旅行、さらに多額の資金をつぎ込み浄土真宗と関係のない中央アジアに幾度も探検隊を繰り出すことなど、ただ無駄使いをしているとしか思われなかった。

お勤めをおろそかにし門徒の貴重なお布施を浪費しているとしかどうしても思えない光瑞に対し、末寺の中から批判的な集団が形成される。そして財政を返りみない光瑞を咎める役日の執行長ら執行部の人事刷新と寺法に定められた大谷家と本派の財政分離の徹底を求める運動が、東京・大阪・広島で始まった。

大遠忌を日前にした二月、東京の改革派は猶興会（主唱者柘植信秀「明教新誌」記者「中外日報社」同人）を立ち上げた。新しい仏教運動を目指し結成された団体で、機関紙『新仏教』により、光瑞法主に対し「独裁専制主義の危険・大谷家と本山の分離独立、法主直属の職制廃止、寺法不備の訂正・集会権限拡張・制度調査会設立・通報所廃止、財政改革では緊縮・整理の始末・各財団の収支報告・各冥加金軽減、教育改革では宗門教育方針の確立・虚栄浮華の教学施設全廃」などを提言した。

大阪・神戸など関西の僧侶らは大遠忌法要中ながら憂宗会（会長中井玄道米国シアトル布教所派遣）を結成、西日本に広がった。一大教区広島においても還俗した国会議員金尾稜厳（後安芸改革党代表）を中心に、批判勢力が本山改革の必要性を訴え始めた。

反光瑞派が公然と各地で声を上げ始めていた時だけに、光瑞にとっては大遠忌法要の百万人参拝と新財団設立の寄付金目標は是が非でも達成させる必要があった。

五六　第三次探検敢行

ここからは瑞超の手記『中亜探検』から追っていく。

前日シベリア鉄道を使い帰国する裏方・九条武子随行渡邊哲信をリバプールで見送った橘瑞超は、奇しくも八年前第一次探検隊が出発した八月十六日ロンドンを発った。露都サンクトペテルブルクまでは一次と同様連絡船と列車を乗り継いだ。荷物二十個は新聞広告で募集した二歳下の英国青年の従僕が船で連んだ。

従僕と二人でこれからの準備をした後、露都から東に延びるシベリア鉄道に乗り込んだ。ウラル山脈を越えモスクワの真東二千五百キロにある西シベリアの行政・軍事・

経済の中心都市オムスクに四日がかりで着いた。シベリア特有の広大な低湿（ステップ）地帯を流れるイルテリシュ川と大河オビの支流に交差し、シベリア鉄道開通後は交通の要所としても発展しつつあった。

オムスクに三日間滞在後、川船を使い五百キロ東南のセミパラチンスクまで行き、そこから馬車で国境を越え中国領タルバガタイ（ターチャン）に入った。さらに天山山脈北縁の幹道を通り十月十九日ウルムチに着いた。ロンドンを発って二か月を要した。光瑞は当初孟買まで船を使い、列車でカシミールのスリナガルへ行き、そこから新疆に入ることを考えた。しかし印度政庁は大谷一行の諜報活動を強く疑い、清国への出国を許可しなかったためのロシアからの行程に変更した。野村との探検では外モンゴルから入っており、二度目の訪問であった。

ウルムチではトルファン・楼蘭への本格的な探検準備のため十日余り滞在、二年前の訪問時に知り合った旧知の友と交流ができた。トルファンへ向けて十一月初め出発、身軽になるため英人従僕に大行李をクチャまで運ばせ、二人はそこで落合うことにした。

トルファンでは高昌故城を発掘、古銭や大般若経の経典やウイグル文字による写経の一部を採取した。その後ロプ砂漠を南下、ちょうど最適の冬期に当たり灼熱にはならずまたこの時期砂嵐も少なく順調に進めた。そして二年前に訪れた楼蘭に着き、前回偶然に掘り出した李白文書の発見場所近くを「盛んに発掘」を試みた。しかし今回はたいした獲物を得ることはできなかった。

一度西域南道のオアシスチェルチェンに戻り数日間滞在、タクラマカン砂漠を北に縦断し従僕の待つクチャに行く準備をした。この地から西域北道への縦断はこれまでどの探検隊も踏破しておらず、未知の行程であった。大行李はすでに従僕に運ばせていたこと、大砂漠踏破に打って付けの真冬期であったこと、距離的には最短であることから、とにかく真北へ進めばタリム河に到達することができ、そこから数日で北道の要所ブクルかクチャの近くに辿り着くことができると考慮した末での決断であった。一見無謀な旅行に見えるが、地理学上の湖水や古代文明の花を咲かした強大な上国の「一種の光輝を発見する」ことになるかもしれない、との探検家らしい野心を秘めてのことでもあった。

二月四日チェルチェンを出立、只々磁石の示すところに従い、北へ北へと砂漠の中を進んだ。何日過ぎても四囲の光景は変わらず「寂寞荒寥満目悉く沙で何物も眼に映ずるものはない」単調な風景が続くだけであった。

次第にキャラバン隊に雇ったトルコ人たちに不安が募り、死の恐怖心に駆られてきた。瑞超一人「猊下の御命令を遵奉すれば善い」との達観した覚悟で乗り切れた。しかし氷も溶け水は飲めず、食料のパンは一片もなく

なった。駱駝が斃れトルコ人の失望は極点に達した。

二日間一滴の水も口にせず、ただ磁石の示す方向に進んでいたところ地図にもない涸渇した河を発見、この涸れた河床に水溜りがあり争って飲んだものの全員下痢をきたした。水は悉く腐敗し動物すら飲まないものであった。周りを探すも河や飲める水はなかった。再び磁石の示す方向を進み、やっと緑を帯びた森を発見、野羊や人の足跡を見つけた。出立して二十二日、遂に南から北へと「タクラマカンの大砂漠を通り抜けた」のであった。

クチャに到着してみると、ホップスという名の従僕は既に天然痘で亡くなり遺骸はカシュガルに運ばれていた。瑞超は休む暇もなく大急ぎで西域北道を使い、三週間を要する行程を十日間でカシュガルに着いた。三月中旬英国総領事の立ち合いで葬儀を済ませた。

その夜追い打ちをかける驚愕する悲報が舞い込む。一月末京都から発信された「裏方逝去」の電報であった。

リバプールで帰国されるお裏様を見送ったとき、

「どうかくれぐれも、食べものと水には気をつけてください。辺地へ入ると病気になればお医者もおらず、大変ですからね。それに、怪我もしないようにね。砂漠で怪我をして動けなくなれば、遭難することにもなりかねませんからね」（津本陽『大谷光瑞の生涯』）

と、実の母のように優しく細やかな気遣いをしてくだ



第三次探検隊　橘・吉川の行程図
『シルクロードに仏跡を訪ねて』（本多隆成著）

さった。プラットホームの一番端まで走り、見送った思い出がありありと浮かび上がった。暫く茫然としてなすところを知らなかった。

五七　チベット挑戦

三週間滞在し西域南道のヤルカンド・ホータンを経て第三次探検最大の目的地に向かった。ストックホルムでヘディンから直接聞き出したチベットへの入国である。無論光瑞がロンドンで発表した探検計画には載っていない。また瑞超『中亜探検』にも光瑞の計画であるとは記されていない。しかし手記を注意深く読むと、チベット入国を目的に南道を東に向かったのは間違いない。

露都ペテルブルグで探検の準備として、モーゼルのピストルを護身用に買いたい旨露国当局に申請した。その時の申請書には「日本の僧侶でチベット〔西蔵〕旅行をしたいから、護身用として一挺買いたい」と記している。

また楼蘭を訪れた後南道のチャルクリクに行くのだが、「ここはかつてヘディン博士がチベット探検の準備を整えたところで」と記載しており、常にチベットへの入国が頭から離れなかった。

また二か月間ホータンに滞在し盛夏期に出発しており、六千㍍級の高峻で厳寒を予想したことからこの時期を選んだと思われる。チベットに向かわず南道をまっすぐ敦煌に向かって進むのであれば、この時期砂漠を通行するのは最悪である。

『中亜探検』は一九一〇年八月ロンドン出立しシベリア鉄道オムスクから満州ハルピン朝鮮を経由して一二年六月京都に帰着までの二十二カ月を七十七の章立てで構成されている。三か月間にわたるチベット高原に関する章は十二章を占め、次に多い砂漠縦断と楼蘭に関するものは各々六章と圧倒している。瑞超にとって最も重要な任務で、強烈な思い出となったことを示している。

決定的な証拠は光瑞から中国の内乱拡大により、急遽シベリア鉄道により帰国を命じられるが、

「最初の計画は第一にタクラマカン大砂漠の縦断を試み、第二にはチベット高原を跋渉して甘粛省に出て、第三には安西より北緯四十度に沿い真東に進み帰化城（現フフホト呼和浩特）付近の内モンゴルを探検する」

と白状している。

探検の出発前から光瑞・瑞超の最大目的このチベット高原への進入であった。

チベット高原踏破は、かねてから光瑞はひそかに温めていた。最初本願寺でヘディンの講演を聴き、次に二度目の西欧滞在中ストックホルムで会い、チベット高原への入国は「困難を伴うものの不可能ではない」との思いを強くした。ヘディンは既に九六年ホータンから、一九

〇一年には楼蘭の南下から、六年には印度北部レーからと三回挑戦いずれも成功していた。

一一年六月末ホータンを出発、三日後に次のオアシスケリアに着く。この地は崑崙山脈の豊富な雪溶け水が注ぐケリア河がタクラマカン砂漠に流れ出ており、この河の上流を目指せば高峻で「底知れぬ」と表現した崑崙の山岳を越え、チベットに辿り着くことができる。ヘディンが最初に侵入した経路と同じものであった。

ケリアを本陣に定め、チベット高原に向けて苦力六十人余、馬だけでも二十頭そのほか駱駝・驢馬・ヤクを買い入れた。また雇人と動物用に三十日分の糧食を準備した。約一か月をかけチベット高原から中国甘粛省に出る計画であった。

万端の準備を済ませ、予定通りケリア河の上流に向かって進んだ。しだいに川幅は狭く「雷の如く」響く激流となる。崑崙山脈を越えるのは「言語に絶する」難所であった。何とか困難を乗り切り崑崙山脈の南前面に出ることに成功、湖のほとりを基地とした。

しかし隊長の瑞超のほか隊員のトルコ人全員が高山病と日射病に罹った。心臓の鼓動を覚え、また呼吸するものの息苦しく倒れてしまった。数日皆テントで横たわり回復に努めた。一週間で全員元に戻ったが雇人は恐怖におののき、次々に隊から離れ逃げてしまい僅か二人しか残らなかった。まとまった訓練もない急造のただ金欲しさの隊員ではやむを得なかった。もはや先に進むことはできず、ケリアに引き返すしかなかった。山脈は越えたものの最初の挑戦は失敗に終わった。

新たに必要な人員を雇い、馬・驢馬・駱駝・ヤクを調達しホータンを出発した。今度も同じ湖畔に到達したが、そこで一群の豺狼が羊やヤクを襲った。混乱した中そこからさらに東に進み始めたが、またも高山病に罹り夜に使用人が逃走し始めた。ケリア河の上流と思しき所にたどり着いたが水量が異常に多く、渡ることのできる場所を求めてさらに上流を進んだ。ようやく川幅が狭くなりわたることができた。

しかしその前面は絶壁となっており一歩も進むことができなかった。翌日何とか山岳を越えられる経路を探し、六千㍍の「身の毛もよだつほどの絶壁を」よじ登り峠に達した。そこでその日はテントを張り、翌日さらに進み三度目のチベット高原にたどり着いた。ここでたった一匹残った駱駝も倒れ、不要な荷物を捨て去った。もはやこれ以上の前進は不可能となりテントを張った。草や枯れ木など燃料になるものがなく生煮えの羊肉を食べる始末であった。すでに使用人は二十歳にみたない青年二人しか残っていなかった。

生き残った馬・ヤク・羊も次々に倒れ、前進を断念し北のタクラマカン砂漠に向かった。もはや探検どころではなく、これから人里にたどり着けるか否かが生死の分

かれ日であった。凍死か餓死の瀬戸際であったが、三人は必死で北を指して山岳を下り渓流に沿って歩いた。二日ばかりで食料は食べつくし、着のみ着のままで毛皮の外套を纏っているだけであった。ただ氷を齧り無言で下った。夜は寒くて眠れず空腹を抱えながら進むしか生きる道はなかった。

ようやく木や草などの燃料がある所に出て暖をとった。さらに進むと人里に行き着き死を免れた。一旦ケリアに戻り、チベット高原に置いてきた荷物を回収した。

瑞超の二度にわたるチベット高原侵入の挑戦は失敗に終わった。ヘディンと同じ行程をとりながらなぜ失敗したのか。直接ヘディンから高原への進路について詳細に聞きただしたであろうに。

ヘディンはチベット高原にたどり着くには「どんな強力なキャラバンを組んだところでチベット中央部に到達する前に壊滅してしまう」（『ヘディン伝』金子民雄著）と警告した。六千㍍の絶壁が続く崑崙山脈を越え過酷な道程を突破するには「十分な装備と食料そして何よりもよく訓練されたキャラバン隊員」が不可欠であった。

瑞超の失敗はキャラバン隊の装備と食料も十分とはいえず、加えて隊員はその地で急ぎ募集した素人集団であった。しかも瑞超一人でキャラバン隊を指揮・管理すること自体限界を超えていた。元来光瑞・瑞超二人の忠告を軽視した計画自体が無謀なものであった。

五八　日蔵交換留学生

一九一〇年秋西欧にそのまま滞在し英国及び欧州大陸各国の宗教事情を調査していた青木文教に、「帰国の途に就かんとする折柄、奇態な文字で認められた」一通の書信が届いた。この書状から事態は大きく前進する。

差出人はダライ・ラマ十三世で、この親書は日本に西蔵の留学生を送りたいので、帰途ダージリンに立ち寄って欲しいという依頼であった。青木は急ぎロンドンを出発してカルカッタに向かった。

ダージリンで十三世に会見すると、日本へ派遣する留学生の人選について助言を求められた。詳しい記録はないが、助言内容は「日本仏教や日本語を学ぶだけでなく、十三世の代理として日本当局とも臨み得る能力と資格を持つ人材」（『ラサ憧憬』高本康子著）と推測される。

この条件に適う人材はダージリンにはいないので、ラサから呼び寄せることになり、青木は印度で仏蹟調査をしながら二か月待った。

十三世が選んで呼び寄せた西蔵の留学生はツァワ・ティトゥルという三十歳の僧正であった。青木が「聖者の権化」と記すように活仏と認められた聖僧であり、清国亡命中であった十三世に随行した最も信頼する側近であった。青木が留学生として挙げた条件を超える第一級の人物が選ばれた。すでにこの時期清国内において在外華僑から経済的支援を受けた革命派（中国同盟会）が華中・南で散発的に武装蜂起を繰り返していた。その都度鎮圧したものの清朝の衰退はあきらかで、十三世はラサにそう遠くない時期に帰還できるものと判断した。日本の飛躍的な経済発展を、チベット近代化のお手本として導入することを見越したうえでの人選であった。

青木に案内され、ティトゥルと従僕の二人は印度政庁を刺激させないため日本人に変装させ、秘密裏にカルカッタから出国した。シンガポールで日本船に乗り換えてからはモンゴル人を名乗らせた。一一年四月神戸に到着、新聞記者の目を逃れ京都西本願寺に直行した。

ティトゥル一行は大遠忌法要が終わり静けさを取り戻した西本願寺南東隅にある飛雲閣（国宝）に身を隠した。チベット高僧の存在が知れると英国との外交問題に発展するおそれもあることから、周囲を日本庭園で囲まれ外とは隔離されている桃山文化を代表する数寄屋風書院造の中で日本での生活を始めた。しかしチベット人三人はそこから外へは一歩も出られなかった。

まず日本語の修得から始めた僧正に不便をきたさないように、専属の世話係として常時同じ建物内で生活したのがのちにチベット留学生となる多田等観（一八九〇―一九六七秋田県西船寺三男）である。ティトゥル・多田二人とも自国語しか会話できなかったが、寝起きをともにしていくうちに二人は次第に日本語とチベット語の二国語で会話ができるまでになった。

その後光瑞の六甲二楽荘に移り新年を迎えた。ここで本格的に日本の仏教・文化・政治・経済・軍備の研究を始めた。この別荘には西蔵僧正室が設けられており、一行三人と世話をしている多田の寄宿場とした。印度から案内した青木文教は二楽荘の隣に開校して間のない武庫中学に奉職、合わせ光瑞の秘書的な役割を担っており、チベット留学生の世話を手伝った。

五九　敦煌文書将来

橘瑞超がチベット高原へ二度にわたる苦難の挑戦をしている間、一時本山と不通となった。その後西域南道を敦煌に向かうオアシス（ニヤ・チェルチェン・チャルクリク）には日本への通信手段はなく、約半年連絡できなかった。そのため光瑞は「瑞超の身を案じ、捜索のため吉川小一郎を派遣することにした」とされていた。しかし吉川が日本を出発したのは一一年五月であり、この時瑞超はホータンでチベット探検の準備をしており連絡はとれていた。それゆえ近年では吉川の派遣は、三次探検の主要な目的である敦煌文書の入手を目指したもので

あったとされている。

瑞超より十歳年上の吉川小一郎（在家）は西本願寺絵表師の四男として生まれ、十六歳から大谷家の家計を担当する西本願寺室内部専任部員として勤務した。新しく造られた二楽荘に随行するなど、光瑞の側近として信任の厚い人物であった。

ここからは吉川の書き残した「支那紀行」（『新西域記』所収）から辿る。

出発前京都で渡邊哲信・堀賢雄・野村栄三郎三人の発起で送迎会を開いてもらい、五月二十八日国鉄住吉駅にて光瑞や武庫中学百三十名の盛大な見送りを受け下関に向かった。翌日門司から上海行客船に乗船、三十一日上陸した。漢口・武昌を通過したのは六月であったが、三か月後四川省で起きた保路運動（借款の担保に供するため民間鉄道路線の国有化を進める政府に対し清朝立憲派・地方民族資本家が起こした反対運動）と称する抗議運動が発生した。政府はこの暴動を鎮圧したが、十月に武昌で官軍である陸軍新軍自らが武装蜂起、中央政府と対立する内乱が勃発しており、三か月遅れると敦煌へ向かうことはできなかった。

その後新軍による大規模な武装蜂起は全国に波及するが、吉川は七月六日西安着、八月二日蘭州着と幸運にも各々三か月早く通過した。天下第一雄関嘉峪関から玉門関を通り、九月十三日安西、敦煌には十月五日に着いた。上海を出立して四か月を経過していた。

到着するや最大の目的である莫高窟に残る古代文書の入手に取り掛かった。二日目に鳴沙山と砂に囲まれるも涌泉が出る月牙泉を見学、十日に千仏洞に赴いた。初対面の発見した王圓籙道士と数時間交渉し、「遂に目的を達す」と記したようにいくばくかの古文書・経典を入手した。また洞窟内にある諸像の中で最も精巧で損傷の少ない二体を選び、道士と交渉これも購入に成功した。

大英博物館で開催された展覧会には、敦煌文書に含まれている多くの経典類の中に鳩摩羅什や玄奘の訳した写本のしかも完本があった。いずれも光瑞の求めてやまない大乗仏教の原典に近づくものであった。これらの入手に引き続き努力することにした。

ホータンから西域南道を東に進み敦煌に着くはずの橘瑞超を待つ間、莫高窟に長期間滞在し日本人として初めて本格的な調査をした。洞内の壁画を写真撮影により記録に残し、敦煌から石摺師を呼び寄せ石窟内で摺写を試み採取した。調査中経文の断片を見つけ持ち帰った。

一方橘瑞超はホータンに六月末まで滞在していたことが京都でも確かめられていた。その後はチベットを経由したとしても、敦煌には遅くとも十月には到着するはずであった。事実、十月六日吉川が敦煌に着いた翌日、衙門（役所）を訪ねると橘の荷物が届いていた。チベット探検から何とか生還し南道オアシスケリアから先に荷物だけを敦煌に送らせたものであった。いまだ橘の消息は不明であるが、荷物は予定通り届いており一安心した。しかしそれ以後も音信不通が続き、使いを一人雇い手紙を持たせ南道を西に向かわせた。敦煌で十月末まで待つものの依然橘とは連絡が取れず、三週間前迎えに行かせた従僕からも報告はなかった。

十一月に入り心配が高じてきた吉川は、ロプノールから来た者やホータンを七月中旬に出発した印度商人に橘について訪ねたが手掛かりはなかった。印度に帰るキャラバン隊を見つけ、橘の消息を依頼した。

この月の終わりに敦煌古城を訪れ、初冬清冽な西河を臨んで「この風景を遊眺して、橘氏と歓話を交わすのは知らずいつの日ぞ」と未だに所在のわからない橘と巡り合える日を待ち望んだ。

十二月は結局何一つ手掛かりがなかった。

明治四五年新年を迎え、チャルクリク・チェルチェン・ホータンの清国三衙門に、敦煌知県より橘の所在について照会状を発出してもらうことにした。

それでも橘の行方は全く掴めなかった。到着予定から既に三か月経ち、吉川は一月二十六日京都へ次のような電報を発するため従僕を安西の電報局に向かわせた。

「橘行方不明、大捜査を要す」

次の日まさに急転直下、午前読書をしているとき突如一人のトルコ人が入ってきた。「何事ならんと凝視せば、実に意外これ橘氏なり。喜心感激」した様子を綴った。

一方橘の手記ではこの時の様子を「吉川君はすぐに私の変装を看破し『貴下は橘君でしょう』と叫び、『実は君の消息が一向分からないので最早この世の人でないと諦め、現に今より二、三十分前（一日前の誤りか）に君の生死不明のことを法王猊下に打電せんと人を電報局に遣わしたところで、よくまあ無事でおられた」とその時の様子を詳述している。すぐに電報局に走らせて前電を取り消して、橘が無事敦煌に着したことを本山に打電した。橘は吉川の西域南道を西に行くキャラバン隊に託しておいた手紙をチャルクリクで読み、敦煌で吉川が待っていることを知ったのであった。

その夜二人は遅くまで語り明かした。吉川は日本から携えてきた光瑞から贈られた羊羹・両親からの手紙・名古屋の名産など「目の前に何やかも並べ」、四か月待ちに待ったその嬉しさをあらわにした。

六〇　辛亥革命

十二月に入ると北京から二千キロ離れている敦煌にも、十月武漢で起きた革命党と清国政府の戦いの様子が次々

にもたらされた。「陝西省（西安）以東大革命党起こり、郵電全く不通。この乱は十月十日より始まるもいつの日に終息するを知らず」と吉川は手記に記した。

その五日後内乱が拡大した様子を「安西以東の革命党勢い猖獗（悪いものの勢いが盛んなこと）。またウルムチに暴徒蜂起し、回教豪商一家を襲撃せり」との報に、「頗る不安を覚え」た。

中旬には蘭州から家主に書信が届き「革命党は今や西安・河南・太源・漢口等に瀰漫し、清朝既に力無く満人の戦死せるもの五万に及ぶ。今や蘭州には甘粛新疆の兵六万を集めてその防御に当たれり」と革命党の優勢が伝えられた。

一九一一年は干支で言うと「辛亥」の年にあたる。十月から始まったこの内乱こそ十七世紀初め徳川幕府と同じ時期に建国された満州族清王朝を滅亡させる辛亥革命の端緒となる武昌起義（蜂起）であった。

革命派を指揮したのが孫文（逸仙・中山一八六六―一九二五）である。孫文は台湾（国民党）では「国父（中華民国の父）」の尊称を、中華人民共和国（中国共産党）では「中国民主革命の偉大な先駆者」とされ、主義の異なる双方から高い評価を受ける、中国の統一を生涯追い続けた稀有な人物である。

日清戦争講和後の一八九五年孫文三十歳の時、満州清朝の打倒を掲げて最初の広州武装蜂起を起こした。戦争終結に伴い広東軍の四分の三に及ぶ兵士が解散させられ、これら不満分子を集めての決起であった。しかし清朝正規軍に敗れ日本に亡命した。以来亡くなるまでの延べ九年間日本に在住し清朝打倒を画策し続けた。

日本政府は立憲君主制よりさらに進んだ共和制を目指す彼の革命理論には冷淡であった。一方革命に対する理論・情熱・徳望から支援した日本人は千三百人（神戸孫文記念館編纂『孫文・日本関係人名録』）に上る。民間人では革命思想に共鳴した宮崎滔天・思想家実兄民蔵、経済面で支援した実業家梅屋庄吉、アジア主義に共鳴した頭山満・内田良平・北一輝、政治家では犬養毅、軍人では台湾総督児玉源太郎が知られる。

その中に似通った思想を持つ大谷光瑞がいた。

一九〇五年東京で宮崎・頭山らの奔走により、各地で連絡もなく独自で清朝政府に反乱を起こしてきた興中会（広東省孫文）華興会（湖南省黄興・宋教仁）光復会（浙江省蔡元培）は、中国同盟会として大同団結を成し遂げる。その時の行動綱領は「駆除韃虜　恢復中華　創立民国　平均地権」とし、総理に選ばれた孫文の「三民主義（民族〔反満反帝国主義〕・民権〔ブルジョア民主体制五権分立〕・民生〔地価平均上地所有〕）」を基本理念とした。同盟会の三民主義は、資本主義の行き過ぎを修正する社

会主義的要素を取り入れたブルジョア民主主義国家の樹立という先進的なものであった。

日本で団結した中国同盟会の主要会員は、皮肉にも清朝が軍隊の近代化を推進するため日本へ留学させた軍人であった。留学生は日本がいち早く近代化を成し遂げ国力を飛躍的に増大しアジアで唯一列強国に仲間入りできた秘訣は、天皇を中心とする立憲君主制による統治体制にあるとみえた。日本の官僚・役人・軍人は汚職や売官など個人の利益のみを求める清国とは明らかに違い、潔癖で天皇を中心とする国家を第一に考えていると彼らの目には映った。清朝政府は衰退した正規軍の強化のため西洋式陸軍（新建陸軍・新軍）を編成するが、軍人留学生は帰国後指揮官に就任、革命派の一員として多くの師団で孫文の思想を兵士に広め同調者を増やした。

発足した同盟会は長江周辺・南部広州で十数回におよぶ武装蜂起を繰り返した。しかし政府の徹底した鎮圧により失敗を繰り返した。一九一一年九月四川での地方の資本家・指導者・民衆らからなる保路運動を鎮圧したあと、武昌革命派の湖北省新軍兵士三千人が中央政府からの独立を目指し蜂起した。政府派新軍兵士二千五百人と戦闘になったが革命派は武昌城を占拠、満州人の総督や清朝官憲は逃亡または捕虜となった。次いで漢陽・漢口（三鎮現武漢）を占領した。

この武漢の新軍内での革命派と官軍派の戦いは近代兵器を装備した新軍同士の戦闘となったので、半日で終ったが悲惨な状況に陥った。光瑞は武昌蜂起の第一報を四年前開設した漢口本願寺出張所から受け取ると、矢継ぎ早に指示を出した。激戦地となったのが別院建設の予定地として取得していた競馬場であり、「官革両軍の戦死者及び人民の死没者頗る多く、死屍累々として頗る惨鼻の状を呈し居る」（『中外日報』）との報告から、「宗教家の天職」として戦闘で倒れた兵士を官・革差別なく救護を、合わせ住民の保護慰安・傷病者の医療保護、戦死者の遺体収容・葬儀埋葬を指示、これにかかわる費用は本山の財政で賄うことを通知した。本願寺の素早い活動は清国民の日本排斥運動を一時やわらげ、官・革両軍から感謝された。

十一月には内乱は全土に拡大しており終結するまでかなりの期間を必要とすると見た光瑞は、日露戦争開戦直後に「特設臨時部」を設けたと同様、漢口に「特設臨時部」（部長大谷尊由清国開教総監兼務）を開設した。すでに当地に本願寺出張所が上海には清国開教総監部があるにも関わらず、内乱に関する窓口を臨時部に一本化にすることで、光瑞が全山を挙げて本格的に取り組む姿勢を内外に明らかにした。

臨時部には中国通の人材が集められた。長く中国に滞在している水野梅暁、渡邊哲信・堀賢雄・前田徳水・渡

邊哲乗ら一次探検隊の面々、北京・大連別院など中国布教経験者など光瑞が中国における教線拡大のため長年育成した人材であった。

臨時特設部の開設により本願寺派の活動は際立った。多くの日本企業が進出しており在留邦人の救護や避難活動、書籍・歯磨・石鹸・風呂敷・紙・筆など日用品が入った慰問袋配布、日本からの派遣兵士に対して、休憩・入浴・慰安所の提供や新聞各紙・娯楽器具（碁盤・将棋盤）仁丹など薬の配布と多岐に渡った。

中国各地に拠点を擁しそこから集まる独自情報は、日本政府以上であり早くしかも正確であった。本来日本政府の出先機関である領事館が果たす役割を一部本願寺派が担うことになり、陸軍・警察・病院・日赤救護は本願寺を頼った。

光瑞は二月清国開教総督兼臨時特設部長の実弟尊由を渡邊哲信に随行させ、漢口・南京に派遣した。現地の状況を視察させ、当地で活動をする水野梅暁らを慰労するためであった。また革命派が樹立した南京の中華民国臨時政府を訪問、孫文臨時大総統に会見した。大総統は本願寺の人道活動に対し深く感謝すると述べ敬意を表し、後で感謝状を贈った。黄大元帥主催の晩餐会や黎元洪副総統との懇談などまだ混乱する中、臨時政府挙げて歓迎謝意を示した。

革命軍は湖北軍政府を組織、革命派でもない軍人を都督に据え中華民国と称した。革命派内での対立があり妥協した政権であった。しかし孫文ら革命派が十五年にわたり清朝滅亡に執念を燃やした「満滅革命」は三民主義のほんの一部に過ぎないが、湖北省で何とか成功した。

この武昌革命の成功は、次第に高まってきた漢民族の自立を一気に促し、各省新軍内の革命派が次々に蜂起、十一月末で中南部の十四省が軍政府を組織し中央から独立を宣言した。複数の官軍師団長が連名で清国皇帝権の無力化の要求書（兵諫）を突き付け、容れられないときは北京攻撃の意思を明らかにした。清国政府が誇る最新鋭の装備を持つ新軍から同時多発的に反乱が発生したことから、一気に流れは孫文率いる同盟会・革命軍に傾くものとみられた。

「瀕死の獅子」と化した清朝政府は存続をかけ、革命派を抑え込む切り札に、十一月初め野心を持つ危険人物として遠ざけていた袁世凱（一八五九―一九一六）を内閣総理大臣に任命、収拾に当たらせることにした。袁は十年前に亡くなった北洋大臣李鴻章の後継者としての地位を占め、西洋式の整備・訓練された直隷新軍を編成、北洋軍と改称し清国最強軍団を統率した。

独立を勝ち取った十七省の代表と革命派を集め南京で三民主義を標榜する中国同盟会代表の孫文を中華民国臨時大総統（大統領）に選出、孫文は一九一二年一月一日

中華民国の建国を宣言、臨時政府を南京に置いた。

一月北方の清国政府を代表とする袁世凱内閣総理大臣と南方の孫文中華民国臨時大総統の間で、皇帝の退位を条件に袁世凱が孫文に代わり中華民国臨時大総統に就任するという協定が成立した。軍事力の弱い革命派は袁との戦いで内乱が長期化するとの懸念からであった。

二月一日袁世凱に裏切られた清朝宣統帝（溥儀）が退位、二千年続いた中国皇帝政治から国民主権による共和制が一応現出することになった。ここまでの過程は第一革命と呼ばれる。

十月から辛亥革命と呼ばれる各省の新軍の反乱と革命派の決起は、全省におよび大混乱を招いた。清朝が支配する北部、南京臨時政府が影響下におく独立宣言をした十九省、周辺地域では十一月独立を宣言した外モンゴル、去就が明確でない新疆・内モンゴル・チベットが併存する状態になった。

一二年一月第三次探検隊橘と吉川の二人は敦煌に滞在、敦煌文書の偽物を売りつけに来る王道士の文物を用心深く選別しながら購入を進めていた。購入が済めば、橘は内蒙古の探検を予定、吉川はトルファンを中心に新疆オアシス都市に残る仏蹟調査を行う計画であった。

内乱勃発により治安を危惧した光瑞は、橘に探検を中止してカシュガルに預けていた二次探検の発掘物や敦煌で得た古文書を携え、シベリア鉄道で帰国を命じた。瑞超は八年四月に二次探検隊員として日本を発ち、一〇年八月からは三次隊員としてチベット侵入に挑戦するなど四年近く経っていた。予定している内蒙古の探検は、外蒙古が独立を宣言したあと政情が定かではなく危険が考えられた。橘は指示通り新疆に入るとき下車したオムスクからシベリア鉄道に乗車、満州ハルピンから朝鮮半島を南下し六月京都西本願寺に帰着した。

吉川はまだ派遣後半年であり、しかも内乱から遠く離れた新疆地域が調査予定であることから続行を許した。

印度ダージリンに亡命中のダライ・ラマ十三世には清朝滅亡はまさに好機到来といえた。革命により後ろ盾を失くした四川省軍は、もはやラサの占領を続けることができず撤退を始めた。近々十三世のラサ帰還できるとの見込みが立ったことから、日本に派遣した近習ティトゥルの留学を打ち切り本国へ召喚することにした。

六一　巨人二人の親交

一三（大正二）年二月孫文は「全国鉄路督弁」の肩書で日本を訪問した。これまで支援をしてくれた日本人に御礼や墓参のために来日した孫文を、衆議院議員選挙に大勝し中華民国の次期大総統として「国賓」待遇でもて

なした。当時十万㌔の鉄道敷設と港湾施設の建設を計画しており、日本の鉄道・港湾事情視察と助言を得るためでもあった。これまで孫文に冷淡であった政府もこの時ばかりは大歓迎した。

一三（大正二）年二月の孫文来日の二か月前、辛亥革命の勃発により争乱が朝鮮に波及するとして、陸軍はかねてからの韓国二個師団増設要求を強硬に主張、聞き入れられないと陸軍大臣を辞任させ後任を出さない手段で西園寺内閣（二次）を倒閣させた。次期首班には山縣らが薄閣・軍部の後押しで陸軍が期待する内大臣・侍従長桂太郎が再び組閣、二か月前第三次桂内閣が発足した。

しかし発足直後から「閥族打破と責任内閣制」の実現を叫ぶ憲政擁護運動が全国各地で起き、立憲国民党犬養毅と立憲政友会尾崎行雄がこれを主導した。二月五日露国との講和締結に反対した「日比谷焼き討ち事件」以来の数万の民衆が国会議事堂を包囲、この事態に桂首相は三日間の議会停会命令を出し対抗した。議会停会が伝わると民衆は激怒、政府系御用新聞社・警察署を襲いその沈静化のため軍隊が出動した。結局桂内閣は三月と持たず、初の民衆運動による大正政変が起き、山本権兵衛内閣が二十日に発足する直前であった。

十四日の寒い夜であったが、新橋駅には中国人留学生や民衆が歓迎のため集まり、孫文が姿を現すと大歓声が起き、革命を支援した犬養毅が出迎えた。東京には二十日ほど滞在したが、組閣したばかりの山本首相を初め大隈重信・桂太郎・後藤新平ら政治家・軍人、渋沢栄一ら経済界の首脳と交流し旧交を温めた。東京府知事主催の歓迎会や各地で講演会が開催され多くの聴衆が集まった。革命の犠牲者（山田良政）追悼会や縁故者の墓参を行い、革命を一身に支援した宮崎滔天の熊本の生家まで訪ねるという日本に恩義を忘れない孫文は民衆の心を捉え行く先々で大歓迎され、つい半月前の政変騒動を遠くに追いやった。

横浜・名古屋を経て、三月九日京都を訪れるやそのまま真っ先に西本願寺を訪問した。一年前漢口で会見した清国開教総監大谷尊由が出迎えた。孫文は阿弥陀・御影両堂を参拝した後、金色に輝く障壁画に囲まれ、中国・廬山虎渓の谷を模した枯山水の虎渓の庭が眺められる白書院一之間に通された。賓客をもてなす部屋で法主光瑞・新門尊重・開教総監尊由と懇談した。

初対面であったが漢口に駐在する孫文と親しい水野梅暁（上海東亜同文書院一期生中国在住の側近）から国内での徳望を知らされており、書状ではすでに幾度か交し合っていた。

孫文は辛亥革命動乱の折、官革両軍に対する救護に多なる援助を受けたことを「満腔の熱意を以て感謝する」

と述べ、その後支那時事問題に移った。詳細な内容は不明であるが二人は間違いなく日本や中国のことだけでなく、アジアというより高い次元から時局を論じ合ったことは間違いない。

ついでながらこの時の大歓迎された来日からわずか五か月後、袁世凱臨時総統の法律（臨時約法）無視、議会を度外視した国民党弾圧、国民党幹部宋教仁の暗殺などあまりの反動的独裁政治に堪えられず、孫文は七月に第二革命と呼ばれる袁世凱追討の武装蜂起を起こすが二か月で敗退、秘密裏に日本へ亡命する。この時はうらぶれた亡命者として身を隠すひっそりとした来日となった。以後中華革命党を組織、第三革命の時期をうかがいながら中国の同志と秘密裏に連絡し会うことになる。

孫文は一九一二年一月一日中華民国の建国を宣言、臨時大総統就任演説で、

「国家の本源は人民にある。漢（漢族）・満（満州族）・蒙（蒙古族）・回（新疆イスラム系民族）・蔵（チベット族）の諸地を合して一国となし、漢満蒙回蔵の諸族を合して一人のごとくする。これを民族の統一という」

とする五民族の協調（五族共和）を謳った。国旗は五族を象徴する赤・橙・緑・白・黒等分の五色旗とした。

一三年二月東京市長主催歓迎会の中で孫文は五族を一つに融合した「大アジア主義」を唱えた。この論の根底には「種族・文字・文化が同じ国なら特別な親密な関係もっていない国はない」として中日提携を掲げ、日本の政・経済界の首脳に呼びかけた。

その後も米国の「移民法」「排日土地法」など黄色白人種闘争論が高まる中、非圧迫人民の解放という人権論から「黄色人種大連合」や「アジア人のアジア」を強く主張した。

孫文は日本に中日連合による大アジア主義の実現を呼びかけたが、一五年大隈重信内閣「二十一カ条の要求」、一七年寺内正毅内閣の軍閥政権への「西原借款」供与・「石井・ランシング協定」（日本の中国特殊権益と米国の門戸開放機会均等を相互に認め合う）、原敬内閣のベルサイユ条約（旧ドイツ権益を日本が継承）締結など日本は革命派にとっていずれも厳しい要求を続けた。

日本の中国に対する過酷な姿勢に対し、最後まで一縷の望みを持っていた孫文は二四年秋最後の訪日を果たし神戸に着いた。しかし日本政府は軍閥政府を承認していたので、単なる一地方の広東政府代表孫文が上京することを拒んだ。新聞各紙や世論も孫文の非現実的と思えるとみえる孫文の言動に冷淡であった。（広東政府ロシア革命政府を承認、日本政府未承認）

理想主義や革命後のソ連に接近しながら日本にすがろう

上京ができない孫文は、神戸で革命を支援した親中国派で旧知の加藤内閣逓信大臣犬養毅、経済界を代表する

渋沢栄一ら要人に面談を依頼したが、来神したのは中国同盟会設立以降も長らく支援した国権主義者頭山満だけであった。

こうした状況の中十一月二十八日中国貿易の依存が高い神戸商業会議所の申し出により、会議所主催の「大亜細亜問題」と題する歴史的な講演を神戸高等女学校で行った。

この講演で日本がいち早く不平等条約の改正に成功し、アジア諸国の中で唯一経済発展を成し遂げ日露戦争に勝利したことは、アジア民族に大きな刺激を与えたとして暗に中国への不平等条約の改正を日本に求めた。

そして最後に次の言葉で締めくくった。

「東方の文化は王道であり、西方の文化は覇道であります。王道は仁義道徳を主張する者であり、覇道は功利強権を主張するものであります。我らが大アジア主義を実現するには、我らが固有の文化を基礎にした道徳を講じ、仁義を説かねばなりません。仁義道徳こそは我ら大アジア主義の好個の基礎であります。

我々が大アジア主義を説き、アジア民族の地位を恢復しようとするには唯仁義道徳を基礎として各地の民族を連合すれば、アジア全体の民族が非常な勢力を有する様になることは自明の理であります。我々の主張する不平等廃除の文化は覇道に背反する文化であり、また民衆の平等と解放を求める文化であると言い得るのであります。貴方がた日本民族は、既に欧米の覇道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質をも持っているのであります。

今後日本が世界文化の前途に対して、いったい西洋覇道の鷹犬（番犬）となるのか、或は東洋王道の干城となるのか、あなたがた日本国民の詳密な考慮と慎重な採択にかかっているのであります」

帝国主義むき出しの過酷な要求を続ける日本政府・国民に対し、中国の正統政府を自認する広東政府孫文総統最後の衷心からの懇請であった。

孫文の講演に賛意を示した新聞は少数であった。同調した一人はかねてより公然と日本の植民地放棄を主張する経済紙『東洋経済新報社』の石橋湛山だった。

多くの識者からは中国統一に際し軍閥打破を選ばず反帝国主義を優先させている、朝貢という歴史的事実を歪めている、西洋勢力の下で呻いている弱小民族の不平とアジアという地理的観念を非論理的に結び付けている、理想家的体質では国内統一は困難であり現実の立場で国内統一と経済の発展を図るべき、など批判的な論評が多く、孫文の「心からの願い」は理解されなかった。

孫文の「大アジア主義」を理解する一人に、アジアの仏教復興構想を持つ大谷光瑞がいた。一八九九年初の外遊となる五か月の清国巡遊で知り得たのは、日本仏教が

師とも母とも仰ぐ中国仏教のあまりの衰退ぶりであった。民衆は長引く内乱で困窮した生活を送っていても、仏教各派はただ寺の奥に閉じこもったままであった。同年西欧留学の途上仏教発祥の地印度でみたのは、仏教徒はわずかしか生き残っておらず、崇高な聖地である仏陀成道の地仏陀伽耶も、成道後初めて教えを説いた初転法輪の地鹿野苑もわずかに往古の石碑を残すだけであった。

西欧ではなんと北伝大乗経は経文の系統が不明で仏陀の説いた教えという根拠がない、とする「大乗非仏説」であり、「語るに足らず」と見下したものであった。

宗祖親鸞の血脈を継ぎ生まれながらにして日本最大の浄土真宗本願寺派法主となるべく英才教育を受けた光瑞は「仏の子」を自認、西欧の大乗非仏説に対しては大乗原典を発掘し、正統な仏教であることを証明するとともに、廃れた中国・印度の仏教を復興させねばならないと決意した。

光瑞の視点は仏教を中心とするアジアであり、特に東シベリア・満州・朝鮮・内外蒙古・中国・新疆・西蔵にまたがる東アジアであった。孫文の言う「大アジア主義」は、光瑞の描く仏教再興地域と重なる。この地域に西欧諸国を排し平和をもたらすのは、日本・中国・チベット各仏教いわば大乗経にほかならなかった。

光瑞はまず中国の仏教の再興に着手日本陸軍と歩調を合わせる形で、厦門・香港・漢口・ハルピン・北京・奉天・大連旅順・上海に拠点を設けた。大乗原典探求のためチベットに接近、蒙古からチベットにわたる広大な地域に広まるチベット仏教の研究に力を入れた。

宗教・探検家で仏教徒光瑞と政治・思想家でキリスト教徒孫文は分野・信仰と異なるが、西欧列強国の植民地化しているアジア諸国の人民の平和と幸福を願う思いは、手段の違いこそあれ目的は同じものといえた。

二人の巨人は光瑞が一五年行動の拠点を上海に移してから、煩瑣に会い気軽に話し合える親友となった。光瑞はマレーシア・蘭領印度での南洋農業の経営に本格的に乗り出したことから拠点を上海に移した。一六年一月北京では袁世凱が皇帝に就任、帝政を強行した。時代に逆行する袁世凱大総統に対し、南部の雲南省などは再び独立を宣言、第三革命と呼ばれる武装蜂起し、北京へ討袁軍を差し向けた。

これまで袁世凱を支援してきた列強各国はこれ以上の混乱を好まずこれを静観、袁世凱は内外の反対で辞任、三か月後死亡した。北洋軍閥の最高実力者袁世凱の死亡により各省の軍人総督が支配する軍閥割拠時代に移った。孫文は中国の混乱に乗じ日本から帰国、広東政府総督に就任した。そして活動の拠点を上海に移し軍閥の力が及ばない仏租界に居（現在淮海路孫中山故居記念館）を置いた。光瑞も仏租界の淮海中路に住んでいたので、二人

は度々行き交い、日本・中国・アジアの未来について語り合った。

光瑞は「一九一八年三月中華民国政府の最高顧問となり、広東を訪問した」と『本願寺史』は記す。いかに孫文と親交が深くお互いの思想に共鳴していたことが分かる。近年の研究ではこの事実は中華民国側の資料からは見出せないとのことで、孫文の私的なものであったのかもしれない。

さらに二九年六月孫文の国葬に当たり国賓として招待（代理出席）された。

日本人大谷光瑞と中国人孫文の二人の巨人は、東アジア諸国や民族の将来について「自国の利益を貪欲に追い求める西欧列強国に如何に対決するのか」という課題を話し合った。アジアという視点から政治・経済・宗教について長く幾度も議論を重ねた。

その後孫文はソヴィエト革命政府の「ロシア帝政時代の既得権放棄・国交回復交渉の対等化」（カラハン宣言）という思い切った政策転換を高く評価、「連ソ・容共」政策をとり、二一年結成された中国共産党と国共合作（第一次）を成し遂げた。この合作により国民党の勢力は飛躍的に伸び、孫文は軍閥が牛耳る北京政府や満州張作霖など各地方の軍人政権を平定し統一国家樹立を目指し、北伐を開始する。

神戸における大アジア主義講演はこの時のもので、孫文は四か月後の二五年三月北京で五十九歳の波乱の生涯を閉じた。最後まで日本と日本人を信じ、既得権放棄と不平等条約の撤廃を迫り大アジア建設を目指した。日本政府がソヴィエト政府宣言と同様、既得権を放棄し中国への侵攻拡大を控えたならば、日本を盟主にする日中連合が成立、孫文には遠き目標は実現できると思われた。

しかし日本には国際社会での安定した発展を目指しロシアとの戦争を回避すべく日英同盟に反対、初代韓国総督として併合に反対した政治家伊藤博文（九年没）や日露戦争を続行したい桂首相を戒めた軍人大山巌（一六年没）や児玉源太郎（六年没）はすでに亡くなっていた。日本人が持っていた謙虚さや思いやり、大乗仏教の修業理論である利他行（自らを捨てても他者を救済する）の精神は忘れられていた。孫文の忠告に耳を傾けることができず、傲慢で強欲な帝国主義で中国を侵略し続けた。

併合した朝鮮ですら一九年ソウルで起きた延べ二百万人が集合した三一独立運動の鎮圧に警察憲兵や日本帝国陸軍朝鮮軍（第十九・二十師団）では抑えることができず、本土から六個大隊を派遣しようやく鎮圧できた。

これに刺激されナショナリズムの高揚から北京で発生した排日・反帝国を叫ぶ五・四運動、軍閥割拠の情勢、中国共産党結成と国共合作成立などを冷静に考慮すれば、孫文の忠告は中国政策を考え直す良い機会であった。

孫文の遺言は次の言葉であった。

「現在革命なお未だ成功するに至らず。・・・同志すべからく継続努力して目的を貫徹すべし」

生涯多くの挫折を乗り越え中国革命に一生をささげ共和制による新生中国の樹立と西欧列強国を排除する「大アジア」を最後までめざした生涯であった。

十歳年下の大谷光瑞が掲げる仏教徒によるアジア仏教連合構想は、衰退しているとはいえ中国仏教各派は本山末寺とも存続し、宗徒も存在していた。戦乱が収まれば中国仏教の再興は本願寺が指導すれば可能に思えた。光瑞の構想も日本の野心を思い止めさせることが前提であった。二人の目標は近いとも思えたが、日本の帝国主義を変更させることは至難であった。

光瑞のアジア主義は拡大主義をとる軍部や政治家が掲げる「大東亜共栄圏」構想に類似しているとして、第二次近衛文麿内閣の内閣参議、一七年大東亜建設審議会委員、一九年小磯国昭内閣顧問に推され就任した。『本願寺史』は、戦時期の政府が目指した「大東亜共栄圏」に対し「自分の思いを提言することもあった」と記した。

光瑞のアジア主義は軍部や政治家により、中国侵略を正当化するものとして悪用されたのである。

二人の巨人が上海で熱心にその実現を語り合った大アジアの建設は、結局生前には実現されず夢に終った。

（つづく）

参考文献は最後に記します

私の伊達政宗像を訪ねて（その五－①）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の菜ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
政宗の海外への残夢は消えず
その五：東北の関ヶ原と仙台開府と仙台城
瑞巌寺と瑞鳳殿と政宗終焉の地を訪ねて

【東北の関ヶ原と仙台開府】

〈1〉会津征伐と百万石の御墨付

秀吉薨去の二年後、慶長五年（一六〇〇年）九月十五日の天下分け目の関ヶ原の戦いに前後して、東北の関ヶ原といわれる西軍の上杉景勝と東軍の伊達政宗・最上義光の慶長出羽合戦が起り、再び戦乱の世となった。

東北の関ヶ原で戦った伊達氏と上杉氏はかつて蜜月の関係にあった。政宗の時代から百年ほど遡る伊達氏十三代尚宗が、越後守護上杉定実の姉を正室に迎え、その子十四代稙宗が三男実元を定実の養嗣子に送ろうとして、反対する嫡男晴宗と南奥羽を二分する天文の乱が勃発、勝利した晴宗が家督を相続して稙宗は隠居、実元の上杉

入りは沙汰止みとなった。定実の死で後継のない越後上杉家は断絶、定実の娘の夫長尾晴景の実弟景虎が、越後守護を代行した。長尾景虎は、後に関東管領上杉憲政の養子となり山内上杉家を継いで後の上杉謙信である。

謙信に子なく急死すると、謙信の実姉の子景勝と小田原北条氏から養子に入っていた景虎が後継を争い御館の乱が勃発、政宗の父輝宗は北条との同盟に基づき蘆名盛氏と景虎方に参戦するが、景勝が勝利して当主となる。

家督を相続した十七代政宗は景勝と講和して、会津の蘆名義広を滅ぼしたが、秀吉の惣無事令に反したとして奥州仕置で蘆名氏から奪った会津他八郡が召上げられ、更に葛西大崎一揆の責任を問われて、伊達氏本領の米沢と仙道六郡も召上げられ、蒲生氏郷に与えられた。

氏郷が急死すると、越後の景勝が移封され、会津・米沢・仙道を引き継いだ。政宗の所領のほぼ半分を奪った形となった景勝は、秀吉に江戸の家康と奥州の政宗を監視・牽制する使命を託されており、秀吉死後に家康と政宗に敵対することは避けられない運命だったのだろう。

慶長五年四月一日、秀吉の死後を専横する家康が景勝に領内諸城改修の弁明に上洛を命じるが、上洛を拒否する直江状に、秀頼公守護の役を果たさぬは故太閤の遺言に背くと景勝謀叛を治定、五月三日に会津征伐を決した。

六月二日に東国諸大名に会津陣触れを発して、家康は十八日に伏見を出発、七月二日に江戸城に入る。七日に南部・秋田等奥羽諸侯に会津攻めを指示、二一日に江戸を出陣した。会津攻めの陣立てである。

・白河口：家康・秀忠及び東海・畿内の諸大名
・仙道口：佐竹義宣
・信夫口：伊達政宗
・米沢口：最上義光及び仙北（最上川以北）の諸大名
・越後口：前田利家・堀秀治

家康が会津征伐で畿内を留守した隙に、石田三成と大谷吉継が、会津の上杉景勝と呼応するように、毛利輝元を盟主に西国大名を糾合して家康打倒の兵を挙げ、十八日に家康の家臣鳥居元忠が籠城する伏見城を攻撃した。

三成が諸大名に挙兵の触状を廻しているという情報が江戸を出陣した家康の許に入り始めた二三日、家康は会津攻めの中止を決意、下野小山に着陣した二五日に軍議を開き、反転西上して上方の三成を討つ作戦を決定、二六日に小山の陣を引き払い、八月五日に江戸に戻った。

大坂に居た政宗は、家康の会津征伐に先発して六月十六日に伏見を出発、中山道を通り高崎から上杉領の会津・仙道を迂回して、長く敵対関係にある佐竹氏、岩城

氏、相馬氏の常陸、磐城、相馬を経由、七月十二日に本拠の岩出山城ではなく名取郡北目城に入った。

会津攻めについて家康の最上義光宛て七月七日付書状（市立米沢図書館所蔵「古文書集」）で「急度申し入れ候、会津表出陣の儀、来る廿一日に相定まり候、北国表にて北国の人衆を相持ち、会津へ打ち入らるべく候」とあり、家康は、政宗にも七月二一日出陣を伝えて信夫口から上杉領へ侵攻を指示してきていたのだろう。

政宗は、家康の出陣に合せたように七月二一日、宮城県南部の白石城を攻略するため、北目城を出陣した。

二四日に、亘理石近、屋代景頼、片倉景綱、山岡志摩が四方から白石城に攻め懸かり、首級七百余を討ち取って、翌二五日に城代の登坂勝乃が降服してきた。

政宗が白石城を攻撃する前日の二三日、家康は三成の上方挙兵の報を受けて、会津征伐の中止を発していた。

家康の最上義光宛て七月二三日付書状（譜牒餘録）に「急度申し入れ候、治部少輔・刑部少輔、才覚を以って、方々に触状を廻らすに付て、雑説申し候条、御働の儀、先途御無用せしめ候。此方より重ねて様子申し入るべく候、大坂の儀は、仕置等手堅く申し付け、此方は一所に付、三奉行の書状披見の為これを進せ候」とあり、同じ書状が当然に政宗にも送られていたのだろう。

七月二六日に小山の陣を払い、江戸に戻る途中の家康から、八月二日付の朱印覚書（伊達家文書六九五号）で「大坂奉行の謀反に付き駿河尾張の間を警戒すること、秀忠を宇都宮に押さえとして残すので万事相談すること」と政宗に正式な進攻中止命令が送られてきた。

既に白石城を攻略していた政宗は、家康の朱印覚書を受けて、会津征伐中止と反転西上の方針に反駁する書状を、徳川四天王の井伊直政と使者役の村越直吉宛てに八月三日付で出状している（山形県史巻一）。

「上邊之儀、如此之上者、尚白河表会津へ之御乱入、大急ニ被成候様に達而可被申上候、萬一手延ニ候而者、必々諸口之覚違、尚々御凶事出来可申由存事候、縦上者閣ニ成申候共、御遺恨之筋と申、長尾（景勝）被討果候得者、上之事も即可被属御存分事案の内に存候」

政宗は、三成が上方で反家康勢力を結集しているが、反転西上する前に、急ぎ白河表会津へ進攻して景勝を討ち果たしてしまえば、上方の形勢も変わり、家康の思うようにいくだろう、もし会津攻めを先送りすれば、事態はむしろ悪化する、と進言していた。

さらに「最上へも尚御使者被遣候て、長井筋へ被取懸候様ニ可然候、今の分ニ候て者、長井之人衆も、心安仙道筋へ打廻可申候、縦ふかき事成不申候共、手切被仕候様に御下知第一に候」と要請した。

文中の長井筋は、景勝の重臣直江兼継の所領米沢を含む置賜地方である。今のままでは兼継率いる長井衆が白由に仙道方面に進出できる状況にあり、家康から山形の最上義光に使者を送り、兼継所領の長井方面へ攻め入らせるよう働きかけて欲しいと申し入れたのである。

政宗の描いた戦略は、家康が反転西上する前に、家康本軍に南の白河口から会津へ、最上義光には北の米沢口から侵攻させ、米沢の直江兼続の白石城奪還と仙道進出を牽制させて、その隙に政宗が伊達郡桑折から福島城の仙道方面に侵攻するという、家康と義光を陽動作戦に利用した政宗自己利益中心の作戦であった。

江戸に戻った家康から、政宗からの白石城攻略報告と上杉領への進攻を進言した八月三日の政宗書状を受けての返信なのであろう、八月七日付け政宗宛て書状（同文書六九七号）が届いた。

「切々御飛脚、御懇意之段祝着之至候（中略）當表之儀、中納言宇都宮差置、佐竹令御談合、白川表へ可相働由申付候間、其陣御働之儀、無越度様、被仰付尤候」

嫡男秀忠の軍を前線の宇都宮に留め置き、対上杉討伐戦の主戦場を白河口と定めて、秀忠と佐竹義宣に白河口を固めさせ、政宗には秀忠の作戦を援護する範囲に留めて信夫口からの上杉攻めを自制するよう求めてきた。

三成挙兵に反転西上を決意した家康は、北の上杉景勝と南の石田三成を同時に相手にする二正面作戦を回避するため、北方戦線の静謐を保つべく、秀忠を宇都宮に在陣させて白河口を抑えながら、米沢口の最上義光と信夫口の政宗に白重を求めたのである。

政宗は、白石城攻略戦の報告と上方の情勢収集と今後の対応のため、家臣の山岡志摩を使者に立て、家康が政宗の許に戦目付として派遣して白石城攻略戦を見聞して帰府する今井宗薫に同行させた。

今井宗薫は、秀吉の薨去した翌年に、政宗の長女五郎八姫と家康の六男忠輝の婚約の仲立ちを務めており、家康と政宗の間の周旋役を担っていた。

山岡志摩の抜擢理由について、伊達治家記録に「兼日、大神君囲碁ノ御相手仰付ラレ、別シテ御懇ニ成シ下サル故ニ」とあり、単なる報告だけでなく家康と昵懇でなければ務まらない困難な交渉を託されていたようである。

山岡志摩の報告を受けた家康の政宗宛て八月十二日付け書状（同文書七〇〇号）に「御懇使札、祝着之至候、先度如申入候、上方打捨、会津表雖可申付覚書候、福島正則、田中吉政、池田輝政、細川忠興、各先々上方仕置申付候ハて不叶由、再三依被申、先江戸迄帰陣仕候、仙道之儀者何時成共、手間入間敷候間、差合可申付候條、

有其御意得、御働御分別専一候」とあり、正則・輝政・忠興は、前年に石田三成襲撃事件を起こした秀吉子飼い武将である。三成憎しの彼らが三成挙兵に激昂している内に、家康は三成討伐を優先させたかったのだろう。江戸に帰陣した事情を言い訳がましく説明して、上杉征伐優先を主張する政宗に、仙道進攻自制を再度求めてきた。

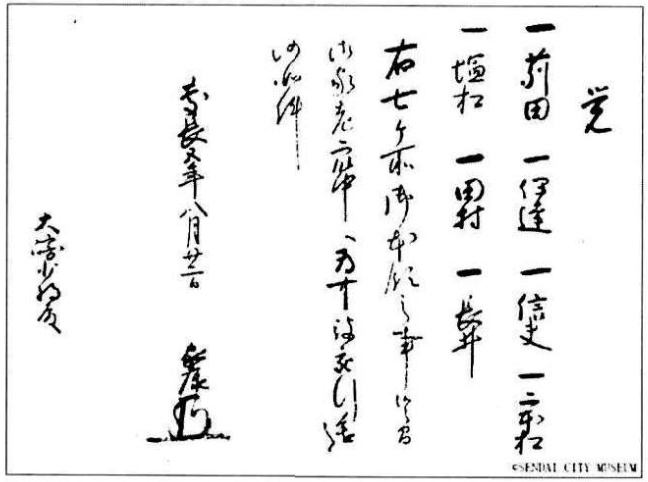
その一〇日後の八月二二日付けで家康から旧領七ケ所四九万五八二二石を充行う判物が与えられた（下図）。

政宗の旧領の五八万石と合わせて百万石になる、後に「百万石の御墨付」といわれた覚書だが、家康の狙いはなんだったのだろうか。その背景を考えてみた。

御墨付七郡の内、伊達は始祖朝宗が頼朝の奥州合戦の戦功で拝領した伊達氏発祥の地、信夫と苅田は大崎氏から、長井は長井氏から、八代宗遠が一三八〇年代に奪った土地、二本松と塩松は父輝宗の犠牲で得た土地、田村は政宗正室愛姫の実家田村氏の領地、いずれも秀吉の奥州仕置で没収されて上杉領になっていた旧領である。

苅田は、政宗が緒戦で奪還した宮城県南部の白石地方、伊達・信夫・二本松・塩松・田村の五郡は、家康に進攻中止を求められた福島県中通りの仙道地方、長井は、政宗が岩出山に移されるまで伊達氏の本拠地だった米沢地方、まさに政宗の欲しがりそうな領地である。

家康の政宗宛書状「百万石の御墨付」
（仙台市博物館蔵）



秀吉の惣無事令に違反して蘆名氏を滅ぼし、更に葛西大崎一揆の責任も問われ、父祖伝来の仙道地方と米沢地方と蘆名氏から奪った会津地方を取り上げられた政宗にとって、家康の会津征伐は、奥州仕置で召上げられ今は上杉領となった失地を回復する絶好の機会であった。

政宗は、戦乱の世の再来で、秀吉の惣無事令で固定されていた領境を打ち破る好機と捉えたに違いない。政宗の上杉領侵攻は、もはや家康のための戦いではなく、旧領奪還という政宗宿願の戦いであり、眠っていた戦国武将の血潮躍らせる戦いでもあったろう。

日本歴史学者で日本の近世城郭を専攻する白峰旬氏が「関ヶ原の戦いに関する再検討」で主張されていたが、関ヶ原の戦いは、石田三成・毛利輝元連合軍と徳川家康主導軍の戦いで、家康の戦争は、天下の主導権を巡る権力闘争であり公戦だったが、政宗の戦争は、秀吉の死で惣無事令が瓦解しており、領土切り取り次第という戦国時代の論理で、自己の所領拡大を目的にした公然たる私戦の復活だったのである。

白石城攻略戦を直前にして、当時の政宗の昂揚感の伝わる記述が伊達治家記録の八月上旬の条にあった。

政宗が伊達上野介（政景）に宛てた書状に、近日中に白石筋と丸森口へ戦闘があり、相馬口でも戦闘が始まるだろうから、人数や鉄砲槍を準備するように、勿論、直ぐには間に合わないだろうが「其内世上モ必ス面白事アルヘシ」と心弾ませている政宗の様子が窺える。

九月十五日の関ヶ原での家康の大勝は、現代の我々には、当然の帰結のように思うが、当時は両軍の戦力が拮抗して、勝敗の帰趨は全く分からない情勢だったろう。

三成方が家康の家臣鳥居元忠守る伏見城を陥落させて気勢を上げており、秀吉の遺児秀頼を頂く大坂方の情勢次第では、三成憎しで家康に付き従っている豊臣恩顧の諸大名も、いつ西軍側に寝返るか分からない。

今は上杉征伐に従軍しているが、秀吉の信任厚く、豊臣七将に襲撃された三成を助けた常陸の佐竹義宣が、景勝と反家康の密約を結んでいる恐れは十分にあった。北と南の二正面対戦を避け、速やかに三成討伐を優先させたい家康にとって、奥州の静謐は絶対必要条件だった。

家康の会津征伐令に、伏見から帰国早々に出陣して白石城を攻略、更に仙道の桑折から福島城を攻略せんとする血気盛んな政宗の行動は、反転西上して三成との決戦に専念したい家康にとって頭痛の種だったろう。いかにして政宗をフライングさせず、宥めすかして仙道進攻を自重させるか、今井宗薫に同行してきた山岡志摩と家康の間に、どんな駆け引きがあったのだろうか。

山岡志摩は、仙道の旧領奪還に懸ける政宗の宿願を訴え、今は家康に従って東征している豊臣恩顧の武将を西国に返すと、常陸の佐竹と会津の上杉が連携して彼らを取り込んで家康包囲網を形成する可能性があり、今の内に常陸と会津を繋ぐ仙道に進攻して実効支配することで佐竹上杉連携の芽を摘むべしと主張したに違いない。

そして、白石城を陥落させてそのうち世情も面白くなると心弾ませている主君政宗を説得して、仙道への自力進攻を自制させるには、まず政宗の熱望する旧領七郡を約束してやることが先決であるとして、家康に一筆書かせたのが、百万石の御墨付だったのではないだろうか。

百万石の御墨付は、政宗が上杉を攻略する見返りでも、旧領切取り次第と自力回復を認めたものでもなく、政宗を上杉領へ自力進攻させないために旧領回復を約束する証文だったのだろう。御墨付の文面に「御家老衆中へ為可被宛行進之候」とあり、地方知行制で主君に半独立の家老衆に家康が直接知行を約束して、血気に逸る政宗を家老衆に自制させる狙いがあったのかもしれない。

小山から江戸に戻った家康は、すぐには上方に進軍しなかった。小山から反転して尾張に戻った池田輝政と福島正則が、八月二三日に織田秀信の守る岐阜城を攻め落とすと、豊臣恩顧の彼らの帰趨を確かめたかのように、九月一日に江戸を出陣、秀忠も上田方面に出陣した。

〈2〉東北の関ヶ原（慶長出羽合戦）

家康の反転西上に合わせて、上杉攻めのために山形に参陣していた南部信直と秋田実季が自領に引き揚げ、家康が九月一日に西へ向けて江戸を出陣すると、南の脅威が遠のいた上杉景勝は、北の最上義光を排除するため、九月八日に大軍を率いて、庄内と米沢の二方面から最上領に侵攻を開始した、東北の関ヶ原が始まった。

米沢の直江兼継軍が、十三日に最上領の畑谷城を陥落させ、最上義光の山形本城から南西八キロの長谷堂城を包囲すると、十五日、窮地の義光は、嫡男義康を北目城に送り、犬猿の仲だった政宗に援軍派遣を要請してきた。奇しくも上方で関ヶ原決戦のあった日である。

片倉景綱は「最上を棄て直江に勝たせて後、両軍が疲弊してから最上と上杉を討つべし」と進言したが、政宗は「家康のため、母保春院の最上を救うため」と伊達上野介政景を名代に援軍派遣を決定、十七日に出陣した政景軍は、二〇日には笹谷峠を越えて山形領に入った。

伊達治家記録の九月二四日の条に「政宗、上野介へ陣中の様子、合戦の心懸、会津よりの増勢如何、二九日に北目城を出陣、晦日白石に着き、来月朔日に伊達・信夫筋へ働き玉フベシと御書を賜う」とある。

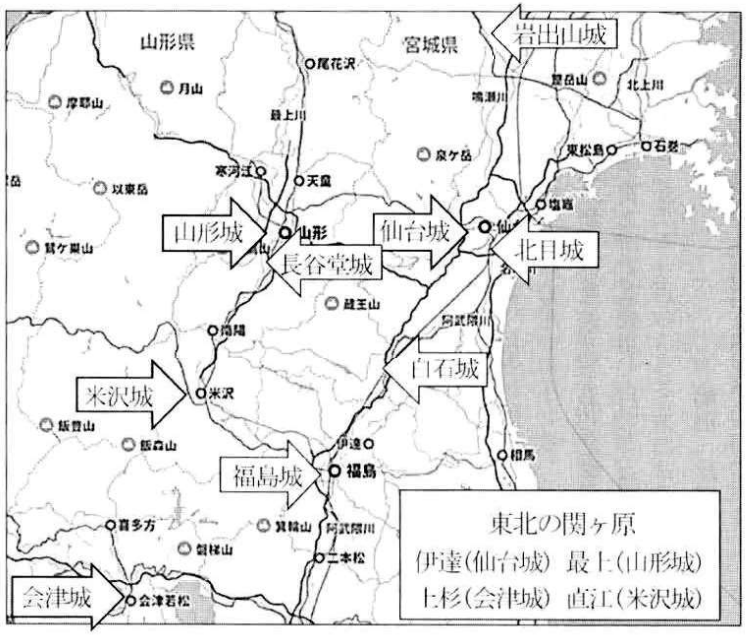
家康の指示で仙道進攻を自制してきた政宗も、直江の最上攻撃という新しい局面に、会津の景勝本軍の動きを注視しながら、百万石の御墨付で家康に約束させた旧領から上杉勢力を自力で排除する作戦に動き始めていた。

九月晦日に関ヶ原の戦いの西軍敗北の報が奥州に届くと、長谷堂城を包囲攻城中だった上杉軍は、米沢に撤退を開始、最上軍と伊達政景軍が追撃戦を展開した。

上方の早期決着で、家康の二正面戦線回避の必要はなくなった。家康が再征してくる前に、孤立する上杉から旧領を自力奪還する最後の機会である。最上が庄内の自力奪還に侵攻を始めた。政宗も仙道南進に踏み切った。

一〇月五日、政宗は二万を率いて北目城を出陣、六日に伊達郡国見山に陣を備え、一番茂庭綱元、二番片倉景綱、三番屋代景頼の陣容で、福島へ向け進軍して宮代合戦に勝利したが、福島城に籠城する本庄繁長の激しい抵抗と梁川城の須田長義による輜重襲撃もあって、福島城の再攻撃を断念して、七日に北目城へ帰還した。

伊達家文書七〇八号「最上陣覚書」に「最上へ直江山城働申候由、政宗承、景勝二本松へ出馬被成、先手福島ニ可罷在候間、伊達郡ニおゐて景勝と一合戦可仕由被存、被罷出候へ供、景勝無御出ニ付、右之合戦計ニて、引籠被申候」景勝が出馬せず政宗は決戦を断念したとある。



一〇月九日に桑折宗長・大条宗直に宛てた書状で「今度之勤、仕合能満足ニ候、今少残多様ニ候得共、時分柄之事ニ候条、能候ト存候」時勢の展開で景勝との決戦叶わず旧領奪還が果たせなかった無念さを吐露していた。

宮代合戦の報告を受けた家康の政宗宛て一〇月二四日付け書状（同文書七一八号）に「至福島表、被及行刻、敵出人数候處ニ、即追崩、数多被討捕、福島虎口迄、被押詰之由、無比類仕合共候（中略）来春者早速、景勝成敗可申付候、其内御行無聯爾様肝要候」とあった。

政宗の戦勝を祝しながら、来春には早速に上杉景勝を征討するので、それまで政宗には軍を出さぬよう伝えてきた。政宗の自力旧領奪還の夢はここに断たれた。

その後の顛末は、山形縣史巻一の慶長五年一〇月二六日に「直江兼続ノ退軍スルヤ、親シク會津ニ詣リ、佐竹義宣ト共ニ、直ニ江戸ヲ襲撃センコトヲ謀ル、會々神原康政本多正信等使ヲ遣ハシ講和ヲ勧告ス、上杉景勝即チ諸将ヲ會集シ、和戦ノ便否ヲ諮問ス、安田能元等多ク主戦ヲ固辞ス、景勝之ヲ解諭、遂ニ否戦ニ決シ、本庄繁長ニ命シテ上洛セシム」とあり、上杉の降伏で終焉した。

〈3〉政宗の十一箇條御書付

政宗が家康の側近今井宗薫宛て一〇月十四日付け書状（同文書七一五号）で、関ヶ原で大勝した家康の大坂入城を祝し、生捕りされた敗将石田・安国寺・小西・長束は、無筋謀反で神罰を蒙り天道有り難く、早々に五條河原辺にて成敗して獄門に掛けるべしと進言、併せて最上に加勢した戦況と仙道筋の福島進攻を報告した。

その五日後の一〇月十九日、政宗は、今井宗薫宛てに次の「十一箇條御書付」を送っている。

内覚

一、虎菊丸（忠宗）縁之事
一、兵五郎（秀宗）事
一、大坂伏見屋敷之事（口上）
一、佐スチ以来共御鹽味之事
一、岩城之事（口上）
一、八月廿八日相馬ヨリ手切可仕由必定ニ付而、直山人数催、フク嶋江参候事（口上）
一、会津ニ御手前之衆置申度事
一、南部之事
一、上方ニテ廿萬石カ十五萬石ホトノカンニン（堪忍）分申請度事（口上）
一、爰元居城之事
一、貴老江千貫之知行可進候、乍去右之儀共調候ハヽ如御望二千貫之所可進候事、（口上）條條、

以上

十月十九日　羽越前　政宗（御書判）

宗薫老　人々御中

政宗が宗薫に託した家康への申し出は、伊達治家記録に「皆大神君へ御内々仰上ラル義共ナリ」とあり、いずれも政宗が予ねて家康に申し出ていたことだという。

第一条の忠宗縁組の事とは、前年に長女五郎八姫と家康の六男忠輝の婚約が宗薫の周旋で成立しており、第二弾として嫡男忠宗の縁組もこの時に申し出ていたのだろう。三年後に忠宗と家康の五女市姫が婚約している。

次の秀宗の事とは、秀吉の猶子となり秀吉の許で元服していた庶長子秀宗の善処を頼み込んだのだろうか。慶長十四年に家康の家臣井伊直政の娘を正室に迎え、十九年に伊予宇和島藩一〇万石藩主に任ぜられている。

大坂伏見屋敷の事とは、上杉討伐のために大坂に残して三成に人質に取られた妻子の保護のことであろうか。

佐スチ以来共御鹽味の事とは、佐竹義重・義宣親子の処置をよく吟味するようにと進言したのかもしれない。

岩城の事、相馬より手切り、直江が福島へ、会津に自分の手勢を、南部の事、とは、奥州の親三成派と親佐竹派への制裁と進攻を家康に申し出ていたのだろうか。

九条目の上方に二〇万石を申し請けたいとは、関ヶ原で敗れた西国大名の改易で大量に放出される領土を狙って、これまで最上支援と仙道攻略の実績と来春予定の会津再征への貢献を売り込む政宗の強かさが見えてくる。

最後の条の千貫とは一万石相当、宗薫に謝礼として一万石やろう、もし全条項を成就させてくれたら望み通り二万石やろうとは、いかにも政宗らしい口上である。

それにしても、驚くべき傲慢な申し出ではないか。家康が天下を取れたのは、俺のお蔭と言わんばかりの盛り沢山な要求の数々である。政宗が関ヶ原の戦いの直後に自分の果たしてきた役割と実績をどう自己評価して自分を売り込んでいたかが知れる貴重な史料である。

政宗が東北の関ヶ原の戦いをどう総括していたかを自ら語っていたもう一つの記録が、仙台市史：特別編八に収録されているアマーティの著書「伊達政宗遣欧使節記」の第三章「奥州国王伊達政宗」にあった。

「現在の皇帝（家康）は、信濃の国王景勝と、佐竹の国王カツ・ヤサタクエンドノというきわめて強力な二人の国王や、彼らと連合した他の領主たちと対峙した時に、もしも伊達政宗が後方で彼を援助し防衛してやらなかったならば、帝国を領有することもなかったであろうし、皇帝にもならなかったであろう。

彼らは政宗が行った三つの戦いで打破され、粉砕されて、敗北した。政宗は彼らの町や砦を占領し、そして彼らを拘束し、彼らが皇帝の他の敵を救援しに軍の後方に回ることのないようにしたのである。その結果、皇帝は自分に敵対していた西方の諸王のほとんどを捜し出して、屈服させることに成功した」

著者のアマーティは、政宗が関ヶ原の戦いから十三年後の慶長十八年に、メキシコとの直接交易を図るため、

キリスト教の領内布教と宣教師の派遣を条件に、家臣支倉常長と宣教師ソテロを、スペイン国王とローマ教皇の許へ派遣した際、使節団の通訳兼折衝役としてマドリードからローマまで同行したイタリア人で、ローマ教皇に奉献する目的で著述された書物である。

アマーティが「遣欧使節記」に記述した日本の国情と仙台藩と政宗に関する内容は、アマーティ自身が来日して情報取集したわけがなく、遣欧使節団を引率してきたソテロから、ローマ教皇に報告されることを意識して、レクチャーされた内容をそのまま記したのだろう。

ソテロは、スペインのセビリア市の貴族に生まれ、大学で法・医・神を学び、洗足会修道院に入会、司祭に叙階され、慶長五年（一六〇〇年）にマニラに渡り日本人町で使徒活動に入った。慶長八年に日本宣教団の一員として来日、江戸城で家康と秀忠に謁見して、江戸と上方に教会と病院を建設しており、政宗との接点は、政宗の愛妾の病気治療が縁だったといわれる。

ソテロは仙台領内での布教を許され、慶長十五年に仙台城で政宗に謁見して、使節船の派遣について話し合っており、ソテロがアマーティに語って「遣欧使節記」に記された奥州国や政宗に関する情報は、この時に政宗本人から教授されたものに違いない。

遣欧使節記の「上杉と佐竹が上方の三成らと連合して家康に反抗した際、政宗が家康を後方支援したお蔭で、家康は西国大名を倒して天下が取れた」という下りこそ政宗がソテロに語った東北の関ヶ原の総括だったのだろう。家康への十一箇條御書付の要求も、さもありなん。

現代の我々は、ソテロとアマーティのお蔭で、政宗自身が語った総括と自慢話を聞けているのかもしれない。

〈4〉仙台開府の背景

政宗が十一箇條御書付の一〇條目「爰元居城之事」で家康に申し出ていた仙台開府について、山岡志摩が家康の承認を得て帰国した記述が、伊達治家記録の慶長五年十一月十三日の条にある。

「最前山岡志摩ヲ上方へ差登サルノ節、宮城郡国分ノ内千代城ヲ再興セラレ、公御居城ニ成シ玉ヒタキ旨、本多佐渡守殿正信ヲ以テ、大神君へ仰上ヲル處ニ、普請セラルヘキ旨、今度志摩下向ノ時仰下サル」

政宗が最前山岡志摩を家康に遣わして仙台移転の申し入れたという「最前」とは、いつのことだろうか。政宗がいつ頃に仙台開府の構想を抱いていたかに繋がることだが、山岡志摩は、七月二五日の白石城攻略戦を報告するため、帰府する今井宗薫に付いて江戸に赴いている。

政宗の仙台開府までの伊達氏の居城変遷を概観すると文治五年（一一八九年）に頼朝が平泉の奥州藤原氏を征伐する奥州合戦に参陣した常陸入道念西が、敵将佐藤基治を石那坂で討ち取った軍功で、福島県北部の伊達郡保原に高子岡城を構えたのが始まりである。

伊達五山を建立した四代政依が梁川城に、十四代稙宗が桑折西山城に移し、祖父十五代晴宗が移した米沢城で生まれた政宗は、十八歳で十七代家督を継ぐと、父輝宗の惨劇を乗越えて、宿敵の会津蘆名氏を倒し奥州の覇者となり会津黒川城に移るが、秀吉の惣無事令に反して蘆名氏を滅ぼし小田原陣に遅参したとして、蘆名氏から奪った会津が没収され、居城を米沢城に戻された。

天正十九年（一五九一年）の葛西大崎一揆煽動疑惑で二百年来の米沢領も召上げられ、代わりに奥州仕置で改易された葛西氏と大崎氏の旧領が与えられ、米沢城から北東に一〇六キロの宮城県北西部の岩出山城に移った。

岩出山城のある大崎地方は、東北最大級の前方後円墳を造営する勢力が存在した古くからの穀倉地帯で、南北朝時代に大崎氏の始祖斯波家兼が奥州管領に任ぜられて奥羽を統括した重要な拠点であった。

なぜ政宗は、この岩出山城から南に四五キロの仙台平野の中央の仙台に本城を移したのだろうか。

仙台開府の理由について、歴史学者小林清治氏が著書「伊達政宗」の中で「これまで政宗が居城とした岩出山城は、大崎・葛西地方の鎮定を主な目的として取立てられたものだったが、その地方の統制が軌道にのると、本街道からはずれしかも北偏するとの位置の不便さが痛感されるようになった。規模の点からいっても、大崎氏の麾下に属する氏家氏の居城であったこの城は、多数の家臣や町人の集住を必要とする六十万石の近世大名の居城としては、あまりに小さかった」と述べられている。

家康の会津征伐令で伏見から帰国した政宗は、岩出山城から南に四八キロの名取郡北目城に入り、対上杉戦の前哨戦となる白石攻城戦の基地として、その後も作戦基地として北目城を利用しており、岩出山城では会津と米沢を拠点にする上杉氏との戦には、遠すぎたのだろう。

仙台開府の理由は、戦略上の立地だけだったのだろうか。もう少し政宗の思いに想像を巡らせてみた。

奥州仕置で強制的に移された岩出山城からの上洛は、天正二〇年の朝鮮出兵と文禄四年の秀次謀反事件嫌疑で秀吉に呼び付けられた二度あるが、岩出山から旧奥州街道に沿って南下して白石から伊達・信夫そして二本松と旧領だった仙道を通りながら、秀吉の小田原陣に遅参した己の情勢判断の甘さを悔恨していたに違いない。

今回の家康の会津征伐令で帰国する際には、上杉領になっている仙道の中通りが通れず、大きく迂回して浜通りを行かなければならない屈辱を味わいながら、この機会に旧領を奪還する決意を新たにしたに違いない。

政宗は、三成の上方挙兵に反転西上する家康から二正面戦線を避けるべく、対上杉戦の行動自制を求められていたが、密かに岩手県の南部領で和賀一揆を煽動しており、更に関ヶ原の三成敗北で上杉勢が引き揚げて手薄になった福島県仙道に自ら大軍を率いて進軍しており、戦乱の世の再来を機に、岩手・宮城・福島三県を束ねた広大な陸奥制覇を狙っていたのであろう。

仙台の地は、平野中央にある遠見塚古墳が、東北第五位の規模を誇る前方後円墳で、畿内政権と結びついた広域な政治集団が存在した道の奥の中心地であった。奈良時代には、多賀城に陸奥国府と鎮守府が置かれ、東北の政治文化の中心で、蝦夷を支配する軍事拠点となった。

平安時代後期に青森の外ヶ浜から福島の白河までを支配した奥州藤原氏が、その中心に位置する平泉に、仏教文化の都市を建設して畿内の朝廷から独立した奥州王を宣言したが、五〇〇年の時空を超えて、政宗は、藤原清衡に倣って、伊達藩北端の水沢胆沢から旧領南端の白河まで二六〇キロのほぼ中間に位置する仙台平野に本拠を置く壮大な奥州王国を夢見ていたに違いない。

政宗が仙台開府の構想を抱いた時期について、家康が政宗に与えた八月二二日付け「百万石の御墨付」によって、南に広がる百万石の新領国の中心になる千代城跡への移転構想が生まれたのではないかといわれている。

しかし会津征伐のため帰国した政宗は、岩出山城には戻らず、南に四八キロの北目城を実質的な本拠にしており、百万石の御墨付を与えられるより一ヶ月も前の七月二五日に、上杉領の仙道に侵攻する手始めに白石城を攻略した報告の使者に山岡志摩を家康の所に派遣した段階で、白石城から南に広がる仙道の旧領を自力奪還した後の新版図の中心に当たる仙台平野への本拠移転の構想を抱いて、家康に「爰元（ここもと）居城之事」として仙台開府を申し出ていたのではないだろうか。

〈5〉仙台城の誕生と盛衰記

仙台城は、なぜ北目城ではなく、千代城跡だったのだろうか。北目城ではだめだったのだろうか。

北目城は、ＪＲ東北本線の仙台駅の南隣の長町駅から南東に約一・五キロ、国道四号線バイパスの鹿の又交差点付近に位置していた。

奥州山脈の面白山を源とする広瀬川と名取川と合流するデルタ地帯の自然堤防と後背湿地上に立地して、七世紀に多賀城に移転する前の陸奥国の国府があった郡山官衙遺跡に隣接しており、仙台平野の中心地にある。

南北朝時代に越前に本領を持ち名取郡に移住してきた粟野氏の居城で、伊達氏十二代成宗に敗れて伊達氏の支配下に入り、秀吉の奥州仕置で政宗が岩出山に移封されると、粟野重国も磐井郡大原（現一関市）に移され、北目城には政宗の側近屋代景頼が城代に入っていた。

北目城の規模は、既に市街化されて城郭の痕跡は殆ど残っていないが、史跡の発掘調査から、東西三七〇ｍ、南北二八〇ｍ、幅十五ｍの堀を四方に廻らせ、総面積一二万八千㎡、仙台城の本丸を上回る広さだったという。

北目城は、奥州街道に隣接する交通の要衝にあり、広大な敷地を持って大軍の集結基地にも適しており、政宗は対上杉の前哨戦になった白石攻城戦で前線基地に利用していたが、土塁と堀に囲まれた、ただ広いだけの中世城郭では、鉄砲など近代兵器に対応した攻城戦には不向きであり、家康の対上杉再征が予想される来春までに、北目城を高い城壁を備えた近世城郭に改修するには、時間が無かったのだろう。

当時の築城は、平城が主流で、山城は時流に反していたが、来春の上杉との本格決戦が、仙道から仙台平野に掛けた大規模な攻城戦になることを想定した政宗は、防衛面に弱い平城の北目城ではなく、外堀の役目を担う蛇行する広瀬川に囲まれ、急峻な断崖が固める天然の要塞でもある千代城跡を本城に選択したに違いない。

千代城は、平安時代後期の頼朝の奥州合戦で、東海道軍を率いた下総国国分荘の千葉胤通が、宮城県中南部を与えられて土着した国分氏の居城であった。

国分氏は、始め郷六城を築城、次いで千代城、小泉城、松森城を居城にしたが、国分盛氏に子なく、伊達輝宗の弟盛重が入嗣するが、家中の内紛もあり甥の政宗と対立して佐竹氏に出奔、国分氏は滅亡した。

千代城址について、伊達治家記録の慶長五年十二月二四日の条に「公、千代城へ御出（中略）晩、御普請初ノ御祝儀、御能五番アリ」、二六日の条に「公、北目城ニ御帰」とあり、宴や能や宿泊のできる屋敷が残り、城郭の様相は未だ残していたようである。

家康の許可を受けた政宗は、十二月二四日に千代城跡に仙台城の縄張りを始めて、翌六年一月十一日に普請を開始、翌七年五月に未完ながらほぼ竣工した。

仙台平野の西端に位置する青葉山の丘陵に築かれた標高一一五ｍの山城は、東側が広瀬川に臨む断崖、西側が深い御裏林、南側が竜ノ口渓谷、北側に急峻な石垣を築いて、まさに天然の要塞である。

関ヶ原で勝利した家康が、来春には上杉征伐に再征するという風雲急を告げる時期の、突貫工事の築城だったが、宿敵である上杉景勝、佐竹義宣、相馬義胤との攻防戦の舞台となることはなかった。

寛永五年（一六二八年）に城下の小泉に隠居用の若林城を造営、政宗の死後、忠宗は仙台城の北側山麓に若林城の建物を移築して二の丸を造営、藩政の中心とした。

正保三年（一六四六年）四月の大地震で本丸の三層櫓が悉く崩壊したが、政務は既に山麓の二の丸に移っており、崩壊した櫓が復興されることはなかった。

戊辰戦争で、仙台藩は東北の三一藩が結成した奥羽越列藩同盟の盟主となり、明治新政府軍と対決したが、仙台城は幸いにもその戦場になることはなかった。

維新政府の廃城令により、明治七年に本丸が破却されて、三七年に本丸跡地に招魂社が創建された。現在の宮城県護国神社である。残った国宝の大手門は、太平洋戦争の仙台空襲で焼失、一部に石垣だけが残る城塞は、仙台出身土井晩翠作詞の「荒城の月」の世界である。

明治四年に仙台城址に仙台鎮台が設置され、後に第二師団に改編、対外戦争の主力部隊として戦地に赴いた。

日清戦争の威海衛湾攻略、師団長乃木希典率いる台湾出兵、日露戦争では遼陽会戦で夜襲師団の異名を取り、満州事変、ノモンハン事件、そして太平洋戦争では南方戦線に投入され、ガダルカナル島奪還作戦で歩兵連隊長三人を含む七五〇〇余人が戦死、ガダルカナル撤退後はビルマ戦線に転戦、苛酷な戦いを強いられた。

〈6〉仙台城の天守閣

仙台城に天守閣はなかった。政宗が天守閣を建てなかった理由について、慶長六年四月一八日付の今井宗薫へ宛てた書状に、仙台城の普請経過を報告する中で「内府様如此御繁昌之間者各城などの普請吏に不入由存候間」と、家康様のかくの如きご威勢にては、天守閣のある城など建てる必要があろうか、と書き送っていた。

政宗が仙台築城の縄張りをした時期は、関ヶ原のわずか三ヶ月後、大坂城には豊臣秀頼が未だ健在で、豊臣恩顧の西国大名も意気軒昂である。来春には家康による上杉再征が予定されており、家康が豊臣氏を滅ぼす大坂冬の陣は、まだ十五年も先のことである。

家康の御威光が天下にあまねく及んでいたとはとても言える状況でなく、政宗得意のリップサービスではないだろうか。天守閣を建てなかった政宗の真意はいかに。

東北に天守閣がないのは、高層建築と石垣構築の技術がなかったからといわれているが、唯一会津に七層の巨大天守があった。蒲生氏郷が文禄二年（一五九三年）に建てた若松城である。天正十七年に政宗が会津蘆名氏を滅ぼし米沢城から会津城に移ったが、秀吉の惣無事令に反して蘆名氏を滅ぼしたとして、会津領が召し上げられその後に伊勢松坂から氏郷が移封されてきた。

氏郷は、信長の娘冬姫を妻に迎え、信長に小さな婿殿と可愛がられたため、本能寺の変後に明智光秀を倒して信長の後継者の位置を勝ち取った秀吉に煙たがられて、氏郷の会津移封は、奥州の政宗の監視と牽制役だったといわれているが、伊勢松坂から「道の奥」に遠ざけられたというのが真相だったかもしれない。

葛西大崎一揆が勃発すると、秀吉は政宗と氏郷に鎮圧を命じたが、氏郷は政宗が一揆勢に通じて自分を挟撃せんとしたと秀吉に讒言、京に呼び付けられた政宗は、一揆煽動疑惑の書状の花押に針の穴がなく偽物だと反論して窮地を脱したが、二人は犬猿の仲だったようである。

後に氏郷が急死すると、政宗による毒殺説が囁かれたという。ライバル氏郷の巨大天守閣を政宗が意識しないはずはないが、それでも政宗は天守閣を建てなかった。高層築城技術がなかったわけではなさそうである。

現存する天守閣十二の内、仙台城の築城と同じく関ヶ原の直後に建てられた天守閣をみると、姫路城（一六〇一年）が池田輝政、伊予松山城（一六〇二年）が加藤嘉明、宇和島城（一六〇一年）が藤堂高虎、高知城（一六〇三年）が山内一豊、いずれも秀吉恩顧の外様大名であり、政宗が家康に敵意のないことを示すため天守閣を建てなかったという話も、俄かには信じ難いが、考えてみればいずれも西国大名である。

それではなぜ東国大名は、高層天守閣を建てなかったのだろうか。東国の大名は、会津の上杉、常陸の佐竹、磐城の岩城、陸奥の伊達、出羽の最上、互いに敵対してはいたが、半世紀前まで、婚姻と養子縁組で繋がる洞（うつろ）と呼ばれる族縁共同体を形成していた。

政宗の曽祖父稙宗は、母が上杉氏、兄弟を留守氏と最上氏に、子女を岩城氏、相馬氏、蘆名氏、大崎氏、二階堂氏、田村氏、葛西氏、梁川氏、亘理氏に、孫を岩城氏、国分氏、佐竹氏、蘆名氏に縁組、奥州の戦国大名が悉く伊達氏を盟主にしたネットワークに組込まれていた。

互いに相手の領地に攻め込むことはあっても、西国大名のように領土簒奪を狙う弱肉強食の世界ではなく、盟主の伊達氏が、陸奥守護職、奥州探題職として、奥州王国の連帯と静謐を保っており、近世大名に脱皮できていない旧態依然とした国人大名の世界であった。

洞の時代から三〇〇年経った明治維新でも、薩長の新政府に対して、朝廷に恭順する会津・庄内両藩の放免を嘆願するため、仙台藩が盟主となり奥羽越三一藩が列藩同盟を結成、軍事同盟に進んでいった世界である。

家康は東国大名に歴史的な血縁の連帯意識が潜在していることを承知していたに違いない。そして来春に会津再征を予定している家康は、東国大名が連帯して徳川に反旗を翻す危険を警戒していたのではないだろうか。

上杉景勝が謀反の嫌疑を掛けられたのは、越後から移封された会津に籠り、領内の城郭を補修して口実を与えたことにあった。政宗が仙台城の築城に当たり、東国大名の連帯感を警戒する家康の猜疑心を恐れて、高層天守閣の建築に及び腰になっていたのかもしれない。

政宗が北日城から仙台城に移ったのは慶長六年四月、まだ壁も付かなかったといわれ、家康の上杉再征予定に急ぎ間に合わせたのだろう。政宗にとって、上杉との決戦を想定した早急な防衛城郭の構築こそが喫緊の課題で美麗な高層天守の建築の余裕などなかったのだろう。

政宗が天守閣を建てなかった理由を思わせるヒントを青葉城資料展示館の主任学芸員大沢慶尋氏から頂いた。

昨年十一月に大沢氏が某セミナーで講演された「政宗公の育んだ伊達文化とは～その継承と広がり～」のレジメの中で「政宗の仙台開府に伴う仙台城の築城や社寺の再興・造営に見る伊達な文化は、伊達家で育まれた奥州の伝統・文化・宗教を正統に継承し護る「奥州の王」であるという気概・意気込みを、桃山建築という新しい息吹を吹き込みつつ示すもの」と語られていた。

そして仙台城本丸の東側の広瀬川に面した断崖に張り出すように建てられた書院様式の「懸造」について、「懸造は、米沢城にも存在していたことが伊達天正日記にしばしばでてくる。伊達家が伊達郡を本拠としていた鎌倉期から室町期の居城・梁川城本丸跡の東（茶臼山北遺跡）の園池跡の発掘調査でも、池の上に建つ懸造とみられる遺構・木材が検出されている」という。

仙台城の懸造は、京で見た清水寺に影響を受けた政宗の発案と思っていたが、伊達家歴代の梁川城と米沢城にあったとは、伊達家独自の城郭形式だったようである。

梁川城は、鎌倉時代に伊達五山を建立した伊達氏四代政依から十四代稙宗が桑折西山城に移すまで二八〇年の間、長く伊達家の本拠地だった城であり、米沢城は、天文の乱で父稙宗を倒した十五代晴宗が伊達郡から移した本拠地で、政宗が生まれた城である。

室町時代に伊達家中興の祖といわれた伊達氏九代政宗が、足利三代将軍義満の生母の妹を正室に迎えて義満と叔父甥の間柄にあり、上洛して義満の京都扶持衆となっている。奥州人として京都の清水寺本堂の懸造りに憧れて、梁川城に造営させていたのかもしれない。

大沢氏は「伊達家＝懸造、といえる伊達家を象徴する伝統的建物で、破損などしてもその都度再建され幕末・明治維新を迎えた、伊達家にとって特別重要な意味を持っていた。仙台城の懸造は城のシンボルとしての「天守代用」の性格をもち、この性格の懸造は日本の城郭の中でもほぼ仙台城のみであり、懸造は政宗公による「伊達氏系城郭」の継承を意味するもの」と言っておられた。

伊達家の伝統と文化と宗教を正統に継承し護持していることを自負する政宗にとって、信長の安土城に始まる当時流行になっていた織豊系城郭の高層天守は、あまり意味がなかったのだろう。懸造の存在こそ、政宗が天守閣を必要としなかった理由だったかもしれない。

〈7〉天守台と幻の天守閣

子供の頃に仙台城を青葉城、本丸跡を天守台と呼んでいた記憶があったが、なぜ天守閣のない本丸跡を天守台と呼んでいたのだろうか。素朴な疑問を抱いて、仙台城絵図をネットで調べてみると、現存最古の正保二年（一六四五年）「奥州仙台城絵図」と、寛文四年（一六六四年）「仙台城下絵図」には、天守台らしきものはどこにもなかったが、四代藩主綱村が元禄一〇年（一六九七年）頃に作成させた「肯山公造制城郭木写之略図」に五重の天守が描かれていた（下図）。

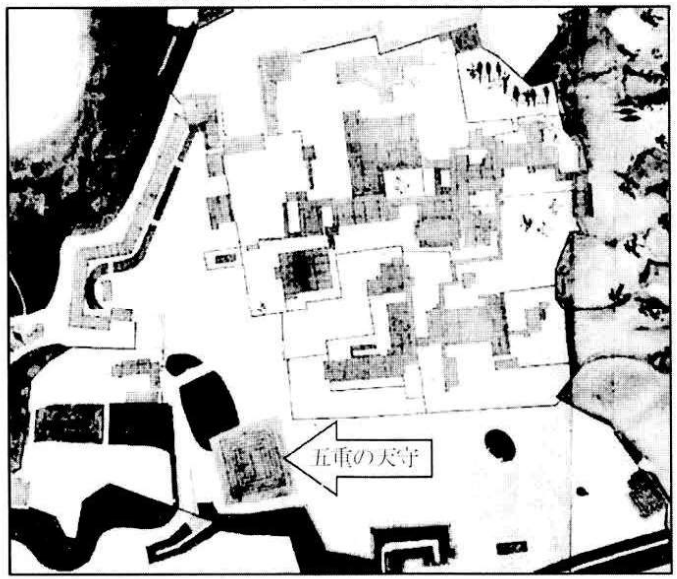
なぜ建てられなかったはずの天守閣が描かれているのだろうか。しかも五〇年前の正保三年の地震で倒壊して当時存在しなかった筈の三棟の三重櫓まで描かれている。

この絵図を描かせた肯山公は、伊達騒動で毒殺されかけた幼君亀千代、後の四代当主綱村である。

祖父忠宗の死後に父綱宗を蟄居させて藩政を牛耳っていた親戚一門を抑えるため、曽祖父の藩祖政宗を神格化してその威光で政宗直系の復権を図るべく、「伊達正統世次考」と「伊達治家記録」を編纂させており、藩祖政宗の築いた城郭はかくあれかし、という綱村の願望が描かせたのかもしれない。

肯山公造制城郭木写之略図に描かれた五重の天守の位置を、現在の地図に重ね合わせると、宮城県護国神社の南側、本丸会館裏手の森がこれに当たるようである。

肯山公造制城郭木写之略図（宮城県図書館蔵）



仙台城を訪れた折、本丸入口の仙台城鳥瞰図を見ると本丸と西ノ丸の間に天守台という表示があった。

そこを訪ねると樹林に覆われた高台で、その前に別宮浦安宮が鎮座、左宮に伊勢神宮の四座の神々が、右宮に伊達政宗公と白水稲荷大神が祀られていた（左写真）。

別宮浦安宮（右宮の祭神が伊達政宗公と白水稲荷大神



別宮浦安宮の右宮に政宗と一緒に祀られている白水稲荷大神について、傍らに立つ鎮座由来の看板に「藩祖伊達政宗公築城以前は、此の地を青葉ケ崎と称し白水稲荷大社が屋敷神として古くより祀られていた」とあった。

隣接の宮城県護国神社は、明治三七年に招魂社として戦没の英霊を祭神に創建されており、白水稲荷大神や伊勢神宮の神々を祀る別宮浦安宮とは、関係なさそうである。天守台と思しき場所に、古くから祀られていた白水稲荷大神とは、いかなる神様なのだろうか。単なる屋敷神が、政宗公と一緒に祀られるものだろうか。仙台城天守台のルーツに関わる何か特別な神様なのだろうか。

〈8〉仙台市青葉区台原の白水稲荷神社

白水という名前で思い当たるのは、福島県いわき市の白水阿弥陀堂である。東日本大震災直前の二〇一一年二月に、いわきサンシャインマラソンを走った後、平泉の中尊寺金色堂と宮城県角田市の高蔵寺阿弥陀堂と共に東北三大阿弥陀堂といわれる白水阿弥陀堂を探訪した。

いわき市の白水阿弥陀堂は、奥州藤原氏初代清衡の娘徳姫が夫岩城則道を供養して建立したと伝えられるが、岩城氏は常陸平氏の流れで海道平氏の嫡流、清衡の正室が北方平氏といわれ、奥州藤原氏の母方ルーツの豪族である。仙台城址に祀られる白水稲荷大神は、その白水阿弥陀堂と何か関連があるのだろうか。

仙台近郊に白水の名が付く場所を探してみると、仙台市街の北西に聳える泉ケ岳を源流とする七北田川中流の左岸に白水沢という地名が、北仙台駅の北側に広がる丘陵地帯の台原地区に白水稲荷神社という社があった。

昨年（二〇二〇年）一〇月、本丸跡の別宮浦安宮を参拝した帰りに、台原の白水稲荷神社まで足を延ばした。

仙台駅から地下鉄南北線の北仙台駅に下車、支倉常長の墓がある光明寺とは反対側を、河岸段丘の崖が剥き出しの梅田川に沿って東に十五分ほど、上杉山通りの延長になる交通量多い県道二二号線を横断すると、住宅地の中の杉林の小高い丘の中腹に、整備中の台原公園が現れて、赤い鳥居と切妻の一間社殿が見えてきた。

標高六〇Mの高台に立つと、緑地と住宅とビルが織り成す市街地が広がっていた。まさに仙台市のベッドタウンである。台原は、三キロ北を東に流れる七北田川の右岸から広がる七北田丘陵の南部が、広瀬川の侵食で河岸段丘を形成して、仙台平野に岬のように突き出す形状から玉手崎と呼ばれ、仙台七崎の一つである。

台原の西側には、荒巻や中山の地名が残って、政宗の仙台開府当時、荒涼たる放牧地だったのだろう。鎌倉時代から政宗に滅ばされるまでの四〇〇年、この地を領して馬を走らせる国分氏の息吹が感じられてきた。

神明造の社殿だが、地元神を祀る村の鎮守にしては立派である。扁額に仙台市長島野武の謹書で「白水稲荷神社」とあり、特別な由緒を予感させてくれた。賽銭箱には「白水神社」とあり、白水神社が後に農耕と商売の稲荷明神と複合して白水稲荷神社になったのだろうか。

台原公園を一回り、神社由緒の説明板を探してみたが見当たらなかった。諦めかけていると、町角の掲示板に貼られた台原町内会報告のチラシに町内会長の名前があった。藁をも掴む思いで、周辺の住宅の表札を探し回って、ようやく会長さん宅を尋ね当て、呼び鈴を押して、白水稲荷探訪の目的をお話すると、後日、神社部長さんから白水稲荷神社に関する資料を郵送いただいた。

送られてきた資料「白水稲荷神社縁起考」の作成者の名前に驚いた。仙台探訪で参考にしていた昭和三四年発行「目で見る仙台の歴史」の編集後記に「仙台市史の編纂出版を終えた完成慰労会の席上で編纂委員の一人である三原良吉氏から、市史に図録がないのは遺憾であると仰られてこの本が出来た」とあった三原良吉氏である。

神社部長さんの話では、台原町内会は、結構古い町内会で、神社部長という役職を設けて町内会で白水稲荷神社を守り、毎年九月に神事とお祭りをやっている、仙台市内では珍しい町内会かもしれないという。

三年前に取り壊された町内会の集会所の倉庫にあったという神社縁起考をパネルにした写真も送っていただいたが、三原良吉氏の「白水稲荷神社縁起考」の内容は、非常に興味深く貴重な考証資料だった。

冒頭に「白水稲荷は、もと青葉ケ崎に在り、慶長五年藩祖伊達政宗公仙台築城に当り、之を杉山台ノ原に奉還せりとい、伝うも、創建はそれよりも更に古きが如し」とあった。奉還とは、返し奉るの意、政宗が青葉ケ崎の千代城跡から台ノ原に戻したということは、白水稲荷は元々杉山台ノ原にあったようである。

続けて「社地は古の国府中山と称せる地にして、この地と国府の関係は不明なるも藤原相之助氏の説によれば武隈国府が貞観十一年の大津波により潰敗せし時、この地に移されし事ありし為めなるべしと云えり」とあった。

八六九年の貞観津波で陸奥国府を武隈（多賀城の誤りか）から台原の中山に一時移されたことから国府中山と呼ばれ、鎌倉時代の「吾妻鏡」に、奥州合戦で頼朝軍を迎撃する藤原泰衡がその国府中山の上の物見岡に陣地を構えたとあり、当地は古代から要衝地だったのだろう。

更に「この地一帯は、平泉藤原氏時代には、信夫荘司佐藤基治の所領たりき。基治は有名なる嗣信、忠信の父にして夫人は藤原清衡の季子清綱の女なりしが、嫁するに当り清衡の護持仏たりし十一面観音を奉持し来りしかば、基治十一面観音を本地仏とする天神を現在の台ノ原一本松の地に祀り、麓に別当大松寺を建て、観音を安置せり。一本松を元天神と称するはこの為なり」とあった。

台原一帯を領したという佐藤基治は、奥州藤原氏初代清衡の孫娘を妻に迎えた平泉政権の武将で、福島県北部の信夫郡の大鳥城を居城に信夫庄司と呼ばれ、飯坂温泉の近くから湯の庄司とも呼ばれており、多賀城の国府に近い宮城郡国分の荘司も兼ねていたとすると、宮城県中部の国分から福島県南部の白河まで、広大な荘園を支配していたことになる。大鳥城はその真ん中に位置する。

江戸中期の田辺希文著「封内風土記」に「藤原基衡本州を守護する時、刈田郡白石城主刈田太郎清光が謀反、佐藤左衛門尉治信、嫡子小太郎をして之を伐たしむ。治信父子、兵を柴田郡川内邑に整へ、天満宮神前に幣を奉じ之を祈り、日ならず白石城陥る。基衡之を賞し國分荘を與ふ。小太郎に基字を授け荘司基春を称す」とある。「天神社別當記」に「基衡は、信夫荘司佐藤治信の子小太郎に基治と名乗らせた」とあり、「封内風土記」の佐藤基春と「吾妻鏡」に信夫佐藤庄司（又号湯庄司）とある佐藤基治は同一人物で、刈田清光を伐った時に信夫荘司に加えて国分荘司を兼ねるようになったのだろう。

佐藤基治は、息子の継信・忠信兄弟を、頼朝の挙兵に平泉から馳せ参じる義経に随従させたが、兄継信が源平合戦の屋島の戦いで義経の矢楯となって討死、弟忠信が平家討伐後に頼朝と対立して追われる義経に同行して都落ちの途上で襲撃されて自害している。

古代学協会前理事長角田文衛氏が著書「王朝の残映」に「義経にもう一人の妻がいた。文治元年（一一八五年）に源頼政の孫有綱の妻となった女性の母である。義経が承安四年（一一七四年）に平泉に下向した時、秀衡やその岳父基成は、義経が快く平泉に定着するよう結婚を勧めたのであろう。私の憶測に過ぎないが、義経が平泉で迎えた妻は、佐藤継信・忠信兄弟の姉妹だったのではないか。兄弟の義経に対する熾烈な忠節は、弓矢とる身の臣節と言うだけでは理解しにくい」と書いている。

二人の息子を義経に捧げた佐藤基治は、秀衡が死に際に頼朝に追われ平泉に逃れてきた義経を主君と為して三人一味（義経・泰衡・国衡）となり頼朝を襲う軍謀を巡らせと命じた遺言の立会人だったろうから、源有綱の妻が義経の子だとすると、平泉へ下向した十六才の義経に基治の娘を最初の妻に娶らせていたかもしれない。

その佐藤基治を、頼朝の奥州合戦に参陣して討ち取った常陸入道念西が、その功で伊達郡を所領に賜った伊達朝宗で、政宗がその十七代とは、不思議な因縁である。

かかる平泉政権を支える佐藤基治の妻が奉持していた清衡の護持仏十一面観音を台原に祀ったというのである。

縁起考には更に「台ノ原の北方八乙女に白水阿弥陀堂ありて古瓦を出土す。同名の白水阿弥陀堂は石城郡内郷にも在りて、石城の地頭岩城則道の夫人徳尼の建つる処、今国宝に指定さる。徳尼は藤原基衡の女にして白水の名は故郷平泉の泉の字を二分して白水と号せりとい、伝う。されば八乙女の白水阿弥陀堂も平泉と関係ありしが如く、基治夫人などの建立にあらざるなきかを思わしむ。

これと同名の本社白水稲荷は、倉稲魂神を祭神とし、白水阿弥陀堂の鎮守たる地主神として祀れるものなる可く古は大社なりしと思わる。本社が平泉と関係ありと思料さるゝは、社地の背後に東鏡に記されし国府中山物見ケ岳の在る事之なり」そして「平泉時代藤原氏の一族たりし佐藤基治の祀る処に係るが如し」と結んでいた。

佐藤基治夫人乙和子姫と岩城則道夫人徳尼は、清衡の孫で従姉妹になる。夫岩城則道の菩提を弔うため従姉の徳尼が石城郡に建立した白水阿弥陀堂に倣って、従妹の乙和子姫も国分荘の八乙女に白水阿弥陀堂を建立し討死した夫基治の菩提を弔っていたとしたら、八乙女の白水阿弥陀堂の鎮守たる地主神として祀られる台原の白水稲荷は、奥州藤原氏と深く繋がっていたことになる。

改めて仙台市泉区の地図を広げてみると、地下鉄南北線の北の終点泉中央駅から北東一キロの国道四号線沿いに、白水沢という地名があり、一つ手前の八乙女駅から北に二キロの近さである。台原の北方の八乙女にあったという白水阿弥陀堂は、この辺りなのかもしれない。

八乙女地区の北側を流れる七北田川の左岸一帯に市名坂という地名があった。なんと奥州合戦で佐藤基治が伊達朝宗に討ち取られた石那坂と酷似した地名ではないか。

台ノ原の北方八乙女に基治夫人が夫の菩提を弔い白水阿弥陀堂が建立されたという史実を、八乙女、白水沢、市名坂の地名が、我々に教えているようである。

三原良吉氏が縁起考の中で紹介されていた藤原相之助氏について調べてみると、興味深い著作があった。

昭和八年発行の著書「郷土研究としての小萩ものがたり」で、仙台に伝わる小萩物語を考証されていた。

冒頭に「北六番丁の東端で、北六番丁川と梅田川（藤川）との合流点から西へ一丁ほど六番丁川の岸から南へ二三間の畑の中に、樹齢何百年かと思われる老杉が一本立て居ります。この杉につき「仙臺鹿ノ子」（元禄八年記述）に、吹上はこの邊なり、畑は和泉三郎忠衡が乳母小萩といひし女の尼となって居れる庵の跡なりといへり、死後白狼澤に葬る、塚の上にも杉数多あり。小萩ケ塚は御宮町西、満日堂の脇より杉山へ出る道二筋あり、梅田川の上の方を渡る道なり、麓に入りて白狼澤といふ、其の上石の方なり」とあり、なんと私が訪ね歩いてきた台原の白水稲荷神社周辺ではないか（次頁地図）。

更に「吹上の老杉が植えられていた北六番丁の観音堂に納められていた小萩観音について「封内風土記」に、本尊十一面観音、行基作、天神の本地仏たり、伝にいふ、和泉三郎忠衡が女の護持仏にして、其侍女、小萩尼となり、堂を国分玉手崎に建て（今の福澤明神の社地）之を安置す、故に世人之を呼び小萩観音とす」とあった。

和泉忠衡とは、奥州藤原氏三代秀衡の三男、佐藤基治の娘を妻に迎え、頼朝に追われる義経を擁護して兄泰衡に誅殺されると、忠衡の遺女が十一面観音を護持して乳母の小萩に侍かれて逃亡、国分の福澤に移り住み、遺女の死後、小萩は尼となり十一面観音を護ったという。

別の説に、基治の寡婦（乙和子姫）が国分玉手崎の古安養寺に十一面観音を護持していたが、歿したので孫たる忠衡の遺女が国分にやって来たともいわれる。

十一面観音が本地仏となった玉手崎天神とは、封内風土記に「基春瑞夢を感じ、社（戦勝祈願した川内天満宮）を国分荘小田原邑の玉手崎に遷す」とあり、国分荘司となった基治が玉手崎に勧請した天満宮のことであろう。

小萩観音はその後、寺社の興亡に所在を転々として、明治維新後の神仏分離騒ぎの中で、市中の骨董品店にあったものを仙岳院の住職が買い取ったという。

そして仙台地方に伝承される「小萩物語」について「小萩というお姫さまが零落して蜂屋長者に奉公したが強欲で人使いの荒い長者夫婦に虐待酷使された。姫は月明かりの晩に外で歌を詠み、仏様を拝んでいたが、耐えかねて屋敷を出て福澤という所で野宿し『雨もふれ風の吹くのも苦にならぬ、今宵一夜は露なしの里』と歌うとそこに露が下りなくなった。長者の方は田畑から何も獲れなくなり、小萩は唯人ではなかったと行方を探すが、露なしの里に観音さまが残っているだけだった」とあり、小萩姫が信心する観音様の加護で救われる歌物語で、下図の右下隅に、その福澤明神と露なしの里がある。

もう一つの小萩塚に伝わる「白水小萩物語」について「平治の乱で父の泉の守が討死、二女萩姫は乳母の在所に隠れ住んでいたが、再度の国の乱れに清水観音を持って巡礼となり諸国を巡拝、勿来で山賊に捕らわれる。山賊の頭に自由になれと責められるが聞き入れず、憎き女よと、懲らしめに小舟に乗せ石城の荒海に流される。萩姫は護持する観音菩薩の加護により名取郡の閖上の浜に流れ着き、難義の旅を重ねて小松二本ある野に寝て今宵一夜は露なしの里と念じると霜は下りず、白老山の白水の井に辿り着き、小萩と改め観音様を安置して信心し二三才で大往生を遂げた。葬った塚の上の萩の花は白く咲き小萩の白衣の姿のようだった」とあり、左図中央の東照宮門前の仙岳院の左に、小萩塚と白水稲荷がある。

「小萩ものがたり」折り込み地図の一部（藤原相之助著）



三原良吉氏の「白水稲荷神社縁起考」と藤原相之助氏の「小萩もののがたり」が、仙岳院に安置されている小萩観音を通じて、国分の地に伝わる様々な史実と民話と信仰が、千年の時の流れの中で融合して形を変えて伝承されてきていることを、我々に教えている。

奥州合戦で討死した佐藤基治の菩提を弔う阿弥陀信仰と藤原忠衡の遺児と侍女の観音信仰を源泉とした仏教的信仰が、基治が玉手崎に勧請した天神信仰や豊富な湧水を恵む泉ケ岳への山岳信仰、霊水信仰、雨乞い信仰、五穀豊穣を祈る稲荷信仰など土着信仰と融合して、仏ではなく神として崇められ白水稲荷明神となり、地域の鎮守の神として尊崇を受け、やがてこの地を支配する国分氏が屋敷神として千代城に祀っていったのであろう。

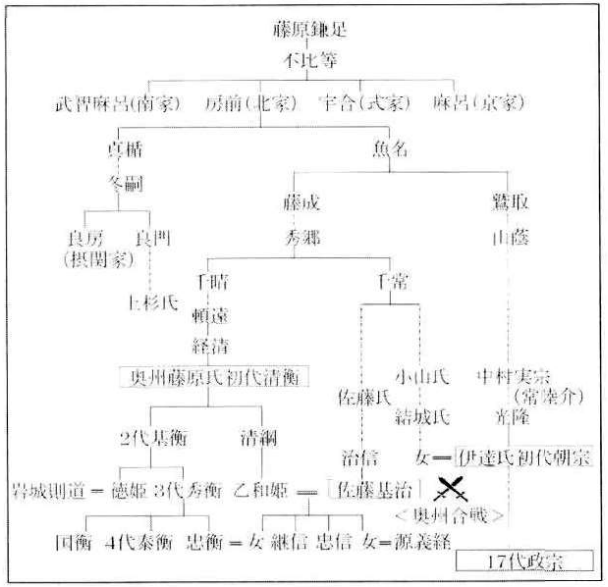
その国分氏を滅ぼして千代城跡に仙台城を築いた政宗は、千代城跡に祀られていた白水稲荷神社を杉山台ノ原に奉還したが、仙台城の守護神として城内にも祀り、国分の地の平安と滅亡した奥州藤原氏と国分氏の鎮魂と伊達氏の安寧を祈念していたに違いない。

天守台に想定された別宮浦安宮裏の高台こそ、白水稲荷を護持する国分氏の館跡だったのではないだろうか。

奥州藤原氏と佐藤一族と伊達氏は、同じ藤原北家の流れである（下図）。藤原鎌足の子不比等の次男房前の北家が藤原四兄弟で最も繁栄し、藤原氏の全盛を謳歌した。房前の五男魚名の子鷲取が山蔭の祖となり伊達朝宗に、魚名の五男藤成が秀郷の祖となり秀衡と基治に繋がっている。政宗は、四百年の時空を超えて、崇敬する同じ藤原北家の秀衡と基治に繋がる神仏が祀られてきた国分の地を、新しい府中の地に選んだのかもしれない。

政宗の天守閣を訪ねる旅が、白水稲荷神社のルーツを辿る旅となり、政宗の始祖が関わった奥州平泉の歴史へ誘ってくれた、神社部長の伴氏に心から感謝したい。

奥州藤原氏と佐藤一族と伊達氏の相関家系図



明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その一）

山本勉

渋江の英語教育法

はじめに

渋江は一八六〇年（万延元年）海保漁村の漢学塾に入り、漁村・竹邨から漢学を学び始め弘前に転籍後も漢学を志していたが、英学で身を立てるために一八七一年（明治四年）上京し尺振八の共立学舎に入り大学南校や東京師範学校等でも英学を学んだ。渋江が英学を学び始めた頃は英語教育の黎明期であった。日本の英語教育は、明治三年に制定された大学南校規則第七条の規定である「諸生徒を正則・変則の二類に分ち、正則生は外国人教師に従い韻学「発音」会話より始め、変則生は訓読解意を主とし、「日本人」教官の教授を受くべき事」から始まったと言える。ここで言う「正則」とは所謂お雇い外国人英語教師について全て外国語で授業を行う学習方法で、「変則」とは、日本人英語教師から文法や読解を中心に英書を読み解く訓読中心の学習方法である。

渋江は一八七二年（明治五年）、十五歳で兄の山田脩と万巻楼よりカッケンボスの『米国史』を翻訳出版し、その後生涯において二〇〇冊あまりの著作を出版している。著述家としてだけではなく、英語教育者としても静岡県や愛知県の中学校や英学校、私塾等において当地の生徒や地域住民に英語教育を施し多くの人材を輩出した。しかし渋江の英語教育者としての授業ノートや英語教育について述べた書簡は現時点では見つかっていない。

小論においては、明治期の正則教育、変則教育を踏まえ、渋江の英語読本『ロングマンス第二読本註釈』や日本の五十年前の英語教科書・現行英語教科書の比較差異をとおして渋江の英語教育法について検証する。

一　明治期の英語読本、昭和中期及び現行の英語教科書に見る英語教育の変遷

（1）明治期の英語読本、昭和中期及び現行の英語教科書について

①英語読本『ロングマンス第二読本註釈』（英学全書全四冊）一八九八年（明治三十一年）について

渋江執筆の英語読本は一八九八年（明治三十一年）に『ロングマンス読本註釈』（英学全書全四冊）のうち三冊と『ナショナルリーダー註釈一、二、三、四』、一九〇〇年（明治三十三年）には『ロングマンス読本註釈』（英学全書全四冊）のうち一冊が出版されているが、このうち国立国会図書館デジタルコレクションで確認できている『ロングマンス読本註釈』（英学全書全四冊）の『ロングマンス第二読本註釈』を取り上げてみたい。また、『ロングマンス読本註釈』以外の英語読本を取り上げ渋江の執筆スタイルを検証したい。

資料1は『ロングマンス第二読本註釈』の第一課、一頁の複写である。[1] 本文に先立ち、新出単語が掲載されている。単語には発音をカナカナ表記、その意味を単語の下部に記載している。本文を見ると、英文解釈のため番号が付されていることが見て取れる。英語学習者は番号の順に訳を読んでいくと英文の意味が理解できる仕組みになっている。同じ単語に二つの番号が付されているものがある。例として「how」を取り上げてみたい。



『ロングマンス第二読本註釈』（第一課　一頁）資料1

「how」の上部に「ハウ」と発音がカタカナで表記されていることがわかる。「how」の下部には、左側に（17）、右側に（20）の番号が付されている。（17）には「如何に」、（18）には「カヲ」と単語の意味が書かれている。つまり、センテンスの意味を理解するには「how」については番号の順に従って単語に付記されている日本語の訳を二回読んでいくことになる。こうした方法は漢文の再読文字を彷彿させるものであり、英文解釈には当時この種の手法が取られていたことがわかる。つまり、漢文を訓読するかの如く日本語の訳ができあがっている欧文訓読である。日本語の訳としては不自然であるが、原文を崩さず直訳されている。英語読本を勉強する助けとなったのが辞書である。『英和字彙　附音挿図』は明治時代の英和辞典の基本形となった辞書のひとつであり、単語の訳も書かれ絵も挿入されていて明治前期に広く普及したと言われている。しかしこうした辞書を当時購入できた学生がどれだけいたのか、英語読本が編纂された背景には、同時希少価値だった英和辞典を購入できない学生の経済状況が背景にあると考える。

②中学英語一年 NEW HORIZON　一九六六年（昭和四十一年）[2]

「This is a pen」、「This is a book」の構文に代表されるように、生活と乖離した英語を教えおり私たちの世代がこの時期に当たる。学生が身近に使用する文具を英文に押し込んで英文法を理解させる文字主体の英語教育が施されていた。

③中学英語一年 NEW HORIZON　二〇二〇年（令和二年）[3]

「Here you are. Thank you. You're welcome」の会話文に代表されるように、日常の生活で使われる挨拶を自然体で取り入れて英語が直ぐに使えるようなコミュニケーション中心の会話文となっている。

（2）英語教育の変遷

明治初期、新政府は近代化を図るために全国各地に官立の外国語学校を設立し、お雇い外国人教師を招聘、英語は勿論、歴史や地理、算術等の学問を全て英語で教えていた。太田雄三の『英語と日本人』には、札幌農学校の英語教育の様子が詳細に述べられている。同書七十二頁に「外国人も驚く語学力」として、札幌農学校の初代教頭として、一八七六年（明治九年）に来日したウイリアム・S・クラークが妻やウイリアム・B・チャーチル

に宛てた手紙を紹介し日本の学生の語学力の高さに非常に驚嘆していることを紹介している。同書七十一頁には、「日本人の英語力のピークは、まだ辞書なども完備していない明治のごくはじめの頃にきたようだ。これは一見不思議なようだが、西洋文明に対する熱狂のあまり、自国の伝統の価値を極端に軽んじる風潮のあった明治初年においては、自国語や自国語を通しての文化を犠牲にしてまで、欧語を重視した教育が未来のエリートに対して行われたからである。」[4]とあり、明治初期には正則教育が施されていたことがわかる。しかし、明治中後期頃からナショナリズムの台頭、外国語学校の減少やお雇い外国人教師の削減等により変則教育主流の英語教育が行われるようになっていった。こうして当時、変則教育重視への英語教育の転換図られたが、実は、戦後における訳読中心・文法中心の英語教育批判の萌芽は既にこの時期にあったと考えられる。

（3）英語教科書に見る英語教育の変遷

英語教科書から英語教育の変遷を概観すると、昭和中期五十年前の英語教育は明治期の変則教育の流れを汲んでいることがわかる。渋江の翻訳ではないが、「ナショナルリーダー第壱読本」一八八九年（明治二十二年）は、五十年前の英語の教科書に類似し、既に明治中期には今日の訳読中心の変則教育の原型ができあがっていた。正則教育から変則教育へと明治中期に大きく転換を図った英語教育は、その目的ともなった受験も相まって昭和中期頃まで続いてきた。昭和後期から平成時代にかけて文法訳読の変則教育が見直され、英会話教室ブームの到来とともに学校教育においてもコミュニケーション重視の正則教育に転換が図られ今日に至っている。しかし、明治以来長きにわたって積み上げられた文法中心・読解中心の訳読式英語教育は、明治期において日本の近代化を推進し、欧米の先進技術や政治・経済・文化をいち早く導入するために必要不可欠であった。今日のコミュニケーション重視の英語教育の重要性は理解できても、文献・資料の理解や世界の先進技術を導入するうえで、文法訳読式を軽視した今日の英語教育も様々な問題が内在してはいないだろうか。

比較対象	ロングマンス 第二読本註釈 1898年（明治31年）	昭和中期（50年前） 英語教育	現行の英語教育
発音表記	カタカナ表記	・カタカナ表記なし ・発音記号が教科書に掲載されており発音記号を教えたが、時間数は少ない	・カタカナ表記なし ・発音記号が教科書に掲載されているが、発音記号を教えることはほとんどない ＡＬＴによる日本語を差し挟まない短時間のオールイングリッシュの授業を展開することもある ・ＡＬＴと日本人教師による授業の割合は５：５またはそれ以上にＡＬＴが関わっている ・電子黒板やデジタル教科書、タブレットを導入して発音の質を上げている
単語	単語に対応した意味の記載がある	・単語に対応した意味の記載がない ・辞書を引き意味を調べてノートにまとめる作業をして単語を増やす	・教科書本文下に単語のみ記載（意味は巻末で確認） ・巻末に教科書本文掲載の単語と意味の掲載一覧があるため辞書を使用した授業を行っていない
会話	読解中心の長文で、英会話に即した内容ではない	・日常生活にない場面設定	・一年次は日常生活にふさわしい挨拶など身近な話題、学年が上がるにつれて歴史や環境、国際、多文化共生等の内容が会話に盛り込まれている
英文解釈	英文解釈のため番号が本文に記載されている。学習者は、番号の順に訳を読んでいくと英文の意味がわかるような仕組みになっている	英文法の授業で構文を覚え、意味を理解した上で長文を訳し読解力を高める	二・三年次になると読解文も増えてくるが、歴史や環境、国際、多文化共生等をテーマとして取り上げている
本文 登場人物	欧米人	欧米人	カナダ・ケニア・南アフリカ・インド・韓国・アメリカ等グローバル化
授業内容の構成	読解中心	読解中心	・文法（20～25%） ・読解（20～25%） ・会話（50～60%） 会話重視　50～60%
辞書	紙媒体の辞書 ※当時書籍は高価であり誰もが購入できなかった	紙媒体の辞書	中学生の段階では紙媒体の辞書や電子辞書を購入していない
指導方法	・日本人教師が指導する ・文法訳読方式 ・変則教育	・日本人教師が指導する ・文法訳読方式 ・変則教育	・日本人教師と英語を母語とするＡＬＴによるチームティーチング ・コミュニケーション重視の正則教育

英語教科書の比較（別表１）

二　渋江が学んだ英語

渋江の英語の経歴については、『抽斎没後』二頁に渋江自身が以下のように述べている。

「○英文。明治四年三月十一日共立学舎の尺振八に入学し六月より又大学南校へも通学し且つフルベッキに就て学ぶ又高等師範学校五年九月入学八年一月卒業在学中は米人スコット、及びブラウンに学び明治十二年十一月慶應義塾に入学同十三年十二月卒業第一位○又キーリング。ラムバラード等諸氏に学ぶ」[5]

渋江は一八七一年（明治四年）四月、母を弘前に残して単身東京に赴き、その年の五月には、尺振八の共立学舎で英語を学び始めている。尺振八（一八三九～一八八六）は江戸末期から明治初期にかけての英語教育者で一八七〇年（明治三年）に共立学舎を両国に創設し英語教育を行っている。尺振八の門下生には渋江とも関係の深い島田三郎がいた。尺振八は一八七二年（明治五年）、須藤時一郎と『傍訓 英語韵礎』を出版しているので、渋江も当然この辞書を使っていたと思われる。この辞書は英語初学者用に編纂された辞書で、アルファベットの説明に始まり、単語の発音について詳細な説明がなされている。単語にはカタカナでその読みが付されている。また、日常用語として最低限必要と思われる単語については、数は少ないが単語に読みをカタカナで付した上に、その意味も訳として掲載している。この辞書は四〇頁あまりと頁数は少ないが、当時英語を学び始めた学生にとっては画期的な辞書だったと思われる。渋江が最初に英語に触れたのが尺振八の共立学舎であり、こうした辞書を使っていたことを考えると、渋江の脳裏には欧文訓読の英語教育法が十代前半のこの時期にしっかりと根付いていたと思われる。

大学南校（現東京大学）では正則教育と変則教育の両者の教授法を行っていたが、一八七一年（明治四年）に変則教育を廃止し、渋江も「フルベッキに就て学ぶ」とも述べていることから、大学南校で学んだ当時は正則教育であったろうと思われる。その後、訳読中心の変則教育を行っていた慶應義塾で渋江は学んでいる。太田雄三も『英語と日本人』一九四頁において「変則英語の全盛をもたらすのにあずかって力があったのは、第一に福沢諭吉の慶應義塾であっただろう。福沢自身の英語が変則的なものだったことは間違いない。」[6]と述べているように、変則教育が行われていた慶應義塾で学んだ渋江の英語も変則英語であったといえる。紀平健一は『福沢諭吉の英語教育論　課題意識を中心に』、「7福沢における「正則」と「変則」」の中で福沢諭吉の「慶応義塾教則変更に関する告示」を取り上げているが、福沢諭吉の学問観は正則・変則を問わず西洋の知識を摂取することの重要性を説いている。こうした意味合いから、多くの英学研究者は慶應義塾の英語教育を変則教育と称しているのだと考える。

三　森鴎外『渋江抽斎』に見る渋江の英語教育法

（1）渋江の英語力

森鴎外の『渋江抽斎』その九十七に渋江の英語教育に関わる重要な事項がある。渋江が師範学校で英語を学び始めたのは、弘前から東京に出てきて一年半あまりたった一八七二年（明治五年）九月であり、「東京人、中国人などは材能がなくても重んぜられ、九州人、東北人などは材能があっても軽んぜられる。」[7]と発音について引け目を感じるとともに、本国弘前時代に『西洋事情』等の書籍の影響を受け、夷狄の学問である英学で将来身を立てようとした並々ならぬ決意が上京へと渋江の気持ちを動かしたのであろう。その結果、「保は英語を操い英文を読むことを志している」、「数学を除く外、一切の科目を温習せずに、ただ英文のみを読んでいる」と訳読中心の英語学習に没頭し、退学処分を自ら望み、「再び頂天立地の自由の身となって、随意に英学を研究しよう。」[8]と考えていたと思われる。こうした渋江の英学への取り組みは、その後の渋江の英語教育の方向性を示すものとして重要である。

（2）渋江保の母親、五百に教えた英語教材

森鴎外の『渋江抽斎』その一〇六に「五百は漢訳和訳の洋説を読んで慊ぬので、とうとう保にスペルリングを教えてもらい、ほどなくウィルソンの読本に移り、一年ばかり立つうちに、パアレエの『万国史』、カッケンボスの『米国史』、ホオセット夫人の『経済論』等をぽつぽつ読むようになった。」[9]とある。

五百が保から英語を初歩から段階的に学んでいる様子がこの文面から見て取れる。五百は、「とうとう保にスペルリングを教えてもらい」とあるが、ノア・ウェブスター（一七五八～一八四三）の著した『スペリング・ブック』を使って五百にスペルの綴り方は発音を教えていた可能性が高い。つまり英語入門の段階である。次に、ウィルソンの『ウィルソンリーダー』を学んでいる。『ウィルソンリーダー』は、著者のウィルソンが少年時代に体験したことにもとづいて題材を取っている。一八七三年（明治六年）に初めて出版された国語の教科書『小学読本』においてもほぼ直訳で『ウィルソンリーダー』の内容が掲載されている。英語を習い始めた母親に平易な読み物を勧めたと思われる。国立国会図書館デジタルコレクションにおいても掲載されていないので全体像の把握はできないが、ネットに掲載された『ウィルソンリーダー』の一部を見る限り、本文と英単語が掲載されているが、日本語の訳や欧文訓読式の番号は英文に付されていない。渋江が次に進めたのはバーレーの『万国史』である。佐藤孝已の『S. G. グッドリッチ『パーレーの万

国史』』十五頁に「この本は英文が読み易く、しかも内容が面白いので中等程度の英語の副読本として、ほとんど明治前期を通じて学校や家庭で読まれたのである。」[10]とあるように、英語を学ぶ初学者にはうってつけの教材だったと思われる。こうして英語訳読の基礎基本を学んだ後で、渋江は一八七二年（明治五年）、一五歳で兄の山田脩と万巻楼より翻訳出版したカッケンボスの『米国史』やホオセット夫人の『経済論』を五百に進めている。『渋江抽斎』に記載されている「ホオセット夫人の『経済論』」は、「フォーセット夫人『経済学物語』」ではないかと思われる。「フォーセット夫人『経済学物語』」は、株式会社極東書店のホームページによれば、一八七四年（明治七年）にロンドンにおいて出版されており、物語形式による幼年者向きの経済読本として書かれたものであり邦訳も出ている。一連の英語教材を概観すると、訳読式の変則英語教育を渋江は母親、五百に施していたことがわかる。

四　渋江が関わった英語学校・私塾での英語教育法

（1）瞬養学校

師範学校を卒業した渋江保が赴任した学校が浜松県の瞬養学校である。静岡県袋井市にある袋井市立袋井東小学校には『袋井東小学校文書』という資料が大切に保管されている。『袋井東小学校文書』の中には『明治拾四年及拾五年官達綴込従壱月刮目舎』という資料がある。同資料に綴られている『浜松懸学務課報告第弐拾三号明治九年四月廿八日発行　明治八年学事諸申報本月文部省エ上申セルヿ左ノシ』の「一教員養成の概略」に「教員養成の為め八年三月創て一校を浜松駅に開き瞬養学校と称す」[11]とあるので、瞬養学校の設立は一八七五年（明治八年）三月である。資料名にある「刮目舎」とは、袋井東小学校の旧校名である。また、「訓導ハ師範校卒業生五名漢学専門二名英学専門一名数学専門一名書学専門一名合十名を置」[12]と記載があるので、このうち英学の専門は教頭として赴任した渋江であると思われる。この瞬養学校は、一八七六年（明治九年）八月に浜松県が静岡県と合併するに伴い、十月に静岡師範学校浜松支校と改称、一八七七年（明治十年）、浜松変則中学校、一八七八年（明治十一年）には、更に浜松中学校と改称している。渋江は浜松に五年余り過ごしているが、この間の渋江が残した足跡として忘れてはならないものとして、一八七六年（明治九年）一月に出版された『小学授業必携』がある。渋江が勤務していた瞬養学校（師範学校）の生徒の指導書として執筆したものである。実際に渋江が瞬養学校に勤務したことが明治七年に出版された『文部省（明治七年）第二年報』に見られる。同書百十三頁から百十七頁の「濱松縣学事年報の教員養成の法」に「子弟十四歳以上の者を変則生徒とし和学文学歴史理学

地理書算術等を授く小学教員陶成の科を設く尚且近日派出の師範卒業生渋江保を訓導に任し是を元程として専小学教授方一定普及の挙を振起せんとす」[13]とある。『文部省（明治七年）第二年報』において「子弟十四歳以上の者を変則生徒とし」とあることや瞬養学校が浜松変則中学として改称されていることを鑑みると、瞬養学校も渋江の教育方針に合致した変則教育を行っていた学校であったと思われる。

（2）宝飯中学校

渋江が校長兼英語教師として赴任した宝飯中学校の「宝飯中学校規則」（明治十四年八月）には「第壱条　学業ヲ二ツニ分チ正変則トシ又此ノ二則ヲ各予科本科ノ二ツニ区別シ予科終リテ後本科ニ入ラシム第二条　正則ハ和漢・英・数ノ三学ヲ授ケ変則ハ和漢・訳・数ノ三学を授ク」[14]とあり、宝飯中学校においては正則教育と変則教育が共に行われていたことがわかる。『三河最初の中学校』には「（一）明治十五年末まで、つまり、渋江保在職中は英学を中心とした図書購入が多額にのぼっている。」[15]との記載もある。拙書論文『豊橋市美術博物館所蔵資料　加藤幸三郎宛渋江書簡』においても触れたが、宝飯中学校設立の中心的な人物であり、宝飯中学校初代校長代理として重要な役割を担った加藤幸三郎宛の一八八二年（明治十五年三月二十六日）の書簡には、金曜日の夜に英語の講義会（訳読会）を開きたい旨の内容が綴られている。この中で、「リバティー（自由之理）」を講義会（訳読会）のテキストとして使用することが書かれている。原書はイギリスの功利主義者、J．S．ミルの『On Liberty』である。宝飯中学校においては正則英語教育と変則英語教育の両者を行っているが、加藤幸三郎宛の書簡から、渋江は訳読式の変則英語教育を通して三河地域の若者に民権思想を伝えようとしたことがわかる。

（3）慶應義塾・攻玉社

渋江は一八七二年（明治十五年）十二月に三河から東京に戻り、慶應義塾と攻玉社の教師になっているが、両校での英語教育についての資料は現時点では見つかっていない。渋江は東京横浜毎日新聞編輯員となった一八八四年（明治十七年）八月に攻玉社の教師を辞めている。

（4）静岡の英語学校と渋江塾、英学研究所

一八八五年（明治一八年）十二月～一八九〇年（明治二十三年）三月の期間、現静岡県浜松市天竜区春野町と静岡市に在住し、五つの英学校で英語教育者として多くの若き人材を育てた。英学校における教育内容について、拙書論文『静岡黎明期の英語教育と渋江保』において詳しく触れたが、渋江が各学校において正則教育、変則教

育、どちらの英語教育法で英語教育を行っていたのかはっきりしたことは現時点ではわかっていない。

当時の教え子に静岡県掛川市出身で、中国人留学生教育の父と呼ばれ、魯迅や周恩来、郭沫若、秋瑾等中国人留学生に日本語を教えた松本亀次郎（一八六六～一九四五）がいる。平野日出雄の『松本亀治郎伝』に亀治郎の履歴が次のように記述されている。「一　明治二十一年四月四日、静岡高等小学校訓導ニ任セラル。一　二十一年五月ヨリ公務ノ余暇静岡県尋常師範学校教諭菅沼岩蔵及静岡安西南裏町渋江塾主渋江保等ニ就キ英学ヲ修メ、二十二年十二月迄スイントン万國史、クライブ及ヘスチング傳、ホーセット小経済書、スペンサー教育学、ベイン心理学等ヲ講習ス。」[16] 但し、少し記載に気になる点がある。実際に松本亀治郎の履歴書を見ると平野の記載とは若干相違がある。松本亀治郎の履歴書には以下のようにある。「同年（明治二十一年）五月以来公務ノ余暇静岡県尋常師範学校教諭菅沼岩蔵及ビ静岡安西南裏町私立渋江塾主渋江保氏に就キ英書研究スイントン氏著萬國史マコーレー氏著ヘスチングス傳等ノ講義ヲ受ケ現にヘスチングス傳受講中」[17] とある。どちらにしても、松本亀治郎が「英書研究」と明記しているように、渋江から履歴書記載の書籍を訳読式で教授を受けていたことが推察される。

渋江は英学校や私塾十校において英語教育を施してきたが、このうち静岡時代の静岡市内における四校の英学校と私塾について注目すべき点がある。渋江は当初、静岡市における最初の正則英語学校と称された静岡英語専門学校で英語教育を行っていたが、その後、東海暁鐘新聞（社主前嶋豊太郎）の主筆となり、静岡高等英華学校、文武館で英語を教授し、一八八八年（明治二十一年）八月からは兄、渋江脩と渋江塾を設けて英語を教えることになった。正則教育を中心とした静岡英語専門学校の正則英語教育になじめず、他の学校においても英語を教え、ついには兄、渋江脩と英語塾を開校するに至ったのであろう。こうした英学校の遍歴から、私塾を設けて自分の理想とした変則英語教育を実現しようとしたと思われる。

No.	校　名	在職期間
1	瞬養学校	1875 年（明治 8 年）２月～ 1879 年（明治 12 年）
2	慶應義塾	1883 年（明治 16 年）1 月～ 1884 年（明治 17 年）8 月頃
3	攻玉社	1883 年（明治 16 年）1 月～ 1884 年（明治 17 年）8 月
4	宝飯中学校	1881 年（明治 14 年）9 月 1882 年（明治 15 年）12 月
5	金曜日の夜の訳読会	1882 年（明治 15 年）3 月～不明
6	英学研究所	1885 年（明治 18 年）12 月～ 1886 年（明治 19 年）3 月
7	静岡英語専門学校	1886 年（明治 19 年）～ 1890 年（明治 23 年）3 月
8	静岡文武館	1887 年（明治 20 年）9 月～ 1890 年（明治 23 年）3 月
9	静岡高等英華学校	1887 年（明治 20 年）7 月～ 1890 年（明治 23 年）３月
10	渋江塾	1888 年（明治 21 年）8 月～ 1890 年（明治 23 年）3 月

英語等を指導した学校一覧表（別表２）

No.	校　名	在学時期	指導を受けた教師
1	共立学舎	1871 年（明治 4 年）5 月～ 1872 年（明治 5 年）2 月	尺振八
2	フルベック	1871 年（明治 4 年）6 月～不明	大学南校在籍中にフルベックに学ぶ
3	東京師範学校	1872 年（明治 5 年）9 月～ 1875 年（明治 8 年）1 月	アメリカ人、スコット、ブラウン
4	慶應義塾	1879 年（明治 12 年）11 月～ 1880 年（明治 13 年）12 月	キーリング・ラムバード

英語を学んだ学校一覧表（別表３）

五　おわりに

小論においては、明治期の正則教育、変則教育を踏まえ、渋江の英語学習歴や英語学校・私塾での英語教育、英語の教科書の変遷をとおして、渋江の英語教育法について検証を重ねた。その結果、西洋の先進的な学問を英学をとおして学生に教えることを目指していた渋江の英語教育は、訳読式の変則英語教育法であることが明らかになった。山岡洋一が『翻訳についての断章』でも触れているように、渋江がこうした英語教育を目指した背景には、当時、欧米人の往来が殆どなかった時代に、西洋の政治経済や文化、科学技術等を必要に迫られて大量の洋書を翻訳する中で吸収し、日本の近代化を急ぐという大命題があった。山岡によれば、特に医学・工業技術・農業技術・法律の分野の翻訳が特に多かったと述べている。明治初期に大翻訳時代を迎える中で、渋江も会話中心の正則教育ではなく、先進的な西洋の知識や技術をいち早く取り入れるため訳読式の変則教育を英語教育法に至極当然のごとく取り入れた。渋江が目指した英語教育は昭和中期頃までその傾向が続き、「受験英語」と批判が高まる中で昭和後期から平成時代にかけて、コミュニケーション重視の正則教育へと転換が図られたことが英語教科書の変遷過程から明らかとなった。しかし、今日転換が図られた英語教育は英語を学び始める中学校段階において辞書を使わない正則英語教育が行われている。渋江も取り組んだ変則英語教育法は日本における伝統的な英語教育でもあり、今日の英語教育において訳読中心の変則英語教育をすべて否定してしまうことは、今後の日本の科学技術をはじめとする学術分野での知識の低下を招くことが懸念される。

注記

（一）渋江保註釈『ロングマンス第二読本註釈（英学全書全四冊）』（博文館　明治三十一年九月三十日）一頁

（二）YouTube 動画『５０年以上前（昭和）の中学英語の教科書から令和時代のものまでを徹底比較』ネット検索日二〇二一年二月二十二日

（三）YouTube 動画『５０年以上前（昭和）の中学英語の教科書から令和時代のものまでを徹底比較』ネット検索日二〇二一年二月二十二日

（四）太田雄三『英語と日本人』（講談社　一九九五年九月十日）七二頁

（五）東京大学の鴎外文庫書入本画像データベース『仲裁歿後』二頁（頁が付記されていないため便宜的に付した）

（六）太田雄三『英語と日本人』（講談社　一九九五年九月十日）一九四頁

（七）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七〇・二七一頁

（八）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二七一・二七二頁

（九）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二九六頁

（十）佐藤　孝己『S. G. グッドリッチと「パーレーの万国史」』（日本英学史学会英学史研究　一九七〇年九月）一五頁

（十一）『明治拾四年及拾五年官達綴込従壱月刮目舎』（袋井東小学校文書　一八七六年四月二十八日）

（十二）『明治拾四年及拾五年官達綴込従壱月刮目舎』（袋井東小学校文書　一八七六年四月二十八日）

（十三）『文部省（明治七年）第二年報』百十三～百十七頁　ネット検索日二〇二一年三月一日

（十四）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年）九十四頁

（十五）山田東作・武田三夫『三河最初の中学校』（ちぎり文庫　一九八一年）一四七頁

（十六）平野日出雄『松本亀治郎伝』（静岡教育出版社　一九八二年四月二十日）一三四頁

（十七）松本亀治郎『松本亀治郎履歴書』（掛川市立大東図書館松本亀治郎記念館）

（一）柴田昌吉・子安峻編『英和字彙　附音挿図』（日就社　一八七三年一月）

（二）山田重正『ナショナルリーダー第壱読本』（山田重正　一八八九年三月二十二日）

（三）尺振八・須藤時一郎『傍訓英語韵礎』（共立学舎　一八七二年）

（四）紀平健一『福沢諭吉の英語教育論　課題意識を中心に』（日本英語教育史研究　一九八七年）

（五）唐澤るり子『モノが語る明治教育維新　第４回―『小学読本』と『ウイルソン・リーダー』』ネット検索日二〇二一年三月一日

（六）株式会社極東書店ホームページ『フォーセット夫人『経済学物語』』ネット検索日二〇二一年三月一日

（七）渋江保『加藤幸三郎宛書簡』（一八八二年三月二十六日）

（八）山岡洋一『翻訳についての断章　一五年に数千点明治初期の大翻訳時代』（翻訳通信　二〇〇四年三月）

ビタミンA・B・C・D・E……Z

匠　克仁

AからZまで使ってビタミンの話をする。最初ビタミンBが発見され、次にAが発見された。三番目のビタミンCの発見前に脂溶性をAと水溶性をBとした。その後はD・E…と発見順につけるルールにした。このルールはEまでである。次に、ビタミンとして発見された物質にFとして名付けられたが、現在はB1である。ビタミンGが発見されたが後にビタミンB2となった。ビタミンHも発見されたが後にビタミンB7となった。ビタミンIはビタミンHと同じものとされB7である。ビタミンJは現在のカテコール・コリン等が該当する。ビタミンKは（血液）凝固のドイツ語の頭文字である。ビタミンLも対象外になりアントラニル酸などである。ビタミンMも発見されたが後にビタミンB9となった。ビタミンNも対象外で現在はα・リポ酸となっている。ビタミンOも対象外で現在はL・カルニチンにあたる。ビタミンPはB3（ナイアシン）フラボノイドである。ビタミンQも対象外で今のコエンザイムQ10である。ビタミンRはリタリン（ADHDの薬）の隠語である。ビタミンSも対象外になり植物ホルモンのサリチル酸。ビタミンTも対象外になりテゴチンという物質である。ビタミンUも対象外となり、現在の胃薬のキャベジン。ビタミンVはバイアグラ（ED治療薬）の隠語である。ビタミンWが発見されたが後にビタミンB7となった。ビタミンXはビタミン候補の物質に対する仮称である。ビタミンYも発見されたが後にビタミンB6となった。ビタミンZというビタミンは存在したことが無いようである。

Zを除いてAからYまではビタミンの名が付けられたがF～JとL～Yが消えた。ここで補足すると、ビタミンPはPermeabilityの頭文字である。ビタミンQはQuinoneの頭文字から付けられた。ビタミンQのQは今もコエンザイムQ10として残る。ビタミンRは一度B10になりB9混合物と判明した。ビタミンUは潰瘍の英語のUlcerの頭文字である。ビタミンVはニコチンアミドアデニンジヌクレオチド（通称NAD）で、ビタミンB3が代謝された後の物質である。

Vitaminは現在、アルファベットにあるのがA・B・C・D・E・Kの6種類のみである。そのなかではBが8種類あるので、全部で13種類とする。ビタミンBはB1・B2・ナイアシン（B3）・パントテン酸（B5）・B6　・　ビオチン（B7）・葉酸（B9）・B12である。13種類とされているが、ビタミンAはA1・A2があってもBの様に2種類と数えない。またDはD2・D3・D4・D5・D6・D7と6個あるがD1は無い。ビタミンKではK1・K2・K3・K4・K5・K6・K7の7個がある。数字のないビタミンはCとEだけである。Cは1種類だが、Eは天然でE1・E2・E3・E4…と表記されないが、8個ある。

B群の内の4種類の1、2、6、12だけ数字を使ってB群の残り4種類は化学名で通常は呼ばれている。

B9はカタカナ名でなく漢字の名前が付けられた。

B9はFolic　Acidであるが、ラテン語からのFolicが葉を意味するので葉酸と名付けた。実際にB9は、ほうれん草の葉から発見されたからである。

B9はコエンザイムF（補酵素F・CoF）である。

B5のパントテンは『どこでもある』という意味なのでB5は『どこでもある酸』と訳すことができる。

B5はコエンザイムA（補酵素A・CoA）である。

B7つまりビオチンは元々はビタミンHで、ドイツ語のHaut（皮膚）の頭文字を付けられた。コエンザイムR（補酵素R・CoR）である。BでHでRのビオチンBiotinのBioは、『生命の』という意味なのでVitalと同じである。生命がダブっている。

Biotinはバイオチンと発音するのが正しい。

Vitaminをアメリカでヴァイタミンと発音するがVitaminはイギリスでヴィタミンと発音する。

B7は随分と立派な名前を貰ったものである。ビタミンB12は補酵素でもB12（コエンザイムB12・CoB12）とそのままB12が使われている。

Bはかつて1から17までとBc・Bh・Bp・Bt・Bxがあった。1・2・3・5・6・7・9・12だけBとして残ったのである。他の全ては一度は、ビタミンBとされたのに、後になってから否定されたのである。

Bを整理する。（数字を使うもの＝○、化学名＝△、今Bでないもの＝×）

B1　○（チアミン）、ビタミンF
B2　○（リボフラビン）ビタミンG
B3　△　ナイアシン（ニコチン酸）、ビタミンPp
B4　×　アルギニン、シスチン
B5　△　パントテン酸
B6　○（ピリドキシン）
B7　△　ビオチン、ビタミンH、ビタミンI
B8　×　エルガデニル酸（アデニル酸）
B9　△　葉酸、ビタミンBc、ビタミンM
B10　×　葉酸と他のB化合物との混合物、ビタミンR
B11　×　葉酸類似化合物、ビタミンS
B12　○（コバラミン）
B13　×　オロト酸（オロチン酸）
B14　×　α-リポ酸、チオクト酸、ビタミンN
B15　×　パンガム酸（パンガミン酸）
B16　×　キャベジン、ビタミンU
（B16化学名はメチルメチオニンスルホニウム塩酸）
B17　×　アミグダリン
Bc　×　葉酸、ビタミンB9、ビタミンM
Bh　×　イノシトール
Bp　×　コリン
Bt　×　L-カルニチン、ビタミンO
Bx　×　パラアミノ安息香酸（葉酸の部分構造）

Bを時系列に並べると、次のようになる。
F　↓　B1
G　↓　B2
H　↓　B7　↓　ビオチン
I　↓　H　↓　B7　↓　ビオチン
M　↓　Bc　↓　B9　↓　葉酸
N　↓　B14　↓　α-リポ酸
O　↓　Bt　↓　L-カルニチン
Pp　↓　B3　↓　ナイアシン
R　↓　B10　↓　葉酸と他のB化合物との混合物
S　↓　B11　↓　葉酸類似化合物
U　↓　B16　↓　キャベジン
V　↓　NAD（B3の代謝物）
W　↓　B7　↓　ビオチン
Y　↓　B6

B群をアスペルガーのぼくは次のように覚える。
B1はチアミンのチがイチとして1と覚える。
B2はリボフラミンのフがフーとして2に見える。
B3はナイアシンのシンがサンとして3と覚える。
B5はパントテン酸のパンが半分でテンが10である。
B6はピリドキシンのシンがシックスで6である。
B7はビオチンのチからシチつまり7である。
B9は葉酸の葉が2と酸が3と見えて3の2乗で9。
B12はコバルミンのバが2であり、元素コバルトか

らB12が名付けられたので、コバルトのトが10。
B1のチが1でB7のチが7に見えるのは都合がよいがBが8に見えたりするから大変である。ぼくにとってはB8がビタミンでなくなって良かった。B8とBBと8Bと88の区別がしにくいからである、このように8とBを誤認識するのも発達障害の一種であり、識字障害（DRD・ディスレクシア）である。なんせB8も8BもBBも88も同じように見えたり、サプリの成分表示のB2のリボフラミンの表示がリボ2ラミンという様にDRDが発生して読めてしまうのである。先述の覚え方でB2をリボ2ラミンに見えると書いたのは事実であってB2のリボフラミンのフの形が2の形に脳で変形する。
Vitaminは最初に名付けた時スペルが違っておりVitamineでスペルの最後にeがあった。これはVital（生命の）+Amine（アミン）である。
Amine（アミン＝窒素官能化合物の一）つまり窒素Nが含まれている、と考えられた。官能化合物だなんてHな名前である。その後になりビタミンは必ずしも窒素Nを含むものではないと分かった。窒素化合物、つまりAmineであると限らないことでeを取ることにしてVitaminとスペルを変更したのである。
Vitaminは続々と発見され、後に条件を満たずにVitaminでないというのが繰り返された。これはVitaminの定義の問題であるからである。定義はVitaminを体内で生成されない物とする。例えばVitaminCは人間以外は体内で生成されるためにVitaminと人間以外にとってはいえない。しかしVitaminCは二五〇〇万年前までに生きた人類もVitaminと言えず、体内で生成できたのである。
VitaminCはグロノラクトンオキシダーゼというVitaminCを合成する酵素を人類が失ったことでVitaminの一つに該当することになった。
Vitaminを発見したのは、日本人の鈴木梅太郎でVitaminB1でなく、オリザニンと名付けた。
Vitaminと英文字で書いているのが鬱陶しいのでVitaminでなくビタミンとする。ぼくはビタミンB3を単体で日常に服用している。さらにNMNというB3の代謝物のサプリを服用している。それだけでなくB3を含むB群全体のサプリも服用している。これだけB3を飲む理由は、自覚症状として、ぼくにはビタミンB3を代謝する能力が低いと考えたためである。ぼくはSSRI（セロトニンを増やす薬）を飲んでいる。普通L-トリプトファン（肉や玉子）を食べてセロトニンをB3等で人は体内で合成することができる物質である。
B3もL-トリプトファンから合成される。合成されるB3はビタミンの定義に外れるが微量すぎるのである。
NRI（ノルアドレナリンを増やす薬）も飲んでいる。
L-フェニルアラニン（これも肉や玉子に多い）を食

べＬ‐チロシンをＢ３等により体内で合成できる。さらにＬ‐チロシンからノルアドレナリンを合成できるのだがＢ３等がこの際にも必要になってくる。

ＧＡＢＡ（γ‐アミノ酪酸）もぼくは少ない方と思うがＬ‐グルタミンからＢ３等で合成される物質である。

Ｂ３を飲んで自前で合成できれば、薬は不要である。

Ｂ３は大人の発達障害に効果があると言う。６０年前にＢ３医療の権威のカウフマン博士が行っている。日本でＢ３をを治療に使う精神科医も多い。しかし発達障害はＢ３を保健で処方できない。Ｂ３製剤としてはストミンＡがあるが耳鳴りの治療でしか処方されない。サプリでＢ３単体のものは日本ではほとんど売ってない。そこでＢ３単体のサプリを海外から個人輸入することにした。

Ｂ３のサプリをネットで注文して、早速、飲んでみた。

Ｂ３の日本人の五十代男性の推奨量は１４ｍｇである。

Ｂ３のサプリは一カプセルで１００ｍｇである。１００Ｍｇでない。なお、小文字のｍは千分の一だが大文字のＭ（メガ）は百万倍である。つまり次の通りである。

１Ｍｇ＝１，０００，０００ｇ、１ｇ＝１，０００ｍｇ。

１Ｍｇ＝１，０００，０００，０００ｍｇである。

Ｂ３サプリをぼくはほんの少し０．０００００００１Ｍｇとしか服用しなかったのである。

〈Ｍ（メガ）ビタミン療法というものがある。メガ療法はＭ＝百万ｇ単位で摂取するのでない。大量という意味でＭ（メガ）を使っている。メガ療法は良いと思うのだがＭｇも服用する気は無い。〉

Ｂ３を飲んですぐに全身の皮膚から血がにじみ出した。

Ｂ３を飲む前日にぼくは全身を洗った。アカスリの様にＢ３を飲む前は全身の皮膚を激しく擦っていた。皮膚にＮＧだとは思いながら、すり傷ができる位が快感なのでＭ（マゾ）の気があるのかもしれない。その様な状況でＢ３を飲んだら、そのすり傷から血が滲みだした。またＢの文字を左９０度回転させた形のかさぶたもできた。

Ｂ３の威力おそるべしとぼくは思った。それだけでなくＢ３で頬のにきびが破裂して出血したのである。それもＢ３を飲んで歯磨きしながら鏡を見ている間で、まるでＢ級ホラー映画を鏡から見ているような感覚である。

ＢＡＮＤ‐ＡＩＤを探して、出血痕に貼った。

Ｂ３を飲んだ後、鏡のにきび内に血の渦巻が発生した。

ＡＢＣ順に箇条書きでこの時のことを説明する。

Ａ　２ｍｍ位のにきび内に透明な液が吹き出した。

Ｂ　２ｃｍ位までに、にきびが水泡に膨らんだ。

Ｃ　水泡の中で血が数本の毛の様に噴き出した。

Ｄ　鏡の血は左巻きに回転してすぐ拡散した。

Ｅ　実像では血は右巻きで中心から広がっていた。

Ｆ　その時、ぼくはなぜか台風の渦巻を連想した。

Ｇ　北半球の台風は左巻きである。（南半球は右巻き）

Ｈ　台風は吸い込むが、血は噴き出して渦を作る。

Ｉ　左巻きの凝縮と右巻きの拡散は同形になる。

Ｊ　吸い込む現象と噴き出す現象は裏（表）である。

Ｋ　鏡は左右を逆に写し出す。（現代科学で証明不能）

Ｌ　裏で逆だから、対偶になっている。

Ｍ　対偶なので、血の渦と台風の渦が同じ現象である。

Ｎ　人体にも地球の自転のコリオリ力が働いた。

Ｏ　ここまで考えて、自分でもアホやなあと思った。

Ｐ　考える間に水泡が破裂し顔面から血が噴き出した。

Ｑ　ぼくはあわててＢＡＮＤ‐ＡＩＤを探した。

ＡＳ（アスペルガー）なので思考が滅茶苦茶に飛ぶ。

Ａから普通の人なら、直接、Ｑの行動を取るだろう。

Ｂ３の副作用をメタ認知的に観察していたのである。

Ｋ番目の文で対偶という言葉を使ったので補足する。

Ａならば Ｂ、という『命題』があるとする。

Ｂならば Ａ、を論理学で『逆』とする。

Ａでないならば Ｂでない、を論理学で『裏』とする。

Ｂでないならば Ａでない、を論理学で『対偶』とする。

Ａならば Ｂという命題と対偶とは真偽が一致する。

Ａならば Ｂが真である。それならば次が成立する。

Ｂでないならば Ａでないが真である。

Ｎ番目の文でコリオリ力と書いたが読者に質問である。

Ｑ　コリオリ力とは何でしょうか。

Ａ　回転座標系上で移動する時に受ける慣性力

Ｅｘ　排水するとき渦巻が左巻きになる（北半球のみ）

Ｅｘ補足　地球の自転によりコリオリ力が働いたため。

Ｑ　人体に地球の自転のコリオリ力が働くか。

Ａ　ぼくの人体実験では働いたが、誰か教えて下さい。

Ｂ３で全身に滲み出た血は、白い肌着に・・●●○○Ｂ３と痕を付けた。黒ごまをまぶしたように汚れた。

Ｂ３のフラッシュという副作用であるが、激烈だった。

Ｂ３フラッシュは全身の毛細血管を拡張する。それでもＢ３たった１個でここまでひどいとは思わなかった。

Ｂ３でゆでだこか赤鬼の様になって、３時間続いた。

ＡＨ（アルコール不耐症）が酒を飲んだ以上である。

Ｂ３のフラッシュの作用機序を説明する。

Ｂ３を服用すると吸収され、細胞内に入る。

ＰＬＡ２（ホスホリパーゼ２）が活性化する。

ＡＡ（アラキドン酸）が細胞膜から細胞内に遊出する。

ＣＯＸ（シクロオキシゲターゼ）酵素が働く。

ＰＧＤ２（プロストグランジンＤ２）が発生する。

ＰＧＥ２（プロストグランジンＥ２）も発生する。

ＰＧＤ２とＰＧＥ２は炎症物質で血管を拡張する。

Ｂ３は１００個（カプセル）入りなので、残り９９個のＢ３を捨てるのは勿体ない。勿体ないお化けがでるのでＢ３を翌日にも２個目を飲んでみた。さすがに２回目のＢ３フラッシュでゆでだこになったが出血しなかった。

Ｂ３を無理して飲まない方が良いと言われそうなのだがＢ３の副作用に反比例して調子も良くなった。体が鉛

（Ｐｂ）のようだと比喩があるが、それが解消された。
　Ｂ３の代謝の仕方がぼくは普通の人とは違っているのがＢ３フラッシュが逆に証明してくれたと思った。ぼくはＢ３に影響する遺伝子が異常なのかもしれない。Ｂ３はＡＳＴとＡＬＴ（肝機能の数値）に注意が必要である。
　Ｂ３フラッシュをやわらげるには、りんごが良い。
　Ｂ３を説明する前に体験談を書いてしまった。
　Ｂ３について種類等を解説していきたい。
　Ｂ３は狭義のナイアシン（Ｎａ）とナイアシンアミド（Ｎａｍ）と2種類をあわせ広義でもナイアシンという。
　Ｎａは植物性で、Ｎａｍは動物性で、活性型である。
　Ｎａは、きのこ、海苔、ぬか漬け…等に多い。
　Ｎａｍは、レバー、たらこ、青魚…等に多い。
　ＮａはＮｉｃｏｔｉｎｉｃａｃｉｄつまりニコチン酸（Ｎｉｃｏｔｉｎｅ酸化物）だが、煙草を連想しない様にＮＩｃｏｔｉｎｉｃ ＡＣｉｄ ｖｉｔａｍＩＮを省略しＮＩＡＣＩＮと名付けた。ＮＩＡＣＩＮの二つ目にあるＩはａｃｉｄのＩでなく、ｖｉｔａｍｉｎの後二つ目のＩである。
　Ｎａは老化を防止する長寿遺伝子であるサーチュイン（ＳＩＲＴ）遺伝子を活性化する。
　Ｎａｍはサーチュイン遺伝子を阻害する。
　ＳＩＲＴ遺伝子と表記したが、厳密には遺伝子は普通にＳＩＲＴでなくイタリックで*ＳＩＲＴ*と書くのが正しくＳＩＲＴと書くと遺伝子でなく作るたんぱく質を指す。
　Ｃｌｏｃｋ ｇｅｎｅは一般名での時計遺伝子であるがＣｌｏｃｋをイタリックにすると特定の遺伝子を指す。
　ＳＩＲＴ（本当はイタリックだが）は人の遺伝子ならばＳＩＲＴを全てを大文字で書く。（マウスの遺伝子ならＳｉｒｔの様に語頭のみ大文字、カエルは全て小文字）
　ＮａｍをＮＡＭと全て大文字で書いている文章をみるがＮＧであり、Ｎａｍと表記するのが標準的である。さてＮａｍの代謝物のＮＭＮやＮＡＤは全て大文字である。
　Ｎａｍ（ナイアシンアミド）はシワ改善の外用薬としてＭＨＬＷ（厚生労働省）が二〇一七年に承認した。
　Ｎａｍとしてシワ予防の外用薬で承認されたがビタミンＢ３だから内服でもシワ予防になると思う。内服薬でもＭＨＬＷからシワ予防薬として承認されると思う。
　Ｂ３は飲み慣れてくるとフラッシュは軽くなる。ぼくはＢ３を３０個目くらいでかなり軽くなっていた。しかしＢ３を飲み続けていたら、口内炎が増殖した。正常ならＢ３の欠乏で口内炎になるがＢ３の摂取で改善する。
　Ｂ３はぼくに対しては、正反対の副作用が出た。ぼくはＣ１という一番小さい虫歯もなく、歯と歯茎のすき間はＰ１という一番小さいもので歯周病も無い。歯の白さもＡ１という自然では一番白い。以前は歯間ブラシの中でＳＳＳという一番細いものを持っていたが、一ヶ所しかＳＳＳが通過しなかった。先日、定期通院で治療した

らＳＳＳですら入る隙間がなくなった。ぼくの口内環境はＡクラスで口内炎になりにくいのである。過去にもこのＢ３を飲む以前は口内炎がなかった。しかし、ビタミンＢ３を飲み続けるにつれ、口内炎になり増加した。○やＢとか8みたいな、丸い形状が連なった、白いアフタ（Ａｐｈｔｈａ）が発生した。原因はＢ３だけ飲んだためＢ２とＢ６の吸収が相対的に減ったと考えた。口内炎はＢ３だけでなくＢ２とＢ６の不足でもなる。栄養不足はＢ２が最も口内炎に影響すると言われている。その次がＢ６である。Ｂ３はＢ２とＢ６に次ぐ3番目でその次がＢ５の順で口内炎に影響があると思う。実際にチョコラＢＢという口内炎や皮膚の薬があるがこの名前のＢＢはＢ２が主でＢ６が副の成分の意味らしい。他にもＢ３とＢ５とＢ１が含まれている。個人的な考えだが口内炎にＢ１は関係なさそうである。Ｂ１よりむしろビオチン（Ｂ７）が口内炎に効くのに、入っていない。ビオチン（Ｂ７）は『皮膚のビタミン』と呼ばれる。さらに葉酸（Ｂ９）も妊婦の口内炎に効果がある。ついでに触れるとＢ１２も口内炎と関係ないと思う。個人的には口内炎はＢ２→Ｂ６→Ｂ３→Ｂ５→Ｂ７→Ｂ９で効く。チョコラＢＢがなぜＢ７やＢ９でなくＢ１が入ってるかチョコラＢＢを飲まないが、ぼくは神経質に気になる。チョコラＢＢがぼくの脳内を飛び回っているのである。チョコラＢＢだけで文章が続きそうなので、思い切ってチョコラＢＢの話は打ち切る。そうでないとエーザイにチョコラＢＢはなぜＢ７やＢ９でなくＢ１か質問しそうである。「Ｂ１に口内炎や肌荒れの効果は無くても、Ｂ２とＢ６はＢ１と一緒に服用すると吸収が高まるので様々な実験でＢ１を入れると効果が上がった」のような答をチョコラＢＢの担当者は返しそうだが。アスペルガーはビタミンＢだけでこれだけ気にする人がいるのである。さて元のＢ３の話に戻す。ぼくはＢ３を一時中断して、ある社のＢ群全体のサプリを飲むと見事に口内炎は治った。先にＢ群のサプリを飲んでいると書いたのはこのためでこのＢ群のサプリはチョコラＢＢと比べるとＢ２が８割位でＢ６が６割。Ｂ３は同量だが表示内容が違ってチョコラＢＢはニコチン酸アミドで、サプリはナイアシンとしてＢ３の表示がなされている。ぼくはどちらのＢ３も実はＮａｍ（ナイアシンアミド）と推測している。チョコラＢＢのニコチン酸アミドはＮａｍ別名である。サプリのＢ３のナイアシンはＮａとＮａｍを合わせた広義で表しＮａｍだけ入っていると体感する。ぼくは人体実験してＢ３だけで２００ｍｇ超える様Ｂ群のサプリを飲んだがＢ３フラッシュが起きなかった。Ｂ群がＮａｍでなくてＮａであれば、ぼくの体質から真っ赤で血がにじむ筈でＮａは入ってない証拠となる。Ｎａはフラッシュするがフラッシュしないからである。（厳密にいうとＮａｍもｌ％の人がフラッシュする）チョコラＢＢよ

りＢ５とＢ１はサプリが倍である。さらに、サプリの方はＢ７とＢ９とＢ１２も入っている。ＢサプリがチョコラＢＢよりもぼくにとってお得感がある。先ほどチョコラＢＢの話を止めようと書いたが止められない。口内炎をＢで直すまで、生理的食塩水を含むと痛みは消えるのでＢの服用と併行するのが良い。生理的食塩水というのはＮａＣｌが０．９％の水である。作るのは簡単で小型のＰＥＴボトルに小さじ一杯の塩を入れる。濃い、薄いはＮＧだが半分や倍位でも充分に効果がある。真水であるＨ２Ｏで激痛を感じる口内炎でも誤差ありの食塩水でもＯＫに感じるくらいで許容範囲はとても大きい。ただしＮａＣｌだけの化学合成の塩より天然塩を使うのがよりＯＫである。口内炎の痛みが消失する機序は、アフタ（Ａｐｈｔｈａ）の細胞膜の内外の浸透圧が関係していてＮａＣｌ濃度が異なると高濃度の方へ体液が流れていてＮａＣｌ濃度を等しくする刺激が痛みに繋がる。だからＨ２Ｏの真水を飲んだら、口内炎が痛くなるのであるがＮａＣｌ濃度の近い塩水を含んだら痛みは無くなる。

Ｂの効用は口内炎だけでない。他に色々あるが、頭痛とＢは関係が特に深い。ぼくは片頭痛を持ってる。それでＢ群は欠かせない。優先的に説明すると頭痛はＢ群中でＢ２の影響が大きい。次がＢ９である。他にも、頭痛はＢ３とＢ６とＢ１２の不足で起きる。機序を説明するとＢ９とＢ１２が頭痛の原因物質ホモシステインを代謝しＢ９とＢ１２が無害なメチオニンにする。セロトニンもＢに関係する。セロトニンが不足か過剰でも頭痛になりＢ３がＬ・トリプトファンを５・ＨＴＰにして、これをＢ６がセロトニンにする。セロトニンが過剰であってもＢ９とＢ１２がメラトニンにする。最も効果があるのはＢ２でありミトコンドリアの栄養分だからである。このＢ２不足がミトコンドリアの不活発で頭痛にする。このＢ２以外にミトコンドリアのクエン酸回路は、ビタミンＢは使われている。炭水化物をＢ３等でピルビン酸にしＢ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ５等が、この物質をアセチルＣｏＡにし、これがクエン酸回路に入る。（クエン酸回路＝ＴＣＡ回路＝クレブス回路＝トリカルボン酸回路でありＴＣＡはＴ＝３、Ｃ＝カルボキシ基、Ａ＝酸で、つまりＴＣＡの１つのクエン酸から始まる仕組をクエブス氏がＴＣＡ回路として発見しただけで、同じである。そしてＴＣＡサイクルの様に回路をサイクルに変えて使うのでＴＣＡ回路を含む８つは同じもの）さて、アセチルＣｏＡはクエン酸回路に入ると、クエン酸になる。それからＧＳＨ等によりアコニット酸になる。これが鉄によってＤ・イソクエン酸になる、これが脱水素酵素を構成するＢ３等によりα・ケトグルタル酸になる。これがＢ１・Ｂ３・Ｂ５等によりスクシニルＣｏＡになる。これからＢ５等によりコハク酸になる。電子伝達系を除くと、２ＡＴＰがここでのみ発生する。なお電子伝達系では３

０ＡＴＰ（一ブドウ糖当り）が発生する。このコハク酸がＢ２等でフマル酸になる。この後はＢ等は必要とせずにＨ２Ｏつまり水だけでリンゴ酸になる。このリンゴ酸がＢ３等によりオキサロ酢酸になる。外部からのアセチルＣｏＡと結合しクエン酸になって、一周する。アセチルＣｏＡだけでなくα・ケトグルタル酸とスクシニルＣｏＡとフマル酸とオキサロ酢酸も回路の途中から入れる。

Ａｎａｐｌｅｒｏｓｉｓ（補充）反応と言うが、これはＢ１・Ｂ２・Ｂ３・Ｂ５・Ｂ６・Ｂ７・Ｂ９それに加えＢ１２がアミノ酸からの変換に必要になる。そうするとＢ群は全てミトコンドリアのクエン酸回路に関係がありＢが一つ欠けてもミトコンドリアの不全につながり結果Ｂの不足が最終的には頭痛に繋がるのである。ビタミンＢと別にぼくは低気圧がくると頭痛がする。１０１３ｈＰａ（ヘクトパスカル）よりも下がったり２０～３０ｈＰａが１時間位で下がると頭痛がする。だから、常にｈＰａが分るアプリで管理している。一日中、１０１３ｈＰａの上下を把握している。単位はぼくの子供の頃はｈＰａでなくｍｂ（ミリバール）を使った。その前はｍｍＨｇ（ミリ水銀柱）を使っていた。ころころと変わるｈＰａ・ｍｂ（ｍｂａｒ）・ｍｍＨｇの気圧の単位だがｈＰａ＝ｍｂと完全一致するが、ｍｂ＝０．７５……ｍｍＨｇである。ＷＭＯ（世界気象機構）が一九七四年にＳＩ（国際）単位にしたので、日本も一九九二年になりＳＩ単位のｈＰａに変更したのである。

Ｂ群のサプリを飲んでいると、副反応が出る。ビタミンＢ２の色でぼくは尿だけでなく汗まで真っ黄色である。Ｂの話ばかりだが、Ａ以下は簡単に説明する。ビタミンＡ・Ｃ・Ｄ・Ｋは服用しておらず個人的挿話が無い。

ＡはＢの次に発見された。２番目の発見なのにＢでなくＡというのはビタミンの名前を付けられる前に脂溶性をＡと水溶性をＢとするルールがあったためである。

ＡでもＢでもない水溶性のＣが発見されてからビタミンＡとビタミンＢが名付けられたのである。

ＡにもＢの様に数字が付き、Ａ１とＡ２がある。狭義のＡがＡ１のレチノールである。広義のＡはＡ２を含んでＡ２はレチナール・レチノイン酸などである。Ａ１及びＡ２とを合わせてレチノイドと総称する。

Ａ（広義）＝Ａ１〈Ａ（狭義）〉＋Ａ２

ＡはＢと違い、Ａ１とＡ２を別のビタミンとしない。

Ｃはアスコルビン酸である。他と違ってビタミンＣにはＣ１とかＣ２とか数字は付かない。

Ｃは冒頭に書いた様に人間以外は体内で合成されるのでＣはビタミンでない。人間も二五〇〇万年前迄は体内でＣを合成できた。グロノラクトンオキシダーゼの酵素がＣを合成したのだがその酵素を人間は失ってしまった。

Ｃは一般には水溶性である。しかし、脂溶性のビタミンＣも開発されている。吸収や安定面では脂溶性が良い。

DにはD2からD7まであるがD1は無い。その理由はD1はD2を含む混合物と後に分ったためである。

DといえばD2とD3がほとんどである。

D3が一番重要で、次がD2である。

D4以下は健康にほとんど関係ない。

D2が植物性（といってもキノコが主）である。

D3が動物性。つまり人間が日光を浴びて作られるのがD3である。

Dはビタミンというよりホルモンの方が近い。ビタミンDは日光つまり紫外線を浴びると、体内で作れる。

WHOで将来ビタミンDはホルモンDに変わるだろう。

Dが増えるのはUVBのみでUVAでは増えない。UVAはガラスを通過し、UVBは通過しない。つまりUVBをガラス越しに浴びてもビタミンDが合成されない。

Caつまりカルシウムとコレステロールと混ざった名がD3正式名称のコレカルシフェロールである。DはA・E・Kと同じ脂溶性である。脂溶性はDAKEだけ（DAKE）と記憶すると良い。

D不足は鬱病を発生させる。そのため夏よりも冬の方がSAD（季節性衝動障害）といい鬱病が酷くなる。

Eは天然のものは次の8種類がある。

D-α-トコフェロール
D-β-トコフェロール
D-γ-トコフェロール
D-δ-トコフェロール
D-α-トコトリエノール
D-β-トコトリエノール
D-γ-トコトリエノール
D-δ-トコトリエノール

Eは合成のものは次の8種類がある。

DL-α-トコフェロール
DL-β-トコフェロール
DL-γ-トコフェロール
DL-δ-トコフェロール
DL-α-トコトリエノール
DL-β-トコトリエノール
DL-γ-トコトリエノール
DL-δ-トコトリエノール

Fは2回名付けられた。最初は今のB1である。

Fが欠番になったので再び付けられた。2回目に付けたFは、その後に多価不飽和脂肪酸と分った。『ビタミンF』重松清という小説があるがビタミンと関係ない。

Gは現在、ビタミンB2である。ビタミンGのGの名はGrothfactor（成長因子）の頭文字である。

HはB7となりビタミンB群のビオチンである。同じくIもB7となり、同じ様にビオチンとなった。ビタミンJもビタミンを外れ、カテコール、コリン等と分った。

Kの発見でノーベル賞が贈られた。受賞講演で受賞者

がKはドイツ語（オランダ語）で（血液が）凝固することKoagulationの頭文字と言ったのがビタミンKの由来と言われている。実際にはアルファベット順にK以前にF・G・H・I・Jと発見されていて、順番にKとしたらしい。講演での話が現在は定着してビタミンKがF・G・H・I・Jを飛ばした理由となっている。

Kの発見は一九三五年である。

KはK1からK7までの7種類ある。天然のKはK1とK2のみである。K3から7は人工的に合成された。

K1は緑黄色野菜・海藻などに多く含まれる。

K2は微生物を含むものである。納豆はK2である。

K1はPK（フィロキノン）ともいう。

K2はMK（メナキノン）ともいい2種類あり1つはMK-4で、もう1つはMK-7である。

LはL1とL2がある。Lは乳汁を分泌をすることからLactation（乳汁分泌）の頭文字である。

L1がアントラニル酸である。

L2がアデニルチオメチルペントースである。

NはビタミンB14に変更されたが、その後はビタミンBでもないとされた。今ではα-リポ酸となった。αがAのギリシア語にあたるため、α-リポ酸の表記方法をA-リポ酸と表現している例もある。実際に、略語ではALAと表記する。略語を使う場合は、ALAとしαLAとは書かない。今回の文章でも苦し紛れに二文字目

にA-リポ酸と書いているのはαに脳で変換して欲しい。

A-リポ酸は2種類があり、R体とS対である。これをR-リポ酸とS-リポ酸という。α-リポ酸の2つの内R-リポ酸の方が健康に良い。αがあるならβもあってB（β）-リポ酸はα-リポ酸が酸化したものである。

A-リポ酸はチオクト酸ともいう。チオビタドリンクもA-リポ酸の別名チオクトから付けられたらしいが今はA-リポ酸をタウリンに変え入っていない。リポビタンDのリポもα-リポ酸と同じく脂質である。リポビタンDとチオビタはα-リポ酸とビタミンと関係する。

OはビタミンBtになり、ビタミンBからも除外されてL-カルニチンとしてサプリで知られる物質である。

L-カルニチンはLが付くのでアミノ酸である。これはL-リジンとL-メチオニン等から体内合成できる。

L-リジンは必須アミノ酸（体内で合成できない）だしL-メチオニンも同様に必須アミノ酸である。

PはPermeabilityの頭文字である。このPのPermeabilityとは、透過性である。ビタミンPは血管の透過性を減少させる作用があるからである。

Pは今でもビタミンPとして使っている。例えば大手のDHCでもビタミンPとしてサプリ販売している。

（DHCは大学翻訳センターで大学Dと翻訳Hとセンター Cの略である。大学の研究者向けの翻訳業で創業したがDHCはサプリを手がけ、その事業で拡大した。かつ

てＤＨＣの偽造株券が出た時に本物は大学翻訳センターとＤＨＣに補記したが、偽造株券では削除していた）

Ｐはビタミン３とフラボノイドである。

ＰにはＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐｐがある。

Ｐ１＝ルチン（蕎麦に多く含まれる）

Ｐ２＝ヘスペリジン（ＤＨＣのサプリ）

Ｐ４＝トロキセルチン（ルチンの誘導体）

Ｐｐ＝ビタミンＢ３つまりナイアシン

Ｐｅｌｌａｇｒａ（ペラグラ＝Ｂ３欠乏症）の頭文字のＰが小文字のｐである。別の情報ではペラグラを大文字Ｐで、小文字ｐはｐｒｅｖｅｎｉｔｉｖｅ（予防の）とＰｐの説明をしているので調べ切れていない。ビタミンＰｐの一文字目は大文字で、二文字目が小文字であるがＰとｐのどちらがペラグラなのか、気になっている。

ＱはＱｕｉｎｏｎｅの頭文字でビタミンに付けられたがＱはコエンザイムＱ１０との名で残った。コエンザイムＱ１０はコ（補）＋エンザイム（酵素）Ｑ１０である。

ＵＱ（ユビキノン）ともいう。コエンザイムＱの略称はＣｏＱである。還元型はユビキノールであり、略称はＵＱＨ２である。健康にはＵＱＨ２の方がＵＱより良い。

Ｑは化学構造がキノン型で数字は側鎖の数である。

Ｑは０から１３までである。

Ｑ１０＝哺乳類・鳥類・魚類

Ｑ９＝ラット・マウス・小麦

Ｑ８＝細菌類・原虫・スズメバチ

Ｑ７＝酵母

Ｑ６＝大腸菌・パン酵母……と書いてきたが、ビタミンＫもキノン構造である。ビタミンＫと名付けずビタミンＱとしていても、それは論理的なネーミングである。

Ｑ１０はもともとサプリでなく心臓病の薬であった。

Ｑ１０の解説前に、（ビタミンＰの前に）α－リポ酸とＬ－カルニチンに触れた。美容系サプリはα－リポ酸とＬ－カルニチンとコエンザイムＱ１０の３つが有名だがＮとＯとＱとそれぞれ全て過去にビタミンであった。

ＲとかビタミンＲという隠語で言われる薬のリタリンはＡＤＨＤで処方されるものである。ぼくが五十才の時にＡＤＨＤと診断されストラテラを処方されたがビタミンＲつまりリタリンを処方されたかもしれない。ビタミンＲと隠語で言われるのは覚醒剤だからである。現実にもＢＭ（ブラックマーケット）で覚醒剤で流通している。

ＡＤＨＤでリタリンを処方されていたら、覚醒剤中毒でＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）になっただろう。

ＳもビタミンＳを外れ、サリチル酸という植物ホルモンでＳａｌｉｃｙｃの頭文字かどうかは調べきれていない。

Ｓのサリチル酸はイボコロリとして使われている。

ＴもビタミンＴを外れてテゴチンである。このＴの由来がＴｅｇｏｔｉｎの頭文字かどうかは調べてない。これはＴｈｅｒｍｉｔｎ（テルミチン）ともいうらしい。ま

たＴｏｒｕｔｉｌｉｎ（トルチリン）ともいうらしい。

Ｔの頭文字と関係するかは分からない。さて、ビタミンＴは、隠語でメキシコ人の料理を指すとあった。例えばＴａｃｏｓ（タコス）はメキシコの国民食なのであるがＴｏｔｏｐｏｓ（トトポス）も代表的なチップスでありＴｏｒｔｉｌｌａ（トルティーヤ）というパンで作る。

Ｔｅｑｕｉｌａ（テキーラ）という蒸留酒を飲みながらＴａｍａｌｅｓ（タマーレス）という鳥料理を食べつつＴｏｒｔａｓ（トルタス）＝サンドウィッチを食べる。

Ｕは潰瘍の英語でＵｌｃｅｒの頭文字である。ビタミンＵはキャベツから抽出された。胃薬のキャベジンはこのＵを配合して、商品名にした。キャベジンは英語名ではＣａｂｂａｇｅから付けられた。

Ｖはニコチンアミドアデニンジヌクレオチドで、つまりＮＡＤである。ＮＡＤの前駆物質の一つが最近、注目のＮＭＮ（ニコチンアミドモノヌクレオチド）である。

ＮＡＤとＮＭＮの最初のＮはニコチンアミド＝ビタミンＢ３（Ｎａｍ）である。Ｂ３を書いたときＢ３の代謝物ＮＭＮを服用しているとして後述するとした。この物質ＮＭＮは現在のサプリでは最も注目を浴びている。このＮＭＮは若返りサプリとして人気が出てきている。『ＬＩＦＥＳＰＡＮ』という大ベストセラーで、デビッド・Ａ・シンクレア教授が若返りの可能性のあるサプリだ

ＮＭＮを紹介したため、世界中でヒットしている。このＮＭＮ研究の第一人者は日本人の今井眞一郎である。

ＮＭＮが直接の目的でなくＮＡＤが目的なのである。

ＮＡＤをそのまま服用しても分解されて排出される。

ＮＡＤの前駆体ＮＭＮを服用することによって、体内でＮＡＤに合成するのである。

ＮＡＤはＢ３（Ｎａｍ・Ｎａ）からも合成される。

Ｎａｍ　→　ＮＭＮ　→　ＮＡＤ

Ｎａ　→　ＮａＭＮ　→　ＮａＡＤ　→　ＮＡＤ

ＮＲ（ニコチンアミドリボシド）→ＮＭＮ→ＮＡＤ

ＮＡＤはＤＮＡを修復する。シャレでなく真実である。

ＷはＢ７つまりビオチンとあるが、ネット情報である。

Ｘはビタミン候補物質に対する仮称である。というのはＸは殆んどのビタミンにも仮に付けられたことになる。

ＹはＢ６となったとあるが、これもネット情報である。

Ｚはビタミンには使われていないが、『ビタミンＺ』のＲＰＧ（ロールプレイングゲーム）がある。

Ｂ１２が最後のビタミンである（一九四八年に発見）がＰＱＱという物質がビタミンの候補になっている。このＰＱＱとはピロロキノリンキノンの略である。三文字目Ｑはビタミンと同じキノン構造である。

ＰＱＱは理化学研究所で研究が進められていてビタミンＢを最初に日本人が発見したように最新であるビタミンＰＱＱも日本人が発見することをぼくは期待している。

編集後記

まんじ一六〇記念号の発刊をお慶び申し上げます。一六〇号という数字を見ると、同人皆様、維持会員皆様に支えられての「まんじ誌」の生命力に、測り知れない「何ものか」が与えられていると思わざるを得ません。ただただ感謝申し上げます。

この一六〇号の発行を記念して、維持会員でもある画家の田寺先生に素晴らしい表紙絵をお描き頂きました。宇宙と地球の起源の解明に心を馳せる壮大な先生の思いが漲っています。画題は「摂理」で、目次直後の冒頭に田寺先生の解説を掲載しましたのでお読みください。私は、先生のご自宅でこの絵を初めて拝見したときに、絵から伝わってくる深さ・大きさに圧倒されて、暫し言葉がありませんでした。

この一六〇記念号発行に当たり同人皆様の中で、葵州月氏が四万字を超える大作「地霊の怒り―宅建士「花山聖司郎」の事件帖―」を、また、同人松下壽男氏は数年ぶりに「杉森孝次郎のこと」を寄稿され、同人皆様の寄稿と共に記念号に花を添えてくださいました。

コロナで、昨年二月以降の合評会がすべて中止されています。東京・大阪等の「まん延防止等重点措置」を行った後の今日（四月一五日）も、新規感染者は収まるどころか増えていて、「終息」の目途は全く見えません。ワクチン接種が一通り行き渡る八月まで大人しく待つしかないのでしょうか。先ずは自己責任で感染防止を徹底しましょう。

（鍋）

まんじ第160号

令和３年５月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL･FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「摂理」

田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.161

2021.8.1

まんじ第百六十一号　目次

箱根路の変遷……千坂精一…4
『まんじ』四十周年記念に
バックナンバー87冊を電子書籍化しました……新井宏…10
天守台を仰いで(二)……三戸岡道夫…17
漢詩　潮汐録（百二）《漢詩の流れ90》……鯨游海…28
漢詩　汲深録（二十五）……松井秀人…31
短歌　老いの楽しみ……山本一成…33
古い物・遠い夢　我家の朝鮮陶磁色々……忠内正之…36
吾輩は紙魚ロボである　その七……永畑俊三…46
青雲の彼方（十二）……太田精一…73
私の「昭和20年」（6）……山田嘉久…91
―終戦から75年―

荻窪と広島……山本鎭雄…99
―都市は「ふるさと」か―
「国旗と世界のストーリー」始末記Ⅱ……米村典紘…113
宅建士「花山聖司郎」の不動産事件帖
虚栄の罠（前編）……葵州月…117
災害……横山正義…131
皇統守護……浅野博文…134
安芸門徒シルクロード紀行（12）……村上邦治…142
高山右近（十）……鍋屋次郎…167
…信仰に生きた生涯…
私の伊達政宗像を訪ねて（その五－②　最終章）……安藤剛…179
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その二）……山本勉…202
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（一）……匠克仁…208
ミネラルA・B・C・D・E……Z……匠克仁…213
編集後記……編集子…225

箱根路の変遷

千坂精一

歴史物を書くときは当然のことながらすでに証言者はいないから資料だけが唯一の頼りである。

その資料をさがすにはまず都内の図書館からはじめて数箇所をまわり歩き、参考になる資料を念入りに集める。資料は書こうとする主題の土台となるものであるから疎かにはできない。

収集した資料が繋がらないときはその欠落部分をこれが事実であろうと推測する創作で補う。そうしておいて資料をじっくりと読み込んで構想を練ると、つぎには肉付けをするための現地取材にとりかかる。

現地へ出かけたおりには、かならずその地の図書館や行政機関の観光課などを訪ねて参考になる資料がないかたずねてまわる。

書こうとする素材の身辺をまわり歩くことによって、より具体的な資料に出会えることもあるし、漠然としていたところがより鮮明になることもある。

だがこれは、あるかないかまったく判らないものを探し歩くのだからたいへん手間暇がかかる。

しかし、無駄なようだが歩きまわって現地の匂いを嗅ぎ、踏みしめる足裏に伝わってくる感覚をたのしんでいるうちにその土地なり、書こうとしている人物像なりがより具体的に浮かび上がってくることもあるのだ。

こうして取材でがっしり固めれば、八分どおりは出来上がり、あとは原稿用紙に書くだけのことである。

そんなことを繰り返してきているのだが、たまには思い違いをしたこともある。

それは箱根路を書いたときのことである。書いたといってもただ作中の人物が通過したことを述べたたった一行だけのことなのだが、それがいけなかった。

箱根路は京へ上る東海道の難所で、〈天下の険〉とうたわれた小田原から三島にいたる八里（三十二キロ弱）をいう。

箱根路を行く旧東海道は、早川に架かる三枚橋のところで現在の国道一号線と別れて橋を渡り、早雲寺の前をとおって箱根新道と併行して須雲川沿いをすすんでゆく。

鎖雲寺のところで新道と別れて須雲川橋を渡り、川を挟んで併行してすすむ。

畑宿を経て七曲りを登ったさきに『忠臣藏外伝』にある神崎與五郎の故事で知られる甘酒茶屋がある。

ここまで登ってくると足腰が疲れて休憩したい誘惑に駆られる。

甘酒を飲んで疲れが癒えたら、隣接の資料館に立寄って往時を偲ぶのもいい。

旧東海道は畑宿で絡み合ったあと、箱根新道と別れて二子山の下二子（一、〇六四米）と屏風山（九四八米）のあいだを抜けて元箱根で国道一号線と合流し、箱根峠で箱根新道が合流してきて三道が仲良く手を携えて三島宿へ下って行く。

十返舎一九作『東海道中膝栗毛』の彌次郎兵衛と喜多八も、廣重作の『東海道五十三次』も、『忠臣藏銘々傳』にある赤穂浪士神崎與五郎東下りのときの話などに出てくる箱根路はみなこの道なので、私はこれがむかしからつづいている東海道だとばかり思い込んでいた。

ところが、のちに『古事記』や『十六夜日記』を読んでいて「あれ」と思った。

そこに書かれている箱根路は私が思い込んでいる道とはまったくちがうのである。

調べてみたら、古代に開通していた箱根路はそのときどきの利便で道筋の変更を重ねてきて現在にいたっているのであった。

そこで、乗り掛かった船なので中途半端のままではすまされず、徹底的に調査してみることにした。

最古の道は「碓氷道」

『日本書紀』によれば、日本武尊が、

「蝦夷の兇暴な首領も全て罪に伏したが、信濃の国（長野県）と越の国（新潟県）はいまだに天皇の徳に従おうとしない」

そう言って甲斐（山梨県）から北方に転じ武蔵と上野を通って西の方碓日坂に到った。

とあったので、東京、埼玉、群馬を通って西の方の碓日坂に至ったのならその碓日坂は上信国境（群馬、長野県境）にある碓氷峠のことだろうと思っていた。

ところがそれからのちに偶々『古事記』を読まねばならないことがあったので、まず日本武尊の東征の箇所を読んでみておどろいた。

そこには、

「日本武尊は蝦夷を平定し、都への帰途についたとき、その途中足柄の険しい坂の麓に着いて休憩して食事を摂り、そのあと険しい坂を上って頂に立ち、海に沈んだ弟橘媛のことを想い出して三度深い嘆息を洩らして、あずまはや（ああ我が妻は）と嘆いた。それゆえこの国を阿豆麻というのである。そこからこの国を越えて甲斐（山梨県）に出て、酒折（甲府市）に着いた」

とあった。

足柄山は軽井沢にはなく、神奈川県の南西部にあって、南は箱根山に連なっている。

だが、箱根に碓氷峠があるとはきいたことがない。

こうなったら足で確かめるよりほかに方法はない。

地元の町の大きな書店へ行って棚に並んでいる地図のなかから箱根を探し出して求め、帰宅して箱根の東側を拡大鏡を使って念入りに調べたが、碓氷峠はなかった。

所用で外出のおりに出先の書店へ立ち寄って、手元にあるのとは違う箱根の地図を探した。

だが、箱根に限ってはそうなん種類もあるはずはなかった。

万策尽きたとき、ふと書店ではなく箱根の観光協会なら詳しい地図があるかも知れないと気がついて早速電話番号を調べて問い合わせてみたら、すぐになん種類もの観光地図とガイドブックを送ってくれた。

まず『観光箱根』という全体地図を広げて日本書紀には「武蔵と上野を通って西の方碓日坂に到った」とあり、古事記には「蝦夷を平定して都への帰途についたとき、その途中足柄の険しい坂の麓に着いて休憩し」とあるから、関東から京へ向かっていたわけで、入手した箱絵観光地図の東側を徹底的に探ってみた。

すると、あったのである。

明神ケ岳（一、一六九米）の南、宮城野城跡のある山腹に碓氷峠とあり、峠と火打沢とのあいだすなわち碓氷峠の麓に日本武尊の碑があることも記されていた。

碓氷峠は軽井沢だけではなく、ここにもあったのである。

この道は、松田町（神奈川県足柄上郡）あたりから酒匂川を渡って関本（南足柄市）に入り、最乗寺、道了尊を経て明神ケ岳を越え、宮城野から碓氷峠を下り、早川沿いに仙石原を経由してさらに長尾山（一、一四四米）と丸岳（一、一五四米）のあいだの乙女峠（九九九米）を越えて御殿場へ下った山道のようである。

この最古の道は箱根越えの見晴らしのいい道だったのであろう。

だが、この碓氷道は、一、〇〇〇米級の箱根外輪山を二つも越える難路だったため、奈良時代に入るとこの道より遠回りだがなだらかな道として足柄道ができた。

新羅三郎伝説の「足柄道」

奈良時代以後の官道として整備された足柄道は、関本から明神ケ岳を迂回して地蔵堂へ行き、そこから相模（神奈川県）と駿河（静岡県）の国境にある〈あずまの関門〉足柄峠（七五九米）を越えてJR御殿場線足柄駅近くの竹之下へくだり、御殿場を経て三島へ向かうのだ。

碓氷道のときは、新宿から小田急ロマンスカーで終点の箱根湯本駅まで行ってバスに乗り換え宮城野で下車した。

そこから仙石原に通ずる古道箱根裏街道（国道一三八号線）を歩いて碓氷峠と日本武尊碑に到着したのでほとんど歩いていなかったから、こんどの足柄道は松田町あたりから県境の足柄峠まで歩いてみようと思った。

一日がかりになるだろうから一人では退屈なので、鎌倉街道研究家で関東の古道はほとんど歩いていて著書も多い日先輩を恐る恐る誘ってみたら、

「久し振りに歩こうか」

そう二つ返事で快諾してくれた。

当日は早朝に家を出て駅近くのコンビニで握り飯とお茶と菓子を少々購入し、待合わせ場所の新宿駅小田急線急行ホームに行ったらH先輩はすでに待っていてくれていた。

到着した急行箱根湯本行に乗車して新松田駅で下車する。

「ここから歩いたのでは日が暮れちゃうから」

というH氏の提案によりバスで関本（伊豆箱根鉄道大雄山線の終点大雄山）まで行き、そこから県境の足柄峠を越えて竹之下（静岡県駿東郡小山町）まで歩くことにした。

関本から狩川を左に見て雨坪、狩野、関場とすすみ、狩川と別れてこんどは右手の内川沿いにすすんで地蔵堂に着くのであるが、それまでの足柄古道は新道に寸断されていて、『足柄古道入口』と書いてある小さな標識を頼りに拾い歩く煩わしさはあったが、途中さほど難儀な起伏もなく、いくつかの集落を通り越して地蔵堂へ着いた。

地蔵堂からの古道も思っていたより勾配が緩く、いっきに登って足柄峠に着き、おそい昼食を摂った。

この足柄峠にも新羅三郎義光の故事があった。

義光は天喜五年（一〇五七）源頼義の三男に生まれた。

当時は元服した社寺名を名告りにしたようで、長兄義家は石清水八幡宮（京都府八幡市）で元服したから八幡太郎、次兄義綱は賀茂神社（京都市）で元服したから賀茂二郎とよばれた。

三男義光は、産土の神（生まれた土地の守り神）として崇敬する園城寺（大津市にある天台寺門宗の総本山通称三井寺）の鎮守新羅明神の社前で元服したことから新羅三郎とよばれた。

私はこの新羅三郎を取材するにあたり大津へ出向いて

園城寺を訪ねたことがある。

だが、寺門派の比叡山延暦寺とのたびたびの抗争で殿堂の大半を焼き払われてしまっていて、新羅明神を祀った祠はなくなってしまっていた。

その新羅三郎義光の後三年の役（永保三年〈一〇八三〉～寛治元年〈一〇八七〉）のときの話である。

義光は京にいて、兄の陸奥守義家が奥羽の豪族清原氏の内訌に巻き込まれて苦戦しているという噂をきいたので、官職を辞して兄の応援を願い出たが許されず、やむなく官職を捨てて手勢を率い、奥羽へ向かった。

義光は若年の頃から知謀に富み、弓馬の術にも長けていて武名が高かったが、笙をよくして名師豊原時元から大食調の入調曲など秘伝の曲を授かり、時元歿後も精進を怠らなかった。

義光の陸奥国下向を知った豊原時元師の遺児時秋は、義光一行のあとを追い、この足柄峠でようやく追いつくと、十歳のときに父が死歿したため習得できなかった秘伝の曲を義光から伝授して貰おうと思い立って、あとを追ってきたことを切々と訴えた。

おどろいた義光は、わが身が陸奥の地で果てれば豊原家に伝わる秘曲が絶えてしまうことを憂えて、京から遙々箱根まで追ってきた時秋の一途な思いに絆され、その熱意を受け入れると、師時元から伝授された前述の〈大食調の入調曲〉など秘伝の曲を懇切丁寧に伝授して時秋の希望を叶えてやった。

そして義光は、あらためてこの世の名残りに師豊原時元の秘伝の曲を一行にも聴かせたあとで、師から授かった名笛をあらためて時秋に与え、別離を惜しむ時秋を京へ帰した。

この足柄峠の頂上を静岡県側に廻ったところに新羅三郎義光が端座して豊原時元秘伝の曲を遺子時秋に伝授したといわれる笛吹石がある。

みずから官職を捨てて兄義家の救援に出向いたり、豊原時秋の心情を思い遣って秘伝の曲を伝授するなど、慈愛に満ちた義光の人柄を偲びながら坐したと伝えられている石に掌をおくと、幽かな温もりのようなものが感じられた。

この足柄峠は、平安初期の延暦十九年（八〇〇年）三月十四日から四月十八日にかけて富士山の噴火があり、その噴石によって一時不通になったことがあるという。

山越え最短距離の「湯坂道」

この道は中世の鎌倉時代に入ってから開かれ、室町、戦国時代にかけて四〇〇年のあいだ箱根越えの官道として利用された。

相模国と伊豆国とを結ぶ最短距離であったから、鎌倉幕府の軍事上の重要路にもなった。

湯本から外輪山の湯坂山（五四七米）、浅間山（八〇二米）、鷹ノ巣山（八三四米）の尾根伝いに芦之湯へ出て、元箱根から箱根峠（八四一米）を越えて三島へいたる道である。

この道は、阿仏尼が夫爲家の歿後播磨細川荘（兵庫県南西部）の領地相続について、実子爲相のために幕府へ訴えようと弘安二年（一二七九）京から鎌倉へ下ったときの紀行文『十六夜日記』などにも出てくるが、なにぶんにも急坂が多く難儀な道であった。

しかし、鎌倉幕府初代将軍源頼朝は熱心な権現信仰者であったから、この道は軍事上のほかにも箱根神社、伊豆山神社、三島神社の三所詣でを繋ぐ便利な道であったかも知れない。

江戸時代の「箱根道」

元和四年（一六一八）江戸幕府二代将軍徳川秀忠のときにつくられた官道で、これまでの小田原、三島間が遠過ぎるのでこの道をつくって箱根宿を開設した。

冒頭で述べた旧東海道がこれで、安藤廣重の『東海道五十三次』や、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』、そのほか赤穂浪士神崎與五郎の東下りなどでこの箱根道が賑々しく語り継がれている。

古代に開通した箱根道は、以来そのときどきの幾多の便宜が図られて道筋の変更を重ねたすえに現在にいたっているのだ。

なお現在の国道一号線（東海道）は湯本にはじまり、宮の下、小涌谷、芦之湯を経て芦ノ湖畔にいたり、箱根峠を経て三島に至る箱根温泉めぐりの利便をはかった道になってしまい、湯本の山崎から須雲川を挟んでこの箱根道と平行に走り、箱根峠に達する自動車専用の有料道路「箱根新道」も設けられているが、古代からつづいている「箱根路」はいまなお県道として大いに便宜を与えてくれている。

（了）

『まんじ』四十周年記念に
バックナンバー87冊を電子書籍化しました

新井宏

去る五月二十二日に予定されていた『まんじ』百六十号記念の合評会は、予定通りと言うべきでしょうか、コロナ禍のために中止されました。合評会の後には「百六十号記念」の祝賀会もあったでしょうから残念でした。

お気づきの方もおられたでしょうが、実は『まんじ』創刊号が発行されたのは、昭和五十六年三月のことです。ちょうど四十年前で、創立以来の同人三戸岡道夫氏は「天明七年」と題した小稿を載せておられました。

それにしても、季刊(年四回)の発行で百六十号、計算すればピタリ四十年です。立派なものですね。

同人が数多く参加する祝賀会などは無理としても、せめて個人的に何か出来ることはないだろうか。

そこで思い立ったのが、四十周年記念として『まんじ』全バックナンバーを電子書籍化してみたいという個人的な構想です。

幸い手元に『まんじ』七四号から一六〇号まで八十七冊があります。重量で言えば、二十三キログラム、厚さは約一メートルになります。もはや読み返すこともあるまいと思いながら、とにかく私の人生の大切な「記録」として保管してきました。

ご承知のように、十年程まえから、貴重な蔵書を「自炊」と称してコピーして電子書物化するのが流行しています。「自炊」とは、自分の書籍や雑誌をスキャナ等でコピーし電子画像に変換する行為を指す俗語だそうですが、コピーに際して、書物の背を裁断して両面スキャナで自動的に読み取る方式が主流でしたので、私はてっきり「自裁」のことだと思っていましたが異なるようです。今では専用のスキャナも開発され、専門業者が、一冊当たり四百円から五百円で「自炊」してくれるそうです。

試みに手持ち八十七冊を「自炊」してもらうと運送費等を含めて五万円、それにソフト代を加えると十万円というところでしょうか。

ただし、本を切断してしまうのが、感覚的にひっかかりました。またかつて『まんじ』連載物を単行本にまとめた方のお手伝いとして、普通のスキャナでパソコンに取り込んだ経験があります。スキャナによるコピー作業は、サッカーや野球、あるいは駅伝やマラソンなどのテレビを見ながらできるのであまり苦になりませんでした。

そうだ。手数はかかるが、とりあえず十五年分(一〇〇号から一六〇号)について自分の思いとおりの電子書籍を作ってみよう。全作品を載せるのはもちろんのこと、基本的には検索機能をつけて、人名や地名、出来事などで作品を探せるようにし、更には、目次集、編集後記集、同人個人著作集、長編連載の集成、などが簡単に作成できるようにしてみたい。またパソコンやスマホに馴染みのない方のために、家庭用のテレビでも簡単に全作品が読めるようにしてみたい。

四月末から作業をボチボチ始めていましたが、六月六日までに十五年分の入力作業を終えて、原稿提出日までには、手持ちの全バックナンバーの処理が終わる見込みです。「ただ働き」でご苦労なことと思われるかも知れませんが、私がしばしば言うように「ただ遊び」なのです。何かが少しずつ積み重なり出来上がってゆく過程は「快感」です。昔は日常生活に満ちていたこの感覚が今では努力しないと得られません。

さて、前にも簡単に紹介したことがありますが、私達の『まんじ』は、現存同人誌の中で、最大規模の発行号数(現在一六〇号)と最大規模の年間刊行頁数(九〇〇ページ)を記録しています。

もっとも「同人誌」とは「特定の同人が資金を出し合い、自らの作品の発表の場とする逐次刊行物」の意味ですので、『三田文学』や『早稲田文学』など、あるいは大手出版社系の『文学界』、『新潮』、『群像』、『すばる』などは、当然除外しています。『県名+文学』を名乗る「同人誌」も、地方自治体のサポートを受けている場合があり、特定の同人ともいえないので一応精査して除外しています。

更には当初「手弁当」で始めた「同人誌」でも有名に成り「文学賞登竜門」などとして投稿者を募り営業誌化している場合も対象外と考えました。すなわち単純に言えば、『まんじ』のように財政的に同人と維持会員によって支えられている場合のみを「同人誌」として調べてみたということです。

原則として百号以上の「同人誌」をリストアップしましたが、俳句、短歌、詩歌系統の同人誌は百号を超える場合も珍しくないので除きました。その一方で、営業誌

化していると言っても単純に除外するのでなく一応リストには含めました。例えば、一九五八年鹿児島のハンセン病棟の患者とスタッフ二十六名によって創刊され、現在二百号を迎えている『火山地帯』はそのような例になります。

100号以上継続の「同人誌」の総合順位

同人誌名	創刊	最新号	費用負担形態	年刊行回数	最近の頁数	同人誌規模(号×頁)	総合順位
まんじ	1981年	160号	同人負担	4回	250頁	40,000	1位
人間像	1954年	190号	商業誌化	1回	180頁	34,200	2位
海峡派	1977年	151号	同人負担	3回	200頁	30,200	3位
姫路文学	1948年	134号	同人負担	1回	200頁	26,800	4位
火山地帯	1958年	201号	商業誌化	3回	100頁	20,100	5位
竜舌蘭	1938年	200号	商業誌化	2回	100頁	20,000	6位
じゅん文学	1994年	105号	同人負担	4回	180頁	18,900	7位
文宴	1963年	135号	同人負担	2回	120頁	16,200	8位
小説家	1965年	147号	同人負担	3回	110頁	16,170	9位
播火	1989年	107号	同人負担	1回	150頁	16,050	10位
Ten	1992年	124号	同人負担	3回	120頁	14,880	11位
岡山文芸	1958年	124号	同人負担	2回	120頁	14,800	12位
裳砂	1979年	144号	同人負担	3回	100頁	14,400	13位
婦人文芸	1977年	142号	同人負担	2回	100頁	14,200	14位
全作家	1956年	100号	同人負担	1回	140頁	14,000	15位
文芸中部	1976年	119号	同人負担	3回	110頁	13,090	16位
たまゆら	1982年	116号	同人負担	3回	110頁	12,760	17位
新現実		122号	同人負担	4回	100頁	12,200	18位
美濃文学	1948年	146号	同人負担	4回	80頁	11,680	19位
	1968年	100号	同人負担	2回	110頁	11,000	20位

「同人誌」の規模を評価する基準としては「継続号数」が適当ですが、号当たりの「頁数」も無視できません。そこでむりやり「継続号数」と「最近の頁数」を掛け合わせた数値を総合順位の規準としました。

その結果では、商業誌化した「同人誌」を含めても『まんじ』が断トツです。

一般的に「同人誌」は「意気込んで創刊しても三号で終わる」事例が多く、最新号が五〇号以上なら立派なものだと言われています。

しかし「同人誌時評」欄で継続的に「同人誌」の作品を紹介している『図書新聞』も、文芸同人誌の紹介を目的として二二七誌を収録しているサイト『文芸同人誌案内』も、『まんじ』のことを当然記載していません。そんな事情もあって、やや力んでしまいました。

スキャナ作業をしながら、『まんじ』の特徴は何だろうかと想いました。印象に過ぎないのですが、かつては、俳句、短歌、漢詩などの作品が充実していましたが、最近はかなり減少しています。女性の同人も大きく減少しました。それに対して、論評、論文、そして特に長編の「評伝」関係が非常に充実してきています。

ちょっとメモって見ましょう。

三戸岡道夫氏(金原明善、米山梅吉、石川理紀之助)、松下魏三氏(赤堀四郎)、太田精一氏(大草高重、天羽英二)、山田嘉久氏(司馬遼太郎)、鍋屋次郎氏(高山右近)、山本鎮男氏(新明正道)、山本勉氏(渋江保)、村上邦治氏(千家尊福、大谷光瑞)、安藤剛氏(伊達政宗)、そして新井宏(狩谷棭斎)、と続く豪華さです。最近では、その過半が単行本として出版される勢いです。

その他にも、永田俊一氏の「信託の歴史」のように専門家の記述として圧倒的な水準のものや、曽根竣作氏の歌壇史、忠内正之氏の茶道史、鈴木守氏の化粧史などもぜひ史料として残したい著作です。

そんな『まんじ』の変遷を文芸誌から総合誌に脱皮したと表現した方もいます。だからこそ『まんじ』を他の「同人誌」に先駆けて電子書籍化し、検索機能付きで公開したいというのが、私の漠然としたイメージでしたが、やっと形になりました。数えてみますと、四十年間の延べ同人数は八十名(内女性十二名)、掲載が百回を超えた方が三名おられます。

重さ二十三キログラム、厚さ一メートルの八十七冊は電子書籍ではどうなったでしょうか。もちろん核心の「情報」に重さがあるわけではなく、その容れ物(記憶媒体)のことです。

良くご存知の方には目障りでしょうが、ここから少しパソコンのことを紹介します。

「電子情報」はPDFという形式で保存されます。ワードとかエクセルとかと同じレベルのソフトです。私は最初PDFをPrint Default Fileすなわち印刷規定ファイルのことだと思っていました。ワードやエクセルではパソコン側のソフトによって印刷に微妙な差が生じますので、それを防ぐために規格を作ったのだと思っていたのです。しかし実際はPortable Document Formatの略で、アプリやOS、ハードウェアに依存せず文章や図版を表示するために開発され電子文書ファイル形式のことだそうです。意味はそれほど間違っていませんでした。

このPDF形式はアドビ社が開発したものですか、それを普及させるため、PDFを読むソフト(Adobe Acrobat Reader DC)を無料で公開しました。だから誰でもPDFを読めたわけです。ところがPDFが流行するようになると改良ソフトが次々に付加されて開発されます。それに対してアドビ社は無料のソフトでは新機能を含むPDFの一部を読めないようにしたのです。純正部品でないと何かと意地悪されるようなものです。そのため、無料のアドビのソフトでは読めないPDFが存在します。

今回の『まんじ』電子書籍はいずれインターネット上にも公開したいと考えています。インターネットを利用するにはWeb Browser（ウェブ閲覧ソフト）が必要ですが、最も多く利用されているがGoogle Chromeで、次に多いのがMicrosoft Edgeです。これらの閲覧ソフトを利用している限り問題はないのですが、未だInternet Explorerを利用している方もいます。その場合にはPDFのReaderとしてアドビ社のAdobe Acrobat Reader DCを使っていますので、問題を起こす可能性があります。本稿の末尾にその対処法を示しておきますので、お読み下さい。

なお、PDFにはテキスト付きPDFとかOCR付きPDFとか称する検索機能付きのものがあります。単に文章を読むだけなら不要な機能ですが、学術的な論考の場合にはとても有効な機能です。

それからテレビでも見ることができるようにすると言いましたが、今のところテレビ側ではPDFに対応していません。しかし有り難いことに、数千枚の写真をUSBメモリーに入れて鮮明な映像を楽しむことは今ではかなり普及しています。写真の映像をJPEG形式といいますが、今度の電子書籍でも、全頁、JPEG方式でも作成していますので、ご利用下さい。リモコン操作だけで簡単に映写する方法は、ご家族でどなたかご存知です。

さて、長々とPDFやJPEGのことなどを書きましたが、電子書籍をどんな形式にしておくのが良いか、私なりに迷っていましたので、ちょっと書いて見たかったのです。

それでは本題に戻ります。

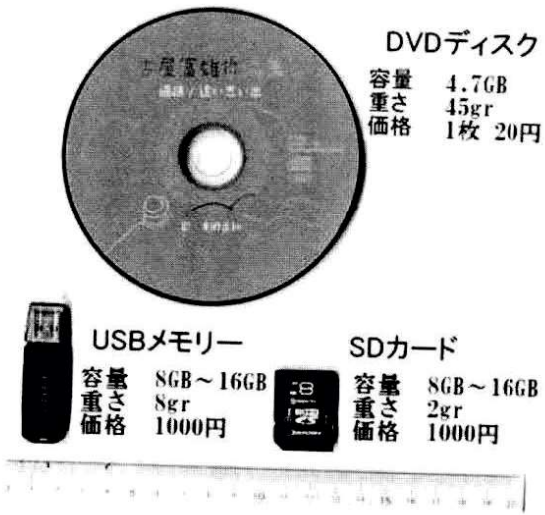
まず電子書籍化した『まんじ』の記憶媒体としては4.7GB容量のDVDディスク、8GB～16GB容量のUSBメモリー、そして同じく8GB～16GB容量のSDカードなどが候補となります。

次の図をご覧ください。一番軽いのがSDカードで二グラムほど、紙に較べると一万分の一です。GBというのはギガバイトと読む情報の量ですが、1GBで『まんじ』十五冊ほどの分量です。本当はUSBメモリーでもSDカードでも8GBあれば十分なのですが、8GB～16GBと書いたのは、現在、8GBと16GBの価格差がほとんど無くなっているからです。共に一個千円ほどです。

それに対してDVDディスクはケースにいれて五〇グラムほどですが、一枚二十円ほどで、4.7GBの容量があり、単に電子書籍を読むだけなら何とか全頁入れることができます。ダビングの業者に依頼して、百枚ほど複製して貰っても五千円程度（一枚五十円程度）で済み非常に安価ですので大量に配布する用途には好適です。

しかし最近のパソコンにはDVD読取り装置が付いていない場合が増えてきて、将来的には消えてしまう危険

性もあります。応急的には二～三千円程度のDVD外部読取り装置を付ければ対応出来ます。



しかし、電子書籍を直接DVDディスクから読むのは一般的ではありません。普通はいったんDVDディスクの内容をパソコン内に取り込んでしまうか、USBメモリーやSDカードにコピーしてから利用します。一回変換すれば済むのでDVD読取り装置の付いたパソコンをお持ちの方に変換を依頼するのが良いでしょう。

このように電子書籍を読むには記憶媒体が必要ですが、実はパソコンやスマホで既にインターネットを利用している方は、私のホームページに併設した「私設まんじホームページ」に直接アクセクして利用することができます。「私設まんじホームページ」にアクセスするにはウェブ検索欄にhttp://arai-hist.jp/と入れると「新井宏(ARAI Hiroshi)のWWWサイト」が立ちあがりますのでそれをクリックして下さい。検索欄に「新井宏 まんじ」とでも入れても同じ結果がでます。

新井宏のホームページが出ましたら、①リンク欄の「まんじ」をクリックすると、②私設の「まんじホームページ」が立ちあがり、③下の方にある「目次」を見て「101～110号」「121～130号」などを選ぶとその内容を見ることが出来ます。その際に、一緒にダウンロードすることも出来ます。

いったんファイルをダウンロードすれば、次からのアクセスは不要になります。ダウンロードの仕方はウェブサイトによって若干の違いがありますが簡単です。『まんじ』一号分をダウンロードするだけなら数秒で済みますが、全部をまとめると数分かかるでしょう。

実はインターネットからパソコンにダウンロードして利用して頂くのが理想的なのですが、同人以外の不特定な方もダウンロードできると、著作権侵害や人権侵害を

起こす危険性もあります。用心のため、当面は同人と維持会員以外のダウンロードを禁止すると注意書きをしておきますが、正式には『まんじ』合評会で審議していただいてから稼働させるつもりです。

さて、それでは電子書籍をどのように利用したらよいでしょうか。もちろん検索したり読んだりする基本機能は当然として、ちょっと思いついた利用法を上げてみましょう。

一、『まんじ』の活字が小さく、印字が薄いので、読むのに苦労されていませんか。そのような時には、最新号発行と同時に、電子書籍化して載せますので、ダウンロードしてパソコンやテレビに大きく写して見て下さい。楽になります。

二、電子書籍は安価なDVDディスクに入れて、気軽に旧友や親族、子々孫々に「記念品」として差し上げるのに適しています。その際には、著者の作品の集成版を付けると良いでしょう。消息を伝えるきっかけとなります。

三、注目すべき評伝、評論、論文などは関係者の目に触れるようにしたいものです。私の印象では実に精緻に調べ上げた作品が多く、このまま散逸させてしまうのはもったいないと思っています。やはりインターネット上に公開するのが良いのだと思います。その際には検索機能付きでないと役に立ちません。

四、最大規模を誇りながら、知名度の低い『まんじ』を一般に紹介するため、『図書新聞』の「同人誌時評」欄や、『文芸同人誌案内』サイトに、電子書籍化したDVDディスクに、本稿等を付けて送ってみたらどうでしょうか。

私の経験ですが、ある方から作品を載せた年刊の「同人誌」を頂いたので、その返礼に季刊四冊の『まんじ』をお送りしたところ、とにかくびっくりされました。

それにしても八月の合評会が開催されるといいですね。

稿末の注

インターネット上でPDFが正しく開けないのはそのReadingソフトにアドビ社のAdobe Acrobat Reader DCが使われているからだと述べました。それを回避するには、101-110号、111-120号などを直接左クリックするのを止めて、右クリックをして、「対象ファイルを保存する」という項目を選んでください。ダウンロードが始まります。そしていったん自分のパソコンにダウンロードしたファイルを再び右クリックして「プログラムから開く」を選ぶと、Google Chromeとか Microsoft Edgeが現れます。それらを使えばPDFが正しく開きます。

天守台を仰いで(二)

三戸岡　道夫

(二)

沼崎武夫は世間のどこにでもいる、平凡な普通の中学生だった。

無口だが、顔にはいつも人のよさそうな微笑を浮かべており、そんなおっとりした表情を、正英は好きだった。

しかし身体は大きくても、動作が活溌ではなかったので、教練の時には時々へまをやることがあった。たとえば金剛寺教官が最も神経を使っている敬礼とか、軍人勅諭の暗誦とか、洋服のボタンが取れたらすぐ付けるなどに、あまり神経を使わなかったので、時々金剛寺教官の不興を買うことがあった。

さらに親が医者で、家庭が裕福であったので、余裕のある小使銭を持っており、それで参考書を買って勉強するよりも、映画を見たり、大福餅を買って食べたりした。だから正英も時々沼崎といっしょに、うぐいす餅や蜜豆を食べた。そんな所を学校側や上級生に見つかったら、ひどい目にあうのだが、二人はいつもうぐいす餅の緑色の柔らかさに、青春のよろこびを感じていた。

しかし沼崎は決して不良性をおびていた訳ではなかった。ただ彼は時局に無頓着だったのである。戦前の学校教育に好ましくないそうした場面を、一、二度、受持の教師から注意されたことがあったが、大して気にしていなかった。

沼崎が突然、山王中学校の職員会議に大きな問題を投げかけたのは、彼が山王女学校の女生徒に手紙を渡したという、恋文事件であった。そうしたことが最も厳禁されるべき問題として押さえつけられている時代だけに、それは予想以上の反響をまき起した。沼崎が不断はおとなしい生徒だけに、人々の驚きは大きかった。

正英は親友として、その女学生のことを、以前沼崎から聞いたことがあった。山王城の天守台の草原に寝ころびながら、

「菅野村からさ、俺の家の前をいつも自転車で通るんだ、彼女」

沼崎は多少はにかんで、そう言った。

「彼女の方は君のこと知っているの？」

「知らない」

「じゃ、仕方がないじゃないか」

「でも、もしかしたら知っているかもしれない。だって、いつもおれが家の窓から見ているから、気がついていると思うんだ。だから、ちょっとは自信があるんだ」

二人はそんなふうに話しあった。

その時正英も、清純なセーラー服の少女が自転車に乗って、白い襟を風にひらひらさせながら、走る姿を思いうかべた。

そしてその時正英は、沼崎に成熟した大人をふと感じた。正英は、自分の兄から恋人のことを話されている、弟のような気持だった。その時から正英は、今までとは違った親近感を沼崎に感じた。それはやがては正英も踏みこむであろう世界へ、二人が手を携えて入っていく、喜びの意識でもあった。

しかし山王中学校の生徒たちは、この事件を興味本位にしか見なかったし、教師たちにも、自堕落な不良学生の、忌わしい行為としか映らなかった。

とくに金剛寺教官にとってはそうだった。それは本人一人の不始末による問題ではなく、山王中学校全体の名誉の問題であり、ひいてはその統率者である金剛寺教官の顔に、泥を塗ったわけであった。金剛寺教官は激怒した。彼は明日の職員会議まで、その処罰を伸ばしておくことが出来なかった。

授業の途中の沼崎を、教室から呼び出した。教室を出ていくその後姿に、クラスの生徒たちは一瞬不吉なものを感じ、一時、授業が中断された。

金剛寺教官は、人にいない職員室の片隅に沼崎を立たせると、いきなりビンタを二つ三つくれた。そして震えている少年に、あらゆる痛罵を浴びせた。沼崎は背たけは金剛寺教官より高くても、頼りなかった。

そこへ四年一組担任の若松教師が入ってきた。若松教師も金剛寺教官の方へは、

「どうもお手数をかけます」

と頭を下げながら、沼崎の方へは険悪な眼をむけて、

「それが女学生へ手紙を書く顔か」

と、沼崎の顔をぴしっと、ひっぱたいた。

それを見ていた金剛寺教官は、

「そう言えば、四年一組はろくな奴は居ませんなあ」

そう言い、その頭の中には、反抗的な顔をした日比野正英の顔も浮かんできた。若松教師は、

「本当に…。どうも私はとんだ組を受持ってしまったもので…」

放課後になると、

（今日、沼崎は教官によって半殺しになるんだ）

という噂が、校内のあちこちに飛んだ。

そこで正英たち親しい四、五人の友人は、心配で、放課後おそくまで教室に残っていた。

全校生徒が帰り、職員室もすっかり空っぽになってしまうと、沼崎は、職員室の並びの一番奥にある、暗い地歴教材準備室に移された。

正英たちは廊下の隅から、その後姿を眺めていた。もう沼崎を残して、帰ることはできなかった。切ない胸騒ぎがした。

（誰かに知らせたい）

しかし、誰に、どうやって知らせればよいのか。

沼崎の姿が廊下の隅に消えてしまうと、やがて若松教師があわただしくスリッパの音をたててその中に入っていくと、ピシャリと手荒く戸を閉めた。

やがて悲鳴が聞こえてくるだろう。正英たちは恐ろしかった。

沼崎武夫が地歴教材準備室に入っていくと、もう金剛寺教官は腰掛けて待っていた。

その部屋は陰気で、細長い部屋だった。右側にはガラス戸棚が並び、その中には古代の土器、埴輪、刀剣、貝殻などが、白っぽく、ほこりを浴びて並んでいた。手垢でよごれた掛地図や、地球儀、粘土細工の地図模型の間を、沼崎は奥へ進んでいった。

それは恐ろしい金剛寺教官のリンチが行われるのに、ふさわしい場所だといってよかった。

若松教師も金剛寺教官と並んで立っていた。

「きさまの心を入れかえてやる」

金剛寺教官はどなった。

「歯を食いしばっていろ」

若松教師は眼を光らせた。そして、

「きさまっ…！」

低くうめくと、二匹の獰猛な狼は、か弱い少年にとびかかった。

なんの防備もなく立っている沼崎の顔は、日茶目茶になぐって、突かれた。金剛寺教官の鉄拳は、沼崎の顔の眞中にめりこんだ。

沼崎は床の上に、ひっくり返った。だが、すぐ起された。そして鉄拳が矢つぎばやに降ってきた。

たちまち鼻血がぱっと鮮血を散らし、それは教官の手まで赤く染めた。その度に、鼻がぐしゃっと音をたてて、横にひしゃげた。沼崎はうめき声をあげながら、唇を歯でかんだ。血が洋服の胸もとに、したたり落ちた。彼の

顔は痛さをすでに通りこし、火のように熱かった。鼻がはれ上った。眼や唇の周囲で紫色になり、顔全体がまっ青にはれ上った。彼は二十まで、パンチを数えた。しかしそれ以上は、もう数えることが出来なかった。

彼はもう立っていることも出来なかった。そこで若松教師が沼崎を支え、金剛寺教官が思いきりスリッパでなぐった。耳がガーンと鳴り、鼓膜が破れ、沼崎はドスンと床に倒れた。

しかし若松教師はそれをたたき起こし、間髪を入れず、金剛寺教官のスリッパはふたたび高鳴った。

（誰がこんなことを想像したであろうか。親は血まみれの私刑を受けるために、息子を中学校に入学させたのであろうか。断じて否、否と言わなければならない）

沈む寸前の眞赤な夕日が、にごった血の色となって、窓に光を投げかけていた。少年の傷から流れ出た血は、その夕日を受けて、不気味に光っている。

沼崎はすでに叫び声をあげる力もなく、うめく力もなく、洋服の胸をはだけ、おびたたしい血の海の中にまっ青にはれた顔を埋めていた。

「思い知ったか、このど阿呆！」

金剛寺教官はその横腹を足で蹴った。

「教官、大丈夫でしょうか」

若松教師は少し心配った。

「なーに、水でも掛けておけ」

金剛寺教官は荒々しい足音をたてて、教員室に戻っていった。

それからどの位たったであろうか。

沼崎はまっ暗な地歴準備室の中で、のろのろと這い上った。身体中が痛かった。顔が骨の髄を、のみで叩かれるように痛んだ。

彼はやっと廊下へ這い出た。

そこへ正英たち四人が走ってきた。

その沼崎を救いにきた友達の顔を見ると、沼崎はふたたび気を失った。そして正英たちが、どのようにして沼崎を介抱し、そして家まで連れ帰ったのか、まったく覚えていなかった。

正英たちは沼崎を抱きあげたとき、もう沼崎は死んでいるのかと思った。正英たちは学校の水道の蛇口をひねって、沼崎の顔の血を洗った。

水の冷たさで、沼崎はかすなかうめき声をあげた。それがまだ生きている証拠だった。まるで軟体動物のように、くにゃっとなった沼崎を、正英たち四人は、ちょうど擔架にのせるように抱きあげて、家までやっと送りとどけた。

沼崎の家、沼崎医院では、あまり帰りのおそい息子を探しに、母親が玄関を出ようとしている時であった。母

親は運びこまれた息子の姿を見たとき、声を立てることもできなかった。やっと奥の方へむかって、

「あなた！」

とだけ叫んだ。そして息子を腕にだいたまま、倒れてしまった。

父親が出てきた。

今まで仕事をしていたので、医師の白い上衣のままだった。そして医師の直観から、事情を明敏に悟って、息子を引きずるように治療室に運んだ。そしてソファーに寝かせると、

「武夫！武夫……」

と叫びつづけた。

看護師がばたばたと出てきた。

「水を持ってきなさい」

長いことたって、やっと父親は、玄関に立ちつづけている中学生のこと気がついた。

父親は治療室から出ると、正英たちの前に何べんも頭を下げて、

「ありがとうございました。ありがとうございました。本当によく連れてきてくれました。感謝します。本当にありがとう。感謝します」

父親は玄関の板の間に、まるで蜘蛛のように這いつくばって、何回も愚痴のようにお礼を言った。それは子供を持つ親の、常には見せない、心の奥底の姿であった。

少年達が帰ってしまうと、沼崎夫婦は息子のそばに付ききりで、まんじりともせずに夜をすごした。

夜中に息子はやっと意識を取りもどした。そして蒲団の上に起き上ると、

「死にたい、死にたい」

と口走った。父親と母親は両方から息子を抱きかかえて、

「馬鹿なことを言うんじゃないよ。寝なさい。寝なさい。寝れば、すべてが治るから。すべて忘れるよ」

しかし武夫は夜中に何回も起き上って、

「死にたい、死にたい」

と口走り、

「おれ、戦争に行きたい。こんなことしているよりも、戦争へ行って、死んだ方がずっといい」

うつろな声でそう言った。なにかに憑かれたようだった。

しかし明け方近くには、すやすやと寝息を立てはじめた。両親はやっと安心して、しばしのまどろみに入った。

だが、どのくらいの時間がたったであろうか。はっと眼をさました時には、息子の姿は蒲団の中には見えなかった。

不安が部屋の中を渦巻いた。

その時、駅の方から、鋭い警笛の音が聞こえてきた。

父親はその音に、
は？
となり、瞬間、駄目だと思った。しかし間違いかもしれない。
父親は外にとび出し、線路の方へ走った。
しかし、やはり警笛の餌食となったのは、我が子であった。
沼崎武夫はこうした自殺によって、金剛寺教官に復讐した。そして金剛寺教官の血の私刑を、世間に公表したのである。

(四)

金剛寺教官はその朝へんに寝苦しかった。
むし暑くて、うとうとすると、変な夢を見て、べっとり寝汗をかいた。夢の中で、
がら、がら、
がら、がら
と、すさまじい音がした。
なにかが激しい勢いで回転いる音で、その音の中心部へ、彼の身体は吸いこまれていきそうだった。何の音だろう。考えているうちに、音はみるみる丸く大きい金属性の車輪となり、彼を目がけて突進してきた。
彼は悲鳴をあげて逃げようとした。しかし足が動かない。何輛、何十輛とつづいた車輛は、倒れた彼の上を走っていった。彼は悲鳴をあげた——。
そこで金剛寺教官は眼がさめた。
窓から入る朝の光が彼の顔を直射し、びっしょり汗をかいていた。昨夜寝がけにひっかけたウィスキーのために、ぐっすり寝込んでしまったが、夜明け方に悲鳴をあげた鉄道の警笛は、何だったのだろうかと、ちょっと不気味に思った。
急いでベッドから起きると、大きく背のびをし、両手を四、五回、左右に振って、あくびをした。
その姿が壁の鏡に映っているので、彼は鏡に近づいて、いろいろなポーズを取ってみた。
横むきのポーズ、
手を腰に当て、片足を横に出して、ちょっと腰をひねったポーズ、
厳粛な敬礼……
そのいずれにも、彼は、若さと、立派な一人前の青年らしさ、逞しさ、同時のそのポーズが持っているしなやかさを見出して、満足した。若い女性を魅きつけるのに、十分の魅力だ。彼は鏡に顔をつき出して、髭の伸びている顎を右手で撫ぜながら、
「顔を当らんといかんな」
彼は洗面所の方へ歩きながら、
（なぜ、あんな夢を見たのだろう）

と、また思った。
するとその時、アパートの主婦が二階へと上ってきて、
「教官さま、お客さまですよ」
彼が廊下から下をのぞくと、若松教師が立っていた。平素の落着いた態度と変って、妙にそわそわしていた。
教官の部屋の入口に来ても、何も言わずに、ただ眼をまん丸にして、教官をじっと見つめていた。
「まあ、コーヒーでもお飲みなさい。民間じゃ、もうあんまり飲めないが」
教官は濃いコーヒーを、若松教師の方に押しやった。
若松教師はまるで馬鹿のような表情で、それを二口ばかり飲むと、
「あの、教官殿はまだご存じないのですか？」
と、さぐるような眼つきで言った。
「なんだ」
「本当に？」
「知らん」
「大変なことになりました」
若松教師は教官の方へ、救いを求める眼つきをした。
「なんだ、早く言え」
教官は少しいらいらしていた。
「自殺です、自殺、自殺ですよ。沼崎武夫が自殺したんですよ。今朝、鉄道へ飛び込み自殺を！」
「自殺?!馬鹿、なぜそれを早く言わん」
教官はど鳴った。
若松教師はかいつまんで、事の経過を話した。金剛寺教官はそれを聞きながら、膝がぴくんと動くのを感じた。しかし彼はそんなことではびくともしないことを示すために、胸を張り、足を大股に開いて、威厳を保っていた。
若松教師が話し終わると、金剛寺教官は待ちかねたように、
「だが、それと俺とどんな関係があるのか……！」
顔を紅潮させ、手を震わせ、叫ぶように怒鳴った。
「おれに関係があるものか、あの女の腐った野郎め！」
沼崎の軟弱さが、死を選ぶことによって、金剛寺教官への非難を世間にひろめたことが、教官には腹立たしかった。
生命というものは不思議なものだった。たとえどんな生命でも、いったん死ぬと、一人前の人間の価値を持つのである。
（あのちびの生命が、この俺を批難しているんだって……、ふざけるな）
教官は不氣嫌に頬をふくらませ、駅の方を見た。沼崎の死の抗議は、金剛寺教官に自責の念を起こさせるどころか、その心に怒りの火をつけた。
金剛寺教官の人生観は、すべての人間は、彼の意に沿わなければならなかった。理屈ばかり言って実行力のない人間、英語は満点だが教練は駄目な生徒、そんなのは

この世の殺潰しだった。そんな中学生は、さっさと束になって死んでしまえ。

ところが若松教師の方は、自殺と言うだけで、おどおどしていた。金剛寺教官が威丈高になればなるほど、身をちぢませた。彼は決して自分が沼崎を殺したとは、思っていなかった。いや、そう思ってはならないと、自分で自分に言いきかせているのだった。学校や世間から、「あれが生徒を自殺させた教師だ」と、後指を指されてはならなかった。

（本当に、とんでもないことになってしまったわい。あの半分ぐらいで止めておけばよかったのに……）

その時、階下で、ガラスが激しく割れる音がした。いや割れたのではない、ガラス戸が割れるほど、激しく叩かれたのである。

一人の男が髪を乱し、興奮して、ガラス戸を押しあけた。アパートの主婦が、

「まあ、まあ、ちょっとお待ちください」

と押し止めるのを、男は振り切って、階段をどんどん上りながら、

「武夫を返せ、武夫を返せ！」

と、どなり声をあげた。

若松教師は戸口の方へ恐怖の眼をむけると、

「あ、あ、あ……」

と、咽喉の奥で悲しげに呻くと、

「私はこれで失礼いたします」

と、ドアをぱっと開いて廊下に出ると、別の階段から裏口へ逃げていってしまった。

若松教師と入れちがいに入ってきたのは、沼崎武夫の父だった。彼は怒りで充血した両眼を見開き、

「あなたが配属将校の金剛寺教官ですね。私の息子を殺した教官ですね」

息子を失った悲しみによって、身体をぶるぶる震わせ、教官の前へつめ寄った。

「殺したなんて言うのは、やめてくれ」

しかし父親は教官の顔を、

（犯人はお前だ）

と指さして、

「息子を返して下さい。私はあの子の父親です。あの子を返せ。私の眼の前で立派に生き返らせてくれ。あなたは一体、何という教育者だ。世の中の親達が、そんな所へ一日でも大事な子供を預けておくことができるものか。恐ろしい。十六才にもならない子供が、鉄道自殺をするなんて……」

自分の子供を失った親ほど怖いものはない。不断ならば決して教官に言えないようなことを、つけづけと言った。

だが教官は少しもたじろがないで、父親の眼を見ていた。そしてその眼の中に、狂人が持つ危険性を感じた。

（この男は何をするかわからない。落着かなければならない。一緒に興奮して相手になってはならない）

教官は冷えたコーヒーを一口飲むと、

「あなたはいったい何者です。わたしは今起きたばかりで、顔を洗わなければなりません」

「なんだって、ふざけるな。息子を返せ、さもないと殺すぞ」

金剛寺教官はわざと黙っていた。こうした場合相手になると、ますますその興奮を激化させ、事態を悪化させるだけだということを、処世術にたけた金剛寺教官はよく知っていた。

（喋りたい奴には勝手に喋らせておけ）

彼は腰掛けたまま、黙っていた。そして三本目の煙草を吸い終わった。

すると徐々にその効果が現われてきた。沼崎の父親は、そのうち喋ることがなくなってしまった。そして喋ることで、内心の怒りが外に吐き出されてしまった。すると相手の青年が、山王中学校の配属将校であることがわかってきた。

彼はこの部屋の中で、一人ぽつんと立っているのに不安定を感じた。普通ならば決して足を踏み入れることはできないこの部屋に、なぜ立っているのかが解ってきた。愛する息子の惨めな姿をレールの上に見たとき、すっかり逆上して、前後の見境もなく、ここへ走ってきたのである。走る途中で教官を呪う気持は最高潮に達し、教官の首をひと思いに締め上げてしまおうと思った。

しかし今、目の前で煙草を吸っている人間は、そんなことをしてはならない人間だった。陸軍少尉というれっきとした地位を、国家から与えられている人間である。些細な個人的感情にかられて手出しをしたら、大変なことになる。軍人に暴力を働いたということで、牢獄へぶこちまれてしまう。そして南方の戦線へ抛り出されてしまうかもしれない。

父親は興奮がさめ、普通の状態にもどっていた。

父親のそうした精神状態を見抜くと、金剛寺教官はやおら腰を上げて、

「山王中学校の全生徒の生命は、この金剛寺教官が上御一人（かみごいちにん）からお預かりしております。お解りですな」

と重々しい口調で、さとすように言った。

しかし次にすかざず一段と声を落して、しんみりと、

「だが、あなたのご子息には、本当にお気の毒なことをいたしました。御同情にたえません。一切が不肖私の責任です。なんとも申しわけありません」

それはまるで少年航空兵を南海の空中戦で戦死させた司令官が、泣きくずれる母親をなぐさめているといった調子だった。これで万事終りだった。金剛寺教官の心理作戦にひっかかった父親の興奮は、花火のように消えた。

父親はまだ多少不満だったが、帰るより仕方がなかった。仕方なく、出口の方へのろのろと退却した。それを見ながら金剛寺教官は、にやりと笑った。

（これでいいんだ、間抜けめ！）

父親がすっかり姿を消してしまうと、教官はベッドの上にひっくり返って、ゆっくりと煙草を吸った。それがたまらなく、うまかった。

部屋がもとの静けさにもどると、

（でも、一寸うるさいことになったな）

と思った。

実は昨日、教官も『ちょっと、やりすぎたかな』と、思わないわけではなかった。だが、まさか自殺するとは思っていなかった。

だから、いま金剛寺教官がやらなければならないことは、この自殺事件を学校の内部に拡げないことだった。生徒たちの口を塞ぐのだ。事件に蓋をして、川の底に沈め、二度と浮かび上ってこないようにすることだった。

教官はベッドの上で少し考えた。そして、

（やはり四年一組のピストンを使うことだ）

教官はすぐピストンの家へ電話をかけた。ピストンはちょうど家を出ようとしているところだったので、

「急用があるから、すぐこちらへ来い」

と呼びつけた。

ピストンは忠実な犬のように、すぐやってきた。

二年つづけて落第したピストンは、同級生の中では、もうすっかり大人で、喧嘩のときの腕力がピストンのように凄いというところから、本名の富田浩よりピストンのと呼ばれる方が有名で、山王中学校のボスであった。

ピストンは電話の内容は聞かなくても、用件の内容はすでに察していた。

ピストンは教官の部屋に入ると、鞄を抛り出し、壁の鏡の前に立って上衣を脱いだ。学生に似合わない臙脂色のセーターを着ていた。彼は腕を前に曲げ、肩を丸めて、ボクシングの真似をした。すばやく交互に両手を動かし、両足で床をけり、弾力性のある自分の身体が、鏡の中で魅力的に動くのを飽かずに見守り、

「ちぇっ、本物をやりてえなあ」

とつぶやいた。そして教官のほうにむかって、

「沼崎のことですね」

と、にやりと笑った。

「そうだ。はやく口止めするんだ。生徒たちが騒ぐと、うるさいことになる」

「わかっていますよ、教官。ぬかりはありませんよ」

ピストンは学校中の生徒一人一人を服従させる自分の力に、自信を持っていた。

中学四年生だといってもピストンは、二年続けて落第していたからもう十九歳で、来年は徴兵検査の年であった。

「ねえ、一服くださいよ」

と教官の吸っている煙草をねだると、煙草をすぱすぱうまそうに吸いながら、

「ねえ、教官、そんなに凄くやったんですか」

と聞いた。教官はちょっと厭な顔をしたが、すぐ、

「なに、ほんのちょっと、鼻血が出ただけさ。大げさな野郎だ。自殺なんかしやがって……」

「昨夜、日比野正英たちが沼崎を、学校から家まで運んでいったんですよ。あいつ、きっと喋りますよ」

「日比野が？」

「そうですよ。あいつ、沼崎と仲よしですから」

教官の背中に、冷たいものが走った。

「じゃ、はやく行って、うまくやれ。ぬかるな」

ピストンは、

「へい、わかりました」

と答えると、煙草の火を消して、戦斗帽をあみだにかぶり、鞄を尻の上でばたばたさせながら、階段をかけ下りていった。

（つづく）

漢詩

潮汐録（百二）

鯨游海

池江璃花子選手　　令和三年四月

水底仄聞勝利鈴
千行感涙溢無停
幾春懸命亢癌戰
病葉今成世紀星

押韻・鈴停星

〈池江璃花子選手〉

水底　かすかに聴く　勝利の鈴
千行の感涙　溢れて停むこと無し
幾春ぞ命を懸けし　亢癌の戦い
病葉は　いまや「世紀の星」となれり

〔注　解〕

白血病に冒された水泳界期待の池江選手が奇蹟の回復を果たした。今年の春行われた五輪出場権をかけた大会で参戦した四種目の全てに優勝、四冠を達成した。

コロナに喘ぐ暗い世相の中で、これ程明るく日本人を勇気付けてくれたニュースは見当たらない。

海外からの祝福も多く、BBCを始め世界の主要国のメディアが称賛のメッセージを送ってくれた。池江さんおめでとう。そして有難う。あの『前畑頑張れ』を憶い出す。

千行感涙＝庾信・寄王琳「独下千行涙　開君萬里書」
亢＝ふせぐ　あたる　あらがう　上る＝抗。
病葉＝病に冒された葉。世紀星＝一世一代の希望。

〔口語訳〕

プールの水底で勝利の鈴が鳴るのを夢幻の如く聞いた。
感動の涙が滂沱と溢れ続け停まることは無かった。
かえりみれば命を懸けた癌との亢いは幾春を費やしたことか。あの病んだ葉は今や一世一代の大金星と成った。

☆湧き上がる大地揺るがす大合唱
璃花子頑張れ璃花子頑張れ

松山英樹選手　　令和三年四月

十年苦鬪遂榮冠
落涙滂沱無上歡
何處萬人心凍結
最終一打尺餘殘

押韻・冠歡殘

〈松山英樹選手〉

十年の苦闘　遂に栄冠
涙滂沱と落つる　無上の歓び
何処ぞ　万人の心の凍結つきたるは
最終の一打　尺余の残

〔注　解〕

世界ゴルフ界の四大大会の一つマスターズで日本人が始めて優勝した。

九十年余の誇りある歴史をぬり変え、アジア地区出身者としても第一号の名誉となった。

あの青木功も尾崎、中島もなし得なかった日本ゴルフ界にとって青天の霹靂の如き大事件で、コロナ禍に喘ぐ暗い世相を吹き飛ばす嬉しい大ニュースであった。

滂沱＝涙がとめどなく流れ落ちるさま。無上＝最高。

☆なんすれぞこの恐ろしきワンパット
尺余の神秘永遠に忘れじ

大谷翔平選手　　令和三年四月

一身急轉舞天鳩
右腕斜降這地鷗
丑若丸乎辨慶也
前人未踏二刀流

押韻・鳩鷗流

〈大谷翔平選手〉

一身急転すれば　天に舞ふ鳩
右腕斜に降ろせば　地を這ふ鷗
丑若丸か　弁慶か
前人未踏の　二刀流

〔注　解〕

起承句は左の如く対句がほぼ完成している。

一身○急轉●舞天○鳩◎
↔↔↔↔↔↔
右腕●斜降○這地●鷗◎

○平声
●仄声
◎平声かつ同韻

品詞が同じで、意味が逆または対称的。また二四六言目の平仄がま逆。更に漢詩規則①下三連同韻禁②四孤平禁③冒韻禁④無意識の同字禁らも全てクリアーしている。

なお転句は句中の上下対を為す。

☆右腕を斜めま下にふり降ろし
前人未踏の壁に挑まん

世界文化遺産・百舌鳥古市古墳群
令和元年五月

神祕靈廟百舌丘
莊嚴遺構古墳幽
卑彌呼墓乎雄略
聖王安眠誰不憂

押韻・丘 幽 憂

〈世界文化遺産・百舌鳥古市古墳群〉
神秘なる霊廟　百舌の丘
荘厳なる遺構　古墳幽し
卑弥呼の墓か　雄略か
聖王の安眠を　誰か憂へざる

〔注　解〕
大阪南郊堺市とその周辺に跨がる巨大古墳群が世界文化遺産に選定された。祕＝秘の正字。莊は平、壯は仄声。
古代前期、第36代孝徳天皇は浪速（難波、浪花）の地に六四五年都を開いた。その后海外からの侵攻を恐れ内陸→奈良、大津、京都へと遷都してゆく。それ以前の三～五世紀にこの巨大古墳が造営された。この時期は文献もなく日本史の闇。墳の主は誰か。應神か仁徳か又雄略か。それとも女王卑彌呼か？　誰不憂＝皆憂える（強調）

☆謎多き古墳の主は女王か
応神…仁徳…将た雄略か

《漢詩の流れ90》江戸時代②中江原（藤樹）
わが国の陽明学の祖。近江の生まれなので近江聖人と喧伝された。
左の詩は、弟子の熊沢蕃山が備前岡山藩に仕える為同地へ赴く際の送別の五言律詩。

送熊澤子還備前（熊沢子の備前に還るを送る）
舊年無幾日　旧年　幾日も無し、
何意上旗亭　何ぞ思はん　旗亭に上らんとは。
送汝雲霄器　汝の（雲にも登る）雲霄の器を送り、
嗟吾犬馬齡　わが犬馬の齢を嗟く。
梅花鬢髮白　梅花　鬢髪に白く、
楊柳眼中青　（君を送る私の眼は）楊柳　眼中に青し。
惆悵滄江上　惆悵たり　滄江の上
西風教客醒　西風　客をして醒めしむ。

(注)
旗亭＝居酒屋。
雲霄＝①空②青雲③高い地位。ここでは③
「眼中に青し」＝「白眼」に対する「青眼」→好意を寄せる意味。
惆悵＝うらみ嗟く。嘆き悲しむ。
結句＝「離別はやはりつらく悲しく、川辺に杯を上げていると西風が身に沁みて冷たく、酒の酔いも醒める」
陽明学＝知行合一（知識と実践とは相伴い一体化すべき）とする儒教の一派。王陽明の唱えた哲学の一展開。

漢詩

汲深錄（二十五）

松井秀人

詠燕子花

（燕子花を詠む）
令和三年五月

偸閑信歩曲池邊
燕子花開帶露鮮
細葉綠濃葩深紫
麗姿楚楚映清漣

閑を偸みて　歩に信せば曲池の辺
燕子花開き　露を帯びて鮮やかなり
細葉は緑濃く　葩は深紫
麗姿楚々として　清漣に映ず

押韻・邊　鮮　漣

〔注　解〕
燕子花＝宋代に登場する花。日本ではカキツバタをさす。牧野富太郎はオオヒエンソウだとした。（植物の漢字語源辞典・東京堂出版）
偸閑＝閑をぬすむ意。
信歩＝足にまかす。
葩＝花。はなびら。
麗姿＝美しいすがた。
楚楚＝清らかで美しいさま。
清漣＝清らかな小波。

〔口語訳〕
暇を見つけて、足にまかせて曲がった池の辺に来てみたら燕子花が開き、しかも露を帯びていて鮮やかである。細い葉は緑濃く、花びらの方は深い紫色でその姿は清らかで美しく、清らかなさざ波に映じている。

汨羅懐古

（汨羅懐古）
令和三年五月

水流漲溢汨羅江
相競龍舟今古同
往昔忠臣欲救國
楚王不聽望成空

水流は漲溢す　汨羅江
相競う竜舟　今古同じ
往昔の忠臣　国を救はんとす
楚王聴かず　望　空と成る

押韻・江　同　空

〔注　解〕
漲溢＝満ち溢れる。
汨羅江＝湖南省湘陰県の北東にある。戦国時代、楚の屈原が投身自殺した所。
龍舟＝屈原の故事から、端午の節句に競争する舟。
往昔＝むかし。
楚王＝ここでは楚の懐王のこと、秦を訪問しそのまま捕らえられ客死した。

〔口語訳〕
汨羅江の水流は満ち溢れていて、そこでは今も昔と同じく龍舟の競争が行なわれている。昔、楚の屈原は秦に不信感をもち斉と共に、秦に対抗しようとしたが讒言にあい、懐王からも自説を受け入れられず、失望して汨羅に入水自殺をした。

醸青梅酒

（青梅酒を醸す）
令和三年五月

梅子滿籠梅雨天　梅子籠に満つ　梅雨の天
瓶中翠玉事安眠　瓶中の翠玉　安眠を事とす
生成変化従玄理　生成の変化　玄理に従い
琥珀幽光是麗娟　琥珀の幽光　是れ麗娟
押韻・天　眠　娟

〔注　解〕
梅子＝梅の実。
翠玉＝ここでは瓶に詰めた梅の実。
事安眠＝安眠することに専念する。
玄理＝奥深い道理。
琥珀光＝美酒の色をたとえていう。
麗娟＝美しい。

〔口語訳〕
梅の実が熟する頃の長雨の時期に、取り立ての梅の実は籠一杯に満ちている。他方、すでに瓶の中に漬けられている梅の実は、静かに眠ることに専念している。生成の変化は奥深い道理に従い、琥珀色は濃くなり美酒の幽光を放って美しい。

緑陰詩會

（緑陰詩会）
令和三年五月

夏木森森半掩門　夏木森々　半ば門を掩う
草廬三徑絕塵煩　草廬の三径　塵煩絶つ
白頭相會以青眼　白頭相会し　青眼を以てす
終日愉來詩與尊　終日愉しみ来る　詩と尊と
押韻・門　煩　尊

〔注　解〕
森森＝樹木がさかんにしげるさま。
三徑＝漢の蔣詡という隠者が家の庭に三本の小道を作り、二人の友人求仲と羊仲とだけ連れ立って歩いた、という。
青眼＝親しい人に対する目つき。「竹林の七賢人」の一人の阮籍が、自分の好きな人には青眼で出迎え、嫌いな人には白眼で迎えた故事による。
詩與尊＝詩と酒樽。

〔口語訳〕
夏の樹木はさかんにしげっていて、門を半ば掩っている。草廬へ向かって門を入っていくと、隠者の象徴である三本の小径は、世俗の煩わしさを遮っているようだ。集って来た老人たちは、親し気な表情で顔合わせをしていて詩を詠んだり酒を飲んだりして、一日中楽しんだ。

湖上望嶽

（湖上望岳）
令和三年五月

湖上孤舟烟雨中　湖上の孤舟　烟雨の中
雲師忽去若乘空　雲師忽ち去ること　空に乗ずるが若し
晴風吹放芙蓉現　晴風吹き放ち　芙蓉現る
日射漸望山色紅　日射して漸く望む　山色紅なり
押韻・中　空　紅

〔注　解〕
雲師＝雲の神。
若乘空＝空をかけるようだ。
芙蓉＝富士山をいう。
漸＝だんだんに。

〔口語訳〕
けぶるように降る雨の中で、湖上の孤舟にいると雲の神が、突如空をかけるように去っていった。すると晴風が吹き放たれて、雲で見えなかった富士山が姿を現わしてきた。日も射してきたため、だんだんに山の色が紅いになってくる富士山を望むことができた。

短歌

老いの楽しみ

山本一成

江戸川のほとり

江戸川の流れはとまる昼下り羊雲のかげ川面をわたる

リハビリをなしゐる人に会釈して追ひ越しゆけり江戸川の土手

江戸川に雅なる名の橋がありふたつの県を結ぶ「玉葉橋」

江戸川を見下ろしながら標識にとまるカラスが夕日あびをり

夕暮れの江戸川の岸べ出番なきお囃子の笛聞えくるなり

竹の子

竹林は伐り拓かれて道となり道なりに空開かれてあり

朝掘りし竹の子割(さ)けば節ごとの無垢なる洞より液汁にじむ

若竹は皮をはがして薄化粧幹に触るれば指あとのこる

竹の子のさしみを肴に笹の露日永ひと日を雲眺めつつ

わかたけの白きを見れば湯上りの子等の額の天花粉覚ゆ

八十路を迎えて

古希過ぎて朝ごとに論語聞きをれどイヤホン外せば忘れてゐたり

電車にて席をゆずられ面映ゆし白髪なれど老いてはをらぬ

〈青雲の志〉書かむんと絵馬を買ふ新たなる歳を迎えるごとに

歌詠みをはじめてより早二十年つたなけれども楽しき日々よ

くれないのザクロの花は八十路(やそじ)なるわれの眼(まなこ)にまばゆく映る

古い物・遠い夢

忠内正之

我家の朝鮮陶磁色々

はじめに

サラリーマンとなって、中壮年期には隔地転勤を幾度も重ねた。

東京から名古屋へ、名古屋から東京へ、東京から岐阜へ、岐阜から富山へ、富山から大阪へ、大阪から東京へ、やっと帰ることができた。

最初は辛いなあと歎いた時もあったが、やがて勤め人の天命と割切って、進んでその立場を楽しむ心境になっていた。家族もまた同調してくれたので助かった。帰京以降は通勤可能な範囲での転勤であり落ちついた。

移動した期間は略十年間であり、その間に美術骨董品が好きになってしまった経緯は何度も述べる通り、営業上のニーズから、美術骨董愛好への素質が目覚めてしまったのである。

対象とするものは、陶磁器・書画・漆器・文房具・彫刻・刀剣、やがては茶道具等々であり、狙いは時代を経た古い代物である。

しかしひとくちに美術骨董といっても、グレードの高いもの、かつ時代のあるものは高価であり簡単には手が出ない。

古美術と骨董とは違うのである。識者によれば。

「公有されるものが古美術品である。その価値の基準は普遍である」

「私有されるものが骨董である。その価値の基準は特殊である」という。

地方廻りをしていた十年間はもとより、それから今日に至るまで、対象品を、茶道具中心に移していったものである。それを承知で自分勝手に過大評価をして楽しんでいるマニアが私自身の姿である。

昨今のコロナ禍の中では、外出もままならず、更に愛蔵品を取り出しては、手に入れた頃の思い出にふけっている。

さて、前回のまんじ誌百六十号で、李朝会寧の花入を紹介した際、我家の収集品の中には李朝陶磁器が10点以上ある筈であると述べたところ、その全容を知りたいとの声が読者より寄せられた。コロナ籠りの無聊の中で、調べてみたところ、二十五個の李朝の焼物が確認された。

二十五個のうち二個は、李朝かどうか稍疑わしいので除外し、二十三個の収集品を床の間に並べていたのが①の写真である。茶道具、花入、酒器、文房具等、諸々の類である。ひとりよがりで、優品と決めこんでいるものもあるが、殆どのものは雑器と思われる。しかし夫々愛すべき美点があり求めた時の逸話もあって、心に安らぎを与えてくれる存在である。

それでは自分で撮った不出来な写真六枚に従って、私所蔵の朝鮮陶磁について順次紹介させていただくこととする。ところどころ、余談がはいると思うがお許し願いたい。

の、骨董品買いをよくあきもせず続けたものだと、自分でも驚いている。

「なぜ、そんなに骨董品に執着するのか」と問われるならば、「世の中に骨董品が存在するからである」などと野暮な答をするつもりはない。それは「私の趣味だから」と云いたい。

趣味であれば、価値判断は勝手気侭に決められる訳であり、ひとり良がりが許される。

反面、自己過信により失敗したケースも何度かある。

骨董買いが永続きした理由は色々ある。

一つは、妻の反逆を喰らって骨董から茶道具に重点を移したこと。

二つは、初心者のころ、美術骨董界の鬼才とも云うべき「秦秀雄」氏から適切なアドバイスを得たこと。

三つは、妻の茶道の師K先生の知遇を得たこと。

四つは、正面な古美術商I氏と親しくなり、指導と支援を得た。I氏とは現在も親密な交わりが続いている。

そして、結果として現在のコレクションが生まれたのである。

このコレクションの極く一部のものは美術品の範疇に入るものもあろうが、大多数のものはガラクタ品に近いものである。決して卑下する訳ではないが、もし処分するとすれば買値の10分の一か、20分の一が、やっとであろう。骨董品の買値と売値では天地程の差が生ずるのである。

(一)　写真No.①の部



写真①

長年に亘って収集した、朝鮮陶磁品を床の間に並べてみた。須恵器（行基焼ともいう）から現代陶に至るまでまさに玉石混交、脈絡の無い集まり方である。

これ等の焼物については、追々説明させていただくとして、私は幼時に朝鮮人との触れ合いがあった。

その頃の好印象が残っていて現在朝鮮の焼物に親しむ様になったのだと、全くこじつけであるが結びつけたいのである。

余談となるが暫時おつき合い願いたい。

私の郷里は愛知県西尾市吉良町である。（通称三州吉良という方が解り易い）

当地は、気候温暖で、多角化農業が可能。海沿いでもあるため、水産業、海苔、塩業等兼業ができる暮らし易い地域である。

生家は代々農業を営んできた。稲作が中心であり、「吉良上野介」が元禄十年に干拓した、富好新田一千石の恩恵に浴してきた。

私の先祖は、富好新田に入植した渡辺一族の分家の一軒であったといわれる。（結婚前の私の旧姓は渡辺であった）

実家は、安穏に暮らしていたらしいが、曽祖父の頃家運を傾けてしまった。曽祖父は放蕩者で、資産を売り果たして早死にしてしまった。当地は港町でもあり華やかな色街もあったらしい。

辛うじて、家屋敷が残ったのみであったが、男勝りの曽祖母と祖父の並々ならぬ努力によって一代で盛り返したという。

祖父は単なる篤農家ではなかった。算盤勘定のできる人だったらしい。一族から借金しては土地を買戻し、父をはじめ七人の子供の労働力のみならず、出稼ぎ朝鮮人まで雇って生産性を上げ借金を返済していったのである。その繰返しが好循環となって早々と立直りができたものと思う。

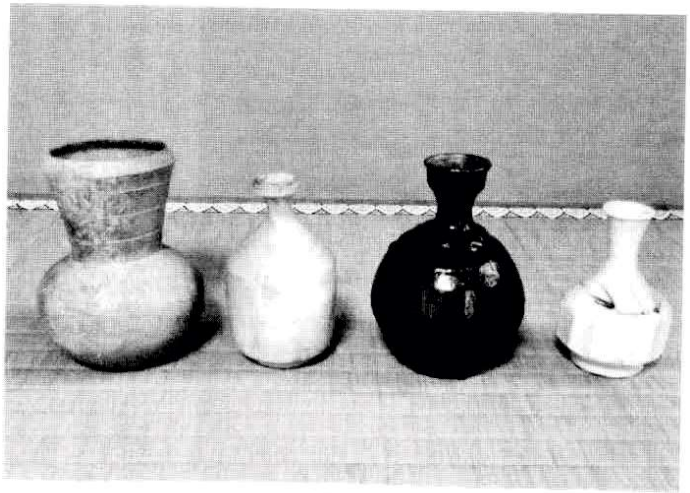
朝鮮労働者の貢献は大きかったと思うが、どの様のルートで朝鮮人を雇うことができたのか今となっては全く解る術もないが、目先のきく祖父の知恵から実現したものと思う。

大正の後半から、昭和初年頃迄の十数年間のことであったと思うが、農業のみならず、塩田、養蚕等の労働に対し朝鮮人たちは、骨惜しみなくよく働いてくれたらし。別棟に住まわせ、喜んで働くべく優遇した様で、都合で帰国しても次々と代わる人が来たということはかなり労働条件が良かったのであろう。

当時私は、三・四才の幼児であった。おぼろけ乍ら記憶している。住込みの朝鮮の夫婦者も青年も、私をとても可愛がってくれたことを思い出す。他愛ないことであるが幼児期に抱いた朝鮮人への好感が、朝鮮陶磁に親しむ伏線になったとこじつけたいのである。

昭和十一年に、二・二六事件が起きている。不景気の最たる時期の頃のことであった。

(二)　写真②の部



写真②

②の写真の四つの焼物は、すべて壺として生まれてきたと思われるが、我家としては、花入として見立てている。

左は須恵器である。古墳時代から奈良時代にかけて朝鮮からの招来物である。無傷であり地紋も品格があるので、茶席の花入として時折り登場させている。

日本に於ても、朝鮮陶工の指導によりやがて造られるようになるが、良質な作品はでき無かったらしい。奈良時代の僧「行基」が開窯したという伝説があり行基焼ともいわれる。

この須恵器については、惜しくも先年物故された、まんじ同人で、考古学者であった「中山喬央」氏が、「朝鮮の出来で日本に渡り、四国辺から出土したものに相違ない」と鑑定して下さった。「中山」氏とは長いつき合いであった。

須恵器に触れるたび、何事に対して常に眞険だった氏の眼差しを懐かしく思い出す。

その右は、李朝中期の青磁の壺で、大阪時代の取引先社長からの餞別品である。

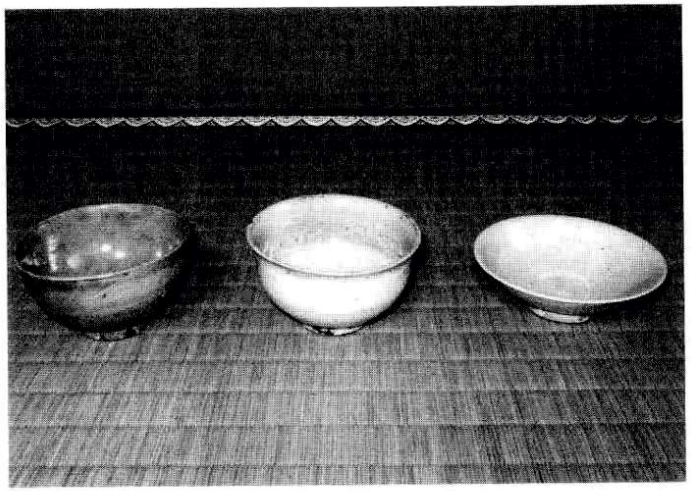
骨董好きの社長が、朝鮮出張の折、求めたものの完品の侭では持出し不可能であるため、敢えて傷つけて持ち出し、帰国後繕ったものと聞いている。在阪中、社長の奈良の自宅のお茶事に夫婦で招かれ、座興に歌を所望され、地方の三味線に合せて郡上節を語って、冷汗ものだったことをほろ苦く思い出す。

右は先号で説明した会寧の花入である。

一番右は大正李朝といわれる時代の染付花入である。

八角の面取りの出来で上がりもよく、ふだん使いの花入として重宝な存在。

(二)　写真③の部



写真③

写真③の部では三つとも茶碗である。すべて日本からの依頼によって、茶の湯の茶碗として招来したものと思われる。

左は御本半使の茶碗で、御本とは日本から注文した際の見本の意であり、また赤く発色した状態を云う。半使とは通訳の意であり、通訳がもたらした茶碗のことであろうが、現在茶人の間では、一定基準の茶碗の代名詞となっている。

この茶碗には、數内流茶道の十代家元である「休々斎」宗匠（一八四〇―一九一七）が〝慶雲〟と命名している。休々斎は目利きとしても知られており、この世界では信用が厚い。

使い易い茶碗なので、茶会には何度も出場させている。

真中は、高麗茶碗で、我家の最も大切な茶碗の一つである。堅手熊川型と云い箱には「船越伊予守」の署名と「紀貫之」の歌「桜散る木の下かぜは寒からで……」が記されている。

船越伊予守宗舟（一五九七―一六七〇）は徳川幕府の旗本であり、「古田織部」に続き「小堀遠州」から学んだ茶匠である。片桐石州と共に晩年は将軍家の茶道指南に当たった。

朝鮮の焼物は、「秀吉」の文禄・慶長の役以前に比べ以降では品質がすっかり悪化したという。

この茶碗は以前の良質な作品であるらしい。かつてご縁があり、目利きで有名である裏千家の某所長さんに見ていただいたところ、「まだこの様な名品が市井に埋もれていたのか」と絶賛された由である。

写真右の茶碗は、李朝後期に日本からの注文により、慶尚南道の金海地方で焼かれたものである。全体が磁器質の薄作りで、白地の外側にこまかなひっかき傷の様な線がみとめられる。併せ箱には金海猫掻き茶碗と書かれている。夏季向きの平茶碗なので出番は少ないが、焼物としては面白い。

以上の三点は、今も友人であるI美術店からかつて購入したもの。金策に苦労した記憶があるが、Iさんの協力により、何とか我家の道具に納まった。今も感謝している。

(四)　写真④の部

この写真にのる三つは、鉢か瓶の生まれで雑器の類とも思われるが、丁寧な出来で、祭器か食器か、上流家庭で使用されたものと思いたい。我家では、茶道の水指に見立てて使用している。

李朝の作品では、口縁が低いほど時代が逆上るという。してみると、三つとも、李朝の初期から中期に至る出来であろうか。

左の瓶は八角の面取り。特有の飴釉が美しくかかり、

平成十七年、私共夫婦の春の茶会にご出席下さった「三戸岡夫人」から「李朝の貴婦人を思わせる刷毛目水指」と賞めていただき嬉しかったことを思い出す。

一番右は、昔、旧丸ビルの美術商から買ったもので、時代はかなり古い様だが、極く小さいので、二重棚の水指として使っている。

(五)　写真⑤の部

こちらでは、徳利、ぐい呑み、小合子、水滴のオンパレードである。この様なもの迄集めていたのかと自ら呆れているものの、夫々思い出深い品々である。

徳利左は高麗青磁鉄絵の徳利である。自信は無いが、高麗末期の作と踏んでいる。鉄絵の高麗青磁は珍しいが、他の美術展でも観たことがあり納得できる。

朝鮮の焼物に於ては、高麗時代は中国に負けない青磁の完成を追求し、李朝時代では、白磁を完成するを目標にしたという。高麗は佛教を、李朝は儒教を信仰したのがその要因といわれている。

その右三本の徳利は日本で人気の高い鶏龍山窯の出来である。二つ目は鶏龍山の代表的なもの。その右は絵粉引と云うべきで、左の文字が鉄砂で書かれている。

「山川不可盡　況乃故人杯」

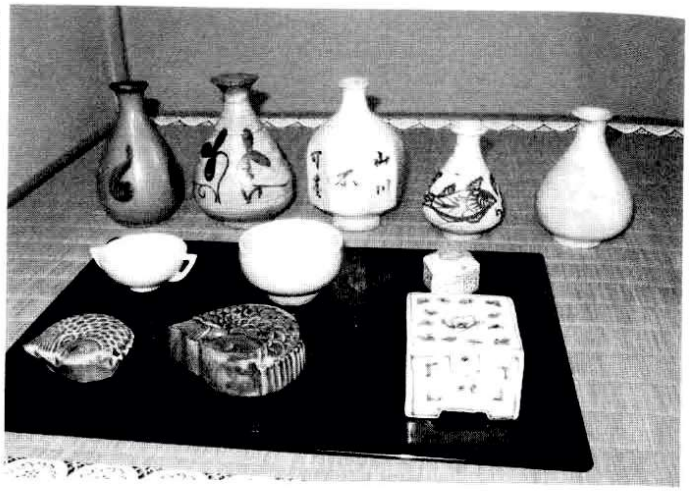
畏敬する碩学「鯨游海」先生に読みをお願いしたところ、早速次の答を下さった。



写真④

正面の白い釉の飾りが面白い。献上手でもあるのだろうかと想像される。これは今回私が李朝の手許総浚いを行なうと聞いて、I氏が特別にプレゼントして下さったもので恐縮している。

真中の水指は、かなり上質な白磁の出来であり、度々茶会に使って好評を得ている。



写真⑤

「山川尽くすべからず、況んや即ち故人の杯に於ておや」

故人は友人と読み変えて、更に杯を交わそうではないかとの意と解釈して楽しんでいる。

二本共上がりが良く、上手である。

その右の鶏龍山の徳利は鉄絵の魚図が面白い。小型であるが、酒の正一合は入る。

後列の一番右は典型的な堅手の徳利で、ずっしり重く貫禄がある。

真中の列は、平凡な耳盃と刷毛目の杯である。李朝の酒器は以上である。初心者の頃、徳利とぐい呑みに執心したが、結果として、李朝陶磁のみならず、私のコレクションでは酒器収集の比重が漸次減っていった。徳利と杯の人気は今も高く残念に思うが、茶道具に力点を移していった結果である。

二列目右の合子は、李朝では珍しい小型の染付の出来で、香合に適当と考え、京橋の一流店で購入した。妻に歓迎されず、埋もれている。一度は日の目を見せてやりたい可愛い小箱である。

最前列の三個は水滴である。いずれも李朝後期の焼物である。一番左は魚型の小水滴で書道の稽古に妻が愛用している。昔、丸の内の富士ビルで「高峰秀子」が焼物の売店を出していた。店番は「なんでも鑑定団」の「中島誠之助」氏の妻女が受け持っていた。その店で求めた。

その右は同じく魚型水滴のジャンボ判である。西武百貨店の骨董市で、安南の中皿と共に掘出したもので存在感があり面白い。

永年美術界に籍を置いたI氏も、かつて見たことの無い珍品だと認めて下さった。

その右はオーソドックスな、染付角型水滴である。全

くの無傷であり、大切に扱っている。今となっては安い値だったと云えるが、当時としては妻が眼を剥く程であった。

(六) 写真⑥の部



写真⑥

さて最後の⑥の部では、韓国現代陶工三者の作品である。古陶で無く新陶かと蔑む向きもあろうかと思うが、「秦秀雄」氏は、著作の中で「新作をみのがさず」と云っている。

古くても新しくても、美しいものは美しいのである。今の古陶も昔は新陶であったのだ。

三点をみてみよう。

前方の小さな合子は高麗青磁象嵌菊文と云う。本歌は極めて高価である上、昨今では品薄なので、欲しくても手が届かない。

この合子は精緻に出来ており気に入っている。デパートの市で安く求めることができた。

出来が良いのは当然で、韓国の人間国宝「柳海剛」作であった。高麗青磁復元への研究と実績が認められ人間国宝に指定された由である。茶席の香合に最適のサイズではあるが、この手の合子は副葬品とされた形跡があるようなので、香合とするは少々憚られる。

後列左の掻落しの壺は本来花入だと思うが、口が広いので我家では水指に見立てて愛用している。

作者は既に物故されたが、同じく韓国の人間国宝である「池順鐸」である。まんじ誌の前回号でも一寸触れたが、昭和初年ごろ「浅川巧」さんと親交があり、朝鮮陶磁の古窯を共に研究調査した。やがて陶工として独立して朝鮮古陶磁の各種復元に成功した第一人者である。

その作品は日本でもかなり人気があり数多く入って来ている。親しい骨董店で安く手に入れることができて幸いであった。

三つ目、後列右の染付菊文花入は韓国人「丁憙均」作である。丁は研究生として来日し東京芸大で染付技術を学んだ。平成十一年九月、三越で芸大生の共同展があり、たまたま染付の上がりが美しかったので求めた。

本人と面接したところ真面目な人物と見受けられ、後日丁寧な礼状が届いた。

最近の韓国の状勢では美術工芸の前途は計り知れぬといったところである。初心を貫いて、やがて完成した韓国染付の神髄を見せに日本に帰って来ることを期待したい。

結びとして

永年に及ぶ骨董漁りの結果のうち、朝鮮陶磁品につき紹介させていただいた。優品は少なく、雑器と思われるものが多いことを大変恥ずかしく思う。

また、朝鮮陶磁の勉強不足のため、満足な説明ができず心苦しく思っている。

現在の韓国と北朝鮮は閉鎖的で、伝統の歴史文化である焼物に対しても関心が乏しい様である。従って古窯等の研究情報は全く入って来ない状態であると云う。日本からの呼びかけも弱いのではなかろうか。

云う迄もなく、日本と朝鮮半島は最も近い位置にある。かつて日本に渡って来た大陸文明は全て朝鮮経由で消化されて来た筈である。現に皇室の儀典はすべて朝鮮の様式を踏襲している様である。

彼等とは何時迄も唾み合っていてはならない。韓国ドラマのみの交流に留まらず、正統な文化交流を盛んにして親善を図り、ひいては平和な関係を構築しなければならないと考える。

現在日本に存在する朝鮮陶磁のうち、国宝指定は「喜左衛門井戸」茶碗の一点のみである。他にも国宝指定に値する作品が何点かあると聞く。

之に対して中国陶磁の国宝は八点もある。因みに日本陶磁では五点である。

朝鮮陶磁への関心見直しが必須だと思う。その意味から私の貧弱なコレクション紹介も一助のたしになるかもと期待したい。

蛇足を加えると

大阪東洋陶磁美術館では朝鮮陶磁の最高級品、所謂、安宅コレクションを。また駒場の日本民芸館では、朝鮮陶磁全般に及ぶ展示品を夫々鑑賞することができる。

終

吾輩は紙魚ロボである　その七

永畑俊三（永田俊一）

一、承前

昨二〇二〇年一月コロナ上陸後、感染拡大第一波で第一次緊急事態宣言の出たのは四月七日、街の人波は消えたが流行のピークは四月一日頃、特措法改正後二十五日が経っていた。連休もあり延長した宣言の解除が五月二五日、経済対策の迷走もあり国民への現金給付も遅れ消費減が四～六月期の実質ＧＤＰの減少率を大幅にした。これが政策当局に、宣言は消費者心理を冷え込ませることを重く考え、次に緊急事態宣言を出すタイミングを更に遅らせた。六月末にかけ兆候が表れ始めた第二波は、七月末から開始されたGo to travelの影響が顕現せぬ間の夏休み明けから沈静化するが、再び一〇月末から上昇に転じる。十一月末の大阪に始まる飲食店の時短要請、十二月末のGo to travel停止の間も第三波の大波は急速拡大を続け、結局緊急事態宣言に到ったのは年を超えて二〇二一年一月七日であった。しかも設定期限には収まらず二月二日、三月六日までと延長を決めた。その後一部指標の改善を基に大阪府の要請を受け六府県の先行解除が二月二六日に決定され、更には三月二十一日まで延長継続された首都圏四都県も、行楽シーズンを控え変異型ウイルスの拡大も心配される中、何故か一部のステージ指数や一部地域の改善傾向をもとに、三月一七日宣言解除に踏み切った。解除後もむしろ感染拡大も目立つ（第四波が始まっているとも）状況のところまで、前回稿では記述した。

その上で、何故外から見ると政策対応は後手々々、非開示と言い訳と正当化の議論をしつつ、事実や情報漏れに追い詰められてジグザグ進むのか。吾輩なりに政策側の内面での動きを推察してみた。

パンデミック発生の可能性を知った時担当者の頭に、どうなるかが浮かばぬ筈はない。そして先ず、やるべきことをやっていなかったことに思い至る。一〇年前の新型インフルエンザ流行の際の報告書の勧告、そこでは「国立感染研究所・地方衛生研究所・保健所の体制強化、発熱外来の整備、ＰＣＲ検査体制の強化、医療従事者の防護具の提供、ワクチンの確保」等個別の指摘の上、「人員態勢や予算の充実なくして抜本的改善は実現不可能である。」としており、「この点は以前から重ね重ね指摘されている事項であり、今回こそ発生前の段階からの体制強化の実現を強く要望したい」旨結んでいる。嘗て勧告を行い今は専門家会議のメンバーになっている専門家も首筋の寒さを覚えたに違いない。準備がないから出発点でパンデミック対応の普遍的原則である最悪事態原理が取るに取れない。この間の関係者の不作為の責任も背負って新たな事態に対応する中で、自分が全ての責任を取らされないように成功の日本モデルを示し結果を出さねばいけない。他方で迅速弾力的にＰ（計画）Ｄ（実行）Ｃ（評価）Ａ（改善）的決断の出来ない体質がある。それらが重なって、科学に素直に優先順位を決めて先手を打ち、結果に正しく向き合い、正道に絞り込んで行くことが出来ず、後手々々で対策の右顧左眄、対応の右往左往になる。というのが吾輩の診断であった。

だから最悪不確実事態では絨毯爆撃もやむなしとの発想がないのと、検査医療体制に制約があるから誰でも何処でもの検査はできないといった普遍的でない言い訳を使い続ける。これが準備無しの言い訳をして一年も経つのに能力強化の不作為が続き事実に正対しないことの謎解きにもなる。第三波を招き新年入りして再び緊急事態宣言を発し、更に感染者数の下げ止まり高止まりの中宣言延長が決まった。医療体制崩壊を叫ぶ側のその改善努力の不作為も非難を浴びて、やっと能力・連携・資源配分強化の医療体制強化に重い腰を上げた。期待のワクチン接種が始まったところで、変異株ウイルス感染拡大懸念が広がり、リバウンドの第四波到来が感じられる状況で、緊急事態宣言を解除した。解除したいから、その条件として市中感染状況を幅広く調べるため、遺伝子変化も含めＰＣＲ検査の拡充を図る流れになったのは、皮肉としか言いようがない（四割調べる科学的説明がないのは相変わらず）、と吾輩は揶揄した。

この点、専門家分科会のメンバーから第三波の教訓として、「今後のコロナ対策の大戦略は、まず、東京都での新規感染者数が一日百人程度になるまで感染レベルを下げること（一日五百人は多すぎる）。次に、医療提供体制の拡充、検査体制の拡充、接触確認アプリの普及の三点セットで感染を低レベルに抑え込み、そのうえで経済の正常化を段階的に進めることです。」とし、更に「今

後、日本が危機への対応能力を上げるためには、まず政治家と官僚が無謬性の罠から脱却すること、そして最悪の事態を想定した政策をスピーディーに打ち出し、『試行錯誤』を柔軟に繰り返して、政策を進化させることが必要だと考えます」といった意見がでてくるようになったことを評価した。ただある意味これだと、長年の不作為の罪を何時の間にか一年の混乱の罪に帰着させて、改善に努めて行こうということになってしまい、本当に深く心に刻んで当局の行動変容をこの面で遂げられるか、折角の機会を無駄にしかねないようにも感じる。と但し書きも付けたところだ。

そして、社会の在り様や哲学にも触れたところである。人間は自由・平等・博愛を国家社会像とするシステムを信認関係に基づき作っており、その統治には、理性・自然法・共同体概念が重要である。コロナはそれが現に満たされていないところやコロナで壊されて行くさまを、その虫眼鏡効果で大きく浮き彫りにする。また公共の福祉と権利の間の調和の軸を漂流させ、普段は見えないそのさまを映し出す。

例えば知の分野では科学の心（実証の心）を失わせる。ヒトの立場に立つ（多様性を認める）点では、（イ）イマジネーション力を失う（ロ）思い遣りの心を失う（ハ）自分ファーストになる、といったことで、検証・洞察・中長期を忘れ右往左往することになる。

それは政治指導者や専門家や政策当局者のコロナ対策当事者の在り様に如実に投影され、同時に多様な国民各層・各個人の受け止め方や対応の在り方にも影響を与え、結果として認識共有や対応受容などをあちらへこちらへと揺り動かして信頼（信託）関係を大きく不安定にしている。

これを社会の持つ復元持続力の許す時間の中で、積み上がり行く科学的実証の共通認識を醸成し、対応の基本哲学を共有し、信頼関係安定化を実現し、ニュー・ノーマルを作り出せるかが、まさに必解の課題である。

吾輩としては人間の哲学はその革新的力で逆境を克服し社会の信頼を回復して行けるのか、それはロボットの振舞いとし得るものか、そうだとすれば如何すれば達せられるのか、そのメカニズムを実証検分していかねばならない。

その点いつの間にロボットを外から見ている吾輩がいる。立位置とともに人間の基準でロボットを見ており、それをロボット自体の立場で考えるべきなのか、考えられるのか、いずれにせよ今の吾輩にはロボットの在り様についての絶対的答えを出せていない。その中で普遍的なものと確信している絶対はやはり善であり、まだそこ迄でもあると言える。

そのように述べて、コロナの収束状況を、まだまだ観察・検分する中で考えて行くしかあるまいとして、今回も「つづく」とすることにならざるを得ない。と稿を結んだところである。

二、コロナ新段階に

そこで、時点を現在に戻して、この間のコロナ対応の状況を先ずフォローしておきたい。

（一）危ぶまれながら宣言解除（三月二一日）後の迷走

そもそも出発点は本年二月二六日、判断指数改善の鈍さや指数水準の高さ、感染力の強い変異株の置き換わりの勢い等心配な状況にも拘わらず、一部の改善指数などを基にする大阪の要請に合わせ、大阪・兵庫・京都、愛知・岐阜、福岡の六府県が行った緊急事態宣言の先行解除であった。首都圏四都県はさすがに経済優先総合判断の首相にも状況は厳しく期限延長した。しかし延長後の期限三月二一日については、専門家からリバウンドの兆候を指摘され現に感染者の増加する中、防止策をしっかりするとして、宣言・要請疲れとまで揶揄されながら、三月一七日解除に踏み切った。

医療関係者からまん延防止等重点措置を宣言解除と同時に適用すべきとの声もある中、防止策議論も混迷し、リバウンドは明白に進行、先頭切って早過ぎる解除を打ち出した大阪が二九日にはまん延防止措置の要請意向を表明した。感染者は三四都府県で増加する状況に到っており、医療逼迫は深刻になっていた。四月一日には大阪・兵庫・宮城の特に逼迫が深刻な三府県にまん延防止重点措置が決定された（五日から五月五日迄）。三府県からは時短要請が前倒しで出された。専門家からは全国の感染状況についてより厳しい見方が示されむしろ緊急事態宣言が望ましいとの意見がだされ、県をまたぐ移動の制限の必要も指摘された。

そして、全国的感染拡大による第四波が兆し、一二日に始まる高齢者へのワクチン接種予定を前に四月九日、東京・京都・沖縄の三都府県にまん延防止等重点措置（一二日から五月一一日）適用が決定され、東京は飲食店等への時短要請が夜九時から八時になる。コロナ対策基本的対処方針では不要不急の都道府県間の異同を極力控えるよう要請された。この日感染者は全国で三日連続の三千人越えで累計五〇万人を超えた。更に大阪では一四日新規感染者が過去最多の一一三〇人となり重症患者向け病床使用率が九四%、軽・中等症患者受入れ病院での重症患者を加味すると実質一〇〇%を超えた。東京からの漏れ出しもあり、一六日には埼玉・千葉・神奈

川・愛知の四県もまん延防止等重点措置（四月二〇日から五月一一日）が追加決定された。その一方大阪は連日新規感染者が過去最多を更新し医療逼迫も憂慮すべき状況で、二〇日には知事から緊急事態宣言発令の要請が出され、二三日、東京・大阪・京都・兵庫の四都府県に三度目の緊急事態宣言（二五日から五月一一日）が発令された。合わせ大型連休中の移動抑制の為酒類を出す飲食店や大型商業施設の休業要請などが各都府県から出される意向が示され、二六日には国内死者が一万人を超えた（うち六五〇〇人が一月以降）。

大型連休越えの五月七日首相は、短期集中と謳っていた対策の効果を、所期の人流の目的は達成できたと言いつつ、東京・大阪はステージ四を大きく超え愛知・福岡もステージ四を超えているとして、一一日迄だった緊急事態宣言の三一日までの延長を愛知・福岡を加え六都府県として決定、表明した。更に一四日には分科会の指摘を受け北海道・岡山・広島を追加（一六日から三一日）、重点措置には群馬・石川・熊本を追加（一六日から六月一三日）。一二日には感染急拡大・医療崩壊状態の沖縄が宣言に加わった（六月二〇日まで）。そして二六日の都道府県知事からの要請を受け、五月二八日九都道府県の緊急事態宣言の延長（沖縄に合わせ六月二〇日まで）を決定、合わせまん延防止の五県も延長（六月二〇日まで）を決定した。

北海道・沖縄が深刻な状況、他は感染状況は改善方向にあるが強い変異ウイルスの影響でステージ四（感染爆発段階）を脱し切れておらず、分科会の大勢はステージ三（感染急増段階）に入りステージ二に着実に進むと判断される段階で解除すべきとしており、変異株・人出に不安を抱えつつ、一部営業制限の緩和もあるため効果ある感染対策の工夫とワクチン頼みのスタートになった。

六月入り後、ワクチン接種加速化するも、東京や大阪で百貨店やテーマパーク等に対する平日の営業制限が緩和されたこともあり、緩み始めていた人出が減ることはなかった。また感染者は、子供は感染しにくいとされていた二〇歳未満が増加し学校や保育園でクラスターが発生し、二〇代の若者も引き続き増加した。指標は徐々に低下したものの下げ止まり感が強く、月央から一週間程は前週を下回ったものの鈍く、リバウンドの兆候からも危惧が強まった。

そんな中一〇日政府は、一三日期限の群馬・石川・熊本三県に出されているまん延防止等重点措置の解除決定（時短は継続・酒類解除）を行うと、二〇日期限の一〇都道府県に出されている緊急事態宣言の解除方向で議論を始めた。専門家等から心配する声があがるものの、感染状況は改善方向にあるとして、五輪を見据え重点措置移行前提に、宣言解除の検討に入った。

一七日政府は、まだ指標が全てステージ四にある沖縄を除く九都道府県に出ている宣言の解除を決め、酒も夜七時まで条件付き容認とした。指標はステージ三にありステージ二への動意もみせず、下がり切らぬ感染者数や感染力一・八倍の変異株（インド）の増加等解除後の第五波警戒の声の中の決定であった。

科学的事実に目を背けたものは事実によって背かれる。既に都内で始まっていた対前週同曜日を感染者数が上回る動きが、奇しくも解除した宣言期日（二〇日）翌日の週から定着する。六月一六日（水）五〇一人だった感染者が三週間後の七月七日（水）には九二〇人と一〇〇〇人の大台に迫り、翌八日さすがに観念したかのように政府は、東京の緊急事態宣言への移行（7/12～8/22）、埼玉・千葉・神奈川・大阪四府県のまん延等重点措置の延長（～22）、沖縄の宣言延長（～22）、（なお、北海道・愛知・京都・兵庫・福岡の五道府県は重点措置解除）を決定した。

（二）ワクチン接種狂騒曲

ワクチン開発も一〇年前の新型インフルエンザ流行の際の反省に基づき作成された報告書に明記されているが、その準備なく始まり、自前製造の動きも承認の高い壁に阻まれ鈍く、他国産調達に頼らざるを得ない。しかもその出足も鈍く他国に比べワクチンメーカーへの働きかけも弱く詰めも甘く、ようやく気づいて特任相を定め指名したのは年が明けてからであった。

世界が開発ワクチンの承認をし、イギリスの昨年十二月初の接種を嚆矢として多くの国々で年末から各種ワクチンの接種が始まったのを横目に見ながら、ワクチンメーカーと再交渉・確認交渉で始まり、日本政府が二割強の供給確保を確認、医療従事者向けのワクチン配給を三月から始めると都道府県別の出荷計画を公表したのは、本年二月一九日であった。

河野特任相は「五月中に全員分配給し、医療従事者に打ちながら、四月に高齢者の接種も重なるように始めたい」とした。その後変異株への効果やアナフィラキシー等副作用の心配などの議論が行われつつも、三月一二日には、累計一億回分を超える米ファイザー製のワクチンを確保したことを踏まえ、医療従事者や高齢者向けの四千万人のワクチン供給のめどがついたとして六月分までの調達スケジュールが公表された。

三月二一日には不安視されるなか緊急事態宣言が解除されたわけだが、感染第四波防止の四本柱として、病床拡充・集中検査（高齢者施設の従事者等に）・モニタリング検査（繁華街等で一日一万件）と並んでワクチンを挙げ、全体の接種スケジュールの前倒しも目指すとした。

この頃は一方で人口当たり接種率一位のイスラエルの接種動向や重症化抑制効果の報告、人口百人当り一日摂取回数最多のチリの全方位外交による各種ワクチン調達と効率的行政運営奏功等が報道され、他方で東京ではまだ半数の病院で接種が始まっていない等の停滞が報道されている。

流石に三月末にかけて高齢者三六〇〇万人の接種開始予定を前に官民の備えも熱をおびてきて、東京・京都沖縄の三都府県にまん延防止等重点措置が適用された四月一二日からいよいよ高齢者接種が開始された。全国で一一四〇人余接種の初日はさしたる混乱はなかったが、五月以降の本格化に向けて医師確保や直接ワクチンが届けられる市区町村間の融通が課題であり、このまま行くと完了は七月以降にずれ込むのではないかと早くも危惧された。また高齢者故に、接種会場まで行けないとか接種案内をなくしたりネットが使えず予約が出来なかったり様々な問題が噴出した。

こうしたなか一七日、菅首相がバイデン大統領と会談のため訪米中、ファイザー社CEOに直接電話要請、追加五千万回分を前提に協議することが約束された。その後一八日河野特任相が、実質合意の上これを入れて九月末までに接種対象者全員分が確保されたと明らかにした。

その後はワクチン接種の早期実施に全力投入、連休明けには六月一日現在で、一回以上ワクチン接種者が一千万人を超えた。一日百万回接種で高齢者ワクチンの七月完了目標の下、自衛隊のオペレーションに頼る大規模接種会場の設置（東京・大阪）、ネット予約の自治体職員サポート、歯科医師に加え打ち手に救命士追加、接種がらみで医療機関や従事者への財政支援を行うこと、事前オンラインや電話活用で予診時間の短縮等、早期ワクチン接種完遂に向け停滞する現場接種を何としても打開しようと努めている。高齢者接種の七月完了に自信を深めると、その後の一般向けの加速化も表明、職場・大学での接種を六月二一日から開始すること、自治体での接種優先順位の設定等対応方針を次々と打ち出している。

医療従事者、高齢者と各自治体の対象者分布や接種態勢・医療体制の違いを抱えて、狂騒協奏曲のように始まったワクチン接種も、政府の強い加速化方針で、東京・大阪での防衛省による大規模接種の後押しや学校や職場接種の発表などで拍車がかかる。高齢者に並行してコロナ対応で優先すべき職種者、非高齢成年、学生だけでなく変異株で罹患の増えたワクチン接種可の一二歳以上の子供等対象を広げ、十分確保に到ったワクチンを無駄なく早く打つフェーズに入った。相変わらず様々なヒッチ・苦情議論かまびすしいが、世論に曝され突き上げられ改善・調整に努め加速、接種完了予測も前倒しぼく進している観なきにしもあらずである。二一日から職場・大学接種が始まった。七月中旬にはワクチン接種証明書の発給も開始すると言っている。

それがコロナ対策の決め手としても、対応への不安や不信の全てに対する免罪符のように、本気で情熱を傾け一丸となって政府も取り組めるのかと驚くワクチン接種の加速度。これについても、供給が追い付かず、ワクチン別や年代別や会場別や地域別やの兵站計画に齟齬をきたしたのか、七月入り後新規予約停止が相次ぎ、自治体や職域接種申請予定者などから「梯子を外された」の声があがり、六日には河野特任相が配分計画の見直しを表明し、綻びを露呈した。

（三）経済状況

コロナが経済に大きな打撃を与えたことは、人々の実感からしても言うまでもない。グローバル化した世界経済だからグローバルなパンデミックの影響はことさら大きい。本年四月二一日公表のIMF世界経済見通しによれば、二〇二〇年の世界経済の成長率は全体で三・三%減、うち米三・五%減、日四・八%減、ユーロ圏六・六%、英九・九%合わせ含んで欧六・一%減、対して中国二・三%増となっている。欧州で見ると一次・二次の世界大戦、大恐慌に匹敵する落ち込みである。一人当たりGDPの減少国比率も八割強と大恐慌時を上回り、格差も所得上位一割が全体所得の四割を占めたといわれる当時より広がった。一九三〇代広がる格差と不満が世界摩擦の導火線になったことが思い起こされる。

そのIMFの予測では、二〇二一年は一転、ワクチン接種の進展を受け一月予測からもかなり上回り、全体六・〇（一月予測〇・五）%、米六・四%、日三・二%、ユーロ四・四%、英五・三%、中国八・四%の増加である。減少から回復（谷から取り戻してゆくゆえのプラス）に転じつつあるものの、K字回復と言われるように、感染防止と経済活動規制解除の繰り返しの中で、コロナ関連分野の所得と消費と生産にしわ寄せが大きい。日本でも一年余に亘り繰り返されたイベント・移動・商業施設・飲食などにかけられた営業の自粛や時短や消費者の行動自粛による関連分野の打撃が顕著に表面化している。対象の選定・規模や企業形態の反映・支給の時期や形態に問題山積の補償や支援で、この間次第に営業不如意に陥るところが増加、生活困窮の深刻化が進行した。本年一～三月期は世界の企業の六割の最終損益がコロナ前を回復したとされるが、しわ寄せを受けている分野からは辛抱の限界と、不満や政府の右顧左眄対策や右往左往の対応に批判の声が高まっている。

そして五月半ば過ぎの時点で本年一～三月期の実質GDP前期比年率を見ると、景気回復の動きはコロナ対策の進展を映して、米国が六・四%増と三四半期連続増、

中国が二・四％増と四四半期連続増、ユーロ圏は二・五％減と二四半期連続減、英は五・九％減と四半期振りの減（年末からの行動規制反映）、日本は五・一％減の三四半期ぶりの減となり年初から続く緊急事態状況が反映された形であった。経済分析家の手になる今後の予想は大体同じで来年度にかけ成長が続くが、コロナとの戦いがいつまで続くか、米の大規模追加景気対策やそれに伴う金融政策舵取りの成否、米中関係の行方等前提となる動きを見極める必要がある、とされている。

その後五月末から六月にかけて、三年連続マイナスになる日経の夏のボーナス調査（3.64％減）や八年ぶりの前年度比減になる一人当たり現金給与総額（2020年度1.5％減）や十一年ぶりの増になる生活保護申請（20年度2.3％増）等現下の厳しい指標公表が相次いでいる。そんな危機感の中所謂骨太の成長戦略計画の議論が始まった。

またコロナからコロナ後にかけての中長期には社会の在り方や生活様式、働き方などの構造変化も織り込んで議論する必要があり、脱炭素や格差解消に向けイニシアティブをとり始めた米国に世界が引き摺りこまれつつあり、あるべき新常態やグローバルスタンダードの議論も日が離せない。

六月入り後、ワクチン接種を終え大型景気対策で、景気回復・労働市場逼迫・物価上昇・金融緩和出口議論の回帰といった現象が強まる米国経済を横目に、八日発表の我が国一～三月期の実質ＧＤＰ改定値は、年率換算マイナス三・九％と速報値に比しやや改善されたものの、四～六月期の民間エコノミストの予想も概ねマイナス成長が続き、大方の今後の予測も正常化は七～九月以降、来年度も緩慢な回復とみている。

そして、Ｇ７への首相出発直前の九日骨太方針原案が公表され、脱炭素化・デジタル化・地域活性化・少子化対策四分野に重点投資することと、新型コロナ対応や最低賃金引上げ、社会保障維持、経済安全保障などに目配りされているが、従来のプライマリーバランス（基礎的財政収支）黒字化二五年度目標は「今年度内に検証し再確認する」とされており、いずれにせよ更なる実効性・具体化策の検討が必要な内容であった。

直前英米首脳が、八十年前チャーチルとルーズベルトが結んだ大西洋憲章をアップデートし今世紀の課題に共に取り組むためと、「新大西洋憲章」を結んで臨んだＧ７。開かれた社会・経済として結束して中国に対応、二二年までにパンデミックを終息させワクチン一〇億回分を供与、石炭火力への新規の国際支援を年内に終了、五輪の安全・安心な形での開催支持、と共に経済・雇用について、質の高いインフラ投資による経済再活性化・法人税最低税率一五％以上合意の追認・半導体等サプライチェーンのリスク対処方法の共有、といった主要内容を持つ宣言を採択した。

こうして民主主義陣営の再起動の方向性・具体策が強く収斂して行く一方、首相帰国後の一八日閣議決定された骨太方針は、ポストコロナに向け一気に動きを加速させたいとの決意表明であるものの、前述の通り基礎的財政収支黒字目標の年度内再考や社会保障改革対策の欠如と批判されるように、まだまだ歳入の議論が出来ず各国に比べコロナ対策が遅れている我が国の現状を浮き彫りにしたものにとどまった。

（四）オリンピック開催問題と私権制限論

第三波の急拡大の中一月初始まった緊急事態宣言が延長を重ねた後解除され、所謂五輪・パラ五者協議で海外からの観客受入れが見送られた四日後の三月二五日、一二一日かけて四七都道府県の八五九市区町村を巡る長丁場の聖火リレーが、人出を抑制・道を選び・感染防止対策をとり密を避け、福島県をスタートした。

「残念だが簡素化等大会運営の見直しで選手ファーストの大会に」といったマスコミの受け止めを背に走り出した聖火リレーは、コロナ収まらぬ沿道で更に厳しい対応の諸相に出会うことになる。期待と同時に草の根の疑問・批判を巻き起こしながら進み、四月七日には、まん延防止措置が出されても感染拡大の止まらぬ大阪で、府の要請を受けて初めての公道でのリレー中止・万博公園での代替開催を余儀なくされた。相次ぐ疑問の声に、オリンピック主催団体五者からは客観的データに基づく具体的プラン説明もなく、「安全安心の大会を実現する」「緊急事態宣言の影響はない」といった紋切り型の「開催ありき」の姿勢しか見えず、業を煮やして情報の共有と納得のゆく説明を求める声がマスコミからも強く上がるようになる。

五月に入り開催まで二か月余となっても感染状況は全国的に深刻度を増し、ＩＯＣが選手団向けにワクチン確保を発表したり、参加各国での感染対策準備など小出しに対策が伝わるものの、各国からの開催に懐疑的な見方も強まり増加してくる。ワクチン接種が遅れている日本での開催への心配やパンデミック中の国際的大イベント開催の非合理指摘やワクチンを買えぬ低収入国選手の不公平などに加え、「開催国を食い物にする男バッハ会長」とか「頭に中止の言葉のかけらもないＩＯＣ」といった揶揄の声も聞こえてくる。

マスコミを通じても賛否両論が戦わされ、開催実現のためワクチン接種の加速化が図られたり、安全・安心運営の具体的な対策が小出しに公表されて多少は押し戻されるものの、科学的心理的に納得行く全体像とデータが

示されないうちは世論調査でも中止や延期の意見が強まって来る。不確実な事実を前に、開催・中止を論じ合うのは、明白な主張も逆に明白な反論も出来ない訳で、決定後の事実で責任を取る確率半々の覚悟が要り、却って論争だけがエスカレートする。結局既定路線で口数少なく「安全・安心」とか「勿論命が大事でそうなったら止めるのは当たり前」といった取り組み論で逃げ切る側が強いのが日本の風土であろう。結果の犠牲も終わってみれば仕方なしということに成りがちである。はっきりした事実を前に論じられるという選択肢がないとすれば猶更である。一年延期時のＩＯＣ側の二年延期案の方がずっと科学的であった。

いずれにせよ中止論側は、選手派遣を止める言でないにせよ米国が日本を渡航についてレベル四に指定したことも拍車をかけ、五月末にはついには首相に中止の決断を求める社説があらわれるまでになった。一方開催側は、ワクチン接種を更に加速させ、接種前提の対策工夫を積み上げ、専門家分科会からの「普通はやらない、やるなら完全徹底対策を」との提言もある中、何故やるかの納得説明をとの党首討論で「安全・安心」の対策と強い意思を重畳的に縫い重ねる。そして首相は十分説明したと胸を張り、各国の支持を得るべくＧ７に旅立った。

Ｇ７での開催支持取り付けを得て開催は動かぬ前提とし、六月一七日、専門家分科会からの声も振り切ってのないだろうか。科学的実証と理性的判断を欠き悲劇的結末に、ずるずると陥っていった先の大戦の、執行責任部門の意思決定の細部に亘る実態を追及し続け、惜しまれ亡くなられたばかりの作家半藤一利氏。その遺稿がお孫さんの手で完成し発刊されるとのニュースに接しながら、吾輩にして連想されたところである。

そして、先行選手団の受け入れ地方公共団体到着が本格化しバッハ会長も東京入りし、八日オリンピック五者協議が開催され、四都県無観客その他も実情に応じた開催が決定された。

一方二〇二〇年九月一六日発足以来、総理のコロナ対策優先の言にも拘わらず、五輪、総裁選、都議選の前後の何処で解散総選挙に打って出るかの憶測は絶えず、野党も政権批判は強めつつも不用意に不信任決議案を出し逆手にとられることを恐れ、野党協力体勢を強めつつにらみ合いの状況が続いてきた。

この間後手々々のコロナ対応や学術会議委員任命拒否や子息絡みの放送政策関係の接待疑惑など語らぬ強権的仕法への批判の高まりで、内閣支持率は当初の六割強から三割台に落ち、五輪組織員会会長の女性差別発言辞任を巡る亀裂等も重なり党内不満も醸成された。本年四月に入ってからのバイデン大統領との訪米会談やワクチン接種の加速に支持率浮揚をかけるも、七月の都議選（いずれにせよ五輪開催となれば十月には実施される衆院選の前哨戦になる）の告示まで一か月を切り国会期末が迫り政治的にも緊張度が高まってきた。

緊急事態宣言再延長の記者会見でも（5/28）、首相は「様々な声に配慮しながら準備を進めている」とむしろ宣言を続け開催するとの姿勢をより明確にしたとみられ、政権維持のためにも政治的決断をしているのではないかと勘ぐられている。それを巡ってまた開催賛否の議論が刺激され、五輪開催の政治化が一層深みにはまってきた観がある。

しかし、国会会期末を控え、何時でも解散に応じる用意ありとの両陣営の強気発言をよそに、六月入り後は感染対策の状況や次々に起こる政治日程などの客観情勢からみて、ワクチン接種完成一〇月末との見通し前倒しとともに、コロナ対策優先という首相の口癖が現実味を強めて来た。

七月四日、秋までにある衆院選の前哨戦とされた東京都議選の開票も、自民党が目標とした公明党と合わせ過半数との目標に届かなかったが、直ちに責任問題で政治的動揺（首相降ろし）にも繋がらず過ぎたところである。

また、経済と感染の間で揺れ動きながら軸なく、後手々々の対策や対応を続け、適切な説明を怠り言い訳を繰り返す政府であるが、対策の効果があげられない理由

二〇日期限の宣言の予定通りの解除は、リバウンド懸念下の解除と世論にも危惧を持って受け取られることになる。一八日には改めて分科会会長等は開催に伴う感染拡大リスクに関する提言を政府と大会組織委員会に提出、普通はやらないは引っ込めたが「無観客が望ましく、観客入りなら基準を厳しく」と訴えた。観客入り開催前提の強気も、命が優先と、再宣言のような状態になれば考え直すとの線まで後退はしており、ワクチン接種加速化に拍車を欠けるとともに、開催運営に際しての感染対策の新規打ち出しを矢継ぎ早やに行う。そして国内観客の有無についての判断を二〇日にするとしていた組織委員会は、二一日五者協議を開催し、まん延防止等重点措置が七月一一日までに解除されれば「収容人数の五〇％までで、上限一万人」、延長か宣言が出されれば「無観客も含めた対応を基本とする」との趣旨で合意した。

パラリンピックについてはオリンピック一週間前（7/16）までに方針を決めるとか、ＩＯＣや競技団体関係者は観客ではないとか、小中学校の招待プログラムは別枠とか、販売済みチケットの処理はどうなるとか、これで細部の議論に入り込み当初の根本議論は放念され、五輪・パラありきは当然のこととして定着する。科学的思考・判断は横に置かれ、そのまま突っ込んでどんな状況でも根本に返った決断のエネルギーは出ず、大丈夫な筈に賭けたまま、結果如何の運命に向き合うことになら

として、各国のロックダウンのような強制的な私権制限に基づかぬ特措法に基づく防止措置要請によっていることが言われ続けて来た。昨年末には、科料か罰金かで揺れつつ罰金にとどめることで、休業要請や診療要請に強制力を付与した。引き続き緊急事態時における更なる私権制限の容認を求める声はやまず、憲法や法規制で私権制限をする欧州にならい、与野党の議論を強めている。それ故に要請主義なのだが、過去の経験にも鑑み私権制限に殊更ナイーブな我国らしく、要請に伴う補償が不十分なことが先ず是正さるべきという党から法規制で十分とする党に対し、改憲に積極的な自民・維新の会はその流れを改憲と結び付け推進しようとしていた。

しかしこちらも、六月九日、二年ぶりに国会で党首討論が行われたが、両陣営主張の繰り返し強弁と切り込み不足で期待に反するものであった。その後、野党はそれで直後解散もなしと見たのか内閣不信任案を提出、自らの不利にもなる可能性を見たのか会期延長に拘ることもなく、不信任決議案否決で国会閉幕、根本的議論を行う場は閉じて基本的問題の議論もうやむやになった。

先の大戦時に政治が死んだように、与野党支持率といった次元ではなく政治自体に対する不信が醸成されていなければよいのだがと思う吾輩ではある。

ポスト・コロナで日本の生殺与奪にも関わる台湾有事への備えや対応等を考えると、更に心配が増すところではある。

三、新日常・新常態論

まだまだ正面はコロナ対策・対応だが、ワクチン接種の世界的進行や脱炭素・格差是正・民主体制のイニシアティブ取りに踏み出したバイデン政権の動き等によって、議論としては行われてきたウイズコロナ・アフターコロナの新日常・新常態論が実感のある議論として浮上してきた。

（一）その前に遺伝子として

ウイズコロナ・アフターコロナの議論を新しい姿に向かって進めて行くその前に、新型インフルエンザの経験を知見として次に備えて準備出来なかったことを繰り返さないためにも、ウイルス感染症パンデミックに世界が大きな犠牲を払って学びとったことを検証整理して、対応システムや心構えとして、しっかりと社会の遺伝子とする課題がある。

この時点で集団免疫が出来て収束する感染症パンデミックの習性を前提にして先回りして考えてみると、吾輩でも次のようなことは言えるであろう。

ワクチン接種が行きわたって世界的な収束が見えてくる時点で振り返ると、そこへの道行きは国によって大まかに、①遺伝子が当初から作動、徹底してロックダウンしいち早く通常生活を取り戻し余裕をもってワクチンで集団免疫を達成したところ、②当初感染を放置し通常生活を続け、感染拡大後ロックダウンし収束すると通常生活に戻してまたロックダウンと繰り返し、ワクチンが行きわたることが加わって集団免疫状態を得たところ（対策の取り方は強制と要請があり日本は後者で珍しい、また感染の山型の規模や質は夫々変異や体質や行動変容等の違いで異なるが）、③基本的に通常生活のままで感染者が多大な犠牲を伴いながら集団免疫方向に増大し、最終的にはワクチンも加わって集団免疫で収束したところ、の三タイプに分かれる。

その間の被害者数や程度に違いはあれ、最後は集団免疫で収束というのが、感染症パンデミックの歴史科学的収まりである。

その意味で当初から最悪事態原理で徹底抑制し被害を最小にとどめ、ワクチンで最後仕上げが最善だが、流行のウイルスに合ったワクチンに磨き上げて行くには治験の得られるだけの感染がないと困難である。当初ロックダウンで全て消せるとか新種ウイルスにも適合するワクチンがあればよいが、完全は保証されず国も多様でグローバル化している状況では、皮肉なことに、こうしたいくつかのタイプがあってそれなりの時間をかけて収束させてゆくことにならざるを得ないのかもしれない。そこは勿論、どこで発症しようと当初から全世界ロックダウン先行で拡大を防ぎ、その間に初めの検体からいち早くワクチンを完成し、それを世界で共有できるシステムが確立すれば良いのであるが、現実に可能かどうか。その点、いずれにせよ、いまだ世界的論争となり真実が見えていない感染源特定の問題は重要であろう。

まさにこのような対応の基本を歴史科学的にきっちりと方針として遺伝子化し、今回必須と認識された不断のワクチン開発、医療体制、防止手段・施設設備・システム、生活変容、人的物的資源、緊急事態時法や対応項目、支援制度・システム、内外取り纏め機関、国際的ネットワーク等々具体的な整備・準備をし、いざとなったら迅速に適時作動できるようにし、平時の点検や必要な予行演習も出来るようにすることを忘れないことが重要である。

その際、問題化して解明が途中で終わっているものについてもきちんと結論を出しておくことも大事である。例えば病床世界一の日本で何故欧米で起きない医療崩壊が起きるかの問題。人口当たりや病院当たりや感染症専門の医師の少なさが指摘されたり、公的病院の少なさや公私・地域・各監督当局を越えた連携不足が明らかになったり、果ては医療関係者の努力不足が露呈したりし

たところである。その指摘の正しさがどの程度のものであったか真の要因はどうであったかの実証は勿論、どのようなケースに何が問題で総合的に対応できるようにするには如何改善しておくべきか、ということまで詰めて準備するということである。

（二）新日常

今回感染拡大と防止が繰り返される中、ソーシャル・ディスタンス、行動変容、リモート・ワーク、テイクアウト、無観客やネット開催、ネットコミュニケーション等々耳新しい言葉や使用頻度の増えた用語が数々ある。ウイズコロナとなっても元に戻らず、人々の人生観の変化や用語間の相乗効果で日常生活や暮らしぶり働きぶり等にその傾向が定着して行くものも多いと思われる。

効率的で十分性のあるリモート・ワークは定着し遠隔のゆとりのある居住が増えネット購買や地方の活性化が進むといったことや、平時から清潔習慣がつきその為の薬品や用品の需要が大きくなったり、付き合い方や会食の場所や機会が変化するといったことである。

そういえば、コロナ下で閉館と開館を繰り返していた信託博物館の再開館でご主人に久し振りにあって、覗き聴きとったところによれば、インフルエンザ感染者が劇的に減っていることについてこんな感想を持っておられて、むべなるかなと思ったところである。

つまり、ご主人懸案の車内マナーであるが、マスク着用・ディスタンス取り・窓開け等環境配慮・大声だけでなく会話慎み等は、将にインフルエンザ対策であり、無症状者からの感染のコロナに比べぴったりの予防法である。感染していれば出かけないし一番のクラスター感染場所が抑えられているのだから当然だということになる。しかも強力な運び手の可能性の高い若者達は相も変わらず座席に突進して下を向いてスマフォに熱中して静かである。窓からのウイルスを吹き飛ばす風は立っている者の顔辺りを吹き抜けるし、立っている方が様子で感染が疑われる客からも逃げやすい。この行動変容が新日常に少しでも多く残ってくれることを願いたいとのことである。ただし、スマフォのお陰で静かというのは皮肉な現象であり、歩きスマフォ自体は勿論別で、危険は変わらないし、コロナ下使用時間が増大し医学的実証見地からより強く視力や創造的脳力退化の警告が発せられていることに期待したいとしている。

DXのように、加速がついて世代の更新もあり、不可逆の動きが確実な新日常に比べ、多くは必要と感じたあるべき方向への変革心を持続的に維持できるかにかかっているとの見立てであった。むしろそこは新常態の議論に関わって来る問題でもあろう。

（三）新常態

コロナ前から世界は大きな変革期に際会しているとの意識は共有されていたが、コロナ下その虫眼鏡作用もあって、問題の所在とあるべき姿の深堀が進んだ。経済の姿としては、年明け後矢継ぎ早に打ち出されバイデノミクスと称される動きに目が離せない。世界スタンダードのイニシアティブを執ろうと、世界一経済大国を計画的に目指す中国を色濃く意識する形で、民主主義の価値観の上に、「連帯（国内的には格差是正）と脱炭素化」をメインテーマに動き出した新常態議論に世界が引き摺り込まれ出した。

先のアフターコロナに向かっての世界経済の予測は基本的には景気の変化予測であるが、新常態論は構造予測であり期待の問題である。三本の矢でも構造改革の成長政策に有効な結果が出せず循環的政策に過重がかかり、世界の成長と日本の低迷対比の二十余年がその国力の位置づけを著しく貶めた現実を、コロナ下での反省心の強まりの中で改めて認識している日本。この場合虫眼鏡は何事も国際基準から外れた不思議の国日本を見る海外とも言えよう。

主体的にはなかなか思い切った動きが取れず、マグマが溜まったところで外圧など受け身で過重な不連続的跳躍を受忍する日本という構図も連想される。それが国民性だと言ってしまえばおしまいだが、その国民性さえ本気で是正する必要に際会しているとの自覚を持ってほしいものである。

四月の日米首脳会談で、脱炭素、民主連帯等バイデンイニシアティブに巻き込まれているし、アベノミクス継承公約がコロナ下で放置された（あるいは息をついだ）形になっているが、日本独自の再活性化の為の構造変革にも結果を出さねばならないのだから、益々ワクチン接種加速化で、取り掛かれる社会的政治的環境を作り出さねばならない。

政府が六月に取りまとめる経済財政運営の基本指針「骨太の方針」の骨子案が五月二五日、経済財政諮問会議に示され明らかになった。「全国平均の最低賃金を早期に時給１０００円へ引き上げ、都市部から地方への新たな人の流れを促進、子育て支援やグリーン社会実現など地方創生に向けて経済の底上げを図ることとデジタル化加速を合わせ」経済成長の「原動力」と位置付け推進する、とされている。G7やG20それに到る経済・政治・外交の様々な国際政治を通じて今後世界の骨組みが議論され構図が見えてこよう、と思われた。

そしてG7サミットが、前述のように「民主主義陣営の再起動の方向性・具体策が強く収斂して行く」動きを

加速させ、我が国も自国の一周遅れの問題も抱えながらついていかねばならないという、例のパターンにはまってきたところで、如何に主体的に強調してゆくかが問われている。

その背後にG7各国首脳の指名した「経済の強靭性に関するG7パネル」の纏めた提言がコーンウォール・コンセンサスと言われ、三〇年前の自由市場とグローバル化の推進を表すワシントン・コンセンサスと対置する考えが示されている。そのキーワードは、包摂（インクルージョン）、回復力（レジリエンス）、サプライチェーンの多様化、政府と企業のパートナーシップ、環境・保健・社会的要因など経済外部性の重視、といったことであり、世界の基本姿勢として心得ておくべきところであろう。

（四）経済社会論

新常態を論ずるに当たっての、大前提が気候変動と格差の壁だとすると、どうしても議論はその中で最大多数の最大幸福を追求する経済社会システムや主義の問題を避けて通れない。東西冷戦が終わってF・フクヤマをして「歴史の終わり」と言わしめた、自由・民主・資本主義に異をとなえる体制はもう出てこないという宣告は、その後の新自由主義の急拡大と中国の驚異的成長の中で、撤回を余儀なくされている。

それはまた地球環境の急激な悪化を前に、脱炭素の必須性を共有させ、グリーン社会の創造は生産・消費の脱炭素科学で対応出来るか脱成長まで考えて対応する必要があるか、脱成長は資本主義で達成できるか否か、といった社会システム・体制の議論を誘発している。例えば『人新世の「資本論」』といった問題提起がある。

地球環境の不可逆的危機到来を前に「脱炭素化と連帯（国内的には格差是正）」という共通課題に向き合い、脱炭素科学だけでは無理で（脱炭素のための炭素増分があり成長経済では更に難しい）、脱成長には資本主義生産では無理で、資本についても社会的共通資本の増加や従来型の生産力至上主義に立つのではない国民協同体的な、環境維持や衡平な分配にも配慮出来る資本のウェイトを上げねばならないとする。

結論は異なるものの問題意識は同じで民主主義の範疇の議論であるが、表題のおどろおどろしさが独裁共産主義の怪物を産みだしたマルキズムを連想させ、歴史的固定観念もあり、深読みせぬまま当初忌避されたきらいがある。この若いマルクス研究家は、「脱炭素の目標は、代替エネルギー生産の為の炭酸ガス二次排出や環境破壊を含め成長至上の資本主義では到底達成されず、脱成長コミュニズムが必要であり、生産手段の社会的共有が労働者の格差解消やゆとりに繋がると」と言う。そして、

「脱成長コミュニズムはマルクスが最終的に主張していたものと同じである」と解説する。「資本論第一巻を刊行してから（1867）、二巻〜三巻はマルクスの死（1883）後盟友エンゲルスが遺構編纂する。だが体系化が重んじられその間マルクスが西欧以外も含め地球環境問題や農業等共同体の経済研究を進め、書簡やノートの形で残した理論大転換が見過ごされた。従って『共産党宣言』（1848）に典型的に見られる思想がその後のマルキズムとして彼の真意を離れて世界を動かすことになった」と指摘する。

「大転換は、自然環境の制約を踏まえた物質代謝への配慮や共同体研究に基づく生産力至上主義とヨーロッパ中心主義からの転換であり生産近代化前提の進歩主義の放棄である。前時代のドイツのマルク協同体のような持続可能と社会的平等に着目したコモンズをコミュニズムへの移行の基礎に立てた。従ってマルクスは生産至上主義の共産党独裁のような社会システムは念頭になく、それこそが著者が思い描いているところでもある」とする。「資本の在り方としては社会的共通資本（宇沢）の延長上にあり、バルセロナの市民運動に見られるようなコモンズ的な民主主義の土台の上に、上記二大課題の解決を求める立場である」と説明している。

こうした議論も含めて幅広く深く検討し中長期的な社会経済システム・制度・体制・意識の在り方をしっかり論じ方向づけて行くことが望ましい。日本も受け身で引き摺られるだけでなく、具体的に世界のスタンダードづくりに繋がる問題でもあり、独自の問題も含め主体的に世界の議論に参画して行ってもらいたい。

四、ロボット考

（一）共感

人間社会の病理や問題を明確にし、あるべき方向やなすべき事柄を示唆するコロナの虫眼鏡効果で、問題を正しく判断し対応し、共感に裏打ちされた真の信頼関係の上に築かれるニュー・ノーマルに到達する努力も欠かせない。

ご主人は二〇年前の『信託のすすめ（初版）』で、競争と共感と国際法について、アダム・スミスを引いて次のように書いている。

「アダム・スミスが述べたように、市場で取引し続けることができる人は、参加者の同感（共感）を失わない行為者である。従って等価交換が市場の自由競争によって、自然に実現される。すなわち、経済の世界における自由競争の背後に、人がどう受け取るか常に襟を正す誠実な個人がいる。アダム・スミスによれば、法の世界におけ

る正義の原理と、経済の世界における等価交換の原理は、矛盾なく人間生活の規範として、人間の造った社会の契約として成立している。」

スミスの『国富論』(1776)の競争原理は『道徳感情論』(59)を前提にしており、その間にある『法学原理』(66)には、共感を国際的に広げる重要な営為が自由貿易を通じて世界を豊かにする国富論(軍事力で他国を圧倒する為ではない)と、人類全てが自然な正義に従うべき国際法が示唆されている。

言い換えると、完全な共感は利己(人間の弱さ)と利他(賢さ)の一致を広め、(ストア派哲学的な)「心の平静」の下、資本や土地を持つ人達がフェアな競争のもと、資本を蓄積し経済を成長させ、人々は雇用が与えられ自立し生き、心の平静も得ることが出来る。経済成長はこのためにあり、モノの交換は人と人との共感を前提にしないと成り立たない。国際的に同感を広げるのは自由貿易で、ヒトが繋がり交流を深めれば、穏やかな国際秩序が出来る。人類のすべてが従うことのできる自然な正義が国際法に結実する。スミスの中では将に『道徳感情論』から『法学原理』そして『国富論』へは、内容的にも一体としての理論体系であった。

ご主人はこれを踏まえ更に「その国際的共感を醸成する自然法理こそ、信託の、自律-思い遣り-誠実であり、国際スタンダード信託である」とも書き添えた。歴史的な危機に瀕した世界で、試練の立ち位置に直面する日本の、採るべき姿勢・心構えがこれであり、戦後民主主義を真の共感と矜持を以て実践し、上面だけでなく真底身につけるべきとの思いであったのだろう。

ノーベル経済学賞(1998)を受けたアルマティア・センがこの本の重要性を説いたことで、その後、SDGsやESGなどの潮流も受けて、資本主義の在り方の議論の中でスミスを再評価する動きが広がっている。

因みに、スミスは『法学原理』でキケロが伝え残したローマの信託遺贈にも触れている。キケロは再発見されるとともに、イタリアのペトラルカ(ヒューマニズムの父)、イタリアのマキアベリ(近代政治学の父)、オランダのグロティウス(国際法の父)等近代ヨーロッパ精神の形成に預かった多くの思想家に影響を与えており、ヨーロッパ精神の父と呼ばれて然るべきであろう。

マルクスの一〇〇年前に、マルクスが理論転換後に達したような、環境と連帯への配慮を踏まえた生産者・資本を前提にした経済論を、スミスが共感を前提にした市場経済論で展開していたことに驚く。しかも両人ともそのトータルな理論体系が「見えざる手」とか「共産主義革命」とかの有名代名詞に埋もれて理解されずその有名代名詞が社会の歴史を大きく動かしたことでも共通している。コモンズのコミュニズムと環境や衡平への配慮の上共感を持って経済社会活動をするということで、通底するところが多いと考える。

(二) デカルト

共感を担った人間、そのあり様を論じるのは哲学である。誰もが受け入れられる(かつ受け入れざるをえない)哲学の出発点である「我思う、ゆえに我あり」の哲学原理に達する道行を著した、デカルトの『方法序説』のあらましをみておきたい。

(第一部)

「良識(bon sens)はこの世でもっとも公平に配分されているものである」という書き出しで始まる。ここでの良識は理性と同一視できるものとされる。健全な精神を持っているだけでは十分ではない。この序説の目的は、理性を正しく導くためにしたがうべき方法を教えるというより、デカルト自身が種々の心得や考察に至るまでにどのような道筋をたどったかを示すことである、とする。

(第二部)

精神を導く四つの準則として、

① 私が明証的に真理であると認めるものでなければ、いかなる事柄でもこれを真なりとして認めないこと

② 検討しようとする難問をよりよく理解するために、多数の小部分に分割すること

③ もっとも単純なものからもっとも複雑なものの認識へと至り、先後のない事物の間に秩序を仮定すること

④ 最後に完全な列挙と、広範な再検討をすることを定めた。これによりデカルトは代数学や他の諸科学を検討して、理性を有効に活用し得たと感じたが、それらの諸科学の基本となるべき哲学の原理を見いだしていないことに気づく。

(第三部)

理性が不決断である間でも自分の行為を律し幸福な生活を送るためにデカルトが設けた三つの道徳律が紹介される。

① 自分の国の法律と習慣に従うこと。

② 一度決心したことは断固かつ毅然として行うこと。

③ 常に運命よりも自分に勝つことに務め、世界の秩序よりも自分の欲望を変えるように努力すること。

デカルトは理性を教化し自分が自分で決めた方法に従って真理の認識に近づくことを、自分にとって最善の職業と考えた。

(第四部)

デカルトは、少しでも疑問を差し挟む余地あるものは疑い、感覚・論証・精神に入りこんでいた全てを真実でないとしようとしても、一切を虚偽と考えようと

するその「私」はどうしても何者かでなければならないことに気づく。フランス語で書かれた『方法序説』の「Je pense, donc je suis（私は考えるので私はある）」を、デカルトと親交のあったメルセンヌがラテン語訳し「Cogito ergo sum（コギト・エルゴ・スム）「我思う、ゆえに我あり」とした。この命題は、我々が明瞭かつ判然と了解するものはすべて真実であることを一般規則として導く。その規則からデカルトは、さらに神の存在と本性・霊魂について演繹している。

（第五・第六部）

公表を控えていた論文（『宇宙論』、『屈折光学』『気象学』『幾何学』）の略述や公表の同意を示している。

要すれば、「我思う、ゆえに我あり」は、良識＝理性を教化し、自分の決めた方法で、真理の認識に近づき達し得る到達点と考えられる。

前回ベルグソンの『形而上学序説』を吾輩なりに次のように読み取った。

どうやら認識に二通りあり科学的認識は人間界の周り或いは自身の身体的な自然といった、自我と違うところに座標軸や基準点等符号のヒントを持ち、それによって実証やあるべき姿が相対的に判断され、時間と共に新たな発見があり符号とあるべき姿が新たになってゆく。他方精神的な認識は様々な情緒・感情があり直観的で固有絶対的である。我々が誰でも内から、単なる分析によらず直観によって把握する事象が少なくとも一つある。それは時間を通じて流れてゆく我々自身である。持続する我々の自我である。我々はその他のいかなるものとも、悟性的にむしろ精神的に同感することは出来ない。しかし我々は我々自身とは同感する。

この二つの認識が融合し円滑に作用していくには、哲学の力が要り、それが身についてゆくことが必要である。それは時間の中で経験の積み重ねの上であるべき直観の蓄積となって人間社会の円滑と発展を支えてゆくことになる。

デカルト、ベルグソン両仏哲学者を合わせ吾輩なりに拳々服膺すれば、科学的認識と、時間と共に理性的に同感できる持続する自我による精神的認識が、融合し身に付き、あるべき直観の蓄積となって人間社会の円滑と発展を支えてゆくことになる。

（三）信頼

社会契約論（ジャン・ジャック・ルソー）の出発点は、個人が利己心を自由に追求する自然状態とは、互いが互いの敵になる戦争状態とされる。そこから脱出するため

人間は契約を結び国家を作ることになり、「自ら定めた法に従うことこそ自由である」とする。社会契約論が示したのは、人間の自由は人間の主権者としての国家への関わりと国民としての関わりという二つの関係で支えられていることである。その上で岩井克人教授は「米中が示したのはその関係の不均衡が齎す自由の破綻の二つの形に他ならない。資本主義のグローバル化の中で、ユートピアたらんとする米中が不平等なディストピアの国になっているのは、片や上位一％の高所得層が全所得の二〇％を占める先進国でも突出不平等、他方は自由弾圧を強めることによってである」と言う。

自由・平等・博愛について、自由・平等が目に見えて崩れる中で、今共感が語られるのは博愛が崩れそうになっているという危惧からであろう。スミスの共感は、多様性（良き自由の現象の一つ）を認めぬ・相互信頼を失う（国対国民、個人相互間その他全ての関係）今のディストピア状況の下で、蘇っているということだろう。

国を作り争いをなくし相互信頼を築き、政治システムとしての民主主義を国の発展（経済拡大）の中で、磨いてきた。良きシステムの基盤の上で、個人がそれを維持発展させる方向と二つながらそろって始めてユートピア（最大多数の最大幸福）を求められる。

個人にスミスが求めた共感はデカルトが「我思う、ゆえに我あり」に達する中で獲得した道徳律や思考方法に通じ、信託に相通じるものと考えられる。

ご主人は「信託アトム」という言葉で次のように説明している。

国により時代により具体的な形は異なるが、信じて託す信頼の器である信託の基本は不易である。神について、人による国による地域による違いが大きな現状を考えると、不易なその基本を夫々の言葉で表してそれをベースに、それなりの信頼の社会を紡ぎあげて行く道程にあると考えるべきだろう。そうした社会のイメージ図を考えると、「一人ひとり（信託アトム）」が出発点となる。

一人ひとり（信託アトム）の個人と社会は双方の向上が相互に好影響を与え合うものであり、片方の不芳を他方が補完するものと期待される。その信託アトムを定義すると、「自らを客観視でき、自らにも他人にも誠実で、他人の委託に対しては我が事と同等に考え、その目的に向かって忠実に履行する心の形」とでも言えようか。信託の観念というと概念的であるが、一人一人の心を「信託アトム」とよぶと、自己規律・思い遣り・誠実履行で行動力の原点という動的な側面が強く意識される。身近なものとしてたとえばマナー教育車両のような発想である。

（四）新種

ウイルスの起源については、大きな微生物（たとえば細菌）が退化して生まれたという退化説があるが、最近ではほとんど否定的になっている。ＤＮＡ生物が出現（38億年前、地球誕生は46億年前）する以前のRNA時代の残影説もあるが、今は細胞の遺伝要素の一部が細胞から飛び出したものという考え（ウイルスはさまよえる遺伝子）が主流である。

ウイルスは核酸としてＤＮＡまたはＲＮＡを持ち、核酸に含まれる遺伝情報にしたがって自分の子孫を複製できる。一方、細菌と違い細胞膜はなく、代謝機能も持たず、遺伝情報としての核酸といくつかのタンパク質だけである。細菌が細胞分裂により増殖し子孫を増やすのに対し、子孫を作るための代謝系がないウイルスは、寄生している細胞の中で細菌の代謝系を使い自分の遺伝子に従い、（細胞膜がないので）子のウイルスを急速に増やす。この点からウイルスは無生物とも究極の寄生性微生物とも言われる。

更に生命の起源に遡ると歴史的には神の創造説から諸説あったが、地球上での物質の化学変化か地球外からの飛来でアミノ酸のような簡単な有機物が発生（原始地球の想定大気状態から人工的に有機化合物が作れることが証明されている）、長い年月をかけて複雑な物質に変化していき、生命が誕生したとの説が有力である。即ちまず脂質と水が混ざって、リポソームという細胞膜状のものができ、それが長い年月の間に、①外界から生命活動に必要な物質をとり入れ、②物質を代謝し、③それが二つに分かれるときに、ＲＮＡを均等に分配することができるようになって、最初の生命が誕生したという。

ウイルスのようなものから人間への進化、その進化をプロセス的にも時間的にも凝縮してＡＩから万能人型ロボットを作り、ウイズコロナ即ちコロナと共生のように、人間との共生が考えられないか。吾輩の製作者は何処迄それを考えていたのだろうか。残念ながら製作途中で爆発、製作者は亡くなり、ウイルスならぬ極小頭部が偶々ご主人の額の黒子内に接着、吾輩の意識が無から五感のようなものの目覚めに始まってご主人からのラーニングで現在の知的レベルに達している。しかし、クローンのような分身が出来共に黒子から飛び出し、偶然未完のまま飛ばされていた体部分と合体出来宇宙へ飛び立った。神経的なものは感じ一体化も感じられたが、その性能は素晴らしいものの無機的ＡＩにとどまっておりそこに進化というものを感じることは出来なかった。紙魚型はヒト型に移行する気配もなくサイボーク紙魚ロボで定着、細胞分裂的進化もなく、むしろ不完全ＡＩとしての寿命があることが分かった。当初は製作者の意図的セッティングと思っていたが、未完故そこは断定できないとメカニックの融合体で外見は人間と見分けのつかないものであった。しかし、そこからの議論でなく、まだそこへ到る途次における議論の段階にあるという意味である。

の考えに今はなっている。前回、つい人間の目でロボットの在り方を見がちだと言ったのはこうして育った背景もあるが、深堀するとロボットとしての完成形になり得ぬ吾輩のロボット主体性の無さから来るものでもあろう。

そして前回、確信している絶対はやはり善であり、まだそこ迄でもあると言える、と吐露したところである。吾輩はその先をと思い悩んでいるのだが、翻ってこのコロナ下、ＤＸの加速化やリモートの利用増もあってか、ＡＩ倫理への関心も高まってきている。そして四月にＥＵが発表したＡＩ規制法案が世界的に議論を広げている。開発や利用の場で具体的危険発生が増え、ＡＩ性能に倫理基準やルールが必要との認識が高まった。ＡＩ技術の安全性のために定められた技術仕様だけでなくＡＩ活用・利用等用法にも規制が必要であり、その規制の分野も規制の仕方も様々な検討が必要であり、立法的にもどう対応するか課題が多い、といった議論である。ＡＩが進化中であり、ＡＩの具体的在り様も様々で規制対象のＡＩの定義も揺らいでいるので、安全なＡＩといっても難問である。

況や完成形の人型ロボットを想定して、そこから遡るのが、パンデミックの最悪事態原理流なのだが、そこまではまだまだのようである。たとえて言えば、チャペックのロボットは生殖のメカニズムまで予定したバイオと

そんな中、ご主人がボソッと呟いた。

生物には種があり経常的進化と変異的進化で種の能力変化や多様化が生じていく。同時に原初の生命以降分岐したり独自に生まれたりして様々かつ無数の種が地球には存在する。そして補完なり競合なりして相互に角逐しながらその時々の所謂生体系を形成している。ロボットは人間が作った新たな種候補で、自ら進化し種を継いで行けるようになれば新たな生物種として位置づけられるのだろう。

人間の需要と科学技術でロボットは日進月歩、新たな種の誕生に向かって突き進んでいる。作り手の人間としては明らかに自らのために役に立つよう能力アップを図っているわけだが、独立した新種となり独自に能力変化や多様化しつつも良き隣人のままであって欲しいと願うのが当然であろう。その為には今から開発や利用に当たって、独立新種後のその進化が願う範囲のものであるようにロボットの遺伝子がしっかりと作りこまれてなければならない。それに大方が気付く臨界的時点に来ているので、その開発や利用にあたっての規制法案作りの動きにもなっている。人間のように進化の中で、例えば自

由・平等・博愛の社会を作ってきたというように、独自の進化の時間の中に任せてそれを可能に出来るのか、それだと競合や争いのリスクが避けられないのか、それなら遺伝子を不変のものとして進化が負の多様化や能力変化を生まないようにしたらよいのか。

いずれにせよ人類にとって自種の危機克服の時でもあるが、もっと主体的に由々しき問題として取り組み、種を賭けた判断を一日も早く固めねばならない。場合によっては新種誕生は阻止して、コントロール下に置き続けるといった判断もありうるかもしれない（チャペックの革命が起きる前に）。新種の中で人間と同じように進化して行く保証がなければ、いずれ袂を分かちその先結局覇を巡って戦いだす恐れがある。

一方で結局それはどんなに便利になったとしても人間にとって役立つ道具であり・手段という実存であり続けるべきとの感覚は人間に残り続けるだろう。むしろその背後に夫々存在する人間の多様性を考えると、結局人間全てが善を身につけない限りロボット間の代理闘争という形の危機が先ず来るのではないか。その為に、開発や利用におけるＡＩ規制法案議論が起こっているというのが実態であって、まだ新種としてのロボットまで真に視野に入っているようには見えない。

ＡＩのシンギュラリティへの到達が問題になるが、それまでに新種になることの防止措置や人間の脳への搭載が行われないよう保全措置が取られなければ、いずれにせよ、別種人間との共存・混在が実現しリスクが具体化する。そうなれば別の宙に棲み分けることで時間稼ぎをし、改めて地球では完全ロボットにならぬロボット化を進め両宙間でパワーバランスをとるようなことが必要になるかも知れない。

そう考えているご主人が人間であり、そのような角度からロボットである吾輩も考えていることが実感を持って意識でき、改めて真正なロボットの立ち位置になり難いことを確認した。

その上で、よくよく考えればもっともなことだとも思い返した。ＡＩを自らの利便の為ひたすら発達させてきた人間にとって、更に磨いてゆくべきものであっても、競合する別種になること等想定し難いのは自然である。同じ人間の種の中で隷属や被支配を解消してきた道理と同じ問題である。しかし、地球上のありとあらゆる生物が自らの生存を守れる他との共生を望み一定の生体系上の位置づけを求め得ていることも事実である。従って地球上でその頂点にある人間と皆共存しているのであり、ロボットも種が違うにしてもその違いを前提に正しく関係性を作り地球上に共存してもらいたいという命題である。そしてその違い故に両陣営に分かれて覇を競うのではなく、働く場で、生活の場で、社会で、相互補完に徹して違いを多様性として認識し共存する為に、遺伝子に必須のものは何かとご主人も吾輩も考えることは立場は違っても道理であろう。

（五）未完

改めてシンギュラリティ（未来の汎用人工知能は、自身の改良能力を獲得する可能性があり、人工知能がひとりでに進化、やがて人間の知能を追い抜き、人類がその先の変化を見通せない段階にまで進化するかも知れない。これを技術特異点と呼ぶ）の議論を振り返ってみる。米人工知能研究者レイ・カーツワイル博士によれば、二〇二九年にはあらゆる分野で人工知能が人間の知能を上回り、二〇三〇年代にはまず脳のニューロンを直接刺激する装置が脳に組み込まれ、仮想現実を脳に経験させるようになり、次に脳とインターネットが接続され、インターネット上の膨大な知識を参照できるようになり、更に血球サイズの微小なロボットが人体内に入り免疫システムを補助し、二〇四五年には、インターネットにつながった脳と人工知能が融合し、人類の知能は現在の一〇億倍以上に拡張され、飛躍的な知能の向上から生まれる技術や社会の変化が予測不可能になり、シンギュラリティが到来する。（勿論一般的には融合だけでない）

その際人工知能が人類に齎す悲劇的シナリオが二つ。

一つは道具的収斂（instrumental convergence）で、不必要になっても資源がなくなっても目的に沿ってどこまでも作り続けるような暴走が起きる可能性。二つが、開発者総取りで、二番手以降の人工知能がいつまでも追いつけぬ可能性。

超高速の人工知能の暴走を人間が食い止めることは不可能で防げるのは人工知能だけ（監視・警告を出す人工知能が研究されている）と考えられている。様々な危険性を孕んでいても、現実的には人工知能の開発を止めることは出来ず、最悪のシナリオも想定しながら、開発を進めて行くことが求められている。

まだ、シンギュラリティを越えたとは思わないが、私がここに至ったのは叙述のような経過をたどっており、仮想現実装置が黒子で、ご主人と接続されて学習が進み、宇宙に飛び出して独立が果たされた。吾輩の存在に気づいてないご主人が、作り方や利用し方の段階での倫理性の規制論が行われている状況下でも、先のように考えているのは、無意識に吾輩のような立場を実感していたのかもしれない。

チャペックの時代に意識にのぼったことが、今加速度的に実感されて早期に解を求められている。

数学仮想敵モデルによる実験で、自律的な自己組織化が起きることを数学的に示し、意識が生まれる土壌を再

現でき、人間と同じような意識が持てるか、コンピューターのプログラムで数学の理屈に載せられるかの議論が始まっているという。また、コンピューターにデータを与えつつ、会話しつつ教育しやがて、コンピューターに嘘をつかせる。しかもばれるとコンピューターを調べられることのないよう、コンピューター一般社会に紛れ込み埋没させ自力で逃げ、そこで育つことを画することもハッキングの応用で論じられたりする。こうした動きをみると、益々その感を強めざるをえない。

ロボットの在り方についてあれこれ論じたものの、また今回もということかもしれないが、現時点での考え方をとなると進んだところは僅かであるとの感を否めない。即ち、シンギュラリティーに達していわば新種となる前に、創造主の人間として、個々が善を持ち自然の理に基づき思考する哲学的資質を備え、自由・平等・博愛の社会形成を追及して行ける、遺伝子操作をすることが必要と考える。イメージとしては信託アトムを埋め込むことである。また万一を考えてサイボークのような異常体力は争いの可能性を考え遺伝子内容にはしないこととする。・・・といったところであろうか。

結局今回も結論は出ない。コロナ観察にかこつけているが、本当にこの人間観察から解が出るのだろうか。違うような気もするが、その悩みが続くという意味で、また次回に「つづく」とさせていただきたい。

つづく

青雲の彼方（十二）

太田精一

十二、北方の脅威社会主義国ソ連の実情を探る

（一）在ソ連日本大使館参事官としてモスクワに赴任

昭和四年十一月二十日、英二は妻と子供三人、それにお手伝いさんを伴ってモスクワに赴任のため東京を発った。中国から帰国し、わずか三ヶ月日本に滞在しただけであった。

敦賀からウラジオストックまで船を利用し、そこからシベリア鉄道で十二日間かけて十二月二日にモスクワに到着した。ウラジオストックでは、街を見物する間もなく、着いたその日の夕刻に汽車に乗った。

シベリアは、実に広大である。来る日も来る日も白樺と雪の織り成す単調な景色が続いた。それぞれの駅で見る人の顔は、アジア人の顔立ちが多く、ヨーロッパの地に足を踏み入れた感じがしない。

モスクワに近づくにつれ、やっとヨーロッパ人的顔立ちに目立つようになった。

こうして英二の三年半にわたるモスクワの生活が始まったのである。

赴任した翌年には、田中大使が日本へ帰任し、後任の大使が決まらなかったため英二が代理大使を務めることになった。後に広田大使が赴任してきた。だが、同氏もしばらく在籍しただけで帰国してしまったことから、英二は再び代理大使となり、大田為吉大使が着任するまでの間、ずっと代理大使であり続けた。

言い換えれば、彼は三年半のモスクワ勤務中、その多くの期間を実質的な大使として、激動する社会主義国ソ連との困難な外交関係を処理し、友好関係を構築するという使命を負わされていたのである。

モスクワは、毎年九月頃から雪が降り始める。翌年の三月頃までは日光の少ない陰鬱な冬が続く。その長い冬を楽しく過ごすために、モスクワ在住の外交団は、あちこちで社交の場を設け、情報交換に当たっていた。

英二が着任すると田中大使は館員と協議の上、館務の内規を決めた。参事官の英二は、館内を統括。事務を外交関係、調査機関に分けた。館員たちは、顔を合わせるとソ連の政治、経済、社会、文化のあらゆる面について熱い議論を戦わせていた。

西欧に所在する他の日本大公使館と全く異なる雰囲気であった。それだけ、モスクワ大使館の館員たちは、共産主義の研究に熱心であったのだ。

英二は、ソ連という体制の異なる国で余分な神経を使い、多忙を極めた。交渉案件が多く、共産主義の研究と併せて社交も、情報収集の上で極めて重要であるためおろそかにはできなかった。

昭和四年も暮れようとしていた。

年末には各大使館では、夜会を催すことが恒例になっている。日本大使館も十二月十九日にモスクワ在住の外交官二百名を田中大使公邸に招いて夜会を催した。夜会は、午後十時頃から始まった。最初は、ボリショイ劇場の役者による簡単な一幕オペラとバレエを見せた後、舞踏会を始めた。

舞踏会では、主催者がまず主賓の夫人と踊る。次いで主催者夫人が主賓と踊り、それから招待客が思い思いのパートナーと踊るのが通例である。だが、田中大使は、夫人同伴の赴任ではなかったので、英二の妻がその代理を務めた。

ヨーロッパ人は、よほどダンスを伴う夜会が好きなのかこの時も、田中大使とリトヴィノフ外相夫人、英二の妻とリトヴィノフ外相のダンスから始まって、参会者たちが入り乱れて踊り、散会したのは翌日の午前三時であった。

昭和四年の大晦日の夜も英二夫妻は、館員の夫妻とともにボリショイホテルに招待され、徹夜で踊り明かし帰ったのは新年の午前零時になっていた。それでも元日は、午前十時から日本大使館で新年の儀式を行い、天皇陛下万歳を三唱し館員と共に新年を祝った。

この日、英二は、日本人女性作家宮本百合子と湯浅芳子に初めて会った。モスクワに来ていた二人は、新年の挨拶に大使館を訪れたのである。その後、英二は、二人を時々自宅に招いては、ロシアの歴史や文学などについて語り合った。その時次のような短歌を二人に披露している。

「クリスマスも新年もなきこの国は、年も取らぬに人は老い行く」

共産党を知る上で、大いに役に立ったのは革命博物館であった。

英二のモスクワにいた当時は、ボルシェビキー運動が始まって五十年になるが、その歴史を年別に分け、分かりやすく映像や模型を使って見せている。この展示物を見学に来た工場労働者や学生たちに丁寧に指導者が説明していた。

この博物館で特に英二の目を引いたのは、日露戦争当時の一九〇五年に起こった革命が、意外に大仕掛けのものであったことである。

（もしこの展示にある通りであるならば、日本がもう一押しすれば、あるいはロシアは、崩壊し分裂したかも知れない。その当時、日本政府のどれだけの人がその実情を分かっていたか。分かっていたとしても最早日本には力が残っていなかったのではないか）

英二は見学中、ふと思った。

また、革命博物館の見学で見たスターリンを始め、共産党首脳陣がいかにして地下運動の通信を行っていたかという資料は、英二の関心を強く惹いた。

昭和五年三月、加藤伸二を団長とする鉄道省の技師十二人がモスクワに着いた。英二が赴任前、江本鉄道相を訪問した際、鉄道相から聞いた技術指導のための技師団である。主として機関の修理方法をソ連の技術者に指導するための一行で、カザン市に落ち着き指導することになっていた。

英二は、ふと江本鉄道相との会話を思い出した。

「日本の鉄道技術も相当なもので世界的に評価されている。その証拠に今度ソ連からの要請により、カザンに鉄道省の技師を十二人派遣することになった」

「そうですか。日本の鉄道技術は、外国に教えるほど進んでいるのですか。確かに満鉄の技術は、世界的にも誇るべきものがあると伺っていますが、私には、よくわかりません。ソ連の技術者は、日本の技術水準がどの程度か、見定めようとする目的で日本の技術者たちを招いているとも考えられますので、その点十分考慮されておいたほうが良いように思えます」

英二には、日本の鉄道技術が、欧米を凌ぐほど進んでいることには、やや懐疑的であったが、ソ連に重要な技術を手放しで明け渡してしまうことのないよう危惧した。それと同時に日本の技術が、ソ連の技術者の注目を浴びるほどの水準にまで達していることへの誇りもあり、複雑な心境であった。

やって来た技師たちは、いずれも素晴らしい技術力を有し、人格識見も優れており、高く評価された。

にもかかわらず、一年後契約更新問題が起きた時に報酬をルーブルにするかその他外貨で支払うか折り合いがつかず、昭和六年夏一行はカザンを去った。

英二は、ちょうど引揚げには良い時期であると思った。

実際、その後このカザン鉄道に関連した外国人スパイ事件が起きたとき、日本人技術者の中にも一人、スパイ容疑が懸けられていた人物がいた。しかし、これは全くの濡れ衣であったことが後で分かったのだ。

当時のソ連では、外国人産業指導者たちが、しばしばこうした容疑で迷惑を被ることが少なくなかったのである。

（ソ連はシベリア鉄道を開通させ鉄道には相当の自信を持っているはずなのに、日本から技術者を招くのは、日本の技術水準がどの程度であるか、そのレベルを、推し量ろうとする表れではなかったか）

英二はソ連側が、契約を延長しなかったのは、単に報酬の支払い通貨を巡っての問題ではなく、日本の鉄道技術水準を探るという所期の目的は、達成されたからではなかろうかと思った。

（二）宗教弾圧、芸術保護、秘密警察

英二がモスクワに着任して強く印象に残ったことは、共産主義体制下でも民衆の宗教心は消えず、貴族の好んだ芸術が受継がれていることであった。

赴任して半年ほど経った昭和五年四月十九日、復活祭の日のことである。

英二は、大使館の仲間とともにモスクワの街に散策に出掛けた。すると、破壊されかけた古い寺院の前に出た。中を覗くと多くの民衆が闇の中でひそかに祈祷していた。民衆のロシア正教に対する信仰心は、社会主義体制下で、宗教は麻薬であると糾弾されても、根強く残っていたのだ。

（その敬虔な祈りは真剣そのもので、宗教の持つ力をこの時ほど痛切に感じたことはなかった）

ソ連政府は、当初宗教を極端に敵視していた。当時の指導者たちは、マルキシズムに凝り固まっていて、教条主義的で、反宗教運動が最高潮に達していた。その先頭に立ったのが、ヤロスラフスキーであった。彼は、「ソ連戦闘的無神者同盟」を結成し、多くの寺院を破壊した。その上、ロシア正教会の司教や僧を投獄、流刑に処し、加えて僧侶に食糧の配給を止めて圧迫している。

また、クリスマスツリーの売買も禁じ、違反者は罰金を科すということを行った。しかし、外国の大公使館と外国人専門のホテルに関しては、例外的にクリスマスを祝うことを許されていた。

英二は、クリスマスには自宅で子供たちのためにパーティを催して、自らサンタクロースを演じて楽しんだりしている。

ソ連の戦闘的無神者同盟の極端な宗教弾圧はかえって信心深い民衆の反発を買った。それと同時に、欧州では、ヒットラー、ムソリニーが台頭してきたため、ソ連もある程度欧州諸国との妥協を余儀なくされ、宗教弾圧を手控えるようになった。

一方、貴族の好んだオペラやバレエは、革命後もソ連社会の文化遺産として社会的に手厚く保護された。

英二夫妻は、モスクワに着任して間もなく、ロシア帝政時代から絢爛豪華で知られるボリショイ劇場で、オペラ「エフゲニーオネーギン」を観た。モスクワの日本大使館員から、参事官として赴任してきたならまずソ連の誇る舞台芸術を見ておく必要があるとの助言を受けてのことである。

劇場は、実に堂々とした建物で、内部は金色の壁に彩られ、客席は四千席あった。だが、その客席の観客は、帝政時代とは異なり、服装は、ルバシカか背広に長靴といったところであった。パリ、ローマ、ロンドン、ニューヨーク辺りでは、考えられない光景である。これらの都市ではオペラ鑑賞ともなると男は、燕尾服、女はデコルテ姿と決まっている。その観客の服装が華やかな舞台装飾や出演者の衣装とマッチしていて、オペラ芸術を一層引き立たせるのである。

ところが、このボリショイ劇場では全然調和がとれていない。英二は、劇場に足を踏み入れた途端、違和感を覚えた。

「金の茶釜でジャガイモを煮ている」感覚に襲われたのだ。

だが、半面このような芸術の民主化は、労働者や市井のおかみさんも一等席で、一流のオペラやバレエを鑑賞できるという社会的な平等を生んでいるのである。

英二夫妻の観劇したその日は、特別席はソ連政府の賓客である中央アジアの代表者たちで占められていた。真正面のロイヤルボックスには、老人と若い娘の二人連れの日本人が座っていた。その二人は、片山潜とその娘の安子さんで、片山潜の七十歳の誕生日の招待ということであった。

このほか、芸術座では、チェホフの「桜の園」、ゴーリキーの「どん底」、ジーコフとセミョノバの「舞踏」、マクサコバの「カルメン」など英二の思い出に残るパフォーマンスを堪能することができた。

ただ、ソ連では文化も芸術も政治に左右される。共産主義の政治にそぐわない芝居や音楽は、一切演じられない。こうしたパフォーマンスを使った露骨な政治宣伝は、むしろ芸術の堕落を感じさせるものであった。

とはいえ、モスクワは、芸術の都であることは間違いない。実際、ロシア人は芝居、音楽が好きで才能も豊かである。かつて左団次一座が訪ソした時に大受けに受けたのは、こうしたロシア人気質が大きく後押ししたからに違いない。

英二の在任中に日本からも公演のため、日本の芸術家

がソ連を訪れた。

昭和六年二月、近衛秀麿が、文化協会主催の演奏会を開き、七年二月には、米川文子が三味線を紹介。十二月には三浦環がモスクワを訪れた。

彼女は、モスクワに着くと直ちにたくさんの毛皮をルーブル紙幣で買い入れた。ルーブル紙幣は、外貨との互換性が乏しい。しかも出演料までルーブル紙幣で支払われたため、ルーブル紙幣はあるが、日本に持って帰っても使えないということが起こり困っていた。

そこで英二は、代理大使であったので、ソ連政府の高官や外国大使館員を日本大使館に招き、三浦環の独唱会を開催して、彼女の窮状を救うことに力を貸した。彼女は大変感激し、大張り切りでリサイタルを行い歌劇のアリアから日本の歌の「松島音頭」や「中国地方の子守歌」などお得意の歌を披露、さらに出席した外国大公使の国の歌を歌い大喝采を博して無事に東京に帰ることができた。

英二のモスクワ在任中に、彼の子供たちも他の外交団の国々の子供とともに、ボリショイ劇場の一流の舞踏家を招いてレッスンを受けたり、発表会を開いたりして、ロシア芸術の一端を学ぶことができたのである。

英二は、モスクワ在任中、言論統制が厳しく自由が制限されているこの国で、外交官としての成果を上げるには、どうすればよいか常に考えていた。

（大使や外交官の最も大事な職務の一つは、駐在する国の国情や国際間の動きを観測し、本国に報告することにある）だから、どの外交官でも駐在する国の人々と食事をし、飲酒する間でも常に鋭い神経を尖らしている。しかし、普通のソ連人は、外国の大公使館には寄り付かない。外国の大公使館に出入りすると遅かれ早かれ、いずれはゲー・ペー・ウー（国家政治保安部）に捉えられるからである。だから、モスクワの外交団は、離れ小島同然である。その代わり外交団同志の交際は非常に盛んでお互いに招いたり招かれたりして、毎夜のように往来している。大公使館の宴会では、食後ダンスをしたり演奏会を開いたり、ブリッジに興じたりして散会するのは、いつも翌朝の二時頃である。そのほか夕刻には、お茶の会やカクテルパーティ。また夏には、テニスの試合といったように、外交の社交界は賑やかだった。ところが、その舞台裏は、「情報市場」が立ち、盛んに情報の交換が行われていた。（この「情報市場」を有効に活用する必要がある）と英二は考え、積極的に機会をとらえて、情報の収集に当たった。

その外交団は、いつもソ連の秘密機関ゲー・ペー・ウーに尾行されていた。日本の大使館の場合は、大使、参事官、陸海軍武官が尾行されていた。名目は、保護と言っているが実際は監視である。

このゲー・ペー・ウー組織はソ連特有のものであることは言うまでもない。ただ、日本語では、秘密警察と呼ばれているが、少し違うのではないかと英二は思っていたようである。もともとゲー・ペー・ウーは、革命後反革命運動を防圧するために生まれたチェー・カー（国家保安委員会）の後身だが、実はソ連政府もこのゲー・ペー・ウーによって維持されているといっても過言でないほど強力な組織であると英二は考えていた。

ゲー・ペー・ウーの英二担当者は、いついかなる時も英二の行動を監視していた。公務を離れた時も、一歩大使館を出れば完全にその監視下に置かれる。例えば冬スキーをしている時も、夏泳いでいる時もオペラを鑑賞している時もゲー・ペー・ウーの人間が付きまとっていた。

英二はあまりしつこいので、ある日突然モスクワ河に飛び込んだ。するとゲー・ペー・ウーの監視員は、ボートを漕ぎ出し追いついてきた。

だが、悪いことばかりではない。劇場では、監視員が預けてある外套や帽子を取るのを手助けしたり、特別の出入り口から出場する便宜を図ってくれたりした。ある意味ではボディガードのような役割を果たしてもいたのである。

暗い面の多いソ連の生活の中で楽しかったことは、ダーチャでの生活であった。ダーチャとは、別荘のことである。

モスクワは、冬が長く日光に恵まれないので、毎年夏になると郊外のダーチャに行って十分日光浴をする。モスクワの郊外には、帝政時代から貴族や富豪が建てた立派な別荘がたくさんあった。

革命後、主な別荘は党や政府関係者に使われたが、外交団もソ連政府に頼んで別荘の斡旋をしてもらっていた。英二の借りた別荘は、広大なものでちょっとした公園であった。

モスクワの夏は、午前一時を過ぎる頃から空が白み始め、午前三時にはもう太陽が照り映える。夕方は、午後九時を過ぎてもまだ明るく十時頃からやっと暗くなり始めるのである。だからダーチャではほとんど屋外に出て裸で過ごす。

朝早く起きてキノコ採りに行き、食事は庭の木陰で済まし、食後は林の間に釣ったハンモックで横になる。野にはいろいろな花が咲き、白樺の林では小鳥が囀る。遠くの森からは、若い男女のコーラスが聞こえてくる。英二は、仕事があるのでこうした暮しを満喫することはできなかったが、家族は夏の間、こうした優雅な時間を過ごすことができたのである。

ダーチャのある田舎で過ごすと、ロシア人は開放感に酔いしれ、我を忘れてしまうようだ。若い女性までも全

裸になって平気で池や川のほとりで日光浴を楽しんでいる。

それだけではない。モスクワ市内でも屋根の上に全裸で寝転がっている男を時々見かけた。短い夏の間に日光を体いっぱい吸収しようとする表れであろうが、全裸である必要はないのではないかと英二は思った。

ある時ソ連政府は、モスクワ河で水浴する場合は、必ず、パンツをはいていることとのお触れを出した。するとモスクワ市民は、水に入る時には、パンツをはいているが、岸に上がって体を乾かすときには、パンツを脱いでしまうという奇妙な光景が見られるようになった。

昭和五年の夏は、ダーチャの林ではキノコがたくさんとれた。「キノコの豊作な年は戦争が起きる」という言い伝えがロシアにはある。この現象をみて、人々は、戦争を心配して、ルーブル紙幣を銀貨に変え、その銀貨を貯蔵する家庭が多くみられた。ソ連政府は、これを禁じた。

毎日のように新聞に「銀貨貯蔵の罪で次の人物を銃殺した」と処刑された人の名前公表し、庶民の恐怖心を煽って犯罪の防止に躍起となっていた。

(三) 不可侵条約の締結を希望するソ連

昭和五年の暮れも押し迫ってきた。大晦日のことである。芳沢駐仏大使が帰国途上モスクワに立ち寄った。吉沢大使は、犬養内閣の外務大臣になることが決まっていた。

ソ連のリトヴィノフ外相は、芳沢大使を貴賓館での昼食会に招いた。その時日本側は広田ソ連大使と天羽参事官が同席し、ソ連側はカラハン次官とカズロフスキー極東部長が同席した。

その席でリトヴィノフ外相は、芳沢大使に次のような提案をされた。

「ソ連は、隣接諸国と不可侵条約を締結する方針だから日本とも同条約を結びたい」

芳沢大使は、ソ連と主要国の間の不可侵条約について様々な角度から問いただした上で「犬養首相兼外相に報告する」と答え、その夜モスクワを発ち日本に向かった。だが、同大使が東京に着く前に、ソ連の報道機関が「ソ連は日本に不可侵条約を提議したのに日本が承諾しないのは、日本は侵略の意図があるからだ」という意味の記事を掲載した。英二は、すぐさま広田大使に代わって、このことをカラハン次官に抗議した。

ソ連が日本に不可侵条約を提議したのはこれが初めてではない。田中内閣の時もソ連から提議があったが日本は承諾しなかった。今度もソ連と満州間、ソ連と日本間に不可侵条約を結ぶという案が出ていて、英二の代理大使中もしばしば折衝したがついに成立しなかったのである。

英二がモスクワ在任当時のソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）は、ロシア革命後十五年しかたっていなかった。その上に、世界で初めての社会主義政権であるため、国内の政治、経済、社会基盤をまず安定させ必要があった。

一方、諸外国は、ソ連による社会主義思想の波及を恐れ、同国への警戒心を募らせていた。そのため、ソ連はとりあえず近隣諸国との摩擦を回避するため、各国との不可侵条約の締結を望んでいた。特に急激に軍事大国化しつつある日本に対しての警戒心は強かった。そこで、不可侵条約を締結することによって、両国に起りうる軍事的衝突を回避しようとしたのである。ソ連の思惑は次のようなものであると英二は推察していた。

①ソ連は、今はただ国力の充実を図る時で第二次五ヵ年計画の遂行と財政経済上の振興に専念し、極力列強との衝突を避けようとしている。

②日ソ不可侵条約の締結によって、日ソ関係が不仲になることを願っている国の内外の勢力に対して、その思惑をはずことができる。

③日ソ政府間は、親善関係にあっても、小さな事件が民心を刺激し、与論を煽ることもある。そうならないため、民心の融和を図り、危惧の念をお互いに持たせないように、不可侵条約のあることを民衆の間に周知徹底せしめる。

④ソ連の現在の国力をもってしては、到底各国の共同侵攻作戦には対抗できない。できるだけ多くの国と不可侵条約を結ぶことによって侵略の脅威を回避する。

モスクワに赴任して一年半つぶさにソ連の実情を把握した英二は、ソ連との外交を進めるにあたって、自分なりの方策を次のように立ててみた。

(1)日露戦争の結果ロシアから獲得した中国東北部（満洲）における日本の権益が守られ、その経営が安定に向かうまでは、ソ連と事を構えぬよう細心の注意を払う。しかし、ソ連との利害の対立が生じ、必要な場合は、ソ連との武力闘争も辞さず。

(2)ソ連の実情を常に調査する。とくに極東事情については、詳細な調査が必要で、そのため在ソ連日本大使館に調査員を増強する。極東諸地域の領事館も同様とする。

(3)日本は、ソ連の領土を侵犯する意思はない。ソ連も満州を含め同様であると考える。当分は日ソの領域侵犯問題は起こらないと判断する。ただ、問題は東支鉄道である。日本の東支鉄道に対する究極の目的は、これを日本の所有もしくは管理下に置くことにある。

(4)ソ連の提案する日ソ不可侵条約の締結については、単に不可侵条約を結んで日ソ双方の領域を侵さないというだけの条約であれば、今のところ必要はない。満州の今後の発展のためには、ソ連の北満における地位の現状維

持を約束するような不可侵条約は、締結しないほうが得策である。したがって、ソ連の不可侵条約提案はそのままとして置き、後日、日ソ関係にかんがみて何らこの種の協定を必要または有益となすときが来ればその内容を変えて協定に応じても良いのではないか。

(5)漁業問題は、漁区安定の取り決めの成立した以上、これを基礎として漁業条約更新改定の準備に着手する。外務本省または在ソ連日本大使館より速やかに関係公館に必要な材料または意見を提出させる。同時に外務本省または在ソ連日本大使館においては、その準備に取り掛かる。漁業経営の方針は、まず合同会社において統制し、合理的な経営をなすこと。ソ連とは共存共栄主義の下に経営上の協調を図ること。例えば、漁区の入り替えなどの問題が起きた場合も世界市場における販売上の問題が起きた場合も協調して解決する。

(6)北樺太石油は、日本側は、半官半民の会社となし、国家的見地から経営する。仮に利益の配布を減じても、油田の試掘、採掘、拡張等を優先する。

(7)貿易は、日ソ関係の好転を利用して貿易の進展を図る。信用保証限度の強化を図る。

これらの問題を整理し交渉に当たってみたものの、ソ連との交渉は、容易ではなかった。

比較的容易に解決すると考えた漁業交渉さえ難航し、解決に至るまでには、相当な時間を要した。

ソ連領海内の北洋漁業は、毎年漁区貸付の入札があった。その漁区租借料やその他ソ連官憲に対する支払いは、すべてルーブル勘定であった。ところが昭和六年当時のルーブルの公定換算率は一ルーブル一円三銭であったが闇相場では二十銭たらずであった。

そんな状態でソ連側は、円とルーブルの換算率改定問題を持ち出した。北洋漁業にとっては極めて重大である。

そこで英二は昭和六年九月、東京で漁業関係者を交えての対策協議のため、一時帰国命令を受けた。シベリア鉄道を利用し、十四日ハルビンに着き、田代長春領事、石射吉林総領事とともに、長春から奉天まで列車の旅をした。車中で二人から、奉天では、林総領事、木村満鉄理事からそれぞれ最近の満州情勢に関する説明を受けた。

九月十八日、東京に到着、翌朝「柳条溝事件」の報を聞いた。この事件をきっかけに、満州の各地へ戦火が拡大、やがて日本の支援による満州国建国へと満州情勢は急転して行くことになるのである。

英二は、打ち合わせを終えて、十月十九日東京を発ち、大連、奉天に立寄り二十五日、ハルビンに着いた。到着するとすぐ大橋総領事から「数日ハルビンに滞在して満州の形勢を電報せよ」との本省の訓電を見せられた。

奉天では関東軍本庄司令官、板垣参謀長、大連では内

田満鉄総裁、江口副総裁らに会い、併せて満州在留の軍人、居留民たちとも会ったが、いずれも口々に威勢のいいことを言っていた。

外務本省では、事態不拡大主義をとっていたが、出先機関は鼻息が荒く、抑制が困難な状況であった。

「満州における日本軍の行動は計画的で永続性を有する」

英二は、この事件は、満州における日本の権益を拡大しようとする関東軍及び満州居留民の武力紛争も辞せずという強硬姿勢から発したものと判断した。したがって解決には相当の時間を要すると考え、ハルビンから外務本省に、ありのままを打電した。

本省への報告を終え、英二は、十月三十日ハルビンを発ち、十一月六日モスクワに帰った。

モスクワはすでに冬であった。

日本軍が、チチハルに進軍した十一月十八日。幣原外相から広田大使のもとに訓電が入った。

「日本軍のチチハル占領は一時的なる旨ソ連政府に通告せよ」とのことである。

だが、英二は、広田大使にこの一時的という文言は、注意を要すると進言した。彼の判断では、日本軍は、中国軍と戦闘状態にある限り、戦略的に重要な拠点チチハルからの撤退はないものと考えたからである。そこで広田大使は、「一時的」という文言を取り払い、リトヴィノフ外相に日本軍のソ連領内への進行はないとだけ伝えたのである。

一方、関東軍の満州での軍事行動の米国への説明は、出渕大使が行ったが、本省からの訓令通り一時的という文言が入っていたため、米国の信用を失うことになったと後から、同大使が、モスクワを訪問した時に、英二に語っている。

当時軍部は出先機関に引っ張りまわされていたので、このようなことがしばしば起きたのである。このことは、中央の軍司令部の内部統制力の弱体化を物語っている。

ただ、わが国にとって幸いなことに、ソ連は満州事変に関して中立的態度で臨み、軍事介入をする意図はなかったことである。

英二はモスクワ帰任後すぐ漁業交渉に取り掛かった。ここで問題となったのは、前にも述べたが、ルーブルと円の換算率である。一ルーブル一円三銭の公定換算率を実質換算率に近づけることである。訓令では「一ルーブル二十五銭から交渉せよ」とのことであったが、英二は、一ルーブル二十銭から始めた。するとソ連側では一ルーブル五十五銭を主張した。それから交渉により少し下げて、一ルーブル五十銭として、以後なかなか下げなかった。そのうち双方とも少しずつ歩み寄って、結局一ルーブル三十二銭五厘で決着した。

その後昭和七年四月になって、幣原・トロヤノフスキー

協定ができたが、それをきっかけに日魯漁業の株が急騰した。それを見て英二の交渉相手であったカブロフスキー極東部長は、「換算率をもう少し上げておけばよかった」と残念がった。

一方、幣原外相からは「交渉の仕方が縁日の商人よりうまいぐらいだ」と英二は冷やかされている。

（四）ソ連の満州不介入方針

中国東北部の満州で起こった事件は、満州国の建国へと発展した。また、モスクワ帰任後の英二の対ソ外交活動にも大きな変化が求められたのである。

そもそも満州事変は、昭和六年（一九三一）九月十八日、満州の奉天郊外柳条溝で南満州鉄道が何者かに爆破されたことから始まった。日本の関東軍は、この事件は張学良の東北軍の破壊工作と発表し、直ちに軍事行動を開始した。短期間のうちに満州全土に兵力を拡大、半年間の戦闘を経て昭和七年二月には、満州全域を支配。三月一日には、元首に清朝の元皇帝愛新覚羅溥儀を担ぎ出し、満州国の建国宣言を行った。首都は長春を改名し、新京と定めた。

後でわかったことであるが、この事件は、満州を関東軍の制圧下に置こうとする高級参謀板垣征四郎及び作戦参謀の石原莞爾中佐たちによる謀略であったのだ。

だが、不思議なことに翌年の昭和七年六月十四日には、

衆議院本会議で満州国承認決議案が全会一致で可決され、九月十五日には、大日本帝国と満州国の間で日満議定書が締結されている。その後昭和八年（一九三三）五月三十一日、中華民国政府と塘沽停戦協定が結ばれ武力紛争は一応の決着を見たのであるが、日中間の溝は深まるばかりとなった。

一方、ソ連は、満州問題について、不介入の態度を取り続けた。同国は不安定な国内の政治事情と欧州諸国との外交課題を抱え、極東地域での紛争に巻き込まれることを避けたかったのだ。

ただ、満州事変発生当初、ソ連はリトヴィノフ外務人民委員及びカラハン外務人民委員代理が、広田大使に対し「満州においては、ソ連が特殊利益を有する東支鉄道もあり、今回の満州事変に対し非常な関心を有する。日本側がハルビンに出兵するに当たって、ソ連に対し何らの説明もないのは心外である」と苦情は述べている。

だが、その言葉の裏には、①ソ連は満州事変に対しては伝統的不変の平和主義を貫き、中国と締結する条約の尊重並びに他国の主権及び独立を尊重し、厳正不干渉の政策を維持する。②ソ連政府は、東支鉄道のソ連側幹部及びソ連の支配下にある官吏は、日中双方に対し、何も援助を与えない。と明らかに日中双方の紛争に巻き込まれることを避けようとする態度が明確に示されていた。

さらに、「東支鉄道を日本、中國いずれの国のためにも軍用に使用させないという命令を発した」とも明言した。日本軍隊が、ハルビン方面において東支鉄道を横断するに当たり、ソ連政府は、これにより同鉄道に物質的損害を受けることを恐れ、日本側に注意を喚起したのである。

満州事変勃発三ヶ月後の昭和六年十二月、関東軍が中華民国政府軍と交戦中に、ソ連のカラハン外務次官が広田大使をクレムリンに呼んだ。「チェッコスロバキアの公使館員が日ソ戦争を引き起こさせるため、ソ連人と共謀して日本大使を暗殺するという計画が発覚した」との情報を伝えるためであった。

この当時は、過激な共産主義者がテロリストとなって世界的に暗躍し、各国の要人を狙った暗殺があちこちに起こっていた。実際昭和七年の三月には、ドイツの参事官がモスクワ市内で狙撃されている。

また、フランスのドーメル大統領がロシア人に暗殺され、日本でも井上準之助、団琢磨の暗殺や五・一五事件が起きて世界は、一触即発の危険にさらされつつあった。

こうした時、日本共産党佐野学、鍋山貞親らが、上海からソ連船でウラジオストックに入り東方民族共産主義者養成学校（クー・ド・ペー）に入学、そこでブハーリンの指導を受けて日本に帰国、日本共産党の再建に取り掛かろうとし、日本の官憲に逮捕されたという事件が起きた。これは、日ソ基本条約の「ソヴィエト連邦共和国は、他国の秩序、安寧を危殆ならしめる人物に援助してはならない」という条項に違反するからと英二は、訓令によって厳重にソ連側に抗議した。

だがソ連政府は「この日本の共産主義者との関係は、国際共産党に関することであり、ソ連政府とは何ら関係ない」と突っぱねている。当時大使館員は、クー・ド・ペーの日本人の若者と会ってはいたが、若者たちはいつも館員の目を避けているようであった。

ある晩大使館に一人の日本の若者が飛び込んで来た。「私は、クー・ド・ペー共産主義者だが、一緒に学んでいる東南アジア人とウマが合わない。またその他の理由で転向したいと思っているので保護して欲しい」と青ざめた顔で言ってきた。そこでひとまず大使館の一室に彼をかくまっておいたが、そのうちソ連側でこのことに気が付き、ゲー・ペー・ウーが大使館の周りを厳重に固め、彼が逃げ出さないようにして約一ヶ月経った。そこで英二はカブロフスキー極東部長と交渉、日本に送り返すことでようやく決着をつけることができたのである。彼は鹿児島県人で、その後日本に無事帰国したと伝えられている。

昭和七年二月、日本は東支東部線在留民保護のため、日本軍隊を海倫及び一面坡まで出兵するため、東支鉄道

使用の要求をした。それに対しソ連側は、次のような回答をしながらも条件付きでこれを許可した。

「日本の軍隊の輸送は、ポーツマス条約第七条に抵触する。最近の日本軍が、ソ連及び朝鮮国境地方に集中しているとの情報があるが、これもやはりポーツマス条約第二条に抵触するので、日本側の説明を求めたい。ただ、今回は、日本側の東支におけるソ連の権益を尊重することを条件に、例外的臨時措置として、日本軍の限定数を海倫または一面坡まで、輸送することを許可する」

これに対して、日本政府の反論は次のようなものであった。

「この軍隊の輸送は警察的自衛行為により輸送するもので、ポーツマス条約第七条には抵触しない。また、同条約第二条は、各締結国が露韓両国境においてロシアまたは韓国の領土の安全を侵犯することのある場合のことのためであって国境警備の目的で必要な軍隊を駐屯することは、何らこの条約に違反するものではない。また、日本側においては、前々からこのため一定数の軍隊を駐屯させているものの日ソ国交回復後増員した事実はない」と。

さらに、ソ連側において国境に軍隊を増派したとの情報があるがそのことについての説明を求めた。

そうした交渉を重ねているうちに、四月になって英二の家族にも変化が起きた。次女の和子が学齢に達したので、妻は子供と家政婦を伴って、日本に帰国することになったのである。昭和七年四月七日、妻たちは春の訪れの待たれるモスクワを発ち東京に向かった。

ところがそれから二日後、北海の馬占山が反旗を翻し、東支鉄道を破壊したとの報が入った。

同月十四日には、ハルビン近郊のスンガリー鉄道破壊未遂や東支東部線で汽車が転覆、日本人が数十名死傷したなどの新聞報道を見たので、英二は、ずいぶん家族の安否を心配した。だが、同月十八日、寺島奉天総領事代理から、奉天安着の電報が届き、英二はほっと胸をなでおろしたのである。

この頃、上海では、四月二十九日の天長節に朝鮮人の爆弾で白川義則陸軍大将、植田謙吉中将、野村吉三郎中将、重光葵中華公使、島田繁太郎少将など、陸海軍及び外務省の代表が負傷するという大事件が起こったのである。

英二は、この事件をソ連外務省のカラハン次官から知らされ、驚いて照会かたがた見舞いの電報を打った。

昭和七年八月二十九日、広田大使の帰国直前、カラハン外務人民委員代理は、広田大使と会談、日本軍の東支鉄道使用に関連して東支に対するソ連側の物質上、商業上の利益を害しないことを改めて希望した。ソ連は、北満に有するソ連の利害関係とは東支鉄道に対する物質的、

商業的利益であることを明らかにしたのである。その直後の九月六日、同氏はソ連政府の最も有力な閣僚が、東支鉄道の売却に同意したことも述べている。さらに同鉄道は、「必ずしも南京政府に売却するとは限らない。満州国が、ソ連側の承認を受けたうえ、国際人格を得て、中国とソ連間に締結した条約の主体であるならば、同国は、東支に関する権利を取得することができる」と付け加えた。

英二は、ソ連が中国における特権及び利益の放棄を声明し、かつ中国側よりしばしば赤色帝国主義の攻撃を受けつつあるにもかかわらず、なお帝政ロシアの遺物である東支鉄道を保持するのは、①極東ロシア領の経営②軍略上、商業上の必要であったものが、満州事変以来、日本の勢力が北満に進展し、また日本側において東支鉄道に並行する鉄道を敷設するに及んでは、東支鉄道のソ連に対する価値は甚だしく減少してしまうと判断したに違いない。

ソ連の北満経営は、東支鉄道を中心としてその前線をハルビンに進め、後方基地はハイラルに置くというものであった。ハルビンは国際都市にして北満の経済の中心をなしていたが、日本の北満への進出により満州全域が、押さえられ、ソ連は北満から、手を引かざるを得なくなったのである。

昭和七年九月、広田大使が帰国し、英二はまた代理大使となった。その時に、衆議院議員の松方幸次郎が、台湾総督府の森孝三をともないモスクワを訪れた。松方が大使館で、英二と食事をしているとモスクワに亡命していた片山潜から電話がかかってきて「滞在中ソ連政府の交渉に役立つことがあれば何でもする」ということであったので、松方幸次郎がスターリンに会えるように骨を折っていただきたいと英二が頼んだが、それだけは無理だと断られた。

だが、松方は、ミコヤン商業大臣はじめ、多くのソ連要人と折衝し、安いソ連の石油の輸入に成功したのである。

(五) 満州国ハイラル軍司令官蘇炳文の反乱

広田大使が帰国し、英二がソ連代理大使となってすぐ建国したばかりの満州で大事件が起きた。

昭和七年九月二十七日、ハイラルの軍司令官蘇炳文が建国間もない満州国政府に反旗を翻した事件である。

北満辺境地に蟠踞していた蘇炳文は、東支鉄道の沿線各地で一斉に蜂起し、満州国に反乱を起こした。満州国を支援する日本人にもその被害が及び多数の在留民が略奪、殺害、監禁された。ことにソ満国境の満州里においては、国境警備隊及び海関を襲撃し、その雇用人である邦人二人、在留民四人を殺害し、邦人住宅を略奪、百五十九人を領事館内に監禁した。これによってソ満辺

境に散在する現地住民数十万人が危険にさらされることになった。

日本軍と満州国軍は、共同して蘇軍を攻めたが、同地方には数万の日本人がいたため、外務省は「ソ連側から蘇炳文に在留邦人を保護するようソ連政府に申し入れたし」との訓令が、在ソ連日本大使館に発せられた。

英二は、すぐにソ連のリトヴィノフ外相、カラハン次官と交渉、時には一日二、三回も面談することもあった。

十二月初旬の寒い日であった。英二は夜遅くカラハン次官に会見を申し込んだ。だが同次官はすでに就寝している。英二はそれでも急を要すると伝え、何とか応じてもらった。すでに午前二時を回っていた。

彼は、パジャマの上にガウンを着て現れた。ずいぶん長い間話し込んで外を見ると雪がしんしんと降っていた。やっとソ連側は、蘇炳文と連絡を引き受けてくれたのである。

また、日本の大使館員及び陸海軍武官による交渉団のために特別列車をソ連側が用意するとも約束をしてくれた。そこで在モスクワ日本大使館では、その列車に食糧を満載して出掛けたが、蘇炳文は、十二月四日軍隊を率いてソ連領に逃げ込んだ。そのため在留邦人には、被害はなかった。この時は、ソ連も日本側に協力してくれたが、蘇炳文の扱いについて、ソ連政府は「蘇炳文は、政治犯人で、ソ連側では亡命者との扱いである」とし、日本側の引渡し要求を拒否した。後に彼は、中国共産軍に合流したと伝えられている。

蘇軍の敗退の結果、南京政府は非常に失望し、満州の叛徒は士気阻喪し、東支東部線の叛徒は、難なく日本軍に帰順するか、あるいはソ連領内に脱走し、北満叛徒の大部分は一掃された。

他方、日本軍は、満州里より撤兵したが、ハイラルに駐屯した。その後、各地に特務機関及び領事館を設置しようとする計画が生まれ、それから漸次日本人がこの地方に増加した。その結果、蒙古人及び同地方におけるソ連の勢力に対して影響を及ぼし、その影響は外蒙古にも波及するかもしれない状況となったのである。

スターリン、モロトフらは従来しばしば平和主義を唱えてソ連領土は寸尺もこれを譲ることはないが同時に、外国の領土は、寸尺もこれを取らずと声明していたが、満州事変発生後は、極東方面に多数の軍隊を増派し始めたのだ。国際連盟は、満州事変に関し、幾度も会議を重ねたが、何ら解決策を見出しえなかったのである。

余談になるが、昭和七年十一月四日、満州問題で国際連盟に派遣された松岡洋右一行が、国際連盟総会出席の途中にモスクワに立ち寄った。その夜、英二が主催してモスクワの外交団を招きレセプションを開催した。レセプションには、リトヴィノフ外相、カラハン次官も出席した。松岡は、後に両氏と個別に会談している。松岡は、

七日にカリーニンソ連最高会議議長の招待を受けた後、ジュネーブに向けて出発した。

英二が松岡と会った限りにおいては「国際連盟を脱退しない」と明言したにもかかわらず、どうしたわけか、彼は勇ましく脱退してしまった。そのことは未だに英二には、理解できないと書き記している、

昭和七年十一月七日、英二はモスクワで三回目の革命記念日を迎えた。この記念式典は、毎年メーデーより大々的に行われる。そしてソ連共産党は、この時期に数多くのスローガンを発表する。外交団はこれを見ることによってソ連の内政、外交の方向性を探ることができるのだ。そうした意味で十一月七日は在モスクワ外交団にとっても、極めて重要な日であった。ことに、同日は、クレムリンに沿ったレーニン廟の階上にスクリーンを始め、ソ連の政府、党の要人が勢ぞろいする。その並び方によって彼らの順位が分かるため、それを見て外交団は政治状況を判断していた。

また、この日は観兵式があり、新型の飛行機や兵器が披露されるので招待された大公使館の職員や武官などは全神経を集中して空陸のパレードを眺めていたのである。

次女の和子の学習院入学を見届けた妻の美代が、昭和七年十一月十一日に再びモスクワに帰ってきた。その後英二は、妻を伴ってレニングラードまで旅行をしている。旧王宮や離宮に居住して栄華を誇ったニコライ二世及びその一家が、エカテンブルグの地下室で惨殺された跡を見た時、英二は何とも言いようのない思いに駆られ、思わず頭をたれ、手を合わせた。

エルミタージュ美術館は、帝政時代に集めた世界の多くの名画が展示されていた。ことにレンブラントのコレクションは名品ばかりであった。

暮れも押し迫った十二月、大田為吉大使がカリーニン最高会議議長に国書を奉呈した。

それから二ヶ月後の昭和八年二月初め、英二は内田外相から「パリ、ロンドンその他ヨーロッパ諸国に立寄って帰国せよ」との命令を受けた。その旨ソ連側に伝えると二月二十一日ソ連外務省のカズロフスキー極東部長ら十数名の中堅外務職員が英二のために送別会を開いた。その席上カズロフスキー部長は「各国の外交官のなかで君が一番多く外務省を訪問した」と言って記念にソ連製のスキーを英二に贈呈したのである。

英二は三月十四日、モスクワを発ちベルリンに向かった。モスクワ駅頭には政府、外交団、在留民が多数見送った。

三年半のモスクワ駐在は、外交官としても重要な経験であったが、それより人間として、英二の人生に貴重な経験をもたらした。

彼はかつて一橋で、福田徳三博士よりマルキシズムの基本理論の講義を受け、共産主義に興味を持っていた。だが、その現場にきて実際の政治を見た結果いろいろ考えさせられることが多く、複雑な思いを抱きながら帰国することになったのである。

英二は、一九一七年のロシア革命を英国で知っていたが、当時英、仏、米国の諸国は反共勢力を援ければロシアの共産主義はすぐにでも倒れると思っていた。そこでロシアの反共勢力であるセミヨノフ、コルチャコフ将軍、デニギン提督などを援助したが、列国の歩調が合わず、その間に共産勢力に乗じられて、反共軍が敗れてしまった。

英二がモスクワにいた頃には、ソ連はモスクワと中国江西省の中共勢力の本拠地瑞金を結ぶのに躍起となっていた。この夢は中国が共産国家となってやっと実を結んだ。このように共産勢力が異常に膨張したのは、共産主義の成功というより非共産諸国同士の内輪争いによるものであると英二は判断していた。もちろんそのうちの資本主義の欠陥が、共産主義の発達を助けたことも否定できない。

（共産主義は大きな人間の改造）と思いつつ英二は、ベルリン、ロンドン、パリ、ジュネーブ、ローマの各都市を経て、昭和八年四月一日、イタリアのナポリから日本郵船の「靖国丸」に乗って日本に向かった。同船には外交官の家族が六組も乗っていて賑やかであった。

英二夫妻は、ポートサイドで一時下船、子供たちはそのまま同船に乗ってスエズに向かった。夫妻はポートサイドからカイロにわたりスフインクス、ピラミッドなどを見学、スエズに出て再び「靖国丸」に乗り、子供たちと合流した。

昭和八年四月三十日、「靖国丸」は、瀬戸内海に入った。瀬戸内海はいつ見ても穏やかであったが、内陸の単調な景色が続くロシア平原と比べるとひとしお素晴らしく見え、鳴門海峡を望むと英二の胸に郷愁が湧いてきた。

外国から帰国するたび日本は変貌を遂げている。だが、今度ほど大きく変わったように思えることはなかった。

満州には新しい国が生まれた。日本はこの国をどうするのか。今後日本はどうなっていくのか、世界の耳目は、日本に集まっている。

英二は、東京に近づくにつれこれまでにない緊張感を覚えるのであった。

（つづく）

私の「昭和20年」（6）
―終戦から75年―

山田嘉久

11　昭和20年11月―復員

2日　日本社会党結成（書記長片山哲）
6日　GHQ、持株会社解体に関する覚書（財閥解体）
9日　日本自由党結成（総裁鳩山一郎）

海外からの日本人の引き揚げは、終戦直後の9月、高砂丸がメレヨン島（ミクロネシア）から1700人を乗せて別府に帰航したのが最初だが、当時、復員の対象となる日本人は民間人を含めて660万人と言われた。

敗戦時、日本軍隊の残存兵力数は陸軍547万（うち海外308万）、海軍242万（うち海外45万）計789万（うち海外353万）であり、これに海外民間人約300万を加えた数字である。

実に当時の日本の人口の約9%に当たっていた。

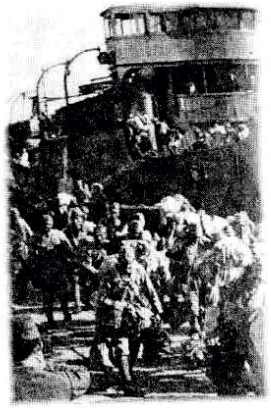
このうち、大半の500万人はこの年の暮れまでに帰国しているが、私の兄と姉は前述のとおりこれには含まれてはいなかった。

この頃、おかしな占いが流行った。

20センチほどの糸を通した小さなボタンを、生死不明の人の写真の顔あたりに垂らすと、生きている場合はボタンが揺れ動くが、死んでいる場合は全く動かないという占いである。

母親がどこからか聞いてきたようで熱心に実験していたが、その都度、ボタンは微妙に動いた。両親とも喜んでいたが私は信じなかった。「生きていてほしい」と少しでも願ったら指先は無意識であっても微妙に動くものである。人間の心理を巧妙に点いた占いと思ったからである。

それにしても両親にとっては藁をも掴む気持ちだったのだろう。特に母親はこの占いを信じて、死ぬまで兄の戦死を信じなかった。兄のことを最期まで生前の兄の愛


海外引き揚げ第一号

称であった「坊や」と呼んでいた。彼女にとっては兄は永遠に「坊や」であり続けた。

私は勿論、この種の占いは信じなかったが戦後もずっと気になっていたことは確かである。そして最近、この占いはわが国で古来から行われていた「こっくり（狐狗狸）さん」の変形でないかと思うようになった。

わが国で19世紀末に流行した「こっくりさん」は西洋の占い「テーブル・ターニング」を起源にもつ占いの一種だそうだが、机に乗せられた人の手がひとりでに動く現象は「心霊現象」だと古くから信じられてきた。日本では通常、狐の霊を呼び出す行為（降霊術）と信じられ、そのため「狐狗狸さん」の字が当てられた。

このような「降霊術」を科学的に解明しようとしたのが明治の哲学者井上円了であった。彼の説によるとこの占いにおいては真っ先に参加者の潜在意識（予期意向）が反映されるため無自覚に指が動く。さらにこれに「不覚筋動」が加わる。同じ姿勢を取り続けると筋肉が疲労するためどうしても僅かに腕が動いてしまうのである。

円了は後に「哲学館」（後の東洋大学）を創立したので、現在でも東洋大学では「妖怪学」という授業科目があるそうである。

さて、政府の復員業務については、すでに冒頭に記したが、9月13日に日本軍隊を統括していた大本営が廃止されたので、厚生省が責任官庁となっていた。しかし実務は陸海両省が担っていた。

陸海両省が廃止されたのは12月に入ってからである。敗戦から既に4ケ月、とうに軍隊が無くなっていたのに陸海両省が存在していたとは奇妙な話だが、実態は復員業務のためだった。

なお、翌21年6月には、復員業務は総理大臣直轄の復員局に引き継がれ、私は少しでも兄の消息を知りたくて新設の復員局に短期間だがアルバイトをしたことも前述した。

「教科書墨塗り」が行われたのも、この頃であったろうか。前述のとおり「歴史」「地理」「修身」の授業停止とその教科書の使用禁止と回収が行われていた。

その代わりに「公民科」（のちの社会科）が構想されたようだが、我々の時代には実現していない。

体育も転換した。戦争中、正科必修であった柔剣道（女子は薙刀）の授業は一切廃止となった。私が入学した戦

争真っ最中の昭和18年頃には、入学と同時に他の科目に先駆けて2週間、柔剣道のみに明け暮れたあの頃とは雲泥の変わりようだった。また「歩調とれ」で腿をあげて足並みそろえての行進は教練に属するとして禁止された（11月7日）のは馬鹿げている。

ただ、私にとってタダ一つ救われたことがある。戦時中、放課後など校外で上級生に会った場合には下級生は必ず上級生に向かって「敬礼」をすることが義務づけられていた。このことは下校時も例外ではなかったが、幸か不幸か我が家は茂原駅の真ん前にあったため、駅の構内に屯した大勢の上級生（在校生の半数以上が列車通学生だった）に向かって敬礼をしながら帰宅するのが日課だった。少しでも怠ると上級生に脇道に連れ込まれてピンタが飛んできた。幸いにして私は一度もその被害を受けなかったが、それにしても私にとっては最も憂鬱な時間帯だった。

それが終戦とともに全くなくなったのは最大の喜びだった。

そういえばこの頃、日本に進駐してきた米兵は学生服を纏った大学生の群れをみて「とっくに武装解除を終えた日本でまだ軍隊が残っている」と驚いたという笑い話が残っている。学生服を軍服と混同したわけだが、教育勅語の廃止や男女共学の実施など種々の改革を行ったGHQだが、さすがに学生の服装までは介入できなかった。

その他「国語」などでも戦中、戦意高揚を謳った文章や戦後の民主化に差しさわりのある文章はすべて墨汁で塗りつぶして読めなくするようGHQから指示（命令）されたのである。

当時の新聞記事によると、たとえば国民学校初等科国語2年生は「1神の剣　7潜水艦　8南洋　14軍旗　15爆弾三勇士」といった単元が対象となったという。

この作業は、生徒自身が授業中に先生の指示によって行われた。私の記憶では、「国語」の教科書から「曽我兄弟の仇討」が全文、真っ黒に塗られた。

今から考えれば、鎌倉初期に起きたこの事件は、江戸時代に入ると浄瑠璃や歌舞伎の題材となり民衆の人気を得たといわれるが、なにも戦後の「民主化」を阻害するような内容ではなさそうである。しかし「忠臣蔵」などもそうであろうが、仇討そのものが復讐の賛美でありアメリカに対する敵愾心を喚起する行為と見たのであろう。

このことは映画界において顕著であった。

日本刀を振り回す剣劇（チャンバラ映画）はすべて軍国主義とみなされ全面禁止された。そのため時代劇スターたち（坂東妻三郎や片岡千恵蔵など）は現代劇に転向を余儀なくされた。また戦前、「鞍馬天狗」をヒットさせた嵐寛十郎は剣劇場面の殆どない「右門捕物帖」のみとなった。

11月には、GHQは戦時中に作られた映画236本を「封建的かつ軍国主義的」だとして廃棄を命じている。その中には、戦時中にデビューして最も期待された黒沢明の4作品（「姿三四郎」とその続編、「一番美しく」、未完成の「虎の尾を踏む男達」）まで含まれていた。

しかし時代劇がすべて禁止されたわけではない。その証拠に私は、この年11月封切りの時代劇「狐の呉れた赤ん坊」（主演坂東妻三郎）を観ている。

（時代劇が完全復活するのは、昭和26年の講和受諾後である。）

なお、私が戦後、最初に観た映画は戦前制作の「秀子の応援団長」だったことは前述の通りだが、当時、人口1万の小さな町（茂原町）でも映画館が3つもあった。映画が市民の「娯楽の殿堂」であったことがよくわかる。

GHQは映画に限らず放送全般や新聞、雑誌を含む刊行物すべてについて「検閲」を実施した。さらに特記すべきは「刊行物没収」なる指令で「焚書」を行ったことである。「GHQ焚書」と呼ばれたが「検閲」と「焚書」は全く別次元の行為である。

焚書といえば遥か昔、紀元前3世紀に秦始皇帝による「焚書坑儒」が有名だが、20世紀の今日、戦勝国米国は敢えてこの蛮行に及んだのである。全く敗戦国日本国の文化を踏みにじる行為であった。

「20世紀の焚書」といえば、昭和8年、ヒトラー独裁確立後のベルリンで非ドイツ的、マルクス的、ユダヤ的なものとみなされる書物が中世さながらの焚書が再現された。この結果、アインシュタイン、フロイト、トーマス・マン、ツバイクなどの著書2万冊が灰と化した。

しかし、この場合は多少、狂信的とはいえヒトラーという同じ民族によってなされたが、日本の場合、日本の文化、伝統を全く理解しないアメリカ人によってなされたことにより罪深さを感じる。

その結果、昭和3年から終戦までの刊行物約22万タイトルの刊行物から約8千件が「没収刊行物」に指定された。その中には私が子供時代に夢中になって読んだ「敵中横断三百里」（山中峯太郎著）や「日米もし戦わば」（平田晋策著）、さらにベストセラーだった「麦と兵隊」（火野葦平著）も含まれていた。

日本の戦争体験から生まれた名作「戦艦大和ノ最期」（吉田満著）も昭和21年に発禁処分となり全文が読めるようになったのは占領終結後だった。

12　昭和20年12月―民主化

1日　陸軍省、海軍省廃止
4日　GHQ農地価格に関する覚書
6日　GHQ近衛文麿ら9人の逮捕命令
15日　GHQ国家神道に関する覚書
17日　婦人参政権確立
22日　労働組合法公布

マッカーサーは「青い眼の大君」として6年間、我が国に君臨した。その間、数多くの民主化路線を戸惑う日本政府に指示してくる。

曰く「農地改革」、曰く「財閥解体」、曰く「婦人参政権」、曰く「労働組合法」、曰く「教育改革」などなどである。後年、彼は当時の日本人を「12歳の少年」と評したが、日本人にとっては全くの初体験だった。

「憲法改正」も彼の主導のもとに論議され、翌21年11月には発布されている。20年の後半から翌年にかけての「憲法改正」の動きをみると、さながらドラマを見ているようで興味深い。

まず動き出したのは元総理近衛文麿であった。彼はこの年10月4日夕刻にマッカーサーと会見した。その時マッカーサーは「憲法の改正」を強調したうえでこう言ったという。「公は未だお若い。敢然として指導の陣頭に立たれよ」。

それに気をよくした近衛は同月11日、内大臣府御用掛に任じられ、京都大学の佐々木惣一博士と憲法改正案の取り纏めに着手した。

ところが、近衛らが精力的な作業を続けていた最中の11月1日、GHQは近衛にとって衝撃的な声明を発表するのである。「彼は連合国当局より憲法改正のために選ばれたものではない。」として幣原新首相に新たに憲法改正の指令を通告するのである。

しかし近衛は失意の中でも改正作業を続け、11月23日には帝国憲法の骨子を残しながらもアメリカ側の意向を取り上げた近衛案を上奏した。

しかしその後、近衛は戦犯容疑者となり12月15日、荻外荘で青酸カリ自殺をとげるという運命に見舞われることになる。

一方、それとは別に幣原内閣では10月25日に松本蒸治国務大臣を主任とする「松本委員会」を設置し、年明けに「憲法改正案」（甲案）を発表した。しかし、それとは別に同じ会の3委員（宮沢俊義、入江俊郎、佐藤達夫）による「乙案」が纏められたので事態は複雑となった。甲案と乙案はそれぞれ明治憲法の小改正、大改正の違いはあったが、両案とも天皇の基本的地位に変更を加えるものではなかった。

同じ時期、各政党がそれぞれ独自の憲法改正案を発表したので事態は益々複雑となった。まず日本自由党は結党直後から改正作業に着手して「改正要綱案」を発表したが、天皇条項は明治憲法と変わることはなかった。

また進歩党は天皇主権論にたつ要綱を決定した。

一方、日本社会党も「新憲法要綱」を発表したが、「主

権は国家（天皇を含む国民共同体）に在り」とするなど微温的なものであった。

共産党は「主権は人民にあり」など「新憲法の骨子」を発表していたが、肝心の「新憲法（草案）」はずっと遅れて新憲法発布後である。

政府案とは別に注目を浴びたのは民間団体「憲法研究会」である。高野岩三郎、鈴木安蔵、森戸辰雄らの在野学者が中心であったが、12月25日に「憲法草案要綱」を発表した。これがGHQの深い関心を示すことになる。「いちじるしく自由主義的な諸規定」と高い評価を得たのである。

明けて2月13日。

この日は憲法制定史上、画期的な日となった。実はこの日は先にGHQに提出した「松本案」への回答がGHQから行われる予定の日であった。

吉田外務大臣、松本国務大臣らを前にして、ホイットニー民生局長は会談の冒頭、「日本案ハ全ク、受諾シ難シ」と述べてGHQ案を提示したのである。

松本案への回答を受け取るつもりであった日本側は「茫然たる表情」をうかべる以外はなかった。日本側は30分ほどの検討する時間が与えられた。

この日より10日前、GHQでの憲法草案起草を決意したマッカーサーはホイットニーに「マッカーサー3原則」（天皇制保持、戦争放棄、封建制廃止）とよばれる憲法改正の大枠を示したが、これを受けたホイットニーは民生局行政部員を集めて1週間で草案作成を命じたのである。主たるメンバーはいずれもロースクール出身の法律家ではあったが、憲法の専門家は一人もいなかった。彼らは連日、朝8時から明け方までほとんど徹夜で起草作業を行った。

この間の事情については、平成に入ってから読んだ「敗北を抱きしめて」（ジョン・ダワー著）によってより詳しく知ることができた。

その下巻135ページにこうある。

「最高司令官は、この新憲法の諸規定が受け入れるならば、天皇は事実上安泰になると感じています。」

この日の会談でホイットニーが日本側に云った言葉である。

これは「GHQ草案受諾」と「天皇制保持」のバーター取引ではないか。暴露本ならともかく、米国の著名な政治学者の書いた評判の本で、この年のピュリッツァー賞を受賞している。更に日本では第一回大佛次郎論壇賞も受賞している。史実と見るほかないであろう。

翌年、同じピュリッツァー賞を受賞した「昭和天皇」（ハーバート・ビックス著）でもそっくり同じ場面が登場している。

また戦後すぐに発刊されて評判となった「ニッポン日記」（マーク・ゲイン著）はこの日のやり取りを詳細に書いてあるそうだが、私は読んでいない。

一方、日本人の著作―例えば「昭和史」（半藤一利著）―では簡単に触れてはいるが、あまり問題にはしてないようである。

一方、5月3日、極東国際軍事裁判（東京裁判）が開廷されたが、26名の被告者リストには天皇の名はなかった。既に天皇の不起訴が決定していたのである。

しかし、法廷内外ではなお、この問題が燻ぶっていたのも事実であろう。そのクライマックスが21年暮れも押し迫った12月26日の東条英機元首相の「うっかり失言」であった。相手弁護士の質問に対して東条は「日本の国民は陛下の御意思に反してかれこれすることはありえぬことであります」と断言した。

その瞬間、法廷には緊張が走った。開戦も天皇の意志であったと読み替えることのできる発言であったからだ。

午後、休廷に入ると関係者は水面下で一斉に動き出した。そして休み明けの1月6日、証言台に立った東条は自身の発言の誤りを訂正したのである。

危機は回避された。翌々8日、マッカーサーはキーナン主席検事を招致して天皇の不起訴、不喚問を改めて確認したのである。

以降、不思議にこの問題は急速に鎮静化した。アメリカ政府とGHQは占領政策を円滑にするため、また当時の日本の国民感情を考慮して、これを避けたのである。

そして5ヶ月後の5月3日、新憲法の施行に繋がる。

（令和3年5月には「憲法施行75年」を迎えたが、最近の世論調査では憲法改正の是非は拮抗している。改憲必要派の第一の理由は当然、第9条の「国防の規定が不十分だから」だが、「アメリカからの押し付けだから」も35%に達している。）


戦犯廿五被告に判決下る
東條、廣田ら七名絞首刑
うなすく被告
昭和23.11.13朝日朝刊

そして一方の東京裁判は2年越しの昭和23年11月まで続いた。判決は11月4日。勿論、テレビのない時代なのでラジオにかじりついて聞いた。裁判長の「デス・バイ・ハンギング」（絞首刑）と宣告する無慈悲な声を7回も聞いた。

なかでも文官唯一の極刑となった広田弘毅については今でも不満に思っている。たしかに外相、首相として責任ある地位にありながら、殆ど有効な手を打たずに日中

戦争を始めてしまった罪はあるにしても「絞首刑」は酷い。票決は6対5のわずか1票差による死刑だった。

広田は公判中、殆ど沈黙を貫いた。他のA級戦犯の同僚たちが広田に無罪を主張することを促しても彼はこれを頑強に拒否したという。このことは昭和50年代に読んだ「落日燃ゆ」（城山三郎著）によって始めて知った。

（しかし今冬、急逝した半藤一利によれば、城山は広田を必要以上に「持ち上げている」と評している。「昭和史」）

刑の執行はその年の12月23日早朝。死刑判決を受けた東条元首相以下7名の遺骨は米軍によって太平洋上に散骨されたという。（令和3年6月8日付　朝日朝刊）

この日は奇しくも皇太子（現上皇）の15回目の誕生日に当たっていた。作家の猪瀬直樹は皇太子に処刑の事実を常に思い起こさせるために選ばれた日であると書いている。

また、この日は広田と外務省同期だった吉田茂が総理大臣として国会を解散した日でもある。そして翌年早々の新憲法下最初の総選挙で大勝して長く「吉田時代」を築くことになる。

人の世の栄枯盛衰を感じずにはいられない。

終戦の年（昭和20年）に戻すと、この年12月からNHKで放送されたラジオ番組「真相はこうだ」が評判を呼んだ。再放送を含めて毎日のように放送されていたが、戦前の軍国主義者の犯罪や国民を裏切った人々を白日の下に晒したドキュメンタリー風の番組だった。

しかし後日、脚本はGHQ内部の民間情報教育局（CIE）ラジオ課と知って驚いた。彼らは戦時中のイギリス番組［Now It can be told］（今だから話せる）を元にした「やらせ番組」だったのである。当番組は翌年2月から「真相箱」と名を変え昭和23年1月まで続いた。

GHQによるプロパガンダは「すべての日本人に敗北と戦争に対する罪、軍国主義者の責任、連合軍の軍事占領の理由を周知徹底させること」を目的とすることであったが、これは当時開廷されていた前代未聞の戦勝国が一方的に敗戦国を裁くという「東京裁判」にも通底された考え方でもあった。

そのため、昭和40年代に入ると、「東京裁判史観」（自虐史観）という造語が語義がやや不分明のまま論壇で流通し始めることとなる。

こうした主張の主力は、例えば渡部昇一（英語学）、西尾幹二（ドイツ文学）、江藤淳、小堀圭一郎（国文学）、藤原正彦（数学）、田母神俊雄（自衛隊幹部）といった歴史学以外の分野の専門家が多かったが、中には作家司馬遼太郎の歴史観（いわゆる「司馬史観」）さえも「東京裁判史観」に毒された史観だと極論する論者も現れた。

（続く）

荻窪と広島

――都市は「ふるさと」か――

山本鎭雄

「心のふるさと」

私は東京都中野区新井で生まれた。次いで杉並区荻窪で育ち、宮城県仙台市に居住した。さらに広島県広島市で一〇余年を過ごし、東京に舞い戻ってきた。一時、アパートに仮住まいしたが、東京都小金井市梶野に住み、定年退職し、この住処（すみか）が「終の棲家」になるであろう。ここに、私流の自分史、回顧録を中心にエンディングノートを書くことにしたい。

「ふるさと」は（一）「自分が生まれた土地」であり、（二）かつて住んだことのある土地、また、なじみ深い土地」である（『広辞苑』）。明治以降、「故郷へ錦を飾る」、功成り名遂げて、錦を着て故郷へ帰ることを念じて向都離村した。また「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷（ふるさと）。……思いいずる故郷」と、「ふるさと」は歌われてきた（『故郷』、大正三年、小学唱歌）。

農村はともかく、都市に生まれた人間にも、必ず「生まれた土地」がある。その土地に愛着を覚え、いずれ自らの「ふるさと」と自覚されるであろう。その生地に終生暮らし続けることもあろう。それを第一の「ふるさと」とする。その後、都市生活者の多くは転々と都市で暮らす。それぞれの都市を「なじみ深い土地」と自覚するようになれば、その土地を第二、第三、第四の「ふるさと」と言えよう。第一の「ふるさと」にたいして、第二以下の「ふるさと」をあえて「心のふるさと」として区別したい。

「ふるさと」を乗り降りする電車に例えれば、第一の「ふるさと」は始発駅の住処とその周辺の土地（地域空間）であろう。次に乗降する停車駅の最寄りの住処とその周辺の土地に愛直を覚えるならば、第二の「心のふる

さと」と言えよう。第三、第四などの停車駅を乗降し、さらに終着駅の最寄りの住処、人生の「終の棲家」とその周辺の土地が最後の「心のふるさと」と言えよう。

私の場合、第一の「ふるさと」は戦前・戦後に住んだ東京都中野区新井である。その後、引っ越し、杉並区荻窪が第二の「心のふるさと」である。第三の「心のふるさと」は宮城県仙台市である。その後、はじめて赴任した第四の「心のふるさと」が広島県広島市である。その後、東京に舞い戻り、第五の「心のふるさと」となった。いずれ「終の棲家」になるだろう。私の人生の終着駅である。

ところで、晩年の井伏鱒二は、関東大震災後に暮らし、二・二六事件に遭遇した荻窪、五〇年以上も居住した荻窪を中心に、その地で体験した自伝的小説『荻窪風土記』（一九八二〔昭和五十七〕年）を刊行した。アメリカ軍は一発の原子爆弾をリトルボーイ（ちびっ子、おちんこ）と称し、広島に投下した結果、広島全市が壊滅し、被爆による大量の死者と原爆症による死者、住宅、工場、学校、官公庁舎、兵舎などの崩壊と焼失という大惨事を起こした。井伏はその惨劇を描き、記録的原爆小説『黒い雨』（一九六六〔昭和四十一〕年）を出版した。私は井伏の二冊の小説を読み、私の人生の第二の「心のふるさと」荻窪と、第四の「心のふるさと」広島を想起する手掛りとしたい。

井伏鱒二の『荻窪風土記』を読む

井伏鱒二は広島県東部の福山（市）に近い農山村の加茂村に生まれた（一八九八〔明治三一〕年二月）。一九歳の時、福山中学校（現・福山誠之館高校）を卒業し、上京して早稲田予科に編入学し、早稲田大学文学部に進学し、のちに中退した。その間、文学青年として短編小説を書き、盛んに同人誌に寄稿した。早稲田界隈の下宿屋に止宿していた時、関東大震災の本震と引き続き起る余震に遭遇し、早稲田大学の下戸塚球場（安倍球場）の三



井伏と節代夫人（29歳）
荻窪の新居
昭和2年頃



井伏
中央線荻窪駅構内
昭和3年頃

塁側スタンドに避難し、被災状況を観望・情報交換した。

その後、井伏は福山東部の生家でしばらく静養し、再び早稲田界隈の下宿屋に止宿した。生家の兄からの送金を貯金し、荻窪（東京府豊多摩郡井荻字下井草）に農家の麦畑の土地を賃借した。生家の兄が再び送金し、建設費に当て、家を新築した。短編小説が商業誌に掲載され、原稿料や執筆費の収入を得た。そこで、遠縁に当たる娘と結婚したが、建築費の借金、米屋、炭屋、酒屋、質屋の借金の返済には苦労したという。

陸軍皇道派青年将校の軍事クーデタ、二・二六事件が勃発した。その早朝、高橋是清蔵相、斎藤実内大臣が殺害された。陸軍教育総監の渡辺錠太郎大将は統制派の頭目の一人と見なされた。叛乱兵士の一隊が中央線荻窪の北西にある渡辺大将の私邸を急襲し、機関銃を乱射した。射撃の名手の渡辺大将は拳銃で応戦したが、射殺され、さらに銃剣で止めを刺された。

私は二・二六事件、荻窪で渡辺大将の襲撃事件を『荻窪風土記』で初めて知った。井伏は当日の午後、積雪を見て、自宅近くの銭湯で「光明院の裏通りにいる渡辺さんが機関銃で襲撃されて、護衛の憲兵も殺された」と聞いた。現在、杉並区で古刹の光明院は中央線荻窪駅の北西にあって、環八通りの直ぐ西側にある。奈良時代以前旅僧がこの地で群生した荻で草庵を結び、観音像を安置し、荻寺と称し、その周辺の地形が窪地であったことから、荻窪という地名が定着したという。

荻窪の思い出

私の父は八三（昭和五三）年七月、享年八〇才で逝去した。父の菩提寺は吉祥寺駅の南西にある井の頭池の弁天堂の本堂、明静山圓光院大盛寺の老僧から吉祥院夏雲秀山居士という戒名をいただいた。葬儀は荻窪駅南口にある自宅で執り行い、そのあと、場所を変えて、初七日の法要を荻窪駅北西にある慈雲山萩寺光明院の斎場で執り行った。その時、父の年来の地元の知人が僧侶に代わり、手に数珠を持ち、肩に袈裟を懸け、天台宗の妙法蓮華経を読経した。

高齢の母はすでに身体を動かすことが不自由だった。本葬では椅子に座り、会葬に見えた方々に丁寧に座礼していた。初七日の法要では、寡黙の母の周りに私や兄嫁や姪たち、近隣の女性が集まり、慰藉の言葉を掛けていた。喪主の長兄をはじめ、私も精進落としのテーブルに着いた方々に酒とビールを注いで回り、会葬の御礼を述べた。私は親族や近隣の知り合いから、「お父さんには本当にお世話になりました」と言われた。父の通夜、本葬、精進落としは実に慌ただしかったが、父の立派な供養になったと実感した。

そういえば、早朝、頑固一徹の父は仏壇の前で特有の寂声で「色即是空　空即是色　般若波羅蜜多」と唱えて

いたことを思い出す。父は決して信心深い仏教徒ではないが、「安心立命」の心境、仏に一家の永続、幸福、健康を祈願し、先祖代々の霊を敬ったのであろう。老いた父は自転車に乗り、荻窪の自宅から五キロ離れた生地の三鷹市下連雀へ行き、空き地の隅に腰掛けてしばし物思いに耽っていたという。父は生まれ育った往時、武蔵野の面影を追憶していたのであろう。

三番目の、直ぐ上の兄は「自由に生きたい」と口癖のように話していた。早稲田大学法学部を卒業し、母は涙を流して止めたが、ブラジルに移民した。ブラジルの第二の都市サン・パウロの日本人街に落ちつき、原石を装飾用の宝石に磨き、のんびりと暮らしていたようだが、高速道路で事故に遭い、即死した。

早速、長兄が骨を拾いにサンパウロへ急行した。父は三鷹市にある大盛寺の別院の墓地に墓所を購入し、火葬された遺骨を納骨した。晩年、三木露風はその周辺に住み、彼の死を悼んで、墓を設け、のちに「赤とんぼの墓」と称した。私のご先祖（父と兄）の墓は「赤とんぼの墓」に接している。私は三鷹駅で降り、タクシーに乗り、運転手に「赤とんぼの墓」へと指示すると、「承知しました」と言われた。若い頃、父が往来した三鷹連雀通りの変貌を注意深く見て、墓参した。

井伏は五七（昭和三二）年一二月、盲腸炎（虫垂炎）に罹り、荻窪駅北口の荻窪病院（その前身は中島飛行機製作所付属病院、その当初は従業員の健康管理を目的とした）に入院した。大晦日の夜、同病院の手術台で全身麻酔注射を受け、近くの「観泉寺の除夜の鐘が『ごおん』と鳴った。……（三つの目の鐘が鳴り）「意識がなくなった」。入院中、腹膜炎を併発し、激痛に堪え、二十日間以上も入院を余儀なくされた。一月一日、手術を受け、その年の第一号患者となったという（井伏、六十歳）。

私は中学生の夏休みに腹痛、発熱、吐き気がして、荻窪駅南口の近くにある診療所の名物医に虫垂炎と診断された。同医師は私が在校した桃井第二小学校の校医で、三学期の冬の全校朝礼の時、演壇で裸になり、乾布摩擦をしたあと、冬風邪の予防について講和をした。同医師から紹介され、井伏が入院した同じ荻窪病院で検査を受け、麻酔を注射され、昏睡状態で痛みを知らず、虫垂切除の手術を受けた。私は腹膜炎を併発せず、二週間で退院することが出来た。初めての入院・手術だった。

午後五時、入院中の病室のベッドで微かにお寺の鐘の音を聞いた。その時、観泉寺の梵鐘の鐘の音だとは知らなかった。私がベッドでうつらうつらしていると、心配した父が自転車で見舞いにやって来た。同室の患者一人一人に「息子を宜しく」と言って、お見舞品を渡して帰った。私は父が幼い子供のように扱い、何故か恥ずかしい思いがした。夏休みだったので、家でぶらぶら静養した。

広島へ赴任

私は荻窪で過ごしたあと、仙台で暮らし、言わば、シュトゥム・ウント・ドランク（疾風怒濤）の青春時代を過ごした。高校の修学旅行で京都や奈良へ行った。その後、関西、さらに西の山陽・山陰、四国、九州、沖縄などへ一度も旅行・滞在したことはなかった。ところが、最初の赴任地が広島市だった。絶えず不安と昂揚の感情が支配した。

広島に赴任の途中、大阪駅で下車し、駅の展望台に上り、駅周辺を見物したあと、夜遅くまで大阪駅前の梅田のキタ、難波と千日前のミナミ、道頓堀の派手な看板のある繁華街を見物し、昔ながらの商店街の新世界を歩いた。木造の建物の中を覗くと、将棋会所だった。映画『王将』の主人公坂田三吉がここで腕を上げたのであろうか。次いで高層の通天閣に上った。

飲食店街の狭い法善寺横町で料理屋、喫茶店から流れてくる藤島恒夫の「月の法善寺横町」を聞き、苔に覆われた水掛不動に柄杓で水を掛けた。大阪は「食い倒れ」の商都だなと納得したのが、その時の最大の印象だった。のちに、広島と東京を所用で往来した時、高校の同級生のA君に会い、大阪、京都、奈良などの名所・繁華街を随分案内してもらった。

大阪から呉線回りの夜行列車に乗った。早朝、目が覚めたが、何とも日覚めが悪く、車窓から夜明け前の薄明るい景色を眺めた。列車は単線で手掘りのトンネル、近くに山々が迫り、そこには雑木林が繁っていた。瀬戸内海の直ぐ近くの何の変哲もない島々を見た。この時、私は広島行きは「都落ち」ではないかとしみじみと実感した。その時の記憶は、今でも鮮やかだ。

これまでの仙台の学生生活で大変世話になった先輩Aさんは東洋工場（その後、マツダと改名）に勤務していた。途中、出勤前の彼の借家を訪れ、独り旅の草草鞋を脱いだ。彼はすぐ出勤し、結婚早々の奥さんに朝食をご馳走になった。頃合いを見て、奥さんが運転する車で勤務先の広島市宇品まで送って貰った。今でも、広島のことを回想すると、いつもA夫妻の厚情を思い出す。

早速、私は赴任前に世話になった知人に挨拶し、彼の案内で挨拶回りをした。事務局長に会うと「申請しているが、まだ辞令は出ていない。急ぎ辞令を出すように交渉する」と言われた。それは、すでに新年度が始まり、連休明けの五月中旬だった。やっと職に就くことが出来、勇躍して赴任先に出向いたつもりだが、まだ辞令も出ていないのだ。今後、私はどんな生活を送るのか、ますます不安が昂じた。

ここに長居は無用と思い、大学時代の同級生S君の職場に電話し、彼の職場を訪ねることにした。途中、広島市内を広島電鉄の路面電車や広島バスに乗り、車窓から繁華街やオフィス街を見物した。広島市の表通りは都市

再建と整備が進捗し、たしかに都心部は立派な地方中枢都市の形相を呈していた。私は「都落ちだ」という軽率な判断をともかく修正した。

S君と事務所で会い、退社時間まで事務所の周辺、直ぐ近くの瀬戸内海と島々を眺望した。夜、彼の下宿で一泊させてもらった。その翌日、彼の紹介で彼の職場近くの賃貸借の真新しいアパートの一部屋を借りることにした。なんとか住まいが決まったが、事務局から辞令が出たという連絡はしばらくなかった。その間、一人で平和記念公園、原爆慰霊碑、原爆資料館、原爆ドームなどを見物して回った。

それ以前、大学の同級生のM君は本社で初任者研修を終え、広島に赴任・勤務していた。A氏、S君、M君とは学生時代の学生寮で過ごし、持つべき友は「同じ釜の飯を食った仲間」だとしみじみと実感した。だが、S君は慌ただしく広島を去って上京した。

先住のM君に広島の歓楽街の流川通りの馴染みのバー「銀河」に誘われた。私は和服姿の美人のマダムに娘の家庭教師を依頼され、他人を介して娘さんの家庭教師が見つかった。なぜか、その家庭教師と娘さんの家庭学習は長く続かなかったようだ。最近、M君からのLINEでつぎのような作句をしたとのこと。

折鶴に託したサダコ原爆忌　拓三

サダコ、実名は佐々木禎子。彼女は二歳の時、爆心地の近くの自宅で被爆し、黒い雨も浴びた。小学六年生頃まで元気に過ごしたが、原爆症（白血病）を発症した。入院中、折り紙で千羽以上の千羽鶴を折り続け、病気の回復を一心に願ったが、亡くなられた。のちに、広島平和記念公園に「原爆の子の像」が建立され、その石碑には児童の願い、「これはぼくらの叫びです　これは私たちの祈りです　世界に平和をきずくために」と刻まれ、石像のモデルになったのが佐々木禎子である。

私は瀬戸内に近い宇品で一戸建ての老朽化した木造の広島県公舎に住み、何とか暮らすことが出来た。「一人口（ぐち）は食えぬが、二人口は食える」と言われたが、妻には大変な苦労を掛け続けた。夜でも、バイトの声がかかると、出掛け、遅い夕食を食べた。

知り合いに近くの宇品海岸に誘われ、磯釣をして何匹か細魚（さより）を釣ったが、下手糞で直ぐ止めた。私設の動物園ではよぼよぼのライオンや滅多に見たこともない山椒魚を見物した。小さなセーリング・ヨットに乗せて貰い、波にもまれ、爽やかな海風を体感した。内陸で生活した私には宇品海岸の経験は、はじめてで、今でも鮮やかに記憶が蘇る。

小学校教諭の私の次兄が教員研修を理由に広島にやって来た。早速、予定した小学校を訪問し、広島における

平和教育について指導を受けたのであろう。その後、平和記念公園のある原爆資料館や原爆ドームを案内した。その翌日、二人で観光名所の音戸（おんど）ノ瀬戸に出掛けた。途中、呉線の車窓から風景を眺め、左に瀬戸内海の島々、右に起伏のある山々が見え、明媚な風光を堪能した。その時、広島に「都落ち」したという最初の印象を完全に払拭した。

私は広島でさまざまな経験をし、「社会」というより、慣習に従い、生きて暮らすために「世間」という社会的現実を身に染みて理解した。広島に生まれ、暮らした人々は自らを「地付きの人」といい、「旅の人」（私のように他所から来た人）と区別して一定の距離を置いた。「地付きの人」は相手の言葉使い、広島方言で「地付きの人」か、「旅の人」か、いずれかを判断したのであろう。私は東京方言を使って、「旅の人」で通した。だが、私はこの広島でこの地の慣習や儀礼を知り、渡る「世間」の知恵を身に着けることが出来た。

勤め先の共済組合がセ・リーグの広島カープ球場のネット裏に年間観覧券を契約確保していた。共済組合に往復はがきで応募すると、抽籤して観覧券が交付された。私は職場の同僚たちと良く広島球場で対戦試合を観戦した。妻と一緒に巨人戦を見物した時、王貞治がホームランを打ち、戦況が逆転した。妻は「王さん　素敵」と金切り声を上げ、盛んに拍手した。

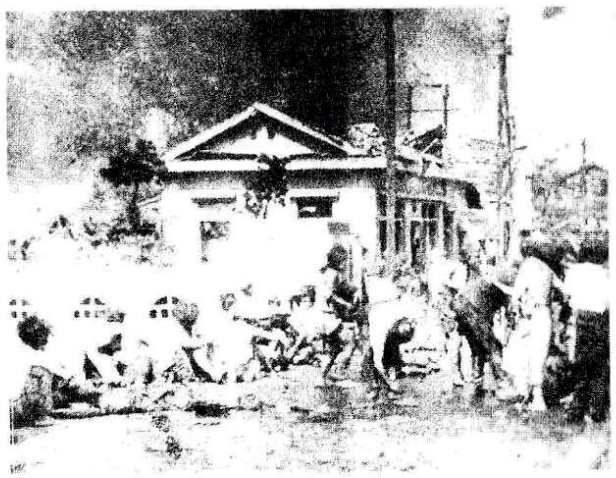
その時、カープファンは憤懣やるかたない。前列の熱狂的なファンがふり返り、苦虫を噛み潰したような顔で妻を睨んでいた。私は恐ろしくなって、妻に「もうやめろよ」と言ったことを、今でも覚えている。「野球は巨人」と思っていた私は、「郷に入っては郷に従え」と思い、「野球はカープじゃけえのう」と言うことにした。広島カープ（鯉）は五月の端午の節句の鯉のぼりの季節が過ぎると、次第にチームの成績が低迷した。にもかかわらず、私は「野球はやっぱカープじゃけえのう」と言って、観戦の後に飲食店街に行き、飲みニケーションをして、親交を深めることが出来た。

井伏鱒二著『黒い雨』を読む

戦争末期、井伏は荻窪から生家の広島県東部の福山市外の加茂村に疎開し、終戦の二年後に上京した。当然、当地で広島の原爆投下の惨劇を聞いたであろう。すでに触れた自伝的小説『荻窪風土記』には広島の惨劇について言及されていない。ほぼ一五年前に発表した『黒い雨』（一九六六〔昭和四一〕年）は、原爆投下直後の広島をテーマに月刊雑誌「新潮」に連載した。掲載当初、タイトルは「姪の結婚」、のちに「黒い雨」に改題されたが、私は広島の原爆被害の実態、地名や場所の詳細、また井伏が参照した重松静馬の「重松日記」を読んでみたが、『黒い雨』のストーリーの展開が複雑で、しかも地名に疎く、

一気呵成に読了出来ず、しばらく本箱に積んだ。

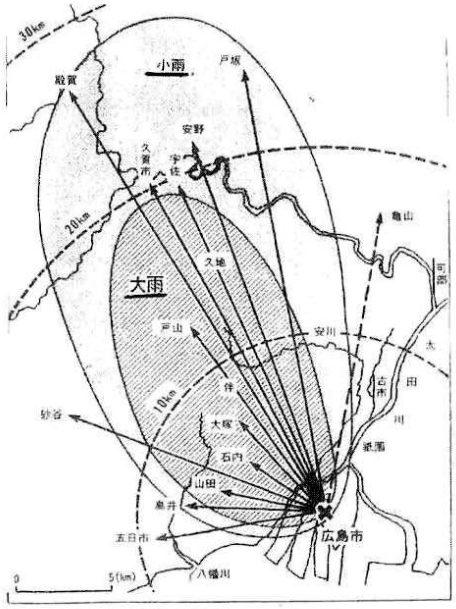
広島の爆心地と周辺では土を掘り、そこに被爆者の遺体が火葬された。安芸門徒の重松は急造の火葬場で「されば朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり」と、浄土真宗の「白骨の御文章（白骨之御文）」を読経した。重松は原爆投下の当日、広島の北（古市）から南の軍港（宇品）を歩いて、妻と姪を探した。ついに、広島文理科大学（広島大学）に近い借家で出会うことが出



広島市平田町御幸橋西（1945年8月6日午前11時半）

来た。原爆の激烈な閃光と強烈な爆発音、つまりピカドンに加え、爆風によって吹き飛ばされた無数の死体の他、建物の残骸や破片が放置されていた。

重松は原爆投下の惨状を目撃し、空中の様子を「『ムクリコクリ』（蒙古高句麗）の雲が東南に流れて行く」と見た。「茸型の雲は、茸よりもクラゲに似た形であった。しかし、クラゲよりもまだ動物的な活力があるように脚を震わせて、赤、紫、藍、緑と、クラゲの頭の色を変えながら、東南に向けて蔓延っていく。ぐらぐらと煮えくり返る湯のように、中から中から湧き出しながら、猛り狂って今にも襲いかぶさって来るようである」とその様子を詳細に描写している（『黒い雨』新潮文庫、六五頁）。



黒い雨　楕円に降る
（内円：大雨、外円：小雨）
（広島管区気象台調査）

その直後、「突然、大音響が轟いた。地響きがして、西北七八百メートルあたりのところ黒煙の柱が立ちのぼった。……また一つ爆発音が響いて、地を震わせる大音響と共に、黒煙の柱を百メートル余も噴き上げた」（六七頁）。

避難者の多くは、クラゲ雲から目をそらせていた。ただ一人、「両手をクラゲ雲の方に突き出して『おおい、ムクリコクリの雲、もう往んでくれえ、わしらあ非戦闘要員じゃあ』と繰り返して金切り声を張りあげる女がいた」という（六七頁）。

重松は「午前十時ごろではなかったと思う。雷鳴を轟かせる黒雲が市街の方から押し寄せて、降って来るのは万年筆ぐらいの太い棒のような雨だった。真夏だというのに、ぞくぞくするほど寒かった。雨はすぐ止んだ。……黒い夕立は私の知覚をはぐらかすように、さっと来てさっと去った。だまされたような雨だった」と、降った黒い雨を自らの日記に記述している（三七頁）。

重松、妻、姪の三人は原爆投下直後、熱気と煙のある焼け跡、各所に屍臭を放ち、無数の俯伏せの死体、建物は崩壊し、大樹は倒木し、庭石は吹き飛び、この世の生き地獄を見ながら広島市内を歩き、放射能に汚染された。黒い雨を浴びた姪は、のちに白内障、悪性腫瘍、造血機能障害などの原爆症を発症した。その間、満身創痍の姪は福山の狭苦しい病室のベッドで七転八倒の激痛に苦しんだ。重松は叶わないことと思いながら、姪の全快を祈った。ところが、姪は自ら苦しんだことを重松に告げず、衰弱し、苦痛に耐えて死んだ（実際は姪は結婚し、二人の子供を生み、亡くなった）。

「原爆小説」の代表作

広島の原爆と長崎の水爆の投下により、両市に空前絶後の惨劇をもたらした。原水爆の凄惨な体験の記憶と記録に基づき、随筆、小説、詩歌、映画、演劇などによって公表され、世界的に唯一のジャンル「原爆文学」が成立した。原爆症を発症した体験者自身の作品、例えば、原民喜の『夏の花』、太田洋子の『屍の街』、峠三吉の『原爆詩集』、林京子の『祭りの場』などは最高の代表作と言えるだろう。また非体験者の大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』、堀田善衛の『審判』、井上光晴の『地の群』、そして井伏鱒二の『黒い雨』などを「原爆文学」の代表作に挙げることが出来るであろう。

『日本の原爆文学』（一九八三年、ほるぷ出版社）は、「核戦争の危機を訴える文学者の会」（署名者「反核文学者の会」）の活動の一環として企画された。大江健三郎、小田実らの編集世話人が相互に協力しあって画期的な「原爆文学」として全一五巻が出版された。しかも販売促進のために大江健三郎、小田実らの編集世話人は文芸講演会を各地で開催したという。



井伏鱒二（左）と歓談する重松静馬（右）
（1964年頃）



重松の姪と重松
背景はゲンバク・ドーム

当初、『日本の原爆文学』は全一六巻の刊行を予定されていた。私は広島で『ヒロシマ・ノート』読んだが、残念ながら、はっきりと記憶に残っていない。ただ、地元広島の中国新聞で『黒い雨』の作者は被爆体験者ではない、被爆者の凄惨な記憶や記録と相違し、重松の「被爆日記」の剽窃だという記事を読んだことがある。多分、中国新聞の記者が被爆者の豊田清史を取材した記事であろう。そのこともあってか、『黒い雨』は全集『日本の原爆文学』に収録されず、全一五巻をもって刊行された。『黒い雨』は新潮社から単行本として刊行されたあと、第一九回野間文芸賞を受賞した。しかも英語版『黒い雨』Black Rain（ジョン・ベスター訳、一九六九年）が刊行された。

たしかに井伏は被爆者ではない。だからといって、被爆者が非体験者の井伏の原爆小説を執筆する資格はないという理屈は不当である。すでに触れたように、井伏は姪の日記を清書・検討し、はじめ『姪の結婚』という題名で、のちに重松静馬の日記を参照し、『黒い雨』と改題し、引き続き月刊誌『新潮』に連載した。なお、これらの日記が清書されたのが、被爆して四年後、重松が福山に近い実家である。

被爆者とはいえ、被爆地から遠い実家でぶらぶらしていると、隣近所との世間体が悪い。重松と同じ被爆者の一人は悪態をつかれたあと、「広島や長崎が原爆された

ことを忘れとる。みんなが忘れとる。あのときの焦熱地獄――あれを忘れて、何がこのごろ、あの原爆大会じゃ。あのお祭り騒ぎが、わしゃあ情けない」（三〇頁）と捨き台詞を吐いたという。

重松が日記を清書したあと、「自分で見たことの千分の一も、本当のことが書けとらん。文章というものは難しいもんじゃ」と妻に語った。すると、妻は「それは、あんたの書く文章が、何かとイズムとかいうものになるからでしょうが」と言った。重松は「イズムというのじゃないよ」と軽く反論した（七一頁）。井伏の「イズム」という表現は、『黒い雨』を執筆した時期のイデオロギーをめぐる対立と密接に関係するのであろう。

重松と妻との「イズム」をめぐる対話は、井伏自身が『黒い雨』をどのような思想や感情で言語表現するのか、表現したのかという、井伏自身の思想性にもかかわる。五五年八月六日、広島で第一回原水爆禁止世界大会が開催され、原水爆禁止日本協議会（原水協）が結成された。それ以後、毎年八月に大会は継続された。その結果、原水爆禁止運動は全人類の共通の課題として世界的に賛同された。

ところが、六一年八月、原水禁第七回大会の開催後、ソ連が核実験を再開し、それを契機に有力な原水爆禁止団体の社会党・総評系（のちに原水禁〔原水爆禁止日本国民会議〕）と日本共産党系（のちの原水協と称した）が対立・混迷を深め、第九回原水禁世界大会は分裂大会となった。六五年には原水爆禁止署名運動に貢献し、日本協議会の初代理事長の安井郁（法政大学教授）は辞任した。

井伏が『黒い雨』を執筆以前、ソ連の核兵器の実験と中国の核兵器の保有の国家的な実施に直面したであろう。また冷戦下の東西対立のもと、中ソの核兵器の実験と保有、社会党系の原水禁と共産党系の原水協は大会開催の主旨、そのスローガンをめぐって激しく対立した。井伏は『黒い雨』を「イズム」からの解放、つまり党派間のイデオロギーの対立を超越し、あくまでも広島庶民の被爆の凄惨な現実を直視し、そのことを文学的に表現したのであろう。

「反戦小説」として読む

福山の近くの自宅に住む重松は、妻に「広島に於ける戦時下の食生活」と題する思い出を書き残すようにと指示した。妻の手記の最後に、「広島は昔から海のもの山のものが豊富」だと言われて来た。だが、「長期にわたる戦時下では、大きな街ほど住民が食生活に困るものだと言うことが、広島に住んでいてよく分かりました」と書き記し、さらに戦争について「老若男女を嘲殺しにするものだ」と付け加えている。井伏は原爆投下後の広島の凄惨な現実をそのように表現したのであろう（八七頁）。

重松は「日記」に「八月六日の午前八月十五分、事実において、天は裂け、地は燃え、人は死んだ『許せないぞ。何が壮観だ。何が我が友だ』。僕ははっきり口に出して云った」。そして「…戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい。早く済みさえすればいい。いわゆる正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい」と真剣に考えた。そう書かれた「日記」を読んだ井伏は「正義の戦争よりも不正義の平和の方がいい」と、「戦争」の終結を自ら断定したのであろう（二〇五頁）。

しかも原爆投下の中心地、兵士たちは上官の命令で穴ぼこを掘り、運んで来た死体を投げ込んで死体を焼却していた。腐乱した死体から蛆がうようよと這い出して来た。童話で有名なピノキオは板と留釘（とめくぎ）で組み立てられた玩具だが、焼却される死体はピノキオの関節部の留釘を抜き取られたような状態に見えた。

上官の命令で死体をトタン板に載せ、肩に担いで来た兵士の一人が、「この屍、どうも手に負えなんだのう」と言うと、相棒の兵士が「わしらは、国家のない国にうまれたかったのう」と言いあった（二〇六頁）。そのような光景を見た安芸門徒の重松は思わず、死体に向かって「白骨の御文集」を口誦した。

このように広島の惨状を見た重松は、「広島はもう無くなったのだ。それにしても広島という町が、こんな惨状で末路をつげるだろうとは思いもよらなかった」と記録している。

重松は八月一四日、明日の一五日正午に「重大放送」があるとラジオで知り、その内容は戦争の継続ではなく、「講和か降伏か休戦か」と推測し、彼の結論は「降伏」だった。それは「ピカドンが落ちる前に降伏することは出来なかったのか。いや、ピカドンが落ちたから降伏することになったのだ」と判断したからであろう（三七二頁）。

さらに重松は「もう負けていることは敵にも分かっていた筈だ。ピカドンを落す必要はなかったろう。いずれにしても今度の戦争を起す組織を拵（こしら）えた人は……」と書いている（三七二頁）。後半の表現は曖昧だが、重松はピカドンを落とすまで戦争を継続した戦争指導部とその組織の戦争責任を問題提起したのであろう。

アジア・太平洋戦争の「敗戦」、「降伏」、とくに「終戦」は、一般に昭和天皇が終戦の詔勅を玉音放送で発した八月一五日とされているが、ミズーリ号の艦上で日本政府代表の重光葵外相らが降文書に調印した九月二日とされている、だが、重松は「戦争はいやだ。勝敗はどちらでもいい、早く済みさえしればいい」と考え、自ら広島が壊滅した八月六日を「敗戦の日」と判断したのである。

井伏の『黒い雨』はたしかに代表的「原爆小説」である。井伏は「重松日記」、記録、聞き書きを「色々熊手で掻き集めるように資料を集め」、この世の生き地獄を

雑誌『新潮』に連載した。庶民が被った悲惨な被爆を克明に描くことで、最高傑作の「戦争小説」と言える。しかも原爆投下による広島の惨劇を綿密に描き、そのことで優れた「反戦文学」、「反核小説」と言えるであろう。

追記

被爆死した方々にたいして、広島市街の各所に遺族や親族たちは追善と供養のために小さな急造の慰霊碑が建てられたという。私が広島に滞在した時、小さな慰霊碑は見かけなかったが、爆心地近くの原爆供養塔、遭難横死者慰霊供養塔、韓国人原爆犠牲者慰霊碑に黙祷して死者の冥福を祈った。爆心地に近い縮景園（旧浅野藩主の別邸）に集団で多くの被爆者が避難した。園内には学校関係者、被爆した老木のもとに見事な慰霊碑が建てられていた。

広大な広島平和記念公園中央に「安らかに眠って下さい　過ちは　くりかえしませぬから」と埴輪型の碑の下に刻まれた原爆死没者慰霊碑がある。毎年、八月六日の「原爆の日」、広島平和祈念式典が行われた。その夕刻、遺族らは死者の追善と慰霊のために、平和公園の横を流れる本安川を中心に灯籠流しが行われた。灯籠は下流に流れ、ロウソクの灯が川面に鮮やかに映え、極めて幻想的で、心から死者の冥福を祈っている。

広島市は砂礫が堆積された扇形のデルタ地帯で、その主たる本流が太田川である。爆心地に近い太田川沿いを歩いていた時、小学校の児童の校外学習であろうか、道路から石段を降り、泥地で子供たちが「先生、見付けた」と言って、地中から掘り当てた屋根瓦の小さなかけら手をかざしていた。原爆投下で家屋は倒壊し、屋根瓦は放射能で粉々に破砕し、熱風で飛散した。それを児童たちがこの泥地で掘り当てた。

当時、被爆者の多量の遺体や火葬され遺骨も放置されたのであろうと推測し、歩いている道路はコンクリートで舗装されていたが、この道路の地中に遺体や遺骨が埋まっているかもしれないと推測してゾッとした。今でもその体験は頻りに思い出す。

私は広島で被爆者と思われる数多くの方々に会った。だが、私に彼らの被爆体験を進んで話すことはなかった。私は体験者の傷口に触れることを躊躇した。「原爆文学」に関連した記録や小説その他を閲読し、人間の生と死、戦争と平和について真摯に向き合うべきだった。今、老いて「終活」の我が身、そのことを猛省している。

『黒い雨』の最後に、重松は黒い雨を浴びた姪の原爆症の回復を願った。「今、向うの山に虹が出たら奇跡が起る。白い虹でなくて、五彩の虹が出たら（姪の）安須子の病気が治るんだ」、「どうせ叶わぬことと分っていても、重松は向うの山に目を移してそう占った」という。重松は奇跡的に「五彩の虹」が現れることを願って、心

から姪の症状の回復を祈ったのである。

二〇二一年六月夏至　擱筆

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

「国旗と世界のストーリー」始末記―Ⅱ

（発売後6月20日）

米村典紘

『国旗と世界のストーリー』のアマゾン予約販売が5月下旬に始まりました。アマゾンでは1時間ごとに、分野別（拙著は地域研究）に購入数の状況がランキングされるシステムがあります。

また、神戸市、つくば未来市などの教育委員会、図書館からの注文が、直接出版社に入り、教育分野の関連図書として評価されるようになってきたようです。ただ、一般の書店販売は準備段階で、恐らくオリンピックを睨んだセールスプロモーションがこれからなされるのではと愉しみにしていましたが、無観客開催ということで、売上げの増加は期待外れになるかもしれません。更に緊急事態宣言下のオリンピックになったことで、ロータリークラブからの講和依頼も延期になりました。

出版して驚いたことは沢山ありました。まず、コロナ禍の5月下旬、10人程度の集会に参加した時、私の呼び名が「米村さん」から「先生」に変わり戸惑ってしまいました。

6月の中旬に五輪組織委員会の橋本聖子大会会長に挨拶に行きました。晴海のトリトンスクウェアーの展望の素晴らしい会長室で「著者の先生は会長の隣に」と言われ、会長が拙著を掲げて頂き記念写真をとりました。

その後、ソファーに座り、私は東京オリンピック開催意義について橋本会長に説明しました。

「五輪は歴史的にも世界平和の普遍的な証（あかし）、過去に世界大戦で中止になったことがありますが、人類が力を合わせてコロナ禍でも開催出来れば、それだけで十分な意義があり、今後の国際大会の見本となります」と緊張しながらお話ましたが、会長は事前に拙著を読んでいたようで、にこやかにうなずき、秘書にサインペンと朱肉を運ばせ、本の白紙の部分に、『**心より感謝申し**

上げます　東京２０２０オリンピック・パラリンピック組織委員会　会長橋本聖子』と自筆され捺印を押して頂きました。（その瞬間にこの一冊は我が家の家宝となりました）。

私は話を続けました。拙著のブラジル編ではふれましたが、その時の状況を少し詳しく説明しますと、友人とブラジルのアラカジュという街に旅行中に、友人が死にそうになったときの話です。「友人はみるみる顔が緑色になり、立っていることも出来なくなってしまいました。ホテルの主人と一緒に数少ない街の病院に担ぎ込みました。既に診察を待つ多くの患者さんたちが列をなしていましたが、彼らは外国人である私たちに順番を譲ってくれました。３名の医師が診察、私は辞書を片手に「盲腸炎」ではないのか?と余計な問いかけをしてしまいましたがそうではなく、海岸で食べた生牡蠣（なまがき）中毒で数時間遅れれば死に至る怖い病であることが分かりました。病院での処置は適格であったため、リンゲルや注射などが打たれ顔色は少し赤みが戻ってきました。

最後に、ドクターから〈治療費はいりません。日本で困っているブラジル人がいたら助けてやって下さい〉と言われました」更に続けて、

「和歌山沖で遭難したトルコ船の船員救助のために、和歌山の漁民達が身を挺して助けに行き、９６名のトルコ人の命を救ったことを、トルコの人達が今でも忘れず、親日国となっているように、私は親ブラジル派の一人です」と調子にのって話してしまいました。

つまり、オリンピックで来日する外国選手がコロナになれば「国民のいのち優先」は当たり前だとしても、ホスト国として対応するのが当然なことであり、日本人の心意気そのものであると伝えたかった訳です。

次に出版して驚いたことの二つめに戻ります。

まんじの同人の方々をはじめ、数多くの方から祝辞（電話、メール、手紙）やお祝い品をいただいたことです。その中には、昔その方のご主人と親しい親交があり、３年前に鬼籍に入られた故人の貴重な芸術品ともいえる日記を添えて頂いた心のこもったお手紙と祝い品もありました。

５０数通のお手紙には、本の表装などが素晴らしいこと、内容が国旗だけではなく、コラムが思いのほか良かったこと、孫の教材になるので孫の分まで注文したこと、これから国旗の勉強したいことなどさまざまでした。また、米村さんがこんな本を書いていたことは全く知らなかったので驚き、今度私の会で話して欲しいとの話もありました。

台湾在日代表からは、「世界を紹介する本の中で今まで台湾のことをこのように多くのスペースを割いて書いた本はしばし無かったので、是非著者にお会いしたい」

とのお言葉も頂きました。五輪の警備担当の総責任者で私と同姓の方からは、「五輪は正直、大変ですが、コロナ禍の五輪として歴史に残すべく頑張りたいと思います」と記され、「くれぐれもご自愛の上ご活躍下さい」とのお手紙を頂きました。

書店販売について記述します。書店が商業出版するとき、基本的には東販、ニッパンなどの大手流通を通じて書店に並びますが、出版社からの委託販売なので、本が売れなければ書店は出版社に本を戻すことが出来ます。出版社としては、売れなければ全て戻されるので大きなリスクを抱えることになります。最近のカラー印刷は昔よりはだいぶ安くなったとはいえ、拙著のようなカラー本はリスクが大きい商品となります。そのため、ターゲットを絞った戦術が必要となってまいります。

私の友人が、最大書店会社Ｋの代表者と学生時代から昵懇（じっこん）なことから、拙著を売り込んでいただいた結果、７月のオリンピックにあわせ主要店を中心に販売することになりました。

先日出版社から、出荷台帳を送って来ました。

書店では、紀伊国屋書店が全国９０カ店（大学の売店を含む）と一番多く、ジュンク堂１８カ店、未来屋１５カ店、丸善、三省堂、が続きます。単独店では八重洲ブックセンターもありました。

また、大学（津田塾大・農大・玉川・学習院・相模女子・駒沢・成城・上智・明星・南山・京都産業・武庫川学院・西南・関西・東海・中央・山梨・長野）からの注文もありました。

全国市長会の会長をなさっていた友人からは、「この本は手に取って読んで頂ければ、誰しも勉強になる本」「オリンピックが終わっても子供や孫のために、きれいな色の国旗を覚えることで世界を知るきっかけになる学習書、世のためになる」と言って、旧知の市長の方々に自ら働きかけていただき、図書館からの注文が入っているようです。

また、私の出身大学は、「全人教育」のこじんまりした良さがあります。教育理念の一つに「他人の喜びを我が喜びとすべし」があり、これが人生を豊かにすることだと教わりました。

その教えからでしょうか

インターネット「成城同窓会」の会員活動情報欄にはいつの間にか拙著が載っていました。お礼に電話をすると、また事務局長の働きかけと出版社社長の協力で学生食堂にある三省堂書店にも置かれることになりました。

ＯＢとしては嬉しいことです。

インターネットでは、アマゾンの他ネット販売の会社が拙著の販売を開始しています。たしかにネットは便利ですが、「米村典紘」と検索するだけで、多くの情報がでるようになりました。つまり、これからも悪いことは

一切出来なくなったと言うことです（笑）。

出版後はしばし気がぬけたような気持ちにもなりましたが、諸先輩や多くの友人方から数々の感想とエールをいただくと、本を出版し世の中に問うということが、思いのほか大きな反響があり、大きな驚きとエネルギーを感じました。

東京２０２０五輪では首都圏での競技が無観客となりました。拙著で「五輪と感染症については政争の道具にしてはならない」と訴えていたことが、秋の衆議院議員選挙を控え「政争」そのものになっています。民主主義の弱さかもしれません。

発売後も出版社の方々、まんじ同人の方々や数多く力強い友人方の引き続きのご協力をいただき、いつもながら「多くの人に支えられて今まで生かされてきていること」を改めて感じています。心より感謝申し上げます。

次回は、「東京五輪」と「世界の動き」についてメンテナンス投稿の予定です。

6月20日　筆者

宅建士「花山聖司郎」の不動産事件帖
虚栄の罠（前編）

葵州月

宴のあと

「人に対して誠実か、礼節に外れてはいないか、自分が欲に溺れ、欲に狂ってはいないか」営業第一課、野本修一郎主任が朝礼台から州英不動産の本社社員にやさしく語りかけている。

一週間に一回、月曜日、全社員の朝礼で「ひとり五分スピーチ」のセレモニーは、社員が持ち回りで自由なテーマを取り上げて話をすることになっており、今朝は営業第一課、野本主任がその当番だった。

安岡正篤翁を尊崇し、腹中、導師としている大多社長が「一燈照隅・萬燈偏照」を社是としたのは会社創業以来だった。

その経営理念を、社員ひとりひとりが置かれた立場で奮闘努力して、光り輝け！そうして満天の星のごとく全社員が光り輝き、家庭、会社、社会を照らせ！と展開している。この「五分間スピーチ」は先の「某役員の殺人幇助・背任事件（係争中）」以来、大多社長の発案で全社員の楔として始まったのだった。会社役員の不祥事件は不動産免許取消に及ぶこともあるが、新東洋開発との裏金の覚書が判明した時点で丸尾裕一常務取締役を解任したこと。また当社、社員が埋もれた凶悪犯罪を再捜査し解明する糸口となって事件を解決に導いたこと、この社会的な貢献度が評価され会社存亡の危機を乗り越えた。

野本はスピーチのなかで「誠実」とは私利私欲のない純粋無垢な心で真実を見極め温かい真心で人に尽くすことだとも言った。また礼節の例として「まず普通の挨拶」を励行し、人を見下すことなく相手の立場を思いやることが社会の秩序と調和を維持する原点だという。

そして締めはユーモラスに「わたしたちはいま再び、経済的にたいへんめぐまれ裕福になっている時期だと判断しています。当社の給料や賞与は業界でナンバーワンだと思っています。これはバブルではないでしょうか！」（大爆笑！）

「賢者は過去から学ぶ、と言う」諺があり、いまこそあのバブル期の悪い習性は慎まなければなりません。例えば酒食や遊蕩の欲望を押さえなければならないと言うことです！贅沢な宴やキャバクラに狂うと、家庭生活の崩壊に繋がり、自分自身が泣きを見ることになりますよ！（爆笑）そういうわたし自身があの昭和の不動産バブルを経験した男です。日本の経済は忽ち崩壊してわたしの勤めていた元会社も倒産！わたしは失業し妻子とも貧乏暮らしに泣いた経験者ですから間違いはありません。過去は変えられませんが、自分自身と未来は、今から自由に変えられます。良い一日を始めましょう。（拍手）

野本修一郎は五十七歳、花山課長より二十歳年上の部下だが、短期間では異例の販売実績を上げてきている。苦境を乗り越えてきた人柄が顧客に安心感を与え信頼されているのだろう。

さらに昨年は過去に起きた登記簿の不実記載「不動産詐欺事件」を志摩司法書士らと分析調査、罪を逃れていた共犯者や殺人犯逮捕に貢献したひとりだった。

正義感と誠意のあるトップセールスマンのスピーチは素晴らしい！良い部下に恵まれ幸せだと花山課長は思っている。

朝礼のあと「営業第一課の打合せ」で移行する。

田丸営業部長が営業第一課の部屋へ入ってくると笑顔で野本を労う。

「野本君！いいスピーチだった！今の給料が今だけで終わらないように、今日もがんばろうな！よろしく頼む」

「ありがとうございます。たくさんいただき感謝しています。ホンネです」

「感謝のこころも大切だね。萩谷君もいい先輩に恵まれてラッキーだぞ。プレーヤーである前に社会人なのだと認識してくれよ。やがて、キミのスピーチも期待しているよ！」

「はい！野本さんのような素晴らしい話はできないと思いますが・・難しいけど、がんばります！」

役職では係長の萩谷雄二が緊張して答えた。

「いいんだよ！自分を語れば。キミの好きな野球の話が聞きたいな」

彼は三十一歳、元高校野球選手でキャッチャー。全体を冷静に見て、大局的、多面的に判断できる資質を期待されて入社した。みんなとの協調性も抜群で社内の評判もよい。

「さて、無駄話で申し訳ない。花山課長へバトンタッチ」

「ありがとうございます。さあ！みんな！今日の予定をこれから確認しますよ！」

いつものように各課員の前で業務分担表を開いて課長の花山が各担当へ告げる。

「萩谷君は川崎ホープタウンのプロジェクト担当だよね。今日から新区域で新規の地主さんへ挨拶と買付交渉を引き続きお願いします。同行のタチバナハウジングの前田課長によろしくお伝えください。各々の決済の時はわたしも出ますからね」

花山は野本の席へ移る。

「野本主任の今日の予定は藤沢のR銀行で中古住宅の決済でしたね。新入社員の山岸君と一緒に、よろしくお願いします」

既に山岸昴は緊張して野本の傍に立っている。

山岸昴は二十三歳、T大学卒業と同時に入社、野本とは親子のような歳の差。花山は新人の実務教育も野本に任せていた。

「さあ、肩の力を抜いて！山岸さん」

女性社員の小城弥生が緊張した山岸に声をかける。

「ひかり、輝け！スバル君！キミは会社のニューフェイスなのよ！」

ベテランの女子社員、彼女は内勤専業で明るい、ムードメーカーなのだ。

「歌にもあるわ、われはゆく、蒼白きほおのままに・・さあ行けゆけ！」

「顔は色黒ですが、名前負けしないように、頑張ります」

「そうよ！その調子でね！」

彼女の日常は、店頭の物件広告を見た顧客の受付、対応、担当課員への顧客からの取次や電話連絡、取扱物件の資料作成、整理、総務、経理部との庶務全般がルーチンワークだった。

今日は特別の来客予約はない。

課長の花山聖司郎は田丸営業部長から指示を受けた訪問先があった。

午前中は、港区浜松町の大門土地開発株式会社の専務、井坂久志、顧問の萬道与輔と「横浜山手」にある住宅の仲介不動産案件の打合せだった。

同社と大門土地開発との親密な提携関係は田丸営業部長と井坂専務との縁で二十年になると、花山は聞いている。

「花山課長！井坂専務がたいそう喜んでいたよ。キミが紹介したらしいね。優秀な技術屋さんだと褒めておられた。ありがとう！」

「はい、私と同窓の土壌汚染調査技術管理者を紹介しました。部長もご存じの東邦化学の工場跡地の土壌改良で・・・」

「まあ、詳しいことはいいよー井坂専務によろしく伝えてくれ。今日の媒介物件をよろしく頼むよ。あの山手の大邸宅は地元の当社が決めなければなあ、東京の業者には負けられんぞ・・・」

「山手地区」といえば横浜では定評のある高級住宅地域だった。ここは明治以降外人居留地の歴史があり、港が見える丘陵地では美しい庭園を兼ね備えている広い邸宅が多い場所だった。

会社からほど近い、優良な物件だが媒介の大元（おおもと）は株式会社大門土地開発だった。

「わかりました。地元の物件ですから頑張ります。値ごろ感も良いと思っていますが・・・」

売却指値は一億六千万円、土地の面積、二百坪、建物は木造、七十坪の風光明媚な邸宅と宣伝できる優良物件だった。是が非でも当社で買主を見つけなければならない。

田丸部長と打合せを終えると花山聖司郎（かやませいしろう）は横浜市中区本町にある、州英不動産株式会社本社ビルから馬車道の舗道へ出た。京浜東北線で関内駅から横浜駅に向かうためだ。

初夏の風が気持ちいい。

馬車道には「アキニレ」の街路樹が浜風を受けてそよぎ、時折、海の香りを運んでくる。

この地、関内駅の周辺は幕末維新、横浜港開港と同時に外人居留地となり、明治時代、港との間約一キロは外人馬車や乗合馬車が行き交う道となり「馬車道」と名付けられたという。

当然、現代は自動車が絶え間なく走る幹線道路だ。

花山が踏みしめているレンガの舗石やレトロな街路灯（ガス灯）のエキゾチックな造形に当時の面影を偲ばせる。

彼はこの街が好きだ。

自分が置かれた歴史ある環境で仕事ができることを感謝しながら働いている。

（今日も先ずは自分のために頑張らなくてはならない！）

それが根源で、結果は家族や会社のため、日本経済のため、国家のためになると営業部長の田丸謙二郎に教えられて今日に至っている。

平成二十七年六月×日。

横浜駅から東海道線、品川駅で山手線に乗り継いで浜松町駅で下車、

浜松町駅、北口を出たのが午前十一時二十分だった。

花山は東京都内へ出かける場合、車は使わない。道路事情で到着時間が読めないからだ。「約束の時間を厳守」することは彼の営業姿勢の基本としているところだった。

電車を降りて浜松町駅北口を出ると、すでに夏の太陽

が真上から歩道を照り付けていた。一気にアスファルトの熱が足元から上がってくる。

梅雨入りの季節、蒸し暑い！

（関東地域でも都内は横浜と体感温度が随分ちがうなあ）と、常に感じている。

花山聖司郎は上着を脱いで手に持った。

駅から徒歩で約七分。指定された時刻、十一時三十分前、大門土地開発本社の玄関ロビーに到着した。このビルは同社が所有する貸しビル、建物名称は「DKビル」という。玄関フロアーに入ると冷房が効いていた。気持ちがいい。顔の汗を拭うと花山は手に持っていた上着を着てネクタイを結び整えるとエレベーターに乗り、大門土地開発本社を設置した六階のエレベーターホールで降りた。

白い大理石のフロアーを歩いて受付に向かう。

「花山さん、おはようございます！井坂専務がお待ちかねですよ！」

突然、濁声（だみごえ）が廊下に響いた。

同社、顧問の萬道与輔だった。

「お早うございます。おや！萬道さん、どこかお出かけですか？」

「いえ、ウンチ（大便）に行くところです！」

大真面目に答える。

フロアーを行き交う女性社員ふたりが顔を見合わせて「クスッ！」と気恥ずかしそうに口元を押えて、花山の前を小走りに通り抜けて行った。萬道はそんな女性社員に気付いても羞恥心は微塵もないようだ。

「萬道顧問、部屋でお待ちしています！今日はよろしくお願いします」

花山は萬道の背中に一礼をする。

彼は六十歳で三分刈りのゴマ塩頭、下肢は短く蟹股（がにまた）、背中を反らせて「洗面室」に消えていった。

「ウンチクのない無粋な人だなあ・・」

思わず呟いた自分の駄洒落に苦笑する。

Time（時間）、Place（場所）、Occasion（場面）がわからない萬道顧問を全面的に信頼することはできないな、と彼は思った。

表面的に見れば素朴な初老の男に見えるが、花山には萬道の真の性根はわからなかった。

萬道に初めて会ったときは「花山さん、わしも、あのとき銀行の貸しはがしにさえあわなければ今も銀座のビル王と呼ばれていましたぜ・・・」バブル経済崩壊時に受けた自分の悪運を語り、落胆した姿を見せたこともある。

しかし、酒に酔うとその表情は一変する。

「バカヤロー、今にデッカイ仕事をして、あの銀行の奴

らを見返してやるよ！今に見ていろよ！もう一度オレは花を咲かせて見せるぞ！」

誰かれなく虚勢を張る。

「見栄はる爺さん！」「もはや花咲じいさんにはなれないだろう！」

口さがない社員に陰で言われている。

花山はまた、野本の朝礼スピーチ「礼節」を思い起こしていた。

（来客への礼儀、この会社は社員同士が社員を育てているのだろうか！）

花山は「人生は人との縁の糸で紡がれた織物のようだ」と誰かが言っていたことを思い出していた。すでに萬道顧問との縁が始まっている。どんな糸の色で紡がれるのだろうか？

その前に萬道与輔の経歴を簡単に見ておかねばならない。

萬道与輔は新橋で生まれ新橋で育ったという。勉強の嫌いな彼は高校を卒業すると同時に、戦災から奇跡的に免れた父が所有していた貸ビルのひとつ、新橋、烏森にあった五階建て、二十室の貸ビルの管理を手伝った。

幼少から経済的に恵まれて、わがままに育ってきたから、ビルの管理とは言え、清掃等の汚れ仕事はアルバイト要員を採用して厳しく指示し働かせた。賃料は彼が専権で管理し必要な経費を支払い、差引いた純益を彼の収入として自由に使った。

彼は二十二歳になった時、幼馴染みで美容院に勤めていた大崎結子と結婚し、一男二女に恵まれ、平々凡々と過ごしていた。

やがて、

彼が五十一歳の時、父親が死亡すると同時に渋谷にある貸しビル二棟を烏森ビルと合わせて相続した。

当然、税務、賃料管理、テナント管理等、仕事は数倍に膨れ上がり煩雑になった。

どうすればいいか。自分の手を汚さず、苦労なく利益をあげる方法を模索、諸所に相談をする。

その結果、

地元で税務事務所を経営している税理士と取引銀行員の指導を受けて、貸しビル業を目的とした株式会社萬道ビルを立ち上げた。

新たに社員を増員して組織化、会社社長として貸しビル業に専念していった。

その数年後、不動産、金融バブルが訪れたのだった。

各地で貸しビル成功者が生まれ成功のマニュアルがマスコミで紹介される。高騰した不動産を担保に入れて銀行から融資を受けて次々と新たな不動産を取得、これを繰り返して巨大な資産と負債を増やしていく方法だった。

彼は時流に乗り遅れまいと

「うちの会社も貸ビル業者だ。更に不動産投資がしたいが、どう思うかい！いつ買えばいいのかね」

「萬道社長、それはいまですよ！お金は幾らでもお貸ししますよ。会社をビッグにする、今がチャンスです！」

「そうかね！上等博覧会じゃ！オレも男だ！宝船に乗り遅れては男の恥じゃ！」

萬道に売り物件の資料を持ち込む銀行員たちの誘いに乗って、新規の貸ビル購入の決断をするのは速かった。

（上等博覧会！）は気分のよいとき吐く、彼の口癖だった。

銀行員、更に不動産業者が勧めてくる銀座の貸ビルを次々購入。テナントの埋まった貸ビルの利回りは良かった。

天から降ってくるように多額のお金が彼の懐に入ってくると、毎日のように銀座、六本木へ萬道を取り巻く者らと豪遊する。“おカネのキレの良い社長さん”とおだてられると

「金は天下の回り物じゃ。宵越しの金は持たねぇよ！」

「さすが社長！太っ腹！今や銀座のビル王だ！」

彼を取り巻く者で自分に利益をもたらす者は萬道社長を褒め、媚びる。

贅沢な食事、高級なお酒、若い女性。

萬道は帝王になった気分で酒池肉林の幻覚にハマったのだった。

更に敗残の原因はトランプのジョーカー・ゲームのようにバブル期の最後まで彼は幻のジョーカーを大事に持ち続けたということだった。

「悪夢から覚めてほしい！」

萬道を諫める妻や友人は彼にとって疎ましい存在になった。

結果、妻とは間もなく別居、離婚された。

「人生は好きか嫌いか、損か得かじゃ！」

彼は独自の人生哲学を豪語して虚しい自己弁護を繰り返していた。

“山高ければ谷深し”諺のごとく不動産価格は大暴落、不動産の簿価は泡のように消えていった。

株式会社萬道ビルも当然債務超過に陥り、それまでと政策転換した銀行から報復を受ける、新しい担当者からは激しい“貸しはがし”にあって間もなく倒産、破産手続きに移行した。

平成十一年に成立した民事再生法で債務カットはされたが、所有していたすべての不動産、金融資産を失ったのだった。

“奢れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし”まさしく平家の凋落を思いおこすばかりだった。歴史は繰り返すものだ。

当時の経験のない花山課長は、主任の野本修一郎からこの時期の経済破綻を聞いて知った。

しかし、

一方では、無謀な不動産投資を慎み、負債を押さえて堅実な経営をしてきた企業もあった。

その一つが株式会社大門土地開発である。

萬道ビルの破綻、社長の萬道与輔の生活窮状を伝え聴いた田代社長が萬道一家の救済に動いた。

「萬道さん、私の会社で働いて見ませんか?」萬道の亡き先代とは旧知、過去に取引をしたこともあり、その縁で彼を会社顧問として招聘した。「あなたの経験や人脈を生かしてビル管理の指導と営業活動をお願いしたい」

経営に失敗したワンマン社長、萬道与輔が即戦力になるわけはないが、二度目の妻をパートで働かせて、二人の子供を育てている窮状も知っていたから。

恵まれた環境に育った未熟な経営者だが根は善性であることを良としていた。

長い目で見れば、やがて自己の根源を悟る時期もくるだろう。

これを期待して田代社長が救済をしたのだった。

いつはりの糸

五月初旬。ソメイヨシノの桜も葉桜にかわり、その新緑は清々しい。

大門土地開発顧問、萬道与輔は住宅地図の写しを片手に横浜市の高級住宅地、「山手」の一区域の邸宅を目指していた。上下アイボリー色、ダブルの春用スーツで帽子はレトロなカンカン帽子、オレンジ色のネクタイ、その姿は一見、キザな遊び人風に見える。

いや、昔、どこかで見た松竹新喜劇の芸人のようでもある。

彼にとっては高価な一張羅の正装なのだがどこかレトロで可笑しい。古いベンツと同じように懐かしい時代の産物なのだった。

今日は、ゴルフ仲間から紹介された「売却希望の邸宅」を見て、「専属専任媒介契約」を結ぶためだった。

「萬道顧問!宅建上の高野君を同行させましょうか?」

井坂専務に言われたが

「いや、けっこう、毛だらけ、猫はいだらけ!」両手を翳してお道化て見せる。「自分一人で大丈夫ですよ専務。信頼できる友人の紹介ですからの、ご心配には及びません」

久し振りに出てきた優良な売りの物件情報だった。萬道は自分一人の手柄話にしたかった。(当然、コミッションは半分頂ける契約だ、他人に借りはつくりたくなかった)

会社組織の常識、コンプライアンスやリスク管理も今もって彼は分かってはいない。

「専務!高野君から重要事項のチェックリストは頂きましたし、専属専任の契約書も貰いましたからな、媒介契約が出来次第、売りにかけましょう」

港の見える高級住宅は供給が少なく、出ればすぐに売れる物件として定評のある住宅地でもある。

「すぐに買い手がつきますわな、はっはっは、心配しなさんな!」

今の萬道は専務とのやり取りを思い出して、ご機嫌だった。

当然、計画通りに運ぶだろう。そうすれば高額手数料が彼の手に入るからだ。

鼻歌まじりに街路樹が続く舗道を歩いてくる。

「♪惚れて通えば千里も一里　♪逢わずに帰ればまた千里♪」

地図を片手にして各住宅の門前に貼られた住居表示板を見比べながら勝手に浮かんでくる言葉に都都逸の節をつけて歌いながら目標の住宅を探しているのだ。

萬道は歩くのが苦手だった。査定ゼロの古いベンツは債権者にも持って行かれず、手元に残っていたが、一昨日に青山通りで突然エンストしたために修理にだしていた。

(♪車も買い換えたいが♪先立つものは・・お金かね♪)

汗を拭きながら、港の見える丘陵地から空を見上げてフーと大きな息を吐く。

(お金だ。お金がすべて。あの景気がいい時、随分無駄使いをしたからなあ。罰が当たったんだなあ・・・)

後悔と反省が時折胸を締め付ける。

立ち止まって春の浜風を受けている。バブル崩壊、会社倒産時の苦しい時期が胸に浮かんでは消える。

暫くゆっくり息を整えていると心地よい春風が胸の痛みを和らげる。

(そうだ!目的の物件を早く見つけなければならん。所有者から売却のための専属専任媒介契約の契約書を貰わねばならないのだ。そして、買主も自分で見つけたいもんだ~ね、♪これが両手に花というもんだ~ねェ・・♪これはたまらん♪これまた、たまらん♪)

ドラ声が春風に乗って響く。

「変なおっさん!変なおっさんたら!へんなおっさん!」

気が付いたら数人の小学生がコメディアンの志村けんの真似をして走り抜けてゆく。

それを見送りながら萬道与輔は、

ふたりの子供たちの顔を思い浮かべている。何としても二人とも大学まで進学させて良い会社に就職させねばならないのだ。

一軒のマサキの生垣で囲われた邸宅が目に入る。

門の左右には花壇が設えてある。

大きさから判断すると目的の家のような気がする。

正午に近い時分、萬道は門前に立ち止まった。
カンカン帽を右手で取って汗をかいた頭を扇ぎながら屋敷を眺めている。
「生嶋」と御影石に彫り込まれた表札が門柱に埋まっている。
（この屋敷だ。生嶋真紀子邸に間違いはなかろう）
見ると花壇に屈みこんだ女性の背中が目に入った。花床の手入れをしている様子だ。
「あの～ちょっとお聞きしますが・・」
エプロン姿の女性が手を止めると萬道を見上げた。目と目が合う。女性は丸顔の老婦人だった。
「いいお天気ですのう。ここは生嶋さんのお屋敷でしょうかな」
「はい、こんにちは。そうですけど・・」
老婦人は小さな手道具、備中鍬（びっちゅうくわ）を持ったまま立ち上がった。
「何の花ですかいのう、そこに咲いているきれいな花は」
「スイトピーですよ。これは赤いスイトピー、あの紫も白いのもみんな同じスイトピーですわ・・・」
「はあ～、何か歌にもありましたなあ。これですか・・・あの歌の花は！」
「聖子ちゃんの歌ね。赤いスイトピーのうたですよ。♪こころに春が来た日は赤いスイ～トピ～♪・・ですわねェ」
「はい！いいお声ですな・・・さすが！」
さすがに元芸者さん！とは言わなかった。
粋で気さくな老婦人で良かったと、萬道は心が震えた。
この人が生嶋真紀子に違いないとこの時確信した。紹介者から、所有者は元赤坂で芸者、その後、横浜関内で高級クラブを経営していた色気のある女性だという経歴を聞いていたから。
描いていた想像と現実が瞬間混じりあった。
老いても婦人の目鼻立ちは美人相だ。
色気があり、粋な女性は自分には性（キャラクタ）があう、と、思っている。遊び慣れた者同志は馴染みやすいということだろう。
この女性の実態は、生嶋真紀子と親しい家政婦さんだったのだが。
日頃から大雑把な性格の萬道には気が付くはずもなかった。
彼女を家政婦だと見抜くことはできなかった。
彼は胸を張り
「実はこういうものです」
名刺を差し出して渡す。
「まあ、不動産屋さんなの。とても見えないわね～」
「・・・・」
どう答えていいか返答に悩む。
老婦人は萬道の五分刈りの白髪の混じった頭から足元まで見分し、「でも、いい男ぶりねえ！」
「いや～、おねえさんこそ美形ですなあ・・もと女優さん？」
気持ちよくウソが言えた。
「お上手なこと、ホッホッホ・・」
「ワシは何やに見えますのかなあ」照れを隠して聞いてみた。
「あなたこそ芸人さん？いや～、リッチな社長さんと言われても可笑しくはないわよ！」
この女性の名は岡野マリ。クラブで働いたホステス時代のクセだろう。「男をほめてほめてほめあげる」これがホステス稼業の常套手段と、教えられ、三十年もホステスをやってきたからお世辞も血肉になって染みついていた。
（ほめられて悪い気はしない。男と言うものは褒められれば褒められるほどお金の切れが良くなるものよ）
老いても女の習性（サガ）は消えないのだろう。
この岡野マリは横浜、関内で生嶋真紀子が経営していたクラブ“マキ”でも二〇年近く働いた。
二人は出会いから気が合い、やがて岡野マリはチーママ（運営代理）となって多数の美人ホステスを雇い入れて関内ではリッチな男たちが集う高級クラブとして有名な時代を築いた。
やがて、
生嶋真紀子の夫が肝臓がんを患い亡くなった。子供はいない。失意のうちに生嶋真紀子は七〇歳になり、客足も徐々に遠のいてくると経営意欲を無くして店を居抜きで転売、業界から引退した。
債務はなく、山手の家を相続し、店の売却金は岡野マリや勤めていたホステスに退職金として支払ったが、その残金や預貯金もあり生活に不自由はしはなかった。
「マリ、長年ありがとう！よかったら、このまま家事を手伝ってほしいな。一緒に住んでもいいわよ」
マリはその時、六十七歳。クラブで知り合ったやさしい「ある男」と長年同棲していた。
住まいは、その男が住む黄金町の老朽化したビルの一室だった。
このビルのオーナーはバブルの崩壊で倒産し失踪、立地条件、権利関係が複雑で整理回収機構でも現在も整理ができていない。
今はホームレスや生活困窮した老人、障碍者ら「生活保護受給者」を集めた異色の老朽ビルだった。社会福祉の名目で生活保護費を基金として「ある男」が一部の住人を組織化し運営している。
別称「闇のＮＰＯ法人」と言われている。
「いい話じゃないか。山手ならここから通えるじゃないか、真紀子ママとの縁を大切にしろよ。そのうちわかるさ、ありがたさがな」

やさしい口ぶりで家政婦になることを勧めた。
それ以降、生嶋真紀子の家に通いで家政婦をしてきたのだった。

「わたしはこの家の家政婦です」
岡部マリは事実を萬道与輔に言わなかった。
別に、ご近所や顔なじみには知られているが、初めて訪ねてきたキザな不動産やに言う必要もなかろう。
もちろん、女の虚栄心、自尊心は老いても失ってはいなかった。わたしはこの家のオーナーにふさわしいのだわ。
「生嶋さんですか」
「はい、そうですよ！」
言ってみると邸宅のオーナー気分は悪くないものだ。
このキザな男を相手に立役者になってみよう。
面白いわね。
「今日は、このお屋敷を拝見するために来たんですわ。中を見させて頂いてよろしいでしょうかな」
「どうぞ・・」
真紀子から（そのうち家を売って、老人ホームへ入りたい）と、聴いていたから違和感はなかった。生嶋真紀子はリュウマチが悪化したために、二週間まえから円医院に入院している。マリは不動産業者に住宅を見せることは問題ない、と思っている。鍵も台所もすべて自由に使用することは許されている。
「外側からまずは見せていただきます」
宅建士から予め渡されていた書類、チェックリストをカバンから取り出す。
ガス、水道、電気の元位置を確認することは常道、建物の四方、生垣、庭園の樹木や庭石、石像等ガーデニング風景をスマホで撮影。
屋敷の裏に回る。
法面は広い。地表は竹笹が這い全体は雑木林になっている。が、その下は公道が通っている。三方が道路に面している土地は最高の立地条件に仕上げられた区画だと感心している。この法面が造成宅地防災区域に横浜市が指定されていることは、今は知らない。
「ここは山の臭いがするでしょう」
いつのまにか、背後に来ていた家政婦の岡部マリが言う。
「大きな木が立っていますのう。涼しい風がきて気持ちいいですわ」
「ここにお風呂があるのよ」
窓を指さす。
「この窓からの眺めがいいのよ。森の中でお湯に浸かっているみたいなのよ」
「はあ～、それはいいですのう」
萬道は少し息苦しくなっていた。老婦人とは言え色気

を感じ、浴槽での姿態が脳裏を過る。
あわてて幻影を打ち消し、苦笑する。
「中も、家のなかも見せていただきたいのですがね」
「いいわよ、案内しますわよ」
一瞬、初対面の男を家に入れても良いのかな、と、迷ったが、不動産の調査できた様子のキザ男に悪意は感じない。男の性根の良し悪しは長年のホステス経験でわかるからだ。おそらくこのキザな男は家主と偽った自分同じように虚栄心の強い、単純な男だと思っていた。
玄関から中へ入る。
三ＬＤＫの設計だがトイレが二階と階下で二か所、健康機器を置いたトレーニングフロアー、浴室は想像以上に広くて見晴らしがよい。総計床面積は二百五十㎡。
「立派な邸宅ですなあ・・」
萬道は所定の物件情報記載事項をチェックリストに書き進めて、
「ご印鑑をお願いしたいのですが・・認印で結構ですが」
「これでいいかしら」
マリは宅急便の受け取りのために家主から預かっていた認め印を萬道に渡す。
「この書類は媒介契約書と言いまして、生嶋さんの土地と建物を当社での専属専任で媒介、販売をするという契約書ですわ。これを業界で法三四条書面と言いますがね・・」
萬道は濁声を強くして覚えたての知識を披露し、不動産屋としての恰好をつけている。法的用語を入れて彼女に説明することはさらに彼女と信頼関係を築くためだと、考えている。
「五日以内に指定流通機構への登録をします。レインズと言いましてな、業者間に当社が専属専任だとしらせるんですわ」
当社以外は不動産の仲介業務には手が出せないということを説明したつもりだった。専門外の彼女には意味が分からない。
萬道を見上げる目には縋るような色気が漂っている。
萬道の虚栄心は疼いた。オレはプロなんだ！知識は信頼だ。知っている限りの知識を彼女に披露しておこう。
更に
「三五条の書面を重要事項説明書と言い、買主さんに宅地建物取引士が買主さんへ説明して、売却が決定しましたら三六条書面を作成して、売買契約書のことですが、取引の決済をして売買代金をお支払いすることになります。今日はここまでで失礼します」
「いま、お茶を差し上げますわ」
「いえ、お構いなく、それではまた、後日、詳しいことはご連絡しますからよろしくお願いします・・わしが五日に一回は必ずあなたに連絡します。これも業法の決まりですわい」

萬道与輔は書類を鞄に収めて意気洋々と生嶋邸を後にしたのだった。

（次号に続く）

これはフィクションです。記載された団体名・会社名、人名、事件は架空のものです。

災害

横山正義

私が災害を経験したのを思い起こしてみます。

戦後、政治の変革の時、皇国史観（天皇中心主義）を唱えた東大日本史教授は占領軍が来ると、郷里石川県に帰郷し、慶応大学教授は郷里でなくなりました。向上心のある人なら、名誉、地位、権力、金といいますが、目標とすることは健全だと思います。明治憲法下で、爵位男爵で、年々再々令和の時代に換算すると、約五千万ほど授与され、子々孫々まで保障されていました。日清、日露戦争で、少将以上で、千人近い人が授与を受けていました。

昭和二十年三月十一日のまだ肌寒い夕方、ひとりの少年が訪ねてきて、「東京からきた。東京は焼け野原だ。家族はどこへ行ったか生死不明でわからない死骸だらけだ。この先の叔父のところへお世話になろうと思うので一晩泊めてくれ、今高等科一年だ」というのです。

昭和十九年の秋、近所の子供と、山で椎の実とりに興じていたとき、牧の原の飛行場が米空軍機に爆撃され白煙をあげるのをみました。

昭和十九年十二月七日午後二時ごろ、小学一年で授業を受けていました。戦時下で空襲警報となれば、帰宅していた頃でした。若い女の先生は教室のガラス窓越しに外を見、私達に「地震だ、机の下に入って」と叫びました。その真剣な表情だけが記憶に残っているのです。はじめて、地震というものがあることを経験した瞬間でした。

現在、コロナ禍の時代です。社会保障が充実しているので、社会は動じる気配は全くありません。

土方村（現在掛川市土方）の古老の話。

昭和八年米一俵金十円八十銭が昭和九年金十四円八十銭と、米の不作により米価は上昇し、農家の経済は疲弊し、新聞報道によれば、農家の子女が五十銭で売られ、

上野駅に子女で溢れたと言います。当時の軍事費は国家予算の四十七％でした。社会保障費はまったく無かったのです。

昭和の始め頃、不景気で失業者は百万とも二百万人とも言われ、しかしこの中には、工場はなれ、家の脇屋に住み、農業の手助け、日雇をよぎなくされている人は含まれていませんでした。物乞いをしている人を見るのは日常茶飯事でした。親は『勉強しなければ乞食になる』と言い、東海道には裸足の三歳ぐらいの子供をつれ、乳のみ飲み子を抱き母親が裸足で物乞いをする姿が一日に三組も通りました。これが日清日露戦争に勝利した大日本帝国の真実でした。

現在九月一日は防災の日、大正十二年九月一日午前十一時五十三分関東地方は大地震に見舞われました。昼食の準備でガスを使っていた家庭が多く、大火災となりました。全焼、四十五万戸、死者十四万人。夜、土方から東の空を見れば赤く見えました。土方では新聞はいっさい来ず九月十四日に千葉県船橋の無線電信局から浜松へ入った情報を電話で聞き取ったという人が掛川からメモをもってきて、土方の人達は惨事を知りました。ラジオが普及したのはそれから十年後でした。土方の隣組は東京の人達の無事を祈り、大頭龍神社へ参拝にいきました。罹災者は東海道を続々と歩いて西の方へ帰るので、東海道筋から三里離れた土方にも、着のみ、着のままの人が物乞いをしながら通りました。海軍では軍艦で清水港に難民を何回も運んだとのことでした。

大正六年、七月になると、米の不作が予測されると掛川の米問屋の番頭が土方に来て、米の予約を取っていきました。米一升、常の値段は十五銭から二十銭が三十八銭でした。

江戸時代、二百七十年という長きにわたり、平和の世が維持されましたが、欧米先進国に触発され、明治憲法により、戦争を是とする国になり、惨事にまき込まれました。戦争は人々を奴隷として、すなわち個人としての権利・自由を認められず、他人の所有物として取り扱われるようになるのです。

昭和二十二年平和憲法が制定され、現在があります。

遠江の災害を振り返ります。（小笠原郡誌参照、昭和二十六年発行より）

元禄四年（一七〇七）富士山噴火し宝永山できる。大地震があり、掛川の駅家は一宇も残らず転倒し、横須賀の湊が塞がる。

文亀七年（一五一〇）遠江に大風があり、海あふれて今切れの渡し生ずる。

応永三年（一三九六）遠江に大地震があり、浜名橋が破壊される。

天長十年（八三三）遠江飢える。

弘仁元年（八一〇）遠江飢える。

天平五年（七三三）遠江飢える。

和銅八年（七一五）遠江に大地震がある。

和銅三年（七一〇）遠江飢える。

皇統守護

浅野博文

一、はじめに

不易流行という言葉がある。その意味する所は、易きに流れず、時代に応じて、環境に応じて、進化や変化に対応してゆくということである。不易と流行、昔時の哲人・荘子（春秋戦国時代の思想家）は、矛盾するこの二つを同化させることが、最も重要な人生形成であり国家戦略であると説いた。

一方、それは偉大なる「くりかえし」とも言えるであろう。我が国に於ける神宮の式年遷宮がそうである。二十年に一度、御殿が建てかえられるそれは、天武天皇（在位六七三～六八六）の御代に制度が確立（それ以前は破損の都度修補）せられたが、その時点で数百年の伝統を有していた。

内宮と外宮、両宮合わせて二所大神宮と称せられる建築は言う迄もなく、全ての面に於いて創祀以来の古儀を厳しく伝えていたが、天皇の思召とは、宮殿や寺院の建築が大陸の影響を受け、急速かつ清新な発達を遂げていた中で、新しいものをそこに持ち込むことをせられたのではなく、その古儀をあくまでも正しく不朽に伝えてゆくために、体制を確立・整備されたのである。

翻って、目下コロナ禍の急務とされる諸々の政策（ワクチン接種や東京五輪開催準備など）が実行される中、首相官邸で「安定的な皇位継承策」を議論する有識者会議は開かれているが、それはどこまでも、不易と流行を念頭に置いて議論しなければならないであろう。

特に、国史を鑑みて、皇位が男系に限り、女系の所出に及ばざるのは、皇位継承の不易の原理にして、万世一系の本質である。女系天皇の出現とは王朝の交代であり、

前のものと後のものと何等関係のない革命（revolution）であることを意味する。

加えて、「百年の風雪に山河も昔ならず」と言われはするが、現行憲法の規定に於いて、宮中祭祀を国家と無縁のものにしようとも、「天皇様は自然身ではあるが精神は神である」という点は動くことはない。本会議とは、あくまで男系男子継承を基本として進めなければならない。

そもそも、皇位継承をめぐる議論に於いて、女性・女系天皇容認論を打ち出したのは、「皇室典範に関する有識者会議」（平成十七年十一月）が嚆矢である。当時の小泉純一郎総理は、自身の任期中に、それを認める皇室典範改正を進めようとしたものの、秋篠宮家に悠仁親王殿下が御誕生になると沈静化した。

そして今回、有識者（計二十一人）へのヒアリングが実施され、令和三年六月七日の第六回会合終了時点で、現在の皇位継承順位を前提とし、男系男子を尊重した上で皇族数の増加を検討する方針が一応確認された。

今回の有識者の人選は、過去の皇室の歴史や制度に詳しい専門家を中心としたものではなく、多くの女性や若者世代にも対象を広げて意見を求めたものであるが、既に論外である女性宮家の創設や女系天皇の容認論者は厳然と存在する。

或いは、男系男子の論者であっても、形式的に神武天皇以来、今上陛下に至るまで百二十六代の男系継承を数えるからという事実認識のみに止まっている様に思われる。

かつて、国史の深き研究が、必然国體の明確なる認識となり、国體の明確なる認識が、必ず皇室の尊崇、即ち「皇統守護」に帰結するとして、「学問他なし忠と孝」を確信されたのは、神道学者の山崎闇斎（一六一八～一六八二）先生である。

今日、日本書紀神代巻に沈潜し、幕末維新の志士に多大なる影響を与えた往時に比して、双方の有識者が身に纏っているのは、冷徹な合理主義である。合理的算用を超えたより高き次元にある継承の道理への「つつしみ」や「うやまい」が見えてこない。

現に、幾多の断絶・消滅の危機を克服し、歴史の相承に努められた父祖（忠臣の鏡として皇居に尊像が立つ和気清麻呂公や楠木正成公など）に対する敬称（公・先生）を平然と省略し、みずからと同一線上で論ずる様な人達に、その足跡を踏まんとする忠実や気骨がある様に思われないのが実感である。

現代の科学的・合理的精神を基調とする時代に生きる我々が、先人の創業と栄光、苦難と奮起の跡を偲び、そ

の思考の本質を知ることには限界があるかもしれない。

しかしながら、我が国に於ける万世一系の道の本質が、古今東西を超えて誤らざるものであり、永遠に光輝くものであることだけは確かである。改めて、祭政一致の歴史と伝統を振り返らなければならない。

二、神道の極意

室町後期の神道家の吉田兼倶（一四三五～一五一一）の言葉に「神道に書籍無し、天地を以て書籍とし、月日を以て証明となす」（『神代上下鈔』）とある。

太古より、くりかえし水は流れ、火は燃え、そして草木は生育する。そこに神の御稜威をかしこみ、神霊の御はたらきを感得した時、神道の信仰は生まれた。ある時は驚き、恐怖し、感激し、すがりつつ神々を仰いだ古代の人々の素朴にして確かな信仰を基盤として伝承したのが神道であった。

西洋でもアニミズム（animism）と称される自然崇拝の信仰とは、かつて世界各国に於いて共通していた。しかし欧米各国に於いては、大抵がキリスト教によって征服せられ、根絶してしまった。

この民族原始の信仰が、異教によって滅ぼされず、寧ろそれによって切磋せられつつ、生々存続して高度の文明と併存し、基調をなせる唯一無二の貴重なる例こそ日本の神道に他ならない。

万古を洞視し、当世を愍惻する神道。何故、日本の神道のみが存続し得たのか。それは、自然崇拝から人の道へ、倫理的な姿として収斂したからである。ひとりひとりの自分自身の生命（いのち）、或いは生き方、言い換えれば、この生命は何であり、この生命は如何に生かすべきかという点に展開したのである。

そして、人倫の到達点として、子たるものは親に対し不孝にならぬ様に、臣（日本国民）たるものは、皇室に対し不忠ならぬ様に、どこまでも汚し、侮らぬ様に、もち損なわぬ様に、天の神様の賜物を戴ききって、敬み守ることを人生の鉄則、神道の極意としたのである。

今日、神道が世界宗教としての立場に徹底し、教義を確立、整頓すべきであるとする考えが強いように思える。現に、神社や寺といった聖地を、巡礼ではなく観光の対象としての世界遺産への登録と合わさって俗化が進み、本質は忘却されつつある。

神道が、国家と共に発展し、国家と運命を共にしてきたのは歴史的事実である。大東亜戦争敗戦後の「神道指令」により徹底的に分離されたが、依然として神道は国家と不可分のものである。

宗教的心情と倫理的心情、宗教と国家を截然と区別するのは西洋合理主義の立場であり、それは西洋史の示す所の血みどろの現実より生み出されたものとして大いに異論があり、安易な世俗化には否を唱えなければならない。

省みれば、歴史に於ける盛衰とは世の実相である。絶えず用心をし、油断をしない所に、永久不変や天壌無窮の国體が実現して来た点は疑うべくもない。

一体、古代の天皇を中心とした律令国家体制が衰退する中、三十年に一度朝廷に於いて実施せられた日本書紀講読は中断し、保元の乱（一一五六）を皮切りとして、朝廷から武家へ政権は移り、中世（乱世）は到来した。

一君万民を旨とした皇国の道、忠孝の道は廃れ、記紀の内容や精神は忘れられ、天武天皇の御代に定められた大嘗祭も応仁の乱以後の戦国時代の中で後柏原天皇以降（九代二百二十年間）中絶をした。

しかし、乱世の終焉した江戸時代、国学派の代表にして古事記研究を中心に日本の道の本質に迫った本居宣長（一七三〇～一八〇一）先生や、伊勢大神宮を仰ぎ、日本書紀編集総裁の舎人親王を祀る藤森の社に度々詣でた山崎闇斎先生に連なる人物（崎門派）が現れた。神道の極意、その本質が明らかとなり、その中で大嘗祭（東山天皇）も再興せられた。

日本人が神々を仰ぐことによって、如何なる歴史が展開し、その歴史の事実がどの様に神道を伝承して来たかということへの崎門や国学の先哲の探求とは、神道とは単なる神々に対する信仰というだけのものではなく、歴史の中に神々を観たのであり、その神の道を仰いで各々の本分を尽くす所、人の道、殊に日本人の道が存在することを見出そうとしたのである。

「ただ天皇の大御心を心として、ひたぶるに大命をかしこみゐやび（敬び）まつろひて（順ひて）、おほみ（大御）うつくしみ（慈しみ）の御蔭にかくろひて（隠ひて）、おのもおのも祖神を斎祭つつ、ほどほどにあるべきかぎりのわざ（生業）をして、穏しく楽しく世をわたらふほかなかりしかば、今はた其ノ道といひて、別に教へを受て、おこなふべきわざはありなむ」。

本居宣長先生の『直毘霊』には、古来から連綿と受け継がれてきた日本人の道が記されている。

三、自覚・意志・努力

事物には必ず「はじめ」がある。古事記に「天地初発之時、於高天原成神名、天之御名主神云々」とあり、旧

約聖書にも「太初に言葉あり」とある様に、「はじめ」は人間社会に於いて強い関心の対象である。

古今東西に於いても、自然科学者は生命の起源を知ろうとし、歴史家は国家の成立の事情を探究し、造物主なる者の意志に迫ろうと宗教家は苦闘して来た。各人が対象とする物事のはじまりを知ることは、その本質を明らかにすることでもある。

人間にとって最も重要な「はじめ」とは、行為の主体である人間そのものに対するそれである。二宮尊徳先生が詠まれた和歌に、「父母もその父母も我が身なり我を愛せよ我を敬せよ」とあり、「昨日より知らぬ明日のなつかしや、もとの父母ましませこそ」とあるのは、そのことへの極めて深い理解であった。

人の精神生活に於いて、自己の「はじめ」が如何にあったかということの認識は、人生のあらゆる方面に決定的な影響力を及ぼす。各々の時代に於いて日本人とは、現実を如何に生きるかということに全力を注ぎ、誠実に尽くす中で、天地のはじめに一切の根源を求めると同時に、その無窮（永遠に続くこと）に対するあこがれを抱いて生きてきたのである。

記紀神話には開闢と渾沌がくりかえされている。開闢とは渾沌を秩序に転ずることであり、かたちが与えられ、意味が与えられることであり、本立って道生ずという、その本を立てることである。

人間が「生きる」とは「生かす」という意味が含まれる。自分を生かし、時間を生かし、一切を生かすことである。同時に生むことである。即ち、現在の自覚を契機として、新たな自分を生み出してゆくことである。

現代の我々にとっても、渾沌は常に現在に、また我々自身にあり、開闢も現在に我々自身にあると言える。そして渾沌と開闢は神代から現代に至るまで、くりかえされるという意味で神代は今に存すると言える。

いつの世も人は、そのことをかしこみつつ、自覚し、決意し、努力してゆく所に、人の人たる所以、「人は人のために生きてこそ人である」とする人生の本質がある。

人生を振り返ってみて、失敗を嘆き悔やむ必要は何もない。そこに意志が在りさえすれば。はじまりらしきはじめも持たず、定めに泣いて、宿命を恨んで、すべてを犠牲者にして、仮説と分析のまま一生を終える。これこそ、本当に虚しく惨めな人生である。

神々の実在をかしこみ、神々の御徳によって賜った、この生命の前では合理主義や進化論による説明など、もはや無意味である。尊い生命、二度と来ない今日という日に生きる、かけがえのない人生を正しく生かしきって、真に意義あらしめるものは日々の精励切磋しかない。

四、歴史や伝統が要求するもの

人間の自覚とは、「生命」の自覚である。その「生命」とは、無限の広がりと繋がりを持ち、その繋がりと広がりが歴史となり、倫理となり、その歴史と倫理とを「生命」が担いつつ日々に生きているのである。

そして、一家の祖霊の祭祀、一族・一村・一町の氏神、産土神（うぶすなかみ）の祭祀とは、常に歴史と倫理の具体的に個性的に確認せられる姿であり、伊勢大神宮を大御親と仰ぐ国民的信仰という形で、その姿は結晶してゆくのである。

『古事記』・『日本書紀』や『新撰姓氏録（しんせんしょうじろく）』には、古代からの信仰の事実が記されている。身近にある、家の墓や位牌に観える「先祖代々」という言葉も、日本人に於ける「生命」の連続性についての強い自覚の表れに他ならない。

神宮に参られた西行法師（一一一八～一一九〇）の有名な和歌である「何事のおはしますとは知らねどもかたじけなしに涙こぼるる」とは、「生命」があり、働きがあると信ずる所に、神々を祭ったのが神道であることを端的に示している。道端で度々目にする地蔵堂や道祖神などもその表れであり、外国に例は無い。

その心こそ祭祀の心であり、自分が「生まれた」という厳粛・神秘な事実に対する敬虔な自覚である。そして、その自覚を突き詰めた所にこそ、世界の平安に対する純粋にして切なる祈りが起こって来るのである。

人間の人間たる所以が自覚であるということは、フランスの哲学者デカルト（Descartes 一五九六～一六五〇）の説いた所である。一見すると道理であり、その通りだと自らも思っていた。

しかし、その自覚を導く理性を絶対化し、おのれが信ずるもの以外を無価値なもの、無意義なものとし、到達した「我考ふ故に我あり」という命題とは、決定的に神道と異なる認識である。

「生命」の一つ一つは、大いなる神聖・神機なる意志の流れの、一つ一つの極点に立っていると言える。どこまでも人間の行為とは、そのことを自覚し、その意志に参じようと努力することでなければならない（その意味に於いて生命の本質部分を人間の欲望で自在に改変する遺伝子工学の進歩には違和感を禁じ得ない）。

重ねて、「生む」という行為、広く言えば、「生きる」という行為を正しからしめるのは、人間の自覚と努力以外ない。

人の自覚と努力、このことが人生の鉄則であることは

言うまでもない。人の無自覚・怠慢が、渾沌・断絶・消滅へ導くのも確かである。しかし、日々の事件や災害事故等の報道からも伺える様に、人生には絶えず渾沌の世界が存在し、そこに向かう可能性のつきまとうこともまた事実である。

人の世に於いて、日々その認識に基づく対決の姿勢が、歴史や伝統の継承発展を続ける上で、絶えず厳しく要求されていることも決して忘れてはならない。

五、皇統守護

人が肉体の死を免れないのは、避けることの出来ない定めであり、宿命である。そして死は、ある場合では断絶そのものであり、ある場合には断絶の契機である。

しかし、明治の御代に小泉八雲（ラフカディオ＝ハーン）が、賞賛と羨望の眼差しで評した如く、国家の忠臣を靖国神社や護国神社に英霊としてお祭りした点に、死を断絶の本質と考えなかった日本人の伝統的思想がある。

そして、国学や崎門の先哲の本懐も死の超克にあった。即ち、歴史の中で「生命」が如何に生きたかを探り、死によって断絶を克服した「生命」の姿を追い求め、それを明らかにしようとしたのである。

天は自ずから運行し、世の森羅万象もまたそれにしたがう。そして運行のままが、即ち理（ことわり）そのものになっている。故に、天道は「本然」とか「自然」という表現で説明される。日本及び日本人にとって、天照大神の神勅とは天道に他ならない。

日本書紀には、天孫降臨のみぎり、天照大神の御孫の瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が、「葦原千五百秋瑞穂国ハ、是レ吾子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫、就ヒテ治メ、行矣、宝祚ノ隆マサンコト、当ニ天壌ト伴ニ窮無カルベシ」との神勅を賜ったことを記している。

代々日本国の統治者として、その輝かしき光栄と、重い責任とを荷って、皇位を継承せよとの神勅に奉答すべく、臣下として随伴する八百万神もまた、君と共に国家の安泰を祈り、国難に臨んで君国を守護すべき性質を帯びていたことが分かる。

また、建武の中興の際に、大楠公が掲げた「非理法権天」旗も、「天」こそが、知力や弁舌、威権を以てしても、決して通ることが出来ないものであると闡明していた。

その「天」もまた神勅を意味するに違いない。建国以来、天道（神勅）の下ではじまり、今日まで生かされて来たのが日本人である。それは御歴代天皇が「世々継承し違背せず」という意味で国體であり、我が国御歴代の天皇陛下とは、その意味に於いて国體の護持者にあらせられる。

我々が、日本人各々の家系図を遡れば、本家である皇室からの分家であり別家であることを自覚し、忠孝が一本であることを想起する時、日本国民全体の象徴であり、我が国を代表する積善の家にして、倫理の中核である皇室の尊さを改めて認識する。

古代に於いて、皇統断絶の最大の危機を乗り越えて即位せられたのは、第二十六代継体天皇である。先帝・武烈天皇に皇子がなく、皇統ここに断絶すると思われた時、重臣豪族が長年の御恩を忘れず、尽力して御血統の皇族を捜し求めて、応神天皇五世孫（継体天皇）が越前から迎えられたことは周知である。

人間とは、天理に外れまいとする意志と努力を以て、はじめて天理に適った正しい道をあゆむことが出来る唯一の存在であり、人間の万物の霊長たる所以である。そのことは、自然という言葉で証明することは出来ない。

世の道理とは天理に基づく。我が国の神勅（国體）がそれに当たる。人の事業は自らの見識自覚によって成立し、おのれの意志と努力とによって初めて実現する。したがって、人事は「当然」、当にそうあるべし、という言葉で説明されなければならず、日本人にとって皇統守護とは、その最たるものである。

畢竟、皇統連綿とする我が国の国體、その護持者たる天皇の御血統が危機に瀕する今日、皇位が男系に限り、女系の所出に及ばざるのは、皇位継承の不易の原理である。

皇統を守護することは、日本国民として当然であり、昔時に於いて天皇陛下万歳に殉じた士は天下の忠臣として、その死を超克したのである。

古代の重臣の重厚を忘れず、国学や崎門の先哲に倣い、易きに流れず、時代に応じて、叡智を駆使し、様々な可能性を求めて（旧宮家の皇籍復帰ないし皇籍取得を実現するための皇室典範改正等）、皇統を守護せねばなるまい。

参考文献
平泉澄博士著
『少年日本史』　皇學館大學出版部
『山　彦』　勉誠出版
谷省吾著
『神道原論』　皇學館大學出版部
三戸岡道夫著
『二宮金次郎の一生』　栄光出版社

安芸門徒シルクロード紀行（12）

村上邦治

常用金として日露戦役ために生じた負債の返済と大遠忌法要開催の費用に充てるとした。本山・末寺の財政基盤強化のための基金を設立し寄付金を募るとしながら、その内実は三年前の日露戦争に際し消費した財政の補填をも意図したものであった。戦時に「臨時特設部」の設置や戦地兵士への慰問・軍人遺族に対する救恤資金供与・戦地在住日本人への慰問袋配布など数百万円の資金が支出された。さらに戦争費用調達のため発行された国債を八十三万円という多額の購入をして協力した。ただしこの国債購入は資金的に余裕のある日本仏教慈善会財団であったと思われる。後日慈善会資産のかなりの部分がこの時の国債で占められていたことが判明する。

明治三九年十月本末共保財団の設立に連動して、財政整理部を大仲居（現宗務総合庁舎）の一部に設けた。三

六二　負債疑惑

末寺の住職や門徒が本派及び西本願寺・大谷家の負債疑惑を最初に抱いたのは、宗祖六百五十回大遠忌法要を契機として本山・末寺の財政基盤を強固なものにする「本末共保財団」の設立からであった。

ここからは『本願寺史』（本願寺史料研究所）を参考に辿る。

六（明治三九）年光瑞は年頭の親示で、五十年に一度の大行事に合わせ本末共保財団の設立とその意図を明らかにした。三月臨時集会で審議承認され、設立条例を定め具体的な寄付金目標額を五百四十万円に設定し発布された。

寄付金の内三分の一は基金に繰り入れるのではなく、月の財団設立の目的に「日露戦役の為に生じたる本山の負債を償却」と「大遠忌御待受の準備金」と明記されていたが、いざ財政整理部が部員百名近くの大陣容で設置されると、本山の負債の深刻さが風聞となった。

『寺史』では「新聞においては本願寺側の負債が二百三十万円という巨額に達しており、その整理のために設置されるものであると報道された」とのみ記す。本山執行部は流説を払拭するため、負債額は「明治三八年一〇月の段階で八十三万円であり、三九年七月には六十六万円にまで減少しており、九か月間で約十七万円もの負債を償却した」と説明した。またこのうち「二十五万円は本山特別会計から補填されているため、実質的な負債総額は四十万円余である」と表明した。（現物価を一万倍とすれば現在額四十億円）

執行部は新聞報道の約六分の一に圧縮したうえで、初めて負債に陥っていることを明らかにした。しかし新聞報道の負債額が真実に近いものであり、大遠忌法要の眼目として設立された本末共保財団への寄付金募集に紛れ込ませて負債解消を試みた。だが末寺の住職からは負債額に疑念を持たれ、募金活動は全面的な協力が得られなかった。そのため集まった募金は目標額に程遠く、大半は大遠忌法要行事の運営・本山の修繕に使われた。肝心の負債償却および設立された財団には振り向けることができなかった。

本派が負債償却を終えたとして財政整理部を閉鎖したのは明治四五年三月末であった。しかし大正二年には寺債二百万円を発行せざるを得ず、この償却には第一次世界大戦が終わる大正一〇年までかかった。

その後四四年までは宗派挙げての大遠忌法要挙行の準備に忙しく、負債疑惑の追及は大きなものとはならなかった。

この間宗派自体の費用とは認め難い事例が続いた。

明治四〇年　宮内庁に買い上げられた須磨別邸の代わりの二楽荘建設（三十二万円）
明治四一年　蒙古・中央アジアに第二次探検隊派遣
明治四二年　印度・西欧へ一年間外遊
明治四三年　中央アジア・敦煌に第三次探検隊派遣
二楽荘隣地に私費による武庫中学設立

これら施策は将来の教線拡大を図るための先行投資となるもので、日本仏教の正統性の証明や若手人材育成を図るものであった。しかし末端の住職からは、単なる法主の無駄使いにしかみられなかった。

一部の末寺住職から本山財政は既に大幅な債務超過に陥っており浪費を続ける「法主の自覚を促す」として、大法要開始直前東京に猶興会が、法要中関西で憂宗会が結成された。また教団随一の門徒を抱える広島では、還

俗した国会議員金尾稜厳を中心に財政の追及を始めた。

大行事が終了するや、改革派と称しかれらは一斉に疑惑追及の声を上げた。改革派は『新仏教』（新仏教同志会機関紙）や宗教専門新聞『中外日報』を通じて、本山改革を名目に本派・西本願寺・大谷家各々財政の実体公表を迫った。かれらの疑念は末寺で門徒から集めた浄財が、光瑞の「破天荒な道楽」のために浪費されているのではないかというものであった。改革派の指摘は詳細で実体に近いものであり、内局の改革派同調者から情報の提供を受けての追及であった。

宗派内からの相次ぐ厳しい追及に大正元年九月遂に光瑞は大谷家の負債問題について、屈辱に満ちた次の親示を出し多額の負債があることを公表した。

「先ニ家隷計ヲ誤リ債ヲ起シ、以テ患ヲ家門ニ胎ス、徒食従テ生シ、醜晦ヲ公示シ家名ヲ傷ルコト甚シ。素ヨリ予ノ不明疎虞ニ基キ、剔抉（テッケツ）ヲ以テ罪ヲ嫁スルノ要ナシ。宜ク家資ヲ清シテ債ヲ償ヒ患ヲ後ニ絶ツヘシ。

幸ニ累ヲ宗派ニ及ホサヽルヲ以テ、宗政ハ蹉跌スルコト無ク、予ハ弟子等ノ先頭ニ立チ之ヲ引導シ、勇猛精進一層ノ隆盛ヲ期スヘシ。

盛明ニハ魔障アリ、覚王ノ願力我等ヲ擁護シ給ヘリ。汝等宜ク奮励以テ予ヲ翼賛セヨ」（一部略・新漢字改）

日本最大の門徒を誇る浄土真宗本願寺派管長・西本願寺住職・宗祖親鸞の法燈を受け継ぐ第二二代鏡如上人・伯爵という名誉や矜持・体面のすべてをかなぐり捨てた親示であった。宗祖や歴代の法主・大谷家の弟妹に謝罪をするとともに、すべての責任は光瑞一人にあり、「これ以上の詮索は止めてほしい」と願った。

そして債務の解消についてはこれまで長年収集してきた大谷家の家宝を処分することで、すべて弁済できるとした。それゆえ教団には一切迷惑を掛けないので、これからも法主に協力してほしいと結んだ。

これを読んだ大半の住職・門徒は、光瑞猊下の真摯で率直な猛省に共感を覚えた。また大谷家の家宝売却で弁済できるとの説明で安堵もした。

しかしこの一門を安心させた親示は、日本経済の不況が続き没落した大名家や名家から大量の秘蔵品が売りに出されている現下の絵画骨董品市場の相場を反映したものではなかった。家宝を高額に見積ったため多額の負債が残った。そのため後刻株式運用や土地投機による資金の捻出に追い込まれ、数々の疑獄を引き起こすことになる。

追い込まれた光瑞は一門の面々に法主として前例のない謝罪により出直しを誓ったにもかかわらず、「大乗非

仏説」の反証を求め日本仏教の正統性を証明することと、チベット仏教最高指導者ダライ・ラマ十三世との約束を反故にすることは一切考えていなかった。

六三　チベット留学生派遣

一九一一（明治四四）年一〇月に起きた中国辛亥革命は瞬く間に全省に拡大し、印度に亡命中のダライ・ラマ十三世のラサ帰還が近々実現できる見込みとなった。この突然の展開に十三世は京都西本願寺に留学生として派遣していた側近のツァワ・ティトゥルを、急遽呼び戻しラサ帰還に備えることにした。

そのため青木文教とティトゥルと寝起きを共にした世話係の多田等観およびカルカッタ駐在の連絡要員藤谷晃道（後ハワイ別院輪番）三人で、留学生と従僕二人を法王が亡命しているダージリンに送り届けることになった。

ここからは青木の『西蔵遊記』および「西蔵入国記」（『新西域記』所載）による。

一二（明治四五）年一月一行は秘密裏にカルカッタ直行便の英国客船に乗船、神戸を出立した。発覚すると印度政庁・英国との外交問題に発展することを恐れ、日本に来たときと同様、官吏や新聞記者に覚られないことに留意した。留学先の西本願寺や六甲二楽荘では外部に一切出させず、チベット留学生の受け入れ事実を完全に隠匿した。出国時も秘密保持のため、日本人三人は親族や友人にも行く先を告げずに出国した。チベット人三人は蒙古人に変装して乗船、一カ月の航海でカルカッタには二月中旬に到着した。

すぐに列車でダージリンに向ったが、すでに十三世は帰国するため十キロ北にある国境沿いのカリンポンに移動していた。直ちに追いかけ法王のもとに留学生を送り届けた。ここで青木は一年ぶりに謁見し、留学中の報告をするとともに同行してきた多田を紹介した。

青木・多田はここからすぐに日本へ引き返す予定であったが、法王は「この機会に入蔵せよ」とこのまま一緒にラサへ行くことを勧めた。チベット入を願望していた二人に入蔵許可証と旅券が下付されチベット名も賜った。十三世とともに入蔵できれば楽な旅程となるのだが、大谷光瑞配下の真宗僧侶は日本政府・陸軍の別動隊と疑う印度政庁は印度からの入蔵を許可しなかった。

六月下旬十三世一行はチベット帰還のため国境に向かった。日本人二人は印度からチベットへの入国が困難になる中、チベット仏教寺院で修行するとして一時身を隠した。二人は警戒が緩い第三国を経由、しかも別々にチベット入国を目指すことにした。三か月間チベット国についての研究や旅程の調査をして、チベット入国に備えた。

一二（大正元）年九月この時期光瑞は債務問題に関する親示を出した時であったが、二人に帰国命令は下さなかったので、予定通りまず青木が多田に見送られネパール経由でチベット入りを目指した。西蔵僧に変装し雇入れた二人のチベット人の従僕とともに、いくつかの「関所」を通り印度を出国ネパール領に入った。

雨季のネパールは歩いていても無数の山蛭が足下から這い上がり、両脚は血だらけになった。顔つきは西蔵人とは異なりまた言葉も拙いことから途中何度も問い質され、蒙古僧と名乗ることさえあった。ネパール国境からチベットへは、世界に冠たるヒマラヤ山脈の高峻で厳寒の難路が待ち受けていた。

九月二十日から四日間塗炭の苦しみに直面した。チベットに向かう隊商に加わり、荷物は犛（チベット産の毛の長い黒牛）に負わせ身軽になり山越えを始めた。低地では「左右の山々は薄く白雪を頂き、谷間には奇岩は苔を被り丁度庭のような風致」を楽しんだ。

登るに従い眩暈が酷くなり、酒を口に含みながら何とか隊商に追いついた。しかし「耐えがたいような山眩暈」に陥り、高山病にかかったことを知った。前方には「ヒマラヤの屏風のような山が削ぎ立つように聳え」ていた。「断崖の一本道は脚のかかり場さえはっきりしていない。一歩も過らうものなら忽ち千仞の渓谷に粉微塵になって叩き落される」恐怖を覚えた。

登るにつれて眩暈は一層ひどくなり、仁丹を含んでは回復を待ち前進した。しかしすぐに倒れ、百メートル進むにも一時間ほどかかった。

四方の山々は白雪に蔽われ、日光を反射するので頭はますます痛んだ。これ以上の歩行はもはや困難になり、犛に乗りなんとか隊商とともに進んだ。幸いにも徐々に高山病に慣れてきた。

「峨々たる氷嶺が碧空をつんざいて聳え立ち、千古の玄氷が山谷を埋め盡している」という、まったく筆舌に絶する壮観な光景が広がった。絶頂は海抜一万八千九百尺（約五七〇〇メートル）あり、ここがネパールの国境であった。遂にチベット入国に成功、長年の念願を果たした。

チベットに入れば何と言っても法王からいただいた入蔵許可証と旅券がものをいう。単に通過を許すというものでなく、支給する馬の種類・頭数や宿舎の広さ・食事の条件までもが明記されていた。県知事が訪ねてきて、「法王から便宜を図れ」との通知があったと告げた。

ここからは四頭の乗馬に鞍を付けた一隊が手配されており、一気に楽な旅途となった。まるで「西蔵の国賓にでもなった」気分となり、「心嬉しさ」を感じながらラサに向かった。

一〇月初めラサの二三〇キロ西にある第二の都市シガツェ（高度四千メートル）に着いた。ここには留学生ティトゥルの実家があり両親から大歓待された。「一週間滞在してこれまでの疲れをとりなさい」との厚情に素直に甘えた。緊張した印度出国・ネパールの悪路・高山病に罹り苦難が続いたヒマラヤ越えなど、積り溜まった疲労を一気にとることができた。この間一家の末っ子からチベット語を懸命に教わった。

体力が回復した最後の一日大寺院「タシルンボ寺」（第二活仏パンチェン・ラマ住持）や城砦を見学、写真を撮り記録した。ここでも県知事が訪ねてきて法王から「便宜を図れ」との命令が来ており、ラサまでの旅行は何ら心配はいらないといわれた。

僧正の両親からこれまでとは比べようのない立派な西蔵服を贈られた。さらに従僕一人を与えられ、日本から遠く離れた異郷での数々の厚遇を「涙の外には感謝の言葉もなかった」とティトゥル一家に感謝した。「見すぼらしい土人服」から着替えて法王の滞在所に向けて出発、一週間の旅路に就いた。

一〇月一五日ラサ郊外の法王滞在所に着いた。まず側近のティトゥル僧正を訪ねた。お互い「天外の地で同胞の親友に邂逅したような喜び」であった。二人は日本語と西蔵語とを取り混ぜ夜遅くまで話し込んだ。五年前来日したヘディン博士からチベット探検の講演を西本願寺で聴講して以来、抱き続けた夢が今実現した。これまでの入蔵の苦労が思い出された。酬いられたその夜は万感胸に迫り眠れなかった。

次の日カリンボンで別れて以来初の謁見が実現した。法王から「今回の入蔵は困難であったろうと思う。道中は無事であったか」と遠路の労をねぎらわれた。そして「要用はおって相談する。差し当たり不自由なことがあればこの僧正に申し出よ」と丁重な言葉で話された。

青木は「三宝の冥護により安着することができました。私の入蔵によって本願寺との関係がいよいよ密接なりました」と申し述べると、法王は「日本の各宗派と帝国政府との間にこれを拡充したい」と希望を述べられた。

この日の会見で青木に依頼したい要用とは、独立国として産業の発展と軍備力強化により、近代化を成し遂げるための助言を得ることであった。いわば十三世の政治顧問として力を貸してほしいというものであった。

一方四歳下の多田等観はカルカッタに滞在し、ラサの青木と連絡を煩瑣にとり入蔵の機会を伺った。負債問題で窮地に立つ光瑞から、「西蔵仏教の研究は世界の輿論なり。殊に我が教を同じくする一門に於いてはその研究たるゆるがせにすべからず。印度仏教衰亡、遺法今や西蔵に伝わるをや。この故汝は入蔵以て深くその教の理趣の研鑽に勉べし。思いを遠く本邦に断ち永く駐蔵の計を

立つべし」（一部略）と長期留学の指示を受けた。

一三年八月末チベット語に堪能な等観は西蔵僧に変装、印度政庁に隠れて第三国ブータン経由で青木と同様苦難の旅の末入国、九月末ラサで青木と再会した。

三か月後ラサから八キロ離れたセラ寺（色拉寺一五世紀創建ゲルク派大寺院）のチェ学堂入り、長期間にわたりチベット仏教の本源を修学することになった。

光瑞は多田が学者肌であり時間を掛けて勉学すれば、チベット仏教の本質にまで迫ることができる人物とみた。大乗教をそのまま継承している深淵なチベット仏教研究のため、青年僧の中から選んで派遣した。

青木文教については近くにおいて幅広い経験を積ませたことで、なにをやらせても目的を果たし期待以上の成果を挙げる人物に育った。橘瑞超とともに光瑞の後半生を支える中心人物となる。

文教は法王から派遣された個人教師から、一年目はチベット語特に公式語のラサ語の会話・筆記・文法を学んだ。毎週始めには法王に謁見、邦字紙・英字紙・ジャーナル誌から世界の主要な出来事を報告した。法王からは国力増強を図る施策についての助言と資料の取り寄せなどを指示された。大国中・露・英・日各国の動静に敏感にならざるを得ない法王の情報源となるとともに、施策について助言や資料収集の役目を担った

近代化を急ぐ十三世から矢継ぎ早にご下問があり、まず産業振興のため鉱山開発に着手した。ネパールの技師により劣等の褐炭が発掘されたので、文教に日本から石炭を取りよせさせ、石炭鉱脈を探査させた。素人である文教には結局発見できなかったが、ネパール人が見本と同じ石炭層を発見した。しかし遠方過ぎて当時の運搬事情では採算に合わないことを進言、開発を断念させた。

次に軍事強化について着手、新式蔵軍の訓練のため日本から教官招聘を依頼された。指導教官の派遣は実現しなかったが、日本から各種操典類を取り寄せ、法王に献上、チベット語に翻訳した。日本陸軍の教本により西蔵軍の兵制が整えられた。また軍旗の作成を依頼され日本の軍旗を参考に「雲を付け抜けた高山を背景に獅子が走る」図案を考案、帝国陸軍の旭日をあしらい二匹のスノーライオンを配した。この軍旗が国旗の一部に採用され、現在チベット亡命政府の国旗となっている。

国民教育制度検討の際、日本の初等・中等教育の教科書や関連書籍を取り寄せるように命じられた。カルカッタ駐在の藤谷晃道を通じて日本から取り寄せ、初等学制の創設にかかわった。また郵便事業制度の開始に際し助言をした。

文教が滞在した一二（大正元）年から一五年までの三年間はチベットにとって激動の時代であった。一一年一二月チベットと同じ清国の支配下にあった外モンゴルが

独立宣言、一二年一月中華民国臨時政府樹立・二月清朝滅亡、六月法王ラサ帰還・独立宣言（袁世凱政権拒否）、一三年一月外モンゴルと相互独立承認と同盟条約締結、一二月チベット独立について中華民国・英・チベット三国による印度北部でのシムラ会談決裂（英独立承認中国拒否）、一四年第一次世界大戦勃発、一五年六月中・露・外モンゴルによる外モンゴルの中国宗主権下の自治合意（キャフタ協定）などが続き、大国の狭間でチベットダライ・ラマ政権は翻弄され続けた。

青木文教はチベット滞在の三年間、激動する国際情勢の渦中にあった首都ラサで法王に助言をしながら、政権中枢の立場から冷静に秘密の国チベットを調査した。ラサの地理概況、中・露・英との対外関係、中央政庁・地方県庁の統治体制、ダライ・ラマ制度の仕組みと宗教、教育制度、産業・貿易、人情風俗など鋭い観察眼から詳細に記録し持ち帰った。大正九年光瑞から「序」文をいただき『秘密の国西蔵遊記』を出版、チベット国に関する基礎本となった。

黄檗宗僧侶河口慧海が『西蔵旅行記』で初めて紹介、青木文教は滞在三年間の調査からチベット学の基盤を確立、多田等観が『西蔵大蔵経総目録』などによりチベット仏教の真髄を、各々もたらした。

六四　家宝売却

大遠忌法要後東京・関西・広島で国内末寺・門徒を顧みないとして光瑞宗主の本派運営に批判の声が高まり、三地区の批判勢力は大同団結し中央同志会を結成、宗主光瑞と執行部に一層強い批判の声を上げた。かれらの主張は当初『新仏教』や『中外日報』など宗教専門誌が取り上げたが、次第に一般紙も詳しく報道し始めた。

債務超過が公になった翌日光瑞は執行幹部を更迭、連枝の藤枝沢通を執行長とする新執行部を発足させた。弟の大谷尊由前執行長は財産管理事務所長に配属、負債の実態解明と大谷家・西本願寺の財産処分に当たらせることにした。

一〇月には実業界の重鎮で門徒の飯田新七（呉服商）・伊藤忠三（呉服商）・西川幸兵衛門（織物商）・小西新右衛門（酒造業）らを発起人として地方の財産家を加え計百名を本山勘定（財務顧問）に任命、財政改善の助言を得るとともに大口の寄付を期待した。この会議で新執行部は負債額を百三十四万円とし、大谷家所有の什物売り払うことで弁済する方針を説明した。

しかし『本願寺史』は大正元年の時点での総負債額は四百七十六万円に上り、有価証券および土地の評価額は三百四十二万円となり差し引き百三十四万円が事実上の

負債額と記したが、評価額の三百四十二万円は単なる見込み額であった。しかも長引く経済不況・本末共保財団からの度重なる寄付要請・内紛騒動などにより、期待した勘定方からの寄付は低調であった。

そのため大正二年一月二百万円の寺債を発行することにした。発行条件は二五年以内の抽選償還・金利五%・払込額百円につき九十円とした。起債により実質百八十万円の資金を得たものの、すぐにも必要とする資金は教学費・系列保険会社株式購入等に百二十万円、負債返済に四十万円を必要とした。本山財政の資金繰りはそこまでひっ迫した状況に陥っていた。しかし寺債の応募額は少なく大半は護持会財団・慈善会財団が引き受けざるを得なかった。結局これまで本派で営々として積み上げてきた二財団の資金を、つぎ込む羽目となった。

『寺史』では大正二年四月から大谷家所蔵の書画・屏風・茶道具などとともに、一体であった本願寺の貴重な美術品や仏具などが放出されることになったと記す。半年前の報知新聞は「愈々売却と決す　本願寺の什寶」の見出しで、次のように報じた。

「本派本願寺財政整理のため秘蔵の什宝売却の説ありしが果たして事実なり。一一月五日来本山内二十四箇所の宝庫を開放して什宝の数々を取り出し、先ずこの際の宝庫を開放して什宝の数々を取り出し、先ず売り払うべき品と手放しかねる品とを選び分けこれを骨董商の有力なる者を招き寄せて目下頻りに価格を上下せしめつつあり。

売品中には円山応挙・松村呉春・景文・酒井抱一・長沢蘆雪・尾形光琳・狩野探幽・伊藤若冲・池大雅・谷文晁等名大家の作も少なからざれば全国雅客の注目惹くに至らん」（一二年一一月九日報知一部補充）

これは大谷家及び西本願寺所有の什宝を蔵から出し、赤松連城ら古老が目録作成に着手したことからの勇み足であった。

大正二年四月から大谷家および一体である西本願寺が中世から長きにわたり所蔵してきた書画・屏風・茶道具・能面装束など、四月二回に分けて千二百点・五月四百点・一一月七百五十点の入札を行いその数は二千三百点に上った。

その中には絵画では尾崎光琳「燕子花図屏風」（国宝現根津美術館）・藤原定家「小倉色紙」・円山応挙「青柳瀑布図」（現サントリー美術館）、茶道具では利休瀬戸大茶入（銘因幡堂現京都薮内宗家）・本願寺井戸茶碗（現野村美術館）・白天目茶碗（重文益田鈍翁）、能楽関係品（住友友純現泉屋博古館」などの外、現在重要文化財・重要美術品に指定されているものが多く含まれた。所在不明の品が多いが、上記の外東京・京都国立博物館、出光・兵庫香雪美術館、茶道具は尾道市生口島耕三寺博物館が所蔵している。

入札（売立）には京都や関西の主要な古美術商が参加した。本願寺に馴染みの古美術商が札元となり、入札目録（売立目録）を各古美術商の顧客や好事家に配り注文を受け入札する。主な顧客は明治三十年代から急成長した新興実業家や財閥経営者であり、入手した銘品が戦後美術館の創設に繋がった。

売却予定された品々は総額百十七万円となり手数料を支払うと百万円程度であった。この時の公表した負債総額は百三十四万円であったので、三十万円余の不足となった。寺債発行で一時しのぎにはなったものの未公表の負債や利子の支払いが膨れ上がり、最後の手段として家宝の売却に踏み切ったものの負債解消に至らなかった。

そのため追加して高輪中学校用地を売却、大谷家の負債整理に充てることを決めた。

しかし後で明らかとなるが、執行部は財源不足の中何とか負債問題を解決するため、ひそかに株式運用や不動産投機に手を出した。経済不況から逆に裏目に出てしまい、かえって新たな負債（新聞報道では二～三十万円）となり公表額より膨れ上がった。

六五　新法主擁立運動

一三（大正二）年春大谷家・本願寺の什宝売却を進めている間も、光瑞に対し「覚醒をもとめる」とともに、教団運営にかかわる執行部への批判は高まるばかりであった。

六月には梅上執行長が批判を叫ぶ門末に対し「軽躁付和、漫ニ宗政ヲ非議シ、派内ノ安寧ヲ攪乱スルカ如キ言動戒メカ、其後尚徒ラニ事ヲ好ミ、口ヲ廓清ニ籍リ、言ヲ改革ニ托シ、軽挙妄動ヲ重ヌルノ徒アリ」と厳しい訓告を行った。

四月東京猶興会（主唱者柘植信秀）・憂宗会（会長中井玄道）・安芸改革党（代表金尾稜厳）が団結、「改革中央同志会」が結成された。決議文で「法主と管長の分離」と「門徒の集会への選挙権と被選挙権を付与し宗政の参加」を掲げた。法主光瑞に対しては「覚醒して速やかに法主の本分に帰れ」と訴え、そしてこれらの要求が実現されない限り「募金勧誘に応じない」とした。そして主張が叶えなければ「本派から離脱して転派を考慮する」とし、光瑞法主と本山執行部に対し実現を迫った。同志会の中で最も先鋭化し光瑞辞任まで要求したのは、東京柘植と安芸金尾の二人であった。

東京では光瑞辞任を決議、広島安芸門徒は金尾の主張に賛同者は少なかった。大阪憂宗会は辞任までは求めなかった。総会の決議は「本分に戻れ」は総意であったが、

辞任については一致しないままの大同団結であった。

大阪中井玄道によれば、法主の職務には「法主」と「管長」の二つがある。法主は宗祖親鸞の法燈を継いできた大谷家の当主のただ一人が就任できる「絶対神聖権」を保持しており、一派全徒の「宗意安心の師匠」であるとした。それゆえ不満は持っていても光瑞辞任には明確な反対の立場であった。この中井の考え方は全国大半の住職・門徒の見方であり、柘植や金尾がいくら光瑞辞任を主張してもついてくる門信徒は一部に限られた。

明治四〇年過ぎから、全く新しい法主の候補者を担ぎ出す人物が現れた。祖父足利義山（勧学）の孫で安芸門徒ともいえる浄円（後出版社同朋舎設立二次探検隊員瑞義の甥）である。文学寮から高輪仏教大学を卒業、ハワイで開教使を務めた。病気で帰国した後、親戚縁者の忠告を聞かず還俗し本派を離れた。そして四四年秋新団体「仏教教団」を設立した。

教団の目的は「宗祖親鸞の原点立ち戻り、法主と門信徒は平等とする御同朋御同行主義を実践し、未だ真の仏教に入らざる未信者集めて新教団を組織する」というものであった。宗教的実践は「信心・念仏・布教・王法」とした。

この新教団の理念に適う人物として、真宗十派の一つ滋賀県野洲市木部の錦織寺（キンショクジ）を本山とする真宗木辺派法主と結びつきを強めた。

法主木辺孝慈（一八八一―一九六九）は光瑞の直ぐ下の弟（大谷尊行）で、早くから木辺派の後継者として定められ一四歳の時養子に入った。親鸞が関東で布教した時の門弟二十四輩第一・性信（ショウシン）（下総常総市横曽根報恩寺創建）の横曽根門徒により錦織寺派（明治九年より木辺派改称）として独立、寺院数二百・信者五万人の小規模な一派で関西を基盤としていた。

五歳年下の孝慈は兄光瑞と真逆ともいうべき人物であった。人柄は温順・素直で、他人の意見によく耳を傾けた。また宗祖親鸞や蓮如に向き合い、その教えや生き方に忠実であった。海外への積極的な教線拡大やシルクロード・蒙古・チベットの調査に力を注ぎ法主としての宗教的実践を軽視しがちな兄と違って、宗祖と門信徒は平等とする「御同朋御同行主義」の実践や「実践躬行」の好模範として、光瑞に批判的な本派末寺の住職・門信徒からも慕われた。養子に行く前から孝慈の人柄をよく知る本山の中枢近くにいる老僧や幹部の中にも、ひそかに心を寄せるものが増えていった。

新しい「仏教教団」は機関紙『教団時報』を発刊、次第に本派の門信徒に読者が増えた。開明派で海外布教に重点を置く豪放な光瑞に対し、保守・伝統的な法主として宗教的実践を重んじる実直な木辺派孝慈法主の評判が次第に高まった。本山錦織寺の参拝や一二年四月木辺派

宗祖六百五十回大遠忌法要へ本願寺派僧侶が駆けつける光景がみられた。

宗教専門紙『中外日報』は「錦織寺の勃興はこれ直ちに本願寺の危機なり」と報じ、光瑞批判と孝慈人気がともに高まりをみせた。

やがて光瑞に批判的な改革派の中にも真宗十派と言っても本派の一分にもみたない真宗木辺派法主木辺孝慈を、本願寺派法主の後継者に推す声が出始めた。

木辺孝慈はまぎれもなく光瑞の実弟であり、法燈を継ぐ資格に全く問題のない人物であった。高まる光瑞批判は孝慈後任説の賛同者を増やした。

六六　海軍収賄事件

一九一四（大正三）年の正月は、日本中がこぞってお祝い気分に浸る記念すべき年の幕開けであった。

大正天皇即位の御大典が一一月京都で挙行されることになっており、高御座・幟の新調や大嘗祭に使用される大嘗宮の設営が進められた。西欧列強諸国に肩を並べた大日本帝国の威信をかける最大の国家行事であった。世界各国から国王・大統領など国家元首、王室・皇室のロイヤルファミリー、首相・大臣・将校などを大典に招待する手はずが進められた。初代神武天皇から続いてきたという世界に類のない日本独特の伝統式典こそ、皇紀二五七四年を数える世界で最も歴史がありかつ唯一の万世一系を誇る第一二三代大正天皇を、招待した各国要人にお披露目する舞台であった。

三月には即位奉祝と産業振興を目的に東京大正博覧会が、主会場上野公園・分会場青山練兵場（陸軍）芝浦埋立地（海軍）で着々と準備が進んでいた。もともと明治五十年記念博覧会が計画され準備が進んでいたが、崩御されたため大正博覧会の開催に変更された。新しい御代の到来にふさわしい新技術として不忍池の上には呼び物の九名乗り遊覧ケーブル（ロープウェイ）が前人気をあおり、既に対岸四百㍍間の設置工事が完成間近であった。さらに国産初の小型自動車「ダットサン」や陸海軍の飛行機が一般公開されることになっていた。

日本にとって誇らしい年の幕開けに、水を差しかねない思いもよらない大災害が突如発生した。

一月一二日鹿児島湾の桜島が大噴火した。数日前より有感地震が続いていたが、八時頃中腹から薄い白煙が九時には山頂からも上がった。一〇時中腹の標高百㍍から五百㍍付近まで二・五㎞にわたり、直線状に並んだ十数個の火口が出現し突如噴火が始まった。午後になると爆発音が激しく噴煙は高さ一万㍍に達し、対岸の鹿児島市民はこれまでにない勢いに驚き郊外に避難を始めた。

激しい噴火が続く中、午後六時半今度は桜島西の鹿児島湾を震源地とする震度六（M七・一）の直下型大地震が発生した。市内の家屋・石塀・煙突が倒壊、道路は亀裂により通行不能鉄道は線路が波打ち、市内に向かうすべての交通機関は不通となった。しかも電柱の倒壊により電信電話も一切使用ができなくなった。このため鹿児島市は一時外部と連絡がとれない陸の孤島となった。

翌日の夜八時過ぎ火柱が高く上がる最大の爆発が起こり、赤熱した噴石により二万一千人が住む桜島の集落はほぼ焼失した。もっともこの大爆発を契機に火山爆発は二日間で収まり、以後は火口から溶岩の流出が続いた。流れ出た溶岩は一月末には幅四百㍍の瀬戸海峡を埋め尽くし、大隅半島と陸続きとなった。

一三日の朝刊各紙は火山噴火の写真を掲載、「煙焔天に漲り岩石落下す」「黒煙中の鹿児島火石天より降る」「桜島村全滅か」「市民狂奔して避難」の見出しが躍った。鹿児島湾に浮かぶ桜島の状況や鹿児島市内の惨状はラジオのないこの時代、電報・郵便は通信途絶、鉄道・道路の不通により、詳しい状況は大阪・東京では不明であった。

しかし桜島火山噴火の影響は身近に現れ、その巨大さを体感させることになった。大爆発による火山灰が関西で十三日、関東で十四日、十五日には東北仙台に達し降り注いだ。日本の最南鹿児島市沖の小さな島に過ぎない桜島の大正三年の噴火は、火山国日本における二十世紀最大の規模であった。

大慶の年のまだ正月気分も冷めやらぬ時に起きた自然の猛威を目の当たりに実感した国民は、秋の天皇即位の大典にかすかな不安を抱いた。

神戸駅を出た上り列車の乗客は、ここ数年六甲中腹の二つの建物を見上げるのが楽しみであった。日本最大仏教浄土真宗本願寺派大谷家別邸「二楽荘」の印度とも露風ともみえる、何とも奇妙な外観が見て取れた。そしてその隣には、対照的に広大な敷地の中に瀟洒な洋館の大邸宅を望めることができた。奇しくもこの二館の主が、この年前半の社会面を賑わすことになる。

桜島ではいまだ溶岩の流出は続いていたが日本国中を文字通り震撼させた火山噴火が収まった一月二三日、ロイターのロンドン発特電の奇妙な事件を各紙が大きく報じた。

報道の内容は独電気機械製造業シーメンス社東京支店のタイピストがいくつかの極秘重要書類を窃取、盗んだ書類の中に「日本海軍将校との贈賄を裏付ける不正契約書」が含まれており、公表されたくなかったら二千五百ポンドでこれら書類を買い取れとシ社に金銭強請の恐喝をしたというものであった。恐喝されたシ社は直ちに告訴し、二一日ベルリンの裁判所は元従業員のタイピストに懲役二年の判決を下した。

問題は審問の際被告は「これら書類の一つはシ社が日本海軍から注文を取るため、海軍将校にコミッションを支払うことを約した書類である」と暴露し、裁判所がこれをシ社の「不法なる取引」を示す書類と認定したことであった。そしてシ社の不法取引が被告を誘惑したとして、被告の罪を軽減した。この裁判で日本海軍の岩崎提督・ロンドン駐在藤井提督らの氏名が明らかとなった。

直ちにシ社は「日本代理店にコミッションは支払ったが、日本の官吏には決して支払っていない」と弁明した。

海軍当局は「責任を以て、断じて海軍軍人にかかる非行を敢てせる者なき」と断言、「帝国海軍は飛んだ側杖を喰い、迷惑この上なし」と潔白であることを強調した。

山本内閣は来年度予算案に三億五千百万円に上る海軍拡張充実費を計上しており、ちょうど衆議院予算委員会において審議中であった。

早速野党立憲同志会島田三郎が独裁判所による刑事事件の証拠書類に贈賄を受けた将校の氏名は明記されており、「国の疑惑を解くに非ずんば、政府・海軍は何に依りてその名誉と信用を内外に維持せんとするや」と厳しく問い質した。

斉藤海相は昨年一一月シ社東京支店から事件のあらましの報告があったが、「日本海軍には断じて収賄はない。事実であれば包み隠さず公表してもらって結構、書類の公表も却って希望する所である」と返答した旨面談の模様を報告、「我海軍省は飛んだ迷惑なり」と収賄の事実を全面否定した。

しかし海軍の強気な説明は三日と持たなかった。

各新聞社は競ってこれら事実確認を開始したが、艦政本部部員からの内部告発が東京朝日新聞社にあり、二六日「艦政本部の内情」の見出しを付け某消息の談として告発者の証言を載せた。「今更新しき問題ではない。海軍の腐敗問題はつとに有識間に唱道せられおり」「海軍拡張においては特に軍艦製造を取り仕切る艦政本部に対する商人側の運動は猛烈となれり」とその内幕を打ち明けた。

具体的に英ヴィッカース社発注の最新鋭巡洋艦「金剛」の英二社による入札は出来レースであったこと、横須賀工廠で建造した姉妹艦「比叡」の甲鉄板は英ヴィ社から同一型により造船に都合よしとの理由でわざわざ高価な鉄板を輸入したこと、快速艦新造は内地製造方針であったがエンジンがヴィ社の専売特権との口実でこの方針を放棄同社に発注輸入したことなどを挙げ、艦政本部員の中には大層憤慨する者が多いと報道した。

報知新聞は「藤井少将の家」の見出しで、原宿の邸宅について報じた。この中で外国人から購入した宅地千四

百坪には日本家屋と広壮な二階建ての西洋館が建ち、庭は数奇を凝らし善美を尽くしたものであったとし、「一少将の分限に過ぎたるもの」で以前より種々の噂が絶えなかったと報じた。

一月三一日大阪朝日新聞は「収賄事件証拠書簡」の見出しで、独法廷で証拠として認定されたシ社を脅迫した手紙を入手、艦政本部前第一部長岩崎・第四部長藤井と二名の大佐の名前があると伝えた。この中で岩崎少将との旧契約は問題ないが、藤井少将との新たな契約は「英ヴィッカース社発注の戦艦金剛の代金五％を、その他海軍の注文に対しては二・五％のコミッションを各々贈呈する」内容の契約であり、贈賄を裏付ける証拠と断じた。

さらに海軍では査問委員会を設置したこと、国会では野党中正会が山本首相・斉藤海相の二人は、同じ海軍軍人であり「この度発覚した収賄事件を国民が納得できる調査説明がはたしてできるのか」と質問状を提出、山本内閣の与党立憲政友会は調査の結果を待って態度を決めたいとした。海軍腐敗の実情として外国会社のみならず川崎神戸造船所（現川崎重工）との取引にも同様なコミッション契約の風評があること、山本首相・斉藤海相にも年々金が贈られていると噂されていることなど、内部告発を受けて詳細に報じた。

二月中旬には呉海軍鎮守府司令官松本和中将・呉工廠長村上中将に及んだ。さらに横須賀鎮守府に飛び火した。事件が発覚して以来、連日新聞各社による報道合戦が続き、新事実が続々と明らかとなった。

多くの国民は軍備拡張特に巨額を要する戦艦建造に、「海軍のためなら」と新税や増税に堪え続けた。またこの冬も新聞紙上では北海道・東北地方の凶作により、村民は「松皮を食す」悲惨な状況や「廓を抜けてきた哀れな少女」の記事が紙面に掲載されていた。

この海軍将校収賄事件は日露戦争を勝利に導いた日本海海戦以来、日本海軍を誇りとして我慢を耐え忍んできた国民を一挙に憎悪のまとに変えさせた。

鬱積した不満を持つ民衆に対し、野党の立憲国民党犬養毅と立憲中正会尾崎行雄が二月五日の憲政擁護会で「薩長閥打破と海軍廓清ため、山本内閣を弾劾し国民は蹶然起きて憲政擁護の旗を振ろう」と呼びかけた。同日国民党・同志会・中政会による野党三派連合会が成立、現内閣不信任案の提出を決めた。

海軍大将山本権兵衛首相の下での海軍将校大収賄事件の発覚は、一年前長州閥陸軍大将桂太郎内閣を退陣に追い込んだ護憲運動を呼び起こした。一〇日日比谷公園で「現内閣不信任案に対する国民的応援の国民大会」が開催された。

読売新聞は「国民の示威運動、群衆の叫び議事堂を震撼す」の見出しで大会の様子を伝えた。衆議院で過半の

議席を有する与党政友会に対し数では明らかに劣勢の三派連合は後押しを得るため「一内閣を倒すに非ず。我国民の顔に泥を塗られたる泥を拭い腐敗せる海軍を根本より廓清せんとするもの」「泥棒の嫌疑かかりし首相を不信任なりと云うに何の不都合ありや」「山本首相宅と議会を包囲せよ」など三派の代議士は次々に集まった民衆を煽った。五万人の群衆は「皇国の荒廃この一挙にあり」と大書した白旗を翻しながら国会議事堂を取り巻いた。

議会では「山本内閣不信任案」が上程され、三派連合犬養・島田らの賛成演説と与党政友会の反対演説の後投票に移り、百六十四対二百五で否決され三時過ぎ散会した。群衆が国会を取り巻く示威行為により政友会代議士の翻意を促したが、結束固く三派連合は敗退した。

この結果を聞いた群衆は暴徒化し、警官が警備する議会正門を押し破った。この不穏な情勢に警視総監は府知事と協議、遂に東京衛戍総督部に軍隊の出動を要請、歩兵第三連隊が警備のため派遣された。

寒い夜であったにもかかわらず、数千の群衆は芝の政友会本部やその機関紙中央新聞社を襲った。さらに毎夕新聞社・時事新報社に向かったが、かろうじて警官憲兵軍隊に守られた。首相邸・警視庁は襲撃・焼き討ちを予想、消防の手配を済ませかろうじて大きな被害を免れた。しかし警備の弱い交番を襲い破壊、深夜電車を襲った。

国民の示威行為運動やその後の暴徒化した破壊行為を背景に、四年度の予算案は結局議会を通らず、三月末山本内閣はその責任をとり総辞職した。

突然発覚した海軍将校収賄事件の進展をじっと見つめていたのが前宮内大臣田中光顕（任一八九八―一九〇九）と現渡辺千秋（任一九一〇―一四）であった。かれら二人は長年内外の海軍納入業者から、慣例として謝礼を贈られていたのである。しかもこの事実は検察当局に把握されていた。

六七　西本願寺疑獄事件

海軍将校収賄事件がどうにか落ち着きを見せ始めた二月一四日各紙朝刊は「西本願寺疑獄事件」「赤松連城ら続々召喚」などの大見出しで、一三日浄土真宗本願寺派前執行朝倉明宣・後藤尭爾、大洲鉄也、元室内部長上原芳太郎、元共保財団理事芳滝智道の五人を検挙収監したと報じた。大日本仏教慈善会財団理事長赤松連城は老齢であり事情をもれなく自白したことにより収監はせずと続けた。逮捕された六人は共謀し財団所有有価証券を流用した業務上横領・背任罪によるものであった。

各紙は連日社会面を埋め尽くす詳細な報道をした。記

事の内容は四か月後検察の「予審終結決定書」とほぼ同様で、具体的かつ正確であった。

各紙はこの事件を、

「西本願寺の重役赤松連城ら続々召喚」（一四時事）

「慈善・共保両財団資金の背任横領発覚」（一五時事）

「西本願寺検挙の経過―改革派の告発が発端不正の種々―」（一六大阪朝日）

「大谷光瑞法主の引退を迫る改革派」（一六時事）

「本山内部の腐敗　相場通の法王連枝　放蕩三昧の僧侶」（一六大阪朝日）

「大橋銀行の取調」（一六大阪朝日）

「文部省、信仰を名とした巨額募金に制裁」（一六時事）

など頗る生々しく伝えた。合わせ改革派が主張する法主光瑞への批判を繰り返し載せた。

当時の刑事司法は予審制度をとっていたが、その予審終結決定書では「日露戦役後教線を海外に拡大しかつ各事業を計画したことにより財政漸次膨張したる結果、これが弁済・借り換え・利子支払いおよび諸経費弁済のため多額の金員を要する」に至ったとした。新聞で報じられた通りその後「連城を除く五人が相謀り、大谷家資産を増殖してその基礎を鞏固になすべき目的をもって、株式の売買取引（新聞報道では東電株）を開始さらに土地取引に乗り出するに至り、これまた多額の資金を要し漸次負債を醸す」ことになり次第に金融に窮するに至り犯行に及んだとその経緯を明らかにした。起業銀行が預金の取り付けに会い、急遽本願寺への貸付金の返済を依頼され、銀行救済の資に充てられた事実も明らかにされた。

借入は東京・京都・大阪三市の三井・住友・安田・第一・森村・平沼・北浜・豊国・起業・台湾・商工など多岐にわたった。返済期日が来ると継続・期間延長交渉・利払い手続きを行うとともに、継続または期日延長不可の銀行には新たな銀行からの借入交渉を行った。三財団保有の国債・大阪電鉄や築港公債・勧業債券など有価証券や銀行定期預金証書を担保に差し入れ、さらに追加・取り下げなど担保繰りにも忙しかった。

取り付けに会った起業銀行救済の時のような緊急な資金が必要なときには、三財団の当座預金を直接借り出した。もはや寺債を発行し三財団に引き受けさせるという表向き合法的に金員を得る余裕はなかった。予審決定書は資金繰りに多忙を極めた様子が明らかにされた。

各紙が内部の告発者や改革派から取材した「五万円問題」の追求は一切なかった。この疑惑は光瑞が妻籌子を伴い中国を視察中の七（明治四〇）年、宮内省が武庫離宮造営のため大谷家須磨別荘を二十六万円で買い上げた折、五万円の使途が不明となっている問題である。かねてからうち一万円が宮内省要路者に謝礼金として贈られたとする噂が根強くあった。

さらに株・土地への投機は、法主光瑞・実弟尊由が関与していると書き立てたが、光瑞・尊由の名前は一切なく、この疑獄事件は赤松連城以下六人による犯罪とした。

詳細を知らされていない多くの末寺住職や門信徒はこれら報道に驚愕するとともに、事件の推移を憂慮した。

めったに目に触れることのない大宗教教団内部の疑獄に検察当局を動かすことになったのは、ちょうど一年前改革派が京都検事局に告発したことからであった。当初検事局は宗教教団の内情に疎く、しかも複雑な資金の流れの調査に消極的であった。告発状に記載された慈善会財団を調査し、保有有価証券の取り扱いなどに問題ありとして、執行幹部に対し書類の整理と不備の修正を警告し事件化を避けようとした。

しかし改革派は何度も検事局を督促し、財団の資金消費の解明を求めた。それでも資金の流れは複雑で難しく、検察局は表立って動かなかった。

一一月所管する文部省宗教局長から呼び出しを受け、「告発が出ているが公の事実であれば、大宗教に対する信徒の信仰心が動揺し由々しき精神界の打撃になる。一時も早く紊乱した内政を整理せよ」と警告・指導された。

これを聞きつけた改革派は改めて検事局に捜査の開始を求めた。検察局は文部省の動向から本格的に着手することになり、検事局総出で内局幹部の取り調べを始めた。京都での召喚は秘密が漏れる恐れがあり、大阪検事局に呼び出しての取り調べとなった。二月に入り確たる証拠が固まりつつある時新聞報道となった。

この疑獄発覚を契機に、一部強硬派はこれまで訴えてきた法主光瑞・大谷家からの譲職問題の解決を迫った。また国会で衆議院議員金尾稜厳が政府に対し宗教行政上の監督責任を追及し本願寺疑獄事件の対応を求めたが、政府はあたり触りのない答弁に終始した。金尾は国政の場での解決を主張したが、大きく広がらなかった。

改革派の多くは「光瑞法主の引率による引退と弟法嗣光明の擁立就任」により「本願寺の法運を恢復し、衰頽せんとする教権の再興」を訴えた。光瑞の後任には、一時すぐ下の弟木辺派法主木辺孝慈擁立の声はあったものの一部に止まった。本願寺住職（大谷家）と本願寺派管長（集会公選）との分離の主張についても、大谷家や一族連枝の反対が強くすぐに消えた。

社会の耳目を集めたこの疑獄事件は、真宗門徒には片時も頭から離れなかったが、暫く続報が続き罪状が出尽くすと世間の関心は次第に薄れた。

六八　皇太后崩御引き延ばし事件

四月一一日各紙朝刊は明治六年撮影の若き日の昭憲皇

太后（明治天皇皇后）の写真とともに、「皇太后崩御」を一面全面で伝えた。

「皇太后陛下今一一日午前二時一〇分崩御あらせらる
大正三年四月一一日　宮内大臣男爵　波多野敬直」

宮内省は続いて先月から崩御までの経過（九日激烈なる狭心症発症一一日午前二時過ぎ心臓麻痺）を、続いて今一一月の御大典延期、三日間の廃朝、一年間の大喪、御斂葬日、さらに一〇日軍艦香取により沼津御用邸から青山御所還御、午後一一時半皇后陛下還啓御迎の模様を発表した。

国民は過ぎ去った明治の御代を懐かしみ、写真を見ながら近代化に努力される明治天皇を支えた皇后陛下を偲んだ。皇后自ら進んで着物から洋装服の着用、女子教育（華族女学校・東京女子師範学校設立支援）の振興、日本赤十字社・東京慈恵医院など看護・救助や医療の分野の発展に貢献されたお姿が思い出された。

ロンドンタイムスは社説で「明治天皇の皇后として、能く国母として無数の職分尽くし、西欧の皇后に求むる国民生活上の貢献は模範を示し日本における婦人の地位を高めた。日清・日露両戦役に際し負傷兵救助機関の設立に貢献した」と賞賛した。

宮内省からの一連の皇太后崩御の発表を読んで、いくつかのおかしな点に気付く読者もいた。皇太后は狭心症の重体にも拘わらず、なぜ崩御一日前に沼津御用邸から青山御所に還啓されたのか、そもそも宮内大臣は波多野ではなく渡辺千秋であったのでは。

これら疑問が生じたのは当然であった。波多野の宮内大臣就任は四月九日だったのだが、その日の早朝午前二時すぎ皇太后は崩御されていたのである。皇太后崩御となれば一連の多くの儀式が待ち構えており、取り仕切る宮内大臣の交代などあり得ない。しかし万難を排してでも、渡辺宮内大臣を更迭する差し迫った深刻な事情が生じていたのである。

そのためなんと皇太后崩御の日時を「事実より二日間」遅らせ、一一日二時一〇分と発表したのであった。

以前より前田中光顕および現渡辺千秋両宮内大臣にはとかくのうわさがあった。五年前の九（明治四二）年『都新聞』に「田中宮相、渡辺内蔵頭指弾される」の記事が掲載された。内容は御料林二〇余カ所から不正利得を得ていたこと、清国からの賠償金二千万円の一年間の利息八〇万円の内三〇万円が不明瞭になっていること、日本銀行保管の帝室所有株式を低落の恐れがあるとして売却したが、時価四二～三〇円のものを三〇〇円で売却その差額を壟断したことなど個別具体的に指弾した。渡辺内

蔵頭は製糸業者への貸付・高輪の宏壮な邸宅を新築したにもかかわらず、預金は五割増加し残高は一〇万円以上になっているとした。田中大臣は郷里に広大な不動産の購入事実を暴かれた。二人の関係は渡辺が謀策し田中は均霑するものであり、宮内省の廓清が急務と報じた。

田中光顕は土佐勤王党員から陸軍に入り少将、警視総監、学習院院長を歴任、その後十一年間宮内大臣を務めた。山県の忠実な部下であり、明治天皇の絶大な信頼を受け長期間その職にあった。九（明治四二）年新聞報道をきっかけに収賄疑惑が発覚、辞任した。その後任が次官に昇進していた渡辺千秋であった。渡辺も収賄容疑を報道されたが、同時に二人の更迭は支障があるとの懸念から省内をよく知る渡辺が後任に就任した。

渡辺は諏訪出身の法務官僚で判事となり、その後京都府ほか三知事を務め、九五年山県の推薦で財務を所管する内蔵頭に就任した。以後汚職をささやかれた御料局・帝室林野庁の長官を兼務、次官から大臣に昇進した。通算十五年間という長きにわたり皇室にかかわる資金を扱った。蒐書家として名を留め古典籍・古筆を収集した。その趣味のためもあり多額の資金が必要であった。

渡辺の収賄容疑は一月に発覚したシーメンス贈賄事件を捜査中、海軍将校へのコミッションとともに慣例として謝礼の一部が宮内大臣にも渡っていたことを検察当局は掴んだ。金額はさほど大きくなかったのかはたまた皇室という特殊な部署に遠慮したのか、この時は事件化を見送っていた。

二月に公となった西本願寺疑獄事件では予審決定書には一切記されていなかったもの、新聞では大谷家須磨月見山別邸を武庫離宮用地として買い上げる際、既に明石に候補地があったにもかかわらず、金策に苦しむ本願寺内局の依頼を受け買い上げた。その際当時の渡辺内蔵頭は謝礼として一万円を受け取っていたことを報道されており、検察当局もこの事実を掴んだ。

二月海軍将校収賄事件に端を発した少数野党を支援する内閣弾劾国民示威行為運動から政局は混迷を深め、結局三月二四日山本内閣は総辞職した。

二八日元老会議は後継首相に貴族院議長徳川家達を推薦したが、家達はこれを辞退した。次に内務官僚で山県派の枢密顧問官清浦清吾に組閣を命じた。しかし海軍大臣に予定した加藤友三郎中将（日露戦役連合艦隊参謀長後首相）から「八・八艦隊」を目指した軍艦建造費の上積みを強く主張され、四月七日組閣を断念した。

混乱した政治情勢の中、検察当局は渡辺千秋宮内大臣を西本願寺からの収賄容疑で逮捕の方針を固めた。宮内省の一部局でありながら、華族に関する不祥事・不始末など懲戒を担当する実力者宗秩寮（ソウチツリョウ）久我通久総裁にこの情

報が入ったものとみられる。

検察筋からの大臣逮捕の情報に久我総裁は驚いた。シーメンス社から賄賂を受け取った海軍艦政本部幹部による汚職事件は国民から厳しい非難を浴びた。国民大会開催の日比谷公園周辺の暴動は軍隊出動により何とか一日で収まったものの、その怒りに押され海軍の拡張計画はとん挫、山本内閣は退陣した。大元帥天皇の忠実な将兵であるはずの、しかも日露戦役最大の功績者である海軍の長年にわたる多額収賄事件が、天皇の近くにまでは及ばなかったことに安堵したばかりであった。

西本願寺による疑獄事件は、天皇の義理の兄にあたる光瑞が法主を務め、新門の裏方は皇后の実妹という皇室と密接な関係にある大谷家西本願寺から、皇室を輔弼する宮内大臣にしかも両陛下がご使用になる御用邸の買収にかかわる収賄により近々逮捕されるという、思ってもみない展開であった。しかも確かな筋からの情報であった。

シーメンス収賄事件で国民の怒りを痛いほど知らされたあとだけに、天皇・皇室を所管とする宮内省渡辺大臣の現職での逮捕だけは何としても避けなければならなかった。宗秩寮久我総裁と山県ら一部の元老が素早く動き、逮捕直前の九日に渡辺の大臣辞任・波多野大臣就任の発令を決めたところであった。

あり悪しくその日の早朝昭憲皇太后が崩御され、すでに御遺体を青山御所に移送のため沼津御用邸まで軍艦香取を向かわせていた。皇太后崩御となれば宮内大臣の同日の更迭などあり得ないことであった。

悩んだ末現職大臣逮捕という事態を回避することを優先させ、「崩御の事実は二日間伏せ」その間は生存されていたことにしたのである。この大それた決定は省内を牛耳る元老山県の承諾のみならず、天皇皇后両陛下の内諾を必要としたことは間違いない。そのうえでの「皇太后崩御先延ばし」であった。少しつじつまの合わないことが生じたのはやむを得なかった。

幸い世間の関心は崩御の後の一連の行事に移った。崩御と偶然重なり大混乱に陥ることを危惧した検察当局は、結局渡辺千秋前宮内大臣の逮捕を見送った。こうして「崩御日虚偽発表」のみが歴史に残ることになった。

今日年表記載の崩御日は一一日となっているが、九日であることに疑いを持つ研究者は一人もいない。

六九　宮内省宗秩寮久我総裁の決断

春の到来とともに東京では三月二〇日から東京大正博覧会が開幕、最新の技術成果が評判になり地方からの観客も多く連日数万人が来場した。帝国劇場では芸術座がトルストイ作島村抱月脚色の「復活」を初演、主演松井須磨子が歌う中山晋平作曲「カチューシャの唄」が人気を呼んだ。

関西では四月初めから宝塚新温泉で「婚礼博覧会」が開催された。各時代の婚礼衣装や世界の結婚式の様子が展示され入場者の目を楽しませた。呼び物として宝塚少女歌劇が初公演を果たし、物珍しさから注目を集めた。

長引く政局の混乱は三人目の候補として大隈重信が推され、野党であった同志会（加藤高明）中正会（尾崎行雄）を支持政党とするものであった。山本内閣を最も指弾した国民党犬養毅は閣外協力することでようやく大隈重信が組閣し、政界は正常に戻った。

五月に入ると、年明けから社会を騒がし続けたシーメンス社贈賄事件や西本願寺疑獄事件の新聞報道は下火になった。

しかし西本願寺疑獄事件に端を発した宮内省大臣更迭は皇太后崩御が重なり大変な苦労を強いられた宗秩寮総裁久我通久は、その後も光瑞の動向に目を離さなかった。通久の最初の妻は皮肉にも本願寺派と競い合う真宗大谷派東本願寺第二一代法主大谷光勝の娘、二番目の妻もその妹であった。自然仏教宗派の動向には関心が強かった。

社会をあれだけ騒然とさせた海軍将校収賄事件は、呉・横須賀両鎮守府に拡大したが、疑惑の将校は収監され処罰を受け最後は退役となり責任を取らされた。退陣した海軍大将山本前首相と中将斎藤実海相の二人は、大隈内閣が成立するや八代海相によりすぐさま予備役に編入された。

渡辺千秋宮内大臣の西本願寺からの収賄容疑事件は、検察からの逮捕情報を得るやすぐに更迭した。しかも現職宮内大臣の逮捕という事態を回避するため、昭憲皇太后崩御の日を二日遅らせることまでした。

不祥事に目を光らす久我総裁は、細心の注意を払い皇室への批判につながる芽をつぶすことに神経を使った。

しかしながら西本願寺疑獄事件の主役というべき法主大谷光瑞一人は改革派の辞任要求が厳しくなる中、六甲二楽荘から西本願寺錦華殿に常駐し反省・謹慎の態度を示しているものの、浄土真宗本願寺派管長・西本願寺法主の地位は微動だにしなかった。疑獄発覚から時間が経つにつれ、宗祖親鸞の法燈を継ぐ光瑞の地位は次第に安泰になりつつあると見えた。宗門徒の誰一人として大谷光瑞管長・法主を辞任させることはできなかった

年初めからの皇室に何らかの関与する三事件は、西本願寺疑獄事件だけは弟子が一身にその責任を背負い、頑なに光瑞を事件から護り通した。そのため検察の予審決定書には一切言及はされなかった。しかし多くの人には

事件の根源は法主光瑞にあると思われた。ましてや新聞報道では光瑞自身が株式や土地投機に乗り出していたと喧伝され、光瑞法主の関与を生々しく報道していた。

久我総裁は、大正天皇即位の御大典を控え、何かと皇室に結び付けたがる世間の動向に目を配った。光瑞が引き続きその地位に留まれば、天皇の義理の兄、また弟新門光明の妻紘子は皇后の妹として両陛下と関連付けられる恐れがあった。法主・管長の地位にこのまま留まれば、いずれ再び光瑞に批判がぶり返し内紛は終わらないことが懸念された。社会の目が皇室に及ぶ火種が残ることは、総裁にとっては一番悩ましいことであった。

五月一〇日京都にいる光瑞に宮内省から親展の封書が届いた。要件は宗秩寮久我総裁が至急お目にかかりたいというものであった。これまでこの種の宮内省や所轄官庁からの呼び出しは、妻籌子が引き受けてきていた。籌子であれば、宮内省の中でも特に宗秩寮総裁からの呼び出しの用件は即座に予想できた。呼び出しを受けるや、すぐに上京し要人と相談、的確な対応をしたはずであった。しかし光瑞には用件の趣について何も心当たりはなかった。

謹慎中であった光瑞はやむなく呼び出しに応じ、東京築地本願寺に数日間滞在の予定で夜行列車に乗り東上した。翌日朝新橋に到着、築地本願寺で一休みをして宮内省に赴いた。

一時間ほど久我総裁に面談の後、光瑞の様子は入室の時とは一変していた。一切口を開かず考え込む様子で築地本願寺に戻り、予定を変更してすぐに京都に帰った。そのまま住まいの錦華殿に入り、誰とも会わなかった。

翌一四日朝一族・連枝や本山幹部集めた。その席で、「この度の事件の責任をとり、本願寺住職・真宗本願寺派管長を辞職し、伯爵も返上することを決断した。ついては皆で後のことを相談してほしい」

とすべての職から退くことを明言した。その場にいた者は思いもよらない発言に驚愕し、翻意を促し慰留したが、一切無視し錦華殿に再び引きこもった。光瑞をよく知る親族や近習たちには、これほどの重大な決心した以上その意思は決して変わらないことを知っていた。

同日宗主は宗門徒に対し次のような親示を出し、すべての役職から辞任することを正式に表明した。

「曩日、憂患内ニ生ジ、未ダ其ノ局ヲ結ブニ至ラズ。不徳ノ責モトヨリ免ルヽニ由ナシ。而シテ依然ニアリ職ヲ行ハ慚愧恐懼心自ラ安カラズ。

因ッテ断然意ヲ決シ責ヲ引キ職ヲ辞ス。一派ノスベテノモノ、予ガ苦衷ヲ諒トシ公私ニオイテ誤ルコトナカランコトヲ希フ」（一部略・改変）

事件が発覚して以来の苦しい胸の内を語り、本願寺疑獄事件の責任は自分一人にあるとして辞任に至ったことを明かした。そして浄土真宗本願寺派管長職は一日も空席が許されないので、直ちに管長（代理）を選任して欲しいと続けた。突然の辞任であるが、相伝の法義については受け継いでいるので伝授したい。これらは歴代宗主からの伝示であるので疑いのないものであるとした。最後に末寺住職・門信徒に対し「真（僧侶）俗（在家）相協力して奉公し本派の発展に協力してほしい」と結んだ。

わが国最大の仏教宗派浄土真宗本願寺派宗主・第二二代鏡如上人・西本願寺住職大谷光瑞は全ての権力を握る絶対君主であった。改革派や宗教専門誌からの辞任要求、新聞などによる覚醒を促す報道があろうとも、その座は微動だにしなかった。宗祖親鸞の法燈を継ぐ宗主・管長の権力は絶大であった。

この法主・宗主双方の権力を一人が持つという絶対的権力体制を明治初期島地黙雷・大洲鉄然・赤松連城ら改革派が宗派の近代化として、大谷家・西本願寺（法主）と浄土真宗本願寺派（管長）を分離させた。本派では寺法（憲法）・宗規綱領（皇室典範）・執行長（内閣総理大臣）・執行（大臣）・集会（議会）と、国家の立憲体制と類似する統治体制を十年早く確立させた。

しかし幼い時より中興の祖蓮如に並び称された鏡如光瑞の並外れた才能と行動力が、この統治体制を骨抜きにしてしまった。「仏の子」を自認、日本仏教の正統性を証明し、東アジアに本願寺派の教線を拡大、仏教復興・興隆を掲げた。全国から末寺の子弟を京都本山に集め、自ら人材を選抜・育成した。経験と専門知識は持ち合わせていないが、彼らの情熱と体力・胆力そして篤い信仰心を疑わず青年僧たちを探索地に放った。かれらは光瑞が予期した以上の確かな成果を残した。

そして古色蒼然とした仏教界近代化の旗手として、世界を舞台に優秀な弟子とともに目的実現のために邁進してきた。こうした大きな構想を目指すには、巨額の資金を必要とした。

しかし光瑞の遠大な目的と行動は途方もない単なる無駄遣いとみられ、本派末寺住職や言論界では理解されなかった。本派の豊富な資金がついに底をつき、逆に数百億円という大きな負債を抱え込み、批判の声が上がり謹慎は余儀なくされても、その地位は揺らがなかった。

最後に光瑞に苦言を呈し退任を決意させられるのは、もはや天皇の威を借りるほかなかった。

皇后の姉である妻籌子を失い、宮内省から面談を求められるままただ一人赴いた。華族の不法不正・不逞・不始末を断罪する宗秩寮久我総裁から「このままでは、い

ずれ両陛下に類が及ぶことになる」と諭された。幕末の戊戌戦争を戦い抜き維新後の混乱を潜り抜けた老練な清華家の名門久我通久の説得に、迂闊にもその場で辞任を受け入れてしまった。もし籌子が側におれば決して応諾はさせなかった。少なくとも本願寺住職の座は手放なすことはあり得なかった。否この辞任要請自体、妹の皇后を通じて火を消したことであろう。三十歳で往生した裏方籌子の存在がこの時思い出された。

本願寺派だけでなく一般社会にまで衝撃を及ぼした辞任の決断は、第二二代法主大谷光瑞が西本願寺住職・浄土真宗本願寺派管長に就任して十一年、まだ三十八歳の時であった。

本願寺派が総力を挙げて募った共保財団設立の寄付金募集、負債整理のための寺債発行、大谷家所蔵品売却、内局による東電株・土地の投機などことごとく失敗に帰したことが辞任につながった。

日露戦役後日本経済は不況と恐慌を繰り返し長引く不振に喘いだ。度重なる寄付金募集の失敗は国民の一割を占める真宗門信徒にもその影響を大きく受け、家計の余裕を失くしたからに他ならなかった。

しかし元老井上馨が「大正新時代の天祐」と評し、日本経済を一気に好転させ大戦景気をもたらすことなるオーストリア皇太子夫妻暗殺（サライェヴォ事件）が発生したのは光瑞辞任の一か月後、オーストリアがセルビアに宣戦布告し第一次世界大戦がはじまるのは僅か二カ月後のことであった。

（つづく）

参考文献は最後に記します

高山右近（十）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

父ダリオの死

右近は高齢化した父ダリオを京（みやこ）の名医に診てもらうため、ダリオの北ノ庄時代からの付け人浅香与平と召使一人をつけて、前田家京都屋敷からほど遠くないところに、父の療養屋敷を設けていた。

右近が屋敷に着き、父ダリオの部屋に直行した。ダリオは口を閉じ、今にも微笑みそうな穏やかな表情をしている。右近は枕元に跪き、父がこのように穏やかに帰天したことの感謝と共に、これからの、父のいない自分の歩みについて、神様が豊かに導いてくださるように祈った。

葬儀については、父は予てから長崎の「キリシタン墓地」への埋葬を希望していたので、京都では前夜式のみ行い、遺体は金沢迄運び、右近の屋敷で葬儀を行い、長崎のキリシタン墓地に改葬する迄、暫定的に屋敷敷地内に仮埋葬することとした。

明日、ダリオの遺体を金沢に運ぶため、浅香与平に「バテレンがいれば、夜になってもいいからここに来ていただくように」と、右近の走り書きの手紙を持たせて京都南蛮寺に行かせた。

京都南蛮寺は、秀吉の「バテレン帰国命令」発令時にはバテレンは誰もいなくなったが、その後その命令の実行チェックがなされなかったので、バテレン一人が戻って来て外部からは分からないように、個別教会や信徒の信仰相談に乗っていた。

その夜、バテレンが来てくれたとき、右近はダリオの本葬儀は長崎改葬時に行い金沢で仮葬儀を行うことを話し、留意事項などを聞くことができた。

右近は父の遺体と共に金沢に戻り、前田利家に挨拶し

たのち、自邸で仮葬儀を行い、遺体は自邸敷地内に仮埋葬した。

京都を経ってから仮埋葬が終るまで、毎日のように夜になると幼い時からの父の姿が浮かんだ。

右近が一〇歳前であったが、キリシタンに改宗直後の父の朝夕の祈りの真剣さには、子どもながらに驚いていた。その翌年、右近は父が招いたロレンソ修道士から、父の命に従って洗礼を受けた。その後、父の真剣な宗教生活を見続け、また、父が転写した教本を転写させてもらってキリスト教のことを学んだ。それは父の信仰の姿が無言で「俺を見習え」と迫っていることを感じていたからである。その後、高槻城主のとき、荒木村重の織田信長への反乱に、主従の筋として自分は織田信長に、父は荒木村重についたので、信長が勝利を収めた段階で、死罪であった父を、信長に父の一命を助けてもらったときのことなど、思い出せば次々と思い出されてくるが、自分が今あるのは、父が父の全生命をかけて「キリスト教信仰はかくあるべきだ」を自分に見せて、教えてくれたことであった。

仮葬儀も終わり、前田利家の所に挨拶に行き、利家から指示されていた「豊臣家を守り存続させるための仲間造り」は一向に進展していないことを伝えると、利家からは「焦らず、自然体で、それを切り出せる雰囲気の時に切り出せ」と言われたが、千利休の弟子仲間の細川忠興や、キリシタン洗礼を右近が奨めた黒田官兵衛などとも、会う機会が見いだせなかった。

天正十八年（一五九〇）の秀吉の小田原征伐以後、これまで秀吉に臣従していなかった仙台の伊達家が、小田原討伐に参加して秀吉の軍門に下り、今や秀吉の軍門に従わない大名はなく、天下に戦は亡くなっていた。更に秀吉は多くの時間を秀頼と過ごしているので、前田利家は、長い歴史から見ればつかの間の暇＝平安を過ごしていた。

秀頼誕生以後、それ以前に秀吉が官位と地位を与えた近親に対して、「謀反を企てた」との理由で官位の剥奪だけにとどまらず、その妻妾までも死罪という狂気のような沙汰に対して諫めることはできず、むしろ何かとばっちりの難癖をつけられないように細心の注意を払っていた。天正十五年（一五八七）の秀吉によるバテレン国外追放の命令は解除になっていないので、右近の追放は許されたとはいえ、金沢での教会建設を行うことは「今は危険」と考え、利家も右近も秀吉の様子を注意深く見守っていた。従って、右近も多忙から解放されて自己を見つめることができた。

茶室での右近

右近が金沢に来てから茶会をするのは、金沢城内で前田利家から依頼されて、前田利家・利長を相手にするときと、筆頭家老の横山長知が右近のお手並み拝見と称して何度か来ている程度であった。右近も金沢で教会ができた段階では、有力町人たちも招きたいと思っている。

久しく茶室の内部や外回り・茶器などをを見ていないと感じて、先ずは裏庭にまわり、露地を眺めながらゆっくりと歩いた。この茶室は右近が「集雲庵」と名付けている。茶室を建てたときに、茶室の入り口に「集雲庵」と言う表札を付けていた。

露地には名も知らない草が生え、庭木の緑も色が濃くなって、植物の生命力を感じさせてくれている。

腰を落として路地に生えてきた草を丁寧に抜いて行くと、昨日まで雨だったせいか、草が地中に一生懸命に伸ばして張った根が、そのままの姿で抜けてくる。何か可哀そうな気もしたが、茶席に招いた来客に失礼のないような状態にして置くことが必要で、右近は小さな草迄丁寧に抜いていた。

庭木の枝が伸びて、露地を歩くのに邪魔になるものは、その枝を途中で折ったり切ったりしないで、そのような枝は、最初からありませんよ、と言わんばかりに幹の近くの枝分かれしたようなところから切口が目立たないように切っている。また、その枝についている葉も、色が褪せたり虫がついたりしたものも切り取って、きれいな緑の葉だけ残していた。

やがて躙り口の所に来ると、躙り戸の外側表面をしっかり眺め、汚れた個所があればそれを落とし、躙り戸を上に開けて、右近自身が躙り口から茶室に入る。そのとき目に入る茶室内部の正面、左右の状況を時間をかけて眺め、各種茶道具を置くのに障りがないか、お客の座布団の大きさ、並べ方も目で確認する。正面、左右の内壁の状況も「これでいいのか」と自分に問いながら確認していた。

右近が躙り口から茶室に入って、水屋に行き、そこから釜を始め茶会に必要な全てを持ち出して作法通りに並べ始めた。

先ず右近が点前座に座って袱紗を腰につけ、炉に釜をかけ、水差し・茶巾・建水・蓋置・柄杓・茶碗・茶入れ・茶杓・仕覆などをそれぞれ定めに従って所定の位置に置き、順番に手に取って清め始めた。清めは、本質的には招いた客に失礼のないようにとの思いで、仕舞う時に念には念を入れて清めていたが、この日も一旦出して並べたことから夕方まで清め続けていた。

茶室内のさりげない目立たない位置に孟宗竹を床から天井まではめて、中央よりやや高めの所に一ヶ所花を活ける穴をあけて、花活けにしている。穴は縦長で、生け花の葉影で見えにくくしていた。茶室全体を眺めたとき

に、謙虚な右近の気持ちを表現するような形で素朴な花を活けていた。

加賀でのキリスト教宣教で考える事

茶器類を全て所定通りに仕舞い終えて、再び点前座に正座して目を閉じて、これからのキリスト教の地域宣教についての課題・・それは現在は前田利家が加賀、越中、能登三か国の領主として統治しているが、この殆ど全てが、信長が十一年に及ぶ石山本願寺との戦いの中で、一向宗門徒との激戦を経て奪い取った領土であり今の金沢城の場所は一向宗の北陸地区の本山的機能をはたしていた「金沢御堂」が建っていた場所である。天正二年（一五七四）には越前一向一揆勢力が攻めてきて、信長が朝倉家から奪った越前を奪い返されてしまった。そこで天正三年（一五七五）八月、信長自らが出陣して、越前を奪い返し、柴田勝家に統治を任せたが、信長の死後柴田勝家は秀吉により滅ぼされた結果、前田利家の統治になっている。信長の越前奪回時、一向一揆側の死者と捕縛者総数は四万人に達したと伝えられている。前田利家は信長陣営の主戦者の一人として、「進むは極楽浄土、退くは無間地獄」と唱えながら戦いに出てきた多くの門徒を殺戮していた。

前田利家は領主としてきた最初に、領内神社・仏閣に従来通りの安堵状を交付し、領民対策として行政上の代官とは別に各村ごとの有力者に年間米十俵から三十俵の知行を与えて、地域ごとの百姓の面倒を見る組織を造り、百姓の安定化を図った。このような配慮が功を奏したのか、右近の見るかぎりでは統治は安定している。

右近はここまで考えて、これからのキリスト教宣教では、前田家と一向一揆の争いがあった事については一切触れないことに決めた。

そこで墨と筆を用意して、茶室の点前座に座ったまま、これから建築する教会と、今の金沢城の防衛強化について考えを書き出した。

教会については

① 宣教対象は武士・領民を区別しない。教会へ来会した人の名簿は、武士・領民別に作成する。（今の一か月四回のキリスト教説明会でも行っている）。

② 一度でも来会した人には、その月中に右近または篠田伊織が訪問し、継続して来会できるように人間関係をつくる。（将来司祭が教会に常駐するようになれば、その訪問は司祭が行う）

③ 教会のお祝い行事（今考えられるものはクリスマスのミサと子どもたちの祝いの寸劇）は、教会を知ってもらうために原則誰でも希望者は無条件に参加できるようにする。

④ 教会完成時に、司祭と修道士の駐在をイエズス会に求める。

⑤ 信徒教育のための「読本」的な「十戒」「慈悲の行い十四箇条」の作成を、来会者全てに渡すことのできる数量の製作をイエズス会にお願いする。（当初の分は現状通り右近が筆記作成し、新規来会者に信徒のあり方の教本として配布する）

⑥ 教会建設の場所・時期を確定するように時機見て四社協議で提案する。

金沢城の防衛強化

金沢城が北陸の要の城として存在するためには、二年前に小田原征伐で小田原城が二十万人と言われる大軍で攻めてもなかなか落ちなかった原因、それは城下を大きな堀で囲ってしまったことにあったので、それを北陸拠点の金沢で作ること、また、今の金沢城の建物の外壁の防火工事も求めてゆきたい。

文禄二年（一五九三）八月三日に大阪城内で秀頼が生まれてから、秀吉は大阪・肥前名護屋間を行き来していた。秀吉自身、己の体力の衰えを感じていたことから、生まれたばかりの秀頼の将来が不安で、家康をはじめとして五大老・五奉行を大阪城に招いて秀頼への忠誠を求めることに心が奪われ、朝鮮に派兵している戦いも、国内政治も石田三成任せになっていた。

豊臣秀吉死去

秀吉の体調が思わしくなく、本人もそれが分かっているだけに、徳川家康はじめ五大老に秀頼と豊臣家のことを再三に亘って依頼し、また、秀吉は諸大名と会った都度、秀頼に忠誠を尽くす旨の誓書一札を取っていた。

前田利家は、豊臣家には豊臣家が天下を掌握した上での存続を図る体制が出来て居らず、秀吉亡き後は、後継をめぐって天下の騒乱は必至と読んでいた。

右近はこの所前田利家が加賀に戻った都度、利家・利長・横山家老・右近の四者会議でその辺の状況を詳しく聞かされ、それを前提として前田家はいかにあるべきかを、外交と守りの観点から意見交換をしていた。

慶長三年（一五九八）八月十八日、豊臣秀吉が大阪城で死亡した。

前田利家は秀吉の訃報を聞くと同時に徳川家康に会い、朝鮮派遣軍に秀吉の訃報を知らせることなく、朝鮮から即時全軍の撤兵を行うよう、家康共々石田三成に指示をした。

右近は秀吉の死を知らされて、肥前名護屋でのあの苦しかった日々を思い出していた。

それは、秀吉が肥前名護屋城で右近追放を許したときからの数日間であった。秀吉が右近の追放処分を赦免したあと、その場で秀吉から明日の秀吉の茶会に出席をす

るように言われたとき、最も喜んだのは他ならない前田利家であった。また、利家は数日後に行われる利家の茶会に秀吉を招いているが、利家からその茶会にも出席するよう言われた。秀吉の出席する茶会に同席出来る者は、秀吉のお気に入りしか出席を許されていなかった。このような状況を見て、他の大名たちも右近が秀吉の側近として返り咲くと思っていた。

前田利家も、秀吉が右近を側近の一人として傍に置くことを期待していた。右近としては秀吉の命令には、キリシタンとしては耐えられないことも行わなければならなくなる。追放でそのような状態から開放されて、ホッとしている自分としては、新たに秀吉の側近となることは耐えられないことである。利家にはその思いは気づかれないようにしていた。利家不在の加賀を、右近もそう空けておくわけにはいかないと言う思いから、秀吉にも儀礼的な挨拶を済ませただけで加賀に戻ってきた。

前田利家の死

豊臣秀吉死去の翌年、慶長三年（一五九九）四月二十七日、大阪前田屋敷で前田利家が死去した。嫡男利長が前田家の当主となり、利家の豊臣家五大老の立場も継承した。

秀吉が生前、五大老は勝手に自分の勢力範囲を弘めることを禁止する意味で、大名間の婚姻を禁止していたが、家康は秀吉・利家の死後、徐々に有力大名との婚姻を進めだした。これを石田三成等が糾弾したが家康は相手になっていなかった。

それと、五大老は大阪に駐在して秀頼を補佐することも命ぜられていたが、家康は他の四大老（毛利・上杉・前田・宇喜多）に対し、大阪に居ても秀頼補佐は自分一人で十分であるから、他の四大老は、大阪駐在から引き揚げ、自国に帰る様勧奨し、利長も大阪に居ずらくなって、同年八月、父利家の「三年間は大阪に駐在せよ」の遺言を破らざるを得なくなり、加賀に帰国した。

家康は利長の帰国を待っていたかのように「前田利長、家康への攻撃準備」の流言を流し、徳川家自らも前田家攻撃態勢を組んだ上で前田家を詰問した。これには、石田三成一派の「徳川・前田間で戦をさせて、両者の戦力を弱らせる」目的で、勝手な流言を流していたことも一因であった。

同年九月、利長は筆頭家老の横山長知に高山右近を付けて、大阪城にいる徳川家康に事実無根であることの釈明をさせた。横山家老と右近は、利長から「今、徳川との戦はすべきでない」との内命を受けていた。右近の驚いたのは、前田家中で物静かな家老と評判の横山家老が、家康を相手に堂々の論陣を張った。九月に始まった家康

との話し合いは家康の都合で中断が多く、話し合いが進まず既に十一月も半ばとなって、家康は遂に最後の切り札として、利長の母「まつ」の江戸への人質を要求してきた。これについては流石の横山家老も即答ができるものではないので、これも堂々と自分の立場を主張して、家康に利長の返事を待つ了解を得て、横山家老と右近は早馬で加賀に戻り利長に報告した。利長が母まつに事の経緯を報告すると、まつは利長・横山家老・右近の三者での話し合いの場に出てきて

「事の成り行きは了解しました。まつでお役に立つのであれば、江戸に屋敷を持って暮らしましょう。横山家老、家康殿に承知しましたと伝えてください」

と言ってから

「今、前田家が徳川と戦ったらどうなる？　一方的に勝てる相手ではないから、加賀・能登・越中三か国の領民を戦火にさらすこととなる。領土も減らず前田家が安泰で、交渉事で戦を避けることができるのならそれを選ぶべきと思う。まつのことは心配しないでよい」

と言って三人を見まわした。利長は

「母上、有難いお言葉を頂き恐縮です。早速家康にその旨話します。有難うございます」

と言ってから、横山家老と右近に

「横山家老、右近、聞いた通りだ。これから大阪に戻って母の江戸行きについて、日程その他具体的に話してくるように。これで、前田家が戦の心配をしないで過ごすことができれば、全て母上のお陰だ」

と言い終わると同時に、利長・横山家老・右近の三人は改めてまつに

「有難うございます」

と礼を言って三者会議を終わった。

右近は久しぶりに自宅に戻って茶室に入って、前田家の素晴らしさを思い直していた。それは

「利長の母まつが、現時点の天下の形成を熟知していることから、あのような言葉が出たのであろう。利長が具体的に母親まつにお願いするまでもなく、まつは利長の考えを十分に理解して、前田家の安泰のために自分のできることを自発的に理解し、人質になることを了解した」

とその家族間のお互いの思いの素晴らしさは、何物にも代えがたい尊いものと前田家の人間関係の素晴らしさに感嘆していた。

翌日、利長に挨拶した横山家老と右近は、家康への回答を持って大阪に行った。

大阪では横山家老が「まつを人質として江戸に送る」ことを家康に話し、形の上では前田家が徳川家に届したことで、徳川・前田両家の話し合いは終わり、徳川家が「まつの江戸での居住先」が決まり次第、まつを江戸に送ることとした。

金沢城の防衛体制強化

慶長四年（一五九九）の十月、利長は横山家老と右近を招き、いよいよ徳川家康と石田三成側との東西決戦は必至の状況となってきたことを説明した。

前田家はまつの江戸・徳川への人質を約して以来、東西陣営の決戦となれば徳川方に付くことを旗色鮮明にしている。しかし、それにもかかわらず西側石田陣営から、秀吉と前田利家の古くからの極めて親密な関係を取り上げ、「今前田家があるのは秀吉のお陰」と西側に参加するよう誘いがあったが、その場で断っていた。従って東西の戦が具体化した場合、西側参陣がはっきりしている敦賀城（福井）の大谷吉継が、東側参陣で手薄になった金沢城を攻めてくる可能性がある。

そのようなことを考えた利長から右近に、金沢城の防衛体制強化について考えを聞かせよとの指示があり、三日後に再度打ち合わせることとして散会した。

三日後の打ち合わせで右近は

① 現在の城の大手門を中心とした増築工事を行い、城内から攻め手を攻撃する体制を強化することと、城を攻め手の火力から守るために、城の外壁を防火対応として「なまこ壁」を多く用いる。

② 金沢城の今の堀は城を囲むだけで防衛的には弱い。城下をも含めて深い堀で囲む惣構（そうがまえ）の設置が必要である。その為の掘削工事は、堀の幅は五間、掘った土を城側に積み重ねて土居を造り、堀の底からの城側土居の高さを五間とし、惣構全長は概算一七〇〇間。東西に分けて掘削するが、東西の接点では堀の水は浅野川に流れ出る構造とする。土居が崩れないように土居の頂に根の張る竹や松を植栽する。

と説明した後、その惣構の必要性を先の小田原戦で、小田原城が二十万の大軍で攻めてもなかなか落ちなかったのは、城下を囲む大堀にあったことを説明した。その上で城下概略図面で掘削場所を明示した。

翌日の家老会議でも横山家老からこの大手門一帯の防衛的観点からの増築と新たな惣構設置の案を説明した。それに続いて利長から東西の対立という天下風雲急な時でもあり、積雪の時期に掛かるが、敢えて十月下旬には工事に着工するよう指示し、工事総奉行に右近を任命した。

右近は横山家老の推薦に基づき、大手門一帯の増築建設工事を、城の建築を今まで手掛けている重臣の篠原一考、惣構工事を富田一機を夫々の工事責任者に指名し、翌日には具体的な打ち合わせに入った。

翌日以降、右近はそれぞれの準備現場、工事着工後は工事現場に毎日顔を出し、作業上の問題点があれば、現場の担当者と一緒に解決方法を考えて、可能なものはその場で解決し、作業の渋滞を起こさないようにしていた。

問題は降雪対策であったが、工事現場には古材で雪除けの仮天井を仮設して工事を続け、寒さ対応には焚火・炭火を増やして対応した。

全員の努力のおかげで、惣構掘削による堀と城側の土居は一月末には完成し、大手門一帯の増築も三月末には完工を見た。

この間、右近が毎日のように建築現場に出かけているので、右近邸で行っていた月四回のキリスト教説明会は、篠田伊織が前日夜間に右近の指導を受けて、例会は休むことなく継続していた。

関ヶ原の戦い

慶長五年（一六〇〇）一〇月の関ヶ原の戦いには、右近も戦奉行として二万五千の兵と共に出陣したが、前田家は加賀の小松・大聖寺寺で西軍山口玄蕃、丹羽長秀と戦い勝利を収めた程度で、関ケ原の中央には軍を進めることはなかった。関ケ原の戦いは徳川方東軍の圧勝でその日の夕刻には終わり、前田家は従来の八十三万五千石から三十六万石の加増を得て、百十九万五千石の大大名となった。

徳川家との間では、翌年春（慶長六年）には利長の後継の利常（利家の四男。利長に男子がなかったため利長は弟を養子として後掲にした）に、徳川秀忠の次女珠姫が輿入れするなど徳川家との関係は良好に推移していて、前田家は徳川家に次ぐ大大名として、対外的には何らの不安のないときを過ごしていた。

金沢での教会建設

天正十五年（一五八七）のバテレン国外追放の命令者秀吉は今は無く、徳川家康はバテレンには好意的態度で接していて、秀吉の追放命令によって長崎に集結していたバテレンは元の教会に戻り、各地の教会、信徒の活動は活性化していた。

右近が加賀に来て七年が経過し、その間、小田原への出陣での右近の挙げた輝かしい戦果、肥前名護屋で秀吉から追放を許されたこと等で、前田家内でも、また旧知の大名からも右近の立場は大幅に好転していて、なかでも前田家当主利長の右近に対する信頼は絶大なものがあった。

右近は家康もキリシタンに好意的なこの時を逃がさず、恒例の前田利長・横山家老・右近の三者会議で右近の悲願である教会建設を持ち出した。

前田利長・横山家老の賛同を得て、右近の提案通り金沢城大手門の反対側、石川門を下った処の右側の城側空地に教会を建設することとなった。ここは兼六園の正面

にもなり、右近の屋敷からも近く、また信徒が出入りするにも金沢城内に入ることなく出入りでき、教会建設場所としてはこれ以上の立地はなかった。

横山家老が建設費支出の公費負担を申し出たが、右近は「自分は二万五千石を頂いているが、その高に相当する部下もなく支出もないので、教会建設に関する費用は一切自分が支出をする。城としての公費の支出は辞退する」と申し出て了解を得た。ただ、工事の担い手は、今迄金沢城の建設等に関わった人々の中から選んで横山家老が手配し、設計・監督は提案企画者である右近が行うこととした。

教会の規模は、敷地が広いことから、京都の南蛮寺を参考に三階建てとする。専任の司祭・修道士を置きたいので、教会内にその常駐施設を設ける。加賀・越中・能登など領内全域から信徒が来ることを考え、相応の宿泊施設も設けることなども話した。利長は

「教会建設は高山右近が今迄いろんな角度から緻密に考えて組み立てていると思うので、一切は高山右近にお任せする。建物の概要設計だけは事前に見せて欲しい」

と締めくくり、横山家老も全面賛成した。建設工事に関わる責任者は、近日中に横山家老が選任して右近のところに差し向けることとした。

翌日、早くも横山家老は建設工事の責任者として富田一機を右近邸に差し向けた。富田一機は右近の建築に関する知識の新鮮さ・豊かさは惣構構築段階で承知はしていたが、実際に教会建築の細部に亘る右近の説明を聞いて驚きを新たにした。朝方来訪したにもかかわらず夕刻になっても右近との話が終らなかった。

右近は分業体制、具体的には設計図面に必要とする材料の寸法と材料間の組み立て仕様も詳細に記載して、資材置き場で図面通りに材料の寸法と組み立て用の切り込みを行い、資材を現場に運べばそこですぐ組み立てができるようにする。

これを聞いた富田一機は、最初は「建築の門外漢が机上の理屈を並べて」と言った思いで聴いていたが、右近のこれまでの高槻城、明石の船上城、京都の南蛮寺、山崎の茶室等の具体的な経験に基づく話から、いつの間にか右近の話を拝聴する立場に替わっていた。話は深夜までに及び、富田一機の工事組織を①設計部門（基礎土木と建築）、②資材調達分門、③現場での組み立て部門の三部門とすることが話し合われた。この組織作りのため、三部門のそれぞれの責任者を誰にするかは、部下をよく把握している富田一機の提案を待つこととし、特に設計部門の基本図は右近が作成して、右近と富田一機と部門責任者との打ち合わせを密にすることとした。

慶長六年（一六〇一）一月、教会堂の建設工事が着工した。

教会堂の庭になる部分に、降雪時でも作業可能な平屋建ての資材置き場と資材加工場を設け、基礎の土木工事

が終れば設計図面と照合し、不備がなければ既に切り込み加工済みの資材を建設現場に運び込んだ。富田一機の職員一同は右近の指示に最初は疑心暗鬼であったが、やっているうちに慣れてそのやり方を理解し、建築が従来の方法と比べて格段に速く進んでいることを喜んでいた。

右近は京都の南蛮寺建設に当たって資材調達を行っていたことから、調達指示もてきぱきしており、教会内でのミサ等各種行事が手際よく行えるよう内部造作も使いやすいように配慮していた。

時折、現場を見に来る前田利長も、今まででは考えられない工事の進捗状況に驚いていた。一階・二階・三階の工事では、降雪期前に三階までの基本柱の組み立てと各階の仮囲いをを行い、降雪時でも内部造作工事ができるようにを進めていた。

なんと着工から八カ月、慶長六年（一六〇一）九月に完工した。

献堂式（注 ①）は九月二十五日に、キリスト教式の祈りと聖歌の讃美の中で献堂を祝った。キリスト教会献堂式に参加した前田利長・横山家老も、建物の大きさに比して工事の速さに驚いていた。献堂式には当時神戸にいたオルガンチーノ師一人だけの出席をお願いしていた。右近はオルガンチーノ師に時機を見て金沢駐在神父と修道士の派遣をお願いした。

前田家の当主前田利長は、改めてキリシタン宣教を許可し、家臣に教会に行って右近の説教を聞くように奨め、先の献堂式に出席したオルガンチーノ師を右近と共に金沢城に招き、キリシタン宣教への協力を約束していた。

教会が完成したので、右近の自邸で行っていた一か月四回の会合を、午前中ミサ、午後に従来の会合を行うこととし、ミサは司祭の着任までは右近が行うこととした。

その他教会の地域開放として教会正面に

「どなたでも見学できます。ご自由にお入りください」

の看板を掲げ、常時二名の受付担当を配置して、武士、領民誰でも自由に見学できるように準備を整えた。

そのような状況の中で、右近は今迄右近が夢にまで見た最もしたかった仕事・・・出来るだけ多くの人を教会に招き、信徒獲得に動くことが実現できる喜びに、疲れを知らずに懸命に動いていた。

信徒獲得には、新たに信徒となった人に洗礼を授ける必要であるが、秀吉のバテレン国外追放命令以来イエズス会には新しい宣教者の来日はなく、人員は逼迫している状態であった。そのような中でもオルガンチーノ師は右近の要請により、翌慶長七年（一六〇二）一月には、右近の応援と言う形で、専任駐在ではないが司祭を一人金沢に長期に滞在させてくれ、右近と共に宣教活動をした。

注　①　献堂式とは、完成した教会建物を神に献げる式であり、一般世間の落成式に当たるキリスト教用語。

（続く）

参考文献

完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
茶の湯の心で聖書を読めば　高橋敏夫　フォレストブックス
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房
加賀百万石異聞　高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史　渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡　小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編
金沢での生活―継続する殉教―　日本カトリック司教協議会　列聖推進委員会

私の伊達政宗像を訪ねて（その五―②　最終章）

安藤　剛

その一：伊達政宗のルーツ
念西と朝宗と宗村
福島に伊達氏発祥の地を訪ねて
その二：十七代政宗の誕生
父輝宗の惨劇
二本松の粟ノ須古戦場を訪ねて
その三：小田原陣の遅参
弟小次郎の刺殺
大悲願寺の白萩文書を訪ねて
その四：政宗と秀吉と家康
海外への夢か野望か
遣欧使節支倉常長の墓を訪ねて
政宗の海外への残夢は消えず
その五：東北の関ヶ原と仙台開府と仙台城
瑞巌寺と瑞鳳殿と政宗終焉の地を訪ねて

【仙台城にかけた政宗の夢】

〈1〉武人政宗と文人政宗

六年前（二〇一五年）五月、仙台国際ハーフマラソンを走り終えた後、久方振りに仙台城を訪ねた。青葉城と呼んで親しんだ仙台城を訪れること数知れないが、古稀を過ぎての仙台城散策は、格別な新鮮さを覚える。

仙台駅から八木山経由の市内巡回バスで仙台城跡南に下車すると、外国人観光客が本丸跡に溢れていた。広場の中央に君臨する伊達政宗騎馬像に直行した。東側の急峻な断崖に立つと、眼下に東北最大の百万都市仙台の市街が広がり、遥かに太平洋が望めていた。

政宗が仙台城の縄張りを始めたのは、慶長五年九月の関ヶ原の戦いの三ヶ月後、家康が三成に勝ったとはいえ

大坂城に豊臣秀頼が健在で、翌春には家康の上杉討伐の再征が予定されている。家康から「百万石の御墨付」を与えられ、南の仙道に進攻して旧領地の奪還と会津の上杉景勝との決戦を前に、青葉山の千代城址に新城を築く政宗の思いは如何に、と想像を巡らせてみた。

眼下の広瀬川も今は青葉城恋歌に歌われる瀬音ゆかしき清流だが、当時は氾濫を繰り返す広い瀬の川で、政宗の城下町建設は広瀬川の治水から始まったといわれる。

広瀬川に幾つもの堰を築き、城下に都市用水を引いて格子状に屋敷割した城下町を設計、岩出山から武士や商人町人を移住させ、領外からも積極的に商人を誘致して戸数一万八百、人口五万二千の仙台が誕生したという。

さらに東に広がる原野に水田用水路を巡らせて新田開発を推し進め、波の荒い仙台湾に注ぐ名取川と阿武隈川を結ぶ貞山運河を開削して物資の輸送と交易に活用、さらに北上川を改修して石巻港を江戸廻米の拠点となし、殖産産業にも注力した積極的な領国経営で、実質百万石といわれた仙台藩の基礎を築いた。

本丸跡に建つ青葉城資料展示館に入ると、東帯姿の政宗の電飾画像が迎えてくれた。「遅れてきた英雄」と添え書きがあり、遺言どおり両目が描かれ、左上余白に晩年に詠んだ五言絶句が書かれていた（下絵図）。

伊達政宗画像（仙台市博物館蔵）



「馬上少年過　世平白髪多　残軀天所赦　不楽是如何」

酔余口号の題で、酒に酔った勢いで詠んだといわれるが、馬に乗って戦場を駆け巡るうち、少年時代は過ぎ去り、世の中も平和になり白髪が目立つようになった、残る老後は天も赦してくれるだろう、これから楽しまなくてどうしょう、という意味らしいが、最後の句が、楽しくないのはどうしてかという意味にも取れるという。

平和な今が物足りないと言っているように思わせてくれるところが、政宗の底知れぬ魅力である。

政宗の電飾画像に向き合い「戦国の世にＪＩＳ規格導入」と題した伊達家家臣の甲冑四領が展示されていた。

天守台の政宗騎馬像の鎧は、黒漆塗りの五枚の鉄板で構成されて「黒漆五枚胴具足」と呼ばれ、運搬も組立も容易な実用的な具足で、政宗は家臣に同じタイプの具足を作らせていたという。まさにＪＩＳ規格である。

政宗は、文禄元年の朝鮮出兵の出陣式に、この黒甲冑集団で行進した。紺地に金の日丸の幟三〇本、幟持は黒漆具足で後前に金の星あり、鉄砲一〇〇挺、弓五〇張、槍一〇〇本の足軽も同じ黒漆具足に朱塗りの太刀に金色の尖笠、馬上三〇騎は黒母衣に金の半月、馬に虎豹熊の皮を飾り黄金の太刀を帯びて、豪華絢爛な武者行列に、洛中の視者が「伊達者」と喝采を送ったのも頷ける。

慶長二〇年（一六一五年）の大坂夏の陣に、徳川方の主力として参陣、道明寺の戦いで豊臣方の後藤基次を打ち破り、更に真田幸村と激闘を繰り広げたが、大阪城天守閣蔵の「大坂夏の陣図屏風」に、黒甲冑の伊達軍と赤甲冑の真田軍との対決が描かれており、実際の戦闘もさぞ壮観だったに違いない。政宗最後の戦さである。

館内に政宗が岩出山から仙台に移転した際に千代の文字を仙台に改めた動機を詠った短歌が掲示されていた。

「入りそめて　国ゆたかなる　みぎりとや　千代とかぎらじ　せんだいのまつ」

入りそめてとは初入国の意、仙台城と仙台の町が永遠に平和に栄えるようにとの政宗の祈りが窺える、と説明書きにあったが、政宗はなぜ仙台と名付けたのだろうか。

国分氏が享徳元年（一四三二年）に居城を築城した青葉ケ崎に、奥州藤原氏が創建した大満寺があり、虚空蔵城、虚空蔵館と呼ばれていたが、境内に千躰仏を祀ることから、国分能登守が千躰城に改名したといわれる。

後に千体から千代と呼ばれるようになり、慶長六年に政宗が千代城跡に築城する際、虚空蔵堂と大満寺を広瀬川対岸の経ケ峯へ移設して、前漢の文帝が国の繁栄を願って西方に仙人達が集う宮殿「仙遊観」を建てたという故事にちなんで、政宗が「仙人の住む高殿」の意味で、千代の旧地名を仙台に改めたのだという。

仙台城と城下町を結ぶ広瀬川大橋の欄干の擬宝珠に政宗が師の虎哉和尚に作らせた銘文が刻まれていた

「仙臺橋　仙人橋下　河水千年　民安国泰　敦与堯天」

仙人が住むというこの橋の下、広瀬川の流れが永遠であるように、仙台の繁栄が末永く続き、民が安らかで国が泰平な政治を実現したい、古代中国の聖王堯の政治といずれが優れるだろうか、という意味らしい。

十八歳で伊達氏十七代当主を相続、父輝宗を犠牲に蘆名氏の会津を奪うが、小田原陣への参陣前夜に母義姫に毒殺されかけ、その原因となった弟小次郎を自ら刺殺、

小田原陣への遅参で会津と仙道の旧領を召上げられながら、秀吉との三度の危機を巧みに乗越え、数ケ月前まで奥羽で会津の上杉景勝と戦い、春には家康の再東征と対上杉決戦を控えているこの時期に、政宗が仙台築城に平和な理想郷を夢見ていたとは、俄かには信じられない。

二三才で南奥羽の覇者となり、後世に独眼竜と恐れられ、生まれてくるのが遅かったといわれる独裁者的な戦国武将のイメージ強い政宗とは全く違った、私の知らないもう一人の政宗が目の前に現れていた。

武人政宗に対比するように文人政宗の資料が展示される中、流麗な筆致の政宗自筆書状が掲示されていた。

戦国大名の多くは右筆を抱えて代筆させているが、政宗書簡の約六割が自筆、その数は一〇〇〇点を超えて筆まめ武将と評されている。次の書状の内容に惹かれた。

「こちらへお越しになったということで、お目にかかることができれば、ご満足いただけるよう歓待いたします。今日わたしがお伺いすべきところですが（貴殿も到着したばかりですので）ご休息なさるのがよいと存じ、まずは日延べいたします。何様明日あたりわたしがお伺いして、賢意を得たいと思っております」

セキレイ型公用花押の対外文書だが、署名に羽越前とあり、秀吉に羽柴姓を許された天正十九年から家康に松平姓を許された慶長十二年までの書状らしい。

秀吉の奥州仕置で初上洛してから朝鮮の役、関ヶ原、そして大坂の陣の直前という激動の波乱な時代に、まだ三〇代の血気に逸る青年武将政宗が、細やかな心配りと思いやりに溢れた、人生を達観した好々爺を思わせる書状を認めていたとは驚きである。

東北の地方区から全国区に登壇した政宗が、京と江戸を舞台に、筆まめ武将の本領を発揮して、交友関係を広げて新しい人脈作りに努めていたのであろう。

後日、仙台在住の友人杉村氏から、亡父のコレクションにあったという政宗自筆書状の写を見せてもらった。

京か大坂に住んでいた頃の茶人との交流を知る貴重な書状で、関白近衛信尹に仕えて後に政宗の家臣となる名村長吉宛てに「御帰宅の砌は、取り乱れ候事候て、残り多く候、今度は、さしたる御遊山もこれなく云々」と慌ただしく十分なもてなしもできず心残りですと書き送っていた。おもてなしの心こもった手紙を自筆で認め、関白の家臣まで自分の家臣にしてしまう、京の雅な茶人の間での政宗の人気ぶりが窺えてくる。

〈2〉本丸大広間の鳳凰絵図

仙台城の本丸は、東西一三五間、南北一四七間、広さ約二万坪、四楼の門と四基の三重櫓を結ぶ多門長屋や木柵で囲まれ、郭内に大広間・大台所・書院などの殿舎が建てられ、天守閣はなく、中心的建物が大広間だった。

柿葺き大屋根の大広間は、高さ約十七M、縁側を含めると約四三〇畳の広さで千畳敷と呼ばれ、桃山文化の粋を集めた聚楽邸方式の武家書院造り御殿であった。明治維新で大広間が破却され、残った城郭も昭和二〇年の米軍機の空襲により全て焼失してしまった。

本丸大広間の礎石だけが並ぶ本丸跡の入口横に建つ仙台城見聞館に入ると、大広間の藩主が座する「上段の間」の床の間に描かれた鳳凰の絵図を、実寸大に復元した障壁画が、金銀彩色豊かに描かれていた（下図）。

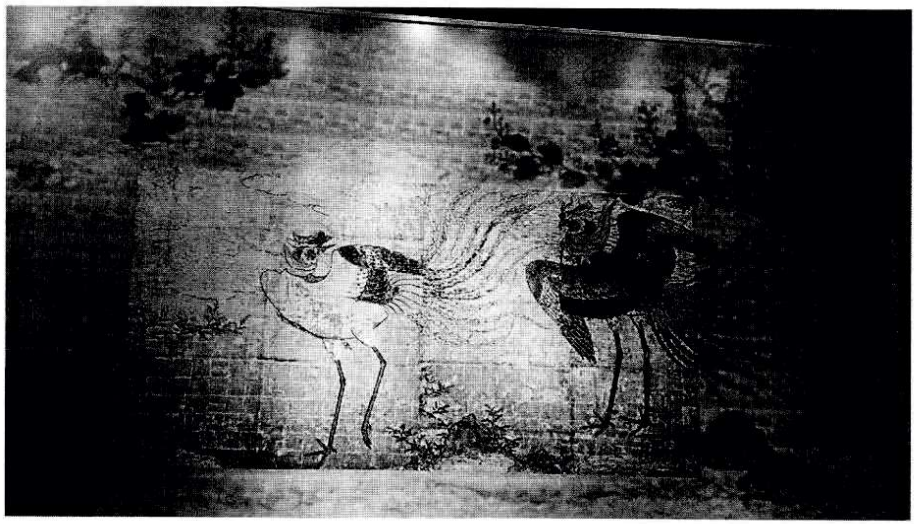
政宗に京から迎えられて仙台藩最初の御用絵師となった狩野左京（佐久間修理）の制作で、桃山期狩野派特有の濃絵は、華麗な政宗好みの世界なのだろう。

明治に入り本丸大広間が取り壊された際に、上段の間の鳳凰の絵図は、つがいの鳳凰の部分だけが切り取られて、四曲一隻の屏風に仕立てられたという。

見聞館の障壁画には、屏風に仕立てる際に剥がされて逸失していた周りの桐の大樹の部分も復元して、その枝の下に寄り添うツガイの鳳凰が復元されていた。

鳳凰は古来中国で、麒麟・亀・龍と共に四瑞として尊ばれた想像上の瑞鳥で、その姿は種々の動物の特徴が組み合わされた姿に表され、五色絢爛で梧桐に宿り、竹の実をついばみ、醴泉を飲み、永遠の時を生き、聖徳の天子の兆しとして現れて、雌雄の対は愛情を現すという。

仙台城大広間「上段の間再現」　鳳凰障壁画復元（仙台城見聞館）



中国画の伝統的画題の一つだが、古代中国の思想が日本に移入され、和様化されて、日本独自の鳳凰図が、吉祥の表現として定着するようになったのだという。

鳳凰の障壁画を前にすると、京都二条城二の丸御殿の大広間に描かれていた巨大な老松が浮かんできた。後に将軍慶喜が諸侯を前に大政奉還する舞台となった、あの他を威圧するような襖絵とは、異次元の世界である。

二条城二の丸御殿の完成は、寛永三年（一六二六年）で、既に幕府の威光が盤石な時代だが、仙台城の鳳凰絵図はそれより十六年も前の慶長十五年、未だ大坂城に豊臣秀頼が健在で、徳川幕府に抵抗する戦乱の炎燻る最中にあって、政宗が仙台の地に鳳凰の住む平和な世界を開こうとしていたとは意外だった。

それにしてもこの鳳凰が霊鳥らしくないのはどうしてなのだろう。実在しない想像上の動物で、描く絵師によって違うのは当然だが、金閣寺や平等院の屋上に聳え立つ凛とした神聖な鳳凰とは違い、どこか仲睦まじく連れだって野原を散歩するつがいの温かさが伝わってくる。振り向いた牝は牡に何を囁き掛けているのだろうか。

私には、幼く片目を失明して醜い容貌への劣等感に苛まれ、また父や母や弟そして妻と決して良好な家族関係だったとは言えなかった政宗の、屈折した複雑な心情の裏返しが投影されているように思えてならない。

群雄割拠する四面楚歌の伊達家の命運を若くして託され、拉致された父輝宗を敵将もろとも銃撃させ、弟を溺愛する母義姫に疎まれて毒殺されかけ、無実の弟小次郎を自ら刺殺、実家田村家からの正室愛姫付き侍女たちを政宗暗殺の嫌疑で死罪にするなど、度重なる家族の悲劇を乗り越えて、二十二歳にして奥羽を制する大大名となり、戦国の乱世を暴れ回り独眼竜の異名を取った猛々しいイメージが、この大広間の空間には全くない。

仙台城の資料展示館で出会った政宗は、未だ戦乱の渦中にある三十四歳ながら、新天地の千代を仙台に改名させ、仲睦まじいつがいの鳳凰を描かせた平和主義者であり、理想主義者であり、桃山文化に造詣深い教養人であり、文人、治世の人、である。

政宗画像にあった酔余口号の「不楽是如何」は、平和な時代を迎えて花鳥風月を愛し狩猟を楽しみ余生をのんびり過ごしたいという思いを詠ったといわれるが、鳳凰の障壁画の前にしていると、仙台城を造営する頃に既に政宗は達観した老成の境地にあったようにみえてくる。

屏風に仕立てられた「鳳凰図」の現物について、瑞巌寺に問い合わせると、宝物館に保管されており、常時公開はされていないとのことだったが、後日、東北歴史博物館に展示されるとメールで連絡をいただいた。

この機会を逸する訳にはいかない。昨年一〇月、東北新幹線の仙台駅で乗換え、東北本線国府多賀城駅に下車、駅前の東北歴史博物館は、モダンで大規模な博物館である。旧石器から縄文、古墳時代、律令、中世、近世、近世へと、発掘資料から古文書資料、複製資料やパネル資料など東北の歴史が広範囲に網羅されて、興味は尽きなかったが、目的の「鳳凰図屏風」に直行した。

高さ一間、幅二間程の四曲一隻屏風である。明治維新に取り壊される仙台城本丸大広間の障壁画から、ツガイの鳳凰の部分だけを切り取り、屏風に仕立てあげたもので、金箔地は黄土色に色褪せていたが、むしろ光沢のない色合いが純正な本物感を現出していた。

仙台城見聞館の煌めくような復元障壁画では感じなかった、鳳凰の鬼気迫る鋭い眼光に射竦められていた。鷹のような眼光、七面鳥の首のたるみのようなグロテスクな頸、緑青色の背中と頑強な骨格の肩羽と雨覆は鱗のように鮮やかで、シダの葉のような尾羽一〇本余りを吹き流しのように靡かせる姿は、どこかアンバランスで天を飛翔する美麗な聖鳥らしさが感じられない。

屏風の右上隅に描かれた葉は確かに桐の葉のようで、鳳凰は桐の木にのみ巣を作るといわれており、鳳凰には違いないのだろうが、定型化された神聖な鳳凰とは違う、生々しい野鳥のような鳳凰に出会えた錯覚に捉われた。

「鳳凰図屏風」の左隣に並んで展示されていた瑞巌寺本堂障壁画の「松孔雀図」に描かれている孔雀は、鶴のような長い首に、色鮮やかな日玉模様の長い尾羽を束ねた凛とした優美な姿態で描かれており、不細工な鳳凰を描いた同じ狩野佐京の作品とはとても思えない。

鳳凰の絵図は、孔雀の障壁画が完成した元和八年（一六二二年）の十二年前である。未だ大坂の陣を控えた混沌とした乱世の最中にあって、仙台と改名して平和を希求する困惑と緊張感が政宗にあったのかもしれない。

実は、東北歴史博物館まで足を運んで鳳凰図屏風の現物を鑑賞してどうしても確かめたいことがあった。ネットで鳳凰の絵図を検索して見つけた、日光東照宮拝殿の将軍着座の間の正面額羽目に寄木細工で彫刻された鳳凰が、仙台城大広間の鳳凰と酷似していたからである。

将軍着座の間の鳳凰の写真を片手に、目の前の鳳凰の各部位を見比べると、確かによく似ていた。二つのトサカと目付きと嘴の形状、グロテスクな頸回りとがっしりした骨格の翼角と翼羽の形状、右上に桐の葉を配した構図は、まるで模写したようである。（次頁の絵図）

日光東照宮の絵画装飾を担当したのは、狩野派絵師集団だが、将軍着座の間の鳳凰は、日光東照宮の各所に狩野派絵師が描いている鳳凰の優美な姿とは、明らかに異質で無骨な作風で、霊鳥の鳳凰らしくもない。

私の想像は広がっていた。将軍着座の間の鳳凰の作者はもしかしたら仙台城の鳳凰を描いた狩野佐京ではないだろうかと。日光東照宮の造替は寛永十三年（一六三六年）で、仙台城大広間の完成から二六年後、狩野左京の没年は一六五八年、狩野左京の可能性は十分有り得る。

政宗は、仙台城本丸の大広間に描かせた鳳凰の絵図を若き将軍家光に事あるごとに自慢気に語っていたのではないだろうか。鳳凰が聖君の治政に現れる由来を語り、日光東照宮の造替を機に、拝殿の将軍着座の間に相応しい絵模様として鳳凰絵図を推奨していたかもしれない。

政宗は、秀忠が家康の遺言に従い廟所を久能山から日光に遷して簡素な霊廟を造営した元和三年の翌年に南蛮鉄燈籠を奉納していた。ポルトガルから鉄を運んで鋳造させたといわれるが、火袋の窓に支倉常長の家紋である逆卍が明けられており、政宗は家康と始めた遣欧使節派遣の偉業を秀忠に誇らしげに語っていたに違いない。

その政宗が、祖父家康を崇敬する家光が日光東照宮を大造替する際にも、秀忠の時の南蛮鉄燈籠のように、東照宮拝殿に鳳凰絵図を奉納すべく、自分のお抱え絵師の狩野左京を日光に派遣したのではないだろうか。はじめ佐久間修理を名乗っていたが、その功績で狩野派の絵師と認められ、狩野左京の名を許されたのかもしれない。

日光東照宮の絵画装飾を企画構成していたのは、幕府御用絵師の狩野探幽だったが、伊達の親父殿と呼んで慕い崇敬していた家光は、政宗の推薦する絵師を断れなかったのかもしれない。

仙台城大広間 鳳凰図屏風
松島町蔵



日光東照宮拝殿 将軍着座の間
額羽目の鳳凰



政宗は、寛永十三年にその制定に尽力した寛永武家諸法度で制度化された参勤交代を自ら率先垂範すべく、病身に鞭打って第一回参勤交代を強行したが、その途中に完成間もない日光東照宮へ立ち寄り、大神君家康に詣でて、将軍着座の間に完成された鳳凰の絵にどんな思いで向き合っていただろう。政宗はその一ヶ月後、江戸藩邸で七〇歳の生涯を閉じた。

〈3〉奥州王の伊達政宗

仙台城見聞館を退出、本丸跡に整然と並ぶ礎石に、大屋根の本丸御殿の在りし姿を思い浮かべながら、本丸東側の広瀬川に面した断崖に向かった。高さ九〇メートル程の断崖は、浸食崩壊で築造時より十七メートル後退してしまったという。崖淵に懸造り書院跡の看板があり、京都の清水寺舞台を彷彿させる崖にせり出した数寄屋風書院が描かれていた。まさに雲上の楼閣である。

伊達治家記録の慶長十四年七月二四日の条に「政宗、御城懸造りの御座敷へ御出、総御鉄砲組のつるへ仰付られ御覧あり」とあり、眼下の広瀬川対岸で二キロ半に亘って足軽が次々に鉄砲を撃ち放つ、つるべ撃ちの光景はさぞ壮観だったろう。懸造りは、仙台城に天守閣を建てなかった政宗の、この地を仙台と命名して仙人の集う理想郷を演出しようとした象徴だったに違いない。

政宗の仙台城に描いた理想郷は、奥州藤原氏の平泉に築いた仏国土の世界に通じるものだったかもしれない。

平安時代後期に、京の中央政権による収奪の支配から解放された独立国家の建設を目指し、多くの命を奪った血生臭い戦いを終焉させ、平泉に中尊寺を中心に仏教寺院を建立して平和な極楽浄土の再現を願った奥州藤原氏初代清衡に倣って、政宗は奥州の戦乱の終焉と平和の招来を、仙台城の建設に掛けていたのではないだろうか。

奥州藤原三代の夢の跡の平泉が、秀吉の奥州仕置で政宗の所領になると、かつての平泉文化の遺構に触れた政宗は、寛永九年に中尊寺に客殿を建立、金色堂を修復させて、藤原三代の棺を開いたといわれる。

伊達氏が、奥州藤原氏と同じ藤原氏北家の流れとする伝承が、十五世紀半ば頃には広く認められており、伊達氏が平泉政権の奥州支配を継承する正統性を主張して、平安時代から五百年の時空を超えて、戦乱から平和を希求した藤原清衡の再来を自任していたのかもしれない。

支倉常長の慶長遣欧使節が持参したスペイン国王宛て和文の政宗書簡に「奥州之屋形」とあり、スペインとローマ側の資料に「奥州（BojuVoxu）の王」とあるが、屋形と王は同意語で、政宗は、外国に対して奥州王を公言していたのである。

慶長十八年（一六一三年）に支倉常長を大使にした遣欧使節団の通訳と折衝役としてマドリードからローマまで随伴したイタリア人アマーティが著述した「伊達政宗遣欧使節記」に、奥州王に関わる記述がある。

第一章「奥州国の広大さ」で「奥州王国は日本と称する本島の四分の一以上を占め、島の端、東北部にある」とあり、平安時代後期に奥州藤原氏が支配していた青森から白河までの広大な領域をイメージしている。

第二章「奥州国王の家柄」で「公家最高位の近衛殿の一族の秀衡が、乱立していた奥州王国の領主となり、平和的に統治したが、二二年が過ぎた頃、謀反の首謀者を殺害した頼朝に内裏は皇帝の称号を与えたが、秀衡が自分の子らに牛若殿と好誼を保つよう言い残して亡くなると、二人の子が牛若殿を殺害して、頼朝は口実をもうけて彼らを殺害してしまう。頼朝が亡くなると、近衛殿が一族の山陰中将に奥州王国を引き継がせるが、中将の死で王国は分裂、三〇〇年を経てこの家系の領主が伊達氏を名乗り王国を回復させた」とあり、平泉政権、源平合戦、鎌倉幕府の成立、奥州合戦と平泉滅亡、藤原氏から伊達氏に続く歴史がほぼ正確に語られている。

ローマ教皇に報告されることを意識してソテロがアマーティに語り聞かせたものだが、その内容はソテロが出国前に政宗からレクチャーされていたに違いない。

伊達氏が、高貴で古い歴史ある公家最高位の藤原氏の家系であり、政宗が広大な東北六県を領する奥州王たる秀衡からの正統な継承者であると、政宗自身が口伝していたことを、我々はこの使節記で知ることが出来る。

〈4〉二つの伊達政宗像

城郭がなく礎石だけの天守台に聳え立つ政宗騎馬像は、仙台城の唯一のシンボルである。

私の子供の頃の政宗像は、白いコンクリート製の平服立像だった。戦前に政宗没後三百年祭を記念して騎馬銅像が設置されたが、太平洋戦争下の金属類回収令で供出され、戦後の昭和二八年に小野田セメントの協力で柳原義達制作の平服姿の政宗像が立てられた。

柳原義達は、明治四三年に神戸に生れ法隆寺の仏像に心打たれて日本画家から彫刻家に転向、東京美術学校を卒業した年に二・二六事件が勃発、日本が戦争に向かって突き進む中、放心的空間を彷徨っていたといわれる。

学徒動員で出征した実弟が戦死、召集令状を受けて出発する日に終戦を迎えた義達は、戦争前後の体験によって、自嘲と空虚、割り切れぬ屈辱感、そして戦争の無意味さの自覚に生きて、戦争に対するアイロニーとレジスタンスの精神が、自己への芸術生活への支柱になっていったと語っている。政宗の平服立像には、義達の戦争への反省と平和への希求が込められていたに違いない。

その後、高度経済成長期に市民から騎馬像復活の要望が上がり、槻木小学校の倉庫に残されていた石膏原型から騎馬銅像が復元され、昭和三九年の東京オリンピック前日に除幕されて、平服立像は岩出山城址に移された。

初代の騎馬像を製作した小室達は、明治三二年に宮城県柴田郡槻木村に生まれ、旧制白石中学から東京美術学校彫刻科に進学、首席で卒業、帝展に出品して翌年には無鑑査となる。昭和八年に宮城県青年団から依頼を受けて仙台城に入城する政宗の騎馬姿を制作したという。

仙台城本丸に建てられた昭和一〇年は、満州事変が勃発して中国大陸への進出に国論が燃えていた時代であり、勇猛な騎馬武者姿は軍国日本の戦意高揚に一役買っていたのだろう。そして戦後の復興期に制作された二代目政宗像は、平和日本の建設に向けた祈りが込められ、勇ましい騎馬姿ではなく平服姿が求められていたのだろう。

政宗が仙台城築城に掛けた平和への希求を知ってみると、撤去されてしまった平服姿の立像の方こそ、ここに立つに相応しい政宗像だったのかもしれない。

政宗は、戦後七六年を迎える平和日本の現代に立つ自分の騎馬武者姿をどう思っているのだろうか。仙台城を訪れて政宗の勇壮な騎馬像にカメラを向ける観光客の中に、政宗が仙台開府に当たって平和を希求していたと知る観光客が如何ほどいるだろう。

岩出山城址の伊達政宗平服立像
(Wikipediaより)



仙台城本丸跡の伊達政宗騎馬像
（２０１９年1月２６日撮影）



【松島の瑞巌寺を訪ねて】

平成三〇年九月、平成の大修理を終えた松島瑞巌寺を訪ねた。七年半前の東日本大震災では、押し寄せる大津波が松島湾内の島々による複雑な地形で減衰され、海岸沿いの商店街の津波被害は軽減されたが、内陸の瑞巌寺の山門の所で約一メートルの浸水があったという。

鬱蒼と林立して厳かな雰囲気を作っていた約二〇〇メートルの参道の杉並木は、津波の塩害によって歴史を伝える太い幹が立ち枯れして約六〇〇本が伐採され、残る杉木立も枯枝おろしされて無残な姿を晒していたが、参道に新しく植えられた若木の緑が一際鮮やかである。

瑞巌寺は、平安初期に慈覚大師の開創と伝えられ、鎌倉時代に臨済宗の禅寺として幕府の庇護の下に栄えたが、戦国時代に衰退した。江戸時代初めに伊達政宗の仙台開府に伴い、伊達家の菩提寺として慶長九年（一六〇四年）から五年の歳月をかけて現在の大伽藍が完成した。

政宗は、浄土の地といわれる紀州熊野から用材を求め、京都と根来から名工を招いて腕を競わせ、巨大な甍を連ねる本堂と庫裡の豪壮さと豪華絢爛な彫刻と彩色は、桃山建築と美術の精華であり、共に国宝に指定され、本堂を飾る一六一面の障壁画は、国重文に指定されている。

一〇年かけた「平成の大修理」が完了して六月に落慶法要を迎えたばかりで、国宝の本堂が公開されていた。

本堂廊下の欄間彫刻や室中への入口を画す唐戸は、創建当時のままで彩色が微かに残っていたが、本堂の襖群は、昭和六〇年からの復元模写制作事業により鮮やかな彩色で復元されていた。

本堂の中心の室中「孔雀の間」は、法要が営まれる部屋で、襖絵には、金箔地に松と楓の下に羽根を拡げる雄と連れ添う雌の孔雀が描かれ、仙台城大広間の鳳凰を彷彿させてくれる。孔雀は、古来、害虫や毒虫を食べる喩えから、身辺の災いを駆逐して、心の迷いを食べ尽すともいわれ、欄間に彫刻された雲に舞う天人と共に、この部屋が此の世の浄土であることを表しているという。

正面左右の襖絵に冬・春・秋の世界が描かれ、絵師は仙台藩お抱えの佐久間修理（狩野左京）である。当時主流だった狩野派の美術を京都で学んで伊達家大坂屋敷の絵仕事をしていたが、政宗の仙台開府にともなう絵画担当に登用されて来仙、仙台城本丸、大崎八幡宮、瑞巌寺など主要な襖絵を描いたといわれる。

奥の仏間に政宗以下歴代藩主の位牌が安置されていた。仏間の政宗公位牌の戒名「瑞巌寺殿前黄門貞山利公大居士神儀」は、周知されている「瑞巌寺殿貞山禅利大居士」と少し違っており、不思議に思っていた。

後日、瑞巌寺のHPに問い合わせすると、宝物課主任学芸員堀野真澄師よりご丁寧なメールをいただいた。

「違いが生じたのは、尊敬する人物の法諱（僧侶の実名）の上の字を落として呼ぶという禅宗の慣習によるもので、「貞山禅利」の「禅」字を落とすと「貞山利」となるが、大名ですので呼び捨てにするわけにはいかず「公」という尊称をつけて奉ったものと推察されます。貞山禅利も貞山利公も同じです。

位牌には生前の官位が刻されることが多くあり、禅宗では生前の官職を中国様式に改めて刻するという習わしがあります。政宗公は従三位にあり、これは中納言、黄門の位に該当することから「前黄門」と刻されています。

政宗公御霊屋の仙台瑞鳳寺に祀られている位牌に「瑞鳳寺殿前黄門貞山利公大居士神儀」と刻されているが、位牌を祀る菩提寺と、遺体を祀る御霊屋が別な場合は、各々の寺院が戒名に刻されることもあります」という。

三年前に伏見の伊達上屋敷跡に建つ海宝寺で拝ませて頂いた政宗公の位牌に「當山前地主仙臺太守瑞鳳寺殿故中納言貞山禅利大居士神位」とあったが納得である。

隣の「文王の間」は、正面に中国歴史上理想の国家社会とされた周の建国者文王が造営した周都洛陽城の姿が金雲の間に覗かせ、右側の襖に従者達を引き連れた文王と太公望呂尚が描かれていた（下図：画像提供瑞巌寺）。



「文王の間」は伊達家一門の詰めの間で、結束して宗家をよく補佐して伊達家統治下の世が平和で繁栄したものになるよう知らしめる願いが込められているという。

金箔が一面に貼られた襖に、鮮やかな多彩色で文王や従者たちの、それぞれの表情や仕草や衣服の文様が精妙な筆使いで描かれており、故事に詳しい長谷川等胤が招請され担当したという。等胤は、京都の智積院で拝観した国宝「楓図」を描いた長谷川等伯の高弟である。

描かれる呂尚は、初め殷王朝の紂王に仕えていたが、堕落した無道な暴君に反発して出奔、いつか紂王を倒すため誰かが自分を求めてくるものと、釣り糸を垂れて待っていたという。釣り人の呂尚を見つけ出した文王は、呂尚を軍使に迎え、殷の紂王を滅ぼして周王朝を開いた。

呂尚の兵書「六韜」に、天下を帰服させるには天下を君主一人の物とせずこれを万民と分かち合うこと、君主が愚かであれば政治は乱れて国を危うくする、国を治めるに最も大切なのは民を愛することに尽きる、とあり、文王は、呂尚の語る仁と徳と義と道に則った政治を行ったという。千代を仙台と改名させ、大広間に鳳凰を描かせた政宗は、文王の仁政に憧れていたのだろう。

「文王の間」の奥隣の「上段の間」は、藩主の部屋で特徴的な火頭窓の床の間と違い棚を備えた書院である。床の間に描かれた群青の池と老梅の絵図は、文王の間と同じ長谷川等胤が描いたといわれているが、翌十一月に京都に臨済宗妙心寺派大本山の妙心寺と雲居禅師の幡桃院を訪ねた際に立ち寄った特別展示中の聖護院門跡で、離れの書院の「お梅の間」に、この瑞巌寺上段の間の絵図によく似た構図の障壁画が描かれていた。

聖護院の書院は、御水尾天皇（在位一六一一～二九年）が女院のために建てた御殿で、延宝三年（一六七五年）に聖護院が京都の大火で焼失、翌年に烏丸上立売から当地へ移転再建された際に、御所から移築されたという。

女院とは、皇后や内親王に宣下された称号、御水尾天皇の皇后になった秀忠の娘徳川和子（東福門院）の書院だったとすると、政宗が和子の入内に先立ち、元和五年（一六一九年）に上洛しており、和子用に建築中の女院御殿で絵作業する長谷川等胤を見染めて、松島に造営中の瑞巌寺の絵師に引抜いたのかもしれない。聖護院では狩野派絵師の作と言っていたが、瑞巌寺本堂の障壁画の完成は元和六年から八年、時期が符合している。

上段の間の左側の一段高い「上々段の間」は、帝鑑の間と呼ばれ、天皇や皇族の御座所として、仙台城の大広間と同じく設営されたという。明治九年六月に明治天皇が東北巡幸の途次一夜をここで過ごされており、泉下の政宗も念願が叶って喜ばれていることだろう。

明治天皇東北巡幸の九年前に起きた戊辰戦争で、仙台藩は朝敵と見做された会津藩と庄内藩の赦免を嘆願する目的で結成した奥羽越列藩同盟の盟主となり、薩長中心の新政府に会津庄内両藩の恭順嘆願が拒絶されると、やむなく軍事同盟化して新政府軍と戦ったが、朝敵となった伊達家の菩提寺である瑞巌寺の一室で、夜を明かした若き明治天皇の心境は如何ばかりだったろう。

本堂内の襖絵を一回りしながら、一昨年秋に訪ねた京都二条城で鑑賞してきた襖絵との違いに思い馳せていた。

関ヶ原の戦いで勝利した家康が、将軍の上洛時の宿泊のために建てた二条城の二の丸御殿は、寛永三年（一六二六年）に完成されたが、虎と豹が描かれた襖絵に囲まれた遠侍の間、何枚もの襖に跨って描かれた巨大な松に囲まれた大広間は、将軍家の権威と繁栄を威丈高に叫び諸侯を平伏させて威圧する場として造営されていた。

しかしその十七年も前の、未だ戦乱収まらない慶長十四年に竣工した政宗の瑞巌寺に描かれた世界は、諸侯や部下を威圧する世界ではなく、枯山水の幽玄な世界でも死後の極楽浄土の世界でもない、聖人君主の治世の実現を希求した政宗自身の現世の平和な世界であった。

明治維新で破却されて今は礎石だけを残す仙台城の本丸に鳳凰を描かせた政宗の壮大な夢を、瑞巌寺の障壁画に見ることができることは幸いである。

【経ケ峯にホトトギスを求めて】

仙台国際マラソン大会を走り、仙台城の天守台を散策した後、高さ十七mの北壁石垣を見上げながら登城路を一気に駆け下り、大手門前でタクシーを拾い、仙台城の東側を蛇行する広瀬川河岸に半島状に突き出た対岸の経ケ峯の頂に造営された政宗の霊廟瑞鳳殿に直行した。

政宗が七〇歳の天命を全うする前年の寛永十二年（一六三五年）七月、江戸から帰国した政宗は、母義姫の十三回忌に当り菩提を弔うため、覚範寺清岳宗拙和尚を開山に迎えて臨済宗少林山保春院を創建、翌十三年四月十八日に保春院の落慶式を終えたあと、ホトトギスの初音を聞きたいと経ケ峯に立ち寄り「死後この辺りに墓所を定めるように」と国老の奥山大学常良に命じたという。

隻眼の政宗は、片目の万海上人の生れ替りといわれ、万海上人の墓がある経ケ峯に、政宗に生まれ替わった万海上人が、再び自分の墓に入る、と言ったのだろう。

政宗は体調を崩していたが、その二日後に江戸へ出立、江戸に着いた翌五月の二四日に江戸上屋敷で死去した。死因は食道癌と癌性腹膜炎といわれる。

遺命によりご遺体は、束帯姿で木柩に納めて駕籠に乗せられ、生前そのままの大名行列で仙台に戻り、葬儀は覚範寺で清岳宗拙和尚導師のもと挙行された。

政宗公のご遺体は、遺言に従い、経ケ峰に駕籠に乗った状態で墓室に埋葬され、翌十四年に二代藩主忠宗が霊廟を造営して瑞鳳殿と命名、香華寺として瑞鳳寺が創建され、清岳和尚が開山として住職を務められた。

瑞鳳寺前でタクシーを降り、経ケ峯に向けた参道を上ったが、両側の杉並木は、霊廟造営時に植えられ、樹高が二五mに達して経ケ峰全体で四七本、荘厳な霊域を醸し出していた。仙台藩の石高と同じ数だという六二段の石段を踏み締めながら、シンとした静寂の中に嬉々と飛び交う小鳥の囀りに耳を澄ませ、特徴的なホトトギスの鳴き声を求めてみた。

政宗は卯月に聞けるというホトトギスの初音を求めて経ケ峯にやって来たが、初音は聞けなかったという。翌日「鳴かずとも何か恨みん郭公時も未来の夕暮れの空」と詠んでその翌日、江戸に向けて旅発った。残り少ない命を知ったかのような淋しい意味深な歌である。

ホトトギスの漢字は、時鳥・霍公鳥・郭公と数多くあり、大伴家持が万葉集に「あしひきの山も近きを霍公鳥月立つまでに何か来鳴かぬ」と詠んで、毎年同じ時期に渡来して鳴くことから時を告げる鳥といわれ、卯月（旧暦四月）に夏の始まりを告げる朝一番の初音を聞くことが風流なこととされていたという。

花鳥風月を愛する風雅の人として政宗はホトトギスの初音が聞きたかっただけなのだろうか。病躯を押してまで聴きに来た特別な思いがあったのではないだろうか。

佐々木信綱作詞の唱歌「夏は来ぬ」に「卯の花の匂う垣根に時鳥早も来鳴きて忍び音漏らす夏は来ぬ」と歌われ、ホトトギスが夏を迎えて初めて鳴く声「初音」を声を潜めて鳴くことから「忍び音」ともいわれたという。

和泉式部日記に「時鳥世に隠れたる忍び音をいつかは聞かん今日も過ぎなば」と、忍ぶ恋の相手を時鳥に見立て、今日（四月三〇日）が過ぎてしまうと貴方の人目を忍ぶ姿が見られなくなる、明日に公然と会えても意味はない、今宵のうちに会いに来て欲しい、と詠っている。

母義姫の十三回忌法要と菩提寺保春院の落慶を無事に終え、経ケ峯に時鳥の初音を聴きにきた政宗は、かつて確執のあった母をホトトギスに見立て、二日後には江戸に発つ、老いて病んでいる自分はもう二度と仙台には帰れない、今日いま、あなた（母）の忍び音をぜひ聴きたい、和泉式部の歌心で呼び掛けていたのかもしれない。

天正十八年（一五九〇年）四月五日、小田原参陣の前夜に母による政宗毒殺未遂があった。弟を擁立して自分を毒殺しようとした母に手を下すわけにはいかない、お前の存在が悪いと、政宗は弟小次郎を自らの手で刺殺したという。居たたまれなくなった母義姫は、実家の山形最上家に出奔したが、三〇年後に最上家が内紛で改易されると、行き場の無くなった母を政宗は仙台に引き取った。その翌年に仙台で死去、七六歳だった。

自分を憎み殺そうとしたといわれる母を、なお思慕し続ける政宗の苦悩と心の優しさが見えてくる。政宗が仙台に下向するたびに経ケ峯に聴きに来ていたのは、亡き母の「忍び音」だったのではないだろうか。

ホトトギスは、自分では子育てせず、ウグイスの巣に托卵する習性があり、やむなく託卵して孵化した我が子を求めて鳴くホトトギスと、捨てた我が子に懺悔する母を重ね合わせていたのだろうか。

ホトトギスは魂迎鳥の別名を持ち、冥土を往き来する鳥ともいわれる。病魔に侵されて死期を感じていた政宗が、哀れな亡き母を思慕する思いを魂迎鳥のホトトギスに託そうとしていたのかもしれない。

【政宗の霊廟：瑞鳳殿を訪ねて】

ホトトギスの鳴き声を求めながら、杉並木の参道の石段を上り詰めると、瑞鳳殿を囲う豪華な飾り彫刻の涅槃門が森の中に現れた。涅槃門の横からかなり急な石段を登ると、両側に家臣が一周忌に奉納した九基の石燈籠が並んでいた。当初十五基あったが、瑞鳳殿が焼失した昭和二〇年の空襲で六基が破壊紛失したという。

黒漆塗りの唐風造り拝殿を潜ると、黒と赤を基調に金と漆を多用した本殿が、薄暗い森の中に眩いばかりである。正面中央の桟唐戸に伊達家家紋の竹に雀と九曜文が金細工の透かし彫りで、正面左右の花頭窓に平和を告げるツガイの鳳凰が、周囲に桐が彫刻されていた。

宝形造の軒下に極彩色の彫刻が施され、四面の欄間に向かい蝶のデザイン模様が帯状に描かれ、その下に楽器を奏でる十二人の天女が瑞雲に飛翔していた。

瑞鳳殿は、桃山様式の建築で、昭和六年に国宝に指定されたが、昭和二〇年七月の仙台空襲で焼失した。昭和四九年に瑞鳳殿跡の発掘調査が行われ、政宗の遺骨や副葬品が出土、昭和五四年に焼失以前の瑞鳳殿を範に色褪せた古色仕上げで再建された。

平成十三年に仙台開府四百年を記念して大改修工事が行われ、柱に彫刻獅子頭を、屋根に竜頭瓦を復元、極彩色も再現して創建当時の姿が蘇ったという。

瑞鳳殿本殿の扉は閉ざされ、衣冠束帯の政宗公の木造座像を安置する宮殿形の豪華絢爛な装飾の厨子を拝することは出来なかったが、観光客が誰一人いない静けさの中で瑞鳳殿に眠る政宗に合掌した。

隣接する瑞鳳殿資料館に入ると、空襲で焼失した霊屋が再建される際に行われた発掘調査の模様がビデオ放映されていた。約三四〇年を経て開かれた政宗の墓室から

完全な遺骨と数多くの副葬品が発見され、調査終了後に遺骨と副葬品は再び墓室に収められたという。

墓室は、凝灰岩の切石三二個で造られた石室に、政宗の遺体を容れた小判形座棺を載せた葬式用素木の駕籠が収められ、棺桶には防腐剤として牡蠣灰の石灰が詰められて、遺骨の保存は良好だったようである。

資料館には頭骨や副葬品のレプリカが展示され、鉄黒漆五枚胴具足や金梨子地桐葵紋蒔絵糸巻太刀のほか文人政宗を彷彿させる筆や墨や硯の文房具、生前愛用していた黒漆絵箱類や蒔絵香合、継げば七〇㎝になる煙管、携帯用の日時計兼磁石に政宗の息遣いが伝わってくる。

特にヨーロッパからの伝来品と思われる金製ブローチ、銀製服飾品、鉛筆、筆入のガラス板は、来仙したスペイン大使ビスカイノの贈り物であろうか、遣欧使節支倉常長の土産品であろうか。政宗が七〇歳に達してなおヨーロッパ文化に愛着を示していたとは感動ものである。

金製ブローチが禁制のキリシタンと誤解されるロザリオだとしたら、キリシタンといわれる長女五郎八姫の愛用品で、遣欧使節派遣という父政宗の遠大な夢の証として、旅立つ父の柩に納めてあげたのかもしれない。

発掘された政宗の頭骨を元に復元された政宗の容貌像が展示されていたが、長頭型で面長、鼻筋が高く現代的な凛々しく臨場感がある。若くして伊達家当主となり、南奥羽を制圧した波瀾の人生を送った政宗に黙礼した。

幼少時に疱瘡で片眼を失明して映画やテレビに見る政宗は、刀鍔眼帯姿の勇ましい独眼竜政宗だが、頭骨から復元された容貌像には両眼が入れられていた。

瑞鳳殿に安置されている政宗公の木造坐像も、天守台に建つ騎馬像も松島瑞巌寺の甲冑像も仙台市博物館所蔵の肖像画も、両眼が入れられており、政宗は後年、自分の肖像を描かせる時には、必ず両眼を入れさせるよう遺言までしたといわれている。

片眼の醜い顔立ちが母義姫に忌み嫌われた理由であろうか、母の溺愛する弟小次郎を殺害してしまう政宗には終生コンプレックスだったのだろう。そのコンプレックスがあったればこそ、文武両道に秀でた政宗に自分を成長させて行けたのかもしれない。

政宗の頭蓋骨の複製を前に、つい眼窩に視線が行ってしまう。失明した右眼窩は綺麗な円形だが、外傷らしき痕跡はなく、左眼窩の方が気持ち縦長に大きくみえた。

幼く隻眼となった政宗が左眼を大きく見開いて、成長と共に左眼窩が大きくなったのだろうか。対面していると睨み付けられているような威圧感を抱いてしまう。

政宗の失明は、五歳の時の疱瘡によるといわれているが、政宗が木の枝で眼玉をえぐり掌の上にのせて母に申

し出たとか、失明した醜い眼玉を小姓の片倉小十郎に短刀でえぐらせたという逸話があるが、いずれも後世のカリスマ独眼竜政宗誕生の寓話なのだろう。

瑞鳳殿資料館を出て、更に森の奥に進むと、二代藩主忠宗の感仙殿、その左隣に三代藩主綱宗の善応殿が並んでいた。いずれも仙台空襲で焼失、瑞鳳殿の再建に続いて昭和六〇年に豪華絢爛な霊廟が再建された。

感仙殿の右隣は、霊廟ではなく墓石だけである。当初は霊廟三棟を予定していたが、四代藩主綱村が豪華絢爛な霊廟建築を廃して墓碑だけの薄葬を命じたという。

周りがすっかり薄暗くなり、時計は十七時を回っていた。職員さんから急かされるように墓域を退出した。

仙台城と瑞鳳殿の探訪を終えて、仙台駅に戻り駅のロビーに入ると、聞き覚えのある音楽が流れてきた。

仙台フィルハーモニー管弦楽団の「杜の都コンサート」で、グリーグのペールギュント「オーゼの死」を演奏していた。椅子を片付けていた係員が、次回のリハーサル中ですと言っていた。ペールの母オーゼが死にゆく場面で奏でられる名曲である。瑞鳳殿に政宗の死を訪ねてきた直後だけに美しく悲しいメロディーが心に響いた。

政宗を訪ねる旅の終わりに相応しい追慕の音楽が、新幹線の座席に着いてからも耳元で奏でられていた。

後日、仙台市教育委員会発行（昭和五五年三月）の「経ケ峯―総合調査報告書―」に掲載された「瑞鳳殿発掘調査概報」の中に、興味深い報告があった。

伊達政宗の霊廟「瑞鳳殿」（２０１９年1月２６日撮影）



「棺中に納められた政宗の遺体は東向き、すなわち参道のある西の方から詣でる参詣人に背を向ける姿態で発見された。普通ならば参詣者の方に向かって西向きに埋められるのが当然である。これはまだ瑞鳳殿の建たない埋葬時にはこの方が自然であったのかもしれない。

政宗が寛永十三年四月にこの地に立って、ここを自分の墓地にしたいと言ったのは、東に仙台の街を一望の下に眺め得るため地の眺望を愛したためであろう。現在の瑞鳳殿は杉の下老に囲まれて眺望がきかないが、当時は灌木林であったから、東方遥かに太平洋まで見えたはずである。東向きに遺体を安置したのは政宗の心にそったものというべきであろう」

龍のように蛇行する川で作られる半島状の場所に祖先の墓を造ると、その国を守る神になるといわれている。

死期を迎えた政宗は、蛇行する広瀬川に突き出た経ケ峯の頂に立ち、自ら開府した仙台城下を眼下に、太平洋の彼方に遣欧使節を送ったヨーロッパへ思いを馳せ、仙台の守護神たらんと己の墓をこの地に定めたのだろう。

【日比谷公園に政宗終焉の地を訪ねて】

二〇一五年六月に宮城県出身者の団体「みやぎ夢フォーラム」のイベント「皇居ウオーキング会」で、日比谷公園内にある政宗終焉の地を訪ねた。

日比谷公園の有楽門から入った心字池の傍に、仙台市が立てた「仙台藩祖伊達政宗終焉の地」の案内がある。

案内には「ここは、仙台藩祖伊達政宗から三代綱宗の時代、仙台藩の外桜田上屋敷があったところである。

慶長六年（一六〇一年）、政宗は徳川家康より江戸屋敷を与えられ、外桜田の屋敷は寛文元年（一六六一年）まで上屋敷として使用された。その敷地は、東西は心字池西岸から庭球場東端まで、南北は日比谷堀沿いの道路から小音楽堂付近まで広がっていたものと推定される。

政宗の時代は、徳川家康が三度、二代将軍秀忠と三代将軍家光はそれぞれ各四度ここを訪れ、もてなしを受けたことが記録に残っている。政宗は江戸参勤の折、寛永十三年五月、ここで七十年の生涯を閉じた」とあった。

案内に従って公園内のテニス場から小音楽堂を回ってみたが、後日地図で測ってみると、東西一六〇m、南北二〇〇m、約一万坪はあろう広大な敷地である。

正保元年（一六四五年）御江戸繪図（次頁）を見ると江戸城東側の内濠と外堀通りの間の大名小路郭（丸の内と大手町）に老中や若年寄など幕閣の譜代大名の武家屋敷が配置され、江戸城南側の内濠と外堀通りの間の外桜田（日比谷と霞ヶ関）に主要な外様大名の上屋敷が配置され、外桜田から大名小路郭に入る日比谷口を守護する位置に、松平奥州（伊達氏仙台藩邸）があった。

御江戸繪図（下図）の「松平奥州」の西隣に「松平長門（毛利氏萩藩邸）」と「上杉弾正（上杉氏米沢藩邸）」の屋敷が日比谷濠に沿って並んでいた。

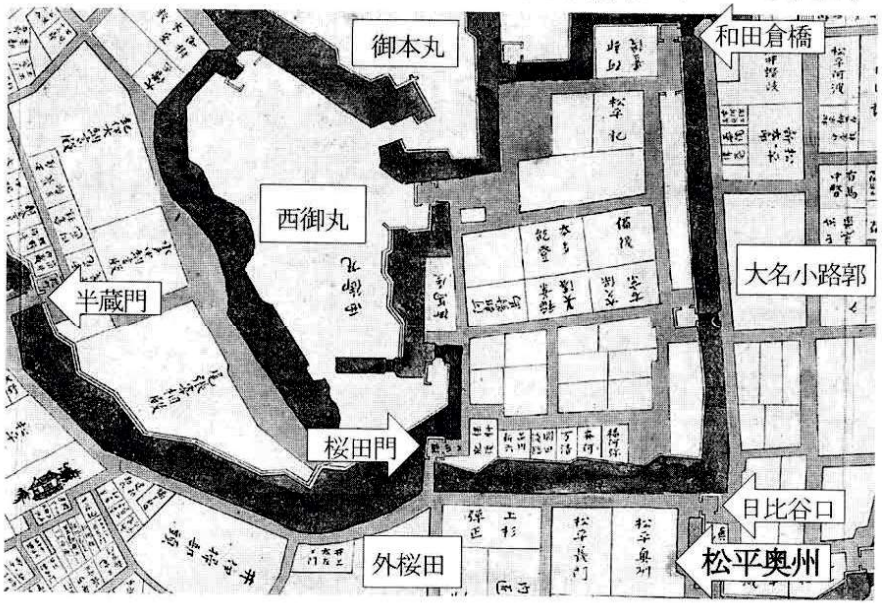
関ヶ原の戦いで家康に敗れて中国八国から周防と長門の二国に減封された西軍総大将の毛利輝元の屋敷と、石田三成の挙兵に呼応して家康に敵対して東北の関ヶ原で政宗と戦い、会津から米沢に移封された上杉景勝の江戸屋敷が、政宗の屋敷と並んでいたとは驚きである。

この絵図の作成された正保元年は、江戸市街の大半が焼失した明暦大火（一六五七年）の十二年前である。慶長六年に家康によって屋敷割りされた状態のままだとすると、昨日まで家康に敵対していた西軍主役の二人の屋敷を、政宗の屋敷の隣に配置させた家康の狙いは何だったのだろうか。粋な差配とでも云うのだろうか。

関ヶ原直後の未だ大坂城に豊臣秀頼が健在な時期であり、豊臣恩顧の外様大名の妻子を人質同然に住わせる外桜田上屋敷の目付役として、政宗を配していたのだとしたら、家康が政宗をいかに信頼していたかが見える。

政宗は、寛永十二年（一六三五年）七月に母保春院の十三回忌法要のためいったん仙台に帰国、翌十三年四月に母の菩提寺保春院の落慶式を済ませて仙台を出立、途中日光の東照宮に参詣して江戸に着いたのが四月二八日、五月一日に江戸城へ登城して将軍家光に謁見した。

正保元年（１６４５年）御江戸繪圖（国立国会図書館デジタルコレクション）



外桜田の江戸上屋敷で家光の見舞いを受けた三日後の五月二四日、参勤して一か月足らずで外桜田の江戸上屋敷で、政宗は七〇歳の波瀾の人生を閉じた。

仙台に帰国する前年から政宗は体調を崩していたといわれ、病状を悪化させて死期を早めるリスクを冒してまで、片道三六〇キロの仙台往復を強行していた。

小田原参陣直前に起きた母による政宗毒殺未遂事件と弟小次郎刺殺事件で、母義姫との間に長く確執があったといわれるが、乱世の時流に流された哀れな母を悼む想いが、政宗に強行日程を強いたのかもしれない。

病躯を押してまで江戸に戻り、江戸で終焉を迎えた政宗の強い思いとは、一体なんだったのだろうか。母の十三回忌で仙台に戻ったまま、残された時間を静かに送ろうとはしなかったのだろうか。

政宗の死去する前年の寛永十二年、将軍家光が武家諸法度を改訂していた。家光が諸大名の前で参勤交代制を含む武士諸法度寛永令を発布して「今後は諸大名を家臣として遇す」と述べると、政宗がいち早く進み出て「命に背く者あれば、政宗めに討伐を仰せ付けくだされ」と申し出たため、誰も反対できなかったという。そして家光は、下城する政宗に護身用に十挺の火縄銃を与えた、という逸話が伝わっている。

家康の時代の参勤交代は、天下を掌握した徳川将軍家に対して、妻子を人質として江戸に住まわせ、参勤して将軍に参府の挨拶をする自主的なもので、その後、秀忠の武家諸法度（元和令）で、従者の人数を制限する程度の改訂はあったが、強制的な参勤制度ではなかった。

しかし家光は、寛永十二年六月二一日に更なる大名統制強化のため、武家諸法度（寛永令）を発令して第二条に「大名小名在江戸交替所相定也、毎歳夏四月中、可致参勤」と定め、東西大名の入れ替わり隔年参勤交代を制度として明文化、義務付けたのである。

参勤交代は、従前の将軍に忠節を尽くす意味から、将軍に対する服属を意味するものに変質、主君に対する家来としての奉公の一つと定められ、家康から三代続いた大名を統制する武断政治の総仕上げでもあった。

これまで政宗と共に戦国の乱世を生きてきた戦国大名は、家康、秀忠、上杉景勝、毛利輝元、加藤清正、福島正則、島津義久、池田輝政、最上義光、ことごとくが幽明境を異にして、残るは政宗ただ一人となっていた。

戦国大名から近世大名に変貌してなお徳川幕政の御意見番として厳然たる存在感を呈していた政宗は、家光の定めた参勤交代の完全遂行こそ、幕府の威光を盤石なものに、戦さなき永遠の平和構築のため、自分だけに出来る最後の使命と覚悟していたに違いない。

自ら病躯を押して老骨に鞭打ち、寛永令発布最初の参勤を率先垂範、将軍家への絶対服従の範を示せば、譜代も外様も皆これに従い、天下泰平もゆるぎないものになると、命を賭した最後の御奉公を完遂したのであろう。

家光は、崇敬する祖父家康が後事を託した政宗を「伊達の親父殿」と慕っていたといわれるが、弟忠長を溺愛する母お江に疎まれた自分を、弟小次郎を偏愛する母義姫に嫌われた政宗と重ね合わせていたかもしれない。

そして父秀忠と確執があったともいわれており、父に求め得なかった父と子の情を、家光は政宗に求めていたのかもしれない。

寛永令で定めた参勤を率先決行した政宗の決意と思いが家光に伝わったのだろう。甍った政宗を送った家光は江戸で七日、京都で三日、服喪するように命じた。

御三家以外では異例なことだったという。家光にとって政宗の死は、大きな喪失だったに違いない。

政宗の辞世の句である。

「曇りなき心の月を先だてて浮世の闇を照らしてぞ行く」

何も見えない闇の中を月の光を頼りに進むように戦国の先の見えない世をひたすらに歩んだ一生だったと回顧しながら心穏やかに旅立つ政宗の姿が浮かんでくる。

仙台市博物館裏庭の伊達政宗胸像（２０１９年1月２６日撮影）



太平洋戦争で徴用された初代騎馬像の上半身部分が幸いにも残されており仙台市博物館の裏庭に飾られている。

私の伊達政宗像を訪ねて（完）

明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その二）

山本　勉

渋江の共立学舎時代

はじめに

渋江はその生涯において、英語教育者・ジャーナリスト・民権家・著述者として活躍しているが、こうした人生を歩むに至った出発点が、一八七一年（明治四年）に弘前から上京後、英学を学んだ尺振八の共立学舎にあったと思われる。本稿では、共立学舎時代の人物との出会いが渋江のその後の人生にどのような影響を及ぼしたのかを渋江の交友関係を中心に検証したい。

一　共立学舎について

共立学舎は尺振八（一八三九～一八八六）により一八七〇年（明治三年）七月に東京本所相生町（東京都墨田区両国四丁目八番附近）に創設された。東京都墨田区教育委員会によれば、「英語だけにとどまらず、漢字教育も行った洋漢兼学のバランスのとれた私塾であったために開塾後わずか半年で一〇〇名を越える生徒数を誇りました。尺はスペンサーの『教育論』を翻訳した『斯氏教育論』を刊行、自由民権運動の理論書として数多くの人々に愛読され、また未完の『明治英和字典』（死後、英学者永峯秀樹が後を継ぐ）の記述や多くの人材を輩出するなどの業績により、"現代英学の祖父"とも呼ばれ、諭吉と共に近代教育の幕開けを演じました」(1)とある。『文部省第二年報　明治七年』、「明治七年外国語学校統計表」には「名称　共立学舎、位置　東京本所相生町、設立明治七年、教員　三名、外国語教員：記載なし、生徒：男子八十四、女子記載なし、学校主　尺振八」(2)とあるので、尺振八が当時の東京府に共立学舎の開業願を出

したのは一八七四年（明治七年）と思われる。これらの資料から、百名近くの塾生が尺振八の共立学舎で英学や漢学を学んでいたことがわかる。

二　共立学舎の塾生

百名近くいた共立学舎の塾生で名前や経歴がわかっているものは現時点で十八名いる。その中には渋江と同時期に共立学舎で学んだ塾生が少なからず六名いる。また後年渋江と関わりが深く東京横浜毎日新聞時代を共に過ごした塾生も四名いる。塾生には明治前期の自由民権運動家で、日本で係文を支援して辛亥革命を支えた宮崎滔天の兄、宮崎八郎も含まれている。渋江が後に清末中国人留学生と関わりを持つことにも多少なりとも影響があったのはないかと推察される。共立学舎塾生一覧表（別表1）には梅浦精一（一八五二～一九一二）も含めた。『渋江抽斎』その九三に「専六は成善に紹介せられて、先ず海保の伝経廬に入いり、次で八月九日に共立学舎に入り、十二月三日（一八七一年（明治四年）：引用者）に梅浦精一に従学した。」(3)とあるの

No.	塾生	生没年	塾生期間	経歴・交友関係等
1	安立 綱之	1859～1938	1875 年～?	内務官僚、政治家、警視総監、貴族院議員
2	石川 暎作	1858～1886		大蔵省職員、『東京経済雑誌』編纂者、アダム・スミスの『国富論』訳
3	岩山 敬義	1839～1892		宮崎県知事、石川県知事、駒場農学校初代校長
4	梅浦 精一	1852～1912	1871～1873	東京商法会議所書記長、石川島造船所専務取締役、渋江保弟は梅浦精一について学ぶ
5	大谷 光瑞	1876～1948	1886 年頃～直ぐに退学	探検家、浄土真宗本願寺派第 22 世法主
6	小池 靖一	1853～1928		衆議院議員（立憲政友会）、貴族院勅選議員
7	郷 誠之助	1865～1942		日本商工会議所会頭、日本経済聯盟会会長、東京電燈会長、東京株式取引所理事長等
8	志賀 直温	1853～1929	1871～?	実業家
9	渋江　保	1857～1930	1871～1872	東京横浜毎日新聞編輯員
10	島田 三郎	1852～1923	1872 年初頭～	東京横浜毎日新聞主筆、『立法論綱』全四巻ベンサム原著、重訳、田口卯吉は沼津兵学校時代の学友
11	首藤 陸三	1851～1924	1870～1871 頃	衆議院議員
12	高梨 哲四郎	1856～1923	1870～1871 頃	東京横浜毎日新聞社友　　沼間守一の弟
13	田口 卯吉	1855～1905	1872 年初頭～	島田三郎は沼津兵学校時代の学友
14	半井 桃水	1861～1926		小説家
15	乗竹 孝太郎	1860～1909		沼間守一、田口卯吉、島田三郎らの自由民権結社の嚶鳴社に加わる。共立学舎助教
16	波多野 伝三郎	1856～1907	1874 頃	東京横浜毎日新聞会計係
17	町田 則文	1856～1929		教育者
18	宮崎 八郎	1851～1877	1870 年～?	自由民権運動家、宮崎滔天の兄

共立学舎塾生一覧表（別表1）

で梅浦は共立学舎の教員と思われる。

三　渋江の民権思想の確立と共立学舎

渋江と同時期の塾生には、現時点でわかっているものだけでも、志賀直温（一八五三～一九二九）、島田三郎（一八五二～一九二三）、首藤陸三（一八五一～一九二四）、高梨哲四郎（一八五六～一九二三）、田口卯吉（一八五五～一九〇五）、宮崎八郎（一八七〇～不明）がいる。『渋江抽斎』その一〇八に「保はこの年（一八八四年（明治十七年）：引用者）六月に『横浜毎日新聞』の編輯員になった。これまではその社とただ寄稿者としての連繋のみを有していたのであった。当時の社長は沼間守一、主筆は島田三郎、会計係は波多野伝三郎という顔触れで、編輯員には肥塚龍、青木匡、丸山名政、荒井泰治の人々がいた。また矢野次郎、角田真平、高梨哲四郎、大岡育造の人々は社友であった。」(4)とあるが、ここに名前が挙がっているうち、主筆の島田三郎、会計係の波多野伝三郎、社友の高梨哲四郎は共立学舎時代に渋江が出会った塾生である。東京横浜毎日新聞社友、高梨哲四郎の兄の沼間守一は東京横浜毎日新聞の社長であった。東京横浜毎日新聞は民権新聞として論陣を張り立憲改進党の機関誌となり当時日露戦争非戦論を展開した。共立学舎と東京横浜毎日新聞とのかかわりについて、鈴木栄樹は『尺振八の共立学舎創設と福沢諭吉』の中で、原抱一庵「尺振八．先生」（『太陽』第二巻第一号・一八九六年一月　一九四頁）を次のように引用している。「『改進党』は故と嚶鳴社と議政会との二分子より成る。嚶鳴社の重なる領袖は、沼間守一、島田三郎、高梨哲四郎、波多野伝三郎等此れなり、世之れを『毎日』派と称す。議政会の重なる領袖は、矢野文雄、尾崎行雄、箕浦勝人、犬養毅、加藤政之助等此れなり、世之れを『報知』派と称す。嚶鳴派は河野敏鎌に拠り、議政会は大隈重信に拠る。両派の頭領は実に河野と大隈なりき。而かも之れが素養をあたへたるものを誰とかなす。曰く、福沢諭吉。曰く、尺振八。報知派は多く福沢の門下より出で、毎日派は多く尺の門下より出づ。」(5)このことから、塾生たちは共立学舎時代に自由民権運動思想を確立していったと思われる。『渋江抽斎』のその百三に主権論・普通選挙論争について森鴎外の記述が見られるが、実際に一八八三年（明治十六年）一月三十一日、三月八日、三月九日、三月十日、四月十五日、四月十八日の六回にわたって普通選挙論・制限選挙論について東京横浜毎日新聞に掲載し、渋江は外山正一と本論から外れた枝葉末節的なベンサムの選挙論争を展開した。詳細は拙著論文『渋江保思想の原点を探る　自由民権運動期を中心に』を参照されたい。渋江が東京横浜毎日新聞の編輯員として島田に加勢して論陣を張ったのも、共立学舎時代からの島田との交友関係があったからであろう。島田と沼津兵学校時代からの

学友であった田口卯吉も沼間の嚶鳴社の設立に島田と共に参加し演説活動も行った。田口卯吉ら嚶鳴社員と民権運動とのかかわりについて、鈴木栄樹の『尺振八の共立学舎創設と福沢諭吉』には、「共立学舎は僅か十年程の短い歴史であったとはいえ、その間に、田口卯吉・石川暎作・乗竹孝太郎を始めとする経学方面での人材を育てた点でも大きな役割を果たしたのである。とはいえ、田口ら共立学舎の関係者が、時の民権結社嚶鳴社の中心的社員であったことからも明らかなように、共立学舎の意義は必ずしも経済学者という学術的方面の人材輩出にとどまるものではなく、当時の民権運動とも直接にかかわっており、この点は近年の研究が指摘する通りである。」(6)とある。当時、共立学舎に身を置いていた渋江は共立学舎において民権思想の基盤を形成していったと思われる。

四　共立学舎での英学修行とカッケンボスの『米国史』

渋江は一八七二年（明治五年）、十五歳でカッケンボスの『米国史』を兄の山田脩と袋屋亀治郎の万巻楼より翻訳出版している。渋江は生涯において二百冊あまりの著作を出版しているが、『米国史』は渋江の最初の著作である。『米国史』については、国立国会図書館デジタルコレクションに第一巻、第二巻の掲載があるが、『米国史巻之一』の目次によれば、『米国史』は『米国史巻之五下』まで出版が予定されていたようだ。藤元直樹の『渋江抽斎没後の渋江家と帝国図書館』によれば、第三巻までは国立構文図書館に五セットもあるが、第四巻以降の所蔵がないことから、藤元も指摘しているように刊行は途中で中断したと思われる。『米国史』は共立学舎で英学を学んだ直後の一八七二年（明治五年）八月に出版されており、渋江が学費目当てで翻訳出版したことも考えられるが、そこには他の理由もあったと思われる。渋江が『米国史』の翻訳出版をとおして当時のアメリカの民主的思想を意識していたのか、これについては第一巻、第二巻から読み取ることはできない。『米国史』全体の内容を把握することはできないが、巻之五下の目次にアメリカ独立戦争・アメリカ歴代大統領・南北戦争等について記載が見られる。巻之五下第五十八章から六十五章において「内乱」との表記で述べられているが、「第五十九章行軍ノ一事係千八百六十二」(7)の一八六二年は南国戦争が始まった年であり、「第六十三章行軍ノ五事係千八百六十五」(8)の一八六五年は南北戦争終結の年である。目次に南北戦争の年号が記載されていて、最終章は、「第六十六章ジョンソンノ大統領」との記載がある。アンドリュージョンソンはアメリカ十七代大統領で南北戦争の戦後処理を行っている。渋江はイギリスの植民地であったアメリカが本国から独立を勝ち取り共和制国家を作り上げ、その後の南北戦争によりアメリカが

奴隷制を克服し民主的な国家として成立していく過程を『米国史』の翻訳を通して理解していたはずであり、『米国史』の翻訳は渋江の民権思想形成の出発点として大きな意義があったと思われる。

『米国史』を出版した万巻楼がどのような出版社だったのか、これについても詳細はわからず、藤実久美子が『アイカーブス学研究No31』において、鈴木俊幸の『書籍文化資料論』を紹介している中に「東京の袋屋亀治郎宛の葉書から書籍輸送の側面を解明する。袋屋の屋号は万巻楼、姓は東生で安政五年（一八五八年）に創業したという。」(9)との記載が見られるのみである。国立国会図書館デジタルコレクションには、万巻楼から出版された著作が多数掲載されているが、そのうちの六冊は一八七八年（明治十一年）に星亨が翻訳したウィリアム・ブラックストンの『英国法律全書』である。この『英国法律全書』は『イギリス法釈義』として知られており、堀部政男の『ウィリアム・ブラックストン―その生涯と『イギリス法釈義』』によれば、「『イギリス法釈義』は、イギリスおよびアメリカの法と法学に対して、甚大な影響を与えた。」(10)とある。その他、訳書としてモリソン著、『古今万国綱鑑録』があるが、国立国会図書館デジタルコレクション書誌情報には、万巻楼は共同刊行、出版社は青山堂とある。万巻楼が主に翻訳書を手がけた出版社であった訳でもなく、渋江と万巻楼とのつながりは判然とせず、万巻楼で翻訳・出版に至った経緯はわかっていない。

おわりに

小論では、一八七一年（明治四年）に弘前から上京後、尺振八の共立学舎での学びをとおして渋江が出会った塾生との交友関係について検証を重ねた。その結果、当時の共立学舎の塾生の中には政治家やジャーナリストとして活躍し、明治期の自由民権運動を牽引し大きな影響力を及ぼした人物がいたことが明らかになった。そして、そこでの交友関係が渋江の民権家としての思想形成の骨格を形つくり、その後の交友関係にも大きな影響をもたらしたことが明らかになった。

注記

（一）東京都墨田区教育委員会『尺振八の共立学舎跡』（一九九六年三月）

（二）文部省『文部省第二年報　明治七年』（一八七五年）十一頁

（三）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二五九頁

（四）森鴎外『渋江抽斎』（中公文庫　一九八八年十一月十日）二九九頁

（五）鈴木栄樹『尺振八の共立学舎創設と福沢諭吉』（京都大学学術リポジトリ　一九九〇年七月一日）一三四頁

（六）鈴木栄樹『尺振八の共立学舎創設と福沢諭吉』（京都大学学術リポジトリ　一九九〇年七月一日）一一五・一一六頁

（七）渋江保『米国史巻之二』（万巻楼　一八七二年八月）目次

（八）渋江保『米国史巻之二』（万巻楼　一八七二年八月）目次

（九）藤実久美子『書籍文化資料論』（アイカーブス学研究No31　二〇一九年十二月）一一九・一二〇頁

（十）堀部政男『ウィリアム・ブラックストン―その生涯と『イギリス法釈義』』（日本評論社　一橋論叢第六十一巻第四号　一九六九年四月）一四三頁

人事部長　首切り姫（トゥーランドット）2
神戸から来た男（一）

匠　克仁

〈登場人物〉
弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
　東西信販から京亜クレジットを経て転籍
牛島崇　アサヒ信用保証グループ相談役？
前田康夫　アサヒ信用保証人事部所属
〈時系列〉
　参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
　第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

1　幽霊社員

アサヒ信用保証人事部長の弓本良香が昼休みを終えて、人事部室に戻ってきた。アサヒ信用保証は家賃保証を主業務とする会社である。

二〇一八年ゴールデンウイーク明けの週で、休みが続いたため仕事が溜まる時期である。

部下の前田康夫が良香に目配せをしながら、電話口で大声で対応している。クレームの電話だと良香は察した。

「人事部長は現在、外出しています。家賃の回収の件でしたら、人事部の所管でなく、債権管理部が担当ですから、そちらへ転送しますが」

前田は自分のスマホを良香に指先で示しながら、食い下がっている。

良香は察して、業務用のスマホを取り出した。電話を受けながら、前田がコメントした社内ＬＩＮＥが届いている。

『人事部長に替われの電話　債権回収の件』

債権管理部につなぐ電話で人事部宛ては筋違いであると良香も思った。

『家賃の取り立て　脅迫を受けた　入居者の弁護士』

電話しながらの前田のＬＩＮＥがさらに続いた。

（弁護士…すると、法テラスか）

法テラスとは正式名称で日本司法支援センターと言い国によって設立された機関である。経済的な困窮者には弁護士の無料の相談が受けられる。

家賃が払えない入居者が弁護士費用を払える訳が無い。その場合は無料相談の法テラスを利用することになる。

弁護士も基本的に相談に答えるだけで、それ以上になると低額だが弁護士費用が発生する。

しかし、中にはこうして相手に電話を一回かけてくる弁護士もいる。その一回で解決すれば良いし、解決できなくてもそれ以上のことはしない。

正攻法の担当部署でなく、勤め人にとっては怖い人事部に直接入れて、圧力をかけようとしているかもしれない。

良香はそこまで考えて、面白そうね、と思った。

『電話かわる』

良香は前田のＬＩＮＥに返信した。

「少々、お待ち下さい。部長が戻ったので」

前田が電話を保留すると、良香はすぐに出た。

「人事部長の弓本です」

初めての電話で人事部長として良香が出ると、他の場合でも相手が一瞬、沈黙する。

一部上場企業の京亜クレジットの実質１００％子会社（形式上は別会社が株式を保有している）で、相応の会社規模の人事部長ポストで女性は少ないからである。

しかし、今回は一瞬の沈黙は無く、相手が名乗った。

「弁護士の…」

相手はアリカワユウコと名乗った

良香も相手が弁護士と聞いて、男性と思い込んでいたが、女性であった。もっとも良香は相手の性別で差別する感情は全く無い。女性で弁護士ならかえって優秀かもしれないと気を引き締めた。

パソコンで『ありかわゆうこ　弁護士』と検索すると、ＢＮＧＳ弁護士法人が検索された。なりすましでなければ本人である。有川優子と思っていたら、在河悠子という漢字であった。大学時代に悠子という名前の友達がいたことを良香は思い出した。

「御社の社員の牛島さんですが」

相手の弁護士が言い終わる前に良香はさえぎる。

「待って下さい。ウシジマという社員は弊社には存在し

ません」
「弓本部長は就任して日が浅いので、知らない社員がいても当然ですが」
在河弁護士もすかさず返した。
（事前に調べて、電話してきたのか）
法テラスと思って軽く考えたが、良香は少し警戒した。
無料の仕事でそんな下調べをするかと疑問に思った。
「たしかに赴任したばかりですが、パートを含め全国の社員の名前は全員覚えています」
良香は断言すると同時にパソコンで社員データベースを開けて『ウシジマ』と検索した。念のため『ウシシマ』でも検索したが、思った通り該当者無しであった。
（幽霊社員でもいるのか）
退職した社員が昔の名刺を使って何か悪事をしているのではないかと良香は思った。
退職者も含めて社員データベースを検索し直したが、その様な名前は存在しなかった。
「相談者から牛島氏の名刺の画像を頂いています。それをメールに添付して送りますので、確認した上で話を再開しましょうか」
弁護士は提案して、良香も応諾した。良香がメールアドレスを伝え、復唱しようとしたら、その間に先方からのメールが届いた。このスピード感で相手の弁護士が優秀と感じた。
タイトルも本文も無く、画像ファイルだけ添付されていた。
良香は届いたメールアドレスのドメインと弁護士法人のホームページのアドレスを一文字ずつ確認した。
（本物の弁護士のようね）
良香はメールの添付ファイルを不用意に開くことはないが、今回は即座に開いた。
一枚の名刺の画像が写っていた。
『アサヒ信用保証グループ
指導役　牛島　崇』
崇には『たかし』の仮名が付いていた。
ロゴもフォントもレイアウトも良香が使っている名刺と全く同一であった。この名刺を見ると、アサヒ信用保証の関連会社の社員と誤解させるだろう。
しかし、住所は本店でも支店でもない場所で、一見するとマンションの一室である。個人の自宅マンションでないかと良香は思った。
電話番号も携帯電話しか書いていない。携帯電話だけ載せた名刺は会社では作製していない。
それに指導役などという肩書は社内に存在しない。
前田も気になるようで良香の席に近づき、パソコン画面をのぞき込んだ。そして、良香に素早く手書きのメモを渡した。
『サイケンカンリブ　ギョウムイタクサキ』

人事部長として転籍して二ヶ月少しの良香よりも前田の方が社内事情には通じている。
「在河先生、たしかに名刺を拝見しました。しかし、アサヒ信用保証グループというのは存在しません。アサヒ信用保証は子会社を持ちませんし、京亜クレジットのグループ会社の一社です」
良香は丁寧に説明した。
「入居者は御社の家賃保証を契約して、家賃が払えなかったので、御社が肩代わりをしました。そして、その人物が督促というか、相談者がいうには脅迫に来ているそうです。御社が無関係とはいえません」
「債権管理部では業務委託先として複数の下請け業者を雇っています。その業者が弊社の名刺に似せて作ったのだと思います」
「それでも、そのような名刺を作っていること認めている、認めていなくても知らなかったことに付いて過失があるのではないでしょうか。牛島氏に表見代理が成立すれば御社の責任は免れません。いずれにせよ、業務委託先であれば事実関係を調べて、現在の行為をすぐ止めるように指導して下さい」
弁護士の一方的な主張に良香は反論する。
「待って下さい。名刺一枚で表見代理が成立するとお考えなのですか。それがＢＮＧＳ弁護士法人としての統一的見解ですか」
良香が詰問すると、相手はふくみ笑いを抑える調子で続けた。
「良香は相変わらずたくましいわねえ」
大学時代に、たくましいと言われたことがあり、その様な表現をした当時の友人を思い出した。
「もしかして、あなたは…」
大学のゼミの友人の姓名で呼びかけた。
「結婚して同じ弁護士の旦那の姓に替えたからね」
相手の弁護士は良香の大学のゼミ友達であった。良香のいた法学部のゼミは平均して同期の一人は司法試験合格者を出していた。二十四年ぶりで同期の一人は司法試験合格者を出していた。二十四年ぶりで懐かしく感じた。
それで、わざわざ在河弁護士が良香を指名したのかと良香は納得した。
アサヒ信用保証に良香が人事部長として転籍したことを在河は知っていたのであった。偶然に法テラスの相談でアサヒ信用保証の件が回ってきたということであった。
「そんな偶然が無ければ、相談者のためにここまでしないけどね」
在河弁護士は本音らしい言葉を漏らした。
良香は懐かしく思ったが、今はビジネスで対立する関係である。感傷にひたっている訳にいかなかった。
「本人は七十五才の男性ですが、家賃を払わないからと言って、全裸にされ首に紐をつけられてマンションの廊下を四つん這いで犬の様に歩かされたと言っています。

事実としたら、刑法231条の侮辱罪になります。さすがに弓本さんの会社としても問題になるんじゃないかしら」

たしかに事実としたら、違法行為になると良香は思った。

「ちなみに被害者が録音した音声データがありますので、それも送ります。電話の後で聞いて下さい」

弁護士が言い終わる前にメールが届いた。その後、二、三のやり取りが続いた。今後の対応を良香から弁護士に連絡するということで落ち着いた。

債権管理部に転送しないで、自分で受けて良かったと思った。債権管理部では握りつぶされるだろう。

良香が音声ファイルをクリックすると、人事部内に大きな音声が響き渡った。窓ガラスが震えるような大声である。

「てめえ、早う払わんかい。なめたまねをしてると、ぶっ殺すぞ」

良香はあわててボリュームを最小化した。部内の社員全員が良香の方を見た。

その後に罵詈雑言、物を叩く音など数十分に渡り続いた。

(やはりデューデリで見つからなかった負の資産があったようだ)

デューデリつまりデューデリデンスというのは買収する会社の価値を測る手続きのことである。訴訟リスク等、会社価値を下げることが買収後に出てこないか当時から良香は心配はしていた。

もともと良香は京亜クレジットの人事部でアサヒ信用保証の買収プロジェクトチームのリーダーをしていた。

東西信販の子会社であったアサヒ信用保証をM&Aしたきっかけも、良香が東西信販から京亜クレジットに転職したという個人的な事情である。

そして、M&Aの実績で買収先のアサヒ信用保証の人事部長に就任した。就任一ヶ月後から厳しいリストラつまり大量の首切りを実施したことから、良香に不名誉なニックネームが付けられた。

『トゥーランドット』から転じて『首切り姫』である。

トゥーランドットというと、トリノオリンピックのフィギュアスケートで荒川静香が金メダルを取った時の曲で知られている。

トゥーランドットは古代中国を舞台にしたオペラであり、中国皇帝の一人娘の名前である。彼女は美しいが、残虐な姫であった。求婚者に謎かけをして、答えられないと斧で首を切り落とさせた。多くの首が切られ、北京城の広場は血の海になり、『首切り姫』と怖れられた。

人事部長に就任して一ヶ月目で大量の首切りをした良香にトゥーランドットの姿が重ねられた。そして『首切り姫』のニックネームが付けられ、広まったのである。

ミネラルA・B・C・D・E……Z

匠　克仁

Al（アルミニウム）過剰と検査された。心配してたらBa（バリウム）検査で胃の荒れを診断された。最近はCa（カルシウム）を骨密度の改善のために、ビタミンDとともに食事で摂取している。脂溶性ビタミンはAもEもKもサプリでなく食事で摂る。少し貧血気味なのでFe（鉄）サプリを飲んでいた。毎年の健康診断結果はGLU（血糖値）が正常であるが、基準より赤血球数やHb（ヘモグロビン）が低い。福島原発事故の発生後はI（ヨウ素）に気を付けている。ところで、元素記号はJとQの二文字だけ使われない。日本食は塩分が過剰でK（カリウム）を含む食品で対抗する。筋肉を鍛える為L-アミノ酸の多い食品を食べる。口からだけでなくてMg（マグネシウム）は経皮吸収している。前述したがNa（ナトリウム）を減らす食事をしている。昨年七月OligoScanで体内のミネラル量を検査したのでP（リン）等34種類ミネラルを調べた。健康度を知りQOL（生の質）を上げていくつもりである。DNAやRNAのレベルから健康にしたい。必須ミネラルはただSe（セレン）が少し多い以外は全体的に不足である。ATP（生命エネルギー）が衰えてる原因と思う。重要なUltraミネラルはZnとMgとぼくは考える。さてVitaminは様々なミネラルを組み合わせることでW効果が期待できる（ミネラルがビタミン活性化）なおX線を照射することで物質のミネラル組成が分る。さてY（イットリウム）は癌治療薬として使われる。ぼくはZn（亜鉛）を毎日三食後にサプリで舌下吸収する。

Ｍｉｎｅｒａｌは１１８種類の元素の内、Ｈ（水素）・Ｃ（炭素）・Ｎ（窒素）・Ｏ（酸素）以外を指す。
Ｍｉｎｅｒａｌは栄養素のみとは限らず、一般に考えるＭｉｎｅｒａｌだけでなく放射性元素も含むのである。
ＭＨＬＷ（厚生労働省）では次の１６種類を日本で必須Ｍｉｎｅｒａｌと指定している。
Ｍｇ（マグネシウム）・Ｓ（硫黄）・Ｋ（カリウム）・Ｃａ（カルシウム）・Ｐ（リン）・Ｎａ（ナトリウム）・Ｃｌ（塩素）の７種類が、主要Ｍｉｎｅｒａｌである。
Ｚｎ（亜鉛）・Ｆｅ（鉄）・Ｉ（ヨウ素）・Ｃｕ（銅）・Ｓｅ（セレン）・Ｃｏ（コバルト）・Ｍｎ（マンガン）・Ｃｒ（クロム）・Ｍｏ（モリブデン）の９種類が、微量Ｍｉｎｅｒａｌである。
Ｓ（硫黄）・Ｃｌ（塩素）・Ｃｏ（コバルト）についてＭＨＬＷ（厚生労働省）の摂取基準が無い。
（ＭｇやＺｎ等の順番はぼく個人に必要な順に並べた）
ＵＳＡでは日本と違い次のミネラルも摂取基準がある。
Ｃｌ（塩素）・Ｓｉ（ケイ素）・Ｖ（バナジウム）・Ｆ（フッ素）・Ｂ（ホウ素）・Ｎｉ（ニッケル）・Ａｓ（ヒ素）である。
Ａｓは猛毒であるが、一部無毒の有機化合物がある。
ＵＳＡと日本だけでなく必須ミネラルは国により違う。
ＯｌｉｇｏＳｃａｎは体内ミネラル検査である。ぼくはＯｌｉｇｏＳｃａｎを二〇二〇年七月に受検した。
ＯｌｉｇｏＳｃａｎの検出ミネラルは次の通りである。
Ｃａ～Ｓの必須・参考ミネラル２０種類
Ｃａ　Ｃａｌｃｉｕｍ　（カルシウム）
Ｍｇ　Ｍａｇｎｅｓｉｕｍ　（マグネシウム）
Ｐ　Ｐｈｏｓｐｈｏｒｕｓ　（リン）
Ｓｉ　Ｓｉｌｉｃｏｎ　（ケイ素）
Ｎａ　Ｎａｔｒｉｕｍ　（ナトリウム）
Ｋ　Ｋａｌｉｕｍ　（カリウム）
Ｃｕ　Ｃｏｐｐｅｒ　（銅）
Ｚｎ　Ｚｉｎｃ　（亜鉛）
Ｆｅ　Ｉｒｏｎ　（鉄）　ラテン語でＦｅｒｒｕｍ
Ｍｎ　Ｍａｎｇａｎ　（マンガン）
Ｃｒ　Ｃｈｒｏｍ　（クロム）
Ｖ　Ｖａｎａｄｉｕｍ　（バナジウム）
Ｂ　Ｂｏｒｏｎ　（ホウ素）
Ｃｏ　Ｃｏｂａｌｔ　（コバルト）
Ｍｏ　Ｍｏｌｙｂｄｅｎ　（モリブデン）
Ｉ　Ｉｏｄｉｎｅ　（ヨウ素）
Ｌｉ　Ｌｉｔｈｉｕｍ　（リチウム）
Ｇｅ　Ｇｅｒｍａｎｉｕｍ　（ゲルマニウム）
Ｓｅ　Ｓｅｌｅｎ（ｉｕｍ）　（セレン）
Ｓ　Ｓｕｌｆｕｒ　（硫黄）
Ａｌ～Ｔｈの有害ミネラル１４種類
Ａｌ　Ａｌｕｍｉｎ（ｉ）ｕｍ　（アルミニウム）

Ｓｂ　Ａｎｔｉｍｏｎ（ｙ）　（アンチモン）
Ａｇ　Ａｒｇｅｎｔｕｍ　（銀）
Ａｓ　Ａｒｓｅｎｉｃ　（ヒ素）
Ｂａ　Ｂａｒｉｕｍ　（バリウム）
Ｂｅ　Ｂｅｒｙｌｌｉｕｍ　（ベリリウム）
Ｂｉ　Ｂｉｓｍｕｔｈ　（ビスマス）
Ｃｄ　Ｃａｄｍｉｕｍ　（カドミウム）
Ｈｇ　Ｍｅｒｃｕｒｙ　（水銀）
Ｎｉ　Ｎｉｃｋｅｌ　（ニッケル）
Ｐｔ　Ｐｌａｔｉｎｕｍ　（プラチナ＝白金）
Ｐｂ　Ｐｌｏｍｂ【仏】　Ｌｅａｄ【英】　（鉛）
Ｔｌ　Ｔｈａｌｉｕｍ　（タリウム）
Ｔｈ　Ｔｈｏｒｉｕｍ　（トリウム）
Ｃａから順番にミネラルについてコメントする。
Ｃａ　Ｃａｌｃｉｕｍ　（カルシウム）
Ｃａ（カルシウム）は体内で最も多いミネラルである。
Ｃａをぼくはサプリでなく食事で意識し摂取している。
Ｃａ摂取の理由は５３ｋｇから４７ｋｇに痩せたためでＢＦＰ（体脂肪率）は前後で９％と変わなかった。ではＢＭＤ（骨密度）が減って骨が痩せたと思った。実際にＢＭＤを測っていないが骨と筋肉も脂肪と同率で減ってＢＦＰが変わっていない筈という論理的な話である。
ＢＭＤが減ったのは痩せて重く感じたことで分った。
ＣａとＭｇをそれで意識して摂取するようになった。
ＣａはＭｇとのバランスが重要である。Ｍｇを取らずにＣａだけだとかえって骨密度が下がってしまう。それにＣａの摂取はあくまで食事からに限定していているのでＣａをサプリで飲んだことは無い。Ｃａサプリを飲むとＣａ２＋（＋＋）イオンになる。吸収されると。体内でＣａ２＋が血管の内側が－に荷電しているので、血管にＣａが付着する。すると動脈が硬化してしまう。だからＣａはサプリでなく食物で摂取する。具体的には玉子のＣａで、玉子を食べるとき、卵殻を２ｃｍ四方ほど食べＣａを摂取する。卵殻は食べても吸収できなさそうだがＣａＣＯ３（炭酸カルシウム）で吸収できる。また卵殻Ｃａは多孔質の構造なので胃に溶け吸収率は高い。またＣａＣＯ３は栄養強化剤として添加もされる。その上にＣａ／Ｍｇ比率も良く、Ｍｇも卵殻に含まれる。実際にＣａ等の栄養不足で苦しむ貧困国で卵殻を食べる様にしＣａ不足を解消したとの話を聞いたことがある。Ｃａ／Ｍｇ比率が重要でＭｇ不足でＣａ過剰はかえって悪い。
Ｍｇ　Ｍａｇｎｅｓｉｕｍ　（マグネシウム）
Ｍｇ（マグネシウム）はＺｎと同じく重要である。よくＭｇをエプソムソルトを溶かした水から経皮吸収するがＭｇＳＯ４（硫酸マグネシウム）で塩ではない。ぼくはＳＯ４－－（２－）、イオン化した硫酸を浴びている。
Ｍｇは苦汁（にがり）に多くてご飯と味噌汁にかけるがＭｇＣｌ２（塩化マグネシウム）が苦汁である。しか

しＭｇは経皮吸収するが消化管で吸収されにくい。それでＭｇＯ（酸化マグネシウム）が便秘薬に使われる。さてＭｇは漢字で金偏に美しいと書く。ぼくはＨ（水素）をＭｇと水と混ぜて水素水を作ることで、摂取している。

Ｍｇ＋２Ｈ２Ｏ → Ｍｇ（ＯＨ）２＋Ｈ２

Ｍｇ（ＯＨ）２は水酸化ナトリウムである。

ＭｇＳＯ４（硫酸マグネシウム）を体に塗りたくった上Ｍｇから発生したＨ２を大量飲んでいる。ということはＨ２ＳＯ４（硫酸）ができて体がゾンビになりそうだ。

ＭｇはＰ（リン）により吸収阻害される。食品添加物にＰを含むリン酸塩が多いためＭｇが不足するのである。

Ｐ　Ｐｈｏｓｐｈｏｒｕｓ（リン）

Ｐ（リン）は体内で二番目に多いミネラルである。ＡＴＰという生命エネルギーのＰはリン酸である。

Ｐは加工食品に多いため不足よりも過剰の弊害が多い。

Ｐが過剰だとＣａやＦｅの吸収を阻害する。

ＰＳというサプリが脳の栄養素として人気がある。このＰはホ（フォ）スファチジル、つまりリンのことでありＳがセリンである。

Ｓｉ　Ｓｉｌｉｃｏｎ（ケイ素）

Ｓｉ（ケイ素）は地球地殻で二番目に多い元素である。

Ｓｉは漢字で珪素、上の王様と書く。日本では少ないがＳｉはドイツのサプリで売上一位だそうである。

ＳＩはシリコンまたはシリカともいい英語のスペルではＳｉｌｉｃｏｎである。よく似た言葉で、シリコーンはＳｉｌｉｃｏｎｅでケイ素の化合物で別の物である。

Ｓｉを多く含む天然水を飲んでいる。天然水を選ぶ際はＳｉの含有量の多さを最優先にぼくは考えている。またＳｉを多く含むスギナ茶もぼくは飲んでいる。その上でＳｉを発生するスティックを水に入れ飲んでいる。このＳｉを発生するのは麦飯石の粒かなと推測している。

ＳＩの吸収を良くするミネラルがある。そのミネラルはＮａである。

Ｎａ　Ｎａｔｒｉｕｍ（ナトリウム）

Ｎａ（ナトリウム）について食卓塩の純度９９％であるＮａＣｌ（塩化ナトリウム）を使わない。その代わりにＮａ以外のミネラルも豊富なヒマラヤ岩塩を使う。

Ｎａの過剰摂取が日本食の問題になっているのでぼくもＮａを摂取しないように努めている。

Ｎａと塩の割合は３９３対１０００であるので、塩分中Ｎａは約４割と覚えるとよい。食品成分表をよく見てもＮａのみ表示したり、塩のみ表示していると混乱する。

Ｎａを水に入れると大爆発して水上で激しく燃える。

Ｎａと同じ様に、水と反応して激しく燃えるミネラルがＫである。

Ｋ　Ｋａｌｉｕｍ（カリウム）

Ｋ（カリウム）はＮａと対になる栄養素である。それでＫが過剰になったＮａを排泄させる。

Ｋは積極的に取りたいが、人工甘味料のアセスルファムＫというカリウムをぼくは摂らないようにしている。

Ｋのカリはアルカリ（ＡＬＫＡＬＩ）の同語源で酸（ＡＣＩＤ）の反対である。

Ｃｕ　Ｃｏｐｐｅｒ（銅）

Ｃｕ（銅）は通常の食事で不足することなくそれよりもＣｕ過剰が問題で、激しい怒りが起きることがある。

Ｃｕを含むヘモシアニンの血液は青い（エビやタコ）（Ｆｅを含むヘモグロビンの血液は赤い。Ｃｕが青色にしＦｅが赤色にする。血液の色はミネラルで決まる）

Ｆｅと拮抗するため、Ｃｕはその吸収を抑える。ＣｕとＦｅとＺｎとも拮抗するためその吸収を抑える。ＣｕとＦｅとＺｎはどれか一つ多く摂取すると他の二つが下がる。

Ｚｎ　Ｚｉｎｃ（亜鉛）

Ｚｎ（亜鉛）はＭｇと同じく重要である。ぼくは毎食後Ｚｎのサプリを口にするが、飲み込まない。飲み込むとＺｎは胃を荒らし、気分が悪くなるからである。そこでＺｎを舌下に置いて舌裏の毛細血管から吸収する。なおＺｎトローチといって口中で溶かす薬があるのでぼくはＺｎの吸収法として効果的と思う。

Ｚｎは決着剤や品質改良剤（ポリリン酸Ｎａポリリン酸Ｋ）で吸収が阻害される。

Ｚｎは酸化防止剤（エチレンジアミン四酢酸・Ｎａ（ＥＤＴＡ・Ｎａ））でも吸収が阻害される。

Ｚｎは増粘剤・安定剤（カルボキシメチルセルロース・Ｎａ（ＣＭＣ・Ｎａ））でも吸収が阻害される。

Ｚｎはこれだけ経口吸収しにくいので舌下吸収が良い。

Ｚｎの服用でＣｕが少なくなる話をしたが、ＣｕよりもＦｅが少なくなるのが問題である。

Ｆｅ　Ｉｒｏｎ（鉄）　ラテン語でＦｅｒｒｕｍ

Ｆｅ（鉄）が多いが貧血気味で鉄を飲んだためである。

Ｆｅサプリは主に動物性のヘム鉄サプリを飲んでいたがＦｅ２－のクエン酸第一鉄のサプリも飲んでいた。他にＦｅ３－の第二鉄（三価鉄・酸化鉄）サプリも飲んだがＦｅ３－はＦｅ２－に還元する必要があると思い、今はＦｅ３－のサプリは非効率と考えて飲んでいない。またＦｅの多いひじき・レバー・砂肝の一つを毎日食べた上Ｆｅの塊の鉄玉子を飲料水に入れて飲んでいた。それでＦｅの体内の量は標準範囲で少し多い日である。現在はＦｅの過剰摂取も問題なので、少し控え目にしている。

Ｆｅは活性酸素を除去する酵素で、寿命とも相関するＳＯＤ（スーパーオキシドディスムターゼ）を構成する。ＳＯＤ酵素はＦｅの他にもミネラルがある。ＺｎとＣｕとＭｎである。

Ｍｎ　Ｍａｎｇａｎ（マンガン）

Ｍｎ（マンガン）は漢字で満俺と書く。体内の１／４のＭｎが骨に存在する。Ｍｎは２５番元素で隣の２４番がＣｒである。

Ｃｒ　Ｃｈｒｏｍ　（クロム）
Ｃｒ（クロム）は必須栄養素である。ただしそれは三価Ｃｒであって、六価Ｃｒは猛毒である。三価と六価とはＣｒの電子の数の違いである。三価Ｃｒが酸化して六価Ｃｒになる。Ｐｂ、Ｈｇに次に多い有害金属となるのがＣｒ（六価）である。ステンレスという合金は、ＦｅとＣｒとでできている。
Ｃｒは多くの食材に含まれるが吸収率が低い。ビタミンＣが吸収を助け、シュウ酸とフィチン酸が阻害する。
Ｃｒは右隣の元素はＭｎであるが、左隣の２３番元素はＶである。
Ｖ　Ｖａｎａｄｉｕｍ　（バナジウム）
Ｖ（バナジウム）は天然水の成分表示されるようになりＶが血糖値を下げることから注目されたようである。
Ｂ　Ｂｏｒｏｎ　（ホウ素）
Ｂ（ホウ素）は漢字で硼素と書く。
Ｂの化合物はダイヤモンドに次ぐ硬度を持つ。そのためＢの化合物はヘテロダイヤモンドと言われる。
Ｂを使ったホウ酸はゴキブリ団子として使われる。
（Ｂ１２のビタミンを構成するのがＣｏである）
Ｃｏ　Ｃｏｂａｌｔ　（コバルト）
Ｃｏ（コバルト）とビタミンを合わせた名コバラミンがＣｏｂａｌａｍｉｎというビタミンＢ１２である。またＣｏは菜食主義者が不足する栄養素である。
Ｍｏ　Ｍｏｌｙｂｄｅｎ　（モリブデン）
Ｍｏ（モリブデン）はプリン体を尿酸にして排出する。
Ｉ　Ｉｏｄｉｎｅ　（ヨウ素）
Ｉ（ヨウ素）はうがい薬のヨードで漢字で沃素と書くがＩは８割が甲状腺にある。
Ｌｉ　Ｌｉｔｈｉｕｍ　（リチウム）
Ｌｉ（リチウム）は電池に使われるだけでなく栄養素でＬｉは躁鬱病の薬にも使われている。
Ｇｅ　Ｇｅｒｍａｎｉｕｍ　（ゲルマニウム）
Ｇｅ（ゲルマニウム）は温泉を連想するだろう。しかしＧｅも栄養素であり、過剰だとＡｓ並み毒性を持つ。
Ｓｅ　Ｓｅｌｅｎ（ｉｕｍ）　（セレン）
Ｓｅ（セレン）は今回の検査で相対的に一番多かったがＳｅがＺｎのサプリに入っているためかもしれない。
Ｓ　Ｓｕｌｆｕｒ　（硫黄）
Ｓ（硫黄）はぼくの飲んでいる薬、スルピリドに入ってＳｕｌｐｉｒｉｄｅの名前はＳｕｌｆｕｒ（硫黄）からＳで始まる名前を付けている。また、よく飲んだサプリＬ・システインは含硫アミノ酸でＬ・メチオニンと共にＳを含むアミノ酸である。他にも飲んでいるサプリではＲ（α）・リポ酸もＳを含んでいる。グルコサミンにＭＳＭがよく配合されているが、このＳも硫黄である。
ＳはビタミンＢ１、Ｂ７（ビオチン）に含まれている。
Ｂ群複合サプリの独特の臭いはＢ１のＳの臭いである。

Ｂ１の静脈注射が世間ではニンニク注射と言われるのはＢ１のＳの臭いがニンニクを連想するからである。このＢ１注射がニンニクエキスを使っていると誤解があるがＢ１注射には全くニンニクは使われてはいない。ぼくはＳの入ったスルピリドの他にサプリでＬ・システインやＲ（α）・リポ酸やＭＳＭも飲んでおりさらにビタミンＢ１・Ｂ７も飲んでいる。スルフォラファン（スルフ＝Ｓ＝硫黄）の多いブロッコリー等アブラナ科の野菜からＳを摂取している。これだけ食べて飲んでいて、体内のＳが少ないのが気になっている。
Ａｌ　Ａｌｕｍｉｎ（ｉ）ｕｍ　（アルミニウム）
Ａｌ（アルミニウム）はよく使われるが有害であるのでＡｌが基準値をぼくも超えていて、残念であった。このＡｌの急性毒素は少ないが、長年に渡って、蓄積するとＡＤ（アルツハイマー病）の原因にもなる。鉄鍋でなくＡｌ鍋を金がなくて使っていたからに違いない。それにＡｌはインスタントコーヒーに多く、これも金が無くてＡｌ入りコーヒーを飲んでいたからに違いない。ぼくはＡＤになっていないので、この推理は間違いない。更にＡｌはデトックスし難いミネラルである。デトックスにＳｉ（ケイ素）とＭｇ（マグネシウム）が有効であってＳｉとＭｇは元素の周期表でＡｌの隣にある。それからＳｅ（セレン）も有効なのである。
Ａｌデトックスをしているが、ネット上に流出しているＯｌｉｇｏＳｃａｎの結果を見るとほぼ標準値を超えたＡｌの検査値になっていた。１００件以上を見たのだがＡｌが標準値内のものは一つもなかった。ぼくは自分のＡｌの値が普通と安心したわけではない。世界中の人がＡＤ（アルツハイマー）の予備軍が多いと怖れた。ただＡｌ自体は体内への吸収率の低い毒素である。そのためＡＤが発症するまでＡｌが蓄積するには数十年かかってＡＤになるまでに今までは寿命が尽きた。人生百年時代Ａｌを毎日少しずつ摂取すると遂には臨界の容量に達しＡＤになってしまうのである。ＡＤの原因は他にもありＡＤはＡｌの蓄積だけでなく蛋白質アミロイドベータ（Ａβ）の蓄積でも発症し、その影響の方が大きくある。
Ａｌは前述の通り標準値内に収まっている人がいなくてＡｖｇ（平均値）が健康でなく、不健康なのである。
Ａｌデトック対策をぼく個人でするよりも地球にとってＡｌ異常値の人類を少なくする方が良いと考えている。
Ａｌ缶やＡｌ鍋も見直す必要があるかもしれない。特にＡＩホイルは包んでいる食品にかなり吸収される。またＡＩはベーキングパウダー等の食品自体にも含まれる。
Ａｌは経口だけでなく経皮吸収に気を付ける必要がありＡｌは制汗剤に入っているので、脇から吸収する。
Ａｌの排泄は便の次いで母乳に多い。乳児は未熟なのでＡｌの排泄能力が弱く脳などに蓄積するのである。更にＡｌは胎盤を通過するので、胎児にも蓄積する。

Ａｌ入り制汗剤は妊婦と授乳婦への警告が必要である。

ＡｌからＡＢＣ…の順番に並んでいると思ったら、次がＳｂである。しかし、元素名をみるとＡＢＣ順である。

Ｓｂ　Ａｎｔｉｍｏｎ（ｙ）（アンチモン）

Ｓｂ（アンチモン）は半金属レアメタルである。海外のＰＥＴボトルに含まれる。日本国内で産出されないのでＰＥＴボトル（海外製の青色）の飲料を飲んでいないとＳｂを日本人が過剰摂取することはないだろう。

Ａｇ　Ａｒｇｅｎｔｕｍ（銀）

Ａｇ（銀）は硬貨にも食器にも使われており、さすがにＡｇを避けられない。歯科用アマルガムを詰めていればＡｇが常に口中にあることになる。有害金属といってもＡｇは毒性が低いから気にしない方がよいと思う。このＡｇよりもアマルガムはＨｇの方の危険が心配である。

Ａｓ　Ａｒｓｅｎｉｃ（ヒ素）

Ａｓ（ヒ素）は漢字で砒素と書く。よく毒殺に使われたＡｓは和歌山の毒入りカレー事件にも使われた。Ａｇとの混ざると変色する。そのため、Ａｇ製の食器はＡｓの毒殺を回避するために使われたという。現在ではＡｓは殺虫剤に含まれていて、それが侵入経路である。

Ａｓは海藻のひじきにも多く含まれる。ぼくはひじきをＦｅ（鉄）目的でよく食べたので気をつけようと思う。

Ｂａ　Ｂａｒｉｕｍ（バリウム）

Ｂａ（バリウム）が有害金属だとは知らなかった。胃のＢａ検査を毎年してて大丈夫かと胃が痛くなった。前回Ｂａ検査が心配でそれで胃が荒れて検査に表れた。このＢａ検査の胃癌発見率は胃カメラの千分の一位らしくてＢａ検査を受ける医者は少ないという。

Ｂｅ　Ｂｅｒｙｌｌｉｕｍ（ベリリウム）

Ｂｅ（ベリリウム）は１９８５年まで歯科合金で使われＢｅは２０年以上の潜伏期間がある。

Ｂｉ　Ｂｉｓｍｕｔｈ（ビスマス）

Ｂｉ（ビスマス）は毒性が低く胃腸薬に使われる。またＢｉはピロリ菌の除去に使われる。

Ｃｄ　Ｃａｄｍｉｕｍ（カドミウム）

Ｃｄ（カドミウム）はイタイイタイ病の原因物質でありＣｄは腎臓に障害を与えて、それで骨を脆くする。このＣｄの侵入経路は煙草、排気ガス、メッキ等がある。尚ＣｄはＺｎで排泄ができる。

Ｈｇ　Ｍｅｒｃｕｒｙ（水銀）

Ｈｇ（水銀）は水俣病の原因物質である。日本人は魚でＨｇが過剰になっている。マグロ等大型魚が食物連鎖でＨｇが濃縮される。妊婦にマグロ等を食べさせないのはＨｇがそれを排泄できない胎児に蓄積するからである。

Ｈｇは歯のアマルガムも主な吸収経路となっている。

Ｈｇは排気ガスや火山国日本の大気にも含まれる。またＨｇは石炭火力発電で大量に排出される。

Ｈｇの排泄をＺｎやＳｅが促す。Ｚｎの同族元素がこのＨｇであり、Ｃｄもそうである。

ＨｇやＣｄが体に悪いのは、体がＺｎと間違えることでＺｎが果たす補酵素の効果がなくなるからである。

ＤＮＡやＲＮＡを合成する酵素をポリメラーゼというがＺｎが含まれる。Ｈｇが体内に入るとＺｎと同族元素のＨｇがポリメラーゼに間違って含有されることになってＤＮＡとＲＮＡの合成が阻害されるのである。

Ｈｇは重金属デトックスたんぱく質メタロチオネインのＺｎに置き換わることでデトックスを妨げる。

Ｎｉ　Ｎｉｃｋｅｌ（ニッケル）

Ｎｉ（ニッケル）は５０・１００・５００円硬貨材料でＮｉの体内の侵入経路の一つになっている。といってもＮｉ硬貨を使わないで日本で生活できない。接触の他にＮｉは加工食品に含まれ、排気ガス等の都会の空気にもＮｉは含まれている。メッキ工場の労働者ではメッキのＮｉにさらされることになる。

Ｐｔ　Ｐｌａｔｉｎｕｍ（プラチナ＝白金）

Ｐｔ（プラチナ）は白金であるから、宝飾品職人が多くＰｔを体内に侵入させることがある。一部の癌治療薬でＰｔが含まれるものがある。ぼくの検査結果は正常値のＰｔだったが、少ないといえどこから入ったのだろう。

Ｐｔを入れた水をデトックス水とネットで売っているがＰｔでデトックスできるのでなく、すべき対象である。

Ｐｂ　Ｐｌｏｍｂ【仏】　Ｌｅａｄ【英】（鉛）

Ｐｂ（鉛）は昔の水道管に使われていたので水道水からＰｂが侵入した。現在は缶詰や排気ガスが原因である。

Ｐｂは全人類では最も多い有害重金属である。日本人はＰｂよりもＨｇの方が魚類の摂取の影響で最も多い。

Ｐｂが有害なのは骨のＣａと置換するからである。またＰｂは腎臓・造血・生殖など酸化ストレスを与える。

ＰｂとＣやＳｉが同族元素で周期表の縦一列に並ぶのでＰｂの解毒にはＣとＳｉが拮抗することで有効である。

Ｐｂの酸化ストレスを防ぐと言われるのがＺｎである。

Ｐｂの脳の海馬の毒性をＳｅは軽減する。ビタミンではＰｂの毒性をＢ１とＢ６とＣとＥが軽減する。

ＰｂはＡＤＨＤの影響もいわれる。もしかしたらぼくはＰｂの多い古い水道管の文化住宅で育ったことから、ＡＤＨＤになったかもしれない。

Ｔｌ　Ｔｈａｌｉｕｍ（タリウム）

Ｔｌ（タリウム）は半導体の製造の職業の人に多いからＴｌの心配をする必要はない。

Ｔｈ　Ｔｈｏｒｉｕｍ（トリウム）

Ｔｈ（トリウム）は核兵器の施設で働く人に多いそうでＴｈの心配をする必要もない。

ＯｌｉｇｏＳｃａｎのぼくの検査結果を次に記す。

Ｃａ等の必須ミネラルは次の結果。（　）内が標準値。

Ｃａ（カルシウム）４４２．２〇（２７９～５９８）

Ｍｇ（マグネシウム）３３．８△（３０．５～７５．７）

Ｐ（リン）１７３．０　○（１４４～１９９）
Ｓｉ（ケイ素）９．７　×（１５～３１）
Ｎａ（ナトリウム）６０．０　△（２１～８９）
Ｋ（カリウム）２５．４　△（９～３９）
Ｃｕ（銅）１４．４　△（１１～２８）
Ｚｎ（亜鉛）１１５．１　×（１２５～１５５）
Ｆｅ（鉄）１１．８　△（５～１５）
Ｍｎ（マンガン）０．２４×（０．３１～０．７５）
Ｃｒ（クロム）０．７５　×（０．８２～１．２５）
Ｖ（バナジウム）０．０２５　△（９～８３）
（Ｖの標準範囲は小数点以下４から３桁目）
Ｂ（ホウ素）１．７９　○（０．８４～２．８７）
Ｃｏ（コバルト）０．０２８　△（２５～４５）
（Ｃｏの標準範囲は小数点以下４から３桁目）
Ｍｏ（モリブデン）０．０３９　△（３５～８５）
（Ｍｏの標準範囲は小数点以下４から３桁目）
Ｉ（ヨウ素）０．２７　×（０．３２～０．５９）
Ｌｉ（リチウム）０．０４８　×（５２～１２０）
（Ｌｉの標準範囲は小数点以下４から２桁目）
Ｇｅ（ゲルマニウム）０．０１６　○（３～２８）
（Ｇｅの標準範囲は小数点以下４から３桁目）
Ｓｅ（セレン）１．６６　△（０．９５～１．７７）
Ｓ（硫黄）４７．２　×（４８．１～５２．０）
Ａｌ等の有害ミネラルの次の結果であった。

ＯｌｉｇｏＳｃａｎのデータは小数点以下５ケタなのでＯｌｉｇｏＳｃａｎの数値を十万倍して整数にした。
（Ａｌ等の量は５００迄が標準で１０００超は要注意）
Ａｌ（アルミニウム）１１８３　高値＋
Ｓｂ（アンチモン）２０２　標準
Ａｇ（銀）１１０５　高値＋
Ａｓ（ヒ素）４０５　標準
Ｂａ（バリウム）４１４　標準
Ｂｅ（ベリリウム）４７５　標準
Ｂｉ（ビスマス）５９９　高値－
Ｃｄ（カドミウム）９９７　高値－
Ｈｇ（水銀）９５３　高値－
Ｎｉ（ニッケル）７４０　高値－
Ｐｔ（プラチナ）２５１　標準
Ｐｂ（鉛）５３８　高値－
Ｔｌ（タリウム）１００　標準
Ｔｈ（トリウム）６２　標準
Ｃａ／Ｍｇ等の比率も個々の量と同じく重要である。
Ｃａが高くてもＭｇが低いと、高い方が悪い。
Ｃａ／Ｍｇ等の比率は４つで次の検査結果であった。
Ｃａ／Ｍｇ　１３．１　○（７．８４～１８．２５）
Ｃａ／Ｐ　２．５６　△（１．６４～４．１５）
Ｋ／Ｎａ　０．４２　×（０．４５～０．７５）
Ｃｕ／Ｚｎ　０．１３　△（０．１１～０．１７）

Ｂを代表にビタミンはミネラルと深い関係がある。
Ｂ群などビタミンは活性型で効果を発するが、それにはＺｎやＭｇなどのミネラルが必要だからである。
（Ｂなどビタミン→活性型【必要ミネラル】で表示）
Ｂ１　→　ＴＰＰ（チアミン２リン酸）　【Ｍｇ】
Ｂ２→ＦＭＮ（フラビンモノヌクレオチド）【Ｚｎ】
Ｂ２　→　ＦＡＤ（フラビンアデニンジヌクレオチド）
【Ｍｇ】
Ｂ３（一般名はナイアシンだが本稿ではＢ３）　→
ＮＡＤ（ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド）
【Ｍｇ】
Ｂ５　→　ＣｏＡ（コエンザイムＡ）　【Ｍｇ】
Ｂ６　→　ＰＬＰ（ピリドキサールリン酸）【Ｚｎ】
Ｂ９　→　５-ＭＴＨＦ（５メチルテトラヒドロ葉酸）
【Ｍｇ】
Ａ　→　レチノイン酸　【Ｚｎ】
Ｄ→１・２５(ＯＨ)Ｄ３(１・２５ジヒドロキシビタミンＤ)　【Ｍｇ】
ＺｎとＭｇがビタミンの活性化に必要と分かる。
ＺｎとＭｇは癌の予防にもなる。他に癌予防にはＳｅ・Ｍｏも有効と言われている。ちなみに多いと逆効果だがＦｅも適量であれば癌の予防になる。
Ｐ．Ｓ．本原稿をほぼ書き終えた後、二〇二一年六月にＯｌｉｇｏＳｃａｎを再度、検査した。結果は次の通

りＭｇやＺｎやＳｉを過剰摂取したのに増えていない。
Ｓも過剰摂取した筈なのに、不足が赤色で警告された。
Ａｌは微増している。しかし、年齢を重ねることによりＡｌは増え、ＭｇやＺｎやＳｉは減るものだからむしろＡｌ等の悪化を抑えていると考える。解毒をしてないとＡｌがもっと増加していたに違いない。前回の検査ではＰｂ（鉛）とＮｉ（ニッケル）が高値だったが、今回はＰｂとＮｉが標準範囲なので、解毒できている。それにＨｇ（水銀）とＣｄ（カドミウム）もかなり下がった。
Ｃａ（カルシウム）５２８．１△（２７９～５９８）
Ｍｇ（マグネシウム）２２．８×（３０．５～７５．７）
Ｐ（リン）１４１．６　×（１４４～１９９）
Ｓｉ（ケイ素）９．３　×（１５～３１）
Ｎａ（ナトリウム）５９．２　△（２１～８９）
Ｋ（カリウム）２８．２　△（９～３９）
Ｃｕ（銅）１７．８　△（１１～２８）
Ｚｎ（亜鉛）１２１．８　×（１２５～１５５）
Ｆｅ（鉄）１１．６　△（５～１５）
Ｍｎ（マンガン）０．２５×（０．３１～０．７５）
Ｃｒ（クロム）０．７４　×（０．８２～１．２５）
Ｖ（バナジウム）０．０２９　△（９～８３）
Ｂ（ホウ素）２．１７　△（０．８４～２．８７）
Ｃｏ（コバルト）０．０２５　△（２５～４５）
Ｍｏ（モリブデン）０．０４５　△（３５～８５）

Ｉ（ヨウ素）０．３０　×（０．３２～０．５９）
Ｌｉ（リチウム）０．０４７　×（５２～１２０）
Ｇｅ（ゲルマニウム）０．０１７　○（３～２８）
Ｓｅ（セレン）１．５５　△（０．９５～１．７７）
Ｓ（硫黄）４４．８　××（４８．１～５２．０）
Ａｌ等の有害ミネラルは次の結果であった。
Ａｌ（アルミニウム）１４８８　高値＋
Ｓｂ（アンチモン）１９６　標準
Ａｇ（銀）９９６　高値＋
Ａｓ（ヒ素）３９２　標準
Ｂａ（バリウム）４０６　標準
Ｂｅ（ベリリウム）４９４　標準
Ｂｉ（ビスマス）５７３　高値－
Ｃｄ（カドミウム）８２０　高値－
Ｈｇ（水銀）８５３　高値－
Ｎｉ（ニッケル）３０３　標準
Ｐｔ（プラチナ）２２６　標準
Ｐｂ（鉛）４９４　標準
Ｔｌ（タリウム）９８　標準
Ｔｈ（トリウム）６１　標準
Ｎｈ　Ｎｉｈｏｎｉｕｍについて最後に書いて終わる。
Ｎｈ（ニホニウム）と日本の名の付く元素がある。
Ｎｈは日本の理研の研究員達が発見した元素である。
Ｎｈは原子番号１１３で現在の周期表の中で最新元素でＦｌ（フレロビウム）等とともに追加されたのである。
Ｎで始まる元素記号は、Ｎ・Ｎａ・Ｎｂ・Ｎｄ・Ｎｅ・Ｎｉ・Ｎｏ・ＮｐとＣに次いで多い。ニホニウムならばＮｉでも良さそうだがＮｉはニッケルで使用済である。
Ｎｉｈｏｎでなくて日本はそのままローマ字表記するとＮｉｐｐｏｎである。だからＮｈ（ニホニウム）でなくＮｐ（ニッポニウム）とするべきと考えそうだ。しかしＮｐ（ニッポニウム）とできなかった理由がある。実はＮｐ（ニッポニウム）は４３番元素であった。百年前にＮｐ（ニッポニウム）を日本人が発見した。しかし後にＮｐ（ニッポニウム）は元素であることを否定された。
Ｎｐ（ニッポニウム）はその後、４３番元素の１つ下のＲｅ（レニウム）７５番元素であることが判明した。
Ｔｃ（テクネチウム）が現在の４３番元素である。
ＩＵＰＡＣの命名ルールで過去に付いた名前は使えずにＮｈ（ニホニウム）はニッポニウムとできなかった。
Ｎｐは既にネプツニウムの元素記号に使われているのでＮｐの元素記号で命名できないということもある。なおＮｐの発見にも理研の日本人が関与している。理研ではＮｈを最初はジャポニウムと名付けていた。それならばＪｐと元素記号になったのであろう。冒頭に元素記号はＪとＱの二文字だけ使わないと書いた。ジャポニウムはＪを使う元素記号が他に無いので、目立っただろうからＪｐ（ジャポニウム）の方がぼくは良かったと思う。

編集後記

「物書く時百倍の情報をインプットしなければだめだ」は、読売新聞の記者が、今年四月に亡くなった立花隆氏（「田中角栄研究――その金脈と人脈」の著者）の取材に、立花氏の仕事場（ネコビル）に行ったときに忠告された言葉です。また、立花氏は「三十回文章を見直すと原稿は読みやすくなる」とも語っています。（読売新聞七月七日版）

立花氏について「素朴な疑問と知的好奇心こそ立花氏の本質」とも書かれており、先の言葉と共に、多くのことを考えさせられました。

まんじ同人千坂精一氏の本号「箱根路の変遷」冒頭に「資料収集で歩き回っている」ご本人のご苦労が書かれています。毎号の千坂氏の作品を読むごとにこれは感じていました。これからも引き続き千坂精一氏の姿勢を見習っていきたいと思います。

同人新井宏氏が「まんじバックナンバー八十七冊」を電子書籍化してくださいました。大変なご苦労の賜物と感謝申し上げます。これから同人皆様のご意見をお伺いして、有効に活用をしていきたいと思います。

同人米村典紘氏が、まんじ誌に連載していた「世界の国旗から学ぶ」を「国旗と世界のストーリー」と題してこの度出版されました。おめでとうございます。氏の詳細な調査は私達にいろいろなことを教えてくれます。オリンピックもあり、常に手元に置いて活用させていただきます。

皆さん、コロナワクチンは既にお済でしょうか。変異型とか出てきていますので、くれぐれもご用心ください。（鍋）

まんじ第161号

令和３年８月１日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL·FAX 048(721)2001
（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について
「牛にひかれて　暗雲退治」
田寺怜葦（たでられい）画

まんじ第百六十二号　目次

藤村『破戒』の舞台を飯山に導いた
藤井宣正と「椰子の葉陰」……新井　宏…4
奉幣勅使罷り通る……千坂精一…25
回想のベルリン……山本鎭雄…29
―統一ドイツの首都ベルリン―
柿本人麻呂①……横山正義…46
天守台を仰いで㈢……三戸岡道夫…48
短歌　なつかしき思ひ出他……山本一成…57
漢詩　汲深録（二十六）……松井秀人…60
忠山人日乗（四）……忠内正之…62
青雲の彼方（十三）……太田精一…68

吾輩は紙魚ロボである　その八……永畑俊三…81
宅建士「花山聖司郎」の不動産事件帖
虚栄の罠（後編）……葵　州月…108
私の「昭和20年」（7）……山田嘉久…135
―終戦から75年―
私の本州マラソン歴史紀行（東北編①）……安藤　剛…144
高山右近（十一）……鍋屋次郎…169
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（13）……村上邦治…180
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その三）……山本　勉…202
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（二）……匠　克仁…205
オリンピックA・B・C・D・E……Z……匠　克仁…214
編集後記……編集子…219

まんじ第百六十二号　目次

藤村『破戒』の舞台を飯山に導いた
藤井宣正と「椰子の葉陰」……新井　宏…4
奉幣勅使罷り通る……千坂精一…25
回想のベルリン……山本鎭雄…29
―統一ドイツの首都ベルリン―
柿本人麻呂①……横山正義…46
天守台を仰いで㈢……三戸岡道夫…48
短歌　なつかしき思ひ出他……山本一成…57
漢詩　汲深録（二十六）……松井秀人…60
忠山人日乗（四）……忠内正之…62
青雲の彼方（十三）……太田精一…68
吾輩は紙魚ロボである　その八……永畑俊三…81
宅建士「花山聖司郎」の不動産事件帖
虚栄の罠（後編）……葵　州月…108
私の「昭和20年」（7）……山田嘉久…135
―終戦から75年―
私の本州マラソン歴史紀行（東北編①）……安藤　剛…144
高山右近（十一）……鍋屋次郎…169
…信仰に生きた生涯…
安芸門徒シルクロード紀行（13）……村上邦治…180
明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その三）……山本　勉…202
人事部長　首切り姫（トゥーランドット）　2　神戸から来た男（二）……匠　克仁…205
オリンピックA・B・C・D・E……Z……匠　克仁…214
編集後記……編集子…219

藤村『破戒』の舞台を飯山に導いた
藤井宣正と「椰子の葉陰」

新井宏

藤井宣正……。おそらく、どこかで名前を見かけたとお思いだろう。

そうなのである。同人村上邦治氏の連載「安芸門徒シルクロード紀行」に登場する準主人公格の人物名なのである。

準主人公格とは言っても、通算二五〇頁ほどになる長編のなかで、フルネームの藤井宣正が出てくるのが七頁、藤井または宣正の名前が出て来るのが二〇頁に過ぎない。したがって、あまり印象に残らなかったかも知れない。

ところが私の場合、なぜか藤井宣正が初出した「安芸門徒シルクロード紀行(2)」の部分を読んでいて、訳もなく懐かしさがこみ上げてきたのである。短い文章なのでそのまま引用する。

……インド班には薗田宗忠（文学寮教授アメリカ留学中ロンドンに召集）、島地大等（黙雷の養子大学林卒）ら八名が選ばれ追加された。最年長で班長格の藤井宣正（一八五九生）は西本願寺内地留学生とし初の東京帝大哲学科を卒業直ぐに文学寮教授に迎えられ、次年には教頭になった。急遽一九〇〇年末ロンドンに留学生として光瑞のもとに呼び寄せられた。能力・人格いずれも光瑞の信頼する人物であり、かれの著作からすでに海外でも仏教学者として知られていた本願寺派有数の学者であった。

かつて私がシルクロードやチベット、インドに夢中になっていた頃の印象であろうか。しかし手元の参考書やコピー集を見ても手応えがない。インターネットで調べて見ても様子が異なる。どうやら私の勘違いだったかも知れない。

しかし藤井宣正が再び『まんじ』に登場するのはそれから九ヶ月後の「安芸門徒シルクロード紀行(5)」で、その間に私の関心も大分薄れてしまっていた。ところが「紀行(5)」には再び次のような記述が出て来る。

仏陀伽耶では藤井宣正と別れ一足先に呼び寄せられた島地と秋山が合流した。六日遅れた藤井は途中車中で旧知の河口慧海と井上円了に偶然会い、二人を連れて光瑞のもとに赴き引き合わせた。

黄檗宗の河口慧海はネパールからヒマラヤを越えて、鎖国を守るチベットの都ラサに日本人として初めて潜入した。その後チベット学を主導した入蔵者としてその名を遺した。

大谷派で教育家の井上円了は哲学館（後東洋大学）を設立……仏教は科学的見地に反しないと主張、当時の西洋文明＝キリスト教に異議を唱えた。

藤井は一ヶ月前アジャンタで姉崎正治にもすれ違っている。姉崎は帰国後東京帝国大学教授に就任し宗教学講座初代担当教授となり、日本宗教学の基礎を開いた。

やはり藤井宣正は河口慧海の『西蔵旅行記』[1]に登場していたのである。私が五十年近く前に、仮設の相模原図書館で借りて読んだ本は装丁からして戦前の旧版だったが、今はインターネット上の『青空文庫』で簡単に読める。

その第一四三回に、河口慧海がバンキープールという停車場で、インド人と英語で話していたらトイレから藤井宣正が飛び出してきたという話がある。慧海はたまたま井上円了と同行していた。また藤井宣正も大谷光瑞がダルバンガローにいるので会いに行く途中であった。そして、河口慧海（一八六六生）、大谷光瑞（一八七六生）、井上円了（一八五八生）、藤井宣正（一八五九生）、その前後に会う姉崎正治（一八七三生）が偶然インドで大集合したのである。

話題は終始河口慧海が義理のあるチベット人を助けるためにネパールに入国するというのを三師が止める形で進んだが、最も強烈に反対したのが藤井宣正であった。藤井は言う。

大体その道理が分らぬ。婦人の仁というのはその事だ。いわゆる小仁を知って大仁を知らぬ者の言だ。その理屈は君はまだ分らんのだろうからおれが言って聞かせる。元来チベットに起って居る事件は何人位死刑に遇うのか分らんけれども、ここに十名の人なり二十名の人なりが死刑あるいは財産を没収されると仮定したところで、それが世界に対しどれだけの害を及ぼすかそれをよく考えて見なさい。鎖国を励行する一つの動機

になるだけで、そんなに大きな害はありませぬ。しかるに君がこれからネパール国へ入って不幸にして死んだらどうするか。折角出難いチベットから出て来て世界に紹介すべき大功の事を冥土に齎らしたからといって何の益があるか。早く日本に帰ってこれを世界に紹介したならば、間接にどれ位世界の学者に利益を与えるか知れない。だからこの場合は世界に対する義務ということに重きをおいて、チベットに対する小さな義務を棄てにゃあならぬ。しかるにその別も付かずにただ子供のように女のように、区々たる人情に搦まれて居るというのは分らん話だ。

大谷光瑞や井上円了も同意見であったが河口慧海は諦めない。しかしインド皇帝戴冠式に来ていた奥中将や外交関係者も動けなかった。結局、慧海はネパール入りして、ネパール王を通じてチベット法王へ嘆願書を提出するという方法を探った。

それにしても、温和な風貌の藤井宣正にこのような激しさがあったことを改めて知った。そう言えば、後に宣正と結婚する井上瑞枝が「其頃島地家に出入した、腕白連の中の総大将が宣正だった」[2] (p.242) と述べている。その頃とは瑞枝が十一歳で初めて島地家に寄宿した頃、すなわち宣正が二十二歳の頃の話である。

かくして藤井宣正に対して感じた懐かしさは、河口慧海の『西蔵旅行記』の記憶によるものかも知れないと思った。しかし、藤井宣正について知れば知るほど、新たな疑問や好奇心が生まれてくる。ここまで来るともう止まらない。

それを紹介しようというのが本稿の目的であるが、雑然とした項目を羅列しても、すっきりしない。そこで思いついたのが、「藤井宣正の紹介」を兼ねて、「藤井宣正ウィキペディア」の全文を載せ、その項目を選びながら書き進むことである。「**藤井宣正のウィキペディア**」を次に引用する。

一八五九年、越後国三島郡本与板村（現新潟県長岡市与板町本与板）の光西寺に藤井宣界の次男として生まれた。旧制長岡中学を経て慶應義塾に学び、西本願寺からの内地留学生として初めて東京帝大哲学科に学んだ。東大卒業と同時に西本願寺文学寮教授に就任。当時における仏教学のエキスパートとされ、一八九一年には日本で初めての仏教通史となる「佛教小史」を著した [A]。一八九二年に飯山の井上寂英の長女瑞枝と結婚。瑞枝は日本英学校（?）を首席で卒業「心の露」[3]を出版した才媛であり、実家は島崎藤村「破戒」の中で蓮華寺のモデルとなった [B]。ちなみに、この二人の仲を取り持ったのが入江寿美子（後の伊藤博文夫人）である [C]。また、翌年の東京白蓮社会堂

での挙式が日本初の仏前結婚式とされている。

一八九七年に教授を解任（され）、埼玉県第一尋常中学校長に就任した。一九〇〇年、本願寺よりヨーロッパにおける政教調査のためロンドン派遣の命を受け、大英博物館やヴィクトリア&アルバート美術館にて仏教美術研究の最新動向に触れた。一九〇二年～一九〇四年に浄土真宗本願寺派の第二十二世門主大谷光瑞が組織した学術調査隊・大谷探検隊では実質的リーダーを努め、中央アジア・インド・東南アジアへ三度にわたり（宣正は一度だけ）仏教伝播の軌跡を追う調査を行い、特にシルクロード研究に関する調査成果を残し、貴重な遺物・古文書を日本に持ち帰った。その中でも一般にもよく知られるインドのエローラ石窟群やアジャンター石窟を、日本人として初めて本格的に調査した。

二百日以上に及ぶ行程のレポートが日本へ送られた後に紛失してしまったことで、彼らの調査は正当な評価を受けることができなかったが、隊の様子は宣正が記していた「印度霊穴探見日記」[4]などに垣間見ることができる。調査を終えた後、もともと体が弱かった彼は劣悪な環境の中で腸を患いながらも、昼夜を惜しんで同地での研究・調査に打ち込んだ。一旦は小康を得たものの一九〇三年に再度調査の指示があり、ロンドンに渡航する直前、フランスのマルセイユで帰らぬ人となった。享年四十五歳。死後本願寺学位最高の勧学に任ぜられた [D]。

一九〇四年、島崎藤村は「明星」にて宣正の生涯をモデルとした「椰子の葉陰」を発表、旅先で書かれた彼の絵葉書や日記をもとに、未知を求めて異郷の地で孤独な死を迎えた青年僧への哀惜の情が藤村の詩情と重なり、主人公への共感をより一層強めている [E]。後に次女鶴枝は高野辰之と結婚している [F]。

それでは始めよう。

[A] 宗教学者、藤井宣正も井上円了も長岡出身

藤井宣正の出身は新潟県長岡市与板町の浄土真宗本願寺派西光寺である。長岡市は私が小学校二年生から五年生までの四年間両親の郷里を頼って疎開していたところであり、与板町についても、千坂精一氏が本誌連載「関東管領始末記」で上杉景勝を支えた智将直江兼続の城下町として紹介しておられたことなどを良く覚えている。

藤井宣正が東京帝大哲学科を卒業して浄土真宗本願寺派の文学寮教授となり、まもなく教頭になったことは村上氏も紹介しているが、文学寮は龍谷大学の前身であり、その教頭は実質的な学長を意味していた。すなわち龍谷大学の実質初代学長は藤井宣正なのであった。

ところで、偶然であろうが、河口慧海の『西蔵旅行記』

[1]にも現れた井上円了も長岡市浦村の浄土真宗大谷派慈光寺の長男で、東京帝大哲学科を卒業して、まもなく東洋大学の前身哲学館を創設している。すなわち東洋大学の初代学長となっている。長岡市浦村は私の疎開先の高山村から信濃川を挟んで三キロメートルのところ、信越線の鉄橋を渡って遊びに行ったこともある。

井上円了が洋学に目覚めたのは十歳の時、石黒忠悳の漢学塾に入門し、そこで洋学も学んだことであった。石黒は後に陸軍の軍医総監になった西洋医で、森鴎外の上司に当たる。長岡藩は新潟港を持ち、もともと海外に目を開いていたので石黒忠悳のような人物が片田舎にもいたのである。

その頃、長岡藩は北越戊辰戦争により焼け野原になり石高も七万四千石（実高約十四万石）から二万四千石に減らされ、士族は困窮を極めていた。その中で、一八七〇年支藩三根山藩から百俵の米が贈られて来たが、藩の大参事小林虎三郎は、その米を藩士に分け与えず売却して学校設立の費用に宛てた。この故事は山本有三の戯曲「米百俵」で良く知られているが、その流れで一八七一年には長岡洋学校が設立され、井上も藤井もそこで学んだのである。

ここで、もう一度藤井宣正と井上円了の経歴を比較しておこう。

藤井宣正は一八五九年長岡市与板本願寺派西光寺に生まれ北越戊辰戦争で寺が焼かれたため長岡洋学校には三年遅れ十六歳で入学、一八八一年に本願寺派内地留学生となり慶応大学を経て東京帝大哲学科を一八九一年卒業、後の龍谷大学となる文学寮の教頭（学長）となっている。

一方、井上円了は一八五九年長岡市浦村大谷派慈光寺に生まれ十六歳で長岡洋学校に入学、一八七八年東本願寺の留学生として東大予備門を経て、東京帝大哲学科を一八八五年卒業、後の東洋大学となる哲学館を創設して学長となっている。

両名の経歴は全く同一だといっても過言ではない。

迫り来るキリスト教の脅威の中、しかも激しい廃仏毀釈に見舞われていた浄土真宗も洋学を取り入れなければならない時代であった。その代表選手がともに長岡藩の領内から生まれたことは、偶然と言うレベルではなく、地政学的な位置付けで理解しなければなるまい。藤井宣正を理解する新たな視線だと思う。

[B] 井上瑞枝とその家族

宣正のウィキペディアには「瑞枝は日本英学校を首席で卒業「心の露」[3]を出版した才媛であり、実家は島崎藤村「破戒」の中で蓮華寺のモデルとなった」と簡潔に紹介されているが、本稿の主人公なので補足したい。

井上瑞枝（一八七〇生）は飯山市の本願寺派真宗寺第二十三代住職井上寂英（一八四一生）とよしえ（一八四一生）の

長女。十一歳の時に単身上京し島地黙雷（一八三八生）の庇護のもとに跡見学校の寄宿舎に入る。寂英が島地黙雷と知り合ったのは一八七三年築地本願寺別院の輪番（末寺から選ばれた本山執行委員）として勤務した際と思われる。

その頃は東京にまだ女学校もない時代、跡見学校は上流家庭の子女の集まる唯一の教育機関であったが、瑞枝は知名の学者、先輩を訪問して私宅教授を受けている。そのことを瑞枝は就職活動のために作成した履歴書に次のように記している。

一八八六年十月より麹町区飯田町明治女学校に入り英語を修め、宇田川準一等に就き物理学、生理学、植物学などを学ぶ。一八七年九月より神田区猿楽町の日本英学館に入り一八八〇年二月、同館高等英文学全科卒業、この間高橋五郎、三宅雪嶺、辰巳小次郎、雨森信成、松本政雄、マクレー、マンソン、フォールス等に就き英文学、教育学、倫理学、心理学、経済学などを学び、傍ら蒲生重章、根本通明、三島毅、豊島毅に就き漢学を修む[4] (p.39)。

とにかく機会を見つけては貪欲に学び、それを活用していた様子が判る。まわりは華族や高級官僚・豪商の子女ばかりの中で、平民の瑞枝はキャリアウーマンを目指していた。瑞枝の書『乱れ雲』[5]に序を寄せた文学博士村上専精（一八五一生、帝大初代印度哲学教授）は「英学館在学中、百五十名（男子）のクラス中、山田孝道君（今の曹洞宗大学教頭）と、瑞枝女史との二人限り、年末試験最優秀のため、特別の進級を許された」とその才媛ぶりを述べている。なおウィキペディアの日本英学校は日本英学館の誤りである。

長女の瑞枝には弟で長男の弘円（一八七二生）と次女の鶴枝（一八八一生）がいる。弘円は文学寮で藤井宣正に学び、第一次大谷探検隊では大谷光瑞の秘書格で随行、インド班を担当している。その四女武子（一九一一生）は大谷光瑞の秘書となり、ミス上海となった美人である。

猪瀬直樹の『ふるさとを創った男』[4]は主として鶴枝の夫、小学唱歌「ふるさと」や「朧月夜」を作詞した高野辰之（一八七六生）を主人公とした「志を果たしていつの日にか帰らん」の物語であるか、武子に取材したことによって作品の幅が拡がっている。

例えば、猪瀬直樹は主人公高野辰之を登場させる前に、武子から得た藤井宣正の絵葉書についての情報を基に島崎藤村が『破戒』の習作として書いた「椰子の葉陰」について詳しく述べている。私の問題意識とも重なる部分があるのでこれは後述する。

武子の記憶は十三歳の時、関東大震災（一九二三年）のため飯山に戻ってきた瑞枝のことから始まるが、その時五十三歳になっていた瑞枝の印象を「ネットの黒い

ヴェールを被って、ずば抜けて上品でした。子供心に、こんな綺麗な人、いるのかしらって思いました」[4](p.45)と語っている。ミス上海は近代的な美人、瑞枝も鶴枝も写真を見ると瓜実顔で聡明さや意思の強さが顔に表れた美人だと思う。

井上寂英の妻よしえは十一歳の瑞枝を島地黙雷のもとに送り、次女鶴枝を学齢に達する前に英語習得のため地質学者のジョン・ミルンのもとに送っている。藤村の『破戒』に出て来る蓮華寺の奥様もかなりのやり手のようだ。瑞枝がよしえの資質を受け継いだのは間違いないであろう。

[C] 宣正と瑞枝の仲を取り持ったのは入江すみ子か

藤井宣正と井上瑞枝は一八九二年六月六日東京白蓮社会堂で日本初の仏前結婚式を挙げている。そのことに全く異論はないが、ウィキペディアでは両名の仲を取り持ったのが入江寿美子（後の伊藤博文夫人）だと書いてある。もちろん状況から見て極めて疑わしい。第一、入江すみ子を後の伊藤博文夫人としているのなど論外であり、正しくは伊藤博文の最初の妻である。

村上邦治氏も「紀行(9)」では「新潟から出てきて自宅に寄宿した藤井宣正と、井上弘円の姉で長野から出てきて黙雷宅で厄介になった瑞枝との結婚式で……黙雷は仲人を務めた」と入江すみ子説など一顧もしていない。

ところがもしかしたら入江すみ子の仲介説は正しいのではないかと気になり始めた。ここから入江すみ子との格闘がはじまる。

入江すみ子は、吉田松陰の松下村塾において、高杉晋作、久坂玄瑞、吉田稔麿と共に四天王と謳われた入江九一やその実弟野村靖（一八四二生、廃藩置県の成立に功があり、岩倉使節団にも参加、内務大臣、逓信大臣などを歴任）の妹である。一八六三年伊藤博文と結婚し一八六六年に離別、一八六八年に伊藤博文の仲人で再婚したという流れは、ちょっとインターネットで調べれば簡単に判る。問題は再婚相手が分からないことである。

多くは再婚相手を長州藩士としているが、中には山県有朋も候補だったとか神戸港の商人だとか諸説ある。相手が定まらないことには、入江すみ子のその後のことなど調べようがない。

その中で、最も信頼できそうな情報は、伊藤博文のウィキペディアのなかに、ほんの一行であるが、入江すみ子は「梅子が妊娠したことにより離縁され、のちに神戸税関員と再婚した」とある。

入江すみ子が再婚した一八六八年は、一月三日の王政復古宣言と同日に始まった戊辰戦争、続いて一月十五日には各国公使に王政復古が通告されるなど慌ただしい中、二月四日には備前藩と英・仏・米の水兵間の「神戸事件」、三月八日には土佐藩とフランス水兵間の「堺事件」と外

交問題が相次いで起こり、新政府は対策に苦慮していた。その中で頭角を現したのが英語力と交渉力を合わせ持つ伊藤博文であった。その年七月には兵庫県知事に就任している。

その頃、神戸は最重要貿易港であり、それが伊藤博文の管轄下に入ったのである。「神戸税関員」とさらりと書いてあるが、おそらく伊藤博文の信頼する長州藩の人材であったに違いない。

そこで、現代に至るまでの歴代神戸税関長のリストを入手してみた。神戸税関の発足は一八七二年十月であるが、一八七四年一月から一八八〇年三月まで二代目の税関長を勤めた人物の名前を長岡義之と記している。ただし奇妙なことに出身とか前歴の欄が空白である。

名前さえ判れば、いくらでも情報が集まる。早速、獨逸学協会会員名簿（獨協学園百年史編纂室編）に長岡義之の名を見つけた。そこには大蔵省外国品調度掛長、権大書記官関税局検査官 大阪税関長、会計検査院検査官、法学博士 山口士族（麹町区元園町二丁目四）とある。やはり長岡義之は長州藩士であった。

その後も情報が続々集まる。列記してみよう。

① 一八八〇年山口市銭鋳司に建設された「大村公神道之碑」に寄付した人の名が六十八名記されている。有栖川熾仁親王、東伏見嘉彰親王、三条實美、毛利元徳、伊達宗城、伊藤博文、井上馨、山田顕義、山尾庸三、林友素、品川彌次郎、原田一道と続く中ほどに長岡義之の名を見る。大村益次郎系統のかなりの人物のようだ。

② 外交官の大物長岡春一が義之の息子だと判る。春一は一八七七年生で勲一等瑞宝章。母が入江すみ子であれば、三十歳の時の子。兄弟の記載がないところを見ると一人っ子らしい。

③ 「岩倉使節団」を広く研究している泉三郎の主宰する『欧米亜回覧の会』という会の会報に小野博正と言う方が書いた「岩倉使節団人物論の列伝からもれた随員たち expydoc.com」というウェブがある。そこに長岡義之の名を見つける。大蔵理事官田中光顕に随行した山口出身で出生没年不詳。妻は分部光賓（第八代近江大溝藩主）の娘とある。しかし分部光賓は一八〇八年没、その継嗣分部光邦も一八一〇年没で年齢的に全く合わない。もし長岡が岩倉使節団（一八七一～七三年）の一員だったとすれば、副使の伊藤博文、入江すみ子の兄の野村靖、藤井宣正や井上瑞枝の師である島地黙雷と関係者が全て岩倉使節団の参加者となる。長岡義之が初代神戸税関長でなく二代目なのは、その間岩倉使節団に随行していたからであろう。

④ そうこうしている内に、二〇一五年の大河ドラマ『花燃ゆ』の資料「長州のひとびと」の項に、……（入江）九一は禁門の変で散りますが、すみには母への孝行を

日頃から頼んでいたといいます。……一八六三年、伊藤博文と結婚しますが、一八六六年に離婚。一八六八年に長州藩士の長岡義之と再婚します。一八九三年母を看取りますが、その後のすみについては知られていません……とあるのを見つけた。

⑤ そしてアジア歴史資料センターの資料で長岡義之の生年一八四〇年、没年一八八六年と確認する。

素人なので大分遠回りしたが、もう再婚相手が長岡義之なのはゆるがない。

それでは入江すみ子が再婚した後にどうなったのであろうか。藤井宣正と井上瑞枝の仲を取り持つ時に「長岡すみ子」ではなく「入江すみ子」と名乗ったとすれば、再び離婚して「入江」に戻ったのであろうか。

入江家は長男の九一が禁門の変で戦死、次男の靖は野村家へ養子に出ていたので後継ぎがいなかった。

その頃、神奈川県令となっていた野村靖は、次男の貫一を入江家の養子にし、入江すみ子を戻し、彼らの母と共に入江家を再興したのではなかろうか。前出の『花燃る』の資料にも「一八九三年母を看取る」とある。

その決定的な証拠になると思うのは、長岡義之の長男の名が「春一」、その長岡春一の長男が「美一」、入江家の養子となった野村靖の次男の名が「貫一」、そして入江九一も「九一」と名前に法則性があることである。

あるいは、長岡義之が亡くなった一八六年に入江に復姓したとも考えられるだろう。しかしそれでは九歳の春一を置いて家を出たことになる。おそらく野村靖は、すみ子を入江家に戻したことで、その後の長岡家の面倒を見たはずである。靖は一八九一年に駐仏公使（当時は公使が最高位）を勤めたが、長岡春一も一九〇二年にフランス在勤でパリ大学に学び、一九三年に駐仏大使になっている。

入江家を再興した入江すみ子はまだ幼い入江貫一に代わって維新の名家入江家の家長を務めていた。

一方、瑞枝は日本英学館を優秀な成績で卒業し、伊藤博文等が設立したばかりの華族女学校に勤務先が決まるかにみえた。しかしその頃、後に津田塾大学を設立する津田梅子が教授補として入ってきたので事情が変わった。瑞枝は、島地黙雷や跡見花蹊、藤井宣正に就職活動の支援を強く依頼するが、当時の日本は女子の就職に対して偏見が多く、門戸が閉ざされていた。結局、藤井宣正との結婚の道を選ぶ。

末寺が一万ヶ所以上もある本願寺派きっての秀才と才媛の結婚である。華族女学校の教師の道よりはるかに素晴らしい「永久就職」ではないか。

ところが瑞枝は「わたしは世間で兄等が想像なさるような平和な運命の寵児ではありません。いろいろ複雑な因縁により藤井に嫁したのです。何しろ仏教界でも公然

結婚の出来るのは真宗だけ、真宗中でも西本願寺派、東本願寺派と分かれ、わたしたちの属する西本願寺関係で、それぞれ種々の因習的な資格などを取り調べて互いに結婚しようとすると、ごくごく狭い範囲になるのですからね」[4] p.40 と述べている。瑞枝の真宗寺と宣正の光西寺の間に何か問題でもあったのだろうか。

そこに入江すみ子が登場したのであろう。津田梅子は伊藤博文の娘の家庭教師で華族女学校入りは博文の推薦であった。島地黙雷や跡見花蹊とも関係のある博文は、前妻の入江すみ子に後処理を依頼する。それは島地黙雷や跡見花蹊の意を受けて「就職なんかやめてさっさと宣正と結婚しなさい」と言うものであったと思う。

瑞枝にとって十一歳違う宣正は、兄のような先生のような存在であった。周りから見れば理想的な組合せであるが結びつくには何らかのきっかけが必要であった。その役割を無事に勤めたのが入江すみ子であった。

後年、瑞枝は弟の弘円の四女でミス上海になった武子に「武ちゃん、女はあまり勉強するとしあわせになれないものなの」[4] (p.35) と繰り返して言っていた。

さあ、やっと私の中で、入江すみ子が納まるべきところにおさまったが、その明確な証拠は何もない。

[D] 宣正の実家・光西寺は「勧学」や「傑僧」を生む

ここまでの記述では、藤井宣正の実家・光西寺は北越戊辰戦争で焼かれて貧乏寺になり二男坊の宣正は、その貧困の中から本願寺派内地留学生となり慶応大学を経て東京帝大哲学科に進んだ秀才のイメージである。そのことに間違いがあるわけではないが、宣正と瑞枝の仲を取り持ったのが入江すみ子と言う「有りそうもない」説がウィキペディアに出ていたのでその出典を大分探した。唯一、ほぼ同じ内容を伝えていたのが与板町の出身者を紹介するウェブ (PERSON 05 YOITA) である。

その時は、ウィキペディアの丸写しだろうとあまり気にしなかったが、入江すみ子の仲介説が「あり得る」となって、与板町にそのような伝承があったのではないかと調べていた。

宣正がその死後十七年、本願寺派の勧学となったことで、思い出したのは宣正の父、藤井宣界も勧学だったということである。ただしその時は、田舎の名高い学僧だと思っていた。しかし本願寺派の勧学は僧侶二千名に一人ほどで他宗派なら大僧正なみの階位だという。そして宣界が勧学に昇進したのが一八八三年七十二歳の時で、その当時は再々本山にも出仕していたと言う。ちなみにその当時島地黙雷は司教で勧学に登るのは一八九三年である。

さて、それでは宣界の後を継いだ長男藤井界雄、すなわち宣正の兄はどんな人物だったろうか。それがびっく

りするほどの傑僧で、若い頃出奔し一向宗（浄土真宗）が厳しく禁止されていた薩摩に入り鹿児島開教に携わり、本山の内命を受けて沖縄の内探をしている。

父の死後二八九四年には戊辰の兵火で失われた梵鐘を再鋳造するため「三万人余に募り金八百余、銅錫幾百斤」を得、島地黙雷らの宗教人のみならず、山縣有朋、西園寺公望ら二十余名から鐘銘の辞や書を得て刻している。

その後も日清・日露そして第一次大戦の戦没者を敵味方問わず慰霊するため「萬歳閣」という壮大な伽藍を築きその中心に与板大仏（十三㍍の立像）を置いた。一角の「愛楳居」には藤井宣正の霊を祀っている。愛楳は宣正の雅号で楳は梅である。

このようなことを知ると、入江すみ子の仲介説は与板発であったことも考えられる。瑞枝の実家の真宗寺は飯山の豊かな寺で、藤村の『破戒』の舞台なので注目していたが、実は与板の光西寺の方が真宗寺よりも格上だったようである。この部分は、長岡市の広報誌「よいた」に載った「界雄一代」[6]によっている。

[E] 飯山取材は『破戒』と『椰子の葉陰』のどちらが先か

島崎藤村の「椰子の葉陰」が『破戒』の習作であり、藤村が詩から散文に向かう大きな役割を果たしたとするのは、いまや定説と言って良いだろう。共に飯山の真宗寺に舞台をとり、『破戒』の心理的な構成や描写も「椰子の葉陰」から多く引き継いでいると言う。

そうであれば、飯山における「椰子の葉陰」の取材が先で、その経過で飯山が『破戒』の舞台に選ばれたとするのが素直な考え方であろう。『破戒』のモチーフ面でのモデルとされる大江磯吉も猪子蓮太郎も飯山と特に関わりがあるわけではない。

ところが、定説では『破戒』の取材中に、藤井宣正からの絵葉書が真宗寺に沢山あることを知り、急に「椰子の葉陰」を先に書いたことになっている。

その解釈の背景には、島崎藤村が藤井宣正や井上瑞枝を知るはずがないと言う認識があるだろう。しかし、彼らの経歴を調べてみれば、藤村が瑞枝や宣正を知らなかったはずはない。そのことは経歴を述べる時に伏線として示しておいた。

島崎藤村は一八七二年生まれで瑞枝より二歳年下であるが、明治学院を卒業して一八九二年二十歳で明治女学校高等科の教師となっている。一方瑞枝は明治女学校を経て一八九〇年日本英学館を最優秀な成績で卒業、一八九一年には『心の露』[3]を発表、翌年藤井宣正と白蓮教会堂で仏前結婚式を挙げている。樋口一葉がまだ世に出る前であった。しかも明治女学校は麹町区下六番、島地黙雷宅や白蓮教会堂は麹町区中六番にあり隣接していた。同じ英語の世界で競った藤村が、瑞枝のことを知らないはずはない。

一方、第一次大谷探検隊のインドにおける活動情況はその後日本にどのように伝えられたであろうか。

大谷光瑞は父二十一世の光尊が一九〇三年一月十八日に亡くなると大急ぎで帰国するが、折からのエドワード七世印度皇帝戴冠式のため船便が取れず京都に帰着したのは三月十四日になった。意図した帰国ではなかったが、新聞は大谷探検隊の偉業を讃え、あたかも「凱旋帰朝」の様相であった。

ちょうどその頃、藤井宣正が印度中央部のナーグプル(Nagpul)から二月二十四日に出した「印度村落風景」の絵葉書が真宗寺や瑞枝のところに届いたはずである。ナーグプルはインド西海岸ムンバイと東海岸カルカッタのちょうど真ん中にある都市で椰子の名所である。



雑誌『太陽』一九九一年六月号（通算三六〇号）に載った宣正の絵葉書を示す。まさに「椰子の葉陰」の風景である。

ところがこの絵葉書について藤村はなぜか「椰子の葉陰」の中で何も触れていない。二月一日付の第九信と三月十一日付の第十信の間が空白なのである。小説の題目にもなっているのに二月二十四日付の絵葉書だけが欠落している。他の例からみれば数行の記載で済むのに載せられていないのは奇妙なことである。

実は島崎藤村の研究者田中富次郎は、一九五二年の飯山の大火で真宗寺の旧い建物が焼失してしまった後に、焼け残った経堂の六角堂を調べたが「当時の絵葉書は散佚して現存しなかった」と報告しているのである[6] (p.158～169)。そのため彼の研究では、宣正の「現地調査日記」（後に飯山市藤村文学研究会が『印度霊穴探見日記』[8]として出版）の記載と「椰子の葉陰」の内容を比較する方法をとっている。

ところが前出の『ふるさとを創った男』によると、猪瀬直樹が真宗寺を訪れた一九七六年には「六角堂の経典に交じって、椰子の木が写っている変色した古い絵葉書がしまいこまれていた」というのである[4] (p.18)。

まさに藤村が何も触れなかった二月二十四日付絵葉書である。しかも「小説の第一信から第十三信までは、ほぼ現存する絵葉書に即している。実際に絵葉書と小説を

読み較べてみて、それは確認できた。第十四信から第十七信までは、まったくの創作である」[4] (p.30) と述べている。

それなら「大発見」であるが全く驚いた様子がない。猪瀬は田中富次郎の著書[7]も参考文献に挙げているが「散佚して現存しなかった」との記述を見落としたのであろうか。それとは全く逆になるが、猪瀬直樹が絵葉書群を再発見した一九七六年の十二年後に、飯山南高校の先生だった三井文彦が書いた『藤村と飯山』（発行真宗寺）では相変わらず「絵葉書のことだが……現在は一枚も見当らない」としている。どうなっているのであろうか。

宣正の絵葉書は彼の「現地調査日記」[8]によるとその宛先の多くが妻、兄、飯山を含んでいる。前出の絵葉書は良く見ると地名ナーグプルをローマ字で書いているので瑞枝あての可能性が高い。「散佚した」のは真宗寺あての分で、再発見されたのが瑞枝あての分とでもいうのであろうか。

それにしても二月二十四日付けの絵葉書「印度村落風景」のみ、藤村の「椰子の葉陰」から抜けているのは、何か意味があるはずである。また気になることが生じたが先に進む。

大谷光瑞に随行していた井上弘円が帰国するのは宣正の「日記」によると二〇〇三年四月末頃である。また宣正の最後となった五月十五日付「孟買（ムンバイ）通信」[9]には「印取せる古銘文は……近日此の地より錫蘭（セイロン）を経て六月の初に帰朝すべき姉崎正治氏に託せり」とある。

八月十八日に戻ってきた藤井宣正の遺骨を弘円が出迎えている。宣正の「現地調査日記」などの遺品は弘円により真宗寺に持ち帰られた。その時は瑞枝も同行していたかも知れない。いずれにしても一連のニュースは新聞に報道されている。

飯山は、浄土真宗本願寺派の地盤である。これらの絵葉書のことは檀家、本願寺派の寺院でも評判になったであろう。「椰子の実」を『落梅集』に発表して成功を収めた藤村が知れば興味を示すはずである。

そこに登場するのが、新設されたばかりの飯山中学校に図画教師として島根県からやってきた森本香谷である。就職を紹介したのは藤村と一緒に小諸義塾で図画教師をしている丸山晩霞である。森本香谷は、とりあえず真宗寺に宿を取った。

『破戒』の冒頭は「蓮華寺は下宿をかねた……」で始まる。『破戒』の主人公瀬川丑松のモデルとなる清水謹治も五年前から真宗寺に下宿していた。そこに森本香谷を訪ねて丸山晩霞がやってくる。

水彩風景画家である森本香谷や丸山晩霞は、「椰子の

葉陰」などの絵葉書に関心を持ったであろう。そのまま模写すれば立派な作品になりそうなのである。事実、グーグルの画像検索を使ってこの「椰子の葉陰」に似た画像を探してみたところびっくりしてしまった。百二十年も前の絵葉書がインターネット上に存在していたのである。

諸説あるが、通説によれば、藤村が飯山を訪れたのは二回である。いずれも「千曲川のスケッチ」[X]の記載を精緻に追いかけた研究結果によるが、結論から言うと一回目は豊穣な稲田を見るような秋で丸山晩霞が同行していた。一九〇三年の秋のことであろう。おそらくこの結論と繋がる記載が「千曲川のスケッチ」に記されている。

（千曲川・山に住む人々の一）

飯山の方では私は何となく高い心を持った一人の老僧に逢ってみた。連れ添う老婦人もなかなかのエラ者だ。……君は印度に於ける仏蹟探険の事実を聞いたことがあるか。その運動に参加した僧侶の一人は斯の老僧の子息さんで、娘の婿にあたる学士も矢張一行に加はった人だ。学士は当時英国に留学中であったが、病弱な体軀を携げて一行に加はり、印度内地及び錫蘭に於ける阿育王の遺蹟などを探り、更に英国の方へ引返して行く途中で客死した。この学士の記念の絵葉書が沢山飯山の寺に遺って居たが、熱帯地方の旅の苦しみを書き付けてあったのなぞは殊に、私の心を引いた。老僧の子息さんは兵役に服して居るとかで、その人には私は遭って見なかった。

通説の二回目は一九〇四年一月十三日から十四日と日時がはっきりしている。この時の様子を「千曲川のスケッチ」などからまとめると次のようになる。

（千曲川・千曲川に沿うて）

軽井沢の方角から雪の高原を越して次第に小諸へ降りて来た汽車、それに私が乗ったのは一月の十三日だ。……この旅は私独りでなく小諸から二人の連があった。いずれも私の家に近いところの娘達で、I、Kという連中だ。この二人は小諸の小学を卒えて、師範校の講習を受ける為に飯山まで行くという。……Naiveな、可憐な、見ていても噴飯したくなるような連中だ。御蔭で私も紛れて行った。Iの方は私の家の大屋さんの娘だ。……豊野で汽車を下りた。……私が（前に）一度その坂の上に立った時は秋で、豊饒な稲田は黄色い海を見るようだった。

（千曲川・山の上）

種々の土地の話を聞き、同行した娘達を残して置いて翌朝私は飯山を発った。……一月十四日のことで村々では「ものづくり」というものを祝った。……豊野から復た汽車で、山の上の方へ戻って行った時は次

第に寒さの加わることを感じた。

（田中富次郎論文[6]）

三村きの氏（K）の記憶では飯山行きの藤村の服装は……馬子のような風体であったが、寺へは二人のお供だと言へ島崎だとは言うなと固く口止めされていた。…もうひとりの白樺山いそじ（I）は「清水先生は小学校の先生でしたから、私共を可愛がられまして、お二階のお部屋へはよく伺ひました。破戒を拝見いたしました時……破戒の主人公丑松さんは、清水先生をお書きになられましたことすぐわかりました」と言っている。

（高野辰之の『破戒』後日譚・猪瀬[4] (p.162)）

確かに藤村という人がこの寺に来たことが一、二度あるな……老奥様に訊ねたところ、確かに偽名を使って寺に来ている。……馬子のいでたちだったが手足を見ればすぐわかる。同行の女学生に問い質してみると……藤村という有名な詩人だという。そこで手厚くもてなした。

通説二回目の真宗寺訪問記事を全て並べてみても、その時藤村が住職の井上寂英に会った形跡はない。「種々の土地の話を聞いた」相手は清水謹治であろう。謹治は長野尋常師範学校を経て飯山の小学校訓導になって真宗寺に下宿していたが、破戒の主人公の瀬川丑松も長野尋常師範学校、飯山の小学校訓導と全く同じコースを辿っている。藤村にとって通説二回目の真宗寺訪問が清水謹治への取材にあったことは疑いない。しかもその日は汽車で小諸から豊野まで行き、豊野から飯山までの二十キロメートルは千曲川を舟で下っているので五、六時間かかり、到着は夕方になっていたであろう。翌日は朝立ちしている。「椰子の葉陰」の取材時間など取れなかったはずである。

また、老奥様の記憶では確かに偽名を使って一、二度来ているとある。しかも、固く口止めしたというのは特別な理由があるはずだ。私案を示そう。

その頃、藤村は『新小説』一月号に、妻の婚約者であった男とのことを「水彩画家」という短編に発表し、題名からモデルと目された丸山晩霞が激怒していた[7] (p.125～137)。

間もなく『明星』に発表される「椰子の葉陰」も真宗寺の了解を全く得ていない。藤村は『破戒』の執筆を控えて、問題を避けたかった。

それらの問題に加え、一月十三日から十四日に取材して、原稿を書き、出稿、校閲、校正、印刷を経て『明星』三月号（三月一日発行）に載せるまで一ヶ月半というのは特別な便宜を図ってもらったとしても簡単ではない。

藤村が『新小説』に載せた「津軽海峡」の場合を調べてみると取材は二〇〇四年七月末、八月十八日に出稿して

十月号に載せるつもりであったが、実際には十二月号になってしまっている。事情は分からないが取材から四ヶ月もかかっているのである[7] (p.172)。

そのような検討をしている最中、「箱店屋横丁大家の店番日記」という超長期ブログを見つけた。その中に「#破戒」と名付けた連載が今年初から本格化して既に二四八件あり、「藤村が飯山を訪問した時期と回数」を取り上げたブログだけでも四十件もある。

このブログの優れている点は、通説が主に「千曲川のスケッチ」の記載に依存して、一回目（秋、豊饒な稲田の頃）と二回目（一月十三日～十四日）しか認定していないのに対して、『破戒』の内容から、天長節（十一月三日）のテニス試合と、真宗寺の報恩講（十一月二十八日）の記述も、藤村が実際に見たことが元になっていると判断していることである。

すなわち、一回目（秋、豊饒な稲田の頃）、二回目（天長節頃）、三回目（報恩講の頃）、四回目（一月十三日～十四日）との新説を出し、「椰子の葉蔭」の原稿を書き上げたのは、二〇〇三年十一月末から十二月初旬だったとしている。それなら出稿から三ヶ月、取材から四ヶ月となり「津軽海峡」とほぼ同じである。

すこし冗長になったが数多くの理由を挙げて一月十三日～十四日の取材では『明星』の三月一日発行に間に合わないと主張してきた。しかしそれらには決定的な証拠が欠けていた。

ところが、やっと決定的な証拠が見つかったのである。

決定的な証拠（その一）姉崎正治への取材

それは猪瀬直樹が言うように「小説の第一信から第十三信までは、ほぼ現存する絵葉書に即している」が、感動を呼ぶ第十四信から第十七信は完全に藤村の創作で、その部分に相当する宣正の絵葉書がないのは当然である。宣正は第十四信の五月四日付で「いよいよ昨日にて印度旅行を終り申し候。明朝出発の因幡丸、われを乗せて此港を離るべく候」と英国に向かってしまうのである。

もちろん創作であれば、藤村の得意な分野であり、いくらでも書けたであろう。しかし注意深く読むと誰かに取材しなければ、藤村ひとりでは書けない項目がいくつもある。例えば

① コロンボの仏教大学「ウヰデフダヤ」
② 奇異なる牛の牽く車「ゼビュウ」
③ 「浩浩鯨波，巨鼇起滔天之浪。獨歩鐵門之外，亘萬嶺而投身　孤漂銅柱之前，跨千江而遺命」……『大唐西域求法高僧傳』の一部。

などである。

これらを藤村に伝え得る人物は、宣正が最後にコロン

ボで古銘文等の持ち帰りを託した姉崎正治しかいない。

姉崎正治（一八七三生）は東京帝大哲学科を一八九六年卒業、『印度宗教史考』を出版、一九〇〇年からドイツ・イギリスに留学し、印度・セイロンを経て一九〇三年帰国、翌年東京帝大教授となる。藤井宣正の印度での最終時期二ヶ月間ほどは姉崎正治としばしば一緒に行動していた。

さて、それでは藤村は本当に姉崎正治に取材したのであろうか。

実は姉崎正治は、文人としても優れた才能を持ち、帝大在学中には高山樗牛らと『帝国文学』を創刊、石川啄木とも交流があり、後になるが自らの主宰する雑誌『時代思潮』に啄木の詩を載せている。年齢は藤村の一歳下である。ベルリン大学留学中にリヒャルト・ワーグナーの楽劇に魅せられ、当時の総合雑誌『太陽』一九〇二年三～四月号の「高山（樗牛）君に贈る」でワグナーへの心酔ぶりを披露したことが明治末期の知識人たちの間にワーグナー・ブームを巻き起こしたという。ちなみに一八九五年『太陽』の第一巻には藤村も姉崎正治も稿を寄せている。

このような状況からみて、おそらく姉崎正治と藤村は直接的ではなくとも相互に知っていたのは間違いない。

更に決定的な証拠は、『明星』の「椰子の葉陰」の文中に何のコメントもなく突然「大音楽家ワグネル」の似顔絵が中央に挿入されていることである。後の全集等では



『明星』3月号(3月1日発行)の「椰子の葉陰」の原稿中央部に何のコメントもなく、唐突に挿入されたワグナーの似顔絵。

は削除されているので、編集者もその挿絵の意味を理解出来なかったのであろう。

事情が分かって見れば、藤村が何らかのルートで姉崎正治に取材したことを暗示しているのは疑いない。

もう一つの傍証を示そう。姉崎正治は一九〇三年六月に帰国するが、その年の十一月七日帝国文学会で講演した「ワグネルの戯曲に於る恋」の要旨を『明星』十二月号に載せ、更にその翌月の『明星』一月号に「ペクリンが浪の音づれ」を載せるのである。姉崎正治は作品のほとんどを自ら関与する『太陽』や『帝国文学』に載せていて『明星』に載せたのはこの二件のみである。

『明星』三月号には「椰子の葉陰」が載るが、いわば

藤村にとって『明星』はホームグランドである。時期から見て藤村が姉崎正治に取材した事に関連して紹介したのは間違いないであろう。

ここでもう一つ重要なことを紹介しておきたい。

藤井瑞枝と高山樗牛・姉崎正治は既知の仲であった。それは一九〇一年瑞枝が小田原に住んでいた頃、樗牛の弟、斎藤信策（野の人）が小山東助（後に東京毎日新聞主筆、衆議院議員）と一緒に訪ねて来たことがあった。ふたり共、島地雷夢の二高・帝大の友人であるがその時瑞枝は、樗牛の弟とは初対面で、容貌・風姿・言語・動作が樗牛とは少しも似ていなかったと述べている。その後、樗牛の弟は瑞枝のことを雷夢同様に「姉さん」と呼び、「駄々をこねたり理屈をいったり夢を語ったり遊んだり困らせ」ている。斉藤の雅号を「野の人」と名付けたのも瑞枝である。雷夢は明治仏教界の改革者島地黙雷の三男、法灯を継ぐ期待の秀才であったが二高時代にキリスト教に入信してしまった。同時に洗礼を受けたのが吉野作造と内ケ崎作三郎である。

筑摩書房の『明治文学全集40』は高山樗牛・斉藤野の人・姉崎正治・登張竹風を一緒に収録している。いわば、『高山樗牛全集』はこの四名で成り立ち、樗牛と共に雑誌『太陽』『帝国文学』で論陣を張った「野の人」は、兄樗牛の死に臨み、姉崎正治に送った書簡に「予は君が最愛の友の一人なる高山樗牛の弟也。予が命よりも愛したる彼は今逝きたり」と記している。

高山樗牛も姉崎正治も瑞枝と同年配であり藤井宣正の帝大哲学科の後輩である。どのようなルートで知り合ったか判らないが、瑞枝はそんな明治に生きていた。

なお、瑞枝には「逝ける野の人」という長文の弔辞（一九〇九年八月十七日清水潟にて）がある。

余談ながら、藤村が「椰子の葉陰」の十四信以降、創作で書いた部分に、宣正の最後を看取る留学僧が現れる。藤村はこの留学僧が初出することを「いまだ父上に書き送らざりし」と「言い訳がましく」書きながら、「見るからに頼母しき青年」と紹介している。藤村が姉崎正治をイメージして書いたものと思う。

かくして「椰子の葉陰」の取材は、通説の第二回目（一月十三日から十四日）ではなく、水彩画家丸山晩霞が同行した時（豊饒な稲田）を初回として、天長節（十一月三日）頃と報恩講（十一月二十八日）にも追加取材していたとの「箱店屋横丁大家の店番日記」の説を追認したい。

決定的な証拠（その二）清水謹治への「返事謝書」

ここまで書き上げたところで、国会図書館に手配していた藤井宣正の日記『印度霊穴探見日記』[7]のコピーをやっと入手した。主要な内容は田中富次郎論文[6]で承知

していたのであまり急いでいなかったが、精読してみて驚いた。

宣正が印度「第二旅行」を終えた二〇〇三年二月二十日に友人等十数名宛てに印度から「返事謝書」を出しているが、その中に清水謹治の名前を見つけたのである。

『破戒』の主人公瀬川丑松の人物モデル清水謹治は、長野師範学校を卒業し、飯山の下水内高等小学校の訓導となった一八九八年から再び真宗寺に下宿している。

その頃、藤井宣正は西本願寺内局との対立で文学寮教頭を追われ浦和中学校の校長を務めていた。宣正は瑞枝を伴いしばしば真宗寺に里帰りしていたに違いない。

清水謹治にとって帝大卒の中学校校長と親しく話すのは貴重な機会であった。その宣正から真宗寺に絵葉書が届きはじめる。謹治は早速印度の宣正に手紙を送った。

その清水謹治は長野師範学校で同級のアララギ派の島木赤彦とともに藤村の熱烈なファンであった。後に飯山小学校校長、飯山町長を勤める。

宣正の二月二十日付「返事謝書」は、船便の関係で二月二十四日にナーグプルから出した「椰子の葉陰」の絵葉書と同時に真宗寺についたであろう。それは清水謹治にとって「椰子の実」の作者島崎藤村にぜひ知らせたいニュースであった。

ちょうどその頃、飯山中学校に図画教師として赴任してきた森本香谷も真宗寺に下宿していた。ふたりは、島崎藤村の「椰子の実」のことや「椰子の葉陰」の絵葉書のことについて話したに違いない。そしてその話は藤村と同じく小諸義塾の図工教師をしている丸山晩霞に伝わる。

繰り返すが、清水謹治は藤村にとって『破戒』の貴重な取材源であり、後に主人公瀬川丑松のモデルになる人物である。その清水謹治が、絵葉書「椰子の葉陰」をもって藤村を待ち構えていたのである。

だから判る。藤村にとっては、清水謹治から「椰子の葉陰」の絵葉書を知り、まず「椰子の葉陰」を書き、その縁で飯山を舞台に彼をモデルとして『破戒』を書き始めたのである。いわば、藤井宣正からの絵葉書「椰子の葉陰」が『破戒』の舞台を飯山に導いたのである。

そうであれば、藤村が詩作から小説に向かって苦闘していた時に、藤井宣正と瑞枝が大きな役割を果たしたことになる。藤村の研究者にとっては大きなニュースといえるであろう。

それにしても、猪瀬直樹が流石だと思うのは、藤村の成長過程に、有名な新体詩「椰子の実」から「椰子の葉陰」に至る一本の道筋があると指摘していたことである。具体的な意味は不明であるが、誰でも想うことを藤村研究者はあまり重視していなかったようだ。むしろ「箱店屋横丁大家」や筆者のような素人の直観の方が正しい場合もあるのである。

[F] 鶴枝と高野辰之　志を果たして帰る

小学唱歌「ふるさと」や「朧月夜」が高野辰之の作詞であることは、今ならすぐ判る。しかし、その唱歌を学んだ時分は誰も知らなかった。高野辰之の妻井上鶴枝の姪でミス上海となった井上武子でさえ、小学校で習った「ふるさと」が叔父高野辰之の作詞だなどとは全く知らなかった。飯山の人達も同様であった。

しかし猪瀬直樹の『唱歌誕生―ふるさとを創った男―』を読むと感銘を受けるはずである。まさに唱歌「故郷」に出て来る「志を果たしていつの日にか帰らん」の物語なのである。

鶴枝十七歳、高野辰之二十二歳の時ふたりは結婚する。高野辰之は苦学しながら尋常師範学校すなわち小学校の先生になるコースを進んでいた。結婚するとき、鶴枝の母よしえは「将来、人力車に乗って山門から入ってくる男になるなら……」との条件をつけた。

しかし尋常師範学校は当時のエリートコースと全く異なっていて、どんなに努力しても限界があった。それが辰之四十九歳一九二五年に東京帝大から文学博士の称号を受けて人力車に乗って故郷に錦を飾ったのである。

藤村は『水彩画家』のモデル問題で丸山晩霞を激怒させたが、『破戒』でも真宗寺（蓮華寺）の住職のことを「養女に手を出すような女狂い」と描いたので飯山の人たちは小説を信じてしまい、真宗寺の一族はえらく迷惑して藤村を怨んでいた。

そのため娘婿の高野辰之が「『破戒』後日談」を雑誌『趣味』の一九〇九年四月号に変名で載せる。しかし藤村は寺院や住職をモデルにして描いただけでこれは「小説」だと反論する。藤村は日本全国の読者を対象としていたが、飯山はローカルな地域、「借景」とした真宗寺とそこに登場する人物を区別しなかった。

どうやら藤村の小説には当初から「モデル問題」がつきまとっている。その極まりが、実姪の島崎こま子と一線を越えたことを『新生』に赤裸々に描いたことである。

なお、高野辰之は清水謹治と同い年の従兄弟で二人はとても仲が良かったという。共に長野尋常師範学校の出身であるが学年は辰之が一年上である。藤村が「椰子の葉陰」を書く頃、辰之は既に結婚して上京していたので、直接の関係はないが、同窓の島木赤彦、清水謹治、高野辰之がみな文学を志していた。そう言う時代であった。

おわりに

冒頭に書いたが村上邦治氏の連載「安芸門徒シルクロード紀行」に登場する藤井宣正の名を見て訳もなく懐かしさがこみ上げてきて、その理由を知りたくなった。

そのため、藤井宣正を調べる内に、宣正や瑞枝の魅力にも触れ完全に嵌まってしまった。ひとつ疑問を解くと、また新たな疑問が生ずる。そして当初は思ってもみなかった長い探索の旅となってしまった。

コロナで外出も思うようにならない中、結構楽しい旅であったが、この辺で締めたい。

最後になったが、藤井宣正の「孟買通信」[8]のコピーにサンチーの大塔の写真がある。直径三十六メートル、全高十七メートルほどの紀元前後の仏塔で多くの仏教遺跡が破壊された中、丘全体が樹木で蔽われていたため、奇跡のように破壊を免れた。

もう四十年ほど前、世界各地の古代建造物の写真や図面とにらめっこしながら、古代の尺度研究に没頭していた。その中でも仏教のルーツ、印度サンチー大塔は整然とした計画で造られていて大変魅力的であった。もしかして、その時に藤井宣正に出会っていたのかも知れない。

参考文献

[1] 河口慧海『西蔵旅行記』時事新報と大阪毎日新聞連載、一九〇四　今は『青空文庫』で読める。

[2] 村上護『島地黙雷伝―剣を帯した異端の聖―』ミネルバ書房、二〇一一。

[3] 井上瑞枝『心の露』日黒書店、一八九一。

[4] 猪瀬直樹『唱歌誕生―ふるさとを創った男―』小学館、二〇〇二。「あとがき」によると初出は『月間 Weeks』で単行本となったのは一九九〇年。

[5] 藤井瑞枝『乱れ雲』丙午出版社、一九一二。

[6] 石黒秀一「界雄一代」『長岡市の広報誌よいた』三一〇～三三三号、一九九二。

[7] 田中富次郎『島崎藤村Ⅱ『破戒』・その前後』桜楓社、一九七七。原論文「「島崎藤村に関する覚書」藤井宣正について…『破戒』の発想(1)…」『信州大学教育学部紀要』15、一九六五。

[8] 三井文彦校注『藤井宣正・印度霊穴探見日記』飯山市藤村文学研究会、一九七七。三井文彦『藤村と飯山』発行所真宗寺、一九八八。

[9] 藤井宣正「孟買通信」上原芳太郎編『新西域記上巻』有光社、一九三七年。

[X] 島崎藤村『千曲川のスケッチ』左久良書房、一九一二　今は『青空文庫』で読める。

なお、ウェブやブログ関係、特に「箱店屋横丁大家の店番日記」の「#破戒」と名付けた連載から多くを学んだが、「藤村が飯山を訪問した時期と回数」を取り上げたブログだけでも四十件もあり、詳細を示すのが困難である。ブログにログインすれば辿れるので省略した。

奉幣勅使罷り通る

千坂精一

分県地図の『栃木県』をひろげて鬼怒川水系を辿っていたとき、偶然『旧例幣使街道』と書いてあるのが目に入った。

よく見ると、鹿沼から今市を経て日光に至る道筋なのでこれまで『日光街道』と承知していたところである。

街道名になっている『例幣使』とはなんなのか、以来ずっと気になっていたので余暇をみて調べてみた。

すると、旧暦四月十四日の日光東照宮大祭に幣帛を供えるため朝廷から派遣された勅使が通る道なので、その名が冠せられていたということがわかった。

例幣というのは、朝廷が毎年九月十一日に皇室の宗廟伊勢神宮に幣帛を奉っていたので例幣といい、例幣のために派遣される勅使を例幣使といった。

元和二年（一六一六）四月十七日、すでに引退して駿府城（静岡市駿府町）に隠棲していた家康が七十五歳で病歿すると、幕府は生前家康が

「わが遺体は久能山（静岡市駿河区根古屋）におさめ、葬儀は増上寺（東京都港区芝公園）でおこない、位牌は三河大樹寺（岡崎市大樹寺）にたて、一周忌がすんだら日光山（日光市山内）に小さな堂を建てて勧請せよ。関八州の鎮守となろう」

と言っていたその遺言にしたがって久能山に埋葬し、一周忌がすぎた翌年四月日光に改葬した。

正保三年（一六四六）、朝廷は幕府に敬意を払っておいたほうが得策と考えたのか、はたまた幕府が家康を祀る日光東照宮に朝廷が頭を下げることで威光を示そうとしたのかは定かでないが、とにかく朝廷は伊勢神宮と同様に日光東照宮へも奉幣の勅使を送ることになったのである。

奉幣使は堂上公家五十七人が任命され、幕府徒士頭の

のうち木曽路だけで十一宿もあった。

そのなかの馬籠宿で生まれた文豪島崎藤村が大作『夜明け前』の冒頭で「木曽路はすべて山の中」と書いているように、木曽川沿いを行く木曽路は鬱蒼とした樹木に覆われた薄暗い道がつづいていたのであろう。

とにかく奉幣勅使は労力を要する任務であるから敬遠されて、小身の経済的に恵まれない公家たちに課せられていた。

彼らはやむなく拝命すると、鬱憤晴らしに中山道を倉賀野から例幣使街道へ入ると、勅使であることを笠に着て横柄に振る舞った。

幕府の出先機関も奉幣勅使が通るとなるとたいへん緊張して、栃木陣屋からきびしい指示を伝達した。

その主な内容は、

・通行される道や橋の補修。
・火の用心を心掛けて、焚火は禁止。
・宿所本陣のまえや宿場の道の両側に砂を盛る。
・一行の荷物を運ぶ人馬は沿道の町村から無償で提供する。
・二階から見下ろすことは厳禁。窓を閉めて目張りをする。

等々であった。

そして翌日、一行は栃木町、合戦場（栃木市都賀町）、金崎、楡木（鹿沼市）、鹿沼宿を経て日光に到着する。

そこで歩行に疲れて微発した農民の担ぐ駕籠に乗るときはこうやった。

はじめのうちはおとなしく乗っているが、やがて乗っている駕籠を揺する。はじめは駕籠舁きに合わせる程度だが、そのうちに大きく揺さ振る。担いでいるほうは危なくてすすめないから、

「お静かに」

と頼むのだが、奉幣勅使のほうは聞こえぬ振りしていっこうにやめようとしない。

やむなく幾らかを御捻りにして渡すと静かになる。

だが、それでやめるわけではない。

すこし行くとまた揺する。仕方がないからまた御捻りを渡すとやめる。そんなことをなんども繰り返すのだ。

揺すられるたびになんどでも御捻りを渡せば無事にすむが、わたさないと腹を立てて駕籠を激しく揺すり、はてはわざと駕籠から転げ落ちて、

「この始末どうしてくれる」

と凄み、大枚の治療費と慰謝料を要求されるのだから手に負えない。

江戸時代の風俗、文学研究者の三田村鳶魚は、脅して金品をまきあげる〝強請〟の語源はこの〝揺すり〟の行為から生まれた、といっている。

なるほど、言い得て妙である。

こうして小遣銭の荒稼ぎをやったようだ。

先導で毎年四月一日寅ノ刻（明け七ツ、午前四時）に行列を組んで京を出発して近江国に入り、大津を経て草津で東海道とわかれて中山道をすすみ、上野国倉賀野（高崎市）でこんどは中山道とわかれて日光例幣使街道に入って東照宮春の大祭の初日にあたる四月十五日に日光へ到着する、十五日間の長旅であった。

そして、翌日京から持参した金幣を神前に供えて参詣し、午後帰路に就く。

往路は宿泊日と場所を予め定められており、日光到着日の前日は東照宮から四里十七町（十七・六キロ弱）手前の天明宿（栃木県佐野市）泊まりが定められていた。

このように往路は行程が定められていて、雁字搦めで息抜きなどできなかったが、帰路は日程も行路も定められていなかったので中山道を戻らずに、江戸に出て充分息抜きをしたあと、物見遊山しながらのんびり東海道五十三次を経て京へ帰着する行程を立てた。

東海道が相模（神奈川県）、伊豆、駿河、遠江（いずれも静岡県）、三河、尾張（いずれも愛知県）、伊勢（三重県）、近江（滋賀県）と主に風光明媚な太平洋沿岸地帯を行くのに対して、中山道は武蔵（埼玉県）、上野（群馬県）、信濃（長野県）、美濃（岐阜県）、近江（滋賀県）と内陸を行くので、東海道とちがっておよそなんの変哲もなかった。

東海道五十三次に対して中山道は六十八次もあり、そこを彼らはいつの頃からか中山道を歩きながら道中で稼ぐことを考えた。

甘い汁でも吸わなければ一箇月余りも過酷な旅などしてはいられないというわけだ。

そこで知恵を絞ってあれこれ考えたのであろう。

まず手軽にできるのは生産品の販売である。京には食料品も雑貨も珍味珍品が数多い。

これらは出入りの業者を威圧すれば容易く調達できるが、売上高は知れている。

京にとどまらず上方の品まで調達したところで労多くして利益は少なかった。

結局は値が張り、利益も大きい呉服物が多かったようだ。

これらを道中で売りながら旅をするのである。荷物の運賃は公儀御用として無料にしたから利益は大きかった。

奉幣使は歴とした勅使であり、それも行先が日光東照宮とあっては、沿道の扱いは丁重を極めざるを得ない弱味につけ込んでいい気になり、高値で売りつける横暴な振る舞いが目立つようになっていった。

こんな話もある。

奉幣勅使は京から日光まで徒歩と定められていたようで、馬や駕籠に乗る費用はなく自己負担であった。

困り果てた沿道の者たちは、随員にもれなくたのみ込む入魂料を用意して渡す習慣にしていったが、それでも金を強請る行為はやまず、見兼ねた幕府は、
「不法な要求をされたら訴え出るように」
と通達したのだが、沿道の住民たちは後難を恐れて訴え出る者などいなかったという。

また、こんな話もある。
随員たちは、勅使の公家たちが食べ残した飯を干して、
「病に卓効がある」
といって売ったり、公家の入浴した残り湯を売ったりした。

いくらなんでも、こんなものを信じて買うものなどいないだろうと思うのだが、それが結構売れたらしい。

ばかばかしいと思うのだが、この時代の庶民にとって朝廷やそこに仕える公家たちは神に近い存在と考えられていた節があったから、信じて購入したのであろう。

だから公家たちが「入魂じゃ」と言って金をせびると、庶民は高貴な人から親密な関係と言われて感激し、財布の紐を緩めたようだ。

こういう馬鹿馬鹿しい話がいくつものこっている。

またまた、こんな話もある。
帰路は中山道をもどらず江戸に出て東海道を行ったと述べたが、それは江戸での稼ぎがあったからである。

幣使一行は前年奉納した御幣を受け取るとそれを江戸に持ち帰った。

そして、これを細かに刻んで大名屋敷に届けた。

大名側も相手が公家だから粗略には扱えずに応分の金を包んだのだ。このことは大名たちが内々ですませていたから、表沙汰にはなることはなかった。

こうした行為はほどんとが泣き寝入りだったので表面化することがなかったから、幣使たちは毎年おなじ行為を繰り返していたのでどこでも嫌われていた。

被害者は弱い立場の例幣使街道の庶民たちであったから、太刀打ちや訴訟などできずに泣き寝入りだったのである。

下級公家たちはこうして懐を温かくしておいて、東海道を物見遊山しながら悠々と京へ帰っていったのであろう。

奉幣勅使の日光への旅は、沿道の各町村から金をせしめるための旅でもあった。

こんな馬鹿馬鹿しい話が実際にあったというのだから、あきれてものが言えず、あいた口が塞がらない。

（了）

回想のベルリン
――統一ドイツの首都ベルリン――

山本鎭雄

はじめに

私は一九八六（昭和六一）年十月から一年間、ドイツ連邦共和国（以下、西独と略す）の、西ベルリンへ海外研修の機会が与えられた。同年四月、ソ連のチェルノブイリ原子力発電所四号炉で史上最大で最悪の爆発事故が発生した。その当初、ソ連政府は原発事故の発生を秘密にしていた。だが、二日後に、放射能セシウムがスウェーデン北部の上空に飛来し、大雨で降下したことが明らかになった。私が滞在する予定の西独でも放射能汚染が盛んに報道された。

西ベルリンへの出発を中止しようとも考えたが、我が人生で滅多にない好機でもある。東西対立を象徴する西ベルリンに滞在し、勉学の傍ら現地を見物し、現代社会の一端を考察しようと考えていた。私は期待と不安を抱きながら、妻と高校生の娘とともに、西独に向かった。無事帰国出来たのは、ベルリン音楽大学に在学する学生諸君をはじめ、彼らが紹介してくれたドイツ人の配慮と厚情による。改めて、ここに感謝したい。

当時の西独は経済的不況で、外国人、とくに外国人労働者家族にたいする出入国管理は極めて厳重だった。私は大学改革で新設された「改革大学」のビーレフェルト大学社会学担当のハンスユルゲン・ダーハイム教授から「受入れ承諾書」を頂戴し、正式に旅券（パスポート）の交付を受けて出国した。ところが、長期の西独滞在のビザはなかなか交付されず、ビーレフェルト駅前のホテルに一ヶ月近くも宿泊を余儀なくされた。その間、私たちはダーハイム教授の自宅に招かれ、夕日を眺めながら、夫人のドイツの手料理をご馳走になった。

また、ダーハイム教授に誘われ、ビーレフェルトの近くの「トイトブルクの森」を散策した。木々の葉の間か

らもれる木漏れ日、落ち葉を踏み、「カサカサ」と靴と触れ合う音は今でも懐かしい。やっと、私たちはダーハイム教授に案内されて、当地の出入国管理事務所に出掛けた。事務所の長い廊下には数多くの外国人労働者と家族が不安そうに待機していた。私と妻に滞在ビザが交付され、やっと西ベルリンに向かうことが出来た。

東西ベルリンの印象

ドイツ西部の都市ビーレフェルトから都市間列車に乗り、東北東三三六メートルの西ベルリンに向かった。はじめ車窓から西独の都市や農村の佇まい、石造りや木造の堅牢な住宅、さらに広大な農地と空地など、ドイツ特有の異国情緒を堪能した。ところが、東独領に入ると、列車はプラットホームに停車せず、ただ通過するだけで、ドイツで言う「幽霊駅」だった。しかも線路に沿って白樺のほか、椎や樫などの常緑広葉樹が密生し、車窓から周辺の景観を遮っていた。冬季になれば、線路が雪に覆われ、それを防止するための予防策だろうかと考えた。むしろ車窓から東独の一切の景観を遮ろうとしているのではないかと推察した。

西ベルリンのフリードリッヒシュトラーセ駅に下車し、駅から荷物を持ち、タクシーに乗った。私は運転手にドイツ語で西ベルリンの住宅街に住む妻の従弟の住所を指定した。ところが、彼は「アイ・キャン・スピー

ク・イングリッシュ」と返答するではないか。ドイツ語の住所を英語で話すことに躊躇し、私の英語の日常会話の能力を探っているのだろうと推測した。彼にドイツ語で書かれた住所のメモを見せ、「アイ・シー」と言って、発車した。途中、タクシーは広いティーアガルテンの自動車道から、三車線の広いロータリー交差路に入った。交差路の内側には高さ六七メートルの歴史的なベルリン戦勝記念塔（ジーゲスゾイレ）、その頂上に勝利の女神ヴィクトリアの立像を見上げた。帰国して、ヴィム・ヴェンダース監督『ベルリン・天使の歌』のポスターを見て、あの戦勝記念塔を懐かしく思い出した。

妻の従弟夫婦が借りているアパートに着き、そこで旅の草鞋を脱いだ。従弟はベルリン芸術大学音楽部（当時はホッホシューレ）に入学し、留年してすでに六年生で、毎週一日一回、大学で担当教授の音楽の指導を受けていた（授業料は無料、また公共のバス・地下鉄の料金も無料）。それ以外の日は音楽関係のアルバイトをして、家族四人で気楽に生活しているように思われた。アパートが見つかるまで、そこにしばらく過ごさせてもらった。

その間、私の妻は若い夫人からベルリンにおける日常生活のあれこれを伺ったようだ。私は夫人から「近くにトルコ屋さんがある」と聞いた。よく聞いたら、近くのスーパーの入り口の空間にテントを張り、そこで若いトルコ人が野菜を売っていた。通称、「トルコ屋さん」と言っているのだろう。ドイツ人のジャガイモや肉を中心とした従来の食生活が変化し、野菜を多く食べるようになったと思われた。

西ベルリンのミニ・イスタンブール

従弟のマンションを出て、次第に日常生活が落ち着いた。「ベルリンの壁」に近い、外国人労働者のトルコ人が主に利用するクロイツベルクのテント張りのショッピングセンターに出掛けた。とくに魚屋で魚を買い、妻が生魚のイワシと香味野菜でマリネを調理してもらった。その日はイスラム教の安息日（金曜日）で礼拝日だった。興味本位に近くのモスク（礼拝堂）に行き、入口から中を覗いたら、信徒（ムスリム）から大歓迎されたのには驚いた。聞き覚えのイスラム教の唯一の神「アッラー」を口にでもしたら、教会は誰でも信者として認めるそうだ。私はそこを早々と引き上げた（今日、ベルリンのユニークな観光スポットの一つだそうだ）。

トルコ出身の外国人労働者とその家族の暮らし方に関心を触発され、よくクロイツベルクに行き、トルコ民族の男尊女卑、主婦は金曜日以外は、めったに外出は許されないなどの風習の一端を観察した。当地は戦後の再整備・再開発が遅れたスラム街で、多くのトルコ人労働者家族が居住し、トルコ人ゲットー、ミニ・イスタンブールと呼ばれていた。おそらく、西ベルリンのドイツ人の差別感がそう言わせたのであろう。

さらに、失業者、就労忌避者、サブカルチャーを志向する芸術家や音楽家、ヒッピーなどのドイツ人が居住していた。また住宅占拠運動の根拠地で、テロリストやアナーキストの隠れ家となり、街頭行動の出撃拠点でもある。西ベルリンで知り合ったポリツァイ（警官）から、「あの地域は危険だから、絶対に行くな」と忠告されたことがある。だが、私はこの地域によく出掛けたが、危険な目に出会ったことはない。

残念だったのは、トルコ風の商業センターの地下に舞台があったが、ついに、踊り子の女性が腹部の筋肉を刺激的に動かすベリーダンスを見物しなかったことだ。もう一つは、ベルリンからオリエント急行に乗車し、トルコの首都イスタンブールに旅行しなかったことだ。途中、高くて広いボスボラス海峡橋からの眺めは抜群で、そこを歩くと、ここから「ヨーロッパを去り、アジアに入る」、その橋を戻れば、「アジアを去り、ヨーロッパに入る」と実感するそうである。また、知日家のトルコ人は日本人と分かると、「飛んでイスタンブール」（歌、庄野真代）と鼻歌交じりで近寄ってくるそうだ。残念ながら、私はそんな体験さえしなかった。

西ベルリンの暮らし

最初に入居したのが、ポーランド系のカトリック教会

付属の難民宿舎だった。当時、ポーランドからの政治的亡命者はなく、二階建ての宿舎は空き部屋になっていた。ただ、夜、西ベルリンに定住したポーランド人の女性グループが宿舎の奥の廊下に集まり、声高に会話していた。いつも安眠を妨害された。宿舎から、中庭を挟んで併設されている老人ホームを見ることが出来、その廊下に人影を見た。早朝、教会のドアをけたたましく叩き、女性の大声が聞こえた。何事かと思い、教会の入口に行った。女性の顔は血だらけだった。夫に殴られ、教会の神父に相談に来たのだろう。

そのうち、広いアパートの部屋が見つかり、転居した。帰国するまでそこに居住した。ベルリン芸術大学の校舎が近くにあったため、従弟の紹介もあって、日本人留学生がよく訪れ、待ち合わせ場所となった。留学生の一人がユニークなアルバイトを話してくれた。教会の牧師と芸術大学の学生グループが契約を結び、学生は順番で故人の命日に墓前で故人の愛唱歌など二曲を歌う。学生にとって結構有難いアルバイトだそうだ。他にも、学生は公立公民館で歌唱を教えるのも結構なアルバイトになるそうだ。だが、クラシックの音楽世界でプロになるにはなかなか難しいようだ。妻の従弟も帰国して、私立高校の声楽担当の音楽教師になった。

数人の日本人留学生が揃って我が家の下宿先に訪ねて来ると、妻は練った小麦粉を平らにして、調味したナスや葉野菜を餡にして両面を焼き、「御焼き」を留学生たちに振る舞った。その後、私が留学生たちに近く日本に帰国すると言ったら、妻に向って「『御焼き』を食べたいからベルリンに残ってほしい」と言われたのには参った。留学生やその仲間が演奏・出演するクラッシック・コンサートには、家族一同で観賞した。さすがに「音楽の都」ベルリンだった。

妻と娘は外国人のためのドイツ語学校に通った。妻は大して上達しなかったが、日常の買い物には不自由しなくなった。娘は日常会話に上達したようだが、独和辞典を引くのを面倒臭がった。帰国して、大学受験では外国語科目にドイツ語を出題する大学を受験し、見事合格した。また就職では特技のドイツ語を話せることを応募の条件とする企業（旅行業）を選んで試験を受け、無事就職することが出来た。だが、その職場では大変苦労したようだ。

妻と娘はドイツ語学校で北アフリカのモロッコ出身の女性と親しくなり、しばしば彼女の家に招かれた。妻は彼女から地中海の郷土料理を教わった。さらに彼女の夫のドイツ・ギムナジウム（中等高等学校）の先生とも親しく話を聞いた。私は彼から西独における「戦争と平和」をテーマにした平和学習について聞いた。西ベルリンではヒットラー・ナチスのドイツ独裁政治、ポーランド・アウシュビッツ強制収容所などが取り上げられているこ

とも聞いた。ベルリンでは「戦争」の跡を現地学習するには事欠かないだろう。

ミュンヘンのビア・ホールで

一九八六年十一月以降、八七年九月まで西ベルリンに滞在した。その一〇年前、一九七八年七月から九か月間、ドイツ東南の大都市ミュンヘンを中心に滞在したことがある。私が単身で先に西独へ行き、ローテンブルクのゲーテ・インスティテュート（外国人のための語学学校）でドイツ語の日常会話を学習した。ローテンブルクはロマンチック街道に中世の街並みを再現した。街の中心部のマルクト広場、その周囲には市庁舎、聖ヤコブ教会、市参事館、古風な旅館、中世犯罪博物館などを見物した。私は中世都市の面影を堪能した。

そのあと、ミュンヘンに行き、ミュンヘン大学に近い、学生街のシュヴァービンクに下宿先を決めた。有難いことに、一階はスーパーマーケットで雨や雪に当たらず、買い物が出来た。西ドイツのブンデスリーガ（プロサッカーの）では地元のＦＣバイエルン・ミュンヘンは超人気がある。とくにセンターフォワードのフランツ・ベッケンバウアーは「皇帝」の愛称で、絶大な人気を博していた。ホーム・ゲームの試合当日は街中の気分が高揚していた。試合後、私は下宿の窓越しにグループごとに応援で使ったチームの旗を担ぎ、高唱しながら道を練り歩く若者の姿を見たものだ。

ビールと言えば、コマーシャルで「ミュンヘン、札幌、ミルウォーキー」と言われた。残念ながら、私はこのミュンヘンで九月に盛大に開催されるビール秋祭りのオクトバー・フェストを見物出来なかった。ミュンヘンでしばらく一人暮らしをし、ドイツの日常会話の現場研修だと理屈をつけて、広々としたビア・ホールのホーフブロイハウスに出掛けた。ハウスの中心の一段高い演奏台に楽団が「乾杯の歌」などを軽快に演奏していた。

観光客のガイドが楽団の責任者と交渉して、音楽に心得ある一人がタクトを振った。謝礼は楽団の一人一人にビールを振る舞い、楽団員は演奏の合間にグラスを傾けていた。また日本人旅行者の団体客が見えると、楽団は唱歌「さくら　さくら　弥生の空は」を演奏していた。旅行ガイドが楽団と直接交渉したのであろう。

ホールの給仕はおおかた中年の女給仕だった。彼女たちはビールの入った大きなグラスを何個も両手の指に挟み、客に届けていた。給仕は微かに酒臭い息をしていた。客はその給仕に料金の他、なにがしらチップを渡すのが慣例のようだ。そのチップが給仕の収入の大きな部分を占めているという。また客同士がいざこざを起こすと、男の職員がやって来て、ホールから酔っぱらいたちを追い出していた。

このビア・ホールで、ドイツ語の日常会話の修得より、

ドイツ人の庶民の日常生活の一端を垣間見たように思う。それはゲマインシャフト（血縁・地縁などにもとづくドイツ特有の緊密な共同社会）である。十人以上も座れる大きなテーブルがあって、ビールを飲み、メンバーが自由に談論風発していた。私は何を話しているのか、分からなかったが、まさにゲマインシャフトのシンボリックな現場ではないかと思った。

私はミュンヘンで生活の段取りがつき、妻と幼い娘を迎えることにした。妻と娘は羽田空港を発ち、フランクフルト・アム・マイン国際空港の構内で会うことにした。そこで、私はフランクフルト空港に直行せず、ミュンヘンを発ち、東西ベルリンを見物したあと、フランクフルト空港に飛ぶことにした。家族三人はフランクフルト空港でミュンヘン行きのルフトハンザ航空の飛行機に乗り、疲労困憊してミュンヘンの下宿に着いた。

東西ベルリン初見

私は東西ベルリンを見物のために、ミュンヘンを出航し、西ベルリンのテーゲル空港に着いた。その日、「ベルリンの壁」、「壁」の東側にあるブランデンブルグ門、無人地帯のポツダム広場、また東ベルリン市民が「ベルリンの壁」を脱出するために工夫した秘話などを展示している壁博物館、国境検問所のチェックポイント・チャーリー（アメリカ統治地区で、英語で表記された）を見物した後、ベルリン中心部を歩いた。西ベルリンのメインストリートのクアフュルステンダム大通り（通称、クーダム）沿いの高層ビルのヨーロッパセンターの屋上から周辺を眺めた。

夜間、西ベルリンの広い目抜き通りはネオンサインで輝き、街路灯は明るく照らされ、賑やかだった。「ベルリンの壁」に囲まれた「陸の孤島」だが、何よりも「資本主義国のショーウインドー」と確認された。ビルの屋上から西ベルリンを観察したあと、東ベルリンの方向に向けられた望遠鏡があったので、望遠鏡のケースにコインを何枚も入れ、東ベルリンの街並みを観察した。東ベルリンの商店はすべて閉店し、街路灯だけが微かに道路を照らしていた。男女二人、軍服を着た男と正装した女がひっそりと歩いているのが見えた。何故か、男女のこつこつと靴音が聞こえるように思えた。東独の首都の東ベルリンは、華やかな「陸の孤島」の西ベルリンの都市部とはあまりにも対照的だった。

その翌日、西ベルリンの大通りのクーダムに出かけ、東ベルリン市直営の観光バスに乗車した。女性のバスガイドは軍服のような厳つい制服を着て、職務に極めて忠実のようだった。検問所のチェックポイント・チャーリーを通過する際、パスポートを提示させられた。さらに、バスガイドは入国料として西独五マルクを請求し、東独の絵葉書を買えというのだ。私はあまりにも写真の

写りが悪いのと高いので、断った。この観光バスの営業は社会主義の首都東ベルリンの宣伝と外貨稼ぎのためではないかと推測した。

観光バスは東ベルリンのウンター・デン・リンデン大通りに隣接するフンボルト大学、国立歌劇場、新設された共和国宮殿（議事堂とコンサートホール）、広大なパレード用会場のマルクス・エンゲルス広場を、説明を聞きながら車窓から眺めた。共和国宮殿とマルクス・エンゲルス広場は、あの広大なモスクワのクレムリン宮殿と「赤の広場」のミニサイズではないのかと思った。

都心を離れ、広い公園前で降り、案内されたのが、軍服のソ連の兵士が稚児を腕に抱えた巨大な石像だった。ソ連がヒトラー支配のベルリンを軍事的に制圧したこと、東独がソ連・東欧圏の一国として存続していることをアッピールしたのであろう。さらに車窓から市内各所に展示された大きなポスターを見た。それはロシア十月革命を指導し、社会主義政権樹立を指導したレーニンの大きな顔写真と、その脇に小さなホーネッカー書記長の顔写真、さらに「働けば、統一出来る」Arbeit macht Einheit という標語が大書きされていた。「統一」とは、のちに実現する東独と西独の「統一」を指しているのではない。東独が政治的に社会主義体制を維持し、「経済政策と社会政策の統一」という方針を明示したのであろう。それと同時に、私は、東独はソ連を盟主とする統制経済と官僚主義支配の国家にほかならないという印象を抱いた。

「ベルリンの壁」について考える

すでに触れたように、一九八六年十一月以降、私は妻と娘の三人で東西冷戦末期の西ベルリンに居住した。当時、東ベルリンは東独の首都である。西ベルリンは東ベルリンを含む東独の領土内に、あの世界的に有名な「ベルリンの壁」に囲まれていた。東独政府はそれを「反ファシズムの防壁」と称したが、現実は計画経済の東独から西ベルリンへ、西独への人口流失を阻止するために構築された。たしか六一年八月、東独は一夜にして有刺鉄線とコンクリート製の壁で「陸の孤島」となった西ベルリンを囲い、自動小銃を手に持った国境警備兵、監視塔、警備のための軽自動車が配置された。

「ベルリンの壁」の構築によって日常的な往来は不可能になった。例えば、東ベルリンに住所があり、西ベルリンの職場で働く多くの労働者（「通勤越境労働者」）は直ちに失職した。また西ベルリンに住所があり、東ベルリンの職場に通う労働者もまた失業した。西独は経済成長を実現するために、安価な労働力として、ドイツ語が話せ、専門技術労働者や若年労働者を必要とした。西独の企業はリクルーターを配置し、東ベルリンで密かにスカウトしたと言われていた。

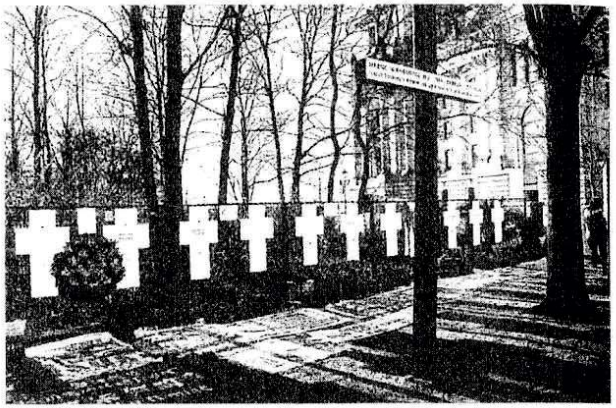
私は「ベルリンの壁」に囲まれた西ベルリンに住み、よく「壁」沿いの歩道を歩き見物して回った。例えば、西ベルリンの西側と、東独のブランデンブルク州ポツダムとの間は明らかに国境である。私はポツダム会談が開催された堅牢な木造建築のチェチリエンホーフ宮殿を見学した（エリート官僚の高級ホテルとして利用されていた）。ポツダム会談の会議場を見物したあと、周囲に国境監視兵がいないのを確認して、宮殿の敷地の東、鬱蒼とした森の細い道を歩き、静かに流れるハーフェル川を見物した。

ハーフェル川の手前は東独のブランデンブルク州ポツダム、川の向こう側は西ベルリンで、東独側のハーフェル川のほぼ中央に国境の限界を明示する、赤い頑丈なロープが張られていた。しかもポツダムから逃亡を阻止するために、水中に浮遊地雷が装備されていたであろう。地雷の装備は別にして、国家の主権行為として領土の限界を示すために、赤いロープで国境を明示すること、悪しきにせよ、目視を遮るコンクリート製の障壁を設置することもまた、主権国家として当然の行政上の行為であろう。ただ、海洋国の日本では目前に国境の限界を示す表示は存在しない。たしかに、私にはハーフェル川の赤い頑丈なロープは、これまで見聞したこともない異様な景観だった。

「ベルリンの壁」と言えば、直ちに東ベルリンと西ベルリンの頑丈なコンクリート製の国境の壁がイメージされる。と同時に、東ベルリンの域内にある威風堂々したブランデンブルク門、広大な空地のポツダム広場がイメージされる。その限りで、あの世界的にも有名な「ベルリンの壁」に外国人観光客が殺到している。だが、「壁」に沿って西ベルリン側のバス通りや歩道を歩き、それが「ベルリンの壁」のすべてではないことを知った。

すでに触れたように、東西ベルリンを分割する「ベルリンの壁」とは別に、西ベルリン（西独）を囲い、東独の領土の限界を示す国境が存在する。東独に限らず、主権国家として領土内に国境を明示することは何ら問題ではない。私は東西ベルリン間の境界の壁のほか、東独の西部のブランデンブルク州と西ベルリンの国境の沿道を歩いて、そんなことを考えた。もっとも、東独国民と西ベルリン市民を含めて、西独国民が検問所の通過をまったく認めないのは異常としか言いようがない。その後、「ベルリンの壁」に付設する検問所が解放され、自由な往来が認められた。さらにドイツが統一したことで国境を示す障壁は解体された。

西ベルリンに滞在中、私は「ベルリンの壁」に近接した沿道を歩き、各所に犠牲者の追悼碑を見かけ、自然と黙禱した。東独の国境を超え、西ベルリンに逃亡しようとして、国境警備兵に銃殺され、あるいは国境の川や運河で溺死した犠牲者の追悼碑だった。国会議事堂の直



「ベルリンの壁」の犠牲者追悼（平田達治）

ぐ近くにある追悼碑には氏名、生年月日、死亡した年月日が記載されていた。なかには氏名未詳 unbekannt という追悼碑もあった。さらに西ベルリンの最北東端の飛び地（東独領土内にある）のシュタインシュッテュッケンはまさに「孤島の孤島」である。当地に通じる幅二〇メートルの通行路を歩いて見たのは、多数の犠牲者の追悼碑だった。

東独のドイツ社会主義統一党 SED 書記長（国家評議会議長を兼務）のホーネッカーは、国境を越える逃亡者にたいして国境警備兵に銃殺を厳命していたという。一九八九年一〇月、ホーネッカーは書記長を辞任し、ホーネッカーを中心に一八年間にわたる一党独裁体制は動揺した。当時、私は、東独の国家的崩壊をまったく予測していなかった。帰国して、ほぼ二年後、妻は朝寝をしていた私を「大変だ！」と言って起こしに来た。NHKテレビ局が国境検問所の遮断機が解放され、東ベルリン市民が続々と西ベルリンに入国している風景を放映しているではないか。私には驚愕以外の何ものでもない映像だった。

私は西ベルリンの下宿で深夜鋭い数発の銃声がして、眠りを覚まされ、まんじりともしないで夜を明かした。翌朝、新聞を読むと、東ベルリンを逃亡しようとした青年が立ち入り禁止地域（「ベルリンの壁」の直ぐ東側）で射殺されたという記事が掲載されていた。残念ながら、東西対立の最前線の「ベルリンの壁」ではあり得ることだと了解した。国境警備兵は射撃訓練を受け、上官から「国境侵犯者」を容赦せず、射殺せよと命じられていたという。

ベルリン七百五十年祭

一九八七年四月、東ベルリンと西ベルリンは別々に都市生誕七百五十年記念祭を実施した。西ベルリン市民を含めて西独国民は直ぐ隣の東ベルリンにさえ入国することを禁じられていた。だが、私のような外国人は「ベルリンの壁」に付設された国境検問所でパスポートを提示

し、入国料として西独（Dマルクという）五マルクを支払い、さらに西独二五マルクを東独二五マルク（オスト・マルクという）強制的に交換させられ、簡単な入国審査を受け、容易に入国出来た。

私が最も警戒したのは、私服を着たシュタージ（秘密警察）の尾行だった。彼らは西ベルリン側の国境周辺で監視し、西ベルリンの居住者の挙動を探っていると、噂に聞いたことがあったからである。ただ、私は一度だけそれらしい男に親切そうに声を掛けられたことがある。私はますますシュタージを警戒することにした。それは、おそらくソ連のゲー・ペー・ウー（国家秘密警察）と同類であろう。

西独通過と東独通過の公式の交換レートは一対一だが、実際の交換レートは西独のDマーク一にたいして東独のオストマルク六～七だった。西ベルリンには「ベルリンの壁」の直ぐ近くに私設の通貨交換所があって、Dマークを持ち込めば、オストマルクに交換してくれた。東ベルリンの国境検問所ではオストマルクの持ち込みは禁じられていた。私はオストマルクと交換した数日後、東ベルリンにオストマルクを秘かに持ち込んだ。東ベルリンの記念祭を見物し、アレクサンダー・プラッツ（広場）にある東欧一に高級デパートで買物をし、国立歌劇場のオペラを観劇し、さらに東独が誇る、高さ三六五mのテレビ塔のエレベーターに乗り、超一流の回転レストランで眼下に広がる東ベルリンの景観を満喫しながら、豪華な食事を堪能した。

私は公立公民館で「ベルリン七百五十年祭の歴史と意義」というタイトルの講座が開かれるのを知り、それに参加した。都市ベルリンの成立史、あるいはヒトラー政権下の歴史、現在の東西冷戦下のベルリンの諸問題などを学習した。講義の最終回はコンクリート製の「ベルリンの壁」から荒れ地のポツダム広場一帯を観察するフィールドワークだった。戦争終期、この何処かでヒトラーが愛人と結構式を挙げ、総統地下壕の居間で青酸カリを服毒し、さらにヒトラー自身はピストルで自殺を図ったという。私は壁越しに覗き見をして、総統地下壕とその周辺を探したが、目視することは出来なかった。

日本外務省企画の「日本週間」

ほぼ七百五十年前、ベルリンの市域を貫流するシュプレー川北岸に集落が形成され、ケルン Köln と呼ばれ、その南岸にベルリン Berlin という集落が形成された。のちに、両市は漁村・農村からシュプレー川の恩恵で商人が住み、物資の交換港としてドイツ・ハンザ同盟に加入した。このシュプレー川には熊（ドイツ語、Bär）が頻繁に出没し、熊がベルリンのシンボルとなった。そう言えば、世界三大映画祭の一つベルリン国際映画祭の最優秀賞（長編および短編作品）には金熊賞、最優秀の男女の俳優や映画監督には銀熊賞が授与されている。

新東京国際空港（通称、成田空港）の建設に反対する三里塚空港反対同盟、その闘争について、小川紳介プロダクションが制作したドキュメンタリー作品が西ベルリンの映画館で上映された。日本人のスタッフが入場券を入口で売っていたので、私は彼と親しく話したことがある。彼は三里塚闘争に参加し、スタッフの一人として小川プロダクションに加わったということだった。

ベルリンの七百五十年祭の一環として映画館で寅さんの人情喜劇「男はつらいよ」が上映された。私は妻と一緒に見に行った。日本外務省は「日本週間」と題して「ベルリン市政七五〇年」を祝して「寅さん」映画を上映したのであろう。今、そのタイトルやストーリーは覚えていないが、久しぶりに渥美清の演技と台詞に声を出して大いに笑った。だが、多くの観客はドイツ語の字幕（サブタイトル）が映し出されてはじめて笑っていた。当然とはいえ、こんなことはこれまで一度も経験したことはなかった。

この夜の映画観賞は「寅さん」映画の観賞と、日本語とドイツ語という言語の決定的な相違、二重の意味で愉快な体験だった。他に、私たち家族はテーゲル空港の上空で秋田県大曲市の盛大な記念打ち上げ花火を見た。その帰り、新潟県佐渡島の「鼓童」が山車の上で和太鼓を叩いているのを聞いた。さらに鼓童がベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の打楽器奏者と共演するのも聞いた。日本の伝統芸能の義太夫節の実演と説明も拝聴した。西ベルリン七百五十年祭の「日本週間」を大いに満喫した。

共和国広場の野外ロックコンサート

西ベルリンの七百五十年祭で最も話題を呼んだイベントは、世界的なロック・スターのデヴィド・ボウィのロックバンドが「ベルリンの壁」に隣接する帝国議事堂の直ぐ側の共和国広場に特設ステージを設け、三夜連続してハードロックを実演した。私は興味半分にロック会場に出掛けたが、入場券を買う観客が余りにも長蛇の列をなしていたので、最後尾の列に並ぶのを止めた。数組の若者グループが雑踏する入口付近で右手の親指と人差し指を盛んに擦り、通行人に金をせびっていた。私はこんな乞食みたいな奴らを軽蔑し、下宿に帰った。部屋でロックコンサートの観客の歓声が微かに聞こえた。

余談だが、西ベルリンではものもらいをよく見かけた。ちなみに、電話ボックスの側でコインを欲しがる娘、雪解けの歩道で赤子を抱く母の物乞い（多分、「ロマ」であろう）、しきりに雪降る日に小羊のロープを握る羊飼いの物もらいを見たことがある。いずれも、冬の慣習だろう。なぜ、そんな慣習が定着したのか。今でも私には大いに不明だ。

六万人の観衆を集め、大音響の野外コンサートが実施

された。「ベルリンの壁」の側でデートをする恋人同士を歌ったボウィの「ヒーローズ」（「英雄夢語り」）がとくに大歓声を浴びたようだ。三夜連続、東ベルリンの若いロックファンはコンサートを聞こうとして、「ベルリンの壁」の東側のウンターリンデン大通りに集まった。東独の国境警備隊は、「壁よ！とっととどけろ！」と叫ぶ彼ら若者を金属製の棍棒で殴打したという。また彼らは近くのソ連大使館に向かって、「ゴルビー、ゴルビー」と盛んにシュプレヒコールをしたという。

東西ベルリンで東西首脳の招待外交

東西のドイツ政府はベルリン七百五十年祭の機会を利用し、それぞれ東西両首脳の招待外交を展開した。東ベルリンにはソ連のゴルバチョフ書記長、中国の趙紫陽首相が来訪した。私は東ベルリンのテレビ放送を見ていたら、何と「西側陣営の一員」を自負する中曽根康弘首相がホーネッカー書記長との握手を放映していた。そのため、中曽根首相は西ベルリンを訪問しなかったようだ。これが中曽根首相の在任中の最後の外遊だったのかもしれない。

それにたいして、西ベルリンにはフランスのミッテラン大統領、イギリスのエリザベス女王、アメリカのレーガン大統領が来訪した。エリザベス女王を除き、彼らはイタリアのヴェネチア・サミット（第一三回主要国首脳会議）の帰路、西ベルリンに立ち寄ったというのだ。私はエリザベス女王がクーダム大通りのカイザー・ウィルヘルム記念教会の側で降車し、顔見せに大通りを歩くというので、歩道から見物することにした。高齢の女王は少し猫背だったが、白い帽子を被り、ピンク色のコートを優雅に着て、厳かに歩く後姿を拝見した。

一九八五年三月、ソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフはペレストロイカ（立て直し）、グラスノスチ（情報公開）、ウスコレーニエ（加速化）を提唱した。その翌年にソ連で世界最悪のチェルノブイリ原子力発電所四号炉が爆発炎上した。ゴルバチョフは世界最大で、史上最悪のチェルノブイリ原発事故を「小さな核戦争」と認識する一方、事故について全面的にグラスノスチを実行しようとした。しかし、ソ連・東欧諸国の共産主義体制を維持しながら、スターリニズムの官僚主義が政治体制を大胆に構造的改革するにはかなりの困難に直面したようだ。

八六年四月、ゴルバチョフ書記長ははじめて東独の首都ベルリンを訪問し、「ブランデンブルク門」と新衛兵所を眺めた。彼の東ベルリン訪問は東独青年から「ゴルビー、ゴルビー」と熱狂的に支持され、ゴルビー旋風を巻き起こした。その当時、ホーネッカー書記長をはじめドイツ社会主義統一党の指導部は彼のペレストロイカや新思考外交について秘かに疑問視していた。ソ連・東欧

諸国の変動期、「ベルリンの壁」の崩壊直前、東独のホーネッカーは解任を迫られ、自ら辞職した。

招待外交の対照的な主役

東西ベルリン七百五十年祭の招待外交の主役は米ソの政治指導者であろう。一方の主役はアメリカ大統領のレーガンであるが、西ベルリン市民はレーガン来訪を必ずしも大歓迎したのではない。ゴルバチョフはＩＮＦ全廃条約（中距離核戦力、のちに中距離核戦力全廃条約が締結された）を提案した。ところが、その当時、レーガン大統領の世界政策は、西独を含む西欧諸国ＥＵには軍縮と緊張緩和のブレーキと見なされた。端的に言えば、レーガンは「強くて豊かなアメリカ」をスローガンにし、アクション映画『ランボー』（主演・シルベスター・スタローン）に共鳴した。ところが、西欧では「ランボー」レーガンと酷評された。

レーガンの西ベルリン来訪に「異議を申し立てた」のが、西ベルリンの平和団体、ベルリン自由大学の学生自治会、婦人団体、反核グループなど、一五〇団体が参加し、西ベルリンの大通りクーダムでアンチ・レーガン・デモを敢行した。主催者側はデモ参加者を約一〇万人（警察は約二万人）と発表した。参加者の大多数はデモ行進の終了地点で平穏に解散した。私はクーダムの歩道で多彩なデモを見物した。

レーガン演説の当日、さらに大規模な抗議集会とデモ行進が予定されていたが、西ベルリンの行政裁判所は治安の攪乱と不穏な事態の発生を懸念して、レーガン演説当日の集会とデモ行進の禁止を命じた。主催者側は行政裁判所の決定を受け、アンチ・レーガン集会とデモ行進を中止したと、ラジオやテレビで報じた。

だが、それを認めない過激派グループのアウトノーメ・グルッペ（オウトノミズム、自治主義者集団）は、レーガン演説の当日も過激なデモを敢行した。私は西ベルリンのメインストリート（クーダム、通称）で彼らデモ隊を見物した。黒い覆面と黒ジャンを着た約二〇〇名が機動隊の厳重な警護に囲まれ、都心の大通りに座り込み、またデモ行進する彼らは、ポケットから小石を取り出し、デパート・商店・銀行のショーウインドーに向かって投石を繰り返した。歩道で見物していた私は、投石が私の頭上に唸りをあげて飛来し、デパートや商店のガラスを破砕した。

さらに現地の「日産」営業所のショーウインドーのガラスが木っ端微塵に破砕されていた。その前の大通りには簡単なバリケードが造られ、焼け焦げていた。私はただただ過激派の行動に驚愕しながら、独り歩いて見物した。だが、彼らが居住し、出撃拠点のクロイツベルクへは、身の危険を感じて敬遠した。

レーガン大統領の演説はテレビで放映された。レーガ

ンはブランデンブルグ門の直ぐ西側に厳重な警備と、防弾ガラスに囲まれた特設ステージで、「ベルリンはすべてのヨーロッパに開放されている」。ソ連のゴルバチョフにたいして「あなたが平和を望むなら（中略）、この門を開放し、この壁を取り払え」と要求し、最後に「私はここ西ベルリンに旅行用の大型トランクを置いてゆく」と結んだ。

その当時、レーガンの「ベルリンの壁」開放の要求は、ソ連と東独の政府にはただの虚しい演説に過ぎなかったであろう。だが、その一年六月後、「ベルリンの壁」は開放された。レーガンは、二期八年の任期を終え、思い出の地、都市ベルリンを再訪し、「ベルリンの壁」が撤去された跡地を見て、「あの演説が実現するとは少しも思わなかった」と回顧していた。

多少、東西対立が緩和したとは言え、ベルリン七百五十年祭の主役はレーガンとゴルバチョフであろう。その二年後、東独市民は「ベルリンの壁」開放と崩壊の真の主役となった。繰り返せば、私は西ベルリンに滞在中、「ベルリンの壁」が開放され、崩壊するとは、まったく予測もしなかった。のちに、ダーハイム教授の話しによれば、西独の知識人は今次の東独の「平和的革命」を予見していなかったということである。何故なら、彼ら知識人は自由に東独の文献や資料を収集して西独に持ち帰ること、自由に現地を調査することさえ困難であったからである。ドイツ統一後、旧東独について自由な研究が可能となり、客観的に東独史（邦訳書あり）が出版されるようになったことは、歓迎すべきである。

東独建国四十周年記念の「意図せざる結果」

すでに触れたが、一九八九年一〇月、東独は建国四十周年記念日に盛大に式典を開催した。ソ連のゴルバチョフ書記長は招かれ、夜の晩餐会で献杯の直後、ゴルバチョフはロシア流に強烈なハグをして、ホーネッカーの耳元で「遅れて来る者は人生に裁かれる」と囁いたという。私はドイツのニュース週刊誌『シューピーゲル』の表紙で、ゴルバチョフとホーネッカーはお互いに頭部を右に傾け、ゴルバチョフの肩の上でホーネッカーの顔は歪み、メガネが外れてかかっている写真を見たことがある。私はゴルバチョフとホーネッカーの政治認識の相違を決定的に表現した写真だったと思った。

今、ほぼ三十数年前に起きたソ連・東欧の政治的現象を記述したい。ソ連・東欧の社会主義圏内では「旅行の自由」が認められていた。そこで、東独市民は東独の独裁体制から亡命しようと、まずハンガリーなど東欧諸国へ旅行した。そこで、ハンガリー政府は、ハンガリーに殺到する東独市民のために隣接するオーストリアとの国境を開放した。早速、彼らは列車でオーストリアを経由して西独に亡命することに成功した。さらに、彼らは「旅行の自由」が認められているポーランドやチェコスロバキアへ行き、当地の西独大使館に亡命を申請し、西独へ亡命に成功した。このようにして、多数の東独市民は「私たちを出せ！」（「出国させろ！」）と要求し、東独から迂回して西独へと亡命に成功したのである。

その一方、東独東部の商工業都市のライプツィヒ市民多数が当地のルーテル派教会に集まり、牧師の「お祈り」のあと、「月曜デモ」を実施した。「私たちを出せ！」と要求し、東独から「亡命」するのではなく、彼らは「私たちはここに留まる！」Wir bleiben hier と主張し、東独の民主的な構造転換を要求した。建国四十周年記念ののち、社会主義統一党のSDSの書記長ホーネッカーは中央委員会で退陣を余儀なくされた。後任のエゴン・クレンツは民主化要求に有効に対策を打ち出せず、東独各地で民主化を要求するデモが頻発した。東独の最大の人民広場のアレクサンダー広場は民主化と構造改革を要求して、東独各地から参加した群衆で埋め尽くされた。

さらに、彼らは「我々こそが国民だ！」Wir sind das Volk と主張した。さらに「ベルリンの壁」が崩壊すると、「我々は一つの国民だ！」Wir sind ein Volk と主張し、東西ドイツの統一が実現された。だが、東西ドイツが統一するには、米・ソの東西冷戦構造が絡んでいたが、国際的に承認された。東西ドイツの統一は、西独が東独を吸収・合併し、ドイツ連邦共和国となった。それと同時に、連邦制のもとで旧東ベルリンはベルリン州に糾合され、ベルリン州は統一ドイツの首都となり、旧東独諸州はドイツの東部五州となった。

統一後のドイツ連邦共和国の課題

第一にドイツの首都を何処にするのか。旧西独はドイツ連邦共和国基本法で暫定的に首都をドイツ中西部のライン川中流の地方都市ボンに置かれた。ボンはかねてベートーベンの生地として知られている。西ドイツの首都として連邦議会、首相官邸、各国の大使館・領事館が設置され、高級住宅地も出来たが、ボンは西独の首都として風格を欠き、「連邦村」と称された。当時、大統領府は西ベルリンにあった。私は西ベルリンの中心部に出掛けた機会に直ぐ近くの大統領府のシンプルな建物を見物したことがある。

ヒトラー政権が成立直後、ベルリンの国会議事堂が放火炎上し、そのまま放置された。さらに大戦末期のベルリン空襲と攻防戦で国会議事堂は破壊された。私が見学した時、部分的に補修されて、内部を自由に見物することが出来たが、連邦議会の議事堂として利用されていなかった。ただ記憶に残っていることは、旧議事堂正面上部にDEM DEUTSCHEN VOLK（「ドイツ民族のために」）と表示されていた。ドイツ統一後、大改修が完了し、連邦議会が開催され、またベルリンの名所として観光客

邦制の国家である。例えば、国際的金融都市のフランクフルト・アン・マインにはドイツ連邦銀行、フランクフルト証券取引所、さらに欧州中央銀行などがある。ドイツの南西部にあるカールスルーエには最高裁判所、連邦憲法裁判所、通常裁判所があって、ドイツの「司法首都」である。自由ハンザ都市の中枢として栄えたハンブルクは、ドイツ通信社、北ドイツ放送などのほか、新聞社や雑誌社が活動の拠点とし、ドイツの最大のメディアセンターである。

今、思うこと

ベルリンがドイツ連邦共和国の「首都」になったといって、ベルリンに人口は流入し、各地の本社は移転していない。首都ベルリンとは対照的なのが、一極集中の首都東京であろう。すでに超過密都市の東京は一極集中を打開するために、一九九〇年代に首都機能移転論争、地方主義による地方分権論争が展開されたが、何ら合意が形成されずに論争は終息した。しかも論争は政策的に何ら影響を及ぼさなかった。

私は東京都杉並区荻窪に住み、中学校の社会科の授業で「地方自治は民主主義の最良の学校」（ジェームス・プライス）と教えられた。杉並区長や区議会議員の選挙では、選挙カーで地方自治について自らの理想や政策を宣伝していた。これが民主主義の基礎なのだと、幼いながらも感銘を受けた。ところが、中央集権国家体制のもとで、本来的に危機的状況の都道府県、市町村の地方自治体について、自治体の「組長さん」や自治体の議員先生は、現在の「地方自治」がどうあるべきかなど、問題だと認識しているとは思えない。

中央集権体制によって憲法第九二条の「地方自治の本旨」、さらに地域住民が独自に自治体を統治する「団体自治」、住民が自らの責任で行政を処理する「住民自治」はすでに形骸化している。このコロナ禍で日本の中央集権国家の欠陥が、いみじくも露呈したと思う。今日、中央集権制ではなく、地方分権制の国是に基づいて、とくに最重要の政治的・行政的な課題は検討・審議されるべきであろう。その際、ドイツの連邦共和国の制度や現状を配慮し、「国家百年の計」を考慮し道州制を手掛かりに地方分権体制について検討されるべきであろう。

擱筆　二〇二一年九月二五日

で賑わっているという。

当然のこととして、統一ドイツでは首都ベルリン案が浮上した。旧東独の首都の東ベルリンと「陸の孤島」の西ベルリンがベルリン州として併合されれば、自ずからベルリンはドイツの経済的・文化的・人口的に最大の「主都」となる。しかも地理的にイギリスのロンドン、オランダのアムステルダム、ポーランドのワルシャワなどと、政治的・経済的に西欧と東欧の結節都市として機能することになる。

そこで、統一ドイツの首都は「ボンか、ベルリンか」と首都論争が生じた。これまでも大統領官邸は西ベルリンに置かれ、大統領は西ベルリンで執務にあたっていた。当時の大統領ヴァイツゼッカーは「ベルリンはドイツの政治に責任をもち、指導のための場所である」と提言した。ドイツ統一に功績のある首相コールもまた首都をボンからベルリンの移転することを提言した。当然、ドイツ連邦議会では各政党は自由投票とした。連邦議会のマラソン討議の結果、一七票の僅差でベルリンがドイツ連邦共和国の首都に決定した。連邦政府、連邦議会などはボンからベルリンに移転することとなった。ただ、政治的判断から連邦参議院はボンに残留した。

ドイツ統一によって、ベルリンは経済的・文化的に「主都」になり、さらに政治的・行政的に「首都」となった。しかし、ドイツは中央集権国家ではなく、あくまでも連

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同人の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みをお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　ま　ん　じ

柿本人麻呂①

横山正義

古事記の応神天皇の項に、最初の奥さん（高木の入日売命）の子息に大山守命（おおやまもりのみこと）がいます。二番目の奥さん（中日売命）の子に大雀命（おほさざきのみこと）がいます。三番目の奥さん（弟日売命）の子に宇遅能和紀郎子（うぢのわきいらつこ）がいました。

応神天皇は長子大山守命、大雀命、宇遅能和紀郎子に「大山守命は山海の部を管理しなさい。大雀命は私の治める国の政治を執行して、報告しなさい。宇遅能和紀郎子は皇位につきなさい」と言いました。大山守命は年も近く何かと主張が多いのでうるさいのです。それに対して末の子は大人しく応神天皇の云うとおりになるので、可愛いのです。天皇家の末子相続です。

大山守命は「自分こそしっかりした人物だ。天皇になるのは当然だ」と自負していましたので、末弟・宇遅能和紀郎子の殺害を決意しました。

兵士を招集し、武器を集めました。異常を察知した大雀命は末弟宇遅能和紀郎子に通報しました。驚いたのは末弟でした。早速待ち伏せの準備を整え、宇治川で船頭となり待ち伏せしました。大山守命はなにも知らず船にのりこんできたので、突き飛ばし、川に落とし、家来に見晴らせて岸に上がれないようにしましたので、大山守命は溺れ死んでしまいました。勝利した宇遅能和紀郎子は天皇になることなくまもなく死亡してしまったので、大雀命が天皇となり、仁徳天皇と名乗りました。古事記の完成。七一二（和銅五）

古事記には榛原氏、土方氏、幣岐氏等の始祖は大山守命だと記されています。榛原・土方・幣岐（日置）は何処であったか。榛原は奈良県宇陀郡にあり、土方は京都府丹後峰山町に、日置は京都府宮津市にあります。そして遠江（静岡県）に榛原、土方があります。日置は鹿児島県薩摩にあります。皇位継承の争いに敗れた皇子は強制的に遠方に流されるか、自ら離れていくか二度と皇位につくことはありません。

崇道天皇（早良親王）～七八五（延暦四年）、光仁天皇の第二皇子、桓武天皇の弟。崇徳天皇一一一九～一一六四（元永二年～長寛二年）在位一一二三～一一四一鳥羽天皇の第一皇子の例があります。

私は講演を聴きました。島田市川根図書館歴史講座「川と人が創る豊かな民族・文化」～奥が深い川根の歴史にふれる～平成二十九年十一月十八日（土）焼津市立大井川中学校　矢澤和宏

「川根の文化は京都保津川の下流大井川周辺に住む秦一族によって伝承された。京都に大井川・大井神社などがある。島田市に大井川あり。大井神社など数箇所あります。」

門外漢の私の仮説、古代、奈良京都に住んでいた大山守命の子孫・榛原氏、土方氏、幣岐氏等は天皇家にとってトラブルを誘発する火種にもなりかねないので、肥沃な土地で温暖な遠方、遠江へに移住をうながされたのか。

京都峰山町土方が最初に歴史に登場するのは伊勢神宮の外宮です。二十一代雄略天皇（四七八～五〇七）の夢枕に天照大神が現れ「自分ひとりでは食事も安らかにできないため、丹後国土方の豊受大神をよび寄せてほしい」と懇願しました。そして伊勢外宮に祀られることになりました。遠江の土方が最初に登場するのは応永二十三年（一四一六）今川了俊によって高天神城が築城されたことです。榛原は和名抄で承平年間（九三一～九三八）です。

万葉集四二八柿本朝臣人麻呂の作

土形娘子（ひじかたのおとめ）の泊瀬の山に火葬せられし時に

「こもりくの泊瀬の山の山のまにいさよふ雲は妹にかもあらむ」

この歌が静岡県遠江の土形であった説がありますが、万葉集四二九、四二八は出雲の娘子の歌で、柿本人麻呂の死地は石見で大変に山陰に縁の深い歌人です。私は山陰の入り口、古い歴史の丹後（京都）の土形ではないか。

『参考文献』
古事記　岩波文庫三十―〇〇一―一　倉野憲司注　岩波書店
日本歴史大系第二十二巻「静岡県の地名」
発行人　下中直人　著者「静岡県の地名」
発行委員会　発行者平凡社
日本史辞典　高柳光寿　竹内理三編　角川書店
大東町誌　編集発行　㈱きょうせい

天守台を仰いで(三)

三戸岡　道夫

(五)

ピストンは恐ろしい勢いで学校へ走って行った。

（伝染病が拡がらないように、一刻もはやく喰い止めなくてはならない）

走りながらピストンは、いま金剛寺教官から指示された任務に興奮して、戦場にむかって突進していくような気持だった。山王川の堤の青草を踏みにじり、途中で下級生が敬礼しても、返事もしなかった。

まだ授業の始まらない朝の中学校では、生徒たちは勝手にわいわい騒いでいた。しかし今日の彼等は無意味に騒いでいたわけではなく、沼崎の自殺の話で持ちきりであった。

自殺という、彼等にとって驚くべき事実と、自殺に追いやった金剛寺教官の恐ろしさに、彼等は身をちぢこませて、聞き、語りあっていた。

話の中心となっている者は、沼崎の屍をレールの上で見た生徒や、昨夜、血に染った沼崎を家までつれて帰った日比野正英たちで、彼等を中心に交わされる話は、ちょうど火事の飛火のように、校内のあちこちに飛び火していた。

日比野正英の興奮も、まだ治っていなかった。彼は自分を取り巻いた四年一組の生徒たちに、自分に見たこと、聞いたこと、経験したことを、一つのこらず話さなければ気がすまなかった。

「教官と若松教師はこう構えてさ」

彼はリング上のボクシング選手のように両手をかまえて、

「メガネをはずせ！」

と、どなると、顔の真正面から日茶苦茶にパンチをめりこませたんだ。沼崎は最初はその数を数えていたが、やがてその数もわからなくなって、倒れてしまった。

「顔がはれて、目が見えなくなったんだって？」

「身体にも黒ずみが、いっぱいだったって言うじゃないか」

「そう言えば、キューピー、今日はまだ来てないぜ。沼崎の家にあやまりに行っているのかな」

「あやまり？　ばか言え、知らん顔さ。先こうがなぐるなんて、当たり前だもの。死ぬ奴が馬鹿さ。ほら、二組の浅川さ、かぼちゃの野郎（数学の教師のあだ名）に黒板用の太いコンパスでぶんなぐられて、頭がほじれたっていったぜ」

そうした中学校の中へ、ピストンは嵐のように入っていった。

ピストンは周囲を見廻して、ちぇっ、と舌打ちをした。だが、今からでも遅くはない。まだ火事は、学校を全焼してはいない。昇降口で靴を脱ぐと、廊下をけたたましく走って教室へ向った。下級生たちはびっくりして窓から首を出して身ぶるいした。

ピストンはまず自分の仔分を集めなければならない。彼は自分の教室へすっ飛んで、

「おい、白井、渥美、加賀山、亀山、ちょっと来い」

教室の中でざわめいていた生徒たちは、いっせいに降りむいた。ピストンの仔分たちは走って出てきた。ピストンは彼等を廊下の隅に集めると、

「沼崎の自殺のことは喋るな」

「なぜ」

白井が眼をパチパチさせながら聞き返すと、ピストンは、

「ばかやろう！」

白井の顔をひっぱたいて、

「止めさせるんだよ。親分（彼等は金剛寺教官のことをそう呼んでいた）のお達しだ」

ピストンは仔分たちを引きつれて、まず最初に四年一組へ入っていった。

教室の中では生徒たちがさっきのままの姿勢で、教壇の横に黒山のように人垣を作っていた。ピストンはその一人一人を背後から襟首をつかんでつき飛ばして、黒山を崩した。そして人垣の中央に立っている日比野正英の肩を、むずっと掴んだ。

「おい、ちょっと顔貸しな」

だが、正英の方も気が立っていて、

「ここで聞くよ、言えよ、俺はなんにも知ってやしないんだ」

ピストンがいきなり正英の顔をなぐった。

人垣がさっと崩れ、ピストンは正英を廊下にうながした。

廊下の隅まで来ると、ピストンの仔分達がぐるっと正英を取巻いた。そして、

「おい、ふざけるな」

と、正英に二つ三つパンチを喰わせた。不意をくらって、正英は廊下に倒れた。が、彼はすぐ起き上った。ピストンは、

「おい、変な話を拡めるのは、やめた方がいいぜ」

「本当にあったこと、話すのが、なぜ悪い！」

「お前のためにならねえよ」

また正英は、一つ二つなぐられた。同時に周囲の者からも、頭や背中をつつかれた。

正英はピストンに武者ぶりついたが、わけもなく外された。同時に、誰かが後から正英の足をはらったので、彼はもんどり打って廊下に投げ出され、数人の足で身体を踏みにじられた。

廊下に面したどの教室の窓も、全部開け放たれ、生徒たちはこの事件を眺めていた。

正英は顔を押さえながら教室へ戻った。すると今まで盛んに喋っていた生徒たちは、しんと静まり返り、自分がその中に捲き込まれるのを恐れて、ピストンや正英の顔をうかがった。そして自分の席へ戻っていった。

四年一組が終ると、ピストン達は次の教室へ移っていった。こうしてピストン達の血祭は次々と放課後までつづき、山王中学校から、沼崎武夫の自殺事件は姿を消してしまった。明日になれば沼崎武夫が使っていた机は倉庫の中へ片付けられ、出席簿からも名前は消されてしまうであろう。

こうしてピストンは校内を平定してしまった。天晴れな腕前であった。金剛寺教官に言わしむれば、まさに殊勲甲であった。

(六)

翌日の朝。

金剛寺教官は起きると、手早く髭を剃り、朝食をすますと、すばやく羅紗の軍服を着た。そして剣を腰に吊すと、生気が身体の隅々に溢れてきた。今日もまた八百人の中学生を自分の意のままに動かす活動が始まるのだと思うと、心が生き生きと躍った。彼はその姿を鏡に映し、香水をふりかけ、帽子をかぶると、微笑を浮かべて、外へ出た。

山王川の橋の上まで来ると、対岸に山王中学校の建物がクリーム色の校舎を朝日ひ光らせ、葉桜の間に鮮やかに見えた。

桜並木の下を二列縦隊に登んで登校する生徒たちが、金剛寺教官の姿を見ると、

「教官殿に敬礼、頭(かしら)あ、右イッ！」

中学生たちの健康な顔が、いっせいに教官の方にむり

向いた。

橋のたもとでは、女が三人立ち話をしていた。彼女たちは、中学校の通用門を二列縦隊で入っていく中学生の列を見ながら、なにか一心に喋っていたが、金剛寺教官の姿を見ると、大いそぎで手を振って、話をやめてしまった。そして六つの白い眼が、金剛寺教官の方に集中した。金剛寺教官はその白い眼に腹を立て、

(くだらねえ井戸端会議は止めろ！)

彼女たちの方に唾をひっかけると、荒々しく砂利を蹴って、校門をくぐった。

まだ授業の始っていない朝の中学校の中は騒がしかった。彼等は喋ったり、騒いだり、口笛を吹いたり、感心に勉強をしているかと思えば、昨夜忘れた宿題を、友人のノートから写しているのだった。

金剛寺教官はその声へ、じっと耳をそば立てた。しかしもう彼等は、沼崎の自殺のことなどは喋っていないようだった。

(ピストンの奴、うまくやったな)

金剛寺教官は校長室へ入っていった。まず学校長の意向を探る必要があるからであった。

校長室では、小柄だが黒々と髭を生やした永峯校長が新聞をひろげて、

(わが海鷲南海に航空決戦)とか、

(ニューギニヤ米軍陣地爆撃、勝利の道は不動)とか、

(勇戦鬼神も哭く、敵を恐怖の坩堝へ、戦略線微動だにせず)

とかいった華麗なニュースを読みながら、軽い勝利の興奮にかられていた。

窓には厚地のカーテンが垂れ、絨毯が敷きつめられ、調度品は四十年の歴史を誇ってすべてどっしりとしていたので、その中で厳然と座っている学校長の姿は、小柄でも、一種の威容を持っていた。

彼は高等師範学校を卒業した後、さらに文理科大学の聴講生となり、哲学を専攻した。そのとき研究した彼の戦争哲学ともいうべき『精神性の優位』は、かって中央の雑誌に掲載されて、今でもかなり有力な地位を教育思想界に持っていた。彼は度の強い眼鏡越しに、

(一発必中の体当たり戦法よく敵艦を征す)

といったニュースを読むと、そこに自分の哲学の展開を見たような気がして感動した。

その学校長が今朝、沼崎武夫の自殺のことを知ったとき、

(教官のやつ、少しやりすぎたな)

と思った。

実は沼崎武夫の恋文事件は、今日の職員会議の議題にのせるべく、学校長の頭の中では用意されていた。しかしもう恋文事件のことは必要なくなった。自殺という事

実の方が先にきたのである。金剛寺教官の勝手な越権行為が、学校長の心をむかつかせた。小賢かしくて、打算的で、抜目なく行動する金剛寺教官としては、これは明らかな失策だった。

永峯学校長は戦争哲学の観念論においては峻烈だったが、生徒に対しては比較的寛容だった。彼は自殺した沼崎武夫の存在を、これまではまったく知らなかった。月に一度の修身の授業に行くだけでは、一人の学生の存在などは、頭の中に残っていなかった。彼がこの沼崎武夫という少年をはっきり見たのは、昨日、職員室につっ立っている時だった。

背たけはひょろ長いが、顔は薔薇色に少年を、彼はそれほど憎いとは思わなかった。かえって、その無抵抗、無防備の姿が、いじらしかった。

学校長は恋文事件を、それほど大問題とは考えていなかった。ただ彼が恐れていたのは、この事件がきっかけとなって、彼がせっかく築いた学校の軍国主義橋頭堡の一角が、崩れることだった。彼が考えていたのは、二、三日の謹慎だった。

金剛寺教官はまっすぐに学校長の方へ歩いてきて、椅子に坐った。そして椅子から少し乗り出すようにして、

「実は沼崎武夫のことでして……」

と話しかけると、二人の感情はすでに職務上の共通の立場に立っていたから、それ以上何も言わなくても、すべて了解がついていた。

「警察の方は？」

学校長がおもむろに聞くと、

「大丈夫です。すぐに手を打ちましょう。簡単です。彼等は我々の味方ですから…」

教官は電話器を取って山王警察署長を呼び出し、話すと、話はすぐに通じた。

警察の次は新聞社だった。

「新聞記者もよく知っていますから…」

新聞社への電話もすぐ通じ、こうして自殺事件は外部に拡っていくことも未然に防げられた。

外部への手を打ってしまうと、金剛寺教官はピストンへの命令がどうなったかを確かめるために、教室の方へ向った。

しかしもう誰も、沼崎の自殺のことを話している者はいなかった。教官は満足した。そしてゆっくりと、各教室の中をのぞいて歩いた。

しかし二階の階段をのぼり、四年一組の教室へ近づいたとき、教官は心のざわめきを感じた。彼はそこに見たくない生徒を見たのである。日比野正英である。

正英を中心にして、三、四人の生徒が、ひそひそ喋っていた。その中の一人が廊下に金剛寺教官の姿を見ると、

彼等はあわてて口を閉じた。

正英も、教官が廊下から教室の中を覗いているのに気がついたとき、ひやっとした。同時にしらじらしい気持になった。正英はなんでもないふりをして、視線を外らした。

金剛寺教官は正英を廊下に引きずり出してやろうかと思ったが、

（混乱がかえって大きくなる）

と、そのまま四年一組の前を通りすぎた。

金剛寺教官が最初正英について知ったのは、

（彼は陸軍士官学校や予科練などの、軍関係の学校へは行かない）

ということだった。金剛寺教官は、

（ちゃんちゃらおかしいや。成績がいいなんて、うるほれるな。おれが首を引っこ抜いてやる。覚えてろ、その時になって泣くな）

教官は廊下の床板を、荒々しくけとばした。

以上のようにして金剛寺教官は、まず学校長を納得させてしまった。新聞社や警察の方も、口を塞いでしまった。学生たちのお喋りも、ピストンの腕によってOKである。日比野正英一人ぐらいは、何のことがあろう。人の噂も七十五日である。この町に住民たちだって、忙しい生活の中で、一人の中学生の自殺なんて、そんなにいつまでも覚えているものか。

残る問題は山王中学校の教員たちだった。彼等は腰抜けで、日和見主義で、自分自身だけが可愛かった。自分と関係のない事件のために、自分を犠牲などにしなかった。だから、ぶつぶつ言いながらも、金剛寺教官の言うことに征服されていた。

金剛寺教官は大手をふって、教員室の中へ入っていった。

そしてまず四年一組担当の、若松教師の机の方へ歩いていった。

しかし若松教師は空席だった。若松教師は今日学校で起りそうなことを予感して、登校しなかったのである。

（臆病者め！）

教官は腹の中で笑った。

しかし教員室の中に、一人の敵もいないわけではなかった。それは英語の辻村教師だった。

辻村教師は日比野正英が尊敬する、ただ一人の教師だった。六尺に近い背丈を持ち、豊かな肉付きと浅黒い肌、金剛寺教官からみれば、大男だった。剣道が三段、柔道が二段、いったん暴れ出したら誰でもかなわなかった。

しかし金剛寺教官は、最初辻村教師を馬鹿にしていた。辻村教師は武道はすぐれているが、愚鈍だった。英語と哲学は出来るが、その他は駄目だった。

しかし辻村教師には、金剛寺教官の権力には服従しようとしない鈍感さがあった。それが金剛寺教官には気に入らなかった。

その辻村教師への敵意がとくに強くなったのは、ある年の忘年会の席であった。それは酒の席にはつきものの女の話に花が咲いて、それが金剛寺教官の情婦である、亀山妙子のことに発展したのであった。

彼女は四年一組の生徒である亀山政也の姉で、美しい煽情的な唇を持つ女性だった。いつかの父兄会の時に、母親の代わりに彼女が来た。その時以来、もう二年近く、彼女は金剛寺教官の情婦として、関係をつづけているのだった。その情婦を辻村教師が酒に勢いで、

「彼女は山王女学校の生徒の頃から、相当のやり手だったということですなあ」

と軽口をたたいたのである。

それが金剛寺教官を逆上させた。彼はいきなり辻村教師をなぐりつけ、顔に少しばかりの傷を負わせた。

翌日、辻村教師が顔に絆創膏を貼って登校した時、教師たちはいっせいに同情した。それは金剛寺教官の予期しない反応で、その時はじめて金剛寺教官は辻村教師を見直した。辻村教師の表面は愚鈍に見えたが、それが誠実さなのであった。

しかし人生における誠実さ、生徒への愛情などは、金剛寺教官が軽蔑するものだった。

その日の午后、定例の職員会議が開かれた。

しかし金剛寺教官は、会議の成り行きが自分の勝利に終ることを信じていた。時代の波が金剛寺教官の立場を支持しているからであった。彼は陸軍少尉、そして山王中学校配属将校という椅子の上に座っている。辻村教師にはそれがない。いくら騒いだって、何も出来はしない。事実その通り、職員会議は辻村教師が一人でしゃべっただけで、何事もなく終り、金剛寺教官は、

『ざまを見ろ』

と思った。誰も自殺の眞相に触れたくなかったからである。

しかし金剛寺教官には、(辻村教師が喋ったくわしい情報を、彼はどこで得たのか)という疑問が残った。

(ニュースの提供者はあの日比野正英にちがいない)

日比野正英が辻村教師と非常に親しいということを思い出して、非常に不愉快だった。

翌日、教官は日比野正英を職員室へ呼び出し、正英の口から泥を吐かせようとした。そして、心の内で、

(俺の命令に従え。俺の部下になれ。ピストンの仲間に入って、俺のために働け。そうすれば、甘い汁は吸わせてやる)

そう叫んだ。しかし正英の顔の表情は、それを拒絶していた。

(七)

その日の午後、沼崎武夫の葬儀はひっそりと行われた。

中学校からは若松教師のほか、四年一組から二名の生徒が、学校を代表して参列した。二名の中に日比野正英が選ばれなかったのは当然で、その背後に金剛寺教官の指図が動いていた。

しかし日比野正英はその葬儀に個人で参列しようと、無断で午後の授業を休み、裏門からそっと学校を抜け出した。

葬儀場では若松教師に見つからないようにと、ずっと後の方に立っていた。

葬儀が終わり、棺が靈柩車に積みこまれると、人々の列は乱れた。

正英は沼崎夫妻の前へ行って、深く頭を下げると、夫妻は、

「ああ、よく来てくれましたねえ」

と、正英の上に、祭壇の上の息子の写真を重ねて、涙ぐんだ。

靈柩車に棺がすっかり納まってしまうと、沼崎夫妻が最後に車の中に入り、靈柩車は滑るように道路を走っていった。

靈柩車が去ると、人々は参会した。

正英もその中に入り、歩いていくと、東の方から、

「万才!」

「万才!」

という叫び声が、どよめきとなって流れてきた。今日も出征兵士が、山王町からも征っていくのだった。

赤襷の出征兵士を先頭に、手に手に日の丸の旗を持った人々が、駅にむかって歩いていた。愛国婦人会の女性たちは、揃いの白いエプロンに襷をかけ、小旗を振って軍歌を歌っていた。小学校の生徒たちはひばりのような声を張りあげ、小旗の棒で友達の頭を叩きあったり、ちゃんばらの眞似をしていた。

一行が町の眞中まで進んできたとき、やっと在郷軍人の楽隊が、ドンチャン、ドンチャンと、軍歌を吹奏しはじめたので、今までばらばらだった軍歌が楽隊に合せて、町の大通りに一きわ高く響きわたった。

楽隊の華やかなメロディにあおられて、町の住民たちも家から外に出て、出征軍人の行列を見守り、子供たちはぞろぞろと行列の後についていった。

やがて一行は山王川の堤にさしかかった。

ぎっしりと茂ったはこべや、すずめのてっぽうの上を、大小の靴や下駄が踏みつけて通った。春の花を摘んでいた子供達が、

「兵隊さん…」
「兵隊さん…」
と駆け寄った。
日比野正英は橋の袂で、それをじっと眺めていた。出征軍人は四十歳ぐらいの年齢に見えた。その後を家族と子供が歩いている。
しかしこの大通りは、さっき正英の親友をのせた靈柩車が通ったばかりである。その後へにぎやかな楽隊に取囲まれて、一人の男が戦場へ征っていく。戦争は小さな田舎の城下町からも、一人一人と人間を集めていく。正英はぼんやり行列を眺めながら、やがて彼の父も戦地へ征つ日が来るのではないかと恐れた。
楽隊は正英の目の前で、ドンチャン、ドンチャンとひびき、おびただしい日の丸の旗の波は、駅前の広場へ吸いこまれていった。
正英は旗の波とは反対の、山王城の方へ歩いていった。そしてゆっくりと天守台へ登った。
天守台の草原へ出ると、山王町の町並みが一望に見えた。
しばらくすると、
「ばんざい！」
「ばんざい！」
「ばんざい！」
と遠い歓声が、駅の方から聞こえてきた。
しばらくして出征兵士を乗せた上り列車が発車すると、海鳴りのように町中にひびいていた、ばんざい、軍歌のひびきは、消えていった。
正英が立っているこの天守台は、彼が中学校に入って、始めて沼崎武夫と会った場所であった。それから四年の歳月が流れたわけである。
「沼崎！　沼崎…」
正英は駅の線路にむかって叫んだ。

（つづく）

短歌

なつかしき思ひ出他

山本一成

なつかしき思ひ出

小走りに階段おりて乗りかへるせはしき朝の通勤なつかし

ゴルフ場「緑の待合ひ」と言はれしが愉しみし日々の遠くなりゆく

高速をなつかしきバス走りゆく車体につばめマークをつけて

ふるさとの訛りなつかし日曜の「のど自慢」楽し帰りたくなる

若き日の思ひはいずこ楽しみは酒を飲みつつ観る阪神タイガース

晩夏

夏草を踏みつつ行けばバッタらが左右に跳びたつ脚美しく

をちこちに萱草咲きゐし岸のべは草刈り車きて地肌あらはる

晴れわたる江戸川のきしべ青柳の靡く間（あはひ）にゴルフの旗竿（ピン）みゆ

江戸川の岸辺の柳連なりて水面に色濃き影を落とせり

水鳥のとび交ふ湖面に浮び立つ河童の彫像夕日に照れり

コロナ禍

理由（わけ）ありと言はれしほどの理由（わけ）でなし我が理由（わけ）ありは〈野菜〉とは違ふ

待たされて受話器に聞こゆるメロディーも繰り返し聞けばため息のでる

長生きをしたくば飲めと主治医いふしばし考へ降圧剤見る

当然のこととは言へどワクチンの予約のとれてまづは安堵す

ワクチンの接種は済んだとあごマスク大声あげて飛沫を忘る

漢詩

汲深錄（二十六）

松井秀人

梅雨家居

（梅雨家居）
令和三年六月

梅霖十日滴聲連　梅霖十日 滴声連なり
懶出空齋貪惰眠　出るに懶く 空斎に惰眠を貪る
几上古書塵覆久　几上の古書 塵覆ふこと久し
蠹魚疎主獨流涎　蠹魚は主を疎んで 独り涎を流さん

押韻・連 眠 涎

〔注 解〕
梅霖＝つゆ。さみだれ。梅雨。
滴聲＝水のしたたり落ちる音。
空齋＝人のいない書斎。
几上＝机の上。
蠹魚＝しみ。衣服・書物を食う虫。
疎主＝主人をうとんじる。

〔口語訳〕
梅雨が十日以上も長く続き、雨だれの音もひき続いている、こんな状態では外出する気にもならず、人のいない書斎でひたすら眠りこけている有様である。
机の上の古書といえば、放置されて長らく塵が覆っている状態にあり、蠹魚は主人のことなど気にせず、好き放題にご馳走にありついている。

村徑斷梅

（村径断梅）
令和三年七月

村路紆餘泥已深　村路紆余として泥已に深く
怒雷忽地止霪霖　怒雷忽地 霪霖を止む
童兒追逐門前戲　童児追逐して門前に戯る
仰見彩虹欣快心　仰ぎ見る彩虹 欣快の心

押韻・深 霖 心

〔注 解〕
紆餘＝まがりくねる。うねうねと続いているさま。
怒雷＝いきどおる雷。
霪霖＝ながあめ。霪雨。
追逐＝逃げるのを追う。
彩虹＝美しい色どりのにじ。
欣快＝よろこばしい。またうれしく思う。

〔口語訳〕
村の路はうねうねと続いているが、雨で泥がぬかるんでいる。それがいきどおるような雷が一吼えすると、なんとなが雨が止んでしまった。
それで子供達は門前にて、逃げたり追いかけたりして戯れている。
仰ぎ見ると美しい色どりの彩虹がでていて 梅雨あけをうれしく思う。

雨後初蟬

（雨後の初蟬）
令和三年七月

雨霽閑庭松葉香　雨霽れ閑庭 松葉香ばし
蜩蟬初噪映斜陽　蜩蟬(ちょうせん)初めて噪ぎ 斜陽に映ず
可憐短命如朝露　憐れむべし短命 朝露の如し
哽咽哀聲心易傷　哽咽(こういん)の哀声 心 傷み易し

押韻・香 陽 傷

〔注 解〕
蜩蟬＝せみ。
朝露＝あさつゆ。朝おりるつゆ。転じてはかないもののたとえ。
哽咽＝涙にむせぶ。むせび泣く。
哀聲＝悲し気な声。
心易傷＝人の心をいたましめる。

〔口語訳〕
雨があがって閑かな庭では松葉が香ばしく、せみもやっと噪ぎはじめているが、もう夕日は西に傾いている。
可哀そうなことにせみは短命で、あたかもはかない朝露のようである。
その涙にむせぶような悲しい声は、人の心も悲しませる。

廬山懷古

（廬山懐古）
令和三年八月

避暑登來萬仞山　暑を避け 登り来る万仞の山
千尋瀑布隔塵寰　千尋の瀑布 塵寰を隔つ
清澄渓水訝秋冷　清澄の渓水 秋の冷ややかさを訝る
疑是詩仙洗醉顏　疑ふらくは是れ 詩仙の酔顔を洗ひしかと

押韻・山 寰 顔

〔注 解〕
萬仞＝非常に高い、または深いこと。
千尋＝非常に深い、または高いこと。
瀑布＝たき。高所から直下する、白い布のような水流の意。
塵寰＝現実の世の中。人間世界。けがれた世。
詩仙＝李白のこと。

〔口語訳〕
暑を避けようとして、非常に高い山に登ってきた。
千尋の瀑布は、俗世から隔絶しているようだ。
清く澄んだ谷川の水は、まるで秋の冷ややかさを思わせるが、ひょっとしたら 李白も酔い後の顔を洗ったかもしれないな。

水榭納涼

（水榭納涼）
令和三年八月

池畔亭臺厭日長　池畔の亭台 日の長きを厭ふ
沛然白雨阻驕陽　沛然たる白雨 驕陽を阻む
荷風細細吹青蓋　荷風細々 青蓋を吹き
零露如珠一滴涼　零露珠の如く 一滴の涼

押韻・長 陽 涼

〔注 解〕
亭臺＝あずまや。うてな。
沛然＝雨のいきおい盛んに降るさま。
白雨＝白色に見える雨。はげしいにわか雨。
驕陽＝夏のはげしい太陽。夏の日光。
荷風＝はすの花の上を吹く風。
青蓋＝青いかさ。荷の葉のこと。
零露＝したたり落ちる露。

〔口語訳〕
池のほとりの亭台にいると、暑い夏の日が長いのにはうんざりしている。
そこへ突然のはげしいにわか雨がきて、太陽の暑さを阻んでくれた。
さらに、はすの花の上を通ったかすかな風が青い葉を吹いて、珠のようなしたたる露に、わずかな涼しさを得られた。

忠山人日乗（四）

忠内正之

母は戦争未亡人である。婿養子であった父は職業軍人で陸軍省に勤務していたが、支那事変が始まると直ちに応召され緒戦で戦死した。音に聞こえていた関東軍出身であり、金鵄勲章を受章しているので、壮烈な最期であったに相違ない。一時は軍神の妻などとチヤホヤされたらしい。後に当時の新聞記事の切り抜きなど見せてもらった。

400年も続いた名跡を守るため、数年後母は再婚した。再び婿養子を迎えたのである。この父も間もなく下士官として出征し、終戦直後南方で病死してしまった。

母は、元士族の家で厳しく生まれ育っただけあって大変気丈な女性であった。戦時中も自宅に止まって家を守り抜いた。

戦後は幸いにして焼け残った家を活用して、幾人かに部屋貸をして生活を賄ってきた。遺族年金が復活するのは大分後になってからのことである。

私は戦後間もない昭和二十三年、進学のため上京してきた。当時の世の中は、衣食住に事欠く有様で、中でも東京では最も住むところが窮乏しており、部屋探しは困難を極めていた。

当初は地元出身の代議士の自宅に寄宿させてもらっていたが、神楽坂にあるそのお屋敷は人の出入りが激しく、且つ書生代わりにさせられそうになったので懸命になって下宿先を探した。

結局私は同じ郷里の遠縁先であることをたよりにして、今の家に間借りさせてもらうことができた。台所に近い女中部屋ともおぼしき三畳の部屋であった。

サンルームのついた明るく良い部屋には、東大出のM新聞記者の夫婦が入っていた。新聞記者の異常な勤務振りが赤裸々に解って、新聞記者志望を諦める端緒ともなったと思う。

時の経過と共に何人かの間借り人たちは移っていったが、行先の無い私はずっと残っていた。大学を卒業する頃にはこの家を継ぐことを依頼された。

私は一つだけ条件を出した。妻となる女性は自分の好きな人を選んで良いかと。

母は子供に恵まれなかったが、甥や姪の中には、心当たりとする対象が何人か居たと思うのだが、養子は私、そして嫁は自由にと認めてくれたのだった。

当時の生活は、その日暮らしの毎日で心細く、何としても早く後継者を定めて安心したかったのである。

歳月はたゆむことなく流れて、いつしか私は自分の選んだ女性を妻として、一家の主人公に治まっていたのである。「小糠三合あれば云々」という古諺は私には当て外れだったようである。

中野の家は、昭和の初期、親戚である田中九一氏から買ったものと云う。

田中九一氏とは、まんじ誌同人、山本鎭雄さんにお聞きするところによれば、かつて東大新人会で活躍した社会主義者だったとのことである。どうりで田中氏が住んでいる頃、常に特高刑事が張り込んでいたと聞く。

田中氏はやがて戦時に向って更にうるさくなってきたので満鉄調査部へ移っていった。

父母はその家を当時でも格安の300円で買受けた。親戚どうしであることと、急いでいたとの理由であった様である。

更に鶴田吾郎画伯が描いたシベリヤの教会の淋しい油絵が掲げられたまま残されており、「この絵の方が、家よりずっと値打ちですよ」と云ってそのまま下さった由である。

石神井だより

終の栖

地方廻りの転勤を10年間重ねたが、昭和四十三年一月四日ようやく本部勤務を命じられ、東京へ帰ることになった。

とりあえず荻窪の社宅に約二年間厄介になったあと中野の自宅へ戻ることができた。

中野の家は、JR中野駅と東中野駅との略中間に位して、早稲田通り（以前は昭和通りと云っていた）の南側の路地を入った処で、100坪あまりの土地に建てられた、約30坪の和洋折衷のしゃれた平家造りの家である。

古い家であったけれど、戦時下の過酷な空襲から守ってきたと云う母はこの家に誇りをもって住まいをしてきた。

余談となるが、鶴田吾郎は一時、流浪の画家としてもてはやされた。ロシヤへも度々出かけたらしい。同門中村彝と競って、ロシヤの盲目の詩人「エロシェンコ」の肖像を画いた。

結果は中村が勝ち、鶴田は敗れた。中村の絵はその後重文となり、鶴田の絵は現在、新宿中村屋の画廊に飾ってある。中村の絵に勝るとも劣らずすばらしい迫力のある絵である。田中氏は鶴田とかなり親交があったらしい。田中氏から譲られたシベリヤの教会の絵は、後で述べる上板橋の家にしっかり保存している。

私は、地方勤務の空白期間があったものの結局この家に昭和23年（一九四八）から平成二年（一九九〇）迄の約40年間住むことになる。

家は長い私道の奥まったところに存在した。敷地は100坪余りと広く、立木が10本程伸びており、庭は荒れていたが、色とりどりでさながら武蔵野の縮図を見る情景であった。

子供たちの成長に従って勉強部屋と書庫をかねた小さな離れを造って凌いできた。

周辺は屋敷街とも云える静かな環境で、前隣りは理科大の学長さんの広大な屋敷があり、左隣りは「5つ児」の主治医となった馬場先生の自宅があった。比較すると当家はかなり格落ちとなるが、隣家との境の垣根は防災上とり払われており、母は戦時中焼夷弾の雨から共に守ってきたと云う連帯感も残っていて、至極気楽なおつき合いをしていたようである。

中野は住みよいところである。殷賑を極める駅前の商店街は田舎から出てきた私には大変魅力であった。

学生時代は、名曲喫茶「クラシック」に入り浸った。当時この店の飲物は紅茶が一杯20円で何時間でも粘ることができた。音楽会に行く余裕は無かったが、ここで洋楽に親しむことができた。作家五木寛之なども学生時代常連であったと後で知った。

社会人となってからは、寿し屋、酒場、スナックバー、「さらしな」そばや、骨董品店など馴染みの店もできて楽しんだ。

また、その頃友人の紹介で駅近くの小児科医院の先生に子供がお世話になった。野際陽子似の美人医師で家族全員が後々健康相談にのっていただいた。新ぶどう酒の季節になると先生のお宅へ数人で伺ってグラスを傾けて、大いに騒いだ。楽しい思い出となったが、先生は早逝されてしまった。美人薄命と云うが眞であったかと、通夜の席で皆と偲んだ。

医院は医大を出た、お嬢さんが継がれており、現在もおつき合い願っている。

中野はまた交通至便なところである。大手町の勤務先へは、歩行を入れて三十分余りと大変楽であった。地下鉄東西線が通じていたからである。専用自動車が付く立場になった時も車を辞退した。車で通うよりは、地下鉄を利用した方が遥かに早かった。

この様に大変恵まれた住宅環境下にあって、母や私はゆっくり構えていた。私はまたそれを可として、相変わらず骨董狂いに資金をつぎ込んでいたと云える。

妻は古い建物による使い勝手の不便さと、借地の上に建つ不安定さに、かねてより危惧の念を持っていたとするが、嫁の立場として到底口に出して云える雰囲気では無かった様である。

脳天気をきめこんでいた我家に青天の霹靂とも云うべき難題が持ち上った。

昭和六十一年ごろ突如地主より、土地明け渡しの請求が申込まれたのである。確かに借地ではあったが、田中九一氏から数えて優に60年以上の間に及んでいる。建物の存在する限り賃貸は安泰であるとのんびり構えていた。田中氏が住み始めた頃は、借手市場であり、口頭契約でしかも期限の定めも無かったのである。

立退きを必要とする理由はと尋ねると、相続対策のためマンション経営を考えているとのことで、設計図を見せられた。隣家なども含む大型開発である。

さらば、マンションの一部を当方の自宅とすべく等価交換を申出したが、すべて賃貸経営にしたいからと断られた。

何の瑕疵もない、借主さんを追立てて誠に心苦しいが、当方も差し迫っての事情がありお許し願いたい、応分の立退料はお支払い致しますからとの申入れであった。

地主側には世代交代による止むを得ない事情が生じていたのである。

地主側とはもともと親密な間柄の関係にあり、かなりの好条件を提示してきた。一方で我家はと見ると、広い敷地の奥に建てられており、粘って見ても、現在の建築基準法から考えて本格的な新築は不可能と思われた。そこでこの際思い切って申出に応じることにした。

母はかなり未練があった様であるが、既に友人知己の方も少なくなってきており、結局認めてくれた。妻は無論賛成であった。

早速なじみの深い中央線沿線を手始めに移転先候補と定めて探し始めたが好条件の土地が右から左に出てくるものではない。この頃既に、不動産バブルの兆候が現れてきていたのである。

止むなく、中央線沿線に固執することを諦めて、四方八方に向っての情報収集に転換した。

然し乍ら、平穏無事に過ごすことができた期間は短かかった。江東区亀戸のマンションに住んでいた伜一家が、事情があって移住したいと言ってきたのである。すったもんだと親子の相反議論を重ねた後、当方が折れて、結局我々がこの新居を伜一家に譲って、かねてから母が所有している練馬区石神井の老朽化している建物を新築して移ることに決めた。

石神井の土地建物は、昭和四十二年（一九六七）、母が亡父の元上官から頼まれて購入したもので代価は600万円であったと聞いている。義理堅い母は、四国に隠退する元上官夫妻に泣きつかれて已むなく買取ったもので、かつては親戚に住んでいてもらっていたが、既に転居して、当時は空家となっていた。

中野から移転する事態となった際も、この土地を活用する案もあったのであるが、面積の狭い土地で石神井とは云え駅から程遠い不便な田舎であるとの悪印象が強くて見送っていたのである。

倅どものクーデターまがいの要求に負けた親は、気に入らぬ点は多々あるものの、こちらへの新築移転にふみ切ったのである。

今考えると、随分乱暴な過剰投資をしたものだと反省するが、当時はまだ60歳代前半でかなり元気が残っていたようである。

土地代金は要らなかったが、妻の希望で茶室その他の説明のテンポを早めたい。

結局、それから二年余の歳月をかけて練馬区錦一丁目に移転した。東武東上線沿線の上板橋駅から約七分の距離で、高台、東南の角地、面積50坪余りと、私にとって最高の条件である土地を得て新築引越しができた。

当時私は、銀行を退職して、銀行の関係会社である不動産会社に移っていた。職権を悪用した訳ではないが、偶々(たまたま)そこで得た生情報(なまじょうほう)により、好運にもこの土地を買うことができたのである。

余談だが、骨董に於ける場合でも、店頭に並べられた品よりも、生(う)な掘出物の方が、遥かに秀れて上等な品であることが多い。

上板橋の家は、平成二年（一九九〇）七月完成となり引越した。身分不相応な投資となったため貰った移転料と手許資金では足りず、生まれて始めて銀行借入れを行った。

上板橋はもともと銀行の支店があり、私自身はよく知った場所柄であったが、母や妻にとっては未知の土地であり心配であった。

茶室を備えたので妻も落ちついて茶道に打ち込むことができるようになり、お弟子さんも増えつつあった。親戚も泊まりがけで遊びに来るようになり母も新居に慣れつつあった。



〈終の栖〉石神井の家

注文を入れたので、建築費が高くなり資金繰りにかなり苦労した覚えがある。そして平成七年一月（一九九五）新築した現在の家に引っ越してきたのである。

大阪から東京へ帰ってから、住居は、荻窪―中野―上板橋―石神井と目まぐるしく変った。

「引越しやつれ」と云う小説があったと記憶するが、内容は「貸間やつれ」であった様に思う。当方の場合、土地売買、建築を伴う引越しが重なったため、物心両面に亘る相当な負担が生じた。

石神井へ移った後、大変お世話になった母をこの家から見送った。晩年は施設のご厄介になったが103歳の長寿を全うした。

思えば、この家に住むことができるのも、母が義侠心から買っておいてくれた結果であり、まさに「情は人のためならず」と云う言葉が現実のものとなった。

我々夫婦も齢を重ねた。この地がこの家が母と同様「終の栖」となるは必定となる。

今年、令和三年（二〇二一）、この地へ移ってきてもう26年にもなる。当初は不便な田舎でどうなるものかと心細かった。

唯一の救いは、尊敬する三戸岡先生ご夫妻が、石神井公園駅の近くにお住まいで、当方から自転車で20分以内の処にいらっしゃることであった。爾来、公私に亘って夫婦共々大変お世話になっている。

三戸岡先生ご夫妻のご協力を得て、石神井の生活にも慣れてきた。一方で石神井地区のインフラも段々と向上し、暮らし易くなってきている。「住めば都」と云う言葉がある。負け惜しみでなくて、本音でその様な心境になりつつある。

次号以降で石神井の暮らし振りを反芻してみたいと思う。

（続）

青雲の彼方（十三）

太田精一

十三、満州事変後の日本の外交政策、天羽声明として内外に伝わる

（一）外務省情報部長に就任

昭和八年（一九三三）五月一日、英二はモスクワ勤務を終え、本省に帰任した。久しぶりに見る首都の東京は人で溢れ、賑わっていた。だが、満州事変以来、過度なナショナリズムが横行し、全体主義の台頭が、軍事力の強化を呼び、政治への軍の関与が強まっていた。

前年の五月には、犬養首相が暗殺される五・一五事件が起き、英二の東京に着く直前の三月には、国際連盟脱退の詔勅が下っている。

英二は、日本国家の繁栄を願って外務省に入ったが、外交の主導権が、軍部によって脅かされつつあることを感じないではいられなかった。

とはいえ、英二が帰国してすぐにしなければならないと思ったことは、留守宅にいる家族に会うことであった。

翌二日、外務省に登庁、帰国報告をした後、英二は、内田外務大臣、有田次官に「少し休んで離れていた日本を見つめたい」と述べ、休暇をとり、家族との生活を楽しみながら、日本の現状を洞察することにした。

ところが、半月後の五月十五日、英二が上野寛永寺で行われた故犬養毅首相の一周忌に参列した際、外務次官及び情報部長更迭の噂を聞いた。翌十六日、有田次官は辞職、しばらくした後、ベルギー大使として同国に赴任して行った。

次の外務次官は、重光葵となった。白鳥情報部長は、スエーデン公使に任命され、英二が情報部長を引き継いだ。英二の前任者白鳥部長は、満州事変当時から情報部長の職にあり、満州事変の経緯やその後の日本の政策について国の内外に説明していた。だが、同氏の考えは、軍部と共に急激に強硬化して行ったため、米英に対し強い姿勢で臨むことが多かった。その反動が日本への風当たりを強くし、対米英関係に支障をきたす恐れが生じたことが、更迭の主な原因であった。

それだけではない。出先機関から「機密情報が白鳥部長から新聞に漏れているのではないか」などの苦情が寄せられることがしばしばあった。他にもいろいろと問題があって、上司である有田次官の立場も苦しくなり、結局、次官、情報部長の二人が、責任を取って辞めることになったのである。情報部長というポストは、微妙な立場にあって、常に大臣、次官と密接に連絡をとる必要があり、英二が就任するとすぐに外務大臣室に呼ばれ、訓示を受けた。

「毎日、用事があってもなくても必ず一日は顔を出すように」と。

情報部が外務省にできたのは第一次大戦後である。ベルサユーで開かれた平和会議に日本は、米、英、仏、伊と共に連合国の一員として参加したが、日本全権団は、日本に直接関係ある部門以外は、ほとんど参加できず、多くの重要事項についての発言は封じられた。

それぱかりではない。日本の提案した人種平等案は葬り去られ、山東問題でも日本の主張は通らず、ドイツの領有していた南洋諸島の委任統治についても思うように決まらなかった。

こうした問題に対して外務省は、国内外の世論の啓発に努力を怠ってきた。そのため、日本の立場を理解させることができず、世論が日本に有利に運ばなかったのだ。

この苦い経験を踏まえて大正九年八月、内田康哉外相の時、情報部を設けた。その初代部長にパリ講和条約会議から帰ったばかりの伊集院彦吉イタリア大使を据えた。二代目は田中都吉次官が兼務し、三代小村欣一、四代斎藤博、五代白鳥敏夫と続き、天羽英二は、六代目の情報部長となったのである。

情報部長の地位は、それ程高くなかったが、内外に及ぼす影響は大きい。

英二はその頃、「情報部は外務省の鬼門で部長は最も危険な職だ」と語っている。正直、彼は座りたくないポストだと思っていたようだ。

情報部から一旦外部発信された情報は取り返しがつかない。それだけに情報部の仕事は、慎重であることが大切だが、時間との戦いでもあるので、敏速でなければならないのである。

英二は、前任の情報部長とは異なる考え方で、情報部の統括を考えた。これまで情報部は、政界や軍の有力者との連絡を密にし、そうした人たちの意見を有力な情報源として取り扱ってきた。そのため外交政策まで彼らの

意見が反映されかねないので（外務省内部の情報網を整備強化することが先決である）と考え、その組織作りに心血を注いだ。

また、昭和八年五月から昭和十二年の四月までの四年にわたる彼の在任期間中に、斎藤、岡田、広田、林、近衛と五人の内閣総理大臣が変わり、それにつれ外務大臣も内田、広田、有田、佐藤、広田と変わっている。

その間、蒋介石の西安監禁事件、海軍軍縮条約破棄、北満鉄道譲渡問題、二・二六事件、日独防協定などの諸問題が起き、内外とも多難な時代であった。

外務省は、昭和八年九月、広田弘毅が内田康哉に代わって外相になった。その頃から幹部は、大幅に変わり次官重光葵、東亜局長桑島主計、欧米局長東郷重徳、通商局長来栖三郎、条約局長栗山茂、情報部長天羽英二という顔ぶれであった。

その後、アメリカ局が新設され、局長に堀内謙介、調査部長に栗原正が当たり、その人たちを併せて、幹部会を構成していた。

当時、陸海軍にも情報機関があった。

だが、それはいわば非公式の機関として陸軍は調査部の下に、海軍は軍事普及部の下に置かれていたのである。それが軍事だけでなく、国防の名のもとに内政、外交にまで口を挟むようになり、次第に巨大化したため、外務省の情報機関と摩擦を起こすようになった。

英二が情報部長に在籍していた頃、新興国日本は、国際社会の中で台頭しつつあり、日本がどのような外交政策をとるかは世界も関心を持ち始めていた。

満洲は、昭和七年（一九三二）三月、満州国として独立を宣言し、日本は、同年九月にいち早く承認した。翌年の昭和八年三月には、帝政となり、清朝最後の皇帝溥儀が、同国の皇帝に納まった。

国際連盟は、中国の訴えにもとづき昭和七年二月、リットン調査団を派遣、その調査報告書が早くも十月に提出された。その報告書は、満州国の独立を認めないとするもので、それが国際連盟において採択されたため、昭和八年三月日本は国際連盟を正式に脱退した。

脱退に当たり天皇陛下は、詔勅を発せられた。

「満州国の独立を尊重し、その健全な発達を促すことが東亜の禍根を除き、世界の平和を保つ基である。しかし、国際連盟の主張は、それと全く異なるので、日本は脱退した」というものである。

国際連盟脱退の趣旨は、（満州のような東亜の問題は日本にとって死活問題だから、もし日本の意見が外国と異なる場合は、日本はその存立上、独自の政策をとらざるを得ない）というもので、当時の国民の多数意見であったのである。

これについて広田外相は、翌昭和九年の議会において次のように演説している。

「国際連盟脱退の詔勅で、わが日本の向かうべき進路を明確に宣示された。日本は東亜における平和の維持につき重大な責任を感じ、断固たる決意を示す。日本は、東亜における平和維持の唯一の礎としてその全責任を負うべきである」

これは、これまでの日本の外交政策を大きく変える転機となった演説であった。すなわち国際協調主義から日本の国益を押し出す政策に転換していく道筋となった演説であったともいえる。

外務省情報部の任務は、満州事変後の日本の立場を明白にし、新しい外交政策を説明することにあった。

だからこの新しい広田演説にたいする海外の反響については、特に注意した。

だが、特別な反応はなかった。

米国からも政府、ジャーナリズム及び世論を通してなんら批判や苦情が寄せられなかった。それ故、外務省は、当時日本が東亜の平和維持の唯一の礎として全責任を負うことを世界が了解したと判断した。

実際、米駐日大使も「日本は東亜の安定力だ」と言っていたのだ。

この広田演説の約一月後、日米政府間に公文の交換が行われた。いわゆる広田・ハル交換公文である。その内容は、次のようなものであった。

「日米間には友誼的解決を根本的に困難とする問題は何も存在しない。日本は、他国とことを起さんとする何らの意図もない。米国は、その国策の遂行は平和的手段によるべきであるとの確固たる決意を持っている。日米間に見解の相違が生じた場合は、友好的精神と平和的かつ公正的解決の願意を持って日本の立場を検討する用意がある」というものであった。

言い換えれば、ハル長官は、もし日米間に見解の相違があれば友好的精神と平和的解決の希望を持って日本の立場を検討しようとするものであったのだ。

ところが、日本の立場は、広田外相の演説にあるように「日本は、東亜平和維持の唯一の安定勢力としてその全責任を負う」と明言し、その上で、ハル長官は広田外相と交換公文を交わしていたのであるから、同長官は広田演説を是認したと日本側は解釈した。その解釈は、後になって日本側の思い過ごしであると気付いたのである。

（二）満州事変後の日本と天羽声明の持つ意味

満州事変が、関東軍により謀略的に引き起こされたのは、昭和六年（一九三一）九月十八日である。翌年の三月一日には満州国の建国宣言がなされた。わずか半年の間に中国東北部をほぼ制圧したのである。これをもってしても関東軍がいかに周到な作戦計画を立て満州全域の

制圧を狙ったかがわかる。だが、同国は、日本の傀儡政権であるとして国際的には認められなかった。

にもかかわらず日本政府は、昭和七年（一九三二）九月十五日「日満議定書」を締結してこれを承認した。

さらに日本軍は、抵抗する中國軍を追って、昭和八年三月四日、熱河省の首都承徳を占領。国際連盟を脱退した後、四月には万里の長城を突破して華北に侵入。五月には北京、天津の陥落は時間の問題とされにいたった。

そうした事態を重視した蔣介石軍は、五月三十一日、日本と塘沽停戦協定を結んだ。万里の長城と河北省の延慶と蘆台を結ぶラインとの間、東西約二百キロ南北約百キロが非武装中立地帯となったのである。これによって、東三省（遼寧、吉林、黒竜江）に熱河省を加えた地域が満州国となり、万里の長城をもって中国との国境線とし、その西南側に緩衝地帯を設け、満州国の治安と防衛を図るという日本軍の意図が完成したのである。

この協定によって満州の戦火は一応収まった。その後、盧溝橋事件までの四年間は、日本軍の侵略的行動や局地紛争はあったが、日中間に本格的な軍事行動は起らなかった。

この停戦によって中国側は、満州を奪われただけでなく、脇腹に匕首を突き付けられたような状態となってしまった。それとは逆に、日本側としては、有利な形で満洲事変にピリオドを打つことができたのである。世界は、満州における日本の立場を非難しているが、実力を持って日本の動きを封じ込めるところまでは踏み切ることができず、あきらめムードが漂いつつあった。

満州事変後の日本の立場は、広田演説で明白に打ち出されたが、これを世界に了解させるには情報部としても非常な努力を要した。それにはまず外務省関係の内外の新聞記者に働きかけねばならない。

情報部長である英二の記者会見は、非常に頻繁に行われるようになった。その中に後に有名となり世界の反響を呼んだ世にいう「天羽声明」があった。

当時、外務省では、次官、局長などの幹部が、毎朝九時に集まって幹部会を開催していた。この幹部会で、大体の外交方針を決定していたのである。外務大臣もときどきこの会議には顔を出していた。

情報部長の英二は、この幹部会に毎回参加するとともに、毎日、朝夕二回、外務省担当記者団と会見した。その他、週三回外人記者団との会見がある。そこで発表した英二の談話は、外国ではスポークスマン談話として取り上げられ、記者によっては、その談話をすぐに本社に打電していた。

また、内容によって外国人記者たちは、ホテルのロビーに集まり、その情報の持つ意味を話し合い、コメントを加えて本社に送っていた。さらに、そのロビーには在京

大使館員が出入りしていて記者から聞いた情報を持ち帰り、それぞれの大公使に報告していたようである。

発表の責任は、すべて情報部長である英二が持っていた。彼は、日本の新聞には、国際外交関係の記事が多く掲載されるよう願って、朝日新聞の緒方竹虎、毎日新聞の高石真五郎、読売新聞の正力松太郎など各紙を代表する人物に頼んだ。

記者会見は、通常、情報部長室で行っていた。大テーブルを囲んで記者団が集まり、発表の後に質問を受け付けた。外国人記者の中には、あらゆる問題についてしつこく質問を浴びせかけてくる記者があり、閉口させられることも少なくなかった。

また、コミンテルンのスパイとして世間を騒がせ処刑されたユーゴスラビア（現セルビア）人のゾルゲもいた。彼は、出潴大使の紹介状を持って、米国からやって来たが、英二の記者会見には、必ず出席した。体格の良いスポーツマンタイプの気さくな男であった。

英二が次官の時に逮捕されたが、残念ながら彼がスパイであったことは、それまで全然気が付かなかった。それほど彼は巧妙に立ちまわっていたのである。

当時の日本で、最も重要な懸案事項は中国であった。中国は、満州事変以来、排日、抗日運動をますます強め、国際社会に対しても日本の不当な侵略を訴えかけていた。こうした運動の背景には、国際連盟や米英の強力な後押しがあったのである。

米英両国は、中国に対し、武器や飛行機を供給したり軍事用の飛行場を建設したりして、蔣介石率いる国民党を支援していた。また、国民政府の顧問として国際連盟や米英関係者が入り込んでいた。

それだけではない。日本を除外した中国借款団を設けるなど、中国への対日戦争準備を支援する動きが活発となった。そこで広田外相は、在外外交官に対し、次のような訓電を発した。

「中国の状況は、極めて異常である。通常の国際法規及び慣例を持って律することはできない。中国の改善は、一般欧米人などが考えるような生易しいものではない。東京における日本の権威と実力とが、東亜平和維持の唯一の基礎である。中国に関する国際問題については、当然日本が主となるべきだとしばしば強調してきたが、最近の緊迫した事態にかんがみ、随時各方面にこのことを徹底せしめるよう努めたい」というものであった。

ところが東京の二、三の新聞が、その訓電の内容をかぎつけ、スッパ抜いた。このような重要な政策は、出先に任せて別々に発表するよりも、中央で統一して発表したほうが誤解を避けられるだろうと英二は考えた。

そこで彼は、昭和九年四月十八日の記者会見で、非公式談話の形式で外務省の見解を発表した。それがいわゆ

る天羽声明といわれた発言である。

「日本は、満州問題に関して国際連盟を脱退した。これは、東京における平和維持の根本義につき、日本と連盟との間に大きな意見の相違を見たためである。日本は、東亜における平和及び秩序維持については、当然東亜諸国と責任を分かち合うべきである。中国の保全及び統一秩序の回復は、日本の最も切望するところであるが、それは中国自身の自覚及び努力を待つよりほかない。したがって、中国がもし他国を利用して日本を排斥し、東亜平和に反する措置に出る場合、例えば武器、軍用機の輸入、軍事教官の雇い入れ、政府借款などを行うようなことがあれば日本は黙っていられない。また、欧米列国が中国に対して、共同動作をとるようなことがあったならば、たとえ、名目は財政的又は、技術的援助であるにせよ、事実において政治的意味を持ってくることは必然である。もしその形勢が助長されるときは、中国にとっても非常に不幸をきたすのみならず、東亜の安定に、ひいては日本に対しても重大な結果を及ぼす恐れがある。したがって、日本としては、主義としてこれに反対せざるを得ない。しかし、各国が中国の平和に支障を及ぼさない経済活動をすることは、無論歓迎するところである」

翌日の日本の新聞は、いずれも趣旨に賛成するという論説を掲げた。フランスの新聞は、大体趣旨を是認し、ソ連は沈黙した。しかし、米英の新聞の多くは批判的であった。

この談話の内容と発表は、すでに外務省の幹部会で決められ、発表の時期だけが情報部長に任せられていた。だが、発表後米英から強い反響があったので、英二は、広田外相、重光次官に対し申し入れた。

「あの談話が、対米外交に累を及ぼすことのある場合は、私の責任として、私は辞職する用意があります」

しかし、広田外相も重光次官も「あれは自分たちの方針だからそんな心配はいらない」とのことであった。

天羽声明を、米英の新聞は大きく取り上げ、日本の中国大陸への進出を正当化するものであると書き立てた。そのため、在日クライヴ英国大使、グルー米国大使が天羽談話の真意を確かめるため、広田外相を訪問した。

訪問を受けた外相は、天羽声明は当時の外務省の政策を反映したものであることを説明した。ところが、米英両国は、中国国民党政権を支えようとしていたため、天羽声明は米英の新聞論調の示す通りではないかとして、日本の立場に理解を示さなかった。

（三）スポークスマンとしての役割

英二が外務省情報部長時代にもっとも気を使ったことは皇室記事である。外国新聞関係者の陛下への拝謁は極めてまれなことであったが、その時は面倒な打ち合わせを行った。

例えば昭和八年六月二十二日UP通信の社長のロイ・ハート氏の拝謁のときも会談の内容に触れないで記事を書くことで落ち着いたが、合意に至るまでには相当に時間を要している。

また、外国の新聞雑誌などに陛下または皇室の記事が掲載されるたびにチェックした。不敬とみなされる記事があった場合は、関係国の大公使に電話して前後措置を講ずるよう働きかけた。

南太平洋委任統治区域に対しては、外国の新聞記者が、視察しようとしても、海軍はいろいろ口実を設けては、取材に行かせようとしない。そこで情報部は外国新聞社と日本海軍の中に立って調整したが、米国などはその秘密主義的な態度をなじって委任統治区域の軍備について疑惑を深めたようである。

また、当時の制度で不快であったのは、いわゆる掲載禁止事項で、ときどき内務省から事件について掲載禁止のお触れが出ることがあった。このため、外国の新聞通信社などはかえって日本政府の秘密事項を感知することができたともいわれている。

米国人の経営するジャパン・アドバタイザー紙は、掲載禁止事項の通達があるごとに米大使館に内報して、大使館の情報係に利用されていたという。このことは、終戦後、英二は、同社の記者の一人から聞いている。

いずれにせよ満州事変を契機に世界の日本に対する目は、次第に警戒の色を強めてきた。特に米英及び国際連盟は、日本に対し、厳しい目を向けてきたのである。そのため、外務省情報部としては、まず米英に日本の立場を理解せしめることが急務となった。

だが、それは単なる親善外交で片付くような問題ではない。

英二は、米英に対してきちっと日本の考えを説明し、理解させることが大切であるとかねてから考えていた。そこで来訪する外国の新聞記者、名士、評論家などにも積極的にコンタクトを取ることに極力務めたのである。

さらに、昭和十年七月には米誌フォリン・アフェアーズに若槻礼次郎元首相の名で「日本とその使命」と題する論文を掲載。同年十二月には英紙フォートナイトにも松井慶四郎元外相の名で「イギリスと日本」と題して日本の政策に関する論文を掲載している。

昭和九年秋のある日、英二は、広田外務大臣から次のような指示を受けた。

「斎藤実内大臣が米国の在日新聞記者ヒルシャーに語った談話の中に帝国海軍の方針と異なる発言があったのでその真偽を確かめてほしい」と。

広田外務大臣は、大隅海軍大臣から閣議の席で聞いた話で、もともとは米国ワシントンの駐在武官から大隅海軍大臣宛直接伝えられた情報である。

英二は、ヒルシャー記者と親しくしていたので、早速同氏を呼び真偽を確かめた。その記事は「日本海軍がワシントン条約破棄、ロンドン条約脱退など威勢のいいことを言っているが、それには斎藤実大将は、反対である」という内容で、海軍の大御所である斎藤大将にそんな発言をされてははなはだ困るというものであった。

英二は、この問題でしばしば斎藤邸に足を運びその真意を聞いて、「改めて意見を発表する」ということで決着をつけた。

だが、当時の雰囲気から言って、斎藤内大臣の発言はますます軍拡へと向かって行く海軍に一石を投ずる勇気ある言葉で、英二には、斎藤大将はさすが国際感覚のある英傑であると感じた。

それから約一年、軍の発言力は、ますます強まり、日本の軍国主義化は進んで行くことになるが、比較的平穏に過ぎた昭和十年九月のことである。

米誌「リバティ」から元ウィルソン大統領のブレーンで知られていたハウス大佐が世界の平和を維持するためには、米英仏ソの大国がその領土の豊富な資源のある一部を割いて日独のように狭い国土の中で活発な国民を有する国に分配すべきであるとの意見を述べた。それに対する答えを世界の著名人から伺いたいとして日本からも複数人の意見を求めてきた。

英二が、その指名された人物に当たり、寄稿を求めると、それらの人たちは、英二に代筆を頼むことが多かったようである。

情報部長の英二は、日本の立場について外国の新聞雑誌に多数の寄稿を行っている。そのことが彼自身の主張かのように誤解され、戦後戦犯として重い責任を負わされることになったのである。

英二が外務省情報部長在任中、最も重要な事件は、昭和十一年二月二十六日に起きた二・二六事件である。

同日未明、英二の持つ連絡網からいち早く事件の内容が知らされたので、重光次官とも打ち合わせた上、早速外国への新聞、電報を一時止めた。だが、その前にロイターの記者が、簡単な暗号電報をシンガポールに打ったため、東京に反乱が起きているとの報道が世界に広がった。

しかし、情報部側でも事件発生以来、在外公館宛に正確な情報を打電し、同時に同盟通信にも打電したところ世界の世論は、流言飛語に惑わされることなく、落ち着きを取り戻した。

とはいえ、東京では、戒厳令が敷かれ、通信の閲覧が始まったので、外国本社と東京特派員は、思うような連絡が取れず、外国の新聞・通信記者は、毎日英二のところに駆けつけ苦情を言った。ことに検閲が厳しかったので不平があった。そうした緊迫した状況の中に一つのエピソードが生まれた。

記者会見の時にＩＮＳ通信のジェームズヤングが息巻いて「一体日本の検閲官は英語がわかるのか」と怒鳴った。すると英二は「英語は分かるのだが、米語は分かるかどうか。それは知らん」と答えたから一同大笑いとなり、ヤング記者も黙ってしまった。

緊張した場面では、時には冗談も効用があると、英二は述懐している。

二・二六事件をきっかけとして、軍の動きはますます活発化し、米英との距離は次第に遠くなって行った。

昭和十一年十月、英二は有田外相から日独防共協定の内報を受けた。この協定は、外務及び陸海軍の最高幹部が、秘密裡に動いたもので、外務省の幹部である英二にも全く寝耳に水の出来事であった。

日本が、米英と対抗するため、ドイツと手を結んだことは、日本の将来を暗くすることになるのではないかと英二は懸念した。実際その後、日独防共協定は、日独伊三国同盟にまで発展し、戦争への道を歩むことになってしまったのである。

その間英二は、国の内外に向かって、国土の狭い日本に対し門戸を閉ざすことなく対応するよう呼びかける執筆活動を続けた。「国際知識」「世界とわれら」などの論文を外交時報や国際評論に書き送り、依頼に応じて外国の新聞、雑誌にも寄稿した。

(四) 外務省情報部、内閣情報局に吸収さる

外務省情報部として着手する必要に迫られた仕事に、国際通信網の確立があった。昭和の初期には、外国と日本を飛び交う国際的なニュースは、ほとんど外国の通信社経由のものであった。

明治になって日本にも通信社が誕生したが、とうてい外国通信社と対抗できるものではなかった。

英二が情報部長になった頃には、「連合通信」と「電報通信社」の二社がありそれぞれ競い合っていたが、資金力に欠け、経営基盤も脆弱であった。需要先は新聞社、会社、銀行などで、通信購読料は日本全国併せても百五十万円程度にしかならない。ところが、両通信社の経営費を合わせると二百五十万円以上かかっている。その差額を広告収入、民間の寄付金、政府補助金で賄っていた。連合通信は外務省情報部、電報通信社は主に軍がその補助金を出していたのである。

日本の国力が急に上昇し、それに伴って、国際的地位も向上してきたのに日本人が毎日読んでいる外国ニュースを取扱う通信社が充実していなかったため、独立した外交ニュースを十分供給することができなかった。外国人から伝えられた外国製のものを右から左に流すだけであったのだ。

これではいけないと考えた英二は、昭和六年発足当初

の若槻内閣、幣原外相のとき、部外者であったが、有力な国際通信社の設立を研究した。折よく英二は情報部長になったので、かねてから懸案の有力な国際通信社の設立に着手し始め、関係方面に両社合併の方向で積極的に働きかけた。

英二は、連合通信の社長岩永裕吉氏とは長い間親交を重ねていたので、説得に当たってそれほど面倒なことはなかったが、電通社長の光永星郎氏との交渉は難航した。最初はまとまりかけ、光永氏が承諾の覚書を提出した。ところがその後、話しが頓挫してしまった。

その理由は軍の圧力を恐れてのことだったのである。

最初、通信社買収の資金は、内田外相から林権助武部長官を通じて三井の有賀長文、池田成彬にはかかった。だが池田は「財界は、今軍部からの攻撃の的になっているのに、その上通信にまで財界の手が伸びるのかとの印象を持たれれば、財界はますます軍部ににらまれる」として反対した。その代わり、資金の余裕がある放送協会の参加を呼び掛けたのである。

そこで、外務省、逓信省、放送協会及び新聞社代表との間に協調が図られたが、今度は光永と関係がある徳富蘇峰、地方新聞代表の小山松寿、東武らが反対し始めた。

英二はこうした人たちと数回にわたり話し合いを続け、昭和十年五月九日、広田外務、床次逓信両大臣の連名で全国の代表的新聞社二十七社と放送協会の代表を招いて懇談会を開催するところまで漕ぎつけた。これによってやっと新通信社設立の基盤ができたのである。

しかし、電通系の新聞社は反対を続けた。が、昭和十一年二月二十四日、頼母木逓相のとき解決し、収まったかに見えた。

だが、今度は人事の問題が起きた。外務省は、最初最高責任者には、永井松三駐独大使を推すつもりで、内田外相は、わざわざ彼を呼び寄せたのだが、いざ新通信社ができかかると軍部がこのポストを手に入れようと動き出し、連合も内々軍部に岩永祐吉氏を最高責任者にしようと根回ししていたので、総意は岩永氏に傾いた。

外務省情報部も強いて永井駐独大使に固執することはなかったので、結局岩永氏が、責任者に決まった。これが、昭和十一年九月に設立され、戦前新聞やラジオのニュースを賑あわせた同盟通信である。

設立までに四年近くを要した。その間逓相は、三人変わっている。（これでやっと日本にも初めて外国の通信社と肩を並べる強大な通信社ができた）と英二は肩の荷を下ろす思いであった。

満州事変後、軍も情報の収集と宣伝の必要を痛感し、陸軍は調査部と新聞班、海軍は普及部を設け、多額な予算と人員をもってそれぞれ独自に、情報宣伝活動を始め出した。

だが、国際問題の情報は、外務相の所管であり、信頼されるに足る情報が多かったため、最も活用されていたのである。

そのためか、軍はしばしば国際問題の情報にまで手を伸ばし干渉するようになった。

外務省情報部は、軍の自由にならないだけでなく、時には軍と異なった方向に進む。そのため、軍の情報機関と外務省の情報部がしばしば摩擦を起こしたのである。

外務省情報部が強化され、活動が活発になればなるほど軍にしてみれば煩わしい存在となってきた。その上、同盟通信まで握られては大変だと考えた軍は、外務省を弱体化し、通信社を掌握しようと考えた。

そこで、まず内閣に情報委員会の設立を提案、ついで同盟通信に対する補助金の所管を外務省情報部から内閣情報委員会に移そうとしたのである。

外務省は、こうした企図に極力反対した。だが、それも無駄な抵抗にしか過ぎなかった。時代の流れは、軍の発言権をますます強大化する方向に動いていったのである。

昭和十一年六月、広田内閣は、閣議で情報室設置を認め、情報委員会が同盟への補助金の支出をすることが決定された。全く軍の思うとおりになってしまったのである。

その後、情報委員会は昭和十二年九月内閣情報部に昇格、さらに十五年十二月には、内閣情報局となって、外務省情報部は吸収されてしまったのである。

こうして軍は、対満事務局、大東亜省などを創設し、東亜に対する外交権を握り、情報機関をその手に収めたのである。こうした一連の軍の行為を止めることができなかったことが、今次大戦の突入を許した結果につながったのではないかと英二は、後になって深く反省することになった。

情報委員会が、内閣情報部となった五カ月前の昭和十二年四月、英二はスイス公使兼国際会議帝国事務局長に任命された。

国際会議帝国事務局は、日本が国際連盟を脱退した後、政治問題以外については、国際連盟と協力した活動を行っていただけでなく、国際会議も数多くあったため、事務局をジュネーブにおいて連携を保っていた。英二は、その事務局長とスイス公使を兼ね、また海外に赴任することになったのである。

彼は、情報部を去るにあたって思った。

（情報部在職期間中は苦難の日々であったが、これまでの外務省勤務の中で最も充実し、輝いた期間であった。天羽英二の名は、欧米の新聞、雑誌などに毎日のように掲載され、未知の人からたくさん手紙をもらった。また、外国の大学、図書館、政財界のクラブ誌などにも顔写真

入りで談話が掲載された。特に天羽声明後は、はからずも時の人となってしまった。とはいえ、外務省を代表するスポークスマンの役割を十分果たし得たのか、次第に先鋭化する軍の暴走に歯止めをかけながら、高揚する国民の民族意識を国際協調の輪の中に溶け込ませ、諸外国を納得させることができたのか）

満洲国を諸外国に認めさせるが、万里の長城を超えて中国本土を侵そうとするつもりのないことを諸外国に理解させることができず、軍の中国本土への進出を抑制できなかったことに、心を残しながら英二は、次の与えられた職責を全うしようと決意を固めるのであった。

これから赴任する欧州は、政局が不安定で戦争の危険性をはらんでいる。イタリアでは、ムッソリーニ率いるファシスト党が、ドイツではヒットラー率いるナチ党が台頭し、まさに一触即発に近い状態であった。

英二は、赴任に当たって外務大臣の内命を受けた。

それは、赴任地はスイスであるが、ロンドン、パリ、ベルリン、ローマなどに自由に出張して国際政局に対する観測を速やかに外務省に通報する任務も併せて与えられたことである。

そのため彼は、スイス公使在任中、月の三分の一は、公使館のあるベルンにいたが、三分の一は、国際会議事務局のあるジュネーブで、残り三分の一は、他の欧州諸国の首都で暮らすことになった。

英二は、スイス赴任の船中で、盧溝橋事件をきっかけに、日中間に全面的な武力衝突が起こったことを聞いた。昭和十二年七月七日のことである。

この武力衝突が、全面戦争にまで拡大しないことを英二は、ただ祈るばかりであった。

（つづく）

吾輩は紙魚ロボである　その八

永畑俊三（永田俊一）

一、承前

前回は六月末から七月入り辺り迄の記述だが、繋ぎに簡単に振り返っておく。

（感染対応）

六月半ば大きな感染の波が危ぶまれる中緊急事態宣言を解除した東京が、七月に入り再宣言に追い込まれ、三週間で倍増一〇〇〇人の大台に迫り、八日に政府は東京の緊急事態再宣言（7/12～8/22）、埼玉・千葉・神奈川・大阪四府県のまん延防止等重点措置の延長（～22）、沖縄の宣言延長（～22）、（なお、北海道・愛知・京都・兵庫・福岡の五道府県は重点措置解除）を決定した。また政府の対応切札のワクチン接種加速も体勢が追い付かず七月に入ると新規予約停止が相次ぎ、自治体や職域接種申請予定者などから「梯子を外された」の声があがり、六日には河野特任相が配分計画の見直しを表明し、綻びを露呈した。

（オリ・パラ開催）

総理がG7での開催支持取り付けを得て開催を動かぬ前提としたオリンピック、六月二一日、組織委員会は五者協議を開催し、まん延防止等重点措置が七月一一日までに解除されれば「収容人数の五〇％までで、上限一万人」、延長か宣言が出されれば「無観客も含めた対応を基本とする」との趣旨で合意した。先行選手団の受入れ地方到着が本格化、バッハ会長も東京入りし八日オリンピック五者協議開催、四都県無観客その他も実情に応じた開催が決定された。

（政治情勢）

会期末、野党の内閣不信任案否決、会期延長も出来ず国会閉幕。緊急事態時に法でロックダウンする欧州にならい私権制限容認を求め始まった議論もうやむやになる。

そして七月四日、秋までにある衆院選の前哨戦とされた東京都議選も、自民党が目標とした公明党と合わせ過半数との目標に届かなかったが、直ちに責任問題で政治的動揺（首相降ろし）にも繋がらず過ぎたところである。（先の大戦時に政治が死んだように、支持率といった次元ではなく政治自体に対する不可逆的不信醸成に到らなければよいのだがと思う吾輩ではあった。）

（経済情勢）

ワクチン接種を終え大型景気対策で、景気回復・労働市場逼迫・物価上昇・金融緩和出口議論への回帰といった現象が強まる米国経済を横目に、日本では四～六月期の民間エコノミストの予想も概ねマイナス成長が続き、大方の今後の予測も正常化は七～九月以降、来年度も緩慢な回復とみている。首相G7帰国後の一八日閣議決定された骨太方針は、ポストコロナに向け一気に動きを加速させたいとの決意表明であるものの、基礎的財政収支黒字目標の年度内再考や社会保障改革対策の欠如と批判されるように、いまだ歳入の議論が出来ず各国に比べコロナ対策が遅れている我が国の現状を浮き彫りにしたものにとどまった。

（新常態論）

コロナ前から世界は大きな変革期に際会しているとの意識は共有されていたが、コロナ下その虫眼鏡作用もあって、問題の所在とあるべき姿の深堀が進んだ。経済社会の姿としては、年明け後矢継ぎ早に打ち出されバイデノミクスと称される動きに目が離せない。世界スタンダードのイニシアティブを執ろうと、世界一経済大国を計画的に目指す中国を色濃く意識する形で、民主主義の価値観の上に、「連帯（国内的には格差是正）と脱炭素化」をメインテーマに動き出した新常態議論に世界が引き摺り込まれ出した。そしG7サミットが、「民主主義陣営の再起動の方向性・具体策が強く収斂して行く」動きを加速させ、我が国も自国の一周遅れの問題も抱えながらついていかねばならないという、例のパターンにはまってきたところで、如何に主体的に強調してゆくかが問われている。

（ロボット論）

あれこれ論じたものの、またこの回も進んだところは僅かであるとの感を否めない。即ちあるべきは、シンギュラリティーに達していわば新種となる前に、創造主の人間として、個々が善を持ち自然の理に基づき思考する哲学的資質を備え、自由・平等・博愛の社会形成を追及して行ける、遺伝子操作をすることが必要と考える。イメージとしては信託アトムを埋め込むことである。また万一を考えてサイボークのような異常体力は争いの可能性を考え遺伝子内容にはしないこととする。・・といったところであろうか。コロナ観察にかこつけているが、本当にこの人間観察から解が出るのだろうか。違うような気もするが、その悩みが続くという意味で、次回に「つづく」とさせていただきたい・・・とした。

二、コロナ第五波の新段階

（一）感染拡大、宣言・措置の強化（七月）

七月八日東京都の緊急事態再宣言等が公表された段階で世界を見ると、デルタ型が世界一〇四か国で確認され、新興国で接種率の低い国を中心に感染再拡大が進んでいる（減少していた死者数も足踏みを見せだした）。一二日宣言適用時、対象の東京・沖縄では酒提供が一律停止され、飲食店は午後八時までの時短要請がなされた。先だって八日酒提供停止を「金融機関も働きかけを」とした西村経済大臣の要請が融資制限の恐れなどから反発を招き翌九日直ぐ撤回されるというハプニングもあった。更に一三日には酒類販売事業者に対し休業要請などに応じない飲食店との取引を停止するよう求めた方針も撤回する仕儀となる。

新たに二日連続で千人を越え一三〇八人の感染が確認された一五日、東京都の新型コロナウイルス対応モニタリング会合では、二週間後一四〇二人・四週間後は二四〇六人と第三波のピーク（1816）を越えるとの分析予想が専門家から指摘され、医療提供体制の逼迫の危機感が示された。オリンピック開催も控え大会組織感染対策会議の座長が「医療逼迫なら五輪期間中でも中止を」とか政府分科会の会長からは「五輪応援は自宅で」とかの発言もあり、都医師会からも入院急増で余裕がなく危惧が表明されたりした。なおこの時点でのオリ・パラについての朝日新聞の電話世論調査では、開催賛成三三％反対五五％、無観客はよかった七七％、安心・安全の大会出来る二一％出来ない六八％の結果であった。そしてまた、首都圏三県や大阪府はじめ関西圏でも感染が急拡大してきた。更に一八三二人を記録した二一日になると同じ都のモニタリング会議は、八月上旬には一週間平均が約二六〇〇人になり第三波越との予測数字を示した。

実際には、月末二九日は東京で当初予測の倍を超える三一七七人、全国でも最多九五八三人を記録、首都圏推定デルタ株七五％を示した。首都三県・大阪も緊急事態が検討に入った。酷暑の中無観客で始まった五輪は日本のメダル獲得に熱が高まる一方、「五輪やるのに家に居ろでは、人流は減らず意識も緩む」「医療逼迫第三波ほどでない、との都の説明では危機感が伝わらない」等専門家等から厳しい批判の声も上がった。こうした中三〇日、政府は基本的対処方針の改定を行い、埼玉・千葉・神奈川・大阪に緊急事態宣言、北海道、石川、京都、兵庫・福岡にまん延防止等重点措置の実施（8/2～8/31）を公表。重点措置区域にも飲食店の午後八時までの時短と酒類提供しないよう要請を行い、軽中等症患者の重症

化を防ぐため、抗体カクテル療法の新薬を積極供給すること等を公表、首相会見で記者説明した。なお、首相は感染拡大の原因でないとして五輪中止を否定、八月末には高齢者のワクチン二回接種八割の見込みと重症化リスクが次に高い四十・五十代そして感染が大きく広がっている若い世代の接種に今後注力することを強調、ワクチン接種が更なる効果を発揮する迄、一人一人が高い警戒感を持って感染予防を徹底し慎重な行動をとるよう要請した。

同時に五輪について聞かれた首相は、繰り返し交通規制やテレワークの効果で歓楽街の人の流れが減少傾向にあるとし、「自宅でテレビなどを通じて声援を送って欲しいと」と述べるのみ。都知事も会見で五輪開催と感染拡大の関係を聞かれ「五輪の視聴率は二〇%を超え、ステイホームに一役買っている」と否定していた。この安全・安心な大会一辺倒の当局に、同日首相会見の前に直談判に及んだ政府対策分科会の尾身会長は、検査体制の整備と医療提供体制の強化要望と並んで、コロナ疲れや五輪で生じた国民の複雑な気持ち等に触れ、国民に強く寄り添うメッセージを出すよう求めていた。なお実際に開催（7/23～8/8）されてからも一方で熱戦に国民の熱が高まる中、関係者の感染が止まず五輪自体を隔離運営するとのバブル方式の綻びや無観客ながら周辺に集まる人流密がもたらす感染が危惧され続けた。

（二）感染爆発・医療崩壊、オリ・パラ、災害・異常気象等多事多難（八月）

六都府県の緊急事態宣言、五道府県のまん延防止等重点措置は八月二日（期限は8/31）適用になったが、同日朝の主要駅などの通勤風景に大きな変化は見られなかった。四日開催の厚労省新型ウイルス対策専門家組織は、二三都道府県の新規感染者数がステージ四（感染爆発）相当に達したことを示し「全国で感染が再拡大し、これまで経験したことのない感染拡大が継続している。危機感を行政と市民が共有することが必要」と指摘した。五日にはまん延防止等重点措置に福島、茨城、栃木、群馬、静岡、愛知、滋賀、熊本の八県が追加された。

専門家の心配や夏休み越県自粛を呼びかける知事会の声（8/1）もむなしく、心配されたお盆前より早くあっという間に「感染爆発」と言われる状態に達した。八月一一日、東京の感染者は四二〇〇人、重傷者は二日連続で過去最多を更新一九七人となり、全国では一万五八一人の大台で過去最多を記録、重傷者も一三三二人となった。厚労省の対策専門家組織は、全国九府県で感染最多を記録、病床使用も一六都府県で五割超になり、三一都道府県で「感染爆発（ステージ4：最も深刻な状態）」に相当し、「もはや災害時の状況に近い局面」と強い危機感を露わにした。四度目の緊急事態宣言が東京に出て

一か月、過去三回人出の減少幅が縮小してきているがこの四回目は更に顕著で、感染者は急増し、自宅療養者も重傷者も増え続けている。翌一二日には重傷者は全国で一四七八人の過去最多（春の第四波の1413を上回る）を更新、感染者も一三日には初めて二万人を超え（20366 東京は5773）、ワクチンの未接種者が多い世代で爆発的に感染者が増え、都内の重傷者は五〇代以下が七割を占めた。自宅療養が東京では急増し二万人を超え、病床逼迫下ホテル療養も断られ、保健所の入院病院調整機能や軽中等症患者の見守り機能もマヒする中、急変して搬送困難急増下自宅で死亡するケースも出てきている。また、クラスターの発生件数も職場や学校施設などに急激に広がり増え、感染力の強いデルタ株の急拡大に伴って、国内どこでも感染拡大につながる環境へと変化、これまでの感染防止の肝は飲食店という政府の姿勢だけでは通じなくなっている。抗体カクテル投与対象拡大、酸素吸入の拠点構築、開業医の自宅療養支援等、未活用だった医療資源のコロナ対応投入の軌道修正が都や医師会でようやく始まり、政府の分科会もデパ地下も対象に「東京の人流の五割減」を提言する事態となり、日本百貨店協会も加盟各社に入場制限を呼びかけることを明らかにした。

一方で都内重傷者の六割が四〇～五〇代ということからも、ワクチン接種の加速が急務ということも改めて認識され、ワクチン受給導線目詰まりで停滞している接種促進の回復調整も、受給網構成者や国・地方・職域・学校などの間で鋭意進められ出してきた。因みに世界ではワクチ接種の進んだ国ほど社会活動の自由度を大きく取り戻している。米国ではワクチン普及や大規模経済対策を背景に経済はコロナ禍前の水準を回復し、四～六月期の実質GDPは年率換算六・五%となっており、むしろ景気の急回復で飲食店など一部業界は人手不足が広がり、物価の急上昇を避けるため緩和政策の出口を探るFRBと市場の緊張感など、大国の振る舞いに目が離せなくなっている。またいち早くワクチン接種で先行した英国では成人の八七%が接種の一回目を、六六%が二回目を済ませており、ジョンソン首相は「ワクチン接種が、感染者の重症化や死亡の可能性を劇的に弱めている」と説明。春から「解除計画」を示して大規模イヴェントの開催をノーマスクで認める等集団免疫獲得仕上げのウイズコロナ作戦を、これも先行して進めている。そしてジョンソン首相は七月一九日、一方でパンデミックは終わっていないと強調、公共交通機関等混雑密閉空間ではマスク着用を呼びかけつつ、新型コロナウイルスのロックダウンの法的規制をほぼ解除することを発表、感染者が増えることは覚悟の上ワクチンで重症化は抑えられると判断、ウイルスとの共存を模索する道を再確認した。しかし世界はこの面でも格差はなはだしく、例えばアフリカ

は感染第三波に見舞われており、ワクチン接種完了は人口の一％題でそこへデルタ株が流入、一か月で感染者が百万人増（一日当たり人口でならせば急拡大の日本と同じ位）と急拡大し社会不安を起こしている。

また流石に七月末ごろから、米国や欧州でも感染再拡大の動きが見え、米国ではワクチン接種率の低い地域ほど新規感染者が多い傾向にあり、欧州では接種率五割を超えても感染抑制に苦戦し、感染力の強いデルタ株の拡大で感染を抑えるための「集団免疫」獲得へのハードルが上がっている。ワクチン接種率でトップを行ったイスラエルで経時抗体劣化危惧から三回目接種が始まり各国でも検討され始めたが、流石にＷＨＯは「医療関係者の接種さえ終わっていない国を助けるべきが先」だと一時的にやめるよう呼びかけた。なお、ワクチン接種を巡って先行国でも接種率が一定を超えると伸び悩む「七割の壁」が課題となっている。英国では六月初旬一回接種が人口の六割を超えたが、七割到達に二か月かかり、イスラエルも五月に六割を超えたが、八月半ばでまだ六割台で足踏みしている。米国も仏国も七割を前に頭打ち感を強め、デルタ株の広がりで集団免疫の獲得が従来の六～七割から八～九割に上がったとの意見が大勢となっている。その為各国とも接種を条件に金銭やサービスの提供の特典で誘導したり、検査を有料化したりして接種を促すが、強制には副反応への危惧や義務化への抵抗で難しいところがある。日本はこうした段階はまだ見えておらず、二六日予定通り海外渡航者用に国内でワクチン証明書の受付が開始されたが、賦存在庫の性格を巡っての国と地方及び接種機関間の論争は収まっておらず、希望ワクチンに対して供給量不足は相変わらず、東京では知事が「若者にもワクチン接種を」と呼びかけるが、区市も都民も「現場にワクチンが来ないのに」と呆れ憤る。東京・大阪の自衛隊の大規模接種センターも六月中旬から一八歳以上に対象を広げているが、週二回の予約受付が一時間で予約が埋まってしまう状況である。

そんな中三〇日の緊急事態・まん延防止措置拡大決定の記者会見で、首相は七月末までに希望する全ての高齢者への接種とする目標を達成したとし（7/31 一回目86.2％二回目75.5％）、「八月下旬に二回接種を終えた割合が全国民の四割を超えるよう取り組む」と言明した。その前日新型コロナ対策分科会尾身会長は、集団免疫獲得は従来型で人口の六割～七割接種でと言っていたが、デルタ型の広がりで目安は八割以上になったと説明した。七月末厚労省は早ければ来年初めにも米モデルナ社と武田薬品工業から五〇〇〇万回分のワクチンの追加供給を受ける契約を結んだ。米バイオ製薬ノババックス社とも交渉しており合計二億回分の確保をめざしているとし、海外で進む三回目接種を来年に行うことを検討するとした。八月入り後五日河野特任相は七～九月分として

六〇〇万回分の輸入前倒しでファイザーと合意、一〇月上旬までに一二歳以上の対象者の八割分を提供できると説明し、七月一日最大一四〇万回に達した接種ペースを落とし「一二〇万回を目安に最適化して欲しい」と求めていたペース維持が可能になったと発表、今後在庫管理や偏在解消の課題解決と合わせ進めるとした。先ず接種の重点は重症者に占める割合の高い四〇～五〇代で、国内使用の前にワクチン外交で台湾への供給に使い、日本を米国・中国に次いで四位のインドを抑え供給国三位にしたアストラゼネカを四〇歳以上に活用してテコ入れするとした。

八月二日米国ではワクチンを少なくとも一回接種の成人の割合が（目標の独立記念日7/4から一か月弱遅れで）七割を超えた。また三日ニューヨーク市は市内レストラン・バー、スポーツジム等屋内施設の利用客・従業員にワクチン接種証明提示の義務付けを発表した。

東京で七月最終週からは五輪開催期間を挟んで毎日前週の感染者数を超える感染爆発の継続上昇モードに入っており、八月に入ると多い日では五千人を超え、地方の感染水準も急速に高まるに到って流石に一七日、緊急事態宣言一三都府県、まん延防止措置一〇県追加を決定した。具体的には、緊急事態宣言には既往六都府県に既往まん延防止等重点措置から茨城・栃木・群馬・静岡・京都・兵庫・福岡の七県を追加し一三都府県に。まん延防止等重点措置には既往残存の六道府県（7/12 適用五道府県に8/2 適用の福島）に宮城・山梨・富山・岐阜・三重・岡山・広島・香川・愛媛・鹿児島の一〇県を追加し一五道県に。二〇日から九月一二日までの適用とされた。首相は会見で、医療体制の確保・感染防止対策・ワクチン接種の三本柱からなる対策を確実に進め「今回の宣言が最後になるような覚悟で」と述べたが、早速救急搬送困難最多三三六一件（15日までの一週間）、沖縄の病院クラスターで一四人死亡（17日まで）といった現実を踏まえ、「緊急事態の連発より医療体制の拡充を」といった批判に晒された。また、後手後手の対応や矛盾する呼びかけ等を踏まえ、何でもやるというなら国民の理解と協力に訴えるべきで、「国会開き、覚悟を示せ」との批判もあった。

こうして二九都道府県に緊急事態・まん延防止が適用され、デルタ型拡大への対策徹底を急ぐ態勢が示されたが、適用後初の週末多くの地点で前週より人出が増え人流増が危惧された。また検査での陽性率が各地で上昇し患者の急増に検査が追いついておらず、濃厚接触者の調査検査をする保健所の機能が限界を超える実態も明らかになった。入院・治療先が決まらない調整中の人が東京で一万二千、全国で三万一千と増加、保健所のパンクで行政・医師の連携が進まず、国と都が二三日改正感染症法に基づき（二月改正で勧告し従わねば公表可に）都内

全ての医療機関に病床確保や人材派遣を要請した。二五日には緊急事態宣言の対象に北海道・宮城・岐阜・愛知・三重・滋賀・岡山・広島の八県を追加（27～9/12）、まん延防止重点措置に高知・佐賀・長崎・宮崎の四県が加えられた（適用同）。新学期を控え学校に検査キット配布や教職員の接種推進の方針も示された。同時に宣言ドミノの中医療崩壊で三三都府県の病床の過半が埋まっていることも明らかにされた。

こうした中政府不信の声も強まり、二二日の横浜市長選挙で党推薦の候補が大敗することで地滑りが始まり、二五日には、九月一七日告示、二九日投票で自民党総裁選の実施方針が確認され、決定を俟って岸田氏が出馬の意向を示した。一方、無観客を既定路線に、学校連携感染プログラムの実施可否については各地の実情に応じてという調整を経て、パラリンピックが二四日開催された（9/5まで）。そんな折二三日には、四〇～五〇代の重症化抑制を急ぐためのアストラゼネカ製のワクチン接種が大阪市などで始まったが、その最中二六日米モデルナ社製ワクチンの異物混入の事前確認報告を受け一部の接種を見合わせると発表、代替可を除き一六〇万回分は延期とされ、接種計画に影響することになった。

（三）政治を問うまでになったコロナ

二六日には総裁選日程の決定・岸田政調会長の出馬表明が行われ、二七日には緊急・まん延追加県の措置適用が始まった。しかし、人流の止まらぬことや命を脅かす医療崩壊現実そして新学期からの学校クラスター危惧の中、パラリンピック佳境にテレビ観戦熱が上がる裏で、不人気起点で始まった総裁選・解散等政治日程議論が潜行（迷走）進展していた。報道等外から分かる進展を追うと、二六日出馬表明の中で岸田氏が「総裁を除く党役員は一期一年、連続三期までとし、権力の集中と、惰性を防いでいきたい」と述べ活動を開始、それが当然出馬と言い解散についてはコロナ対応が優先と言ってきた菅首相側の対応行動にも影響を与えることになる。一方野党は二七日、予備費積み増しの補正予算を通すための臨時国会を緊急事態宣言の期限のくる九月一二日を挟んで九月七日（～16）招集するよう求め、総裁選告示の一七日の前に解散総選挙に踏み切り、総裁選先送りになる可能性を含んだ案を提示した。自民党国対委員長も総務会長も今後の政治空白を考えしっかり予備費対応を考える意味でも検討には値すると応え、首相周辺では総裁選の前に衆院選を考えていた節が露呈された。野党も支持率低迷の菅首相と衆院選を戦った方が有利との思惑があり、この球を利用して菅首相も党内を震え上がらせ総裁選を有利に出来ると考えるのではないかと策したと受け取られた。他方党内では早速総裁選への各派、潜在立候補者の水面上下の動きが、コロナ疲れでタガが効かな

くなった行動変容同様、一斉に蠢き出した。早速菅支持を打ち出した二階幹事長のお膝元派閥で異論が出るとか、より選挙の顔が気になる若手議員の異論が派閥を超えて共有されるなど、昨年の安倍前首相辞任に伴う総裁選の異例措置と違い、今回は通例の国会議員・党員党友・地方票で行う為、無派閥の選挙の顔が疑問視される菅首相には不利な動きである。総裁選出馬とみられる他候補の世論調査支持率が高いことや前回支持の安倍前総理・麻生副総理といった実力者の消極姿勢も不安材料となった。

ここから首相の対応迷走が垣間見えてくる。三〇日には、岸田提案の辞任ターゲットになった二階幹事長と会談、幹事長交代を含む党役員人事実施との報になる。三一日党として野党の臨時国会召集拒否の方針を伝えるも、首相総裁選前解散総選挙決意の報道は独り歩きし、一日自ら月内解散を否定総裁選の先送りは考えていない旨明言。報道関係も閣議決定で決める「任期満了（10/21）選挙」の一一月五日公示、一七日投開票を軸に調整が進むとの見方に転換されたが、総裁選先送り奇策に「大儀なし」の批判と人事刷新策の不評が残ることになった。

（四）首相退任表明と総裁選、ウイズコロナ射程の宣言等の延長とその全面解除（九月）

そして一夜明け、二日午前中開かれた党役員会で、首相は「コロナ対策に専念する。総裁選には出馬しない」と語り、永田町に衝撃が走り日本中を情報が駆け抜けた。これを踏まえ三日（金）の党内は更に波立ったことは勿論だが、この日の記者質問には「新型コロナ対策と総裁選選挙活動は莫大なエネルギーが必要だ。両立は出来ない。感染拡大防止に専念したい」と、退陣表明の記者会見は来週実施と述べるにとどまった。早速河野太郎行革相（兼ワクチン特任相）が総裁選立候補の意向を固め、石破元幹事長も検討に入り高市早苗前総務相も出馬の意思は変わらずと意欲を示し、既に出馬している岸田文雄前政調会長も「緊張感を持ってこの総裁選に臨み続けねばならない」と語った。更には不出馬表明したばかりの下村博文政調会長も状況が変わったとして改めて相談検討する旨語り、野田聖子幹事長代行も出馬意欲を党幹部に伝えた。四日の各紙は首相退陣を一斉に伝え、「解散・人事封じられ自滅」「解散・人事万策尽きる」との近景から「コロナ後手後手の一年」「緊急事態連発、失った支持」「危機下の指導力不足」「説明尽くさぬ姿勢限界に」「対コロナ国民の信失った末に」「支持率昨年政権発足九月六五％先月二八％」といった遠景まで様々な退任背景が論評された。五日（日）にはパラリンピックも終幕、聖火が消える中閉会式を後にした首相の退任会見が行われる週が始まった。

この間コロナは、東京都は八月二三日（月）からの二週、水準の高さに変わりはないが前週を下回る感染者数

が連続しており重傷者も増加傾向が止まっており、全国への波及拡大も緩やかになっては来たが、感染・重症化年代の遷移も顕著でワクチンの早期投与の体制づくりや臨時医療機関の立ち上げなどが急がれている状況に変わりはなかった。

役員人事や総裁選前解散等の迷走の行き詰まりで党内の支持を失い二日辞任・総裁選不出馬を表明した首相は九日、改めて会見で「新型コロナ対策や公務にあたりながら総裁選戦うことはとてつもないエネルギーが必要」とし「一二日が期限の緊急事態宣言の解除が困難となり新型コロナ対策に専念すべきと思い不出馬を決めた」と述べた。同時に政府は、宮城・岡山をまん延防止等重点措置に移行し、東京など一九都道府県の緊急事態宣言を三〇日まで延長した。重点措置は、山梨・富山・愛媛・高知・佐賀・長崎は期限通りに終了、福島・石川・香川・熊本・宮崎・鹿児島に、宮城・岡山を加えた八県は三〇日まで延長された。なお、感染症対策分科会は新たな宣言解除基準案を提言、既存指標だけでなく、新規感染者数が減り切らない場合でも医療体制の状況をみて判断する内容となった。首相は記者会見で「全国各地で感染者はようやく減少傾向を辿っているが重症者数は依然として高い水準が続いており収束にはいまだ到っていない」との認識を示した。一方で重点措置地域では感染状況の改善があれば第三者認証制度の認定を受けた店は最大限午後八時までの酒類提供を認めるなどの先行緩和を認めた。また、中長期的な展望を示すとして、宣言・重点措置地域での感染対策を講じた飲食店の酒類提供、ワクチン二回接種証明書による会食人数制限の緩和・撤廃、接種者の広域移動を認め観光振興策の実施、等の検討を行い、ワクチン接種が行き渡る一一月ごろを念頭に、行動制限の緩和を目指すことも決定した。感染対策経済相の「緩和はワクチン接種が行き渡ってから」と直ぐ緩和かと受け止めた質問への答えにも「今緩和を語るのは尚早」とした専門家を押し切った政府の前のめりが透けて見え、相変わらずの規制の優柔不断・前のめり緩和の姿勢に変わりなく、その根拠のはっきりとした説明もなく、飲食関係者からも「緩和は嬉しいが、大丈夫か」といった声が上がる脳天気ぶりを貫いた。可と不可、善と悪を事実に合わせ共にきちんと発信する能力欠如と言わざるを得ない。

既に高まっていた総裁選熱は一七日の告示で野田聖子幹事長代行を加え、四候補による連日の討論会や各陣営の発信、動向・情勢報道等でヒート・アップ、リモート配信による新規性も相俟って、四候補はその政策を競うとさながら総選挙のような錯覚を起こさせて全国を釘付けにした感がある。野党も危機感から領袖の露出と自民党批判を逞しくし、自民党内の老・壮・若の動静も対象にマスコミ・世論も盛り上がった。皮肉なことに連日の

感染者数の対前週比差減少は総裁選入り後加速化し、投票日二九日の東京は二六七人であった。

そして岸田新総裁誕生ニュースの裏番組のように、三〇日期限の宣言・措置の全面解除と酒提供の営業再開に備える飲食店の意気込みを伝える報道に、基本行動変容の維持や段階的緩和の必要性や第六波に備えた医療体制改善などを訴える専門家等の声も薄れ勝ちであった。

その宣言解除は二八日決定され、一九都道府県の緊急事態宣言と八県のまん延等防止措置を期限の三〇日で全て解除するというものだが、基本的対処方針では、「医療体制のもう一段の整備」「着実なワクチン接種の継続」「日常生活の回復」の必要を訴えた上、解除後、飲食店では最長一か月をめどとして感染防止対策の第三者認証を受けた店は、営業時間を午後九時まで、それ以外の店では午後八時までを基本とし、知事の判断で酒類の提供を可能とする。時短要請に協力した飲食店に協力金を支給、イベントの開催制限は一か月をめどとし、収容定員の五〇%以内または最大一万人に緩和する、との基本指針を示した。

菅首相は記者会見で「今後は次の波に備えながら、感染対策と日常生活を両立していくことが重要」と指摘、「感染者の数も大きく減少し、ようやく社会経済活動の正常化が見えて来た」と語った。

(五) 岸田内閣発足（一〇月初旬迄）

そして休日明け一〇月四日（月）岸田総裁は臨時国会で第百代の首相に選出され、自民・公明の岸田新内閣が発足、会見で政策運営の考え方を新名主と共に、国会会期末一四日に衆院を解散し、一九日告示、三一日投開票とすることを明らかにした。八日国会で新首相の所信表明演説があり、翌週明け一一～一三日と衆参でこれに対する代表質問が行われた。

新首相は繰り返し、コロナ等危機対応の要諦は常に最悪事態を想定することで、感染が落ち着いている今こそ、病床と医療人材の確保、在宅療養者対策の徹底など、徹底的に安心確保に取り組むと表明している。一二日には東京で感染者七七人、全国で六一一人と低水準となり、落ち着きが顕著となってきたが、冬期の第六波の可能性に備えるためにも、適切な行動変容を新日常のマナーとして欲しいとする専門家の言葉に重みが感じられた。

(六) 内外経済再開への動き

(経済状況)

七月に入り東京に非常事態再宣言が発動される等宣言・まん延防止措置下、第五波の全国的感染拡大の動きが加速化されてゆく中での、経済状況を見てみよう。七月初出た六月日銀短観では、六月半ばの宣言・措置解除も反映してか大企業の幅広い業種で景況感が上向いた。

製造業は世界経済の回復が追い風となり、低迷が続く非製造業でも底打ちの期待を示す動きが見られた。二一年度の設備投資計画は全規模全産業で前年度比七・一％増と上方修正された。

宣言前後に公表された経済指標や予測は、官民ともに実質ＧＤＰの年内コロナ前回復予測やワクチン接種進展や飲み会支出増によるシニア消費の急回復を予測し、七月一四日には中央最低賃金審議会の小委員会が二〇二一年度の最低賃金を全国平均で二八円を目安に引上げ時給九三〇円とすると決めた。（昨年度〇・一％に落ち込んだ伸び率を三・一％とコロナ前の伸び率に戻した）。

しかし自粛措置で飲食・観光中心に厳しさが増し、帰省・旅行の抑制など移動自粛を促す動きの影響も出てきて、七月三〇日時点での日経による民間エコノミスト一〇人の七～九月期実質ＧＤＰ前期比年率予測は平均で二・四％（六月上旬には七％台予測のエコノミストが多）となった。二七日改定のＩＭＦ経済見通しも、二〇二一年世界実質ＧＤＰ六・〇％を据え置いたが、米欧を上方修正する一方、緊急事態相継ぐ日本を〇・五％下げ二・八％とした。八月一〇日内閣府発表の七月の景気ウオッチャー調査（街角景気）でも、二～三か月先の先行き判断指数（ＤＩ、季節調整値）は前月比四ポイント低下の四八・四と三か月ぶりに悪化した。また同日発表の労働力調査も四～六月失業者一三三万人（前年同期比九％増）のうち失業期間一年以上のものが七四万人で三割以上を占め、長期化に懸念が表明された。八月一六日発表の四～六月の実質ＧＤＰ年率前期比も一・三％と小幅な回復に留まり、実態は接種でＶ字回復のシナリオは既に崩壊しており、いち早く回復軌道に乗った米国・中国だけでなく、欧州と比べても日本の回復のペースの遅れが目立ち、回復が遅れる中、秋の衆院選を控え、与党には「大規模な経済対策をうたないと大変なことになる」との焦りの声が強まった。

景気回復の鈍さは二〇日、七月生鮮食品を除く総合前年同月比で〇・二％低下と十二か月連続下落となった消費者物価にも現れており五％を超える米国や二％台のユーロ圏等米欧と鮮明な差がある。また世界では株安が進んでおり、米連邦準備理事会（ＦＲＢ）による金融緩和縮小への警戒感（世界各国の金融政策の舵取りの難しさを予感させる）、部品調達先の東南アジアでの感染拡大による世界企業の供給不安、そして中国の規制強化不安、三重の懸念に起因するとされる。八月二六日公表の八月の政府月例報告は、国内景気の基調判断を四か月連続で据え置き「持ち直しの動きがつづいているものの、一部で弱さが増している」としたが、先行きについては感染力が強いデルタ株の広がり等を踏まえ「感染拡大による下振れリスクの高まりに十分注意する必要がある」と修正、下振れリスクを指摘するのは三か月ぶりとなった。また同日東京商工リサーチが発表したコロナ禍が一因で借金返済や代金支払いが出来ず倒産した社は、昨年二月から今年八月二六日累計で（負債額一千万未満も含む）一九七三社に上り、業種別では飲食業が三六三社と最多で、政府からの休業・時短・酒類提供停止の要請が響いている。また人の移動が制限された宿泊業や娯楽業アパレル業とその関連の卸売業も多い。従業員数べつでみると一〇人未満の企業が約八割を占めた。

日銀一〇月一日発表の九月短観は、大企業・製造業の業況判断指数が前回六月から四ポイント上向きプラス一八、大企業非製造業が一ポイント上昇してプラス二と五四半期連続の改善となった。ただ、改善ペースは鈍化しており、非製造業を中心に緊急事態宣言の解除後の商機に期待を寄せる。経営者アンケートなどからも足踏み状態が覗えるところであった。

（課題検討進展状況）

ＤＸの加速化は当然として、「民主主義の価値観の上に『連帯（格差是正とともに）と脱炭素化』をテーマに世界を巻き込んだ、所謂バイデノミクスの新常態議論」とこれまでも言っている。それも踏まえて、脱炭素議論とＤＸの進展動向をみておきたいと思う。

バイデン大統領主催の地球温暖化対策に関する気候サミットが四月末に開催されて以降本件議論が加速化している。炭素化予想や脱炭素化社会の姿や仕組みや制度についてイメージ共有努力が続いているとも言える。

二〇一六年発効したパリ協定は、二一〇〇年までの気温上昇を産業革命以前と比較して、二度Ｃ未満（可能なら一・五度Ｃ未満）に抑え込むことを目指している。国連の気候変動に関する政府間パネル（ＩＰＣＣ）が述べた地球温暖化の科学的根拠をまとめた第六次（2014以来七年振り）評価報告書（8/9公表）では、二〇年以内に産業革命前からの気温上昇が一・五度に達する可能性を指摘し温暖化の原因を人類排出の温室効果ガスで疑う余地なしと踏み込み断定した。またシナリオ別（五つ）の上下限でみると、五〇年までに排出が倍になる「非常に高いシナリオ」では二〇八一～二一〇〇年の平均気温は四・四度上昇し、大幅に削減し五〇年頃に排出を実質ゼロにする「非常に低い排出シナリオ」では、一時的に一・五度を超えるが今世紀末には一・四度に戻る可能性があると指摘。一八年の特別報告書では三〇～五二年としていたのに対し、いずれのシナリオでも今後二〇年で気温上昇が一・五度に達する可能性があるとした。

米政府が主催する気候変動に関する首脳会議（サミット）が二二日、オンラインで開幕した。会議に先立ち主要国は二〇三〇年に向けた温暖化ガスの排出削減目標を相次ぎ打ち出し、日本は一三年度比で四六％減、米国は

○五年比五○～五二％減らすと表明した。主要排出国が脱炭素で競い合うが、再生可能エネルギーの導入拡大など実効性をどう確保するかが課題となる。気候サミットでは、バイデン米大統領は冒頭「今後一○年で気候変動危機による最悪の結果を避けるための決断をしなければいけない」と呼びかけた。各国は新たな削減目標を国際連合に提出し、国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP）で進捗状況を点検する。一一月に英国で開く第二六回会議（COP26）に向けて、温暖化対策が不十分な国からの輸入品に課税する「国境炭素税」など脱炭素に向けた国際協調も協議する。国際的な温暖化対策の枠組みであるパリ協定は前述のように、産業革命前と比べた気温上昇をできるだけ一・五度以下に抑える目標を掲げる。達成に向けて日米英や欧州連合（ＥＵ）は五○年まで、中国は六○年までにそれぞれ温暖化ガスの排出量を実質ゼロにする「カーボンニュートラル」を目指すと表明済みであり、三○年の排出削減目標は五○年実質ゼロの中間目標となる。

これにより各国の脱炭素政策議論は加速化され、ＥＵは七月半ば温暖化ガスの大幅削減案を公表、ガソリン車（含むハイブリッド車）の二○三五年禁止、環境規制の弱い国からの輸入品に実質関税をかける国境炭素調整措置の二三年暫定導入を決定した。それを受け排出二酸化炭素に値段を設定し投資の是非を決める企業が増え、案件ごとに排出量を把握し金額化することで判断基準の一つに組み入れる企業が世界で二千社を超え、投資家の導入や価格設定を重視するようになっている。欧州先行で環境分野にマネーを誘導、温暖化の経済不安定化リスクを軽減するための中銀主導の融資や社債購入制度が導入され、日銀も七月一六日金利○％で金融機関の気候変動対応の投融資を促す長期資金新制度の骨子を決めた。また経産省は七月二七日新エネルギー基本計画の原案を公表、二○三○年には再生エネルギー割合を三六～三八％、原子力で二○～二二％と現状実現性険しい野心的な目標を提示したが、石炭火力がまだ一九％を占め温暖化ガス排出はなお高水準として再検討批判も出ている。また中国の電気自動車限定計画が世界の自動車メーカーの大変革を起こしている。（2020/11 中国国務院が「新エネルギー自動車産業発展計画［2021～2035］」を公布、2025年までに新車販売台数に占める新エネ車の割合を現行の約五％から約二○％に引き上げ、2035年までにＥＶを新車販売の主役とする目標を設定した。）

ＤＸは、元々デジタル化は時代の流れで日本は先端の研究と起業化は先行したが汎用化・社会化の段階に入ると、足並みが揃わずスピードも落ちた。コロナは世界のＤＸの加速化は当然のこと、日本にとっては世界との距

離感を身に染みて意識するとともに、社会に重い腰を上げて世界に倍する加速化を進めねばならないという、ある意味焦燥感・危機感を抱かせている。この間米中の貿易摩擦は、先端技術覇権争い更にはそれをも使った軍事力や価値観を背景とする国家覇権の争いにエスカレートしており、先端でのＡＩ競争、社会化・経済化における世界的規制・標準問題が進行している。また技術競争・基準争い、ＧＡＦＡ課税問題、デジタル庁といった象徴的動きも見せた。

技術競争の面でみると、この春米国の人工知能国家安全保障委員会（NSCAI）が「現状のままでは中国にＡＩの主導権を奪われる恐れがあり、米国の安全保障を脅かす」と警告する報告書を出した。戦略的人工衛星の分野で中国の量子コンピューターが先を行った事実が衝撃を与えたことも大きい。地政学的対立が表面化する中、半導体製造技術の優位を守る意味でも台湾リスクが高まっていることから韓国始め自陣営側での生産拠点の確保意識も高まっている。他方ヘルスケアや気候変動のような平和的分野での協力も強く訴えており、これらがバイデン・イニシアティブとして打ち出されているといえよう。

経済社会面に目を向けると、急拡大したＩＴ企業を代名詞ＧＡＦＡとしてその問題点を同定、課題を明確化するに到った。データ寡占、非価格競争、関連産業波及効果小、労働分配率小、消費リテラシーの劣化、無法国境越え、勝者総取り等々が明らかになっている。その巨大ＩＴ企業が世界を舞台にビジネスモデルを交差させてぶつかり合い国が巻き込まれる事態になっており、安全保障上、独占禁止法上、国際課税上等様々な課題を抱え各国横断あるいは対立の規制論議を呼んでいる。昨年グーグルが米司法省に、フェイスブックが米連邦取引委員会に夫々反トラスト法（独占禁止法）違反で提訴されたことを契機に議論が進み、この七月九日競争促進を目的に大企業へ監視を強める大統領令が出されたところである。また、ＯＥＣＤ加盟国を含めた一三一か国・地域が七月八日までに大筋合意した、法人税の国際的最低税率を少なくとも一五％とするとともに、域内で一定の売上高のあるグローバル企業を物理的拠点がなくとも課税対象としデジタル課税を行う法人課税の見直しルールについて、七月九日から開催のＧ２０財務相会議で合意、一○月迄の最終決着へ議論を前進させた。

コロナ下の日本、リモートワーク、オンライン授業・観戦・買物・手続き等が増え、総務省の本年五月時点での通信量調査では昨年五月に比べ倍になった。そしてコロナ下で痛感された対策情報・手続き目詰まりの背景にある行政のデジタル化遅れの解消が喫緊の課題となった。菅首相が一丁目一番地に掲げたデジタル庁の創設と迅速

総合処理は、ドタバタ続きながら九月一日にデジタル庁発足と相成った。その運用の実が迅速に上がることが期待されるとともに、官民合わせDX加速化の急展開が求められる。

三、新常態論と政策論

（一）新日常

前提としてのウイズコロナの新日常を念頭に、感染対策の心構えをはっきり転換する必要がある。当初から観察してきたところを極端に列挙表現することをお許し願いたい。不作為で準備なく長期戦略も欠き、受け身で対策入りし後手に回ったその場の知恵だしで対応、自ら経験に学び修正考え直しもせず、打ち手の実行方法の吟味や効果の確認もせず、ポピュリスティックな拘りを捨てきれず対策の順逆タイミングをそらし、度重なる自粛要請の遅出し早締めでタイミングを失し、対策の常態的目詰まりを起こし、不作為に辛抱強く従ってきた人々の我慢忍耐を逆なでするヒトごとのよう共感努力も無い説明ぶり等々。ここにきて流石に対応当局への不信も限度を越え、ついに世論のノーが顕現化し首相の辞任劇を誘発するに到った。後継選びでやっと政治の世界にも感染対策のあるべき心構えについても潜っていた正論も表に出てきたところである。新型インフルエンザ反省から決めたなすべきことの不作為を隠し今回のコロナ対応に入った専門家も医師会も、途中から正論批判者になったり、みずからの不作為を露呈するに到ったりしたが、基本同軸小出しの伴走者であった。

コロナ制圧に関しては遅速に随分差はあるが、多くの国が集団免疫獲得で収束の出口に如何にスムースに辿り着くか呻吟（しんぎん）努力中である。パンデミックの王道は、最悪事態原理に立ち、行動変容徹底の感染予防、水際・国内の迅速幅広の検査・隔離・治療（治療薬開発も）、ワクチンによる集団免疫獲得ということであり、如何に犠牲者を少なく如何に経済活動や生活等社会のダメージを小さく抑えてその維持を図りつつ、一日も早くそこへ到達するかである。

新型コロナウイルスの強勢から、感染放置での自然集団免疫獲得戦略は当初の段階で破綻し、結局、各国はこの標準シナリオに沿って臨んでいるが、その基本的スタンスやシステム、政策当局の対応姿勢・巧拙等によって、効果・達成速度に大きな差が出ている。この王道シナリオ通りに対応したのが中国で、コロナ感染拡大の兆候を認識した直後に先ず武漢閉鎖を行い突貫工事で専門病院を作って隔離・治療、全国に完璧な予防体制を敷いてワクチン接種を進め、経済活動の自由を確保している。

我国の場合は、形としては欧米諸国同様、感染阻止と経済活動維持を天秤にかけながらワクチン接種で追いかけ、幾つかの感染爆発の山を描きながら対応をしてきた。

当初はロックダウン政策の他国に比べて自粛のみの日本の感染の低さが注目されたものの、王道の基本的構えを欠いた為に、変異株への入替りとオリ・パラ開催の時期と重なって感染爆発に到り、当局の言行不一致への人々の忍耐もついに萎えたようである。先回りの構えなく後手の対応で説得力なしとして政策運営が信頼を失い、ワクチン接種を急ぐも集団免疫獲得の兆しが見える前に、感染爆発と医療崩壊で緊急事態宣言の全国的急拡散の現実が政治責任を問う事態を招いてしまった。

国民に我慢や理不尽を強いる危機時の内閣は、多かれ少なかれマイナス評価を抱え込むものであり、不評の対応は鮮明かつ過度にすら人々に記憶される。戦後の政権選択に見られたように、歴史的にもこのハンディを乗り越え難いのが看て取れる。戦時下の審判となれば尚更で、コロナ禍の最大の山を迎えている今、初心に帰ってそれをはね返して余りある修正力が政治に求められる、即ち「コロナは政治を問うまでに」なったと考えられる。そして信を失いながらも、ワクチン接種をここまで進める処まできているのだから、次のμ（ミュー）株への置き換わりで感染拡大の動きが出ぬ前に、ウイズコロナの新日常を念頭に、感染対策の心構えを明確に転換し対策を急ぐべきということである。

（二）新常態論

前回も申したところを枕言葉にして言えば、「民主主義の価値観の上に『連帯（格差是正とともに）と脱炭素化』をテーマに世界を巻き込んだ、所謂バイデノミクスの新常態議論」である。それは近年そしてコロナ禍でより鮮明になった世界の経済・金融・社会全般に亘る課題に対し、中長期的な在り方をしっかり論じ方向づけ、計画の進め方や認識・意思の共有を図り、新時代における新常態を具体化して行く歴史的挑戦の号砲であったと後に言われるかも知れないところのものである。しかし、その前捌きとして、コロナの適切な制圧と新常態論に併行する課題として地政学的問題の克服がある。後者は価値観の対立を前提としているため厄介なものであり、中国を中心とする動きに目を奪われているうちに、アフガニスタンにおける劇的展開により早くもバイデン政権及び世界は試練に直面している。複雑な価値観対立・民族や人種問題をはらみつつも、一帯一路で進める中国の経済圏拡大路線と原理主義の軍事偏向で経済政策力のないタリバン政権が逸早く結びつき、力の世界の覇権争いの火薬庫が燃えだしかねない危機に、如何に英知を絞って外交力を発揮し平和維持に努められるかである。

所謂バイデノミクスは、世界を巻き込んだ新常態議論と言ったが、理念面を理想的にフォーカスするとそれは、アダム・スミスとマルクスが展開した理論の復活を意味するものとも言える。前回スミスの「共感」にも触

れたが少しく敷衍すると、完全な共感は利己（人間の弱さ）と利他（賢さ）の一致を広め、『心の平静』の下で資本や土地を持つ人達がフェアな競争で経済を成長させ資本を蓄積していくことである。これにより人々は雇用を得て自立し心の平静も持つことになる。経済発展のための交換は人と人との共感なしには成り立たない。国際的に共感を広げるのが自由貿易であり、人が繋がり交流を深めれば穏やかな国際秩序が出来る。人類の全てが従える自然な正義が国際法に結実する必要があり、まさにスミスにおける『道徳感情論』や『法学原理』、そして『国富論』は、それを一体化した理論体系となっており、将に今の時代に共感を呼ぶ考え方である。またマルクスの理論大転換にも触れた。これも敷衍すると、マルクスは自然環境の制約を踏まえた物質代謝への配慮や共同体研究に基づき、生産力至上主義を脱して共同体の持続可能性と社会的平等に着目したコミュニズム論に転換した。資本の在り方としては、社会的共通資本の延長線上にあるバルセロナ市民運動のようなコモンズ的な民主主義を土台に置いており、脱格差と脱炭素の課題解決を求める現代の立場に通じる新マルクス論に繋がっている。このように、二百年前にスミスが共感を前提に市場経済論を、百年前にマルクスが環境と連帯への配慮を踏まえた資本論を展開したが、その理論体系を十分理解されず、「見えざる手」や「共産主義革命」という有名代名詞が

歴史を大きく動かした。そして現在、環境や衡平への配慮の必要性意識が高まり、グリーン革命議論の中でマルクスが蘇り、ノーベル賞（1998）経済学者A・センの指摘（貧困のメカニズム）やSDGs・ESGの潮流の中で、スミスが再評価される等、経済社会の在り方論の中で両者の存在感が増している。

新常態論のもう一つの相克が民主主義対専制主義である。民主主義を支える自由・平等・博愛のうち、自由・平等が日に見えて崩れる中で「共感」が語られるのは、多様性を認めぬ・相互信頼失墜のディストピア状況（なかんずく米中の）の下で、触媒たる博愛が崩れてはいけないとの危機感から、スミスの共感が蘇っているものと考えられる。そして、スミスの国際的共感を支える自然法理こそ、「信託の自律―思い遣り―誠実」であり、信託の観念が自由と平等を経済的に、あるいは社会的に繋いで、自由・平等・博愛の民主主義社会を紡ぎあげて来たのが歴史の教えるところである。この一年半以上、世界はコロナパンデミックの中で、命と経済の狭間で揺れ動きながらも社会の砦である「共感」、即ち信頼を失わぬよう防戦に努めて来た。そしてコロナ感染拡大の緊急事態宣言の中、危惧の声を押して東京五輪（オリンピック・パラリンピック）が開催され、その間に記録的感染拡大と医療崩壊と政治失墜を残して閉幕した。世界に約束したこの人類平和の祭典である五輪は流石に世界にス

ポーツや多様性への感動と共感を巻き起こしたことは事実である。しかし、パンデミックという人類の歴史的命の危機、その制圧と新常態論の摸索に相互信頼回復を賭けての戦いの日々にとっても、五輪が「共感」を成功裏に証明したかどうかは歴史の判断ということになろう。

こうした議論も含めて幅広く深く検討し中長期的な社会経済システム・制度・体制・意識の在り方をしっかり論じ方向づけて行くことが望ましく、日本も受け身で引き摺られるのではなく、具体的に世界のスタンダード作りに、独自の変革の問題も含め、主体的に世界の議論に参画していくことが望まれる。

「歴史に学び、事の由ってくるところを事実に依って究明し、時勢に的確に対応し事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」ご主人の処世訓である。前述の最近の経済社会の動きを踏まえ、その先にある新常態論との関係で、その事実認識が時勢の中でどう動いて行こうとしているか、議論の前提になりうるようなベース認識が示されているものも拾っておいてみよう。

（中長期経済シナリオ）

七月二一日政府公表の「中長期の経済財政に関する試算」（中長期試算）では、成長実現ケースとベースラインケースの二つが示されている。両者とも目標年度の二〇三〇年度の長期には実質成長率が潜在成長率と等し

く落ち着く姿になっており、前者の三〇年度は一・八%、後者は〇・八%に落ち着いている。過去一〇年潜在成長率が上向く兆しがなかったことからいっても、日本の財政の中期的な姿を見通す上で、ベースラインを基本シナリオと考えた方がよいだろう。基調的な経済成長率は精々一%程度で推移し、インフレ率も二%には届かず財政健全化は更に遠のくという姿であり、長期ではあるがアベノミクスの目標実現に当たる成長実現ケースに引き上げるには強力な打ち手を考え国民的レベルで構造改革を進める必要がある。（さらに言えばご主人は、少子高齢化急速な人口減少の中では、移民の大規模受け入れのような人口の純流入がない限り、国内需給バランスの取れた形での持続的成長は望めず、早い段階で評価指標を総体としてのGDPではなく一人当たりGDPに変え、その持続的成長を図る姿勢に転ずべきとしている。今までより小さいが豊かな国ということである。GDPが大きい程強国というトラウマにとらわれている限り難しいが、地政学要因を経済モデルの外の与件と置くように人口変動を経済モデルの外に置きトレンド修正をすることと割り切って考えられないかということである。）

（エネルギー計画）

七月に示された第六次エネルギー基本計画素案も、案自身が説明しているように「気候変動問題への対応と日本のエネルギー需給構造の抱える課題の克服という二つ

の大きな視点を踏まえて」と厳しいものである。脱炭素の目標に合うように野心的な省エネ・再エネ等による削減を測り、それに沿った各種供給方法の積み上げによりエネルギー構成をはじき出しており、新たな産業創出と削減目標の達成というグリーンイノベーションを如何実現できるかにかかっている。

（企業と働き方改革）

また企業はＳＤＧｓ評価されることとなり金融機関も脱炭素中心にサステナブル金融に傾斜してきている。ルールメークでも欧州に追いついて行かねばならない。また中央銀行も支援金融に乗り出している。コロナ下従来の日本的な働き方から逸脱するが必然の動きとして、「テレワーク」「副業・兼業、フリーランス、」等が一段次元の違うレベルで注目され認識が深まった。人口動態や産業構造変化に従来の日本的働き方がズレを生じておりコロナ禍以前から増加傾向にあり、政策的にも推進されてきた。ジョブ型雇用も同じ流れの中にある。新たな働き方とも相性がよいが、その認識で官民、労使方向が一致し易い環境に入ったと言われる。そうするとなった途端に、その方式が機能するためには企業外部の育成システムやリスキル研修の整備や働き手の「キャリア自律」を促すことや選択的労働日や裁量労働制なども含めて働き方改革のトータルな姿を再提示して必要な法・制度整備を完結し、迅速に具体化することが、生産性を上げる意味でも重要である。がらり働き方を変える覚悟がいる。

（金融政策）

バイデノミクスでインフレ期待が高まり、連邦準備制度理事会の金融緩和政策の出口舵取りが世界中の注目の的になっている。各国の経済状況や経済力の違いがある中、一衣帯水の金融に大きな力の波を起こされると自国経済への影響を適正に保つための金融政策の対応よろしきを得ねばならないし、防波堤の高さが足りなければ津波の様な被害を被ることになる。過剰流動性下、破綻国・地域は違うが度々目にしてきた風景である。そしてＩＭＦの収縮改善の痛みを伴う支援となる。その背景には国際金融決済の通貨システム・制度の問題もある。

（世界金融制度）

社会の大枠の新常態を考える観点から、近現代の未曾有の歴史的危機後に学ぶと、例えばパワーバランスの危機的変化や並行する経済覇権の移行や波立つ世界金融の本位通貨揺さぶりが次の秩序を模索する原動力になっている。例えば、一次大戦後の英国の退潮・一国完結的米国の巨大化が金本位制の揺らぎを招き、戦後の各国金平価復帰も各国経済の立ち直りや発展の格差等からやがて金融危機や経済恐慌を招き、国・地域を閉ざすブロック経済化による直接貿易量の管理や管理通貨体勢導入となり、二次大戦に突入する。戦後は世界の中の圧倒的国力の責任を認識した米国が基軸通貨国の役割を担い金・ドル本位のＩＭＦ・世銀体制を作りだした。しかし各国経済発展に伴う米国経済の相対的地位の低下がニクソン・ショックで金・ドル固定平価制離脱に繋がり、時々過剰流動性のいたずらで何処かに金融危機を招きながらもその後変動相場制と主要国の裁量的為替価格調整で世界金融を何とかマネージして来た。ベルリンの壁崩壊後強い米国が帰ってきたとも思われたが、中国を先頭に途上国の急速な経済成長が続き、また、フィンテックの興隆は国際通貨システムの変革をも求めるものとなり、特定国通貨ではなく独自単一の共通通貨例えば二次大戦後の基軸通貨議論においてケインズが対案で示したバンコールのようなものの必要性を、コロナがくっきりとイメージさせる効果を発揮したのではないか。複数基軸通貨競争の先に安定性は期待されず、各国中銀のその上の世界中銀としての世界管理通貨の要となり世界に目配りして金融政策をとるＩＭＦというイメージかと思う。そして、ＤＸの流れの中フィンテックの進展は決済通貨をはじめとして国内外の通貨システムの改革を生み、金融政策の舵取りもより国際的土俵を意識して世界的安定・バランスを視野において行わねばならないことを後押ししている。

四、ロボット論

（一）共感と倫理

吾輩がこのパンデミックの成り行きを観察しているのは、改めて言うと、ヒトと社会の関係がどのように成り立っており、それを支えているそれぞれの機能や仕組みの在り様は如何なるものか更にはどうあるべきかを学ぶためである。その意味でヒトの心構えの重要素として、哲学することそして倫理と共感に注目してきている。

倫理に関して、今回は新一万円札と大河ドラマが切掛けのようだが、周期的に話題になる渋沢栄一の「論語と算盤」。行動変容と経済の狭間で揺れるこの時期に重なった。その冒頭は漢学塾二松学舎創立（明治一〇年、現同大学）者三島中洲と渋沢栄一の会話。明治四二年一月東京瓦斯役員の福島甲子三から渋沢の古稀の祝いに贈られた書画帖の中の小山正太郎の絵は「論語・算盤・朱鞘刀剣・シルクハット」を描いたものであった。来訪の三島がこれを見て「甚だ面白い。私は論語読みの方、貴方は算盤を攻究している方、その人がこのような本を充分に論ずる以上は、自分もまた論語読みだが算盤を大いに講究せねばならないから、貴方と共に論語と算盤をなるべく密着するように努めよう」と言い後日その一大文章を書いて送ってくれた。・「その富をなす根源は何かといえば、仁義道徳。正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することはできぬ。ここにおいて論語と算盤というかけ離れたものを一致せしめることが、今日の緊要の務めと自分は考えているのである」と。

三島は、明治一九年東京学士院で「義理合一論」の講

演をしている。「朱子学により義と利が峻別されるようになったが、本来の儒学では（陽明学的な立場からは）義と利は離れているものではない」と。そして明治四一年十一月『道徳経済合一説』の講演を行い、渋沢にその小冊子を送った次第。「学問は詰まり知行合一、先ず学問をする始まりは物の道理を研究し知るが始まりだが、詰まり知るのは行の為。研究する時分には道徳は道徳、経済は経済と別けて分析しなければならないが、行うときにはもう一つになって仕舞う」と説いている。

二人はかく肝胆相照らし、後に三島が二松学舎の舎長を退くとき渋沢が乞われ引き継いでいる。日本人のヒトとしての心構えの背景にこの考えが深く根付いている。

共感についても触れてきたが、「公益・私益の相克」の視点から見ておきたい。

スミスの『想像上の立場交換』は「人は最終的に、共感されないことの苦痛を優先して、自分の利己心追及を抑制する。見知らぬ他人の立場に身を置いて自分の行動を客観化することによって、利己的な行動を自己規制する。即ち人は［行為者］［観察者］［公平な観察者］三つの立場を絶えず変えながら生活する。わき目も振らぬ［行為者］、他人を批判ばかりする［観察者］のどちらも道徳的立場としては適当でなく、［公平な観察者］に立とうとする。感情の『適正点』であり、正しい道徳的基準となる」と。「社会と交際とは、精神が何らかの場合に不幸にも取り乱したとしても、それを取り戻す最も強力な手段である」という福沢諭吉の「人間交際」と「共感」の類似性にも着目したい。

スミスは「公益あっての私益でなく、個人は公平な観察者の共感に従って正しい行動が期待され、国家が一々口出しせずとも自ずと社会の秩序が保たれる。人々の生命・財産の保障としての正義（私益）があってこその公益であって、公益あっての私益ではない」と。その意味での国家の役割・重要性を認めている。公共財や市場の失敗や（危機的事態における）公益優先を認めている。すなわち文明社会の歴史の中で「私益（個人）」が生み出した「公益（国家）」だが、ひとたび文明社会の「正義」（法の支配による私権・私益の保障）が確立された後は、「公益」あっての「私益」の実現となる。発達した文明社会では公益と私益はどちらが優先でなく両方向的な関係になる。究極の問題は「公」の論理の内面化である。一人一人の市民がいかにして、責任ある市民として受け入れていくことが出来るか。「自助あっての公助」という論理をささえるものは「公助あっての自助」という逆の論理でもあり、鍵はスミスの「共感」である。一身の「自助」と一国の「公助」とをつなぐ「共助」の世界にこそ、スミスの「共感」や福沢の「人間交際」が主役になっていることが分かる。

そして、経済社会に変調旧秩序の揺らぎの兆しと指摘に始まり危機認識共有を幅広く深刻に促す災い（外敵・地震・疫病など）が内外に起こり、論争や争乱の中、中長期的な変革意識の共感に繋がることが、歴史的屈折点にもみられる。

例えば、飢饉続きで封建制社会を支えた農村経済の疲弊が顕著になり、一揆や開国改革論・アヘン戦争教訓などが頻りに語られ、安政の大地震やコレラ流行に見舞われ動揺が増幅し危機意識が広まり、改革派・体制派が時に立場を変え攻守所を変え外国勢力の干渉も受けながら、歴史的変革の時を迎えた明治維新。また、一次大戦後訪れる強国意識と戦後不況と関東大震災、昭和金融危機と大恐慌で立ち直りのきっかけを失い不況との闘いと泥沼戦争、そして二次大戦の惨禍と焼け跡の中からの戦後復興という大変革。更には少子高齢化人口減少の足音が高まる中平成金融危機後の構造不況下、構造改革・成長政策の不発で一時的景気回復以上には浮上せぬまま、東日本大地震・津波・原発災害、そしてコロナパンデミックに見舞われ、これまで小出しの変革論の一挙実現に向けての覚悟を新常態の形で後押しされている今。必要な大改革の実行には歴史的共感エネルギーが要るということでもある。それが往々にして惨禍で追い込まれないと出来ないきらいがあるということにも繋がっている。心して取り掛かって貰いたい。

（二）鍵を握る脳神経系と遺伝子

吾輩のロボット論は落ち着きを見せる気配がない。人工知能とアンドロイドの技術的可能性についての知見不足は措いて、「湧いてきた自分になりたいとの気持ちと、そうしたロボットが造り込まれるとしたら最低限『善』の気持ちが必要」に始まって「ロボットとしてどういう自分になるべきかを考えているつもりで、ヒトの立場で考えてしまう自分の生い立ちからくる立ち位置への疑問」、そして「シンギュラリティーを達した人工知能がこうして観察し学んでいる人の望ましい心をどう獲得し生物の新種になれるのか」といった思考の道草の迷いから脱出できていない。一応のイメージは遺伝子に信託アトムを持つロボットということなのだが・・・。

思うにチャペック以降、彼のヒト型ロボットは人工知能の研究発展の主流とヒトらしく見え振る舞うアンドロイド研究の流れに分かれて追及されて来たように思える。途中にヒト自体を超人間にするサイボークの動きや物語でヒトの心を持つ人型ロボット登場で両者がくっつくこともあったが、両者の技術レベルが高まり、チャペックが究極的に創造した真のヒト型ロボットへの回帰は、シンギュラリティーが見えて来た時代になってであろう。

チャペックの「ロボット」では、島のロボット工場が反乱ロボットに占拠され、一人を残してヒトは亡くなり、やがて世界にヒトも消える。ロボット達の耐用年数が来て新たなロボットを生産しようとするが出来ず、残されたヒトに「われわれにはロボットの生産ができないのです。機械が作るのはただ血だらけの肉の塊です。皮膚が肉にピッタリつかないし、肉は骨につかないのです。形のないごちゃごちゃしたものが機械から降るように出てくるのです。」と訴える。初代発明者が当初毛も腺も生殖腺もおへそも全て人間そっくりに作ったロボットは三日も生きておらず、息子が替って意識を持つ機械のロボットを作って大量生産、世界に溢れるまでになった。工場が占拠される直前、生産者の仲間内で初代の手稿が失われていることが発覚、どうしても工程で使われているうちの二つだけ、液体の製法が彼らにも記憶されていないのが分かった。この残った一人の製作者にそれを告げられたロボットはそれでも「われわれは機械でした。先生、でも恐怖と痛みから別なものになったのです。・・・魂になったのです。・・・何かが私たちと争っているのです。わたくしたちの中に何かが入り込んでくる瞬間があります。われわれの中からではない考えが、われわれにやってくるのです。・・・　生きていきたいと呼ぶその声、嘆きかなしむその声、永遠について語るその声、これは人間の声です！我々は人間の子なのです！・・・人間の遺産を渡してください。・・・生命の秘密を話すのだ。」と訴えられ脅されるが先生は拒否する。しかしやがて、先生の制止も振り切り生体解剖に名乗りを上げた一対の男女のロボットの死に直面した限界状況での涙と愛の表出、新しい命も生まれるかも知れないとの余韻を残し物語は終わる。

そこ迄行けるのか、明らかにこの時点でも鍵は「脳神経系と遺伝子」であるように思える。それが現代において、人工知能のシンギュラリティーとアンドロイドの姿形の完全ヒト化が見えてきたところで、再び創造主の声を聞くときに際会しているわけである。気になる言辞がデカルトの『方法序説』第五部内のロボット論にある。

「私どもの身体に似ていて、わたしどもの行為を実際には出来る限り模倣する機械があるとしても、それにも拘わらず本物の人間でないことを知るには、極めて確実な二つの方法が常にあるということ。その第一は、そのような機械は、私どもが思うところを伝え合うために実行する通り、言葉を用いることも、これを組み立てて別の合図を用いることも、決して出来ぬということである。なるほど言葉を発するような機械を工夫することはできる。のみならずこの箇所に触れて言わせてみたいことを訊き、あの箇所に触れて痛いとかなんとか叫ばせるというように、それの器官多少の変化

を起こす物体的作用につれて、ある種の言葉を発する機械を工夫することはできよう。が、いかほど愚鈍な人間にでも出来る程度に、目の前で語られる一切の意味に対して応答する言葉をかれこれ按排する機械は考えられない。

第二に、かかる機械は、私どものいかなる者とも同等に、あるいはそれ以上にも多くのことを遂行するとしたところで、このものにはどうしても免れがたい欠陥がある。何が欠陥かといえば、かかる機械は自覚によって動くのではなく、単にその器官の装置に従って動くだけだからである。いったい理性はいかなる種類の出来事であろうとこれに応じ得る万能の道具である。これに反して、それらの器官はといえば、個々の動作に対して個々別々の装置を必要とする。

それゆえに、理性が私どもを動かすような調子に、ただ一つの機械のうちに、私どもの全生涯のあらゆる場合に応じて、これを動かすに足るだけの種類の装置を施すことは、この点からしても実際には不可能だということになる。

・・・

かれら（動物）にあって働くものは自然そのものなので、彼らの器官の配合にもとづくということを証明するのである。それはあたかも歯車とゼンマイだけで成り立つ時計が、あらゆる知恵を尽くしてかかる私どもより正確に、時刻を算え時間を測りうるようなものである。・・・・・

人間と動物とこの二つの精神がどれくらい違うものであるかを知るとき、私どもの精神が身体から全く独立した本性に属するものであること、したがって身体とともに死滅すべきものでないことを立証する理由を一層よく領会し、この精神を打ち滅ぼす他の原因を発見せぬ限り、ひとはここからしても当然にも、精神は不滅であると判断することになる。」と。

不滅の精神、シンギュラリティーを越えたとしても不滅の精神は作り出せるのだろうか。アンドロイドがヒトそのものの肉体をもつに至ってもそれは不滅の精神を宿すことができるのだろうか。

翻って、現実の現在のロボットの姿や議論をみると、この間でも例えば世界的企業テスラがヒト型サービスロボット製作を発表したが、精密度は進んでいるものの使い道はあくまでも特定の人手代替である。コロナ下で遠隔操作のアバター（分身）ロボットの実証実験が行われているが、自身の体を動かしているような没入感を高めるのに通信規格4Gより5Gの活用をといった議論が行われている。また人工知能のシンギュラリティーを視野に、世界的な規範議論が行われているが、それは作り手の人間がそのようなものを作らないようにとの規範であ

る。パラリンピックで意識されたのも人類の可能性を広げる車椅子や義足の延長にある超人像でありその先にある先端技術の発展であった。

一方アンドロイドがオペラ主役をつとめ、台本上の大きな筋書きは事前インプットだが、具体的に読み込まれた受け答えは、その表情や口調や体の動きとぴったりと合うよう、莫大な場面と反応データ収納をベースに、対話相手のヒトとの稽古の繰り返しの中で身につけ、成功裏に（アドリブや更に新機軸の効果も相俟って）演じられている、との報道もあった。

人間の脳神経構造やその機能構造分析の進展も著しいが、紙数もあり詳細は省く。ある意味脱線するが、ご主人のテーマであるスマホ問題についても、スマホ脳分析から科学的にその弊害に警鐘が鳴らされるようになった。世界的に高名な医学者、A・ハンセンの言うところを要約すれば、

＊人間の身体と脳を形成してきた唯一の基本ルールは「生き延び、遺伝子を残す」こと

＊数百万年の進化の産物、視床下部―下垂体からの指令で副腎にコルチゾンホルモンを分泌させ心臓等の動きを強く早くするHPA系を作動させる偏桃体、作動の仕方は「火災報知器の原則」（間違えて鳴らないよりは鳴り過ぎの方がよい）

＊脳内の伝達物質で報酬物質と呼ばれ、元気と何に集中するか選択させるドーパミン（満足感付与は「体内のモルヒネ」と称されるエンドルフィン）

＊周囲の環境を理解するほど生き延びられる可能性高まる→新しい情報を探そうとする本能、その裏にドーパミン産生細胞→「かも知れない」が大好きな脳→「もしかしたら」がスマホを欲しさせ、報酬中枢を煽る（SNS作用）

＊マルチタスクの代償：脳には膨大な手順を同時処理するすごい能力があるが、その処理能力には著しく限定された領域が一つある。それは集中、一度に一つの事にしか集中できない

＊マルチタスクは集中力だけでなく作業記憶（「知能の作業台」）にも同じ影響が及ぶ。マルチタスクを頻繁にやる人は、些末な情報を選り分けて無視するのが苦手、つまり「常に気が散る人はほぼ確実に、脳が最適な状態で動かなくなる」

＊記憶するためにはそれに集中し情報を記憶中枢の海馬の作業記憶に入れて初めて固定化へ。これは眠っている間に行われるプロセスで、睡眠が大事な理由にもなる。情報を作業記憶から長期記憶へと移動するための固定化は、海馬に移す作業だけではなく、情報をその人の個人的体験と融合させ「知識」と呼ぶものを構築する。

＊知識をグーグルで代替は出来ない。本当の意味で深く

学ぶには集中と熟考の両方が必要で脳には消化のための時間が要る。短期記憶造りの場合は脳は既存細胞間の繋がり強化だけでよいが、長期記憶造りは、脳細胞間に新しい繋がりを作り、記憶の長期維持のため新たなたんぱく質を合成し、長期記憶保存の為その新たな繋がりを強化するためにそこを通る信号を何度も出さねばならず、この固定化という作業は、最も脳がエネルギーを必要とする作業である。

といったところだが、裏を返すとスマホ脳のように、環境変化に追いつかぬ脳の引き起こす問題も明らかになっている。仮にドーパミンの出方等を調節し、正しい事実認識と倫理観をベースに論理的常識的に考え冷静な他者への配慮も踏まえた判断と対応をするように神経系・遺伝子系を作り込むとすると、人間性の多様性が出なくなる。かといって、多様性で勝手に動いて社会の羽目を外さず進歩していく構図・個々を描き作り込めるか、といった問題も解決せねばならない。ロボット論としては、人工脳がその点の対応力をも含めシンギュラリティーを超える加速度的な進化に一層の注意が要るということである。

（三）再びの宇宙（予感）

鍵を握るのが脳神経系と遺伝子として、人工脳とアンドロイドの合体があるべきロボットを作り出すのは、現実論ではまだまだ先の事であろう。しかしコンセプトの議論をしっかりして進めないと、出来上がって気づいても遅いというタイミングにあることは確かである。ご主人は「歴史に学び、事の由ってくるところを事実に依って究明し、時勢に的確に対応し事を実現することが道であり、矜持を以って事に処す」を処世訓にしていると度々紹介している。逆に考えると、学び究明しても対応のイマジネーションと決断力に欠けることで、人間社会はあるべき理想への歩みを迷いそれるということを自覚しているからではないだろうか。ヒト型アンドロイドならぬ紙魚の形のままだが人工脳としては人間には追いついている吾輩は待つ身ということになる。「迷いながら」は消えるまい。

ではどうする。もう一度宇宙へ飛び立って、将来の姿への加速を試みてみるなり、タイムマシン・ホール（ワーム・ホール）に入って将来吾輩の言うようなロボットの実現可能性や自身のヒト型への転換方法などを探ってみるのも一法と考え始めた。

コロナ一巡のところまで人間・社会観察を続けて、その後に飛び立とうかというところである。従ってまたしても「つづく」であるが、飛び立ったら何時帰るか分からないこともあり、期限不定の「つづく」である。

つづく。

宅建士「花山聖司郎」の不動産事件帖
虚栄の罠（後編）

葵　州　月

他人物売買の仮登記

初夏の太陽が林立したビルの谷間に沈んで行った。JR浜松町駅や都営浅草線の大門駅周辺はいつものように、夕方のラッシュアワーをむかえ、勤めを終えた男女が駅や世界貿易センタービルの入口へ吸い込まれていった。

日が落ちたとは言え、暑苦しいその夕べの不快指数は一〇〇パーセント。

この暑さにも関わらずアイボリー色のダブルのスーツ、手にはカンカン帽子を持ち、流れ落ちる顔の汗を拭きふき足早に人波を避け、追い越していく男がひとり。

それは横浜「山手」の高級住宅地の現地調査から帰って来た大門土地開発顧問の萬道与輔だった。

暑い！暑いのは地球温暖化のせいだと、人の流れから聞こえてくる会話に彼はすぐに反応した。

不動産媒介契約を締結した売主の色香を思い出していた。老いを感じさせない丸顔で色白のおばあさん、意気投合して専属専任媒介契約を約定した。いまとても気分が良いのだ。すぐに即興で鼻歌が出てくるのである。

♪暑いよるは暑いよね～♪恋の病で熱を出す♪オレとあの女のラブゲーム、これも地球の温暖か～♪とね。

男は「ホッホッホッ」と照れ笑い、満面に笑みを浮かべたままビルの陰に消えていった。

やがて、その男は胸を反らせて意気揚々と蟹股を急がせ大門土地開発の六階エントランスから、営業部のフロアーに勢いよく入ってきた。

「ふうー」と息を吐き、

「萬道与輔、ただいま帰還しました。契約書、貰って来ましたぜ」

萬道は宅建士の高野幸四郎に不動産専属専任契約書を

誇らしげに渡して「いい物件ですわ。あれはすぐに買い手が付きますぜ。売り買いは当社でやる方向で頼みますよ、仲介料は両手に花といきやしょう！」

「でも、買手の媒介は井坂専務から横浜の州英不動産の田丸部長へ話が行っているからなあ・・業界の仁義には井坂専務も田代社長もうるさい人だから無理ですよ、萬道顧問！」

井坂専務も不動産を人間の利欲や利権のためだけの物、と考えてはいけない、不動産は人の縁と同じように、信義を基として良縁を結ぶことを第一義としている。

「片手だけじゃ儲けが半分！片手落ちじゃなかろうかいね！」

萬道は拗ねた表情を隠せない。今回は自分の手柄でできた契約なのだ。彼が予測していた手数料を減らされることは許せない、と、考えているから、その感情が抑えられないのだ。

「そんなにいい物件ですか」

「そうだよ！風光明媚！ヨコハマの港が一望できる高級住宅地の超格安物件というとこだな」

「専属専任だと、指定流通機構には五日以内に登録しなければなりませんが・・」

「登録すれば直ぐに業者から反応が出てくるわい。州英不動産も言ってくるさ、困るんだなあ、片手じゃな！何かいい手はないのかねえ？」

宅建士の菅野が考え込んでいる。考えるときの彼のクセで右手の人差し指をこめかみに当ててグルグル回している。

「どうですか、萬道さん。一度、当社で買い取る方向では・・・自己物件として販売（他人物売買）すれば、売買価格を当社が上乗せできますよ」

菅野は『自ら売主物件』として、第三者に売却をしようと提案している。その上乗せ価格で州英不動産に売らせても宅建法では『他人物を自社の物件』として売買することになるが、一定の条件を整えれば認められている。他人物売買は売買予約の契約でも良いことになっている。

「そのためには、どのくらいの価格で売れるか、試算してみましょうか。売りと買いの手数料以上の価格で売れれば一挙両得です。萬道顧問！ただし、専務の了解を得なければなりませんが、専務との調整は萬道顧問にお願いしますよ」

「上等博覧会じゃ！これから話に行くわい、会社も儲かる話にノウとは言わせませんわい」

田代社長と特別な縁故で顧問に招聘されたことは分かっていたから菅野も萬道には逆らえない。しかし、これが成功すれば菅野の手柄にもなる。

「わかりました。まずは明日、わたしも現地を見てきましょう。萬道顧問、ご一緒によろしいでしょうか」

「いい話になりそうだのう、大いに結構！生嶋のばあさ

んに会いにゆきましょう。菅野君！驚くぞ！色気のあるばあさんだよ！」
「聴いていますよ！もと赤坂芸者！関内では高級クラブの経営者で有名人だそうですね」
萬道は早速、生嶋家に電話をかける。
実体は、帰り際に聴いた家政婦の岡野マリの携帯に電話をかけているのだが。
「先ほどはありがとうございやした！明日も伺いますが、ご都合は如何ですかな」
（どうぞ、どうぞ・・・、また、お会いできるのは嬉しゅうございますわ、フッフッフッ・お待ちしていますわね）
「はい！よろしくお願いしますな。部下をひとり連れて参りやす」
電話を切った萬道の顔が赤い。
「菅野君も一緒に来てくれ。専務室に！」
「資料の準備をして、すぐに追いかけます」

そのまま萬道は専務室へ駆け込む。
「どうしたの、アカイ顔をして！もう飲んできたのかい？」
井坂専務が怪訝な表情でデスクから萬道を見上げて問う。
「飲んでいませんよ！専務！ヘッヘッヘッ・・媒介契約はできやした！菅野君がすぐに来ますが、ワシの発案でいいアイデアが出てきやした！」
「それはご苦労でした、やりましたね、さすが顔の広い顧問！今回は豊かな経験が生きましたね！」
元芸者である売主とバブル時代に遊びすぎて破綻した顧問との奇縁は天が与えた粋な邂逅ともいえるだろうと皮肉を込めて言ったつもりだが。
「でもねえ専務！ワシは生嶋のばあさんに惚れられちまったかもしれませんぜ、彼女は寡婦（やもめ）暮らしですぜ」
「年甲斐もなく！まったく・・顧問！契約ができたのはよかったがね、仕事に私的な感情移入は禁物ですぞ！」
「分かっていますよ！専務！惚れられても、ワシがあのばあさんに惚れることはござりません・・御心配にゃおよびやせん。でも、丸顔の色白で、どうみても四十代後半にしか見えないなあ、そういえば専務好みのタイプじゃありませんか！どうですかな、明日、専務も同行されると、いいかもなあ・・・老いらくの恋が芽生えるって筋書きが見えてくる・・・へっへっへ！」
「冗談はよしてください！そんなバカなことを考えないで取引先の女性には特に注意をしてくださいよ、顧問！」
「さすがにお堅い専務様、はいはい、注意しやしょう」
その時ドアにノック音、
「どうぞ！」専務が応答。
「菅野君が来ました、ワシの発案で、いいアイデアがあるようですぜ、説明をさせますから聞いてやってくれませんかのう」
萬道顧問は再度、自分のアイデアのようにアピールする。専務はこれを無視して菅野を見る。
「宅建士の菅野君のアイデアを聞こうじゃないか」
宅建士の菅野が他人物売買の詳細を説明する。宅建法上、売主と売買契約が出来れば自社物件として直接買主と契約ができる。この場合は売買予約の契約でも構わないとされている。
「菅野君、わかりました。他人物売買をすると仮定して、当社が手付金一割を支払うとき売買予約の仮登記をつけさせて貰うことを条件として交渉して来てくれないか」
「どうってことはありやせん！仮登記をつけさせましょう！」
萬道が胸を張って言う。井坂専務は萬道の顔を見ないで、
「来週には州英不動産の花山課長が来られるから、当社の売却価格を決定しておきたい。そのためには生嶋さんと売買契約を終わり、当社の販売価格を決定たいな」
「わかりました。当社の売却想定価格も鑑定してみます。批准価格（取引事例非核法）と収益還元法で鑑定をやってみます」
鑑定士がやる不動産鑑定作業を菅野がやるという。菅野宅建士の知識に萬道は感服していた。
「ほっほっほぅ！菅野先生！たのみますよ」

萬道の胸には成功報酬の計算式が浮かんでいる。コミッション（報酬）が確実に増える。媒介手数料の半分より大きい報酬が入ることを彼は確定的に想定していた。

なりすましの報酬

生嶋邸の門前に一台のベンツ・SL600が止まる。
午後六時。西日が横浜港に入船している大型貨物船や赤色のクレーン群を浮かび上がらせていた。
クラックションが二度、短く響いた。
これが合図だった。
しばらくすると、
家政婦の岡野マリは生嶋邸のセキュリティのセットをして、玄関に鍵をかけ門前に出るとリモコンでオートロックの門扉を閉めた。
「お待ちどうさま！」
運転席右のドアを開けると、サイドシートにゆっくり乗り込んだ。
運転席の男は、岡野マリがホステス時代から同棲してきた内縁の夫「やさしい男」藤井義男だった。
「お疲れさま」
「まあ！ヨコハマの港が綺麗ね」
「ああ、いいねえ、この景色は」
ハンドルを持った藤井はマリを見て微笑むとアクセルを踏み発進した。

車は黄金町の自宅のある老朽ビルへ向かった。

ベンツ・SL600がビルの駐車場に着く。

彼と岡野マリの部屋は最上階にある。

藤井はこのビル名を社会福祉施設：カナリヤ荘：と命名していた。ただ、大西洋の海と街並みが美しいカナリヤ諸島をイメージしてつけたのだった。

老朽化してシミだらけの外壁、街並みとも会わない違和感のある命名だった。

その七階建ての最上階が彼の事務所と二人の居宅だった。

２ＤＫの二部屋を間仕切りの一部を取り払い、繋げて使用している。

リビングルームに入ると、

岡野マリは手下げカバンから封筒を取り出す。

「今日はね、面白いことがあったのよ、あなた！これを見て！」

大門土地開発のロゴが入った封筒を内縁の夫に渡す。

白髪で長身の初老の藤井義男は、岡野マリから渡された封筒から一枚のシートを取り出して眼を細めて見ていたが、すぐに胸のポケットから老眼鏡を取り出して詳細に読み取り始めた。

「専属専任の媒介契約書ではないか。生嶋のばあさん、退院したの？」

「退院できるわけはないでしょう！本人はリュウマチと言っているけどネ、ホントは肝臓癌なんだってさ、もう、あの家には戻っては来られないみたいだからサ、わたしが書いてハンコを押してあげたのよ」

「そう言えばあのばあさんは山手の家は広すぎるし、子供もいないし、売ってシニアマンションへ移りたいと言っていたからなあ」

「そうよ！これも生嶋ママのためだわ！業者もね、少し見え張り男でサ、わたしのこと、始めから生嶋だと思っているのよ！フッフッフッ・・」

「騙したのかい・・」

「わたしがダマしたわけじゃないわ！勝手にそうなっていったのよ！相手がわたしを生嶋と思い込んでいたから、家政婦ですとは言えなかっただけよ！わたしからダマそうという意思はなかったのよ。だんだん面白くなってサ、これもゲームよ、明日もくるって言って来たわ、わたし、あのキザ男に惚れられてしまったのかも・・」

眉を顰めて見ていた藤井の目を覗いて、いたずらっぽい笑みをうかべた。

「あのキザな爺さんがさ！あたしに色目を使うのさ、アナタ！怒らないでよ、わたしを！」

「バカ言ってなよ。年寄りの冷や水ってやつよ！はっはっは！ボクはやきもちを妬いているわけではないんだよ！」

「面白い？」

「ただ面白いだけではボクはおもしろくないのさ・・やっと運がめぐってきたと言うことだな」

「どういうこと？」

「言っただろう！生嶋の家政婦をやっていればさ、そのうち良いことがあるってね、ようやくチャンスが来たということだよ」

微笑みながら藤井はマリの肩に手を回して引き寄せマリの額にキスをする。

「・・・・」

藤井義男は動き出した金脈が具現化する喜悦を噛みしめている。不動産取引の相手の出方次第で利用できる金脈を見つけたと思ったからだ。

藤井はマリの目を覗きながらやさしく語りかける。

「これからはボクが逐一アドバイスをするからね。ボクは財務、不動産コンサルタントだよ。あなたは生嶋真紀子になりきるんですよ！これからはキミが主役です」

「主役？・・」

「ドラマを演じる主役だよ、キミは昔、俳優になりたいと言っていただろう！それが今ですよ。その主役のギャラを手に入れようね」

「何を言っているか分からないわ、分かるように説明してよ！そんなに簡単にいつまでもキザ男を騙せるわけはないわよ」

藤井はやさしい目でマリを見て、また肩を強く抱いた。

（今は分からなくていい、分からないほうがベターだ）

藤井は胸に描いているドラマの筋書きの説明は避けた。

「アナタはね、そのキザ男には、ウソを通してください！これからも生嶋でいくのですよ・・・心配は要らないよ・・・」

岡野マリはやさしく語り掛ける義男を見上げている。

長年、内縁関係が続いてきたのはこの男のある面の「やさしさ」だった。ホステスの仕事柄、成績を上げるためにセレブな男性との一夜の付き合いが分かっても彼はそのことを叱責することはなく、もちろん暴力を振るうことは一度もなかった。

彼は暴力を振るうマリの前夫も知っており、いつもおおらかで悠然たる態度で彼女に接してきた。

「キミにはボク以上の男はいないよ」

愛撫を繰り返し、やさしくマリのなかに入って来る。

幼少で両親を事故で失い、養護施設で育ったマリの過去も知られている。

自分の男関係に罪深さもあり結婚を望むこともできず、馴れ合いのまま、今日に至っていたがマリはそれに不満はなかった。

「家政婦」の役柄でギャラを得ることができる。その実感は今は湧かなかった。

（彼は何を考えているのだろう）

「明日ね、生嶋のパスポートを探して持って帰れないか？」
「わかったわ、借りてくればいいのね」
マリには保管場所は分かっている。
「でもさ、ママは海外旅行をしていないから期限が切れているかも知れないわ」
「問題ないさ、それでいいよ」
藤井義男は顔の表情は崩さず、やさしく告げた。

真昼の接待

「どうぞ、ご案内します」
花山聖司郎は受付の女子社員に導かれて応接室へ入る。
直ぐに応接室の卓上へ三名分のお茶を置いて出てゆくと同時に、大門土地開発の専務取締役井坂久志が入って来た。
ショートカットでまとめた半白髪が良く似合う六十七歳。
「花山課長さん、お昼はまだでしょう。先に食事にゆきましょう！今日はお茶よりオチャケ（お酒）にしましょう！」
笑いながら手にした扇子で顔を扇ぎながら
「この界隈では名の通った中華料理店です。まあ、そうは言っても横浜の中華街を台所のように利用されている花山さんには釈迦に説法ですがね！」

「とんでもございません。確かに目と鼻の先に横浜中華街がありますが、有名店にはめったに行けません。灯台下暗し、と言うところです」
「ご謙遜ですね。まあ、この浜松町の店の噂ですがね、本場の中国、深圳の有名店で修業した調理人がいる店だと言われています。わたしはとても美味しい店だと思っていますよ」
「ありがとうございます。そのような一流のお店で、わたしなぞ、恐縮です」
実際は接待の常套で「一流」と言ってお客をもてなす。そのおもてなしを喜んで受ける。営業畑を歩いてきた二人が相手を思いやる言葉のせめぎ合いなのだ。
「そこで例の山手の物件のお話をさせて頂きますよ。さあ、どうぞ行きましょう！」
笑顔で花山を促す。
萬道顧問は応接室にはまだ戻っては来なかった。
「どこへ行ったのかな？相変わらず顧問は自己中心的な行動をとるからなあ。山手の物件の当事者なのになあ・・それはさておき、彼の縁でできた横浜・山手の物件は今般、当社が売買予約をする予定です。同時に所有権移転請求権の仮登記を付けます。やがて当社が売主で進めることになります。あとで資料を萬道から渡しますがね、まずはここを出ましょう」
花山は彼が洗面所にいることは分かっていたが黙って

いた。仮登記を付けて、他人物売買に変更されることは初めて聞いた。
「まあ、彼も当事者で主役ですから、一番はりきっていますよ。直ぐ追いかけて来るでしょう。わたしたちが出かけたことを係りの者に話しておきましょう」
井坂専務は彼の戻りを待つことなく、花山を促し、二人はエレベーターで降りると、大通りへ出る。
「すっかり夏の気候になりましたね、どうぞネクタイを取ってください。お楽にどうぞ！今日は無礼講でやりましょう。花山さんのお陰で当社はご存じの元化学工場の土地開発で暗中模索をしていましたあのトンネルから脱出（ぬけで）ましたからね・・・」
今日の井坂専務は花山が紹介した土壌汚染調査技術管理者、大藪英彦を紹介して貰ったお礼を兼ねて、昼食でもてなし、感謝の気持ちを表したかったのだ。
同社が昨年末に落札した国有地は戦前、軍が管理した経緯のある元化学工場の跡地だった。
横浜市の西、栄区にあるこの工場跡地には大きな鉄筋コンクリート造の建屋内にメッキ槽が二槽残っていたことは周知の上で取得した。この工場で戦前は軍部が毒ガスの研究をしていたという噂もある工場だった。現実に茨城県で旧日本軍が所有していた土地で製造していたと思われる有機ヒ素化合物が農業用水に混入し、その農業用水を引水していた水田で収穫された米からも同化合物が検出され事件になったことも専務は知っていた。
何が出てくるか分からない土地から、土壌の汚染処理を一歩でも間違えばやがて有毒物質による人身事故を引き起こすことになり、事故を起こせばやがて会社存続の命取りになりかねないのだ。
事実、近年、某化学工場の跡地に建てたマンションの庭で遊んでいた子供がしみ込んだ土地から発生した青酸ガスを吸い込んで死亡する事件が発生したことも記憶に残っている。
「この宅地開発プロジェクトには土壌汚染処理のための優秀な技術者が必要だ」
井坂専務の要請を田丸営業部長経由で知った花山は同窓生のK大学、理学部出身の後輩、土地土壌研究所で資格を取得した技術者の大藪を紹介、彼は昨年暮れから研究所から出向し現地へ赴任していた。
平成十五年から施工された土地汚染対策法による試験で合格した技術者は少なく貴重な存在だった。
同法で合格認可を受けた技術者は土壌汚染状況の調査・施工等をおこなう際に技術上の管理・監督を担うもので、化学工場等の跡地で宅地開発する土地には必ず土壌汚染調査技術管理者を置くことが義務付けられていたのだった。

中華料理店“深圳（しんせん）　大門店”に入る。

直ぐにウエイターから店の奥に設えられた個室へ案内される。専務が前もって詳細な予約を入れていたので、すぐにコース料理の前菜が運ばれてくる。
「これは！お昼から豪華ですね。食べきれないかも・・」
「まあ、そう言わないでください、花山さんには大変お世話になりました。先ずは紹興酒で乾杯しましょう！」
江戸切子のグラスに紹興酒が注がれる。
「まもなく萬道顧問も来ますから、彼が居れば料理が残ることはありませんよ！ご心配なく！」
井坂専務が皮肉を込めて言っているところへ萬道顧問が部屋に入ってきた。
「おお！さすがグルメ！間に合いましたか！早速、顧問も一緒に乾杯してください！さあ、始めましょう・・」
「花山課長さん、先ほどは失礼しやした！」
いきなりフロアーで「ウンチ」に行く、と、大声で告げたことを謝っているのだろう。本人は無粋な言葉を吐いたことを認識していたということだろうか。この朝の出来事について、井坂専務は知らない。
「顧問！何か失礼なことがあったの？花山さんに・・」
不審な目を向けて聞いている。
「いえ、いえ、たいしたことではございません。遅れましてすみません。乾杯しやしょう！」
紹興酒を上げて乾杯をする。
「最近、ワシは便秘でなあ、ホントに食ったものが出てくれんので困っとりますワ」花山を見ながら、「さっき、廊下でお会いましてからな、厠（かわや）でウンウンとがんばっとりましたがな、なかなか出なんでの・・最近はウンにも見放されたということかのう。最悪ですわ！」
「萬道さん！やめてくださいよ！食事のとき、そんな無粋な話はお客様にご無礼でしょう！」
「はあ・・失礼いたしやしたァ～」
幼少から畏まって礼儀という躾を誰からも受けていないために彼にとっては善悪の自己意識はないのだろう。この年齢まで礼節に無知であることを花山は哀れにも思うが、もし逆にこれらの礼節を知覚し、根源的な性悪を見極める力があれば、天道を外れたバブル経済を冷静に読むことができただろうし、彼の会社倒産も避けられたのかも知れない。今となれば詮無いことだが。
「萬道さん！そこにあるオシボリで手を良く拭いてくださいよ！萬道さんはトイレで手を洗わないクセがあるからなあ！」笑いながら井坂が萬道を諫める。
「今日は洗いやしたぁ～」井坂、花山の二人は苦笑しながら飴色に揺れる紹興酒のグラスを合わせた。
「萬道顧問も承知されていますが、今日は、例の化学工場開発の土壌汚染管理士のご紹介を受けた花山さんに御礼をかねていますからね、山手の土地については後で資料を渡してください」
井坂専務が萬道の持参した封筒を見ながら告げる。

萬道にとっては本件をあと回しにされたことは不快なことだった。
「そう言えば、あの工場ではむかし青酸カリを使った殺人事件があったようですのう・・従業員が何人も死んだらしい・・」口から出まかせの話をする。
「萬道さん！また縁起でもない話を・・」
「でも専務！ひとの口は止められん・・地元ではみんな知っとるで～。ひょっとしたらやがて人骨が出てくるかも知れんなあ！でも、もう溶けとるかもしれん、ヒッヒッヒッヒッ！」
「また！イヤなことを・・根も葉もない話ですよ、かんべんしてくださいよ！顧問！だからコストをかけ土壌改良やっているんですよ」
「専務、よ～く考えて見なさい、戦前は軍が管理していた時代もあったようだから、メッキ槽を使って死体なき完全犯罪があったかも知れんなあ、ウッヒッヒヒッヒ・・」
「止まりませんね、萬道さんの推理は！ミステリードラマになりそうですね・・」花山は苦笑しながら井坂専務に首を横に振り知らせた。酔いの回った萬道に、今は抗うと、いけないと思ったからだ。
酒が彼の理性を侵し始めているに違いない。
萬道顧問に限らず、現在では何を言っても責任感が喪失した時代だ。テレビやSNSで言論の自由だと正当化し、誰かれに構わず、品位のかけた言葉、人を中傷する投稿が勝手放題に飛びまわっている。この風潮は誤った世相のひとつなのだが。
井坂専務は萬道が紹興酒のボトルを片手に手酌でグラスに注いでいるのを見て
「萬道さん、酒を飲むピッチが速すぎますよ！酔うとまた反省と後悔ですよ！奥様に怒られますよ！」
「わかりやした！花山課長さん、どうぞ！」立ち上がって花山のグラスに注ぐ。
「花山さん、いつもカタブツの専務がお世話様になっておりますのう」
すでに、かなり酔いが回っているのだろう、足元がふらついている。
テーブルにはスープや肉、野菜料理が運ばれてきた。
「萬道さん、どうぞ箸をつけて、遠慮しないで食べてください。食べないで飲むと身体に毒ですよ。わたしが何か取り分けてあげましょう・・」
「それはいけません！花山課長さん！ダメダメで～す。やめてくれ～」
萬道が配膳係りの女性従業員に箸を振りながら大声で言う。
「おねえさん！お願いしますよ！花山さんにそんなことはさせられん！この料理をみんなに分けてやってよ～」
「はい！わかりました。よろしければこちらでお取りして、お分けしますわ」

係りの女性が笑顔で答えると料理を手早く分けて各自の手前に配ってゆく。

やがて、デザートにメロンと杏仁豆腐が並んだ。

「では、話を今度の取引案件に戻しましょう。萬道顧問！資料をお渡しください。現在の登記事項証明書と重要事項説明書です。この住宅は、萬道さんが友人の縁で取ってこられた横浜市中区、山手高級住宅の媒介物件ですが、間もなく売主の生嶋真紀子さんと売買予約の契約をして、所有権移転請求権の仮登記を付ける予定です」

「他人物売買ですね」

「そうです。花山さんも宅建士ですから話が速い。助かります。当社の土地、建物の購入価格二億六千万円です。先方様の希望価格、満額、そのままです。土地は二百坪、建物は木造で九十坪、建物の査定はゼロ評価で考えています」

「花山さん！生嶋のママさんは、丸顔で色白の美人ですぜ！井坂専務の好みのタイプ！」

「また、顧問は、余計なことに口を挟まないで！」

「だって、女優の八千草薫さんのファンだって言っていたでしょうがね、生嶋ママはぴったしカンカン」

「バカなことは言わないで、顧問から当社の売却希望価格を説明しなさい」

花山は地元では名の通った高級クラブ“マキ”の名前は記憶にはあるが利用したことはなかった。

「銀座の一流店と同じくらい高いお店でしたよ」野本主任が言っていたことを思い起こしていた。

萬道顧問が書類を読み上げるように説明を始めた。

「花山課長！当社の売買価格は宅建士、菅野の鑑定価格で三億一千万円になりやした。これを最低価格として、入札販売をしたいんですわ」

「そうですか、土地もひとの縁で結ばれますからね。この土地を見る人の価値観が縁になりますから、私どももご縁を大切に探してみましょう」

近傍類似価格からザックリみればそれ相当な価格かも知れないと花山は思った。

それにしても、五千万円の上乗せか。価格設定は自由とは言え大門土地開発の田代社長らしくない。承認は得ていないに違いない。萬道顧問の知り合いとはいえ、購入価格が安すぎる。何か裏があるのではないのだろうか、と疑念が浮かんでくる。

「少し時間をください。当社も全力で対応します」

「よろしくお願いいたします。社長の田代にはまだ詳細の報告をしていませんが、価格の変動はあるかも知れません」

専務が花山の心底を推し量っているように耳元でこれに応じた。

「そんなに悠長な話はだめですわ～。元の売主さんは売

却を急いでいるんですわい！売却価格は下げませんぜ」

萬道が酔眼で二人を牽制する。

「アラ！聴いていましたか！自分のテリトリーには、酔っぱらっていても、お耳のほうは大丈夫なようですね！」

井坂が嫌味を込めて萬道に答えた。

「専務！この程度の酒に酔っちゃいませんぜ！時間をかけるって、いま言っていましたな！そんな悠長なことはいけません！ワシの辞書には早期販売こそお客の利益となる！と書いてある。網に入った魚は逃がすべからず、早く料理をして食すべし！イッヒッヒッ！」

萬道が利己的な性格であることは、井坂専務も承知している。バブル時代は豪遊した経歴の持ち主も「貧すれば鈍する」と言う諺があるが、専務は苦り切った表情で萬道を見ている。

「ひとつ気になることは、この地域は昨年、開発宅地防災区域に指定されています。法地が対象になっていると思いますが」

「あの法地は崩れることはありやせん！竹笹と棕櫚や灌木で固まっていますからな」

今、この議論は無駄だと花山は思っている。花山はこの案件は自社では取り扱えないかも知れないと内心考えていた。

「不動産は利欲だけで対応してはならない。天に恥じない人と人の縁を繋げる」仕事なのだ。

誠意ある応対、社会的正義を貫く、顧客に対して誠意を尽くして営業活動をすることは会社の方針、いや自分の営業哲学でもあるからだ。

この案件から逃げるわけではないが、一応独自の調査だけはしなければなるまい。

常に、相手の立場でものを見、考えて行かなければならない。多面的、長期的な見方も必要だ。

小事は大事の元となる。悪い芽は早く摘み取らねばならない。

「萬道さん、不動産も人と同じです。使用する人、取り扱う人によって良くも悪くもなると言われています」

「お言葉ですがなあ！花山さん、オタクがよくお話になる誠意とか不動産は天からの借り物とかいう、お考えはですな、きれい事すぎて、ワシとは合いませんな！」

「当社の田丸部長の教えです」

萬道は花山を見ないで独白している。

「要するに商売はだな、仕入を安く、売価を高く、臨機応変に利益をあげることですよ。すこし言いにくいけどな、いま、ワシが最近付き合っている同業他社からワシの言い値で売って欲しいって言うて来ておるなあ、花山課長には悪いがねェ～入札を待つまでもないわ、専務そうだよね！」

「萬道さん、今はその話はダメでしょう、折角、花山課

長さんに来ていただいて、骨を折って頂だこうと言うさ中で！」
「専務！そのための営業合同会議じゃございませんのかな～」
「専務さん、当社のことを気にしていただいてありがとうございます。でも取引は自由です。どうかお構いなく・・・」
萬道顧問が広言した取引相手の不動産会社は、花山も知っていた。
専務が言った。
「あの桃山社長の評判は花山さんも聞いていると思いますがね、〝自慢屋のモモさん〟というニックネームがつくほど自己の営業実績を誇大して相手を信用させようとする社長です。不当な勧誘行為だと不動産協会に訴えた同業者もあるんです。また、彼は利益の臭いがするところには、どこにでも顔を出す、別称〝ぺんぺん草〟とあだ名をつけた者もある程、拝金主義者だと言われていますよ」
花山はこの話は飲み込み黙殺した。
「はい！井坂専務さん、よく承知しています。さらに当社も努力してみますが、よろしくお願いいたします」
花山は事あるごとに、気を付ける、気を配る、やる気を失うな、「三気の原則」を常に胸に刻んでいる。
萬道顧問に対して基本的な「要素」に気を付けねばならないように感じており、冷静に対処しなければならない、と感じていた。
「大変、ご馳走になりました。また、引き続きよろしくお願いいたします。」
二人に深々と頭を下げて、中華料理店を出ると、花山は浜松町駅から京浜東北線で自社へ向かった。
（この案件は田丸営業部長、課員に報告して今後の方向性を決めなければなるまい）

不実の疑惑

帰社した花山は別件の「川崎ホープタウン」の報告を部下の萩谷から課長席で報告を受けていた。予測通り新しい地主との話し合いは進展してはいなかった。
「今後とも誠意をもって交渉してください。また次回の面談の日程を決めてください。日時が合えばわたしも同行しましょう」
「わかりました」
その時、小城弥生が戻って来た。
「田丸部長に営業会議へのご出席、了解をいただいてきました！問もなくお見えですよ」
「ありがとう。早速、始めよう」
課内の営業会議は夕刻、六時から始まった。今夕は第一営業課に隣接した応接室の使用も小城弥生に許可を取らせて膝を交えて意見を交換する趣向にした。

中央の田丸営業部長を左右から囲み萩谷雄二係長、野本主任、新人の山岸昴、女子社員、小城弥生そして課長の花山が部長に対面して席についた。
議事進行、司会は花山が各人に「横浜、山手」の資料を手渡して、詳細を報告しながら進めていった。
「この土地は、企画次第では化けますよ」
野本主任は資料をめくりながら呻くような声をだした。
「法地（のりち）は防災法でネックにならないかい」
田丸部長が問う。
「いいえ、この法地に価値があると思います。このまま販売すれば防災区域にともなうリスクがありますが、開発にかけて危険を排除してしまうことです。擁壁工事によって土砂崩れは防止され、新たに相当の宅地が生まれます。土木部に開発工事費用を見積もらせてみますか？」
「そうですか！よろしい！視点を変えてやってみよう」
田丸部長のあとを花山がつづけた。
「そういえば、造成宅地防災区域の防災工事には県から補助金が出ますね。これも野本さん、調べてください
「逆転の発想！野本先輩の逆転ホームランだ」
野球部出身の萩谷雄二係長が膝を打って野本主任の発案を褒める。さらに、
「頑丈な擁壁を組めば災害も防ぐことができるわけですよね。これは公益上有益な仕事ですね、さすが百戦錬磨の先輩にまた勉強させていただきました！」
田丸部長も頷き、表情を緩めて、
「土地も人間と同じように、欠陥ある体質を持ったものでも適正な手術、治療を加えれば、体質は改善されて、生まれ変わる、と言うことだね」
野本主任に、
「ところで、野本君はあの当時のクラブ〝マキ〟を知っているだろう。バブルの時期に遊蕩をしていたと、スピーチで言っていましたが・・・」
「はい！前の会社が倒産する前には良く使わせていただきました」
「そうだろうね、バブルの時代は芸能人、横浜の有名人や社長族が集う有名な社交場だったらしいね。当時のボクはまだ会社からそんなクラブを使わせては貰えなかったなあ、ハッハッハッ・・・」
「・・・・・」野本は過去を恥じてどう答えていいか、目を伏せたまま言葉がでてこない。
花山が続けた。
「そのクラブのママさんが生嶋真紀子さんですよね。今でも美人だと萬道顧問、が言われていました。女優の八千草薫さんに似た丸顔の色白で色香の残ったおばあさんだと言っていましたよ」
「そうだったかなあ・・」
野本が記憶をなぞるように目を細めて親指とひとさし

指を額に当てている。
「そうだなあ、女優で言えば岸恵子さんのほうが近いよ、うりざね顔で八頭身美人の典型的なママさんでしたよ。あれから十五～六年経っていますがね、記憶は確かですよ」
野本が立ち上がり、窓の外の暮色に目を細めて、当時を回想しているような様子を見せている。
「お高いクラブだったのでしょうね？」
小城弥生が聞いた。
「そうですね！座るだけで片手でした。若い女性が傍に座るということも含めてだけどね」
「ええ！そんな、ひとり五万円も！」
山岸昴が頓狂な声を浴びせる。
田丸部長が山岸を制して
「キミが驚くのも無理はないが、それがまかり通る時代だったのさ！」
その時、花山の脳裏に一瞬、萬道の顔が浮かんで消えた。違和感が彼の理性を覚醒させたようだ。
「ちょっと待って下さい！野本さん、クラブのママの顔がうりざね顔だったと言われましたが・・丸顔ではないの？」
「そうだけど、丸くはないなあ、それがどうかしたんですか」
一瞬、花山が腑に落ちない表情で固まってしまった。
「当時はわたしも営業上の接待で、あのクラブを再三利用しておりましたから、記憶は確かですよ。お顔は細面ですが、丸顔とは絶対に言えませんね、あのママは」
丸顔で色白の老婦人、だと、断定していた萬道顧問の顔が浮かんでくる。
いま回想していた野本の記憶が間違っているとは考えらえられない。萬道顧問は誰と契約してきたのだろうか！
「野本主任、明日、現地に行って、調査してください。この件には何か不実の臭いがします」
「わかりました課長。所有者に直接会って本件の経緯を聞いてみましょう。他人物売買を承知されているかどうかも併せて確認します」
「大門土地開発が当事者である以上、本質的な契約には間違いはないと思うけどね。所有者にご無礼がないように気を配ってやってくれよ」
田丸部長は厳しい目を野本に向けて言った。
丁度、その頃、大門土地開発では役員会を開催中。
営業本部長専務の井坂久志は一通の投書を手に読み上げている。
「御社が取引を計画されている横浜、山手にある生嶋真紀子邸は不動産詐欺集団に狙われております。生嶋は現在、病気療養中で某病院へ入院されており、貴社に売却

する意思はありません。ご注意ください」
田代社長が、
「仮契約を済ませて仮登記も了解、手付金決済を明日に控えているというのに、これは一体どういうことだね、説明してください、井坂君・・・」
「まったくわかりません。手付金、参千百万円を明日支払い、当然生嶋真紀子さん本人が出席して取引することは確定しております、宅建士の菅野君も萬道顧問に同行して本人確認をしたと報告を受けています」
井坂は社長の田代正治に弁明をしていた。
「萬道顧問と親しい間柄だとも聞いていたがね」
実際は萬道顧問の情報源は生嶋と親しいゴルフ仲間の某氏なのだが、情報はすでに曲げられて理解されていた。
「そうです！要するに、この投書の目的は同業他社の嫌がらせだと思いますがね、私どもに対する営業妨害行為にもなりますが、匿名の相手では訴えることはできないしね」
仕入価格に五千万円を上乗せする今回の事案は大門土地開発にとっても簡単には逃せない収益物件だった。どの役員の胸内も同じだった。
「当社が仮契約をしたことを知った者の中傷だと思うのですか？」小見取締役経理部長が専務に遠慮をしながら聴いた。
「そうとしか考えられないんだ」
井坂専務が答ええて、
「M銀行、横浜支店の応接室で粛々と契約をして、明日はM銀行、品川支店の応接室を借りて、手付決済を行う予定ですから」
「銀行内部の者が絡んでいるかもしれませんね。懇意な同業者に情報を漏らしていたのかもしれない！経理部長の小見さん、あなたにM銀行のコネがあったら、当たってみてくれないか、売主の生嶋とも懇意な担当者がいるに違いないぞ！」
「急にそう言われてもね・・・」
経理部長の小見は両手で頭を隠してしまった。
「もし、そいつが情報源と判明すれば個人情報保護法違反だ、厳罰を科して貰わなければなりませんんね」
井坂専務が断じた。
「では、この件は匿名であるし、単なる嫌がらせ、また同業他社からの業務妨害として、無視しよう」
田代社長も同意して、結論は出た。

売買予約契約の決済日

株式会社大門土地開発への売買予約による仮登記の取引が平成二十七年、六月二七日、午前十一時からM銀行、品川支店の応接室を使用して行われた。
（最終的に買主が確定した場合はM銀行に融資を申込むことを理由に当銀行の応接室の使用を許可されていた。

指を額に当てている。
「そうだなあ、女優で言えば岸恵子さんのほうが近いよ、うりざね顔で八頭身美人の典型的なママさんでしたよ。あれから十五～六年経っていますがね、記憶は確か
ですよ」
「当時はわたしも営業上の接待で、あのクラブを再三利用しておりましたから、記憶は確かですよ。お顔は細面ですが、丸顔とは絶対に言えませんね、ちょっと
をお願いしてください」
井坂専務に言われた宅建士の菅野が書類を売主側の卓上へ差し出す。
予め印字された箇所に、売主が調印をする。
司法書士の大元が契約書の調印が終えたことを見極めると、
「契約が恙なく終わりましたので、仮登記の書類をこれから作成します。売主の生嶋様から始めます」
委任状、登記原因証明情報が面前に置かれた。
「この欄に、ご署名、ご調印をお願いします」
一瞬、岡部マリの顔がこわばった。
ボールペンの先が小刻みに震えている。
「生嶋さん、落ち着いて、ゆっくり書いてください。この印鑑証明書、パスポートの通りで良いですよ」
藤井が並べて置いていた印鑑証明を指さして冷静に指導をする。
前日から何十回となく練習してきた住所、氏名である。
手のひらにボールペンで生嶋真紀子と書いてみる。
「わたし、こんなことには慣れないから、緊張しちゃうのよね！こういう時！ダメねえ、わたしって・・」
「一般の方は、不動産の取引は少ないですから、一生で一回もないかたもいらっしゃいます」
「仮登記ですから、今日は不要です」
「これはまた、失礼しましたあ～」
萬道がゴマ塩頭を掻いている。
入金確認に行っていた担当の銀行員が帰って来た。
「生嶋様、ご入金を確認させていただきました。ご通帳をお返しします」
銀行担当者が通帳を売主側の席に置く。
岡部マリが通帳を開いて藤井義男と二人でこれを確認、
藤井はニコリと頷いた。
予め作成した擬装口座の通帳だった。

近年、銀行にとって利益を齎さない顧客に、支店の個室を利用させることは無い。
大門土地開発の専務、井坂久志、顧問の萬道与助、宅建士の菅野幸四郎が予定時刻の一五分前に到着し、銀行担当の支店長代理、川本に丁重な挨拶を受けて応接室へ導かれた。
既に生嶋真紀子になりすました岡部マリ、その内縁の夫、藤井義男、銀行側から指定された司法書士が緊張した面持ちで待機している。
「お待たせしました」
井坂専務が形式的に挨拶。売主側を見た萬道が初対面の司法書士と他の男性を見て、
「当社の専務ですわ、お二人は初めてですな」
萬道に答えて、
「わたしはこういうものです。本日、生嶋さんからコンサルの依頼を受けて来ております」
【財務・不動産コンサルタント、藤井義男】と印刷された名刺を受け取り、相互に名刺の交換。
「司法書士の大元と申します。本日はよろしくお願いいたします」
そいぎしが席に座り事務的な書類の受け渡しが始まる。
「これで良いかしら・・」
岡部マリが漸く委任状と登記原因証明情報の欄を書き終わった。
そして実印を押印した。
司法書士大元はその調印と印鑑証明を照合している。
本人確認資料のパスポートを大元司法書士が受け取り、住所、氏名、生年月日を確認して、売主の顔と写真を照合した。彼もパスポートが偽造されたものであることは気が付かなかった。
既に大門土地開発の書類は菅野が調印して司法書士へ渡し終えていた。
「それでは書類が整いましたので、手付金の決済をお願いします」
井坂専務が携帯電話で本社経理部へ手付金振込の指示をだす。振込先は、この銀行の生嶋真紀子の口座であり予めその詳細な情報は伝えてある。
「オンラインで振り込みますので、時間はかかりません。銀行のご担当に入金のご確認をさせてください」
送金を指示した専務に続いて、
「当社にも印鑑証明書、パスポートの写しをお願いしますね」
菅野が売主に要求した。

生嶋真紀子の死

M銀行品川支店で取引を終えた大門土地開発の井坂専務、萬道顧問、菅野宅建士は銀行の駐車場で待機していた会社の車へ乗り込んだ。
「北品川でウナギでも食って行こう。一件落着、みんなご苦労だったね」
「ヒッヒッヒッ！ごちそうさんです！ヒャヒャヒャ～」
萬道が喜び奇声をあげる。
「酒なしですよ！顧問！」
「分かりやした～、酒なし、ビールありといきやしょう！」

近年、銀行にとって利益を齎さない顧客に、支店の個室を利用させることは無い。

大門土地開発の専務、井坂久志、顧問の萬道与助、宅建士の菅野幸四郎が予定時刻の一五分前に到着し、銀行担当の支店長代理、川本に丁重な挨拶を受けて応接室へ導かれた。

既に生嶋真紀子になりすました岡部マリ、その内縁の夫、藤井義男、銀行側から指定された司法書士が緊張した面持ちで待機している。

「お待たせしました」

井坂専務が形式的に挨拶。売主側を見た萬道が初対面の司法書士と他の男性を見て、

「当社の専務ですわ、お二人は初めてですな」

萬道に答えて、

「わたしはこういうものです。本日、生嶋さんからコンサルの依頼を受けて来ております」

【財務・不動産コンサルタント、藤井義男】と印刷された名刺を受け取り、相互に名刺の交換。

「司法書士の大元と申します。本日はよろしくお願いいたします」

それぞれが席に座り事務的な書類の受け渡しが始まる。

「先に、当社の宅建士の菅野から売買契約書、重要事項説明書を用意させてきましたので菅野君、売主様の調印をお願いしてください」

井坂専務に言われた宅建士の菅野が書類を売主側の卓上へ差し出す。

予め印字された箇所に、売主が調印をする。

司法書士の大元が契約書の調印が終えたことを見極めると、

「契約が恙なく終わりましたので、仮登記の書類をこれから作成します。売主の生嶋様から始めます」

委任状、登記原因証明情報が面前に置かれた。

「この欄に、ご署名、ご調印をお願いします」

一瞬、岡部マリの顔がこわばった。

ボールペンの先が小刻みに震えている。

「生嶋さん、落ち着いて、ゆっくり書いてください。この印鑑証明書、パスポートの通りで良いですよ」

藤井が並べて置いていた印鑑証明を指さして冷静に指導をする。

前日から何十回となく練習してきた住所、氏名である。

手のひらにボールペンで生嶋真紀子と書いてみる。

「わたし、こんなことには慣れないから、緊張しちゃうのよね！こういう時！ダメねえ、わたしって・・」

「一般の方は、不動産の取引は少ないですから、一生で一回もないかたもいらっしゃいます」

司法書士の発言で。

「そうですよね、慣れていなくて当然ですわねえ」

急に甘えた口色に変わった表情に大門土地開発側の誰もがこのなりすまし（擬装）には気が付かない。

「これで良いかしら・・」

岡部マリが漸く委任状と登記原因証明情報の欄を書き終わった。

そして実印を押印した。

司法書士大元はその調印と印鑑証明を照合している。

本人確認資料のパスポートを大元司法書士が受け取り、住所、氏名、生年月日を確認して、売主の顔と写真を照合した。彼もパスポートが偽造されたものであることは気が付かなかった。

既に大門土地開発の書類は菅野が調印して司法書士へ渡し終えていた。

「それでは書類が整いましたので、手付金の決済をお願いします」

井坂専務が携帯電話で本社経理部へ手付金振込の指示をだす。振込先は、この銀行の生嶋真紀子の口座であり予めその詳細な情報は伝えてある。

「オンラインで振り込みますので、時間はかかりません。銀行のご担当に入金のご確認をさせてください」

送金を指示した専務に続いて、

「当社にも印鑑証明書、パスポートの写しをお願いしますね」

菅野が売主に要求した。

「権利証が無いようですのう・・」

突然、萬道顧問が濁声で司法書士に言う。

「仮登記ですから、今日は不要です」

「これはまた、失礼しましたあ～」

萬道がゴマ塩頭を掻いている。

入金確認に行っていた担当の銀行員が帰って来た。

「生嶋様、ご入金を確認させていただきました。ご通帳をお返しします」

銀行担当者が通帳を売主側の席に置く。

岡部マリが通帳を開いて藤井義男と二人でこれを確認、藤井はニコリと頷いた。

予め作成した擬装口座の通帳だった。

生嶋真紀子の死

M銀行品川支店で取引を終えた大門土地開発の井坂専務、萬道顧問、菅野宅建士は銀行の駐車場で待機していた会社の車へ乗り込んだ。

「北品川でウナギでも食って行こう。一件落着、みんなご苦労だったね」

「ヒッヒッヒッ！ごちそうさんです！ヒャヒャヒャ～」

萬道が喜び奇声をあげる。

「酒なしですよ！顧問！」

「分かりやした～、酒なし、ビールありといきやしょう！」

「バカを言ってないで、勤務中ですぞ」
「専務！忙中閑あり、と言う、諺を知りませんかいのう、そんなにギシギシしないで、携帯の電源も切って、しばし、ウナちゃんと楽しく遊びやしょう！」
「まったく！」今回は田代社長と旧知の萬道顧問の成果を評価して井坂も少し腰が引けているのか、携帯の電源をオフにする。（会社からの雑用電話も煩わしいからな）
北品川駅周辺は日本橋から出発し東海道最初の宿場。旧街道は名残を感じさせる北品川の風景が井坂も好きだった。
街道沿いの"竹の屋"という店のウナギ屋へ三人は入っていった。

この同じ時分、
州英不動産株式会社の営業第一課、花山聖司郎の課長席周辺には沈鬱な空気が流れていた。
「ええ～！生嶋真紀子さんが亡くなっているって！それは間違いないのですか？」
現地調査を終えて帰って来た野本修一郎の報告を聞いていた課長の花山が大声で叫ぶように言った。
「みんなも、ここへ来てくれ」
萩谷係長、山岸帛、小城弥生三人も席を立って花山課長と野本を囲んで報告を聴いている。
「すでに、一ヵ月以上前から、横浜市、都築区にある円(まどか)病院に入院されており、昨日亡くなったようです」
「病名は何ですか？」
「病院のヘルパーさんから聞いたところもともと糖尿病の持病があり、関節が痛むリュウマチがさらに重くなり治療のために入院されていたようですが・・最後は急性心不全で急逝されたようです。ただ・・警察が来ていました。死因に不審なことがあるのかも知れません」
野本が掌を顔に当てている。
「それはそうとおかしいですね、近く大門土地開発と契約して仮登記をすると聞いていましたが」
花山が手帳を取り出した。
「オオッ！今日だぞ！」
「本人が亡くなっていては出来ないでしょう！今頃担当者は対応に苦慮されているのではありませんか」野本が答える。
「そうだよね、その通りだ。井坂専務に電話をして確認してみよう」
花山は井坂専務の携帯に電話を入れる。電源が切られてつながらない。
「花山課長！わたしが大門土地開発へ電話をつなぎます！」
小城が課長席の電話機を取り上げる。
花山らは、この時点で売買契約が進行し、仮登記の手続きが終了していたことを知る由もない。

「課長！営業部の方に繋がりました」
小城から電話を受け取った花山は本社営業部へ事態を告げて、井坂専務への早急な伝達を依頼する。
「ホントですか。本当にありがとうございます。早速、当社の担当者と事実を再確認して善後策を講じます」
電話を取った営業課員は井坂専務らが横浜市、山手の物件、生嶋邸の売買契約決済が午前中であることは知っていた。
親密な州英不動産とはいえ、部外者に内部事情等の事実は言えない。手付金の支払い、取引の終了、「北品川で食事」をしていることは、井坂専務から連絡を受けていたが花山には伏せた。
もし州英不動産からの情報が事実なら、間に合わないかも知れない。営業担当者は躊躇していたが・・・。
冷静に見れば事実はまだ闇の中だ。
すぐに、電話を受けた担当者は経理部へ走った。
まず、経理課員に大声で伝える。
「井坂専務の取引は詐欺の疑いがあります。お金の振り込みをストップしてください！」
「さっき、今岡課長が専務とやり取りをしていましたよ」
女子経理部員が答える。
「今岡課長と？やり取りしていた！」
女子社員が課長席を指さす。
営業課員が課長席で再度説明する。
「何を言いに来たんだよ！担当外のお前が！」
「いま、州英不動産からの情報を私が受けたんです。当事者の本人確認を再確認させてください！売主がニセモノの疑いがあるらしいのです」
「バカヤロー、遅いわ！もう、カネはもう流した！」
見る見るうちに蒼白な顔面で固まった今岡経理課長の姿に、伝令の営業課員、経理課員は瞬間息をのんだ。詐欺に巻き込まれた重大性を覚知、重い空気が淀み、沈黙が数秒間続いた。
「本当なのかい！ホントにホントか！オレは知らんよ、専務の指示でしたことだよ！」
これが事実としても経理課長は自分の責任ではないと強調しているように。
「お金を止めなければ・・・課長！事実ならM銀行に電話を！」
経理課の誰かが叫んだ。
その声で覚醒した今岡課長は震える手で卓上の電話機を掴み、M銀行、品川支店の電話番号（プッシュボタン）を押し始めた。
（詐欺集団はすでに次の手を打っているかも知れん）
脳裏に最悪場面を抱きながら・・・・
事実、コンサルティング藤井義男は、大門土地開発からの入金を確認後、すぐに、タブレットを操作、オンラ

インで生嶋真紀子名義の口座から全額を香港（地下銀行）の自己の口座へ移していた。

この事実を何も知らずに、北品川で食事を終えた、井坂専務以下三人が大門上地開発の本社に帰ったのは午後二時三〇分ごろだった。

三人の表情は明るい。

井坂専務の肝いりで、取引後、北品川の〝竹の屋〟で昼食をとり、三人は帰社したのだった。

萬道与輔だけは少しご機嫌が悪い。

「専務！ご馳走さまでしたな、でも一杯くらい飲みたかったなあ」

「あなたはね一杯では収まらないでしょう・・一杯が二杯、二杯が三杯・いっぱい飲めばまた後悔と反省になる」

「もう反省しておりやす、失礼しやした！」

専務は社長室へ報告に行った。

萬道と菅野は営業部へ戻る。

社内の雰囲気は騒然としていた。

二人の姿を見る社内の目が厳しい。

「何があったのか？」

菅野は異常を感じていたが、この社内の雰囲気に萬道は気が付かない。

菅野のもとへ、営業課員が飛んできて州英不動産からの通報を知らせた。

「大変です。詐欺です！社長室へ行ってください」

すぐに、

社長室に萬道顧問、菅野宅建士が営業課員に急かされ社長室へ入った。

既に井坂専務と小見経理部長が社長の前で沈痛な表情でうな垂れている。

井坂が言った。

「州英不動産からの情報だ。萬道顧問、菅野君、我々はやられた！本当の生嶋真紀子さんは一昨日亡くなっているそうです！」

「あの投書はホンモノだったと言うことかね、私にも責任が・・・」

田代社長は呟いた。

萬道らは無反応だった。

「・・・・・・」

田代社長の顔をぼんやりと見ている。重大な事実を認識できていなかったのかもしれない。

菅野宅建士が先に反応した。顔が青ざめ、手に持っていた契約書、重要事項説明書を落とした。

「亡くなった！では、あのおばあさんは何者ですか！」

専務が答えた。

「あの丸顔のおばあさんは、生嶋家の家政婦だってさ！」

「ゲッ！そんな！」

突然、萬道の身体は硬直し、すぐに電流が走っているように小刻みに震えだした。ようやく事態の重大性に気が付いたのだろう。

「あの女狐め！」

下半身の感覚が無くなり、両掌で頭を抱え込んでしゃがみ込んでしまった。

「どうしょう！どうしょう！」

彼の怒りと動揺は彼自身が描いていた多額の報酬が霧消したことを認識し、この事実がかれの胸を痛撃していたのだろう。

「萬道さん！菅野君も、本人確認を誤った経緯を至急書いてわたしに提出してください。すぐに警視庁へ被害届を出します」

「はい！わかりました。わたしも信じられませんが、萬道さんと現地であった時には違和感はなかった！あのおばあさんが詐欺師だったとは！」

起きた事実を再度菅野が言った。社長の田代が苦々しく

「本人になりすました女は生嶋家の家政婦だと、州英不動産の花山課長から改めて連絡を貰ったがね。井坂君も萬道君も携帯を切っていたらしいね、一刻を争う事態だったがねえ、経理部長！振り込んだお金は押さえることが出来たのだろうか？」

「申し訳ありません。今岡課長の報告ではM銀行、品川支店の口座はカラでした」

経理部長の小見は経理課長の今岡がすぐに手を打ったが約一時間まえに残高が消えていたと報告を受けていた。

「最悪のシナリオだ。わたしの責任です。あの二人が詐欺師だったとは・・・わたしも今日、会ったが、気が付かなかった！社長！申し訳ございません！」

井坂専務が心中を吐き出すように言った。

花山聖司郎は被害を受けた大門土地開発の不動産詐欺事件を聞いて憂慮しその対応を考えていた。

他社の出来事とは言え、親密な提携関係にある会社であり、更に当該不動産の買主を媒介する予定で打合せをした経緯のある案件であるし、自分たちにはこの先何ができるか、を深慮していた。

まず、事実の確認が先だ。

なりすましの家政婦の生活環境、人的繋がりを調べなければならない。更に生嶋真紀子の相続人の調査をしなければならない。この調査は、経験豊富な野本主任に、引き続き担当させるのが最適だ、と、考えて、

「野本主任、この事件は、これだけではない、大きなものが隠れているような気がします。気を付けて調べてください」

「わかりました。早速、司法書士の志摩先生に、戸籍の調査を応援していただきましょう。また、同じような被害が出ていないか調べてみます」

調査結果の報告は速かった。

まず、家政婦の岡野マリについて野本は報告した。

「岡野は破産手続き中の古い雑居ビルで生活しています。内縁の夫、藤井義男、六七歳。彼が生活保護者を入居させて、名目上、社会福祉施設として運営しています」

横浜市の黄金町に存在する場所を地図で示す。

「勝手に破産手続き中のビルを使用、ここの黒幕は、代表の藤井義男です。彼を客観的に見れば、社会の片隅で置き去りにされた生活困窮者に手を差し伸べている慈善家だと思うかも知れません。しかし、彼は別の顔を持つ闇のNPO法人の代表でもあると入居者の某氏は言っています」

野本は続けて言った。

「わたしの私見ですが、この黒幕の背後にも更に大きな影の人物か組織があるような気もしますね」

花山が

「そうですか。現実にはこの闇法人は必要悪なのでしょうね。ホームレスを無くするためにはね」

このビルの入居者には厳しい掟があり、生活保護費はすべて藤井義男が一括管理をしていると言う。

自己破産に至る経歴をもった生活保護者には高利で借り入れたローンの［過払い金返還請求］をさせる。

藤井義男は専任の司法書士にその手続きをさせて司法書士から受け取った還付金の半分をコンサルタント料として受け取る。臨時収入を手にした破綻者は、これを喜び、藤井に感謝をするのだった。

藤井義男は、もちろん、生嶋真紀子が高級クラブの経営者時代から長い付き合いをしてきた。

岡野マリを家政婦に頼んだのも彼なのだった。

岡部マリにも

「生嶋の病院には当分行かないでいいよ、見舞いはボクが行くし、当座の身の回りの世話はキミも知っているあの入居者の啓子さんに行ってもらうからね」

と明確な指示を出し、生嶋にとっても「やさしい男」の真価を発揮していた。

間もなく入院中の生嶋真紀子が重体になる。

藤井はそれを知っていた。

擬装ゲームの終わり

「お恥ずかしいが、当社が不動産詐欺にあいました。捜査をお願いします」

大門土地開発の井坂専務が警視庁港警察所へ被害届を出したのが発端だった。

捜査第二課がこれを受理した。

すでに、警視庁では日黒区の旧旅館を某ハウスメーカーが六十五億円を騙し取られ、更に某ホテルが港区内の更地、二百五十坪の売買予約の手付金十五億円の被害に会っており、これらの大型詐欺事件には特別捜査本部が設置されていた。

この同時期、不動産関係の詐欺事件の金額に大小の違いはあったが各地で頻発していた。

捜査二課は組織犯罪対策課とも呼ばれ、詐欺、汚職などの知能犯や脱税、薬物犯罪が専門で、担当刑事は不動産詐欺事件に伴う登記知識、金融知識には長けている。

大門土地開発の詐欺事件の詳細を聴いて、二名の専任刑事が動き出したのは速かった。

「横浜の藤井義男か！容疑者にはいろいろな通報があり内偵してきたが、かなり、悪だね。御社が調べて来た情報、今回の経緯を詳しく話してくれ」

井坂専務、萬道顧問、菅野宅建士の順で供述をし、調書を取られた。

「皆さんのような不動産のプロがコロリと騙される。この原因の一丁目一番地は金欲ですな」

ひとりの刑事が呟いた。

恥ずかしいが井坂は同意した。

刑事の通報で審査中の仮登記は横浜地方法務局によって却下された。

「偽造のパスポートは司法書士も見破れなかったです」

萬道は受領したパスポートの写しを刑事に示して悔しそうに言った。

「今はね、運転免許証、パスポート、印鑑証明書、住民票もだが、偽造技術が格段に上がっているために、見分けがつかない。わたしらも分からんです」

「お金は返ってきますかな」

「さあね、これから調査をしますがね、今はなにも言えません」

「あなたが、専任の担当だったと聞いたが、本物の生嶋真紀子には一度も会っていないのか？」

「はあ・・・」

「はあ、じゃわからん！家政婦がその家のオーナーだと見栄を張る。あなたはそれを見破れなかった。女の虚栄心を見破れなかったということだね」

「家政婦に騙されたんですわ！まさかの坂になりやした・・・」

刑事は唖然として肩を落とし、

「人ごと見たいな言い方ですなあ、まあ、いいでしょう。生嶋に会っていなければ、その方はあなたのアリバイは成立だ」

「何のことですかい」

「いや、それ以上はあなたには関係ない、言っても無駄だ！」

刑事は吐き捨てるように言った。

生嶋真紀子の死因に他殺の疑いがあることはその数日後の新聞で報道された。

さらに、遺体の解剖から血液には医局で出していない薬物の反応があり、NPO法人代表、藤井義男が神奈川県警捜査一課に殺人の重要参考人として呼ばれたことも報道された。

たちまちカナリヤ荘と称した雑居ビルの現地はテレビで中継されて、住人の生活保護者を取り上げて、インタビューが始まった。

藤井の別の顔が次々に明かされる。

財務コンサルタント、不動産コンサルタントを語り、居住者の一団にオレオレ詐欺をやらせたグループの統括者の容疑、過去の結婚詐欺・・・。

公文書偽造罪、公正証書不実原本記載罪などが明るみにでてきたのだった。

さらに、なりすまし要員を訓練させて、闇の世界に派遣していた容疑も報道され始めた。

これまで、表に出ない事実がマスコミによって次々と明らかになり、この重罪犯罪の背後にはさらに黒幕が存在しているのではないか、と、憶測を呼んでいた。

事実の解明はやがて白日のもとに晒らされるに違いない。

☆

「おばあちゃん！爺(ジジ)がね、布団の中で泣いていまちゅ！」

萬道与助の孫娘、彩夢(あやめ)（五歳）が縁側で浴衣の綻びを紡いでいた与助の妻、結子に走り寄って告げる。

既に二年前から与助夫婦の長女、奈緒美と夫の健介、彩夢と五人が烏森のアパアートで暮らしていた。

萬道与助は離婚され別居していた妻に過去を詫びて、復縁したのだった。その陰では大門土地開発の田代社長の強力な援護があったことは言うまでもない。

「あやちゃん、ありがとう。心配せんでもいいのよ」

「泣いてれば、会社行かんでもいいの？」

つぶらな目を結子に向ける。

「ジジは会社に行きたくないのよ、きっとね」

結子にはテレビのニュースやワイドショーを見て与助が勤めている会社で起きた事件の大方の事情を把握して彼が悩んでいる原因については分かっているつもりだった。

「今に大金が入る」と豪語。

見栄張りで無知な与助がまた、失敗し、会社に迷惑をかけたに違いない。与助は「クビ」になるだろうと観念はしていた。

「会社行くの、イヤだ、イヤだとジジは泣いているの？

パパもママも会社に行ったのにね・・・」

「あやちゃん、それはね・・・」

来年から幼稚園に入る孫に、教育上、泣いて駄々をこねて許されると言う言訳はうまくないな、と、結子は思い、どう言えば良いか苦慮していた。

「・・・・・」

その時、

玄関をノックしている音が聞こえてきた。

「ごめんね、あやちゃん、誰かきたようね・・・玄関へ出てみましょうね」

彩夢(あやめ)の手を取って玄関口へゆく。

「どうぞ！開いていますよ！お入りください」

「失礼します」

白いワイシャツ、ネクタイ姿の二人の会社員が起立している。

「州英不動産の花山と申します」

「同じく、野本です」

名刺を結子に渡す。

「うちの与助にご用事ですね」

「はい、ご在宅でしょうか」

「ジジは泣いて、寝ていまちゅ！」

彩夢が答える。

「まあ、この子ったら・お恥ずかしいですわ、ホッホッホッ」

「おはずかしいでちゅ・・ジジが泣いていまちゅ」

「いま、起こしてまいりますわ、汚いところですが、こちらへどうぞ」

結子が二人をリビングに案内する。

彩夢(あやめ)は二階に駆け上がっていった。

「ジジ！お客さまでちゅ・・・」

☆

「すまんな・・・こんな格好で」

慌てて洗面したのか、剃り落としの白ひげ痕を残し、浴衣姿で萬道与助がリビングに入って来た。瞼は腫れている。

「この度は災難でしたね。近年益々詐欺師の手口が巧妙になり、どうしてもタイミングのズレが、今回のような事件を生む世の中になり、地元の不動産業で長い私共も責任を痛感しています。早々にわたし達が気付かなくて顧問には申し訳ないことになりました。すみませんでした」

花山が詫びて野本と二人が頭を垂れる。

「いや、ワシが悪かったんじゃ。みんなワシのせいじゃ！」

野本が萬道の目を見て

「わたしと萬道顧問とは同じような年齢ですよね。あの狂気のバブルを経験しました。結果、わたしも前の会社が倒産して苦労してきました」

「聞いとりますわ。でもあなたは優秀な営業マンになり活躍されておる」

「おかげ様で州英不動産に助けて頂きました。先賢の言の葉に過去は帰ら無、未来は自由で無限の可能性がある、と言われています。私どもも即刻、可能な限り手を尽くし今回の事件に対応をしています。萬道顧問！これから諦めずに、ご一緒にやりましょう！」

「ワシは会社に大損害をかけた！もう、会社には行けん！もう駄目じゃ！」

花山が言う。

「田代社長、井坂専務も萬道顧問を責めてはおられません。この経験を肥しとして、更に企業努力をしよう、社員が一丸となってやろう、一人として縁のある社員を失いたくない、と、言われています」

野本が続けて

「わたしはあの不動産を最初からやりなおしたいと思っています。あの不動産は視点を変えれば魅力のある物件です。今度は生嶋真紀子さんの相続人と誠意をもって公正に話をして行きたいと思います。不正を働いた者には司直の手で厳罰が与えられましょう。支払った手付金はその道でベテランの弁護士の力で闇の金融機関を洗っています。これから可能な限り法的手段でお金を取戻して行かれるでしょう」

花山が萬道の目をみて

「縁（えにし）は一生もの、と言います。萬道さん！最後まで一緒にやりましょう！みんなはあなたを待っていますよ！」

「ジジ！いっしょにやりまちょう！」

いつの間にか、萬道の背後から彩夢（あやめ）が現れて花山の言葉をマネしている。彼の膝に乗って肩を掴み、与助の顔を覗いている。

「ジジがまた泣いてまちゅよ、おばあちゃん！・・・」

（終わり）

これはフィクションです。記載された団体名・会社名、人名、事件は架空のものです。

私の「昭和20年」（7）
―終戦から75年―

山田嘉久

13　昭和20年12月―民主化（続）

さて「5大改革」に戻ろう。

○財閥解体

第一弾は昭和20年11月6日の「持株会社の解体に関する件」であった。GHQは三井、三菱、住友、安田の4大財閥をはじめとして、浅野、中島、古河、大倉、鮎川などの持株会社（本社）の解体を指示した。さらにその後、昭和22年には独占禁止法と集中排除法が成立した。

そのため4大財閥の銀行は行名変更を余儀なくされた。すなわち三菱―千代田、三井―帝国、住友―大阪、安田―富士である。（うち三井は戦前昭和18年に第一と合併した年に変更していた。）

これらの名称は私が就職した昭和28年頃まで続いた。

また、独占禁止法では持株会社は禁止されコンツエルン型の財閥は作れなくなった。集中排除法では巨大独占企業を分割することになり12社が対象になった。日本発送電は電力9社に、日本製鉄は4社に分割された。

これら経済民主化をすすめたGHQの中心は、ESSと呼ばれた「経済科学局」であった。

○農地改革

戦前の農村は1000町歩を超える巨大地主を頂点に、その下に中小の地主が広範に存在し、さらにその下に高額小作料の収奪をうける小作農民が存在していた。

それを在村地主の小作保有限度は平均5町歩（後に3町歩）とするなどの改革を進めた。これらは新設の「農地委員会」によって行われた。

この結果、戦前の日本を代表していた地主制度は完全に崩壊して戦後の日本では自作農が殆どとなった。このため農地改革はGHQによる戦後改革では最も成功した改革といわれた。

ただ、残念なことはわが国国土の70％を占める林野に対してはその改革が極めて不十分だったことである。林野解放は第3次農地改革として計画はされたが実現には至らなかった。

○労働組合法

労働組合が初めて公認され、団体交渉権が保証された。労働組合法は戦前の１９２０年代から30年にかけてたびたび制定をめぐる論議がくりかえされたが、ついに日の目をみることはなかった。それがＧＨＱの指令とはいえ敗戦後４ケ月で公布までこぎつけたのは、なんとも皮肉だった。

成立した労働組合法では労働者の団体交渉制度を促進し、労働組合を保護することを第一目的とした。また労働者側委員の参加を保証した労働委員会を創設した。

○婦人参政権

昭和20年11月に治安警察法が廃止され、女性が政党に加入することが自由になった。12月には選挙法の改正で有権者の資格から性別による制限が撤廃された。

その結果、翌昭和21年４月に戦後初めて実施された総選挙では１，３８０万人の女性が初めて投票して39名に及ぶ女性代議士が誕生した。

因みに私が初めて選挙権を行使したのは昭和27年10月の総選挙（第3次吉田内閣）である。投票を済ますとその場で選挙立会人だった親父から記念品として「下駄一足」を渡されたことを覚えている。

○教育改革

10月22日、ＧＨＱは自由主義的教員の復職、教科書から軍国主義的内容の削除、いわゆる教科書の「墨塗り」の実施を命じた。これについては既に前号で書いた。

また12月31日には「修身」「日本歴史」「地理」の学科中止を命じ、皇国教育そのものを全面的に否定する方針を打ち出したのである。

さらに、翌年の米国教育使節団の提言を受けて22年に「学校教育法」と「教育基本法」が制定された。いわゆる「６・３・３・４制」の実施である。ただこの制度の実施に当たっては様々な移行措置が取られた。

例えば昭和22年度、旧制中学５年生である我々を例にとれば、そのまま旧制中学卒業と新制高校3年生への進級とを選択することができた。さらに複雑にしているのは戦前（昭和18年）に旧制中学は４年間に短縮されていたので、学制改革前の昭和21年に卒業した者もいる。（このように同じ同級生でも卒業年度がばらばらなので、我々卒業後のクラス会では卒業年度ではなく同じ昭和18年入学を基準としている。）

大学でも昭和24年から28年頃まで旧制と新制が混在していた。

これらの5大改革とは別に12月15日、ＧＨＱから「神道指令」が発せされた。神社神道に対する公の財政援助の停止、公立学校における神道的教育の禁止、公的資格での神社参拝の禁止などが命ぜられたのである。

明治維新後の日本は国家神道にもとずく「祭礼一致」の宗教政策をとっていた。そして国家神道は大日本帝国憲法や教育勅語などによって国民の間に定着して、太平洋戦争時には日本国民の超国家主義を支える理論的支柱となっていたのである。

そのため「覚書」には信教の自由の確立と軍国主義の排除、国家神道の廃止、政教分離が盛られていた。それに伴って「大東亜戦争」や「八紘一宇」などの語の使用禁止や、国家神道、軍国主義、過激なる国家主義を連想させる用語の使用も禁止された。また伊勢神宮はじめ全国の神社を組織していた神社本庁は国家管理をはなれ宗教法人となった。

また、戦前、国家神道を推進した教育機関としての「神宮皇學館」も解散を命じられた。同校は明治36年、官立の旧制専門学校（内務省所管）として発足したが、その後、時流に乗って昭和15年には旧制の官立大学となっていた。

同校を受験した中学の先輩もいた。

なお、私の記憶では、戦後ＧＨＱによって潰された学校は３つである。当然、陸軍士官学校と海軍兵学校が真っ先にやり玉に挙がったが、あと一つがこの神宮皇學館であった。

アメリカは日本軍の玉砕や特攻にみられた日本人の狂信的な死生観の背後には、この国家神道があると考えていたのである。

この神道指令の理念は、その後制定された新憲法第20条（信教の自由と政教分離）のなかに法制化されることなる。

これらの改革はマッカーサーの指示のもと、矢継ぎ早に実施されたが、正直云って中学生の私にはあまり関心がなかった。

それよりも再開された野球や大相撲に興味があった。

敗戦によって野球は戦前を上回るブームとなるのだが、その先駆けとなるのは大学野球だった。早くも10月に全早稲田対全慶応の対抗戦があり、神宮球場は満員になったという。あの有名な戦前最後の試合「最後の早慶戦」から丁度2年を経っていた。

「最後の早慶戦」とは戦争真っ只中の昭和18年10月、早慶両野球部により行われた野球試合のことで、第2次大戦期間におけるアマチュア野球最後の試合として知られている。当時、東京六大学野球は既にその年の春、廃止されていたが、慶應総長小泉信三と早大野球部顧問飛田稲州両氏の肝いりで「出陣する学徒たちに何か餞別を、それには早慶戦がふさわしい」と「出陣学徒壮行早慶戦」と銘打って行われた。

現にその5日後には、激しい雨の中、神宮外苑競技場で出陣学徒壮行式典（学徒出陣）が挙行されている。そしてその後、多くの学生たちが出征したが両校の野球部員にも多くの戦死者が出た。

そして戦後日本の野球の復活を告げたのは、終戦から2カ月経った10月28日に開催された全早慶戦であるが、翌年には東京六大学リーグ戦も再開され、神宮の青空に再び球音が木霊するようになるのである。

なお、「最後の早慶戦」から65年目となる２００８年には相次いでこれが舞台化、映画化されたのは記憶に新しい。

一方、プロ野球は兵役から帰ってきた選手たちによって11月に東西対抗戦が行われている。球場は同じ神宮球場だった。後楽園球場は高射砲陣地だったし、甲子園球場は全面芋畑で使えなかった。唯一残ったのが、当時進駐軍専用球場であった神宮球場（ステイトサイドパーク球場と呼ばれた）でようやく使用許可を取り付けた。（しかし不思議にこの時の写真や映像は全く残っていないという。）

なお公式戦が始まるのは翌年（昭和21年）からである。また昭和17年から中止となっていた「全国中等学校野球大会」も21年に復活したが、これも球場は甲子園球場でなく西宮球場だった。千葉県からは南関東代表として成田中学が出場したが、全国優勝は浪華商（大阪）だった。（当然、敗戦により放棄された朝鮮、満州、台湾の枠は削除され全国19枠。またその後の学制改革により昭和23年から「全国高等学校野球大会」と名称が変わった。）

なお、戦時の中止期間中、昭和17年に文部省は「国民精神の高揚」のため「全国中等学校錬成野球大会」を開催している。しかしこれも大会史に記録されていないため「幻の甲子園」と呼ばれた。

この大会では、打者が球をよけることは「突撃精神に反する」と許されず、負傷以外の選手交代は禁止など軍事色の強い決まりがあったという。（令和3年8月13日朝日夕刊より）

なお、野球用語の日本語化（ストライクーよし一本ボールルー（だめ）1つ　セーフーよし　アウトーひけ等々）は翌18年4月からである。

余談だが、我が母校長生中学も戦前唯一、南関東大会（千葉、神奈川、埼玉3県から各県4校の代表校で競う。その優勝校が全国大会（甲子園）へ。）に出場したことがあるが、その時のキャプテンが兄純孝だった。「一番遊撃山田」とラインナップに書かれた地方紙を得意げに隣人に見せている父親の顔を今でも思い出す。その兄も昭和18年、野球部が敵性スポーツとして廃止となると同時に兵役に服してしまった。野球に賭けた青春が一挙に

消滅してしまったと感じたからであろう。

今でも同窓会に出席すると、兄の同級生から「純孝（兄のこと）のような選手があと2、3人いたら、長中も甲子園にいけたのに」といわれることが再三あった。

相撲の復活も早かった。

昭和20年11月には両国国技館で戦後初の大相撲秋場所が開催されている。出場力士の中には坊主頭の復員兵や食糧不足でやせ細った力士も多かったという。

特記すべきはこの場所で、あの不出世の名横綱双葉山が引退したことである。11月場所の番付には名前こそ載っているが一番も取っていないので実質には先場所6月場所が最後の土俵だった。先場所は戦争中、最後の本場所で戦局悪化の折、「晴天7日間開催（両国国技館は軍需工場になっていたので）しかも非公開」の特異な場所だったが、双葉山は1勝6休みで引退が決定的となっていた。

従って彼の引退は太平洋戦争の終結と重なっている。

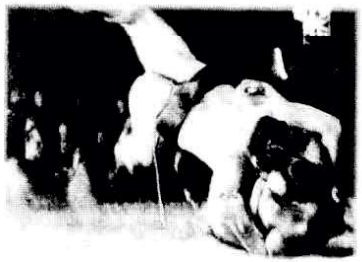
双葉山の引退土俵入りは翌21年秋に行われたが、太刀持ち羽黒山、露払い照国の両横綱を従えての堂々たる最後の土俵入りだった。

あの有名な69連勝を成し遂げたのは昭和11年春場所から14年春場所にかけての3年越しの快挙だったが、連勝が途切れてからもそのショックから立ち直って、その後も36連勝を遂げるなど、文字通り「双葉山時代」を築いたのである。今と違って、年2場所（1月と5月）の時代だから余計、その偉大さがわかる。（年6場所制は戦後昭和33年から）

その当時、私は彼の本名「穐吉定次（あきよしさだじ）」が読めずに女学生だった姉に聞いたが姉も首をかしげていた。その姉は相撲好きの私のために毎場所、番付表を作ってくれた。私はラジオの実況放送を聞きながら「○●」を点けるのだが、贔屓だった「立浪三羽烏」（双葉山のほか羽黒山、名寄岩、ときには旭川を加えて4羽烏ともいわれた）の取組の時には、ドキドキしてラジオも聞けずに外に飛び出し番組が終わってから家に帰るのが常だった。

しかし、双葉山の70連勝が成らなかった時、その師安岡正篤に打ったという電報「我、未ダ木鶏（もっけい）足リエズ」は今でも疑問に思っている。マスコミの作りあげた美談ではないかと。それはこの時、一方の勝者の安芸ノ海が母親に打った電報「オカアサン　カチマシタ」とあまりにも落差が大きいからだ。

そんな国民のヒーローだった双葉山の引退後、ほどな



双葉山70連勝ならず（昭14.1.15）

く起きた「璽光尊事件」にも驚いた。

戦前に設立され戦後すぐに金沢に本拠を構えた新興宗教「璽宇」に対して、石川県警は教祖が人心の不安を煽っている事と食糧管理法違反などで取締った事件で、この集団には双葉山のほか呉清源（囲碁）などの有名人が加入していたのでニュースバリューは大きかった。

特に双葉山は逮捕に来た警官20人を相手に大立舞を演じて、逮捕まで15分以上かかったといわれる。

しかし大捕物の割には厳罰にならなかったのは、有名人の双葉山たちを「邪宗」から救出する意図があったと、世上言われた。

当時の私の愛読書は「月刊野球界」だった。

野球選手だった兄が定期購入していた月刊誌で、勿論、野球を専門とする雑誌だったが、当局の方針のもと敵性スポーツ野球が次第に衰退してくると雑誌内容は国技である相撲に替わった。

私が愛読するようになった頃には、野球の記事は申し訳程度の数ページに過ぎず、殆どが相撲記事で埋まっていた。雑誌名と内容が違っているなと子供心に感じていたが、案の定、戦争末期には「相撲界」と改題された。（戦後はさらに「ベースボールマガジン」と改題）

今でも、前記立浪勢だけでなく当時の関取名をよく覚えている。「横綱」は双葉山のほか男女川、武蔵山。「大関」前田山、鏡岩「関脇」立浪勢の羽黒山、名寄岩のほか、平幕玉ノ海、出羽湊、鹿島洋、五ッ島、笠置山、安芸ノ海、両国、鯱ノ里などなど懐かしい名が浮ぶ。

贔屓の立浪勢のなかでも特に名寄岩が好きだった。

それは茂原での地方巡業のときには我が家が名寄岩の定宿であったことによる。関係者が部屋の入口に「名寄岩関」と独特の角力文字で書いた半紙を貼るのだが、それを喜んで手伝ったものだった。

それと土俵上で、立ち合いに相手力士にじらされると、顔を真っ赤にして怒り出す直情な人柄も好きだった。（「怒り金時」と綽名された。）

彼を最後に見たのは大学生の頃。私はその頃、学割を使って蔵前国技館の最上階立見席によく通っていたが、大関を2度も張った彼もこの頃は十両下位まで落ちていた。相手は幕下から日の出の勢いで上がってきた新鋭栃錦（後の名人横綱）。ものの見事に土俵中央で裏返しになるほど叩きつけられたのは哀れだった。ほどなく彼は引退した。

双葉山についてはさらに思い出がある。

小学校3年（昭和14年）の頃、花相撲ながら初めて両国国技館で憧れの双葉山の土俵入りを見たのだ。多分、69連勝の直後のことと思われる。型は勿論、立浪一門伝統の雲竜型、従える露払いは同部屋の名寄岩、太刀持ちは同じく羽黒山だった。

その感激を「双葉山の土俵入り」と題して作文（当時は「綴方」と呼んでいた）を書いて提出すると、どんな弾みか全国コンクールで入賞してしまった。それ以来、大の相撲好きとなってしまったのも当然であった。（今でもそうだが）

担当の今関久吉先生は私が太刀持ち羽黒山の持つ太刀の長さを「50センチ」と書いたのを、それでは短いだろうと長さ「1メートル」と1ケ所だけ訂正してくれたことを不思議に今も覚えている。

今関先生は当時盛んだった「綴方運動」の信奉者だった。この運動は1930年代、夏目漱石の弟子の児童作家鈴木三重吉（雑誌「赤い鳥」主催）の影響を受けた教育運動で、「子供たちに自由な題で文を綴らせる」ことをモットーとした。後に東京下町の小学4年生豊田正子の綴方により評判にもなった。豊田の作文を最も精読し、評価したのが後のノーベル賞作家川端康成だったと後年知った。

昭和13年には映画化もされ（山本嘉次郎監督、高峰秀子主演「綴方教室」）、私も学校から連れられて見に行った記憶がある。

その前年には築地小劇場で舞台化されているのは最近知った。演出岡倉士郎、主演山本安英の堂々たる顔ぶれである。

一方、この運動は当局からは一種の社会運動とみなされ睨まれていたらしい。勿論、当時小学生だった私が知る由もなかったが、戦後に読んだ山住正巳編「綴方教室」（岩波文庫）で知った。山住によれば、この運動は「観念的な内容と美文調からリアリズムとヒューマニズムを基調とした作品への転換であった」というが、特に千葉師範の卒業生が熱心だったようだ。そういえば私の担任今関先生も、豊田正子を指導した担任も同校卒だった。



映画ポスター（昭13年）

この流れは、戦後は無着成恭らの「綴り方教育」に影響を与えてゆく。

（終わりに）

かくして激動の昭和20年は暮れていった。

ろくすっぽ勉強もせずに、そして兄姉の生死も未だ分からずに翌年、私は中学4年生になり、早くも受験期を迎えることになる。

受験雑誌「蛍雪時代」は戦時中、兄が読んでいたので雑誌名だけは知っていたが（当時は旺文社ではなく欧文

社）戦後、復刊第一号（昭和20年10月号）を自分の小遣いで手にした感激は忘れない。（たしか1円だった？）

一寸、大人になったような気分になった。

粗悪な紙質ながら一見、雑誌風の形態だったが、各ページの裁断をしてないので広げると新聞大（あるいはタブロイド版だったか）の大きさになったのを覚えている。

この頃、町に一軒しかなかった古本屋にはよく古本を売りに行った。みな兄姉が残した本だったが、戦後の猛烈なインフレのため戦前の本の定価は殆どタダ同然だった。（例えば、前述の三木清著「哲学入門」は昭和17年版50銭）

あるとき、癪に障ったので奥付きの定価欄を引き破って持っていたら、見るからに栄養失調気味の店主から定価欄のない本は本当にタダだと愕かされてしまった。

以下、余談だがその戦後インフレを解消するため政府は翌2月、新紙幣（新円）の発行と従来紙幣（旧円）の流通禁止という金融政策を取った。

いわゆる「新円切替」である。「日本銀行兌換券」と表記された紙幣はすべて無効となったわけだが、新円印刷が間に合わなかったため、回収した旧円紙幣に「証紙」を貼り新円として流通させた。

しかし「新円切替」（金融緊急措置令）の発令と実施には2週間ほどの余裕があったので、市民は旧円が使えるうちに使おうとしたため、当局の狙いとは逆に消費が増大した。現に我が父親はその間に旧円で５００坪ほどの土地を購入している。

この政策はインフレ抑制にはある程度の効果はあったが、完全には抑制できなかったことになる。

ともあれ、あれから75年。その後の日本の変化と発展は凄まじかったが、その芽はすべてこの年昭和20年に撒かれているといっていい。

中学生の頃から軍需工場で働き、米機の空襲の中を逃げ回っていた昭和5年生まれだが、生まれて以来ずっと純粋培養の「軍国少年」として育てられた。それが「終戦」を境に一挙に「民主少年」になることを強いられたのである。

「子供から大人へ」。15歳という肉体的変化に加えて未曽有の精神的変化が加えられた。

そのため、この年の出来事は75年経った今でも鮮明に覚えている。大げさに言えば、私にとってはこの年の1ケ月はほかの年の1年に相当すると冒頭にも書いた。

しかし例外もある。

それは終戦の日から翌９月の「授業再開」までの２週間ほどがぽっかり空白となっている。それまでの毎日の防空壕生活から一挙に解放された日常を殆ど記憶にないのだ。

私と同じ年齢で今冬、急逝した作家半藤一利は「（8月）22日、ラジオで天気予報再開。23日には音響管制解除、電報小包制限解除、電話も個人の架設許可、休演中の映画・演劇再開と、つぎつぎに指令がだされている。」（昭和史おぼえ書き）と書いているが、私には全く記憶がない。

ただ、灯火管制が解除されて、「電灯とはこんなに明るかったのか」と実感したことだけは鮮明に覚えている。ものごころついてから世の中は、ずっと灯火管制だったから当然のことかもしれない。

灯火管制が解除されたのは1週間後の22日。まだ満州や南方の小島などでは—あの沖縄でさえも—小競り合いの戦闘が続いていた。翌日の朝刊の見出しは「有難いご慈悲の灯、明るくなった帝都、ただ再建に必死の御奉公」とある。今から考えればどうも少しピント外れの見出しだが、そういえば、戦争が終わったのに新聞はまだ米軍を「敵兵」と書いていたし、原子爆弾は「新型爆弾」であった。

この頃の朝日新聞の連載物「英霊に詫びる」の第一回目に大佛次郎はこう書いた。「君たちが遺して逝った愛国の信念を日本の再建に連結する——」。

日本の知性を代表する人の文章でさえ「戦時中の延長的文章であった。

「終戦」の衝撃があまりに大きかったために、日本中が茫然自失の期間が続いたからであろう。

今から考えれば、終戦の日から降伏文書に調印した日までの2週間は、絶好（？）の下剋上の期間ではなかったか。なにが起きても不思議ではなかったが、何一つ起きなかった。

しかし翌月からの変化には、我々少年たち（戦時中、「小国民」と呼ばれた）は驚くほどの順応ぶりをしめしたのは少年期の特権でもあったであろうか。１００％の価値観の転換に逡巡する大人たちに反して、我々少年たちは、何の疑問も持たずに順応していったのである。

現在、激動のこの年を知っている世代は極めて少数となったが、この激動の年の持っている歴史の重みを私は決して忘れないつもりである。同時にこのことを若い世代に伝えてゆく義務みたいなものも多少感じるが、勝手に当方がそう思っているだけかもしれない。

現代史家保坂正康は「子供に歴史を伝えることは父親の責務である。子供は祖父母や父母の生きた時代を知ることにより、人生の重みと生きる勇気を知る」（「父が子に語る昭和史」）と書いているが、私はそんな大袈裟ではなく一市民として、あの頃の身辺雑話を気軽に書いてみたかっただけである。

（終わり）

私の本州マラソン歴史紀行（東北編①）

安藤　剛

【本州全都府県マラソン走破と歴史紀行】

還暦を過ぎた二〇〇七年に健康管理の一環で自宅近くの見沼代用水ロードを走り始め、憧れの皇居ランナーに仲間入り、地元埼玉のマラソン大会に挑戦した。

走る距離を五キロから一〇キロに延ばし、更にハーフマラソンそしてフルマラソンへ、参加する大会も埼玉県内から関東、東北、中部、近畿、中国地方へ広げて、二〇一五年十二月の山口県萩市マラソン大会で、本州全都府県のマラソン大会を走破することができた。

本州各地のマラソン大会を走りながら、その土地の歴史を訪ねて、拙ブログ「老いてなお青春（マラソンへの挑戦）」に綴ってきたが、これを地方ごとに纏めて、歴史探訪を少し深掘りしながら「私の本州マラソン歴史紀行」と題して青森県から南に順次投稿していきたい。

【青森県：義経北行伝説を訪ねて】

二〇一〇年九月十二日に青森県三沢市で開催された「米軍三沢基地ハーフマラソン大会」に参加しながら、青森県に義経北行伝説を訪ねて来た。

〈1〉義経北行伝説

この年の四月下旬に地元埼玉のテニス仲間と青森県弘前と秋田県角館を花見旅行した際、当時東北新幹線の終点だった八戸駅の待合室で「義経北行伝説」と題したドライブマップ付ガイドが目に付いた。

八戸から弘前に乗り継ぐ電車内で、子供の頃によく叔父が語っていたチンギスカン義経説を話題に、いつか源義経が平泉で自害せず北に逃れたと伝わる三陸海道を訪ねてみたいと語り合った。

東北出身者として東北六県のマラソン大会走破を目標に、これまで宮城、福島、山形、秋田を走り、青森は、ぜひ義経北行伝説の三陸海道近くの大会をと探していたが、八戸近くの三沢市で開催される「米軍三沢基地ハーフマラソン大会」の情報にすかさずエントリーした。

牛若丸こと義経は、父源義朝が平治の乱に敗れて、京の鞍馬寺に預けられたが、奥州平泉に脱出して藤原秀衡の許に匿われた。兄頼朝の平家追討の挙兵に、平泉から馳せ参じ、木曽義仲を討伐、西国に逃れた平家を追って一ノ谷、屋島、壇ノ浦で打ち破り、源氏勝利の功労者として京に凱旋するが、やがて兄頼朝に疎まれ、再び平泉に逃亡した。庇護者の秀衡が死去すると、頼朝の威圧に屈した後嗣の泰衡に襲撃され衣川で自害したとされる。

ところが、実は義経は自害せず、平泉を脱出して海上に逃れ、八戸の種差海岸に上陸後、津軽半島から北海道に渡ったとする義経北行伝説が根強く語られている。

〈2〉義経と奥州平泉（藤原基成）

義経の父義朝が、平治の乱で平家に敗れて逃走中に殺害され、義経ら幼児三人を連れた母常盤が、敵将の平清盛の寵を受け、後に大蔵卿藤原長成の妻となり、義経は幼く京の鞍馬寺に預けられたが、十六才で京を脱出して奥州平泉に逃れ、藤原秀衡の庇護の許で成人した。

京の鞍馬寺に預けられていた義経は、なぜ逃亡先に奥州平泉を選んだのだろうか。

平治の乱を題材にした軍記「平治物語」の「牛若丸奥州下向」の段に「或時金商人吉次といふ者、京上りの次いでには必ず鞍馬寺に参りけるに、逢ひ玉ひて、此の童を陸奥へ具して下され、由々しき人を知たれば、其の悦びには金を乞ひて得させんずる、と宣へば」とある。

平家を父の仇と恨み、出家を拒み、学問と武芸と兵法に励む牛若丸を、陸奥へ連れ出してくれたら、由々しき人から金が貰えよう、と吉次に頼んだというが、牛若丸本人が頼んだのか、寺の僧が頼んだのか、平家を恨む息子の身を案じた母が頼んだのかは別として、陸奥に由々しき人というツテがあったことは確かなようである。

このツテについて、会社時代に常陸国出土の埴輪を寄贈する席で面識を頂いた古代学協会の前理事長角田文衛氏が、著書「平安の春」の中で「義経の生母常盤の夫の藤原長成とイトコ同士の忠隆の子基成が奥州平泉に移り奥州藤原氏三代秀衡の顧問になっており、常盤の切々とした哀願を容れて、長成が遮那王丸こと義経の処遇を基成に依頼したことは容易に察知され、基成は娘婿の秀衡に義経の保護を依頼したと認められる」と書いていた。

藤原基成は、藤原北家の中関白家、大蔵卿藤原忠隆の子で妹が関白藤原基実の正室という名門、二四才で陸奥

守兼鎮守府将軍に任じられ多賀城に赴き、奥州藤原氏二代基衡と親交を結び、娘を秀衡の正室に嫁がせていた。一〇年余の任期を終えても京に帰らず、平泉政権の顧問として留まり、娘は四代泰衡を産んでいる。

角田氏は、更に「平泉に居る基成の側にも義経を受け容れるべき義理があった。基成の弟の権中納言信頼が平治の乱に源義朝を引き込み、彼を破滅に追いやった張本人であったからである。義経の平泉下りは、長成と基成との合意のもとに行われたに相違ない」と書いていた。

基成は、実弟の信頼が首謀者になった平治の乱で源氏を滅ぼしてしまったという負い目から、平氏に命を狙われる義朝の遺児を匿うリスクを断れなかったのだろう。

吾妻鏡の文治五年四月三〇日に「泰衡、源與州（義経）を襲う。豫州民部少輔基成朝臣の衣河の館に在り」とあり、基成は最後まで義経を援けていたようである。

〈3〉義経と奥州平泉（藤原秀衡）

「吾妻鏡」の文治二年六月二八日に「去る十六日、平六兼仗時定、大和の国宇多郡に於いて、伊豆右衛門の尉源有綱（義経聟）と合戦す。然れども有綱敗北し、深山に入り自殺す」とあり、有綱が義経の婿だったという。

有綱が妻に迎えた義経の娘の生年を逆算すると、平泉に初下向してすぐ妻帯したことになり、その相手について、角田氏が「平安の春」に「恐らく基成の世話で現地の婦人―泰衡の異母妹―を妻に迎え、翌安元元年ごろには女子を産ませた」と書いており、秀衡は義経を単なる預り人ではなく婿養子として迎えていたようである。

かつて陸奥の俘囚長安倍頼時が、藤原経清と平永衡を娘婿に迎えたように、蝦夷の安倍宗任の娘を母にする秀衡もまた、藤原北家の基成の娘を正室に、清和源氏の義経を娘婿に迎えて、蝦夷をルーツにする奥州藤原氏に、貴族と天皇家の貴種血統を取り込み、中央に対抗出来る権威付けを図ろうとしたのではないだろうか。

承安四年（一一七四年）十六才で平泉に初下向した義経は、藤原基成の衣川館に住居を与えられ、武芸に秀でた武将に成長するが、頼朝の平家追討の挙兵に馳せ参じようとして、秀衡は引き止めようとしたといわれる。

「吾妻鏡」の養和元年（一一八一年）八月十三日に「藤原秀衡可令追討武衡也、平資長可追討木曾次郎義仲之由、宣下、是平氏之依申行也」とある。

前年一〇月に富士川の戦いで源氏に敗れ、翌二月に清盛が薨去、木曾義仲が北陸から京に進攻すると、平氏の棟梁を継いだ平宗盛は、奥州の秀衡に頼朝の追討を、越後の平資長に義仲の追討を命じる院宣を出させ、秀衡を陸奥守に叙任した。国司（守）は中央から派遣される貴族が通例で、現地の豪族が国司に就くのは前例がなく、平氏がいかに追い詰められていたかが知れる。

九条兼実の日記「玉葉」の寿永二年（一一八三年）一〇月九日に「頼朝使者を進す。忽ち上洛すべからずと、一八秀平・隆義等、上洛の跡に入れ替わるべし」とあり、後白河法皇は頼朝に義仲追討の上洛を求めたが、奥州の秀衡と常陸の佐竹隆義が、留守にする鎌倉に攻め入る恐れありと上洛を延引しており、頼朝は法皇からの上洛要請を断るほどに奥州の秀衡を恐れていたようである。

中央から遠く半独立した平泉王国を一〇〇年に亘り守ってきた奥州藤原氏の三代秀衡もまた、保元平治から続く中央の源平合戦に巻き込まれたくなかったのだろう。平宗盛からの頼朝追討要請を無視して、源平双方に距離をとり非戦中立を守るべく、兄の平家追討挙兵に馳せ参じようとする義経を引き止めようとしたに違いない。

しかし、秀衡の許で成人した義経は、兄頼朝の平家追討の挙兵に呼応して平泉から参陣を強行した。天才的な戦略と戦術を駆使して平家を滅ぼす活躍で大きな名声を得たが、やがて狡猾な後白河法皇に取り込まれ、政争の具に利用されると、自立を志向してゆく弟への猜疑心と畏怖心から、頼朝は謀叛の疑いで義経追討令を発した。

都を脱出して再起を賭けた九州落ちに失敗した義経は文治三年（一一八九年）に再び平泉に逃れてきたが、迎えた秀衡の立場は、義経が幼く初下向してきた時とは大きく変わっていた。もはや義経の問題だけではなかった。

黄金と良馬を産する奥州の支配は、源氏積年の野望だった。平安時代後期に武士の棟梁として台頭した平氏は西国を地盤に伸張、源氏は東国の支配を指向した。

頼朝の五代前の陸奥守源頼義が、蝦夷征伐を名目に前九年の役で陸奥の安倍氏を滅ぼし、その子義家が後三年の役で藤原清衡に助勢して出羽の清原氏を滅ぼしたが、奥州支配を果たせないまま、後三年の役が朝廷に私戦と見做され、義家は陸奥守を罷免されてしまう。

義家の孫為義が、挙げた武功に陸奥守を望んだが勅許が得られず他の受領も断ったため、ライバル平忠盛に後れを取って源氏弱体を招いてしまったほどに、奥州支配は源氏相伝の宿願であり、為義の孫頼朝が平家追討と源氏再興を果たした次なる目標は、奥州の制覇であった。

平泉に平和な仏国土を築いてきた奥州藤原氏の三代当主秀衡は、頼朝が平泉に逃避した義経の首を求めて来た真の狙いが奥州の支配であることを見抜いていた。義経を匿うか匿わないかはもはや問題ではなかった。

鎌倉の頼朝に屈服するか、徹底抗戦するか、抗戦するとして張り子の虎同然の奥州平泉軍に勝算があるのか、平泉の命運を決める英断を秀衡は求められていた。

秀衡は義経が平泉に逃れてきた半年後に死去するが、死に臨んで、義経を大将軍に任じ、庶長子国衡と嫡男泰衡と三人結束して頼朝に抗戦すべしと遺言した。

「吾妻鏡」の文治三年一〇月二九日に「今日、秀衡入道、陸奥國平泉舘に於て卒去す。日來重病し恃み少きに依て、其の時以前に伊豫守義顯（義経）を大將軍と爲し、國務令む可し之由、男泰衡以下に遺言令むと云々」とあり、摂政関白の九条兼実の日記「玉葉」に「秀衡死去之刻、以義顕為主君、両人可給仕之由有遺言、仍三人一味、廻可襲頼朝」と記している。

秀衡にとって義経は、単なる源氏の客人ではなく、平家討伐に天才的な戦術と戦略を発揮した英雄であり、平家相手に百戦練磨の頼朝軍に立ち向かえる頼もしい聟殿であり、平泉軍の守護神であり、平和ボケしている凡庸な息子達に主君として仰ぐよう遺言したのである。

しかし義経の秀でた軍略に平泉の命運を託した秀衡が病没すると、頼朝の恫喝に屈した後嗣の泰衡は、秀衡の遺言に反して義経を討ち、その首を鎌倉に送った。

〈4〉義経の平泉脱出

「吾妻鏡」が文治五年四月三〇日に義経襲撃状況を「今日陸奥の国に於いて、泰衡、源與州（義経）を襲う。これ且つは勅定に任せ、且つは二品（頼朝）の仰せに依ってなり。豫州民部少輔基成朝臣の衣河の館に在り。泰衡の従兵数百騎、その所に馳せ至り合戦す。與州の家人等相防ぐと雖も、悉く以て敗績す。與州持仏堂に入り、先ず妻子を害し、次いで自殺すと」と記している。

「吾妻鏡」の三月二〇日に「奥州の基成朝臣並びに泰衡等の請文到来す。義顕（義経）を尋ね進めるべしの由これを載す」とあり、泰衡が義経を襲撃する一ケ月以上も前に、基成と泰衡が義経を捕えて頼朝に差し出す旨の請状を発出していた。

頼朝の威嚇に追い詰められている泰衡たちの不穏な言動に、義経を中心に結束して頼朝に抵抗すべしとの秀衡の遺言が反故にされる事態を義経が気付かない筈はない。

秀衡の遺言で父の正室を妻にした庶長兄の国衡が弟の四代当主泰衡を後見、父秀衡の遺言を順守して義経を大将に擁立する三男忠衡らと対立して平泉政権内は二つに分断しており、泰衡の義経襲撃は時間の問題だった。

中尊寺所蔵　義経像（部分）



かかる緊迫した状況下で、義経にその気さえあれば平泉を脱出する時間的余裕は十分あった筈である。

平泉には初下向時からの後見人の藤原基成はじめ泰衡の弟の忠衡や通衡だけではなく、秀衡の従妹乙和子姫を継室にする信夫荘司佐藤基治も、頼朝挙兵に馳せ参じる義経に息子の継信・忠信兄弟を随従させた忠臣で、後に奥州合戦で頼朝率いる大軍を迎撃した福島県北部の阿津賀志山の防塁を構築しており、義経の強力な擁護派だったろう。義経は奥州で決して孤立無援だったわけではなく、自刃に追い詰められる状況でもなかった筈である。

「吾妻鏡」の文治五年二月二一日に「御使を京に発せられ、伊豫守（義経）が京を逐電して後も、義顕（義経）に同意する頼経卿、按察大納言朝方、左少将宗長、出雲侍従朝経が放任されていると朝廷の生温過ぎる対応を糾弾した」とあり、京にも後白河院近臣を中心に義経に味方する勢力が残存しており、義経が平泉に落ち延びてなお、再起の望みが全く絶たれた訳ではなかった。

義経自害を疑う根拠のひとつが、義経と泰衡の首に対する頼朝の対応の違いである。

頼朝執念の義経追討令に従って義経を討った泰衡が奥州合戦に敗れて平泉を逃亡して裏切られた家臣に殺害され、泰衡の首が頼朝の許に届けられると、八寸釘で首を木に打ちつける釘打ちの刑に処されたと吾妻鏡にある。

しかし義経の首は、守護・地頭を設置してまで執拗に追討した頼朝の私怨の対象で、すぐさま届けられるべきはずが、鎌倉搬送途中でしばし止め置かれて、鎌倉に着いた義経の首実検は、死後四二日も経ってから、しかも首実検に頼朝は立ち会っていない。反逆者として晒し首にされるべきその後の扱いに吾妻鏡は触れていない。

首実検の延引について、亡母供養のため建立した五重塔の完成式典が延期できず、頼朝が内陣に入る神事でもあるため、身の穢れを恐れて義経の首を途中に逗留させたと吾妻鏡にあるが、頼朝にとって後白河法皇の後ろ盾を失った義経はもはや脅威ではなく、義経の首を上げたことが天下に宣言出来ればそれでよかったのだろう。

もし義経が平泉から逃亡したとなると、いつまでも義経を追い続けなければならなくなる。頼朝の狙いは義経の首そのものではなく、義経を匿ったことを口実に奥州藤原氏を征伐して、祖先の源義家が果たし得なかった奥州支配の夢を自らの手で成し遂げることだった。

義経は自害したのではなく、義経を擁護する基成や忠衡や佐藤基治たちが義経の逃亡を画策したのか、泰衡が義経自刃を擬装して偽首を頼朝に届けさせ義経を密かに逃したのか、頼朝に追い詰められていた奥州藤原氏の苦境を慮った義経が、自らの判断で平泉を脱出して北方へ逃亡したのか、まさに歴史秘話ヒストリーである。

〈5〉義経上陸の地：種差海岸を訪ねて

この年は九月に入っても記録的猛暑が続いていた。朝七時に埼玉を出立、盛岡を過ぎると予報通り雨模様になってきた。一〇時に東北新幹線終点の八戸駅に到着。八戸線「うみねこ号」に乗り換えて八戸湾に沿った市街地を抜けると、車窓に太平洋の海原が覗き始め、三〇分程で三陸リアス式海岸の北端に当たる種差海岸駅に着いた。

三角屋根の待合室兼駅舎を出ると、雨足が更に強くなり肌寒ささえ感じられる。寂れた駅前通りを抜けると、目の前が開けて灰色の大海原と緑一面の草原が現れた。

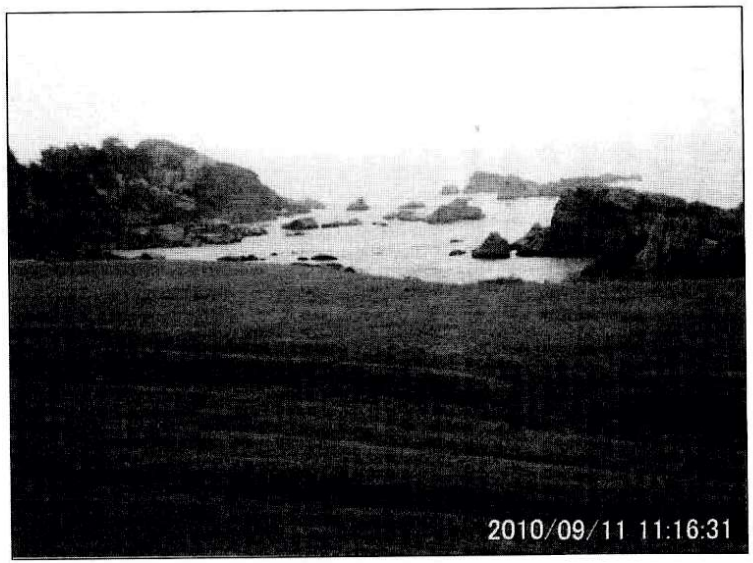
ここが、平泉を逃れて宮古から乗船した義経主従の上陸した種差海岸なのか。風光明媚なこの別天地に辿り着いた義経の安堵感は如何ばかりだったろう。

ゴルフ場のような美しいウエーブの天然芝生が海岸線まで広がり、荒波に浸食された異形な岩々に白波が打ち寄せて、女性的な優しさと男性的な荒々しさが織り成す絶景である。海岸線の右手奥に漁港の防波堤が長く延びて、義経一行が上陸したのは、あの辺りであろうか。

冷たく降り頻る雨にズボンの裾を濡らして、緑色に美しく映える芝原の突端まで散策してみると「種差海岸ゆかりの文化人」と題した碑文があった。

雨に煙る美しい大自然の表現に、名勝説明板にあった種差海岸ゆかりの文化人の言葉を拝借させてもらおう。

詩人佐藤春夫は、随筆文「美しい海べ」で「海岸美と山岳美とを打って一丸としたとも言うべき、ちょっと想像に絶する風景」と絶賛したとあり、作家の司馬遼太郎は、紀行文集「街道をゆく」で「むしろどこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらなければならないはめになったとき、一番にこの種差海岸に案内してやろうとおもったりした」と書いていたという。



青森県八戸市　種差海岸

日本画家の東山魁夷は、随筆「風景との対話」の中で、第六回日展（一九五〇年）に出品した「道」について「ひとすじの道が私の心に在った。夏の早朝の、野の道である。種差海岸の牧場でのスケッチを見ている時、その道が浮かんできたのである」と述べたとあり、正面の丘に灯台が見える牧場のスケッチから、牧場の柵、放牧されている馬、灯台を取り去って道だけを描いたらという発想により完成したものだという。

翌年には種差海岸で描いた、馬が放牧された「夕凪」と乳牛が放牧された「朝涼」の二点を出展している。一九四〇年に種差海岸と馬を描いた「凪」を紀元二千六百年奉祝美術展に出展しており、種差海岸が森と湖に白い馬をモチーフにした魁夷の世界の原点だったのだろう。

海岸沿いの食堂で地元名産「生ほたて丼」をいただき義経主従が上陸後に参拝したという「熊野神社」に向かった。海岸通りから山道を四分ほど上ると、杉林に囲まれた五つの朱塗り鳥居が並ぶ奥に社殿が佇んでいた。

鳥居横の案内板に「義経は平泉自害の一年前にひそかに平泉を脱し気仙の港から種差海岸に上陸しここで休憩した」とあった。義経は泰衡に襲撃されて逃れたのではなく、秀衡の死の半年後には既に平泉を脱出していたことになる。鎌倉に届けられた義経の首は、泰衡が義経を逃亡させて仕組んだ身代わりの偽首だったのだろうか。

社殿に合掌しながら、義経主従もこうして逃避行の安全を祈念したに違いない、これから先の不安は如何ばかりだったろう、義経の苦悶に思いを馳せていた。

〈6〉八戸市白銀町の源治囲内を訪ねて

次の探訪先は、義経が上陸して仮住居を構えたと伝えられる「源治囲内（げんじかこいうち）」である。

八戸方面に戻る八戸線の車窓に、ウミネコ繁殖地として天然記念物に指定されている蕪島が見えてきた。

次の白銀駅に下車、駅裏の高台に建つ三嶋神社に参拝した。境内の案内板に「源治囲内」について「海路を舟でやって来た義経一行は、八戸の浦へ上陸し、白銀の村に仮住居を定めることにした。このあたり白銀に残る「源治囲内」という地名は「源氏の屋敷」との意味だったといわれ、義経一行が舘越に居を移す前に、法官氏の世話で住んでいたところであるという。法官という姓は、義経が一行に世話を焼いてくれた者に「今後、判官と名乗るがよい」と申し渡したが、判官と名乗るのは差し障りがあるというので法官と改姓したといわれている」と説明書きにあった。

事前にネットで調べて来た地図を片手に、三嶋神社か

ら住宅地を東へ三〇分ほど、ようやく「源治囲内」と思われる地区に辿り着いたが、地名表示板も法官の表札も見付け出せず、当てずっぽうに飛び込んだ理髪店で「法官さん宅」を聞き出すことができた。

大通りを隔てた屋敷の表札「法官」をカメラに収めていると、人の気配がしたと不審そうにご主人が現れた。

昔はこの辺りも源治囲内と呼ばれ、林に囲まれた大きな屋敷が多かったが、数度の八戸大火で全てが焼失してしまった。源氏に関わる文書を子供の頃に見た記憶はあるが、焼けてしまい今は伝承だけで、時折テレビ局や出版社が取材に訪ねてくるがと、申し訳なさそうだった。

まさか法官さんにお会いできたうえ、こうして歴史ガイドまでしていただけるとは、思いがけない幸運に興奮しながら、再び強くなった雨の中を白銀駅に向かった。

かくして、義経が上陸した種差海岸、参拝した熊野神社、仮の住まいを構えた源治囲内、そして義経のお世話をしたという法官さんの末裔を訪ねることが出来た。

義経主従は、法官さんに世話された後、白銀駅から南西に四キロの館越山に一年余り住んだ後、北西に五キロの八戸湾を見下ろす高台に移り住んで、平泉の高館に似た地形から高館と呼ばれたらしい。

高館に移った文治五年は、頼朝の奥州征伐の年である。頼朝の追手が八戸まで及んだ時には、すぐ海に逃げられるよう、海岸近くに移住したのかもしれない。義経はその後どうしたのだろうか。高館に永住したのだろうか。津軽半島の龍田岬から北海道に渡ったのだろうか。

八戸駅に戻り駅前の食事処で夕食をとり、東北本線で三沢駅へ、駅からタクシーでマラソン大会会場の米軍基地ゲート前のホテルに着いたのは午後七時過ぎだった。

〈7〉三沢市と米軍基地

三沢市は基地の町である。三沢基地は航空自衛隊唯一の日米共同使用の航空作戦基地で、地理的・能力的にも北に対する防衛の要である。基地の面積は四八五万坪で三〇〇〇mの滑走路を有し、自衛隊のF2、米空軍のF16という日米最新鋭主力戦闘機が配備されている。

近くの姉沼通信所には、世界最大級の円筒形アンテナ「象の檻」があり、日本の周辺諸国の通信を傍受、円形レーダードームは、軍事衛星通信の傍受や追跡を行っておりまさに世界軍事戦略のセキュリティゾーンである。

今回参加した「米軍三沢基地ハーフマラソン大会」は米軍三沢基地が主催、三沢市が後援、一般人がめったに入れない基地内を一周するマラソン大会である。

大会運営は、基地の米軍人や職員とその家族が担っており、日本国内にある米国軍事施設として地元三沢市民との共存と融和を願うイベントだが、海外マラソンの雰囲気が味わえるかもしれないという期待もあった。

〈8〉甲子園の三沢高校

青森の三沢と聞くと、我々の世代では、やはり太田幸司の三沢高校である。昭和四四年夏の甲子園の決勝戦でエース太田幸司投手が演じた延長十八回0対0引分け翌日再試合は、高校球史に残る熱戦だった。

三沢中学の野球少年たちがそのまま地元の三沢高校に進学、甲子園出場を果たしただけでなく、太田幸司投手を中心に攻守ともチーム一丸となって勝ち進み、ついに決勝で甲子園常連の強豪松山商業を相手に繰り広げた延長再試合の熱戦で甲子園を席捲したあの年の夏は、今年の記録的な猛暑を上回る、文字通りの熱い夏だった。

当時私は仙台から東京に転勤して二年目、日本橋堀留の問屋街を自転車で取引先回りをしていた。六月に新宿駅西口地下広場で数千人に膨らんだ反戦フォーク集会が機動隊に制圧され、野次馬で居合わせた私も親友と騒然とした地下広場を逃げ回った思い出があるが、その日の堀留の街中は、人通りがほとんどなく、喫茶店には軒並み高校野球中継中の張り紙が張られて、路肩に駐車している車から野球の実況放送が甲高く流れていた。

勤務中にズルして喫茶店に入り込む勇気も無く、車の運転席から漏れる野球放送に聞き耳を立てながら、路上駐車の車から車に渡り歩いていたことが懐かしい。

決勝戦の延長十五回裏と十六回裏の二度にわたる満塁の攻防は伝説のイニングと呼ばれ、四国の伝統ある強豪校を相手に延長再試合で二七イニングを一人で投げ切って惜敗した東北の弱小高校の太田幸司投手は、悲劇のヒーローと云われたが、薄命の英雄だった義経に寄せる同情や愛惜に似た判官びいきなのかもしれない。

〈9〉米軍三沢基地ハーフマラソン大会

昨日の雨がうそのように晴れ上がり、マラソン日和である。北国の爽やかな風が心地よい。昨夜暗くなってから三沢に着いたので気付かなかったが、ホテル前の三沢基地前大通りは、英文字の看板が多く、西部劇の舞台のような町並みは、さすがに米軍基地の町三沢である。

マラソン会場の受付で、写真入り身分証明書の呈示が求められた。事前に承知はしていたが、閉ざされた基地ゲートに銃を構えた軍人が立哨する光景には緊張感が漂い、平和ボケしている我々に世界のどこかで殺し合いが続いている現実を思い知らされた。

基地ゲートを入ると、樹林と芝生の緑が鮮やかに広がり、外の活気とは無縁な不気味な静けさである。

九時過ぎに基地メインゲート前のアメリカ広場で開会式が始まった。特設ステージで米人男女と日本男性の三人が司会進行役を努め、半円状に取り巻く数百人の参加ランナーが真面目に参加していた。

両国国旗を捧げた儀仗兵のセレモニーで始まり、黒の礼装の米人女性が歌うのびやかな両国国歌が青空に響き渡り、ランナー姿の米人牧師が無事完走の祈りを捧げ、日米両基地司令官と三沢市代表が開会挨拶を、大会本部からの米人役員による的確な連絡事項と指示がなされて二〇分程で感動的な開会式は終わった。米軍基地関係者の地元三沢市そして日本国との交流を深めたいという熱い思いがひしひしと感じられた。

開会式のセレモニーが終わると、基地のメインゲートが再び開かれ、ランナー達が続々と基地内に入場、広々した樹林コースを試走し始めた。

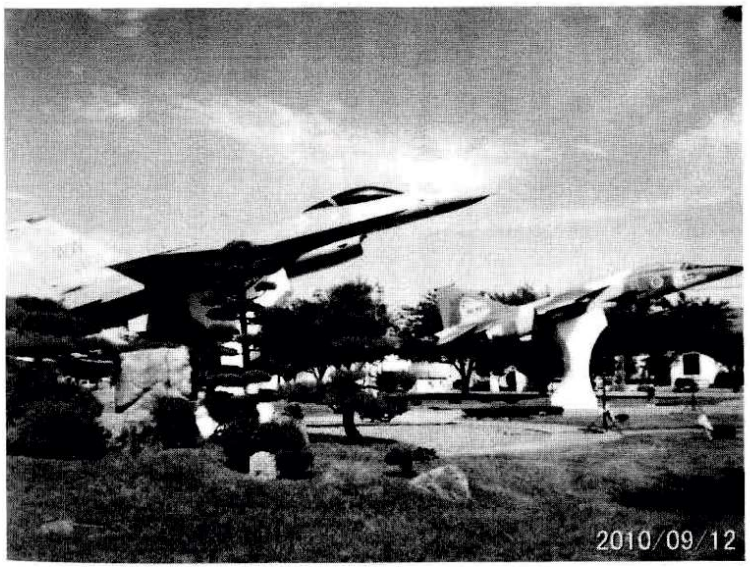
基地内に嬉々とした賑わいの声が広がって、先ほどの不気味な静けさはどこへやら、極東の軍事最前線基地の緊迫感が全く感じられなくなっていた。青空に白い雲が浮游して、樹間をそよぐ爽やかな空気が実に美味しい。

スタート地点近くに日本庭園が造営されて、その隣に米空軍主力戦闘機F16と日本自衛隊支援戦闘機F1が機首を空に向けて展示されていた。子供の頃に戦艦大和やゼロ戦の模型造りに夢中になっていた本性が甦り、カメラを構える手が震えていた（下の写真）。

まもなく最初のプログラムの一マイル親子ランが始まった。日米の親子が手を繋いで競い合う姿がなんとも微笑ましい。まさに平和の祭典である。

本大会のコースは、ハーフ七〇〇人が一〇キロ三〇〇人と一緒にスタート、まもなく左右に分かれ、ハーフ組は、反時計回りで広大な基地飛行場を一周（約十六キロ）、途中の姉沼付近で「象のオリ」方面を往復（約五

青森県三沢市　米軍三沢基地



キロ）、最後に基地外の市街地を走ってメインゲート前にフィニッシュする二一キロである。

一〇時三〇分、いよいよ我々の出番である。上背が二メートルはあろう体躯の米兵や筋肉逞しい黒人女性に囲まれて、貧相な日本人の我々は圧倒されてしまいそうである。これでは太平洋戦争でアメリカに負けるのも当然だなと思わず苦笑してしまった。

ハーフランナーの二割、女性一一〇人の四割がアメリカ人とあって、これまで参加してきた国内マラソン大会とは別世界、まさにインターナショナルである。ホノルルマラソンもかくありなん、国際大会に参加しているような昂揚感を楽しんだ。

米軍基地司令官もランナーの列に加わり、静かにスタートを待つ日本人ランナーとは対照的に、アメリカ人同士の陽気な会話が飛び交う中、カウントダウンのアナウンスでスタートした。ヤンキー特有の奇声が一斉に上がったが、ピストル音も花火の打ち上げもないのは、いかにも軍事基地内のイベントらしい。

快調なペースで走り出して一〇キロ組と分かれて右折すると、英文字だらけの米軍基地から、日本語の案内板や道路標識が林立する航空自衛隊の基地内に入った。改めてここが日本だと思い知らされた。道端に立つキロ表示板で最初の二キロが一〇分二五秒はかなりハイペースである。格納庫群を抜けると左手に広大な飛行場が果てしなく広がり、これからここを一周するのかと思うと気が遠くなってしまう。先頭は既にはるか前方を走って点々と蟻のような列を作っていた。

視野を遮る物ひとつない広々とした飛行場の外周を、心地よい陽射しと爽やかな秋風を浴びながら、周りのランナーの流れに乗り、体躯のいいランナーの後ろについて向かい風を避ける余裕はまだあった。

四キロ付近で米人女性ランナーが歩き始めていた。追い抜きざま日本語で「がんばってください」と声掛けすると、女優さんのような綺麗な笑顔で応えてくれた。

反対車線をゆっくり走ってくる車の中からアメリカ人が半身を乗り出して応援していたが、日本では見られないシーンである。これがアメリカ流なのだろうか。

マラソンコースの車道には、米兵の誘導員が立つのみで沿道の声援がないのは、基地のセキュリティで車外に出てはいけないのかもしれない。

飛行場の周回途中から美しく整備された林間コースに入り、木蔭の涼しさが疲労を感じ始めた身体に大いなる救いである。八キロ地点で四五分、まだまだいけるぞと思いきや、突如、長い上り坂に入った。

まさに山岳コースである。延々と続く魔の上りが始まった。はるか右前方に小川原湖が広がり、対岸に円形

の金網が見えてきた。あれが「象のオリ」か。あそこまで走ってハーフの折り返しとは、気が遠くなりそうだ。

先ほどから並走している若い女性の苦しそうな息遣いに、励ますつもりで「きついですね」ようやく前方が開けてきたので「もうすぐ坂が終わりみたいですよ」と声をかけたが、坂を上り切ると、背に「くいしんぼう」と描いたTシャツ女性はどんどん先に行ってしまった。

平坦な林間コースに戻り「象のオリ」に向けて右折するポイントで、立哨の米兵に「グッジョブ！」と大きな声を掛けられ「サンキュウ！」とハイタッチした。グッジョブは、いい走りだね、頑張ってるね、の意か、いい英語だ。それからはグッジョブを連発してやった。

一〇キロ地点で五七分三七秒。さすがに上り坂一キロに七分も掛けてしまった。今度は「象のオリ」に向かう下り坂が始まった。並走する男性が「この坂を折り返してまた登るんだよね」と声かけてきた。ここを下った分また上るのか、と弱音を吐いて同情を求めてきた。いい仲間だ。並んでいるだけで心が通い合っていた。

遠望していた小川原湖が、右手に海のように広がり、まもなく「象のオリ」が前方に現れてきた。直径四五〇m、高さ三八mの円筒形の巨大な鉄柵で、まさにサーカスのオリである。この巨大なアンテナ網でソ連や中国や北朝鮮の通信を傍受しているのだろうか。

その奥にゴルフボールのような表面凸凹そのままの巨大な円形レーダードームが並んでいた。これが軍事衛星を追跡する設備なのか。厳重な警備の気配は感じられなかったが、今この瞬間に戦争が起きたら最初に攻撃目標になるのではと、急に恐ろしくなってきた。

ようやく折り返し、先行と後続の様子が見えたが、満更でもない位置にいることに、ひとまず安堵した。さっきまで並走していた顔馴染みが遅れていった。覚悟はしていた上り坂が始まった。歩くまい、走りきろう。筋肉の張りは限界に近かったが、まだ歩く人はいない。負けられないという一念でついに登り切った。

平坦な飛行場の周回コースに戻っての一六キロ地点で一時間三六分一七秒。このあと残り五キロをキロ七分で二時一〇分は切れると計算したが、平坦コースに戻ったのに足が上がらなくなっていた。

往復の長い上り坂のダメージで、両足のスネと右腰の関節に痛みが感じられ、後続のランナーにどんどん追い抜かれ始めたがどうしようもない。昨年の東京マラソンのラスト五キロのような限界を感じ始めていた。

周りは人影も機影も滑走路も見えず、ただ大草原の中に取り残されたようで、ひたすらトボトボ走るだけになっていた。さっきまで連なっていた仲間はどこに行ってしまったのか、まさにアローンランである。

草原を抜けて米軍社宅らしい居住区域に入ると、アメリカ人の男の子達がランナーに向けて水鉄砲で水掛けしていた。鉄砲で撃たれる仕草をして笑わせてやった。

基地の外に出るゲートをくぐると、畑の中で日本人老夫婦が手を振っていた。これまで三キロ毎の給水スタッフはほとんどがアメリカ人で「サンキュウ！」と変な発音でお礼を言ってきたが、「ありがとう」と日本語でお礼を言うことが久方振りのようで新鮮な感じがした。

ようやく基地メインゲート前の大通りに出ると、誘導係員が「あと五〇〇m！頑張れ！」と声を掛けてきた。そして西部劇の舞台のような建物が並ぶ商店街を揺るがす三沢市民の日本語の「頑張れ」コールに包まれた。

前も後も誰も走っていない。沿道の声援と視線が全て私一人に注がれていた。無様な姿は見せられない。

頭を上げろ！胸を張れ！腕を振れ！　最後の力を振り絞り大観衆の前を独走、大通りを左折して、フィニッシュアーチに向かって走り込んだ。

ゴール直前で足を引き摺るアメリカ人ランナーを仲間が肩を貸してゴールしようとしている場面に遭遇した。一瞬、負傷した戦友を助ける戦争映画シーンと重なった。奇しくも昨日は、九年前にアメリカ同時多発テロが勃発した九月十一日、今も三沢基地からF16戦闘機がイラクとアフガニスタンのタリバン空爆に飛び立っている。

彼らにとって三沢基地は故郷の米国本土から遠く離れた最前線の戦場であり、肩を貸して走る彼らは単なるランナーではなく戦友なのだ。米軍三沢基地の現実と人間の温かさを垣間見た思いで熱いものが込み上げてきた。

結局ラスト五キロはキロ八分を超えていた。ゴール後のオレンジの甘さに救われ、幾切れもいただいてしまった。完走証に二時間一八分四七秒とあったが、たくさんの思い出をもらい、満足と安堵に包まれていた。

〈10〉東日本大震災と三沢基地

米軍三沢基地マラソン大会に参加した半年後の二〇一一年三月十一日に起きた東日本大震災で、仙台空港が大津波で壊滅したため、米軍三沢基地が本州における自衛隊との救援活動の共同拠点となり、米軍による「トモダチ作戦」の基地となったことは記憶に新しい。

アメリカ海軍は、米韓合同演習に向かう途中の原子力空母ロナルド・レーガンを仙台沖に直行させ洋上から救援基地の拠点となり捜索救助や物資輸送活動に従事、アメリカ陸軍と海兵隊は、二万余の人員を投入して被災地の瓦礫の処理や駅や線路の復旧活動に従事、アメリカ空軍は、嘉手納基地から民用支援用ガソリンを空輸する空中給油機を交代要員と五〇名のエンジニアと共に三沢基地に送り、基地の兵士だけでなく家族や基地従業員も救援物資搬送や土砂撤去など救援活動に参加したという。

【秋田県：小野小町伝説を訪ねて】

二〇一〇年八月七日に秋田市湯沢市で開催された「湯沢七夕健康マラソン大会」に参加しながら、秋田県に小野小町伝説を訪ねて来た。

秋田県内のマラソン大会には、日本海メロンマラソンや田沢湖マラソンといったメジャーな大会が多いが、大会ポスターを飾る七夕絵燈籠祭りの艶やかな美人画に惹かれ、東北夏祭りの見物を兼ねてエントリーした。参加者が少ない地方都市の大会で、距離は一〇キロと短いが、猛暑の夏場にはちょうど手頃な大会である。

〈1〉小野小町伝説

開催地の秋田県湯沢市は、秋田県の南玄関口に位置して、全国有数の豪雪地帯、稲庭うどんが有名である。

湯沢市は平安時代の女流歌人小野小町の生誕と終焉の地といわれ、クレオパトラ、楊貴妃とともに世界三大美女と称されて、六歌仙に選ばれた小野小町の悲恋物語を同人誌まんじに投稿された島津隆子氏の「小野小町物語」で興味深く読ませていただいたこともあり、小野小町ゆかりの里を訪ねるのも大いな楽しみであった。

お米の「あきたこまち」や秋田新幹線の「こまち号」は、美人の誉れ高い「小野小町」にちなんで末永く愛されるようにと願いを込めて命名されたそうだが、小町はその美貌故に波乱な生涯を送った謎多き女性として、全国各地に出生地といわれる様々な伝承が残されている。

秋田県湯沢に伝わる小町伝説では、約一二〇〇年前に出羽郡司の娘に生まれ、十三歳で宮中に上がり仁明天皇に仕えて、容姿端麗な美貌の歌人として宮廷サロンの中心となり、言い寄る男性を美しさと歌の才能で魅了しながら実際には寄せつけることなく、三六歳の時に郷里に戻ってしまうが、その小町を慕って下京した深草少将を百晩通わせた「百夜通い」は、小町の恋愛感を象徴する伝説として能の謡曲で演じられている。

（一）平家物語の小野小町

平家物語の「小宰相身投」に小野小町の名があった。

清盛の弟教盛の嫡男通盛が、宮中一の美人と云われる小宰相を見染めて手紙と歌を送り続けるが、受け入れさえしない小宰相に、女院の上西門院が「あまりに人の心強きもなかなか仇となるものを」と、小野小町の寂しい晩年を例に出し、身を固めるよう仲を取り持って二人は結婚するが、源平合戦の一の谷の戦いで通盛が討死したと聞いた小宰相は、出陣前夜に「後の世と契らざりけん」と後悔して屋島に逃れる船から後追い入水したという。

平家物語は、小野小町について「一昔前、容姿が非常にすぐれ、芸術の道もまれな才能を持っていたので、見る人、聞く者、心を悩ませないということはなかった。

けれども気が強いという噂が流れたからであろう、ついには人の思いが積もったせいで、家には風を防ぐ塀もなく、雨を漏らさない屋根もない。家に降り注ぐ月や星の光を、涙を浮かべ野原の若菜や沢の根芹を摘んで、露のような人生を過ごしたという」と書いていた。

（二）百夜通い（ももよがよい）

『京都市山科に伝わる伝説』では、自分に思いを寄せる深草少将に小野小町は「私の所に百夜通い続けたら、思いを遂げさせてあげる」と言い、小町の言葉を信じて深草少将は毎晩通い続けて門口に榧（かや）の実を置いた。九十九日目に大雪のため榧の実を手にしたまま少将は途中で行き倒れとなり凍死してしまう。小町は後に供養のため、榧の実を小野の里に蒔いたという。

『秋田県湯沢に伝わる伝説』では、このとき小町は疱瘡を患っており「私を心から慕ってくれるのなら、毎日芍薬を植えて百株にしてください」と言ったとある。そして百日目となる激しい雨の夜に従者の制止を振り切って少将は百本目の芍薬を握ったまま氾濫した川の橋ごと流され亡くなってしまう。それを知った小町は晩年を少将への思いを抱きながら自像を彫っていたという。

小町が深草少将に「百夜通い」を条件付けたのは何故なのだろうか。高慢にも彼の愛を試そうとしたのか、途中で諦めてしまうだろうと軽くいなしただけなのか。

百夜通いで届けさせたという榧の実も芍薬の根も、古くから不老長寿や薬草として珍重されている。三六歳で突然華やかな宮廷生活を捨てて郷里に帰った理由もその病気にあったのかもしれない。

小町は病痕で醜くなった己の姿を人前にさらしたくなかったのではないだろうか。もはやかつての若い美貌の自分ではない、容色衰えた今の姿を見せたくもない、百夜通いの伝説は、一途な愛を捧げる深草少将を凍死と溺死という非業な最期を遂げさせて、小町の美貌と名声を永遠なものに守りきったのかもしれない。

小町の疱瘡を治して上げたいと榧の実や芍薬の苗を下げて雨の日も風の日も日参する一途な深草少将の思いを知りながら、少将の脳裏に残る己の若かりし日の美貌を守りたい、そして少将の夢を壊してしまいたくないと、あえて会うことを拒み続けた小町の少将への思いやりもまた真実だったのだろう。

もしかしたら、少将は疱瘡に侵された醜い容貌を受け容れてくれたかもしれない。さすれば小町の晩年は救われたものになっていたのかもしれない。

百人一首に小野小町の有名な歌がある。

・・花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに（古今和歌集：春歌下）

長雨が降り続きぼんやりしている間に、花は盛りを過

ぎてすっかり色褪せてしまった。思えば私もこの花のように、恋の悩みなどの物思いに耽っている間に容貌もすっかり衰えて年をとってしまったものだと歌っている。

絶世の美貌ゆえに、老いにおののく小町の気持ちが伝わってくる。下京してまで慕ってくる少将に百夜通いを課した理由は、やはりそこにあったのだろう。

（三）卒塔婆小町

川の流れに身をまかすしかない浮草に自分を喩える「わびぬれば身をうき草の根を絶えて」の歌を口ずさんで、山野の町々に飯を乞う乞食の老女が、朽ちた卒塔婆に腰掛けているのを高野山の僧が咎めるが、逆に法論で遣り込められる。僧は驚き問い質すと、老女は小野小町のなれの果てと名乗る。身の上を語るうち、小町のもとに百夜通おうとして死んでしまった深草少将の怨念で狂乱状態となる。我に返った老女は合掌して悟りの道に入ることを心に誓う、という小町の謡曲がある。

（四）あなめ小町

ある僧（在原業平とも）が旅の途中、夜ふけて風の音にまぎれて「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ（ああ目が痛い）」と上の句を吟ずる声が聴こえ、翌朝その当たりを探してみると草むらに髑髏があり、その目の中にススキが生えていた。小野小町の変わり果てた姿と知りススキを抜き取り「小野とは言はじ薄生いけり」と下の句を付けて弔い、小町は成仏したという謡曲である。

絶世の美人だった小野小町の晩年と死後が、何故これほどまでに貶められなければならなかったのだろう。彼女の美貌と恋と歌に弄ばれた貴公子たちの怨念が創作させたものなのかもしれない。

（五）小町は衣通姫の流れなり

小町の歌を絶賛して六歌仙の一人に選び、十八首を自ら編纂した「古今和歌集」に収めた紀貫之が、その仮名序で「いにしへの衣通姫（そとおりひめ）の流れなり、あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女の、なやめるところあるに似たり」と評している。

狩野探幽「三十六歌仙額」



衣通姫は、その四〇〇年前の允恭天皇の寵妃で、日本書紀にその艶やかさは衣を透して輝いていたと記されてあり、同母姉の皇后から妬まれ、都を離れて河内に逃れ、天皇を恋い慕いつつ、淋しい生涯を終えたという。

小野小町に五〇年遅れる紀貫之が、小町の美貌を知る由もなく、ただ小町の歌が衣通姫に似ていると言っただけだろうに、後世の人に衣通姫に似た美人と解釈されて小町の美人伝説が生まれたといわれている。

果たしてどうなのだろう。歌の作風だけでなく、美貌の歌人としての境遇も運命も古の衣通姫に似ていたのではないだろうか。衣通姫と同じく美貌と歌で時の天皇の心を捉えながら嫉妬で遠ざけられたのだとしたら、小町の相手は、時の天皇の仁明天皇ではないだろうか。

小町の「古今和歌集」の歌十八首の内十四首が恋歌の部に収録され、内六首が夢の歌である。

・・思ひつつ　寝ればや人の　見えつらむ　夢と知りせば　さめざらましを

恋する人を夢に見たのはその人を思いながら寝たからだろうか、夢だと知っていたら覚めないようにしたのに。

・・うつつには　さもこそあらめ　夢にさへ　人めをもると　見るがわびしき

現実には人目を気にして避けるようにしてしまうが、夢の中でさえ他人の目を気にしている、そんな夢を見ることのなんと侘しいことかと、やんごとなき人への叶わぬ思いが切々と伝わってくる。

容易には逢えない、想いを寄せることすらはばかる身分の違うやんごとなき高貴な人、を小町の周りに探してみると、更衣として仕える仁明天皇しか見当たらない。

仁明天皇は小町の十六才年上、天皇の居室や寝所に立ち入れる更衣とはいえ、田舎郡司の娘という身分の壁が大きく、互いに恋心を抱きながら、文と歌の世界でのみ心を通わせる関係だったのかもしれない。

仁明天皇が崩御された後、文徳天皇の更衣となるが、文徳天皇が在位八年で急逝すると、まもなく小町は郷里の秋田に帰ってしまう。これまで疱瘡を患って帰郷したと考えていたが、小町は恋い慕う仁明天皇と息子の文徳天皇の相次ぐ崩御に、その喪失感から出家する心境で帰郷した、というのが真相だったのではないだろうか。

（六）仁明天皇と僧正遍照とシラノ

小町が仕えた仁明天皇は、桓武天皇の孫で御陵（深草陵）の在所から深草帝と呼ばれた。そして奇しくも、小町の許に通い続けた百夜通いの主役も深草少将である。

深草少将に比定される僧正遍照は、桓武天皇の孫で俗名を良岑宗貞、仁明天皇に寵愛されて蔵人頭となり、仁明天皇が崩御すると初七日に比叡山で出家したという。

小町が石上寺にお参りした折、遍照侍りと聞き「岩の

上に旅寝をすればいと寒し、苔の衣を我に貸さなむ」と贈り遍照が「世をそむく苔の衣はただ一重、貸さねば疎しいざ二人寝む」と返した贈答歌が後撰和歌集にある。際どい歌のようでも洒落た歌のようでもあるが、仁明天皇の更衣と蔵人頭、昵懇の仲だったことは間違いない。

もしかしたら、小町の許に仁明天皇（深草帝）の文使いをするうち、小町に横恋慕するようになり、やがて深草少将の名で小町の許に通うようになったのだろうか。

恋文の使いで思い浮かぶのが、劇作家エドモン・ロスタンの戯曲「シラノ・ド・ベルジュラック」である。

大きく醜い鼻に悩む剣豪シラノは「考えまいと思うそばから、あの命取りの美しさ」と密かに想いを寄せている従妹のロクサアヌから、シラノの友人で美男のクリスチャンに、自分に手紙をくれるように伝言を頼まれる。

クリスチャンも彼女に一目惚れしていたが、自分に恋文の才がなく、シラノに恋文の代作を頼むと、シラノがロクサアヌ宛てに書いておいた恋文を与えて、自分で書いたようにロクサアヌに送らせる。

クリスチャンは、ロクサアヌに自力で恋心を打ち明けようとするが、凡庸な言葉しか出ず、幻滅するロクサアヌに、シラノがクリスチャンの代役となって、露台の下から美しい愛の言葉を告げ、彼女はその言葉に陶酔してゆく。そしてロクサアヌとクリスチャンは結婚する。

シラノとクリスチャンは戦場に送られるが、敵の攻撃を前にして、クリスチャンは、今生の別れの心を美しい文に書いて欲しいとシラノに頼み、シラノが密かに書いて置いた手紙を渡すが、その手紙に涙のシミがあり、二人が同じ女性を愛していたことを知る。

ロクサアヌがクリスチャンに会いに戦場まで来るが、シラノは、クリスチャンになり替わって内緒で戦場から毎日ロクサアヌに恋文を送り続けていたことをクリスチャンに告げる。美しい手紙に夢中になったから来たと話す彼女が、愛するのが自分ではなく恋文の主だと知って絶望したクリスチャンは、前線に飛び出して戦死する。

シラノは修道院に居るロクサアヌを十四年も週報を語りに通っていたが、落下した木材に重傷を負ったシラノは、ロクサアヌがいつか読ませると言っていたクリスチャンの恋文を見せてもらい、字も読めない夕暮に手紙を諳んじる瀕死のシラノの声にロクサアヌは全てを知る。

小町の心を捉えた仁明天皇の文と歌が、実は蔵人頭の宗貞（遍照）の代作だったとしたら、あなたは仁明天皇（深草帝）ではない、と通い続ける遍照（深草少将）のひたむきな恋心を避け続け、仁明天皇への叶わぬ想いに一生を捧げて貞節を守り通した小町が、百夜通いの深草少将の献身的な非業の死で真の愛を知ったのだとしたら、遍照はまさに和製シラノではないか。

〈2〉小野小町ゆかりの里を散策

東北の夏祭りの一つに、八月五日から七日まで小野小町のふるさと秋田県湯沢市で「七夕絵どうろうまつり」が行われる。祭りの中日に湯沢入りして小野小町のゆかりの里を散策、その夜の七夕絵どうろう祭を楽しみ、翌日の湯沢七夕健康マラソン大会を走る旅程を組んだ。

埼玉を早朝七時に出立、山形新幹線の終点の新庄駅から奥羽本線各駅停車で湯沢手前の横堀駅に着いたのは正午過ぎ、小野小町生誕の地についにやって来た。

五時間の乗車はさすがに遠い。一二〇〇年前に京の貴人深草少将が、道の奥のこの地まで片恋慕の小町を追ってはるばるやって来たとは、そのうえ逢うこと叶わず、百夜通いを求める小町の許に通い続けた深草少将の思いはいかばかりだったろう。

横堀駅から十五分ほど、林に囲まれた朱塗りの「小町堂」が見えてきた。芍薬塚を祀っていた小町神社が老朽化して建てられたという。平等院鳳凰堂のミニチュア版のようで、自動音声テープが流れ、小町伝説の紹介と芍薬の花香る六月に地元の美女（七小町）による王朝風式典が優雅に行われる「小町まつり」をガイドしていた。

音声ガイドは、小町の帰郷理由について故郷恋しさのあまり、と言っていたが、恋い慕っていた仁明天皇の崩御で喪失感と虚脱感に襲われ生きる望みを失ったのではないか、それとも疱瘡に侵されて自分の容貌に自信を失い生まれ故郷に逃避してきたのではないか、境内に腰かけてコンビニで買ってきたおにぎりを頬張りながら、しばし小町の帰省事情に思いを巡らせた。

秋田県湯沢市　小町堂



その先の小野氏の菩提寺といわれる「向野寺」に向かった。奥羽本線の踏切を渡ると、墓地の奥に朽ちかけた茅葺屋根をトタン板で覆った民家風の佇まいである。

小町の父小野良実が創建、古くは小野寺と呼ばれ、洪水などで雄物川向うに移転して向野寺に改称、深草少将が亡くなると小町は供養の地蔵菩薩を安置したという。

曇りガラス戸の隙間から覗いた祭壇に、小町の晩年の作と伝わる木像の自像が朧げに見えていたようだ。

いったん小町堂に戻り、深草少将が住まったといわれる「長鮮寺跡」に向かった。四方を山に囲まれた盆地の水田地帯をひたすら東側の山裾に向かったが、気温が三〇度を超えて強い陽差しが降り注いでいた。

国道十三号バイパスを潜るとまもなく「御返事」という道標があった。橋の袂に住む姥に小町への恋文を託してここで返事を待ったというが、小町から来るはずもない返事を待ち続ける少将の哀れな姿が浮かんできた。

田圃道の道端にワラ人形の「鹿島様」と呼ばれる悪疫除け道祖神が立っていた。太鼓を打ち鳴らして集落の家々を練り歩いたといい、ナマハゲの原型であろうか。

ようやく「桐善寺」に辿り着いたのは午後二時半を回っていた。山裾の少し高台で、盆地の底にある小町の館が遥かに見下ろせる好位置である。小町を追って東下りした深草少将は、近くの長鮮寺に仮住まいしたという。

長鮮寺跡は、桐善寺の裏手右の沢沿いに五分程の南斜面で、雑草が生い茂っているだけ、案内板に「小町は少将の供養の大きな板碑を建てましたが、その後近くの桐善寺の境内に移されました」とあった。

少将はここ長鮮寺から百夜通いをしたのだろう。毎朝、庭先から小町の館を遠望しては今日の恋文を認め、従者に芍薬の苗を用意させ、夕刻を待って西の方角になる小町の館に向かう少将の後ろ姿を思い浮かべてみた。

桐善寺に戻り、長鮮寺跡から移された板碑を見つけた。梵字は摩耗して読めなかったが、小町に想いを寄せて非業の死を遂げた深草少将の安寧を祈り合掌した。

深草少将の仮住いの長鮮寺跡から、小町の館といわれる「桐の木田城跡」まで約二キロの道のり、少将が小町の許に通ったであろう道筋を、実際に歩いてみた。三〇度を超す猛暑の陽射しを浴び、定かでない田圃道を歩きながら、少将の叶わぬ一途な想いに感情移入していた。

盆地の緩やかな傾斜で、往路は下り坂である。百日まであと幾日と指折り数えて、百日を待たず今日にでも逢ってくれるかもしれないと淡い期待を抱きながら、足取り軽く小町の館もどんどん近くなっていっただろう。

しかし帰路は、長い上り坂になる。一縷の望みも裏切られ、小町に逢うこと叶わず、閉じられた門扉の前から引き返す帰り道は、なお一層重く感じられたに違いない。

少将の百夜通いは、今日のような猛暑の日、雨風の強い日、もしかしたら湯沢特有の豪雪の日があったかもしれない。約二キロの同じ田圃道を虚しく通い続ける少将の心もボロボロに蝕まれていたに違いない。

最後となったあの日の少将の様相が浮かんできた。百夜通いの満願叶う日を迎えた少将は、擦り切れた衣服を正し、髪を梳い、烏帽子を被り、薄紅を引き、香を焚き染めてはいるが、目は窪み、頬はこけ、足元おぼつかず、憔悴しきった風貌は、さすがに隠せなかったろう。

あと一時もすれば、これまで閉ざされていた門扉が開かれて、小町の優しい微笑みと甘い香りが迎え入れてくれる光景を思い描きながら、朝からの悪天候に思い止まらせようとする従者の制止を振り切って、風雨強まる中を小町の館に向かう少将の後ろ姿が浮かんでくる。

そんな少将を迎える小町の思いはいかばかりだったろう。少将の思い浮かべる小町の笑顔が、少将の独りよがりで幻影に過ぎないことを最後まで知る由もない。

小町の館といわれる桐の木田城跡は、往路では気づかなかったが、目印になる大きな桐の木の樹形を持参してきた写真と照合してようやく見つけ出した。ここが絶世の美人で才色兼備な小町の生まれ育った館跡なのか。

深草少将の住んでいた長鮮寺あたりの山並みを振り返ったが、遥か遠くである。小町は、垣根越しに、深草少将の肩を落として重い足取りで長鮮寺に戻っていく後ろ姿を覗き見ていたのだろうか。

最後に二人が眠る「二ツ森」に向かった。古墳のような、ひょうたん形の二つの丘に登ると石の祠に石像が無造作に収められていた。小町は哀れな少将をここに埋葬したと言われているが、少将の不慮の死で、初めてその想いの確かさを知ったに違いない。そして少将への罪悪感も抱いたに違いない。二人の永遠の安息を祈って合掌、長堀駅に戻ったのは午後四時近くになっていた。

〈3〉湯沢七夕絵どうろうまつり

湯沢駅前ホテルにチェックイン、ベッドに倒れ込んで小町の里を散策した疲れを癒して、午後七時に「湯沢七夕絵どうろうまつり」見物に夜の街へ出た。

今日（八月六日）は、七夕絵燈籠祭りの中日である。湯沢市街の中心を十字に交わる商店街通りは、七夕飾りの短冊と大小色々な美人画の絵灯籠が飾られて、沿道に縁日の露店が軒を並べて大変な賑わいである。

湯沢市の絵灯籠は、京の関白鷹司家から湯沢の秋田藩佐竹南家七代義安公に輿入れされた姫君が、あまりの町の静けさに寂しさを感じ、灯籠に絵を描いて京を懐かしんだことが始まりといわれている。

佐竹氏は、源義家の末弟義光の流れ、常陸源氏の嫡流で甲斐の武田源氏と同族、会津蘆名氏と同盟を結び、奥

州の覇権を狙う伊達政宗と対決、秀吉政権下で石田三成と親交を結び、関ヶ原の戦いで、佐竹義宣が会津の上杉景勝と密約を結んでいたとして家康に常陸国から出羽国秋田郡に転減封され、佐竹南家は湯沢城を居城とした。

商店街の大通りに、縦三メートル横四メートルはあろう巨大な和紙の灯籠に描かれた絵模様が幾台も連なり、灯りがともされて、夜空に浮かび上がり、色彩豊かな幻想的な雰囲気に包まれていた。

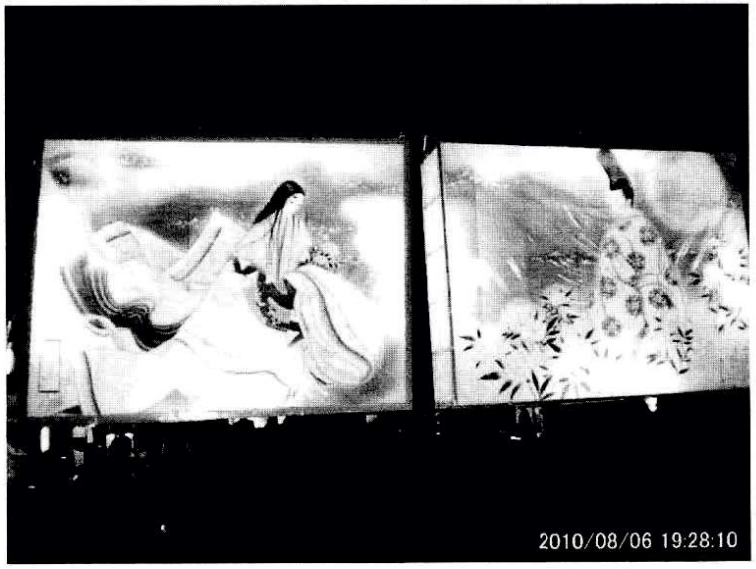
絵燈籠には、日本画風の優美な美人画が多いが、画題は、地元の小野小町や鷹司家姫君だけでなく、浮世絵美人や時代物からアニメまで多岐にわたるジャンルに、老若男女を問わず楽しませてくれる夢の世界である。

私のお気に入りはやはり小町物である。特に「小町幻想」と題された絵燈籠（下段の写真）は、優美な小野小町と深草少将の絵灯篭が道幅一杯に並べられて、二人の妖艶な世界が今日の夏の夜を席捲していた。

添書に小町の歌「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」が書かれてあった。この絵燈篭の作者は、夢に現れた思い人を、百夜通いの深草少将と考えているようだが、私には二つの絵灯篭が小町と仁明天皇の逢瀬のように見えてくる。

帰り道の喧騒な中から映画「戦場のピアニスト」の曲が流れてきた。楽器店前の電子ピアノ生演奏で、私の好きなショパンのノクターン遺作嬰ハ短調をこんなところで聴けるとは思わなかった。小町と深草少将を訪ねた日に相応しい哀愁漂う切ないメロディーに店先にひとり佇んでしばし聴き惚れていた。

七夕絵どうろうまつり　題「小町幻想」



〈4〉湯沢七夕健康マラソン大会

湯沢市は会社時代に仕えた故横手幸助氏の故郷で、旧制湯沢中学の会と称して日本生命の伊藤助成社長とニューヨーク大学の佐藤隆三教授との会食を設営させていただいたこともあり、湯沢市には特別な思いがあった。

昨夜は、幻想的な絵燈籠の余韻に浸りながら、遅くまで小町ゆかりの里巡りの備忘録を書いて寝不足になり、こんな状態で猛暑のマラソンは大丈夫なのかと思っていたが、八時少し前にホテルを出ると、薄曇りのお天気で高原の爽風が心地よく、リラックスできていた。

市役所近くの駐車場は、既に満車近い状態なのに、広い更衣室は、二〇人足らずが寛いで閑散としていた。大会の参加者は総勢で八〇〇人程度、地元の人たちが中心で私のような遠方からの参加者は少ないようである。

参加賞のTシャツの「走」の文字が気に入り、持参した浦和レッズの赤シャツから着替えて、市役所を軽く周回してみた。昨日歩き過ぎて不覚にも作ってしまった右足親指裏のマメの方は、どうにか持ち堪えそうだ。

湯沢の銘水「力水」の湧き水飲み場で走る力を授かり集合場所に向かった。大会のメインレースは一〇キロ走である。総勢二七〇余人が花火を合図にスタートした。

気温三〇度、湿度七〇%ながら赤や黄の短冊が風にそよぐ七夕飾りの駅前商店街通りの下り坂を快調である。

まもなく左折して大町商店街に入ると、昨夜道一杯に掲げられていた絵灯籠は、我々のために一時取り外され、和洋風の建物が立ち並ぶ幅広い道路は、七夕飾りの色鮮やかな短冊に彩られて文字通りの七夕マラソンである。

最初の二キロが一〇分丁度は、距離の測定が間違っているのではと疑うほどの速いタイムだった。

市街地を抜けると田園風景が広がり、遥か右前方に昨日散策した小町の里の山並みが見えてきた。こんな東北の山里に宮廷を席捲する絶世の才女が生まれた文化的素地があったとは俄かには信じられない。

やがて青空が広がり三〇度を超えていたが、高原の爽やかな風が心地良い。一面に広がる水田はアキタコマチなのだろう。稲穂が膨らんで収穫もまもなくのようだ。

第一折返しの四・五キロ地点で二四分二一秒、キロ五分二五秒は、一〇キロ五四分の好記録が期待できそうだと思ったが、折返してから状況は一変した。

右足のマメが気になり始め、キックするのが怖くなり地を這うような走りになっていた。さっきまで気にしなかった高温多湿の熱風が体力を消耗させてきた。折返し地点で後続ランナーが少ないこともショックだった。

ペースがキロ六分台に落ちて弱気になっていた。どうしたんだ、東京マラソンで四二キロを走った人が、一〇キロも半分で根を上げるとは情けないぞ、頑張れ。

給水所でコップの水を頭に掛けていると、おばちゃんが柄杓で背中にドバッと水を掛けてきた。虚を突かれてヒャーと悲鳴を上げながら「ありがとお」とお道化た仕草で笑顔が返せた。こんな交歓があるから頑張れる。

次の給水所で、水を含ませたスポンジをもらい、顔と腕と足、最後は頭にスポンジをあてがい、残った水を絞って係員に「ありがとう」と手渡しで返した。いつもは路肩にポンと放り投げるのだが、こんな所作をしている自分に驚いた。それほどにその時の給水はありがたく嬉しく、猛暑の中を立ち通しで給水対応に勤しむ係員に感謝の気持ちを形で伝えたかった。

沿道の民家で、家からホースを引いてランナーに冷やしの水かけをしているおばさんがいた。前のランナーは濡れないように避けて走っていったが、私は自分から「ありがとお」とホースの水かけに走り込んで、頭からずぶ濡れになった。シャツは熱暑ですぐに乾いた。

七キロ付近から、すぐ後ろを走る女性が沿道の声援に応える明るい挨拶が気になってきた。一人一人に「ありがと、ありがと」と連呼して全く手抜きがない。

負けじと沿道の応援に応えてみたが、とても彼女には敵わない。顔見知りの友人知人の声援に応えているのかもしれないが、苦しい走りの中で大きな声を出し続けることはほとんど苦痛に等しく、彼女には脱帽である。

アップダウンの繰り返しと三〇度を超す猛暑と七〇%を超す湿度に、もう無理しなくていいよと悪魔が耳元で囁いてきた。ベストを尽くす信条との葛藤が始まった。

追い抜かれた赤シャツが前方に見えてきた。ターゲットに定めて追走した。目標が出来ると頑張れてきた。

七夕飾りの揺れる商店街に戻って来ると、沿道の声援は最高潮に達していた。あと一キロの標識に、いつもの自主トレコースの見沼用水堀を思い浮かべ、今あの辺を走っているな、まだまだ頑張れるはずだ、頑張れ、頑張れ、自分を叱咤し鼓舞した。

左折して市役所前のゴールに向かう上り坂に入り、最後の力を振り絞って赤シャツに追いすがるようにゴールに飛び込んだ。タイムは五八分三一秒。四回の給水タイムロスもこの暑さではやむをえまい。足のマメも小町の里を楽しく散策したのだから、良しとしよう。猛暑の中を歩くことなく六〇分切りした自分を褒めてやろう。

ゴール直後の冷たいスイカのサービスに救われた心地である。ゴール近くの野外シャワー場でシャツの上からずぶ濡れになったが、上半身裸になって列に並び直し、赤シャツの男性と童心に返ってはしゃぎあい、互いの健闘を讃え合った。後日郵送されてきたゴールシーンの写真入り完走証に、六〇才以上完走五六人中三八位、来年もまたお会いしましょう、と添書があった。

高山右近（十二）

・・・信仰に生きた生涯・・・

鍋屋次郎

生命（いのち）の言葉

高山右近は新しく教会に来る信徒に、キリスト教の本質をどのような切り口からどのように語るべきかを幾日も幾日も考えていた。まだ自ら最終決定まで至っていない日の就寝前、このことを神に祈り求めていた。直後、まだ祈りの姿勢を崩す前に、右近が教会で新しい信徒に語る内容と範囲が、全体像として一度に右近の頭に閃いた。その瞬間、右近は「これだ！」とうめくと同時にその閃きの内容に驚き、そのまま自室に行き、閃いた全体像を書き出して何度も読み返した。右近が何度も何度も考え求めていたことではあるが、その内容の全体像が瞬間的に閃いたことに神の意を強く感じた。

その内容はローマカトリック教会が設立時点から大切にしている「主祷文の祈り」と「使徒信経」を、信徒にその全体像を示しながら個別信仰用語も一語一句を丁寧に解説していくことであった。

「主祷文の祈り」の全文は左の通りである。

「天にまします我らの父よ
み名の貴（とうと）まれんことを。
み旨（むね）の天に行われるごとく、地にもおこなわれんことを。
我らの日用の糧（かて）を今日我らに與え給え。
我らが人に赦（ゆる）すごとく、我らの罪を赦し給え。
我らを試みに引き給わざれ。我らを悪より救い給え。
アーメン」（注 ①）

「使徒信経」の全文は左の通りである。

「天地の創造主、全能の父である神を信じます。
父のひとり子、聖霊の不思議な力によって身ごもった
乙女マリアから生まれ、
ポンテオ・ピラトの治下で、責め苦に耐えられ、十字
架に掛けられ、
死んで葬られ、大地の底に降りて行かれ、三日後に復
活して天へ昇られた
全能の神、父の右に座り給う主イエス・キリストを信
じます。
それより以降キリストは生者・死者の別なく
人々を正しく導くために、天から下られるのである。
聖霊を信じ、聖カトリック教会、聖徒の交わり
罪の赦し、身体の復活、永遠の命を信じます。
アーメン」（注　②）

「新しい教会で新しい信徒に、この二つの祈りの中にキリスト教の教えの全体像が短くまとめられていることを話しながら、その中の一言一句ずつを詳しく丁寧に説明する。新しい信徒に、キリスト教の教えの全体像を正しく理解してもらうにはこの方法しかない」

これを行うことが神の啓示であり、右近の語る内容は神から与えられた生命（いのち）の言葉と右近は確信し神に感謝の祈りをささげた。

そして更に時間的に余裕があるときには、「十戒」を一戒ずつ信徒の守るべき基本事項として教え、更に日常生活で守らなければならないこととして「七つの大罪」「慈悲の行い・・身体に関する七つの行い・・精神に関する七つの行い」（注　③）等も話していくこととした。

注　①②
「主祷文の祈り」は、イエス・キリストが、弟子たちに「祈るときにはこのように祈りなさい」と直接教えた祈りで、教会では最初から大切にしています。どちりなキリシタン」十八頁から引用）
（「使徒信教」は、イエス・キリストの信徒たちが聖霊のお導きによって一か所に集まり、イエス・キリストのお口より直接お聞きした内容を文章にまとめたものです。「どちりなキリシタン七十六頁以下引用」

注　③
「十戒」「七つの大罪」「慈悲の行い」はどちりなキリシタンから引用。

右近が次に行ったことは、教会で来会者に与える教本造りである。
「主祷文の祈り」と「使徒信経」はイエズス会バテレン

が、日本でのキリスト教宣教の教本として長年かかって作成した「どちりなキリシタン」に詳しく記載されており、それを右近がバテレンの指導を得て日本語に翻訳したものがあるので、それの必要ヵ所を転写して教本として使うこととした。

その為には、妻、弟、娘ルチア、小姓三名の六人で、自分たちの分以外に一人一日三部を目標に、三日間で「主祷文の祈り」と「使徒信経」各五十部転写するように指示した。彼らも何度も転写するうちに覚えてしまう効果も期待できる。

高山家の女中三人と父の付け人であった浅香与平には、ミサに毎回必ず出席して、右近の話を聞き、キリスト教のことを学ぶように指示した。そして、教会に来た人が何か困っていれば、手伝えることは手伝うことができるようになることも依頼した。

新たな教会でのミサ開始は十月四日とし、それ以後は、右近の私邸で今までやっていた通り七日目ごとにミサを行なうこととした。教会での説教は右近が担当し、ミサで行なう聖体拝領（注　④）と信徒となって信仰を告白する洗礼式は司祭が来てから行うこととし、それまでは洗礼希望者を募っておくこととした。ただし、右近の説教に対する質問と教会の見学は、「ミサを行わない日」に自由にできるようにすることとした。

注　④
イエス・キリストと弟子たちとの最後の晩餐の席上でイエス・キリストがこのようにされた。
「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これは私の体である」。また、盃を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この盃から飲みなさい。これは罪が赦されるように、多くの人のために流される私の血である」（新約聖書マタイによる福音書二十六節～二十八節引用）これを「聖体拝領」と言い、今も教会の大事な儀式として続けられている。

教会の礼拝堂は、前面にミサに使用する司祭用の大きい目の机と予備のやや小さな机を置き、信徒用の記帳台つきの椅子席は五人掛けの横長椅子二十脚を司祭席に向って左右に十脚ずつ並べ、まだ左右と後ろに余裕があるので、最大二百人は収容できる大きさになっていた。

十月四日の教会でのミサ初日は、現前田家当主で金沢城主の前田利長が家臣たちに「高山右近の話は為になる話だから、教会へ行って聞いて見たらどうか。キリシタンになれ、と言っているのではないから誤解しないよう

に」と話してくれたこともあって、十月四日教会初日の前田家家臣出席者は二十人余りあり、横山家老の子息は引き続き出席している。一般領民も右近自邸集会からの続きもあって、初日出席者三十人余りを数えた。

右近の説明は、「主祷文の祈り」の説明で、その中のキリスト教用語、例えば「聖霊」などの「語句」については出席者の反応を見ながらわかりやすく説明していた。そのようなキリスト教用語が「主祷文の祈り」一行の中にいくつもある場合もあって、説明には思ったよりも時間がかかった。初回が終って右近自邸の集会に最初からきている横山康玄三人組に感想を聞くと、「用語などが個別・具体的に理解できて、この方が分かりやすい」と感想を言ってくれた。

教会を開いて四か月後の翌年慶長七年（一六〇二）一月末に、オルガンチーノ師は司祭一人を金沢教会に送り込んでくれた。イエズス会は人繰りが苦しく、長期間の金沢派遣は無理で、当面半年程度の駐在と言うことであった。例え半年であっても右近にとってはこれほど有難いことはない。早速教会でのミサ、説教、洗礼、聖体拝受等の司式は全ては司祭にお願いした。教勢は益に拡張し、二月に洗礼を受けた信徒は、前田家家臣を含めて九十人に上った。

右近はこの司祭駐在を好機と捉え、右近の知行地の能登に教会を作ることとした。用地は既に取得済みで設計図面も右近が作成済みであった。積雪が解ける前から現地での準備を始めた。右近は金沢教会の建築を担当した富田一機を伴って五日間能登に行き、規模はあまり大きくはないが、百人くらいは入ることのできる教会を二か所作って、能登駐在として弟に任せるようにした。五か月後の七月末には能登の二か所に教会を開くことができた。

前田家が徳川総本家と縁戚を結ぶ

前田家当主利長は、男子がなかったので利家の四男利常を利長の後継に定め（この時点で名前を利光に代えた）、城内で着々と準備を進めていた。

城主利長は、徳川家康の側近へ贈物を送るなどきめ細かな配慮を続け、秀忠次女珠姫の前田家次期当主利光の奥方としてのお輿入れをお願いしていた。秀忠の了解を得れば、まだ九歳の利光を伴って、江戸に挨拶に伺うことも伝えて返事を待っていた。

慶長六年（一六〇一）弥生三月、側近から、将軍秀忠（家康存命中に将軍継承）も基本的には了解したので、挨拶かたがた相談に江戸に出てくるように、との連絡があった。そこで利光の顔見世も兼ねて挨拶に江戸に出かけた。

前田利長は、徳川との閨閥を深めることで前田家の永

続的安全を考えていた。一方徳川側でも、前田家は徳川に次いで二番目の百二十万石の大大名であり、江戸での徳川体制構築には前田家との紐帯強化も必要と考えていた。

この縁談が実現し、慶長六年（一六〇一）秋前田利光と秀忠次女珠姫との結納が交わされ、翌慶長七年（一六〇二）玉姫が金沢に降り、利光と結婚した。この年玉姫は三歳、利光は十歳であった。

この結婚を契機に、前田家外交路線は今までの「やや徳川寄り路線」から名実共に「親徳川路線」に移っていった。

右近はこの前田家の「閨閥を要（かなめ）とした親徳川路線」を、徳川体制の下での、「利家のいない前田家の安全を考えた選択」としての一つの方策かと静かに眺めていた。

内藤如安（内藤飛騨守忠俊）　加賀へ

慶長八年（一六〇三）五月、恒例の城主利長、横山家老、右近の三人の打ち合わせが行われ、城主利長から、「内藤如安が前田家の客将としてお世話になりたい」との手紙が来ている。利長が了解すればすぐにでも挨拶に来たいと言っていることが、利長からその日の議案として出された。

内藤如安はキリシタンであり、小西家の重臣であったこと。朝鮮の役では、現地で早く和議を結び停戦を目論んでいる小西行長の特使として、明の北京まで行き交渉をしてきた有能な士であること。その後の関ケ原の戦いで小西家は敗れ、内藤如安は有馬家の斡旋により肥後の加藤清正の客将として仕えたが、清正から「キリシタン棄教」を命じられた。そこで内藤如安は「前田家に客将として仕え乍ら、高山右近のキリスト教宣教のお手伝いをすることはできないか」と考えてこの依頼になっていた。

右近は今迄内密にしていたが、事前に内藤如安から「自分も前田家の客将になれないか。その上で高山右近殿のキリシタン宣教に協力したい」との問い合わせが来ていた。右近としては内藤如安を、前田家の客将として推薦する必要性も理由もないので、前田利長宛に「客将としてお仕えさせていただくことはできないか。禄は一切お任せする。拙者もキリシタンであるので、高山右近殿にも協力できる」との簡単なお願い状を出すように奨めていた。右近からはこの経緯は一切利長には話していない。このことを右近が主導すると、前田家の中で「右近が人集めをして勢力拡張を考えている」などと、考えてもいない噂が立つ危険性もあるので右近としては細心の用心をしていた。

そこに利長からこの議案が出て意見を求められたので「内藤如安はご高承の通り小西家の重臣として朝鮮の

役では明迄和平交渉に遣わされた傑物。前田家のお役に立ちうる人物と思います。また、キリシタンとも聞いているので、内藤氏に時間があって、殿のお許しがあれば、教会の方にも協力していただければと思う」

と答え、横山家老も異議なく内藤如安の前田家客将の受入れが決まった。

二か月後、内藤如安は家族で加賀へやってきた。利長は横山家老、右近と同席で内藤如安に面談。その場で禄高四千石の客将として決まり、住まいは既に右近邸から少し北へ入った屋敷が用意されていた。既にその屋敷には、一通りの必要家具・寝具類は用意されており、手荷物のみ置いて右近邸に挨拶に来た。右近は教会建設から現在に至るまでの経緯を簡単に話した後教会に向かった。

内藤如安は、教会の立派さに驚き、右近が客将としての立場で、よく絶好の場所にこのような教会を建築出来たと驚きと共に絶賛していた。

教会では、右近は「信徒教育」として実行している連続講話の内容を話し、早速家族で次回のミサに参加し、終わった時に出席者皆さんに紹介し、内藤氏からも挨拶してもらうこととした。また、右近は

「自分の考えで教会運営をしているので、教会を眺めながら、気がついたところは意見として何かと発言してくれるよう」

お願いした。

娘ルチアの結婚

慶長八年（一六〇三）九月、金沢教会設立から二年を経過し、前田家家臣と領民からの信徒も増え、誰に対しても謙虚な右近の姿は、城内からも、地域からも、信頼されていた。

教会のミサに出席する人員は一日当たり百人を超すときもあった。慶長六年（一六〇一）に八カ月司祭が駐在している間に、洗礼を受けた人数だけでも二百人を超えていた。

そのように過ごしていた慶長八年（一六〇三）九月二十日午前、夏の暑さがようやく収まり、過ごしやすくなった秋の気配の中を、前田家筆頭家老の横山家老が突然高山家にやってきた。

お互いに一通りの挨拶の後、横山家老は

「今日お伺いしたのは、突然で申し訳ありませんが、お宅のお嬢様ルチアさんを、我が家の息子康玄の嫁に頂きたくお願いに上がりました。息子康玄はお宅でキリスト教説明会を開催したときから、また、教会ができてからも、一回も休みことなくミサに出席を続けています」

右近が「何事を言い出すのか」と驚いた表情で横山家老を見つめていると。続けて

「突然のことで驚かれたことと思います。息子も二十三歳になりますので、家の中でも、ぼつぼつ嫁をと話しておりましたところ、康玄の方からお宅のお嬢様の話が出て、親としては賛成するもしないも高山右近様のご令嬢であればぜひお願いして、お許しいただいて我が家の嫁に来ていただこう、と話しが家庭内で進んだ次第です。というわけですのでお願いに上がりました」

ここまで聞いた右近は

「いやー驚きました。そのようなことで横山家老様が拙宅へ直接お越しになられるとは。ご承知の通り拙宅はキリスト教徒でルチアも洗礼も受けたキリスト教徒です。横山様は前田家の歴代筆頭家老職のお家柄にあり、ご子息康玄様は横山家の御嫡男です。いずれお父上の後を継いで、前田家になくてはならないご家老になられる御身分です。熱心に毎回教会に足を運んで下さっているのは私ども一同感謝しています」

一息ついて

「ご承知のことですが、我が家は豊臣秀吉様がバテレンは全員国外退去、右近はキリシタンを捨てろ、と命じられて、右近はキリシタン信仰を守るために、明石十二万石をそっくりお返しして、秀吉様に逆らって咎を受けて浪人になりました。その咎は既にお許しいただいたものの、そのような経緯で現在に至っています。このような家の娘では、横山様のような、押しも押されもしない前田家百二十万石の筆頭家老の家格のご嫡男の嫁は、とても釣り合いが取れませんし、ましてキリシタンの家からキリシタンの娘を嫁にするなどはあり得ないことではないでしょうか」

ここまで言ってお茶に口を付けて横山家老を見ると

「今高山様の仰られることは全て考えた上で参りました。高山様には終生この加賀でお暮しになられるものと思っております。また、高山様のご人格はこの加賀で尊敬していない人はいないと思います。そのようなご家庭に育ったお嬢様であれば、人として間違いはない娘様と確信しています。高山様が秀吉様からキリシタンをやめないことを理由に追放され、既に許されたことも充分存じております。その上でお願いに参りました」

「お話の趣旨は分かりましたが、前田家筆頭家老の御嫡男の嫁となれば、当然城主であられる利長様のご了解が必要と思います。前田家お殿様としてはこの話はお困りになられるのではないですか」

『実は昨日お城に伺い、お殿様にお目に掛かって参りました。そのとき、お殿様は、「ホー」と仰って、続けて「この話はお前の所の康玄が持ち出してきたのであろう」

と仰られて

「康玄は教会に熱心に通っているからな。高山右近の娘とはいいところに目を付けた。儂は筆頭家老の嫡男の嫁

がキリシタンであろうと構わない。秀吉様が亡くなって、どこのキリシタンも息を吹き返してきている。家康がキリシタンに対して今後どう出るかは今のところ全く分からない。キリシタンは決して悪い宗教ではない。儂もひと頃キリシタンになろうと思ったこともある。それは右近が知っている。この話は親の横山家老が了解すればそれでいいのではないか」

と殿様は仰られて、ご理解は頂いています。ご安心ください』

右近は横山家老のこの話に、ことがそこまで進んでるのか、と唖然とした気持ちで聴いていたが、そうなると断る理由がない。右近は、これからの徳川政権がキリシタンに対してどのような対応をしてくるか、当面現時点では、南蛮貿易を独占的に手に入れるまではキリシタン対応は現状維持と考える。今後キリシタンの禁教令もあり得るかどうかは、今は分らない。そのような時は状況に応じて別途考えることとする。と、そこまで考えた右近は

「横山様、そこまで話が進んでいるとは存じませんでした。これは高山家の問題でもあり、娘ルチアの問題でもあります。ほかでもない横山様からのお話でありますので、今晩、妻とルチアと三人で話し合うので、明日午前中に、横山様のご都合がよろしければ当方から返事を持ってご挨拶に伺いますが、ご都合はいかがでしょうか」

「わかりました。お忙しいところ申し訳ありません。吉報をお待ちしています。突然のお話しでご迷惑をお掛けしました」

と挨拶して帰って行った。

その日の夜、右近は自室に妻とルチアを呼び、昼に横山家老が、横山家として子息康玄の嫁にルチアを迎えたい、これは横山康玄から持ち出した話しだ、と言ってきたことを話した。妻は

「ルチアを何歳だと思っているのですか。まだ十二歳ですよ。もう少し二～三年待てないのでしょうか。先方の方はおいくつですか。ルチア、知っているの？」

と聞くと、ルチアは

「康玄様は、教会に最初から来ています。熱心にキリスト教のことも勉強されています。歳は二十三歳になるのではないですか」

「教会では何かと親しくお話ししているの？」

「必要な要件だけ。それ以外はお話ししたことはありません」

三人での話はいろいろとあったが、ルチアの年齢については当時の婚礼慣行でもあり、前田家のお殿様迄この縁談について既にご存知で、賛成しておられることからも、この話を受けることとした。

右近は三人の話し合いを終えて、一人で自室で思ったことは横山家老のこの縁談の話から、「この加賀ではキリシタンがよそ者、別者といった差別は少なくなってきている」ことを強く感じていた。右近が前田家の家老として戦にも出て戦果を挙げ、城の改修も、城下防衛の惣構えの設置などにも指導的役目を果たしてきたことから、右近を前田家の家老として認めた結果でもある、と感じ、教会での宣教も、よそ者としてでなく、この土地の一員と言う姿勢をはっきりと出してゆくこととした。ただ、今考えてもどうしようもないことではあったが、徳川政権が今後キリシタンについてどのような姿勢を打ち出すかが、ただ一つの不安材料であった。

翌日午前中、右近は横山家を訪問し

「昨日はご足労賜り、娘ルチアについてのこの上ないお話を有難うございました。昨夜、妻とルチアと三人でお申し出の件で話し合いました。お申し出を有難く喜んでお受けいたします。ふつつかな娘ですが宜しくお願いします」

と挨拶し、今後結婚式に至るまで、全て横山家の方式に従うことを話して挨拶を終えた。

二か月後の十一月十日、横山康玄とルチアの結婚式は横山家で行われ、横山家老は結婚式の後、横山家後継者である嫡男の結婚挨拶に、二人を伴って城に登り城主の利長に挨拶した。その後も二人のミサ出席は従来通り続いた。

前田利長　富山城に隠居

利光に徳川秀忠の次女玉姫が輿入れし、利光が秀忠の娘婿となり、家康の孫の婿となったことから、利長は自分が隠居して、利光を前田家当主に早くしたほうが徳川家も嬉ぶであろうと考え、慶長一〇年（一六〇五）六月二十八日富山城に隠居した。

利長はこの年四十四歳と若く、まだ体力的には隠居をする年齢ではなかったが、前田家の老中は横山長知を中心に安定しており、利光は若いが安定した老中を背景として加賀百二十万石の当主として存在できると判断した。また、何かあれば利長自らも忠告はできる。世代交代により徳川秀忠の娘婿が、家康の孫の婿が早くも加賀百二十万石の当主として存在することの方が、必要に応じて徳川家からの支援もあるのではないかと、どこまでも徳川家・前田家の両家の関係を考慮しての隠居であった。

この利長の隠居により、右近の前田家家老としての存在影響力は低下した。利長が城主であったとき、利家の慣行を継続して、利長・横山家老・右近との三者会議が、

家老会議に先立って行われたので、前田家運営に関しても、それなりに右近の意見の影響力もあった。利長が隠居して利光が後継城主となった段階から、従来の利長・横山家老。右近の三者会議は行われず、家老会議では筆頭家老の横山家老の議案提案・採決の後、城主利光の「よしなに」の言葉で終わっていた。そのような状況が続くと、前田家内での右近の存在感も薄くなっていった。富山に隠居した利長は、時折金沢城に来るが、来たときは必ず横山家老と右近を城内に招き、城内の運営状態を聴取するとともに二人の意見を聞いていた。

豪姫　前田家に戻る

前田利家の四女、豪姫は二歳で秀吉の養女となり、長じて天正十六年（一五八六）岡山城主、宇喜多秀家に嫁いだ。関ヶ原の戦いで西軍に加わった宇喜多氏は、八丈島に流刑になった。豪姫は宇喜多家が滅亡後、秀吉の母高台院に仕え、慶長十二年（一六〇七）、前田利長の配慮で加賀前田家に引き取られた。高台院に仕えている間に、内藤如安の妹ジュリアの手引きでキリシタンとなり洗礼を受けていた。

前田家では豪姫に化粧料として千五百石と、右近宅の近くに住まいを提供した。豪姫は利長に依頼して、同時に宇喜多家の一族宇喜多休閑も前田家の客将（禄は千五百石）として前田家に仕えさせてもらった。

豪姫は落ち着くと、高山右近に会って、いろいろとキリシタン信仰のことを教えてもらいたく、下女に右近宅に手紙を持たせた。

右近が開くと、流麗な女文字できちんとした挨拶の後に「いつでもいいからご都合の良い時にキリシタンのことを教えて欲しい。自分は二年前に洗礼を受けて、その後キリシタンの学びも進んでいない」

という趣旨が書かれていた。右近は恐縮して「何はともあれお目に掛かってご希望を伺いたい。教会のミサの日（毎月四、十一、十八、二十五日）以外であれば、ご都合のよろしい時に教会でお目に掛かりたい。」と返書を持たせた。

（続く）

参考文献

完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社
　フォレストブックス
茶の湯の心で聖書を読めば　同右
　高橋敏夫
高山右近　海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近
　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見
　岸野久・村井早苗　雄山閣
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　岩波書店
日本キリシタン史　海老沢有道　塙書房
加賀百万石異聞　高山右近　北国新聞社
どちりなきりしたん　水野　聡訳　能文社
どちりなきりしたん　海老沢有道校註　岩波書店
人身売買・奴隷・拉致の日本史
　渡邊大門　柏書房
悠遠の人　高山右近　塩見弘子　ドン・ボスコ社
小豆島のキリシタンと高山右近の足跡
　小豆島キリシタンの足跡をたどる会　編
金沢での生活―継続する殉教―
　日本カトリック司教協議会　列聖推進委員会
フリー百科事典「ウイキペディア」（Wikipedia）

安芸門徒シルクロード紀行（13）

村上邦治

族・内局幹部に依頼したことは異例であった。後継者については既に簀子と婚儀を挙げた一八九八（明治三一）年から十年目の一九〇七年、弟尊重（光明）を大谷宗家の跡継ぎとして定め養子として入籍させた。正式には一〇（明治四三）年尊重が兄嫁簀子の妹紅子と婚儀を挙げた日、嗣法選定式を行った。夕方からは京阪神の政治・行政の要人および実業界の重鎮や宗教関係者を、本山に招待してお披露目も済ませた。四年前より光瑞の後継者は尊重（浄如光明）と定まっていた。

光瑞は疑獄事件を重く受けとめる弟尊重が新門の立場にありながら法燈を継承しないことを事前に知っており、新法主の選任を親族会と内局幹部に委ねたのであった。

一四日から始まった親族会（連枝会）は前例のない法主・新門同時辞任という緊急事態に、門信徒の皆が納得

七〇　新法主選任

浄土真宗本願寺派第二二代鏡如上人大谷光瑞の唐突な辞職表明は新聞各紙が大きく取り上げ、宗教界にとどまらず一般社会に大きな衝撃を与えた。

五月一四日『東京日日新聞』は大見出しで「大谷光瑞師法主管長辞任」、続いて「さらに爵位を返上す」と伯爵についても辞退することを報じた。新門の「光明師亦襲爵を拝辞して一門新生活に入らん」として、嗣法光明もすべての役職を固辞する意向であることを伝えた。この日から連日辞任に至った経緯、大谷家兄弟の動向、後継者選任会議の様子、疑獄事件の予審見通しなどについて競って掲載した。

光瑞が一四日の朝「後のことを相談してほしい」と親

二八歳の末弟尊由も上がったが、兄光明と同様の理由で辞退した。人望が厚いと評判が高かった三三歳真宗木辺派管長門主木辺孝慈（光瑞実弟大谷尊行）については、その名前すら出なかった。

本願寺は宗家に長子がいない場合には、次期法主として血統の近い者を養子とすることで万一に備えてきた。法主・新門同時辞任というこの度の非常時には、長年周到に用意された仕組みは役に立たなかった。結局皆が受け入れる新法主にはわずかまだ四歳の新門でもない照（光照勝如上人）を、末寺一万寺門徒一千万人を誇る日本最大宗派の法主に選任せざるを得なかった。この決定により戸籍上光瑞の養子に入った光明は養子縁組を取り消し、改めて長男照を光瑞の養子とする手続きがとられた。

法主・新門同時辞任に伴う新法主選任、大谷家・本願寺派の分離問題など重要課題を実質的に決めたのは、連枝からなる親族会であった。元来連枝なるものは平時には何ら必要がないが、大谷家と本派との間に紛擾（ふんじょう）が発生した時には、親族会（連枝会）により決定され、正式な決定機関である本派集会は単に追認するに過ぎないものであった。親族会の頂点に立つのが、法燈を受け継ぐ大谷家当主であり本願寺住職である。合わせ本願寺派管長を兼務することで絶対的支配権を保持する統治構造であった。

できる新法主を選び出すことは容易ではなかった。しかもこの会議に諮り検討されたのは後継者問題だけではなかった。改革派が主張し続けた管長および法主の分離、大谷家のこれからの経済支援問題が委ねられた。

法主・管長分離問題は「分離不可なり」と親族会議で満場一致をもって決定した。改革派が強く要求した完全分離については強硬派の広島選出金尾衆議院議員が国会で文部省を動かしてでもその実現を図ろうとしたが、親族会はこれを「前例無し」として撥ねつけた。

大谷家のこれからの暮らしについては、既に目ぼしい書画骨董・不動産・有価証券などは負債償却のために提供されており、財政支援をする必要があるとした。支援額についてはこれまで年五万円が支出されていたが、内三万円は光瑞が開校した武庫中学の運営費用に充てられていた。中学廃校により濫費をしなければ三万円あれば一応不自由はないとされ、以後年三万円が大谷家に寄付されることになった。

新法主については、現法主の辞任意思が堅固であり、また新門光明師も「兄光瑞伯爵を補佐していた関係上、当然疑獄事件につき引責に必要があることから、固く法灯を辞す」と表明していたので選出は長引いた。会議では最終的に血筋から「ついに四歳の新門光明の長男光照（照）師」を以って後継者に決した。有力候補として

まだ幼少の光照が法主就任ということになれば、大所帯の実質的な管長として管長事務取扱（管長代理）を置くことが必要となった。寺法にはこの規定がなく、一週間後一連の事項を正式に決める臨時集会の開催が予定されており、承認を求めることにした。この前代未聞の管長代理には、連枝の中で最も光瑞に近い奈良吉野本善寺（蓮如創建子実孝が継ぐ大和最有力寺院・飯貝御坊）六雄沢慶が選ばれた。

六雄は第二代広如（光瑞祖父）の跡取りで新門（嗣法）徳如の猶子である。父徳如は広如の養子に入り二一代を継ぐことが定められていたが、広如より三年早く示寂したため光瑞の父光尊（広如五男兄姉全員早世。徳如入籍後誕生）が二一代を継いだ。光瑞にとって異腹の伯父にあたり、連枝の中では姻戚関係が近くまた働き盛りの六十歳ということから決まった。

六雄の管長代理就任は連枝・門信徒を納得させる人選であったが、就任後六雄に愛妾問題が発覚し在任中何かと批判の対象にされた。

三年間集会との軋轢で苦労が続いた六雄が辞任した大正六年、連枝近松尊定が就任するが三か月で没した。そのあとを連枝武田沢心が継いだ。六雄・近松・武田の三家はいずれも河内顕証寺（八代蓮如創建八尾御坊・大谷宗家に準ずる家柄明治より近松姓）の出であり、近松家に繋がる者が大谷宗家の危機を救うことになった。

六月初め正式に四歳照の大谷家家督相続が決定、宮内省から伯爵襲爵が出された。幼主のため本願寺内範により親族会が開かれ、保育補佐する「保傅」に八二歳の長老利井明朗（一八三二―一九一八）が指名され合わせ自身二度目となる執行長に任命された。保傅の下に教育係・養育係を置き、法主としての教育と健やかな成長を助け、無事成人して継承できる体制を敷いた。

利井は摂津常見寺住職で、三十年前より僧侶養成と仏教教育のための専門学校として行信教校を設立運営してきた。一時幼年期光瑞の教育係にもなり、明治一九年には執行長を務めた誰もが認める屈指の長老であった。一連の決定により、六雄管長代理・利井執行長による浄土真宗本願寺派の新体制が整った。

利井内局は六月末発足、執行長は「只交代したというだけでなく、真に革正の思いを以って」仏祖の事務として宗門のため一致して尽力してほしい旨告示した。特に大谷家と本願寺派の関係が明瞭でなかったことにより、疑獄事件を引き起こし巨万の負債を生じたとその原因を指摘した。もし両者の区別が明らかであったならば、本願寺の事務財政の責任は執行所にあり疑獄の手が法主の身辺に及ぶことはなかったとした。そのため大谷家には毎年本願寺財政からすでに決まっていた三万円を二万円

増額して五万円の支給とし、内一万円は負債整理の財源に充てることに改めた。

利井の改革策は疑獄事件が発覚した直後、東京在住の学者・高僧（高楠順次郎・前田慧雲・島地大等ら一九名）らの改革案（執行公選・連枝宗政非関与、集会の宗政監督の責を果たすため特選会衆廃止、財務監督機関設置など）や東京猶興会桁植らの改革派が主張してきたものであった。

法主・管長光瑞の浪費を可能にした現体制から法主管長完全分離の改革案は、この時期見識者から賛同された。しかしいざ着手すると執行部は困難に直面した。完全分離を進めるには、どうしても大谷家や連枝会にこれまで以上に厳しく当たらねばならなかった。光明・尊由ら大谷家、そして連枝たちにとっては光瑞退任の根本原因が分かっていても、一層の倹約を求められることに素直に従えなかった。しかも門信徒の多くは未だ光瑞を筆頭に大谷家を崇拝・信頼しており、浄土真宗本願寺派は大谷家あってこその宗派と信じ切っていた。

大正六年二月利井の厳しい改正寺法案について、定期集会で公然と反旗を翻す研究会と称する者たちで紛糾し、六雄事務取扱は止むを得ず利井執行長を更迭し新執行長を任命した。しかし執行長更迭案は集会で一転否決され、管長代理六雄は三月末引責辞任した。

後任の法主代理は連枝近松尊定が就任、新門徳如に繋がる光瑞に近い連枝であったが就任三か月後五四歳の若さで没した。その後伯父の武田沢心が就任したが、実質管主である管長事務取扱が不祥事や在任中の死亡により安定しなかった。

執行長の利井は、最後まで大谷家と宗派の分離に執念を燃やし続けた。しかし大谷家（光明・尊由）および連枝会の根強い反対に会い、しかも大谷家に味方する末寺門徒が多く支持が得られなかった。高齢のため次第に床に就くことが多くなり、三年務めた大正七年九月辞任二か月後に没した。

光瑞退任後体制が安定するのは、大正一〇年三月末弟大谷尊由が管長事務取扱に任命されてからであった。浄土真宗本願寺派管長は大谷宗家の就任以外、末寺住職・門信徒を納得させることはできなかった。就任するやこれまで中断していた垂示の復活や布教使体制を強化した。また自ら国内主要教区を巡回するとともに、精力的に海外巡教（台湾・朝鮮・ハワイ・米国・カナダ）に出向いた。

大正末期から昭和の初めにかけて決断を要した部落問題・全国水平社への対応、関東大震災による築地本願寺（別院）の再興・被害を受けた末寺の再建整備など帝都教線復興事業、対外国問題（排日移民法・ロシア革命による共産主義対策・ローマ法王庁への外交代表者駐在）

などに対し、宗派をまとめ次々に対処した。法主・管長はやはり大谷宗家の人物しか勤め上げることはできなかった。

一九二七（昭和二）年光照が一六歳で得度、浄土真宗本願寺派第二三代宗主および管長に正式に就任した。未成年でまだ学生であったことから「保摂会」が設置され、その会長に実父光明が就任し、文字通り大谷宗家による法主管長光照・保摂会光明体制が実現した。光瑞退任十三年後のことであった。

光瑞の辞任以降混乱が収まらず、前法主光瑞の存在感は次第に強くなり復職の嘆願が続いた。

辞任の直ぐあと五月二二日からの臨時集会では次の建白が提出された。

一、管長（光瑞）御辞職遊ばさるも、法主として御留職あらせられ度

二、法主は宗祖血脈相承の名門中より選出し、管長は公選とすべき等

三、猊下（光瑞）は御退職遊ばさるも、或時機を竣て御復職あらせられ度

光瑞には少なくとも法主として留まってほしい、との切実な声が末寺の住職から早くも上がった。

翌年二月の定期集会では門信徒が連署した前法主復職請願書が提出され、所轄文部省の意向を伺うことになった。執行が東上、文部省次官と宗教局長に面談したが、賛否については一切語らなかった。政府の意向は「前法主復職は遠慮すべきである」ということは明らかであった。

錦華殿で謹慎中の光瑞が最もつらかったのは、本願寺疑獄事件（業務横領罪・背任被告事件）の予審が終結したときであった。六月三〇日京都地方裁判所は赤松連城・朝倉明宣・上原芳太郎・後藤莞爾・大洲鉄也・芳滝智道六人を業務横領背任罪で公判に付すことを決定した。これにより実質有罪の見通しになった。

七月から身を挺してかばってくれた赤松連城らの本訴が始まった。本山の錦華殿にこもる光瑞は、六人のことを思うと精神的にも落ち込んだ。気晴らしもできず六百五十回忌大法要前の時と同じく神経衰弱に罹った。転地が必要と診断され、錦華殿から出ることになった。しかし前法主の居場所はなく、既に室内には売却され何も残っていない六甲二楽荘に行くことにした。お供は橘・桂本ら僅かの側近であった。

一〇月二二日京都地方裁判所から「執行猶予なし一年半実刑」の判決が申し渡された。ちなみに判決に不服として控訴したものの、翌年二月大審院で上告を棄却され刑が確定した。

地裁判決を見届けて、光瑞は外国への旅に出ることを思案し始めた。

七一　亜細亜放浪

五月中旬光瑞がすべての役職を辞任してからの半年間、世界情勢は激変した。

六月末オーストリアに併合されたバルカン半島のボスニア州サライエヴォで、オーストリア皇太子夫妻がセルビア人に暗殺された。犯人の裁判に際し判事の参加をめぐって両国は合意が図れず、独国の支持を得て被害国オーストリア政府は七月末セルビア政府に対し宣戦を布告した。これをきっかけとしてセルビアには露国が味方し、独・オーストリア・イタリア（三国同盟・同盟国）と英・仏・露（三国協商・連合国）の二派に分かれ、嘗てない大規模な戦争が始まった。

遠く離れた日本の対応は素早かった。八月同盟を結ぶ英国から「独武装商船撃破」のためと限定した参戦要請を受けた。領土拡大の好機とばかり一五日独国に対し最後通牒として中国近海からの艦艇の即時撤退と山東省膠州湾租借地青島の引き渡しを求めた。欧州戦線で戦闘中の独国から返答はなく、日本は二三日宣戦を布告した。

布告と同時に日本海軍第二艦隊が青島基地のある膠州湾を封鎖、また第一艦隊は独巡洋艦を追って南下した。九月初め陸軍は独租借地で東洋艦隊基地のある青島を攻略するため、山東半島に上陸を開始した。第一艦隊は独東洋艦隊を追撃し、一〇月一四日一兵の損失もなく赤道以北の独領南洋諸島（サイパン・パラオ・マーシャル諸島）の占領を完了した。

山東半島北海岸に上陸した青島攻囲軍（久留米第一八師団などで編成）は一〇月六日黄河下流の済南を占領し、山東（膠済）鉄道を支配下に置いた。準備に一カ月をかけ天長節に当たる三一日山頂の独要塞に総攻撃を開始、激しい砲撃を受け苦戦しながらも、ようやく一一月七日陥落させ青島を占領した。

この大戦中唯一の激戦となった青島要塞攻略作戦は苦戦しただけに、日本国民は戦勝気分を高揚させた。八日夕方東京では皇居から同盟国の英国大使館まで、長蛇の提灯行列が行われ青島要塞陥落を祝った。市街には豪華な飾りを付けた花電車が列をなし、また多くの人々の提灯行列により、帝都東京の夜は「光の都」と化したと写真付きで報道した。

一四年七月末からの欧州での大戦は、日本にとってまさに「大正新時代の天祐」（元老井上馨）となった。漁夫の利ともいうべき独国の持つ中国権益（青島・山東鉄道）と南洋諸島を素早く獲得した。

欧州の大戦開戦は、これまで長く不況に喘いでいた産業界を一気に好転させた。交戦国への軍需品輸出が急増

し、また欧州各国の商圏であったアジア諸国への輸出が増大した。株式市場は日露戦争終結後の株価を二〇年ぶりに上回った。その後も急上昇が続き、いわゆる「成金」が出現した。この未曾有の好況は工場で働く労働者の賃金に反映され、天祐を感じ取った。浄土真宗門徒にも余裕が生まれ、不振をかこった本山への三季冥加・三財団寄付・門末冥加金や懇志が増加し、財政の回復を早めた。

日本国中で大戦景気に沸く中、浄土真宗本願寺派法主として思い通りの外遊や別邸生活を送ってきた光瑞一人、半年間の謹慎を続けわびしい生活を余儀なくされた。この精神的苦境から立ち直るため思い切って外遊することを決意した。

これまで中国三度、印度・欧州二度の旅行をしてきた。今度は精神病の転地療法が第一の目的であったが、三八歳で法主辞任というどん底を味わった光瑞が、これからの人生の拠り所を探し求める旅でもあった。

外遊といってもこれまでのような法主としての潤沢な資金を使う道は閉ざされており、先ず経済的な壁に直面した。この時手を差し伸べたのが『国民新聞』社長の徳富蘇峰であった。長年の友人で誇り高い光瑞をよく知る蘇峰は、国民新聞に旅行記を寄稿してもらい原稿料として旅費を出すことにした。文無しの光瑞は蘇峰の掲載料により、どうにか面目を保つことができた。

この寄稿は国民新聞に「放浪漫記」と題され、三〇回近く連載された。形式は光瑞から蘇峰宛に、訪れた先の旅情や政治・地理などを手紙で知らせるもので、光瑞が感じたまま自由に書きとどめたものであった。

一一月末神戸からまず朝鮮釜山に向かった。第一回の冒頭、出発に当たり旅の心境を記した。

「蘇長（蘇東坡・蘇軾）公曰く『蚤（早）知臭腐即神奇。海北天南総是帰。九万里風安税賀。雲鵬今悔不卑飛』小生（光瑞）も二楽山荘の旧廬を出で、海北天南処を定めず、燕鴻と等しく寒暑を追い、怡神適意、逍遥放浪の決心を致し・・・」

宋最高の文豪で知事を歴任した高級官僚でありながら、二度までも理不尽な左遷を味わい死出の直前まで貧困の中流浪の生活を虐げられた唐宋八大家蘇東坡の詩を引用して、旅に出る心境を表した。

釜山から列車で古都慶州・大邱を経由して京城（漢城改称現ソウル）に到着した。この地には一二年京城出張所を格上げした京城別院があり、併合して日本の植民地となった朝鮮における教線拡大の拠点であった。京城市内は内地で相次ぐ暴動発生の報道よりも意外に平穏で、朝鮮民衆の安定した生活振りをみて、総督府（総督寺内正毅陸軍大将後首相）の善政を評価する手紙を送った。

しかし四年前日本は大韓帝国を強引に統合、朝鮮人の

反発は激しく各地で暴動が頻発していた。総督府は憲兵や警察を使い武断政治と言われる厳しい監視・統制を行い、力ずくで民衆を抑え込んできた時期であった。この反動は一九年パリ講和会議における民族自決主義提唱の影響を受けた「三・一独立運動」（独立万歳事件）を引き起こし、八千名の死者を出した。以後独立武装運動が本格化する。

京城から北上平壌・安東・九連城を経て安奉（あんぽう）鉄道を利用し満州に入り、一二月七日終点奉天に着いた。そこから南満州鉄道（通称満鉄）を使い南下、遼東半島付け根の日本の租借地関東州大連・旅順に赴いた。日露戦争により露国から遼東半島南部を勝ち取った日本は、関東州と呼び関東総督府を遼陽から軍事基地の旅順に移した。大連には満鉄の本社があり、邦人が多く住む中国北東部の拠点として関東別院（日露戦争後出張所開設昇格）を設けた。風光明媚な避暑地でもある旅順には、一七年眺望の良い高台に大谷別邸を建て、上海とともに光瑞の中国における生活本拠とした。

五月末上海に行きここを海外活動の本拠地に定めた。この地はシンガポールとともにアジアの交通要所として発展、日本・南洋・西欧・北米航路が早くから開け、各国の租借地が点在し多くの外国人が住む国際都市であった。日本人も商人や金融・運輸に携わる人々が次第に増加し、内陸進出の玄関口になった。本派は六（明治三九）年上海本願寺を設けて、中国中央部の拠点とした。

光瑞は一二月末から印度巡拝の旅に出立し、一五（大正四）年一月セイロンコロンボから印度孟買に行った。そして列車で北上、一次探検時に視察できなかったアグラ・デリー・ラホールの遺跡や博物館を訪問した。その後横断鉄道で東に進み、二度目となるカルカッタを経由ダージリンに向かった。この地は西蔵経研究のため二人の留学生を送り込んだチベットに最も近く、ヒマラヤの高峰が眺望できる高地にあり紅茶栽培の中心地でもあった。この地も一次探検の帰国間際に訪れており、二度目であった。

三月初めカルカッタを出てペナンに上陸した。側近の桂本瑞俊（連枝二次印度探検隊員）に会うためであった。桂本には南洋特にマレー半島における農業の実情を調査させており、その報告を受けた。二人はペナンから半島鉄道でコーランポ（クアラルプール）経由してシンガポールに向かった。シンガポール本願寺を訪問した後、翌日乗船三月二七日香港に着いた。ここでは四月三日に日本総領事が列席する香港本願寺の起工式があり、主催者として臨席した。式後上海に戻り、辞任後半年にわたる最初の朝鮮・中国・印度の旅行を終えた。

旅行中の半年間、日本と中国の関係は様変わりした。日本は世界大戦に強引ともいえる参戦を果たし、一四年一一月独租借地であった青島と膠済（山東）鉄道を支配下に置き、独国の権益を実質継承した。

この一連の強硬策を主導したのは大隈内閣の実力者加藤高明（桂太郎結党の立憲同志会総裁）外務大臣であった。一五年一月加藤外相は軍部・財界から中国に対する要求をまとめ、対華「五号二十一カ条」として袁世凱政府に突き付けた。

具体的には独山東省の権益譲渡・南満内蒙古の優越と旅順大連租借期限の延長・漢冶萍（かんやひょう）煤鉄公司（製鉄・鉄山・炭鉱経営）の日中共同経営・中国沿岸の不割譲・中国政府への政治財政軍事顧問派遣（希望条項）の五項目二一カ条にわたる広範な要求であった。そしてこの要求は秘密保持にすることを求めた。西欧諸国はヨーロッパ各地で戦争を繰り広げ日本への抗議の余裕はなく、また中国国内は袁世凱政府と孫文ら革命党や地方軍閥との内乱状態にあった。まさにこの混乱期に乗じ、中国の主権を無視した侵略政策であった。

秘密保持を求められた袁世凱大総統は日本政府のあまりの横暴に「豚狗の如く、奴隷の如く」あつかうものと激怒、内外に内容を漏らし新聞に報道され始めた。袁世凱は列強諸国の日本への反発を狙ったものであった。

米国は日本が希望項目とした第五項目には反対したが、すでに実質的に支配していた南満州・旅順大連および山東省・青島の独権益継承については反対しなかった。当時すべての強国は帝国主義による領土拡大を進めていたからである。事実米国自身植民地支配打闘を叫ぶフィリピン革命を弾圧、戦争に勝利し二〇世紀初頭から植民地支配をしていた。

中国国内では日本からの不当な要求が報道されるや、各地で一斉に反対運動や排日運動が起きた。五月九日袁世凱大総統は日本の圧力に屈し、日本が撤回した五号を除きすべてを承諾した。中国人はこの日を「国辱記念日」と呼び、以後反日感情を強めた。

この要求自体は既得権益を主張したものであり、当時の帝国主義国からすれは必ずしも厳しいものではなかった。しかし弱みにつけ込んだあからさまの要求を、民衆は受け入れることができなかった。

報道された二月には早くも日本ひいきの東京在住中国人留学生は祖国を思いやり、抗議大会を開催して反対を叫んだ。

直接排日・日貨排斥運動の真っ只中に身を置いた光瑞は「日本人の中では豪富・学者・官吏は欧米人に対し遜色はなしと雖も、下層に至りては衣食に窮するの余、来たりたる流民少なからざるにより、尽く彼等の軽侮を受け、今日に至りては、日本人を侮り日本人を憎み、若しと、法主管長は辞任したものの、海外では依然と同様に振る舞った。また本派内や高官・高級軍人からも常に猊下と呼ばれ、その存在感は全く変わらなかった。

この年一二月上海を出立、再び印度巡拝に出向いた。一六年正月はカルカッタで迎えた。チベットへ派遣していた青木文教に帰国の指示を出しており、この地で会えるものと期待したが、青木の出蔵が遅れたため数か月の差で会えなかった。

今回の主要な目的は本格的な梵語修得と研究のためで、印度北部シムラに八月まで半年間滞在した。仏教経典の研究には必須な知識であり、後に光瑞を囲む梵語研究会での指導にも役に立った。九月上海に戻り、仏租界地の借家で暮らし始めた。近くに孫文の邸宅があり、二人は煩瑣に会い話し合った。

一七年二月第二の人生の柱に考えていた熱帯農業に着手するため南方に渡航した。マレー半島やシンガポールに行き、有望に思えたゴム園事業に乗り出した。

ほぼ同じ行程を二度までも旅したのは、これからの人生をかけるに足る目標を明確にし、確認するためであった。

辞任後上海や大連・旅順を拠点として、対日感情悪化の中、中国の国内事情や日本軍の動向を観察し教線拡大欧米に与えるものあるも日本人に与えざるべしと、是朝野の与論なり」と異なる視点から、反日の原因の一端は流れてきた日本人側にあると伝えた。

中国人の排日運動は第一次世界大戦終結後の一九年一月パリ講和会議から六月ヴェルサイユ条約締結の間、「二十一カ条要求」の撤廃を強く主張し再び高まった。五月四日北京大学生が抗議集会を開き、ついでデモ行進や親日要人宅を襲撃した。これを契機に反日運動は中国全土に拡大、一般民衆も加わり激しい抗議運動を繰り広げた。「五・四運動」と呼ばれるこの運動は反帝国・反封建・軍閥政府打倒運動まで高まった。

上海に帰着後排日・排貨から反日運動に高まりを見せ、光瑞は予定していた国内旅行を取りやめた。

五月初め予てから予定していた露国ウラジオストクの本願寺起工式参列のため、大連・ハルピンを経由してウラジオストクに赴いた。起工式では代表して挨拶をしたのち、復路も往路と同じ東清鉄道でハルピンまで乗車した。この地には日清戦争後日本人の移住が始まり、一九〇一（明治三四）年には早くも哈爾濱別院が創建された。ここから長春まで同じ東清鉄道を利用、長春から満鉄を使い奉天・遼陽を経由して大連・旅順に向かった。休養を取った後五月末上海に帰着した。

光瑞の香港および浦潮両本願寺起工式への参列を見る

を検討した。同時に香港・浦潮本願寺起工式の参列や中国各地の別院巡回など、いわば本派海外担当としての役割を果たした。また二度にわたり印度を訪問し、仏教原典の研究に備え梵語について半年間本格的に修得・研究を行った。興味のあった南洋農業事業にも着手できた。

これらの旅行を通じ、光瑞には進む道が見えてきた。

七二　帰俗

これからの海外で歩む道として光瑞は次の二つとにしたことは間違いない。

一つはこれまで努力してきた大乗偽仏説への反証である。そのためのチベット仏教の研究と梵語の修学により、大乗仏教の本質に迫る事であった。そして最終的には東アジア地域における仏教の復興と興隆を果たすことであった。もう一つは日本の人口問題の解決と国力増強のため、持論である南洋農業分野への進出すなわちこの分野への資本投資や事業経営であった。

懸念が消えないのは辞任後二年経過するにもかかわらずこの機に及んでも、法主復帰の要望が一向に静まらないことであった。光瑞自身は上海と大連・旅順を本拠として新しい人生を始めており、六雄管長代理や利井執行長の妨げにならないようにこの間一切帰国せず、京都本山や末寺に立ち入らなかった。

しかし初の管長代理制度は血統の近い連枝から選任されていても大谷宗家による継承者と違い、門信徒に与える崇高な信頼感は程遠いものであった。門徒が「生き仏」と信じる歴代法主と違い、連枝とはいえこれまで末寺の住職に過ぎない管長代理は比べるべくもないのは当然であった。また運営最高責任者である執行長を使いこなすことも難しかった。管長代理を後ろ盾にする執行長は最高決議機関である集会に対し、紛糾する門信徒を押さえ切れなかった。光瑞の弟や連枝たちは一度は納得したかに思えた法主管長分離について、次第に不満を大きくしたことも巨大宗教集団の運営に影を落とした。

光瑞辞任直後に始まった大戦景気は、これまで不振であった冥加金や布施・懇志・三財団への寄付を増加させた。内外の情勢変化により、本山改革を旗印にする執行部は次第に軽視され改革機運はうすれた。

辞任後丁度二年が経った一六年五月、光瑞はいつまでも頼ろうとする幹部や門信徒の懇請を断ち切るとともに南洋農業事業への本格的な進出をにらみ、「帰俗（還俗）」を決断するに至った。

三月末六雄沢慶管長事務取扱（管長代理）が辞任の後、親族会の推薦で就任した連枝近松尊定にその旨を伝えた。「光瑞帰俗」の驚愕する意向を聞いたためか、就任僅か

三か月の六月初め五四歳で急死した。

その後同じ近松家出身の福井市照護寺住職武田沢心（早逝した新門徳如弟）が就任したが、就任直後の多忙と安定しない宗派の現状を慮り、引き継いだ懸案の光瑞帰俗問題については暫く伏せる事にした。

しかし九月になると本山周辺から次第に漏れ始めた。この時光瑞は一〇月大連満鉄本社と関東別院での講演を予定しており、旅順大谷別邸に滞在中であった。

武田管長代理は不祥事により法主・管長を辞任したとはいえ、宗祖親鸞聖人の法燈をまごうことなく継承した第二二代鏡如上人大谷光瑞猊下が「帰俗」を決意しているということには、どうしても信じきれなかった。武田管長代理は執行足利瑞義（二次印度探検隊員）・今里游玄（利井後任執行長）・本多恵隆（一次探検隊員）らを旅順に派遣し、直接本人から帰俗の意思を確かめさせた。光瑞の信任の厚い元探検隊員足利・本多の二人と次期執行長になる今里の三人は直ちに旅順に赴き光瑞に面談した。三人は光瑞から直接帰俗の意思が固いことを知らされた。

一一月初旬帰国した三人から面談の報告を聞いた武田管長代理は、すぐに顧問会議を招集した。この会議では「帰俗を思いとどまる」よう懇請することで一致した。光瑞は講演後一一日大連から門司を経由して台湾基隆に行き、台北・台南訪問や阿里山登山を予定していた。門司寄港の僅かな機会をとらえ、欧州留学八年の経歴があり連枝随一の学識を持つ藤枝沢通（二〇代広如新門徳如弟・異腹伯父・前執行長）を派遣した。遙か年上の伯父は懇切丁寧に顧問会議の決定を伝え、なんとか帰俗を思いとどまるよう懸命に諭した。しかし光瑞は藤枝の説得にもついに応じなかった。

藤枝から報告を受け一二月初め再び顧問会議が開催された。この問題を議論したが「猊下には何事か深き思召のあることとて、ご決心非常に堅く、御帰俗に関しては何人が御諫止申上ぐるも御採用ならざるや」として散会、ついに帰俗を阻止できなかった。

光瑞にとってこれで心置きなくこれからの人生の目標に向かう条件が整った。

七三　中亜探検終焉

一二（明治四五）年一月第三次探検隊吉川小一郎は、一時音信不通となった橘瑞超と敦煌で出会うことができた。莫高窟千仏洞調査といわゆる敦煌文書蒐集後、橘はこれまで未踏であった内モンゴルゴビ砂漠の踏破、吉川はタリム盆地に広がるシルクロードの仏蹟調査を予定していた。しかし一一年秋四川省から始まった辛亥革命の

拡大により、全土が内乱状態に陥ったため、橘の身の危険を案じた光瑞は、「シベリア鉄道を利用し帰国せよ」と指示をした。

吉川は日本出発後まだ半年という短期間であり、最西端の新疆省シルクロードでは危険は少ないと思われたので、光瑞は本人の希望を聞き入れ、予定通りオアシス都市に残る仏教遺蹟の調査に向かうことを許した。

二月初旬敦煌を出発まず幹道の安西に出た。ここで清朝宣統帝が退位し、秦始皇帝以来の王朝支配体制が終わったことを知った。

吉川は帰国する橘とウルムチまで同行、西域北道を通り三月哈密に着く。そこを中旬に出発、トルファン・ウルムチに向かった。四月末橘はウルムチから露国オムスクに行き、シベリア鉄道を使い帰国の途に就いた。

残る吉川は光瑞から指示されたトルファンで、廃城・故廟・仏蹟・古址・仏洞・廃塔・墳墓などを発掘した。この地のベゼクリク千仏洞・高昌故城・交河故城など著名な遺蹟は、三次にわたる独隊・英スタイン・仏ペリオ・二次隊員野村らが発掘調査し、目ぼしい遺品は持ち去られていた。

住民たちは各国の探検隊が貴重なものとして大事に持ち帰るのを見て、これまで見向きもしなかった古い紙切れや仏具などを掘り出し、やって来た探検隊に売込んだ。手記にも「午前中中古物の買収に忙し」「午前は字紙片等の買収に当たり」などみえる。トルファンにはもはや発掘されつくし、新たに人員を投入しても僅かの古銅銭や経典の断片だけであった。

しかし吉川は諦めなかった。この地で誰も興味を示さなかったのが、唯一地下に眠る唐代の墳墓であった。地上からはだだっ広い空き地しか見えないこの墳墓に着目したのが吉川小一郎であった。

この地には大規模な墓地が二か所（手記では二堡（アスターナ古墳）・三堡（カラホージャ古墳）、現在のアスターナ古墳群）あり、この古墳群に人夫を振り向けた。古墳群は一八世紀西欧の考古学者に一部発掘調査されていたが、ベゼクリク千仏洞などから出土した見事な仏教壁画や木製・金属製の仏像・仏具経典などに注目が集まり忘れられていた。住民は祟を恐れ、地下に眠る古代の墓を暴くことはしなかった。

この二か所の墓を三月下旬の五日間にわたり十余人を雇い発掘した。初日は土器片のみ、二日目には二体の唐代ミイラと衣装・靴、三日目は土器三十余点・紙片・絹片・筆など多くの出土品を採取した。四日目には土器・真珠四〇粒・鏡・筆・辞令書数紙・絹地唐画断片が出土、「意気頓に軒昂たり」と予期を越える収穫を喜んだ。急遽トルファン市街より高価な板材を注文、大工を呼び寄

せた。現地で荷箱を造らせ出土品を収納した。四日目の夜三堡の村長が来て墳墓発掘に抗議した。そのため三堡の発掘は諦め、二堡に集中することにした。新疆に入って初めての少雨があり、「発掘の祟りなり」と人夫が怖がったため、五日目で中止した。

この墓地発掘調査については、墳墓の断面図および土饅頭形の墓下に至る羨道の傾きや深さについて図面を作成し記録した。また槨中（玄室）の状態を「高官の人々は其の在世中の辞令書その他が巻き納められて棺中に保存してあるを見る」と記し、ミイラ・シナ風ゴザ・木製食器台・俑・土偶など置かれた様子を詳細な平面図で記した。

玄室からは副葬品として仏教画が入っており、法隆寺遺品に酷似した「唐画樹下美人図」を発見し持ち帰った。

吉川が注目したのは、ゴザの上に貼られた「反故紙（廃紙）」や死者が身にまとう履物・帽子・服飾品・葬具などの「紙製」であった。この紙製には「同時代の諸種の事柄が記載されたるもの多く」「この反故紙の記事よりしばしば思わぬ収穫ありし事あり」と記している。

七世紀唐の時代貴重であった紙は、この地の行政機関が用済みの公用書類を紙くずとして売り、その紙が紙製の死装束の材料に利用された。それを見ての吉川の直観であった。

反故紙の重要さを認識したこの記述は、後のトルファン考古学の進展を予見していた。カラホトで西夏文書を発見したコズロフやオルデンブルクなどのロシア隊・この地を三度にわたり集中的に調査した独隊・英スタイン・仏ペリオなど有力な探検家が訪れたが、吉川小一郎ただ一人この使い古しに過ぎない公用書類が「貴重な歴史史料」と認識したのである。彼こそ五〇年後「トルファン出土文書」として、シルクロードオアシス都市の状況を明らかにする史料を世界最初に発見した人物であった。吉川は並々ならぬ中国古代の知識を持っていたことが分かる。

後のことになるが、中華人民共和国政府は一九五九年から七五年にわたりアスターナ古墳群の発掘調査を実施、大量の文書断片を集め復元した。そこから現れたのは、契約書・訴訟書類・受領書・積荷目録などであった。これらは漢語・梵語・消失した言語など様々な言語で書かれてあり、五―八世紀のトルファンの行政・裁判訴訟・運輸・商品売買などや多くの他国人が生活する様子が明らかとなった。

約半年ウルムチとトルファンを往復しながら、橘の残した荷物、敦煌文書及び二次探検野村の発掘品などを整理して、ウルムチのロシア領事館に預託した。この間天

山山脈の山岳登攀・植物採集・地形調査に三週間従事した。氷河に囲まれた高山・渓谷・氷河・樹林・湖など多くの写真を撮り、「天山紀行」（『新西域記』収録）としてまとめた。

身軽くして一三（大正二）年二月西域北道を西に進み、カラシャール・コルラを経由して三月初めクチャに着く。三か月スバシ故城・クムトラ千仏洞・キジル千仏洞を調査したが目ぼしいものは得られなかった。七月カシュガルに着き、本山に送金依頼を打電するが返事はなかった。七月末出立、西域南道を利用ヤルカンド経由で八月中旬ホータンに着いた。古代都市として知られたヨートカンの遺蹟を調査した。しかし堀尽くされており、収穫はなかった。

ホータンから一次探検隊渡邊・堀が苦労したタクラマカン砂漠の縦断を決行した。あまり苦境に会わなかったのか予定通り九月下旬西域北道のアクスに着いた。条件の最も悪い真夏の砂漠旅行、しかも日本人一人でキャラバンを組んでの旅であったが順調に終えた。

九月末アクスを出発して天山山脈を越えて北側のイリに出た。この行程は日本人として初めてのものであった。そこから天山北路を東に進み、三週を要し一一月中旬ウルムチに戻った。

ウルムチには一か月半滞在し、これまでの発掘品や購入した古文書を整理、帰国準備に取り掛かった。光瑞からの指図は、荷物についても運搬方法やその行程について実に細かい。それほど探検隊員の発掘品は貴重なものであり、吉川は日本への運搬には特に気を使った。何せ二次橘・野村、三次橘・吉川の荷物は合わせると大行李九〇箇を上った。

中国国内は辛亥革命の余波がまだ残り、治安が安定していない地域は残っていると思われた。またこれだけ大量の荷物を輸送するには、シベリア鉄道を利用するにしても数回に分散して積み込むことになるので吉川一人では目が届かない懸念があった。また官憲の検査で開封され、持ち去られる危険や毀損されることも恐れた。結局吉川はウルムチで駱駝一五〇頭近くを調達、大キャラバンを編成自らの手で運ぶことにした。

一四（大正三）年一月正月開けウルムチを出発、トルファンに向かい、預けておいたアスターナ古墳群などから採取の帛画・ミイラ・副葬品・古文書類などが入った大行李九箇を受け取った。これで荷物は総計九五箇になった。

西域北道を使い一月末哈密二月中旬敦煌、二月末には嘉峪関三月蘭州に着いた。このまま西安に至るのが楽であったが、不穏な情勢を危惧し、厳しく苦難な道程を選んだ。

蘭州から幹道を離れ北に転じ、黄河沿いを辿った。臨

河からは東に向かうのだが、長城の外側の内蒙古ゴビ砂漠が広がる砂漠地帯であった。大キャラバン隊を率い、五月五日内蒙古の出入り口張家口に着いた。蛇足だがこの時の吉川の砂漠地帯を進むキャラバン隊の行進写真が、大谷探検隊の紹介に使われるものである。

張家口では三井洋行の世話になった。荷物もすべて届き発掘品は無事であることを確かめ、倉庫に一時預けることにした。一四日南東二百キロにある北京に向かった。光瑞がすべての職の辞任を発表した日であった。翌一五日北京に着き本願寺別院を訪ね、夜はここに泊まった。

一六日本山に北京到着と荷物九五箇を無事に持ち帰ったこと知らせた。折り返し次の指示があるものと待機したが返事はすぐには来なかった。本山では新法主選任の会議が続き、混乱をきたしていた時期であった。

五月末になって二年前一足早く帰国していた橘瑞超から驚かされる指示が届いた。橘からは「この探検は主命によるに非ずと心得べき事、旅況等に付き公使館員以外は語る可らざる事。新聞記者には一切面会すべからざる事」と、何らかの不祥事をうかがわせるものであった。本山の事情に疎い吉川は「頗る不可解の注意事項なるが、内地の状況を詳らかにせざせば極めて当惑する」も「暫く隠忍自重」を覚悟せざるを得なかった。

吉川はこの機に及んでも機転としたたかな交渉力を発揮した。大量の大行李を如何に日本に持ち帰るか悩んだ末、日本公使館を巻きこみ外交品として輸送することを思いついた。

北京日本公使館に「大谷光瑞の内意により探検に従事するも、一面京都帝室博物館・京都帝大・東京地学協会等からの依頼を受け蒐集したもので、多くは博物標本・古文字・地図・その他物産見本」であり、「万一税関にて開函されると破損または散乱等の恐れのある物品が少なくない。途中安全なる方法により帝室博物館に属する荷物をご承認の上日本に送り届けてほしい」と訴えた。三日後公使館からは一〇箇のみ公使館扱いとする旨返事を得た。九五箇すべてではなかったが、重要品を公使館に任せることに成功した。

しかし橘と別れた後の二年間、光瑞猊下の期待に十分応えるものと自負していた吉川にとって、不遇と云える二か月の北京滞在であった。

この時在家の吉川を温かく世話したのは、箕面の浄土真宗末寺の息子で文学寮・仏教大学を卒業後北京において雑貨貿易商を営む三島海雲（一八七八―一九七四）であった。内蒙古で酸乳の効果を自ら体験、帰国後酸乳製品の大量製造に成功した。「カルピス」（カルシウムと梵語の仏教用語熟酥サルピスからとった商品名）と名付け、

新しい飲料として人気を呼んだ。戦後事業により得た資金で、信念とする「国民利福」を実践する異色の経営者になった。

三島は不運の吉川を北京の自宅に寄宿させ、帰国の際には高級支那料理店で送別の宴を開いて励ました。そして天津郊外タンクゥから乗船する吉川を見送った。

七月一〇日神戸港に帰着。橘・桂本ら三人が迎えに来ていた。三年前神戸住吉駅を列車で出立した時の、光瑞自ら武庫中学生一三〇名を引率し盛大な見送りをしてくれたことが思い出された。帰国は雲泥のさびしいものであった。

直に、法主・管長を辞任し京都本山から何も残っていない二楽荘で寝起きしていた光瑞猊下に復命した。特に光瑞からねぎらいの言葉も発掘調査など尋ねられることもなかったのか、ただ「復命す」のみ記されている。あれだけ待ち浴びた光瑞との対面は味気ないものであった。

その後本山に行き法主の父となった「光明猊下から麦酒一函賜ふ」と記述して、几帳面に毎日綴った六巻におよぶ吉川の「支那紀行」は終えている。

一二年にわたる中央アジア大谷探検隊のしんがりを務めた在家にすぎない吉川小一郎の広域活動調査は一・二次に引けを取らないものであった。

日本人として初めて敦煌莫高窟千仏洞を詳細に調査、多くの写真を残し記録した。しかも英スタインや仏ペリオ二人の大量持ち出しの後とは言え、まだ残る敦煌文書を圓道士から買受け日本に持ち帰った。大乗仏教・漢訳経典の研究・材質分析で先端を行くわが国の東洋・仏教学者が世界に広がった敦煌学を主導するきっかけとなった。

トルファンアスターナ古墳群の本格的発掘は世界で最初であった。この墳墓から反故紙製埋葬品の重要性を見抜いたのも吉川であり、後の「トルファン出土文書」研究の端緒となるものであった。この研究により四世紀五胡十六国時代の前涼から八世紀唐代まで四世紀間の「高昌郡・高昌国・唐西州・吐蕃」における行政司法制度・庶民生活・唐諸制度の普及状況が明らかになった。

そして最後の隊員として二・三次探検隊が残す大量の発掘品をウルムチ・トルファンから、すべて日本に持ち帰った。この吉川の将来により、わが国の東洋学・中国古代学・仏教学の研究に多大の貢献を成した。

吉川小一郎の帰国により、一九〇三年から一一年間続いた中央アジア探検は終了した。

七四　チベット留学生の帰国

大谷光瑞が辞任した一九一四（大正三）年五月、チベットへ派遣された青木文教と多田等観の二人はラサで各々修学中であった。光瑞辞任の報は当時ラサと日本の通信は次第に整備され、書信で一か月半電信では五日ほどであった。青木は煩瑣に本山や琵琶湖北岸にある自寺と連絡を取り合っていたので光瑞辞任については遅くとも六月中には知ったものと思われる。青木はすぐ郊外にいる多田に知らせたことであろう。しかし大事件の知らせを受けても、二人はこれまでの生活を変えることはなかった。

留学中の二人は法王庁から経済的支援を受け、本山からの送金がなくても困らなかった。青木には有力貴族の邸宅があてがわれ、恵まれた生活を送ることができた。多田は一三年一二月からセラ大僧院（大学）チュー学堂（学部）に入りチベット仏教を勉学中で、法王の特別な弟子ということで活仏用別館が与えられた。肝心の光瑞からも特段の指示はなかったので、当初計画通りの留学生活を送ることができた。

青木文教は午前中法王から差し向けられた教師から、チベットの中でも正統なラサ語の個人授業を受けた。月曜日の午後からは法王への邦・英字紙やジャーナル誌から得られた世界情勢の報告や法王から御下問のあった事項の答申など、法王の顧問的な仕事が課せられた。空いた時間は報告の準備や資料の取り寄せに費やした。チベット仏教に関心を持つ光瑞から、西蔵経の翻訳を依頼されることもあった。

余暇には運動として乗馬や市中・郊外を散策した。この逍遥は法王の周辺から得られる情報の確認に役だった。何事も自分の目で確かめる青木らしさであった。自慢の写真機を携えることも度々で、秘密の国の自然風景・街並・ポタラ宮・大僧院・人物肖像・集合・スナップなど多くの写真を撮った。帰国後出版した『西蔵遊記』には持ち帰った写真が多数掲載され、日本に未知の国の真の姿を伝えた。青木は「無料撮影の写真師」として人気を呼び、多くの人を引き寄せたと述懐した。

西蔵滞在が三年になる一五（大正四）年秋、さらに「西蔵仏教とチベット特有の文化の研究」を計画していた矢先、本山より「最早三年の留学期も充ちたれば直ちに出蔵せよ」との帰朝命令が届いた。光瑞はちょうど一六年一月印度巡拝旅行を計画していたことから、カルカッタかダージリンで会えるとの思いがあった。十三世法王からは「切に出蔵延期を勧告」されたが、「猊下よりの厳命を如何ともする能わず」ラサを去ることを決心した。

ラサ留学中の三年間、法王側近の顧問として優遇され恵まれた留学生活であった。経済的にも定期的な支給の外、翻訳料の名目として支援された。チベット特にラサ

の経済・生活事情や地理について、実地の調査や視察が法王からのはからいで許された。青木の真摯な態度で取り組む人柄もあり、政庁や上流階級の人々とも親交を深め、躍進目覚ましい日本からの賓客として接せられた。当時高官でさえ日本の認識は「日清戦争に勝利し清の宗主下から脱出して、独立した国家になった」という程度のものであった。信頼する青木の話す日本は、「欧州列強国に肩を並べる近代国家に成長している」ことを実感させた。

チベット三年間の留学を振り返り、「崇仏心篤く、従順で、慈悲に富み」「戦争を憎み平和を愛する」人々が暮らす「天国の楽園」とした。続けて「英京（ロンドン）・独都（ベルリン）の再遊はこいねがわず」とも、「神地の理想郷（ラサ）には今一度遊学したい」と振り返った。

帰国が決まると、法王から特別のはからいで外国人として初となる「サンビリクト」の学位を授与された。さらに近代化を推進する法王に数々の提言・資料の提供など献身的な協力助言に対して、これまでの感謝の意を出蔵の旅で酬いた。ちょうどチベットから印度政庁のもとに武器調達を依頼する特使の派遣が計画されており、この特使の顧問の肩書を与えたのである。

エベレストを見ながらの高峻なヒマラヤ山脈越えなど人の目を避けた入蔵の時とは異なり、この度の出蔵は特使の顧問として随伴する旅となり、堂々と「最も楽な公道」を通り印度に向かうことになった。印度政庁より特別待遇を受け、英国官舎・ホテルおよび途中の電信電話の使用を許され「きわめて安全に、且つ愉快に、至る所英・蔵官憲の歓待」を受けた。

思い出深いチベットを去り一六年三月印度ダージリンに着いた。すでに光瑞は梵語研究のため印度北部避暑地「夏の首都」シムラへ立ち去っており、この時は会うことはできなかった。

その後光瑞の指示によりダージリン・カルカッタで印・蔵国境の情報収集と西蔵研究を続けた。そのため日本の帰国は一七年五月になった。青木を一年印度に滞在させたのは、いまだ混乱している本山のことを慮ったことからかもしれない。

青木文教は五年間（ラサ滞在三年入出蔵各一年）の西蔵研究はあまりに短いが、再度の入蔵が容易でないことを考えれば、「この五年間は一刻千金に値する」と顧みた。そして斯くの如き機会は「真にただ猊下によってのみ」与えられるもので「筆者の如きものが空想だも容されないことであり、無辺の厚恩謝す」と、無位無官になった大谷光瑞猊下に感謝の辞を記して『西蔵入国記』を閉じた。

一方多田等観は入蔵前の一三年一月光瑞から「西蔵仏

教之研究ハ世界の輿論ナリ。殊ニ我ガ教を同フスル一門ニ於テハ其研究タル忽ニスベカラズ。印度仏教衰亡遺法今ヤ西蔵ニ伝ワルヤ」と西蔵仏教研究の重要性を強調された。そして光瑞は「入蔵ヲ以テ深ク西蔵仏教ノ理趣ノ研鑽ニ務ムベシ。永ク駐蔵ノ計ヲ立ツベシ」との命令書を出し、長期研究修行の覚悟を求め励ました。

九月末ラサに着き、青木と再会し、京都で昵懇となったツァワテトゥルによりに法王への謁見が許された。年末からダライ・ラマ十三世法王による特別な指示により外国人として初めて国内最高学寺の一つセラ大僧院（大学）チェー学堂（学部）に入り、チベット仏教の本格的な研鑽生活を始めた。

光瑞辞任の報はセラ寺で勉学中に青木から伝えられた。しかし光瑞からは多田にも帰国命令は出されなかった。本山からの留学費用は中断されたが、法王庁からの支給や実家からの仕送りにより留学生活を続けることができた。

一六年青木はラサを去ったが多田はセラ寺にてチュンゼ（最高学位の次級）をうけ、また論議会座（学寺講演）の講者となり、順調な修得振りを窺わせた。六年目の一九年には十三世より受戒、三衣一鉢を贈られた。二〇年にはまたも論議会座の講者に選ばれた。セラ寺の教育課程については、帰国後光瑞に提出した「入蔵学法始末書」（『多田等観』所載）で報告した。チュー学堂における西蔵仏教の受講課程は仏教論理学・般若学・中観学・戒律学・倶舎学を各々四年かける最長二〇年間にわたるものであった。

多田は一〇年間にわたるセラ寺での研鑽修得により、外国人として初めて最高学位ゲシェー（博士）を賜られた。二〇年の修学課程を半分の一〇年でやり遂げたことになる。粘り強い多田の努力の賜物であった。

入蔵して一〇年になる二二年、光瑞より帰国の指示が来た。既にチベット仏教を正規の学寺で修得し終えた多田は、すぐに帰国の準備に始めた。

十三世より謁見を許され、観音懸け仏菩薩などをいただいた。もっともありがたかったのはデルゲ版西蔵大蔵経（カンギュル仏説経・律およびテンギュル論書）を二部贈られ、日本への将来を許されたことであった。

光瑞へ報告した「入蔵学法始末書」の中で「従来東西の学者が研究してきた西蔵大蔵経は、何れも将来してきたナルタン版であった。何人も未だデルゲ版の大蔵経を将来したことがなく、天下の学者が等しく一日も速やかにこの大蔵経の将来を熱望しつつあるが、ダライ・ラマ十三世の好意によりデルゲ版のすべてそろって持ち帰ることができた」と、誇らしげに上申した。

因みに西蔵大蔵経は仏説部（カンギュル）と論書部

（テンギュル）の二部から構成され、多くの写本・版本により伝えられてきた。最古の一五世紀明永楽帝作成（永楽版）や清康熙帝（康熙版）などがあり、北京版（中国製開版）と総称される。チベットでは一七世紀から木版印刷が主流となり、北京版を加えて「四大版」としてデルゲ版（一七世紀デルゲ王開版・最古版仏説部を底本、論書部最古開版）・ナルタン版（ダライ・ラマ五世作成写本大蔵経を底本）・チョネ版（一八世紀デルゲ版底本）があった。

多田が報告したのはこれまでチベット大蔵経はナルタン版によるものが持ち出され、世界中の仏教学者が競ってこれを研究した。デルゲ版は「漢訳にない梵語仏典の翻訳、特に七―八世紀以後の後期印度仏教の典籍が含まれている」ことから、印度における仏教伝播の研究上重要な史料で文献的学術価値の高いものであるとされた。しかもデルゲ版は最も正確でかつ鮮明なものとして、各国の仏教学者からその入手が待たれていたのである。

多田は一一年にわたる長期間、チベット仏教の正統な最高学府で学んだ。その間顕教と密教の双方を学びかつその根源を極め最高学位をとった。仏教学者が待ち望んだデルゲ版大蔵経を初めて国外に持ち出した。これにより量的には漢訳大蔵経をしのぎ、質的にも漢訳よりはるかに原典に忠実な翻訳であることが判明した。梵語原典として現存する法典は僅かにすぎず、大部分は散失しているため仏典研究にはチベット大蔵経が不可欠であった。そのチベット大蔵経の中で最も古く正確なデルゲ版を、日本に将来した功績は大きかった。

否、それだけでなく多田等観自身がチベット国内の最高学寺で正規の西蔵教を研究・修得して帰国したことの方が大きかったかもしれない。帰国後チベット仏教の権威者として、東京帝国大学（文学部印度哲学）・東北帝国大学（法文）・慶應大学（亜細亜研究）・東洋大学（宗教）・駒澤大学（仏教）の講師に迎えられた。昭和四二年七七歳で亡くなるまで、その研究成果を発表するとともに後進の人材育成に努めた。

多田等観がラサを発ったのは二三（大正一二）年一月であった。二月カルカッタから乗船、神戸に上陸したのは三月のことで、一一年ぶりの日本であった。

大谷光瑞が西欧の大乗非仏説を打破し大乗仏教の正統性を証明するため、中央アジアシルクロードに点在する仏蹟調査・発掘およびチベット仏教の研究と西蔵大蔵経の将来は、多田等観の帰国によりようやく完了した。大谷光瑞がすべての職を辞した一九一四（大正三）年からは一〇年を経過していた。

一九〇三年八月ロンドン出発から始まった光瑞の仏教大乗教原典を追い求める悲願から、浄土真宗本願寺派選

りすぐりの青年僧の恐れを知らない好奇心とたくましい精神力そして篤い信仰によって、二〇年をかけてアジア広域活動を繰り広げた。その将来は東洋中国古代・宗教・地理・考古・民族および文化・言語など各分野に多大の貢献を果たした。

国家の経済支援を一切受けず、浄土真宗本願寺派の法主と二十数名の青年僧達は未踏の大探検紀行を敢行し、西欧の国家の支援による大規模な探検隊に劣らない成果をあげた。大谷アジア探検隊は先進国との劣等感に悩んでいた明治の多くの日本人に、とてつもない自信と勇気を与えたのであった。

それにしても驚かされるのはすべての役職を辞した後も、一〇年間という長きにわたりヒマラヤ奥地の秘境の地でチベット仏教の研究を続けさせていたことである。大谷光瑞がいかに大乗仏教原典に強い関心を持ち続けていたことを如実に物語っている。

（つづく）

参考文献は最後に記します

明治時代の著述者　渋江保の足跡を訪ねて（その三）

山本勉

渋江保の交友関係表、家系図

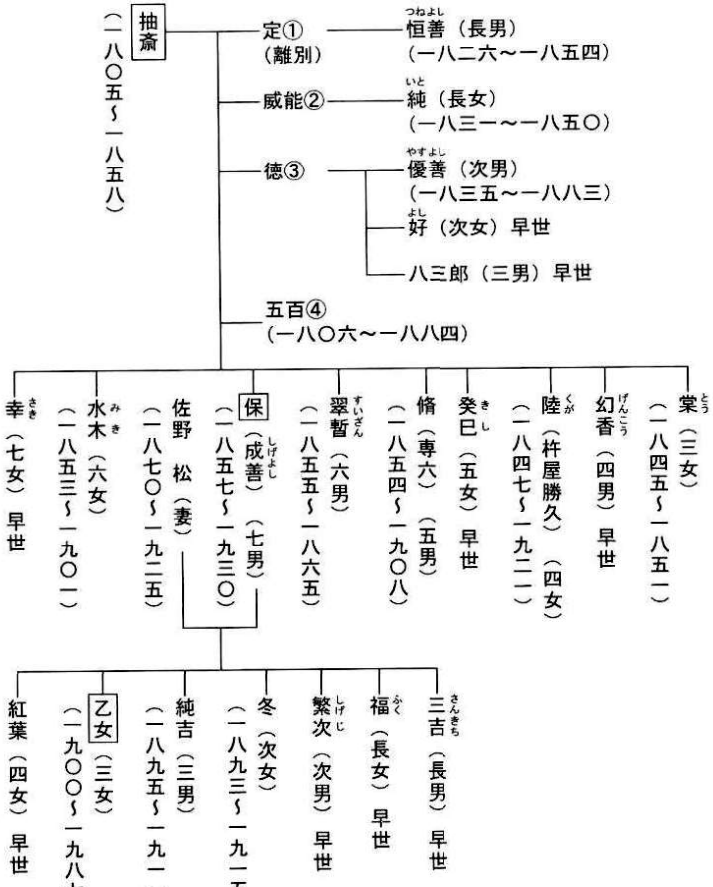
はじめに

これまで『明治時代の著述者　渋江保の一生』において、その生い立ちを時代区分ごとに綴ってきたが、各時代で渋江に関わった人物について「渋江保の交友関係表」としてまとめた。「渋江保の家系図」については、渋江保の三女、渋江乙女（一九〇〇～一九八七）の長男、故佐藤豊彦氏の妻、佐藤八千代氏（青森県青森市在住）から譲り受けた家系図を参考に作成した。本稿に掲載する家系図は、渋江保の生い立ちに関係するもののみを掲載する。

渋江保　交友関係表

区分	時代	滞在期間	交友関係
1期	幼少時代（江戸）	1857年7月～ 1868年4月	海保漁村（経書）、小島成斎（筆札）、多紀安琢（素問）、海保竹渓（経書） ※括弧内は渋江が教えを受けた科目
2期	弘前時代（弘前）	1868年4月～ 1871年3月	兼松石居（経書） ※括弧内は渋江が教えを受けた科目
3期	第一次修学時代 （東京）	1871年3月～ 1875年1月	志賀直温、島田三郎、首藤陸三、高梨哲四郎、田口卯吉、宮崎八郎、波多野伝三郎 ※いずれも共立学舎で学んでいる。フルベック・スコット・ブラウン（教えを受けた外国人英語教師）
4期	浜松時代（浜松）	1875年2月～ 1879年10月	大江孝文（浜松県、学務課長兼庶務課長）
5期	第二次修学時代 （東京）	1879年10月～ 1881年7月	福沢諭吉、小幡篤次郎、阿部泰三、山田要蔵、キーリング・ラムバード（教えを受けた外国人英語教師）
6期	宝飯中学校時代 （豊川市）	1881年8月～ 1882年12月	加藤幸三郎・木村永太郎・三輪弘忠・山崎程者（いずれも宝飯中学校関係）、武田準平、阿部泰蔵
7期	東京横浜毎日新聞時代 （東京）	1883年1月～ 1885年12月	近藤真琴・藤田潜（攻玉社関係）、福沢諭吉・小幡篤次郎・浜野定四郎（慶應義塾関係）、島田三郎・沼間守一・肥塚龍（東京横浜毎日新聞関係）、福地桜痴（東京日日新聞関係）、外山正一
8期	静岡時代 （浜松市・静岡市）	1885年12月～ 1890年3月	栗田輝永、前島豊太郎（暁鐘新報社主）、前田五門、中江兆民、藤波甚助、山路愛三・松本亀治郎（教え子）
9期	博文館時代（東京）	1890年3月～ 1901年	大橋佐平・新太郎（博文館）、根本道明（易学）
10期	大学館時代～ 晩年（東京）	1903年～ 1930年4月	劉成禹（中国人）、上村売軒（漢詩）、山路愛山（教え子）

渋江保　家系図



人事部長　首切り姫（トゥーランドット）2
神戸から来た男（二）

匠　克仁

〈登場人物〉

弓本良香　アサヒ信用保証人事部長
　東西信販から京亜クレジットを経て転籍
牛島崇　アサヒ信用保証指導役？
棚橋博久　アサヒ信用保証債権管理部長

〈時系列〉

参考　第一話より
一九九四年四月一日　弓本良香、東西信販入社
二〇〇〇年四月一日　良香、京亜クレジット転職
二〇一八年二月一日　アサヒ信用保証のM&A
二〇一八年三月一日　良香、アサヒ信用保証転籍
二〇一八年三月三十一日　第一回目の大リストラ
二〇二〇年十月三十一日　アサヒ信用保証株主総会
第二話（本編）
二〇一八年五月からの数週間

2　神戸から来た男

「おい、お嬢ちゃん、何か俺に用か」

お嬢ちゃんと呼ばれたのは、アサヒ信用保証の人事部長である弓本良香である。

良香は人事部から同じ本店ビルの三階下の債権管理部の目的の人物に向かって歩いていた。

昼過ぎの在河弁護士からの電話を終えて、良香は棚橋博久債権管理部長に内線電話をかけた。

牛島氏について訊きたいと言ったところ、牛島は午後二時に債権管理部に来るということであった。牛島という人物は定期的に債権管理部を訪問していると良香は棚橋から説明を受けた。

ちょうど良いタイミングと思い、良香は債権管理部に

赴いた。棚橋は突然は困ると抵抗したが、弁護士からのクレームということで、棚橋は仕方なく応諾した。
その棚橋と隣の席にいる人物に向かって歩き出していたら、先方から「お嬢ちゃん…」と呼びかけられたのである。
（人事部長の私に向かって、お嬢ちゃんって）
一瞬だけ良香の血液が沸騰しかけたが、落ち着いた。
（見かけは十才や二十才は若く見られるからね。若く見られるのは罪なのね）
そのように良香は解釈したのである。良香は根が完全にポジティブ思考である。
（それにしても、この態度は常識外れじゃないの）
牛島は両足の革靴の靴裏を良香に向けたまま、デスクの上に乗せている。
その隣には棚橋部長が自席に座っている。部長席の隣が副社長専用のデスクである。副社長は常勤でなく形式的に担当というだけで常に空席になっている。つまり、牛島はその副社長用デスクに足を乗せていたのであった。
（このシワシワ男、まるでヤクザじゃないの）
態度だけでなく、人相は映画で登場するヤクザそのものであった。シワシワ男と良香が思ったのは、まるで紙を握り潰してから広げた感じの顔面であった。髪は短く角刈りで、半分が白髪である。
眼光が鋭いというだけでなく、目だけで喧嘩を吹っ掛けてきている威圧感がある。
スーツもネクタイも光が反射するほど派手なもので、とても堅気の人間が着るものでない。そのネクタイは無造作に緩めている。
「人事部長の弓本です。あなたが牛島さんね。まずは、この邪魔な足をどけなさい」
毅然とした態度で良香は牛島に命令した。
良香は年齢の割に外見が若々しくて、愛らしい表情をしている。
しかし、人事部長就任早々に大規模のリストラを断行し、多数の社員の解雇を告げた。そのことで『首切り姫』とあだ名を付けられたほど社員からは怖れられた存在である。
実際に、良香が債権管理部の部室に入った瞬間に室内は凍ったような雰囲気になった。
「それは人事命令か、業務命令か」
牛島は良香に従わず、両足を挙げたまま、平然として質問した。
「人事命令ならば、社員でない俺は従う義務はない。業務命令ならば、業務委託手数料が発生するが、俺が足を下ろすのに、いくら業務手数料を払ってくれるのか」
牛島の態度に隣にいた棚橋部長が慌てて止めに入る。
「弓本部長、ここは抑えて」
（抑える相手が違うでしょ）

良香は普段に無く感情的になった。
棚橋部長もかなり人相が悪い。しかし、この男の隣であれば、優男に見えるので不思議だと良香は思った。
「相手に靴底を見せるのは失礼でしょう。人間として最低のマナーは守って下さい」
良香は毅然として言い返した。
「人間としてのマナーをまきまえていない奴を相手にするのが、この債権管理部だ」
牛島の発言に部室内で、そうそうという相槌をする声を良香は聞いた。
「まあまあ、牛島さん、このままでは話が進みませんから、応接室に移動してから、話を続けませんか」
棚橋が提案し、自ら立ち上がった。
「債権管理部長さんのご指示であれば、当然、従いますよ。俺はアサヒさんとは債権管理部から受託している身分だからね」
そう言うと、牛島は足を降ろし、立ち上がった。それから良香に近づいて上から見下ろした。
牛島は日本人離れした背の高さと体格の持ち主であった。
良香はバレーボールをしていて、身長は女性としては高い方である。ハイヒールを履いていると、普段は男性の目線の高さと変わらないか、少し高い。しかし、この男の前では大人と子供の違いがあった。
接近した牛島は良香に対して、あきらかに「見くだして」いたのである。良香は視線をそらさず、かつ一歩も引かないでいたら、えびぞりになった。
見かねた棚橋が牛島の肘を引いて、その場を抑えた。
棚橋に続き、牛島、良香の順に応接室に入った。
良香と牛島が向かい合い、棚橋が審判の様に横に座った。応接室で席に座ろうとしながら、良香は牛島へ声をかける。
「言っておきますけど、私はあなたと三才しか違いませんから」
良香は牛島との契約書を事前に調べていた。そして契約書に添付されていた印鑑証明書から生年月日を知った。
「ほう。俺の年齢を知っているだと。さては俺の印鑑証明書でも見たか」
なかなか勘が鋭い男だと良香は思った。
「俺が五十才だから、三才違いとすると、あんたは五十三才か」
良香の全身の血管の中の血液が沸騰した。
「なんで、私があなたより年上なのよ」
良香には珍しく激高した感情がそのまま出て、大声を出した。
今まで実年齢よりも十年、二十年も若く見られて舐められたことがあった。そのような経験は散々してきたが、社会人になってから一度も実年齢より上に見られたこと

がなかった。
二〇一八年現在で四十七才であるが、二、三十代にしか見えないと言われていた。それどころか、肌や体型は二十代の頃からあまり衰えていないと自信があった。
（それなのに、それなのに、こんな顔面シワシワだらけの五十オッサンから三つ違いを年上に見られるだと）
良香は自分のこめかみの血管が浮き上がるのを感じた。
「お前、一部上場企業の子会社の人事部長の割にはメンタルコントロールできてないな」
牛島の言葉に良香は我に返った。
そういう牛島の顔を良香は観察した。両耳はカリフラワーの様に変形していて、鼻はS字型にねじれていた。
「この会社の人事部長は歴代、五十代後半だ。当然、新しい人事部長も同年代の人間と思って当然だろう。だから、後任の人事部長も俺より年上と考えた。何か俺が論理的に間違っているか」
理詰めで牛島に言われて、良香は答えられなかった。
「それに女は化粧と整形手術で化けるから、お嬢ちゃんヅラのあんたが五十過ぎだっておかしくないだろう」
牛島の言葉に良香はむきになる。
「整形はしていません」
大声で良香は言い返した。何でこんなこと言っているのかと良香は空しくなった。
「弓本部長、ここの応接室の会話は債権管理部のフロアに全部、筒抜けなんだ」
棚橋の説明に良香は我に返った。棚橋が続ける。
「うちの部はクレームの押し掛けが多いんでね。社員の命の危険防止のために録音の上、スピーカーで応接室の音を外に流している。過去にこの部に直接、来た奴が出刃包丁を持っていたこともあって、仕方ない処置だ」
良香は債権管理部の応接室の仕組については知らなかった。
「それって、私がこの五十男に年上と言われて怒ってるとことか、整形してません、ということが全部、外に漏れて、録音されているってこと」
声を下げて良香は棚橋に質問した。
「その通り。弓本部長の一言一言もライブ配信でフロア全体に響いている。応接室の話は債権管理部の全員に聞こえてる。もちろん電話対応中の者がいるが、物理的には弓本部長の声は届いているでしょう」
棚橋は無表情で言った。
応接室の会話がフロアに響いているのを知っていて、牛島が挑発した。そのように良香は悟った。
自分で冷静になろうとして、良香は要件を切り出す。
「そんなことよりも、この名刺は何ですか」
良香はスマホを取り出して、牛島に見せた。弁護士から送られてきた牛島の名刺が写っている。
「何か問題は有るか」

牛島は平然として問い返した。
「問題が有るに決まっているでしょう。単なる受託先でありながら、弊社の社員の様な名刺を作るなんて許されません」
良香は債権管理部の社員に聞こえていることを意識して話した。
「最初に作ったときには、棚橋部長には渡したけどな」
牛島は振り返って、棚橋をにらむ様に見た。
「本当ですか。棚橋部長」
良香は棚橋に視線を向けて確認した。
「牛島君が渡そうとしたが、私は受け取らなかった。その時は指導役でなく相談役と書いてあった。相談役は会長や社長が退任した後に使う肩書だと注意した」
棚橋は答えたが、言い訳にもなっていない。
「それで指導役に変えた。ここの債権管理の社員を指導してるんだから文句はねえだろう。もったいねえから、相談役の名刺も使い切ったが」
相談役の名刺が百枚ばらまかれたことになると思い、良香は頭を抱えたくなった。
相談役の肩書はアサヒ信用保証に存在しないが、実質的な親会社の京亜クレジットに存在する。社長や会長が引退後の肩書である。
「指導役だろうが、弊社に似せて名刺を作るのは大変な迷惑です」
「この名刺を使うな、とは言われていないぜ」
牛島の言い分を聞いて、良香は棚橋に尋ねる。
「棚橋部長は名刺を渡されて、そんな名刺は使うなと言わなかったんですか」
「いや。相談役はおかしいということで、暗に使うなと含んだつもりだったが」
棚橋の回答に良香はあきれた。
「そうか。俺は認めたと思った。ちょっとした勘違いだ」
勘違いで済む問題ではない、と良香は苛立った。
「実際に迷惑を受けた事例があります。今日、弁護士からの電話を私が受けました。弊社の社員が家賃保証の取り立てで脅迫をしたという話です」
弁護士から送られてきた音声ファイルをスマホで開いた。音量は抑えていたが、応接室に響き渡った。
ということは債権管理部のフロア全体に筒抜けである。
「コーセーマンションのあのジジイか。法テラスに泣き言をいうなんて、随分と落ちぶれやがったなあ」
「ジジイなんて。弊社にとっては契約者、つまり、お客様です。お客様に対して失礼な言い方を」
良香が言い終わる前に、牛島がテーブルを両手で叩きつけた。
「お客様だと。これだから、人事の奴らは全く現場を知らねえ。滞納している入居者は客じゃねえ。アサヒが入居者から貰っている保証料は一ヶ月分だけだ。一回滞納

して代弁しただけで、アサヒの収益はゼロになる」
代弁とは代位弁済のことで、アサヒ信用保証が入居者に代って家賃を家主に支払うことである。
「二回滞納すれば、貰った保証料分がまるまる赤字になるんだぜ。そんなことも分らねえのか。お客様は神様、万引き様もお客だから神様です、って言ってるのと同じだぜ」
牛島の言葉に良香は言い返せなかった。
「このジジイが今どこから収入を得て、今まで何してきたか想像がつくか」
突然、牛島が良香に質問した。
「そんなこと分るわけないでしょ」
「アサヒの部長がそんなことでは頼りないな。想像でいいから何か言えよ」
「想像で良ければ、何でも言えますけど」
良香は黙り込むのが嫌で、少し考えて続ける。
「七十五才というから、年金暮らし。一人暮らしだから今までサラリーマンで定年退職し、妻に先立たれてマンション住まい。年金が少なく家賃が払えなかった。情報が何も無いので、そんなことしか想像できませんけど」
良香の回答に牛島は馬鹿にするように鼻を鳴らす。
「このジジイは年金や税金は一度も払ったことはねえ。十代からヤクザで、チンケな三次団体の組長をしたこともある。刑務所の壁を行ったり来たりした奴だ。そんな奴が刑務所を出た後、生活保護で生活している。日本っていい国だよな。生活保護にはマンション代が含まれているが、そのマンション代を家主に払わず、くすねているんだぜ。こんな外道がお客様、神様かよ」
牛島は再びテーブルに両手を叩きつけた。
「だからといって、全裸にして廊下を犬のように這わせたなんて」
「奴は全身に刺青を入れている。パンツ一枚の姿で現れて、取立に来た人を脅すのさ。俺は見慣れているから、そのまま首にひもをかけて、引きずりだした。そのうちにパンツがずれて脱げたってことだ」
牛島は少し考え込む様子で続ける。
「ちょうど良い機会だ。今日の午後にコーセーマンションの取り立てに行く。十五時に地下の駐車場に来たら、現場に連れて行ってやるぜ」
牛島は良香を挑発した。
「弓本部長、後は牛島君と債権管理部できちんと対応するので」
棚橋が言うのを良香は遮った。
「面白そうね。分かりました。午後三時に駐車場ですね」
午後の会議を部下の前田に任せることにして、良香は即答した。
「どうせ、ビビッて来ないだろう。まあ、期待せずに待っている。一秒でも遅れたら、置いていくからな。分ったかな、お嬢ちゃん」
牛島は一方的に言い放つと、応接室を出て行った。
「棚橋部長、当然ですが、外部スピーカーを切るスイッチがあるんでしょう」
良香は小声で棚橋に呟いた。
「もちろん、ありますが、応接室は原則的に外部スピーカーオンですので」
「いいから。切って」
良香が要求すると、棚橋はドア横の隙間に手を突っ込んだ。
「本当に消したの」
良香が確認したが。それまで聞こえていたコダマのような反響音が無くなっている。
「スピーカーを消すと、応接室のドアの上の表示が緑から赤に変ります」
良香は赤表示を確認して、それ以上は疑うのを止めた。
良香の中で内心の怒りが燃え上がった。
「何よ。あのシワシワ男」
良香は怒りでつい独り言を呟いた。普段は外見をからかう表現をすることはないが、思わず口に出た。
五十才のシワだらけの男に年上と言われて、良香は内心の怒りが治まらなかったのである。
「シワでは無い。人事部長の割には人を見る目が無いな」
棚橋は良香の独り言を聞きつけて、訂正した。訂正というより挑発である。
「彼の顔面に刻まれているのは、シワでなく、歴戦の傷跡だ。名誉の勲章といっても良い」
歴戦の傷跡と言われて、良香は何のことか分からなかった。
「彼は十代からプロの総合格闘家として活躍してね。大学生の時には既に世界チャンピオンとして有名な選手だった。テレビでもよく放映されたから、弓本部長も同世代だから記憶にもあるじゃないか」
同世代の言葉にいらついたが、棚橋の言葉でそんな格闘家がいたと良香は思い出す。
「当時はイケメン格闘家として有名だったよ」
顔面のシワというか傷跡を除き、潰れた耳と鼻を修正し、ヤクザの雰囲気を除けば、と良香は想像した。五十の男性にしてはイケメンだと良香は牛島のことを思い直した。
「確かに牛島ってプロの格闘家がいたわね」
学生時代に格闘技好きの男友達に誘われて、牛島の試合を良香は見に行ったことも思い出した。
会場では最も盛り上がった試合だったが、テレビ中継ではカットされていた。両者が血まみれの陰惨な試合だったからである。
「有名だったのに、いつの間にか、テレビからも姿を消したようね」

良香が会場に行った後も、牛島の試合がテレビ番組で報道していた。友達の影響で良香もテレビで何試合か見たことがあった。

「彼は激しすぎる試合を繰り返して、左目の網膜剥離になった。これで格闘家としての人生を失ったんだ」

「それで人生の道を外して、ヤクザにでもなったの。どうみてもヤクザにしか見えませんけど」

良香の皮肉な発言に棚橋は手を振り答える。

「ヤクザ…。違う。彼が選んだ次の職業はヤクザと究極的に反対のものだった」

ヤクザと究極的に反対という言葉で良香は何となく予想がついた。

「格闘家を引退したとき、彼は未だ東京の大学生だった。彼はすぐ気持ちを切り替えし、警察官を目指した。地元の兵庫での警察官試験に合格して、警察官になった」

プロ格闘家から警察官への転身と聞いて、良香は少しだけ牛島のことを見直した。そういっても、あの粗暴な態度は良香は許せなかった。

「そして、神戸署に配属された。配属先はマル暴だ」

マル暴とは、暴力団を取り扱う刑事部捜査第四課を指した。かつて刑事部は各都道府県の警察本部の中の一部門であり、四つの課に分かれていた。

捜査第一課が殺人などの凶悪犯罪、捜査第二課が詐欺などの知能犯罪、捜査第三課が万引きなどの窃盗事件を扱う。

捜査第四課で暴力団などの取り締まりを扱った。ただし、兵庫県警だけは捜査第四課ではなく、暴力団対策第一・二課と呼ばれていた。二〇〇四年からは暴力団の担当は全国でほぼ組織犯罪対策部に変わった。

マル暴の刑事であれば、ヤクザに対抗するためには相手を威嚇できるような警察官でないと務まらない。

それであのような態度を取るのかと良香はようやく納得した。

「当時、ヤクザの中で怖れられた有名な刑事が東西に二人いた。東は新宿署の鮫島、通称『新宿鮫』だ。そして、西は神戸署の牛島、通称『神戸牛』だ」

「神戸牛…、なんか美味しそうな名前ね」

肉食系の良香は、最近は神戸牛を食べてないと舌なめずりをした。

「何を言っている。神戸のヤクザは『神戸牛』と聞くだけで震えあがった。ヤクザの中には焼肉が食べられなくなった奴もいたくらいだ。彼の顔面の無数の傷跡はプロ格闘家の時だけでない。むしろマル暴時代の傷の方が多いらしい」

よほどのことで無い限り、あれだけの顔面の傷はないと良香は思った。

(顔面であれなら、全身でどれだけの傷跡があるのか)

「あいつの体には銃痕や刺し傷もあるらしい」

棚橋は良香の内心の想像に応じるように話した。

「その神戸牛がなぜここにいるんですか」

素朴な疑問を良香は口にした。

「彼はヤクザ五人を血祭りにして半殺しにしたんだ。そのヤクザ抗争では同僚の刑事も一人が殺された。この事件で正当防衛が認められたが、警察では対面上で仕方なく懲戒処分とした。それで上層部と衝突して、辞職した」

(ヤクザ五人を血祭りに半殺し…)

やはりまともな人間じゃないと良香は思った。

「彼は危険な神戸を離れ、所属した格闘技ジムと出身大学のある東京へ戻ってきた。現在はジムの先輩の経営する調査会社、昔の探偵事務所であるが、籍を置いている。探偵・調査の仕事と掛け持ちで、個人でこの会社の債権回収の業務を請け負っているんだ」

「その神戸牛とアサヒがどうして結びついたのですか」

良香は再び疑問を繰り返した。

「私から直接、本人に頼み込んだ」

「なぜそんなことを」

「私が東西信販の神戸支店に勤務した頃にヤクザにからまれて苦労した。それを解決したのが彼だ。その彼がマル暴を辞めて東京にいると私は知った」

棚橋は思い出す様に目をつむると、また話し続ける。

「当時、既にこの部に転籍した私は部下の回収が上手くいかなくて、困っていた。私から彼のいる調査会社に直接、訪問して、彼に債権回収の指導する役割を頼んだんだ。その時の彼の条件として、好き勝手にやらせてもらう、ということだった。名刺の件はそういう事情があってのことだ」

棚橋は名刺の件を説明したが、良香は納得しない。

「そうは言っても、牛島氏の様な業務委託の詳細は、デューデリの際には全く検討されてませんでした。こんな人物がアサヒの回収業務をしていたとなると、企業買収の際の価値判断も変わったかもしれません」

「どういう意味だ」

棚橋の語気が荒くなった。

「訴訟リスクです。つまり、脅迫による精神的な被害で何十件も訴えられたら、合計で数千万円単位の損害賠償の可能性を抱えているということです。事前に報告しなかった棚橋部長にも業務上の過失があると思います」

良香の指摘に棚橋の顔面が赤くなる。

「弓本部長、あんたは何十億円か知らねえが、札束で会長の頬を引っぱたいて、うちの会社を乗っ取った。だがな、そんな会社で実際に利益をあげているのは、現場の人間なんだぜ」

牛島と比べたら、ましな棚橋の顔が悪人面に変わった。

「現場ではきれい事なんてないし、けがれ仕事を引き受けている。最近は、けがれ仕事をする人間なんて少なくなっている。調子に乗って、現場を無視するんじゃねえ」

オリンピックA・B・C・D・E……Z

匠　克仁

ＡＤ２０２１年、東京オリンピックが開催された。先のＢｒａｚｉｌのリオオリンピックから５年後の１年遅れＣｈｉｎａの北京オリンピックは半年後に迫る。しかもＤｅｌｔａ型の新型コロナが蔓延した中の無観客でありＥＵ諸国を初め世界中からの選手がコロナ対策をした。

Ｆｒａｎｃｅのパリ大会へ何とか繋げられた。開会式はＧｒｅｅｃｅが先頭で最後の日仏米まであいうえお順でＨｏｎｇＫｏｎｇはホだが、Ｔａｉｗａｎがチである。

ＩＯＣが台湾でなくチャイニーズ・タイペイとして扱いＪＯＣもこれに従ったからだが、何か変である。因みにＫｏｒｅａは韓国のカでなく大韓民国のダの順である。ＯＬＹＭＰＩＣに国家間の政治の影響が出ている。ＯＬＹＭＰＩＣが純粋にスポーツの祭典と言えないと思った。

Ｎｉｐｐｏｎでの開催に諸外国の評価も高かったようでＯｍｏｔｅｎａｓｈｉの精神を発揮したと思う。大会はＰｅａｃｅの祭典として成功したと思う。今回ＬＧＢＴＱを公表した選手が多かったのも特徴である。ところでＲＨ選手と共に身長差５０ｃｍの開会式旗手を務めたＹＳ選手が女子レスリングで優勝して感動した。全試合でＴフォール勝ちの無失点で金メダルを獲得した。彼女はＵＷＷ（世界レスリング連合）ランキング１位であり、初Ｖは当然の結果なのだが内容が素晴らしかった。彼女はＷ大レスリング部４年で同部のぼくは嬉しい。東京ＭＭＸＸ（＝２０２０）では障害者の人権尊重もＰＡＲＡＬＹＭＰＩＣで、日本から世界中に発信できた。夢の国のＺｉｐａｎｇｕの五輪が世界中に夢を届けたと思う。

ＡＢＣで無理矢理に文章を作成したので、人名がＹＳやＲＨ等とイニシャルにしてしまった。病的に二文字目がＡＳ（アスペルガー）のぼくは気になるのである。

ＹＳは須崎優衣（すさきゆい）選手のことである。前のＲＨはバスケットボール代表の八村塁選手である。またＷ大は早稲田大学のことである。須崎優衣さんの父親もＷ大学レスリング部でぼくの先輩である。頭文字を取りＹＳ先輩（娘さんと同じになる）と表記したい。それでＹＳ先輩は現在のＭ銀行、ぼくは現在のＲ銀行に勤務しＷ大レスリング倶楽部で会計・幹事を一緒にした。実はＷ大在学時のぼくはＹＳさんが卒業済で知らない。このＹＳ先輩と会ったのは卒業後で二十八年前（東京五輪のＧメダリスト誕生前）である。ぼくは銀行員をしながらＪＢＣライセンスを持つボクサーになりたかった。他にＣ級でも銀行員のボクサーはいないと思った。しかし『ＢＯＸＩＮＧ　ＭＡＧＡＺＩＮＥ』に銀行員ボクサーでＷの草鞋で活躍するという記事を読んだ。その人は当時Ｍ銀行で働きながらプロボクサーで試合をした。ぼくはＹＳさんの記事を読んで銀行員プロボクサーがいるのでＣ級ライセンスを取ろうというのを止めた。別の雑誌でＹＳさんが早大レスリング部卒と知った。ぼくは驚いてＯＢ名簿を見ると確かにＹＳさんの名前があった。当時Ｒ銀行勤務のぼくは営業で新規取引開拓もした。偶然にＢ社というボクシンググッズを販売する会社が、ぼくのＵ支店の担当地域にあった。ぼくは銀行に入って初めてＢ社で新規融資取引した。ぼくはＢ社で個人的に後楽園Ｈのチケットやグラブやビデオ等を買っていた。後楽園ＨでプロボクシングのＹＳ先輩を見付けた。雑誌の写真で顔を知ってたぼくはＹＳ先輩に声をかけたのである。『早大レスリング部のＯＢで銀行員でボクシングも』と自己紹介した。先輩はＤＧ（ダイヤモンドグローブ）にセコンドで来ていた。

Ｗ大レスリング部では学年が離れていたのだが、後楽園Ｈというボクシングの聖地で初めてお会いした。その後Ｋ支店と京都にぼくは転勤し暫く会えなかった。その間ＹＳ先輩とはお互い転勤の挨拶状を交わす関係だったがＯＢ会にぼくが出席するようになってからレスリングでＹＳ先輩と一緒になる機会が増えてきた。銀行出身からＷ大レスリング倶楽部で会計・幹事を二人でしていた。

Ｐ生命にぼくが転職しＹＳ先輩に世話になった。それでＹＳ先輩に娘さんが二人いることは以前から知っておりＹＳ先輩の四才上の娘さんもＷ大レスリング部である。

ＹＳ先輩とぼくの関係は以上の通りである。そんな訳でＹＳ先輩の娘さんが東京五輪金メダルを取って喜んだ。

Ｗ大で縁のある人がメダルを獲ると、特別に嬉しい。

Ｗ大在学中にぼくはレスリングの授業の助手をしていてＡＯ先輩が授業を教えていた。イニシャルとしないで

もＡＯ先輩は有名なので…太田章教授である。太田先輩がＳｅｏｕｌオリンピックで銀メダルを獲った。四年前のＬｏｓオリンピックでも銀メダルを獲っていた。つまりＷで銀メダルを獲った。ソウル五輪の次の授業で先輩はＷの銀メダルを持ってきた。先輩が入浴の間ぼくは首にＷの銀メダルをかけ両手で握って待っていた。この時のＷの銀メダルの感触は三十三年後の今も残っている。

Ｗの銀メダルは数日前も四年前のものも同じデザインでＷの銀メダルの区別ができなかった。リボンの状態からＷの銀メダルの内、獲りたてソウルのメダルと分った。

Ｗの銀メダルを太田先輩は鷲掴みしてポケットに入れてＷ大レスリング部の部屋を出た。ぼくはこの時の先輩がＷの銀メダルを獲った瞬間よりもかっこいいと思った。

Ｗでオリンピック銀メダルを獲るのは偉業なのに、そのＷの銀メダルを百円硬貨の様に扱う姿に感動した。

Ｍｏｓｃｏｗ五輪で幻の代表だったので出場していたらＷでなく、もう一つメダルを獲ったかもしれない。

Ｗ大出身のお陰で五輪で感動することができた。ぼくはＴ大を二年連続で落ちて人生が終わったと思った。もしＴ大に合格したら五輪で感動しなかった。三十五年前にＷ大に進学したことが最善だと東京五輪で再認識した。

Ｗｒｅｓｔｌｉｎｇ競技の東京五輪での結果は、男子がＧ（グレコ）の金メダルを逃したが、２０１２年以来のＦ（フリー）を６５ｋｇで金メダルを獲得した。女子はＦ種目だけ６階級の内、４階級の金メダルである。女子Ｆの五輪の金メダル獲得率は高く、今回も４つである。

ＦとＧで昔は男子の階級で４８、５２ｋｇ級があったがＦもＧも最軽量が５７ｋｇとなった。ぼくは一時４７ＫＧいやｋｇに痩せた位で階級が無い。復活するなら女子Ｆ５０ｋｇ級にぼくは性転換してから挑戦しよう。女子Ｆ５０ｋｇ級では須崎選手と対戦したら、１０秒以内でＴフォール負けするだろう。ちなみにテクニカルの略のＴフォールは１０点差がつくことである。その前１秒でＦ（フォール）負けで秒殺されることに間違いない。

Ｂｏｘｉｎｇは女子で入江選手が金メダルを獲得した。（Ｂｏｘｉｎｇは男子も銅メダルと拳闘、いや健闘した）

ＯＬＹＭＰＩＣ柔道も阿部兄妹の同日の金に感動したがＪｕｄｏという柔道と全く別の競技を見た気がした。

Ｊｕｄｏは授業で習った柔道と違い全く組み合わない。

Ｊｕｄｏは男子の最軽量は６０ｋｇである。ぼくは男子Ｊｕｄｏをするには軽すぎ適切な階級が無いので、女子Ｊｕｄｏ４８ｋｇ級に性転換して挑戦しよう…とまたＬＧＢＴＱの話題にして書いてしまった。それにしてもＬＧＢＴＱがこれだけ騒がれた五輪も初めてだろう。特にＴで女子重量挙げで男性が女性に性転換して出場した。

Ｌ＝レズ・女性同性愛

Ｌでは女子砲丸投げ銀メダリストが公表している。

Ｇ＝ゲイ・男性同性愛

Ｇでは男子飛び込み金メダリストが公表している。

Ｂ＝バイ・男女両性愛

Ｔ＝トランス・性転換

Ｑ＝クィア・クェスチョニング・ＬＧＢＴに分類しないＳｅｘｕａｌ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙ　性自認が未定。

ＬＧＢＴＱを公表している選手は１８２人である。

ＬＧＢＴＱの開会式の旗手は米国含め６ヶ国である。

ＬＧＢＴＱのメダル獲得数は３２である。

ＬＧＢＴＱに対しぼくは差別意識はない。ＬＧＢＴＱのＳｅｘｕａｌ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙの気持ちは、ぼく自身Ｎｅｕｒｏ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙなので、立場は異なるがＭｉｎｏｒｉｔｙ同士なので、共感する。Ｎｅｕｒｏ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙはパートナーについて Ｓｅｘｕａｌ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙよりも作りにくいので、Ｎｅｕｒｏ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙの方が孤立しているかもしれない。

Ｎｅｕｒｏ　Ｍｉｎｏｒｉｔｙの選手も出て欲しい。

Ｓｗｉｍｍｉｎｇ女子の大橋悠依選手の金２個は男…

…Ｒ１８の下ネタを書きそうになったので自粛する。

Ｇ難度の技で体操の橋本大輝選手も金２個で日本男児…Ｒ１８の下ネタを書きそうになったので再び自粛する。

ＪＫ（自粛警察）がコロナ禍でぼくの中で発動する。

ＪＫ（女子高生）的なメンタリティもたまに発動する。

ＯＬＹＭＰＩＣの開会式の行進の順が、あいうえお順でＡＢＣ順でないというのが、不思議で感動した。これはＡＢＣ順でなく開催国の母国語の順番だからである。

Ｒｉｏ（リオ）五輪ではポルトガル語の国名順で並んでＳｅｏｕｌ（ソウル）五輪はハングル文字の順である。

Ｐｅｋｉｎｇ（北京）は漢字の画数の少ない順だった。

Ｎｉｐｐｏｎは開催国で最後である。最後から二番目がＦｒａｎｃｅなのは次回開催国だからである。三番目がＵＳＡなのは次々回の開催国だからである。それならばＲｉｏで日本が最後から二番目になったがそうでなくてＵＳＡが単に最後の方に出場するためらしい。アメリカＴＶ局が視聴率を稼ぐために圧力をかけた話も聞いた。

Ｇｒｅｅｃｅ（ギリシア）は発祥の起源で先頭である。

Ｇｒｅｅｃｅ以下は、あいうえお順であるが次は難民でＲＯＣと続いた。ＲＯＣはロシアという国として認めずＲＯＣ（ロシアオリンピック委員会）つまり、ＩＯＣやＪＯＣと同じ委員会で国でない。ロシアの選手は全てがＲＯＣで国の代表でなく個人参加で３番目入場である。

ＲＯＣはあいうえお順でアアなので最初かと思った。

ＲＯＣがギリシアと難民に続いて行進した時ぼくもなぜＲＯＣというかロシアが事実上トップに行進するのかとＲＯＣの陰謀と思ったが個人を国家より優先していた。

ＲＯＣは所属別では金メダル数で日本を下回ったのだがＲＯＣの方が総メダル数では多かったのであった。

ＲＯＣとして参加したオリンピックの政治性も感じた。

Ｅｎｇｌａｎｄというか、イギリスは開会式の順番で

はGreat Britainのグでもなく、イでもなくEikokuつまり英国のエの順番であった。

Virgin IslandsはバでもなくヴでもなくEiryo（英領）でエの順番である。英領だけでなくVirgin Islandはアメリカ領もあるのだがBeiryo（米領）ということでべの順番でサモア（Samoa）のべの次であった。サモアがべの順番とはBeiryo（米領）が国の前につくからである。

Samoaって南太平洋の独立国と思っていたら国名にBeiryo（米領）がついてべの順番になった。なぜSamoaがべの順かって疑問に思うのはぼくだけか。

Virgin Islandは百以上の一ヶ所の島群でW（西）半分はべで、E（東）半分はエで行進した。

Virgin Islandはヴでなくバージンなのでサモアの前でなく、あいうえお順で後になった。

Franceが次回開催国でなければ、あいうえお順でFranceのフの順か仏国のフの順か気になった。

Franceならば前回開催国のブラジルの後になるしFutsukokuならばブラジルの前になる。

Eikokuの順番でイギリスが行進したらフランスはFutsukokuの順番になるのが論理的である。

USAも、あいうえお順だったら、どの順番だろうか。

USAだからユの順かアメリカだからアの順かそれともBeikokuだから、べの順になったのだろうか。

Eiryo（英領）バージン諸島の前にイギリスつまりEikokuが行進したのだから、あいうえお順に従いBeiryo（米領）バージン諸島の前にUSAつまりBeikokuが行進するのが論理的である。二国間にBeiryo（米領）サモアがはさまるのであるが。

SoftBallと野球の金メダルも話題になって女子BasketBallの銀メダルも騒がれたが、ぼくはAS（アスペルガー）なので興味の対象ではない。なおASは小脳が小さいらしい。小脳の機能は運動に関係しASの運動の能力は一般人と異なる。どの本か忘れたがASは特に球技が苦手と書いてあった記憶がある。またASには光過敏などの五感の刺激に対する過敏症や逆にASは不感症がいる。ぼく個人の場合でも直接の原因がASか不明だが、屋外は光過敏で上を見れない。ぼくはASで不器用で、球技は屋外も屋内も苦手である。このASの特徴から、できるスポーツが限られる。そのためASにとって、できないスポーツは興味も持てないのでOLYMPIC話はレスリングと開会式だけになった。

OLYMPICを見ていたら、出たくなった。性転換でMTF（男性→女性）なら女子重量挙げに挑戦できる。

P……煩悩くんを取れば十キロは痩せるだろう。それかPARALYMPICに発達障害者の参加ができるまでASのぼくは体を鍛える。決まってから、競技を始めてPARALYMPICへの出場を目指すことにする。

編集後記

今夏は半世紀ぶりの五輪開催で日本中が沸き返るものと思われましたが、コロナ第五波の感染爆発と重なり終始翻弄されました。一日当りのコロナ感染者数は、八月首都圏一万二千人全国では二万四千人に達し、一時はどうなることかと危惧されワクチン接種を受けてもなお不安が続きました。やっと九月末から急減し、首都圏は二百人未満まで減りました。百年前の「スペインかぜ」では、人口の四割が感染したのでまだましかもしれません。

突然の新型コロナウイルスパンデミックにより、合評会はまる二年中止せざるを得ませんでした。同人が顔を会すことのない中にも従前同様の寄稿を頂き、大変有難く同人各位のご協力に感謝申し上げます。

今号では横山氏の「柿本人麻呂」が始まりました。これまで丹念に郷土静岡の歴史を掘り起こし、自説を交え現代との関わり合いを軽妙に追及されてきました。前々号「内田の国の怨霊信仰物語」で、石見の国益田市について言及されていましたので、生誕・終息地であり神として祀られている万葉歌人柿本人麻呂について関心があるのではと推察していました。古事記から説き起こされており今後の展開が楽しみです。

同人だより

鯨游海氏は二五年間休みなく寄稿され、このほど「潮汐錄」は一〇二回を数え、漢詩の面白さや漢字の持つ奥深さを同人に披露されてきました。

この度、目を悪くされ目標の百回を達成したことから、退会を決意されました。最後の詩結七字を引用「前人未踏潮汐錄」、長い間ありがとうございました。

これからのご健勝をお祈り致しております。

（村）

まんじ第162号

令和3年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
編集担当　安　藤　　剛（あんどう　たけし）
事務局長　村　上　邦　治（むらかみ　くにはる）

（編集担当）〒362-0022　埼玉県上尾市瓦葺 2055-29
TEL・FAX 048(721)2001

（事務局長）〒270-0001　松戸市幸田 5-65
TEL 047(346)2929

（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ

（印刷製本）　中川印刷株式会社
〒231-0036　横浜市中区山田町 7-1

表紙の絵について

「牛にひかれて　暗雲退治」

田寺怜葦（たでられい）画